

幻想支配の幻想入り

カガヤ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学園都市でヒーロー達と世界を救った少年は、人知れず姿を消した。

これは「東方Project」と「とある魔術の禁書目録」のクロスオーバー二次創作です。

ですが、しばらくは上条当麻達「とあるシリーズキャラ」は名前以外出てきません。

シリアス中心の少しギャグやカオスにするつもりで、オリキャラ主人公はチートです、多分（笑）

メインヒロインは2人、ヒロイン複数でハーレムになる予定です。

また、東方の原作と作中の異変時期はズレます。

例：紅魔郷編（原作：初夏くらい、本作：冬の終わりくらい）

「とある魔術の禁書目録」「とある科学の超電磁砲」時系列事件などは原作・アニメ両方の設定を混ぜています。

オリキャラ主人公、ハーレム、チート、キャラの独自解釈・設定に違和感を感じる方は読まない事をお勧めします。

過去編では主人公の視点のみの話になります。

目次

プロローグ

プロローグ 「とある少年の消滅」

1

第1話 「幻想郷」

7

第2話 「世捨てられ人」

20

第3話 「弾幕ごっこ」

31

第4話 「妖精」

42

第5話 「紅魔館」

52

第6話 「人里」

65

紅魔郷編

第7話 「紅霧」

82

第8話 「腹ペコ妖怪」

95

第⑨話 「さいきよーの氷精」

110

第10話 「紅魔の門番」

126

第11話 「紅魔の主であり……姉」

140

第12話 「狂気乱舞」

154

第13話 「悪魔の妹と星の魔法使い」

169

第14話 「上条当麻」

185

第15話 「決着」

198

第16話 「不器用な姉妹（前編）」

211

第17話 「不器用な姉妹（後編）」

232

過去編 I

第18話	「異変の後」	425	第30話	「VS魔術師」	427
第19話	「表と裏」	263	第31話	「首輪」	449
第20話	「学舎の園」	277	第32話	「魔術」	477
第21話	「視覚阻害」	291	日常編 I		
第22話	「都市伝説」	306	第33話	「紅魔館の悪魔」	502
第23話	「爆弾魔」	322	第34話	「魔女考察」	514
第24話	「幻想御手」	337	第35話	「初めての弾幕ごっこ」	
第25話	「禁書目録」	350	530		
第26話	「無能力者」	364	第36話	「殺人鬼」	558
第27話	「木山春生」	376	第37話	「強者」	576
第28話	「VS多才能力」	391	第38話	「ごども」	606
第29話	「VS幻想猛獣」	411	第39話	「宴会I」	627
			第40話	「宴会II」	638

第41話	「宴会Ⅲ」	653
第42話	「宴会Ⅳ」	666
第43話	「宴会Ⅴ」	682
第44話	「宴会Ⅵ」	695
第45話	「レポート：外来人の脅威性について」	706
第46話	「香霖堂」	722
第47話	「再戦（前編）」	738
第48話	「再戦（後編）」	752
第49話	「前兆」	772
妖々夢編		
第50話	「春告精」	788
第51話	「異変」	805

第52話	「氷精と雪の妖怪」	820
第53話	「マヨヒガ」	837
第54話	「人形と人間」	852
第55話	「騒霊ライブ」	874
第56話	「冥界剣士」	893
第57話	「経験値」	910
第58話	「西行妖」	927
第59話	「死闘（前編）」	945
第60話	「死闘（後編）」	963
第61話	「後悔」	978
第62話	「私闘」	995
第63話	「目覚め」	1021
過去編Ⅱ		

1183	第75話	「最弱VS最強(前編)」	1170
	第74話	「ヒーロー」	1158
	第73話	「本物」	1144
	第72話	「暗部」	1131
	第71話	「偽物」	1117
	第70話	「毒」	1104
	第69話	「闇」	1091
	第68話	「ミク」	1080
	第67話	「絶対能力進化」	1065
	第66話	「遭遇」	1053
	第65話	「アイテム」	1040
	第64話	「木原」	

	第76話	「最弱VS最強(後編)」	1202
	第77話	「なごり雪」	
	第78話	「弟子入り」	
	第79話	「善人」	
	第80話	「水晶石(前編)」	
	第81話	「水晶石(後編)」	
	第82話	「幻想武装」	
	第83話	「紅魔ライブ」	
	第84話	「妖精ピクニック」	
	第85話	「竹林の因幡」	
	第86話	「花見」	
	日常編II		
	第77話	「なごり雪」	1217
	第78話	「弟子入り」	1233
	第79話	「善人」	1249
	第80話	「水晶石(前編)」	1263
	第81話	「水晶石(後編)」	1277
	第82話	「幻想武装」	1302
	第83話	「紅魔ライブ」	1314
	第84話	「妖精ピクニック」	1329
	第85話	「竹林の因幡」	1346
	第86話	「花見」	1362

第87話 「花見Ⅱ」 | 1377

萃夢想編

第88話 「幻想郷縁起」 | 1389

第89話 「花見Ⅲ」 | 1404

第90話 「疑惑」 | 1415

第91話 「悪寒」 | 1426

第92話 「スペルカード」 | 1438

第93話 「自分」 | 1456

第94話 「花見Ⅳ」 | 1472

過去編Ⅲ

第95話 「9月1日」 | 1494

第96話 「風斬氷華」 | 1509

第97話 「一騎打ち」 | 1525

第98話 「魔術と科学」 | 1541

第99話 「オルソラIIアクイナス」

1550 第100話 「法の書」 | 1569

第101話 「VS天草式」 | 1588

第102話 「ローマ正教」 | 1606

第103話 「VSアニエーゼ隊」 | 1619

第104話 「乱戦決着」 | 1643

日常編Ⅲ

第105話 「剣士の憂鬱(前編)」

1658 第106話 「剣士の憂鬱(後編)」

第115話	「永遠亭」	1818
第114話	「刺客」	1793
第113話	「接敵」	1777
永夜抄編		
第112話	「人形劇」	1764
第111話	「母、襲来」	1749
第110話	「蛭姫の仕事」	1735
第109話	「夜雀の屋台」	1714
1700		
第108話	「閻魔の休日（後編）」	
1686		
第107話	「閻魔の休日（前編）」	
1671		

過去編IV		
第124話	「月見酒」	1952
1934		
第123話	「VS最強コンビ」	
第122話	「タッグバトル」	1916
第121話	「相棒」	1899
1886		
第120話	「博麗と紅魔（後編）」	
1873		
第119話	「博麗と紅魔（前編）」	
第118話	「欠けた月」	1862
第117話	「逃亡者」	1849
第116話	「かぐや姫」	1832

第125話	「大覇星祭」	—
第126話	「追跡封じ」	—
第127話	「追跡者達」	—
第128話	「真なる脅威」	—
第129話	「憤怒」	—
第130話	「敵」	—
第131話	「木原幻生」	—
第132話	「食蜂操祈」	—
第133話	「イタリアへ」	—
第134話	「奇襲」	—
第135話	「女王艦隊」	—
第136話	「脱出」	—
第137話	「合流」	—

2145213121142098208820732063204220262012199319811969

第138話	「海戦」	—
第139話	「救出」	—
日常編IV		
第140話	「薬師稼業(前編)」	—
2192		
第141話	「薬師稼業(後編)」	—
2204		
第142話	「風祝」	—
2222		
第143話	「天狗と河童と鬼」	—
2239		
第144話	「妖精探検隊(前編)」	—
2250		
第145話	「妖精探検隊(後編)」	—
21712159		

第153回	「チュートリアル：魔法の	235
第152回	「新人研修」	237
第151回	「取材開始」	234
花塚&文花帖編		
第150回	「新聞大会」	232
第149話	「本稽古」	231
第148話	「執事体験（後編）」	230
第147話	「執事体験（中編）」	228
第146話	「執事体験（前編）」	227
第143回	「森」	226

第157回	「ステージ3：紅魔館（前編）」	242
第156回	「ステージ2：永遠亭」	241
第155回	「ステージ1：迷いの竹林」	239
第154回	「EXステージ：神様取材」	238
第153回	「森」	236

プロローグ

プロローグ 「とある少年の消滅」

その日、とある少年が学園都市から、いや、世界から姿を消した。

消えた少年の名は「ユウキ」

名字もあるが、少年はユウキ、もしくは違う名前で呼ばれていた。

幻想支配（イマジンロード）

あらゆる異能を打ち消すのが幻想殺し（イマジンプレイカー）なら、あらゆる異能を支配するのが幻想支配。

ユウキは目に映る能力者をコピーしたり、使用不能に出来る異質な能力者だった。

能力の研究を目的とした学園都市でも、ユウキの能力は異質すぎた。

測定不能、原理不明、学園都市で発現した能力ではなく、ユウキが生まれつき持っていた能力、原石だったからだ。

彼は見た目は冷たい男だが目の前に困った人がいたら助けに入り、相談にきた相手にはちゃんと相談にのっている。

そして、ユウキが高校に入り出会った右手に幻想殺しを持った、最高に不幸な少年「上

条当麻

ユウキと当麻はすぐに仲良くなり、当麻がインデックスと言うイギリスのシスターを拾った事から様々な事件に遭遇する事になった。

ある時は学園都市最強の「一方通行」に挑んだり、悪友の陰謀で学園都市の外や海外に飛ばされ魔術師と戦ったりする事もあった。

当麻が関わらなくても、ユウキ自身にトラブルに巻き込まれる素質があるらしく、レベル5第三位のレルガンと共に幻想御手事件を解決したり、スクールやアイテムと言った学園都市の暗部と殺し合いをした事もある。

かと思えば、敵として戦った浜面仕上の恋愛を手伝ったり、一方通行と共闘して幼い少女を助けたりもした。

ユウキには学園都市や世界中に数多くの知り合いがいるが、中でも上条当麻、一方通行、浜面仕上と言った3人の「ヒーロー」との関わりは深い。

学園都市や世界を、共に救った事も1度や2度ではない。
そんな彼、ユウキがある日突然消えた。

だが、彼が消えた事には誰も気付かなかった。

ここは人間と妖怪が住む楽園【幻想郷】

私、博麗霊夢は幻想郷にある博麗神社の巫女をしている。

ある日、人里での用事を済ませ神社へと飛んで帰る途中、嫌な気配を感じた。

気配は眼下に広がる、広大な森の一角から感じた。

「早く帰って夕飯の支度したいんだけど、しょうがないか」

放っておくと面倒な事になりそうな予感がしたので、私は気配の元へと飛ぶとそこに

は小さい女の子を背負って走る少年。

そして、少年の背後に迫って走る数匹の巨大な狼妖怪の姿があった。

「あの服装、外来人？ 紫ったらまたやらかしたのね」

外の世界と博麗大結界で隔られたこの幻想郷に、たまに外の世界の人間が来る事があ

る。

大抵は結界の綻びに引っ掛かったか、八雲紫と言うスキマ妖怪が好奇心から神隠しで

連れて来るかのどちらか。

今回はどっちだろうか？ 何にせよあのスキマ妖怪の仕業には違いない。

「と、そんな事考える前に……つと！」

【妖怪は人間を襲い、人間は妖怪を退治する】これが幻想郷のバランス。

私は懐から御札を取り出し、狼妖怪へと放った。

御札は少年に飛びかかろうとしていた1体に当り、妖怪が崩れ落ちる。

「その人、隠れてて。すぐに済ませるわ。質問はその後！」

空から降ってきた私を茫然と見つめる外来人に、手短に言つて私は右手に札、左手に靈力を蓄え妖怪たちに向き直った。

「夕飯の準備で忙しくなるつて言うのに……面倒起こさない、で！」

御札と靈力弾で妖怪達を一掃する。数も少なく、一体一体はひ弱な妖怪ではこの程度ね。

「さてと、もう出てきていいわよ」

「ああ、ありがとな……」

樹の陰から顔を出して様子を窺っていた外来人が出てきた。

顔は整っていて、幼さが抜けて大人の顔つきになったくらい、背丈は私より高く、少し年上かもしれない。

などと珍しくもない外来人を観察していると、急に外来人が私の後ろを指さし叫んだ。

「っ!? 危ない!」

「えっ?」

見た目に反してひ弱な妖怪と舐めていた。仕留め切れていなかった1体が、死骸の山から私に飛び掛かってきた。

それでも冷静に札を取り出し、トドメを刺そうとしていた私の頬を光の弾が掠めた。

「ギャイン!」

弾は正確にまるで追尾機能でもあるかのように、飛び上がっていた妖怪の急所を直撃し、妖怪は今度こそ死んだ。

私は一瞬、茫然と立ちすくんだ。目の前で妖怪が死んだ事に驚いたわけじゃない。

妖怪を退治した光の弾がありえないものだったからだ。

「嘘? 今の……私の?」

そう、あの弾は私の霊力で作られた弾。世界で私しか使えない霊気弾。

誰が放ったのかと後ろを振り返ると、そこには青い瞳を輝かせた外来人が右手を突き出して立っていた。

「今の、あんたが撃つたの?」

「……………」

「答えて、あんた何者?」

無言の外来人に札を構え、2度問いかけたが反応はない。

「……………」

外来人は瞳の色が元に戻り倒れてしまった。

「ちよ、ちよつと!?!」

倒れ込んだ外来人に駆け寄り、私は思った。

——ああ、きつとこれからとんでもなく厄介な事が起こりそうね。

続く

第1話 「幻想郷」

博麗神社

S i d e 霊夢

外来人が背負っていた女の子を探しに来た慧音に引き渡し、私は改めてさつき有り得ない事をした人物を見た。

「さつきのは見間違え……な、わけないわよね。当の本人の私が間違えるわけない」

「ですよー。と言う事はやっぱりこの人は博麗霊夢の霊力を使い、博麗霊夢の弾幕を使った。と言うわけですよー」

「……やつと出てきたわね鴉天狗」

私の背後から、さも最初からいたかのように降りてきた黒い翼と赤い下駄を履いた天狗、射命丸文（しやめいまる あや）

外見は若いけど、私の数百倍は生きてる 【風を操る程度の能力】 を持ったカラス天狗。

「あややゝ霊夢さんには気付かれましたか。いやあ、外来人がいるなー程度にしか観察してなかったんですけれどね。人里から離れた人間なんて襲われるのは当たり前です

し」

私がこの外来人を見掛けた時から、気配を感じてはいた。

文は新聞記者で、天狗にしては珍しく人里にも新聞を配り、人間に敵対もしていないし、むやみに襲つたりもしない。

が、やはり妖怪らしく襲われた人間を観察はすれど、進んで助けようとはしない。

「嫌ですよ霊夢さん。私だつて新聞を御鼻屑にしている人間だつたら助けますつて。お得意さんなんですから」

と言う事は、人里の人間は誰も文には助けてもらえないわね。

「そんな事よりぼさつとしてないで、この人運ぶの手伝いなさいよ。どうせ取材する気なんでしょ？ 見た目よりガツシリしてて結構運ぶの大変なのよ」

「この人すごく筋肉もついていますし、傷跡もチラホラありますし、いつもみたいなひ弱な外来人じゃないですね」

「わざわざ服までめくつて観察する前に運べー!!」

こうして、外来人を博麗神社まで運んだ。幸いにも外傷はないから、布団に寝かせて濡れた布巾を頭にかぶせて様子を見る事にした。

「で、この人が目覚める前にどうしても確認したい事があります」

眠っている外来人に目を向け、文はさつきまでと打って変わって真剣な眼差しを向けてきた。

「……分かつてるわ、この人があの狼妖怪を退治した時、確かに私の弾幕を使ったわ」

「それは、霊夢さんから力を奪って弾幕を使用した。という事ですか？」

「違うわ。私は何もされていない。この人を最初見かけた事は何も力も感じなかったけれど私の弾幕を使った時、たしかにこの人から私の霊力を感じた」

「そうですか。今は霊力も妖力も何も感じませんが、この人本当に人間なんですよね？」

「ええ……」

文がここまで真剣になる理由。それはこの外来人が私、博麗の巫女の力を使ったから。

妖怪を退治できる人間は幻想郷も大勢いるけど、博麗の巫女は中でも群を抜いて妖怪退治の専門家とも言える。

更に、博麗大結界の要でもあり、特別な存在。

その博麗の巫女を使える人間が博麗以外にも現れ、しかもそれが外来人ともなれば文達妖怪にとっては由々しき事態。

「全く、なんで冬眠してるはずの紫はこんな外来人を連れてきたのか……もしかはこの力があるから連れてきたのか」

「心外ですわ。私今回は何も関与していませんのに」

声と共に空間が裂け、リボン付きの裂け目から扇子で口元を隠した金髪の女性が降りてきた。

名は八雲紫。【境界を操る程度の能力】を持ったスキマ妖怪で、幻想郷の賢者と呼ばれる実力者。

本来なら冬の今は寝ているはずなのだが。

「あんたら妖怪は、少しは普通に現れるって事しないのかしら？」

「だから真つ正面から現れましたのに……ま、そんな事よりも、この外来人。どうやってここに来たのかしら？」

「はっ？ あんたが連れて来たんじゃないの？」

博麗大結界には綻びも穴もなく、異常は全くなかった。ともすればこのスキマ妖怪が外の世界から連れて来る以外にはないはず。

「私はついさつきまでずっと冬眠してたのよ？ でも、何か変な気配がして起きてみたら、霊夢の力を使った外来人がいるじゃない。眠気もすつ飛んだわよ」

紫の言葉にウソはないらしい。いつも物事をはぐらかした言い方をする事はあつても、ここまでではつきりと否定する限りは本当の事はないだろう。

「と、なると誰かが連れてきた……もしくは外の世界で事故か何かでここに飛ばされた、

ですか？」

文が別の可能性を言ったが、紫は難しい顔をして口元の扇子を閉じ、じつと外来人を見つめた。

「今のところは謎ですわ。でも今藍が結界の様子を丹念に調べてるから、もう少ししたら分かりそう……あら？ どうやら何か分かったみたいね。では、少し離れるわ。また来るから、この子が目覚めたら幻想郷の説明とかお願いね〜」

「あつ、ちよつと〜」

ひらひらと扇子をはためかせ、紫はスキマへと消えて行った。

「人に面倒事押しつけて」

「まあまあ、原因が分かりそうなんですから、待ちましようよ〜」

文も文で”メモ帳に今の会話を書きこんでいる。情報を整理しているのだろう。普段なら面白おかしく取材しているけど、今回は割と真面目に動いているわね。

「あ、霊夢さん霊夢さん。この人目が覚めそうですよ!」

文の言う通り、眠っていた彼の瞼が動き、ゆっくりと開かれていった。

瞼を開けた彼の瞳は、青く輝いてはいなかった。

「うつ……うつくん、こ、こ……どこだ?」

「気が付いたかしら? ここは博麗神社。私の家よ」

「……俺が背負って、た……あの子は？」

自分の状態よりも、助けた子の心配か。お人よしね。

「大丈夫よ。あの後すぐに家に送ったわ」

「そう……か」

心底安心した笑みを浮かべる。うん、良い人だ。

見た目もそうだけど、話し方も日本人のようね。

「私の名前は博麗霊夢、霊夢でいいわ。それで、色々話したい事や聞きたい事あるんだけど、大丈夫？」

大丈夫だ、と言って起き上がった彼に文が水の入ったコップを渡した。

「ありがと……？」

文を見て困惑の表情を浮かべる彼。見知らぬ人がいる。と言う反応でもないわね。

「あつ、私は射命丸文といいます。新聞記者をしています、こちらの霊夢さんの友人です。森の中であなたを見つけて霊夢さんとここまで運んできたんですよ。それであなたの名前はなんというのでしょうか？」

文は取材対象に向けては丁寧語になる。自分が天狗である事を明かさないのは無暗に混乱させない為、一応取材対象には気遣いするのよね。

勝手に友人扱いされたけど、訂正しても面倒だからほつといてあげるわ。

「俺は……ユウキ、年は16、高校1年生。部屋で寝ていたらいつの間にか森の中にいたんだ。で、女の子が変な化け物に襲われてたから、助けたんだけど……お前ら、何者？」
その言葉に文と2人で少し、ドキツとした。

人間なのか？　と言う意味が籠っているように感じたからだ。と、言っても私は人間だけだ。

そして、私達を見つめるその瞳がうつすらと波打つように輝いた。

「え、えつと……それはどういう意味ででしょうか？　通りすがりの新聞記者、と言えばいいでしょうか」

「そういう意味じゃない。2人共見た目はただの美少女だけど、そっちの巫女は変な力を感じるし。あんたに関して言えば、人間じゃないだろ？　人間じゃ感じない力を感じる」

驚いた。会って瞬時に文の正体に勘づくなんて。幻想郷の力ある妖怪には見た目は人間なのが多い。

中には角や翼が生えているのもいて人間らしくない外見なのもいるけど、今の文は翼を隠していて、何も知らない外来人には普通の女の子にしか映らないはず。

知らずに私も文も警戒を強めていた。良い人には違いないけど、森での事もあるし彼には何かある。

なので、私は単刀直入に聞く事にした

「その質問、そのままあなたに返すわ。森であの妖怪を倒した時に使った力、アレは何？

あなたが使った力は私の力よ？ あなたこそ、人間なの？」

「俺は……能力者だ。幻想支配（イマジネロード）、そう学園都市では呼ばれていた。目に映った異能の力を支配する能力……俺は昔からその力が使える。だから、あの時は目に映った君の力を使った。とっさだったし、今まで触れた事のない力だったからあの程度しかできなかったし、すぐに頭痛が起きて倒れたけど」

聞き慣れない単語はあったけど、けど彼の力は大体分かった。

「能力者とかはともかく学園都市？ 聞いた事ない言葉ね。良いわ、先にこの世界の話をしておける。ここは幻想郷、場所としては日本だけど、結界を張って外の世界とは隔離された世界よ。ここでは人間と妖怪が暮らしているわ。あなたの言う通り、文はカラス天狗、妖怪よ」

どうも、とペコリとお辞儀する文に動じる事なく、ユウキさんは先を促した。

「幻想郷には文みたくない天狗以外にも、鬼や河童、妖精に吸血鬼、神様もいるわ。外の世界で人間が忘れ去った存在がここにはちゃんと存在している。妖怪と人間にはある決まりがあるの。【妖怪は人間を襲い、人間は妖怪を退治する】これがあるから幻想郷の人と妖怪はバランスを保って共存しているの。ここまではいいい？」

長く喋ったけど、ユウキさんはちゃんと理解しているらしく、納得したように頷いていた。

適応力が高いと言うか、少し物分かりが良すぎじゃない？ たまに迷い込む外来人にこの説明するとみんなポカーンとするか、信じられないと激昂する事もあるのに。

「ま、いいわ。で、幻想郷には人間の人間があつて、ここでは妖怪は絶対に暴れてはいけない決まりがあるの。更に言えば、人里以外では人間は妖怪に襲われる。あなたもあの子もだから襲われた。そして、私は妖怪の退治屋、人間を守る仕事を持つ博麗の巫女としてあなた達を助けたと言うわけ」

ふう、決まりごとではないけど、こうも長い説明すると喉渇くわね。

「あのく私からも一つ。ユウキさんの事とか、学園都市と言う物とか色々聞きたいので、取材をさせてもらつてもいいですか？」

幻想郷の説明を聞いて、特に混乱もせず受け入れた彼を見て、文が新聞記者として我慢していた事を始めた。

あんな事聞いてすぐに取材に応じるとは思えないけど、そこは彼次第ね。

「……俺は構わないけど」

うん、ホント大した人だわ。まるで当たり前のことを聞かされたかのようにあっさり受け入れてるし。

彼のいた世界にも妖怪がいるのかもしれないわね。

ともかく、私も彼に興味あるから取材をしようなら聞かせてもらいましょうか。

「はい、一旦ストップよー」

取材をしようと身を乗り出した文と、彼を遮るように紫が現れた。意外と早く戻ってきたわね。

文が音速で私の横にまで戻ってきたわね。そこまで嫌なのかしら。

「取材も良いけど、大事な事を先に話さないとダメでしょ？」

「またいきなり現れて、で、大事な事って何よ？」

「彼の世界への帰る方法とか、どうして幻想郷に来たかよ」

「あつ……」

本当に大事な事を忘れていた。彼のあまりの適応力に外来人であることを忘れかけていたわ。

学園都市と言う所から来たなら、そこに帰さないといけない。それに彼がどうして幻想郷に居たのかもはっきりさせなきゃ。

でも……そこで私は妙な違和感を覚えた。彼は今までの外来人と色々違うけど、それでも感じる違和感。

「はじめまして、ユウキ君。私の名前は八雲紫。ゆかりんと呼んでね☆」

「は、はあ……」

妖怪とか聞いても平然としていた彼の表情が固まった。

ゆかりんはないでしょゆかりんは。

「こほん、それは冗談として」

本気だったでしょ。

「場を和ませる為よ、霊夢。これから大事な……彼にとってショックを受ける話をしなきゃいけないんだから」

「……どういう事ですか、紫さん？」

「ゆかりんでもいいのに。まあいいわ。ユウキさん、霊夢と天狗からこの幻想郷の事はあらかた聞いたと思いますけど、結界で隔離された幻想郷になぜあなたがいたのか、それをお話ししますわ」

「……はい」

何だか興味なさそうな返事ね。表情にも変化ないし。紫もそれを不自然に思ったけど、すぐに話し始めた。

「あなたのように幻想郷の外から来た人間を「外来人」と言います。結界に綻びが出来て、それに巻き込まれた人間が結界の外から入ってきたり、私が面白そうな人間を見て、神隠ししたり」

さらりと恐ろしい事を言われているはずなのに、ユウキさんの表情に変化はない。

「そして、外人人はここ博麗神社で霊夢や私の手によつて外の世界に帰されるわ。中には人里で暮らす人もいるのですけれど。さて、ここからが本題。ユウキさんは確かに外人ですが、結界の綻びによつて外から来た人間ではありません」

外の世界に彼みたいないな強力な能力者がいるとは、少し考えにくいからこれは予想出来た。

ま、たまに紫が連れて来る中にはいるけど。

「そして、私が神隠しで連れてきた人間でもありません。今まで結界などを調べて他の事故によつてここに来た人間、でもありませんでした」

事故ではないなら、誰かが幻想郷に送り込んだのだろうか？

とすれば、侵略？ 確かに私の力ですらコピー出来る彼の能力は強い。

でも、彼は幻想郷を全く分かっていなかった。

「幻想郷には外の世界と倫理的に断絶する博麗大結界の他にもう一つ、『幻と実体の境界』という結界が張られています。これは外の世界で幻想となり、忘れされた妖怪や物を幻想郷に導く為の結界……」

ここまで言つて紫は少しだけ、ほんの少しだけ辛そうに息を少し吐いた。

私は次に紫が何を言うのかに気付いた。そんな事は有り得ないはずなのに。

「ちよつ、ちよつと待って下さい！ それってまさか!? 有り得ない事じゃないんですか!?!」

文も気付いたみたいね。この慌てよう、幻想郷が生まれて初めての事なんでしょうね……でも。

「私も文に同感ね。彼は外の世界ではなく、別の世界の人間なんでしょう?」

「藍と2人で結界を調べて分かった事、これは事実よ。とはいえ、私も初めての、想定外の経験です。ユウキさん、あなたは……あなたの世界で忘れさられて、幻想となつてこの地へ流れついた、残酷な言い方をすれば……」

【世界に捨てられた外来人】

続く

第2話 「世捨てられ人」

博麗神社

S i d e 文

あやややく興味深い外来人が来たと思つたら、とんでもない事になりましたね。

「それ、本当なの紫？」

博麗の巫女も流石に驚いています。

他人の能力を使える事にも驚きましたが、まさか異世界から、それも忘れられての幻想入り。

私の記憶が確かなら、異世界からは幻想郷には来られないはずなんですけどね。

そもそも人間が忘れられて幻想入りする事なんて、滅多にありませんし。

「そうよ。物体と違って生きている人間、それは存在するだけで世界に認識されているわ。そして、いかに外の世界の人間に昔ほどの繋がりが薄れたとはいえ、そうそう忘れられるものではないわ」

事故か何かで親戚を失った人。他人に嫌われたり、存在感がなく忘れられる人も外にはいる。

けれども幻想入りするには当てはまらない。

例えばホームレスになろうとも、道行く人の目に止まればそれだけで認知される事になる。

「それでもたまにはいますわ。それでも彼は特例中の特例です」

八雲紫も少し困惑した表情を浮かべている。彼女にしては珍しい表情だ。

と、3人で唸り合っていたけど、肝心の外来人を忘れていたわ。

さつきから無言だから、さも傷付いているのかと思つたら……

「そうか」

とやけにあっさりとな納得した。

「いや、あの……なんでそんなに淡泊なの？ あなた、混乱してるのかしら？ えっと、

もう少し分かりやすく言うとなね。あなたはあなたのいた世界の皆から、世界そのものか

ら忘れられた、捨てられたのよ？ それに、異世界から来たのなら私の能力の範囲外、私

でも元の世界に帰せないの」

八雲紫は状況を理解させようと必死でユウキさんに説明していますが、それでも彼の表情は変わりませんね。

「俺は自分の状況理解してるから大丈夫だ。それより、文だったよな？」

「は、はい！ 清く正しい射命丸文です！ 何のご用でしょうか？」

いきなり名前を呼ばれて思わず敬礼までしちゃったわ。全く鬼が相手じゃあるまいし……

「さっきの取材の続き、しなくていいのか？　俺は何回も取材受けるの嫌だから今回だけにしたいんだが」

「あつ、えっ？　取材？」

本当にこの人は何を考えているのだろう？

霊夢さんも流石に呆れてるし、スキマ妖怪に至っては少し脱力してるわね。

「はあ……なんだか疲れましたので、てっとり早く終わらせましょう。まずはユウキさんの言う能力や学園都市について御伺しますね」

こうして、私はユウキさんから色々な事を聞き出せた。

なんでもユウキさんがいたのは、学園都市という人口の大半が学生で、しかもそのうちの半分近くが何かしら超能力を持っているなんていうとんでもない世界でした。

超能力と言っても1人につき、1つしか能力を持っておらず、火を出せる能力者は水を出す事も飛ぶ事も出来ないとか。

幻想郷にも大抵の力ある人や妖怪は能力がありますけど、それとは別物みたいです
ね。

で、更に能力者も強さに応じたレベルわけがされていて、最高はレベル5、最低は能

力を持たないもしくはとてつもなく弱いレベル0。

でもレベル0と言っても解析不能な能力を、レベル0と認定する場合もある。

ユウキさんはそのレベル0。なぜかと聞いたが、ユウキさんの能力である幻想支配は原理も何もかもが不明な力で解析不能だからだそうだ。

学園都市最高の能力者は全部で7人、そのうち6人の能力を聞く事も出来た。

ベクトルを操って地球の自転から人体の生体解析までなんでもこなせる一方通行（アクセラレーター）

未知の物質を生み出し世界の常識を外れた現象を起こしたり、応用性の高い未元物質（ダークマター）

「とんでもない所ですね、学園都市って」

「学園都市の外にもとんでもない連中が大勢いるけどな」

彼のいうとんでもない連中、それは魔術師と呼ばれていて、学園都市を【科学】として、その正反対に位置する【魔術】

幻想郷にも少数ながら、魔法使いがいるけどそれと似たようなものらしい。

魔術師が能力者になる事は可能だけど、能力者が魔術師になったり、魔術を使う事は出来ないらしい。

でも、それを可能にするのがユウキさんの幻想支配。

「俺も最初は魔術なんて存在知らなかったけど、ちよつとした事件に巻き込まれて初めて魔術を目にした時、使えるようになった。と言つても能力者相手にする時と同様に、魔術師が使う魔術しか使えないけど」

なるほど、チートに見える幻想支配にも色々制約があるようですね。

とはいえ、見ただけで霊夢さんの力を使えるのは妖怪にとつて脅威にもなりますね……待てよ？

「それじゃ私や八雲紫の能力も使える。つて事ですか!？」

私の疑問を霊夢さん達も抱いていたようで、ユウキさんに視線が集中します。

対するユウキさんはじつと私や八雲紫を見つめました……なんだか少し照れてきますね。

「……駄目だ。霊夢には使えるけど、2人にはまだ使えないみたいだ」

「そうですか……つて『まだ』とは？」

「初めて魔術を見た時もそうだったけど、どうやら初めてみる形態の力は最初は全然使えなくて、徐々に馴らしていくと使えるようになるみたいだな」

霊夢さんの霊力を初めて見た時、すぐに倒れてしまったのは身体が慣れていない力を使ったから、だそうです。

「未恐ろしい能力ね。妖怪に慣れてしまえば、私の力すら使えるようになるとは……」

「天使の力を支配したこともあったな……死にかけてた事あったけど」

天使……どうやらユウキさんの世界にも、妖怪に負けず劣らずのトンデモナイ存在が
いっぱいいるみたいですね。だから、私を見て人間じゃないと気付き、妖怪と言われて
も驚かなかったんですか。

妖怪としては、人間に驚かれないと言うのは少し複雑ですね。

「それじゃあユウキ君のこれからの事ですが……明日にした方がよさそうですね」

ユウキさんがさつきからウツラウツラとしている。眠いと言うよりは霊夢さんの力
を使った後遺症みたいなもの、と本人は言っています。

「そうね。色々あって私も少し頭を整理したいし。ユウキさん、今日は泊っていいわよ。

私には別の布団あるし」

「いや、女の子の家に男一人泊るわけにはいかないぞ?」

「別に私は気にしないわよ? 襲われたら叩きのめせばいいんだし。それにさつき助け
てもらったお礼も一応兼ねてるし」

初めてユウキさんに困惑の表情が浮かびましたね。意外と初心なんでしょうか?

さつきから驚かされればなしなんで、こういう方向で攻めて見るのも面白そうですね。

「それを言うなら俺の方だろ。しまった……悪い、言うの遅れたけど。森で助けてくれ
てありがとう、霊夢、文」

「あやややや、私は別に見てただけなので、御礼は霊夢さんだけに言って下さいまし」
「私はこれが仕事だし。見捨てても目覚めが悪いからそうしただけよ、それこそ気にしなくていいわ」

私達のやりとりを八雲紫は面白そうに眺めている。それにしても彼女があまり口を出してこないのが珍しい。

「さて、ブン屋さん。少し話があるのだけど、2人きりでね」

と思ったけどこのまますまないらしい。けれども話の内容はおおよそ想像が付くわね。

神社の外にでて、中にいるユウキさんに聞かれないような場所まで来て、八雲紫はゆっくりと口を開けた。

「言われなくても分かっているとは思うけど……彼の事、彼のいた世界の事」

「分かっていますよ。明日の新聞に彼の事を書く時は、ここに来た原因はぼかしますし、学園都市や能力に関しては書きません」

「あら、珍しい事もあるわね、明日は隕石の雨でも降るのかしら？」

「失礼な。私だって空気を読む事があります！彼の能力は危険ですし、妖怪達が変に興味持つのは幻想郷にとってバランスが悪くなる危険がある。ですよね？彼が幻想

入りした理由を書きたくないのは、個人的な理由ですけど」

そう、世界に捨てられて幻想郷に来た。これを面白おかしく広めるのは気が進まない。

幻想郷に住む妖怪は、外の世界で幻想となり、存在を忘れられ消滅の危機を回避する為ここにいます。

ユウキさんが幻想入りした理由と変わらない。だから分かる……忘れられる恐怖を。

世界にお前の居場所はないと、突きつけられる理不尽さ、行き場のない怒りと悲しみを。

「ホント、明日は隕石どころか太陽が降ってくるでしょうね。と言っても私も同じことを感じましたけれども。世界から居場所がなくなる。ある意味死よりも残酷。ですが、それでも幻想郷は受け入れましょう。彼の孤独も……」

たった1人の外来人に私と八雲紫が同情している。確かに他の妖怪が知ったら天地がひっくり返るくらい驚くわね。

はたてや椀が聞いたら、それだけで死にそうなほど驚くかも……自分で言ってるんだか虚しいわ。

「それと、彼の実力についてはいざれ色々な形で知る事になるでしょう。ですけど、それを一度に大勢に知られるのは危険。そういう意味で新聞には載せないで欲しいのよ。

彼の能力が未知数のうちはね。学園都市に関しても同じような事ですわ」

やっぱりこのスキマ妖怪は何を考えているのか分からない。彼自身に関する事には同情しているが、彼の能力に関しては何か思う所があるようだ。何かを利用する気？

「それじゃあ、私は失礼するわ。冬眠を叩き起こされて、色々面倒な調査までさせられて眠いつたらありやしない。霊夢には彼の面倒を見てあげると、ユウキ君にはあまり能力を使わないようにと伝えてくださいな。それでは、おやすみなさい」

そう言うのと八雲紫はスキマを使つて、自分の寝どころへと帰つて行つた。

「ちよつと待つて下さい、それはご自身で伝え……て、つて行つちやいましたか。私が伝言役に使われるなんて……しかも、こんな事、霊夢さんに何を言われるやら、とほほ」
案の定、八雲紫の伝言を霊夢さんに伝えると、無責任だの、何だのと散々言われまして……私のせいじゃないのに。

ユウキさんは話をしている間に眠つてしまったらしく、伝言は明日伝える事にしました。

「ではでは、私もこれから帰つて急いで新聞を書かなければいけませんので失礼します！
また明日ユウキさんに取材にきますねー」

「来なくていいわよ……と言つても来そうだから、せめて何か食べ物とお酒を持参しなさい」

「あはははは……考えておきます。ではささようなら」

そして、夜もすっかり更けた妖怪の山に帰ってきた私は、早速新聞の作成に取り掛かりましたが、そこでとある失敗に気付きました。

「そう言えば、ユウキさん自身については能力以外何も聞けませんでした……私とした事があー！」

ユウキさんの名字や家族構成、趣味、などなど肝心の人物像には何も触れてません！「仕方ありませんね。新聞には必要最低限だけ書いて、明日早めに御酒と食べ物持って博麗神社に行きますか……」

と、私がユウキさんと話して感じた事から性格や人物像を書き、なんとか記事にする事ができました。

翌日、改めて博麗神社を訪れた私は、ユウキさんがいなくなった事を知りました。

霊夢さんがまだ眠りに付いている早朝に、こんな書置きを残して出て行ってしまったそうです。

『 霊夢へ 色々世話になった。昨日幻想郷の事も沢山教えてもらったから、どう

にか生きていけそうだ。この礼はここのお金手に入れたら御賽銭箱に入れる事にする。

それじゃあ、さようなら。

ユウキ』

続く

第3話 「弾幕ごっこ」

Side ユウキ

『悪役ゴッコはいい加減卒業して、囚われのお姫様を助ける英雄（ヒーロー）になろうぜ……』

『手を伸ばせば届くんだ、まずはそこから始めようぜ……』

『『魔術師！』』

懐かしい、夢を見た。

「う……うう、身体いてえ」

穴の入口から零れる眩しさで目が覚めた。

昨日、俺は学園都市から突然幻想郷なんて所に飛ばされたが、どうでもいい事。

「川は、あつちか」

草木も眠る丑三つ時、博麗神社を出た俺は、人里に向かっていた途中、川の側にある大樹の根元に穴を見つけて入口を雪で固めて、カマクラを作りそこで寝た。

こんな大樹は見た事もない。けれども、そのおかげで寒さをしのぐ事が出来た。

学園都市は冬で、きていた防寒服もそのままこっちに流れ着いたので寒さ対策には問題はない。

持ち物も最低限しかないが、もっていた携帯電話のおかげで時間も分かる。

「最新型携帯に変えていて良かったな」

これは高性能太陽電池内蔵型で、常に太陽の光を吸収しているのでコンセントから充電する必要がない。

しかも、時計も衛星電波で合わせるのではなく、全く新しい方法で自動的に合わせてくれるので問題がない。

最も、異世界の幻想郷で時間合わせが正確に出来るかは謎だ。

霊夢曰く、今は冬の終わりが近い時期らしく、学園都市とは数カ月ずれがあった。

「……霊夢はもう起きたかな」

去った博麗神社の方向に目を向ける。書置きは残したけど、博麗神社を出たのはこれ以上誰かの世話になるのは嫌だったからだ。

違うな、もう誰かに関わるのは嫌だったからだな。

「それにしても、懐かしい夢をみたな」

あれは俺と当麻がインデックスの首輪を破壊した時だな。初めて科学以外の力であ

る魔術を目にして、最初は軽い頭痛程度だったがインデックスの放った【竜王の息吹】を見て、俺もそれと同じ魔術を使ったんだっけ。

あの時は咄嗟の事だったし、よく覚えていないけど気がつけば俺はベッドに寝かされていた。

それ以来、能力者以外にも魔術師を相手にする事が増え、条件付きだが相手の魔術を使えるようになって……第三次世界大戦では【天使の力】なんてものも使ったっけ。

「ここでは妖怪の力を使えるようになる。って事か……何なんだろうな幻想支配って」
「そうなのよねえ。私達の力も使われると色々困るのよねえ」

「うわっ!？」

川で顔を洗おうと覗き込んだら、目の前に女の顔が現れた。

「お前は、八雲紫」

「ゆかりんって呼んでと言ったのに、まあいいわ。どうして博麗神社から逃げだしたの？ おかげでこんな朝っぱらから動く羽目になったじゃない」

眠そうにあくびをする紫を、俺は油断なく睨む。

左手に日傘を、右手に扇子を構え飄々としているけど、こいつは殺意まではいかないけど、かなり警戒している。

「そんなに身構えなくてもいいわ。私はただ……確かめたい事があるだけよ。霊夢がい

ない今のうちにね」

そう言つて紫が扇子を振りかざすと、どこからともなく弾丸が放たれてきた。

木々を盾にしながら、転がるように走り回つてかわす。

「いきなり何するんだ！」

「あなたに弾幕ごっこについて教えようとしているだけよ、その身体にね」

抗議の声をあげても紫の攻撃は止まらない。

放たれている弾幕に誘導性はないが、それでも数が多い。

それに昨日見たたく紫を見ても、頭痛はするがその力が使えない。

なのでこちらから攻撃する手段がないので、逃げの一手だ。

幸いここは森の中、木を盾代わりにする事が出来る……自然破壊しているようだが、

悪いのは紫だ。

「あら、自然は大切にね☆」

「だったら攻撃を止めろ！」

「あなたが全部喰らえばいいだけの事ですわ」

地面に降りた紫は懐から一枚のカードを取り出した。

「このカードはスペルカードと言います。説明するより一度喰らってみれば分かります

わ……境符『二次元と三次元の境界』」

紫がカードをわざとらしくかがけ、技名らしきものを唱えると、足元からいくつかの青白い波動が俺にむかつて放たれた。

今までの攻撃よりも速い、よけられるか？

「っ、にやろ！」

咄嗟に木を蹴り、三角跳びの要領でかけあがり、太い枝を掴み回避した。

「身体能力は高いわね。それに戦い慣れてもいる。よほど学園都市は物騒な所なのね」
「お前みたいな危険思考の変人は、確かにゴロゴロいたさー！」

そのまま枝を飛び回り、紫の側へと突進する。

紫もさつきまで放っていた弾幕を再び展開したが、速度に目が慣れてきたのでなんとかかわせるようになってきた。

服や頬を掠める程には受けているが、あまりダメージらしいダメージはない。

「チョン避けもできるのね。でも、あなた自身には攻撃力はなさそうね」

「そうでもない！」

ちょうど紫の真上に飛び移った時、適度な大きさの枝を踏んだ。

枝は簡単に折れて、紫の上に落ちる。

だが、紫はそちらに見向きもせず傘で叩き落とした。

「これ、反則ギリギリですわね」

「何の反則だか分からない！」

木から飛び降り、全力で紫の死角を付くように回り込み、殴りかかった。

「あら、てつきり殴られると思っていましたのに。フェニミストですか？」

「老若男女問わず敵には容赦はしないつもりだけど、仮にも恩がある人を殴る趣味はない」

俺の拳は紫の手前で止まっている。

紫は俺が死角から殴りかかってきた事にも、俺が紫を殴らない事に気付いていて涼しい顔で笑みすら浮かべていた。

「で、こんな茶番をした理由はなんだ？ あんたなら俺を秒殺するくらい簡単だろ？」

弾幕とか言つて速度も遅いし、狙いもバラバラで、わざと避けやすくして、何のつもりだ？」

「それが【弾幕ごっこ】だからですわ。口で説明するよりも身をもって味わった方が、あなたにはいいと思つたのですけれども？」

「……人間が妖怪を退治しやすくする為か？ スペルカードもその一環？」

「理解力が高くて助かりますわ。弾幕ごっこは殺し合いとは違う、幻想郷式の決闘。スペルカードは弾幕ごっこに使用する各々の能力を元に作られた弾幕を誓言する為のカード」

要するに弾幕ごっこはゲーム感覚らしい。それはそうか、ただでさえ人を襲う妖怪が多い幻想郷、弱い人間はあつという間に食いつくされてしまう。

それを防ぐ為や妖怪同士のストレス解消に弾幕ごっこは最適らしい。

「と言うわけで決闘前にスペルカードを使いきった方の負け。さて、私が何を言いたいか理解して頂けると手間が省けるのですが？」

「俺の能力が危険なら殺しかかってくればいい……抵抗はするけどな」

今までの霊夢や文の反応を見て、俺の能力が幻想郷でいかに危険なのかは理解出来る。

学園都市でもそうだったし、そのせいで神の右席にも狙われたしな。

強者の能力のコピーだけでなく、反動はあるが使用不能にする事も暴走する事も出来るなんて、反則もいいとこだし。

「あらあら、そんな物騒な事は致しませんわ。・幻想郷は全てを受け入れるのよ。それはそれは残酷な話ですわ。私はただ弾幕ごっことスペルカードに付いて教えに来ただけ……それとあなたの幻想支配についての考察と忠告、ですわ」

「忠告、ね」

「あなたの力はまだ幻想郷に適合していないだけで、とても危険な能力です。使う時には十分気を付けて下さいね。と言ってもここであなたが生き残るにはその力を使うに

外ないでしょうけど」

当然、俺には魔力も霊力も妖力もない。元の世界でだって能力者や魔術師相手には優位に立てたけど、木原や神裂、アックアなど身体能力や近接能力が高い相手には負ける事もあった。

「ですから、妖怪相手には相手の通常弾幕を使つての攻撃で対処をお願いしますわ。今のあなたでは私達の能力やスペカまでは支配できないでしょうけど」

「分かった。と言つても俺にはそれしか対抗手段がないけどな」

「分かつて頂ければ結構。それと……出来れば博麗神社で過ごして頂きたいですね」

そういう紫の表情が、ほんの少しだけ変化したように見えた。

「俺を監視しやすくする為か？」

「それもありませんけど、保険、ですわね。後は霊夢が1人では何かと心配なので」

「霊夢が？　なんだ意外と寂しがり屋とかか？　そうは見えなかつたけど、むしろ1人だろうが何人いようがお構いなし、だろうな」

会つてまだ間もないし、話もまともにしてないけど。彼女はそういう少女だと思う。

何と言うか、無干渉でも、無関心とも違う、宙に浮いている。それが彼女の印象だ。

「……はあ、あなたのその尋常ではない適応力と理解力の高さ、それも能力かしら？」

「それは買被りだ。俺は一般人より少しだけ怪奇の世界に触れて、少しだけ殺し合いを

して、少しだけ戦争の真ただ中にいたただけだ」

「それだけで十分普通じゃありませんわね。そこら辺をもう少し詳しく聞きたいのですけれど……」

「……………」

「またの機会に致しますわ。そうそう、あつちに行くとしても大きくて綺麗な湖がありますよ。幻想郷の名物の1つ、ぜひ行くことをお勧めしますわ。ではごきげんよう」
扇子を振りながら胡散臭い妖怪は消えて行った。

大きくて綺麗な湖……経験的にこういうオススメをされた場所には、必ず何かある。それでも特に行くあてもないから、行ってみるのもいいかもしれない。

と言うか……

「人里がどっちかわかんなくなっただけ……」

昨日霊夢から人里の方角も獣道も教えてもらったけど、紫と戦ってるうちに方向を見失った。

「方向音痴ではなかったはずだけど……森の中歩き慣れていないせいかな」

とぼやきつつ、しょうがないので紫が言っていた湖へと歩き出した。

「その湖で魚釣ればいいんだけどな……朝食食ってないし」

ま、なんとかなるか。

???

「おかえりなさいませ、紫様」

「ただいま、藍。どう？ あれから何か分かった事はある？」

「いえ、何も……紫様の方はどうでしたか？ 彼の能力は危険だとおっしゃっていましたが」

「確かに危険。でも、今すぐどうこうって事ではないわね。霊夢の力も弾幕程度しか使えてなかったみたいだし、スペルカードも使用出来なさそうね。私の弾幕もコピー出来ていなかったし」

「……幻想支配、本当に私達の力も使えるのでしょうか？」

「それはこれからの様子見ね、彼が幻想郷に馴染めばあの力もそれに応じて順応していくかもしれないけど。今は【通常弾幕をコピー出来る程度の能力】と言ったところかしら。ただ、あの力は……」

「あの力は？」

「異世界の力と言う感じがしなかった……むしろ、こちら側の……」

「?? 紫様？」

「なんでもないわ。それより私は少し寝る事にするわ。あの吸血鬼達が近々何かしそっう
だけど、その時になったら起こしてね」

「はい、わかりました。おやすみなさいませ、紫様」

続く

第4話 「妖精」

Side ユウキ

『いい、ユウキにとうま？ 妖精って言うのはね古くから宗教的にも魔術的にも非常に密接な関係が……』

『だーもう！ 分かったよ、分かりましたから、ながーい解釈はまた次の機会について事で、出ないと特売に遅れる』

『お前が、天使が実在するなら妖精はいるのかなー、なんて言うからだぞ当麻。タイムセールに付き合ってやってんだから、とつとと買い物済ませるぞ。インデックスも続きは買い物が終わって当麻の家で夕食食べながらじっくりと話してあげなされ』

『うん、分かった。ユウキにはまた今度教えてあげるね』

『つてこらー！ 何ー人逃げようとしてるんでございますか、ユウキ！ 夕食御馳走するから最後まで付き合ってくれ』

『はいはい。あ、タイムセール終了まで後1分切った』

『何〜!? 不幸だあ〜!!』

なんて、当麻やインデックスと妖精の話で盛り上がったけど、まさかこんな妖精に出会うとは思わなかったな。

「ねーねー、ユウキー魚まだー?」

「チルノちゃん。まだ始めたばかりだからもう少し待とうよ」

俺の目の前には水色の髪をして氷の結晶のような羽を生やした少女、チルノ。

そしてもう1人、こっちは緑髪をサイドポニーで纏めて、背中に羽を生やした少女、大ちゃんがいる。

2人は妖精と呼ばれる存在でその中でも特に力の強い存在らしい。

チルノは氷の妖精、大ちゃんは大妖精と呼ばれているが、大ちゃんと呼んで欲しいと言われた。

「まあ、2人のおかげで釣りが出来る訳なんだけどな」

少し前、紫に言われて湖にやってきた俺は、朝食の魚を釣る事にしたのだが、当然釣り竿などあるわけがなくどうしようかと考えている所に2人がやってきた。

2人は初対面の俺にも人懐っこく話しかけてきて、流石に邪険には扱えなかった俺は釣りをしようとしていた事を話すと。

大妖精、大ちゃんが湖で拾った釣竿を渡してくれた。

なんでも、人里の人間の忘れものらしく餌のミミズも地面を掘ればすぐに出てきた。

で、2人も釣りをしているのを見ていると言うわけで今に至る。

「なあ大ちゃん。ここつてよく釣りに来る人多いのか?」

女の子にちゃん付けなぞした事もないので、かなり恥かしいがこう言わないと拗ねられたのだから慣れるしかないか。

「はい、人間もよく見かけますし。あそこに住んでるメイドや妖怪も釣りに来る事ありますよ」

「あそこつて、あの赤い館の事?」

湖の反対側に赤い館が見える、見た感じ一面真っ赤つかの洋館で……趣味が悪い。

「そうそう。名前はなんだっけ……えっと、なんとかまかん……まかんこうさつぼう?」

なんだその、緑色の異星人が放ちそうな怪光線は。

「違いますよー紅魔館。紅の魔が住む館、紅魔館です」

ん? 聞いた事がない声がしてふり返ると、そこには釣り竿と大きなバケツを持ち、チャイナ服を着た赤い髪の女性が立っていた。

「おはよう、チルノちゃん、大ちゃん」

「おはようございます」

「あ、みすずだ、みすずー!」

もう、ゴールしてもいいよね??

「いえいえ、紅美鈴。ホン・メイリンです！ 中国つて言われるよりはマシですけどね」
チャイナ服の女性、紅美鈴はたはは、と苦笑しながら2人の妖精に挨拶して、俺に向
き直った。

「あなたは初めましてですね。改めまして私の名前は紅美鈴です。美鈴と呼んで構わな
いですよ」

人懐っこいその3だな。でも、彼女の笑顔は太陽のように眩しかった。

こんな笑顔を見たのは……いや、見せてもらったのはいつ以来かな。

「あ、俺は「ユウキさん、外の世界からやってきた外来人さん。ですね？」 なんて知っ
てるんだ？」

霊夢、文、紫としか知りあっていないのに。

「これですこれ、さつき届いたばかりですが、これで知ったんですよ」

と美鈴が取り出したのは、文々。新聞と書かれた新聞だ。

そう言えば昨日、文に取材受けたんだっけか。幻想郷中に配達されているらしいから
俺の事を知ってる人がいるのも分かる。

「良ければ読みますか？」 というより、一度読んだ方がいいでしょうね」

「えっと、どれどれ……日本語で書かれてるのか良かった、これなら俺でも読める。何何
？」

《新たな外来人現る。名前はユウキ、でも謎。年は16、らしいが謎。人里の少女を妖怪から守っていた所を博麗の巫女に救出される、悪い人ではない、けど謎。身体能力は高く戦闘経験も豊富で戦争に参加した事もあるとか、やっぱり謎》

「……なんじゃこりゃー！ 謎しかないだろうがあゝ!!」

あんなに取材受けた意味が全くない！ 受けない方が良かったと心の底から思った。

「あ、あははは……気持ちばかりわかりますけど、落ち着いて下さい。ユウキさんが悪い人ではないと言うのは会ってみて分かりましたから」

「会って数分も経ってないのにそこまで言われると、かえって怪しいんだが？」

「ユウキさんは優しい人ですよ？」

「うん、ゆうきはいいやつだ！」

根拠のない褒め言葉だ。チルノと大ちゃんは見た目同様に子供だからそうなるのか？

「こう見えて私は、人の気を感じる事が出来るんです。で、あなたからは悪い気を感じません。ですから悪人ではありません！」

悪人には見えない。そう言われるよりは具体的だな。

「で、美鈴はここに何しに来たんだ？」

「あ、そうでした！ 実はですね、この湖の魚を釣ろうかと思って来たんですよ。咲夜さ

んに頼まれました」

そう言つて美鈴は俺の隣に座り、釣りをし始めた

「咲夜？」

「はい、十六夜咲夜さんです。紅魔館のメイド長をしているとっても瀟洒な人ですよ。料理も作つていたので魚を取つてきて欲しいと言われました」

「なるほど、どうでもいいが、俺に敬語はいらぬぞ？ 俺の方が年下だろうし」

「これは、癖……みたいなものですね。門番しているとキツイ言葉では品が問われると言われたので」

昔は荒んでましたよ。と苦笑いを浮かべる美鈴の竿がピクリと反応した。

「おつ、早速来ましたね！」

早いな。と感心していると、俺の竿にも反応があつた。

「あー！ ユウキにもかかつてるよ！」

「2人共がんばつてください！」

チルノと大ちゃんに応援され、腕に力が籠る。

何だろう、この感覚……初めて味わつたかもしれない。

それからしばらくして、2人して獲物と格闘し、ようやく魚の姿が見えてきた。結構大きいな。

「セーのおー!!」

自然と美鈴と息が揃い、一気に魚を釣り上げる事が出来た。

「うわっ、おつきい〜!」

「滅多にいないですよ、こんな大きいの!」

「ふう、大物を釣り上げると気持ちがいいですね」

「そうだな。で、これくらいじゃ足りないんだろ?」

確かに大きな魚を釣れたが、あの洋館で使うにはまだまだ足りなく見えた。

「多いに越した事はありませんから。干物にするか、パチュリー様に魔法で保存してもらつてもりでしたし」

「パチュリー?」

「えつとですね、パチュリー様は……」

と、その後も釣りをしながら紅魔館に住む住民の事を聞く事が出来た。

主である、幼い吸血鬼レミア・スカーレット、瀟洒なメイド十六夜咲夜、地下にある巨大図書館に住むパチュリー・ノーレッジ、その手伝いをしている小悪魔など。

それだけでなく、美鈴は聞いてもない彼女達の能力を自慢げに語ってくれた。

よほど、紅魔館のみんなが好きなのようだ、とても楽しそうに誇らしげに教えてくれたが、初対面の人間に教えていい事なのだろうか?

ちなみにチルノと大ちゃん、時折釣りの様子を見つつ近くを飛び回って遊んでいた。

「それからですね、フランドール様という……「美鈴！」…あ、咲夜さん！」

突然美鈴を呼ぶ声がしたと思えば、銀色の髪をしたまさに「メイド！」と呼ぶに相應しい風格をした十六夜咲夜が空から現れた。

舞夏や鞠亜が見たら悔しがるだろうな。見る事は絶対にありえないけど。

それしても、幻想郷では人里の一般人以外は、大抵空を飛べるらしい……羨ましい。

「釣りをしてると思えば、随分と楽しそうにしているわね」

「い、いやこれは……」

「美鈴に色々尋ねたのは俺だ。そちらの門番を長く引き留めて悪かったな」

と、そこで初めて咲夜は俺の事が目に入ったように振り向いた。

「あら、あなたはもしかして……新聞にあつた謎の外来人さん？」

「謎は余計だ、謎は。俺はユウキ、朝飯を釣りに来たら美鈴がやってきて、色々教えてくれてたんだ。それにおかずの魚なら大量に釣れてるぞ」

大きなバケツ一杯の魚を咲夜に見せると、かなり驚いた顔をした。

「驚いたわ、ここってこんなに魚いたのね」

「私もびっくりですよ。きっとユウキさんのおかげですね」

「何もしてないのに、褒められても嬉しくもないんだけど?」

どうも美鈴は紫と別の意味で調子が狂う。

「それより、これ俺が釣った分も持つて行つてくれよ。少し多く釣り過ぎたからな」

「……………」

釣った分の魚を差し出すと、咲夜は半ば睨むように俺を見て怪訝な表情を浮かべた。

「どうやら美鈴と違い、咲夜は俺を警戒しているようだ。左手を何か掴もうとしているかのように構えている。」

「こつちの方が俺としては楽だけどな。」

「ねえねえ、ユウキ。お腹すいたよお、早く焼いて食べようよお」

「(ぐぐぐ) ……はう」

服を引つ張りながらチルノが空腹を訴えてきた。

妖精が魚を食べるのかと疑問に思ったが、大ちゃんのお腹の虫が騒ぎ出したので妖精もお腹はすくようだ。

「と言うわけで、俺はこの2人に魚焼かなきやいけないから、これ渡すぞ。じゃあな」

押しつける形で魚の入ったバケツを渡し、3匹の魚を手去ろうとしたが、その肩を美鈴に掴まれた。

「ちよつと待つて下さい、ユウキさん。せつかく知りあつた縁じゃないですか。咲夜さ

んもそんな警戒しないでくださいよ」

……何が言いたいんだろう？

「はあ……分かったわ。ユウキさん、それからその妖精たちも、お嬢様が寝ているから館には入れないけど、門の所で待ってなさい」

「流石、咲夜さん♪ ほらほら、行きますよー!」

「えっ? ちよつ、マテ、俺飛べ……なあゝ!」

返事をする前に美鈴に手を掴まれ、あつという間に湖を文字通り飛びこえる事になった。

眼下にはポカーンと、口を開けているチルノと大ちゃん、額に手をあて深く溜息を付いた咲夜がいた。

S i d e o u t

続く

第5話 「紅魔館」

Side 咲夜

はあ〜〜〜……全く、美鈴ったら。あんなに騒いで彼を連れ出すなんて、何を考えているのかしら。

釣りをしている美鈴の様子を見に来ただけなのに、とんだ事になってしまったわね。

「美鈴はなんでそこまであの外来人に肩入れするのかしら」

「あ、あのユウキさんは悪い人じゃないですよ?」

「ユウキはあたいの事、さいきよーだつて言った、だからいいやつだ!」

この妖精たちは、どうやら私がああ外来人の事を悪く言つてると思つたみたいね。

無愛想に見えて、偉く懐かれたものね。

「別に悪く言つたわけじゃないわよ? それにチルノの事最強と言つたの?」

この氷精はさいきよー、さいきよーつて言いふらしてるのは知ってるけど、真に受ける人がいたなんて。

ま、こつちに来たばかりの外来人だから気を浸かつたのかも。

「うん、ユウキが言つてたぞ。あたいがさいきよーだと思つたら、ずっとそう思つてお

けて。それから……えっと」

「誰に何を言われても自分の事を信じて、信念を貫き通せれば、チルノちゃんは最強だだよ」

「そうそう、そう言ってくれたんだ！」

へえ、面白い事言うのね。確か新聞には戦闘経験豊富で戦争すら体験した事がある。と書いてあったけど、それと何か関係あるのかしら？

外来人にはあまりお目にかかった事ないけど、少なくとも彼は一番強い外来人ね。

だから警戒もしたのだけど、ナイフに手を伸ばす挙動もあっさり見破っていたし、お嬢様とパチュリー様の【あの計画】の支障になるようなら……と思っていたけど。

でも、美鈴が警戒していないなら、私の取り越し苦労みたい。

せつかくだからあの外来人の事をもっと知れば、お嬢様のいい退屈しのぎになりそうね。

「あの、2人を追わなくていいんですか？」

「はっ!？」

大妖精に言われて、美鈴と外来人が紅魔館の門に着こうとしてるのに気付いた。

……仕方ないわね。

「あ、あれ!? 咲夜さんいつの間に門に着いたんですか?」

「遅かったじゃない、美鈴」

「あれ? なんであたい達紅魔館にいるの? さっきまで湖にいた気がするけど」

そう私は2人に追いつく為、時間を止めチルノと大妖精を連れて紅魔館へ飛んできた。

美鈴も外来人も、いきなり目の前に私達が現れたから驚いてるわね。

「あ、これが時止めか。便利な能力だな」

ん? なんで外来人が私の能力を知っているのかしら?

「めーりん?」

「ご、ごめんなさい咲夜さん! 咲夜さん達の事話してる時にうつかり……というか自然に……」

初対面の得体のしれない外来人にそこまで気を許すなんて、門番としてどうなのよ? 「だ、大丈夫ですよ。ユウキさん悪い人じゃないですから」

「だからって能力をばらす理由には……ひよつとしてお嬢様達も?」

私の指摘に口笛を吹いて誤魔化す美鈴の頭部に、ナイフを刺しておいた。

「あいたー!? ごめんなさいごめんなさい! お嬢様やパチュリー様の事も少しだけ……」

外来人も呆れかえっているわね。というか目の前でナイフが突き刺さった人がいるのにそこには突つ込まないなんて、外来人にしてはかなり変。

「よく頭に噛みつかれたり電撃浴びせられたり、頭突き食らったりと散々な目にあつた奴いたからな。こういうの慣れた」

いや、それレベルが色々違い過ぎる気が……

「ともかく俺は幻想郷にきて間がないんだ。あまり俺を信用するな。後で俺が思つてた通りと違つた事して幻滅しても知らないぞ」

そう言う外来人の顔が一瞬、ほんの一瞬だけ曇つた……あの表情を、目を、私は知っている。

嫌な沈黙が流れる、がチルノの一言でその空気が変わった。

「ねえねえ、難しい話終わつたー？ あたいも大ちゃんも待ちくたびれたよー」

「もう、チルノちゃんつたら我慢しなきゃダメだよ。今何か大事な御話してるんだから」
そこまで大事な話じゃないんだけどね？

「はあ……美鈴、テーブルと椅子ここに持つて来なさい。私はこれ捌いてくるから、門の外でなら大丈夫でしょ」

門の中なら問題あるけど、外なら大丈夫でしょう……多分。

そう言つて私は、魚が一杯入つたバケツを両手に持ち、紅魔館の厨房へと向かつた。

背後から気配が沢山近づいてくるのが分かったけど、美鈴がいれば問題ないわね。

Side out

Side 美鈴

「さて、咲夜さんが料理作る間、テーブルなど用意しましょうか」

「運ぶの手伝うぞ。どこにあるんだ？」

「私も手伝います」

「あたかもー！」

「それじゃお願いしよう……ん？」

3人を連れて、門の側にある小屋からテーブルなどを運ぼうと思ったのですが、そこに来客が来たみたいです。

「なあ、紅魔館ってペットに狼でも飼っているのか？」

「番犬代わりに私がいますから、飼っていませんね」

湖の向こうから走ってくるのは、3匹の黒い狼のような妖怪。

こんな時間に襲ってくるのは、お嬢様の就寝時間を狙って？

「つて、そんな知恵ありそうな妖怪には見えませんね。チルノちゃん、大ちゃん、門の影に隠れててすぐに終わらせるから」

さて、門番の仕事をしましょうか。

「さて美鈴、あれは俺がやる」

と、ユウキさんが私達の前に守るように立ちました。

「あの妖怪、昨日俺と人里の子を襲ってきた妖怪の仲間っぽい。仲間の仇打ちでも来たのかも、昨日は女の子背負ってたから逃げの一手だったけど……今は」

そう言つてユウキさんは懐から殴打用のグローブを両手に嵌め、狼妖怪達に向かつて走り出しました。

昨日の新聞に書かれていた妖怪はあの狼だったんですね。つてそれどころじゃないです。

「ユウキさん、下がつて下さい。アレは紅魔館を目指しています、なら門番の私の仕事です」

「なら、紅魔館の御客を守るのも門番の仕事だろ」

走りながら門の影からこちらの様子を心配そうに見ている、チルノちゃんと大ちゃんを指さしました。

手に嵌めたグローブも年季が入っていますし、一連の動作の1つ1つにも慣れを感じ、一先ず私は様子を見る事にしました。

これで、彼の力が分かりますね。勿論、危ないと感じたらすぐに助太刀しますが。

「無茶しないでくださいね！」

「ユウキくがんばれ〜！」

「気を付けてくださいね！」

「おう！」

私とチルノちゃん、大ちゃんの声援を追い風に、ユウキさんは飛びかかってきた狼妖怪の一匹の懐に飛び込み、両手の掌底を無防備な腹に叩きこみます。

「ギヤインツ?!」

「悪いな、俺は弾幕撃てないから……肉弾戦で退治させてもらおうぜ！」

右からユウキさんのわき腹に噛みつきこうとした妖怪を右の肘打ちで迎撃し、続けてその反動を利用した右パンチを残った狼妖怪の顔に放ちました。

「まだやるか?」

ユウキさんがドスの効いた声で狼妖怪達を睨みつけると、3匹ともすっかり戦意を喪失したらしく、尻尾を下げ森へと逃げ帰りました。

「ふう、ま、こんな感じでやればいいか」

強いですね。何か能力や霊力などの強化に頼らず、純粹に身体能力を技術で更に効率よく攻撃力に変換しています。

拳法だけでなく、空手なども合わせつつ総合格闘と言えますね。

「ユウキ、すつごーい！」

「ユウキさん大丈夫ですか？ とつてもかっこよかったです！」

息を吐き、何やら独り言をつぶやくユウキさんの元へチルノちゃんと大ちゃんが門から文字通り飛び付いて行きました。

あ、ユウキさんとても面白い表情してますね、照れ隠しでしょうか？

「お、おい。いきなり飛びついてくるなつて。あんなの美鈴や霊夢ならもつと効率よく退治してるぞ」

「美鈴はともかく、巫女は反則だからユウキが一番すごい！」

は、反則つて。確かに博麗の巫女の強さは反則級らしいですけどね、色々な意味で。

「謙遜する事ないわ、あなただつてほんの一瞬で退治したじゃない。おかげで料理が冷めずに済んだわ」

「咲夜さん。もう調理終わったんですか？」

時間を止めてやってきたらしい咲夜さんが、門の前に並べたテーブルに出来たての魚料理を並べていました。

「てつきり美鈴が対峙してるのかと思えば」

咲夜さんの少し非難めいた視線をさらりと流し……

「こつち見なさいよ、美鈴」

流せませんでした！

「い、いや。私がサクツと行こうとしたんですけど」

「アレは多分俺を狙って来たんだ。だから俺がやるのが当然だろ？」

ユウキさんが助け舟を出してくれましたが、咲夜さんは。

「曲がりなりにもユウキさんはおお客様です。紅魔館に害をなすものの始末をお客様の手を煩わすわけにはいきませんわ。ユウキさん、すみませんでした。そして、ありがとうございます
ごいしました」

紅魔館のメイドとして、ユウキさんに頭を下げ礼と謝罪の言葉を言いました。

少し、驚きです。咲夜さん、さり気なくユウキさんを名前で呼びましたね？

「あ、私からも。ユウキさんありがとうございます」

「ユウキ、ありがとうございます！」

「ありがとうございます」

私に続いてチルノちゃんと大ちゃんもお礼を言うと、ユウキさんの顔がみるみる赤くなっていきました。

「お前らまで……ああもう！ 早く料理食べようぜ。せっかく作ってくれたんだから、

冷めたらもつたないだろ」

「ふふっ、そうしましょうか」

どうやら咲夜さんもユウキさんに対する警戒心解いたみたいですね。

確かにユウキさんの強さには驚きましたし、あそこまで強くならなきゃいけないほどユウキさんのいた場所では危険があつたんでしようね。

ひとまず、咲夜さんの手料理を堪能しましょうか。

その後、ユウキさんは人里に向かうと言うので見送り、夕食の時に起きてきたお嬢様に報告しました。

「で、呑気に朝食会を開き、昼食まで用意してあげたと……」

「申し訳ありませんでした、お嬢様！」

「すみませんでした！」

紅魔館の主、レミリア・スカーレットお嬢様は報告を聞き不機嫌そうな声をあげました。

やっぱり、世話を焼き過ぎましたかね。

「別にその事でもやかく言うつもりはないわ。悪意がないと判断しての行動でしょうし、そこは咲夜や美鈴を信用しているわ。ただ、私も呼びなさいよ。そんな面白そうな外来人、一度会ってみたいわ」

「……でしたら、恐らく、あの計画の時に会えるかと」

ユウキさんなら、お嬢様の計画を止めに来るかもしれない。そう、咲夜さんも思っていた。

「へえ、邪魔でもしにくるのかしら？　まあ、人間には有害な計画だし、それはそれで面白そうね」

「??　妨害が増えたら計画が御釈迦になるんじゃないですか？」

「分かってないわね、美鈴。障害が博麗の巫女だけじゃつまらないでしょ。障害は多ければ多いほどいいのよ。それにそう簡単にやられる紅魔館じゃないわ」

「でも、あの妖怪にはメチャメチャにやられたけどね、レミィ」

レミリアお嬢様の友人で、地下にある図書館の主、パチュリー・ノーレッジ様が食後の紅茶を飲みながらポツリと呟いた一言はお嬢様のハートをブレイクしたようです。

「あ、ああれはまだ私達の威厳を知らしめてなかったせいよ」

「どうだか、それにしても咲夜や美鈴が気にかけてきた外来人ユウキ。魔力も霊力もないだの人間にしか見えなかったのに、妖怪を素手で退治なんて結構やるじゃない」

「見てたんですか？」

どうやら朝の騒動を水晶か何かで覗いていたらしい。流星は魔法使いですね。

「まーね。で、あなた達2人はユウキを見て、どう思ったの？　ただの外来人と思っただいからあそこまで世話焼いたんでしょ？」

「それは私も気になるわね。私はホントに寝てたからユウキって外来人の事何にも分からないけど、美鈴はともかく咲夜までなんて……もしかして一目惚れ？」

「違います」

いやらしい笑みを浮かべ、小指を立てるお嬢様に咲夜さんと2人で即答否定しました。

「あら、残念。じゃあ、どうしてそこまでしたの？」

「……似ていたんです、ユウキさんの目が」

咲夜さんも私と同じ事感じていたみたいですね。それも当然だと思いますけど。

「外来人の目がどうしたの？ 魔眼だったり？」

「いえ、ただ……昔の、お嬢様に救われる前の私と同じ目をしていたんです。全てに絶望し、誰も信じようとせず、1人で生きていこうとしていたあの頃の私と……」

そう、紅魔館にやってきた時の咲夜さんはまさにそうでした。

お嬢様が手を差し伸べ、名前と役目を与えて、今の咲夜さんがいるんです。

「私も同じです。あの頃の咲夜さんと似た感じで、それを相手に悟らせないようにも感じました。それに……表面上は温かく優しい気でしたが、内面はとても冷たく悲しい気が満ちていました」

「……天狗が謎としか書かなかったのはわざと、かもね。私は朝読んだけど、レミイも読

んだ？」

「ええ、あのバ鴉天狗の新聞にしては妙にちぐはぐよね。わざと書こうとしなかったかのような意図を感じるわ」

天狗の新聞は何度か読みましたが、あの書き方は非常に違和感を感じていました。

いつもは何でもない事でも面白おかしく書いたり、脚色するのにユウキさんに関する記事は簡略されていて、何かぼやかしているかのような印象でした。

「ま、それは今は関係ないわね。パチエ、準備は後どれくらい？」

「もうすぐよ。下準備は出来ているから後は調整ね」

お嬢様の一大計画がもうすぐ始まるうとしています。

その時、ユウキさんは止めに來るのでしようか？

来てほしいような、でもお嬢様に会わせたくないような気がしますね。

「ふっふっふっふっ、いよいよ始まるわ。私達の樂園、幻想郷を紅く染め上げましょう
！」

続く

第6話 「人里」

紅魔館の門で朝食を食べ、暎夜から昼食に食べてと渡されたサンドイッチを片手に、俺は人里に向けて森の中を歩いている。

人里までそれなりに距離があると云われたが、1日中かかる距離ではないのでそれくらいなら大丈夫だ。

「ま、何事もなく行ければ……だけど」

襲いかかってきた妖怪の眉間を殴り、昏倒させる。

チルノや大ちゃんとは違った妖精も、何度か見かけたがこちらをジツと見つめるだけで特に何もして来ない。

「当然だよ、だってあたゝい達が一緒だもん」

「妖精はイタズラ好きなだけで、特に人を襲う事はないですよ？」

そう言つてチルノと大ちゃんは、遠くから見ている妖精に手を振っていた。

大ちゃんに妖精のイタズラが結果として襲つてる事になる事もある。とサラリと言われたが。

「ほら、ユウキも手を振りなよ」

「はいはい」

チルノに言われ、妖精に手を振ると、妖精も笑顔で手を振り返してくれた。

……あまり経験した事のない気分だな、これは。

「で、2人は人里にはよく行くのか？」

「うん、たまにだけだね。て……てとりす屋に行ってるよ」

テトリスも幻想入りしたのでだろうか？

「違うよ、チルノちゃん。寺子屋だよ、寺子屋。慧音先生が人里の子以外にも私達にも色々教えてくれるんです」

そう、チルノや大ちゃんと一緒に人里に向かっているのかと言うと、2人も寺子屋に行くからと着いてきたのだ。

1人で行けると言ったが、道案内がいた方が迷わないから。と、美鈴や咲夜に言われて渋々同行している。

何かあれば2人を守るつもりだったが、チルノは氷の妖精でその中でも飛びぬけて強い部類らしく、雑魚妖怪程度なら氷の弾幕で追い返したりしていた。

大ちゃんも妖精にしては少し強い程度の強さだったが、彼女達がいるおかげで妖精から悪戯をされずに済んでいる。

「ユウキも飛べればもっと早く行けるんだけどな」

「仕方ないよチルノちゃん。ユウキさんは外の人間だもん。博麗の巫女とか慧音先生みたいには行かないよ」

「お前らは飛べるんだから、とつとつと行つた方がいいんじゃないか？ 寺子屋に遅れるぞ」

「大丈夫！ あたい達は大抵お昼食食べてから行くから、これくらいならちようどいいもん」

本当は1人で行きたいのだが、それをこの子達に言つても無駄だろうな。

この子達の目は打ち止めやアニエーゼ達に似てる気がする、似ているからつて何を期待するわけでもない。

それに、例えばどんな目で見られても結果は変わらなかった。なんて、いらぬ感傷に浸つても仕方ないのにな。

1人になりたいから博麗神社から出たと言うのに。

「……やつぱり1人になるべきだったな」

「えっ？」

「なんでもない」

それから2人の他愛無い会話を聞きながら、森の中を進んでいった。

チルノや大ちゃんには妖精以外にも友達がいるらしく、色々教えてもらった。

人食いだけどなかなか食えないルーミア、ホタルの妖怪リグル、八目鰻屋をしている雀妖怪ミスチー。

友達の話をする時の2人はすごく楽しそうだった。

美鈴が紅魔館の人達を話す時のように、彼女達の事をととても大切に思っているのが良く分かった。

それが……とても羨ましく、妬ましく、少し悲しかった。

「そーいえばさ、ユウキって外ではどんな事してたの？」

「私も知りたいです」

今の俺に一番困る質問をされた。紫や文のような警戒心を奥底に秘めた目ではない、ただの子供の好奇心から来る質問。

適当に誤魔化すか、こんな子達に聞かせる話じゃないしな。

「おや、チルノと大ちゃんじゃないか」

そこへ聞き覚えのない声が空から聞こえてきた。

「あ、けーね先生だ。やつほー！」

チルノと大ちゃんに手を振りながら降りてきたのは長髪の女性で、頭にはどつかの大学教授でも被つていそうな形をした帽子をしている。

飛んではいるが、人間……ではなさそうだな、何か別の力を感じる。ま、どんなのが

いても不思議じゃないか。

俺の幻想支配は他人の力を感じる事も出来る。目の色が変わらないから、力を使つても別にバレル事はないと思う。

「2人共今から寺子屋に行く所だったのかい？ おや君は……ユウキ君だね？ ちょうど良かった、博麗神社に行ったら、君はもうどこかに行つてしまったと聞いたのでね」昨日助けた子を探しに来た人が、確か慧音という教師だったな。

慧音は、美鈴とはまた違った聞く者を安心させるような、ゆつたりとして芯の強い声をしている。

なるほど、まさに教師らしい人だ。

「ここで立ち話もなんだから。人里へ行こう、飛べないなら私に捕まると良い。これでも人一人くらいは一緒に飛べるさ。チルノと大ちゃんも一緒に飛んで行こう」

美鈴の時とは違い、彼女は手を差し伸べるだけで強引に連れて行こうとはしなかった。

ここは、掴んだ方がいいのだろうか？ それとも慧音にチルノと大ちゃんを任せ、自分景色を見ながら行くとさえいへば一人になれるかも。

いや、ならば私も歩こう。と言ひそうだな。

「……………よろしく」

「ああ、すぐに着くから辛抱してくれ」

手を掴まれたまま空を飛ぶ。チルノ達も後ろに続いて空を飛んでいる。

「空を飛ぶ感覚はどうか？　機械で飛ぶ事はあつても、生身で飛ぶ事はないのだろう

？」

「二応飛んだ事はある。数回」

一方通行の力でロケット噴射のように飛んだり、美琴の力でグライダーのように滑空したりもしたな。

垣根の力を使った時は面倒だったな、色々。

待てよ？　もしかしたら俺も飛べるようになるかも？　今度試してみるか、今は止

めておこう。

「ほう、それは少し意外だな。君は何か能力でも？」

「ま、そんな所だ。でも今は飛べないな」

「そうか」

慧音は、それ以上何も聞いては来なかった。

やがて、森が開けて人里らしい集落が見えてきた。

コンクリート固めの無機質な家ばかり見てきた俺には、藁や木などで出来た家はすこ

く新鮮だった。

まるで時代劇がそのまま目の前に現れたかのようだ。

「ここが人里だ。外の世界から来た君には古風だろうけど、良い村だよ」

「ああそうだな。博物館や図鑑で見た昔の日本がそのままある感じだ。何か温かい感じがするよ」

「そう言ってもらえると嬉しいな。さて、話は寺子屋でしよう、こつちだ」

人里の中を歩く。慧音は道行く人に挨拶をされて、丁寧に戻している。

「おつ、チルノに大ちゃんじゃないか、これから勉強かい？」

「うん、寺子屋でおべんきよー！」

「そうかいそうかい。あ、これ良かったら食べなよ、飴だよ」

「ありがとうございます！」

チルノや大ちゃんも知っている人が大勢いるようだ、しかも人気者だ。

他にも明らかに人間ではない見た目の少女などが、ちらほら村人たちと会話をしていた。

妖怪と人間が共存する楽園。人間中心の里でも妖怪や妖精は差別されずに、受け入れられている。

「本当いい所だな、ここは」

俺みたいな奴でも、受け入れてくれるかな。

「ここが寺子屋だ。さあ入ってくれ」

昔の学校、寺子屋。古風な建物で年季も入っているが、立派な建物だ。

「チルノと大ちゃんは先に教室に行つていてくれ。他の皆は午後から来る事になっているから、しばらくは遊んでいても構わないよ」

「うん！ ユウキ、後でねー」

「またね」

2人と別れた俺は、慧音に客間に案内された。

「さてと……まずは」

正座した慧音はまず俺に向けて、深く頭を下げた。

「昨日は梨奈、あの子を助けてくれてありがとう、心から礼を言うよ。梨奈の家族も君にお礼をしたいそうだね。夕食に招待したいと言っていたんだ、後で案内しよう」

あまりに丁寧過ぎる慧音の態度に、困惑しながらも俺は言った。

「待て、礼を言うのは俺じゃない。霊夢にだろ？俺は気絶したんだし」

そうだ。俺は助けていない、霊夢がいなければどうなっていたかは分からない。

妖怪を倒しても梨奈に怪我を負わせていたかもしれない。

「勿論靈夢にも御礼をしたさ。けど、最初にあの子を助けたのは間違いなく君だろ？」

「目の前で女の子が食われる姿見るのは気味が悪いからな、自分のためさ」

「例え、君がそう思つての行動だとしても、結果的に梨奈は助かつたんだ。その礼は素直に受けておくべきだと思うよ？ それに君は梨奈を背負つて走つていた時も、必死に呼びかけていたそうじゃないか。大丈夫だ。絶対守るからしつかりつかまつている。と、そのおかげで梨奈はあまり怖くはなかつたそうだよ？」

……何もかも見透かされたような目、この目はチルノ達以上に苦手だ。

「……後で案内してくれ。けど、過ぎた礼は受け取らないぞ？」

「ふふつ、分かつた。それで、靈夢から君はしばらく帰れないと聞いたが、それまではどこに住むつもりなんだい？」

どうやら、俺が世界に捨てられた事は靈夢も言っていないらしい。

しばらく帰れない、しばらくしたら帰れるかもしれない……なんて甘い幻想は抱かないが。

「金はあるが、それは外の世界のお金でここでは使えない。だから仕事と住む場所を探しに人里に向かつていたんだ。外の世界じゃまだ学生でロクに働いた事はないが、力仕事は結構自信があつたから」

「ふむ……そうか、ならば寺子屋で働かないか？」

「はっ?」

俺が学校で働く? あまりに考えていない提案だったので思わず間抜けな声をあげてしまった。

「聞いてただろ? 俺は学生だ、物を教わる学校に通ってたんだぞ? 子供相手だからって物は教えられない」

「いやいや、何も教壇に立てとは言わないさ。ただ事務作業を手伝ってほしいんだ。1人で全てやっていたからね、人手が欲しかった所なんだよ。たまに親友に手伝ってもらってはいいたけどね。寺子屋には空き部屋がある、そこを部屋代わりに使ってくれて構わない」

正直、嬉しいというか美味しすぎる提案だ。慧音は誰かを利用したり陥れたりするタイプではないだろうが……

「素直に受け入れられない。と言った顔だな? これは親切が過ぎたかな」

「いや、ただ会って間もないのにそこまで親切にされる謂われはない。と言うだけだ」
「ではしばらく他の仕事や住居が決まるまで私が貸す。と言う事でどうだろうか?」

それを聞き少し考えた。確かに学校の裏方ならあまり人に関わらずに仕事が出るかもしれない。

が、チルノや大ちゃんみたいな好意的な子供ばかりではないだろうし、見ず知らずの

外人がいるとなれば子供の親も心配かもしれないが……その時は去ればいいか。

「どうやらあんたよほど人の世話をするのが好きみたいだな」

「悪人の世話までは焼かないつもりだが？」

皮肉にも笑顔で答える。オルソラ2号かこいつは……

「はあ……分かった。しばらく世話になる」

「よろしく頼む。早速だが、午後からの授業に一緒に出て、子供達を見てほしい」

「……は？」

裏方の事務と言っておきながら、いきなり授業の手伝いとは。なんだか嵌められた気分だ。

「これから住み込みで先生の手伝いをしてもらう、ユウキさんだ」

「ユウキだ。よろしく」

「見た事ない服だ！」

「あつたかそう！」

特に無難な挨拶をしたつもりだけど、子供達は眼をキラキラさせて俺を見ている。

「ユウキは外人だ。だからと言って物珍しそうにジロジロ見るんじゃないよ？」

「「はーい！」」

元氣よく返事をする中に、チルノと大ちゃんがいた。2人共こつちにしきりに手を

振っている。

他にも明らかに人間じゃない子もいるが、それでも人里の子と自然に溶け込んでい

なるほど、外来人ごときじゃ心配しないって事か。

「では早速だが……」

授業が始まるようだ。俺は教室の隅の椅子に座り見学をした。

授業内容は小学校レベルの算数や国語、歴史を主にやっている。と言っても小学校には通った事ないけど。

慧音はとても真剣に教えようとしているが……なんだろう、内容は小学生レベルなのに、高校レベルの授業に感じる。

しかも、小萌先生や黄泉川先生の方がわかりやすい気がする。

「……キュウ」

「だ、駄目だよチルノちゃん、寝たら怒られるよ」

「だって、言ってる事よくわかんないんだもん」

チルノが退屈そうにするのも無理はないかもな。

その後、授業で使う資料作りなど裏方の仕事を教わり、早速別室でやろうとしたのだが、今日一日は授業の見学をしてくれと言われ、少々付き合う事になった。

「では、これで今日の授業は終わりだ。みんな、ユウキさんは人里が初めてなんだ。見かけたら色々教えてあげてくれ」

「「はーいー！」」

「……………」

俺はガキか!? まあ、子供だけだ。

その後も慧音の授業を見学しつつ、子供達の話相手をした。

あまり愛想よくしてたつもりはないが、適当にあしらってたのが返って子供の好奇心に火を付けたらしい。

一方通行みたいな無愛想さを身につけたいな、ホント。

「で、どうだった? 寺子屋の授業は」

「慧音は先生より、研究者の方が向いていると思う」

「そうか、私は歴史書の纏めなどもしているからな。研究者と言うのも間違いいではないな」

遠回しな嫌味だったんだが、通用しなかった……

「娘を助けていただいてありがとうございました」

気は進まなかったが、昨日狼に追いかけられていた少女、梨奈の家に2人で行った。

本来は梨奈も寺子屋に通っているが昨日の事もあり、今日は一日家で安静にしているそうだ。

そして、梨奈の家に着き出迎えたのは母親らしき女性とお手伝いさん、どうやら人里の中では割と裕福らしい。

来るまでもそうだったが、昔風の服装と言うのは新鮮だな。田舎の方ではこういう服装している人もいるみたいだが、あいにく日本の田舎には行つた事がない。

「あ、お兄ちゃん！」

続けて、小さな女の子が走つてきた。昨日は暗がりによく見えなかったが、大体最愛や涙子と同じくらい歳の頃か……

って、さつきから学園都市の奴らばっか頭に浮かぶな。早く忘れないと。

「ん？ どうかしたか、ユウキ君？」

「なんでもない。それより身体は大丈夫なのか、梨奈……だったよな？」

「はい！ 御咲梨奈（みさき りな）です！ 昨日はありがとうございました！」

ここまで礼儀正しく御礼を言われるとは、少し困った顔をしたら隣にいる慧音が不思議そうな顔をしていた。

「あ……梨奈、それに家族の人も。俺は昨日たまたま近くにいただけで実際助けたのは

「霊夢なんで、御礼は博麗神社にして下さい」

「それも慧音先生から聞きました。けれどもユウキさんがいなければ、梨奈はその前に食べられていたでしょう。ですからあなたも梨奈の恩人です。さあさあ、主人も奥で待っていますし、お二人ともどうぞ」

「またか、また俺を恩人扱いか。別に今までしてた事と変わらない、変わらないはずなのに……どうしてこうも違うのかな。これが普通だと言うのなら……今までは。」

「ほら、いこつ、お兄ちゃん」

「あ、ああ……分かったよ」

それから、梨奈の家族と共に楽しい夕食会になった。

明るい暖かな家庭は、俺には火傷するくらい熱かった……

「では、私の家はすぐ裏だ、何かあれば呼んでくれ」

「女性の就寝を邪魔する趣味はないさ」

「ふふつ、そうか。おやすみなさいユウキ君」

「ああ……おやすみ、慧音」

寺子屋の部屋に案内された後も、慧音は何も尋ねてはこなかった。

でも、気付いてはいると思う。時折心配そうな表情で何かを尋ねようとはしていた。

俺はそれに気付かないフリをした。

「ここは優しすぎる場所だな。そして、世話焼きの馬鹿が多い。居心地がいいと言えるのか、言えないのか。分からないけど学園都市より腐った連中はいなさそうだな。あのクソババアの依頼を聞く必要もなくなったし、それが一番良かった事かも。なあ、お前、俺の事忘れるのはいいが、代わりに当麻や一方通行達に面倒ふっかけてないだろうな

【木原尼視（きはら あまみ）】

月に向かってそう呟き、静かに目を閉じた。

彼、ユウキ君の心はとても暗い。表面上では他者を気にかけているが、そのせいで自分を傷つける事を彼は気付いているはずなのに。

「妹紅も、最初はああだったな」

自分の部屋で月を眺めながら、不老不死の親友と出会った頃を思い浮かべる。

他人を信用せず、頼らず、壁を作り、手を拒む……そんな悲しい人生を送っていた親友を。

でも、彼は彼女とは違う。住んでた世界に拒絶され、忘れられ、捨てられ……それでも他人に手を伸ばせるお人よし。

いや、普通なら心が壊れるくらいなのに、平然と運命を受け入れているかのような異

端者。

「彼の傷は、ここで癒えるといいのだが。さて明日は少し豪勢な朝食にするか、よし！」
そう決意し、私は眠りについた。

が、その時に異変に気付くべきだったのかもしれない。

さつきまで眺めていた月が

血のように赤い霧で、染まって行く事に。

続く

紅魔郷編

第7話 「紅霧」

——アソボ？ ネエ、アソボウヨ??

「……っ!? 夢、か?」

何かとても不気味な夢を見ていた気がする。

まだはつきりしない意識で周りを見渡す。ここは、寺子屋の空き部屋を借りた俺の個室。
と言つても、まだここを借りてほんの2日しか経っていないので机と蠟燭台以外は何

もない。

「霧は、まだ晴れていないか」

窓を開けると、外はまだ赤い霧で覆われたままだ。

この霧が人里を覆い始めるのと、俺がここに世話になったのは同じ日。

俺が厄介事を引き連れてきたのかとも思ったが、そんな事はないようだ。

「ユウキ君、起きてるか?」

「ああ、起きてるよ慧音」

「おはよう、ユウキ君。」

襖の向こうから慧音の声がした。2日前からここで世話になって以来、食事は慧音の家と一緒に食べている。寺子屋の裏に慧音の家があり、繋がっているので移動はすぐだ。

最初はそこまで厄介になるつもりはないと断つたのだが、一瞬だけとても悲しそうな顔をして、少し躊躇った所を半ば強引に誘われて……今に至る。

意外に策士な所があるな、慧音は。

「ん？ 私の顔に何かついてるのか？」

「ああ、目と耳と鼻と口がついてる」

「そうか、今日も私は健康だな」

と言う風に嫌味なども全く通用しない。

「御馳走様でした」

「お粗末さまでした」

朝飯が終わり、午前いっぱいには慧音と2人で寺子屋の掃除と資料作りをする。

人里、と言うより幻想郷一体を覆っている紅の霧は、人間には長時間耐えられないも

のらしく、寺子屋はお休み中だ。

なので、こうして2人で掃除をしたりするしかない。慧音は半人半獣の獣人という種族で、この霧の中でも問題なく動けるので、人里の様子を見まわったりしている。

「いつ晴れるんだろうな、この霧。自然現象じゃないんだろ？」

「そうだ。間違いなく誰かの仕業、異変だ。」

異変、幻想郷に住む妖怪達が何らかの理由、もしくは暇つぶしのきまぐれで怪現象や怪事件を起こすというもの。

博麗の巫女である霊夢が解決に乗り出すのが普通らしく、そろそろ動きだすだろうとの事。

「ああ、そうだ。これを渡しておこう」

昼食の後、そう言って慧音は一枚の御札を俺に渡してきた。

「霊夢から預かったものだ。これを持っていれば霧の影響を受けずに動ける。念の為に持っていてくれ」

見た目は難しい字が書かれた御札だが、幻想支配の眼で見ると霊夢の霊力が注ぎ込まれているのがわかる。

「だからと言って無暗に外に出る事はやめた方がいいぞ？ 何かあれば私が代わりに行

こう」

ならこれは何の為に渡したんだ？

「何があるか分からないからな。さつきも言ったが念の為だ。では、私は里を見まわってくる。」

人里が霧で覆われてから、慧音は少し離れた竹林に住む親友と一緒にこれに乗じて人里でバカ騒ぎしようとする妖精や妖怪を監視する為と、外に自由に出られない人里の皆の様子を見て回っている。

「夕方には戻ってくるよ」

「いつてらっしゃい、気を付けてな」

いつてらっしゃい……か、この言葉初めて使った気がする。学園都市じゃほとんど一人暮らしだったしな。

それからしばらくは、寺子屋の本を読んでいたりしたが、ここにある本はもう何度も読んでしまったからすぐに飽きた。

「いつになったら晴れるのかなこの霧、早く香霖堂と言う所に行きたいんだけどな」

慧音から聞いたが、幻想郷に流れ着いた外の世界の品物を売っていたり、珍しい品物を買って取ってくれる香霖堂という店が人里から少し離れた場所にあるという。

幻想郷には手ぶらで来たので、売れそうな物はあまり持っていないが、学園都市での

通貨を換金してもらうつもりだ。

学園都市で使っていたお金を慧音に見せると、幻想郷の外の世界で使っているお金と変わらないらしく、香霖堂の店主に交渉すれば換金してもらえるか、物々交換してくれるかもしれないらしい。

他に売れそうなものは携帯電話があるけど、これは太陽光さえあてれば半永久的に使える最新型で、電話やメールが使えなくても色々暇つぶしや便利な機能がついているので、少し勿体ない。

「せっかく御札もらったんだから、これで行くかな」

と思ったがやめた。霧が無害になるとはいえ、見通しの悪い道に行く気にはなれない。

慧音に頼めば連れて行ってくれるだろうが、そこまで世話になる気はない。

香霖堂の話を聞いた時も案内すると言われたけど、断ったし。

「……少し、寝るか」

ずっと本を読んでいたせいとか、少し眠くなったので座布団を枕代わりに寝転がる。

よほど眠かったのか、すぐに眠りについた。

——ネエ、アソボウヨ？

誰だ？

——アソボウ？

子供の声？ 夢？

——ズツト、声ヲカケテタンダヨ。ヤツト聞コエタ！

何を言っているんだ？

——ワタシハ、ココニイルヨ？

宝石のような羽をした、女の子？

——ダカラ、早く会イニ来テネ？

ここは、紅魔館？

——ワタシノ名前ハ、フランドール・スカーレットダヨ

フランドール・スカーレット？

——今日ノ夜、紅イ月ノ下デ、マツテルカラネ

「待て！」

そこで夢が終わり、俺は飛び起きた。

「夢、だけど。夢じゃないよな……ん？ このタオルケット、慧音か」

寝る前になかったタオルケットがかけられている。

「……やつぱりこういうのは落ち着かないな」

外を見るとすっかり日が暮れていて、紅い霧の向こうから霧よりもさらに紅い月が見える。

「フランドール・スカーレット……そう言ってたな」

『それからですね、フランドール様という……「美鈴……あ、咲夜さん！』

あの時、美鈴が言いかけた名前だ。と言う事はやはりフランドールは紅魔館にいるのか。

それにスカーレットと言う姓。おそらく紅魔館の主、レミリアの妹か家族だな。

「吸血鬼に明るいうちに会いに行くのは失礼か」

吸血鬼に会った事はないが、夜行性なのはあつちの伝承と変わらないだろうし。

なら、夜に会いに行くのが普通だろうな。

「ユウキ君、起きているかい？」

朝と全く同じ事を言いながら、慧音がやってきた。

「ああ、これ、慧音がかけてくれたんだろう？　ありがとう」

「昼寝は良いが、ちゃんと布団で寝た方がいいぞ？　冬も終わりに近づいたとはいえこの霧のせいでまだ寒いんだし。さ、夕食が出来たぞ」

「ご飯を食べる間、慧音は人里にはあまり混乱は見られないが、外に自由に出来ないの

が不便だと言う事、今日一緒に回った親友である藤原 妹紅の話などなど、色々な話をしてくれる。

人に話をするのが好きなのか、それとも単に俺を気遣ってくれているのか、両方だな。

「御馳走様でしたつと。慧音、俺ちよつと出かけて来るから、多分遅くなると思う」

「こんな時間にか？ 一体どこに行くんだ？」

「ちよつと紅魔館まで、吸血鬼に誘われたから遊んでくる」

「そうか、誘われたなら行って来ると……つて紅魔館だと!？」

あ、ノリツツコミ。

「ダメだ！ ただでさえ今は霧と異変中で妖精達が興奮して危ないのに、よりにも寄つて紅魔館、しかもこんな満月の夜に行くなんて自殺行為以外の何物でもないぞ！」

「そうか、今日は満月だったのか、霧でぼやけてみえていたから気付かなかつた」

「つっ!! 君は、全く……とにかくダメだ！ あそこの住民は危険だ！」

なぜそこまで慧音が紅魔館を危険視するのは分からないが、俺を心配してくれているのは分かる。

「そんな心配しなくても、あそこの門番やメイドと話はしたし悪い人達じゃなかつたぞ？」

「会った事があるのか!?! だ、だがあそこの吸血鬼はとても危険だ。血を吸われないの

か?」

「そう簡単にやられる程弱いつもりはない。それに、今日行くと約束したからな……破るわけにはいかないだろ」

一方的な約束だけど、フランドールは待っているだろうからな。

「ユウキ君、なぜ嬉しそうな顔をしているんだ?」

「ん? そうか? 別に嬉しいとかはないけど、そうだ。慧音にはまだ俺の力、幻想支配を見せてなかったな」

試したい事もあるし、ちょうどいい機会だ。

「君の能力の事か? それならば霊夢から聞いているが……」

眼を閉じ能力を使用するイメージ、そして、ゆっくりと瞼を開け慧音を見つめる。

すると、全身に力が巡り巡ってくる感覚が、学園都市で能力者を相手にしていた時や、魔術師相手に戦った時と同じ感覚。

「なっ!?! 君の瞳が青くなっている?」

慧音の力、やっぱり霊夢と同じような力だ。紫と戦った時はうまくいかなかった。多分、紫は妖怪で人間と違う力を持っているからうまく出来なかったんだと思う。半分は人間の慧音なら、力を使えるんじゃないかと思っただけど大正解だ。

幻想支配の発動条件は何となく体で分かっているけど、実際はどうなっているのかは

分かってない。

今度はチルノや大ちゃんのような妖精に使えるか、試してみるか。

「これが、幻想支配？」

「ああ、俺は今慧音の力を身に宿しているようけど、何か身体に不都合はあるか？」

「いや、何も異常はないが、確かに君から私の霊力を感じるな」

「霊夢も確か霊力を使うんだったな。この世界の人間が使う力は霊力と言うのか、AI M拡散力場のようなものか。」

「ともかく、これで慧音の力をコピーできた。ならば……」

「よしっ！」

「ユウキ君の身体が、浮いている？」

「慧音が飛んでいるのを見て、ひよっとしたらと思っただけど、うまくいった」

「幻想支配で相手を見ると、相手が使う能力と全く同じ能力が使えるようになる。」

「相手が出来る事なら何でもできる、が、相手が出来ない事は出来ない。」

「だから、俺は慧音が飛んでいるのを見て、慧音の力を使えば俺も飛べるんじゃないか
と思った。」

「だから君は霊夢の弾幕を使えたわけか。私の弾幕も使えるのか？」

「それも試してみるか……それ！」

窓を開け、空に向けて右手を突き出すと、赤い弾がいくつか発射出来た。

霊夢の時は半ば無我夢中だったから感覚よく覚えていなかったけど、こんな感じで弾幕を撃てばいいのか。

後ろで慧音が口を開けて、あ然としているのが笑えた。

「……す、すごいな、君は」

「幻想支配で一度見た力は、他の力を上書きしない限り1日ほど使える。それに元の世界に居た時、昔から体も鍛えていたし、それなりに訓練もされたから肉弾戦にも自信がある、これで俺の強さは分かったか？」

学園都市ではもつと小さい時からナイフや拳銃や重火器の訓練も受けたし、アイツから格闘術も教わったしな。あまり思い出したくないけど。

能力者以外にもスキルアウトとか天草式やアニューゼ隊など、幻想支配があまり意味のない戦いでも負けなかったし。

流石に聖人には無理だったけど。

「はあ、これ以上言ってこっそり抜けだされるよりは、見送った方がマシだな。本当は私も同行したいのだが……」

「慧音は人里を守るって言う大事な仕事があるだろ。これは俺の私用だ、付き合う必要はない」

「……なら、少しだけ待っていてくれ」

そう言つて慧音は自分の家へと戻つて行き、少し大きめの風呂敷を持ってやつてきた。

「これは、なんだ？」

「実はご飯を多く炊き過ぎてしまつてな。おにぎりを作つたんだ」

いや、今夕食終わつたばかりなんだけど？ まあ、幻想支配使い続けていると無性にお腹がすく事はあるけど、それでもしばらくは大丈夫だ。

「お腹が空いたら食べても構わないが、正確には君用ではないな」

「？ 俺の為じゃない？」

「君が食べる為に用意したわけじゃない、と言う意味だ。ともかくこれを持って行つてくれ、きつと役に立つと思う」

「慧音がそう言うなら……」

いまいち釈然としないが、おにぎりの入った風呂敷を受け取る。

結構入っているのか、少し重い。どれだけ作つたんだ？

「まあいいか。それじゃ、行つてくる」

「気を付けてな、危ないと思つたらすぐに戻つてくるんだぞ？」

「分かつてる……じゃあな慧音、本当に色々ありがとう」

「? あ、ああ……」

まだ借りを返していないが、いい機会だ。

「寺子屋のみんなによろしくな……さようなら、慧音」

「っ!? ま、待つんだユウキ君!」

慧音が俺に手を伸ばすが、それよりも早く窓から空へと飛び上がった。

背後からは慧音の叫び声が聞こえるけど、無視する。

「これでいい。これ以上世話になりたくはない」

俺は一人の方が性に合っている、今までずっとそうだったんだ、これからもずっとそうすればいいだけだ。

少し後ろ髪が引かれたが、紅い霧の中を俺は紅魔館に向かって一直線に飛んだ。

続く

第8話 「腹ペコ妖怪」

人里を文字通り飛びだし、紅魔館へと向かう。

「……どれだけ作ったんだよ、このおにぎり」

背中に背負ったおにぎりの風呂敷の重みを感じ、少し溜息をつく。

霊夢に続けて慧音にも……恩を返す相手が増えてしまった。

慧音には世話になったが、これ以上あそこで恩を返そうとしても溜まるだけだ。

「ん？ 来たな」

前を見ると、妖精達がぞろぞろと現れてきた。

異変の最中は、妖精達は興奮して弾幕をばらまいてくるとは聞いていたけど、実際に見るとすごいな。

「アハハ〜アハハ〜♪」

あつちの妖精はなんだかハイになってるな。なんだこの霧は妖精にとつて覚●剤とかそういう薬物なのか？

「いえいえ、ただ単に楽しんでるだけだと思えますよ？」

「まるつきり無邪気な子供だな……オリヤ！」

声のした後ろに向けて思いつきり回し蹴り。相手が誰か分かっているので手加減なしの全力だ。

「うわっ!?! な、何するんですか!?! 私じゃなかったら思いつきり急所に入っていましたよ!」

「ああ、お前と分かって思いつきりやったんだが……残念、仕留め損ねた」

何か見られている気配は人里出た時からあったし、感じた事のある気配だから恐らく文だと思っていたが当たるとは。

「なぜにそこまで私に恨みでもあるのですか!?! 前は一応恩人として敬ってくれてませんでしたか!?!」

「やかましい! なんだあの新聞は! せっかく、慣れもしない取材受けたと言うのに変な事ばかり書きやがって」

「変な事とはなんですか! ありもしない嘘八百を書くよりはよっぽどマジじゃないですか! 謎と言う事で読者の好奇心を煽る新聞記者のマル秘テクニクです! ……ところで、さつきから随分と器用な事してますねえ」

「お前もなー」

ちなみに文が現れても妖精たちの攻撃はやまず、俺も文も弾幕を避けながら会話をしている。

「こんな殺意も悪意もなく、ただばら撒くだけの弾に当たるわけないだろ？ 一応これよりもっと趣味の悪い攻撃たくさんされてきたからな」

「つくづく面白い人ですねえ。そもそも弾幕は相手を倒す為だけではなく、いかに相手に魅せ付けるかも重要なんで」

だからこんなに殺意も悪意もないのか、純粹に遊んでいるだけなんだろうな。

見るからに楽しそうに撃つてきてるし、俺達がよけるのを悔しくも思っていない。

「で、さつきからごく当たり前のように飛んでいますよ、あなたって飛べましたっけ？」

「気付くの遅いな！ これは慧音の力使ってるんだよ、幻想支配だな」

「ああ、だから眼の色が違うんですか。便利ですよ、その能力。だったら弾幕使ってみたらどうですか？」

「このまま避けながら先進むのも面倒だし、そうするかな」

本当は無邪気な妖精に攻撃するのは、何か躊躇いあるけど。でも弾幕なら傷付ける為じゃない攻撃なら、と両手を突き出す。

別に突き出さなくても出るようだけど、何かこういう動作がないと落ち着かない。

赤い楕円形の光の弾が撃ちだされ、妖精へと当たった。初めての弾幕、にしてはあまり感動も何もないな。

弾の当たった妖精はそのままピチューンという音と共に消えてしまった。

慧音やチルノ達からは妖精は人間や妖怪と違って死なず、攻撃されてもただ消えてしばらくすればまた元に戻るだけ、とは聞いていたけど、本当にあとかたもなく消えるんだな。

「死体が残らないだけ、マシ……か。で、俺に何の用だ？」

あらかた妖精もいなくなり、俺は近くの木に止まり文に聞いた。

「サラリと物騒な事言いますね。まあいいでしょう、ここ2、3日はドタバタしていました、少し落ち着いたのでユウキさんの取材の続きをしようと思ひまして」

「続きも何もこの前話したのが全部だろ。全くわけのわからん記事にしかならなかったけど」

「そうです、そこです！ 私幻想支配とか学園都市とかの話は聞きましたけど、肝心のユウキさん自身の事は全く聞いていません！」

ビシツと指を刺される。人を指さしたらダメなのは妖怪には通じないのか？

しかし、俺自身の話か……

「年齢は16歳、高校1年生身長体重はここしばらく身体測定してないから不明、以上」
「なるほどなるほど……ってそういうのじゃなくてですね？」

適当に「まかそうとしたが、ダメなようだ。さて、どうするか……ん？ 森の向こうから何か黒い球のようなものが飛んでいるのが見えた。」

街灯もないいつもの夜だったら気付かなかったかもしれないけど、今は赤い霧に月の光が反射して世界が紅いから黒い塊がよく目立つ。

「聞いていますか、ユウキさん！ ルーミアなんて見てないでこつちを見てください！」
「ルーミアって、あの球の事か？」

ルーミア、確かチルノや大ちゃんの友達で闇を操る人食い妖怪だったな。ま、妖怪は大抵人を食うみたいだけど。

「ルーミアは闇を操って自分の周りをまつ暗闇にするんです。でも、ルーミア自身も闇でも何も見えなくなると言うお粗末ぶりですが……フラフラですね」

つまり、能力の無駄遣いと言うわけだな。そんなルーミアはあっちへフラフラ、こつちへフラフラしつっつ向かってきた。

「……お腹すいた」

「は？」

「お腹すいたんだよー!!」

インデックス2号かコイツは!?

「そこにいるのは人間？ 食べても良い人間？ 美味しそうな匂いがするから食べてもいいよね？」

「なんだかすごく物騒な事言われていますね。まーがんばってください」

「つて文！　なんでそんな離れた場所から手を振ってやがるんだ！」

離れた木陰から顔だけ出してこっちに手を振っている。好き勝手やってくれ、私は知らない、とでもいいだけだ。

「取材対象に過度な干渉は記者としてはダメダメですから、私はここからばっちりかつちりあなたの喰われる様を観察してきつちり記事にさせて頂きますから〜」

などと合掌付きのエール(?)を送られてもやる気が起きるわけでもない。

「……アイツ後でシめて「いただきまーっす！」……おわっ!？」

黒い塊、ルーミアがこっちに向かつて飛んできた。咄嗟に空に飛び上がりかわしたが、ルーミアはどうやら直接食らいつくつもりだったようで、さっきまでとまっていた枝がバリボリと食われていた。

「……まずい」

黒い球から枝がポロポロと吐きだされる。ちよつとしたホラーだな。

「おいしい匂い、そこお！」

「ちっ、弾幕ごっこはどうしたんだよ！」

あくまで肉弾戦(?)をしかけてくるルーミアに、俺も慧音の弾幕を使って対抗しようとするが、うまく当たらない。

ルーミアがいるのは黒い球の中心部だと思われるが、フラフラと不規則に飛ぶ中の見

えない球の中心部を弾幕を使って間がない俺がうまく狙うのは難しい。

「うう、逃げるなあ!」【夜符・ナイトバード】

突如黒い球から青と緑色の弾幕が左右にばら撒かれるように放たれた。

「これがスペルカードか」

確かに妖精達のものも数が多いけど、左右に規則的にばら撒かれる弾幕を避けるのは簡単だ。

隙間を縫うように飛び、ルーミアとの距離を保つ。あまり近付き過ぎても突っ込んで来られたら厄介だしな。

「よし、俺もスペルカードを試してみるか」

幻想支配で能力をコピーすると、出来る事と出来ない事が瞬時に頭に入ってくる。

スペルカードも同じよう、慧音が持っているスペルカードと効果が頭に浮かんでき
てはいた。

とっておきと言う事で、妖精達には使うつもりはなかったが、ルーミアには別だ。

【産霊・ファーストピラ……】ん?」

スペルカードを唱えようとした時、ルーミアに異変が起きた。突如弾幕が止み、ルーミアを包んでいた闇が薄くなってきた。

「お、お腹すいてこれ以上はだめえ……」

そして、闇の中から赤いリボンをした金髪の少女が見えてきたと思えば、力尽きたかのように地面に真つ逆さまに落ちて行った。

「お、おい、危ない！」

いくら頑丈な妖怪でもこの高さからじゃ怪我ですまないかもしれない。慌てて落ちるルーミアを抱きかかえ、地面へと降りた。

「いやあ、危ない所でしたねえ。どうやらルーミアは本当に空腹だったんですね」

「文……お前何事もなかったかのように出て来るんじゃないやねえ！」
【産霊・ファーストピラミット】

「ええく!? ちょっと、まつ、わわわっ!?」

背後から悲鳴とピチューンという音がしたみたいだが、無視。

ルーミアを木にもたれかかせると、文が涼しい顔で近付いてきたので発動しかけたスperlカードを、半ば八つ当たりにぶつけた。少しはすつきりしたな。

「う、うくん……」

「おい、ルーミア。大丈夫か？」

「お腹、空いたよお」

よほどお腹がすいているらしく、豪快にルーミアのお腹が鳴った。

と、ここで背中にしよつていた荷物の事を思い出した。ルーミアがさつき美味しい匂

いがすると言っていたのはきつとコレの事だな。

「ほら、おにぎりだ。食べれるか？」

「おに……ぎり？ 食べ物、たべるー！」

風呂敷からおにぎりを出し、ぐったりしているルーミアの口元に持つていくと物凄い勢いで噛みついてきて、危うく手ごと食べられる所だった。

拳ほどの大きさのおにぎりをペロリと食べたルーミアに、更におにぎりを渡すと美味しそうに食べる。

「んぐっ！ んんんっ!」

あまりにもハイスピードで食べたものだから、喉に詰まったようだ。

「そんなに急いで食べるからだ。ほら、水、沢山あるからゆっくり食べろよ」

「んぐ、んぐんぐっ……ふはあ、ありがとー！」

竹で作られた水筒を渡すと笑顔でお礼を言ってきたルーミアに俺は、いつかのインデックスを思い出した……

インデックスに負けない程の食欲で、持っていたおにぎりはあつという間になくなってしまった。

「ふうぐ、食べた食べたーありがと……えつと？」

「俺の名はユウキだ」

「ユウキ？ ひよつとして外から来たチルノや大ちゃんの友達？」

どうやらあの2人から俺の事を聞いているようだ。それなら話は早いけど友達……か、自分の事を言われているのどこか他人の感じがするな、まあそれはいいか。

「俺もチルノや大ちゃんから聞いてるぞ、ルーミアだろ？」

「うん、私の名前はルーミアだよ、よろしくねユウキ！」

「で、ルーミアはどうしてあそこまで空腹を空かせていたんだ？」

まるで何日も食べていないかのような空腹っぷりだった。それとも、インデックスみたくお腹が空きやすいだけか？

「えつとね、ずっと人間食べてなくて、おまけにこの霧でますます人間が出歩かなくなつて、さつき巫女とほうきに乗った白黒を見つけて食べようとしたら、コテンパンにやられてお腹が空いて限界だったの。でもおにぎりのおかげで助かったよ！」

「なるほど、確かにこの霧じゃ人間は出歩かないですからね。巫女と白黒と言うのは異変解決に向かった霊夢さんと魔理沙さんですね。あの2人を食べるのは不可能ですよ」
いつの間にか復活した文がそこにいた。人を食べる食べれないだの、文も随分と物騒な話をするな。

「霊夢が異変解決に向かったのは慧音から聞いているが、魔理沙って誰だ？」

「霧雨魔理沙さん、一応魔法使いです。魔法の森に住んでよく霊夢さんの所に遊びに

行ったりしてますよ。そう言えばなんであなたはこの霧が平気なんですか？ 霊力や魔力がない人間には有害のはずですけど」

今更気付くのか、お前は本当に新聞記者か？

「慧音から御札をもらったんだよ。霊夢がくれたもので、これを持っていれば霧の中でも自由に動けるんだとき」

「あの巫女もなんでもありですね。それにしても……ユウキさんには変わった御趣味がおありのようですね」

「？ 何の事だ？」

「いやあ、妖怪とは言え見た目幼女なルーミアを餌付けして、すっかり懐かれてるじゃないですか」

文はニヤニヤと擬音が見えそうな程、俺の隣にちよこんと座り水筒の水を飲んでいるルーミアと俺を交互に見る。

「……ルーミア、鶏肉って好きか？ 目の前に大きいバカラスがいるから好きだけ食べろ」

「にく〜♪」

「ちよっ!! 私そんなに食べる所ないですよ？」

突っ込むのはそこか？

「手足は細長いですし天狗の間でも細い方ですが、胸はありますがそこを食べられるのは……あ、でもユウキさんになら……」

「ルーミア、ゴー」

「らじやー!」

——ガブツ

「いったああ〜い!? ルーミアさん、ギブですギブ! ユウキさんも冷たい目で見ないで助けてください! ごめんなさい! さっきのは冗談です、冗談!」

やれやれと、頭を噛みつかれ涙目の文からルーミアを離す。とんでもない事を口走るからだ。

「いたたた、私が人間だったら噛み砕かれてますよ」

「自業自得だ。さて、俺はもう行くよ。じゃあなルーミア、今度俺を見かけても食べようとはするなよ?」

「うん、ユウキは友達だから食べないよ、おにぎりありがとう、ばいばーい」

ルーミアはまた黒い球になりどこかへと飛んで行ってしまった。やはりあの状態では外が見えないらしく、木に何度かぶつかっていた。普通に飛べばいいのに。

「友達……か」

「いやはや、随分可愛らしい御友達が出来て良かったですね〜♪ ユウキさんも随分と

幻想郷を満喫してるようで」

「満喫って、そう見えるか?」

「勿論、愛妻弁当を作ってくれる人まで出来たじゃないですか」

「愛妻弁当じゃない! あ、慧音、こういう事予想して持たせたんだな」

ルーミアも寺子屋の生徒の1人で、慧音もよく知っている子だ。

途中でルーミアに遭遇した場合に備えて、こんなにかくさんのおにぎりを用意してくれたのかもしれない。

もしくは、この霧で何も食べられないルーミアの事を知っていたか……どつちでもいいけど。

「それでユウキさんは、こんな夜に一体どこに向かってたんですか?」

「紅魔館。そのフランドールって吸血鬼に招待された」

「紅魔館ですか!? いや、確かにあそこの門番やメイド長は危害加えたり主の命令なしじゃ人を襲いませんですけど、でもよくあんな所からの招待受けましたね」

なんだかオーバーに驚いている気はするけど、確かに慧音にも紅魔館にいたと言った時は驚かれたな。吸血鬼は人里の人間は襲わないが、外来人の血を吸ったり料理したりはするそうだ。

でも、美鈴も咲夜もそこまで危ない人には見えなかったな、警戒はされたのは当たり

前だし。

「文は紅魔館の人とは知り合いなのか？」

「新聞を配る時に門番とメイド長にたまに会うくらいですわね、フランドールと言うのも名前しか聞いた事ありませんし……そうだ！　せっかくなので私もご一緒します」

これは名案とばかりに頷く文だが、俺は心底嫌な顔をした。

「あややや、そこまで嫌がられるとは予想外ですよ。紅魔館まで私が護衛代わりもしますし、道案内もしますよ？」

「護衛が必要なほど危険とは思わないし、一度行つてるから場所も分かるんだけどな？」

「そ、それに私みたいな美少女と2人つきりになれるんですよ？　これはお得じゃないですか……それとも、ルーミアみたいな幼女が御好みですか？　あ、それともすでに寺子屋の先生とそう言う仲に!?　これはスクープです！」

1人で妄想全開の文にスペルカードを数発御見舞して、紅魔館へ向けて出発した。すぐに文も復活し、後を追ってきたが、弾幕より物理的に沈めれば良かったかな？

「じよ、冗談ですって。それに私もいざれ紅魔館を取材したいと思つてたんです。で、今回の異変の原因は紅魔館らしいので、異変の取材も兼ねて、尚且つユウキさんの取材も出来る、これは一石三鳥、乗らない手はないです！」

「鳥はお前だろ……つたく、好きにしろ。道案内はともかく、護衛は任せただぞ」

「はい〜♪ おまかせくださいあ〜い！ 一名様ごあんな〜い！」
なんでそこまでハイテンションになるんだか、このバカラスは。
でも、護衛してくれるみたいだからそれはいいか。
どうも慣れない力を使い過ぎたのか少しヤバい感じだしな……

つづく

第⑨話 「やいきよーの氷精」

いやあゝ思わぬ形でユウキさんに同行取材出来て良かった良かった。

この赤い妖霧は我々の住む妖怪の山にまで及んで、特に影響はないけれど人里や他の場所にはどんな影響出てるか調べてこいと言われて人里の様子を見ていました。

そこで誰かが寺子屋から飛び出るのを偶然見つけて、後を追って見るとユウキさんが弾幕を使って妖精達を蹴散らしていた。

幻想支配、やはり脅威になる。でも、彼はその力を最低限にしか使っていない、八雲紫に忠告でもされたようね。

「さつきから何ブツブツ言ってるんだ？」

「え？ いや、ちよつとここまでの取材を纏めてるんですよ。えっと、ユウキさんの趣味は餌付け……ワブツ!？」

「いい加減そのネタはいらねえっての」

後ろ向きで弾幕を撃たれました。妖精やルーミアとの弾幕ごっこを見て改めて思ったけど、やはり戦い慣れてるわ、ユウキさんは。

身のこなしや気配の読み方、未知の能力にも即座に対応し対策を立てれる判断力と順

応力。

幼少の頃から何かしらの訓練を受けて、それ相応の修羅場をくぐり抜けてこないとうはいかないわ。

「ユウキさん、紅魔館での用事が済んだら、元の世界でのあなたの武勇伝も聞かせてくださいねー」

「断る。それよりお前は自分の仕事しろよ」

分かつてますよー。と、私は向かってくる妖精を弾幕で追い払う。落とせば済む話だけれど、護衛なんでそこまでする必要はないしね。

紅魔館への同行取材の代わりに、私が道案内と護衛をする事になったけれど、すでに一度紅魔館に行っているというユウキさんに道案内は不要で、護衛と言っても今のユウキさんは慧音の力を使っているのです、そこらへんの妖精や妖怪じゃ相手にならないからこれも不要。と思っていたけれど何やらさつきからユウキさんから感じる力が弱くなっている気が？

見た目は疲弊しているわけでもなさそう、調子が悪いわけでもなさそうね。

「ユウキさん、少し休みますか？」

「そうだな。湖が見えてきた、あそこで休むか」

おや、随分あっさりと休憩を取る事に賛成したわね。てつきりそのまま行くと思った

けど。

「霧の湖、その名の通り今は赤い霧で覆われていますね。でも、月が出てるので少しはマシですか……赤い月ですけど」

「……もう、限界だ」

湖に到着し降りた途端、ユウキさんの様子がおかしくなりました。

フラツと地面に倒れ込み、片膝をついたかと思えば、彼の体から慧音の力が霧のように霧散してしまつたのです。

「ど、どうしたんですか一体？」

もう何の力も感じず眼の色も元に戻つてしまつたユウキさん。

それでも本人は体の調子を確認するだけで、特に混乱している様子はありません。

「タイムリミットが来ただけだ。幻想支配が解除されるのは自分の意思で解くか、一定時間が経つかだ。学園都市に居た時は能力者相手では大体1日くらいは保つてたけど。それも最初のうちは1、2時間ですぐに解けたりもしたしな。要は慣れつて事だろうな」

つまり、慧音の力もつと言えば幻想郷にある力の1つ、霊力は視慣れない力だから持続時間が短かった。と言うわけね。

「霊夢の時みたいに気絶しないだけマシだ。特に体に問題ないみたいだし、護衛もいる

から道中も問題ない」

なるほど、力が切れそうなのが分かってたから私に護衛をさせた……って、あれ？

「それじゃユウキさんはそのまま紅魔館に行つて、フランドールさんに会う気なんですか!？」

慧音の力を使っているならいざ知らず、今の誰の力も持っていない状態で行くのはかなり危険。

「そのつもりだ。けど、何もないよりは……」

そう言つてユウキさんは、じつと私の事を見つめてきました。

「え、えつと……一体何でしょうか？」

「……………」

「流石の私もそう見られると、ちよつと……恥かしいんですが」

うわあ、ユウキさんが真剣に私の事見てる! そう言えばこうもじつくりとユウキさんを見た事ないような?

これは負けていられません! 全てを見て聞いて知る新聞記者が見られればなしじゃダメです!

うゝ、なんだか色々混乱してきました、ここは私もユウキさんを見つめる事にしましょう!

「ジ―……」

「……………」

「ジ、ジ―……」

無理、もう降参！　なんだかすごく恥かしくなってきたあ！　赤い月明かりに照らされた湖畔でこれはかなりムードがあるんじゃない？

なんでユウキさんはこうも私をじつと見つめるの!?　わ、私に惚れました？　さつき弾幕撃たれたりルーミアをけしにかけてきたのは照れ隠し!?

そ、それはそれで嬉しいような……その、いきなりこういう展開は予想外と言いますか。

「やっぱダメか、文の力をコピー出来ない。慧音で出来たから文でも出来ると思ったんだけどな」

「そうですね!?　そのパターンですよね？　お約束ですか!?!　私一人が舞いあがってばつかみみたいですよね!?!」

「……………何いきなり木に頭ぶつけてるんだ？　気でも狂ったか?」

こ、この人は本当にもう……………この展開は想像できたはずなのに私のほかあ!

「と言うか、ユウキさんも私の事じつと見つめててそのうつすい反応は何ですか!?!　私れっきとした女の子なんですよ!?!」

「あ、悪い。今日は化粧してなかったのか？ でもそれにしても綺麗だけどな？」
「ちつがいます！ そういう意味じゃありません！」

全くもう、さっきの仕返しかな……あれ？ 私今さりげなく綺麗って言われたのかな？

あと女の【子】にツツコミも何もしてこなかったのは嬉しいけど、これでも私はユウキさんより何百年も年上ですが。

「ん？ あそこにいるのはチルノと大ちゃんか？」

「なんでユウキさんって私にドライなんですか……」

がつくりと項垂れながらユウキさんの指さす方を見ると、確かに霧の向こうに青い髪の少女が湖の淵に座り込み、隣に緑髪の少女がいるわね。

それにしても私よりもあの小さい妖精が気になるのは……ひよつとして、ユウキさんはそういう系の人？

外の世界では流行りだとも言うし、ルーミアにも餌付けしたし、フランドールに呼ばれてのこのこ行くあたりも……

「……」

と考えていたら、ユウキさんが無言で私の脳天にチョップを、それも割と強く。

「痛いー!!? ちよ、何いきなり人の頭叩くんですか？」

「お前がさつきから思ってる事口に出まくってたからだ。俺にそんな趣味はない」
「ほうほう、でしたらユウキさんのストライクゾーンはどれくらいなんですか？」

「少なくとも何百歳も年上はアウトだな」

うわつ、何気にアウトと言われた……少しショック。

「よつ、大ちゃん。こんにちは」

「あ、ユウキさん、こんにちわ！ それと誰ですか？」

うーん、そう言えばチルノには何度か会ってるけど、大妖精にはまだ会った事なかったような……あれ？ でも会ってるはずだけど？ ま、妖精だからこんなものね。

「ああ、初対面だったか？ こっちはバ鴉っていう文だ」

「どうもお、バ鴉という文です……つて違います！ 射命丸文というバ鴉です……つてそれもちがーうー！」

「な？ バ鴉で十分通じるだろ？」

「は、はあ……どうも、バ鴉さん」

「しゃ・め・い・ま・る・あ・や、です！」

な、何なの？ さつきからユウキさんにペースを乱されっぱなし、そんなに私が嫌いななの!?

「で、さつきから黙ってるチルノは一体どうしたんだ？」

チルノは私達が近くに来てから顔をちらりと向けただけで、無言で湖に石を投げ込んでいただけ。

その姿は誰がどう見ても落ち込んでるようにしか見えない。拗ねているとも言えるわね。

でも、年中無休で頭の中がお花畑の妖精がこうも落ち込んだりするのには珍しい。

この氷精と大妖精は妖精にしては力が強く、人間臭い所も多いからかしら？

「実は、さつき巫女さんと魔女さんに弾幕ごっこで立て続けに負けて……それで」

「自信を無くしたか。それにしてもまた霊夢と魔理沙かい、あいつら紅魔館に霧止めに行くのになんで通り魔みたいな事してるんだ？」

「いえ、むしろ逆ですね。異変なんで妖怪も妖精も興奮して、暴れたい所にたまたま通りすがったあの2人が標的になって、返り討ちつて所です。私達だつてここまで来る時に妖精が襲ってきたじゃないですか」

「それもそうか」

私達からしたら普通の事だけど、外から来たユウキさんには変に見えるようで、でもこれは慣れてもらうしかないわね。

ユウキさんはチルノの側に座った。と言つてもチルノに何を言うわけでもなく、ただ黙つて湖を眺めている。

紅魔館に行くんじゃないかったの？ ユウキさんも寄り道がお好きなようで。

「ユウキ……あたいたい、負けちゃった。それも2回も、あたいたいきよーじやないのかな？」

「最強だつて負ける事もあるさ。強いからつていつも勝つとも限らないしな。俺のいた所でも最強最強と言われてたけど、何回か負けた奴も知ってるしな」

「あたいたい、負けたくないもん。さいきよーだから負けたくないもん！」

「チルノちゃん……」

チルノは涙を浮かべるほど悔しかったのね。気持ちとは分からなくもないけど、でもやっぱり分からない。

「弾幕ごっこに負けた事に悔しがりますか、別に勝ち負けは重要じゃないんですけどね」
「どういう事だ？」

「弾幕ごっこという遊びの戦闘をする事自体が重要なんですよ。中には勝ち負けにこだわる妖怪もいますけど、実力者はみんなそうです」

「じゃあ文もか？ お前も実力的には結構強いだろ？」

「ええ、勝とうが負けようがネタに出来れば、私はそれでいいので」

「なるほど、分かるような分からないようだな。俺のいた世界じゃ生死をかけた時、世界の運命をかけた戦いばかりしてきたからな」

外の世界から来たユウキさんには、そこらへんの理解はまだちよつと無理かもね。

それに今更だけど、つくづく物騒な生活をしていたのねユウキさんは。

「チルノ、お前もつと強くなりたいつて事か？」

「……うん」

もう十分に強いんですけどね、妖精としては。これ以上強くなるのは色々とマズイよ
うな気も……

「分かった。なら、少し待ってろよ」

「ユウキさん、何かいい案でもあるんですか？」

大妖精が首をかしげ、私もユウキさんが何か思いついたような表情が気になるわね。

「それは、こうするのさ」

そう言つてユウキさんはじつとチルノを見つめ始めました。すると、みるみるうちに
瞳の色が変わり、ユウキさんの体から冷気が溢れだしてきました。

「これ、チルノちゃんの冷気？」

大妖精もユウキさんから、チルノの力を感じたようです。

これは少し驚きですね。私の力を使えないのに、チルノの力は使えるなんて。

「よしっ、成功だ」

「どうしたのユウキ!?! あたいみたいに冷たい空気出して、それに眼が緑色に輝いてい

るよ?」

今のユウキさんの目は緑色、慧音の力を使っていた時は青だったのでこれで2色。

しかも、緑色に輝いているから赤い夜によく目立って少し綺麗かも。

「緑か、緑にはなつた事ないな」

「どうしましたかユウキさん?」

怪訝そうにするユウキさん、一体何だろう?

「文には言つたけど、元いた世界では俺は能力者の力を使う時は青、魔術師の力を使う時は赤になるんだ。だから、緑色つてのは初めてだ。あ、それ以外の色にはなつたかもしれない時は何回かあつたけど、その時何色かは分からない。自分の目の色は鏡とか見なきゃ分からないだろ?」

「はあ、それは確かに。で、チルノさんの力をコピーして一体何をしますか? その力でフランドールさんに会いに行くだけでも?」

確かに何も無いよりはマシだけど、でも妖精の力をコピーしても吸血鬼相手にはキツイと思うわ。

「過小評価は良くないな文。チルノよく聞けよ。俺は今チルノの力を使ってるんだ、分かるか?」

「う、うん。何となく、ユウキを見てるとなんだか自分を見てる気になるよ」

自分と全く同じ力を持ったのが目の前に居ればそうなるわね。私はまだ体験した事がないけど、実際そうなったら気持ち悪いものかも。

「すごい、あたいがもう1人いるみたいだ。ユウキすごい！」

「でも少し寒いかも……」

確かに。力の強い氷精が2人、それも冷気がだだ漏れ、妖怪といえど側にいるだけで風邪引きそうですね。

私は平気だけど、大妖精には少しキツイかな。

「で、だ。ここからが肝心」

ユウキさんの体からあふれ出る冷気が弱まっていき、完全に止まりました。

目の色は以前緑のままだし、感じる力はそのままなので力を解除したわけじゃなさそうだけど。

「見てろよ、チルノ」

そう言っただけで空に飛びあがったユウキさんは、空中で両手を前にかざす。すると両手から冷気が放たれ空中に氷の道を作っていく。

ユウキさんはその氷の道に乗り、スケートをするように滑って行った。あれなら空を飛ぶより速いかもしれない。

「何あれ、何あれ！ 面白そう！」

「氷の道を作りながら滑ってる、すごい！」

妖精2人は大興奮。空中をただ飛ぶより、氷の坂道を滑って移動する方が確かに楽しそうではあるから、子供みたいな妖精には受けがいいみたいね。

と言いつつ、実は私も少しやってみたくはある。外の世界には氷の滑り台があるって聞くけど、あんな感じかしら？

そして、ユウキさんは湖に浮かぶ木の枝や丸太に向けて、滑りながらチルノの弾幕を撃ち始めた。

これは弾幕ごっこにうってつけかも……なるほど、そういう事ですか。

歓声をあげていた2人も、空中を自在に滑りながら弾幕を撃つユウキさんの姿に見惚れているようで、黙って見上げています。

私も思わず見惚れちゃいましたが、新聞記者としての仕事は忘れてないですよ、ぼつちりカメラに収めています。

「どうだった、チルノ？」

やがて降り立ったユウキさんの目は元に戻っていて、彼からチルノの力は感じなくなっていた。時間切れのようね。

「……………」

「チルノ？ 大ちゃん、チルノどうしたんだ？」

「多分、ユウキさんがかつこよかったからだと思います。私もすごく感動してますから」
興奮のあまり顔を赤くしたチルノが大ちゃん言葉に、うんうんと頷いています。そんなに赤くして溶けないのかしら？

「そうか、でもな今俺がやった事、チルノも出来るんだぞ？」

「えっ!？」

2人揃って驚く。そりやあんな事を自分も出来ると言われたらそうなるわね。

「俺はさつきチルノの力を使つたけど、チルノに出来ない事はさつきの俺では出来ない。逆に言えばチルノの力を使つて俺が出来る事はチルノでも出来るつて事だ」

「うーん、あたいにもさつきみたいに滑り台が作れるつて事？」

「ああ、それがチルノの新しいスペルカード、必殺技の完成だ」

「おお〜！」

物凄く目がキラキラしてるわね。子供の扱いがうまいと言うか、何と言うか。

でも、さつきのアレは確かにスペルカードとしても十分ね。スペルカードは魅せる事が一番大事、現にさつきの氷の道を作りながら弾幕を撃つ姿は、チルノや大妖精それに私も見惚れちゃつたし。

「本当は俺がさつきの動き教えても良いんだけど、これから他に約束があるんだ」

「ううん、だいじょーぶ！ さいきよーのあたいならあれくらいくしょーだよ！ 次

に会ったらユウキに見せてあげられるようになるよ」

「そうだな。チルノなら楽勝だな、なんて言ったって……」

「最強だもん（ね／な）！」

それからチルノや大妖精に別れを告げ、私達は湖の向こうに微かに見える紅魔館に向けて出発しました。

「あれ？ ユウキさん、チルノの力もう使えないんじゃないんですか？」

「いや、さつきは時間切れで解除になったんじゃない、力を解除しただけだ。幻想支配の解除とコピーした力の解除は別だからな。自分で解除しても時間切れにならない限りはコピーした能力は使えるんだよ。と言っても、これでまた別の誰かの能力コピーしたら、チルノの力は使えなくなるけどな」

「つまり、幻想支配は時間切れにならない限り、一度コピーした能力は何度でも使えるところ、言うわけですか」

そして、幻想支配を使っているかいないかは目を見ればすぐに分かる。と、ふむふむやはり同行取材して正解でしたね。これで結構幻想支配の事が分かってきたわ。でも、まだ色々出来る事がありそうな気もするわね。

「てか文。いつまでその話し方してるんだ？」

「えっ？ 何がですか？」

「新聞記者だからだろうが、その取材相手に対する時の独特の話し方と言うのは、あまり好きじゃないんだ。出来れば素で話してくれた方が俺も話しやすいんだけど」

「バレてましたか。ですが、これは私の癖といえますか、今は取材中ですし習慣なので気にしないでくださいな。私ともっと親密になれば話は別ですけど？♪」

とにこやか営業スマイル全開でユウキさんにせまってみても……

「……一生その話し方でいろ」

つれない人ですね、ホント。

だけど、ユウキさんとは取材対象兼監視対象としてではなく、もっと親密になってもいいかなーなんて、思ってるのは事実ですよ？

つづく

第10話 「紅魔の門番」

「はあ……負けちゃいましたか」

私、紅美鈴は紅霧を止めに来た紅白の巫女と、白黒の魔法使いの侵入を阻止するため、弾幕ごっこを行い負けた。

レミリアお嬢様からはそこまで真剣に侵入を阻止しなくてもいいと言われていたけど、それでも門番として全力を出しての敗北。

あとで咲夜さんに怒られるでしょうねえ。今頃あの2人は、パチュリー様と咲夜さんが仕掛けた迷路で迷っているかも。

「考えていても仕方がない。まずは……着替えかな」

あの巫女が来た以上、これ以上侵入者は現れないかな。と甘い考えをしていると、湖の向こうから飛んでくる2つの影が見えました。

1つはどうやら新聞記者の文で、もう1人はチルノちゃんですか？ でもチルノちゃんにしては大きいような？ でもこの感じはチルノちゃんみたいですが。

「こんばんは、美鈴。派手にやられたみたいだな」

「どうもー！ 清くただ……」

「あー新聞は間にあつてゐるんで、とうかいいつも問答無用で配つてるじゃないですか。今日はどうしたんですか、ユウキさんまで、まさかあなたもこの霧を止めには？」

異変を解決するのは巫女や人間だとは聞いていますが、まさか外来人であるユウキさんも解決しに来たのでしょうか？

「それは霊夢がもう動いてゐるんだろ？ なら俺までする事はない。俺は、フランドル・スカーレットに遊びの招待受けたから来たんだ。んで文はここまでの護衛兼案内と云う名の野次馬だ」

「野次馬つて、ひどいですねユウキさん」

「なるほど……つてフラン様から!?! 本当ですかそれ!?!」

有り得ない。あのフラン様が誰かを、それも人間を招待するなんて。それにフラン様は一步も館から出てゐないのに。

「フランドルつて、金髪で七色の宝石が付いた羽をした小さい女の子だろ？ なんか遊び相手探してゐるらしくて、俺がたまたまその声聞いたからだとき」

確かにそれはフラン様だけど、そう言えば巫女達の相手をしてて気付かなかつたけど、フラン様の気が少し昂ぶつてゐる？

まさか、本当にユウキさんを呼んだ？

「それでもなんであなたがここに？ フラン様は吸血鬼でとても強いんですよ？ それ

にフラン様相手ではいくらあなたでも殺されてしまいますよ?」

「確かにフランドールの力はコピーも何も出来そうにないから、結構危ないかもしれないけど。それでも呼ばれたし行くと約束したからな」

さも当たり前のように言っていますが、ユウキさんはフラン様の事も分かっていないようです。でも、あのフラン様が興味を持って呼んだ相手ならば、ひよつとしてフラン様の本当の遊び相手になれるかもしれません。

ん? コピー? そう言えば、さっきまでチルノちゃんの力を感じましたし、ユウキさんは何か特別な力でもあるのでしょうか?

「ユウキさん、さっきチルノちゃんの力で飛んでいませんでしたか?」

「あ、美鈴には俺の能力の事言っていなかったな。てつきり新聞読んでみんな知っていると思ったけど、あれには書いてなかったな」

と、視線は隣にいる鴉天狗に向きましたが、当の本人は口笛吹いてシラを切っていますね。

「ま、簡単に言うとな俺の能力は幻想支配と言って相手の力を使えるって事。と言っても今の所使える力は人間と妖精だけみたいだけどな。だから、妖怪である文や美鈴の力は使えないんだ」

なるほど、チルノちゃんの力を使って飛んできたという事ですか。そして、私の力は

使えない。と言う事はお嬢様やフラン様の力も使えないと言う事ですぬ。

だからと言つて、チルノちゃん程度の力を使えてもフラン様と会つて無事で済む保証にはならないですよ。

「色々と説明してもいいけど、今は先約があるからまた今度な」

「氷精には随分とお節介焼いたのにはですか……イタツ!」

「余計な事を言うな。とにかく通してくれないか?」

どうしましようか。今、紅魔館は巫女に備えても臨戦態勢を継続中です。とてもじゃないですが、人間を入れるわけじゃないです。

ましてやフラン様と呼んだとなれば、レミリアお嬢様も黙っていないでしょう。

ですが、ユウキさんなら通してもいいと心の中で思い始めているのも事実です。

彼ならフラン様の友達になれる気がします。なので、試す事にしましようか。これは

……主の命より優先すべき事ですから。

「分かりました。あなたの力を試させていただきます」

「……なんでそうなる? 普通そこは通さないとか、私を倒していきなさいとか言うんじゃないか?」

「簡単な事です。フラン様の招待されたお客様を無下には出来ません。ですが、あなたを通してむぎむぎのフラン様の玩具にされて、殺されてしまうのはすごく嫌なので」

巫女と魔法使いを通すのとはわけが違う。レミリアお嬢様ならまだしもフランお嬢様では、普通の人間では殺して下さいと行くようなもの。

「殺されに行くつもりはないぞ?」

「はい、ですからあなたがフラン様に会っても大丈夫と思える強さ、私に見せてください」

自分でも不思議な事を言っていると思う。だけど、私はユウキさんをフラン様に会わせても大丈夫と思える確信を持ちたい、それには戦ってみるのが一番いい。

「どうやら美鈴さんは、あなたの事を心配して言ってくれているようですね。氷精や大妖精といい、本当にいつの間にかそういう仲間になったんですか?」

「人聞きの悪い事言うなつての。大体どういう仲の事言ってるんだよ……:」
「どういう仲つて、そういう仲です!」

なんだか、文が少し不機嫌に見えるのは気のせい……:と言う事にしておきましょうか。

「ま、文の事はほつといて、いいぜ。美鈴に俺の力存分に試してもらうか」

そう言つて構えるユウキさんですが、あれ? そのままでやるつもり?

それ以前に普通に力試しに乗ってくるのも……:吹っ掛けた私が言うのもあれですが、意外に好戦的ですね。

「その幻想支配、チルノちゃん力は使わないんですか？」

「幻想支配と言ったって、所詮は他人の力であって俺の力じゃない。美鈴がみたい俺の力ってのはそういうものじゃない気がしてな」

「なるほど、それにしても案外すぐに乗りましたね。てつきり……」

「拒むと？ そりゃ無意味な喧嘩は好きじゃないけど、けど力試し目的だったり、ただの殺し合いだったり、実験の為とか色々吹っ掛けられるのには慣れてるからな。やるからには徹底的にやるのが一番と分かってるんだよ」

うーん、分かるようで分からない人ですね。

ともかく、あまり引き留めてもフラン様が待ちかねて暴れてしまいそうですから、早く始めましょうか。

「それじゃ、手加減なしで本気できてください」

「お言葉に甘えて……行くぞー！」

言葉と共にユウキさんの右回し蹴りが、私のすぐ横にせまっています。

私はしゃがんでそれを避けましたが、避けられる事を見越していたユウキさんは、すぐに地についた右足を軸にして回転をそのまま利用した左後ろ回し蹴りを放ってきました。

初撃の速さを甘く見ていた私は、その蹴りをかわせずに咄嗟に左手でガードしました

が、体勢が悪かったのでそのまま蹴り飛ばされてしまいました。

「おお……人間にしては速いですね」

少し離れた木の上で観戦していた文が驚くのも無理はない。間合いはそこまで離れていなかったとは言え、即座に私の側まで一気に詰め、尚且つ私がうまく反応できない速さで2段攻撃を仕掛けてきた。

私もこれでも幾百年も生きて、色々な相手と戦ってきた妖怪。お嬢様みたいな力ある妖怪相手ならともかく、人間相手には負けない自信があった。中には拳法や剣術などの達人やあの巫女達みたいに身体能力を強化した人間相手に苦戦する事はあったけど。

ユウキさんはそういう達人レベルです。

「ふっ……はあっ！」

追撃とばかりに突き出された右拳を左手で払いのけ、左フックを受け止めそのまま勢いを殺さずに投げ飛ばす。

ユウキさんは、器用に受け身を取り逆に私に関節技をしかけてきましたが、何とか外し再度彼を投げ飛ばしました。

「どうしました？ もう終わりですか？」

「まだまだ」

と、少し余裕を見せてみましたが、実はそこまで余裕があるわけじゃないんですけど

ね。ユウキさんは間合いを詰めつつ拳の連打を浴びせてきます。やはり普通の人間にしては相当な速さですけど、見切れない速さじゃないですね。

ユウキさんの両手を広げるようにはじき、無防備になった腹部に掌底を叩き込みます。

が、ユウキさんは寸前に後ろに飛んで衝撃を和らげていたようで背後にあつた岩を蹴り、その反動で前へ飛び蹴りを放つてきました。

「なかなかやりますね」

「不意打ちの回し蹴り以外、まともに一発も決められてないのにか？」

「あれは不意打ちとは言いませんよ、完全にガードしきれませんでしたし。それに普通の人間で何の力の補助もなしに、ここまでやれる人は数百年ぶりくらいですね」

自然と私とユウキさんは笑い合い、再度構えを取りました。私も様々な中国拳法を習得していますし、西洋の武術も知っていますがユウキさんの構えは独特ですね、でも隙のない良い構えです。

「お二人ともいい絵をもつと見せてくださいね」

少し離れた場所にいる文が何か言っているけど、私達には聞こえない。ただ目の前にいる強敵しか見えない。

さつきから私に当てられない、とユウキさんは言うけれど、実際は結構ギリギリな時

が多い。

甘く見ていたつもりはない。あの新聞や、初めて会った時に体付きや動きでただの人間じゃない事は見抜いていたし、狼妖怪達を倒した時の格闘技術と身体能力の高さは分かっていた。

それでも、それでも自分自身が対峙して拳を合わせて、改めて認識の甘さを思い知った。

「俺は幻想支配しか取り柄なかったんだ。他人の能力頼み。だから自分の体を鍛えまくったんだよ、いや、鍛えさせられた……と言った方がいいかな？ それでも身体能力からして化け物だらけと戦ってきて負けもしたけど」

「なるほど、自分の能力に慢心せずですか。いい心がけですね。格闘以外にも何かしていましたか？」

「ああ、ナイフや刀、槍にピストルや重火器なんかもな。能力のない人間相手には俺は自分の体以外武器ないからな。だから、美鈴みたいなタイプが一番戦いたくない。身体能力が高い上に格闘戦も大得意、更に弱点らしい弱点がなく、人間相手には間違いなく上位に立てる。おまけに気を使う能力で肉体強化、一番相性が最悪なタイプだな。幻想支配がコピー出来るのは能力のみ、戦闘技術や身体能力はコピー出来ないからな」

「そんな卑下する事ないですよ。攻撃も防御もしっかりしてますよ。」

先程から私とユウキさんは呑気に会話をしながら、格闘戦を続けている。

最初こそ手加減はしているが、ユウキさんは私の捌きや手足の動きを読み、的確に攻撃をしかけてきていて段々と手加減が出来なくなってきた。

「いい攻撃でも、当たらなければどうという事はない」

「名言ですね。ですが、それ本来私が言うべき事な気がします」

「そうかもな！」

ユウキさんは、また拳の連打を浴びせ、更にしゃがみこみ地面についた片手を軸にした、連続下段回し蹴り。

私は、一歩ずつ下がる事でかわしましたが、ふと背後が何かに当たる感触がありました。

それは紅魔館の壁、私とした事が壁際まで誘導させられていた事に気付かなかつたとは！

「しまっ!？」

「今だ！」

ユウキさんは好機とばかりに、両手で地面を思いつきり撥ね飛び捻りを加えたドロツプキックを放ってきました。

連撃を浴びせ、体勢を崩した所での絞めの一撃。それがユウキさんの戦法と気付いて

いたのに、今の私の体勢ではかわせない。

両手を交差し、キックをガードしましたが、それでユウキさんの攻撃は終わりではありませんでした。

キックの反動で後ろに飛び、更にその反動をも利用した両手での掌底が私の腹部に深く突き刺さりました。

「ぐはっ……お、お見事です」

「はあ、はあ……や、やっの一撃加えられたあ」

私はその場で片膝を付き、ユウキさんは地面に腰を降ろし息もかなりあがっています。

ここまで消耗させるつもりはなかったのですが、少しやりすぎたでしょうか？

「いやあ、本当にいい試合でしたよ。お二方」

「どこがだよ、文。俺はあれだけ動きまわってやっの一撃。美鈴はろくに攻撃もしてこない手加減しまくりで、息も切らしてないんだぞ？」

「あはは、私は体力と身体が頑丈なのが取り柄なんで、そうでもなきや紅魔館の門番は出来ませんよ。でも、あそこまで見事な一撃を食らうとは思いませんでした。私もまだまだ功夫が足りませんねえ」

本気で来てとは言いましたが、いくら身体が頑丈な私でも、急所にあんな一撃食らえ

ばそれなりに効きますね。

「それで、俺は合格か？」

「はい、これなら大丈夫。とは言いきれませんが、ユウキさんの強さは分かりました。どうぞ、お通りください。ですが、気を付けてください。フラン様はとても強く力の加減がうまく出来ません。危ないと思ったたらすぐに逃げてください」

「分かったよ、ありがとな」

本当はフラン様の能力や、そのせいで引きこもりがちで何百年も軟禁状態に近い事も教えてあげるべきですが、文が興味津々にこちらの会話を聞いているので話せません。

あまり、外部に知られたくはない事だとレミリアお嬢様はおっしゃっていましたね。

「ユウキさんが来るほんの少し前に博麗の巫女と魔法使いが入ったので、ひよつとしたら追いつくかもしれませんよ」

「その時はその時だ。ここの主や咲夜に会ってもみたいしな。じゃあな」

ユウキさんならひよつとしたら、という私の勘が当たってくれる事とユウキさんが無事に戻ってくる事を祈りつつ、見送りました。

願わくば、また彼と弾幕抜き of 格闘のみで戦ってみたいですね。でも、今度は軽くお茶でもして色々お話ししたいです。

では、私は本来の仕事に戻りますか。

「で……なぜに私は入れてくれないのでしょうか？」

「答えは簡単。ユウキさんはフラン様に招待されたお客様ですが、あなたは違いますよね？　なら通せません。レミリアお嬢様や咲夜さんからもあなたは通すと言われてますし」

「理由はなんですか？」

「秘密です」

まさか、弾幕ごっこで巫女に退治される場面を取材されたくない。とはレミリアお嬢様は言わないでしょうね。私や咲夜さんやパチュリー様にはバレバレでしたが。

「私は新聞記者としてユウキさんに同行取材の許可を得て、ここまで来たのですがー？」
「それはそちらの都合で、私達には関係ありません。それにあなたがユウキさんに同行する理由は本当に取材の為だけですか？」

「そ、それはどういう意味でしょうか？」

「いえ、ただそう思っただけですよ？」

他に人や妖怪がいれば、今の私と文との間に火花が飛び散つてるように見えるでしょうね。

「そういう美鈴さんも、お客様とは言え随分とユウキさんの事気にかけてますねえ」

「な、何が言いたいんですか？」

「ここは一つ、ユウキさんに関する事をあなたから聞くのもいいですね」

「私から言う事は何もありませんよ？」

「そうですか……うふふふっ」

「あははははっ」

「弾幕ごっこで話つけましょうか！」

巫女達との弾幕ごっこからこれで4戦連続ですが、今回ばかりは負けられないですね、色々な意味で！

つづく

第11話 「紅魔の主であり……姉」

なあ、なんで紅魔館の地下になんかいるんだ？

——ワタシハね、ずっと、地下に1人でいるの。

1人？ 紅魔館には沢山人、と妖怪や妖精いるんだろ？

——食事を届けに妖精とか誰かが来たりするけど、でもそれもいつもじゃないわ。

……何か理由があるのか？

——理由？ ミンナ私が怖いカラ、ミンナ壊レルから、ミンナ私が怖いカラ、ダカラ私ハズット1人ナノ！

お、おい。大丈夫か？

——ダカラネ、才兄チャント一緒

っ!?

——才兄チャンモ、1人ポツチナンデシヨウ？ 私ニハワカルヨ？ ダカラ一緒に、ミンナでアソボ？

それ、は……

「俺と同じ、か……」

フランドールはそう言ったけど、とてもそうは思えないんだよな。

主であるレミリアは知らないけど、あの美鈴や咲夜がフランドールの事気にかけてないとは思えないんだよな。

「つて美鈴にも、フランドールの事聞けば良かったじゃん!」

咲夜やレミリアからフランドールの事聞こうとしてたけど、美鈴でも良かった……と言うか、美鈴は前フランドールの事言いかけてたんだから、普通に聞けただろ、俺。

新聞記者の文がいる前で、話せるような事じゃなさそうだったし、仕方ないか。

で、紅魔館に入ったはいいいけど、なんだか不思議な感覚。まるで迷路に迷い込んだような感覚だ。

目に見える景色がニセモノのような気がする。これは幻術か何かがかかっているのかな。

さてとチルノの力を完全解除して、これをどうにかしてみるか？ でも、それだと本当に丸腰になるんだよな、それは厳しすぎるか。

「あれー？ また人間がいるよー？ 侵入者ー？」

「侵入者は巫女と魔法使いだよ、それにあの人間は男だから違うよ」

ん？ 何か話し声が聞こえる。どこからか隠れて……はいないな。思いつきり柱か

ら身を乗り出して、こつちを見ているメイド服を着た妖精が数人。

「あ、あの人！ 門番さんやメイド長達と一緒に食事していた人だ！」

「そうだよ！ あの人きつとお客様だよ！」

「お客様ならこの迷路に入れたらダメだよね？ おこられるもん」

「うん、今メイド長とパチュリー様が侵入者の相手してるんだもん、これ以上迷路に誰か入れたら怒られるよ」

何か話が勝手に進んでるようだけど、俺が美鈴やチルノ達といたのを見ていたのがい
るって事か。

それに霊夢と魔理沙はどうやら、この迷路の中で咲夜とパチュリーという魔女と戦つ
てるみたいだ。

で、どうやら俺をお客様と勘違いしてるようだから、利用させてもらおうか。

余計な力これ以上使うわけにもいかなしいな。それにフランドールの事聞けそうだし。

でもこの妖精達大ちゃんよりもかなり力弱いから、色々無理っぽいかも。

「なあ、俺はフランドール・スカーレットと呼ばれてここに来たんだけど、案内してくれ
るかな？」

「フランドール様から？ やっぱりお客様だ！」

「それじゃあ私達が案内しないと、迷っちゃうね」

「お客様、私達に着いてきて下さい。御案内いたしますわ……って、いつもメイド長こんな風にお客様に言ってたよね？」

「お客様なんて来た事あったっけ？」

……やっぱいいつらアホだ。

「ま、まあ案内よろしくな」

「「はーい！」」

俺はメイド妖精に連れられて、迷路とは別の通路に案内された。

侵入者用ルートとは別の、安全な抜け道って言った所だな。

「なあ、フランドールの事、何か知ってるか？」

「フランドール様？ 私は会った事ないよ。あんたは」

「私もないよーでもフランドール様、ずっと昔から地下にいるんだって」

「お世話した事ある子もいたけど、いなくなっただけだから今はメイド長が食事の支度とかしてるんだって」

いなくなっただ？ 咲夜が一人でフランドールの世話をしてるのか。

「わ、私……フランドール様、の部屋覗いた事、あるよ……」

1人の妖精が青い顔をして、ぽつりと呟いた。その表情は恐怖で歪み、体が震えてい

る。

「ここ、ここ壊れた玩具や、人形がたくさんあって、それで……フレンドール様と目、目があつて……それで、ひいひい!?!」

「おい、大丈夫か?」

崩れ落ちた妖精を抱きかかえる。あまりのショックに顔色も悪く今にも死にそうだ。

「この子。とても好奇心強いから、一度こつそりフレンドール様の部屋に忍び込もうとした事があつて、それ以来よくこうなるんです」

「パチュリー様や小悪魔さんにお薬や魔法で癒してもらつてたんですけど、それでも……」

それほどまでの恐怖を与える子には見えなかったけど、フレンドールには何かあるんだな。

やっぱり本人に会う前に、レミリアから話を聞いた方がいいな。それにこの子達をこれ以上巻き込むわけにもいかない。

「ありがとなお前ら。後は俺一人でもいいから、その子に付いてあげてくれ」

「ホント? 大丈夫なの?」

「ああ、もう場所は分かったから」

目を向けた先、屋敷の奥からとても強い何かを感じるようになった。誘われているの

かは分からないけど、きつとそこにレミリアがいる。

「それじゃあ、またねー」

「ばいばい」

メイド妖精達はどこかへと飛んで行き、再び俺1人になった。

そして、力を感じた方へと進み、他よりも少し豪華な扉のある部屋の前まで来た。

——空いているから、入っていいわよ。

ノックしようとする、扉の向こうから女の子の声が聞こえた。

静かに扉を開けると、明らかに内装が違う大部屋の奥、豪華な装飾が施された椅子に1人の少女が腰をかけていた。

吸血鬼らしい蝙蝠の翼に、白い帽子を被った紫色の髪をして、血のように紅い瞳をした少女。彼女がレミリアだろう。

「紅魔館へようこそ。私はこの主、レミリア・スカーレットよ。歓迎するわ、物好きな外人人」

レミリアは肘をついた手の上に顎をのせ、薄い笑みを浮かべこちらを見ている。身なりは小さいが、その振る舞いは古くから存在している王者のようだ。

小萌先生など、見た目と実年齢のギャップが激しい女性は見慣れていけど、レミリアはそれ以上だ。

レイヴィニアのように幼い身形で尊大な振る舞いをしてるけど、感じるオーラは段違いだな。

「俺の名はユウキ。突然の訪問にも関わらず歓迎の言葉、感謝するよ。その様子だと、俺が来た目的は分かっているのかな？」

「ええ、正直予想外もいい所よ。異変を起こせば巫女が来ると思っていたけど、うちの咲夜とパチエが頑張りすぎたせいで全く部外者のあなたが私の所に先にきてしまつて、おまけにあなたはあなたで異変を解決しに来たんじゃなくて、まさかフランに誘われて来るだなんて」

不機嫌、と言うより目論見が狂つてどうしよーという感じだ。

ま、俺もまさか霊夢達より早く異変の元凶にたどり着くとは思つてなかった。

考えてみれば俺は霊夢達より遅く出たとはいえ、ルーミアやチルノとは弾幕ごっこしてないし、美鈴にもあまり時間はかからなかったし、咲夜とパチュリーという魔女にも会つていない。

何だろう……霊夢にズルいと言われそうな気がしてきた。

「あ、そうだ。あのメイド妖精達には罰を与えないで欲しい。向こうの勘違いと言え、ここまで案内を頼んだのは俺の方だ」

「勘違い？ いいえ、確かにあなたは紅魔館の客よ。我が妹が招いたのは私が招いたの

も同じ。あの子達の対応に間違いはないわ」

「そうか、それはありがたい。で、フランドールの所に行きたいんだけど、1つだけ聞きたい事があってな」

「何かしら？」

「フランドールがなぜ地下にいるのか、だ。本人はずっと地下にいるという事を言っていたけど、美鈴の反応から見ても軟禁しているわけでもなさそうだった。けど、メイド妖精達はフランドールの事は良く知らず、1人はフランドールの部屋をただけで発狂してた。彼女は一体？」

俺の問いにレミリアは深く溜息を吐きしばらく目を閉じ何かを考え始めた。そして、椅子から降り俺の方へと歩いてきてじっと目を見つめてきた。

「その質問に答える前に、私の質問に答えてもらえるかしら？ あなたはなぜ、フランと会おうと思ったの？ 普通の人間なら人型とはいえ、異形の存在である吸血鬼に誘われてノコノココにやって来ないわ、自殺行為よ。でもあなたは別に死にたがりつて顔はしてはいない。答えて、あなたはなぜフランに会いに来たの？」

レミリアは紅魔館の主としてではなく、姉の顔をしていた。

ひとまずは良かった。フランドールは、別に紅魔館の住民に、家族に嫌われたり恐れられたりしているわけではなさそうだ。

「……それは、誘われたから、としか答えようがないな」

「誘われたらホイホイと乗るのあなたは？ ……はっ!? まさか、ロリコン!」

「それは絶対じゃない!」

全く、どいつもこいつも……と今までの事を振りかえると、そう思われても仕方がないような気がしてきた。

「ふーん、もしそうなら私かフランのペットにしようと思ったのに」

「全力でお断りする!」

幼女に飼われる趣味はない。

「むっ、今あなたとても失礼な事思ったでしょ？ まあいいわ。それよりあなた……本当に人間?」

「人間以外の何者でもないけど?」

「あなた、自己が欠けているわ、いえ、全くないと言ってもいいわね。人に頼まれたら無条件で引き受けるタイプだね」

内心でドキつとしたが、それを悟られないように俺は反論した。

「そんな事はないぞ? 確かに俺は幼い頃から色々と実験やら依頼やら受けて生きてきたけど、ちゃんと報酬はもらっていたしな」

「そう言う意味じゃないわ……あなた、そうしないと生きていけなかったからそうした、

ただそれだけじゃないの？」

「っ……会って数分の人、吸血鬼にそこまで言われるとは思わなかったな。あんた占い師とか人生相談とかに転職したらどうだ？」

「甘く見ないでもらいたいわね。私はお前よりも長い時を生き、多くの人間や妖怪共を見てきたのよ。お前の本性くらいは察しが付く。もつと言えば、お前は咲夜と似ているのよ。様々なものに裏切られて絶望して、自分の生き方すら否定され、そんな何も無い生き方をしていた頃の咲夜にね」

「あの咲夜が？」

「おっと、これは私が言うべき事じゃなかったわね。忘れなさい」

あの潇洒なメイドである咲夜にそんな過去が会った事に驚いたが、それ以上にレミリアの言葉がナイフのように突き刺さって行く。

でも、そんな事出会って間もない吸血鬼に言われるまでもない。そんなのとつくの昔に自覚していたさ。

「……ともかく、俺はフランドールに誘われたからここに来た。それに嘘はない」
「そのようね。じゃ、今度は私が話す番ね」

嫌にあっさりと話す気になつたな。あの妖精の発狂ぶりからフランドールについては門外不出の禁句のように思え、どこの馬の骨か分からない外来人の俺には話してくれ

ないだろうと思っていたのに。

「幻想郷に住む力のあるものは何かしらの能力を持つている。これは知っているわね？ 私の妹、フランドール・スカーレットもそう。フランの能力は「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」よ。文字通り破壊に特化した能力。その能力のせいかな、昔から情緒不安定で気が狂いやすい事が多かった。だから、地下に引き籠っているのよ」

「引き籠っている？ 閉じ込められているとかじゃなくて、自分でか？」

「ええ、フラン自身も自分の力の危険性は分かっているから……昔はね。でも、段々と当時の記憶があいまいになって、自分で閉じこもったとか、私に閉じ込められたとか、呪いで出られなくなったりとか、そう思い込むようになったのよ。機嫌が良い時は会話も出来るんだけど、それ以外だと私に襲いかかる事もあったわ。昔は頑丈な美鈴が世話をしていたけれど、咲夜が来てからは彼女に任せるようになったの」

「どうにか出来ないのか？」

「私が何もしないと思ってるの？ 勿論、色々試したわよ。香水から魔法までありとあらゆるものをね。けれども、効果はすぐに切れてかえって凶暴になってしまふ。だから……自然に任せる事にしたのよ。フランがいつか、自分で自分を律してあそこから出て来るようになるまでね」

そう言うレミリアの瞳には悔しさと怒りが、自分に対する怒りが見えた。

フランドールは言った。自分は何でも壊すから、皆が私を怖がっていると。

だから、自分は1人ぼっちだと……俺と一緒だと。

メイド妖精の一部は確かに恐れている。現に1人は部屋を見ただけで発狂してしまった。恐らく、彼女の力を肌で感じたからだろう。

でも、フランドールは決して1人なんかじゃない。

「ふふつ、なんでここまであなたに喋ったのかしらね。私にも分からないわ……やっぱり美鈴や咲夜の言う通り、面白い人間ね、ユウキ」

「どうも幻想郷の住民は警戒心がなさすぎるな。よそ者の俺に簡単に心を許し過ぎだ」
「あら、あなたが全く外に心を許してないのは、その反動からかしら？」

ちつ、またも凶星を……でもこれでフランドールの事は分かった。後は会いに行くだけだな。

ん？ 何かこつちに近付いてきてる？ あれ？ なんで俺そんな事が分かるようになったんだ？

怪しい気配とかは昔から分かるけど、これはそういう類じゃない。明らかに強い力を持った誰かが……この力は霊夢？

「どうやら、主賓がやっと来たみたいね」

レミリアも気付いたようだ。2人して外に目を向けるとすぐに扉が吹き飛び霊夢が

飛びこんできた。魔理沙はいないようだ。

「よーやく見つけたわよ、性悪吸血鬼！ よくもあんな面倒な迷路作ってくれたわね！」
「あれを作ったのは私の親友なんだけど？ 別にちよつとした遊び程度で良いと言ったのに、張りきつたみたいね」

「ともかく、すぐにこの霧を止め……ちよつと、なんでユウキさんがここに居るのよ?!」
手に持ったお祓い棒をレミリアに突きつけ啖呵を切った霊夢だが、すぐ横にいた俺には気付いてなかったか。

「よう、霊夢。久しぶり……」さては……あんたが誘拐でもしたんでしょ」……いや、聞けよ」

「確かにこの人間はとても興味深いわね。ペットにしたいくらい」

「このっ！ やつぱり！」

「そういう誤解するか普通？ ってレミリアも思いつきり悪役っぽい笑みを浮かべて楽しそうだな！

って霊夢もなんでそこまで怒る？

「でも、残念。彼は私の妹に用事があるからここにいるのよ。私はフラれたわ」
「ちよつとまで、これ以上誤解を広げるような事を言うな！」

「……ユウキさん、別に人の性癖に口を出す気はないけど、正気？ なら私が目を覚ませ

てあげないとね」

「霊夢もマテ！　なんでそういう話になる!？」

霊夢はレミリアに向けていた棒を俺に向け、袖から何枚かの御札を出して何かを唱え始めた。

本気だ。本気で俺の目を覚まさせようと物理的手段を講じようとしている。

「レミリアもレミリアで笑い転げてないでどうにかしろ！」

「そうね。さっきので面接は終了よ」

そう言うレミリアはパチンと指を鳴らした。と同時に俺の足元に魔法陣が現れた。

これは、転送の魔法陣か？

「あ、ちよつと待ちなさい！　彼に何をしたの！」

「私の妹を……よろしく」

魔法陣からの光に飲みこまれながら最後に見えたのは、妹の事を案ずる姉の心配そうな顔だった。

それに親指を立てて応えると、不安そうな顔は笑顔へと変わって行き、そこで全てが白い光に包まれた。

つづく

第12話 「狂気乱舞」

「あんた、ユウキさんをどこにやったの？」

「あの人間は邪魔だから飛ばしただけよ。何、そんなにあの男が気になる？ 博麗の巫女は結構ドライな性格って聞いていたけど、これは予想外ね」

「……別に、そんなんじゃないわよ」

紅い月の元、私とレミリア・スカーレットは紅魔館の外へと飛び出し弾幕ごっこを始めた。

紅魔館の門辺りで門番と天狗がなぜか戦っているのが視界の隅にちらりと見えたけど、それは無視。

正直、あの吸血鬼の部屋にユウキさんがいたのには驚いたし、どこに飛ばされたのかも気になる。

けれどもそれは二次、今はこの異変の元凶をとつちめるのが先、それが博麗の巫女である博麗霊夢の使命だから！

「……無事でいてよね。死なれたら寝覚め悪いわよ」

それでも、無事ぐらいいは祈ってもいいわよね。

レミリアに魔法で飛ばされた俺は、紅魔館の地下と思われる場所にいた。

暗く淀んだ空気が漂う、ここが地下で滅多に誰も来ない場所だと言うのが分かる。

そして、目の前には赤い扉がある。レミリアの部屋の扉と似た装飾だけど、あつちは主の部屋と言う感じだったが、こつちはまるで金庫室のような頑丈な扉だ。

この中にフランドールがいる……と手を触れようとすると、重い音を響かせて扉がひたひたに開いた。

中からは温い風が流れてきて、その風に触れただけで鼓動が速くなるのを感じた。

「こつちに来い。って事か」

『あなた、そうしないと生きていけなかったからそうした、ただそれだけじゃないの?』
「……ああ、そうさ。これまでもずっとそうだった。だからこれからもずっと続けて行く、それだけが俺の存在意義だ」

開けられた扉へと入ると、中は真つ暗だった。

「やつと来てくれたね。お兄ちゃん♪」

幼い声がすると扉が閉まり、部屋の壁と天井に沢山の蠟燭が灯った。

レミアアの部屋よりも数倍広く感じる。多分空間が歪んでいるせいだな。

紅魔館は咲夜の能力で、広くしてあると聞いたけど、これはフランの強い力のせいだろう。

幻想支配を使わなくても分かる、部屋を覆い尽くこの圧迫感。それは全て部屋の奥にあるベッドの上から発せられている。

そのベッドの上には夢の中で会った、七色の宝石が付いた金髪の少女がこつちをじつと見つめている。

「ああ、招待してくれてありがとうな。フランドール」

この少女がレミアア・スカーレットの妹、フランドール・スカーレット。

「フランでいいよ、お兄ちゃん！」

そう言つてベッドから飛び出し、こつちに向けて飛んでくるフラン。

良く見ると、ベッドの周りには沢山の壊れた人形やおもちやが落ちていた。これがレミアアの言つていた能力の結果か。

「あはっ♪ やっぱりお兄ちゃんは私と一緒にだ♪」

フランは俺の前に降りるとじつとこつちを見つめて来ると、にこやかに笑つた。

その瞳は見かけどおりの純粋な子供のような物。が、その瞳の奥底に言いようのない冷たいものが見えた気がした。

それにしてもさっきから体の調子がおかしい気がする。

「何が一緒なんだ？」

「お姉様に495年もずっとここに閉じ込められてるの」

「……なんで閉じ込められてるんだ？」

レミリアから聞いていたが、あえて本人からその理由を聞いてみると、フランは足元に転がるまだ壊れていない玩具を近くのテーブルに置いた。

「フランはね。なんでも壊しちゃうから、こうやって……」

フランは玩具に向けて、右手を突き出すと目玉のような黒い球が現れた。

「ぎゅっとして、どっかーん！」

その目玉を思いっきり握りつぶすと、玩具はまるで内側から吹き飛ぶようにして粉々に砕け散った。

なるほど、こうやって玩具やぬいぐるみが壊して言ったのか、実際に見てみると力任せとは違った壊れ方をしている。

これが「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」か、確かに危険だな。

暴走した美琴や、垣根の未元物質、テレスマみたいに圧倒的で不可侵な力よりも、俺としてはこういう分かりやすい力の方が危険な場合が多い。

単純にして明快、故に能力の穴を利用すると言った攻略法が掴みにくい。

で、こういう能力相手には正攻法しかない。

「私はね、昔からこうやって色々壊して言ったの。だからお姉様に閉じ込められたの。みんな私を怖がるわ、私に壊されるのを怖がるわ。だから私は一人ぼっち、誰にも必要とされない、誰も私に近付かない。私ハヒひとり……お兄ちゃんと一緒♪」

「っー」

その言葉に僅かに心の奥底に黒いものが浮かんだが、それを消した。フランの言葉一つ一つに変化が現れたからだ。

まるで待ち望んでいた玩具を与えられた子供のような、狂気に近い冷たいものをヒシヒシと感じる。

でも、さつきから言葉に出そうとしても何も出ない、何も浮かばない。

場の空気に飲まれているのか、フランの妖気に圧倒されているのか……それとも。自分でも分からないが、何か言わないとまずいのだけは分かる。

「お兄ちゃんは、フランとずっと一緒にいてくれるよね？ だって……」

「俺は、フランとは違う」

かろうじて出せた言葉。その意味をフランはどう受け取ったのかは分からない。けど、俺にはどうしてもこの言葉が言いたかった。フランは、俺とは違う……

「そんな事ないよ……お兄ちゃんも、私もズツと一人ぼっち……だから、一緒にいよう

「よお」

フランが、まるで何かに酔ったかのような面妖な面持ちで俺に手を伸ばす。

俺は、その手を掴まなかった。

「なんで……どうして？ どうしてそんな目で私を見るの？」

今の俺がどんな表情でフランを見ているのかは分からない。けど、きつとフランは失望しているだろうな。

それよりもさつきから頭がぼーつとする。少し、痛い。

「分からない。分からないよ！ ……フツ、フフツ、アハツ♪ アハハハハハツ♪」

フランは俯きながら何か呟いているが、俺の耳は入って来ない。ただ、フランが笑っている事はわかる。

「もういいやあ、お兄ちゃんも壊れちゃえ♪」

右手の爪を突然俺に向けて突き出す。すごく早い動作のはずなのに、なぜかゆつくりに見えた。

顔を少しすらすらだけでかわすと、フランはすごく驚いた表情を浮かべ、一旦俺から離れた。

「お兄ちゃん、すごいね！ じゃあこれはどう!？」

フランが右手を突き出すと、いくつもの弾幕が放たれた。

それを最小限の動作でかわす。かわされた弾幕は壁や床を無尽蔵に破壊していった。

どうやら、妖精やルーミアのよりも凶暴で破壊的な弾幕のようだ。

弾幕ごっこつってこういうものだったか？ よく思い出せない。

「避けてばかりじゃつまらないよ。」

「……ソうだな」

幻想支配でチルノの力を使い、両手から青い弾幕を放った。

フランはそれもまた面白がってはいるが、余裕の表情でかわしていく。

「あはは〜！ 目の色が変わったね、お兄ちゃんおもしろーい！」

また放たれた弾幕をかわして反撃しようとしたが、気が付けばフランがすぐ横にまで迫って伸ばした爪を振り降ろしてきた。

咄嗟に右手に氷を纏って受け止める。流石に素手で受け止めはしない。

「冷たっ!? お兄ちゃん、人間なんだよね？ 人間ってみんなこんな事できるの？」

「……サアな」

右手の氷に爪がどんどん食い込んでいく、すぐにでも砕かれそうだ。それよりも先に左手をフランに突き出し弾幕を撃った。

弾幕はフランに直撃し、吹き飛ばされるがすぐに体勢を立て直される。

ただの弾幕ではあまり効果がないようなので、俺は頭に浮かんだチルノのスペルカードを使った。

「雪符・ダイヤモンドブリザード」

言葉通り、吹雪のような白い弾幕がフランに降り注ぐ。

「アハハハッ、綺麗綺麗♪ なら私はこれだよ！ 【禁忌・レーヴァテイン】」

フランの右手にハート状の突起が付いた杖が現れ、一振りすると炎が走りこちらの弾幕を吹き飛ばした。

更にもう一振りすると杖が伸びてきた。どうにか空に飛びかわすと次は衝撃波と弾幕に襲われた。

「杖の斬撃と衝撃波、それから撃たれる弾幕の3段攻撃か」

空を飛びながら反撃をしようとするが、フランが間合いを詰めて来るせいでうまく距離が取れず高密度の弾幕がかわしきれない。

「あぐっ!？」

左肩を弾幕が掠ってしまった。妖精やルーミアの弾幕は掠つても野球の球が当たった程度の痛みだったが、フランのは違う。

まるで熱い炎と鋭利な刃物で斬られたような痛みが走る。

思わず痛みに動きが鈍った所で、フランが俺の目の前に現れた。

「そーれっ♪」

「しまっ……」

かろうじて斬撃は避けたが、衝撃波を正面から受けてしまい背中から床に叩きつけられてしまった。

「……がはっ！ げほげほっ」

情けない。あの程度のダメージは日常茶飯事のはずだったのに、それでも一瞬だけ気が緩んでしまった。

弾幕とは言え、殺し合いが目的ではないと無意識に思っていたので感覚が鈍ったのかもしれない。

「だったら……」

いつものようになるだけ。

チルノの力を使っている身体から冷気が出ているはずなのに、体中が熱い。

あまりの熱さで頭がぼーっとしてきている……いや、逆に頭がすつきりとしてくる。

「どうしたの？ もう壊れちゃった？」

「いや……まだまだ……これからだ」

……何だか色々難しい事考えていた気がする。単に今までと同じ事すればよかっただけなのに……なんで俺は回りくどい事しようとしていた？

ここに来た目的?……目の前の敵を倒す為。

なんでフランの誘いに乗った?……ああ、フランを……コロスタメダ。

「さあ……続ケヨウカ?」

「うん、いいよ……踊ロウヨ、オ兄チャン♪」

フランの両爪に妖力が集まり伸びる。対する俺は両手両足に冷気を集め、氷の手甲脚甲を作った

「器用ダネ、オ兄チャン♪」

空を飛ぶにはチルノの力じや遅くて不利、ならば地を駆けた方が手慣れていて速い。

「……行クゾ……ハアアアアア!!!」

全身から冷気を噴出し、一時的に部屋全体を凍らせた。

スケートリンクのようになった床を滑るように走る。

「寒イ、サムイ、アハハッ♪」

対するフランは、地面スレスレを滑空してきた。突き出した俺の氷の左拳とフランの右手が激突する。

拳に氷を纏わせてるとは言え、ただの氷。フランの強化された爪に拮抗できるわけもなく、爪は氷に突き刺さった。

だけど厚い氷は簡単には貫けず、拳自体に爪が刺さったわけではないので痛くもかゆ

くもない。

逆に俺が狙っていたのはコレ。爪が氷に刺さり、拳に届くまでの僅かな時間フランの動きは止まる。

俺はそのまま左手を横に振うと、左拳に爪が刺さったままのフランの右腕も外側に引つ張られるように広がり……ボディがから空気になる。

「っ!？」

こっちの狙いに気付いて驚いて目を見開いたフランが、左手で突き刺そうと構える前に俺の右拳がフランのお腹に決まった。

「ゴフツ!？」

助走なしでほぼ密着してからの拳なので、普通ならあまりダメージはないが、今の俺の拳は厚い氷で覆われているのでそれなりには効いているはずだ。

衝撃で俺の左拳から爪が抜けたフランの体が少し宙に浮いたが、これで決まるとは思っていない。

アイススケートのように左脚を軸に高速で回転する。氷の床と氷の脚のおかげでいつもよりも高速回転が出来、キックに勢いがつく。

その勢いをころさず活かしたまま、フランの顔を蹴り飛ばした。

空中で、それも受け身も防御も取れないままフランは壁へと吹き飛ばされ、激しい地

響きと共に瓦礫に埋もれて行った。

「……………つ、はあはあ……………」

猛烈な脱力感に襲われ、地面に倒れ込む。途端に身体から力が抜けていくのを感じた。恐らくチルノの力はもう使えないだろう。

いや、それ以外にもこの疲労感は一切。と思いつつふと顔をあげて……………頭の中が真っ白になった。

「な、んだ……………これは」

部屋の天井や壁には穴が空き、氷柱が突き刺さったりしている。

床は凍りつき、こちらも所々が破壊されている。

そして、遙か向こう側の壁は激しく崩れ落ち、瓦礫の隙間から先程まで話をしていた少女の羽が見えた。

「……………俺が、俺がやったのか」

この部屋に入り、フランの能力を見て何かを言った所までは記憶にあるが、そこから先の記憶があやふやだ。

だけど、感覚だけははっきりとしていた。フランと戦い、殺そうとして、殴り蹴り飛ばした感覚がある。

「俺はなんであんな事を……………フランっ！」

とにかく、フランを助けようと駆け出し手を伸ばそうとしていたその時、突然瓦礫が爆発したかのように弾け飛んだ。

俺は至近距離で瓦礫が当たってしまった、元いた場所まで吹き飛ばされてしまった。

「がっ……う、ぐっ……左手が」

咄嗟に左手で庇おうとしたのがいけなかったようで、激しく痛めてしまった。

血だらけの左腕はブラリと垂れ下がり、自分の腕ながら見ていて痛々しい。

ヒビが入ったか、骨折したかは分からないが左手はもう使えない。

「アハツ、アハハハハハ！ スゴイヨ、オニイチャン！」

土煙の中からフランがふらふらと出てきた。

その瞳はさつきよりも狂気に満ちているようで、見る者全てを恐怖に落としそうな程に狂っていた。

「今度ハ……フランノ番！ 【禁忌・クランベリートラップ】」

そして、魔法陣がフランの周りに沢山現れ、そこから部屋を埋め尽くすほどの弾幕が放たれた

「俺も、さつきまではああだったのか？」

だとすればこの状況は自業自得か。もうチルノの力は使えず、身体に力も入らない。

俺は……ここに、何をしに来たのか分からない

「悪い、借りを返す前に俺、死ぬ」

霊夢や慧音など世話になった人に何も恩を返せず。

美鈴やレミリアの期待にこたえられず、俺は……死ぬ。

「おいおい、諦めるのはまだ早いんじゃないか？　【恋符・ノンディレクショナルレーザー】」

女の子の声と同時に、部屋の外からいくつものレーザーのような光が走り、襲いかかってきたフランの弾幕を魔法陣ごと撃ち抜いた。

「ムー！　邪魔ヲシタノ誰!？」

「……だ、誰だ？」

フランも知らない謎の侵入者。

俺を助けてくれたその女の子は、箒に跨り、白と黒の服を着て黒い帽子を被った、絵本に出てきそうな魔法女の格好をしていた。

「いやあ、弾幕ごっこなら邪魔をするつもりはなかったんだけどさあ、2人共全然弾幕がなつちやいないからつい手を出しちゃったぜ」

箒に乗ったままゆっくりと俺とフランの間に降りた女の子は、俺達をビシツと指を刺した。

「ガサツで品も華もない。おまけに相手を殺す為だけの弾幕なんて本当の弾幕じゃない

い。仕方ないから2人にこの私、霧雨魔理沙が本当の弾幕つてやつを教えてやるぜ！」
そう言つて白黒の女の子、霧雨魔理沙は右手に八角柱の置物のようなものを構え、不敵な笑みを浮かべ何かを宣言するかのうように言った。

「弾幕は……。パワーだぜ！」

つづく

第13話 「悪魔の妹と星の魔法使い」

私、霧雨魔理沙がアイツの事を知ったのはほんの数日前。朝早く起きて、キノコ採取を終え、朝食も食べ終わったので暇つぶしに博麗神社へとやってきた時の事。

いつものように霊夢がお茶を飲んでいたが、いつもとは様子が違い、何か不機嫌そうにしていた。

「よお、霊夢。おっはーだぜ♪」

「おはよ……つてなんなのよ、そのへんてこりんな挨拶は」

「香霖から聞いた外の世界で流行った朝の挨拶だ。幻想郷でも流行らせないか？」

霊夢は興味ないとばかりにお茶をすする。すると、後ろから声がかかってきた。

「寺子屋ではおーはー、が先に流行っているがな。おはよう、霊夢、魔理沙。霊夢、これは昨日の御礼だ。梨奈の両親から預かったよ」

声をかけてきたのは、上白沢慧音だった。手には少し大きい風呂敷を持っていて霊夢に渡した。

「おはよう。この御礼は確かに受け取ったわ。で、寺子屋ではそんなのが流行っているの？」

「おつはー、慧音。教育者として正しい挨拶を教えるべきじゃないのか？」

礼儀作法には割と厳しい慧音だったが、私の指摘に苦笑いを浮かべた。

「勿論、ちゃんとした挨拶をしなさいとは教えているさ。けれども明るくなる挨拶もたまには、な？」

「おーおー、頭の固い慧音がそんな事を言うなんて、今日は槍でも降ってくるんじゃないか？」

「弾幕なら神社と人里以外でならよく降っているけどね。で、魔理沙はともかく、あなたがこんな時間に何の用？」

確かに。慧音は人里の相談事などで来る事はあるが、こんな早くに神社に来るのは珍しい。

「実は昨日の外来人である、ユウキ君だったか。彼に用事があつてな。日中ではどこかに出かけてしまうんじゃないかと思ったんだ。彼はまだ寝ているのかい？」

ユウキ？ 外来人か？ 聞き慣れない名前に首をかしげると、霊夢はさつきよりも不機嫌そうな顔をして、奥から一枚の紙を持ってきた。

「ユウキさんなら、もういないわよ」

霊夢が持つてきた紙を慧音と読む。それはユウキという人物が霊夢に宛てた置き手紙で、もう彼がここにはいない事が分かった。

「……そうか、彼はもういないのか」

心底残念そうな顔をする慧音。何か大事な用事でもあったのだろうか？

「そのユウキつてのは、外来人だろ？　なんで慧音が用あるんだ？」

「実は昨日、彼が人里の子で私の教え子を妖怪から助けてくれたんだ。それで、その子の親が彼に御礼がしたいからぜひ招待して欲しいと頼まれてね」

「ふーん、妖怪から助けたって、その外来人強いのか!？」

外来人は私もたまに見るけど、どいつもこいつも貧弱で妖怪の格好の餌になる奴ばかりだ。

「強いわよ。多分……」

「なあ、霊夢。さつきからなんでそんなに不機嫌なんだ？　ひよつとしてユウキつてのがいなくなったからか？」

「……私にだって分からないわよ」

霊夢の不機嫌で不満そうな顔に慧音と二人で顔を見合わせる。霊夢とはそれなりに長い付き合いだが、賽銭箱に何もなくてもここまでの顔はしないはずだけだな。

「……ユウキさんなら、多分人里に向かうと思うわよ。昨日行ってみるかとか呟いていたし」

「そうか、なら今から向かえば途中で見つかるかもな」

「なあ、霊夢。お前その外来人と何かあったのか？　なんか普通な対応じゃないぜ？」

霊夢はさん付けなのも珍しい。外来人には例え年上にもさん付けしないのに。

「私もそれは気になった。霊夢、彼の事を聞かせてくれないか」

そこで霊夢は何かを考える仕草をして、私と慧音をちらちら見て、いずれ分かる事よね。と小さく呟いたのが聞こえた。

「いいわ。多分、2人共これから彼と関わって行きそうな予感するしね。まずはこれ見て」

と霊夢が鴉天狗の文が発行した新聞、文々。新聞を私達に見せた。

そこには外来人の記事が書かれていたが……

「なんだ、この新聞？　謎とばかり書かれていて、肝心のユウキの情報が少ししか書かれていないじゃないか！　年は16、霊夢や魔理沙よりも少し上か、戦闘経験豊富で外の世界では……戦争も経験してるだど!？」

「うえ？　そりゃ妖怪相手でも対処出来るはずだな。しかし、経歴がなかなか物騒だ。外の世界ってそこまで物騒だっけ？」

確か外の世界は物騒な所もあるけど、そこまでじゃなかったと思うな。香霖堂で外の世界の本よく読むけど。

「……ユウキさんはね、外の世界は外の世界でも異世界から来たのよ」

そうぼつりと呟いた霊夢の表情は少し、ほんの少しだけ、寂しそうに見えた。

でもすぐにいつもの表情に戻りユウキの事を話し始めた。それは、彼は結界の外にある世界ではなく、全くの異世界から幻想郷に流れついた事。

そして、元いた世界から忘れられ、捨てられた事。もう、ユウキのいた世界に彼の居場所はない。

「そ、それは本当なのか？」

「本当よ。まあ、信じられない気持ちには分かるけどね。紫が昨日調べたし、私も結界を見てみたけどそれしかないわ。ちなみにこの事は文も知っている。だからこんな書き方したのかもされないわね。問題は、ユウキさん自身がそれを受け入れた事よ。幻想郷の事も、妖怪の事も、自分が元の世界に帰れない事も全部あつさりだね」

それは、変だ。誰だつて元の世界からこんな所に来たら混乱したりするだろうし。元の世界に帰りたいと思うはずなのに。

「私と言える彼の全てよ。これ以上は彼から聞いて、私だつて色々聞きたい事あつたのに肝心の本人がいないんじゃないわ」

なるほど、それが霊夢の機嫌が悪かった……のか？ ま、いいか。

「ではその事には触れないでおこう。魔理沙も不用意な発言はしないようにな」

「ああ……つてなんで私に言うんだ!？」

「知らないよりも知らせて黙らせた方が、魔理沙にはいいでしょうね」
「霊夢まで!？」

いくら私でもそんな人の心をえぐる鬼畜じゃないぜ。

その後、少し話をして慧音は人里に戻り私は霊夢のせんべいを食べつつまったりと過ごした。

そして、その次の日幻想郷を紅い霧が覆い尽くして私と霊夢は原因と思われる吸血鬼の住む館、紅魔館へと向かった。

正直、まだあそこには近寄った事もないから興味津々でわくわくしていた。

道中でルーミアやチルノを難なくおっばらつて、紅魔館の門番には少し手こずったけど突破。

紅魔館に突入したけど、そこでパチュリー・ノーレッジという魔女と十六夜咲夜というメイド長の罠にはまって、2人揃って迷路の中に迷い込んでしまった。

その中で、霊夢とはぐれパチュリーと弾幕ごっこでどうにか勝って、紅魔館にある図書館を案内してもらったんだが。

突然ドカーンツという轟音と共に図書館が揺れた。霊夢が異変の元凶であるレミリア・スカーレットと弾幕ごっこ始めたのかと思ったけど、音は図書館の更の下から聞こ

えてきた。

「これは……まさか、妹様!？」

音に驚いたパチュリーが図書館の奥へと向かい、私もそれに続く。そこには嚴重に封印された鋼鉄の扉があった。

「おい、妹様つて誰の事だよ?」

「レミイの妹、フランドール・スカレットの事よ、彼女の能力は結構危険なの、だから彼女は自分から地下にいるんだけど、今日はやけに興奮してるわね……まさか!？」

「ん? どうしたんだ?」

パチュリーが扉に手をかざし魔法で中の様子を窺っていると、驚いた顔をして声をあげた。

「そんな! 地下に妹様以外誰かいるわ、これは人間? どうして、ここを通る以外道はないのに!」

確かに、扉の向こうここよりかなり下から力を2つ感じる。それでも探查魔法も使えないんだぜ。

とこうしている間も爆音と震動は続く。外では霊夢とレミリアが激しく弾幕ごっこしてるのも見えるし、ここは私の出番か?」

「とにかく、このままじゃ館が崩壊しちゃうわ、止めないと……っ?! ゲホゲホッ!」

「パチュリー様！ もうこれ以上はダメです。ずっと魔法を使いつばなしじゃないですか」

慌ててパチュリーが使役する小悪魔がやってきた。パチュリーは喘息持ちで、あまり体が強くないようだ。

「なんだか分からないけど、ここは私に任せてもらおうか」

「げほっ、はあ……はあ、ま、待ちなさい。今の妹様は危険よ。一緒にいる人間だつてすぐに死んじゃうわよ」

「あいにく、それを聞いて見知らぬふり出来るほど、私はまだ人間捨ててはいないぜ」
それに私にはフランと一緒にいる人間に心当たりがあつた。

なぜかは知らないけど、私の勤が告げているのだから間違いない。今地下にいる人間は外来人のユウキだ。

「それじゃ、ちよつと行つてくるからパチュリーは休んでな」
「待ちなさい、魔理沙！」

言うが早いか私は箒に跨り、鉄のドアをミニ八卦炉で吹き飛ばし、下に続く階段を飛んで行った。

「ん？ なんだ？ この気配……チルノか？」

人間とフランの力を辿って長い階段を下りて行く途中、私は人間の気配が変わった事

に気付いた。

それは道中、湖の淵で出会った氷精チルノの力を感じる。

「どういう事だ？ お、ここか……ってなんじゃこりゃ」

爆音のする部屋に近付いたが、そこら中の床や壁に穴が空き崩れ落ちていた。

弾幕ごっこでここまで破壊される事はあまり考えられない。

こっそりと瓦礫の影から部屋の中を覗き見て、私は絶句した。

「さあ……続ケヨウカ？」

「うん、いいよ……踊ロウヨ、オ兄チャン♪」

少年と幼女が対峙していた。あの少年がユウキで、幼女がフランか。とてつもない妖力をフランから感じ、そのせいで部屋の中は異界と化しているようだった。

「あいつ、様子がおかしいな」

ユウキの様子がおかしい。チルノの力を感じるのもそうだけど、それ以上に全身から殺気と怒りを感じる。

何をしにここに来たのか知らないけど、間違はなくフランを殺しにかかっている。

「うぷつ、この妖力、いや狂気か？ 人間にはキツイぜ。これのせいであいつもおかしくなっているのか？」

魔法使いである私は耐性があるからいいけど、ただの人間？であるユウキには影響が

あるようだな。

2人共狂ったように拳と爪を叩きつけ合っている。見ているこつちが痛々しくなるほどに。

「それにしてもなんでユウキはあんなにフランを……いや、待てよ。あの眼は」

ユウキの緑色の瞳には怒りと殺気と、ほんの少し羨望が見て取れた。フランを羨ましがっているかのようだ。

「フランもフランで興奮状態か、このままじゃどつちか死ななきや止まらないな」

弾幕ごっこでそれは見たくないな。そもそもあいつら弾幕ごっこを思いつきり間違っている。

「こりや、私がしつかりと教えないとな」

箒に跨り、部屋に入ろうとしたその時、ユウキの氷を纏った蹴りがフランの顔面を直撃した。

「おいおい、今のは流石に死んじやつたんじやないか？　ん？　ユウキの様子がまたおかしいな。どうしたんだ？」

全身から力が抜けたかのようにその場に倒れ込み、殺気や怒りと共に同時にチルノの力も感じなくなった。

ユウキは、それから辺りを見渡すと顔を真っ青にしてフランが蹴り飛ばされた方へ駆

け寄って行った。

「やっぱりフランの妖力にあてられていたのか、ならアイツ何しにここにいるんだ？
異変解決にきたのかな」

と、その時だった。フランが埋もれていた瓦礫が吹き飛び、ユウキが吹き飛ばされてしまった。

こつちにも吹き飛んだ瓦礫が飛んできて、慌てて身を隠してやりすこす。

瓦礫はユウキの体を激しく打ちのめしたらしく、全身が傷だらけになり特に左腕が酷く、骨折しているようだった。

フランはあれほどの蹴りを受けても全く応えていないようで、ピンピンしている。

そして、さっきまでよりさらに狂気に満ちた笑みを浮かべ、倒れ込んで動けないユウキにトドメを刺そうとしていた。

「はあ、仕方ない。助けてやるか、ちよつと興味も沸いたし。まずはフランのスペルカードをどうにかしないとな」

・
・
・

突然の乱入者、霧雨魔理沙と言う魔法少女に助けられた。

意識がぼやけて行く中、箒に乗った彼女は俺の側に降りて左手を見ている。

「あちや、こりや完全に折れてるな。それにヒドイ傷だ」

「これくらい、慣れてる。それより魔理沙だったな？　ありがとう、もう大丈夫だ」

左腕が折れているが、それ以外は動く。ふらふらと立ち上がるうとした俺の肩を魔理沙が押さえ、また座らされた。

「動くなつての。少し前から見てたけど、お前フランの妖力に宛てられて正気じゃなかったんだぜ？　それにそんな身体で何をしようって言うんだ？　私が代わるぜ」

そうか、俺は正気を失って……いや、そんなんじゃない。正気は失っていたかもしれないけど、俺は本気でフランに怒りを覚え、殺そうとしたんだ。

「さーつと、待たせたなフラン。私が代わりに相手だ」

「あはは、いいよ、魔理沙は簡単に壊れないかな？」

「私を壊したかったら、夢想封印一万発は撃ち込んでこないとダメだぜ」

ふとフランを見ると、さつきまでの狂気に満ちた笑顔とは違った眩しい笑顔。夢の中で俺を呼んだあの時の笑顔だ。

さつき俺と暴れたせいですつきりしたのか、それとも乱入者の魔理沙が物珍しくてそれで戻ったのかは分からない。

ただ分かるのは、魔理沙は箒に跨り、フランは宝石の羽を広げ、狭くて広い部屋の中

で【弹幕ごっこ】を始めたと言う事。

「俺は……殺し合いしか出来なかった、か」

フランを中心にばら撒くように撃たれた弹幕を難なくかわし、魔理沙はお返しとばかりに光線のような色鮮やかな弹幕を放っている。

「おいおい。いくら自分の部屋だからって壊しまくると寝る所に困るぜ？」

「魔理沙だつて他人の部屋なのに壊して……いない？」

魔理沙の弹幕はフランのとは違い、壁や床に当たつてもすぐに消えてしまっている。

「相手を傷つけるだけじゃなく、魅せあうのが本当の弹幕ごっこだ。で、これが本当のスペルカードだ！」

懐から一枚のカードを取り出し、フランに向けて掲げた。

「行くぜ【魔符・スターダストレヴェアリエ】」

カードが淡く光ると魔理沙の周りに7つの魔法陣が浮かび、そこから星の形をした弹幕が発射された。

弹幕は全部で7色。部屋一面を鮮やかに彩り、さながら流星雨のようだ。

そのあまりの美しさに俺は見惚れていたが、それはフランも同じよう頬を少し染めながら眼を輝かせている。

あの眼はチルノや大ちゃんに似ているな。

「わあ、綺麗綺麗！ 魔理沙すごーい！」

さつき俺が使った弾幕の反応とは打って変わって今度は、純粋に子供ののように喜んでいる。

「おーい、見惚れるのは嬉しいけど、かわさないとすぐにピチューンするぞー？」

「わわつと、危ない危ない」

眼の前にまで迫っていた弾幕をすらりとかわし、フランは魔理沙の真似をするかのようカードを取りだした。

「今度は私の番だね。行くよー！ 【禁忌・カゴメカゴメ】」

フランも負けじと魔理沙の周りを囲むような緑の弾幕を放つ。

「おお、その調子その調子だフラン！」

網目状に張られた弾幕の間をすいすいと進みつつ、フランに反撃をしている。

「あれが、本物の弾幕ごっこ、か」

殺し合う為ではなく、誇りやプライドよりもっと別の物をかけた決闘。

思えば俺は紫に弾幕ごっこことスペルカードの事は教えられたが、実際にやった事はなかった。

ルーミアは餌付け、チルノも新しいスペルカードのヒントを教えただけ、美鈴は肉弾戦、レミリアとも問答だけで終わった。

そして……フランとは弾幕ごっことは名ばかりの殺し合い。

「……俺、ホント何しに来たんだろうな」

フランに誘われ来たのはいいけど、遊ぶと言っても殺し合いになってしまった。

今魔理沙がフランの相手をしてきているけど、そっちの方がフランの為になるだろう。

現に俺と戦っている時よりも数倍楽しそうだ、狂っている様子もない。

「それは当然の事だけだな。俺は……何もしていない。もうここでも俺は必要ないな……無責任で悪いな、魔理沙」

何かをしに来て、結局は他人任せになる。思ってみれば元いた世界でも同じような事ばかりしている気がする。

「だから……俺はずっと独り、だったんだよな」

——お前は誰かに手を差し伸べる事はしても、誰かに手を差し伸べられた事はあるのか？

「あの時アイツに言われて気付くんだもん。んなもん、最初からないに決まってるのに……だから俺はここに、にいる……」

自虐的な笑みを浮かべ、楽しそうに弾幕ごっこに興じるフランを見上げた。

「ああ……手を差し伸べてくれる相手がいるお前が、羨ましいよ。フラン」

そこで俺は意識を手放した。

つづく

第14話 「上条当麻」

それは7月に入ってすぐぐらいの頃だった。

「全く君くらいだよ？ 週に何度もここに來てる患者は」

「いやあ、あははは……すみません」

カエル顔の医者、冥土返しに言われベツトの上で凹む上条当麻。

「ま、そりゃ無理でしょ先生。スキルアウトに絡まれている女の子ホイホイだからコイツは」

「何だよその変なネーミングは……ま、今回は正直ユウキのおかげで助かったけどな。さんきゅ」

俺の呆れたような視線に当麻はジト目で返事をしたが、すぐに笑顔で礼を言ってきた。

「つてか、何だよあの騒ぎは、スキルアウトの集会に行こうとしていた1人に絡まれた女の子を助けようとして、一緒に逃げたら集会のだ真ん中に行きついて大ピンチつて。お前馬鹿だろ！」

……その集会を1人で潰そうと張っていた俺が言うのもアレだけどなあ。と小声で

眩く。

「ん？ 何か言ったか？」

「いや、何も」

「君達本当に仲がいいねえ。まあ、彼の方は検査で何も問題なかったし。これで帰っていいよ？ 次に会うのは明日、なんて事にはならないようにね？」

「明日どころか数時間後だったりしてな」

「不吉な事言うなよ！ でも、気を付けますよ。お世話になりました」

お大事にと言つて、冥土返しは病室から出て行つた。当麻が検査衣から着替えている間、俺はふとした疑問を口にした。

「なあお前つてどうしてそこまで体張つて他人を助けるんだ？ 基本的に面倒くさがりなのに」

「どうしてつて、うーん、そんなの考えた事すらないな。たださ、頭で考えるよりも気が付いたら助けに行つていゝるんだよ。俺に何が出来るかとか、どうすればいいとか、そう言うのは助けるつて決めてから考える」

困つてゐる人がいゝれば、考えるより先に行動する。そこには裏も表も何も無い。

「はあ、要するにバカつて事だな」

「バ、バカは言ゝすぎだろ！ それに困つてゐる人に手を出すくらいお前だつてしてゐるだ

ろ」

「俺は後先考えず突っ走って敵のど真ん中に特攻する。なんて人助けと正反対の事はないなあ」

「う、うぐぐぐ……」

ま、こんなバカだから入学早々に興味持って友達になっただけだな。

幼い頃から実験やら暗殺やらやってた俺には……眩しいな。

全く、いきなり高校に通えだなんて言われて、色々手続きやら勝手にやられて、ポイツと放り込まれた時は今度こそ殺してやる！ と息まいたけど、コイツと出会えた事が唯一の幸いかな。

それとも……当麻の右手、あらゆる異能を殺す【幻想殺し】と俺の【幻想支配】を引き会わせたかった？

そっちの方がありえるな。

「終わったぞ。待っていてくれてありがとな。お前がこんなに俺を心配してくれるなんて嬉しいぞ」

「んじや晩飯食いに行くか。勿論お前の奢りで。もしくは3万出せ」

「んなつ!!? なんでそういう話になりますか!?!」

「当たり前だろ。30人の武装したスキルアウト相手にしたんだ、普通は1人1万円と

して30万円の報酬を要求してもいいくらいなんだぞ?」

ただの善意でここまでするほど、俺はお人よしじゃないんでね。

「お、お前がちよくちよく学校休んで、研究所とかから依頼されたバイトしてるのは知っているけど……まさか友達の俺にまでそれをするのか!? つてかなんか色々とおかしくないですか!」

当麻は俺の裏の仕事を半分だけ知っている。最も俺の能力が珍しいから研究所から実験の協力を頼まれたり、お偉いさんから何でも屋っぽい仕事をしているという表向きバイトだけだ。

実際は裏切り者の暗殺や、侵入者の排除なんかもしているが流石にそれはない内緒だ。

今回も、スキルアウトが変に武装しているから現場を押さえて排除しろとあのくそババアに言われて、情報のあつた場所に張りこんでいたら当麻が女の子を連れて現れたと言うわけだ。

『手を貸すか? 安くするぜ……………1人につき千円』

『だあもう、なんでもいい! この状況どうにかできるなら手を貸してくれえ!』

で、助ける時に持っていたレコーダーになぜか録音されていた声を聞かせると、当麻は口をあんぐりとあけて絶句した。

「お前それ最後絶対聞こえないように言ってただろ！ 全然聞こえなかったぞ！ 大体いつからそんな金にがめついキヤラになったんだよ!? そりゃ晩飯くらいは奢るつもりだったけど、そこまで今余裕が……不幸だー!!」

うん、ホント見えていて飽きないなこいつは。

「いや、流石に万年貧乏のお前にそこまで要求するほど俺も鬼じゃないさ」
「十分にお前が鬼に見えるっての……」

げんなりする当麻と共に病院を後にし、ファミレスへと向かった。

「んっ……ここは、病院か?」

確か俺は、インデックスを助けようと……そうだ。幻想支配で、自動書記の【竜王の殺息】を使って……それを撃ちあつて、それから頭が痛くなって……羽。

「そうだ羽だ！ あの羽が当麻の頭に！」

意識が落ちる前、インデックスと当麻に降り注いだ白い羽。幻想支配でアレが危険だと言うのがわかり、当麻に逃げろと言おうとして意識が落ちたんだ。で、最後に視たのが……当麻の頭に羽が落ちた所。

「だったら当麻は……こうしちゃいけない！」

腕に刺さった点滴を抜き、かけてあった服に着替えて病室を飛び出る。幻想支配の後遺症は何もなく、体は至って快調だ。

通りかかった看護師さんに当麻の病室を聞いて行ってみる途中、冥土返しとインデックスが一室に入って行くのが見えた。

あそこは当麻の病室じゃなくあの医者個室だから、何か話をしにいったのだろう。内容は気になったが、それよりも当麻の方を急いだ。

「……で、来てみたが。どうしようか」

俺の推測が正しければ、当麻は……ともかく、俺はノックをして中から聞き慣れた声がするのを確認し、部屋へと入った。

「よっ、当麻！」

まずは軽いジャブ。これであいつがどんな反応しめすか。

「あつ、えつと……よ、よう」

「なんだなんだそのぎこちない返事は？　せつかく【兄】が見舞いに来てやったのに」

「あーああ、そうだよな。ごめん、兄、さん。俺さつきまで寝てたから頭ボーつとしててい」

……想定していた中で、最悪のパターン。上条当麻は記憶を失っていた。

恐らくはあの白い羽が頭に降ったせいだろう。幻想殺しも直接右手で触れるか、全身に効果のある攻撃以外は打ち消せない。

「……下手な芝居はやめようぜ上条当麻。お前に兄はいない、従妹はいるらしいけどな。俺はお前が記憶を失う場面に立ちあっていたんだ」

「っ!? そ、そっか……ごめん。気を使わせたみたいだな」

俺の言葉に顔を真っ白にして謝る当麻。気を使ったのはお前の方じゃないか、謝るのは俺の方だ。

落ち込む当麻の頭をかくく小突き、ベッド脇の椅子に腰かけた。

「なんでお前が謝るんだよ。俺の方こそ、お前を助けられなかった……ごめん」

「いやいやいや、こちらこそ。心配をおかけしまして……えつと?」

「俺の名前は……ユウキ。ちなみに俺は兄でも何でもないお前の同級生だ」

「そっか、ユウキ、か。うっし、覚えた! あれ? 名字は?」

「記憶を失う前もお前は俺をユウキと呼んでいた。だから今まで通りでいいだろ? それに俺は名字で呼ばれるのが心底嫌いなんでね」

そう、俺はユウキ。名字はあるが、大嫌いなんで誰にも呼ばせない。

必要以外には教える事もないし、知ってる人には呼ばせないようにもしている。

「そ、そうなのか。あのさ、良ければ俺がなんで記憶を失う事になったのか、それと前の

俺がどうだったのか教えてくれないか？ 一応魔術師って奴らからカエル顔の先生經由で色々聞いたけど、ちよつとピンと来なくて」

なるほど。ステイル達が冥土返しにそのまま伝えたのか。確かにあの先生なら魔術とかにも理解しめしそうだな。学園都市の闇の顔も知っている冥土返しなら。

そして、冥土返しは当麻の記憶は絶対に戻らないと言う事も聞かされたようだ。曰くあの先生の最大の敗北だ。と心底悔しそうだつたらしい。あの人らしいな。

「いいぜ。俺はそのつもりで来たんだ。と言つても俺は高校以前のお前は知らないし、記憶を失った経緯に関わったのは半分くらいだからな。それでいいなら話すよ」

本当はインデックスの事知つてから、ずっと関わつていようとしたんだが、幻想御手事件の方が緊急だったからそつちを優先してしまった。

結果的に幻想御手を使うとした佐天を説得し、美琴と2人で思つたより早く解決できたけど……こつちを優先させるべきだったかもしれない。

それから俺は高校入学式で出会つた時から今に至る話をした。勿論、インデックスやステイル達の事も。

「俺は、記憶を失う前の俺はインデックスを守る為に、文字通り命を張つたんだな」

「……………」

実感が湧かないんだろうな。自分のした事とはいえ、記憶そのものが破壊されて、元

には絶対に戻らない。

自分と同じ顔の人物が活躍する漫画を読んでいるようなものだろうか。

「で、インデックスは今どこに？」

「それなら先生と一緒に話をしている所だと思っただけ、もう少ししたら来るぞ？　つてやばっ！　俺病室抜けてきたんだ。見つかる前に戻った方がいいな。あ、お前……記憶喪失の事どうするんだ？　なんだったら俺が……」

「悪い。それは黙っていてくれないか？　俺、記憶を失ってないフリするからさ。ユウキにも協力して欲しいんだ」

驚いた。てつきり悩むと思っていたのに、しかも、記憶喪失をしていないフリだなんて。

「当麻、まさか……インデックスの為か？」

「そのさ、自分のした事全然分らないし。聞いても何の事だかさっぱりだけど、インデックスって子を悲しませちやいけなくて思うんだ。おかしいよな、名前も顔も覚えていない相手なのに、それでもインデックスの悲しむ顔は見たくない。記憶を失う前が必死になって守ろうとしたんだ。それは誇りに思う……って、自分の事を誇りに思うのは変だよな」

変わらないな、上条当麻は。

「なら、インデックスに会った時どんな顔して何言うか考えとけよ。きつとあの医者からお前が記憶喪失だって聞かされていると思うぞ」

「そう、だな……よしつ、上条当麻一世一代の大芝居だ！……なあ、ユウキ？　俺、記憶を失う前の上条当麻とどこか違っているか？」

当麻は少しだけ不安そうな顔を向けてきた。違和感があれば、インデックスに気付かれてしまうと思ったのか、それとも単にこれからの事が不安なのか。

でもその顔がおかしくて、俺は笑ってしまった。

「ぷっ、あはははは」

「な、なんだよいきなり笑う事ないじゃないか！　やつぱり俺どこか違うのか？」

「いや、そんな事ない。上条当麻は変わってねえよ。記憶を失う前も今もバカでおつちよこちよいで……お人よしさ」

「……そっか」

安心した笑みを浮かべる当麻を見て、俺も笑みを浮かべつつ病室のドアを閉めた。

それからも当麻は、以前と変わらなかった。魔術師絡みの事件やら戦争にまで巻き込

まれるなど、不幸レベルは臨界突破したけど。そして、それにもまして女運が天元突破していたけど！

それでも、あいつは眼の前で誰かが困っていれば、進んで手を差し伸べていった。損得勘定もなく、ただただ自分がそうしたいからと、言葉には出さなかったが自分の信念を貫いて多くの人を救って行った。

それを見て、俺は羨ましくなった。記憶を失おうとも当麻が失ったのはそれだけ、他は何も変わらない。

俺もそれからは当麻と一緒に魔術師絡みの事件に巻き込まれたかと思えば、学園都市の暗部組織と協力したり敵対したりを繰り返してるうちに、一方通行やら浜面、アイテム、打ち止めなど多くの人と友達レベルとまではいかないけど、レベル5ほぼ全員と知り合った。だが……

いや、これ以上は考えるのは止めよう。

ともかく、俺は……上条当麻のおかげで変わった。だから、アイテムに出来て俺に出来ない理由はなかった。

例えばそれが、アイテムを真似たただの幻想（げんそう）だとしても……俺はそれを支配する。

学園都市に、その世界の全てに……当麻達にさえ忘れ去られて捨てられようとも、俺

は変わらない。

突然目の前に狼に襲われそうになった女の子を助けたのも、落ち込んだチルノを放っておけなかったのも……ああ、そうだ。

フランに呼ばれて何がなんでも紅魔館に行こうとしたのも、フランが一人ぼっちで寂しそうだったから、俺に出来る事があるとか考えてなかった。

ただ……何とかしたいと思つたからだ。そこに理由はない、理由はいらぬ。

「俺はバカだな……誰かが俺を必要としているから動くんじゃない、俺がそうしたいから……立つんだ」

そうだ立て！ 寝ている時じゃない。魔理沙が俺の代わりに？ 違う。誰も俺の代わりは出来ない。魔理沙は魔理沙が出来る事をしてるんだ。それに甘えるなんて、俺らしくない。

おぼろげだった意識がはつきりとしていく。魔理沙とフランはまだ戦っている。少しずつだけど、興奮したフランがまた狂気に飲まれようとしている。

——理由？ みんな私が怖いカラ、みんな壊レルから、みんな私が怖いカラ、ダカラ私ハズツト一人ナノ！

「誰が一人ぼっちだつて？ 誰が怖がつてるつて？」

痛みも気だるさももうない。一步一步魔理沙とフランに歩いて行く。

「おいユウキ、お前は休んで……お前、その眼は？」

「えっ？ お兄ちゃんから、私と同じ力を感じる？ それに眼が……銀色？」

俺の中にフランの妖力を感じる。さっきもずっと視ていたが、フランの力は使えなかった。

けれども今は違う、はつきりと幻想支配がフランの力を支配し始めたのを感じる。

「フラン、お前を誰もが怖がってると思うなら、お前がずっと独りぼっちだと思ってるなら……」

この言葉を使うのはいつぶりだろうな。全く、羨ましいからって中二っぽい決め台詞まで真似る事ないだろうにな、なあ当麻？

「まずは、その幻想を……俺が支配する！」

つつく

第15話 「決着」

左手の痛みはほとんどないけど、まだ動かない。フランの魔力で治癒出来ないかと試したが、痛みが引く程度しか効果がないようだ。

まあ、ハンデにはちようどいいか。

「私の幻想を支配する？ あはは、面白い事言うねお兄ちゃん。私の何が幻想な、の！」
フランが腕を振り、赤い弾幕を撃ちだしてきた。

俺はその動きを真似て腕を振り、同じ色で同じ数の弾幕を放ち相殺する。

「あれ!! それフランの弾幕だよね？ なんでお兄ちゃんが？」

「悪い、フランの能力教えてもらったけど、俺の能力は教えてなかったな。俺の能力は幻想支配、相手の能力を支配する力……と、言っても自分でもあまり良く分かってないんだけど。言葉より実際に使った方が分かりやすいか」

そう言っって手近にあった大きめの瓦礫を見る。この世界の能力を使うのは、学園都市の能力者の力を使う時と似ている。

必要なのは演算でも動作でもない。空気をするかのように、何も考えずに手足を動かすかのように自然に使う事。

右手にさつきフランが出した目玉のような物体が現れた。見た目気色悪いが、後はこれを……

「ぎゅつとして、どつかーん！ だっけか？」

握りつぶす。

「ええええ！？」

粉みじんに破壊された瓦礫を見ながら、フランが驚きの声をあげた。当然か、自分と同じ能力をそのまま使われたんだからな。

それにしても、この能力実際使ってみて分かったけど……

「すごく嫌な気分になるな」

「えっ？」

「ただの瓦礫を破壊しただけ、今までも電撃やら火炎やら何やらで色々破壊してきたけど。それでも、気持ち悪い。嫌悪感とも言うかな？」

「……………」

自分の手の中の物体を握りつぶせば何であろうと破壊される。この感覚は嫌いだ。

美琴や絹旗達の能力で壁やらビルやら破壊した事もあったし、直接自分の手で人を殺した事もある。

けれどもこの感覚は、今まで感じた事ない程嫌なものだ。

「気が狂いそうになるのも分かるな。それに……ん？」

この気配は……なるほど、そう言う事か。

「それに、何？」

「いや、なんでもない。さあ、続けようか、今度は俺の番だ【禁忌・レーヴァテイン】」
右手に炎を纏った棒が現れる。正直、さつき見て俺も使ってみたいと思っていたスペルカードだ。

「スペルカードまで!? だったら、こっちは……【禁忌・フォーオブアカインド】」

フランが4人に分身し俺を囲む。幻影などの幻で分身する能力者はいたが、これは違う。本当にフランが4人に増えた。

「さらにく私も【禁忌・レーヴァテイン】」

「いい!? それはありかよ!？」

4人に増えたフラン全員の右手にレーヴァテインが現れた。スペルカードの重ねがけ、確かに慧音から聞いた事はあるがこういう事を言うのか。

「つてかさつき俺と戦った時に使ったんじゃ?」

「『お兄ちゃんコンテニューしたから無効だよ♪』」

「ええい、サラウンドで喋るな!」

フランの声が変に耳に残ってしまう。

「「「あつははくいくくよ〜♪」」」

4人のフランが一斉にレーヴァテインを振りかざし、俺へと迫る。

どうする？ 俺もスペルカードで分身するか？

「……いや、その必要はないな」

「えっ?」

分身のうち2人がレーヴァテインを振り、衝撃波と弾幕を放ってくる。

地面を転がるようにそれらをかかわすと、左右から同時に残りの2人が斬りかかってきた。

「「もらったあ!」」

「甘い」

2人に斬られる寸前、地面を蹴り宙へと舞う。

「流石はフランの力。チルノは勿論、慧音よりも速く飛べる。それっ!」

ポカーンとこちらを見上げる床の2人に向けて、レーヴァテインを2回振り沢山の弾幕をばら撒く。

「わわわっ!?!」

「ちよっ、多いよ〜!」

当てないようにばら撒いたんだからじつとしてればいいのに、2人はあたふたと逃げ

回るので何発か掠った。

「まだ私達が」

「いるよー！」

今度はさつきまで少し離れて弾幕を撃っていた2人が、左右から斬りかかってきた。左から来たフランをかわし、右の攻撃をレーヴァテインで受け止める。

これで左手が使えれば反撃しやすいが動かない物は仕方ない、それにフラン相手なら問題ない。

でも流石に吸血鬼の身体能力で振られたレーヴァテインを、同じレーヴァテインでとは言え右手一本で受け止めるのはキツイ、少し痺れた。

「すーいすーいー！」

「すーいのはこれから、だ！」

受け止めていた右手の力を抜く。すると力を籠めていたフランはバランスを崩し前のめりになった。

すかさずフランから離れ、レーヴァテインから弾幕を放つ。

「わぷっ!!」

かわしきれなかったフランが、弾幕を何発か浴びる。

追撃を放とうとしたが、残りの3人のフランがこちらに向かってきたので距離を取っ

た。

「せっかく4人に分身したんだから、一斉にかかつてきなよ」

安い挑発だったが、フランには効果はばっちり。

「むく、いづくよくよく!」

「「それ〜!」」

地面に降りた俺に向かって、今度は4人一斉に斬りかかってきた。

4人同時に相手にするなら、不慣れな空中より地に足をつけた方が捌きやすい。

身体能力が違いすぎるので一撃一撃がかなり重い斬撃、両手が使えてもまともに受けたくはない。

1人の斬撃をかわすと、すぐに2人目の斬撃が来る。受け止める事は出来なくても、反らす事はできる。

「そおら、よつと!」

右手に力を籠め、2人目の杖を横から狙っていた3人目へと叩くように弾く。

「きやつ! な、何するの!?!」

「わつ、ごめーん!」

狙い通り同士討ちの形になった。背後に気配を感じ、咄嗟に逆手に持ち替えたレーヴァテインを振りかえらずに背中へと突き出す。

「けほっ!？」

こちらに突進してきた4人目に、カウンターでうまい具合に突き刺さったらしく分身は消えた。

普段なら後ろ蹴りや裏拳をする所だが、弾幕ごつこなのでスペルカードのレーヴァテインで攻撃したけど、思いつきり物理攻撃だよなこれ。

1人やられた事で驚いた残りのフランが集まった。

「あ、ナンバー4がやられちゃったよ!」

「同じ力で同じスペルカード使ってるのに、こつちの攻撃全然当たらない!」

「なんだか私よりうまくレーヴァテイン使っている気がするよ!」

さつきからフランの攻撃が俺に届かない事に驚いているようだが、それは当然。

同じ力を使っている、俺にはフランにないものがある。

「悪いな。俺は昔から色々鍛えられたから、こういう武器の扱いはなれてるんだよ!」

学園都市で昔から、棒や日本刀やナイフなどの近距離用から、拳銃や機関銃、ランチャーまでの重火器まで沢山仕込まれた。

幻想支配が明確に発現したのは、数年前からだけどそれまではあいつら俺を兵器人間にしたいかのような扱いだったな。

おかげで今こうして役に立っているわけだけだ。

ちなみに俺の一番の得意な獲物はナイフや短剣。小回りが利くし格闘戦に組み込めるからだ。

「あ、時間切れだ」

「俺もだ」

2人揃ってスペルカードの効果が切れたようで、レーヴァテインもフランの分身も消えた。

もつと色々楽しみたい所ではあるけれど、この弾幕ごっこを終わらせるか。フランを待ってる人もいるし。

「なあ、フラン。次で最後にしないか？俺はフランのスペルカードを迎撃しない、全力でかわす。かわせたら俺の勝ちだ」

「えくもう？ うーん、いいよ。フランも今日は沢山遊べて楽しかったから」

正直、幻想支配の限界が近い。これ以上フランの力で弾幕やスペルカードを使うのはまずい。

フランの力は初めて使うタイプだから、前みたく気絶するかもしれない。それまでにケリをつける。

それにしても、これがさつきまで狂気に満ちていたとは思えないな。今のフランは見ただ目通りの純粋な子供に見える。

気付いているのかは分からないけど、部屋に満ちていた狂気が今はもうほとんどない。フランの力で消し去るつもりだったけど、その必要はなかったようだ。

ありとあらゆるものを破壊する程度の能力、アレの影響か。

「それじゃあ、行くよ」

フランが最後に使うスペルカードはなんだ？ フランのスペルカードで俺がこの状況で使うとしたら……

「私の最後のスペルカード……【秘弾・そして誰もいなくなるか?】」

やっぱりこのスペルカードしかない!

自身の姿を消し、四方八方からの無尽蔵な弾幕攻撃。これの攻略法はただ一つ、制限時間まで避ける事。

まず大玉が俺を囲むように現れ、そこから小さな弾幕が放たれる。

空中を飛びまわりながら避ければいいんだろうけど、多分それをしたら俺が先に限界時間を迎える。

「うおおおお〜!!」

ならば、いつものように地面を駆けて避けるしかない。

左手が振れないので、どうもうまく走れないがそれでも走る。

ブラブラと垂れ下がっている左手に、弾が当たらないように気を付け、全力でかける。

目指す場所はない。俺の背後、正確には部屋の入り口目がけて走れば面白い事にはなりそうだけど、後が怖い。

と、ここで弾幕に変化があられた。俺目がけて放たれた弾が、空中で停止したのだ。設置型弾幕とでも言えればいいのか、背後から迫る弾幕をかわした瞬間、その場に止まった。

避ければそのまま通り抜けると思っていたので、あやうく衝突する所だ。

「流石に難易度高いな！」

ちらりと後ろを振り返れば、弾幕が逃げ道を塞ぐように空中で停止している。

このまま前へと駆けるしかない。それでもいくらか広い部屋とはいえ、すぐに壁にぶつかるだろう。

スペルカードの効果が切れるまであと少し。だが、俺は確実に部屋の隅へと追いやりれていつている。

そこに逃げ道はなく、追いやられた俺は圧倒的物量の弾幕に押しつぶされるだろう。迎撃しないとやった以上、こっちも弾幕やスペルカードで相殺はしない。ただ逃げるのみ。

「あと、1.5秒！」

地面を転がり、飛び跳ねながら避けているが、それでもついに壁の四隅へと追いやら

れた。

後ろを振り返ると、緑や赤、青と言った様々な色をした弾幕が津波のように押し寄せ
てきている。

「10……9……」

効果が切れる前に俺が被弾するのは確実。その時俺はこの弾幕の配置に欠点がある
分かった。

全部避けると宣言した故の弾幕の配置なのだろうが、これでは逆に逃げ場を与えてい
る。

『そもそも弾幕は相手を倒す為だけではなく、いかに相手に魅せ付けるかも重要なんで』
文の言葉を思い出す。回避不可能な弾幕はダメだと慧音も言っていたし、フランもそ
のルールを分かっているの逃げ場なのかもしれない。

ま、単に当てやすくした結果、こうなったのかもしれないけど。

「5……4……3……ここだ！」

残り3秒で、弾幕の津波へと全速力で駆けだす。

目指すは津波の1か所、そこに1人通れるかどうかの小さな穴が空いている。

さらにこの津波、壁としての厚さはほとんどない。つまり、あの穴に飛びこめば、容
易に通り返けられる。

「2……1……1！」

穴に向けてへつとスライディングをすると同時に、弾幕の津波が部屋の四隅へと激突した。

「あ、危なかった」

後少しでも、穴に飛びこむのが遅ければ被弾していたかもしれない。

逆に、早く穴を通り過ぎててもすぐ追撃が来ただろう。

「ようやく、これで」

「うん、フランの負けだね」

床に寝転がった俺の側に立ったフランは、声こそ残念そうだったが顔は笑顔だった。

「今更だけどお兄ちゃん、すごい格好だね」

「……ほんと、今更それ言うかよ」

フランに渡された手鏡で自分の姿を見てみると、外傷もひどいが服もズボンも破れてボロボロだった。

学園都市の化学の粋を集めて作られた最新型の防寒・防弾・衝撃吸収の特殊素材で作られた防寒服。それをよくもここまで傷だらけに出来たものだ。

それにしても、吸血鬼は鏡に映らないんじゃないのか？　なんで持っているんだ??

「ねえ、お兄ちゃん。これからもフランの側でずっと遊んでくれる?」

同じような台詞を少し前にも聞いたが、今度はあの時とは違う。

恥ずかしそうな笑顔で、じつと俺を見ている。さつき聞いた時は狂気と悲哀が混じった瞳だったが、今は拒絶されるかもしれないという怯えと少しの期待が見える。

「フラン、また弾幕ごっこで遊ぶのは構わないよ」

「つー！ じゃ、じゃあー！」

「でも、フランの側にずつといる事は出来ない。俺が側にいなくても大丈夫だ」

「な、なんで？」

俺の言葉にフランは瞳を輝かせたが、一転して悲しみと少しの怒りが滲んだ。

「さつきも言ったけど、フランは一人ぼっちじゃない。気付いていないだけで、フランの側にはずつと……」

部屋の崩壊しかけた入り口を指さす。

「家族がいるじゃないか」

そこには呆れた表情でこつちを見ている霊夢と魔理沙。その後ろに隠れるようにレミリアが、その横には咲夜、美鈴とネグリジエのような服を着た紫色の少女がいた。

つづく

第16話 「不器用な姉妹（前編）」

時間は少し遡る。

紅魔館 屋上

紅い月の元、私レミア・スカレットは地に付していた。服が少しボロボロになり、スペルカードも全て攻略され、私の負け。

そんな私を少し服が汚れた程度の博麗霊夢が見下ろしている。

なんて事はない。これも予想通りの結果。

「私の負けね。霧の維持はもう止めたから、朝になれば元通りになっているわよ」

「そう。で、あんたは結局何がしたかったの？」

「何って、変な事聞いわね博麗の巫女よ。幻想郷を紅い霧で覆えば私は自由に行動出来る。幻想郷を支配出来るわ」

「嘘ね」

霊夢は私のついた嘘をハッキリと否定した。間違つてはいないけど、ここのも断言されるとはね。

「確かに吸血鬼が真昼間から自由に動ければ脅威になる。だけど、それは表向きの理由でしょ？ 霧に対して執着も見せなかったし」

「さあ？ そう見えただけじゃない？」

「そこまでしらばつくれるなら、私が言うわ。あんた自分の力を誇示したかっただけじゃない？」

「ホント、ここまで言い当てられると怖いくらいね。確かに今回の一件、自分の力を幻想郷に魅せ付ける為、だったわ。ここまですれば十分でしょ」

「そこまで肩肘張らなくてもいいのに。幻想郷は全てを受け入れる。前に紫にそう言われたでしょ？」

「プライドの問題よ」

そう、これはプライドの問題。私達は海の方からこの地へきた。歴史も浅いし、認知もされていない西洋妖怪。

私の名声も力も何も知らない連中に、しっかりと力を見せつけなければいけない……私以外の為にもね。

別に畏怖されたいとは思っていない。日本の妖怪と違って、人間達に恐怖を与えても別に得はない。

けれども、軽く見られたり下に見られるのもダメだ。人間や弱小妖怪ごときに舐めら

れるのは腹立たしいけど、それは私が気にしなければいいだけの事、ウザかったら黙らせればいい。

これは、私個人だけの問題ではない。だから、力を示す必要があった。特に人間と妖怪が共存しているここ幻想郷では。

ただでさえ一度失敗しているのだから。

「プライドねえ。じゃあ、次。ユウキさんをどこにやったの？」

「あの外来人なら心配ないわ。ちゃんと生きてるわよ」

フランの部屋に間違いなく飛ばしたけど、まだ生きています。巫女と一緒に来た魔法使いもフランの部屋に行ったようだけれど、どうなっているのかまでは分からない。

「なら、私をそこまで案内しなさい。こんな所にいたんじゃ何があるかわからないじゃない」

本当にユウキの心配をしているわ、この巫女。でもその指摘は間違いじゃないわね。

「いいけど、その前に着替えさせてよ。あなたが派手に暴れたせいで、お気に入りの服が台無しだわ」

「お嬢様、着替えをお持ちしました」

「……ありがとう咲夜」

いつの間にか咲夜が、私の着替えを持って側に立っていた。

と言つても私と靈夢の弾幕ごっこ中、咲夜が紅魔館の屋上からずつと見ていたのも知っている。

一度靈夢に負けた咲夜は手を出す事は出来ない。だから見ていたのだろう。

それはいい、けれども時間を止めて着替えを取りに行った風ではないので、私がこうやってボロボロになって負けるのを前もって予測済みだったと言うわけね……少し、腹立たしいわ。

「これくらいメイドとして当然ですわ」

「本当に気がきくわね、少し利き過ぎじゃないかしら？」

「メイド長、ですから」

咲夜は、業務用の笑顔で私の皮肉に答える。こういう子だったかしら？

「お嬢様く咲夜さくん！ 大丈夫ですかー？」

私が着替えを終えると、美鈴が門の方から飛んできた。確か鴉天狗とやりあっていたはずだけど、私以上にボロボロね。

「美鈴、どうしたのその格好?! あなたがそんなになるなんて、巫女と魔法使いにそこまですられたの？」

「失礼ね。私も魔理沙もそこまで鬼じゃないわよ」

「そうですよ。ボロボロになる前にやられたんです！ これは鴉天狗の文とやりあつて

こうなつたんです」

美鈴、そこは胸を張って否定する所じゃないわよ。確かに巫女と魔法使いは本気で追つ払わなくていいと言つたけども……

隣で咲夜も額に手をあて、深いため息をついている。

「そう言えば文があんたと戦っていたわね。アレは何だったの？」

霊夢も気付いていたのね。まああれだけ門の近くでやり合っていたら、その上空にいた私達が気付かないわけないか。

「ユウキさんの案内兼取材の為だそうで、でもお嬢様から通すなど言われていたので今までやりあつていたのですが……」

美鈴が指を指した方を見ると、門の外で服がボロボロになった鴉天狗が目を回して倒れていた。

これには驚いた。あの鴉天狗は決して弱くはない。むしろ天狗の中でも上位のはず、それを美鈴が負かすなんて。

「あの文を倒すなんて。美鈴って言ったわよね。あんたそんなに強かったの？」

「美鈴、あなた巫女達相手の時は手を抜いていたでしょ？」

霊夢も驚きの声をあげ、咲夜が不機嫌そうに美鈴を睨んでいる。いくら私がそこまで本気で巫女達を止めなくていいとは言つても、門番が侵入者相手に手加減などしては門

番失格だ。

「い、いや……その、負けられない理由と言いますか」

ユウキは文と一緒に来ていた。ユウキは通して文は通さなかった。見る限り美鈴だけではなく、文も熱くなっていたようだし、とすれば……

「……なるほど。ユウキ絡みね？」

「えっ!? な、何の事ですか？」

「どういう事!？」

あら、美鈴だけでなく、霊夢と咲夜まで驚いた顔をするなんて、これはますます面白い事になりそうね。

「咲夜は知らなかったの？ ユウキが霊夢達の後にここにきて、今地下でフランと遊んでいる所なのよ？」

「ユ、ユウキさんがフランお嬢様の所へいるんですか!？」

咲夜がここまで驚いた顔をするのは珍しいわ。無理もない事だけれど。
「そのフランって言うのは誰の事？ とっても嫌な予感するんだけど」

「それは……っ!？」

気が進まなかったが、霊夢にフランの事を話そうとしたその時だった。突然、紅魔館の地下から感じるフランの気配が2つになった。

「フランお嬢様の気が、2つ？」

美鈴も気付いたようで、慌てている。霊夢と咲夜だけが気付いていない。

「えっ？ 何？」

「お嬢様？ 美鈴？ 一体どうしたんですか？」

これはフランが分身のスペルカードを使ったわけじゃないわね。一体地下で何が起こっているのか……

「行くわよ、咲夜、美鈴！」

とにかく、フランの所に行くしかない。

「ちよつと、待ちなさいよ！ ユウキさんはどうしたのよ！」

「来れば分かるわ！」

未だに何が起きているのか分からない霊夢の腕をとり、私達はフランの所へと跳んだ。

「これは、一体？」

「ひどいわね、これ」

跳んだ先で私たちが見たものは、ある意味予想していた光景だったが、それでも想像

を越えるものだった。

フランの部屋の壁はパチエの補強魔法がかかっていたにも関わらず穴だらけどころか、天井ごと崩落している所もあり、扉も原型をとどめていない。

フランが暴れたと言う事だろうが、ここまでヒドイのは何百年ぶりだろうか。

そして、部屋の内部からはやはりフランの気配が2つ感じられる。

「おお？　なんだ？　魔力を感じたと思ったたら霊夢じゃないか」

壊れたドアからひよこりと顔を出したのは、箒を持った白黒の魔法使い。確か霊夢と一緒にここに乗りこんできたはず。

「魔理沙、あんたここで何しているのよ。地下にあるっていう図書館に行くんじゃないの？」

「図書館にいたら爆発音が聞こえてな、ここに来たらあいつらが未熟な弾幕ごっこしてたもんで、ついな」

「あいつらつて……ユウキさん！」

部屋に入ると異様なまでの妖力を感じた。これはフランの妖力。ここまで昂ぶっていたなんて。

そのせいで部屋の中が、異界と化しかなり広がっていた。

「妹様があんなにはしゃぐなんて、私が来てから初めての事ね」

そこへパチエ、パチユリー・ノーレッジがやってきた。顔色が少し悪い。

「パチユリーまだ顔色悪いぞ？ お前大丈夫かよ」

「あなたが妹様目がけて跳び出したから、薬飲んで急いで追いかけてきたのよ、魔理沙。それよりも、あの外来人あんな能力あったのね」

パチエはそこでチラリと霊夢に眼を向けた。霊夢は状況が分かっていないようだったが、その表情にはユウキのあの状態に心当たりがあるようだ。

その時ユウキが視線だけこちらに向けた気がした。私達に気付いたのかしら。でも、何事もなかったかのようにフランに向き直った。

「……見てれば分かるわ。ユウキさんの能力、幻想支配」

幻想支配、それがユウキの持つ能力のようね。でも、さつき会った時は何の力も感じない普通の人間だったのに。

「【禁忌・レーヴァテイン】」

「えっ!? あれってフランお嬢様の!?!」

咲夜が驚くのも無理はない。ユウキがフランと同じスペルを宣言し、右腕を振うと炎の杖が現れた。

あれはまぎれもないフランのスペルカード。

「ユウキさんは元いた世界では、あの幻想支配で様々な能力を操って戦っていたそうよ。」

幻想郷に来てすぐの頃は妖怪の力はコピー出来なかったのに、もうここまで馴染んじやったのね」

「おいおい、霊夢。前にユウキの事話した時は、幻想支配の事なんて聞いていないぜ？」
「当たり前じゃない。言わなかったんだもの」

魔理沙は霊夢に何か抗議しているが、霊夢の視線はレーヴアティンを持ったユウキにしか向いていない。

私やパチエ達もただじっとユウキとフランを見守っている。

フランもユウキがレーヴアティンを使った事に驚いてはいたが、すぐに別のスペルカードを取り出した。

あれは、4人に分身するスペルね。そして、更にフランもレーヴアティンを使った。

「霊夢、あれいいの？」

「スペルカードの重ね掛けは問題ないわ。ただ一気に使用枚数増えるし、私はあまり使わないわね」

これで実質1対4になった。いかにレーヴアティンをコピーしても、4本相手に1本では厳しい。

「模造品は本物には勝てない。これは定石だけど、彼の場合模造品とは違うわね」

パチエに頷く、ユウキの幻想支配の見た目は模造だが、それは違う何かを感じる。

眼を瞑れば、ユウキとフランの区別がつかないほど、力だけではなく気配もフランだ。それに、幻想支配と言った。支配とはどういう意味なのだろう。模造するだけでは支配とは言えないけど。

「おい見ろよ。ユウキの奴、1対4なのに全然食らってないぞ？」

魔理沙の言う通り、ユウキは4人のフランが四方八方から放つ攻撃を全てかわしている。

弾幕を交わしたかと思えば、レーヴァテインの斬撃を同じくレーヴァテインで防いでいる。

「ユウキさんはフランお嬢様の力を使いこなしていますね。それも本人以上に」

「そうね。霊夢、ユウキは武器の扱いに長けているとは聞いてる？」

「元いた世界で幼い頃から色々訓練を受けていたと言っていたわ」

「私が手合わせした時に、刀剣の類や棒術、あらゆる武術を仕込まれたと聞きました。ユウキさんは、相当の修羅場を潜り抜けなければ身につかない体術の達人です」

美鈴にここまで言わせる人間は初めてね。なるほど、それならフランを圧倒しているのも分かる。

フランは、吸血鬼特有の身体能力や私並の力を持っているが、ただ使っているだけだ。もし私がユウキと戦うとしたら、こうはならない自信はある。

でも、フランは495年前からずっと地下に閉じこもっていたのだから無理もない。自分の力をただ本能で振り回しているだけ。

対するユウキは幼い頃からずっと訓練を受け、それを十二分に発揮できる戦場をいくつも戦ってきた。

使う力は同じ、けれどユウキにはフランにはない実戦経験と技術がある。

「あそこまでの戦闘技術レベルだと、能力なしだと咲夜でも厳しいかもしれないわね？」
「ええ、そうでしょうね、時間停止もコピーされるでしょうし。ですが、パチュリー様の場合は身体能力もユウキ様に劣っていますから、魔法を真似されると私以上に勝ち目がないかと」

「パチュリーは、私との弾幕ごっこだって、喘息起こしてボタンキューした程だし。あいつには勝てそうにないだろうな」

「むきゅっ!! い、言うじゃない咲夜、魔理沙」

後ろで漫才している3人はスルー。すると、霊夢が隣にやってきて少し小声で私に尋ねた。

「で、あの妹はどういう子なの？ なんだかともつても訳ありみたいだけど。それにユウキさんがここにいる理由も聞いていないわよ」

「……分かったわ、教えてあげる」

私はフランの過去と、ユウキがなぜここにいるのかを話した。

霊夢は最初こそ驚いていたが、段々とその顔は驚きより呆れに変わっていた。

「はあ……何よそれ、ユウキさんって思っていたよりバカなのかしら」

「それには同意ね。正直、初めて会った時は驚いたわよ。フランの誘いを受けるなんてどんな人間なのかとね」

ま、会ってみて分かったのはとんでもなく歪な人間と言う事。

自分より他者を優先させる自己満足に溢れた偽善者とも違う。

強いて言えば、他者への依存ではなく、干渉する事を糧に生きている異常者。そして、どこか死に場所を求めているとも言えた。

「どうやら、そろそろ決着がつくみたいよ、レミイ」

パチユリーに領き、2人の弾幕ごっこの決着を見守る。

フランが最後のスペルカードを使う。だが、ユウキはそれまでとは違い迎撃はせず、部屋を走りまわる事で回避に専念している。

そして、部屋の隅に追いやられたユウキが、弾幕の一角に出来た少しの隙間を潜り抜けたと同時にスペカの効果が切れ、フランのスペカを攻略したユウキの勝ちとなった。

「ほら、行つてあげないのレミイ？ 今のフランなら大丈夫よ？ 話したい事沢山あったんでしょ？」

「わ、分かっているわよ」

パチエが私の背を軽く押すけど、私は動けない。ユウキの前ではああ言ったが、私は怖かった。

フラン自身やフランの力が怖いのではなく、フランに対する自分が怖い。

たった一人の妹に対して、今更どう接すればいいのかが分からない。

それでも話したい事は沢山あった。だけど495年の間に、フランに会いに行くたびに私はフランに厳しく接してきた。

『お姉様、私お外で遊びたい』

『ダメよ。あなたはもつと自分の能力が危ないって事を自覚しなさい』

『お姉様のケチ！』

こんな会話はまだ可愛い方ね。時には狂気に落ちたフランがいきなり襲いかかってくる、私はフランを止める為に本気で相手をして、気が付いたらボロボロのフランを見下ろしていたりもした。

そんな事があつて、私は段々とフランに会う回数が減って行った。私が行く事でフランが情緒不安定になっていると思つたからだ。

それからメイド妖精や美鈴、咲夜と出会いフランの世話を命じていった。それでもフランに変わりはなかった。

不安定になる回数は減ったが、一度狂うと周りを破壊するのまで止まらないのは変わらない。

外に出たいと言った事は何度もあったが、誰かに会うのを怖がるのは昔から変わらず、美鈴や咲夜もかなり苦勞をした。

そんなフランが、初めて自分から誘った相手、外の世界から来た人間ユウキ。

彼に興味を持った私はフランに会わせてみる事にした。別に私の能力「運命を操る程度の能力」で何かが視えたわけではない。

ただ、今までずっと地下で独りぼっちだったフランが初めて興味を示し、誘った彼なら何かフランが変わるきっかけになるかもしれないと思ったからだ。

結果は……正直まだ分からない。確かにユウキと弾幕ごっこをしている時のフランは楽しそうだった。あんな楽しそうなフランは久々に見たと思う。

だから、今度は大丈夫、ちゃんとフランと話せると思い、2人の元へと足を踏み出そうとして……

「さつきも言ったけど、フランは一人ぼっちじゃない。気付いていないだけで、フランの側にはずっと……家族がいるじゃないか」

ユウキのその言葉に思わず体が強張り、次の瞬間には霊夢の後ろに隠れてしまった。

「ちよつ、なんで私の後ろに隠れたのよ？」

「……何となく？」

「はあ？」

自分でもなぜ隠れたのか分からない。パチエや咲夜や美鈴はこつちを見て笑っている。

「お、こつちやつて見ると見た目相応な子供だな」

魔理沙、後で覚えておきなさい。

その時フランがこちらに振り向いた。フランは私達が来た事に気付いていなかったように、心底驚いた表情をしていた。

ああいう表情もしばらく見た事がなかったわね。

「お姉、様？」

「……フラン」

「レミリア達はさつきからあそこで、フランの事見ていたんだぞ？」

やっぱりユウキは気付いていたのね。何か含みのある笑みを浮かべている。そう言え、私霊夢の後ろに隠れたままね。これはうかつだったわ。

「どうして、なんでみんながいるの？」

「それはフランが心配だからだろ」

「嘘！ きつと私がお兄ちゃんを壊さないか心配で来たのよ。私の事を心配しているわけないわ」

「っ！」

その言葉に心が痛むが、フランにそう言わせたのは間違いなく私だ。そうか、霊夢の後ろに隠れた理由が分かった。

ユウキが私を指さして家族と言った。私にそんな資格はないのに、だからとつさに隠れてしまったのね。

「レミリアお嬢様はフランお嬢様の事を心配して、ここへ飛んできたんです」

「嘘よ！ 咲夜はお姉様のメイドだから、庇うような事言つて！」

「嘘じゃないぞ、フラン。レミリアはお前の事をずっと心配していたんだぞ。妹のお前に何かあつてもすぐ来れるようにと、転送の魔法陣を部屋の外に仕掛けているくらいだからな」

それを聞き、私とパチエは驚いた。まさか、ユウキは気付いたと言うの？

「えっ？ 転送の魔法陣？」

「ああ、俺がフランの所に来た時もレミリアに送ってもらったからな。で、今さつきレミリア達が跳んできた場所も全く同じ。レミリアはフランの部屋にすぐ来れるようにと仕込んでいたんだ」

これには驚いた。確かに私は転送用の魔法陣を仕掛けていた。ユウキの言う通り、もしフランに何かあった時屋敷のどこにいてもすぐに来れるようにと仕掛けたものだ。幻想支配で気付いたのだろうか？

「それに俺は、フランに会う前にレミリアに頼まれたんだよ。妹をよろしくつてな。フラン、お前には家族がいるんだ。だから、独りなんかじゃない」

撫でるようにユウキが背に手をあてると、フランはフラフラとこちらに歩いてきた。

フランに向けたユウキの言葉は、なぜか私にも向けられている気がした。

「お姉様、本当なの？ 本当に私が心配で来てくれたの？」

フランが自分から向かってきているのに、肝心の私がただ黙って待っているのはダメよね。

「お嬢様」

「行つてあげて下さい」

咲夜と美鈴が優しく肩に手を当てて囁くように言った言葉が、私の足を一歩進ませた。

「フラン……」

何を言えればいいのか分からない。それでも、私はフランへと歩きだす。

フランは私に向けて、ゆっくりと手を伸ばしてきた。私はその手を掴もうとしたが、

フランの様子がおかしい。

「お姉様……いい、イヤ。私は、もう壊したくない……」

フランに怯えと恐怖が浮かんでいる。

狂気がまたフランを包みこもうとしているのか、またダメなのか……

咲夜達もフランの様子がおかしい事に気付いたが、パチエが制している。

「大丈夫、大丈夫よフラン。私は、ここにいろわ」

それでも私は動じずフランに手を伸ばした。もし、またフランが狂気に落ちても私がきつと止める。

「私は……ワタシは、誰も壊したくないのに……ダメ、逃げてお姉様……」

伸ばした手に「破壊の目」が現れた。アレはフランが能力を使う時に現れるもの、あれを握られたら私は恐らく破壊されるわね。

「馬鹿ね、逃げるわけじゃない……私はあなたの姉なのよ？」

そう、壊される？ だからなんだ。フランが、妹が必死に自分を抑えながらも私に手を差し伸べてくれている。

涙にくれたその目が、助けてと叫んでいる。なら、私がする事はただ一つ。差し出された手をしっかりと握る事。

「オネエ……さま」

フランは必死に左手で右手を抑え込もうとしている。私はその上からそつと手を置く。

右手に更に力が籠り、手の中の目を握りつぶそうとしている。後一秒もせずに目は壊れ、私も壊されるだろう。

でも、それでもいいと思った。ここまでフランを不安定にさせたのは私だ。

家族である私がフランの側にずっといれば、何があっても私がフランを守っていれば、こうはならなかった。

だから、これは当然の結末。

「レミリア様！ フラン様！」

「いけない、妹様！」

破壊の目が……破壊される。

咲夜や美鈴がこちらに向かってくるのが見えた。パチエも何か言っているようだ、ど、聞こえない。

霊夢と魔理沙も何が起きているのかは分かっているようだが、札と八卦炉を構えてフランを狙っているようだ。

「ダメ、ダメ！ 私は……お姉様を壊したくない！ 今日の前にお姉様は幻想なんかじゃないもの!!」

「そうだ、フラン。それは現実だ、幻想なんかじゃない！　そして、言ったはずだ！　お前の幻想は……俺が支配すると！」

ユウキの声と共に、フランの手がギュつと握られた。

つづく

第17話 「不器用な姉妹（後編）」

私の手がお姉様へと伸びる。

—ネエ？ 壊シチャオウヨ？

伸ばした手の中に、

いやだ。私は誰も壊したくない！

—ウソデシヨ？ 壊シタイカラアノ人ヲ呼ンダンデシヨ？

違うもん！ あのお兄ちゃんは……お兄ちゃんなら、私と……

—同ジダト思ツタ？ デモ拒絶サレタ。

それでも、だからこそお兄ちゃんは私に教えてくれた。私には……お姉様が、家族がいるって！ 今も私に手を伸ばしてくれてる！

—ソナノ幻想ダヨ。幻想ダカラ、ホラスグニ壊レル。結局私は1人ナンダヨ。1人ニナツチャウンダヨ。

私の右手にはお姉様の「破壊の目」がある。これを潰せばお姉様は壊れる。

「ダメ、ダメ！ 私……お姉様を壊したくない！ 今日の前にお姉様は幻想なん

かじゃないもの!!」

「そうだ、フラン。それは現実だ、幻想なんかじゃない!　そして、言つたはずだ!　お前の幻想は……俺が支配すると!」

破壊の目が潰される寸前、お姉様は微笑み、離れていた咲夜や美鈴達がが叫び声をあげたけど、それよりも鮮明に耳に入ったのはお兄ちゃんの優しい声。

その声と共に、私の右手が握られた。

……だけど、何かを潰した感触がない。

破壊の目を潰した感触がない。驚く私の手をお姉様が優しく包み込むように握つた。

「もう大丈夫、フラン。私はどこも壊れていない。あなたはなにも壊していないわ」

「お姉様、良かった、良かった、う、うわああ〜」

「ふふっ、泣き虫なのは変わらないわね」

お姉様に抱きつき、思いつきり泣きじゃくってしまった。

それでもお姉様はそっと私を抱きしめて、大丈夫と耳元で囁いてくれた。

久々の、何百年ぶりか忘れちゃったけど、お姉様は暖かい、この暖かさは覚えている。ずっと地下で引き籠って、みんなを拒絶していたのに、それでもお姉様は私を受け入れてくれたのがすごく嬉しい。

「はあ……っ、良かったな、フラン」

「グスツ、お兄ちゃん……ありがとう、お兄ちゃんがしてくれましたんでしよう?」

何をしたかは分からないけど、お兄ちゃんが何かしてくれたから私はお姉様を壊さずに済んだのは分かった。

「俺の奥の手だよ。相手の能力をコピーするだけじゃなく、支配して封じる。だから幻想支配。これ結構体力とか消耗しちゃうし。相手の能力を封じている間こっちの動きに制限かかるから。使い道間違えると危ないんだよな」

なるほど、確かに今の私は能力だけじゃなく、弾幕も打つ事が出来ない。妖力そのものを封じられているようね。

でも、体に特に異常はなく、力を封じられているのだって言われるまで気付かない程。

「人生初の破壊相手が実の姉、なんてどっかの三文芝居のような悲劇は御免だからな」

「……えっ?」

お兄ちゃんのその言葉に違和感を覚えた。人生初の破壊の相手? まるでそれまで

私が何も破壊してないような言い方に、お姉様も驚いていた。

「お兄ちゃん? 何を、言っているの?」

「フラン、お前は……その能力で物しか壊した事がないだろ。人も、妖怪も、動物も……

生物を壊した事は一度もない!」

「う、そ……?」「!?!」

私はこの能力で生き物を壊した事がない。

嘘だ。私はこれで今までに何度も……あれ？　今まで何を壊したっけ、ぬいぐるみ？

岩？　壁？　部屋の扉？

お姉様や咲夜達もお兄ちゃん言葉に固まっている。巫女と魔理沙はわけが分からないうつて顔だけだ。

「その様子だと、咲夜達も知っていたみたいだな」

「お嬢様、まさかユウキ様にその事は……」

「……それを話す前に霊夢が来ちゃったのよ」

お姉様はバツが悪そうに顔を背ける。その仕草が可愛いと思ってしまった。

「ありとあらゆるものを破壊する能力、この能力のせいで昔から精神が不安定。たまに気が狂い暴走する事がある。俺が聞いた説明だが、咲夜達もそんな説明だろ？　事実これ以上ない確な説明だと思う。だけどな、不要な情報と思っただかそれとも別の意図があったから伏せていたのかは知らないけど。フランはこの能力で生物を壊した事がないのも、事実」

そうだ。思い出した。私がなぜ地下にいたのかを。お姉様に閉じ込められたんじゃない。自分で閉じこもったんだ。

それはなぜか、私がこの能力でお姉様を、誰かを壊すのが怖かったから。

「でも、どうしてお兄ちゃんはそれに気付いたの？」

「さつきフランの能力を自分で使ってみて分かった。あの力を生物相手に使うの心を削るってな。あれで生物を、命を破壊してマトモでいられるわけがない。気が狂うどころの話じゃない。むしろフランは、生物を破壊しなかったからこそ情緒不安定程度で収まったんだ」

「あつ、ああ……」

何だろう、目頭が熱くなってきた。こんな事初めて。

「それにフランの目は人を殺した眼をしていない。分かるんだよ、俺には。元の世界で散々人殺しを見てきたからな。大義だ正義だと、自分以外の存在を悪と認定し殺す偽善者を。自分の目的の為に他者を消耗品扱いして浪費するクズを。他にも沢山いたさ、どんな気高い主義や信念を持っていたても、人を殺してしまった奴も。フランの目はそんな奴らと違った。だから気付いたんだよ。ま、その偽善者のクズってのは俺もだけだな。だからこそ気付けたって所もある」

自嘲気味に笑うお兄ちゃんの表情はここからは見えない。けれども、どこか辛そうに見えた。

「だからさ、レミリア。自分がいる事で不安定になったフランが、誰かを壊すのを恐れるなよ。何かあった時の為にすぐにフランの元に来れるような転送魔法を準備したり、吸

血鬼の力を幻想郷中に見せつける事でフランに不用意に近寄らせない為に紅霧を出す事もない。ただ、大事に思っているのなら、側にいてあげるだけでいいんだ」

お姉様は頬を染めて半ば睨むようにお兄ちゃんを見つめていたけど、やがて柔らかいを浮かべて一言、そうね。とだけ呟いた。

「フランも、自分は1人だつて思つて引き籠らないで少しづつでいい。外へ出てみるといい。大丈夫、フランは優しいから誰も壊したりしないし。もし、そうなったら、止めてくれる家族がフランには沢山いるだろ？」

「うんっ、うん！」

涙が止まらなかつた。私を理解してくれる人がいた。もう昔に諦めていたのに、私はこの能力があるからずっと1人でいなきやいけないと、誰にも関われないと諦めていたのに。

そんな私に気付いて、理解して、道を教えてくれる人がお姉様以外にもいた。

その事がたまらなく嬉しかった。

「……あ、悪い。少し……寝る。流石に、力、使い……すぎ、た」

「お兄ちゃん!」「ユウキ!」「ユウキ様!」「ユウキさん!」

力なく呟くお兄ちゃんの瞳から銀色の光が消えた途端、口から血を流しながら倒れてしまった。

私やお姉様、靈夢達の声が重なり、慌てて駆け寄る。

さつきまでお兄ちゃんから血の匂いがしなかったのに、今は体中から血の匂いがする。

それもそのはず、お兄ちゃんの全身が赤く染まって行き、特に左手は真っ赤だった。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！」

「ユウキさん傷だらけじゃない！ でも、さつきまであんなに普通に動いていたのになんで!？」

「落ち着きなさい、靈夢。さつきまでこの人は妹様の妖力を使っていた。なら、それで全身を覆って自己回復しようとしていたのね。でも、この短時間じゃ治らない程の傷を負っていたから、力が解除された途端に傷が開いちやっただのね」

「診断はいいから早く治しなさいパチエ！ 絶対に死なせたらダメよ！」

お姉様がここまで焦って怒鳴る姿は珍しかったけど、私はそれどころじゃなかった。これは間違いなく最初に戦った時に出来た傷。

なら、私のせいで。私のせいでお兄ちゃんが壊れちゃったの？

「大丈夫よ、妹様。左手が複雑骨折しているけど、見た目より傷自体は浅いわ。今すぐに傷口を塞げば……魔理沙、あなたも手伝いなさい！ 治癒魔法も出来ないわけじゃないでしょ？」

「おう、任せておけ！ 全く、だから私に任せて安静にしてると言ったのに。フラン、ちよつとユウキから離れててくれるか？」

「パチユリー様、包帯など必要なもの一式は用意しました」

時間を止めて咲夜が持つてきた薬や包帯を用意しながら、魔理沙とパチユリーがお兄ちゃんに治癒魔法をかけ始めた。それでも、私は震えが止まらない。もし、このままお兄ちゃんが目を覚まさなかつたら……

「フラン、あなたは誰も壊さない。ユウキはそう断言したのよ。当の本人がそれを覆すはずないでしょ？」

「そうですよ、フラン様。ユウキさんとパチユリー様達を信じましょう」

頭をなでられながらお姉様と美鈴に言われても、私の不安は消えなかつた。

ユウキさんの治療を終えて、客室のベッドで寝かせてから少し時間が過ぎた。

魔理沙はユウキさんに色々聞きたい事があるけど、それはまたにする。と言って自分の家へと戻って行つた。

パチユリーという魔法使いも、魔法を使い過ぎたと自分の部屋で休んでいる。

今紅魔館のリビングには、私とレミリアと咲夜、そして文だけがいる。

フランは眠っているユウキさんから離れたくない、と言って側にずっと付いている。文は、門番の仕事に戻った美鈴と代わるように紅魔館に入ってきた。レミリアがもう通していいと言ったからだ。

「いやあく、すっかり門番さんに不覚を取ってしまった。少々天狗のプライドが折れそうです」

「少しくらい鼻が折れた方が、マシになるんじゃない?」

「霊夢さん、それは偏見すぎます! あんなに鼻の長い天狗はいません! あれは要職を示すお面です!」

そんな事はどうでもいい。

「鴉天狗、あなたは確かここに来るまでユウキとずっと一緒だったのよね?」

「ええ、まあ。護衛と道案内を代償に同行取材を……どっちもいらないうでしたけど、そこは無理やり?」

「それで、ずっとユウキさんと行動を共にして、あなたの感想は?」

真剣な表情でレミリアと私が問いかけるのを見て、文も自然といつもの取材顔ではなく天狗としての顔になる。

「お二人がそこまで気にする理由、それを私が明かす理由、何かありますか? 前者に関しては予想できますけど」

「あらあら、その話なら私も気になりますね。1名追加でお願いしますわ」

ここにはいないはずの声に顔をしかめる。レミリアと文は何か予想していたように、少しだけ溜息をついていて、咲夜はお茶の用意をしますと出て行った。

スキマのような空間が現れ、その中から八雲紫が現れた。

「出たわね、スキマ妖怪」

「随分と嫌われているようですけど、私は今回あなた達に御礼を述べに来たんですよ？」

不機嫌そうに敵意すら籠った視線を向けるレミリアに対して、紫は上機嫌で友好的な笑みを浮かべている。

「御礼？ 幻想郷中に異変を起こした私達を断罪しに来たのかと思つたのに」

「それはそこにいる霊夢の役目。私はスペルカードルールが定まってから初の異変を起こし、見事に退治役になってくださった紅魔館の当主にお礼を申し上げにきたのですわ」

「つつくづく、人のプライドを削り取る言い回しするわね、スキマ妖怪」

レミリアのこめかみがひくひくとしているが、紫は構わず話を進めて行く。

「それと、貴方の妹であるフランドールの件も、無事に解決したお祝いも申し上げにきました。もし、あの情緒不安定のまま何かのはずみで紅魔館から飛び出したら……私が消す、予定でしたもの」

「っ！ 貴様!!」

レミリアは怒りの表情を浮かべ、今にも紫に襲いかかりそうだ。でも、その脇で何食わぬ咲夜が文に紅茶を出している辺り、このメイド長は色々とデキるわね。さり気なく紫の死角に入って私に紅茶を注いでいるし」

「冗談ですわ、冗談。私が自らそんな手間をかけるわけないじゃないですか」

「幻想郷に害をなすものなら、あんた自ら手を下す事もあるでしょ？ で、いい加減ユウキさんに関して何か分かった事は？」

実は、ユウキさんが異世界から来た事など、そこらへんの事情はレミリア達に話してある。

フランや美鈴はかなり驚き、悲しそうな顔をしていた。レミリアと咲夜、それにパチュリーも何かしら予想はしていたようで、それでも辛そうな表情を浮かべていた。

出会ってからまだ間がないだろうに、ユウキさんはどうやら私以上に紅魔館の彼女たちと親しくなったようだ。

どこか気に入くない。

「そうそう、そうでした。可愛らしい吸血鬼ちゃん遊ぶのは楽しいですけど、本題に入りましょうか。ブン屋さん、ここまでの道中、ユウキさんと一緒にいて、どうでしたか？」

それは幻想支配に関しても、ユウキさん自身に関しても、と言う意味が込められている。

「……………ここで黙っていても後で吐かされそうですね」

深く溜息を吐きながら文は話し始めた。ルーミアやチルノに対して、弾幕ごっこではなく、あくまで話し合いと餌付けで突破した事も。

餌付けの話で、なぜそうなった？ と疑問に思ったが、あの腹ペコ妖怪ならありえそうな話。

そして、話を聞けば聞くほど私の中で違和感が芽生え、それはあつという間に膨れ上がった。

それは、紫やレミア達も同じようで、困惑した表情を浮かべ始めた。

「……………以上は、私を知る限りのユウキさんの道中ですが……………皆さんも私と同じ事を考えたいですね」

「ええ……………ん？ 誰か客が来たみたいね」

文の言葉に頷いたレミアだったが、ふと窓の外正確には門の方へと視線を向けた。

どうやら誰か来たようね。それも侵入者など物騒な相手ではなさそう。

その時、パタパタと廊下から足音が聞こえ、メイド妖精が入ってきた。

「あなた！ ちゃんとノックをしなさい！」

「ご、ごめんなさいメイド長！ あ、それより、レミリアお嬢様！ 藤原妹紅と言う見慣れない方が、ここに来た外来人に会わせてほしいとやってきていますが、いかがなさいますか？」

藤原妹紅？ 確か、慧音の親友で竹林の案内人をしている不老不死の蓬莱人。

そんな彼女がユウキさんに何の用……って、そんなの慧音から頼まれて様子を見に来たくらいしか思い浮かばないわね。

「……通して良いわ」

「はいー」

レミリアは紫の方をちらりと見て、それからメイド妖精に指示をだした。

どうやら妹紅も含めて話を進めようとしているみたい。紫もそれに賛成している。

ユウキさんの事を知る人が増える事が、はたしてユウキさんの為になるのか、と言う自分でも分からない疑問が頭に浮かんだ。

つづく

第18話 「異変の後」

何か身体に乗ってかっている感覚に眼が覚める。

「……は……っ！」

ゆっくりと体を起こそうとするが、軽い頭痛に再度枕に頭を鎮めた。

どうやら紅魔館のベッドの上らしい。服も寝間着に着換えさせられていた。

未だ包帯が巻かれて思うように動かない左手を見つつ、気絶する前に何があったかか
思いだす。

「そうか、フランの能力を封じて俺はそのまま……ふう、我ながららしくない事をしま
くつたな。それにあんなセリフまで吐いて、数多のジジイ辺りがあの場にいたら笑い死
にするだろうな。色々な意味でありえないが」

そう、らしくない。幻想郷に来てからの俺はらしくない事ばかりだ。それも自覚する
のは行動してから。

こつちに来てから調子が狂いっぱなし。いや、それはここに来る前から……アレ？
「なんだ？ 幻想郷に来るまでの記憶が……曖昧？」

正確には第三次大戦が終わって、当麻と学園都市に戻ってからの記憶に霞がかかった

かのようにはつきりしない。

幻想郷に来た時も確か、何が起きたのか思い出そうとした。その時女の子、梨奈が妖怪に襲われていて考えるのは後回しにしたはず。

それから色々あって、寺子屋にいた2日間も学園都市にいた頃の事を考えていたけど、幻想郷にくる直前の事は……

「っ!? 頭が、いてえ……久々に能力封じを使ったせいか」

幻想支配の奥手、能力封じ。コピー出来た相手の能力を使用不能に出来る。

ただし、制限時間がありその時間は俺自身にも分かっていない。

それに相手にもよるが力を封じている間は、俺もコピーした能力を使う事が出来ずともに動けなくなる事もある。

「例え相手がレベル5だろうと視れば視るほど能力をコピーすればするほど、俺の体が適応してコピーした能力の使用時間や封じていられる時間が伸び、封じている間でも自由に動けるようになる……あのババアはそう言ってたな」

レベル2、3程度の相手なら初めて視た能力でも、数秒使用不能にしてその間に接近し無力化出来た。

美琴はレベル5だが、何度も幻想支配を使って体が慣れたのか、あまり動きに制限がわからなくなった。

当麻に電撃お見舞いしようとした時に、能力を封じて後ろから思いっきりどついた事もあったっけ。

「なら、幻想郷の人間や妖怪、神ですらその力に慣れちゃったなら。封じる事も出来るようになる……かも」

自分で言っていて少し怖くなってくる。だけど、あくまで個人相手には有効なだけ。能力者集団相手には1人1人封じていたら、動きが鈍りこつちがすぐにやられてしまう。

魔術師や聖人や神の右席、天使に対しても基本的には同じ。最初は、魔術師はともかく聖人や天使の力は全く幻想支配使えなかつたけどな。

聖人は2度目にアックアを相手にした時神裂の力を少しだけ使い、天使相手ではベツレヘムの星でこれも数秒だけ。

それだけ、リスクのある切り札。俺が相手の能力を封じる間に、別の人がトドメをさすのが理想的。

そして、能力封じは体力を物凄く消耗する。だから、フラン相手でも使えなかつた。「つて、フラン！ あれからどうなったんだ？ ん？ 外がうつつすらと明るいな」

カーテンの隙間からうつつすらと陽の光が差し込んできている。

手を伸ばして開けると、まさに日の出と言う時刻になっていた。景色がよく視えているので紅い霧はもうないようだ。霊夢がレミリアを倒して、解決したと言う事だろう

な。

頭痛も収まってきたので起きようとしたが、今度は足が重い。何かに乗っている感覚だ。

そう言えば、眼が覚めた時もそういう感覚だったはず。

で、視線を窓の外からベッドに戻してみると、そこにいたのは。

「……フラン？」

ベッドの上には、フランが俺の足に覆いかぶさるように寝ていた。目には涙の跡が見える。

「なんでフランがここに？」

なぜフランがいるのかさっぱり分からなかったが、窓から日の光が差し込んできているので吸血鬼の彼女に当たれば害になるはず。

そう思いカーテンに手を伸ばすと、別の手が伸びてきてカーテンを閉めた。

「おはようございます、ユウキ様。お身体はいかがですか？」

メイド長の咲夜が微笑みながらそこに立っていた。

「おはよう咲夜。左手以外は特になんともない」

「それは良かったです。それとフランお嬢様は、ユウキ様が倒れてからずっと付き添っていましたよ」

「えっ? なんぞ?」

心底分からなかった。なんでフランが俺なんかにつき添っているのか。

咲夜は眉をひそめたが、すぐに真顔に戻った。

「なんで? と申されましても。フランお嬢様は、私の友達を助けてとレミリアお嬢様やパチユリー様に泣きついて大変だったんですよ? レミリアお嬢様や美鈴、それに霊夢まで結構動揺していましたし……も、もちろん私もですよ? ユウキ様は全身血だらけで左腕もグシャグシャだったんですから」

なぜか慌てたように言葉を付けたした咲夜を可愛いと思ったが、口には出さなかった。

それにしても、左腕は複雑骨折だったのか。ここまでの重傷はトリックやアックアを相手にした時以来かも。

「いらない心配をかけたみたいだな、ごめん咲夜。で、ユウキ様って何だよ。様はいらない。呼び捨てでいい」

「いえいえ、ユウキ様は紅魔館のお客様で恩人です。呼び捨てには出来ませんわ」「恩人? 俺はそんなんじゃない?」「お兄ちゃん!」……ガフツ!!」

俺の声は、目を覚ましたフランの大声とタツクルによつて遮られた。

胸元に文字通り飛びこんできたフランの一撃、もろに急所に入った……

「フランお嬢様。ユウキ様は人が人ですので、あまりそういう事をされると……」

流石に咲夜も苦笑いを浮かべている。フランはハツとすると、俺の顔を見ながらおらずとベッドから降りた。

「ご、ごめんねお兄ちゃん」

「いや、気にするな。これくらい慣れ……てるのは別の奴だな。俺は慣れてないか」

慣れてるのは当麻とかツンツン頭とかウニヘッドとか鈍感ハーレムキングだな、うん。

「それではユウキ様、こちらにお着替えを置いておきます。外にいますので着替えましたら声をかけてください。レミリアお嬢様がお待ちの食堂にご案内します」

「早く着替えてねー」

咲夜とフランが部屋を出て1人になり、ベッドに置かれた俺の服を見る。

確か、ボロボロになっていたはずの防寒服もズボンも元通りになっていた。

この短時間でここまで綺麗に直っているのは、能力か魔術か何かしたのかもしれない。

「さて、用も済んだし……行くか」

着替えを済ませ窓の外を見ると、紅魔館の門がすぐそこにある。

美鈴はいないようだが、門番がいなくていいのだろうか？

これなら、ここから出て来ても気付かれない。と、窓を開けようとしたら視線を感じた。誰かに視られている感覚。

恐らくレミリアが何かしらの方法で俺を探知しているのだろう。

「男の着替えに興味があるのか？」

どこへでもなくそう呟くと気配は消えた。今のは単に着替えを覗いていたわけじゃない。

俺がここから黙っていないのは不可能だぞ。そう言っているように思えた。

面倒だが、左手が使えない状況で力づくでここから出るのは厳しい。ならば、大人しくしていた方がマシと判断。

「……ちつ、こういうのが嫌だから寺子屋抜けだしたつてのに」

結局は変わらず、か。

そして、咲夜とフランと一緒に食堂に案内され、少し早い朝食となったわけだが……
「で、これはどういう状況だ？」

「どういうって、両手に華で男冥利に尽きるって所じゃないですか？ 大も小もだなんて、ユウキさんったら幸せ者♪ ほら、あーんして下さい」

右隣に座って、フォークで刺したステーキを俺に向けて来る文に、ひとまずチョップ

をかます。

「ん？ お兄ちゃん、肉より魚がいいのかな？ だったらこれ、どーぞ♪」

そして、左隣に座ってスプーンですくった魚のスープを俺に向けるフラン。流石にこれは素直に頂いた。

向かいの席から思いつきりプレツシャヤをかけられたからな。

「外の世界では良く言うでしょ？ FISH or MEAT？ ってね」

こんな状況を面白そうに眺めているのは、向かいの席に座っているレミリア。

てかそれ使いどころが間違っている！ 海外旅行の経験がない俺には馴染みのない言葉だけ。

「BIG or SMALL？ でも良さそうね。で、霊夢はそこまで不機嫌になるなら、なぜじゃんけんに参加しなかったのかしら？」

レミリアの隣に興味深そうにこつちを見ている、パチュリー・ノーレッジと名乗ったネグリジエの少女。

「別に、私は不機嫌になってないわよ。ただの寝不足、早く神社に帰ってゆつくり寝たいの」

パチュリー・ノーレッジの向かい側、俺の2つ右隣の席には霊夢。こうもあからさまに不機嫌なのはなんでだ？

2つ左隣の席には、不機嫌というか悔しそうな顔でチラチラこちらを窺っている美鈴。

メイドである咲夜は食卓には付かずレミリアの後ろに控えているが、美鈴と同じようにこつちをチラ見してくる。

どうやら、俺を挟んで座る席に誰が座るかで文、咲夜、美鈴、フラン、レミリアでじゃんけんしたようだ。

左手が満足に使えない俺の食事の世話係、と言う事らしいが……両利きだから別に困らないんだけどな。

で、勝ったのが文とフラン。レミリアは負けたが自然と俺の向かいの席に座っているので満足そう。当主だからだろう。

食卓に付かないのに、なんで咲夜はじゃんけんに参加したんだ？

まあ、ここまでならまだいい、ある程度予想していたから。

問題は……

「なんでここに紫がいる？」

「あら、外来人のあなたが異変に巻き込まれたと聞き、様子を見に来たらここの当主様に食事に誘われたので一緒にいるだけですわ」

八雲紫がなぜか、紅魔館の食卓に座っている。それも当主であるレミリアの横。

レミリアは横目で紫を睨んでいる。きつと招かれざる客だったんだらうな。それでも食事を出しているのは、紅魔館当主としての誇りとかそんならう。

「……私は、慧音からあなたの様子を見てきて欲しいと頼まれて来たら、あなたが寝ていると聞いて起きるまで待っていて良い。時間も時間だから泊って行き朝食も用意しよう。と当主様からちゃんと言われてここにいるからね」

紫に対しての皮肉交じりに、モンペを履いた白い髪に赤いリボンを付けた少女、藤原妹紅はポツリと呟いた。

彼女は慧音の親友で、寺子屋にいた間には聞いていたが、実際会うのは初めてだ。この食堂に入ってきて彼女と視線があつた時は、自己紹介と共に思いつきり睨まれた。

なぜか、と思つたが、慧音に心配かけたからだ。と言われ納得。

それからは無愛想と言うか、感情を表に出さず静かに食卓に付いている。

慧音にもこの妹紅にも後でちゃんと謝らないとけないな。

「こんなに賑やかな食事は久々ね、レミィ。あなた楽しそうよ」

「それは勿論よ、パチエ。何せこうも着になる面白い状況はないからね」

面白い状況。文とフランから交互にパンや飲み物を勧められ、それを霊夢や咲夜が睨み、美鈴はじーつと羨ましそうに見つめ、レミリアやパチエ、紫は暖かい笑みを浮かべ

それを見守る。

「思いつきり食べにくい、空氣的に」

「だからーこうやって私が食べさせてあげると言っているじゃないですか？ そ・れ・と・も、口移しが良かつ……ってフォーク!? フォークで刺そうとしないでください！

冗談です、冗談！」

「おひいひゃん、ふおうぞ（お兄ちゃん、どうぞ♪）」

「何してるのフラン!? ちよつとバ鴉！ 幼くてモラルとか常識とかが不足してる私の妹が、あんたの真似しはじめたじゃないの!？」

「幼くてモラルとかつて……あなたがそれを言うの、レミイ？」

「フランお嬢様。口に食べ物詰めて話すのはマナー違反です。ユウキ様のお世話は私が致しますので、ご安心を」

「さりげなく何言っているんですか!? それなら私がします！ 咲夜さん、じゃんけんで真つ先に負けたじゃないですか！」

「ああもう、ユウキさん！ 1人で食べれるならとつとと食べちゃって！ こいつらうるさくて食事にならないわ！」

「あらあら、嫉妬は良くないわよ、霊夢……はい、嘘です。冗談です。言い過ぎましたから、無言で夢想封印の構えしないでちょうだい」

「ああもう、不幸だー!!」

「ここまで賑やかで騒がしい食事は久々だけど、俺を巻き込むな!

「……いや、あなたが中心なんだけどね? 馬鹿ばつかだな、ここ」

我関せずと黙々と食事をする妹紅が唯一の救いだな、はあく。

慌ただししい朝食が終わり、ラウンジに場所を移してのティータイムとなった。

美鈴とパチュリーと文はいない。それぞれやる事があると行ってしまった。

妹紅と霊夢と紫がなぜまだいるのかは分からないが、俺は今すぐにでも出て行きたかった。

けど、どこに行くかと無言のプレッシャーに押され、出て行く機会を失い場に流れている。

咲夜が入れてくれた紅茶を一飲みした後、紫が静かに口を開いた。

「回りくどい言い方ではもうあなたは聞かないと分かったので、単刀直入に言います。ユウキさん、前にも言いましたがあなたは博麗神社を拠点として暮らして下さい。これはあの時と違い、8割命令2割お願いが混ざったものと思っして下さい」

「はあく!?」

俺と霊夢の声がハモった。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ紫！ どうしてそういう結論になるわけ？ さつき話してたのはユウキさんを保護観察下に置くって話でしょ！」

「あなたにしては察しが悪いわね、霊夢。だからこそ博麗神社でああなたの側にいるのが一番なのですよ？」

「幻想支配はその能力以上に、不安定さゆえに妖怪や神すら脅かすものになりうる。だからこそ、早く幻想郷の力に馴染ませて、安定化させてユウキ自身にうかつに使用させないよう律する。確かに霊夢がうってつけ。と言いたいよね？」

なるほど、紫は俺の道中の行動を見て、幻想支配に対する警戒の仕方を変えたか。

確かにフランと対峙した時みたいに中途半端に能力をコピーさせたり、封じられるのがもし他の妖怪達にまでされれば、パワーバランスが崩れる恐れがある。

幻想支配は使えば使うほど能力に慣れて安定した使用法が出来る。

学園都市の能力者の根元にあるのは、科学が引き起こす異能の力。それに幻想支配が馴染めば自由に扱える。

事実、幻想支配が使えるようになった頃はレベル2相手でも満足に使えず、と思えばレベル3の能力を暴走させた事もあった。

だけど、色々な超能力を使って行くうちに幻想支配が科学の異能に最適化され、初めて会ったレベル5は例え第一位の一方通行相手でも問題なく使えた。

ま、解析不能な軍覇の力はどうにもできなかったし、ある意味一方通行以上の無限の応用力な未元物質は、満足以に制御しきれなかったりもしたけどな。

幻想支配の法則性については、科学側トップの学園都市や魔術側トップのイギリス清教、神の右席達ですら掴み切れていなかった。

紫の危惧は正しい……が、博麗神社で霊夢と同棲つてなるのは何か違う気がするけど、幻想郷の新参者で居候の身としては明確な理由がない限り、あまり反論は出来ないな。

「だからあなたの近くが一番でしょ。わざわざ神社にしなくても」

「あらあら？　今まで外来人を寝泊りさせる事になんの抵抗もなかったのに、なぜ彼だけ特別扱いなのかしら？」

「うぐつ、そ、それは……ユウキさんはずっと幻想郷にいるわけだし。1つの場所に縛り付けるのは……」

「いえいえ、博麗神社に引き籠れとは言いません。寺子屋でアルバイトしたり、紅魔館や別の場所で数日お泊りとかは問題ないですよ。ただ、生活の拠点……あなたの家を博麗神社にしていただければ」

……やっぱ物凄く文句を言いたい。幻想支配が関係ない理由が混ざっている気がする。

と云うかさつきから俺全く意見言っていないのに話が進んでいる!

「で、物凄く色々言いたそうな顔してるけど、あなたはどなの? あ、慧音からの伝言言っておくわね。たまにでもいい、寺子屋に来てくれると私も助かるし、子供達も喜ぶだろう。ちなみに、慧音の異常な世話焼きは今に始まった事じゃないから、気にする事ないわよ?」

私も最初はうつとおしく感じた事もあつたし。と、何やら妹紅に経験談を語られますます言葉が出なくなつた。

「それなら、まずは紅魔館がユウキの世話をするわ。左手はしばらく使えないし、せめてそれが治るまで看病するわ。紅魔館の主としての責任で、義務よ。問題ないでしょスキマ妖怪?」

「流石お姉様。うんうん、そうしようしようよ、お兄ちゃん!」

レミリアの提案に、フランはもろ手をあげて賛成し喜んでいる。

「そうですわね。ユウキさんの意思をそろそろ聞かせて頂きたい所ですけど、いかがかしら?」

その場にいる全員の視線が集中する。

「俺は誰の世話になる気も、これ以上借りを作る気もない。霊夢や慧音、レミリアへの借りは何らかの形で必ず返す……と、言つたら?」

「別に？ どうもしないですわ？ 今は」

紫は扇で口元を隠しているけど、絶対に嫌な笑み浮かべているな。

「私は貸しにした覚えはないわよ。この前助けたり、幻想郷の説明したのだって、博麗の巫女としての責任を果たしただけよ」

「さつきも言ったけれど、あなたの傷は私の妹が原因。ならばその手当も世話も紅魔館当主として当たり前よ？ 貸しだなんて思われたくないわ。むしろ私個人はあなたに借りがあるのよ」

「お兄ちゃん、私のせいで怪我させちゃったんだもん……私達といるの嫌？」

霊夢はそっけなく、レミリアはあくまで当主としての威厳を出しているみたいだが、どちらかと言えば姉としてだな。

フランについては……ロリコンホイホイだな、この上目遣いは。

「慧音も多分、いや絶対こいつらと同じ事言うと思うわよ。それにしても、話に聞いてた以上に強情ねあなた。どうしてそこまで意地張るの？」

分からないわね。と妹紅が言っているが分からないのは俺の方だ。

「なあ。どうして、そこまで俺にしてくれるんだ？ ここにきて数日で、みんなとも口々に話していない俺なんか」

「その言葉はそっくりそのまま返すわ。大体、あなたが先に私達にしてくれた事をその

まま私達がしているだけよ」

レミリアが言うのと、フランも咲夜も頷き、霊夢も同意見と言う顔だ。

「俺が……した事。俺はただ、自分がそうしたいと思つた事を……学園都市でもしていた事を、していた、だけ」

そこで言葉に詰まってしまった。俺がしていた事は元いた世界でもしていた事……なのに、なぜこうも結末が違うんだろう。

「私もお兄ちゃんも独りぼっちで同じ。昨日そう言つたら、自分は違うつて言つたよね？ 私独りぼっちじゃないから、自分とは違うつて意味だつたよね。でもそれつて……お兄ちゃんは独りぼっち、なんだよね」

そうだ。フランは1人じゃない。レミリア達家族がいる。だから、本当に1人なのは俺の方。

「でも、それは違うよ。やっぱりお兄ちゃんも私も一緒だよ。だって、お兄ちゃんだつて1人じゃないんだもん。フランと一緒にそれに気付いていないだけ。だから、フランと一緒に！」

俺は1人じゃない？ 確かに元いた世界で俺は1人、だつた。けど、今は違う。霊夢も口では無関心と言いつつ、フランと対峙していた俺を心配してくれた。

美鈴も俺の為に実力を試してきた。咲夜やレミリアも慧音も、みんな俺を見ている。

それが、嬉しい。それがとても苦痛に思えたが、気付きたくなかったけど、気付いてしまった。

気付かなければ良かった……と、あの時は思ったけど、気付いて良かったと今回は心から思う。

「分かったよ。みんな、これから……よろしく頼む」

それに対してレミリア達、霊夢や妹紅も口元に笑みを浮かべてこう返してきた。

「「「ようこそ、幻想郷へ！」」」
つづく

過去編Ⅰ

第19話 「表と裏」

7月に入り、校内では徐々に近付く夏休みの話がちらほら聞こえ出した朝の事。

「おはよう、遅い！」

それが教室に入ろうとすると、巨乳委員長こと吹寄制理が飛び出してきた。

「おはよう、制理。んで、遅いつてまだベル鳴つてないだろ？」

「……あれ、どうにかして」

心底ウンザリした顔で制理が指さした方を見ると、教室の一角が騒がしい。

「だから、ウサミミ+バニーはもう古臭いんだつて。ネコミミ+ナーズの癒し効果を見よー！」

「何をカミヤん！ ならこつちは犬耳+巫女で勝負や！」

「2人共わかつてないぜい。ウサミミメイドにネコミミメイド、メイドがあるからこそ
の獣耳だにやー」

「それただ義妹に着けたいだろ！」

上条当麻、青髪ピアス、土御門元春の3バカ、デルタフォースが何やら無駄に熱く議

論を繰り広げていた。

関わりたくない話題を振りまいているが、クラスの男子はともかく女子ですらドン引きせず、むしろまた始まったか。という顔をしている。

「……今回はまたどうしてああなった？」

正直、関わりたくなかった。が、これをスルーすると俺にまで飛び火するのは目に見えている。

最近俺を含めて、バカルテット。などと影で言われ始めているくらいだ。

「最初は、料理の話をしていたわね」

「なるほど」

「で、心霊特集の話になって」

「ん？」

「コスプレと獣耳の関係についての話になったわ」

「……日本語で言ってくれ」

話に繋がりがなさすぎる。どこをどうやったら料理の話から心霊特集に繋がるんだ？

「わ、私に言うなあ！ 全部が全部耳に入ったわけじゃないんだし。とにかく……」

「「吹寄、この獣耳つけてみてくれー！」」

何を血迷ったか、思い思いの付け耳を手にしたデルタフォースが吹寄に飛び掛かった。

普通なら逃げるなり、悲鳴あげるなり固まるなりしそうだが、この委員長は即座に反応。

「ふんっ！」

「ごわっ!!」

「めぎっ!!」

「がっ!!」

両手を使った正拳と頭突き、という見事なコンボで3バカを撃沈した。

「俺に頼まずに最初からこうしとけよ……」

「……次からはそうするわ」

と、そこへ【歩く学園都市七不思議】【生きる都市伝説】とも言われている。か、どうかは定かではない身長135センチの女教師月詠小萌がやってきた。

「はいはい、皆さんおはようございます。今日も元気、に……つてなんで上条ちゃん達が洗濯物みたいに干されてるんですかー!？」

当麻達3人が窓から半身を出して伸びている惨状にうるたえる小萌先生に、俺と制理は冷静な声で

「脳の洗濯です！」

「脳の洗浄はちゃんとした設備でやるのであって、こんな所でやる意味が……そうじゃなくてですね！」

微妙にズレたツツコミをする先生だったが、当麻達が頭を抑えながらそそくさと席に戻ったので溜息をつきながら教壇にのぼった。

これでまた学園生活の一日が始まった。

今日は珍しく、朝以外では特に騒動もなく無事に放課後となった。

眼下では学生達はバイトに向かうなり、どつかに遊びに行くなりといった健全な放課後ライフを満喫する為に学校を後にしていく。

それを俺は屋上から無表情で見下ろしたまま、ぽつりと呟いた。

「……何の用だ元春？」

「流石はユウキ。完璧に気配は消してたつもりなんだがにゃー」

後ろのドアが開き、土御門元春が入ってきた。

「わざわざ気配を消しても、裏の空気出してたら俺が気付かないわけないだろ」

「だから流石、と言ったんだぜ」

土御門元春。こいつは俺と同じ年の学生だが、学園都市の人間と言うわけではない。

学園都市外部の組織からスパイとして潜入してきたが、あっさりと露見し学園都市の逆スパイにされた人間。

それでも堂々と学生生活送りながら、学園都市の暗部としても、学園都市外部のスパイとしても十二分に動いている器用な奴。

能力はレベル0の肉体再生。俺には使い道あまりないから、幻想支配で視た事はない。それ以外にも色々の裏技を持っていて、仕事で組んだ時はその器用さを見せられた。

ま、それは俺も同じだけどな。

「今日は仕事入っていないだろ。何の用だ？」

「べつにつにく、舞夏の手料理が堪能できる時間までまだあるから、時間潰そうと思ってブラブラしてただけですたい。そう言うユウキは何を見てたんだ？」

「俺こそ別に……なあ、元春は今の自分の立ち位置に違和感感じたり、もどかしく感じた事はないか？」

「裏切り者の殺害やら暗殺やら、血生臭い事しつつカミヤン達と学生生活を満喫している事を言っているのか？ ま、確かにユウキは数か月前までは考えられなかっただろうにやー。でも、それでもちゃんと両立出来てるんだから、ユウキはすごいって事ぜよ」話をはぐらかされた気はするが、それなりに核心を付いた助言な気もする。

その時だった、2人の携帯にそれぞれメールが入った。しかもそれは当麻達からのメールではなく……

「どうやら、楽しい楽しい表の時間は一時停止みたいだな」

「にゃー……さっさと終わらせて、舞夏の手料理を堪能しますか」

こいつの唯一にして絶対の短所は、重度のシスコンって事だろうな。舞夏は義妹だけだ。

俺に届いたメールの内容は仕事の依頼だった。

——オーダー：複数のスキルアウトがおよそ2時間後に集会を行う。参加者はそれぞれ武装しており、集会の目的を探れ。

状況によっては集会参加者全員の排除も有。

これが、俺の仕事。様々な人からの依頼を受けどんな仕事もこなす。

依頼主は芹亜先輩と言った統括理事会絡みだったり、健全な研究機関から実験の手伝いだったりと表も裏も綺麗も汚いも様々だ。

報酬も様々で、金だったり新型の軍用装備だったり、武器だったりする。

昨日も、とある依頼をこなして新型の武器をいくつか頂いた。

で、今回の依頼主は、木原尼視。俺が一番依頼を受けたくない相手、と言うか関わり合いたくない相手。

しかし、あのババアにしては中途半端な情報だな。だからこそ、俺一人じゃなく元春にも似たような仕事が出来たって事か。

「はあ、つまらなきそうな依頼にくそな依頼主か」

「あつはつはつは、それもまた俺らしいぜい」

そう言つて、俺と元春は時間までの間にそれぞれの準備をする為に別れた。

まずは部屋に戻つて、アレを取つてくるか。

そして、準備を終えて途中野暮用を済ませ、情報のあつた集会場に向かつている途中に追加のオーダーが入つた。

——追加オーダー：スキルアウト達は、とある競売に参加する模様。競売リストの一部には試作用の駆動鎧もあり、将来的な危険性もある為。バイヤーの確保と、仲介人情報および競売リストを入手せよ。尚、参加者の処理は現場委任。

駆動鎧ねえ。学園都市の駆動鎧は用途も性能もバラバラだが、どれもこれもスキルアウトに渡れば面白くない事が起きるのは目に見えている。

が、セキュリティーが嚴重なはずの駆動鎧が、そう簡単にスキルアウトの競売にかけられる事はない。

技術者が単に裏切つたか、それとも最初から外部に持ち出すつもりで技術部に潜入し

た産業スパイが裏にいるか。

そこら辺を探るのは元春の役目らしい。とにかく、駆動鎧以外にも危険なブツがごろごろ競売にかけられるなら、ほっとくわけにもいかないか。

多分、駆動鎧もダミー。本当の目玉商品は他にありそうだ。

そんな見るからに高額商品を買える資金源やら、芋づる式で沢山情報が得られそうだし。

「ん？ まだ追加オーダーか？」

——追加オーダーⅡ：昨日手に入れた玩具を使う機会出てきたら、ぜひぜひその破壊力をレポートして欲しいんだゾ☆

あのクソババア。文面だけで俺にここまで鳥肌やら寒気やら嫌悪感抱かせるとは流石だな。

「アラフォーのババアが心理掌握の真似しても痛々しすぎて、可哀相としか思えないからやめとけ。つと、ついでにさっきのメールを数多達にも転送。うん、これでよし」

要は昨日手に入れた武器、新型の演算銃器（スマートウェポン）の性能実験もしろ。と言おう事。

わざと大げさに競売会場で騒ぎを起こして、バイヤーかスキルアウトの誰かが商品の駆動鎧を駆動させれば、演算銃器の性能を試す絶好の機会になる。

「……めんどくせえ。とつとと参加者ごと皆殺しにした方が早く終わるつてのに」

上着から歪な形をした拳銃を2丁取り出す。

演算銃器は、赤外線で標的の硬度や大きさなどを測定し、即座に似合った弾頭を精製する大型拳銃。

これはその新型でより精密な弾頭設定が出来、尚且つ従来のものより小型化したもの。

おかげで、2丁拳銃として携帯出来るが、肝心の性能はまだ実験不足らしい。

「で、あそこが競売会場。一応警備口ポ対策のバリケードやら、監視衛星対策もしているか。こんなの奥で何かよからぬことしてまーつす。と宣伝しているようなものなのに。まだ時間じゃないけど、人は結構集まつてるな」

競売会場となる路地裏の空き地から少し離れたビル影に隠れ、現場の様子を窺う。

来る途中で高レベルな透視能力を幻想支配でコピーしてきたから、わざわざ現場に近づかなくてもいい。

ん？ わらわらと集まつてきたスキルアウトの中に、見覚えのある奴がいるな。

確かアイツは、利徳んとこの奴だな。アイツらは危ない橋は渡るが、こういう危ないブツには手を出さなはずだったけど、これは使えるかも。

そのうち、バイヤーらしき人物が偽装トラックと共に現れ、ついに競売が始まったよ

うだ。

「じゃ、楽しいパーティーの始まり始まり……つと、んんん？」

右手にスマートウェポン、左手に特注コンバットナイフという裏での基本スタイルで踏みこもうとした時だった。

メイド服を着た少女と学生服の少年が、6人ほどのスキルアウトを引き連れてこつちに向かつて来た。

あれれ？ 学生服の少年、見覚えがありまくりなウニ頭をしているのは幻覚かなあ？

『お前らしくもないな。オーダーをキャンセルだなんて』

「新型武器の性能実験、なんて優先順位が激低オーダーだから、問題ない。それにバイヤーは確保したし、競売リストも仲介人の情報もお前に渡しただろ。オーダーコンプリート、後はお前の仕事だ、元春」

『それは確かに受け取った。で、今回は誰も殺さず素手で気絶させただけ、しかも、一部の人間は逃がしている。つてのはさっきの屋上で的一幕が原因か？』

電話口で元春の声色が変わった。標的に手心を加えたのは、裏の仕事に嫌気刺したのか、と言うニュアンスだ。

「いんや、逃がしたのは2人。とある連中に貸しを作る為だ」

『あつはつはつ、お前さんに貸しを押しつけられる連中が、心の底からお気の毒だにやー』

「そして、駆動鎧を起動させなかったのも、誰も殺さなかったのも、とあるウニの不幸少年が乱入してきたからだ」

『カミヤんか、そりやあいつの前で血生臭い事は出来ないよなあ。で、いつのようにカミヤんの側には誰かしら女の子がいたんだろ?』

「【俺やお前が見覚えのあるメイド服を着た子】がいたな。大方、あの子を助ける為に一緒に逃げてここに來たつて所だな。だからこそ、血生臭い事も出来ず、大事になる前に素早く制圧する必要があつたわけだが? あ、当麻は少しボロボロだけど、その子は傷一つ付いてないからさつき帰らせたぞ?」

『……すまない。【舞夏】を助けてくれて、心から感謝する。俺もお前に借りが出来たな』
「それは当麻に言え。今回の件は当麻に貸しつけてるから、気にする事な。とつととお前も仕事終わらせろよ」

『分かった』

と、ここで元春からの電話は切れた。

「ん、別に俺、舞夏と同じメイド服着た子つて意味で言ったわけで、助けた子が舞夏と

は一言も言つてなんだけどな。勝手に勘違いするとは、このシスコン軍曹め」

ニヤリ、と物凄く悪そうな笑みを浮かべつつ、とある不良へ電話をかける。

「あーツラか？ ユウキだが、利徳も一緒か？ 電話繋がらないからお前にかけてたんだけど」

『何度も言うが、俺はツラじゃねえ、浜面だ！ 大体なんで他の人はほぼ全員名前で呼ぶのに、俺だけ名字で呼ぶんだよお前は！』

俺は相手がだれであろうと、名字ではなく名前で呼ぶ癖がある。なぜかとよく聞かれるけど、俺も分からない。

ただ、相手が名前で呼ばれるのを嫌がれば名字で呼ぶが、大抵は名前で良いと言つてくれる。

「そりやお前が、俺は仕上じゃないツラだ！ って顔してるからだろ」

『どんな顔だそれは！ ああ、もう駒場さん、ユウキから電話……って今まで携帯の電池切れてるの忘れてた？ きつと船来が何度も電話をかけてくれてるだろうから、早く充電機探してくる？ ちよつ、どこ行くんですか!?! 半蔵、幼女の為に充電器買いに行くゴリラを止めろー！』

女子供に手を出す事を禁ずる。と言う顔に似合わず優しいスキルアウトのリーダーは、どうやらロリコンに目覚めたようです。

今すぐ電話を切って、着信拒否リスト入りさせて、ついでに学園都市中の幼女の為にあそこの集団を潰そうかと本気で考えた。

「要件だけ伝える。お前んとこの村櫛と礼拿が裏の競売で物騒な物買い漁ろうとしてた。あのままでバイヤーと他のスキルアウト顧客共々潰される所だったから、俺が助けた。貸し一つ追加、忘れるなよ」

『えっ、それ本当かよ。それより貸し、ってまた増やす気か!?!』

「真偽のほどは本人から聞け。んじやなーロリコンゴリラによるしくー」

『ぶっ、ろ、ロリコンゴリラって……い、いや、違いますよ!?! 俺じゃない俺が言ったわけ、じゃ、ぎやあああゝゝ!?!』

……安らかに眠れ、ヅラ。

「さって、これで仕事は終了。さて、当麻に何を奢らせようかなー」

後の事をどつかの下っ端要員達に任せ、目を回した当麻を担ぎながらその場を後にした。

これが俺の日常。

最も木原から近くて遠く、最も木原とは正反対の性質を持つ男。

木原 勇騎（きはら ゆうき）

の日常。

つ
つ
く

第20話 「学舎の園」

よく世間は狭いだの、世界は広いだのという言葉を聞くが、学園都市は狭い範囲なのか広いと言える範囲なのかどっちだろうか？

なんて思っている俺の目の前では、学園都市で7人しかいない超能力者、レベル5第3位である御坂美琴がナンパをされている。

路地裏に連れ出されたけど、相手はレベル0だらけのスキルアウト（ロリコン）集団だから、俺が出る幕は全くないな。

それに路地裏に連れ出されたように見えるけど、余計な被害出さないように美琴が自分から行っているようにも見える。

どうしてそういう気遣いを俺には出来ないのかねえ。

「なあなあ、これからどこいく？　こんなしけた路地裏じゃなくてさあ」

「それともこんな誰も来なさそうな狭い場所がお好みなのかい、お嬢ちゃんはいっ

ひっひっひっ」

「そうね……ここなら能力使っても特に問題なさそう、ね！」

「へっ？　ぎぎはあ〜〜！」

案の定、誰も来なさそうな路地裏に付いた途端、美琴が電撃でバカどもを一人残らず痺れさせた。

見張りに立っていた一人がいるけど、そっちは風紀委員の白井黒子が来たから大丈夫か。ここにも向かっているみたいだし。

風紀委員の白井黒子、俺が表向きは統括委員会公認の探偵もどきの何でも屋をやっている関係で、何度か事件で捜査協力したりして顔馴染みだ。

今日はバックアップ担当である初春飾利は177支部で、情報収集しているみたいだな。

黒子の耳につけたイヤホンで指示を出してるみたいだ。一応監視カメラの死角にいるから俺には気付いていないよな？

「ジャツジメントですの！ 暴漢に襲われそうな女子生徒がいると通報を受けて……つて、お姉様?!」

「あつ黒子、といい加減降りてきなさいよ、ユウキ」

黒子が毎度のように、右手に付けた風紀委員の腕章を引つ張り得意のポーズを決めて登場したが、まさか暴漢に絡まれているのが美琴だとは思っておらず、ぽかーんとした顔をしている。

美琴の方は、やってきた黒子に目を向け、そのまま真上に視線を上げた。

「やっぱり気付いてたか。よっ、美琴、黒子」

そこにはさつきから事の顛末を傍観していた俺が、壁に足をつけて立っていた。

「ユウキさんも!? で、なんで壁に立っているんですの?」

「ん? レベル5のチビっ子をナンパしようなんて、バカなロリコンいるな〜と思って、文字通り高みの見物。壁に立っていられるのはさつき、重力変化系の能力をコピーしたから」

「誰がチビっ子よ!」

今俺は幻想支配で、名もしらぬ通行人の能力をコピーしている。

この能力、壁だろうと天井だろうと足が付けばそこが自分にとっての地面になる能力だから、結構便利だ。

能力名はバンク見なきや分からないけど、別にいいや。

「いい加減慣れましたが、こう会う度に違う能力をお使いになっているのを見ると、能力者の常識を疑いますわ」

「能力は1人につき1種類、俺にそれは当てはまらない。ま、だからこそレベル0だけど、結構研究所とかに呼ばれたりするんだよな……それよりも、よっと」

能力を解除して、美琴と黒子の間に降り立つ。と、同時に美琴の脳天に割と本気のチョップをかました。

「つくろ!? い、いきなり何するのよ!」

「敬語を使え、つてまでは言わないが、年上の俺を初対面時からずつと呼び捨てだろうが、教育だ教育」

「こいつの場合、砥信先輩相手でもこうだろうな。それはそれで面白いもの見られそう
だ。」

「それと、涙目の上目遣いはその手の輩には大好物だろうが、俺はもう一度見て携帯に保存してるから要らないぞ?」

「あ、あんたとアイツ以外にはちゃんと敬語使ってるわよ! つて今なんて言ったの?」

私の涙目画像持つてる!」

「どーいう事ですの、ユウキさん! お姉様の涙目画像!? ジャ、ジャツジメントとして見過ごせませんわ、ささつ、早く見せてください!」

「それジャツジメント関係なく、お前が見たいだけだろ」

そう言いながら俺は、携帯を取り出しとある写真を見せた。

そこには確かに涙目で、少し怯えた表情の美琴が写っている。

「なつ、な、な……」

「お、おお、お姉様に一体何をしたんですの!」 場合によっては逮捕致しますわ!」

美琴はそれを見て口をパクパクさせて固まり、黒子は宝物を見つけた海賊のようなギ

ラついた目になった。

足元に転がってるナンパ共ほっといいのかよ、風紀委員さんよ。

「鼻息荒げて興奮するなよ黒子、お嬢様台無し。それにこれは美琴に勝負を挑まれた時に撮った写真。言つとくが、俺は美琴に怪我也させてないし、触りもしなかつたぞ？」

そう、それは数か月前の話。不良能力者数人にカツアゲされそうになり、面倒だから能力をコピーして撃退したら、運悪く美琴がそれを見ていて、勝負を挑まれた。

まあ、手から炎やら水やら出している能力者見たら興味を持つのは、分かる気がするけどそれで勝負を挑もうとは。

レベル5唯一の常識人と言われても、やはり美琴もどつか壊れてるなー。

と適当に相手をする事になり、結果美琴の能力をコピーし、放電や磁力による攻撃やら悉く相殺し、とっておきの超電磁砲を放とうとした時、幻想支配で能力を封じ、動揺した所で殺気を出しながら殴ろうとしたら……さっきの表情になったと言うわけだ。

「なるほど……で、本当にそれから殴ってはいませんか？」

「俺が、こんなガキ相手にそんな事するわけないだろ」

仕事だったら殴る程度じゃ済ませないけど。

「先程お姉様の脳天にチョップしておきながら、どの口がおっしゃるのやら」

「あれは羨のなっていない世間知らずなお嬢様に先輩としての、教育だ」

黒子は胡散臭い通信販売員を見るような目で俺をみたが、深く溜息をつきながらも
泣々分かつたようだ。

「はあく……そう言えば、お姉様が能力を真似されたとか機嫌が悪かった日が2カ月程
前にありましたけど、ユウキさんとその時に知り合ったのですね」

「そうそう、それ以来妙に美琴が俺に絡んできてさ。何度か勝負受けたけど、全戦全勝
な」

本当はレベル5相手での幻想支配がどう通じるか、っていう個人的な実験の意味合い
もあつた。

軍覇や沈利、操祈とは何度かそういうのちゃんとした実験場でやったけど、美琴とは
まだだつたし。

おかげで、美琴の能力にも慣れて結構使いこなせるようになった。

「……はっ!? ちょっとあんた！ 全戦全勝って私はまだ一発も食らってないんだから
負けてないわよ」

「負け犬の顔〜♪」

「はぐっ!? だ、だからその画像はいつのまに撮つたのよ！ 消しなさいよ！」

子供じみた事言う美琴を、満面の笑みを浮かべさっきの画像をみせる事で沈黙させ
る。

「お前が勝負勝負としつこくしてこなきゃ、今すぐこの携帯から削除してもいいんだけどっ。」

「ぐぐぐつ、わ、分かったわよ。もうあんたに勝負は挑まない、これでいいでしょ！」

「契約成立♪ ほい、削除っ」と

甘い美琴。俺は『この携帯から削除』としか言っていないぞ？ どつかのサーバーとかパソコンに保存しているものまで削除するとは言っていないぞ？

「ああ、せめて、せめて削除する前に黒子の携帯に転送を〜！」

「すんな!!」

……黒子に貸しとしてあげれば良かったかな？

「それより、いい加減こいつら片付けろよ、ジャツジメント」

未だに地面で痙攣しているバカ共を足でちよんちよんと小突く。

「あ、すっかり忘れていましたの」

こんなのが風紀委員って、大丈夫か学園都市。

そんな事があってからもう1カ月、街中で美琴と遭遇しても勝負ふっかけられなくなっただけで平和だ。

代わりに物凄く嫌な顔されるようになったけど、それくらい慣れっこだ。

『天敵、天敵よあんたは!!』

まあ、レベル5と言うか、能力者にとって天敵みたいな物だから幻想支配は。

そう言えば、俺に勝負を挑まなくなった代わりなのか、当麻がしょっちゅう美琴に狙われているらしい。

あいつの右手にはあらゆる異能を無効化する「幻想殺し」があるからなあ……それに本人の不幸体質と重なって、俺と美琴みたいな出会い方をしたようだ。

やっぱ、美琴ってバトルジャンキーだよな……レベル5で唯一のまともな常識人と評されているけど、俺と当麻は真っ向からその評価を否定したい。

そして、今日俺は学舎の園に来ている。

5つのお嬢様学校で構成されている学舎の園は、男子禁制。本来は例え警備員でも入れないが、俺は学舎の園の学長達からの招待状がある。

ここに来る事は実は意外と多い。やれ幻想支配の研究やら、表ざたに出来ない事件の解決やら……俺が【木原】だから、つてのもあるんだろうな。

正直、学舎の園からの依頼は断わりたいオーダーランキングの2位に入っているが、来ないわけには行かないか。

ちなみに第一位は勿論尼視のババアからの依頼関係だ。

「はい、木原勇騎さんですね。話はどうかかっていますので、こちらで服を着替えてから入場して下さい。荷物は1つだけですか？」

「ああ、これだけだ。ありがとう」

学舎の園の入場ゲートで、身分を明かし音声と指紋認証を終えて学舎の園内部で着る服に着替える。

いくら特別な許可証があるとはいえ、男性が入るのには色々厳しい制限がある。

音声と指紋認証による本人照合は勿論だが、学舎の園内部で着る服も決められている。

これは外部からの侵入者との判別を付けさせるためで、一目で許可を持って入っている男性と分かるようにするためだ。

「服はお預かりしますので、お帰りの際に返却いたします」

カバンを片手にいざ、学舎の園へ。

「相変わらずここは独特の空気だなあ。まるで外国に来たみたいだ」

日本、と言うか学園都市から出た事は数回しかないけどな。

「あー……やっぱり目立ってるな、俺」

道行く女子学生達が俺を奇異な目で見ている。この服を着ているから通報される事はあまりないが、それでも警戒心丸出した。

「ここは文字通り箱入り娘の巣窟だもんなあ。通報される前にとつと早く仕事を終わらせるか」

今回の依頼内容は簡単に言えば、運び屋。

とある実験のデータ資料を学舎の園に持ち込む事。通信で送れるデータだけではなく、現物もあるから俺に頼んだらしい。

場所が場所だけに秘密裏に潜入して、つていう方法を取る所だけど、今回は無理。セキユリティー高すぎて割に合わない。

だからこうやって特別な処置をしてもらっているわけだが……

「俺は宅急便じゃないんだけどな。つてかなんで俺だよ」

男子禁制の場所なんだから、女性使えばいいのに。思いつきり目立ってるじゃないか。

知り合いに会わないといいな。変に誤解されそうだ。

「あ。ユウキさんじゃないですか！　なんでここにいますか!?」

と、思ったら早速見つかった。でもこの声は、本来ここで聞くはずのない声だが？

後ろを振り返ると、そこには花輪を頭にどんと載せた少女、初春飾利。もう一人、こちらを興味津々に見ている髪の毛の長い少女がいた。

2人共同制服と言う事は、この髪の毛の長い少女は飾利のクラスメイトか何かだろう。

「よお、飾利。俺はここには仕事だ、仕事。ちゃんと許可証もあるし、服もそれに着替えてるだろ？」 お前こそこんな所で何をしてるんだ？」

「私達は白井さんに招待されて、常盤台中学の見学です。佐天さん、この人が噂のユウキさんですよ」

「おお！ この人が噂の♪」

どんな噂だ、どんな！ どうせ碌でもない事だろうけど。

「初めまして、私は初春のクラスメートで佐天涙子つて言います。ユウキさんの事は白井さんや御坂さんから色々聞いています！ よろしくお願いしますね」

やけにフレンドリーに挨拶された。こういう子なんだろうな。

それより俺の事を何と聞いているのか気になるな。あいつらの事だから、ある事ない事吹き込んでそうだ。

「よろしくな、涙子」

「あ、あはは、はい、よろしく、お願いします」

ん？ 何だ？ この反応は？ 照れているような苦笑い浮かべてるけど……あ。

「や、やっぱり話には聞いていましたけど、すごく恥かしいですね」

「悪い。つい癖で。ホントごめん。名字で呼ぶ事にするよ」

初対面だろうが相手を名前で呼ぶ癖は、幼い頃から癖で直そうと思つてもなかなか直

らない。

「いえいえ、ユウキさんは誰でも相手を名前前で呼ぶのは、初春からよく聞いてたので、ユウキさんの呼びやすい呼び方で読んでください」

「そうか、お前良い子だな……黒子や美琴にも見習わせたいくらいだ」

「いえいえいえいえ！ 私なんてあの2人に比べたら月とスッポンですよ。それに私、レベル0ですし」

さつきからいえいえばつか言ってるな涙子は。それにレベル0と自分で言った時に一瞬だけ彼女の表情が曇った。

自分でも無自覚な事だったのかもしれないけど、涙子は間違いなくレベル0と言う事に劣等感を抱いているな。

でも、それは涙子だけに限った事じゃない。半数以上が無能力者とは言え、学園都市は能力者の街。能力があつてこそその学園都市だ。なんて極論言う人は研究者にも学生にもいる。

そんなんだから、スキルアウトなんて集まりが出来るわけだし。

俺も一応レベル0だけど、だからといって俺がどうこう言つても何にもならないからな。深く突つ込まなきゃいいだけの話だ。

「あいつらが月、ねえ……自販機を蹴り倒したり、強い能力者相手に所構わず戦闘しかけ

たり、少女趣味全開のレベル5どころか1000くらいのバトルジャンキーと、能力を最大限使って街中だろうが人ごみだろうがストーキングやセクハラしまくる変態痴女。レベル0の俺から見れば、高位能力者になっても、ああはなりたくない。っていう良い反面教師だな」

「ユ、ユウキさん、少し言い過ぎじゃあ、全く否定出来ませんけど」

「流石はあの2人が揃って天敵だ！ って断言するだけの事はあるなあ」

涙子にまで天敵と言ったのかあいつら……

そして飾利は、さり気なくヒドイ事言ってるし。

「おっと、もうこんな時間だ。待ち合わせに遅れる。じゃあな2人共、美琴と黒子にくれぐれもよろしく、と伝えておいてくれ……笑顔で言っていた。とそう言ってくれば尚よし」

「あ、あははくそう伝えておきますね。また支部に遊びに来てくださいいねー」

「ユウキさん、お仕事がんばって下さい！」

「おう、ありがとな」

笑顔で手を振る2人と別れ、俺は待ち合わせの場所へと急いだ。

その時だった。ふと路地に歩いて行くお団子頭の女の子の後ろ姿が目にとまった。

顔の表情は分からなかったけど、あの子が手にしているのは、スタンガンに見えたの

は
気
の
せ
い
、
か
？
つ
づ
く

第21話 「視覚障害」

学舎の園

「結局、なんで俺が呼ばれたのかは不明、か」

運んでいた荷物を狙って、暗部や外部からの侵入者が狙ってくる。なんて事はなく、涙子達と別れ待ち合わせ場所に時間通りに付き、無事に荷物を引き渡した。

引き渡した相手も普通の研究員兼教員であり、特に怪しい点もなし。

本当にただの運び屋仕事を、わざわざ男の俺に頼んだ理由は、信頼性の高い人物に依頼したかった。というもの。

荷物の内容については、元から興味なかったので聞かなかった。

ここまであっさりと短時間で終わる運び仕事も珍しい。

「ま、報酬もちゃんともらったし。せっかくここまで来たんだ、店が閉まる前に何か食べて帰るか」

こんな事でもなきや学舎の園には来れない、何か美味しいものでも食べようかと考えていると携帯がなった。

かけてきた相手は……木原尼視。電話に出たくない相手ぶつちぎりの第一位だが、出

ないと後がうるさいから仕方なく出る。

『はろはろ〜♪ ユウちゃん元氣?』

無言で切る。再度着信。

『ちよつと、無言で切る事はないでしょ!』

「ものすごくキモかったから。聞くと頭やられそうになったから。自己防衛と言うやつだ。んで、何の用だ?」

『こ、このガキはいつもいつも……あんた今学舎の園にいるんだろ? 仕事はもう終わったかい?』

さつきまでのアイドル声から、男っぽい声に変わる。

木原尼視、木原の中でも異端であり嫌われ者の部類に入る。

こんなババアだが、赤ん坊の俺を気まぐれで拾い育ててくれた恩義は一応ある、一応。

で、そのせいで色々な面倒事や厄介事をさせられるわけだが、しっかり報酬は過剰要求もするから、どっちもどっちだ。とは木原数多の言葉。

「ああ、わけわからん仕事だったよ。わざわざこんな所に面倒な手続きふんで俺を入れた……お前の意図は?」

『流石に気付いたか』

「こんなくだらない事に俺を指名するのは、お前くらいだからな。今度は俺に何させよ

うっていうんだ？」

『何、簡単な事だよ……学舎の園内にあるとあるケーキ屋でケーキ一式を買ってきて欲しいな☆って、店名と場所はメールしたから、依頼料は……』

無言で切るパート2。今度は着信拒否＋迷惑着信撃退用ノイズ発生機能オン。

きつと尼視は今頃、耳に残る痛烈なノイズに襲われているであろうが、いい気味だ。

「ふざけんなっての、自分で買いに来ればいいだろうに、この引き籠もりめ」

こんなふざけた事の為に今回の依頼を俺に回すとは……アイツならやるな。

依頼を果たす気は全くないが、せっかくだしアイツが気にいつているというケーキ屋でも行ってみる事にする。

実は俺は、結構甘いものやケーキが好きだ。幻想支配を使うとすぐにお腹すくからカロリー摂取と言う目的もあるが、幼い頃から尼視にケーキをたくさん食べさせられたせい……にしておこう。

「地図だと確かこの辺りだな……お、あれか」

携帯を見ながら目的の店を探していると、それらしい店を見つけた。

と、その時店のドアが開き、2人の学生が飛び出して行くのが見えた。

「行きますわよ、初春」

「はい」

「あれは、黒子に飾利？ あんなに急いでいるって事は風紀委員の呼び出しか。ま、俺には関係ないか」

特に気にも止めず中に入ると、美琴と涙子もいた。

「げっ、あんたは！」

「よお、また会ったな涙子」

美琴がこつちを見て嫌な顔をしたが、それには触れず涙子に目を向ける。

彼女はなぜか常盤台中学の制服を着ていたが、泥でも撥ねて制服汚したから黒子から借りたって所かな？

「あつユウキさん！ さつきぶりです。仕事はもう終わったんですか？」

「さつきな。それで有名なケーキ屋があると聞いて、ちよつと食べて行こうと思つて常盤台中学の制服もなかなか似合ってるな」

「あれ？ ちよつと！」

「えへへ、ありがとうございます！ ちよつと汚しちやつて白井さんから借りたんです。で、ユウキさん意外と甘党なんですね？」

「ケーキ好きに性別も年齢も関係なし！ ってな」

「ねえつてば！」

「ですよねー。良ければ一緒に食べますか？ 初春達行っちゃつて」

「さつきそこで見かけた。風紀委員も大変だよな〜」

「いい加減気付けやあ!!」

涙子と2人で話していると、美琴が今にも放電しそうな勢いで割り込んできた。

危ないなあ。店に損害出す気かよ。

「なんだよ、ビリビリ。涙子と話してるんだから邪魔するなよ」

「あいつみたいにビリビリ言うな! ってそれより私を無視するんじゃないわよ!」

美琴の言うあいつとは、上条当麻の事。当麻が美琴をビリビリ呼ばわりしているのを聞いて、俺も真似をしたのだ。

「無視してるわけじゃないぞ? お前に関わりたくないから敢て視界に入れてないだけ

だ、ウルウル」

「もつとタチ悪いじゃないのよ! しかも、ウルウルって何よウルウルって!」

「ウルウル?」

「涙子は知らないか。ちようどいい機会だから見せてやるよ。これが美琴の……」

携帯を取り出し、いつぞやの美琴ウルウル写真を見せようとする。すると美琴が顔を真っ赤にして慌てて飛び付いてきた。

「ちよ、ちよっと! ウルウルってあの時の事まだ言ってるの!? しかも、それあの時の写真、あんた消したって言ったじゃない!」

「ああ消したぞ？ あの時携帯 【から】 はな」

これは個人サーバーに保管していた写真を、あの後また携帯に移した写真だ。

「な、なな何してんのよ！ 私はちゃんと約束守ってるじゃない、あんたも消しなさいよ！ 出ないとまた勝負ふっかけるわよ！」

「あの時携帯からすぐに消す。それが条件だろ？ 携帯以外の写真も消すとすると、また別の条件出さなきゃ乗るわけにはいかないな」

「ぬぐぐぐ、あんた年下相手にそんな詭弁振りまいて恥かしくないの!？」

「そうだなー大人げなかったなー。年下のチビガキ相手に、ゲコ太グッズにのめり込むお子様相手に大人げなかったなー」

「ひ、人の趣味は関係ないでしょ！ それにゲコ太は悪くないじゃない！」

学舎の園で1, 2を争うその上品なケーキ店でなんとも低レベルな口論を繰り広げる俺ら。

片やレベル5の美琴。片やゲスト扱いとは言え男である俺。

周囲の目を引くのは当たり前で、そんな周りの視線にただの中学1年生である佐天涙子が耐えられるはずもなく……。

「あ、あの私ちよっとお手洗いに行ってきますね。もう私の分は頼んだので……」

「……………行ってらっしゃい」

ものすごくドン引きした笑顔を浮かべ、この場を去る涙子を見て流石に周囲の視線に気付き、気まずい空気を浮かべつつさっさとケーキと紅茶を買い席へと移動する俺達。

「……………」

お互い無言のまま、涙子を待つ事十数分。

「…………遅いわね佐天さん。紅茶冷めちゃうよ」

周りの学生客がちらほらとこつちに好奇の視線を向けて来る中、美琴が耐えきれないかのようにほつりと眩くように言った。

俺もチラリと涙子が向かったトイレの方を向けると、少しだけ何か異変を感じた。

血の匂いがする。とか、殺気を感じるのとは違う。言葉に言い表せない俺の第六感を刺激するこの感じは…………

「美琴、様子見てきてくれないか？」

「私が!? ってあんたじゃ無理なものね。ちよつと見て来るから、先に食べたりしないでよ」

「ああ、食べるとしても美琴の分だけだから安心しろ」

「安心できるかあ!」

怒りながらトレイに向かう美琴を見ながら、ふと自然と口元がゆるむ。

全く、当麻と言いい美琴と言いい、からかい甲斐のある奴らだ。

それにしても……

「やっぱり、こういう店でこういう状況に男一人つてのは物凄く浮くなあ」

一応外からは見えない席に座っているから、まだいいけど。

「……ん？」

ふと店の入り口に目を向けると、何か違和感を感じた。

食べ終えた学生2人がちょうど店から出て行く所だったが、何か気配がおかしい。幻想支配で視てみるか、と思ったその時だった。

「ちよ、佐天さん！」

トイレの方から美琴の緊迫した声が聞こえ、急いでそっちに向かう。

ドアが開いていたが、その向こうに涙子が倒れているのが見えたので構わず入る。

「美琴、涙子がどうした!？」

「佐天さんが、私が来た時には……もう、こうなってる」

「っ!? こ、これは……」

むごい。俺が見てもそう思える程の惨状だった。

それから涙子に外傷がない事を確認して、黒子に連絡を取り学舎の園内部にある風紀委員室に運んだ。

念の為医者に診てもらったがやはり大したことはなく、スタンガンなどで気絶させられ、それから……

「常盤台狩り？」

「ええ、先程の呼び出しの件もまさにそれでしたわ」

「涙子は常盤台の制服を着てたから、1人になった所を狙われた。つまり、少なくとも美琴達に合流するまで犯人は涙子を見ていないと言う事か」

有名お嬢様学校である常盤台は、狙われる事はたまに起きる。

レベル3以上しか在籍出来ないせいで、一部低レベル能力者の女子から逆恨みとも言える八つ当たりもある。

それでも暴力沙汰になる事はない。今回こんな事が起きたのは珍しい。

「犯人の目星は付いているの？」

「それが少々厄介な能力者のようでした……」

「目に見えない能力だろ、それ」

「えっ？ ユウキさんどうしてそれを？」

「まだ何も言っておりませんのに、もう分かったのですの？」

黒子と初春が驚いた声をあげるが、別に推理と言う程じゃない。

「俺の座ってた席からトイレに向かう通路は見えたからな。涙子が入ってからは誰も出

入りしていない。客席からトイレに向かう通路にドアはなかったし。それにレベル3以上の常盤台中学の学生が、何も知らぬ間に白昼堂々襲われた。透明人間、もしくはそれに類似する能力者って事だろ」

「す、すごいです。大当りです!」

それにあの時入口で感じた違和感。恐らく、あの時犯人は客に紛れて店から出ていたんだ。

幻想支配で見れば、犯人もすぐに分かって無効化しつつ確保も出来たかもしれない。

けれども俺の幻想支配は、発動すれば目の色が変わるから安易に使えない。

それでも使うべきだったか……これは、俺の失敗だ。

「で、監視カメラには? もちろん映ってなかったんだろうけど、何か手掛かりくらいは」

「映ってます。監視カメラには被害者の横を歩く人がはつきりと、映ってたんです。ですけど、被害者の皆さんは1人である時に襲われたとしか言っていないくて」

初春の言う通り、襲われた時の監視カメラの映像を見せてもらったが、被害者の横を歩く女子学生の姿が映っていた。

どうやら犯人はこの女子学生のようにだ。

ん? 監視カメラにははつきり映っているのなら、犯人は光学系の能力者じゃない

な。と言う事は。

「被害者には見えていなかったって事ね。あ、もしかして」

「美琴も気付いたか、この能力恐らくは五感操作系の能力者だ」

五感操作、相手の五感を操り苦いものをマズイ、白い物を赤い、などと思わせる能力者。

今回の場合は視覚の認識をずらしているのだろうか。

となると、確か該当者は1人のはず。

「ありました。能力名は視覚障害（ダミーチェック）。登録されている能力者は1人、関所中学校の二年、重福省帆」

「そいつに違いありませんわー」

パソコンに映し出された少女は、前髪を伸ばした団子頭の地味な印象を受ける。

黒子が息まいて犯人と断定するが、俺も彼女だと思いがけどこの子は確か……

「この子確かレベルは2だろ。姿を完全に見えなくする程のレベルじゃなかったはず」

「そうですね。実験データでもそうなっています」

「そっか、いい線言ってると思っただけだなあ」

初春の言葉に美琴は軽く肩を落とす。

「いや、案外この子かもしれないぞ？ 身体検査の時よりも調子がよくなって……って

事もないわけじゃないし」

「まあ、確かに体調やらで実験結果が左右される事はあるけど……」

レベルが上がるほどの急上昇は、ほとんど有り得ない事だけだ。

「それって何でも屋としての【勘】 ですかの？」

「つて勘かい！」

「ああ、そうだ。バカにするなよ美琴に黒子、こう言う時の俺の勘は良く当たるんだぞ？」

確かに俺の勘がそう言っているのもあるけど、本当は学舎の園で涙子達と会話した後でチラリとスタンガンらしきものを持った彼女の姿を見かけたから……なんて、言えるわけではないので、勘と言う事にしておく。

「まあ、ユウキさんのそういう勘は確かに当たりますわね」

「ですね」

黒子と初春は彼女達が新人の頃からの知り合いなので、よく知っている。

「多分、涙子は姿をはつきりと見てると思うぞ。視覚障害は直接見なければ意味がないから、あの洗面台の大きな鏡にだと姿がはつきり映っていたはず、ともかく彼女が目覚めたら聞いてみるといい」

と、言いながら時計をチラ見して鞆に手をかける。

「あれ、もう帰っちゃうの？ 珍しいわね。あんたなら最後まで関わると思っていたのに」

「そうしたい所だけど、俺はもう制限時間なんぞな。これ以上ここにはいられないんだよ。この件は依頼もされてないし、特に危険な事はなさそうだから、お前らだけで大丈夫だろ」

招待された涙子や初春はともかく、仕事できている俺には学舎の園には滞在時間の制限がある。

今回の件は、俺の失敗もあるし、視覚障害の異様な効果にも興味があるが、流石に依頼も受けていないのにこれ以上の滞在は出来ない。

なので、仕方がないが、美琴達に任せる事にした。

「それじゃ、後で電話するから話聞かせてくれよ。それと涙子に伝言、眉の件、そんなに悲観するな後で良い物送る。つてな」

「はあ分かりましたの……色々御助言感謝いたしますわ」

「これを悲観するなと？ ま、まあ伝えておくわ。後は任せなさい」

「ユウキさん、お疲れ様でした」

目にタオルが置かされ、寝たままの涙子を見ながら怪訝が表情をした黒子達だったが、構わず俺はその場を後にした。

「……やっぱり、あの子気になるな。無理言つて滞在時間延長すべきだったかな」
学舎の園を時間内に出て、ふと振り返る。

レベル2の視覚障害、けど状況を考えると明らかにレベル3や4クラス的能力だった。

幻想支配で重福省帆と言う子を見れば、はつきりと分かるだろうが……

「つと、電話だ。美琴か？ つて……誰だ？」

見慣れない番号からの電話に嫌な予感がして、出て見るとその予感は的中した。
相手は尼視だ。

『色々と言いたい事はあるが、まずは素敵な子守歌（ノイズ）ありがとう』

「いや、何、耳掃除の手間省けたろ？ 俺特性だからな」

『今度覚えておきなさい……まあ、いい。仕事だ』

尼視の声色が変わる。と言う事は結構大事になりそうな仕事だな。

「へえ、久々にまともな仕事なんだろうな？」

『どういう意味のまともと言っているのか知らんが、一つ聞くぞ？』

『幻想御手（レベルアップ）』と言う言葉に聞き覚えはないか？』

第22話 「都市伝説」

7月18日

第十九学区

再開発に失敗し、廃ビルなどが立ち並ぶ学区。ちゃんとした研究所もあり、それなりに有効活用はされているが人は少ない。

なので、スキルアウトなどが秘密基地を作ったり、不穏な取引現場にされたりと悪い意味でも有効活用はされている。

そんなそこらじゅうから不穏な気配が漂う、ビル群をバイクに乗って奔る。

「そろそろか」

デバイスが指し示す目的地に近付いてきたので、物陰にバイクを止める。

俺はバイクの免許を持っているので、遠出する時はこいつを使う。

と言つても、今乗っているのは買物などで使う「私用」ではなく、今回見たいな物騒な時に使う「仕事用」。

見た目は普通のバイクだけど、光学迷彩やら小型ジェットバーナーによる超加速。

フロントやバックに機銃やミサイル、マキビシが内蔵されており、更に両サイドカ

バーにはナイフや拳銃が収納できる、まさに戦闘用バイクだ。

今着てるライダースーツも防弾性やら超加速に耐えうる設計された特注品。

これは、仕事の報酬で得た大金を使って作らせたもの。

幻想支配があるとはいえ、それは能力者が相手で初めて効果が発揮される。だから、俺自身の戦闘力を上げるにはこう言う武装をするしかない。

「ビル内の人数は……1階に6人、2階に10人、見張りは2人。か」

目を閉じ、耳を澄ませ、目的のビル付近の音を聞く。

今俺が幻想支配で使用している能力は「存在把握（ルームマップ）」、半径2キロ以内の音を聞き取り、脳内に立体地図を描ける大能力。

これによると、ビル内にいるのはスキルアウトと外部からの侵入者らしい。

嚴重な警備をしていても、外部から侵入される事はよくある。

今回の侵入者の目的は、自分達が開発した新型麻薬の能力者への影響を調べる事。

その麻薬は通称「アッパー」と呼ばれている。

「アッパー……幻想御手と何か関係あるのか？ まあ、あいつらに吐かせればいいか」

バイクのサイドカバーを開き、中から拳銃とナイフを取り出しビルへと向かう。

「な、何だお前は!？」

「侵入者だ!」

「こういう荒事は久々なんでな、悪いがストレス解消させてもらう」

見張りの2人の眉間を撃ち抜きと、同時に発煙筒を投げ入れた。あつという間に煙が立ちこめ、視界が遮られる。

「ゲホゲホツ、み、見えねえ!」

視界を塞がれパニックを起こした1人が、がむしやらに拳銃を乱射した。

が俺には当たらず、仲間当たったようだ。

「危ないなあ、大人しく死んでろ」

まずは身近にいた1人の喉元を切り裂き、返す刃でそいつの胸を突き刺す。

「がはっ! な、なんで……てめえには」

見える? と言う前に絶命した。こいつの疑問に答えるつもりはないが、答えは簡単。

発煙筒を投げ入れてから俺はずっと目を閉じている。

相手がどこにいるかは、存在把握を使えば簡単に分かるので、目が見えなくても問題はない。

1階に居るのは、金で雇われたスキルアウトのみ。

こいつらのリーダーと、本命の侵入者達は2階に集まっている。

騒ぎを聞きつけ、脱出をしようとしているが、もう遅い。

2階から外に出られる、出口はすでに塞いでいる。

「今回はハズレだなあ」

面白い能力者でもいるかと、少しは期待したがここにいるのは全員レベル0。

流石の幻想支配でも、レベル0をコピーしても何も意味はない。

「つまらん仕事は、とっとと片付けるか」

脱出出来る場所を探して右往左往している、2階の連中の声を聞きながら俺は階段をゆっくりと上って行った。

その後数分でビルを制圧し、侵入者とスキルアウトのリーダーを拷問し終えて、尼視へと電話連絡をした。

『で、結局アツパーは、幻想御手と無関係のただの麻薬つて事かい?』

「ああ、最初に睨んだ通り、外で出回っているタイプより強力な奴を、学園都市の能力者相手に使うのが目的だったらしい。ま、能力者に出回る前に釣れたのがレベル0の不良共ばっかりなのは、奴らも誤算だったみたいだな」

『なんとまあ、学園都市を実験場にしようって野望を企てる割には、随分とお粗末な事だ』

「全くだ。能力者用の麻薬の類は、こつちじゃもう結構あるつてのにな。そのデータを

餌に、釣りでもしてみるか？」

『そいつは面白そうだが、今のお前のオーダーは違うだろ？ そっちの進展は？』

——都市伝説として広まりつつある幻想御手の実態を掴み、首謀者とサンプルを入手する事。また、幻想御手使用者に対して、幻想支配を使いどのような効果が出るか確認する事。

学舎の園での一件の後、尼視から出た新しいオーダーがこれだ。

幻想御手、名前のみならどこかで聞き覚えがある程度の認識だった。レベルを上げる事が出来る夢のようなアイテム、それが幻想御手。

尼視曰く、学生の間で少し前から話題となり、最近になってただの都市伝説ではなく、実在するものだという。

「全然だめだな。幻想御手の使用者の情報はそっちじゃ分からないのかよ」

『さーねー』

いつもこれだ。肝心の情報は明かささない。自分で調べろと言う。何かしら理由があるのか、それとも単に俺に探させたいだけか、両方だろうな。

「お前の情報なんかアテにするだけ無駄だしな。こっちで適当に探ささ。今回の報酬、ちゃんと振り込んでよ」

『まあまあ、そんなに拗ねるな拗ねるな。1つ面白い事を教えてやろう』

「……もつたいぶつてないで早く言え」

『最近、爆弾事件が相次いでるのは知っているな?』

「ああ、虚空爆破事件だろ?」

虚空爆破事件。1週間ほど前から学園都市の各地で怒っている連続爆破事件。

使用されているのは、アルミを基点に重力子を加速させる事で爆弾へと変化させる能力とは分かっているが、それ以上の事は不明。

俺も昨日、爆破現場に行った事はあるが、レベル4クラスの威力があった。

『アレ、どうやらレベルに合わない能力者の作業らしいんだよなあ。該当するレベル4の能力者は全員アリバイ確認できたみたいだし』

「なるほど。そんな簡単に能力者特定されちゃうバカは、こんな事起こさないだろうけどな」

『と言うわけで、お前のお気に入りがいる110支部に行ってみたらどうだ? 色々聞けるかもよ、何でも屋さん?』

「110じゃなくて177だ、てめえに110番してやろうか、コラ」

そこで一方的に電話を切り、バイクに跨る。

確かに、虚空爆破事件は不可解な点が多い。あまり風紀委員、と言うか美琴や黒子達に関わらない事件から追って行きたかったけど、仕方ないか。

「でもまずは、マンションに戻ってシャワーでも浴びるか。バイクも替えたいし」
侵入者の首謀格を除いた総勢19名を殺して返り血は浴びていないが、匂いは色々付いたからな。

「まさか……バイクが壊れるとは、マメにメンテナンスしてたんだけどな」

自室に戻り、着替えを済ませいざバイクで情報収集にと思った所で、普段私用で使っていたバイクが煙を吹いた。

もう1つの方ならともかく、こっちは変な運転やら無理はさせていないのにとぼやきながら、行きつけの修理屋まで運んで、歩いて177支部に向かう事にした。

「ん、涙子に美琴。こりやまた珍しいコンビだな」

「ユウキさん、こんにちは」

「げっ、なんでアンタはまたこんな所にいるのよ」

その途中、公園の outlet に並ぶ2人を見かけて声をかけた。

涙子はともかく、美琴なら何か知っている事があるかもしれないと思ったからだ。

そして、なぜか俺が涙子にドリンクを奢られる事になり、3人で公園のテーブルに座った。

「ユウキさん、この前は本当にありがとうございました！」

「いきなりなんだ？ この前のつて学舎の園の一件か？ あれは介抱したの美琴で、俺は特に何もしてないぞ？」

あの後、黒子から詳しい経緯を聞いたが、最終的に解決したのだから美琴だったしな。「佐天さんが言ってるのは、その事じゃないわよ」

「そうです、これですよこれ」

そう言つて涙子は前髪をかきあげ、おでこを見せつけてきた。

そこで俺はようやく涙子が何を言いたいのか理解できた。

「あー眉毛のインクちゃんと落ちたんだな」

「はい！ もう一週間は落ちないと聞いた時はとんでもなく落ち込んだんですけど、ユウキさんが送ってくれた化粧品のおかげですぐに落ちたんですよ」

学舎の園で涙子は、視覚障害を使った重福省帆によつてマジックでぶつとい眉毛を描かれた。

しかも、そのマジックは一度塗られると一週間は落ちない特別製だった。

俺は、なんとなくそんな予感がしたので、マジックやインクを人体から落とす化粧品を涙子に送つたのだ。

「女の子があの眉毛で一週間つてのは、酷だと思つてな。俺の知っている研究所でその手の化粧品取り扱つてたからな、たまたまだ」

「本当にありがとうございました。ユウキさんは命の恩人です!」

「大げさな子だな、涙子は。でも、美琴もこれくらい素直だったなあ」

チラリと意味ありげな視線を向けると、美琴はムツとした表情を浮かべドリンクを一飲みした。

「アンタ、そういう所細かいわよねえ。それでいじわるな所がなきや、結構モテると思うのに」

「一言余計だ美琴。あの画像をばら撒くぞ」

「だから、いつまで持つてるのよアンタは!! いい加減に消しなさい!」

「あ、あはは。まあまあ御坂さん、あの画像結構可愛いじゃないですか」

涙子が苦笑しつつフォロー(?)したが、すぐに沈んだ表情を浮かべた。

「ホント、美坂さんもユウキさんもすごいですよね」

「涙子?」

いきなり何を言うのかと美琴と顔を見合わせる。涙子は何か思い悩んでいるのは分かるが、それに俺の名が出て来るのが分からない。

「初春も白井さんは風紀委員頑張つて、御坂さんはレベル5ですごいし。ユウキさんも何でも屋として色々顔利いてて活躍もして、私はな……って思っちゃって」

「うーん、同い年の黒子や歳近い美琴は分かるが、俺を比較対象にするのは色々間違つて

るぞっ。」

と云うか俺自身涙子が思うほど、すごい人間ではない。悪い意味ではすごいけど。ついさつきも19人やつちやつたんだZE☆とか言ったらどんな反応するだろうな……言わないけど。

「そうよ、コイツは特別な、バカだけど、器用貧乏と言うか、DSだし、いじわるだし」美琴が何か言っているが、涙子に何を言いたいのか分からない。

「美琴、とりあえず、あの画像。みさきちに送ったから♪」

「なんですってー!? よりにもよってなんでアイツに送るのよー!?」

あまりにヒドイ言われようなので、ついあの画像を送信してしまったが、俺は悪くない。

「あ、送り先間違えた……当麻に送っちゃった」

「ぎゃー!? もっとダメじゃない!!」

美琴はムンクの叫びのような面白い絶叫から一転、顔面蒼白で絶望感丸出しになった。

うん、こういう反応してくれるからコイツはからかい甲斐がある。

「み、御坂さん。女の子が発しちやいけない叫びあげてますってー!」

「まあこういう風に涙子が憧れ抱いているレベル5だって、実際はこんな事するバカな

女の子だぞ?」

「ば、ばかは余計でしょ、バカは!　　っていい加減あの画像消しなさいよー!」

飛びかかってきた美琴を片手で止める。構わずブンブン腕を振ってくるが、こいつの腕の長さじゃ当たらない。

「ぷっ、ははっ、あはははは!」

「涙子?」「佐天さん?」

突然笑いだした涙子に俺と美琴はポカーンとした。

「ご、ごめんなさい。なんだか2人が仲のいい兄妹に見えて、それが何だかおかしくつて」

「きょう、だい?」

俺と美琴が?　美琴が、妹?

「うーん、何だろ。寒気がして鳥肌立ってきた」

「って何失礼な事言ってるのよ、こっちだっであんたみたいなのが兄貴だなんてゴメンよー!」

「だよなー。美琴が妹だと、掃除ロボや自動販売機やら発電所の損害賠償請求が沢山きそうだもんなー」

「ちよっと、それどういう意味よ!」

「言葉通りだ」

心当たりが沢山ある美琴はシラーっと冷や汗を流しながらも、文句を言ってくる。

それを見て涙子が更に爆笑。周りの学生達は何事かとこつちを見て来るが、俺達がその視線に気付くには少しかかった。

「ところで、ユウキさんは幻想御手って聞いた事ありますか？」

いい加減、虚空爆破事件の事を切りだそうとした時、涙子から意外な事を聞かれた。

「名前のみならな。確か使えばレベルが上がるっていう都市伝説だろ？」

「そうです！ ユウキさんもそういうの興味あるんですか!？」

「いや、まあ話に聞いた程度だけだな」

美琴はこういう都市伝説には興味が無いと言う顔をしているが、俺にはそういう趣味があると思ったのか涙子はさらに身を乗り出してきた。

「同じ都市伝説の【脱ぎ女】がいたんですから、幻想御手もきつと……あー!」

脱ぎ女って何だよ……ただの露出狂の痴女じゃん。

「そう言えば、ユウキさんに聞こうと思ってた事あるんです。ユウキさんって……【能力をコピー出来る】っていう都市伝説の人なんですよね!？」

「へっ?」

藪から棒とはまさにこの事。いきなり俺が都市伝説の人と言われてしまった。

しかも、能力をコピー出来るって、確かに幻想支配の事なんだろうが、俺がそれだつてなんで涙子が知っているんだ？

と、ここで美琴がアチャーという表情を浮かべ、こちらをちらちらと見てきた。

「美琴、お前か」

「いや、そのこの前都市伝説の話をしてて、その中であんたの事っぽい記事見つけて、それで……つい、あんたの名前出したのよ。黒子や初春さんはわざと触れなかったんだけどね」

なるほど、幻想支配の事はそこまで秘密にしている事じゃない。

けどあまり人に広まりたくないから、よく知っている黒子や飾利、美偉先輩には言わないでくれとは言つてはいた。

「まあ、いいさ。いずれ分かる事だし。俺も結構目立つ使い方しちゃってるから、今更だしな」

主に暗部系の仕事で使いまくっている。幻想支配は便利に見えて、不便なところも多いから知られると厄介な時もある。

「あーえつと、そのやっぱいいです。なんだか、聞いちゃまずい事みたいですし」

涙子はどうやら、俺から幻想支配の事を詳しく聞きたがつていたみたいだ。

都市伝説や噂話が好きななのはこの年頃の女の子なら当たり前、か。

「別に構わないさ。美琴や黒子達には教えて、涙子には秘密にする理由ないしな。えつと、美琴、お前の力使うぞ」

「しようがないわね。使用料高いわよ？」

「ふんっ、後でクレープでも奢ってやるよ」

軽口を言いながら、美琴を見つめる。実際に見るのは体のどこでもいい。【御坂美琴】
と言う存在を視れればいいのだから。

「あ、ユウキさんの目が……青くなった？」

「俺の能力は、幻想支配。これを使うと視た相手の能力を自分のもの出来るんだ。で、使用中は目が青くなっちゃうから、相手に使ってる事がばれやすいのが欠点の1つかな」

美琴の能力を発現し、俺が飲みほしたアルミ缶を空に投げ、それを磁力で操作し近くのゴミ箱へと放り投げた。

「とまあ、こんなものかな。黒子や飾利がいれば2人の能力も使う所見せれるけど、今は美琴のみだ」

「相変わらずわけの分からない能力よね。これでレベル0なんだから」

「れ、レベル0なんですか!?! そう言えばこの前もそう言っていましたよね。レベル5の

御坂さんの能力も使えるのに!？」

俺が美琴の電撃を使った事にも驚いたが、それ以上に俺がレベル0だと言う事を思い出し尚の事驚いた。

「俺の能力はメカニズムと言うか、仕組みや理論がさっぱり分からないって事でレベル0扱いなんだよ」

「そうよね。私の能力使っている間も、私が目の前にいるような奇妙な感覚するし。アంత一回解剖してもらった方がいいんじゃない?」

「物騒な事言うなよ美琴。何回かされかけたんだから」

「さ、されかけたの!？」

「す、すごいですね。ユウキさん」

「それは流石に冗談だ」

「あ、そうですよね、あははは……」

今さらだが、涙子には俺の能力を黙っていた方が良かったかもしれないな。

涙子は自分がレベル0だと言う事にコンプレックスを抱いている。

で、目の前にレベル0でも能力を持っている人間がいる。

それが、劣等感に繋がるんじゃないかと、少し気になったが、当の本人はなぜかやる気が満ちてきたようだ。

「よーっし、脱ぎ女もいて、能力をコピーする人もいるなら、きっと幻想御手だつて存在しますよね?!」

「あ、あると良いわね。ねえ、ユウキ?」

「ああ……そうだな」

こうも前向きだとは思わなかった。でも、これで涙子が幻想御手に更に興味を持たば、色々情報を手に入れて来るかもな。

案外、裏の人間である俺よりこういう子の方が早く真相にたどり着く事もある。

けれども、この幻想御手、どうにも暗部と言うか学園都市の【闇】の気配するから、美琴や涙子みたいな表の人間は関わらない方がいい気がするな。

つづく

第23話 「爆弾魔」

その後、待ち合わせがあるとかで美琴達とは別れた。

特にこれといった情報は仕入れれなかった。ま、美琴は幻想御手にも爆弾事件にもそこまで興味を持っていないようだが。

涙子の方は幻想御手に興味津津なのが少し気がかりだ。

と、考え事をしながら何となくブラブラしていると、セブンスミスト近くまで来ると当麻が小さい女の子に話しかけられているのが見えた。

「アイツ、とうとう幼女にまで好かれる体質になったか」

当麻は不幸体質だが、それと同時にフラグ体質でもある。

女の子を助けて不幸に巻き込まれるが、同時にその女の子に好意を持たれるという何ともバランスが良いと言える体質の持ち主。

「おーい、当麻。何幼女をナンパしてるんだー?」

わざと大きい声で当麻を呼ぶと、案の定周囲の視線は釘付けになった。

「おいこら、ユウキ! 何誤解を招く事を大声で言ってるんだ!」

「あつ、違った? なら、幼女にナンパされたのか。相変わらずモテモテだな、幼女に」

「だから違うって言うてるだろ！ 見ろ、周りの皆さまの冷たい視線を……って何だか暖かい視線に変わってる!？」

まあ可愛いわね。だの、青春じゃん。と言う声がちらほら聞こえてくる。

「ああーもう、こっちはいい！」

いきなり手を引つ張られ引きずられるように、近くにあったセブンスミストに連れ込まれた。

当麻と話していた幼女は、にこにこ笑いながら後についてきていた。

「お兄ちゃん達おもしろいねー」

「面白いのは、このウニヘッドだけだ。」

「誰がウニ頭だ！ はあ……不幸だ」

「ま、この子にセブンスミストの場所でも聞かれたんだろ。とつと案内してやれよ」

「分かってたんならあんな事言うなよ！ はあ……行きたい売り場はこっちにあるから、行こうぜ」

「はーいー！」

そんな溜息ばかり付くと、少ない幸せがますます逃げる事になるぞー。

と、心の中で言いつつせつかくなので、俺も店内を見て回る事にした。

学校がある日は制服でほぼ過ごし、仕事が入った時は私服だけどそれも防弾や耐衝撃

などが組み込まれた服を着ている。

こうやって外をぶらぶらと歩き回る時の私服もあるが、数は少ない。

「少し私服買うか、っ!？」

その時、一瞬だけ何か不穏な気配を感じた。

学舎の園で感じたような、見えない人の気配などではなく、純粋な敵意や悪意のような物。第六感で感じる、見えない物。

木原であるがゆえに自然に身に付いた探知能力のようなもの、と数多は言っていた。それが何かを感じたなら、このセブンスミストで何かが起きる。

不穏な気配の出所は分からない以上、セブンスミストをしらみつぶしに回るしかない。

「……買い物は次の機会だな」

当麻と同じく、俺も溜息をつきながら、セブンスミストに入って行った。

そして、セブンスミストを歩き回ったが、これと言った収穫はなかった。

強いて言えば、4階で美琴の姿を見かけた事か。

涙子は少し離れた場所にいるのか、俺が隠れた物影からじや姿は見えない。

美琴は子供趣味全開のパジャマを買おうとしている姿を動画で撮ったくらい。

そこへなぜか当麻も現れ、いつも通りの光景を見る事もできた。

「ここで俺も混ざっても良かったが、特に面白くもなさそうだから止めた。

「うーん、なんか変な感じはするけど。どこで誰が、つてまではいかないな」

屋上階段付近にある休憩椅子に腰かけ、情報を整理し直す事にした。

懐から取り出した特殊なPDAを操作し、風紀委員のデータベースにアクセスする。

「こう言う時、木原の技術や権限が役に立つのは、正直腹立たしいが使える物は何でも使う。」

「爆弾は初めのうちはただの空き缶やスプーンだったが、ぬいぐるみの中に偽装されているようになった、か」

偽装工作は発見を遅らせる為だと思う。でも、目的が読めない。

場所や建物を破壊できるような威力ではない。

爆弾事件のあった個所を見てみたが、何も重要な施設なども近くなかったのコンビニだつたり様々だ。

「なら、人を狙った？」

それなら直接本人に送るか、その人の活動範囲に置くはず。

再び被害状況などを見直したが、そういう形跡はない。

「爆弾は重力の変動が探知される為、被害者は最小限に抑えられて死亡者もなし」

普通の爆弾と違い、どんな偽装をしてもアルミを加速させて爆発させるので兆候が捉

えやすい。

「不特定多数か本命を狙う為の実験、みたいなものかそれとも……ん？ 被害者は主に風紀委員それも9人？」

爆発の兆候が観測された現場で、処理中に巻き込まれるのは主に風紀委員だからおかしくないとも言えるが、数が多い……なら、最初から狙いが風紀委員だとすればどうだ？

爆発の危険性が分かれば真つ先に風紀委員が動く。それを逆手にとれば、風紀委員を狙いやすくなる。

携帯を取り出し、風紀委員の固法美偉先輩に電話をかける。

黒子や飾利にかける方が自然だが、狙いが風紀委員全体である以上、指揮系統の上位にいる美偉先輩に書けた方が良いと思っただからだ。

『ユウキ君？ 今ちよつと立てこんでるから話なら……』

「美偉先輩、虚空爆破事件の狙いは風紀委員だ。今すぐ第7学区にいる全員に連絡して注意を促した方が良い」

『えっ、ちよつといきなり何を？』

「虚空爆破事件の負傷者は全員風紀委員だ。犯人の狙いは風紀委員の可能性が高い」

『こ、これは……なるほどね。分かったわすぐに皆に連絡を……ちよつと待つて！』

電話口の向こうと、俺のPDAからアラートが発せられた。

みてみると、衛星が重力子の加速を確認したようだ。

場所は……ゼブンスミスト!?

「俺にも重力子異変の情報はきた。そして今、ゼブンスミストにいる……」

と、そこまで言って、俺はハツとして急いで階段を駆け降りた。

美琴は誰かと待ち合わせしていると言った。美琴と涙子が待ち合わせる相手は大抵黒子か飾利、もしくはその両方……なら!

「美偉先輩、黒子と飾利はそこにいますか!?! 嫌な予感がするんだけど」

『白井さんがいるわ。初春さんは外出中で白井さんが今電話をしている所よ……まさか!?!』

電話の向こうで、何ですって!?! という黒子の声が聞こえた。

恐らく飾利がゼブンスミストに居る事に驚いているのだろう。

『あなたの勘ってどうして悪い方ばかり当たるのかしら。初春さんはゼブンスミストにいるそうよ。白井さんも今向かっているから、あなたも早く逃げなさい』

「……ああ、了解」

爆発は毎回大きくなっていつている。前回の規模を考えると、今回は広範囲で被害が出るかもしれない。

周りがセブンスミストから逃げる人々で混んできた。爆弾がどこにあるか分からない以上、俺もここに居るのは危険……と思うのが普通だ。

でも、ピンチとチャンスは同時にくる。

爆破した後の遺留品を視ても、意味はない。が、爆発前の爆弾を幻想支配で視る事が出来れば……犯人は追える。

『お客様に申し上げます。店内で電気系統の故障が……』

「こう言う時のいつものアナウンスだな」

店内に閉店のアナウンスが流れ、客が次々と避難を始めているのを横目に目的の場所へ急ぐ。

エレベーターは、この非常時に使えなくなるのは分かっていたので、階段で駆け降りているのだが、こんな事なら屋上になんかいなきやよかった！

先程、美琴を見かけた階にはいなかったでセブンスミスト中を走りまわって、ようやく当麻と美琴を見つけた。

「当麻！ 美琴！ ここは危険だ、早く逃げろ！」

「ユウキ、ちようど良かった。さっきの女の子見かけなかったか!? はぐれちまったんだよ！」

「あの子が？ はぐれたのか!？」

と、そこへ飾利を見つけた。駆け寄りながら、逃げろと言おうとした時。飾利に走りよるあの子の姿が見えた。

そして、その手に抱きかかえられたぬいぐるみの姿も。

急いで幻想支配でぬいぐるみを視ると、AIM拡散力場の反応があった、やはりあれが爆弾！

「飾利、その子のぬいぐるみを遠くに投げろ！ それが爆弾だ！」

「は、はい！」

飾利がぬいぐるみをほ降り投げ、女の子を抱きかかえてうづくまる。

投げ飛ばされたぬいぐるみの顔が内部に歪み、圧縮されていくのが見えた。

もう爆発まで数秒もない。

「まずい、美琴！」

「分かってる！」

美琴もあれが爆弾だと早くに気付いたようで、ポケットからコインを取り出しレールガンを放とうとした……が、肝心な時にコインを落としてしまった。

ただの電撃では意味がない。俺も美琴の能力コピー出来ても、コインを持っていないのでレールガンが撃てない。

あのぬいぐるみを視る事は出来ても、とっておきの切り札は使えない。

アレは能力者本人を視なければ使えない。

「っ！」

俺は最後の希望に声をかけようとしたが、既に当麻は駆け出していて、飾利と女の子を守るように前に立ち右手を構えた。

その瞬間、フロア全体に爆炎と爆音が響き渡り、目の前が真っ白になった。

セブンスミストから少し離れた所で、メガネをかけた学生が狂ったように笑っていた。

「くつくつくつ、今度こそ死んだだろう。もう少しして支部にでも送りつければ、無能な風紀委員共はみな殺しに……」

「うっさい」

「ゲフツ!!」

もうこれ以上クズの声を聞きたくなかったので、手加減して蹴り飛ばした。

そして、蹴り飛ばした先には美琴が仁王立ちして、クズの退路を塞いでいる。

「な……なんだお前は!?!」

「お前にそれを答える義務も義理もないし。お前がそれを知る意味も資格もない。お前

に許されるのはたった2つ、選択と質問への回答だ」

「せ、選択だど!？」

「ああ、レベル5のレールガンを食らうか、それとも俺にぼっこぼこにされるか……どっちがいい、爆弾魔さん？」

「爆弾魔？ な、何の事だが」

爆弾魔と呼ばれ、学生はぎよつとしたがすぐにしらばつくれた……つもりらしい本人としては。

「大した威力の爆弾だったわね。けど、残念。風紀委員の子も誰も怪我どころか、かすり傷一つしてないわよ？」

「バ、バカな。僕の最大出力だぞ!! はっ!？」

美琴の言葉にかみついたが、すぐにしまったという顔になった。

「別にお前がボロを出さなくても、俺にはお前がああ爆弾を作った能力者だつてことは分かっているんで、無駄な抵抗はやめておけ」

「覚悟しておきなさい。今の私達、手加減できる自信ないから」

ゲーセンのコインを指で遊びながら美琴は笑顔だったが、内心ではすごく怒っているのが学生にも理解出来た。

「レベル5の第三位、常盤台の超電磁砲か！」

学生が鞆からスプーンを取り出し、能力を発動させようとしたが何も起こらない。

レールガンを放とうとしていた美琴も、怪訝な表情を浮かべている。

「な、なぜ……なんで能力が使えない!」

「俺が支配しているからだ、クズ野郎」

「目、目が……青い!?!」

今この学生が能力を使えないのは、俺が幻想支配で封じている為。俺の切り札【能力封じ】でだ。

幻想支配で能力者を視る事で、その能力を全て封じる事が出来る。

さっきの爆弾は能力者が発動させた事象だった為、幻想支配で視てもコピーも封じる事も出来なかったが、能力者自身を視ている今は違う。

今の俺は、コイツの能力を使う事も封じる事も出来る。

「お前に質問する……あの子に爆弾入りのぬいぐるみ渡したそうだが、あの子も犠牲になるって考えなかったのか?」

さっきの女の子は目の前にいるクズ学生に、風紀委員のお姉さんにぬいぐるみを渡すように頼まれたそうだ。

あの爆発の規模では、あの子も巻き込まれる可能性は十分に……いや、确实だっただろ。

「そ、そんな事知るか！ 大体無能な風紀委員が悪いんだ。お前らみたいな力ある奴がいつもそうだろうが！」

「……そうか」

その叫びに美琴が無表情のまま、歩き出していたがそれより早く、俺がこのクズの腹を殴っていた。

「お前は高位能力者や権力ある風紀委員みたいな力のある奴が嫌いか、だからあんな小さな子が巻き込まれても自分のせいじゃないと。そうかそうか、だったらさ……」
この時俺がどんな表情だったか分からないが、目が見開く程に驚く美琴を覗いてどんな表情しているかは分かった。

「レベル0の無能力な俺が、徹底的に潰してやるよ」

腹を抑えうずくまる学生の顎を蹴り飛ばし、更に回し蹴りを脇腹に放ち壁に叩きつけた所で、トドメの一撃を放った。

「や、やりすぎでしょアンタ……」

「別に、脳味噌や臓器に影響が出ない個所に、それなりの力でやったから後遺症は出ないはずだ。アザとかも残らないようにやったしな」

傷跡が残らないように、骨や臓器に異常が出ないように拷問するのは慣れっこだしな。

「後は、任せませ黒子」

ふり返りながらそう声をかけると、黒子が手に持った金属矢を太もものホルダーにしまっていた。

「暴行罪として現行犯逮捕、と行きたいところですが、正当防衛として認めておきますわ。貴重な情報提供の借りはこれでチャラと言う事で」

「あの程度の情報、お前ならすぐに気付けそうだけだな。ありがとさん」

黒子は風紀委員が狙いと言う情報の事を言っていたが、あの程度美偉や黒子なら気付けただろう。

飾利も含めて一七七支部は皆優秀だからな、だから俺もよく情報収集で利用しているんだし。

「ちくしょう……ちくしょう」

学生は、意識はまだあるようで、恨み言を呟いていた。

これ以上関わる気はないので、さっさとその場を後にした。

後で聞いた話では、美琴があいつに自分は、元はレベル1で、必死に努力してレベル5になった事を話したらしい。

力を言い訳にするような奴、美琴が一番嫌いなタイプだしな。

セブンスミスト近くに戻ると、当麻が俺を待っていた。

「よっ、お疲れユウキ。片付いたのか？」

「勿論。後は黒子に任せた。そっちは大丈夫だったか？」

「ああ、結構怯えていたけどさっきの風紀委員の子が色々話しかけたりして、どうにか落ち着いたよだから俺の出番は終わりだ」

「それにしても、今回ばかりはお前に助けられたな。俺じやどうにもできなかったし」

あの爆発の時、俺にはどうする事も出来なかった。

当麻が間一髪間に合って、右手の幻想殺しで守ってくれたから誰も傷付かなかったが。

「黒子や飾利達は、美琴が何かして助かったと思ってるようだけだな」

「ははっ、結果的に皆助かったんだから問題ないだろ」

……多分、明日にでも美琴がその事で突っかかってきそうだが、それは黙っておくか。「お前らしいな。んじや、今日は晩飯奢ってやるよ。恩人だしな」

「なにー!? ユウキが奢りだど!? 明日は雪か、槍か、それとも地球最後の日かー!?」
「すごく失礼な事言ってるなお前」

オーバー、と言うか当麻の場合心の奥底からそう思ってるだろうな。

「せつかくとある高級役肉店の割引チケット手に入れたから行きたがってたお前をつれ

て行こうと思つたが、そこまで言うなら俺一人で行くさ」

「嘘です、前言撤回します！　だから連れてつてくだせえ、ユウキ様あ！」

おお、見事な土下座スタイル。でも街中でやるなよ……

「分かつた、分かつたからその三文芝居を止めろ……でも、お前なら貧乏なお百姓役似合うだろうな」

「お前の方が失礼な事言ってるだろうが！」

当麻と軽口を叩きながら、俺は尼視への報告についてどうするか迷っていた。

さっきの学生を幻想支配で視た時、巨大なプールに落ちたような浮揚感と、何かに無理やり頭を引っ張られるような感覚。

今まで味わつた事のない感覚に襲われた。

恐らくアイツは、幻想御手を使つていたのは間違いない。

明日、読心能力をコピーして面会に行くかな。

つづく

第24話 「幻想御手」

7月19日

爆弾魔である介旅初矢に会う為、正確には彼の記憶を読みとる為に面会に来た。

が、思っていたよりあいっつのでかした事が大きくて、まだ警備員の取り調べ中との事で会えそうにない。

会う方法はいくらでもあるが、そこまで焦って会う事ではないと判断した。

「ま、幻想御手の事とかは警備員にもそれなりに情報流したし、何かあれば取り調べですぐに分かるか」

最も、都市伝説レベルの話なので、警備員も本格的に疑うかは怪しいが、そうなれば俺自身で調べ直すだけ。

それに介旅初矢はレベル2だと言う事も改めて確認されたと言うし、これで幻想御手の使用者と言うのは濃厚だ。

「おっはよ〜ん。な〜に、朝から難しい顔をしてるんだい、ユウキく〜ん？」

「青じ、キモイからその口調は止める。次は問答無用で殴るぞ？」

「あつはつは、明日から夏休みになるからって、無駄にハイテンションになるのは仕方ないぜよ、ユウヤん」

などと教室で一人考え事をしてしていると、ハイテンションな青ピと学校にいるからか、呼び方がフランクモードになってる元春に声をかけられた。

「2人共おはよう。あれ、当麻はまだか？」

「うーん、俺より早く出たはずなんだけどにゃー」

「またどこぞで女の子相手にフラグ立てとると違えますん？　くうく、想像しただけで腹立たしいわあ」

元春は当麻の隣の部屋に住んでいる。青ピもしょうもない予想をして、一人怒りに燃えているが当麻の事に関しては割と当たるんだよな。

なんか道に迷った女の子を送ったり、落し物した女の子に出会って一緒に探したり、不良に絡まれた女の子を助けて逃げ回ってたり……アレ、これ全部何回かあった事だな。

「ユウヤん、ユウヤん。お前さんも青ピと似た顔してるぜい？」

「何?!　それはまずい。青ピ菌に感染してしまったかも、今日は早退して病院で精密検査してもらわねば」

「それなら今日は終業式で午前中で終わるからびったりだにゃー」

「ちよ、人を病原菌扱いするのやめてもらいます!？」

その後、始業ベルギリギリでようやく当麻がやってきた。

今日遅れそうになった理由は、女の子の落し物を一緒に探してたら犬の尻尾を踏んで逃げ回っているうちに、ドンドン学校と反対方向に行ってしまったから。

ちなみに、当麻の遅刻理由について密かに賭けをしていた俺らは見事に誰も当たらず、賭けは不成立となった。

今日は1学期最後の日なので、午前中は終業式とHRだけで終わり、皆は明日からの夏休みをどう過ごすか話しながら帰って行った。

俺は元春を屋上の人目が見つからない場所に呼び、情報を収集する事にした。

「で、こんな屋上に呼び出して何の用だ、ユウキ? まさか告白……じよ、冗談だにやー。振り上げた拳をおろしてほしんだにやー!？」

「つたく、俺は今幻想御手について探っているんだが、そっちで何か掴んでないか?」「ふむふむ、あいにくと最近そっち方面は手薄だったからな。あまり掴んでないぞ?」

あつという間にフランクモードから仕事モードに口調が切り変わる。

元春はここ最近学校で見かけなかったし、何か忙しかったんだろうな。

「そうか、こう決定的な情報がなくてな。イマイチ不確定情報ばっかなんだよな」

「都市伝説として祭り上げられてはいても、どれも本当のような嘘情報ばかりだ。結局は自分で地道に探すしかないぜ？ それかスキルアウトの連中なら知ってるかもな。あいつらこういうのには詳しいから」

「幻想御手作った誰かさんは、モルモットとして最適なスキルアウトにわざと情報流してるかもしれないな」

とすれば、あいつらに溜まった貸しを返してもらおうとするか。

「ありがとな。ところで、お前から見て幻想御手……どう思う？」

「木原のユウキからそんな事聞かれるってのは、何だか妙な気分だが……俺から見れば黒も黒、上から下まで真っ黒って所だ」

「……だよな」

それはつまり、幻想御手は学園都市の闇が関わっていると言う事。

尼視が情報出し渋っているのも、それが関係しているからだろう。

元春と別れ、俺はヅラ……浜面達に会う為にあいつらのアジトの1つにやってきた。

あいつらはちようどATM荒らしの計画を立てていたようで、俺が音もなく忍びよるとアタフタと慌てふためいた。

特に慌てたのが、以前ちよつとお世話をした2人、村櫛と礼拿だ。

「あ、ああああんたは?!」

「こ、この前はお世話になりました!」

「いや、今日はお前ら潰しに来たわけじゃないからそうかしこまるなよ、な?」

俺としては普通に良い笑顔で答えたはずなのだが、当の本人達は違つたとらえ方をしたように抱き合いながら怯えきってしまった。

「あまりうちのメンバーを脅さないでもらえないか、ユウキ」

「ただでさえあの一件で、こいつら駒場の旦那から制裁受けたんだからさ」

「別に俺は脅してるつもりはないっての、利徳、浜面」

ゴリラのような大柄な男、駒場利徳。そして、その横に付き添うようにやってきた浜面 面仕上。

こいつらは前から色々腐れ縁で、面倒を見たり厄介事を押しついたりしている。

今日はもう1人、忍びのはしくれである半蔵がいないようだ。

「それで、今日は何の用だ?」

「まさか……」

浜面がと机の上に広がった計画書に目を移した。

俺もさつきチラリと見たが、なかなか良くできた計画だった。

これなら楽にATMを盗む事もできるだろう……盗んだ後はすぐに捕まるだろうけ

ど。

「安心しろ、そんな計画を潰しに来たわけじゃねえよ。この前の、こいつらの貸し返してもらいにきた」

それを聞き、利徳と浜面は同時に深いため息をついた。

「分かった。貸しは貸しだからな。それで俺達は何をすればいいんだ？」

「幻想御手について何か知ってる事はないか？ なんでもいいんだ」

俺が幻想御手と言う単語を出した瞬間、数人がわずかながら反応した。

「何人かは知ってるって顔してるな」

「実は昨日、幻想御手をなかなかの高額で買わないかと話を持ちかけられたばかりだ」

なるほど。でも利徳の性格から言えば、恐らく……

「勿論、蹴ったがな」

「ふっ、だよな」

こいつが都市伝説上の未確認な怪しいブツに手を出すなんて、そんな危ない橋を渡るはずがない。

「そいつらのグループは情報が少ないが、溜まり場ならいくつか掴んでいる」

「半蔵。お前今までどこに行ってたんだよ」

突然この場に居ない声が聞こえ、浜面が後ろを振り向くと現代風忍者と言う服装をし

た服部半蔵が立っていた。

「駒場のリーダーから、昨日俺らに接触してきたグループが胡散臭いから少し探つてこい。と言われてたんだよ。まあ、あいつらが実際幻想御手を持つているかどうかは不明だぜ。ほれ、ユウキの旦那」

そう言つて俺にメモ紙を投げ渡した。メモには、話に出てきたスキルアウトグループの顔と溜まり場についての情報が書かれていた。

「サンキュウ、半蔵。ともかくこれから当たつて見るか。あ、そうだ。お前ら幻想御手には手を出さない方がいいぞ。色々とヤバそうな心配するからな」

「ああ、気を付けるようにしよう。何か分かれば連絡する」

「よろしく。それとあんまり派手に動くなよ。上層部の目に止まるような動きすれば、俺がお前ら消す事になるぞ?」

「わ、分かった……お前を敵に回すのだけは勘弁だ」

「同感。旦那に勝てる手段がうかばねえよ」

2割程度の冗談を交えた警告をすると、利徳達は心底嫌な顔をしつつ頷いた。

さて、意外に有力そうな情報手に入れたし、どこから周るかな。

割とこのグループ活動範囲長いな。

半蔵の情報にあつた溜まり場4件のうち、3件はハズレ。

残り1件はファミレス。晩飯もまだ食べてなかったんで、ちょうどいいかもしれない。

で、お目当てのスキルアウト達を見つけたので、早速接触してみようかと思つたが

……

「幻想御手について知りてえだあ？」

「うん！ ネットで偶然お兄さん達の書きこみを見つけて……」

なぜか知らないが、超ぶりっ子（死語）と化した学園都市最強の電撃使い、レベル5第3位の御坂美琴がそこにいた。

「はあ、この店に入る時から嫌な予感がしましたのは、このせいだったのですわね

……はあ」

「そんな嫌な顔するなよ黒子。俺だつて幻想御手の情報持つて来たんだからさー」

「それにしても、大丈夫でしょうか、お姉様。色々な意味で」

「俺も心配だな。色々な意味で」

ハンバーグセットを食べながら、向かいの席でメロンフロートを飲んでいる黒子に嬉しそうに話しかける。

なんでも、黒子と美琴も涙子と飾利の情報からこのスキルアウトの事を知り、接触を

「図ろうとしているらしい。」

それなら男の俺が行くよりも、まだガキな美琴の方が警戒心抱かないだろうと、美琴の探りを見守る事にした。

勿論、美琴本人は俺が見ている事など知るよしもなく、世間知らずなお嬢様設定のブリっ子（死語）を演じている。

「しつげえぞ。ガキはもうおねむの時間だ」

流石にこれで引つ掛ければ苦労はないか。

「え〜？ 私、そんな子供じゃないよお☆♪」

「っ!?!……くっ、くっ、くっ、ちよ、調査のために、カメラ持って来ていて、ぶっ、正解だな。」

大丈夫か、黒子？」

いつの時代のお嬢様設定をしているのか知らないが、三文芝居全開の美琴の演技に思わず嘖き出しそうになるのを押さえつつ、ここっそりと高性能カメラでばっちり動画に収めた。

黒子と言うと、耐えきれずメロンソーダーを盛大に吹きだしそうになり、思いつきりむせ返っていた。

「確かに子供とは思えないなあ。俺はあんた、好みだぜ」

「わ〜、嬉しいい♪♪」

半蔵のメモにロリコンの疑い大。と書かれていたが、こりや正解だな。

そこに小さく駒場のリーダーと同類？ と書かれていたが……これは見なかった事にしよう。

それからスキルアウトと美琴のセクハラまがいのコントは続き、黒子は発狂寸前となりテーブルに激しく頭を打ち付け始めた。

「はー……はー……はー!!」

「落ち着け黒子。過呼吸に陥ってるぞ？ 気持ちは分かるけど」

これは黒子でなくても誰でもこうなりそうだ。こうかはばつぐんだ！

「ぐすつ、私……私、ひぐつ、もう幻想御手しか頼れるものがないの、つぐ、だから……ダメ、かな？」

とうとう美琴の奴、泣き落としに入った!?! しかも涙まで浮かべて!?!

「」

あ、黒子の口から魂が抜き出ているような気がする。もう本来の目的が頭から抜け出ているなこりや。

そう言う俺もさつきから腹筋がヤバい。少し離れているとはいえ、ばれないように笑い声をかなり抑えるのはキツイ。

この動画は永久保存しておこう。

「つたく、しようがねえな。泣くな、教えてやるよ。幻想御手」

あ、今美琴、俯いたままものすごく邪悪で黒い笑み浮かべた。

俺でもあそこまで悪い笑みは……いつもしてるな、うん。

「わあありがとう、お兄ちゃん♪」

もう止めて、黒子のライフはゼロよ！

「ま、まあこれでやつと幻想御手の事が……ん？」

と、ここで嫌な予感発動。なぜなら向こうにとつても見覚えのあるウニ頭。そのウニヘッドは、溜息吐きながらこつちに向かつてきていたのが見えたからだ。

「これこれ、変態紳士ども。よつてたかつて女の子の財布を狙うんじゃないやありません」

「あつ？ なんだてめえは!？」

「(またお前・アンタか!)」

今絶対俺と美琴の心の声は一致したな。

で、これからの流れは、あれだな……トラップ発動、上条当麻のお約束という不幸だあ！ つてか？

当麻はこのロリコン共から、美琴を守る為に口出ししてきたんだろが、美琴そつちのけで口論になってしまった。

そのうちトイレに行っていた仲間がそろそろと現れ、形勢が不利とやつと分かった当

麻が逃走。

その間も美琴は諦めずに、ロリコン共に必死に食いつこうとしてるが、全部スルーされてた。

「あ、当麻が逃げた。それをロリコン共が追いかけて、美琴もそれを追いかけて……さて、どーしようか」

とりあえず、まだこつちの世界に戻ってきてない真つ白い黒子に伝票をちゃっかり渡し、当麻達を追いかける事にした。

「あ、会計は全部この連れが払う事になってるんで」

「わかりました。ご利用ありがとうございます。」

「えっ？ ちょっ！ な、なんで私があなただけでなく、あのチンピラどもの会計までしないといけないんですのー!?!」

「無銭飲食を未然に防ぐだなんて、流石風紀委員は違うなー♪」

まだ何か言ってきたる黒子の声援(?)を背に受けながら、ファミレスを後にする。ちなみに、後日黒子に今回の美琴の動画を渡す事でチャラにした。

……あれだけは絶対に消さないでおこう。

それから、少し離れた路地裏で美琴に黒子……くろこげにされたスキルアウト達の1

人を尋問したが、これが大外れもいい所だった。

「お前ら、実際は幻想御手の事はロクに知らない。金になりそうなバカなガキから法外な金をネコババしてただけ。って事でいいのか？」

「へ、へい……そう、です」

そう、こいつらあれだけ豪語しておきながら、肝心の幻想御手については何の情報もない。

と言うのも、こいつら自体別の相手から偽物の幻想御手を受け取っていたわけだが。

「………まあ、言いたい事は山ほどあるが、お前らみたいな雑魚に構ってるのはバカらしいが、一言だけ言っておく」

「な、なんででしょう?」

「このロリコンどもめ!!」

この時、背後で美琴が当麻に放った最大級の落雷が落ちたらしい。

何夫婦漫才してるんだあの2人は。

結局この日の収穫は、新しい美琴弄り動画だけだった。

つづく

第25話 「禁書目録」

7月20日

「……なんか、ダルっ。少し頭も痛いかな？」

寝起き一番で体全体が妙にダルい。風邪をひいたわけではなさそうだけど、これは精神的ストレスか？

せつかく幻想御手の有力な情報を手に入れたと思えば、全くのスカ大ハズレの残念賞。

おまけに美琴がバカしたせいで広範囲で大停電と来た。

俺の住んでるマンションには被害はなかったが、いくつかセーフハウスが停電の影響を受けたかもしれない。

後で、見周りに行かないと……その前に例の爆弾魔に会いに行くか。

そう思ったが、警備員の詰め所に確認した所、予想外の返答が返ってきた。

「介旅初矢が……急に倒れた？」

爆弾魔・介旅初矢が警備員の取り調べ中に急に倒れ、病院に緊急搬送されたいらしい。

捕まえる時に強くやり過ぎたか？ と一瞬思ったが、力加減は間違えてないし、俺が原因ならもつと早くに倒れるはず。

「となると、考えられるのは幻想御手の後遺症？」

と、こんな所で考えてても始まらない。急いで家を出て、病院へと向かった。倦怠感は大分抜けてきた。もしまた変になったら病院で診てもらうか。

病院に着くと、そこには美琴と黒子がいて、医者から説明を受ける所だった。

「美琴、黒子。お前らも来てたのか」

「っ、なんでまたあんたに会うわけよ」

「ユウキさん、昨日はよくも私に支払いを押しつけ……って、今はそんな場合じゃありませんわね。あなたも介旅初矢の件で？」

「ああ、それで介旅初矢の容体は？」

「突然意識不明となつて、最善は尽くしていますが戻る気配はありません」

医者の話を聞き、美琴と黒子が意味深な視線を俺に向けてきた。

「まさか……あんたがこの前やりすぎたせいじゃ？」

「俺は誰かさんと違つて力加減を間違えたりはしないぞ？」

「へえ、誰かさんつて誰の事かしらあ？」

「さあーな、誰かさんは誰かさんだ。それにしても暑いなあ、ここ冷房効いてないのか？ あ、そっかー昨日の停電騒ぎの影響かー」

わざとらしくそう言うのと美琴はぐむむと唸りそうな顔で睨みつけてきたが、まさか自分のせいとは言えず黙っている。

「ぐむむむっ……」

と思えば、本当に口に出して唸ってた。

「お、お二人ともこんな時まで何をしていらっしやるんですの。それで、外傷や脳に異常はありませんでしたか？」

「いえ、頭部どころか身体的な異常は全く見受けられません。それと……」

医者は手に持ったファイルを開き、俺達に見せてくれた。そこには患者リストとして数人の能力者が載っていた。

その中には以前学びの園で常盤台襲撃事件を起こした、重福省帆もいた。

「最近原因不明の昏睡患者が増えているんです。他の病院でも次々運ばれてくるようになります。それも全員原因不明で」

「ウイルスや細菌、精神操作系の可能性は？」

「その点も含めて精密検査は何度も行いましたが、何も検出されず可能性は低いかと」
外傷はなく、身体的異常もなし、ウイルスでも能力操作でもない……なら、残る可能

性は。

「それでも彼らには共通の何かがきつとあるはずですよ。それが分かれば……」

黒子の言葉を聞き、俺はPDAを取り出し2人に見えないように操作をした。

警備員、風紀委員のデータベース、更に学園都市の総合データベース【書庫（バンク）】にもアクセスする。

本来ならば一部の人間しか入れないデータベースばかりなので、黒子達には気付かれないように操作した。

その結果、分かった事がいくつかあった。

「少なくともこの病院に収容されている患者達は、幻想御手使用の疑いがあるな」

「どうしてそう言いきれなのよ？」

美琴に聞かれ、医者を持つているリストを指さしながら説明する。

「昏睡の患者、介旅初矢や重福省帆をはじめとした彼らは、みんな様々ないざこざや事件を起こしている。で、その全てが登録されているレベルでは起こり得ない事件になっているんだ。今言った2人も事件の時はレベル2程度の能力じゃなかったら？」

「確かにその2人は、レベル2や3程度の能力ではなかったですわね」

「じゃあ、幻想御手を使用すれば全員こうなっちゃうってわけ？」

「それに関しては、確定とは言えないけど、可能性は高いな」

そこへ看護師は1人やってきて、医者と何かを話し合っていた。

「情けない話ですが、当院のスタッフや設備ではこれ以上は限界なので、外部から大脳生理学の専門チームを招き入れる事にしました。そのチームが他の病院を見てからこちらに来る事になっています」

やはり、脳に何かあったと考えるのが普通だよな。大脳生理学の専門、冥土返しは別の病院で離れられないだろうし、他にもいくつか有名所は知っているけど、誰が来るかな。

何にしてもまだ来ないんじや、ここで待つても始まらないか。それに下手に俺が木原と知れば、良い顔しないかもしれないし、美琴と黒子に任せるか。

「俺はもうここに用はないし、任せた2人共」

「あら、意外ですわね」

「あんたも話聞くつもりじゃなかったの？」

「ここに来たのは介旅初矢の容体を聞きにただけだ。幻想御手に関しての事は後でお前らに聞くさ。それに、昨日の停電の後始末、しないといけないしな」

後半をわざとらしく強調して言うと、美琴はそれ以上何も言えずバツの悪い顔になり、黒子は額に手をあて深く溜息をついた。

病院を後にした俺は、バイクを駆り第7学区にあるセーフハウスの見周りをした。

セーフハウスは武器や爆薬などを揃えた武器庫や、スーパーコンピューターなど情報操作に向けたタイプなど様々ある。

その全てに水と食料、非常電源もあるがどれも正常に機能していたのが幸이었다。公園で一休みして、時計を見るともう1時を回っていた。

「結局昼過ぎまでかかったな。そう言えば、朝飯食べてなかった」

道理でお腹がすくはずだ。何を食べようかとベンチから立ち上がり、去ろうとすると視界の隅にふと白い何かが移った。

「何だあれ、布？ ゴミか？」

それは大きい白い布の塊のようなものだった。ゴミならすぐに清掃ロボが片付けるだろうと思っていると、その布がごくごくそと動き出した。

布の下からは銀色と水色が混ざったような明らかに髪の毛でだと思われるものが見えた。

「ひよつとして……人か？」

面倒事の予感があったが、好奇心と暇つぶしも兼ねてその物体に近付き、指で軽くつついてみる。

「……うゝ」

まるで壊れた人形のような細かい声が聞こえてきた。とりあえずは生きているようだ。

「なんだ、生きてるのか？　こんな所で寝てると、俺みたいな悪者が掃除ロボに拉致されるぞー」

「……お」

「お？」

「おなかへった……」

そう声を絞りながら白い人物は僅かに顔をあげた。

顔や声でこの物体は少女と分かり、学園都市に似つかわしくない服装をしている事から外部の人間と判断。

「侵入者か？　そうとは思えないけど、ま、どうでもいいか」

放置するのが一番だが、どうにも餓死寸前の様子の子を放っておくほうが後で面倒そうだ。

念の為幻想支配で視てみるかと思ったが、何か変な感じがしたので止めた。

外部の人間を視てもどうしようもない事が多いしな。

仕方なく少女を抱きかかえ、近くに見えるバイキングレストランに向かった。

何となく……本当に何となく勘で普通のファミレスよりこういう方が良いと言う予

感がした。

「今回ほど俺の勘に感謝した事はないかもな」

「ん？ どうしたの？」

目の前の少女がテーブルに満載した料理の山を一気に平らげて行くのを見て、つくづく自分の勘の鋭さに感謝する。

食べ放題のバイキングでこうなのだ。ただのファミレスだったら、恐らくメニューに乗っている料理全部食べきってしまう事だっただろう。

こんなチビっ子のどこにあれだけの料理が詰め込まれているのか、尼視が知ったら解剖したがるだろうな。

「んぐんぐつ、ふうー……たくさんごちそうしてくれて、ありがとうね」

「満足してくれたようだなによりだ。んで、お前は一体どこの誰だ？ 学園都市の人間じゃないだろ？」

「うん、私の名前はインテックスって言うんだよ。あなたの名前は？」

「俺の名はユウキだ。変わった名前だな、日本人には見えないからそういう名前もいるか」

外国人にも数人あった事はあるけど、学園都市から出た事があまりない俺には外国人は新鮮だ。

歳は美琴とあまり変わらなさそうだな。見た目はぱつと見可愛い部類には入るか、その道の人間が見たらお持ちかえりしたくなりそうな人形のような少女だ。

「本当はもつと長い名前があるんだけど、インデックスが一番わかりやすいと思うから」「なるほど、で、インデックス。次の質問、お前あんな所で何してたんだ？ 今更だけど、お前シスターだよな？」

本物の修道女は見た事ないし、教会とは無縁なのではつきりとは断言できないが、こういう格好の人をテレビや本で見た事はある。

「そうだよ。私はイギリス清教のシスターだよ。何をしていたのかって聞かれると……朝、魔術結社から逃げるの失敗してとうまの部屋のベランダに引つ掛かってそれで……っ!？」

そこまで言つてインデックスは何かを思い出したのか、顔を真っ赤にして自分の服をギョツと抱きしめるように掴んだ。

いや、そんな事よりも気になる単語がいくつか出てきたぞ？

「俺の聞き間違いでなければ……魔術結社？ それにとうま？ 前者はともかく後者はとんでもなく聞き覚えあるんだが、まさか上条当麻と言うウニヘッドの事か？」

「えっ、とうまを知ってるの!？ あなたとうまのお友達なの!？」

あつ、やつぱりか。話は大体わかった。経緯は知らないけど、当麻が助けた女の子そ

の百、いや千か？　ともかく当麻が助けた女の子の1人って事か。

あの天然フラグメーカーめ。

「友達、と言うかクラスメートだな。で、あいつのベランダに引つ掛かったって、インデックスは跳躍強化とかそういう類の能力者か？」

「能力者？　違うよ。私は確かに魔術側の人間だけど、魔術も能力も使えないよ？」

また出た聞き慣れない単語、魔術。

「そのさつきも出てきた魔術とか魔術結社って何だ？」

それを聞くと、インデックスはしまった、と小声で言っただけで困ったと言う顔をした。

「あー言いたくないなら別に言わなくていいぞ？　魔術ってのは察するに学園都市の外
の力とかそういう類と自己完結しておくから」

「うん、物凄く簡潔にあなたに分かりやすく言うならその通りかも。でも、あなたは魔術って聞いて信じるの？」

「ん？　別にお前が嘘ついてるようには見えないし。学園都市の外の事はよく知らないからな。そういうものだってあるかも、とは昔から少し思ってた」

学園都市が世界の全てではない。なら、能力者以外の何かだって存在してもおかしくない。

尼視が昔そう言っていたのを思い出した。

「ゆうきつてとうまのお友達なのに、理解力がすごいあるんだね！」

なぜか褒められた。当麻はどうやら魔術やらを胡散臭い何かと思い、インデックスの言葉を信じていかなかったみたいだな。

だからさつき俺に魔術や魔術結社の事言うの躊躇ったのか。

「ここは科学の街で、非現実的なオカルトは否定されるのが当たり前と聞いてたから、何だかすごく嬉しいかも」

「あーそれはあるな。一応俺も科学者でもあるから心霊とか妖怪とかは、否定するべき側なんだろうけど、なんか否定出来ないんだよな。あるかもしれない程度の認識ってやつ？」

昔からこうだ。有り得ない事は有り得ない。テレビゲームで死者が蘇ったり、巨大な鬼とかが現れるなんて非現実的でも、有り得ないと笑う事が出来なかつた。

ガキらしい。と数多や他の木原共は笑ったけどな。

「へえ、なんだか夢見る子供みたいだね、ゆうきつて」

「ふふっ!」

あまりの場違いな評価に、思わず飲んでいたコーラを吹きだしかけてしまった。

「ひ、否定はしないけど物凄くストレートに言ってきたな」

「気にしてたならごめんね？　でも、ゆうきって面白い人だね。それじゃあ私はそろそろ行かなくちゃ、御飯本当にありがとう」

「もう行くのか？　ってさつき追われてると言ってただろ。警備員に保護してもらうとか必要なんじゃないか？　そういうのよくわからないなら俺が手配するけど？」

その言葉にインデックスが僅かに驚いていたが、言った俺も驚いた。

俺はなんで、初対面の外部の人間にここまでするんだ？

「ううん、その気持ちだけ受け取っておくよ。大丈夫、私だってたただ逃げてるだけじゃないし、行くあてもそれなりにあるからね」

「ならそこまで送ろうか？　乗りがかった船だし」

ホント、なんでここまで世話焼く必要あるんだ？

俺はロリコンじゃないし、なんだ？　インデックスを見て少し懐かしい、って気持ち心が中で沸いたからか？

「ふふつ、ゆうきはとうまみたいに優しいね。ありがとう」

インデックスはやんわりと拒否した。それは好意を受け取らないのではなく、これ以上受け取るわけにはいかないという気持ちが籠っていた。

それにしても、俺が当麻みたいに優しいと言うのは間違いだと否定したいな。

「分かった。ならここで別れよう。あ、そうだ。最後に1つだけ聞いていいか？」

「何かな？ 私で答えられる事ならなんでもこたえるよ？」

それはこのバイキンググレストランに入って、インデックスの全身を改めて見てからずつと疑問に思っていた事。

「イギリス清教徒のは、そんな安全ピンだらけの修道服を着るものなのか？ ひよつとして、お金なくて貧乏？ もし、そうなら変な事言つてごめん」

「……それについてはこたえたくないだよ」

ふつと全身に陰が入ったかのような、ものすごく暗い雰囲気をかもしだしたインデックスに俺はそれ以上何も聞けなかった。

きつとあの針のむしろのような修道服の事は、インデックスにとっては思い出したくない出来事の産物なのだろう。

「分かった。これ以上はもう聞かない」

「うん、それじゃあ今度こそ行くね。ありがとう。ばいばい」

それはもう会う事はない。会つてはいけない。と暗に言っているような別れの挨拶だった。

「インデックス、か……魔術とか魔術結社の事もつと聞きたかったけど、仕方ないか」
幻想御手の事が片付いたら、調べてみるのもいいかもしれない。

そう思いながら、俺は会計をすませてバイキンググレストランを後にした。

だけど、これが俺の運命を変える大きな出来事の発端になろうとは、その時は思っていなかった。

つづく

第26話 「無能力者」

7月20日

それから特に収穫もなく、ただ幻想御手の副作用で昏睡状態に陥ったと思われる人物のリストをにらめっこしてらうちに日が暮れようとしていた。

「こいつらの知人に声をかけても、そんなのとつくに風紀委員なり警備員なりがしてるだろうしな。さて、どこから追おうか……ん？」

人気のない場所で考え事をしていたが、ふと人の気配がしたのでそちらを向いてみると、何やら思い悩んだ様子の涙子が走ってきていた。

「……せつかく見つけたんだもん」

そう涙子の小さな眩きがはつきりと聞こえた。

見つけた。確かに涙子はそう言った。その表情は迷いや戸惑いが浮かんでいる。

もしかして、涙子が見つけた物は……

「どうしたの?」

「あ、御坂さん」

そこへ美琴もやってきた。どうやらいつものメンバーで話していて、急にかげだした涙子を追ってきたようだ。

と、ふと涙子が携帯をポケットに入れた拍子に、お守りが落ちて風にのり俺の足元に転がってきた。

別に隠れていたわけでもないし、隠れる理由もなかったので偶然を装ってそれを拾った。

いや、全くの偶然なのは間違いではないけど。

「よっ、これ転がってきたぜ」

「ユウキさん、ありがとうございます。へへっ、なんだかこの3人ってよく会いますね」
考えて見れば、美琴、涙子、俺の3人になる事は最近少し多い気がする。

「……………」

あえて美琴は俺に触れないようにスルーしようとしているが、それを弄るよりも先に涙子と話す事にした。

「このお守り。いつも佐天さんのかばんにさげてたものでしょ？」

「はい。これは母から学園都市に来る時にもらったんです。私が学園都市に行くのを反対してたんですよ。でも、私がどうしても行きたいって言ったから、これをくれたんです。科学の街に行くのに非科学的なもの持って行ってもなー……………なんて、もらった時は

思ったんですよ。迷信深い所もあるんで、私のお母さん」

確かに。お守りなんて神社で御利益があると売っているが、実際は神社に利益があるだけのものだ。と科学者たちがバカにしていた事があつたな。

「優しいお母さんじゃない。佐天さんの事氣遣つてくれたんだし」

「分かつています。でも、その期待が重い時もあるんですよ。いつまで経つてもレベル0だし」

「レベルなんて、どうでもいい事じゃない」

その言葉に、涙子の手が強く握られるのが見えた。

美琴の奴……

「はい、アウト」

「あつた?! い、いきなり何叩くのよあんたは!」

あまり手加減しないで脳天にチョップをかます。

「レベル5のお前がそういう事を涙子に言うのは、失礼だし侮辱だつて事、少しは氣付けよ」

「えっ?」

「確かにお前は心の底からそう思っているだろうけど、それでもレベル1から努力でレベル5にのし上がった【成功者】にこのタイミングで言われて、励ましになると思っ

ているのか?」

「ユ、ユウキさん。私そんな気にして、ませんよ?」

「その様子じゃ説得力皆無だな、涙子」

明らかに動揺している涙子を見て、美琴も自分が発言した事の意味に気付き、罪悪感に襲われたようだ。

「そう、だよな。ごめん佐天さん、私無神経な事言っちゃったね」

「……いえ、大丈夫ですよ。御坂さんは私を励ましてくれようとしただけですし」

凶星をつかれた為か、2人揃って凹んでしまい、嫌な空気が流れる。

が、それは俺には関係ない。自業自得とも言えるしな。

だけど、今日の俺は何か変なようだ。自然に言葉が出てくる。

「レベル0は、学園都市の学生のうち6割ほどが該当する。が、科学者でもある俺から言わせてもらえば……全く能力が存在しない学生は、存在しない」

「えっ? それってどういう意味ですか? それにユウキさん科学者だったんですか!?!」

「それは私も聞いてないわよ!?!」

そう言えば俺が科学者だって事。美琴にも言っただけ……と言うか当麻にも言っただけ……言っただけ……

「でも実際は、科学者って言うほど専攻している分野はないけどな。助手と言うか見習いと思ってくれればいいさ。もっと幼い頃から色々学ばされたり、能力開発の実験に立ち会ったりもした。で、レベル0と呼ばれる人にも何らかの能力がある事が分かっている。反応が弱過ぎて何の能力か分からない場合も多いけどな」

木原である事は科学者でもあると言う事。間違っではない……多分。

最も、俺は木原の実働専門だから、科学者としての活動はあまりない。

それを全部明かす事はできないけど、それでもこれくらいなら問題はない……はず。

「じゃ、じゃあ私にも何か能力が？」

「証明しようか？ ほら」

そう言って幻想支配で涙子を視る。ただ反応が弱いと言うか、これは使えないと言う感覚はある。

これは、まだ能力が完全に発現してないと言う事だ。

「あ、ユウキさんの目が青くなった」

「でも、すごく色が薄いわね。かろうじて少し青くなった、くらい？」

「涙子の能力が弱くて、俺でも使えないって事だ。別に目の色の強さで能力の強さがそのまま出るわけでもないけどな」

「そう、ですか。結局私には能力は……」

俺がそう言うのと、涙子がまたショックを受けて俯いてしまった。

結局は能力が弱くて使えないと言う事実を突きつけただけ。それでも他に分かる事実もある。

「ちよつとあんた、佐天さんを更に落ち込ませてどうするのよ!」

「現状を理解しないで、発展はありえないぞ美琴。それに涙子、能力が弱いつてだけで、ないわけじゃないだろ?」

「それは、そうですね。でも使えないんじゃない意味が……」

涙子がポケットを強く握りしめた。と幻想御手を使おうとしているのかもしれない。

「涙子、お前の母親がそのお守りに込めた思い。なんだろうな?」

「お母さんが、お守りに込めた想い?」

「確かにお守りは非科学的な事だけど、それでもお前の母親はお前にどうなって欲しくて、そのお守りをくれたんだ?」

「それは……」

「涙子が超能力者になって欲しいから、それをくれたのか? 俺にはそうは思えないけどな」

「私も佐天さんのお母さんが何を願ってそのお守りくれたのか、分かる気がするわ」

美琴も俺が何を言いたいのか分かったようだ。

ただ、部外者の俺や美琴が代弁しても意味がない。涙子はお守りを見つめると、何かに気付いたようにハツと顔をあげた。

「お母さんが、学園都市に行くのを反対していたのは、私の頭の中を弄られるのが怖いから。私の身が何より一番大事だからって、このお守りをくれました……能力者になれ、だなんて一言も言わずに何かあればすぐに戻ってきていい、そう言ってくれました」

……羨ましい。なぜか俺は心の奥底でそう思ってしまった。

「ありがとうございます、ユウキさん、御坂さん。おかげで悩んでた事にふんぎり付きました」

「私は何もしてないわよ。こいつのおかげでしょ」

「俺だって何もしてないだろ。しいて言えば、お守りのおかげだろ」

「ふふっ、そうですね。さてと」

笑いながら涙子がポケットから携帯を取り出した。それが幻想御手か？

「実は、私偶然手に入れちゃったんです、幻想御手を」

「そうなの!? えっ? その携帯がそうなの?」

「はい、実は幻想御手は……「音楽ソフト」……えっ? ユウキさん知っていたんですか

?」

「ある程度の予測はしてたさ。ネット上の都市伝説として数多く囁かれながら、実在は

不明。仮に何かの装置なら、現物の痕跡がどこかしらに載るはず。それが無いと言う事は見えない物、例えばアプリとかソフトウェア。で、容易に発見されないように偽装するなら、音楽ファイルとするのが一番いい。そう考えたんだよ」

それに、音楽ソフトなら理論はともかく、使用者の脳に負担がかかり昏睡状態になる事に説明もつけやすい。

「すごいです！　そこまで見抜いていたなんて」

「自称科学者見習いは伊達じゃないって事ね。あ、佐天さん今日様子がおかしかったのって」

「気付いて、ましたか。これ手に入れたの昨日だったんです。最初は早く誰かに見せたくて、でも喫茶店で見せようとした時、容易に犯罪に走る傾向があるから、白井さんが幻想御手の使用者は保護するって聞いて、それで……」

なるほど、それで幻想御手の事を言いだせなかったわけか。

「幻想御手を没収される事を恐れたわけか。でも、それって使用者は副作用で昏睡状態に陥る可能性が高い。だから幻想御手は早急に全て回収する必要がある、そういう意味で白井は言ったんだと思うぞ？」

「そうなんですか!?!」

どうやら涙子は幻想御手の副作用は考えてなかったようだな。

「あの時は、幻想御手の副作用はちゃんと話してなかったわね。最近原因不明の昏睡状態に陥る学生が増えてるのよ。それで調べてみたら全員が幻想御手を使用した形跡があつたの。あの時ちゃんと佐天さんにも話しておけば良かったわね」

「どうかな、例えばその時幻想御手は危険だから使うな。なんて言っても、涙子の悩みは根本的には解決しなかつたぜ？」

「そうですね。多分、使つたかもしれません。危険かもしれないと言われても、それでも能力が使えるようになるなら構わない。さつきまでの私ならそう思つてました。私も能力者になれる。その夢が、やっと叶うんだって、でもそれは幻想だつたんですね」

夢にまで見た見た世界が、ただの幻想《ゆめ》だつた事に涙子はやりきれない笑みを浮かべた。

「それは違うぞ。幻想御手で能力者になつたつもりでいるのが幻想。でもな、涙子が能力に目覚めるのは幻想じゃなく、これからの涙子次第で叶えられる現実なんだ」

「私次第？」

「ああ、自分には才能がないなんて心のどこかで思いこんでたら、能力が出るわけないだろ？ 自分には能力がある、それを伸ばすんだ。つて思つてやらなきゃ、な？」

「はい、ありがとうございます！ 私御坂さんみたいにもつともつと頑張ります！」

幻想御手を使わせなくするんじゃないやなく、使わなくてもいいと思わせる事。それが一番

だと思っ。

「わ、私?!」 ははっ、なんだか恥ずかしいなあ」

努力した自分を目標にすると堂々と言われたのが恥かしいのか、顔を赤くする美琴。

美琴が昔から努力してこうなったのは、俺も実際に研究所で見ていたので知っているから今回は茶化さない。

「それと、容易に犯罪に走る傾向があるのは、幻想御手のせいじゃなくて、今まで自分ない力を簡単に手に入れたら試したくなるものだからな。爆弾魔の介旅初矢は、どうも前から風紀委員や能力者に恨みあつたようだし、そこへ自分の能力が強力になったとしたりや、それを復讐に使うのはむしろ当たり前だと思っぜ?」

「確かに、学舎の園で私を襲つた重福さんも、自分の眉毛にコンプレックスを持つてたし」

「幻想御手で気分が昂ぶつて、それでストレスが一気に……つてわけね」

犯罪に走つた能力者は数多く見てきた。だからこそわかる、一度強い力を手に入れればそれを使つて暴れたくなる。

それは誰にでも起こり得る事。

「とまあそういうわけだから、友達でもし幻想御手に手を出しそうな子がいたら」

「その時は、止めます絶対に。幻想御手が危険だからじゃなく、幻想御手に頼ろうとする

のがダメだつて……今の私にはそれがどれだけ間違っているか、分かりますから。この幻想御手も初春達に渡してきますね」

「私も一緒に行くわ。黒子達きつと喜ぶわよ」

もう涙子は大丈夫そうだな。さっきまでのどこか影のある笑顔じゃなく、心の底から笑みを浮かべている。

「あ、そうだ。風紀委員に出す前に、幻想御手俺に出来ないか？」

「いいですけど、コピー出来ませし。まさかユウキさん使う気ですか!」

「そんなバカな真似しないっての。俺も幻想御手の解析をしたいんでな、仕事つてやつ
」

「ふーん、一応科学者らしい事もしてるのね」

「まあな。それじゃ、俺は早速こいつの解析に入る。何か分かったらすぐに風紀委員に知らせるよ」

「今日は本当にありがとうございました!」

涙子と美琴に手を振られ、俺は幻想御手の入った端末を手に尼視の元へと向かった。

幻想御手も手に入ったし、無用な被害者も出さずに済んで良かったと思いたかったが
……

——私も能力者になれる。その夢が、やっと叶うんだつて、でもそれは幻想だったん

です
ね。

あの時の涙子の言葉と、悲しそうな顔がしばらく頭から離れなかった。

つづく

第27話 「木山春生」

7月24日

幻想御手のデータを手に入れて、それを尼視に渡してから4日が経った。

最初は自分でも解析しようとしたが、体調不良やら幻想御手を使ったバカの排除に多忙だったので、ろくに解析が出来ないでいた。

体調不良の原因は、幻想御手を使ったバカ相手に幻想支配を使ったせいだけだ。

21日に涙子と黒子が複数のスキルアウトに襲われているのを、たまたま通りかかった俺が見つけて交戦。

2人共怪我をしていたから長引かせるのは良くないと思い、幻想支配で奴らの強化された能力をコピーして一掃した。

けど、その後激しい頭痛と倦怠感に襲われ2日程まともに動けなかった。

「そりゃ、幻想御手の副作用をお前も受けたからだろうな。幻想支配の原理が未だに分からない以上、何が起きてもおかしくはないわけだ。でも、そこまで無茶するほどの子達に入れこんでいるなんて……お前はそっちの趣味があったのか？」

「……そういう話をしにきた覚えはないんだが、クソババア」

今俺は、木原尼視がいる研究所に來ている。

幻想御手の解析結果を聞きに來るためだ。電話でもよかったのだが、見せたいものがあると言う事でわざわざ出向いた。

俺自身で解析出来ていればこんな手間かからなかったのに。

で、目の前に座り優雅にコーヒーをすすっている年齢不詳で、いかにも科学者と言う風貌の女性が木原尼視。

「そう言えば、暗闇の五月計画の被験者達の事も気にしていたか……おっと、無言で銃を向けるのはやめてもらおうか？　しかもそれは演算銃器じゃないか」

「コイツの性能テストまだしてなかったからな。相手がお前ならちようどいいだろ？　それと、いい加減会う度に口調変えるのやめろ」

尼視は昔から口調をコロコロ変える。個性だの気分だのと言っているが、實際なんて変えているのかは知らない。

「そろそろ本題に入るか。幻想御手の解析、どこまで進んだ？　と言うか終わっただろ？」

「あーアレか？　うん、そうだなどこまで進んだかと言われれば、今日の朝始めたばかりだな♪」

その瞬間、無言で尼視のパソコンに巨大な風穴を開けた俺は、悪くない。

「ぎゃー!? 私のエツトリーナちゃんがあー!? ちよつと、何してんだてめえ! よりにもよつてソレで撃つんじゃねえよ!」

「やかましい! 俺がそれ渡したの4日前だぞ! 今まで何サボつていやがったんだクソババア! つてかわいい加減自分のパソコンに変な名前つけるのやめろ!!」

ちなみにエツトリーナは尼視愛用パソコン第23号だ。

それにしても、コイツにかかれば2日もあれば解析して複製や強化もしそうなのに、まだ手をつけたばかりとか……

「仕方ないだろう。こんなのより急ぎの用事が出来たんだ。それも総括理事長じきじきのな。お前にも頼みたい事があるそうだから、多分今回の一件片付いたらオーダー入るじゃないかい?」

「理事長直々にか? 一体何事だろう」

総括理事会、と言うか親船最中や芹亜先輩経由でオーダー来る事はあるけど、理事長から直々ののはすごく珍しい。

「まあそれは今回の一件を片付けてからだろうな。さてと、じゃ早速幻想御手の正体を明かそうか」

そう言つて尼視はキーボードを操作すると別のPCが起動した。

「どうやらさつき壊したエツトリーナはゲームや趣味用で、こっちが仕事用のPCらしい。」

「幻想御手は音楽ソフトであり、聴覚により能力強化を促進させている……が、聴覚に訴えただけで能力に影響を与える事は不可能なのはずっと前から分かっていた事であり、現状、学習装置でもない限り同様の効果は認められない」と

学習装置《テストメント》。布束砥信が監修した視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚の五感全てに対して電氣的に情報を入力する事で、脳に技術や知識を埋め込む事が出来る装置。別名は洗脳装置だ。

「学習装置が本来の用途以外で、もしくはは性能をコピーされて他で使われた形跡は？」

「ないね。それに学習装置は今別件で忙しいからな。誰かがコピーしたりする隙はない」

「実に楽しそうに笑いながら尼視が言う。コイツがこんな顔してるって事は、今学習装置はロクでもない実験に使われているのだろうな。」

「待てよ、学習装置……なるほど、そうか、そう言う事か！」

「何一人で納得してんだよ。これを仕込んだ奴に心当たりでもあるのか？」

「いやはや私とした事が、多忙を理由にすっかり頭の中から外していた事案があった。確かに彼女なら、動機もこれの開発も思いつく！」

「おーい、ついに頭のネジが全部ぶっ飛んだか？ あ、そりや前からか」

1人で狂喜乱舞する尼視の頭を叩くが、それでもコイツは気にしていない。

何がそんなにおかしんだ？

「あーもういいや。どいてろ、俺が自分で調べるから。大体の見当はついてる」

伊達にここ数日ベッドで寝ていたわけじゃない。

俺なりに幻想御手の仮説は立てていた。

幻想御手は音楽ソフトだが、ただ音を聴くだけでなく、聴く事により何かの信号が頭

にインプットされたと仮定した。

俺が幻想御手使用者を幻想支配で視た時、何かに引つ張られる感覚があった。

それは自分が何か別のグループ、ネットワークの一部にされていくような感覚。

ならば、幻想御手とは使用者をとある脳波ネットワークに接続させるキーになる物。

人間の脳波も指紋や声紋と同じく、人それぞれにパターンがある。それを逆手にとつ

て脳波をキーとするセキュリティ構築を作ろうとしていると、前に冥土返しから聞いた

事がある。

「だったら、ネットワークで同系統の脳波パターンと同期させていけば……」

学園都市には多種多様の能力者がいると言っても、ある一定のカテゴリーで分けられている。

美琴の能力も、カテゴリーで言えば、第4位の麦野沈利と同じ電子制御系能力に分類される。

第五位の食蜂操祈も暗部の心理定規と同じ、精神系能力に分類される。

もちろんカテゴリーに属さない未知の能力もある。俺や当麻が良い例だ。

「ユウキ、それで正解だ。流石は木原」

「これに木原は関係ないだろ。ってかやつとこつちの世界に戻ったかメンヘラババア」

「さつきからヒドイ言われようだな。まあ、それは慣れたからいい」

慣れるなよ。いや、昔からずつと言ってる事だから慣れるだろうけど。

「んで、幻想御手の使用者リストは……うげ、こんなにいるのかよ。そりゃあ同系統の能力者が多く集まるわけか」

「そして、幻想御手を使うと昏睡状態になるのは、他人の脳波と無理やり同調させられる事で負荷がかかり、オーバーヒートするからだな」

涙子に使わせなくて良かった。

「ん？ 誰かに使わせなくて良かったと言う顔をしているな？」

「してねえよ。俺がそんな顔するわけないだろ」

涼しい顔で答えるが、尼視は悪そうな笑みを浮かべそれを否定した。

「いやいや、お前と会うのは数カ月ぶりだが、前よりずつと【良い顔】になっ

「？」

「そりやお前にとつての良い顔だろ。どんな顔だつての……さて、昏睡状態の患者に共通脳波パターンと一致するのは誰だ？」

学園都市に居る人間は大人も子供も関係なく、書庫に脳波パターンを含めたあらゆる個人情報が入り込められている。

そこへアクセスして情報を引き出す。普通は特別な権限が必要だが、今は尼視のパソコンからなので容易に侵入できる。

自分でも出来るが、コイツの使った方が手っ取り早い。

そうして浮かんできた脳波パターンと一致するのは……

「木山春生？ 随分不衛生そうな顔をした人だな。老け顔に見えるが、実際は今俺の肩に頭を乗せている厚化粧ババアよりもかなり下だな」

「このまま首を絞め殺したいが、今は我慢してやろう。しかし、やはり木山春生か……くつくつくつ、まだ諦めていなかったと見える」

「お前コイツの事知ってるのか？ 確か、こいつは数年前に……あ！」

「そう、幻生のクソジジイが主導となつて行つた、暴走能力の法則解析用誘爆実験の科学者の一人だ」

暴走能力の法則解析用誘爆実験。俺はこいつには関わっていないが、詳細は知つ

ている。

木原の1人。幻生が置き去りを拾い集めて行った、能力を故意に刺激させて、暴走条件や結果を観察する実験だ。

確か、アイテムの理后が使っている体晶はこの実験の副産物だったはず。

「となれば、動機を予想が付く。この実験で意識不明になったのは木山の教え子達だ。彼らを快復させるシミュレーションがしたかったのだろう」

「どうしてそんな事がわかる?」

「実はな、これまで同一人物による短期間での23回もの【樹形図の設計者】の使用申請が却下されているんだよ」

樹形図の設計者《ツリーダイヤグラム》は学園都市最大、いや地球上で最大のスーパーコンピュータだ。

それゆえにその使用には申請が必要だが、手順と目的が明確化されていれば特に却下はされないはず。

それが短期間で、何度も却下されたと言う事は……

「申請者は木山春生で、却下されたのは統括理事会の誰かが動いたため、そしてそれを裏で操っているのが、木原幻生か」

「正解。私がここしばらく忙しかったのも、そこから幻生の足取りを追って、お前に処分

させる為でもあるんだ。あ、理事長からの仕事はこれとは別件だぞ？」

幻生はしばらく前から行方不明で、木原の間でも行方を探されている。

尼視は何か因縁があるのか個人的に嫌いなのか、このクソジジイの行方を掴んで俺に始末させようとしている。

俺としては、そんなオーダーが出たら最優先で執行するけどな。

「で、肝心の春生はどこにいるのか見当ついているのか？ もう、こいつの居場所には警備員を行かせたんだろう？」

「いや、私がする前に誰かがこれに気付いて先に手を回したようだ。で、木山本人は人質をとって逃走中。木山のPCはトラップが仕掛けられていて、データが完全にフオーマットされた……全く手際の悪い無能共だ」

尼視は警備員の間抜けさに心底悪態をついている。ま、仮にも科学者なんだ、トラップくらいは残しておくとか警戒するのが俺達じゃ普通かもしれないけど。

「俺みたいな手際の良さをあいつらみたいなの【真つ当な】奴らに期待するなよ。それにしては人質とはな……ん、電話だ」

かけてきた相手は美偉先輩だった。これは……木山春生絡みか？

「美偉先輩？ 何かありましたか？ ひよつとして、幻想御手、木山春生絡みで何か？」

『相変わらず情報が早いわね。そこまで掴んでいるなら説明の手間が省けて助かるわ

……実は」

「木山春生が飾利を人質に逃走中？ しかも、確保に向かった警備員が彼女の能力によつて全滅状態？ しかも使う能力は多種多様!？」

美偉先輩から告げられた事に、俺だけでなく尼視も眉をひそめた。

『白井さんはこの前の怪我で動けないの。今、御坂さんが現場に到着したわ。でも、悪い予感がするの。ユウキ君、あなたにも正式に風紀委員として協力を要請するわ。これ以上被害が広まる前に初春さんを助けて、木山春生を確保して、お願い!』

「……オーダー了解。すぐに向かうよ。ま、美琴が先に片付けてるだろうけど、それじゃあ」

電話を切つて振り向くと、尼視がパソコンのモニターを覗て何やらにやついている。

そこに映っていたのは、木山春生と思われる女性が、竜巻や水流を操り警備員をなぎ倒していくカメラ映像だった。

「これはこれは、幻想御手のシステムはここまでの副産物を生み出すとはな」

「まさか多重能力者？ でも木山春生は能力開発を受けていないはず」

「恐らく、幻想御手で昏睡状態に陥っている1万もの能力者の能力を使用しているのだろう。1人1人はレベル1や2でも、幻想御手のネットワークを同期させているせいで、どれもこれもレベル4クラスの能力になっているな」

これは、美琴でも万が一を考えた方が良いな。

普通に戦えば美琴に勝ち目があるが、木山春生のこの表情。

何かなんでも邪魔はさせないと言う気迫に満ちている。簡単には折れないだろう。

「行ってくる」

「はいはい、ここで【ヒーロー】の登場ってわけか」

尼視は嫌味たらしく言うが、これは笑えない嫌味だ。

「ちっ、いいからてめえはワクチンソフトの開発でもしてろ。万が一って事もあるからな」

「……いいだろう。それが今回のオーダー報酬だ」

木山春生が持っている可能性は高いが、それだけをアテにはしてられない。

常に万が一を考えて行動する。それが俺のやり方。

だから、今回嫌な予感がしたので、仕事用のバイクに銃器とナイフ、刀もフル装備で仕込んである。

「多重能力者もどきか、俺の幻想支配でどこまで支配できるかな？」

幻想御手使用者と言うネットワーク端末を視ただけでも体調不良を起こしたのに、今回はそのマザーコンピューターを視る事になる。

どんな副作用が起きるか分からない。けれども、それに躊躇いは一切ない。

「木山春生……待っている」

俺はバイクを高機動エンジンで起動させ、現場へと向かった。

尼視の研究所から無謀なショートカットをしつつ、全力で飛ばして10数分。ようやく現場に到着した俺が見た物は、まさに戦場だった。

高架道にはいたるところが寸断、崩落していて警備員の車両がなぎ倒されており、数名倒れている。

警備員の黄泉川愛穂先生が、無事な同僚と救助している所見るとまだ死者はいないようだ。

高架下の空き地はまるで爆撃でもあったかのように、瓦礫に埋もれ、地面がえぐれ、大穴が開いている。

その瓦礫の中に、無傷で立っている目の下に隈が出来た女性科学者が1人。あれが……

「……木山春生」

「なんだ、君は？ 学生のようなだが、見た所風紀委員ではなさそうだが？」

そして、少し離れた瓦礫に埋もれ頭がかろうじて見える女子学生の姿。

「……美琴」

状況を視ると、何か爆撃に巻き込まれたのだろう。恐らく、量子爆弾。

良く見ると瓦礫を盾にして、直撃だけは避けてたようだが、軽い脳震盪でも起こしたのか動く気配がない。

「この子の知り合いか？ 埋もれてはいるが、命までは取ったつもりはない。すぐに病院に運んであげるといい」

「だから？」

「道路の上には風紀委員の子もいる。あの子は衝撃で失神しただけだ。彼女に幻想御手のワクチンソフトを渡してある」

「だから……どうした？」

「君も分からない子だな。ここで勝ち目のない私に殴りかかるより、もつとやるべき事があると言っているのだが？ この子にも言ったが、私はある事柄について調べたいだけだ。それが終わればすぐに全員快復させよう。誰も犠牲にするつもりはない」

目の前の女は、特に感情も込めずにただ淡々と自分の目的を語っている。

「……誰も、犠牲にするつもりはない？」

「それでも、ただ義憤に駆られて私に怒りをぶつける気か？ これだから子供は……」

「俺を美琴と同じただのガキと思うなよ。お前が暴走能力の法則解析用誘爆実験で意識不明となった教え子達を快復させるという目的も。その為に23回も樹形図の設計者

の使用許可を却下された事も、全部知っている」

「何？ 君は一体、何者だ？」

「ここではじめて木山春生は真つ正面から俺を見た。

「俺の名は、木原勇騎。お前を止めに来た男だ。覚えておけ」

「き、木原……だと？ くっ、くっ……ははっ、あっはっはっはあ！ そうか、そう来たか。樹形図の設計者の申請を却下するだけではなく、木原直々に私の邪魔をしに来たか。そうはさせない、もう邪魔はさせない！」

多重能力者もどきの影響か、木山の片目は充血したかのように赤い。

その両目に殺気すら籠めて俺を睨んでくる。

「お前が木原幻生の元で実験をしたのも知っているし。その暴走にあのクソジジイが関与しているのも知った。俺は確かに木原だ。そして、木原の他の奴からお前を止めろと、最悪殺せとも言われているさ。けどな、俺が今ここにこうしてお前の前に立ちふさがっているのには、木原は関係ねえ！」

「な、に？ ならばなぜ私の邪魔をする！ なぜ私の前に立つ!!」

「さあな。なぜかははつきりとは俺もわかんねえ。けどな、お前に怒りを覚える理由にはつきりと言える。美琴をボロボロにした事もだが、それだけじゃねえ。お前は……お前がした事が許せない」

——私も能力者になれる。その夢が、やっと叶うんだって、でもそれは幻想だったんですね。

「お前は誰も犠牲にするつもりはないと言った。けどな、お前は……沢山の能力者達の憧れを利用した！ 1人の女の子の夢を踏みにじった！」

ここまで怒りを覚えたのは初めてかもしれない。

木山春生以上の、たくさんの木原やクズを見てきたが、ここまでなつた事はない。

置き去りをモルモット以下の扱いで、ゴミのように捨てた科学者達にさえ覚えた事のない怒り。

それがなぜか、木山春生には感じた。

「お前が沢山の夢や希望や憧れを犠牲にして、踏み台にしても……そんな事でしか教え子達を救えないと思っっているなら」

当麻、お前ならきつと俺と同じような事言うだろうな……

理屈じゃなく、本能とも違う、それは心の底からの叫び！

「その幻想……俺が支配する！」

つつく

第28話 「VS多才能力」

幻想御手を応用した多重能力で警備員を壊滅させ、美琴ですら圧倒したこの事件の黒幕、木山春生。

一件何を考えているのか分からず、ただ無気力に立っているような彼女だが今は明確に俺に殺意に近い敵意をぶつけてきている。

それは、俺が木原の1人だからだろう。

「驚いたな。そんな事を言うとは、本当に君は木原なのか？」

「よく言われる。俺は木原の中でも異端児って言われてるからな」

「そうか。でも悪いが、君には手加減も容赦も出来そうにないな」

「ああ、俺もお前には容赦も手加減もする気はない。自慢の多重能力もどき、みせてもらおうか」

「これは多重能力ではなく、多才能力なんだがな」

「どっちでも同じだ！」

言うと同時に木山春生に向けて走り出す。

今日は用心のために、仕事用バイクで来たし重火器も爆弾も刀剣類もフル装備できて

いるが、今は風紀委員や警備員の目もあるから無暗に使えない。

それに、相手は多種多様な能力がいつぺんに使えるいわばチート。

下手に銃弾や爆弾使おうなら、逆にこっちが危ない。そして、幻想支配を使おうとしたが、うまく視えない。

恐らくしばらく視続けないとダメな感じだ。

だから、接近して肉弾戦に持ち込む。

「接近戦……君は無能力者か？」

木山春生が瓦礫に手をかざす。と、いくつもの瓦礫が宙を舞い、俺へと飛んできた。

「こんなもの……」

ただ飛んできただけの瓦礫なら、いくつ飛んで来ようがかわしやすい。

レベル5第4位の原子崩しに比べたら遅すぎるくらいだ。

「意外と速いな」

「お前が遅いんだよ……」

木山春生の顔面めがけて回し蹴りを放ったが、視えない壁に阻まれそのまま吹き飛ばされた。

恐らく、気流を操り防いだのだろう。

「やっぱこのままじゃダメか」

「どうした？ もう終わりか？」

「いや、まだこれからだ！」

やはり木山春生を倒すには、幻想支配しかない。

さつきは視えなかった木山春生の力が、今ははつきりと視える。

「っ！ 目が、青くなつた!？」

「いくぜっ!」

いくつもの水の塊を浮かせ、それを一斉に木山春生に向けて放つ。

「これは、まさか!？ ちっ!」

木山春生も地面の瓦礫を浮かせ、水の塊を防ぐ。けれども俺の攻撃はまだ続く。

「はっ!」

両手を勢いよく地面に突き、木山春生の周りの地面から壁を作り上げ閉じ込める。

「まだまだ!」

更に上空から圧縮した水の塊を落下させる。

木山春生も黙ってそれを食らっているわけじゃない。

自身を透明化させ、土の壁をすり抜けて回避した。

「驚いたな。他人の能力を使う能力者の都市伝説は知っていたが、まさか君だったとはな」

「降参するか？ 半殺しで済ませてやるぜ？」

「それは丁重にお断りさせてもらおう、か」

何か鋭い音と共に見えない刃が迫ってきた。これは、かまいたち現象か。

高速移動で回避し、木山春生の背後を取ろうとしたが、逆に瞬間移動で背後を取られた。

「惜しいな」

「お前がな」

木山春生は、片手で掴んだ巨大な瓦礫を俺にぶつけようとしたが、背後に空気の壁を作りそれを防ぐ。

「燃え尽きろー！」

背後に振り向きざまに両手を突き出し、燃え盛る火炎を吹き出したが今度は木山春生が水の壁を作り、防がれてしまった。

それも予測済み。続け様に右手を大きく振りかざし、木山春生に殴るように突き出す。

俺の拳で殴られた空間がそのまま押し込まれるように、木山春生へと迫る。

だが、木山春生もそれを予期していたかのようにヒラリとかわし、足元に転がるアルミ缶を蹴り飛ばしてきた。

能力で加速されたアルミ缶は、高速で俺へと迫ってきた。

「量子爆弾は、俺にはきかない！」

上空へ薙ぎ払うような動作で左腕を振りあげ上昇気流を巻き起こし、アルミ缶を遙か上空に飛ばし爆発させた。

「ラチがあかないな……くっ、動けない？」

「いちいち相手の攻撃を捌いてからじゃ遅いつての！」

さつきアルミ缶を上空へ飛ばすと同時に、こちら辺一体の地面を底なし沼へと変化させた。

木山春生の体は、もうすでに腰まで地面に沈み込んでいる。

他の能力で脱出をしようとしているが、それより先に動く。

「この程度、な、何？ 渦が？ うわあああ！」

今、木山春生を中心に地面が大きく渦を巻いている。まるで洗濯機のようなのだ。

「いかに多才能力でも、演算に集中できなきや使えないだろ……ぐっ!? くそ、こんな時に」

突然頭痛に襲われ、その場にうずくまってしまった。

やっぱ幻想支配で多才能力をコピーして使用するの、かなり俺に負担がきていたよ
うだ。

木山春生はその隙に、地面の渦から脱出し、俺が変化させた地面を元に戻した。

「はあ、はあ……どうやら、君の能力には限界があったようだな」

「ああ……俺は、自分の限界くらい見極めてるさ。俺の幻想支配でも、お前みたいな特異な能力は長時間使用できないってな」

地面に倒れ込んだまま、迫ってくる木山春生を見上げながらそれでも、余裕をもった声で答えた。

幻想支配は今までもどんな能力でもコピーしてきた。けれども、相手によつては初めて視た時は長時間使用できず、場合によつては頭痛が起こり、体力もなくなる事もあった。

レベル4まではそうはならなかったが、沈利や操祈などレベル5達が特にそうだった。

それに、幻想御手を使った能力者相手に幻想支配を使ったときの状況から、今回のこの結末は容易に予測できた。

「……だから、トドメは任せる事にしたんだよ」

そう、今回の俺の役目は木山春生の目をこちらにだけ向けさせ、時間を稼ぐ事。

後は……

「つーかまえた♪」

意識を取り戻した御坂美琴に、背後から奇襲をかけさせる。

「なっ!! き、君は、さっきの爆弾が直撃して……はっ!! まさか、瓦礫で壁を作っていたのか、死角から爆弾を爆発させたと言うのに」

木山春生が驚くのも無理はない。俺も美琴を最初見た時は、爆弾にやられて重傷を追っていると思ってしまった。

けど、すぐに美琴は磁力で周囲の鋼鉄などを集めて壁を作り、防御していた事に気付いた。

最も、爆発の余波で脳震盪を起こして、意識がもうろうとしていたようだったが。

ならば、意識が戻るまで俺が時間を稼げば、美琴は復活する。

と、最初は思っていた。

「お前も科学者なら、電子制御系能力者の応用力の高さを知っているべきだったな。ましてや美琴は学園都市最強の電撃使い。電磁波をレーザー代わりに使って奇襲に対処するなんてお手の物だ」

「そう言う事よ。さっきは散々私の攻撃を防御してきたけど、流石にあのバカやその変人でもない限り、ゼロ距離からの電撃は防御しきれないでしょ?」

「くっ……!」

それでも木山春生は往生際悪く、自分の身体の摩擦力を変化させ、美琴を弾き飛ばそ

うとしていた。

美琴はさつきまで意識が朦朧としていたせいとか、能力発動までわずかなタイムラグが発生しているようで、このままでは間に合わないかもしれない。

「させるか!」

「な、何? 能力が消え……」

なら、俺が幻想支配で木山春生の多才能力を停止させるしかない。

介旅初矢にも使った幻想支配の奥の手、能力停止。

僅か1秒足らずしか停止出来なかったが、それで十分。

「遅いっ!」

美琴の身体から電撃が発生し、木山春生の全身を駆け巡った。

「……がつ、うあ……うう」

「手加減はしたわ。でもこれではらくは自由に動けないはずよ」

力なく崩れ落ちる木山春生の体を受け止め、そっと地面に寝かした。

「随分と優しいのね。さつきまで殺すとかかなり物騒な事言ってたのに」

「半殺しにすると言っただ。お前も気絶したふりなんかしやがって、おかげで手間がかかったぞ」

そう、美琴は確かに脳震盪を起こしていたが、それもすぐに収まり意識がはっきりし

ていた。

「それはあんたがテレパシーで、しばらく気絶したふりしてろなんて言うからでしょ。大体あんなでたらめな能力合戦なんかして、警備員達も茫然と見てたわよ?」

「お前が本当に気絶したと思っただけから、場所を変えながら時間稼ぎで戦ってたんだ!

お前が気絶のフリだったら最初から別の作戦立ててたつての! それにお前さつき当麻をバカと言ったのは良いけど、俺の事変人と言ったよな?」

「本当の事を言っただけが……うぐつ!」

「つ!」

突然美琴が頭を抱えて、その場にうずくまった。

何事かと身構えたが、俺の方にも異変が起こった。

——センサー、木山センサー?

「あ、頭に声が?」

「これは……木山春生の記憶?」

何か子供の声と共に、映像が頭に浮かんできた。

どうやら美琴にも同じ現象がおきているようだ。

さっきの電撃で、美琴と木山春生に電気を仲介した回線が出来たようだ。

俺の方は幻想支配で、木山春生と繋がってしまったのだろうが、こんな事は初めてだ。

俺がコピー出来るのは、他人の能力とその使い方のみで、記憶などは読めないはず。「幻想御手の副作用のせい、か？」

無理やり、俺と木山春生の脳が繋がったせいかもしれない。

——君は確か、教員免許を持っていたよね？

木山春生の記憶が映像として次々と浮かんでくる。その中に出てきた、薄汚い老人は間違いない……木原幻生だ。

木山春生は幻生のジジイに言われ、実験の被験者達である置き去りの教師となった。

——子供は嫌いだ。

慣れない教師生活は、子供達に振り回されっぱなしだったようで木山春生は相当苦勞していた。

——騒がしいし、デリカシーもない。

子供達のイタズラに振り回されたり、容赦ない言葉にショックを受けたりもしていた。

——馴れ馴れしいし、すぐになつてくるし。

けれどもそんな教師生活に、木山春生は心地よさを感じ始めていた。

——センチー、私達は学園都市に育ててもらったから、少しでもこの町の役に立てるようになりたいな——って。

そして月日が流れ、木山春生は生徒達の為に実験を必ず成功させるようと、子供達を立派に育てようと心に強い決意を抱いていた。

——センサーの事、信じてるもん。怖くないよ。

しかし、現実には彼女の夢を打ち砕いて行つた。

【木山春生の思い描いていた実験】は失敗した。だが、【本当の実験】は成功した。

子供達は瀕死の重傷を負い、意識不明のまま今に至る。木山春生は実験について幻生のジジイに聞いたのだが。

——学園都市のお荷物である【置き去り】が科学の発展に貢献したんだ。いい事じゃないか。

この言葉で片付けられてしまった。

「……………い、今の……………本当に、あつた……………の?」

「そうだ……………これが木山春生が、今回の事件を引き起こした動機だ」

美琴には今の記憶はシヨックが大きすぎたな。

信じられない物をみたかのように、身体が小刻みに震えて力が入っていない。

「見られて、しまったか。しかし……………このくらいのこと、事。木原の君には日常茶飯事だろう?」

「そうだな……………見慣れているよ。俺は木原で、クズで極悪人つてのも否定しないし、肯定

するさ。」

俺自身も実験材料になったり、実験を行った立場になった事もある。

実験でバラバラになった死体も、廃人となった子も見てきた。

見慣れてきた……はずなのに、なぜか今の木山春生の記憶をみて、心に言いようのない怒りが、苦しみが湧きあがってくる。

「で、これを冤罪府に出来ると本気で思っているのか？」

「何、を……？」

「私はこんな非道な実験を行い、罪もない子供達を大勢犠牲にしました。だから、その子達を救う為に他の子達を犠牲にするのは仕方ない事です。この町の全てを敵に回しても止めるわけにはいかないんです。って言いたいんだろ、お前は」

「違う！ 私……私……私……お前達と違う！」

木山春生はまるで子供のように、俺の言葉を否定する。

きつと、あの子達を助ける事だけに必死で、それだけを心の支えにしてきたのだろう。でも……コイツのした事は変わらない。

「同じだよ。人助けだなんて大義名分があると言っても、それは俺達と変わらない……他人を犠牲にして救おうだなんて、それに気付かない限り、お前はあの子達を救えない」
「う、ぐつ……ああ……!!」

突然、木山春生の苦しみ方が変わった。俺の言葉に動揺しているのとは違う。頭を抑えて、うずくまってしまった。

「ちよ、ちよつと、どうしたのよ!」

茫然自失になって俺達の会話も聞こえていなかった美琴も、異変に気付いて木山春生に駆け寄ろうとした。

が、俺は嫌な予感がして、足を止めた。

「美琴! 木山春生に近付くな!」

「えっ!? 何?」

「ぐぐつ……がつ、こ、これは……ネットワークの、暴走……いや、これはAIMの……」

そううめきながら倒れ込んだ木山春生の頭から、何かが生み出された。

「何よ、これ……胎児?」

美琴の言うように、それは胎児に見えた。けれども人間の胎児とはまるで違う。

目と口はあるが、異様な色と形をしており、まるで怪獣映画に出てくるような化け物だ。

臓器のような水色の物体が、クラゲのような透明な膜で覆われている。

足と思われる下半身からは、何本もの触手がうごめいている。

へギッ、ギイ……ギイイアアアア……!!

「っ!?　なんて大きな悲鳴!」

「頭が、割れそう!　美琴、防壁!」

ガラスを引つ掻いたような悲鳴と共に、辺り一面に衝撃波が放たれた。

美琴が磁力を操り、鋼鉄で防壁を作り俺も気絶した木山春生を抱えそこへ転がり込んだ。

「何なのよ、アレー!!」

美琴が胎児に向け電撃を放つと、かわそうともせず直撃して肉が爆ぜ飛んだ。

「攻撃が、効いてる!?　でも、血が出ないのは生物じゃないから?」

「どうやらそうみたいだ……次の攻撃来るぞ!」

胎児の爆ぜた肉体の一部が結晶のように形どり、俺達へと飛んできた。

「ちよ、ちよつと!　無茶苦茶でしょ!」

流星に数が多く、距離を取ろうと背後を振り向いたが視界の淵、道路の鉄柱の影に涙子と飾利の姿が見えた。

彼女たちの方へも結晶が向いている。

「マズイ!　美琴、力借りるぞ!」

咄嗟に幻想支配で美琴を視て、能力をコピーして電撃で結晶を砕いた。

さつきまで無茶していたから、使えないかもと思ったが、そんな事はなかった。

「初春さん！ それに佐天さんまで!？」

美琴も2人に気付いたようだ。2人がこつちに向かってくるのを大声で制した。

「こつちに来ちゃダメ！ 隠れてて！ 今こいつを片付け……て？」

俺も美琴もまるこげにしようと思構えたが胎児はこちらに目を向けず、何かにすがるように虚空に手を伸ばしている。

「まるで何か苦しんで、助けを求めているようですね」

涙子の言う通り、胎児はもがき苦しんでいるような悲鳴を上げている。

その時、俺の携帯が鳴った。

「この非常時に誰だ？ ……もしもし？ 今取り込み中なんだけどな！」

『一体何があった？ 突然そこら辺一体のカメラが落ちてしまって、何も映らなくなっただぞ』

電話の相手は尼視だった。ここら辺一体の監視カメラがダウンして状況が掴めなくなったらしい。

隠しカメラの1つや2つ持っていそうだが、それを含めて全部ダウンしたようだ。

『それと、病院に収容されている幻想御手の昏睡患者たちが一斉に苦しみ出したようだ。意識は戻っていないが、まるで何か悪夢にさいなまれているような苦しみ方だそうだが、もう一度聞く、何があった？』

尼視に手短に目の前で起きている現象を話すと、興味深そうな声をあげた。

『きつとそいつはA I M拡散力場の集合体だ。幻想御手で集められた脳波ネットワークが、木山春生では制御しきれなくなって暴走したのだろう』

非常時なので、スピーカーで美琴達にも声を聞かせる事にした。

尼視の事は俺の仕事の上司と言う事にしてある。木山春生も意識も戻して、尼視の声に耳を傾けていた。

胎児の方は、木山春生からの攻撃から逃れた警備員達が、高架道路から銃器で応戦しているが、あまり効果はない。

それどころか銃撃を食らいながら、大きくなっていつていつていうようだ。

「なるほど、虚数学区の正体、その1つがアレ。と言う事なのだろうな。さしずめあれは【幻想猛獣（A I Mバースト）】と呼んでおこう」

『さあ？ 虚数学区については私では専門外なので深く言う事は出来ないが、1つ確かなのは……それ、幻想猛獣をどうにかしないと、幻想御手の患者たちは全員良くて廃人、悪くて死亡するだろうな』

一応一般学生がいるからか、いつもよりも胡散臭くない声を出しているが、白々しい事だ。

虚数学区なんて、お前が知らないわけないじゃないか尼視。

木山春生も訝しい顔をしているが、今はそれどころじゃないと深く追及しようとはしてこない。

「そんな……どうすればいいんですか!？」

『幻想御手のワクチンソフトは、私の方でも作成中だが間に合いそうもない。木山春生、君なら持つているだろう? それを使えばいい。少なくとも患者達は幻想御手から接続が切れて、幻想猛獣も弱体化するはずだ。うまくいけば触媒を失った幻想猛獣が消滅するかもしれない』

「それ、私が持っています! 木山先生から預かりました!」

飾利がポケットから、小さなメモリーカードを出して見せた。

「これは……本物なのか?」

「本物です! 木山先生はこれでみんなが良くなると言ってくれました!」

俺と美琴が疑わしい目をメモリーカードと木山春生に向けると、飾利は力強く言った。

「確かに、あの時はそう言ったが君達はそれを信じるのかい? 私の言葉など君達はどう信じるわけも……」

「いーえ、私は信じます! 木山先生は私を人質にしようとしている間も、昏睡状態の皆の事を心配していました。それに私に怪我しないように手錠も外してくれました。」

「私も、信じます！ 事情は初春から聞いたけど、子供達を助けるのに木山先生が嘘付くはずないです！」

「初春さん、佐天さん……」

木山春生が自虐的な笑みを浮かべ、吐き捨てるように言った言葉を飾利と涙子はきっぱりと言い切った。

「本当に、人の言葉を簡単に信じるバカが多いな。だから子供は苦手だ……君は、どうなんだ？ 御坂君に、勇騎君？」

ここで俺を木原と呼ばなかったのは、飾利達がいたからだろうか、そんな気遣いをする余裕が今の木山春生にはあるようだ。

きっと飾利達の疑いような言葉に、何か思う所があったのだろう。

「私は、信じるわ。正直、幻想御手の事は許せない、けど、それでも私はあなたの言葉を信じる。あなたが子供達を救いたって気持ちには嘘じゃなかったもの」

「俺はお前の言葉を信じる気はない……だが、お前を信じると言った飾利と涙子を、俺は信じる」

「……本当に、この学園都市の子供達は……バカ、ばかりだ。そのワクチンソフトは幻想御手の原理と同じ、音声ファイルだ。それを学園都市中に流す事が出来れば……」

『くっ、くくくっ……』

尼視が電話の向こうで笑いそうになっていたので、電話を切った。

もう用はない。やるべき事はこれで決まった。

「俺と美琴で幻想猛獣をひきつける。飾利と涙子はワクチンソフトを警備員の元へ！」

「はい！」

飾利と涙子が警備員の車両に向かうの見ながら俺は携帯を操作し、離れた場所に留めたバイクを呼び寄せた。

見上げると、道路上からの銃撃は止まっており、幻想猛獣は方向を変えようとしていた。

「警備員は全員戦闘不能か」

「私たちがやるしかないわね」

と、その時俺の視線はある1点に止まった。

幻想猛獣の向かう先に見える建物、正確にはその壁にうつすらと視えるマーク。

激しく嫌な予感がした。

「まさか……」

走ってきたバイクから双眼鏡を取り出し、そのマークを確かめると俺の嫌な予感は的中していた。

「美琴。マズイ、あいつをこれ以上進ませるな！」

「どうしたっていうのよ……えっ!？」

俺の反応に、美琴は疑問符を浮かべたが、渡した双眼鏡を覗くとすぐにその理由を理解したようだ。

「あの壁にあるハザードマークって、まさか!？」

「ああ………つたく怪獣映画じゃあるまいし、何にせよどんな事してもアイツを足止めしなきゃならなくなつたな」

あの幻想猛獣の行く先にある建物。

それは………原子力実験炉だった。

つづく

第29話 「VS幻想猛獣」

7月24日

原子力実験炉を怪獣映画よろしく目指す、幻想猛獣。警備員のライフルも歯が立たない文字通りの化け物。

「それで、どうする気？」

「正直、あれを倒すだけならお前1人で足りるだろうな」

「でも、幻想御手のワクチンソフトを使う前に倒すと1万人の昏睡患者が危ないかもしれない……だから」

「牽制しつつ攻撃！」

美琴を後ろに乗せ、バイクで幻想猛獣の正面に周る。

「俺がバイクで牽制するから、美琴は攻撃に専念するんだ。すぐに再生する化け物でも、狙いどころでいくらでも攻撃のしようがあるだろ？ それと、能力借りるぞ」

「分かったわ。ちよつと鬱憤溜まっていたのよね。思いつきりいかせてもらおうわ！」

「おいおい、倒すのが目的じゃないからな？」

幻想支配で、美琴の能力をコピーしてバイクを走らせる。

このバイクには銃器も刀もナイフも爆弾もあるが、警備員のライフルも効かない相手じゃ効果は薄い。

一応演算銃器もあるが、それもどこまで効くか分からない。

ならば、レベル5の能力を使った方がいい。

「行くぜ化け物！」

手のような触手を薙ぎ払うように電撃を浴びせる。かなり強力な電撃なので、触手が弾け飛んだ。

続けて、美琴が磁力で巻き上げた砂鉄を鋭い斬撃にして、幻想猛獣を切り刻む。

この攻撃は効果があったのか、幻想猛獣は泣き叫びながら眼下の俺達を睨みつけ、触手を向けてきた。

「気色悪い目を向けるな！」

降り降ろされた触手をバイクでかわし両手に電撃の槍を作り、幻想猛獣の両目を撃ち抜いた。

〈ピギャー！〉

「くらー！ 私の能力でえげつない攻撃するなー！」

「そういう美琴も人の事言えないだろ！」

美琴は磁力で瓦礫の中から、鉄筋パイプを抜きとり幻想猛獣の足元に杭のように突き刺して動きを止めていった。

黒子の真似か？

「ほらほら、こつちだこつち！」

バイクを操り、原子炉とは逆の方向に引き付ける。

幻想猛獣は最初の胎児のような外見から、とんでもなく巨大化していて動きは遅い。だから、このバイクではすぐに引き離せてしまう。付かず離れずに攻撃しながら、動きを止めるしかない。

「このお〜！ キリがないじゃない！」

幻想猛獣は、触手を振り回すだけじゃなく結晶を作りだしたり、エネルギーの塊を生み出したりと攻撃手段を変えてきた。

美琴と俺の電撃で、飾利や警備員達の方へ攻撃が及ばないようにはしているが、キリがない。

『ユウキさん、もう少し堪えてください！ 今警備員の黄泉川先生がワクチンソフトの音楽を学園都市中に流すよう、色々かけあってくれています！』

「了解！ でも、コイツどんどんでかくなってるから早くしてくれよ！」

耳につけた小型インカムから、無線を渡した飾利の声が聞こえた。

「どうやら、無事に警備員の所までたどり着いたようだ。」

「美琴！ あと少しだ！」

「ええ、こつちも聞こえた、わ！」

美琴にも小型インカムを渡しているので、飾利からの通信が聞こえようだ。

地面から大量の砂鉄を巻き上げ、幻想猛獣が伸ばした触手を一瞬で切り裂きながら美琴が答える。

幻想猛獣は悲鳴を上げながら、エネルギーの塊のような光弾を頭上に作りだした。

「つたく、なんでもありだな！」

俺が特大の電撃をぶつけると光弾は爆発したが、あんな攻撃までされると流石に分が悪くなってくる。

と、そこへ妙な音が聞こえてきた。

今まで聞いた事のない音で、学園都市中に設置された街頭スピーカーから聞こえてくる。

それと同時に幻想猛獣の動きが鈍くなり、完全に止まった。

「これは、ワクチンソフト？」

『お待たせしました！ 今ワクチンソフトを学園都市中に流している所です！ 病院の

患者さん達も容体が安定……ちよ、ちよつと待つて下さい！』

「初春さん!? どうしたの!？」

飾利から安心したような通信が入ったが、すぐに緊迫した声へと変わった。

これ以上の厄介事は御免こうむりたい。

へヒギャー! ヒギャー!!>

「幻想猛獣の叫び方が、変わった?」

さつきまでの叫びとは明らかに違う、まるで何かに抵抗するかのような叫びは……まさか!?

『昏睡している患者さん達の容体がまた悪化したようです! それもさつきまでよりもっと苦しんでるって、脳波が乱れまくっていて、このままじゃ長く持たないと、そんな……どうして』

「話が違うじゃない。治療プログラムがあれば幻想御手のネットワークから解放されるんじゃないの!？」

「っ!? 美琴、危ない!」

叫び声をあげていた幻想猛獣の周りに、さつきのような光弾がいくつも浮かびあがり、一斉に周囲へと放たれようとしていた。

「まずい! 美琴、施設を守れ! 飾利達の方は俺が!」

「分かったわ!」

高架線道路の警備員車両へとバイクを走らせる、磁力の反発を利用してそのまま大ジャンプをし車両付近にいる警備員達を守るように立ち塞がり、ありつただけの電撃をバリアのように張り巡らせた。

「お前ら、車両に集まれ！ 散らばるな！」

少し離れた場所にいた警備員に声を張り上げると同時に、幻想猛獣からいくつもの光線が発射された。

「だから……怪獣映画じゃねえってんだよー」

光線は電撃のバリアを貫通する勢いだったが、どうにか持ちこたえられた。けれども幻想支配の時間切れが来たようで、美琴の力は消えてしまった。

見ると美琴の方も、施設を守れたようだ。

「電撃で守れる攻撃だったから良かったけど、何が来るか分からない以上マズイな」

「ユウキさん、大丈夫ですか!？」

警備員車両から涙子と、俺の通っている高校の体育教師で警備員でもある黄泉川愛穂先生達が出てきた。

「ユウキ、大丈夫か？ 全く生徒にばかり無茶させて、あげくのはてに守られてばかりなんて教師も警備員も失格じゃない」

「俺はただの生徒じゃないし。そこら辺は貸しって事でいずれ返してもらえばいいです

「よ」

愛穂先生は俺が木原で、そこらへんの事情もある程度は知っている。

「お前さんに貸しを作ると高くつくじゃん。で、どうする気だ？」

「正直、ワクチンソフトで光明が見えてくると思ってたけど、最悪の状況ですね」

眼下では美琴が一人で幻想猛獣の攻撃を捌いているが、さつきよりも見た目が大きく攻撃パターンも増えているので完全に押されている。

「恐らくは幻想猛獣のせいだ。アレがワクチンソフトの効果を激減させているのだから」

そこへ警備員に付き添われ木山春生がやってきた。

「木山春生、どういう意味じゃん？」

「幻想猛獣は幻想御手ネットワークの上位権限を持つ、マザーコンピューターのようなものだ。外部からネットワークを切断しようとしたのを強引につなぎ止めている。だから、接続された1万人もの学生たちの脳には今まで以上の負荷がかかっているんだ。ワクチンソフトを流している限り、彼らは長くは持たない」

「そんな、ワクチンソフトを止めるしかないんですか!？」

「いや、ワクチンソフトを止めても、幻想御手のネットワークがある限り彼らは長くは持たない……くそ、どうする?」

ワクチンソフトが彼らを苦しめているが、それを止める事も出来ず、木山春生や飾利達も苦虫をつぶしたような顔をした。

俺が幻想支配で、幻想猛獣を視て能力停止で止めれば……いや、幻想猛獣を視ても幻想支配が使えないのは分かっている。

どうしてかは分からないが、木山春生は視えたが幻想猛獣はいくら視ても視えないのが分かってしまう。

それに、能力停止はネットワークのマザーコンピュータを強制的にシャットダウンし、サーバーをダウンする事になる。

幻想猛獣を倒す事が出来ない理由と同じで、それをすれば1万人もの昏睡患者に何が起きるか分からない。

けれども、何か……何かいい手が浮かびそうな気がする。

「あの一、こういう外部からアクセス出来ないのって漫画とかだと内部から停止させるっていうのがお決まりですけど、それは……ダメ、ですか？」

理解半分で効いていた涙子が、恐る恐る声をかけてきた。

「それは相手が施設内部の機械とかなら、映画とかでもそういう手使ってますけど、今回は相手が相手なんでアクセスする以前の問題ですよ、佐天さん」

「あ、あはは〜そうだよねー。あんな怪物にアクセス出来るわけないもんね」

待てよ。外部からではなく、内部から停止？ あの怪物にアクセス？

幻想支配でアイツを視る事が出来なくても、あの怪物にアクセス出来れば……そして、それを停止させるには……っ!! この手しかない!

「涙子! お前天才だ!」

「あつ? えつ? て、天才、ですか?」

「飾利、ワクチンソフトは絶対に停止するな。イチかバチか良い手が浮かんだ!」

「ちよつと待つて下さい。何を思いついたんですか!」

涙子や飾利タチが何か言ってきたが俺は無視してバイクに跨り、美琴の元へと走った。

「初春さん達は無事だった!」

「ああ、幻想支配は切れちゃったけどな。で、もう一度お前の力を使って幻想御手のネットワークを停止させる」

「えっ? 私の能力で? どういう事よ?」

美琴に俺の考えを話したが、物凄い剣幕で反対されてしまった。

「ダメよ、ダメ! 私の能力をコピーしたまま幻想御手でネットワークに接続して、内部から接続を遮断するって……そんなの無茶苦茶にも程があるわよ!」

「でもこれしか手が浮かばないんだからしょうがないだろ。早くしないと一万もの学生

たちが死んでしまう。それに接続を遮断するのはあくまでワクチンソフトだ。俺はただネットワークにハッキングして、ワクチンソフトを補助しようとしているだけだ」

幻想御手は俺の携帯にコピーがある。これを俺が使い、脳波ネットワークと同調させる。

それだけではハッキングは出来ないの、更に美琴の電撃使いとしての能力を使えば、こちらからネットワークにハッキングを仕掛ける事が出来るはず。

美琴は何度か自分の能力で、色々とハッキングをしている事があるので可能なはずだ。

ネットワークに強制的に介入した後、どうやって戻ってくるのかなど色々問題はあるけど、それを考えている時間はない。

ワクチンソフトは確実にネットワークを破壊して、幻想猛獣を弱体化出来る。だから、アイツも全力で抵抗している。

「なら私がする。こういう言い方は変だけど、ハッキングに慣れている私の方が良いわ。それに、私の能力だもん。私が適任よ」

「ダメだ。確かにお前はよくハッキングしているけど、俺はお前がレベル5になる前からハッキングやら情報操作をしているんだ、慣れっこだよ。それに、俺がもし失敗したら……その時はお前がやるんだ」

「……分かったわ。絶対に失敗するんじゃないわよ」

「了解だ。俺が成功させるまで、あいつの相手任せたぞ?」

「ええ、あんな化け物くらいこの美琴様1人に、任せなさい!」

美琴にその場を任せ、俺は離れた場所に移動する。

ハッキング中は無防備になるからだ。警備員達がいる場所でやった方がいいのだから、色々と面倒になりそうな気がするので1人で瓦礫の影に隠れてやった方がいい。

と、ここで尼視の顔が頭に浮かんだ。幻想御手の解析が遅れた本当の理由が他にあったように思えたからだ。

「尼視の奴。まさか、俺自身に幻想御手使わせる為に……ま、どうでもいいか」

尼視が何を企んでいるかは、考えても仕方ない。アイツのろくでもない考えは今に始まった事じゃない。

遠く離れた瓦礫に隠れ、携帯を取り出し幻想御手の音楽を聞く。

耳からはさつききのワクチンソフトに似た音が流れだしてきた。

「頭がすつきりとしてくる……けど、何か嫌な感覚だな」

幻想御手は同系列の能力者を同調させる。なら、俺の幻想支配など、1人しか確認できない能力者はどうなるか?

ただ新しいカテゴリーとして登録させるのみか、それとも……

「……よし、やるか」

目を瞑り、意識を集中させる。

俺は、研究所や実験施設の破壊オーダーを何十件もこなしている。そのおかげでハッキングして、セキュリティを解除したりウイルスを仕込む事など朝飯前だ。

それに、美琴の能力でハッキングする事もこれが初めてじゃない。

だから、いつもと同じ要領でやれば……幻想御手のネットワークにも入れるはず。

なんでこの方法をもっと早く思いつかなかったのか、不覚だ。

「つて今はそれを考えてる場合じゃない……ハッキング開始」

一瞬だけ、意識が飛んで行く感覚があり、次には何か得体のしれない空間に浮かんでいる感覚があった。

『これが……ネットワーク内部か?』

そこにはモニターのような画面が、無限にも思えるほど広がっていた。

——血のにじむ努力も、たったひとつの、たった一人の能力に押しつぶされる現実。

——無能力者がどれだけがんばっても、能力者の才能には及ばない。

——どんな想いもどんな願いも、超えられない壁。

——上も見ても、天辺すら見えないから下を見るしかない。

——だから、俺は。

——だから、私は。

——幻想御手が欲しかった……

これは、木山春生の時と同じく、幻想御手に接続した学生たちの記憶の海。

『悪いけど……お前らに同情はしない』

そう、同情はしない。夢を見るのも、理想を抱くのも本人の自由。

だから、堕ちるのも本人の自由。

『自分を卑下するだけで、周りを見ようとしない……自分を騙して、嘘ついて……』

広大な記憶の海の底、何かが光っていた。

『こんな所で落ちこぼれ同士、仲良く傷の舐め合いしてて満足するような……』

三角柱の形をした半透明な結晶。アレを破壊すれば、この幻想は……

『そんなみじめな幻想は……』

幻想支配を起動、目標を視認。

『俺が、支配してやる!』

能力停止、発動。

その瞬間、今までの淀んだ泥のような空間が白い何かで埋め尽くされた。

『ワクチンソフト……これで』

俺の意識はまたそこで戻された。

「つ……くう、ここは……俺は、戻ってきたか」

目を開けると、そこはさっきまで隠れていた瓦礫の影だった。

そこから出て、美琴達の方を見ると幻想猛獣はもがき苦しむように触手を振り回している、美琴はそれを交わしつつ電撃や砂鉄の剣で捌いている。

けれども、さっきまでと違い、傷口の再生はされていない。

「飾利！ 昏睡患者の容体は!？」

『ユウキさん、何をしてたんですか!? さっきまでずっと呼んでたんですよ!? 患者さん達はみんな落ち着いて、脳波の異常も見られないそうです。ワクチンソフトは完全に効いています! ネットワークは破壊されました!』

「そうか……なら、後は……美琴! もう手加減する必要はないぞ!」
「ええ、そう見たい、ね!」

今までとは違う、全力の電撃が幻想猛獣を包みこむように放たれた。

幻想猛獣は何かバリアのようなもの、恐らく誘電力場を発生させようとしてたが、そうはいかない。

「これでも、食らえ!」

両手をつき、幻想猛獣の足元の地面にある砂鉄を一気に噴出させた。

〈nh0苦 oew助sf e〉

全身を切り刻まれ、続け様に美琴の全力電撃をくらいボロボロになりながら幻想猛獣は、何か言語にならない言語を叫びだした。

『油断するな！ 相手はAIM拡散力場の塊だ！ 力場の核を破壊しない限りアイツは倒せない！』

木山春生の声を聞き、俺と美琴は顔を見合わせた。

「見えたか、美琴？」

「ええ、ばつちりとね」

幻想猛獣がボロボロになった時、肉片の中心に三角柱の形をした何かが見えた。

それはネットワーク内部でも見えた、幻想猛獣の核に間違いない。

「後は、私に任せてもらおうよ」

「ああ……俺はちよいと限界だ」

美琴がポケットからコインを取り出した。

【超電磁砲】 コインを指ではじき、打ちだす美琴の異名でもある、必殺技だ。

「……もう、眠りなさい。そして、目が覚めたら、もう一度上を向いて一歩ずつ歩いて行

くよ」

同情とも慰めとも違う、美琴なりの励ましの言葉と共に超電磁砲は放たれ、一瞬で核を撃ち抜いた。

そして、幻想猛獣は欠片も残さず、消し飛ばされた。

「これで、全て終わったな」

「そうね、ふう〜……………あつ」

「おい、美琴？ だいじょ……………ぐつ、くう〜!？」

美琴が深く息を吐きだすと、体から力が抜けたように倒れ込んでしまった。

かけようとした、俺も頭痛に襲われ同じく転んで倒れた。

「私はただの電池切れよ、つて、あんたの方が大丈夫なの？」

「俺も……………似たようなもんだ。流星に、無理しすぎた。ちよつと……………寝る。あとは、愛穂

先生達、が……………」

そこで俺の意識は途絶えた。

後にして思えば、あそこで俺が意識を失うのがもう少し遅ければ…………

テレスティーナの事、気付けたかもしれない。

つづく

第30話 「VS魔術師」

7月24日 夜

「……い、てっ!？」

突然の頭痛に飛び起きた。

気が付けば、病院らしいベッドで寝ていたようで、ゆっくり周りを見渡せば見知った顔があった。

「おや、目が覚めたようだね。念のために聞くけど、僕が誰か分かるかい？」

「忘れるわけではないですよ。その蛙顔は一度見たら記憶に残る。久々に世話になりました、冥土帰し」

「君にはこっちも世話になっているからね。それに、患者を救うのが僕の仕事だよ？」

カエル顔の医師、冥土帰し。学園都市一番、いや世界で一番の名医と言っても言い。

俺は怪我などしたら、基本的に彼に診てもらおう事になっている。幻想支配は謎が多く、下手に他の医者に診てもらおうのは危険だ。

だから今回も、木山春生や幻想猛獣との戦いで消耗しきって意識を失う前に、エマー

ジーシーをかけてここに運んでもらう手配をしていた。

最も、冥土帰しには実験や研究などで俺も色々世話をした事もあるので、対等な協力関係と言っても言い。

「幻想御手は？ あれからどうなりましたか？」

「ああ、それは大丈夫だよ。昏睡患者は1人残らず目を覚ましたからね。脳波も異常はないし、明後日にはみんな退院できるだろう。それにしても御坂くん達から聞いたけど、君は今回随分無茶をしたものだね？」

「……時間がなかったし、他に方法は思い浮かばなかったからな。ま、俺のオーダーはこれにて完了って事」

携帯を見ると、1通のメールが届いていた。

メールには尼視からの短い文章があった。

『面白いデータが取れた。報酬は後日相談だ』

とだけ書かれている。

「そうかい。君の能力もそうだけど、脳も異常かもしれないね。あれだけの事をして脳波に異常が全く見られないよ？」

「木原ですら全くお手上げの能力だから、そこら辺はチートと思ってるよ。で、俺は即退院したんだけど？」

ベッドから起き上がり、両手両足の感覚がすっかりしているのと、幻想支配で美琴の能力がまだ残っているのを確認する。

「君は入院と言っても夜中に脱走される事もあるからね。退院を許可するけど、何か少しでも違和感を感じたらすぐに来るんだよ？」

「当麻じゃあるまいし。早々ここに厄介にはならないさ」

何があるか分からないけど、あそこまで無茶する事は滅多にない……と思いたい。

「すっかり日も暮れたし早く帰って寝るか」

さつきまで病院で寝ていたが、まだ少し眠気が残っている。

警備員が回収してくれたバイクで病院を後にして、自分のマンションへと走らせようとした、その時だった。

「……くっ!? な、なんだこの感覚？ 今まで味わった事のない、嫌な感覚だ。あつちか」

突然、頭をざらつかせる不快感にも近い何かを感じた。

「これは一体……幻想御手の時とも違う、違和感？ とにかく、行ってみるか」

何か嫌な予感も合わせて感じた俺は、用心のためにバイクのサイドカバーを開き、ナイフと拳銃を懐に忍ばせその場所へと向かった。

しかし、違和感を感じる場所に近づくと頭に頭痛がひどくなってきた。

そして、頭に響く何かの意思、ここには近づきたくない。離れたいと言う声にならない声。

「能力者？ 操祈の仕業？ ん？ 周りに人がいない？ いや、人の気配がしない？」

頭痛が突如止んだので、バイクを止めて周りを見渡す。

ここは夜でも人通りの多い交差点。この時間帯ならば学生も多く通っているはず。

なのに、人っ子ひとりいないのはおかしい。

やはり誰か能力者の仕業なのか、いや、仮に心理掌握の操祈の仕業だとしたら、そう気付くはず。

と、周りを見渡した所で視界の端に人影が見えた。

人影は2つで、1つは鏢のない長い刀を持ちジーパンが半分破けてシャツも異様にめくった露出狂女で、1つはどうやら学生のように体中が傷だらけだ。

しかも、地面にはいたるところに深い切り傷が走っていて、所々めくれ上がっている。

「なっ？ どうしてここに人が？ 結界は有効化されているのに!! あなたは一体何者ですか!？」

「そりゃこっちのセリフだつての露出狂め……ん？」

露出狂女が驚いた表情で俺を見た。ふと露出狂の足元に転がっている学生に目があった。その学生は、見覚えのあるツンツン頭をしている。

「おい……そこに倒れているの、当麻、か？」

「この少年の知り合いですか？ なっ!？」

傷付き倒れているのが当麻と気付いた瞬間、懐から拳銃を取り出し露出狂女の急所目にかけて撃ち込んでいた。

「いきなり発砲とは、学園都市には物騒な学生が多いようですね」

距離があつたとはいえ、正確に狙った銃弾を全て交わした露出狂女は、動揺もみせず、に当麻から離れ刀に手を置きながらこちらを睨んできた。

「よく言うぜ。涼しい顔して全部かわすか……お前何者だ？ 学園都市の人間じゃないな。そんな大きい刀振り回す露出狂はここには……いや、露出狂ならいるか」

あつちは、サラシ女だけだな。それよりも当麻の怪我の様子を見ないと。

拳銃の弾倉を変えながら、当麻にかけより簡単に診る。

身体、とくに右手中心に切り傷がヒドイ。骨までは達していないようだが、それでも全身ボロボロだ。

しかし、右手全体に切り傷……と言う事は何かの能力ではなく、物理的な攻撃と言う事になる。

「なあ、こいつはきき、どうしもうもなくバカで、お人よしで、おまけに不幸って文字が歩いてるような奴さ。けどな、何の理由もなく誰かに殴りかかったり因縁ふっかけるようなクズじゃねえ……お前は一体、当麻に何をした？」

「……その少年には少し話をしただけです。そこまでするつもりはありませんでした。が、どうしても聞き入れてもらえなかつたのです」

「う……い、ンデックス……」

苦しそうな当麻の呟きに、少しだけ露出狂女の顔が歪んだように見えた。

「インデックス？　そうか、お前はインデックスを狙う魔導師、というわけか」

ならば当麻がこうまで傷付いたのも納得出来た。恐らくコイツは当麻がインデックスを匿っていると思い、居場所を聞き出そうとしていたのか、だから深手を負わせようとせず拷問に近い傷を負わせた。

「あなたも禁書目録と接触していましたか」

「なんでインデックスを狙う？」

俺の問いに彼女は僅かに口を開き何かを言おうとしたがすぐに閉じ、俺に冷たい視線を投げつけてきた。

「あなたには関係ありません。禁書目録と接触しただけの部外者が口を挟まない方が身のためです」

「確かに、俺はインデックスから詳しい事は何も聞いていない部外者だ。あの子を守る義理も義務もない……けどな」

当麻を巻き込まないように物陰に寝かせ、こちらも露出狂女に思いつきりの殺意を向ける。

なぜここまで自分が怒っているのか分からない。

この女が、インデックスを狙っているから？ 当麻をここまで痛めつけられたから？
あるいはその両方？

いずれにせよ、ここまで初対面の奴を憎いと思った事はない。

「その少年を病院に連れて行かないのですか？」

「ああ、その前にやる事がある……お前を、殺す」

熱のこもった身体が一瞬にして冷やされる。感情のままに挑んでも返り討ちに合うだけだ。

さっきの銃弾を交わした動きといい、こいつの感情を殺したような表情といい、間違はなくこの露出狂女は強い。

それも、俺のような裏の人間だ。

しかし、当麻を運ぶ俺に警戒はしても、攻撃してこないのは、幾分甘いのかそれとも俺を舐めているのか……後者はなさそうだな。

コイツは油断も慢心もあまりなさそうだ。

「……私の名前は神裂火織と言います。もう一つの名は、語りたくはありませんが……」
「もう一つの名?」

「魔法名、と言つても分からないでしょうね」

「いや、何となく分かる。要するに殺し名、だろ? だったら俺も名乗ろうか、初対面の相手には大抵ユウキ、と名乗っているが……お前みたいな相手にはこう名乗っている。
木原勇騎、とな」

俺がフルネームを自分から明かす事は滅多にない。

木原と名乗るのが嫌いなのか? と数多には笑われたが、自分でもよくわかっていない。単に木原と名乗るのが嫌いなのか、木原と言う名が嫌いなのか、それとも……

何にせよ、俺が心の底から殺したいと思つた相手には、フルネームで名乗る事にして
いる。

「きはらゆうき……もう一度言います。無駄な事は止めて、その少年を早く病院に連れて
いって、インデックスや私達の事は忘れてください。そうすれば私もあなた達に手を
出す事はしません」

「そりやお優しい事で、でも、俺の返答は、これだ!」

言うが早いから右手で銃を抜き、全弾撃ち尽くす。神裂火織は、またも涼しい顔でかわ

す。

俺の手には弾切れの銃のみ、と思わせて左手の袖口から新たに拳銃を取り出し、即座に撃つ。

左手の銃はデリンジャー並に小型で威力は低いが、その分弾速はライフル並だ。

「無駄です」

だが、神裂火織に届く前にその弾はバラバラになった。何かが神裂火織から放たれて、弾をバラバラにしたのだ。

それだけではない、正体不明の何かが俺へと放たれたようで、アスファルトを切り裂く音と同時に俺の周りの地面が無数に切り刻まれていた。

ふと気が付くと両手の銃は綺麗さっぱりと斬られていた。御丁寧にも俺の両手は一切傷付けずにだ。

「これでもまだ、やりますか?」

「俺がこの程度の脅しで退くと思うか? 今のは抜刀での斬撃じゃないな。その刀の鞘に巻かれた7本のワイヤーでの攻撃か。流石の当麻の右手も、それは防げないな」

思った通り、当麻の幻想殺しを傷付けたのは異能の力ではなく、鋭いワイヤーがくりだす物理攻撃だ。

神裂火織は俺の推理に目を少し見開き、驚いた表情を浮かべた。

「初見で本数まで見抜かれるとは思いませんでした。ですが、それが分かったのなら尚更勝てない事は理解できたはず」

「どうして？ 手品の種が分かったのなら、それ相応の対処をすればいい」

幻想支配で美琴の力を使おうかとも考えたが、使える残り時間は少ないだろう。

それに、電撃でもアイツは簡単に避けそうだ。

神裂火織は全く本気を出していない。刀を抜く事もせず、鞘に巻いたワイヤーで遠距離から牽制を仕掛けてくるのがその証拠。

しかも、弾を2度も見切った時の動きで相手の身体能力が、化け物級だと言う事も予測できた。

魔術師故の身体強化魔法か何かだろうけど、厄介な事この上ない。

懐に手をつ突っ込んだ所で、少し服が切れた事に気付いた。

「対処も構いませんが、そこから動けば貴方の体はバラバラになりますよ？」

「……そう、みたいだな」

俺の周りにはワイヤーが張り巡らされていた。恐らくさっきの斬撃の時にしかけたんだろう。

拳銃をも切裂く鋼の糸、いや、鋼以上の強度をもつていそうだ。そんなワイヤーに囲まれては、一步も動けなくなってしまった。

「断わっておきますが、私の七閃の先には唯閃が待ち構えています。ここで手を引いて下さい。そこまで私に使わせないでください」

唯閃、それが神裂火織の真の技だろう。抜刀術かそれとも刀の魔法かは知らないが、幻想支配でコピー出来ない異能の力だろう。

幻想支配での出来る事と出来ない事は今まで勘で分かったが、今回もそれだ。

超能力はコピー出来るが、魔法に関してはコピー出来る気がしない。

でも、俺の戦い方は幻想支配でも、銃やナイフを振り回すだけでもない。

「だったらそれを使わせる前に、お前を殺せばいいだけだ！」

懐の中で手に取った携帯を操作する。少し遠くで止めたバイクのエンジンがかかった音がした。

「何をしましたか？ バイク？……なっ!？」

俺のバイクは、携帯で遠隔操作出来る。今はバイクをこっちに向けて走らせながら、煙幕弾を放った所だ。

「こんなこけ脅しを！」

勿論、こけ脅しになるのかすら怪しい事は百も承知。一瞬でも神裂火織の視界を防げればいい。

それだけあれば……

「うおおお〜!」

美琴の力を使い、周囲のアスファルトを磁力で持ち上げる。

幸い神裂火織がめちやくちやに切り裂いてくれたおかげで、アスファルトは細かく砕けて持ちあげやすくなっている。

どんな手でワイヤーを強化しよう、地面に突き刺さっている以上、それごと持ち上げれば隙間が作れる。

走ってきたバイクに跨り、浮かびあがったアスファルトと地面の隙間からその場から離れる。

「ただの銃弾は防げても、これはどうだ」

左右のカバーを開け、銃器とナイフを懐にしまい、一本の杖を背中に背負う。

「夏場だと薄着になって、隠し場所がなくなるのが難点だな」

他の隠しカバーも開けて、色々小道具を懐に仕舞う。

「まだ、やる気ですか。仕方ありませんね。七閃!」

迫るワイヤーをくぐり抜けながら、神裂火織に向けて走る。

このバイクの機動性は普通のバイクとは違う。前後のタイヤは車体に固定されておらず、独自に稼働するので変則的な動きも出来るが、それでも車体の至る所に掠っている。

「こつちからも行くぞ！」

取りだした銃器は、演算銃器。実はこいつを使うのはこれで2度目。尼視のパソコンを撃ち抜いたのが、初使用だった。

「ワイヤーの強度を設定。これは切り裂けるか！」

「無駄です！」

演算銃器の銃弾とワイヤーがぶつかる。ワイヤーは銃弾を切れなかった。だが、弾く事は可能だったようで、銃弾はあらぬ方向に当たってしまった。

「これでもダメか」

「どうやらあなたはとても目がいいようですね」

「自慢じゃないけど、動体視力は人外認定されてるぜ？」

幻想支配の影響なのか知らないが、俺の動体視力は視覚系能力者以外では最高だと言われている。

「ですが、いくら目がよくてもこれはかわしきれませんよ。七閃！」

意を決したような神裂火織の言葉には、今まで以上の力が籠っていた。

直感でバイクでは避けれないと思い、咄嗟にバイクから飛び降りた。

その直後、バイクはバラバラになっていた。

「これで足は封じました。まだやりますか？」

「ちっ、でも距離は稼げた！」

今まで見えていたワイヤーの軌道が、おぼろげにしか見えなかった。

直線的ではなく、曲線的で不規則な動きだった。

それでも、ここまでの攻撃を仕掛けてきてもまだ神裂火織は本気ではない。

「なんで……なんでここまでの力を、あいつらに向けた」

「……………」

まだ本気を見てはいないが、確信した。

この露出狂、神裂火織は……俺が今まで相手をしてきた能力者達よりも格段に強い。

レベル5かそれ以上の強さを持っているが、幻想支配が使えなく尚且つ身体能力が俺

より上な分、脅威度は比べるまでもない。

「こんな力を、なぜインデックスに、当麻に向けた？」

頭の奥底から、怒りが再びこみあげてくる。

「てめえの力はどうでもねえよ……でもな、そんな力を使わなきゃいけないほど、当麻が

脅威だったのか？」

確かに、当麻の右手はあらゆる異能を殺せる。こいつら魔術師の力だつて消せるかも

しれない。

ただそれだけ。身体は多少鍛えられている程度、俺や土御門には全く及ばない。

それでも、コイツは俺よりも強い神裂火織に向かった。インデックスという知り合つて間もない少女のためだけに。

そして、神裂火織は自分の力を振り、当麻を徹底的に打ちのめした。

手加減していても、本気を出していなくても、その次元が違う圧倒的な力でねじ伏せようとした。

それが許せない。

「ははっ、なんでだろうな。今までもつと卑劣で、冷酷な事みてきたし、俺自身もしてきたのにな……身勝手すぎるな。それでも……お前は許せない」

「っ!?!……」

神裂火織は動揺していて、何かを口にしようとしているのだが、関係ない。

動揺するなら勝手にしている。こいつを殺せれたら、それでいい。

「はああああああ!!」

さつき少し使ったせいで、幻想支配で使える美琴の使用時間はもうあまりない。

超電磁砲や砂鉄の剣では避けられるか、防がれる可能性がある。だから、最後の手段を使うしかない。

全身に電気が駆け巡り、ツボを刺激して筋力が増していく。

同時に、体内の電気信号を操作し、感覚を増強させる。もつとも、これは長時間使え

ないし、副作用も強い。

「行くぞお！」

両手にそれぞれ形状の違うナイフを構え、神裂火織に向けて走りだす。

「部外者の、全く関係のないあなたにまで……私、は……七閃！」

今度こそ、神裂火織が本気になった。今までと違う構えから放たれたワイヤーは、さつきよりも更に速い。

「うらあー！」

「速い!?!」

だけど、俺もさつきまでとは違う。限界以上にまで無理やり身体能力を上げている。

身体を少しだけずらしワイヤーをかわしつつ、両手に構えたナイフを振う。

今使っているナイフは、特注中の特注品。片方は高振動ナイフで、もう片方は超高熱刃ナイフ。

どちらも人が扱うサイズにするには、色々と問題点がある危険物だ。

「七閃が!?!」

それでも、これくらいの規格外ナイフでなければ、このワイヤーは切断出来なかっただろう。

しかし、ナイフの方も無事ではなく、それぞれ刃に傷がついている。

そう何回も切断出来そうにないが、神裂火織の側にまで行ける隙を稼げればいい。「うおおくりやあー!」

前後左右、俺の死角をつくようにワイヤーが迫ってくる。まるで生き物のようだ。

俺は、ナイフで進路を塞ぐように迫ってくるワイヤーのみを切断、残りはかわしまくった。

流石にかわしきれず、体中に切り傷が増えていくが、気にはいられない。

「肉を切らせて骨を断つつもりですか、仕方ありませんね。こればかりは使いたくはなかったのですが。直接は当てません、衝撃で気絶してもらいます」

神裂火織は何本も切られたワイヤー攻撃をやめ、ついに両手を鞘の鯉口に添えて抜刀の構えをとった。

どんな予測不可能な斬撃が来るかはしらないけど、抜かせるわけにはいかない。

刃が完全になくなったナイフは既に捨てている。右手に握った小さい青い球を神裂火織に向けて投げた。

「今更爆弾ですか?」

神裂火織は残ったワイヤーで、球を切った。だが、それは失敗だ。

ワイヤーで切られた球から透明な液体が飛び出し、神裂火織の両手と刀、両脚に降りかかった。

「なっ!? ぬ、抜けない!! いや、手にこびりついている!? 足も動けない!」

「学園都市特性の瞬間接着剤だ! お前の両手両足は封じさせてもらった!」

でも、これであいつの刀が封じられたとは思えない。あの長い柄で殴られれば、それだけで終わるからだ。

それにいくら瞬間接着剤とは言え、あいつの力なら強引に刀を抜くだろう。

すぐに左手に持った容器をなげつけ、右手で携帯を操作する。

「今度は本当に爆弾だ」

俺が投げたのは気化爆弾、名はイグニス。そのガスは人体には影響はないが、爆発力が高い

「この距離ではあなたも爆発に巻き込まれますよ!」

「自爆の趣味はない」

イグニスは空気中には一定の狭い範囲でしか拡散しない優れ物だ。

俺の全身は、筋肉を刺激する微弱な電気が常に駆け巡っていて、その火花がイグニスに引火しない距離を保っている。

神裂火織はなんとかこの場から離れようと、両脚に粘りついた接着剤を地面ごと砕こうとしている。

「無駄だ」

神裂火織に向けて、携帯を突き出す。すると、背後で何かが点火したような音が鳴り響く。

それは、さつきワイヤーでバラバラになった……と神裂火織が思っていたが、実際は違う。

俺がわざとバイクを分解させた。このバイクの最後の切り札、車体そのものをミサイルに変えてぶつける。

「……逝け」

神裂火織が地面を砕き、飛んで避けようとするよりも速くバイクミサイルが命中した。

イグニスとバイクミサイルのダブル爆発。

範囲は狭くても、その爆発力は凄まじく、周囲のビルのガラスが衝撃波で一斉に割れた。

これで普通の人間なら、即死して身体はバラバラになっているはず。

しかし、神裂火織は普通の人間ではない。

俺の勘がそう告げていた。これだけやってもまだ彼女は生きている。ひよつとしたら無傷かもしれない。

分からない事が分かったり、柄にもなく頭に血がのぼったりと全く、今日の俺は色々

と変だな。

「はあ、はあ……つたく、過重労働にも程がある……」

木山春生と幻想猛獣だけでも能力を過剰使用したのに、半日もせずにもまた更に過剰使用。

頭はズキズキ痛むし、体中が悲鳴を上げている。

筋力や電気信号による反射神経などの増長による副作用、それは最悪全身の筋肉が断絶する恐れがある。

断絶しなくても全身筋肉痛は確定で、1、2日はまともに身体が動かなくなり、五感の低下も招く。

それだけのデメリットがあると分かっているとしても、神裂火織を殺す為には躊躇なく使った。

殺すと決めた相手に対して取れる手段は全てとる。目的のために手段を選ばない。

木原でありながら、木原ではないとされる俺の異様性の1つ。

「……まだ、だな」

噴煙が辺り一面を覆い、神裂火織の人影もまだ見えないが、確実にトドメをさすべく背中に背負った杖、仕込み刀に手を伸ばす。

思いっきり電灯を蹴り、煙幕の中へと飛びこむ。姿は見えなくても、気配は分かる。

煙の中に一瞬だけ蒼い光が見えた。何の光かは知らないが、その中に神裂火織はいるのは分かった。

空中を飛びながら仕込み刀を抜刀し、袈裟斬りで煙ごと切り裂いた。

——カキンツ

しかし、目標に届くか否かでまるで硬い金属とぶつかったような音がして、刀が折れてしまった。

僅かに晴れた煙の向こう、神裂火織が僅か数ミリ程鞘から刀を抜いているのが見えた。

なら折れた刀に用はない。すぐに投げ捨て、拳を握る。

残った力全ての右手に集める。下手をすれば右手が使いものにならなくなるかもしれないが、それでももう手はない。

電灯から飛んでここまでの時間は、僅か数秒の事だろう。

それでも俺には全ての動きはスローモーションに見えた。

「神裂、火織!!」

拳が砕けても構わない程の力で、神裂火織の顔面を殴った。

彼女は避けようとはせずには殴られた。少し驚いた表情をしていたが、武器が折れてすぐに攻撃が来ると思っていなかったのか、それも……わざとか。

「っ…………もう眠って、下さい！」

退いたのは一步。たった一步後ずきただけで彼女は体勢を立て直し、俺の腹を蹴った。

「がっ…………は」

全神経を殴る事に集中していたため満足に受け身も取れず、俺はそのまま数十メートルは蹴り飛ばされた。

「うあ…………ああ、うぐっ!？」

ビルの壁に叩きつけられ、幻想支配の制限時間も過ぎてしまい、更には身体に過負荷をかけた副作用がいつぱんに襲いかかってきた。

全身至る所に激痛が走り、脳がパンクしような程の頭痛、そして、身体から感覚がなくなり意識も飛んで行った。

「……………」

最後にみたのは、壁にめり込むほど叩きつけられた俺と、地面に寝転がっている当麻に哀しみや苦しみ、少しの後悔が混じった視線を送る神裂火織の姿だった。

これが俺の、殺し合いでの初めての完敗だった。

つづく

第31話 「首輪」

7月27日

どれだけ眠ったか分からなかったが、頭痛と筋肉痛で目が覚めた。

「……知らない、天井だ」

日差しを眩しきで目がくらみながらも少しずつ開くと、そこには見慣れない天井があった。

てつきり地獄か、運が良ければ病院のベッドの上かと思ったがなぜか布団に寝かされていた。

俺は神裂火織と戦って……負けた。

ならなんで俺はこんな所にいる？ 頭をぐるりと動かし辺りを見渡すとそこはどこ

かの部屋ようだが、異様に狭い。

更に頭を動かすと、どうやら隣にも布団が敷かれていて、そこに包帯でグルグル巻きになった当麻が眠っていた。

「あ、ゆうき！ 目が覚めたんだね！」

名前を呼ばれて頭を少し上げると、白いシスターがテトテトと狭い部屋の中を走って

くるのが見えた。

「イン、デックス？　なんでお前が？」

「それはこつちのセリフなんだよ！　とうまとはぐれたから心配で探しても見つからないし、こもえの所に戻ったら2人して倒れてたんだよ！」

こもえ、そうかここは小萌先生の部屋か。

状況がさっぱり読めないが、まずは自分の体がどうなってるか確認だな。

起き上がろうとすると、インデックスが止めた。

「あ、まだ起き上がったらダメなんだよ。とうまと違って怪我はないようだけど、すごく衰弱してるってこもえ言ってたんだよ」

怪我は、ない？　そんなわけがない。神裂火織と戦った時に体中ワイヤーで切り刻まれたり、ビルに叩きつけられた時に骨が数本逝ったはず。

が、上半身だけ起き上がって自分の体を見てもみると、包帯は一切巻かれておらず外傷も一切なかった。

ただ、少し頭痛がするのと、全身が筋肉痛なのを除けば一切健康体だ。

頭痛は幻想支配の後遺症、筋肉痛は肉体の限界を無理やり電気で引き延ばした副作用だと思いが、思ったよりも酷くない。

「インデックス、魔術か何かでお前が治療したのか？」

そう聞くと、インデックスはとても悲しそうな顔をした。

「私は何もしてない、何もできなかったんだよ。こもえと私が2人を見つけた時はとうまには包帯巻かれていたし、ゆうきには魔術で治療した形跡があったんだよ」

「どういうことだ？ 俺と当麻を治療したのはインデックス以外の魔術師と言う事になる。」

恐らく当麻は幻想殺しのせいで回復魔法とかが効かないから、キズ薬や包帯で治療したんだと思うが、一体だれが？

神裂火織？ それとも他の魔術師か？

「ごめんなさい……私のせい、だよな？ とうまもゆうきも私を狙ってた魔術師と戦って怪我したんだよな？」

「……それは」

正直なんでインデックスが狙われたのかとか、あいつの正体とかもよく分からない。当麻が傷付いているのを見て、本能的に許せなくて殺そうとしたのは覚えている。

けど、なんでそこまでしてアイツに挑んだのか、それに戦っている間に少しずつアイツへの殺意が薄らいでいった気がした。

神裂火織、一瞬で俺を殺せたはずなのに、俺の攻撃を捌いたり防いだりするだけで積極的に攻撃しては来なかった。

アイツの本気はきつとあんなものじゃないはず。瞬きする間に俺も当麻も殺せただけ……

「う……………」は

「あ、とうまー！」

やっと当麻が目覚めて、俺とインデックスを不思議そうな眼でみていた。

「インデックス、それに……………ユウキ？　なんでお前が、いつてえー！」

「まだ起き上がったらダメだよ、とうま」

当麻は起き上がったが、右手が痛むようだ。インデックスがそつと当麻の右手に手を添えた。

「目が昇ってる。俺、一晩も眠ってたのか」

「違うよ。とうまもゆうきも3日寝込んでたんだよ」

「3日!?!」

思わず俺と当麻も声が重なった。3日も寝込んでいたのは驚いた。でも、それも当たり前か。

木山春生、幻想猛獣、そして神裂火織と、あの日は立て続けに規格外の奴らと戦って、幻想支配も限界以上に酷使した。

正直、1週間は何もせずにゴロゴロしたいくらい働き過ぎた気がする。

「2人共どうしたの?」

「あ、いや、なんでもないんだ、なんでも」

俺も当麻も何か難しい顔をして考え込んでいるのを不思議に思ったインデックスが尋ねてくるが、俺はともかく当麻は一体何を考えていたんだろうか。

「私、とうまもゆうきも助けられてばかりで、助けられなかった」

インデックスが泣きそうな顔で色々言っていたが、俺は別の事を考えていた。

携帯を見てみるとメールも着信もない。3日も寝込んでいたのに何もないとはいえ少しおかしいな。

幻想御手の件は、もう片付いて後始末は他の奴らがしてるみたいだけど、何も俺に言ってくることはないとは。

ま、それは置いておくか。ともかく、事の始まりから全部こいつらに聞かないと話にならない。

俺は、ほんの数センチ先で何だか微笑ましくも感動ものの対話をしている2人に真顔で向き直った。

「その2人。感動の場面はもう終わったか?」

「うん!」

「いやいや、なんでここで水を差すんだよお前は! 　　つてか、うん! 　　つて何満面の笑顔

で返事してるんですか、インデックスさん!? あ、なんでユウキもここにいるんだ? しかも、俺の横で寝てみたいだし」

今気付いたか、ノー天気だなこいつは。

「3日前、家に戻ろうとしたら、変な気配がして行ってみると変な格好した露出狂がいて、足元にお前が倒れてて喧嘩ふっかけたら負けたんだよ。んで、気がついてたらここで寝ていた。ちなみにインデックスはその前に知り合つて、魔術師に追われているとか簡単な状況は聞いている」

「お前でも、あの魔術師にやられたのか!? って、インデックスとも顔見知りなのは驚いたな」

「ゆうきはね、私にたくさん御飯をごちそうしてくれたんだよ。私が魔術師に追われている事も、魔術の事もすぐに信じてくれたんだよ。全く、とうまも少しはゆうきを見習つてほしいかも」

インデックスは不満げな顔で当麻を睨んでいるが、はつきり言つて迫力不足でどこかしら可愛げのある表情になっている。

「そんな事より、さつきも言ったけど俺は、インデックスは魔術師から追われてるって事しか知らない。だから、今まで何があつたか話してくれないか? ってか話せ、キリキリ全部吐け……っ!?!」

当麻もインテックスに事情を聞こうとしたが、部屋の外から異様な気配を感じ、すぐに2人をかばうように立った。

「ゆうき？」

「どうしたんだいきなり？」

頭に？マークを浮かべる2人に静かにしているように合図して、静かに部屋のドアへと向かった。

「あれ？ 部屋の前で何をしているのですか？」

ドアの外から外出していた小萌先生の声でした。けど、他に2つの気配がする。

「上条ちゃん、誰か分かりませんか？ おおきやくさんですよー？ ゆうきちちゃんも起きてますかー？」

小萌先生の呑気な声と共に、ゆっくりとドアが開かれその先には小萌先生と2つの人影があった。

1人は、神裂火織。相変わらず露出狂な格好だが、表情はあの時より少し柔らかい感じがする。

そして、もう1人。見るからに怪しげな白人で赤髪の男魔術師、頬にはバーコードのような刺青がある。

「っー お前らー！」

後ろで当麻が叫ぼうとするのを後ろ手で制し、普段通りの笑顔で小萌先生を出迎える。

「小萌先生、布団お借りしました。色々御迷惑をかけたようで、すみません」

「あ、ユウキちゃん、上条ちゃんも目が覚めたんですね。身体の方は大丈夫ですか？ 具合悪いようならお医者さんに行った方がいいですよ？」

俺の姿を見て2人の魔術師は警戒をしたが、後ろにインデックスの姿を見て少し安堵の表情を浮かべた。

が、すぐにバーコードの方が楽しげな表情を浮かべて、話しかけてきた。

「やあ、思ったよりは元気そうだね。神裂の治療はどうだい？」

コイツの口ぶりから俺と当麻を治療したのは神裂火織のようだ。

でもなぜ俺達を助けた？ こいつらはインデックスの敵じゃなかったのか？ その証拠にインデックスは警戒心丸出しで2人の魔術師を睨んでいる。

小萌先生はそんな俺達の様子をオロオロしながら見守っている。

「けど、その様子じゃ今度こそ簡単には逃げられなさそうだね。【足かせ】の効果も十分そうだし、良かったよかった」

勝ち誇った顔をするバーコード。あ、なんかコイツ無性にむかつく。殺意とかそんなもんじゃなく、ただムカつく。

だから……

「分かっていると思うけど、残り時間はあと……ふごっ!」

小萌先生がこつちを向いていない隙に、一発ぶん殴った。

「な、何を!」

「えっ!」

「あ、あれ? この人、急に倒れてどうしたんですか!」

神裂火織だけでなく、当麻とインデックスも驚いた声を上げたが、俺は笑顔のまま小萌先生へと向き直った。

「小萌先生。どうもコイツ日射病らしくって、ここじゃなんですから近くの公園で休ませてもらうっていいですか? ジュースやかき氷でも食べさせて下さい。あ、コイツの分はこれで……俺達は、このおねーさんと話があるんで」

「えっ? あ、あの、ユウキちゃん?」

「ささ、おねーさん……今度はちゃんと話しようか?」

小萌先生にバーコードの事を任して5千円札を渡して、その横で目を丸くしている神裂火織に小声で話す。

「……分かりました。ですが、インデックスを外させて下さい。彼女抜きで話をしたいのですが」

「ああ、いいぜ。小萌先生、インデックスがお腹すいたそうなんで、ついでにファミレスで何か食べさせてもらっていいですか？」

「あ、はい、分かりました！」

俺は普通の声で話しかけたはずなのに、なぜか小萌先生は恐縮しきつた表情を浮かべて敬礼までして答えた。

「ユウキ！ 話なら私も！」

「インデックス、俺と当麻なら大丈夫だ。こいつも今の俺達には手を出さない……だろ？」

「はい。約束します。この2人は一切手を出しません。本当に話をするだけです。ステイルにもあなたには手を出さないよう言っております。それだけは信じてほしい、インデックス」

神裂火織の方を向いて言うと、彼女も無表情ながらもインデックスに約束した。

「……分かったんだよ。本当に約束してよ？ とうまもゆうきにも何もしないですよ？ だったら私、あなた達の言う事を……」

「あーいいからとつとへ行けて、話済んだら小萌先生に連絡するから」

「ずっと俺達の看病して疲れただろ？ 外の空気吸ってリラックスしてこいよ、インデックス」

俺と当麻に言われ、渋々なながらも小萌先生とステイルと呼ばれたバーコードと一緒に
出かけて行つた。

去り際にバーコードから物凄く睨まれたが、舌を出して笑顔で見送つた。

俺と当麻、神裂火織の3人は一先ずテーブルを囲むように座り、俺が冷蔵庫の麦茶を
出した。

缶ビールが山ほどあつたが、流石に真昼間から飲む気はない。

「ふう……うまい。あ、飲まないのか2人共？ 冷えてて美味しいぞ？」

「いやいやいやいや、何呑気に麦茶飲んでるんだよ！ 何インデックスをこいつらに引
き渡すようにして、コイツを中に入れてたんだよ！」

「落ち着けよ当麻。さっきのバーコードは胡散臭いけど、神裂火織とは話が出来ると
思つたから誘つたんだ」

何考えているんだコイツ？ みたいな顔で俺に文句を言う当麻を尻目に、神裂火織は
無表情のまま麦茶を飲んでる。

「インデックスに約束した通り、私はあなた達に危害を加えるつもりも、今インデックス
を回収するつもりもありません……ですが、インデックスに関しては引き下がる気もあ
りません」

「あー最初に言っておくか。俺はこのツンツンバカと違ってインデックスの事は魔術師に追われたシスター、としか知らないからな？ それと、俺と当麻を治療してくれてありがとな」

俺が頭を下げると、神裂火織は麦茶を吹きだしそうなくらい驚いた。

当麻は実際に麦茶を吹きそうになり、むせた。

「なっ、何を？ あなたはどこか打ちどころでも悪かったのですか？ 3日前とはまるで別人のようですよ!」

「……そこまで驚くような、事だよな、普通。そりやあの時は本気でお前を殺そうとしたし、その事は今も後悔してないし当たり前だと思う。けど、こっち殺そうとしているのに、お前は一向に反撃らしい反撃して来なかったし。俺や当麻を見て何か後悔のような物も見えたり、こちや何か深い事情がありそうに思えたからな、とりあえず話を聞こうと思っただけ」

目を丸くしたまま、信じられないものをみるかのような目を向けてくる神裂火織。

それは当麻も同じようで、頭を抱えながらも俺にどなってきた。

「ユウキ……お前バカか!? 殺し合いとか色々ぶっそんな単語出てきたけど、それにしてもあつさりしすぎだろ!」

「お前にバカ言われたくねえっての、ウニ頭! いいからインデックスに出会って何が

あったか話せつての！ でなきや話しが進まない！ それと、当麻お前、神裂火織達が、インデックスをただ付け狙うだけの魔術師じゃないって知ってるだろ？」

「な、何をいきなり言い出すんだよ？」

「1つ、インデックスを狙っているのなら、俺と当麻を治療なんかしないし3日間も何もしないわけがない。1つ、さつき当麻が神裂火織達に向けた警戒心に少しだけ迷いがあった。お前インデックスが知らない深い事情も知ってるな？ だから、インデックスに席をはずさせるのにも同意した。違うか？」

全ては俺の勘。でもこういう観はあまり外れない。

「あ、相変わらずの鋭さだな、ユウキは。その通りだよ、こいつらは……インデックスの敵じゃない」

それから当麻はインデックスの出会いから語りだした。

最初はインデックスが当麻の部屋のベランダに引っ掛かったのが始まりで、最初魔術だのを信じられなかった当麻だったが、ある出来事がきっかけで信じるようになったと言う。

何がきっかけだったか、当麻は顔を真っ赤にして言おうとはしなかった。

そして、一度インデックスと別れ、その日の夜血まみれのインデックスを見つけ、さつきのバーコード野郎、スタイルと交戦。

なんとか退けたが、インデックスの怪我を治す為に小萌先生の協力を求めてここに滞在する事になり、先日の神裂火織襲撃となったと言う事だ。

「インデックスの怪我を治してくれたのは、さっきの彼女だったのですね……」

感慨深く神裂火織は少しの笑みまで浮かべてそう呟くのを見て、確信した。

インデックスは神裂火織にとって、とても大切な存在なのだ。

「私達がなぜインデックスを狙うのか、それは私からお話しします。これを聞けば、あなたなら納得して頂けると思います」

どうやら神裂火織が話す気になったのは、俺が当麻よりは話が分かる人間だと判断しからのようだ。

正直、複雑な気分。

「まず、インデックスについてお話する必要がありますね。彼女は【完全記憶能力者】であり、【10万3000冊の魔道書】を頭の中に記憶させられているのです」

10万3000冊の魔道書を頭に記憶させられた完全記憶能力者、それが【禁書目録】の名の由来。

「魔道書とはその名通り、魔術の使用方法が書かれた書物です。彼女は世界中に存在する、もしくは過去に存在した魔術の記録を10万3000通り記憶していると言う事です。そして、彼女がいればそれが自由に扱える、この事が分かりますか？」

「つまり、インデックス1人で世界中の魔術師たちと渡り合えるって事か？」

「知識だけならば、ですね。それに失われた魔術も彼女がいれば再現可能になるのです。いわば、彼女を手にするのは、魔術の世界そのものを手にするのと同じ事」

俺達学園都市側で言えば、現存する能力の全てを記録していると言う事か。そりや危険すぎるな。

そこまで聞いて、俺の中に小さな違和感が浮かんた。

「しかし、その完全記憶能力のせいで彼女の脳の85%が10万3000冊の魔道書に使われているため、彼女は残り15%しか脳に空きがありません。ですので、1年ごとに彼女の記憶をリセットしなければ、彼女は脳がパンクして死んでしまいます」

えっ？　ここ、笑う所？

「これで分かっていただけでしたか？　私達は決して彼女を傷付けるのではなく、彼女を救うのが目的です。ですから、彼にもインデックスの引き渡しをお願いしたので……ですが」

「頭の冷えた今聞いても、納得できる話じゃねえよ。お前言ったじゃないか、インデックスは大切な親友だって、だったら記憶を消さずに済む方法を探せばいいだろ。1度や2度ダメだからって諦めずに、何度でも何度でも、それほどインデックスを大切に思うなら！」

激昂した当麻が神裂火織に掴みかかろうとするが、彼女は無表情に当麻を見据えた。「やはり、あなたは分かっていただけなのです。ですが木原勇騎。あなたは分かっていますね？ 学園都市の研究者でもあるあなたならば。彼女を救いたいと思う心があるならば、どうすればいいかを」

こいつ、3日の間にそこまで調べたのか。つてすごく偏ってる気がするが。

幻想支配の事は調べが付いているのかは分からないが、実際使ったからな。ばれていると思っただ方がいいな。

「おい、ユウキ。黙ってないでお前も何か言えよ。それとも神裂の言う通り、お前も諦めちゃまうのかよ。なあ、魔術でインデックスが救えないのなら、科学サイドなら、学園都市なら救える可能性あるよな!」

「くっ、くくく……」

「お前が研究者なら、尚更インデックスの症状を聞いてどうにかできる道、何か思い浮かばないか!」

もう限界だった。笑いが止まらない。

「くくく……ははっ、あっははははははあー!」

2人が奇異の目で俺も見ているが、止められない。

俺は腹を抱えて腹筋が崩壊しそうなほど、文字通り笑い転げた。

「ユ、ユウキさん？ もしもーし？」

「い、一体彼はどうしたのですか？」

「あはははは、いっふつ、ぶつ、あははは……いやあ、おかしい、こんなにおかしい事に出会うのは久々だ。なんて喜劇だよこれ。もうそこらへんのコントより面白いじゃねえか！」

そして、十分に笑い転げた俺は、ひよこりと起き上がり当麻に指を向けた。

「まずはお前だ、上条当麻。バカだバカだと分かり切った事を今更言うつもりはないけど、あえて言うぜ。バカにも程があるだろ。お前それでも学園都市の生徒かよ！」

「えっ？ 俺がバカなのは今は関係ないのかよ。それとも、インデックスを救おうとあがくのがバカだったのか？」

「違う違う。そういう意味じゃねえよ。当麻、記録術のカリキュラムは受けただろ？
と言うか脳医学、いや、この場合ただ単純に算数の問題か」

「?? お前が何言ってるかわらかねえよ、ユウキ」

頭に疑問符を浮かべている当麻をほっといて、次に神裂火織を指さした。

「次はあんただ、神裂火織。お前、魔術には詳しくても科学……いや、人体についてはド素人だな？」

「なっ、いきなり何を言うのですか?! それなりの教養は持っています。か、科学には疎

いのは認めますが……」

「だったら俺がバカ2人に説明してやるよ。いいか、よく聞けよ？ インデックスの脳の85%を10万3000冊の魔道書で使っている。だから……残り15%では、1年分しか記憶出来ない。まずはこれをおかしいと思わないか？」

「っ!？」

「どうやら疑問点に気付いたようだな。」

「俺は医学や脳医学は専門分野じゃないけど、ある程度は知識がある。でもこれは脳医学以前の問題、数学の問題だ。脳の15%で1年分しか持たないのはおかしすぎだろ、計算が合わない。それに、完全記憶能力者は俺も数人知ってるし、ちゃんとした病気として学園都市の外でも数人そういう症例が今までにある。けど、彼らはみんな10年どころか、40歳や70歳の高齢者までいるぞ？」

「そ、そんな……」

「まー脳の構造を一言つてもラチがあかないから結論を言うか、人間の脳は元々140年分の記憶容量があるんだ。それに、いくら本を何万冊読んで覚えようとも、脳味噌がパンクする事は脳医学上ありえないし、そういう症例は実在しない」

俺の言った事がよほどショックだったのか、神裂火織はその場で崩れ落ちてしまった。

顔面蒼白とはまさにこの事で、汗が物凄い事になっている。

「で、ですがインデックスは今までも、1年ごとに倒れて死にそうな程の苦痛を味わって、ですから私達は仕方なく記憶を……」

「じゃあ、他の観点から言うか、お前やステイルに85%だ、15%だとやけに具体的な数字を出したのは誰だ？ まさかお前らが自分で調べたわけじゃないだろ？」

「そ、れは……」

「話を聞く限り、インデックスつてのはお前ら魔術師にとって超重要な存在だったな。そんな存在を、何もセキュリティつけずに野放しにするような甘い組織なのかお前らの組織は？」

それがさつきインデックスの魔道書について聞いた時の違和感。

学園都市なら、木原なら絶対にそんな事はしない、何かしらの枷は用意する。

出ないともしインデックスが裏切ったり、敵に利用された時打つ手がなくなる。

「お前やステイルがインデックスの親友なのは、お前らの組織上層部も知ってるよな？ なら、2人にインデックスの真実を教ええると思うか？ 逆にお前ら2人をインデックスの【首輪】として利用しようと思わないか？」

「そ、んなばかな……」

神裂火織は俺の疑問を考えているのか、頭を振って否定しようとしているが否定しき

れないようだ。

「はつきりと結論を言いなおそうか。インデックスが1年おきに記憶を消さないといけないのは、完全記憶能力のせいじゃない。そうしないと死んでしまうように、お前らの組織がインデックスにつけた【首輪】が原因だ」

俺は麦茶の残りを飲んだ。当麻も神裂火織も黙ってしまった。

それからどれくらいの間が経ったか分からない。

神裂火織は一言も言葉を出さず、俯いたままだ。

「……私は、あなたの言葉を全て信じたわけではありません。現にインデックスが1年ごとに苦しんで、記憶を消せば楽になったのは事実です」

「だろうな。そして、お前ら2人には罪悪感が残り、無力感が諦めになって、インデックスの親友ではなく、インデックスの敵になる道を選ばせた」

「なあ……今の話は、本当なのか？」

当麻は信じられないと言う顔をしている。

沈利達暗部の人間なら、納得しちゃう胸糞の悪い話だしな。

「なんだつたら小萌先生に聞いてみたらどうだ？ それとも冥土帰しにも話を聞くか？」

「い、いや。正直、85%だ、15%だつてよりは、よっぽど現実的な話に聞こえる。で、

もしそれが本当ならどうすればいい？ どうすればインデックスを救えるんだ？」

「決まっている。インデックスを苦しめているのが外的要因なら、それを破壊すればいい。マイクロチップとか機械を使っているわけじゃないだろうから、そこら辺は専門外だけど、どうなんだ魔術師？ 心当たりは？」

未だ俯いたままの神裂火織に目を向けると、彼女は意を決したような顔をした。

「はい、恐らくはインデックスに術式を埋め込んだはず。それも身体の内部ではなく、どこか外側にでしょう」

「神裂、お前……」

「勘違いしないでください。私はまだ彼の言葉を信じたわけではありません。ですが……私達の上司なら、インデックスに10万3000冊の魔道書を覚えさせたあのくされ上司なら、これくらいいの事はやる。そう判断しだまでです」

明らかにさつきまでの神裂火織とは違っていた。

俺の言葉の全部を信じたわけじゃない。それでも可能性は信じてくれた。

インデックスを救える可能性を。

「制限時間は明日の0時ちょうどです。その時までインデックスに施された術式を解除し、解除します……ですが、もし見つからなければ、その時は」

「ああ、時間切れの時は、インデックスを救うのを優先させればいい。命だけは確実に救

える」

「でも、それじゃ意味ないだろ！」

当麻は食い下がったが、インデックスの命を100%救う方法と言う点では、今は記憶の消去しかない。

他の方法は未だに見付からず、可能性は未知数だ。

「神裂火織、お前がするべき事はまずは……もう一人の魔術師のあのバーコードの説得だな。アイツ頭固そうだから俺から言っても聞かなさそうだし、もし信じたとしても記憶を消去して命を確実に救う道を選びそうだ」

「そう、ですね。まずはそこから始めましょうか……感謝します、木原勇騎」

初めてみた笑顔、とまではいかないがその目には敵意はなかった。

「感謝は早過ぎだ。インデックスを本当の意味で救えた時に言ってくれ。それと、俺を呼ぶ時はユウキだけでいい、フルネームで呼ばれるのも名前で呼ばれるのも好きじゃない。それに、今のお前は俺の敵じゃない。だから、名前で呼べ」

「はい、分かりました。ユウキ」

ふと変な視線を感じ、そっちに目を向けると何か生温かい視線を送る当麻がいた。

「……貴重なユウキのデレシーン？」

「コロス、上条当麻！」

「ギャー!!」 嘘です、冗談です、だからそんな目でフルネームで呼ばないでください、ユウキサマー!!」

狭い部屋で取っ組み合いを始めた俺達に、少しの笑みを浮かべつつ神裂火織は出て行くとした。

「待てよ、火織」

「か、火織!!? な、なんですかユウキ?」

突然の名前呼びに動揺しつつ振り向いた火織に、俺は一枚の小さな地図を渡した。

「これは?」

「今は使われていない無人の実験施設だ。近くに民家も重要施設もない。ここなら何をしようと周りに被害が出る事はない。そこで今日の23時30分に集合だ」

「ん?なんでそこを使う必要があるんだ?」

「インデックスにどんな術式がかかっているかは知らない。けど、もしそれを解除しようとするれば何かしらのセキュリティが発動して、俺達を攻撃する可能性がある。もしものための保険だ。制限時間までに何か効果的な方法が見つければいいけど、最悪の場合……当麻の右手を使う」

「彼の……なるほど、その手がありましたか」

俺と火織の視線がキョトンとしている当麻の右手を向いた。

当の本人は少しだけ考え込んだが、すぐに合点がいったようでもう頷いた。

「無理に術式を破壊すると副作用が出る恐れもあります。私達が合流するまで無暗にインデックスに触れなさい」

「分かった。時間まではインデックスは俺達と行動を共にする。で、時間になれば必ず合流場所に向かう」

「そつちも何か分かったらすぐに連絡くれよ。あ、なんだったら学園都市の病院で検査を……」

「それはダメだ（やめてください）」

当麻の提案を俺と火織が同時に拒否した。

「な、何でだよ。ユウキもさっき言ったろ、冥土帰しに見せればとか」

「それは冥土帰しに話を聞くつてだけだ。いかにあの先生でも、魔術で起きた現象を医学的にどうにか出来るとは思えないし。それに下手に学園都市の病院に見せれば、色々後で問題おきそうだ」

「彼の言う通りです。一応、私達はゲストと言う事で学園都市に入る事を許可されていますが、インデックスは我々魔術サイドの人間です。あなた達は多少信用出来ても、科側の病院に預けるのは……」

そう、冥土帰しとは言え学園都市側の人間。彼に診てもらえば木原にも情報が入っ

て、最悪インデックスの身に危険が及ぶ可能性もある。

ただ、冥土帰し自体は科学の人間だろうが魔術の人間だろうが、患者なら必ず助けてくれるし、秘密も漏らさない。

だから、別の保険をかけると言う意味では、彼に頼るのも手だな。

「そっか、分かった。納得できないけど、納得する」

「色々と勝手を言つてすみません……それに、今更ですが、あなた達を傷つけてしまった。私達の浅はかさが原因なのに」

火織は改まって俺達に土下座した。

やつぱり、こいつは悪人には向かないようだ。

「い、いや、いいって……俺だってお前に殴りかかったんだし、なあユウキ?」

やけに動揺してるな。あ、火織って当麻の好きなタイプ、年上の巨乳管理人さんタイプだからか? あれ? 巨乳は関係ないか?

「俺はコイツと違つて、ガチでお前を殺しにかかったんだ。けど、謝罪はしない。だからお前も俺に謝罪するな」

「……ユウキ、お前つて色々ヒドいな」

「それこそ、本当に今更だな」

当麻は物凄く白い視線を俺に送つてきてるが、気にしていない。今更気付く当麻が鈍

感なんだ。

「では、私はこれで失礼します。インデックスは夕刻を過ぎた頃に意識を失うでしょう、それまでに移動して置いて下さい。それとインデックスには……私とステイルの事は、うまく誤魔化して下さい」

「お前とステイルは親友だった。って部分は言わないよ。そこはいずれお前らが自分で言え」

記憶をなくす前には親友だった。それを第3者の俺達がインデックスに言った所で傷付くだけだ。

これは本人達だけで話しあうべき問題だ。

「……感謝します」

今度こそ火織はそう言って部屋から出て行った。

程なくして、インデックスと小萌先生だけが戻ってきて、俺達に詰め寄ってきて誤魔化しながら説明するのに時間がかかった。

それから、インデックスに簡単に事情を話し、合流場所へと向かった。

無人の廃棄施設とは言え、使用許可を取っておかないと面倒になると思い、その機関に電話しようとしたら尼視から電話がなった。

嫌な予感がしつつ取ってみると、アイツはインデックスの件を知っていたかのような

口ぶりで、実験場の使用許可も降りていた。

『3日間音信不通だと思えば、面白い事してるじゃないか。まあ、いい。幻想御手の報酬はあの施設の使用許可と、何が起きても無請求で事にしておいてあげるよ。ちゃんとゲストを守るんだぞー?』

「てめえ、どこまで知っていやがった? まさか、最近忙しかったってのもこの件か?」
『さーねー、ゲストを丁重におもてな・し、しろって依頼、お前さんに来る予定だったみたいだけど? 来てないかー?』

尼視に言われ、確認した途端にオーダーが入った。それも理事長から直に入ったスペシャルオーダーだ。

内容も尼視の言うように、ゲストに協力して、速やかに問題を解決せよ。という漠然としたものだ。

「……ちつ、結局全部お見通しかよ」

『まあそう言うな。こちとら魔術のサンプルを得る良い機会なんだ。恩を売るのにもな』

「俺にとばつちりきそうなんだけどな、それ!？」

ともかく、尼視や理事長が何を企んでいるか気になるが、時間もないのであえて乗るしかない。

「……本当に信用していいんだね？　とうま、ゆうき？」

「ああ……それに何かあっても俺とユウキが必ずお前を守って見せるから、大丈夫だ」
「がんばれよーとうまーおれはおうえんしてるぞー」

「なんで棒読み!?!　しかもすごく生温かくいやらしい視線で俺をみるなー!」

最初は慥然として、納得しておらず物理的に当麻に噛みついていたインデックスだったが、心当たりがあつたようで渋々付いてきてくれた。

時間までに美琴とか誰か強力な能力者に会って、コピーしておきたかったが止めておいた。

部屋やセーフハウスに行けば、銃器もナイフもあるがそれも止めた。

どうしてかは分からないが、今は幻想支配を真つ白な状態にしておくのが一番で余計な武器はいらないと思つたからだ。

そして、インデックスの制限時間まで残り30分となつた。
つづく

第32話 「魔術」

7月27日 23:30

火織達との待ち合わせの時間。

寝込んだままのインデックスを当麻に任せ、待ち合わせ場所であるこの研究施設入口で待っていると、2人の魔術師が現れた。

「よっ、時間通りだな。首尾の方は……その顔見れば分かるか」

「ええ、芳しくありませんでした。イギリスにいる信頼できる仲間に極秘に調査も頼みましたが、やはり分かりませんでした」

「そっか。ともかくインデックスはこっちだ。付いてきな」

火織達はインデックスにかけられていると思われる魔術、それについて調べてもらっていた。

インデックス本人を調べる事は、火織達が今まで何十回もしている。

だから、今までインデックスの記憶を消去する前後の記録から、それに類似した魔術を調べる方が効率がいいと判断した。

けど、流石に時間が足りなすぎたか調べつくせなかつたようだ。

こうなれば後はインデックスにかかっている魔術を、当麻の幻想殺しで解くしかない。

「ここは使われていない実験施設と聞いていましたが、てつきり廃墟だと思っていました」

インデックスが眠っている場所へと施設内を案内している時、火織が周りを見渡しながらポツリと呟いた。

もう一人のバーコードはやる事があると、どこかへ行ってしまった。何をしているかは見当がつくけど、放っておく。

「今は使われていないってだけだ。データベースは外部アクセスしなきゃ空っぽだし、重要機器は撤去されているだけだ」

そう。確かにここは使われていない実験施設だが、破棄されたわけではない。

ここは主に強力な能力の測定や実験に使われているので普通の施設より頑丈だ。

電気もガスも水道も通っているし、万が一のための日用品や食料品、医薬品も備蓄されている。

緊急時にはちよつとした避難場所にもなる。

「随分奥まで行きますね」

「襲撃に備えたセキュリティも整っていて、空調も整ってベッドもあるそれなりの部

屋を用意してある。ここだ」

この施設で一番頑丈な一室にインデックスは寝かせている。

そこは、広いドーム状になっていて天井は防弾ガラスになっているが、今は閉じている。

中に入ると、インデックスが苦しそうに眠っていて、看病していた当麻が心配そうな顔でこつちを向いた。

「神裂！ その、どうだった？ 何かインデックスを助ける手掛かりは見つかったか？」

「……………」

当麻が期待を籠めて聞くが、火織は首を横に振っただけだ。

「そう、か」

「話した通り、当麻にやってもらおう。0時15分までに何も見つけなければ……………インデックスの記憶を消す」

それを聞き、当麻が何か言いたそうだが今回はぐつとこらえたようだ。

インデックスの記憶を消す儀式の時間は0時15分でなければ行えないらしい。

だから、それまでは改めてインデックスに魔術的な何かが施されていないか火織とバーコードが調べる。

「二応こころにある設備で診たが、インデックスに異常はなかった」

「……そうですか」

この施設にも医療設備が整っていて、データに残らないように調べる事が出来る。

もつとも、そつち方面は専門知識が気薄だから本当に基本的な検査しか出来ないが、それでも火織には言っておいた。

火織は、僅かに期待はしていたのか、少し落胆した表情を浮かべたがすぐに真顔に戻った。

後、幻想支配で何度か視たのは内緒だ。インデックスを見ても何も起きず何も視えなかったのでわざわざ言う必要はない。

こつちの手札を詳しく説明する気もなかった。

「じゃ、始めるか、神裂」

「はい」

俺と当麻は邪魔になるので部屋の外で待機し、火織とバーコードがインデックスの身体を調べたが何も見つからなかった。

そうしているうちに……0時を過ぎた。

「時間だ。こつちらの提案通りインデックスの記憶を消すよ。異論はないね？」

「ああ」

「……くそつ、結局こうなるのかよー！」

当麻が壁に拳を打ち付け、まだ納得がいかないようだったが、火織とバーコードは気にせず儀式の準備を始めた。

「黙ってみているしか、もう手はないのかよ。これでいいのかよ、ユウキ！」

「限られた時間で俺達に出来る事は全部した。あと、出来る事は記憶をなくしてもインデックスの友達でいれば……ん？」

魔法陣らしき中で眠るインデックスを視ていると、何か違和感があった。

初めて味わう感覚だが、言葉で現すとすれば、歯科医が虫歯を見つけたような感覚だ。

それは、インデックスの喉、もっと正確に言えば口の中の奥に感じた。

「ちよつと待った。お前ら、インデックスの口の中は調べたのか？」

「口の中、ですか？ そう言われてみれば調べては……はっ!？」

2人も気付いたようで、インデックスの口を開き喉の奥を調べた。

「なっ、これは!？」 ありました！ インデックスの喉に魔術が施されています！」

「っ！ 見た事もない術式だが、これを調べている時間はないぞ!？」

「……火織、そのままインデックスの口を開いていてくれ。当麻、順番だぞ？」

「お、おう！」

当麻は少し躊躇しながらも、インデックスの口に右手の指をゆっくりと差し込んでいった。

バーコードが物凄く当麻を睨んでいるが、時間がなく他に手はないのが分かっているようで、何もいわない。

「もう、少し……いづつ!？」

「わっ!？」

当麻がインデックスの喉に指が届いたと同時に、バチンと静電気が走った音がしたかと思うと、当麻とインデックスの口を開いていた火織が弾き飛ばされた。

「イン、デックス!?! これは一体……」

さつきまで眠り込んでいたはずのインデックスの身体が宙に浮き、目を大きく見開いた。

その眼には赤く輝く魔法陣が浮かびあがっていた。

「まずいっ! インデックスから離れてください!」

火織が叫ぶと同時に、インデックスの身体から衝撃波のようなものは放たれた。

当麻が右手で防ぐ間もなく、俺達4人は大きく吹き飛ばされ、ドーム状の壁に叩きつけられた。

「警告、第三章第二節―禁書目録の『首輪』第一から第三まで全結界の貫通を確認」

「これはインデックスが言っているわけ、じゃないな」

「ええ、おそらく自動書記(ヨハネのペン)と呼ばれる魔術です。自動防衛魔術、と言え

「ば分かりますか？」

「要するに首輪に気付いて破壊しようとする誰かを攻撃する為に、あんたらの上司が備え付けたえげつない魔術って事だろ。これくらいは予想済みだ！」

懐から携帯とは別の端末を取りだし、操作する。簡単にインデックスの首輪を破壊出来るとは思っていなかった。

何らかの防衛システムくらいは組み込んでいると予想していたからこそ、この施設に連れて来たのだ。

ここは、レベルの高い危険な能力者の実験を行う施設。当然能力が暴走したり、能力者が牙を向く可能性は考慮されているので、防衛設備や攻撃設備も整っている。

そのいくつかを起動させる。が、ここでトラブルが起こった。

端末が、いや設備が何の反応もしない。

「複数の敵性因子を確認。これより排除を開始します。敵性脅威測定、失敗。未確認因子、1。正体不明の因子、1をそれぞれ確認」

「自動書記の影響か、施設の防衛設備が全部使えなくなってるやがる。こうなれば俺には打つ手がない。任せたぜ、魔術師さんよ」

「……わかりました」

「君に言われるまでもない」

何だか2人の反応が鈍い気がするが、それを気にしている暇はない。

未だ幻想支配でインデックスを視ても、何も変わりはない。防衛兵器も使えない今の俺はこの中で一番の足手まといだ。

「で、鍵はお前だ当麻。おそらくインデックスを苦しめていたのが、アレだ。なら……」
「今のインデックスを右手で触って、あの魔術をぶち壊せばいいんだな？」

「触るだけだぞ？ 殴るなよ？」

「殴らねえよ！」

当麻が右手を突き出し、インデックスに走ろうとした時だった。

「複数の脅威に対し、制圧にて行動を停止した後、排除します。マタイによる福音書より構成『迷える子羊の審問（ストレイシープ）』」

インデックスが何かを詠唱すると、白い光が部屋全体を照らした。

「がっ!？」

「ぐっ、ぐう……」

「ステイル、神裂!？」

それぞれの得物を構え、対抗しようとしていたバーコードと火織が見えない何かに押しつぶされたかのようにうつ伏せに倒れた。

「おい、どうした!？」

「こ、この魔術は、恐らく人の迷いを増幅させて重みとする魔術です。あなたたちは何ともないのですか?」

見るとバーコードの方が辛そうだが、火織はどうにか立ち上がろうとしているが、すぐにまた倒れてしまった。

「俺は、別に何ともないな」

「当麻は幻想殺しがあるからだろ。俺は……つておい、魔術師! この期に及んでまだ迷ってたのかよ!」

「っ!!」

この魔術が迷いを重さに変えるのなら、魔術師2人が動けないのはそれだけ迷いがあると言う事。

あの2人が迷う事と言えば、インデックスの事しかない。

「警告。侵入者2名に効果を確認できず。魔術構成を変更。物理法則への干渉を最優先。『聖ジョージの聖域』を発動します」

何かを呟いていたインデックスの前方に、眼と同じ模様の赤い魔法陣が展開していく。

それと同時に、空間に黒い亀裂が走りそこから青白い光が発射された。

「やばっ! 当麻!」

「分かってる！」

右手を突き出し、光を消そうとした当麻だったが、その光は右手に当たっても全ては消えない。

それは、もはやただの光ではない。学園都市の光学兵器ですら玩具に見える程の、極太のレーザーだ。

「お、押さええ……きれねえ」

幻想殺しでも消しきれない大質量の光に押され、当麻の両脚が徐々に後ろに押し下げられていく。

当麻は空いた左手で右手首を掴み、何とかこらえようとするがそれでもふんばるのがやっとだ。

俺も俺で当麻の背中から出られない。

少しでも出れば、この光の余波をモロに受けてしまうだろう。その結果何が俺の身体に起きるかは想像したくない。

「ちっ、おい魔術師共！ お前らにはこれが、今のインデックスの状態や何してるか分かっているだろう。それで、これをどうにかするよりもインデックスの記憶を消した方が、こいつの負担がかからなくて済むんじゃないか。そう思ったんだろ！」

未だに地面に倒れ伏せ苦しむ2人の魔術師を睨み、俺は声を張り上げた。

あれだけ希望を見せても、それでも尚違う道を歩みだせないのか。

「あ、曖昧な可能性なんかいらぬ。あの子の記憶を消せばひとまずの、苦痛はなくなる。現に今！ 人の身にあまりある魔術を酷使し、肉体への影響がないわけない！ ならば、僕がやるべき事は……あの子の命を助ける事を最優先にする。そう、誓ったんだ！」

バーコード、ステイルへの重みが幾分か軽くなっている気がする。

これは迷いを重みに変える魔術だ。ならば、ステイルの悩みが解消されつつあると言う事か、悪い方向へと。

それを火織はただ黙って聞いているだけだったが、あいつと同じ考えと言うわけではないが、それに近い迷いがあるみたいだ。

「ふざけんな！ そうやってインデックスの命を助ければ自分はどうなっても、悪役になっても構わないってのか！」

幻想殺しをも圧倒する光を必死で抑えながら当麻の叫びが、ルーンカードを取り出したステイルの動きを止めた。

「お前らはずっと待つてたんじゃねえのかよ！ インデックスを助ける方法を探して、インデックスが心の底から笑える日を、お前らは待つていたんだろ！」

火織の眼が大きく見開いた。

「押しつけられた悪役なんてもうこりこりだろ？　ここらで自分勝手な偽善者な脚本家や監督に抗議して、主役になろうぜ」

俺と当麻の言葉に徐々に魔術師たちの身体から、何かが抜け出て行くのが見えるようになった。

「悪役ゴツコはいい加減卒業して、囚われのお姫様を助ける英雄（ヒーロー）になろうぜ……」

「手を伸ばせば届くんだ、まずはそこから始めようぜ……」

「魔術師！」

俺達2人の叫びに、魔術師たちは立ちあがる事で応えた。

もうさつきまでの迷いある影が顔から消えている。

が、当麻の右手がついに大きく後ろに弾かれた。

レーザーのような極太の光は当麻にぶつかりそうになったが、それより先に俺が当麻の左手を掴み、力任せに投げ飛ばした。

スローモーションのように当麻が、驚いた顔をして俺の名を叫びながら左へとんでいく。

それを見て、俺は笑みを浮かべ光へと向き、そして……

「ユウキ!!」

光がそのまま、俺を包みこんだ……ように当麻達は見えただろう。

「な、に!？」

だが、光は俺に届いていない。正確には俺の数センチ手前でとどまっている。

いや、それも正確ではない。インデックスが放った光は、同じく俺が放った光に押しとどめられている。

「馬鹿、な……なぜ、彼から魔力が? しかも、この魔力は」

「インデックスから感じる魔力と同じだと? どういう事だ!」

魔術師たちが驚くのも無理はない。

今の俺は、幻想支配でインデックスの魔力で、インデックスの放った魔術に対抗しているからだ。

「やつと……視れた」

予兆はあった。さつき火織達が『迷える子羊の審問』から立ち直った時に、確かに視えた。

それは火織達を縛っていたインデックスの魔力だったのだろう。

「ユウ、キ? お前、その眼はどうしたんだよ。真っ赤だぞ?」

驚いた声を上げる当麻。そうか、今の俺の眼は赤いのか。

普段能力者達の能力を使う時の眼は青い。

なるほど、俺が魔力を視ると赤くなるのか。

なぜ視えるようになったのか、など疑問はいくらでも沸いたが、それは今は後回し。

「警告、同規模同一の魔力を探知。このような現象を起こせる術式は存在せず、現象の正体不明、解析不能。戦場の再検索、完了。現状最も脅威となる未知の魔術師【木原勇騎】の消滅を最優先とします」

「俺は、魔術師じゃないんだけどな。おい！ 何呆けてる！ 今のうちに速くインデックスを止めろ！ コレ、長くは持たないぞ！」

未だ固まったままの当麻達3人に叫ぶ。

現状を確認し、今できる行為を瞬時に識別。

この一瞬で、インデックスの使用している【竜王の殺息】の性能は理解出来た。これを相殺するには、同じ魔術をぶつけるしかない。

けど、木山春生を相手にした時と同じく、長くは持たない。

魔術なんて能力とは全く異質の力を、コピー出来ただけで奇跡のようなものだ。

長時間の使用は無理だろう。現に今も頭が割れそうなほど痛い。

でも能力者は魔術を使えないらしいから頭が痛いだけで済む分、俺の幻想支配は特別扱いしてくれるらしい。ありがたいことだ。

「走れ、当麻！」

「ああー！」

当麻はインデックスと俺の魔術の激突を迂回するように走りだした。

かつこよく檄を飛ばした俺だったが、初めての魔術で負担がかかりすぎたようだ。

「っ、あぐっ……も、もう持たない」

激しい頭痛に片膝をつき、体中から力が抜けて行くのを感じた。

「火織！俺が相殺している間に、インデックスの床をー！」

この魔術は目が向いた方向が標準となるので、横目すら向く事が出来ず、どこにいるか分からない火織に向けて俺は叫んだ。

「——Salveree00!!」

答えるように火織の叫び声が聞こえ、インデックスの床に向けて鋼系のワイヤーが走った。

「そうか、アレが火織の魔法名か」

足元に敷き詰められた床のタイルがバラバラに切り裂かれ、インデックスは体勢を崩し後ろに倒れ込んだ。

それと同時に体に身体から力が完全に抜け、幻想支配の効果が切れた。

床に倒れ込んだ視線の先では、後ろに体勢を崩しても尚インデックスはレーザーを放ち続けており、ドームの屋根を突き破り、宇宙に届かんばかりの光の柱になった。

「……あれでどつかの衛星撃ち落とされてないといいな」

なんて、呑気な事を考えたが、インデックスにはすぐに体勢を立て直し無力化した俺ではなく、自分に向かって走っている当麻にレーザーの標準を向けた。

「やばっ!!」

「——Fortis931。我が名が最強である理由をここに証明する、イノケン
ティウス！」

ステイルの詠唱と共に、当麻を守るかのように炎の巨人が現れ、レーザーを受け止めた。

「行け、能力者！」

ステイルの叫び声を追い風に、当麻は走った。

と、インデックスと当麻の周りに何か白い羽が舞い降りてくるのが見えた。

さつきまで、幻想支配でインデックスの魔力をコピーしていた俺にはそれが何か瞬時に分かった。

「マズイ、アレに触れば、ただじゃすまない、当麻、インデッ……クス」

もはや一ミリも動けず意識を失いかける中、俺はありったけの声を出すしか出来なかった。

「うおおおお〜!!」

周りの羽には目もくれず、当麻はインデックスの元へ対にたどり着いた。黒い亀裂も赤い魔法陣も全て消しながら、当麻の右手はインデックスの頭を確かに掴んだ。

同時に、部屋全体を照らしていた光も消え、全てが静寂に包まれた……はずだった。「まだ羽は消えていません！　すぐにそこから逃げてください!!」

火織が叫んだが、既に遅く羽が1枚インデックスの頭に落ちようとしていた。俺も頭痛がひどくなり、意識が刈り取られていった。

「……の、能力停止で、あのはね……を」

出来ない。そう分かっているにももう一度幻想支配を使い、能力停止で羽を消そうとしたが俺の意識は闇へと落ちた。

微かに視界のふちに、インデックスを守るように覆いかぶさった当麻の頭に、白い羽が落ちたのが見えた。

・
・
・

とある病院の屋上

「今頃当麻はインデックスに下手な芝居で嘘ついて、噛みつかれてる所かな」

インデックス救出から一夜明けて、病院のベットで眼を覚ました俺は記憶を失った当麻を見舞い、事情を話した後、屋上にやってきた。

別に、屋上で黄昏たかったわけじゃない。

会う約束はしてないが、来るべきであろう人達を待っているからだ。

「よう、やつと来たな……神裂火織」

誰もいないはずの背後にそう呼びかけ、後ろを振り向くとそこには申し訳なさそうな顔をした火織ともう一人。

「そして、土御門元春」

「やあくユウヤん。ひっさしぶりい、大怪我で入院したって聞いたけど、元気そうで何よりだにや〜」

相変わらずのアロハシャツとサングラス姿で、おちやらけた笑みを浮かべた元春がいた。

「心にもない事言つてないで、用件を済ませろよ。大方俺の幻想支配で魔術が使えた事で、魔術サイドが俺の排除を求めたか？　で、俺が絶対に勝てない天敵である火織を引き付けられて、お前が来た。って所だろ」

嫌味を混ぜて言うと、元春は苦笑しながら首を横に振った。

「いやーそつちの話はねーちんから言うぜよ。俺はちよいと改めて自己紹介しにきただ

け、あ、お見舞いってのも本当だぜ？ お見舞いのフルーツ詰め合わせは病室に置いて

きた、後で食べるといいにやー。カミヤンにはまだ正体明かすわけにはいかないが、ユウヤンは別だからにやー。けど、思いつきりバレてるのは、流石はユウヤン」

「お前が外部組織のスパイってのは、とつくに気付いていたけど、まさか魔術師とはな。火織やステイルとお前が同じ感じしていると気付いてな」

「なるほどなるほど、いやーこれで少しは肩の力抜けて話せそうだにやー。秘密を知られている相手だとほんの少し気楽に話せるからにやー」

にやーにやーと、大げさな身振りをする元春に何かツツコミをいれたような火織だったが、深いため息をつくと俺に一礼した。

「あなたと彼には返しきれない恩が出来てしまいました。おかげでインデックスの記憶を消さずに済みました」

「よせよせ、実際インデックスを助けたのは当麻だぞ？ 俺は依頼をこなしたただけだ」

「し、しかし、あなたの協力がなければ私達は真実に気付かずに」

「あーそこまでいいだろ、ねーちゃん。ユウキはそういうの気にする奴じゃない」

お、元春がシリアスモードになったな。

「自己紹介と謝罪が済んだ所で、本題に入らせてもらおうか……木原勇騎」

と、元春が懐から拳銃を取り出し俺へと向けた。

俺はただ無表情のままじっと元春を見つめるだけだ。

「お前の言う通り、魔術側はインデックスの魔力をコピーした幻想支配の存在を無視出来ないでいる。ある意味魔導図書館以上の危険な存在になった……という自覚はあるようだな」

「火織からそつち側の話を少し聞いて、お前らの上司を木原に置き換えて、それでこれから色々起こりうる可能性は考えていたからな」

「それで魔術を知らないあなたが、やけに迅速に動けたわけですね」

「科学者は臨機応変に対処するのが大事なんだぜ？　で、俺を排除するならとつとしろよ。俺はこの通り隠し武器も何も持っていない。着ているのも普段着のような防弾機能もないただの患者が着る服だ。つてか、それより脳天にズドンと一発の方が楽に逝けるからそつち狙ってくれ」

「……ちつ、俺達がお前を殺さない事分かってよく言うぜ」

苦虫をつぶしたような表情で元春が拳銃を懐に仕舞った。

「お前が俺を殺す気ならとつくにしてている。それに自分のここでの立場や力の利用価値はよく自覚しているつもりだ。当麻と違ってな？」

理事長から直々にオーダーが来た時点で、こういう結末は予想出来ていたしな。

まさか、俺の幻想支配の成長のために、か？

まあそんなのはどうでもいいか、オーダーはこなしたんだし。報酬はたんまりと請求してやる。

「それもそうだな。じゃ、俺はもう行くぜ。これからはお前には魔術側からのオーダーも入ると思うぞ?」

「だったらお前らの上司に言っとけ。俺に貸しを作ると高くつぞ? ってな」

「はははっ、確かに伝えておくぜい。じゃあな、ユウヤン、ねーちん」

豪快に笑いながら去った元春を見送り、俺はまだ立っている火織に目を向けた。

「で、なんでお前はまだここに居るんだ?」

「それは……あなたに聞きたい事があつたからです」

「ちようどいい。俺も火織に聞きたい事があつたんだ。お前、なんでああもあつさり俺達を信用したんだ?」

それは小萌先生の部屋でのあの話し合いだ。

インデックスの面倒を見ていた当麻にならともかく、初対面で本気で殺しにかかった俺をあそこまで信用するなんて思わなかったからだ。

「……あなたは覚えていないでしょうが。あの夜、私に蹴り飛ばされ意識を失つたあなたは、何をしたと思いますか?」

「いや、意識を失つてて何か出来るわけないだろ」

誰かに操られてたとか、分割思考能力者ならともかく。

「それもそうですね。あなたは、意識を完全に失ったにもかかわらず、あの少年上条当麻を守るように立ち塞がったんです。私は元々あなた達2人を殺す気はありませんでしたが、それでもあなたは上条当麻に私が何かすると思ひ、意識を失いながらも守ろうとしたのです」

……ナニソレ？ 聞いてて物凄く恥かしくなった。

俺が、意識を失つても当麻を守った？ なんて俺はそこまでしたんだろ。

確かに、当麻みたいなバカな善人は俺や木原みたいなクズに巻き込まれて怪我したり、死んだりする事はないと思っていたけど。

「それで私はあなたの事を少し誤解していたようでしたので、それで話だけでも出来そうならばと思ひ、あそこへ行ったのですが」

「前日までの俺と別人に見えて驚いた、つて所か？ もしくは見ず知らずのインデックスを、あそこまで助けようとする人間に見えず、戸惑った？」

「……はい」

なるほど。公私混同しない人間、と言うのもおかしいが。俺は変に見えるだろうな。

「戸惑う理由はわかるけどな。俺は知つての通り殺しも非道な実験もいくつもやってきた。これからもやるだろうな。けど、こんな俺でも当麻やインデックス見たいな、本当

の善人が理不尽な目に合うのが、どうも納得できない性分。ただそれだけだ」

「そうですか。なるほど、あなたという人間が少し理解出来ました」

「これだけで理解出来たのか……妙に納得いかないが、これ以上にここに引き留める理由はないか。」

「では、私もこれで失礼します。もう一度言いますが、インデックスの事本当に感謝しています。彼女は上条当麻と一緒に居る事になるでしょうが、もし良ければ」

「ああ、俺に出来る範囲で気に留めておくよ」

「それで十分です。では、また会う事もあるでしょう……その時敵でないことを祈ります」

「じゃあな」

敵でない事を、か。そりゃこっちのセリフだ。

万全の装備で本気で挑んであっさり無傷の返り討ちだなんて、あんなの初めてだ。

出来れば二度と戦いたくない相手だ。

「さてと、俺も部屋に戻って元春からの見舞い品でも食べるか……アイツが置いたの、食べ物だよな。変な本やDVDじゃないよな……ん？ 電話？ げっ！」

屋上のドアを開けようとした時、電話が鳴った。着信相手は尼視だった。

病み上がりで声が聞きたくない相手だったが、出ないわけにはいかない。

また屋上に戻り、人目のつかない角で電話を取った。

『もしもーっし、ユウキちゃん元気かなー?』

「お前の声聞いて元気がなくなつた。これ以上元気をなくしたくないから切る」

『ちつ、絡みがいのない子だよ、全く。で、初めての魔術はどうだった?』

「やっぱり俺の経験値稼ぎが目的だったか、まあ分かり切つた事はどうでもいいか。」

「まだ頭がズキズキいてえよ。つてか幻想御手事件から今までずっと無理しつぱなしで、流石の俺も疲労困憊なんだが? しばらくオーダーは緊急の以外はキャンセルするぞ。文句あるか?」

『んー別にない。緊急以外のオーダーがお前に行くとは思えないけどねー』

確かに、俺へのオーダーは緊急性が高いものばかりで、他へ回せない内容も多い。

「と、とにかく、せつかくの夏休みを少しは堪能したいんだ! それと、理事長からのオーダー報酬は、新型のバイク。そう言つといて」

『直接言えばいいだろうに。ま、あのバイクでは良いデータが取れたからね。新型モデルの参考にさせてもらうさ。数日で特注バイクをお前宛に送つておくよ』

新型バイクが回されるのは何も報酬だからだけではなく、性能実験も兼ねている。

「用件は以上で良いな? もう病室戻るから切るぞ」

『ああ、そうだ。最後に一つ言つておくよ。お前は魔術側からもマーク対象に入ったん

だ。学園都市内部でも気を付けるんだぞ？　くれぐれもあっち側に誘拐されないようにな。大切な実験体を失いたくはない』

「御心配どうも、嬉しくて涙が出る。俺はそんなへまはしないさ。お前を殺すまではな』
『くつくつくつ、早く私を殺せるようになるといいな』

尼視は憎たらしい笑いをしながら、電話を切った。

「ふう……やれやれ、これから厄介事が増えそうだな。それも未知の領域から」
魔術、俺の幻想支配が得た新たな領域。

でもなんでだろうな……インデックスの力をコピーした時。

どこか、懐かしさも感じたんだよな。

つづく

日常編Ⅰ

第33話 「紅魔館の悪魔」

紅魔館での生活を初めて2日目。

昨日は朝食がてら霊夢や紫達と今後の事を話したらすぐに眠くなり、気がつけば夕方になっていてほぼ1日をベッドで過ごした。

ベッドから起き上がると、日が昇りだしたくらい時間だった。

この部屋には時計はないが、大体6時くらいなのは分かった。

「1日くらいじゃ治らないか」

嚴重に包帯が巻かれた左手に目を落とす。痛みはないが、指を動かす事もできず、感覚も鈍い。

触つても特に痛まないのは、包帯に籠められたパチュリーの魔法のおかげだから日常生活にはあまり支障はない。

それでも食事やら色々世話を焼きたがる紅魔館の人達。感謝はしてるが、困惑はそれ以上だ。

「……これが、看病されてるって事か」

朝から深く考えるの止め、寝巻から普段着に着替える。

手の骨折は初めてではないので、左手が使えなくても着替えるのは簡単だ。

昨日は咲夜に危うく着替えを手伝わされそうになったけど、それは流石に恥かしい以前の問題だし。

「失礼します。ユウキ様、おはようございます。朝食の用意が出来ました」

「おつはよー！ お兄ちゃん！」

「おはよう、咲夜、フラン」

昨日と同じように咲夜とフランが朝食の用意が出来た、とやってきた。

フランはいつの間にか俺のベッドで寝ていた昨日と違い、今日は普通に来た。

吸血鬼は本来夜行性で、昼夜が人間と逆転しているはずなのに、レミリアもフランもあまり気にしていないようだ。

「おはよーございまーっすー」

ただ、今日は2人だけはないようだ。

ドアの向こうから長い赤髪が少し見えたのでつきり美鈴かと思ったが、声を張り上げながら元気よく部屋に入ってきたのは違う少女だ。

「……お、おはよー」

「わはー、やっと挨拶出来ました。もう感激ですよー!!」

目をキラキラさせながら、赤毛の少女は一目散に俺の元へと飛んできた。

その頭と背中にはそれぞれ黒い羽が付いていて、それがパタパタと動いていてまるで犬が尻尾を振るかのようだ。

「こあ、ユウキ様に失礼よ」

「そうだよ。お兄ちゃんはこあの事知らないんだから、ちゃんと挨拶しないとダメだよ」
「あ、そうでした。コホン、では改めまして、私は小悪魔のこあと言います。パチユリー様の使い魔で、普段は図書室にいます」

なるほど、小悪魔だからこあ、ね。それにしてもなんでこの子は目をキラキラ輝かせて俺を見ているんだ？

まるで目の中に星があるみたいだ。操析にも似てるが……あつちはシイタケだったな、うん。

それにしてもフランが常識を語るのって……

「むっ、お兄ちゃん何か失礼な事考えなかつた？」

フランは鋭い視線で俺を睨むが、何食わぬ顔をしてそれに答えた。

何気に鋭いな、フラン。

「いや、そんな事考えなかつたぞ？　で、こあはなんでそんな目で俺を見てるんだ？」

「それはですね。ズバリ、ユウキ様がフラン様の為に奮闘する姿を見て、私……あなたの

フアンになりました！」

「……………は？」

突然のフアン宣言。なぜに？

あ、咲夜とフランが揃って深く溜息を吐いている。

「ユウキ様がフラン様と戦っているのを私、水晶で見えていたんですよ。あそこまで実力差があつて、体がポロポロになりながらもフラン様とレミア様の為に戦う姿を見て……もう、感動しました！」

「は、はあ……」

ますます目を輝かせて俺を褒め称えるこあ。

ここまで言われた事はないので、全身が痒くなつてきた。

ドア付近で呆気に取られている咲夜とフランに目で助けを求めたが、すぐに助け舟がやってきた。

「こあ！ あなたここにいたのね。頼んでいた資料の整理、まだ半分も終わってないじゃない。すぐにやりなさい！」

いつの間にか俺の側まで来ていたパチュリーが、こあの脳天を分厚い本で叩き叱りつけた。

恐らくは魔法でこあを探して、ここまで来たのだろう。部屋に微かに魔法を使ったと

思われる残留魔力が見えた。

「は、はい、パチュリー様！ それじゃあユウキ様、怪我が良くなったら図書館にぜひお越しくださいね」

最後まで目を輝かせたまま、こあはパタパタと急いで部屋を出て行った。

「はあく、ごめんなさいね。あの子が本以外であそこまで夢中になる事滅多にないのに。昨日もあなたに会いたい会いたいとブツブツ呟きながら仕事してて、嫌な予感したのよね」

パチュリーは申し訳なさそうに頭を下げた。

「い、いや、別に俺は何もされてないから大丈夫だぞ？ それにしても、彼女本当に悪魔なのか？ 何だか悪魔らしくない悪魔のような」

「うくん、悪魔で間違いないはずなのだけど、私もたまに分からなくなるわ」

フランとは別の意味で無邪気と言うか無垢と言うか、小悪魔らしいと言えらしいな。

「そんな事より、早く行きましょ。レミイが朝食を待ちかねてイライラしてる頃よ」

「ふふつ、そうだね。早く行かないと今頃お姉様が美鈴に八つ当たりをしているかも」

楽しそうに言うパチュリーとフランに、咲夜と笑い合い俺達は割と早足で食堂へ向かった。

「遅い!」「遅いですよお!」

食堂へ行くと、ご機嫌斜めなレミリアと半涙目な美鈴が座っていた。

「あはは、ごめんねお姉様、美鈴。ちよーつとお兄ちゃんの部屋で面白い事あったから」「何よそれ? 私も見なかったわ。咲夜今度からユウキ絡みで面白い事あったらすぐに私を呼びなさい!」「かしこまりました、お嬢様」

「なんで俺絡み限定なんだよ。俺を着に楽しむ気か」

そう呟くとレミリアは俺に向けてニヤリと笑みを浮かべた。こあよりよつぽど悪魔だな。

俺達が席につくと、それまで何もなかったテーブルに一瞬で料理が乗っていた。

確か、咲夜は時間停止が出来るんだったな。便利だ。

「で、今日はお前ら2人か」

「そうよ、不満かしら?」

「……もう諦めた」

今日も昨日と同じく、俺の食事係がついていた。左手が動かさなくても問題ないと昨日と同じ事を言ったが、聞き入れてくれなかった。

鎖で縛ってでも食べさせろ。そう言ったレミリアの顔は本気だった、なぜこうなった

……

左に座るのはレミリアで、俺の右にはなぜかパチュリーがいた。

向かいの席には、フランが不満そうな顔をして座っている。

上座とかそういうのはないのかこの食卓は。

「ま、また負けた……今日はカラスもいないから行けると思ったのに」

「パチュリーが参加したのが意外だったね……」

「全くです」

じゃんけんに負けた3人が恨み節を見せているが、俺もかなり意外だ。

昨日は参加していなかったパチュリーが今日は参加して、しかも勝ってしまった。

「昨日のあなたの反応が面白かったから自分でもやってみたくなったの。そこまで気にする事ないわ、ただの気まぐれよ」

「パチエは私以上に変わり者だからね。でもあなたの反応が面白いと言うのは同意するわ。はい、あーんして」

レミリアは外見年齢相応の顔をしながら、肉の刺さったフォークを俺に差し出してきた。

「紅魔館の主様が、こんな事してプライドが傷つかないのかよ」

「主だからこそ客人であり、恩人でもあるあなたをもてなすのよ。ほら早く食べなさい」

「いや、絶対俺の反応楽しんでるだけだろ。」

「あら、レミイじゃ不満なのかしら？ だったら、私の方がいい？ 少なくともレミイよりは大人よ？ 美鈴には負けるけど」

パチュリーは半ば強引に、俺の顔を自分に向かせてきた。てか何の話だ何の！

「ちよつとパチエ、それはどこを言っているのかしら？」

「あら、言った方がいいかしら？ 身体よか・ら・だ♪」

「カツチーン。たかが100年しか生きてないあなたより、私は5倍長生きしてる大人よー！」

「胸は私の方が5倍くらいは大きいわよ？ 失礼、0に何をかけても0だったわね♪」

「よーし、その喧嘩乗った！」

「お前ら、喧嘩するならよそでやってくれ。俺を挟むな！」

こいつら親友じゃなかったっけ？ なんで俺を挟んで火花飛ばしてるんだ？

何だか昨日と似たようなやりとりしてないか？ いや、今日の方がもっとヒドいな。

「2人共やめなよ。お兄ちゃん困ってるじゃない。咲夜、お願い」

「はあ、分かりました」

次の瞬間、俺は今までいた席から反対側の美鈴と空いた席の間にいた。

「あ、ちよつと。咲夜何してるのよー！」

「そうよ。食事中の席移動はマナー違反じゃない」

さつきまでの口論がピタツと止め、レミリアとパチュリーが咲夜とフランに抗議した。

どうやら咲夜が時間を止めて、俺を移動させたらしい。

「お客様を挟んで喧嘩をする方が、よっぽどマナー違反だよ2人共!」

「ガーン!? フ、フランにマナーを説かれるなんて」

「お姉様、みつともない真似しないでよ。妹の私が恥かしいじゃない!」

「うー……」

「妹様、ここ数日で急成長ね……はあ」

まさかフランに正論を言われるとは思っていなかったらしく、2人共ショックを受けていた。

でもそれは美鈴や咲夜も同じようで、驚いた顔をしてから喜んでいるような笑顔になった。

「じゃあ、咲夜はここね」

そう言つてフランは咲夜の手を掴み、なぜか俺の隣の空いた席に座らせた。

「えっ? あの、フランお嬢様? 私はお嬢様達の世話をするメイドなので、こういう席には……」

「むうーまたそういう事言う。昨日の夕食でも言ったでしょ。紅魔館の一員である咲夜も一緒に食べるの！」

昨日の夕食も咲夜はレミリアの後ろに控えていたが、フランが同じような事を言つて一緒に食事を取つたのだ。

その時、レミリアは笑いながら許可したが、フランの発言には驚いていた。

「ねえ、レミィ。どつちが紅魔館の主か、段々分からなくなつてきそうじゃない？」

「言わないで、私も少し危機感覚え始めたんだから」

初めに会つた時から、レミリアから随分と色々な物が失われている気がする

「それに、席に着かないつもりならなんでさっきのじゃんけん、昨日も今日も参加したの？」

「そ、それはその……お世話をするのは当たり前かと」

「だつたら、今がチャンスだよ。私は昨日十分にお兄ちゃんのお世話したんだから、今日は美鈴と咲夜がすればいいよ。どうせお姉様もパチュリーも面白半分だつたんだし」

さつきから俺の意思とは関係なしにドンドン話が進んで行つて行くけど、これも慣れなきやな。昨日から分かつてた事だし。

「フランお嬢様もこう言っているんだし。一緒にユウキさんに食べさせましょうよ」

「しようがないわね。と言うわけで、ユウキ様。あーんしてください」

咲夜、お前もか。

少々赤くなりながら、スープをすくったスプーンを差し出す咲夜の表情に少しドキッとした。

レミリアとパチュリーがニヤニヤしながら、こつちを見ている。

お前らさつきまでの喧嘩はどうした？ 今ならいい、思う存分やってくれ。

「早く食べないと、無理やり口移しで食べさせちゃいますよ？……咲夜さんが」

「えっ!？」

「ふぐう!？」

美鈴がぼそりと呟くと、咲夜の顔が真っ赤になり勢いよく俺の口にスプーンが突っ込まれた。

思ったより熱かったスープをスプーンごと喉に押し込められるとは、学園都市でもなかなかなかった拷問の仕方だ。

「っ!？」 な、なんで私なのよ!？ それより朝から何トンでもない事言っているのあなたは!？」

「わわっ、それよりお兄ちゃんが!」

「白目むいてますよ!？」

「ユウキ様!？ しっかりして下さい!」

喉の奥に激痛を感じながら俺が思った事は、本物の悪魔なこよりもつと悪魔がここには沢山いるなあ、と言う事だ。

つづく

第34話 「魔女考察」

あの不思議な外来人、ユウキが来てから今日で3日目。

この3日間、主に食事の時に彼で遊ぶのも親友レミイを使って遊ぶのも、咲夜や美鈴を使って遊ぶのも、そして、妹様に遊ばれるのもじつくり堪能できたわ。

ならそろそろユウキの怪我也良くなってきたているだろうし、あのスキマ妖怪にほぼ命令された事をしましょうか。

「じゃあ、ユウキ。今日の診察をしましょう。朝食の時あなた左手も使ってたわね。もう動かせるの?」

「ああ、これもパチユリーの魔法のおかげだな。激しく動かせはしないけど、日常生活には支障はなさそうだ」

これを聞き、私は僅かに目を細めた。

私の魔法のおかげ? 確かに、私は毎日回復魔法をかけ直して、魔法で編んだ包帯を巻きなおして彼の左手の治療を行った。

けれども、だからと言って3日でほぼ完治するとは思えない。

「パチユリー? 難しい顔して左腕つつつかないでくれないか? 痛みはないが、くす

ぐったい」

「ここであなたに黙っていた重大な報告があります。あなたは左腕が痛まないとずっと言っていました。そこまでの効果は私の魔法にありません。痛みを和らげる程度しか効果がないはずですよ。私は回復魔法が得意ではないので、骨が砕ける程の複雑骨折を3日で治るわけがありません」

「……わざわざ口調を変えてまで言うような事か？ でも実際に俺の腕は治ってるぞ？」

にわかには信じられないが、彼の言う通りだった。

包帯の解けた彼の左手は昨日までうつすら残っていた傷跡も消えていて、少しぎこちなかったけど腕を振り、自由に指も動かしていた。

「本当に完治に近いわね。あなた、よほど魔法との相性がいいのかしら？」

「元いた世界で何度か回復魔法の世話にはなっただけだな、後は昔馴染みの掛かり付けの医者に治してもらったりだ。そう言えば、その頃から結構治りが良かったな。てつきり魔法のおかげか、冥土帰しの腕のおかげと思ってたけど」

なるほど、彼は元から魔法への適応力が高かったのね。害をなす魔法は防ぎ、それ以外の魔法は全て受け入れる。

稀に見かける特異体質なのね。

最も、彼と私が出会った人間達は世界が別だから彼が特別なのか、それとも彼の世界の人間はみんなこうなのか。

「助かったよ。これで、ようやく自由に動ける」

「言っておくけど、まだよ？ 経過観察っていう言葉知ってるでしょ」

私がそう言うのと彼は少し落胆した顔を見せた。

大方ここから出て行く事を考えていたのだろう。

ここ数日の彼は自分の置かれている状況に、明らかに戸惑ってばかりだものね。

「経過観察じゃなくて調査、もしくは実験と言うんじゃないか？」

その言葉を聞いた瞬間、頭が真っ白になりそうだった。

彼の眼は私を真っ直ぐに捉えているが、どこを見ているのか何を視ているのか分からなかった。

何も感じない目、無表情の目に私は全て見透かされているようだった。

「……どういう意味、かしら？」

「八雲紫に頼まれたんじゃないか？ 俺を、俺の幻想支配を調べてほしいと。今回の一

件で、半ば脅迫じみた命令だったかもしれないけど」

彼に完全に見透かされている。

「なぜそう思うのかしら？」

「ここ数日ベッドの上だったからな、考える時間はたっぷりあった。八雲紫、最初は少し面喰ったけどすぐに俺のとっても良く知っている知り合いに似ている所があると思っただ」

彼の言う知り合いが誰かは知らないけど、すごく嫌いで憎んでいて殺したいくらいだと言うのは表情を見ればすぐに分かった。

「で、そんな奴が俺をただ観察するだけ、なんて事で済ませるはずがない。自分もしくは誰かに俺の身体を隅々まで調べさせるはず。そんな時に都合よく数万冊以上の様々な種類の本がある図書館の司書で、魔法にめっちゃ詳しい魔女の元に俺が動けない状態やってきた。調べさせるにはもってこいの状況だろ？」

「別に否定はしないわ。私は確かに八雲紫にあなたを調べるように言われたわ」
そう言っても彼は表情一つ変えなかった。

分かってるのかしら？ 私の実験台になるような物だと言うのに、抵抗感がまるでない。

むしろとつととやれとでも言いそうね。

「そうか。それじゃとつととやってくれ。俺の怪我が治るの待ってたんだろ？ でなきやフランと戦った後での俺を調べるはずだし、そもそも力づくでもいいわけだし」

思わず目をパチクリさせる。彼はどこまでお見通しだと言うのだろうか。

「別にお見通しってわけじゃない。言ったろ？ ベッドの上で数日間暇だったんだから、考える時間はたっぷりと、考える事案は沢山。異世界から来たとか俺の事情色々知ってるんだろ？俺は昔から実験を色々させたしてきたから、自分の身体に何かされれば違和感に気付ける。治療された以外は何もされていない事もな」

これは……観察するつもりが、逆にされている？

「俺自身の事以外でも色々と考えてた事はあるぞ？例えば、フランはきつとレミリアの隣の部屋でいるけど、寝る時はレミリアと一緒にかなーとか」

私は大きく目を見開いた。そこまで知っていたのかと。

「あなた、探偵でもしてたの？ どうしてそこまで分かるの？」

「あーそこまで驚かれるとは思ってなかったけど、これは本人に聞いただけだ。フランの部屋はかなりめちやくちやになって、崩落しててもおかしくなかっただろうからな」
確かに妹様の地下室は今もぼろぼろのままだ。

崩落しないように補強はしてるけど、あくまで天井が崩れない為であつて部屋を使うものにするためじゃない。

土木仕事は美鈴が主にする事だけど、レミイはこのままでもいい。と言っていた。

「どこで寝ているのかとフランに聞いて、お姉様の隣の部屋だよ。と言われて、レミリアが俺やフランのせいで仕方なく空いてる部屋をフランに使わせてるだけ、つてな。無駄

にツンデレっぽく言ってた。そう言えば、あの時はパチュリーいなかったな」

何だかその光景が目には浮かぶわね。レミイは素直になれないだけで、昔から物凄く妹様を大事に思っていたし。

「んで、フランがお姉様と一緒に寝てるよー。なんて言ってるレミアが顔を真っ赤にして照れて、俺や咲夜がニヤニヤ顔でそれを見てて……ってな流れ」

それも想像付きやすい光景ね。私も見たかったわ。そして、弄りたかったわ！

ただ、まあ、ほぼ無表情で感情籠ってない声で、レミイや妹様の声真似する彼はとてもシユールね。

「話がそれたな。じゃ早速始めてくれ」

と言うと、彼はベッドに横になった。完全無防備。

「いや、その……あなたなんでそんなに抵抗しないの？ 解剖されるとかイタイ目を見る

とか、警戒心があなたにはないの？」

「解剖程度の観察ならアイツが自分でやってるだろ。魔女のあんたに頼むくらいだ、魔法で調べるのにイタイ目も何もないだろ。それに幻想支配の事は、俺も正体知りたかった事だしな。調べてくれるっていうならこっちから頼みたいところだ」

「いやいや、魔法で調べるにしてもイタイ目見る事はあるわよ？」

「はあ……そこまで言うなら、始めるわ。咲夜」

「はい、ここにいます。パチユリー様」

私と呼ぶと、さつきまで誰もいなかった場所に時間を止めてやってきた咲夜が立っていた。

そして、ベッドの周りには魔石や道具が置かれている。

こういう助手は、本来こゝにしてもらうのだけど……

『ユ、ユウキさん相手にそんな事出来ません！ 私ふとした弾みでメスをあの人の口に落としてそうです！』

などと訳の分からない事を言っていたので、今回は咲夜に助手をお願いしたわ。

それにしても、あの子……ああいう性格だったかしら？

と思い返して、こゝは私が召喚してからこの数十年、男性を目にする機会全然なかった事に気付いた。

免疫がないわけね。男を知らない、なんて卑猥な表現じゃないけど。

「最初に言っておくけど、痛みはないはずよ。ただ、私の魔法にあなたの身体が拒絶反応起こすかもしれない。その場合何が起きるか分からないわよ？」

「分かった」

私の警告にも全く動じないのね。代わりと言つていいのか、咲夜が眉をひそめて私を見つめてきた。

なんであなたがそんな動揺してるのよ？

「大丈夫よ。何もなければ、本当に何もなければ。彼は私達の知る人間ではなく、異世界の人間なの。それも不思議な力を秘めた人間。私の魔法にどんな反応するかは、やってみないと分からないわ。でも絶対に死なせない、だから大丈夫」

大事な事なので、最初と最後で2度言いました……で、咲夜はどうか納得したわけだけど。

確か彼と咲夜が関わり合ったのはここ数日、なのにここまで咲夜に影響を与える男。けど、それは咲夜だけじゃない。妹様も、そしてレミイにも影響を与えた。

美鈴は元から面倒見のいい性格だったし、こあは……保留。

「それじゃあ、始めるわよ。麻酔必要かしら？」

「……不安にさせるような事わざわざ言わなくていいから、とつと始めてくれ」

確かに興味がわく外来人だけど、そこまでの人物なのか徹底的に調べてあげましょうか。

それから数時間が経過。成果は……ないに等しい。

探知魔法や生命力を浮かびあがらせる魔法、はたまた全身を分解させた映像を見る魔法、
e t c.

これらを使って分かった事、それは彼が人間としての身体能力が五感を含めて上限に近いくらい高いと言う事。

けれどもそれ以外は全くの人間で霊力も魔力も、ましてや妖力や神力もない。

「その様子だと、何も分からなかったみたいだな」

「そうね。でもこれは予想出来た事よ」

これくらいで分かるなら、八雲紫は私に頼まない。

それに、身体能力が極めて高いのは美鈴や妹様と戦った時に分かっている事。

次に幻想支配について調べる事にした。

「それじゃあユウキ、幻想支配で私を視て見て。咲夜でもいいんだけど、私の方がこつちの診察しやすいわ」

「……………えっ?」

今までずっと無表情に近かった彼が、初めて驚いた表情を見せた。

「どうしたの? まさか、怪我の影響で使えないとか?」

「いや、多分使える。使えるけど、パチユリーは……………それでいいのか?」

「???」

私が良いとは、それはどういう意味なのだろうか?

「俺のいた世界では魔術師もいたけど、みんな自分の成果を全くの他人である俺に、いと

も簡単に模倣されるのを酷く嫌っていた。最も初めて会う魔術師は敵ばかりだったから、俺はそんなの気にせず使ってたけどな。魔術師が味方の時も、大抵俺が勝手に使ったり、了承を得てから使うパターンが多かった。で、パチュリーは自分の今までの魔法の成果、俺に丸パクリされるのはいいのか？」

ああ、そう言う事。確かに自分が努力して会得した魔法を簡単に使える幻想支配は、気にくわないかもしれないわね。

でも、ケースバイケース。自分以外が使う事で得られるものがあるかもしれない。

それに彼は私の魔力で私の魔法を使える。これは私から見れば利点しかない。

例えば、危険な実験を私の代わりに行えると言う事。

「事情があつて魔術が使えない魔術師の代わりに、俺が幻想支配で使った事もあつたな。それも数回」

「ふうん。結構有効活用してたようね。私は別に構わないわよ。実験に必要な事だもの、躊躇う理由はないわ……それに、私の魔力で私の魔法を使うあなたを見る事で、その魔法の欠点を第三者的な視点で見れるのよ？ 良い事じゃない」

「……言っておくけど、悪巧みには条件次第でしか乗らないからな？」

つまり、条件が良ければ悪巧みに乗ると言う事ね。

「パチュリー様、そのいかにも悪い事考えてるぞー的な笑みは止めた方がいいかと、お嬢

様みたいですよ」

「あら、それはすぐに止めないとダメね」

「お前ら、主の扱いが酷くないか？」

「それは向こうもお互い様。さ、早く幻想支配で私を視て、私だけを視なさい」

少し艶めかしく言ってみただけど、彼はものすつごーく白い目を私に向けてきた。

「パチユリー様、慣れない事はしないほうが身のためですよ。とつても似合いません」

「う、うるさいわね！ ちよつと和ませようとしただけじゃない！」

「和めません。寒くなりました」

ま、全くこの子は、ズバズバと言うのはレミイと美鈴だけにすればいいのに、なぜか

私には一番言ってくるのよね。

「はあくいいから、視るぞ」

彼は瞼を閉じ、すぐにゆっくりと開けた。

「終わったぜ」

その瞬間、目の前に私が現れた。いや、見た目は彼で中身も彼で、別に私の髪型になったとか、私と同じ声になったわけじゃない。

それは妹様との一件で知っていたはずなのに、それでも実際に私自身を視られた事で改めて認識させられた。

目の前に、私と全く同じ力を持った、誰か別人の殻を被った私がいるようだった。

「目が赤くなりましたね。確かフランお嬢様の時は目が銀色でした」

「そうか、そのルールみたいなのは幻想郷でも変わらないか」

確か、霊夢や人里の教師を視た時は青色、チルノは緑色、妹様は銀色、私は赤。

彼の居た世界では、能力者は青、魔術師は赤だったと聞いた。

「恐らくだけど、その目の色は視た相手の力で区別されると思うわ。霊力など人間が持つ力は青、妖精のような自然が生み出した存在の力は緑、妖怪の妖力は銀、魔法使いの魔力は赤、と言うわけね」

正確には妹様は魔力だけど、妖力に近い性質だから赤じゃないのかも。

「なるほどな。んで、俺はこれからどうすればいい？ スペルカードか、魔法でも使えばいいか？」

「それは良いわ。恐らく私の使える魔法は全て使えるでしょうから、それよりこれを読んでみて」

私が彼に渡した青紫色の本。図書館から持ってきたこれは魔道書。

魔力が無いものでなければ訳の分からない文字で書かれていて、下手をすれば魔道書に囚われてしまうかもしれない。

でも、今回彼に読んでもらうのはそんな物騒な物ではない。

初級者向けの無害な本。内容も魔法の基本的知識を私が纏め上げた物。問題は全くない。

「これは、魔導書か？ 俺の世界にもあるけど、実際手にして読むのは初めてだ」

「そんな警戒しなくても、ただ開いて読んでくれればそれでいいわよ」

「分かった……お、読める、読めるぞ！ 得体のしれない文字ばかりだけど、ちゃんと読める。何何、4月5日、今日の朝食は軽めのフレンチトーストと紅茶だった」

あ、あれ？ おかしい。何かがおかしい

「私の好きな組み合わせだったけど、咲夜が独自にアレンジした紅茶らしく、一口飲んで倒れてしまった。咲夜自身は健康のためにと薬草を煎じてくれたみたいだったが、かえって体調が悪くなった。あのPAD長、いつか呪う……何だこりゃ？」

「か、返して!!」

怪訝な表情をする彼から魔道書(?)をかつさらったけど、もう遅かった。

「パチユリー様？ 今の内容、どう考えても1年前のあの日ですよね？」

ギギギツと音がしそうな動作で首を横に向けると、満面の笑顔でそれでいて極寒の笑みを浮かべた咲夜がいた。

「確か、その次の日ですか、普段はつかない寝癖がどうやっても直らず、その日に限って転んだり滑ったりで皿を割りそうになり、うっかりお嬢様の頭にアツアツのスープを皿

ごとぶつけてしまったり、雨に降られそうになったお嬢様に差した傘が壊れて、お嬢様が大雨で大変な事になったり。と、散々な一日だったのですが……もしかして？」

「な、なな何を言っているのよ。これは小説よ。間違えて魔導書じゃなくて小説持つて来ちやつたみたいなのよ」

何で!?! なんで魔導書が私の日記に変わってるの!?!

あ、これ……ブックカバーだけ魔道書で私の日記と入れ替わってるわ。

しかもこれ、去年の日記じゃない。見つからなくて無くしたと思つてたのよね。

私がおんな隠し方するわけないし、まさか……こあのイタズラ?

「その次のページは一言、呪い大成功! って書かれてたな」

「ちよつ!?! ユウキ!?! あなた何を言ってるのよ!?!」

「あーいや、その一言だけで1ページ使うほど大きく書かれていたから、まさか……自分の日記を俺に渡すわけないよなーと思つて」

ユウキはあはははーと乾いた苦笑いをしながら、視線は私からそらしたまま。

「パチュリー様、私はあの時の事は恨んでおりません。元はと言えば私がおんな薬草を混ぜてしまい、そのせいでパチュリー様は1日寝込んでしまったのですから、だから私が悪いんです。改めて、パチュリー様の朝食を台無しにして、申し訳ありませんでした」

咲夜はさつきまでの黒い笑みを消して、心からの謝罪を籠め、頭を下げてきた。

全くこの子は、人が良いと言うかメイドの鏡ね。

「良いのよ。私こそ大人げなく呪いかけちゃってごめんさい」

でもその呪いの割を食ったのはレミイなのよね……

「では、お相子と言う事で……で、本題なのですが」

ん〜？ 何かしら、さつきよりも背筋が寒くなってきたわね。

なぜなのかしら、咲夜がさつきまでの申し訳ないと言う表情が一変して、冷たい笑みを浮かべてきたわ。

「この日記に書かれている、PAD長についてご説明を頂けませんでしょうか？ 私そんなもの持った事ありませんよ？」

「その、それはね咲夜……うっかり1年前、あなたが引き出しの中にびつしりとPADを入れているのを見かけちゃった、から……ハッ!?」

し、しまったーなんで余計な事までペラペラとー!?

咲夜が顔を真っ赤にしてプルプル震えてるわね……少し可愛いと思つたわ。

「咲夜、俺は両耳を塞いでいたので、今の会話は聞いていないから。うん、気にしないでくれ」

「お、お気づかいありがとうございます、ユウキ様。では、私はパチユリー様と少しお話がありますので失礼いたします」

「ご、ごごめんなさい咲夜！ でも、今は使っていないからいいじゃない！ ちゃんとその美鈴ほどじゃないけど大きな胸はちゃんと本物だって私は知ってるから！」

「ユウキ様の前で何トンでもない事、ペラペラしゃべってるんですか、この紫もやしー！！？」

「フォローしたつもりが逆効果!？」

あ、でも耳を塞いだユウキが顔を真っ赤にして何も聞こえないフリをしているのが、これまた少し可愛かったわ。

なんて、現実逃避してる前に逃げるわ！

「まちなさあーい！ よくもユウキ様の前で恥をかかせてくれましたねー!？」

「きゃー!？」 ちよつと、美鈴、こあ、レミイでも妹様でもいいから、誰か助けてー!？」

結局、美鈴が気付いて止めてくれるまでの数十分、屋敷中を追いかけ回されたわ。

ユウキの実験は、日を改めてと言う事にもなった……ああく怖かった。

つづく

第35話 「初めての弾幕(ごっこ)」

俺が紅魔館に世話になって今日で4日目。

左腕も動かせるようになったし身体の傷も癒えたので、朝食の時にここを出る事にしたんだが……

「「ダメ(です・よ)！」「」」

とレミリア達に言われてしまった。

強引に出るのも考えたが、フランに涙目で、レミリアに睨まれ、咲夜には諫めるように、美鈴は心配そうに、パチュリーからはなぜか獲物を狙う獣のように言われて結局1週間、つまり3日後までここに居る事にした。

そして、今は昼食を終えた午後。

「はあく……」

「さつきから溜息ばかりですけど、大丈夫ですか？」

「大丈夫、だと……思う」

隣で一緒に作業するこあが心配そうな顔をしているが、俺は苦笑いで答えた。

今俺は、紅魔館地下にある大図書館にいる。

あと3日とは言え、流石にベッドで寝ているだけでは身体がなまるだけじゃなく、かえってストレスが溜まりそうなのでレミリアに何か手伝える事はないかと聞くと。

『なら、図書館の整理を手伝ってもらえる?』

と、パチュリーに頼まれた。大図書館には見渡す限りの書物が収められており整理するのも大変で、尚且つ危険な魔導書も多く、膨大な魔力を持つパチュリーかレミリアでなければ触る事すら出来ない物も多い。

そこで俺がパチュリーを幻想支配で視る事で、彼女の魔力を使い魔導書を整理して欲しいらしい。昨日の実験もこれを見越しての事だったようだ。

「いや、どこを見渡しても本ばかりのこの図書館に圧巻されてるだけだ」

今パチュリーの力で宙に浮いているが、上も下も右も左も本棚だからだけだ。

「そうですか? うーん、私はここしか知りませんが、外の世界の図書館って大抵こんな広さじゃないんですか?」

「少なくとも俺が知る中では、ここがダントツの広さだな」

インデックスの記憶している魔導書を全部形にすればこれくらいは……いや、それ以上にはありそうだな。

既に作業を始めて1時間くらいだけど、手にした本は様々だ。

パチユリー自筆の魔導書だったり、製作者不明の珍妙な図鑑だったり、人間が開けば食われる呪われた本とか危ない物もあった。

まあ、虎がバターになる絵本とか、別の意味で危ない本もある。でも普通の小説や漫画もあるのには驚いた。

これを見る限りでは、幻想郷の外の世界と俺がいた学園都市がある世界では、出てくる本にあまり変わりはないようだ。

未来から来た青狸の漫画だったり、少し懐かしいものも見つけた。

今日一日で出来る範囲でやってくれればいいと言われており、それが終われば自由に見て構わないとお墨付きも貰っているのですその時に読ませてもらおう。

「読むのは構いませんけど……気を付けてくださいね。普通のカバーしてても中身が危険な本、と言うのもありますから」

「それは……例えばこれか？」

こゝろが怖がらせようとすこんで言ってきたが、俺が手にしたのはカバーが8作も映画が作られたメガネをかけた魔法少年の話……だった。

「中身はパチユリーのポエムが綴られた……」

「なあくに、してるのよおお〜！」

「……あ、パチユリーさ、まゝ!？」

ページをペラペラめくっていると目の前をいくつもの火球が飛び交い、こあが爆発した。

続けてパチュリーが息を切らしながら飛んできて、俺の手から黒歴史ノートをかっさらった。

「はあはあ、はあ……見た？」

「ここは地下、私は一人闇に向きあう……」

「読まなくていいわよ！　　と　　言うか読むんじゃないわよ！　　忘れなさ……ゲホゲホッ
！」

「大丈夫かパチュリー？」

さっきから怒鳴ってばかりのパチュリーがせき込んでしまった。

確か、パチュリーは喘息を患っているんだったな。これは悪ノリしすぎたか。

「い、いえこれは喘息とは違うわ。全力で飛んで全力で魔法使って全力で叫んだから……少し喉が」

あーそこままでしてあのノートは見られなくなかったのか。

と、呑気な事考えてないで、近くにあったお茶を飲ませると少しは落ち着いたようだ。「全く、せつかく咲夜が3時のおやつにと、紅茶とケーキを持ってきたって教えにきたのに」

「あはは、悪い悪い。ちよつと興味沸いたからな、パチュリーのポエム」

「昨日といい今日といい、なんで私の恥かしい所をあなたに見せないといけないのよ！」
「ひ、酷いですよパチュリー様。全力のアグニシャインなんて、私には避けられません！」
「黙りなさい！ あなた、まだあんな悪戯してたのね！ 昨日のお仕置きが足りなかつたかしら？」

「ご、ごごめんなさいパチュリー様」

体中から煙を上げているこあも本気で怒ったパチュリーは怖いらしく、涙目で俺の後ろに隠れた。

「まあまあ、こあにはさつき一発いいの当てたんだからさ。はやく咲夜のケーキ食べようぜ、パチュリー」

「……次はないからね、こあ」

「は、はい！ ありがとうございます、ユウキ様」

パチュリーがどうにか機嫌を治したところで、ケーキを食べに行こうとした、その時だった。

「やつほー！ お邪魔するぜー！！」

「魔理沙!？」

と、声と共に箒に乗った魔理沙が図書館に突撃してきた。

「一体何の用かしら？ 私達これからティータイムなのだけど」

「お、ユウキ。ちよつと久しぶりー！ 怪我は治っているみたいだな？ 良かった、良かった。結構ボロボロだったから心配してたんだぜ。霊夢はなんだかずつと不機嫌だったから、お前さんの事聞けなくてさー」

「魔理沙にも心配かけたな。それと、あの時は助かった、借りが出来たな。魔理沙来なかつたらフランに殺されてた、ありがとう」

「い、いいって事だ。借りはいつか返してもらえればいい」

フランとの戦いで俺は自分を見失い、狂気のまま戦つてそして殺される所だった。

けど間一髪、魔理沙が来てくれたおかげで助かった。

その御礼がやつと言えたのは、良かった。

「ちよつと私を無視しないでよ！ 魔理沙、あなたこの前のどさくさにまぎれて、私の魔導書何冊も盗んだでしょ？ あれ、返しなさい！」

「あれはパチュリーに勝つたから、その報酬として頂いただけだぜ？」

確か異変の時、魔理沙は霊夢とここに突入してパチュリーに勝つて、この図書館に案内されている時俺とフランの戦いを知つたんだつたな。

「私はここを案内して、魔導書を少し見せるとしか言つてないわ！」

「じゃあ私は魔導書を借りてる事にするぜ。いつか返しに来るから、それならいいだろ

？で、今日も借りてくぜ」

「良くないわよ！ そんな狼藉これ以上見過ごすと思う？」

パチュリーがどこからか魔導書を取り出し、魔理沙も帽子の中から小さな八卦炉を出して構えた。

「わわっ、ユウキ様、こっちへ」

こゝに手を引かれて、本棚の影に隠れる。

2人の邪魔をするつもりはないし、流れ弾に当たるのも御免だ。

「おいおい、連敗記録を伸ばすつもりか？」

「まだ一度しかやってないし、一度しか負けてないわよ！ この前のようにはいかないわー！」

パチュリーの周りに光の球がいくつも浮かびあがり、魔理沙へ弾幕を放ち始めた。

「この前の再現にならなきゃいいな！」

魔理沙も箒で器用に飛びまわりながらも、パチュリーに向けてレーザーのような弾を放った。

パチュリーが魔理沙目がけて文字通り弾幕を放ち、魔理沙が自分の周囲に光球を浮かばせピットのように操り反撃する。

さながらパチュリーが移動要塞で、魔理沙がそれに挑む戦闘機のようなのだ。

「これ、図書館壊れないか？」

「大丈夫ですよ。パチュリー様が魔法をかけてますから本棚が倒れる事はあっても、本が傷付くとはありません」

「便利な魔法だな」

俺の知っている魔法、魔術はここまで応用力はない。

何かしらの儀式や道具を必要として、大々的な物が多かった。

「それにしても、相変わらず綺麗だな」

こあと見上げる先では、パチュリーと魔理沙が弾幕を打ちあい続けて、図書館いっばいに火花が上がっているような鮮やかさだ。

「あれ？ ユウキ様、弾幕ごっこしていませんか？」

「まともにした事はないよ。フランとだって、半ば殺し合いだったし。魔理沙とフランがやっている時は見ていたけど、意識朦朧としてたしな」

俺はまとも弾幕ごっこをした事がない。フランとのアレは弾幕ごっことは言えないだろう。

フランのスペルカードを攻略した事にはなるが、あれはまた別モノだと思っている。

「行くぜ！ 【魔符・スターダストレヴァリエ】」

「それはこの前見たわ！ 【月木符・サテライトヒマワリ】」

魔理沙の星の弾幕を放つが、パチュリーはそれ以上の高密度の弾幕を放った。

互いの弾幕が相殺し合って行くが、物量差なのか徐々に魔理沙が押され始めて行った。

魔理沙は避ける余力はなく、別の魔法で迎撃出来る余裕もない。

このままいけば、パチュリーの勝ち。俺もこゝも魔理沙ですらそう思ったはずだ。しかし。

「っ!? げぼごぼっ!」

「パチュリー(様)!!」

突然パチュリーが激しく咳き込み、弾幕が切れてしまった。

そして、それまで相殺していた魔理沙の弾幕は、全てパチュリーへと向かった。

「おわっ!! ま、まずい。避けるパチュリー!」

「(ごぼごぼっ……え? きゃあああ〜!!)」

魔理沙の弾幕は自分では消せないように、無防備なパチュリーへと思いつきり当たってしまった。

いかに殺傷力のない弾幕とはいえ、まともに食らって気絶したのかパチュリーはそのまま頭から地面へと落ちて行った。

「ちっ、間に合え!」

幻想支配で魔理沙を視て、急いでパチュリーの元へと飛んだ。

高速で飛翔する事だけを考え、その為にこの身に纏った魔理沙の魔力をどう使えばいいかを瞬時に理解し、行使した。

魔力による移動速度はパチュリーより魔理沙の方が早いので、魔理沙の方を選んだ。どうか地面ギリギリでパチュリーをキヤッチした。

ん？ 魔理沙……本当は筈なしで飛べるじゃん!?

「……あ、ありがとう。でも、降ろしてくれない？ ごっつごっつ」

「まだそんな変な咳してるじゃないか。いいから、じつとしてろ。あ、魔理沙、少しだけ待っててくれな」

「お、おう……」

パチュリーを助けようとして固まった魔理沙に背を向け、図書館内を飛びソファやテーブルが置かれた一角へと降りた。

そこで抱きかかえたパチュリーをソファに寝かせると、こあが薬と飲みモノを持ってきた。

「パチュリー様、お薬です。飲んで下さい」

「ありがとうこあ。この前の異変以来落ち着いていたから油断したわ」

紅霧異変の時、咳のせいで魔理沙に負けたがあれから調子がいいので、次は負けない。

パチュリーはそう言っていたが、今度も同じ原因で負けそうになるとは思わなかったのだろう。

「ユウキもありがとう。で、でも出来れば……この体勢以外で助けてほしかったわ」

「この体勢？ お姫様だったか？」

「言葉にださなくてもいいわよ！ 全く、なんで私がこんな体勢に……」

パチュリーは顔を少し赤くしながら何かブツブツと言っているが、聞こえないフリをした。

それにしても自分で言っておいてなんだが、誰かを抱きかかえるなんて久しぶり、いや、初めてだったかな？

いつも当麻や浜面が女の子をお姫様だっこしているのは見ていたけど、まさか自分がする事になるとは。

「とにかく、魔理沙を放っておいたらまた本を持って行かれるわ。とつと追っ払わないと。もう、美鈴も咲夜も何をしてるのよ！ ゴホゴホッ！」

美鈴は魔理沙の侵入に気付かないとは思えないから、多分負けたんだろうな。

近中距離戦の格闘戦なら美鈴は負けないが、弾幕ごっこでの遠距離戦は苦手そうだし相性の問題だろうな。

咲夜も負けたのか、いや今の時間なら掃除で忙しくて気付かなかったかも。

いや、待てよ。この感じは……まさか、そう言う事か。

「パチュリーはここで大人しくしてろ。代わりに俺が魔理沙追っ払ってくるから。あ、これと魔力借りるぞ」

そう言つて、幻想支配でパチュリーを視て、持っていた魔導書を手に取つた。

「ちよつと、何をする気？」

「さっきの続きだよ。俺がパチュリーの力を使つて、パチュリーのスペルカードを使うんだ。いわば代理だ」

「ケホゲホツ、そ、そんな真似させれるわけないでしょ。こんなの少し休めば大丈夫。ここは私の図書館よ、私が守るわ！」

声はしつかりしているが顔色は悪く、フラフラしているパチュリーにこれ以上無理はさせられない。

こあは俺とパチュリーをオロオロして交互に見ながら、意を決したようにパチュリーに向き直つた。

「パチュリー様、ここはユウキ様に任せましょう」

「こあ、あなたまで何を言うのよ!?!」

「今のパチュリー様が魔法を使うのは身体に障ります。ここはユウキ様を信じてお任せしましょう!」

「でも……」

パチュリーは俺を信用していないのではなく、自分の場所は自分で守るというある種のプライドから来ているように見える

レミリアの親友であり、魔女でもある彼女らしいと思った。

「だったらパチュリー、俺は元の世界では何でも屋だったんだ。破壊工作から護衛まで何でもやってきた。だから、俺に図書館を守れと依頼しろ。それならいいだろ？」

「……分かったわ。ユウキ、私の代わりに私の力を使って、あの泥棒魔理沙にお仕置きして頂戴。それとアレは……」

「了解、オーダー受領したぜ。あっちは、まあ分かってる。アイツの魂胆もな」

久々に何でも屋として依頼を受けたな。

さて、幻想郷での初仕事、さっさと始めよう。

観客もいる事だしな。

ユウキがパチュリーをお姫様だっこしてどこかに連れて行った後、私はポツンと地下図書館に浮いたままでいた。

今なら逃げるのも本を【借りる】のも自由だったが、流星にそこまではしないぜ。

とにかく少しだけ待って見ると、ユウキがやってきた。

彼の手にはパチュリーが持つていた魔導書があり、目が赤くなっていて全身からパチュリーの魔力を感じた。

幻想支配でパチュリーを視たんだろうな。さつきは私の力使ってたし。

「待たせたな、魔理沙。てつきり逃げているか、本を盗んでいるかと思っただけど」

「あのなあ、私はそこまで鬼じゃないぜ」

「うーん、俺は魔理沙の事全く知らないからな。てつきり傍若無人かと」

「おいおい、命の恩人に向かってそれはないだろう！」

確かに彼と私は全く面識なかったな。フランの時に乱入したけど、あの時も話らしい話しなかったし。

「慧音からは凶々しくて、豪胆な所があると」

慧音、今度会ったら覚えてろ！ ってか本人目の前にしてよくそう言う事言えるな!?

「でも根は優しくしてお人よしとも聞いている。ま、実際会ってその通りだと思っただよ。この前もわざわざ地下室まで来て助けてくれたし、改めてありがとな」

ユウキと話していると調子狂うな。霊夢が良く分からないと言ってたのがうなづけるぜ。

「それじゃあ恩人としてここは黙って通してくれないか？ 本は借りていくだけでいいか返すぜ？ それにユウキも怪我が治ったばかりであまり無茶するのはよくないだろ

「？」

「あーそれは無理だな。たつた今パチュリーから仕事引き受けたから、魔理沙を捕まえるって。仕事に私情は挟まない主義なんぞな。怪我の方は身体もまともに動くし問題ない。それにこれはリハビリのようなものだからな」

恩人だから見逃してー作戦、失敗か。

目の前にで左手をぐるぐる回すあたり、本当に怪我也治っているようだ。

仕方ない。ここは、さっきの続きをするしかないようだぜ。

「ユウキは弾幕ごっこ初心者だったな？ 生憎、私にはE a s yモードは存在しないぜ？」

「それは良かった。相手が素人じゃないなら……手加減する必要ないよな？」

挑発に挑発で返された。そう言えば、ユウキは元いた世界で戦争も経験してる、かなりの実力者だったな。

フラン相手にも初めは圧倒されてたけど、力を使った後は逆に圧倒してたし。

これは油断しない方がいいな。

「あ、そうそう。フランの時みたいに接近戦や肉弾戦を仕掛けたりしないから、安心していいぞ。女の子を無暗に殴ったりするのは好きじゃないからな」

「それ、嘘だろ？ 顔思いつきり笑ってるぜ？」

「バレたか」

つ、疲れる奴だ。口では恐らく勝てないな。

「まあいいや。それじゃ、再開だ……ぜ！」

箒に跨りユウキの横を一気に突き抜け、振り向きざまに彼の背中に弾幕を放つ。

それでもユウキは驚く事も振り向く事もなく、ゆらりと揺れるような動きでそれをかわした。

「卑怯……つて言つてほしいか？」

「いや、お前ならかわすと思つたぜ」

「そうかい、じゃこつちの番だな」

こつちを向く事なく、ユウキは右手を振うと彼を中心に弾幕が放たれた。

「おつとー」

一度距離を取ったが、ユウキは更に弾幕を撃ち続けてきた。

これは、パチュリーの使っていた弾幕。やっぱりユウキは他人の弾幕を使える能力の持ち主。

恐らくパチュリーのスペルカード、魔法も使えるだろうな。

「だったら、これはどうする？」【星符・メテオニツクシャワー】

「それなら【火符・アグニシャイン】」

私が放った星のシャワーは、ユウキの放った沢山の火球に防がれた。

あのスペルカードは一度見ているけど、今回は軌道が違った。

攻撃用スペルカードを防御に使うなんて、発想が面白いな。

「今度はこっちの番！」「水符・プリンセスウンディネ」

これも一度見た事ある。針のような細長い弾幕と、水玉のような丸い弾幕の2段攻撃。

「へへっ、スペカで迎撃するまでもないぜー」

「それはどうかなー」

ユウキはスペカを放ちながら、私の動きに合わせて動きだした。

おかげで軌道が不規則になり、パチュリーの軌道に合わせて動いていた私は少しだけ焦ってしまった。

パチュリーは弾幕を放つても、あまり高速で動かなかったからなあ。

それは喘息持ちだから激しい動きができないのか、それともパチュリーの飛行魔法は高速移動向きではないのか分からない。

だけど、ユウキはパチュリーの力で高速で飛行……って待てよ。

高速で飛行していると見せかけて、実は本棚や天井や壁を蹴って移動している。

「なかなかアグレッシブな動きだな」

「俺は飛びまわるより、駆け回る方が性に合ってるんだよ！」

スペカの効果時間まで避けるのが辛くなってきたので、仕方なく私もスペカで迎撃しようとした。

ミニ八卦炉をユウキに向け、狙いを定める。

もう少し遊んでいたかったけど、そろそろ咲夜やレミリアが気付いてきそうだからな。

そう言えば、なんで今日は美鈴門にいなかったんだ？ アイツ門番クビになったか？
ってそんな事どうでもいい。早く終わらせて本を借りてずらかるぜ！

「ちまちま撃つだけっていうのも味気ないよな？ やっぱ、弾幕はパワーだぜ！
【恋符・マスタースパーク】！」

「なっ!？」

ミニ八卦炉から極太の砲撃が、ユウキに向かって放たれた。

流石のユウキもこれには驚いたようだぜ。それもそのはずこれは私の十八番。他のスペカより強力だぜ！

「なんのー！」

ユウキはスペカを解除して、身体を回転させながら落下した。

飛行魔法を解除して重力に身を任せて回避するつもりか、間に合うかな？

「ふうく危ない危ない。あんな大火力レーザー、美琴や沈利といい勝負だったぞ」

「その2人が誰か知らないけど、私の十八番をよくかわせたじゃないか。流石だぜ」

ユウキはどうかギリギリでかわせたようだ。十八番を使ってもダメだったのが、少し悔しい

こうなったら、私の新しいスペカを試すしかないぜ！

「なかなかやるじゃないか。霊夢並にやりにくい相手だぜ」

主に性格と言うか、相性的に。

「でも、これが私の最後の1枚。これで勝負を決める。行くぜ！ 【彗星・ブレイジングスター】」

これは私が膨大な魔力を纏い、相手に一直線に向けて突撃するスペカ。

単純な構成だけど、結構前から霊夢に対抗するために試行錯誤繰り返しの結果、ようやく形になった私の魔法だ。

生み出したばかりで試し撃ちもまだけど、これはかなり強力だぜ。

パチュリーの力を使っても、弾幕ごっこ初心者ユウキにはちよつとキツイかもな。

「何のこれくらい、ってうおっ!?!」

一撃目は何とか避けたけど、私のとっておきはそれくらいじゃ終わらないぜ。

スペカの効果時間まで、何度でも相手に向けて突撃を繰り返す。

「このっ！ って効かない!？」

ユウキもただ避けるだけじゃなく、私に向けて弾幕を撃ってきているが無駄だ。

これは迎撃不可能。避けるしか手はないはずだぜ！

しかも、通り過ぎた後は弾幕がばら撒かれるおまけ付きだ！

さあ、どうする？ パチユリーのスペカで逃げるか？ どんなスペカでも突破してやるぜ！

「……………」

ユウキは弾幕での迎撃をやめ、本棚の上に立ち飛行魔法ではなく自分の瞬発力で避ける方を選んだようだ。

それでも私が幾度となくアタックを繰り返しているで、徐々に避けきれなくなっている。

スペカの効果が切れる前に、ユウキに一撃を当てる方が早い。

「うわっとな!？」

とうとうユウキを掠めた。避けれたが体勢を崩したユウキは、本棚の上にもうずくまっ

た。
まだ時間もある、次で最後だ！

「これで、トドメ！」

「……それはどうかな？」

「えっ？」

私の全魔力が籠った彗星が、ユウキに直撃する寸前。本棚の上からユウキが消えた。

そして、今までユウキがいた本棚を通り過ぎた私の背後から、膨大な魔力が感じられ

……

「【日符・ロイヤルフレア】！」

「なにい!? うわあぁ〜!？」

背後に巨大な火球が直撃して、私のスペカは解除されそのまま吹き飛ばされてしまった。

スペカは解除されたが、それまで高速で飛びまわっていた勢いは止まらず、本棚にぶつかりそうになり、思わず目を瞑った。

けど、直後に味わったのは何か柔らかいもの、誰かに抱きとめられたと言う感触だった。

「ふう〜、大丈夫か魔理沙？」

「ユ、ユウキ？」

恐る恐る目を開けると、そこにはユウキの顔があった。

「どうやらさつきパチュリーを助けた時のように私の力を使い、どうにか追いついて間髪助けられたようだ。」

「お姫様だっこされているのも、パチュリーの時と同じだった。」

「結構恥ずかしいな……」

「つい熱くなつて、攻撃当たった後の事考えてなかった。悪い、魔理沙」

「い、いや……助けられたし、それに私の……負けだ」

「男に抱きかかえられるなんて、おとう……いや、アイツと香霖以外じゃ初めてだな。」

「でも、段々とお姫様だっこされている羞恥心よりも、それ以上に悔しい思いが胸に込み上げてきた。」

「あれだけ苦労して生み出した私の魔法、スペルカードをよりにもよって初心者のユウキに破られるなんて。」

「どうして……どうして私に弾幕を当てられたんだ？ まだ時間切れには猶予があったはず」

「そう、ブレイジングスター中は攻撃が当たらないはず。何せ私の全魔力を籠めているんだ。それでも、破られた。」

「あーそれはだな、まず俺も幻想支配が切れそうになったから、パチュリーの魔力を使わないようにする為に本棚の上で身体能力だけかわす事にしたんだ」

確かに幻想支配には制限時間があるのは知っている。だからフラン相手でも、途中で切れてしまったんだよな。

「パチュリーの残った魔力を、最後のスペカに集中する為時間稼ぎもしたかったしな」なるほど、確かにあのスペカは結構な魔力使ってたからな。

「で、肝心の魔理沙のスペカ攻略だけど、アレ背後がから空きだったぞ?」

「へっ? 背後が?」

背後がから空きって……まさか!?

「膨大な魔力を身に纏っておまけに弾幕もばら撒いていたけど、背後つまり真後ろには弾幕はばら撒かれていなかったし、纏っていた魔力に穴も視えたな」

まさか、私のブレイジングスターにある弱点を、私でも気付かなかった弱点をこの短時間で気付いたのか!?

「だから、わざと体勢を崩して隙を見せて。で、魔理沙が最後のトドメをさしに来るタイミングを見計らって、本棚の淵に両手をかけるように落ちて、魔理沙が通過した瞬間に飛び上がって、穴目がけて俺も最後のスペルカードを使ったんだ」

「なっ、んだって……?」

体勢を崩したののも、隙を見せたと思ったのも全部わざとでまんまと私は釣れられたのか!?

——パチ、パチ、パチッ

その時どこからともなく、拍手がなった。

ユウキから地面に下ろされて私は目をキョロキョロさせたが、ユウキは最初からその拍手の主がどこにいるのか気付いていたように斜め上を見上げていた。

その視線の先には、レミリア、フラン、咲夜、美鈴がいた。

「大変面白い見せものだったわ、2人共」

「お兄ちゃんも魔理沙もかつこよかつたよ！」

「……おいおい、俺らを見せもの扱いかよ。魔理沙がここに来た時から視線を感じたけどさ」

「えっ？ ユウキ、レミリア達いたの気付いてたのか？」

ユウキの呆れた口ぶりから、ずっと前からレミリア達がいた事に気付いていたようだ。

「パチュリーをソファアに寝かせていた時にな、パチュリーもその時に気付いていたみたいだな。レミリア達の視線は一度感じていたしすぐに分かったよ」

なんてこった。私一人だけ気付かなかったのか……ユウキにも、パチュリーにも気付けたのに、私は……

「お嬢様が突然美鈴を呼び出して何を言うかと思えば、白黒ネズミが来るけどほってお

きなさい。で、まさかこうなるとは思わなかったわ」

「ホントですよ。まさかユウキさんがパチュリー様の代わりに弾幕ごっこをするなんて、流石お嬢様そういう運命が見えたのですね」

そうか、やけにここまで美鈴にも咲夜にも妖精メイドにも妨害されないと思ったら、レミリアの仕業だったのか。

大方、能力で私とユウキが戦う運命でも見えて、それでみんなで見に来たと言うわけか。

「レミイ、もし運命が見えたのなら私にも一言言ってほしかったわ。おかげで喘息がまた起きたじゃない」

「あら、喘息持ちなのは今に始まった事じゃないでしょ、パチエ」

こあと共にパチュリーが奥から戻ってきた。どうやら喘息は収まったらしい。

「さあ、魔理沙。負けたのだからここの掃除や片付け、1人でしてもらおうよ？ 魔力がでかいあなたなら魔法で簡単でしょ。勿論、本も返してもらおうわ」

「なっ!?……分かったよ。ってこれ1人でやるのか!?!」

良く見ると図書館内はかなり荒れている。本はパチュリーが魔法をかけていたおかげか、全く傷はついていないようだけど。

「当たり前でしょ。私は発作が治まったばかり、ユウキも病み上がりにこれ以上無理さ

せれないでしょ。こゝには元々の仕事あるもの。それに、敗者は黙って勝者に従うものよ。」

「うぐぐぐつ……勝者はユウキだろ?」

「あら、ユウキは私の代わり、代理としてやってもらったのよ? だから私の魔力で私のスペカを使ったの。だから勝者はユウキであり、私なの」

「魔理沙、諦めろ。パチュリーの本勝ちだ」

自分でもヒドイ負け惜しみだと思うけど、それ以上にパチュリーがヒドイ笑顔になった。ユウキも苦笑しているぜ。

「そうだ、魔理沙。後で折角来たんだしこの前の続きしようよ」

「あらいいわね。魔理沙、図書館の片付けが終わったらフランと遊んであげなさい。あの時の決着うやむやに終わったでしょ?」

そう言えば、異変の時私はフランと弾幕ごっこしたけど、ユウキが間に入って代わったせいで決着付かなかったんだよな。

「ちよつと待て、フラン。弾幕ごっこは今度してやるから。ここの後片付けで精一杯で、フラフラで倒れちゃうぜ」

そもそも今も魔力がほぼなくて結構フラフラなんだけど、その上この荒れた図書館の後片付けなんて、魔力が全快でも厳しいぜ。

「その時は私が魔力回復薬調合してあげるから、それ飲んで回復しなさい」

「私も精の付く料理、沢山作ってあげるから、諦めなさい」

「フラン様のお相手頑張って下さいねー」

「お、お前らなあ……」

パチュリーや咲夜は私を回復させてでも、フランの相手をさせたいらしい。

美鈴は純粹にフランの相手が出来たのを喜んでいるようだけど……あ、そうだ！

「ユウキ！ お前の幻想支配で手伝ってくれよ。何でも屋なんだろう？ だったら私が依頼するからさー」

「ん？ 俺は先約があるから、今度魔理沙の依頼引き受けるよ」

「ねえねえ、早く行こうよ。ケーキ一緒に食べよ♪ 魔理沙、またあとでねー」

「そうね。せっかくだし、みんなでティータイムにしましょうか。行くわよ、咲夜、パチエ、美鈴」

ユウキに仕事として頼もうとしたが、フランとレミリアに連れられ図書館を出る所だった。

両手どころか周りに華ばかりなのに、ユウキは困惑した顔だったのかちよつと面白かったけど。

「う、裏切り者〜！」

結局片付けやフランの相手が終わって、解放されたのは次の日の出の時間だった……
そして、私がユウキに対して、嫉妬や恨みに近い思いを抱くようになったのもこの日
からだった。

つづく

第36話 「殺人鬼」

ユウキさんが紅魔館に来て、今日で5日目。明後日には彼はここを出てしまう。口によればするほど、心のどこかで少しの寂しさを感じるようになった。

それはあまり味わった事のない感情でもあり、昔はよく味わっていた感情でもあった。

彼が来てから、正確には先日の異変の時から紅魔館が少しだけ変わった気がする。

美鈴はユウキさんの事をよく気にかけていて、フランお嬢様と2人で何かと面倒を見たがっている。

彼女は元から世話好きで人間好きでもあるから、特に変わったとかではないだろうけど。

パチュリー様は、図書館から出てくる事が多くなり、ユウキさんの身体を診察する名目でよく部屋に居る事がある。最初は実験体として彼を見ていたようだけど、最近では彼を見る目が変わってきている気がする。

こあはどこぞのアイドルおっかけみたく、彼の事を物影から観察している時が多い……正直、怖い。

フランお嬢様はユウキさんを兄として慕っていて、レミリアお嬢様よりもユウキさんの言う事を聞く事が多く、それがレミリアお嬢様には不満だとか。

最近では、パチュリー様に力の制御の使い方を教わっていて、前よりも落ち着いてきている。

レミリアお嬢様は博麗の巫女に負けて、ユウキさんにフランお嬢様との仲を取りもたされて以来、少し雰囲気が柔らかくなった。

前から気にかけていたフランお嬢様へも素直に愛情を示すようになり、フランお嬢様もレミリアお嬢様へ甘えるようになって仲の良い姉妹となった。

「お兄ちゃんこっちこっち！」

「フラン、ちゃんと前を見て飛ばないと壁にぶつかるとぞ」

今日もフランお嬢様は元気にユウキさんと鬼ごっこをしているようだ。私も混ざりたいとは……少し思わないでもなかったりする。

さて、お昼過ぎまで寝ているであろうレミリアお嬢様の洗濯物を片づけましょうか。

「鬼がキター！ 逃げろー！」

そう言えば、2人共一緒に逃げていけるけれど、鬼役は誰なのかしら？ メイド妖精には勤まらないだろうし、美鈴かもしれないわね。

と、洗濯物を干そうとしていたら……

「まーてー、たべちやうぞー!」

——ズコツ!

レミリアお嬢様がノリノリで2人を追いかけている姿を見て、思わずずっこけて洗濯物をばらけさせてしまった。

それでも時間を止めて、床に落ちる前にすべて回収できたけど。

「あ、しゃ……しゃくや!」

「私に借家はありません。で、何をしていますのですかレミリアお嬢様? てつきりお休みになられているものと」

「そ、それが寝ようとしたのだけど、ユウキとフランが鬼ごっこしようとしてるのを聞いて……じゃなくて! あのと私が私とどうしても鬼ごっこしたいと言うから仕方なくよ、本当は眠くてだるかったのよ!」

「はあく……レミリアお嬢様、全くごまかせていません」

一番変わったのは、やはりレミリアお嬢様かしら?

「そうだ。咲夜、あなたも混ざりなさい!」

「いえ、私はまだ仕事がありますから、申し訳ありません。それよりもお二人とも見えなくりましたが、よろしいのですか?」

「はっ!? そうだったわ。あの2人を早く捕まえないと、私のプリンが食べられる!」

——ズルっ！

お、お嬢様……おやつプリンをかけて鬼ごっこをしていたのですか。またもやこけそうになったのを、どうにかこらえる。

「あのお二人が楽しそうなら……それでいい、と思っておきましょうか」
やっぱり、レミリアお嬢様が一番変わったわね……色々な意味で。

なら、私はどうかしら。変わったのかしら、それとも昔のままかしら。

こんな数日で変わるほど、単純だとは思ってはいない。あ、それだとお嬢様達が単純って事になるわね。

「ふっ、ふふふっ……よう、やく追い詰めたわよ、2人共」

「大丈夫、お姉様？ 息が切れ切れだよ？」

「そこまで食べられたくなかったのか、プリン」

「なっ!? 違う……わなくないけど違うわよ！ とにかく、これで私が2人を捕まえれば、あなたの血を貰うわよユウキ。眷属にするわけじゃないから、吸血鬼にはならないから安心しなさい。それに私小食だし」

「安心できるか！ よしっ、フランここらで俺達の切り札使うぞ」

「うん、いくよー！ 禁忌！」

「ダブル！」

「フォーオブアカインド！」

「えっ!? ちよつ、スペルカードは反則でしょ!? しかも、よりもよつてそれ使う!? うゝ咲夜あゝ!!」

聞こえない、私は何も聞いていない。

さーて、早く洗濯物を片づけましょうか♪

それから、洗濯物を干して昼食の準備を始めようとした時、ユウキさんが厨房へとやってきました。

「ユウキ様、鬼ごっこは終わったのですか?」

「ああ、レミリアとフランは少し寝ると部屋に戻った。昼食には起こして欲しいってさ」
今頃2人で仲良く夢のなかでしょうね。

「ならなぜここに、もうお腹が空いたのですか? 昼食にはもう少し早いです、何か作りましょうか?」

「いやいや、そうじゃないんだ。咲夜の手伝いしたいと思つてな」

「私の、手伝い? お客様であるユウキ様にそのような事はさせられません」

そう言うユウキさんは申し訳なさそうな顔をしたが、それでも話を続けた。

「料理は一応できるけど、流石に咲夜の足を引っ張りそうだから、味付けとかは手伝わな

いさ。ただ野菜の皮むきさせてもらえないか？」

「皮むき、ですか？」

「リハビリだよ。ナイフで皮むきして手先の感覚を取り戻すんだ。それに、最近素手でばっかり戦ってたからな、ナイフの感覚も取り戻したい」

なかなか物騒な事を言っているけど、確かユウキさんは元いた世界では、色々な武器を使っていてその中でもナイフが得意だったわね。

同じナイフ使いとして、少し親近感が沸くわ。

下ごしらえや味付けではなく、野菜の皮むき程度なら問題はないでしょう。

「そう言う事でしたら、分かりました。ちょうどこれから昼食の支度をしようとしていたので、よろしくお願いしますね」

「ああ、ありがとう」

こうして私とユウキさんは2人で厨房に立ち、昼食の準備を始めた。

ユウキさんのナイフ捌きは大したものので、正直私よりも早く野菜の皮を剥いている。それにただ皮をむくだけではなく、剥いた皮はすごく薄い。

たかが野菜の皮むきとはいえ、人数が多いので普段は時を止めてやってはいるが、その手間が省けた分かなり助かるわ。

「驚きました。ユウキ様は料理をなさっていたのですか？」

「まあな、咲夜みたくプロ級ではないけど、それなりにな。で、咲夜、やっぱりそれ辞めてほしいんだが」

「はい？ それとは何の事でしょう？」

「敬語と様付けだ。咲夜が俺をお客として敬つてくれているのは分かるし、職務もあるから慣れようと思つてたけど、やっぱり俺にはどうもな」

身体が痒くなる。とユウキさんは苦笑いを浮かべた。

様付けをされた事がない人間には、違和感やむずかしさを覚えるのかもしれないけれど、ユウキさんが大切なお客様なのには変わりはない。

「最初に会つた時のような、あんな感じで頼む。今は俺と2人だけで、レミリアもいないし。ダメか？」

最初に会つた時……あの時は警戒心があつたけど、彼はそれを感じ取つていたのね。

ちよつと罪悪感が沸く。彼は何もしていない。それどころか親しげに接してくれたのに、私はそれを警戒心で応えてしまった。

つてそれよりも、今私はユウキさんと2人きり、なのよね。

厨房で誰かと2人きり、それも男性とだなんて……初めて、ね。

「あの時は失礼いたしました。遅くなりましたが、無礼をお詫びいたします」

「だからそれをやめろつての。俺は……そんな事される程出来た人間じゃない」

「まただ。また一瞬彼の目に浮かんだ、いや、感情が消えた。」

「それは、元いた世界であなたが何をしていたか、に関係していますか？」

「文も霊夢もユウキさんが元いた世界で、どのような生活をしていたか具体的には聞いていないと言う。」

「ただ、何でも屋として戦争も経験したり、殺し合いも慣れていると言う事だけ。」

「言ったかどうか忘れたけど、俺は元いた世界で何でも屋をしていた。と言えば綺麗に聞こえるけど、実際は非道な実験を行ったり、被験者になったり、裏切り者の抹殺とかそういう裏の仕事が主だった。フランなんかより俺の方がずっと危険だぞ？ 殺した人間は100人以上いるしな」

「淡々と話す彼の表情は何もない。」

「普通こういう過去を話す時は、悔いや後悔を表情に浮かべる物だけだ。」

「自分が行った事実を受け止めているのか、それとも彼にとっては当たり前すぎた日常を語っているにすぎないのか。」

「恐らく両方ね。私にも経験があるし。」

「だから、こんな自分を慕うフランお嬢様や、気にかける美鈴やこあが理解出来ない……ですか？」

「よく分かるな。その通りだよ。こんな最低な殺人鬼に好意を向ける彼女達が、理解出

来ない」

これは……私と同じ。私も昔はこうだった。ここに来るまで、紅魔館のみんなやレミリアお嬢様に出会うまでの私だ。

「理解する必要は、あるのかしら？」

「えっ？」

下ごしらえも終わり、後は煮込むだけなので私は手を止め、真つ直ぐにユウキさんを見据えた。

彼の目には困惑しかない。

「あなたが過去にどんな事をしてきたのか、興味はない……と言えようそになるけど。それでもあなたがそこまで自分を卑下する程、最低な人間とは私は思わないわ。それはここにいる皆も同じ。それは紛れもない事実よ」

「……………」

「少し昔話をしましょうか……とある少女の昔話よ」

——ある所に1人の女の子がいました。彼女は幼い頃から母親と2人暮らしでした。父親は亡くなっていましたが、彼女には愛情を注いでくれる母親がいるだけで十分でした。けれども、彼女は母親にすら言えない秘密がありました。

物心つく頃、彼女は自分に不思議な力がある事に気付きました。

彼女は時間を止める事が出来るのです。初めて使った時、彼女はその力を理解し恐怖しました。

こんな事が出来るのは人間じゃない。そう思いこんだ彼女は、母親にも誰にも付けず黙っていました。

その力を使う事もせず、ただ力が消えてくれる事だけを願ひ過ぎました。ですが、母親にはすぐにバレてしまいました。

母親の頭に屋根から崩れ落ちたレンガが当たりそうになり、彼女は咄嗟に時を止め母親を救いました。

母親は彼女に礼を言いましたが。しかし、その時母親の目に少し浮かんだ畏怖の色に彼女は気付いてしまいました。

運悪く、彼女が住む町の一部の住民にも見られてしまい。それが原因で離れた小さな町に引越す事になってしまいました。新しい町に引越すと、母親は彼女に厳しい口調で力を使つてはいけないと言いました。

母親の今まで見た事ない表情に、彼女はただうなづく事しか出来ませんでした。

そして、彼女達が引越してから少し経った頃でした。町に通り魔が現れました。霧の濃い夜に、街の誰かが切り刻まれて殺され始めたのです。

誰もその姿を見た者はいませんが、何人もの人がその通り魔に切り裂かれ殺さ

れました。

その通り魔が誰なのか、誰もが疑心暗鬼になりました。

誰にも気づかれず見られずに、人々を切り裂く犯行にふと母親は自分の娘を疑いました。

彼女なら時を止めている間に好き勝手に切り刻めるからです。

母親の問いに彼女は、何も知らない自分は何もしてないと言いました。

母親は自分の疑心を恥じて、彼女に謝りました。

しかし、彼女の力の事が町中に広まってしまったのです。母親が彼女の力について知っているのを、聞かれてしまったのです。

町の人達は彼女を疑いました。決定的な証拠はないのに、彼女を犯人と決め付けるようになりしました。

その度に母親がかばったので、大きな騒ぎにはなりませんでしたが、彼女を調べに来た警官が誰にも気づかれずに殺された事でより一層彼女を疑う声は強くなりました。

ですが、誰も彼女を責めたり問い詰めたりはしませんでした。

そんな事をすれば自分が殺されると思つたからです。

彼女は影で「夜霧の殺人鬼」と呼ばれるようになりました。

そんな中でも、彼女は何事もなかったかのように振る舞いました。

母親に下手に怯えれば、認めるような物だから普通に過ごしなさいと言われていたからです。

彼女は必死に耐えました。彼女はもう誰にも心を開く事が出来なくなっていました。母親だけが彼女の支えでした。

町を出る事も考えましたが、なぜか母親が反対しました。

僅かな間で通り魔のせいで町から人は次々と減って行き、ついに母親もこの町を出て行く決心をしました。

町を出る前日の夜、その日は満月でした。霧も出ていなく、今夜通り魔が出ないだろうと皆が安心していました。

ただ彼女だけは嫌な予感がしていました。彼女の予感的中しました。

突如、隣の家から悲鳴が聞こえてきました。彼女は家を飛び出しました。

少し前母親が、彼女が作ったお菓子を持って隣家に向かうのが見えたからです。

もしかして母親も襲われたかもしれぬ。そう思った彼女でしたが、隣家に着くとその光景に驚きました。

そこに居たのは血まみれのナイフを持った母親でした。

『……みたな?』

狂気に満ちた目で迫る母親を見て、彼女は逃げようと思いました。が転んでしまい、逃げ

れませんでした。

母親が彼女に馬乗りになり、血まみれのナイフを振り降ろそうとした時、彼女は力を使いました。

時を止めて逃げようとしたが、自分にナイフを振り降ろす母親を見た彼女は、そのナイフで母親を刺しました。

あんなに優しくかった母親の自分への憎しみと狂気しかない姿に、彼女も何かが壊れてしまったのです。

隣家から出て、町へと繰り出そうとした彼女は、殺人鬼と呼ばれるに相応しい狂気を持っていました。

その時でした。ふと空を見上げた彼女の目に、1人の幼女が宙に浮かんでいるのが見ええました。

『なんだ、面白い力を持った人間がいると聞いて来て見れば、ただの人間だったか』

その幼女は蝙蝠の翼を持ち、赤い瞳で彼女を見下ろしていました。

その瞳を見た彼女は、正気に戻り返り血で真っ赤な自分の姿に母親を殺した事を思い出し恐怖し、泣き出しました。

幼女はそんな彼女の元に降り立ち、黙って彼女を見てこう言いました。

『ここは面白い場所だな。霧の夜に来ればもつと面白い物が見えただろう』

幼女が言うには、この町は満月の夜に霧が出ると、人間を狂気に落とし自殺へと誘う特別な場所だったそうです。

そう、殺人鬼はいなかったのです。霧の夜に町人の誰かが狂気に落ち、自殺していたのです。

『お前の母親は、前々から過度のストレスがあつたのだろうな。だから自殺ではなく他殺に走った。それも霧の出ていない今夜にだ。まあ、それはお前の母親に限った事ではないが』

それを聞き、彼女は更に泣き崩れました。

自分のせいで、力のせいで母親は狂ってしまったのです。

『言っておくがこの町にはもう人間はいないぞ？ みんな死んでいたからな』

幼女が言うには、この町に残った住民は殺し合いをしたらしく、全員死んでいたそうです。

『疑心暗鬼が積もり積もって、今夜爆発したのだろう。今夜は血のように綺麗な満月だからな』

嬉しそうに言う幼女の言葉に、ふと彼女は空を見上げました。

そこには血のように真っ赤になった満月が浮かんでいました。

『さて、今夜は気分が良い。お前、私と来い。何、取って食いはしない。ちよつと家事が

得意な人間を探していたのだ。お前の家の料理やお菓子を拝借したが、私好みのいい料理だった』

自分は母親を殺した殺人鬼だ。

彼女はそう言うのと少女は笑ってこう答えました。

『くつくつくつ、殺人鬼か。吸血鬼のメイドとしては最高ではないか。それに、お前が母親を殺した事が私に何の関係がある？ 私はお前が気に行つた。だから連れて行く。拒否権はないぞ？』

この少女は人間ではない、吸血鬼だ。それでも私の事を必要としてくれている、それは母親以外で初めてだった。

幼い姿に似合わないその傲岸不遜で唯我独尊な態度が、彼女にはおかしく思い、つい笑ってしまいました。

『むっ？ 何を笑う？ おかしなことでもあつたのか？』

『いいえ、あなたに付き従います。お嬢様』

『うむ。その響き、気にいったぞ。その褒美だ、お前に新しい名前をやろう、この良き夜に出会えた記念だ』

こうして彼女は、見た目が幼女な主と、新しい居場所と名前を手に入れたのでした。めでたしめでたし。

私の話を黙って聞いていたユウキさんは一言、こう言いました。

「良かったなその子、いい主に巡り合えて」

「……そうね。私もそう思うわ」

ユウキさんは同情するのでもなく、憐れむのでもなく、ただ少女と幼女の出会いを祝福してくれました。

ああ、彼は本当にお人よしで優しい人ね。

「で、俺にその話をしたのはなぜだ？」

分かってている癖に、ユウキさんは小さな笑みを浮かべて尋ねてきた。

「改めて言うけど、あなたが過去にどんな人間だったのか、私達には関係ないわ。あなたがフランお嬢様とレミリアお嬢様を助けてくれた、とんでもなくお人よしで、物好きで優しい人。それだけが重要な事よ」

「物好き……つてのは認めるよ。でも、ありがとう」

やっと、ユウキさんが笑ってくれた。照れくさそうに、でも心の底から笑ってくれた。それがすごく嬉しかった。

「こちらこそ、手伝ってくれてありがとう。おかげで助かったわ、後は私一人で出来るか

ら。もう席に付いていていいわよ」

もう料理はあらかた出来ているので、後は盛り付けるだけだ。お嬢様達を起こしに行こうかしら。

「そっか、これくらいならいつでもやるさ。礼を感じるなら、これからはそんな感じで話してくれるとかかなり気が楽なんだけど？」

そう言えば、気付かないうちに私、口調が変わっていたわね。

「そうね。誰もいない2人きりの時だったら……いいわよ」

「あ、ああ……じゃ、食堂に居るよ」

軽くウインクをしようと、ユウキさんは少し顔を赤くして出て行った。

ふふっ、可愛い所もあるわね。

「咲夜く御飯まだく!？」

「お腹すいたよく!」

と、入れ替わるようにレミリアお嬢様とフランお嬢様がやってきた。

「はい、ただいまお持ちいたしますので、席でお待ちください」

「分かったわ。あら、咲夜、顔が赤いわよ? 何か良い事でもあったのかしら?」

「本当だ顔あかくい♪」

すぐそこでユウキさんとすれ違ったはずだから、気付いているのだろう。

2人共ニヤニヤといじわるそうな笑みを浮かべている。

こう言う所は姉妹そっくりね。

「ええ、とても良い事がありましたよ」

少しでも、ユウキさんの心が癒せたのなら、それはとても良い事。

彼は、あの頃の私よりも深い傷を負っているのだから。

そして、それを哀しむ事をしない、壊れた人なのだから。

つづく

第37話 「強者」

紅魔館生活6日目。今俺はリハビリを兼ねて、紅魔館の周りをジョギングしている。リハビリは咲夜の手伝いをしながらしていたが、そろそろ体全体を動かしたい。

出来れば、誰かと組手をしたいくらいだ。だけど、客人の身でそれはおこがましい話。それ以前にまともな組手が出来る相手は……美鈴くらいだろうな、咲夜は多忙だし。強さはレミリアやフランに劣るが、格闘術に関しては美鈴の右に出る者はいない。そう咲夜やパチュリーが言っていた。

美鈴はほぼ一日中門番をしているので、組手相手を頼むのは無理があるかもしれない。い。

けれども他に適任者はいないので、ダメ元で頼んでみようと門へと向かうと美鈴ともう一人いた。

「どうも! 「射命丸文と言うバ鴉」 ……ちよっ?! いえいえ、バ鴉と言う射命丸文 ……ん? アレ? 違います違います! 鴉天狗の射命丸文です! まだそのネタ続けてたんですか!」

「あ、そうだったそうだった。久しぶりだな、文」

そこにいたのは見るからに脱力して深く溜息を吐くバ鴉、射命丸文だった。

彼女とも会うのは1週間近くぶりだったか。

「で、今日は何をしに来たんだ？ 新聞の押し売りか？」

「それならいつも適当に放りこんで来るんで、押し売りどころか投げ売りですね。文は今日あなたの取材に来たみたいです。嫌なら今すぐ追い返しますよ？」

「取材じゃありません！ お見舞いです！ 追い返すって、この前のようにはいきませんけど、何でしたらまたやりますか？」

「私は構いませんけど、ユウキさんに醜態をさらす事になりますよ？」

「その言葉そのままそっくりと、利子をた一つぶり付けてお返しします！」

な、なんだこの2人。すごい笑顔だけど、目が笑ってない。飛び散る火花が見えそう
だ。

確かこの前の時、文は美鈴に負けたんだっけ。それでライバル心でも芽生えたのか？

何にせよ、俺はいない方がよさそうだ。

「美鈴、俺お邪魔そうだから、また今度にするよ。ごゆっくり〜」

「あ、ちよつと待って下さいユウキさん。この鴉は客でも何でもないので無視して下さい。それで、私に何の用だったんですか？」

「だからあなたに用はないので、ユウキさんだけお借りします！」

文がまだ何か言っているが、美鈴は無視している。

これは……俺の用を話せば面倒な事になりそうだけど、ほつといたらもつと面倒な事になりそうだ……仕方ない。

「今でなくていいけど、空いた時にリハビリに付き合ってほしかったんだよ。あの時の続き、でさ？」

「いいですね。私もまたユウキさんとしてみたいと思っただけです。今日でしたらそうです。すね……」

「あ、それでしたらちようどいいですね！　ぜひ、私にその組手を取材させてください！」

美鈴が時間を考えていると、待つてましたとばかりに文が文字通り身を乗り出してきた。

見舞いじゃなくて、やっぱり取材に来たのかよ……

「お見舞いも取材も、出来る時にやるのが私なんです！　と言うわけです。あ、お二人さん始めちゃってください！」

「ちよつと待つて下さい。今私は仕事中ですし、あなたに組手を見せる理由もありません！　お帰り下さい。でないと私も私の仕事をしますよ？」

美鈴はそう言って、文を睨みながら拳を構えた。

さつきも思ったけど、なんで美鈴はこうも文に好戦的なんだ？

「あーそうですかそうですか、そりや私に見られたら困りますよねー。新聞のトップ記事に『紅魔の門番 唯一得意のはずの格闘戦で人間にボロボロに負ける』なんて載せられたら堪りませんよね？」

「そんな挑発には乗りませんよ？ 第一あなたの新聞に載せられても、まともに見る人なんていないでしょう？」

「またもや火花を飛ばし合い睨みあう2人。俺……帰っていいか？」

「あら、面白そうじゃない。美鈴、私が許可するわ。今からユウキと組手しなさい、もちろんそのブン屋もいていいわよ」

「そこへ騒ぎを聞きつけたのか、寝ていると思っていたレミア、フラン、咲夜、そしてパチュリーとこあまでやってきた。」

「俺はただリハビリをするだけなんだが、なんでこうも人が集まる？ これもお前の能力かレミアア？」

「この前の図書館での一件でもそうだが、レミアアの運命を操る能力は未来予知か何かなのだろうか。」

「さあ？ 私はただ面白そうな事が起きる予感がただけよ？ それよりユウキ、あなたの本気を見せてくれないかしら？」

俺の、本気？

「あなたの身体能力・近接戦闘能力が見たいのよ。あなたは経験と技術だけで、4人のフランを相手にして圧倒した。その力がもう一度ちゃんとした形で見たいの。どうかしら？」

柔らかく言っているが、レミリアの瞳には今まで見た事ないモノが宿っている気がする。

それは敵意や殺意とはまた違ったものだ。

良く見るとレミリアだけじゃなくフランも、そして、先程まで新聞記者の目をしていた文も同じような眼で俺を見ている。

咲夜はただ黙っているが、俺の方を心配そうに見ていたので大丈夫だと言う視線で応えると、彼女は少しだけ微笑んだ。

パチュリーはそんな咲夜をニヤニヤと見ていて、こあはわくわくしながら俺を見ている。

完全に見せものじゃないか、これ？

「ユウキさんが嫌でしたら、断つてもいいと思いますよ？ お嬢様も無理やりは望んでいませんから」

「そう言う美鈴はどうなんだ？ 今すぐにでもやりたいって顔してるけど？」

「あつ、そう見えますか？ 隠さずに言いますと。この前少し手合わせしましたけど、あの時すごく気分が高揚したんです。それが今もまた……ユウキさんのような、魔法も能力も関係なしの肉弾戦であそこまでやれる人間、初めて見ましたから」

「そりやまた随分と大げさだな」

要するに、美鈴は俺と戦いたかったけど、今まで俺が怪我していたりでそのきつかけがなかっただけと言う事か。

とはいえ本来、俺の方が美鈴に組手を頼みに来たんだ。なら、断る理由はないな。

それに……俺も美鈴との手合わせ楽しかったしな。

「分かった。美鈴さえよければ……今相手してもらえるか？」

「はい、よろしくお願いしますねー」

それから俺達は紅魔館の広いホールへと移った。

ここはパチュリーが魔法で補強しているので、大暴れしてもそう簡単には壊れないらしい。

そこまで過激な事するつもりはない。

と思っていると、パチュリーはこんなを聞いてきた。

「ユウキは美鈴の能力、【気を使う程度の能力】については知っているわね？ 使った事ある？」

「いや、紅魔館で幻想支配を使ったのは2人、フランとパチュリーだけだ。あ、魔理沙も視たけどな」

不用意に誰でも視るのは、あまり良くないのは分かっているからな。

「そう。じゃあ美鈴を視てみて、そして能力を使ってみなさい。きつと面白い事になるわよ。美鈴、構わないでしょ?」

「私は構いませんけど……なるほど、そう言う事ですか」

「くつくつくつ、これは面白くなりそうね」

「「?」?」

美鈴とレミリアはパチュリーが何を考えているか見抜いたようだが、俺と咲夜とフランは分からずに互いに首を傾げ合った。

「どうでもいいですけど、早くしてくださいねー」

「なんでお前が仕切るんだ、バ鴉! 全く……とにかく、美鈴を幻想支配で視ればいいんだな?」

言われた通り、美鈴を幻想支配で視てみる。

全身に美鈴の妖力が沸き上がってくる感覚になった。

パチュリーや魔理沙の時は魔力だったから多少慣れ親しんだ感覚だったが、美鈴は妖力と言う今まであまり視た事ない力なので、フランの時と同じく感覚的に違和感がす

る。

「うまく言ったようね。妹様の時と同じく眼が銀色になっているわ。妖力を視ると銀色になるみたいね。さ、次は能力を使ってみなさい」

「ああ……こうか、うお!？」

力を入れ美鈴の能力を使った途端、身体から透明な湯気のような物が沸き上がってきた。

「これが……気? 何だ、すごく身体が軽い。それにすごい力も感じる」

腕を振ったりしてみると、いつもよりも動作が速い。

軽くジャンプすると、普段よりも高く速く跳び上がった。

美鈴の能力や火織の聖人の力を使い身体を強化した事はあるが、それ以上かもしれない。

自分の五感全てだけでなく、反射神経も動体視力も筋力、脚力、瞬発力……その他全てが強化されていた。

これなら美鈴とも互角に戦える……いや、同じ能力だから美鈴も自分を強化出来るので、あまり変わらないか。

「すげえ、何だこれ! 自分の身体じゃないみたいだ! 美鈴、お前とんでもない能力持っているんだな!」

「ありがとうございます。気を使えば身体の全てが強化されるんです。ですから、近接戦闘に長けたユウキさんにはピッタリの能力だと思えますよ」

自分の能力を褒められて美鈴は嬉しそうだ。なぜかフランや咲夜、文までがこつちを睨んでいるけど。

パチュリーが勧めてきたのは、美鈴の能力が俺と相性が良いと思ったからか。

「それにしても、少し意外ね。能力の相性が良いとは思ってたけど、あなたがそこまで浮かれて喜ぶとは思わなかったわ」

「ふふっ、それは私も思ったわ。ユウキ、まるで子供のようじゃない」

「プリンを食べる時のお嬢様程ではないと思いますか？」

「うんうん、昨日も私とお兄ちゃんにプリン食べられて、涙目で私達を睨んでいたでしょ」

「ほほう、紅魔館の主はプリンに眼が無い、と。しかし、レミリアさんの涙目ですか、ぜひ写真に収めたかったですねえ」

「う、うるさいわよ咲夜、フラン！ それと文！ そんな写真撮ったらあなたの羽、全部筆り取るわよ！」

外野が漫才をしているが、無視しておこう。

でもパチュリーの言う通りだ。何でここまで喜んだんだ俺？ 自分の身体が思い通

りに動いて強くなったから？

いや、違うな。

「なあ、美鈴……全力で、やらないか？」

「奇遇ですね。私も同じ事を提案しようとしていました。私は能力を使いませんが、全力でやらせてもらいます」

自然と俺と美鈴は笑みを浮かべていた。こんなに気分が高まる事は滅多にないと思う。

構えた美鈴を見て分かる。この前の腕試しとは違う、これが美鈴の全力。

対する俺は前と同じく全力だが、今は気の力で全身体能力を底上げしているのでどれくらいの強さか自分でも分からない。

「それじゃ、準備は良いわね？ 特にルールは決めないわ、2人の好きなようにやりなさい……始め！」

レミリアの合図と共に仕掛けたのは俺の方だった。一步一步が今までと全然違う。

踏み込みの深さと速さが段違いで、今までの感覚で走ったりするとうっかり自分の目測がかなり狂ってしまいそうだ。

高速で間合いを詰め、勢いをそのまま乗せた正拳突きを放つ。

「っ!？」

美鈴は片手でガードしようとしたが、すぐに両手を交差させる完全防御の姿勢を取った。

——ゴコツ！

鈍い打撃音と共に、美鈴が防御の姿勢のまま殴り飛ばされた。

「つつ、くうく……んっ！」

美鈴はどうか受け身を取り、体勢を直してこちらに走ってきた。

その速度はあの時の比ではなく、美鈴の本気が改めて分かる。

「はっ！」

美鈴は助走の勢いそのままに、地を蹴り高速で回転しながらカカト落としをしてきた。

俺は両手を頭上で交差させ、受け止めたが。

——ドゴツ！

「うぐっ!?!」

あまりの威力に受け止めきれず、片膝を付いてしまった。

まともに食らっていたら、意識が飛んでた所じやなかっただろうな。

美鈴は追撃をせずに一度俺から距離を取った。そこで両手を痛そうに何度も振っていた。

どうやらさっきの正拳突きが効いたようだけど、こっちも美鈴の回転力カト落としを受けた両手が痺れている。

「へ、へへへっ……なかなか効きましたよ、あなたの正拳突き」

「そっちこそ、流石だな。身体強化もなしであの強さは反則級だろ」

火織やアックアは聖人や魔術使っていたしな。五和や天草式達も身体強化術式使っていた。

相手が素人じゃない、ガチでの格闘戦は初めてかもしれない。

「いえいえ、私よりレミアアお嬢様の方が身体能力は高いですよ。鬼の力に天狗の速さが吸血鬼のウリですから」

「……へえ、やつぱり凄いなだな吸血鬼」

横目でチラリとフランの方を見ると、彼女はどこか得意げに胸を張っていた。

「ちよつとそこは私を見る所でしょー！」

レミアアが何か言っているが、無視する事にした。

「さて、そろそろ痺れは取れたか？ こっちはもう大丈夫だぞ？」

「律義に待ってくれてありがとうございます。私ももう大丈夫ですよ」

互いの両手が回復したのを確認し、拳を突き合わせ距離を取り合った所で再開だ。

再度全身から気を放出させ全能力を強化し、美鈴へと攻撃をしかけた。

美鈴も同じく突進してきた。お互い間合いに入った瞬間、互いの蹴り技が交差した。最初は下段、俺も美鈴も地につけての下段回し蹴り。

互いの脚力は互角で、すぐに弾かれた。でも、これで終わらない。

そこから中段への再度回し蹴り。それも弾かれた。

ならばと手で地を押しして飛び、その勢いをそのまま回転に乗せた上段回し蹴り。

周りから見れば恐らく、下・中・上と流れるような三段回し蹴りを繰り返したように見えただろう。

2人共相手の足に蹴り飛ばされ、また距離が空いた。

そこで姿勢を崩すわけにはいかない。急いで体勢を立て直し、今度は上下左右、両手両足を使った時間差同時攻撃。

手足の一本ずつ、律義に組み合わせた打撃ではない。

右手のアッパーをかわした所に左足のひざ蹴りを叩きこむ。普通にすれば、遠心力などの影響で威力が大幅に下がるが、気の強化の影響で遠心力も慣性の法則も重力も無視した攻撃が出来る。

しかし、この攻撃も美鈴は涼しい顔をして冷静に捌き、更には両手の掌底で反撃してきた。

こちらでも両手で弾き飛ばし、がら空きになった胴へと膝を突き刺そうとして、咄嗟に

大きく後ろに下がった。

と同時に、鼻先に美鈴のつま先が掠った。彼女が後方宙返り蹴り、サマーソルトキックを放ったのだ。

どうやら掌底が弾かれるのは想定内で、俺が突っ込んできた所にカウンター気味にキックを決めようとしたようだ。

「流石、攻撃の速度が速いな」

「それはユウキさんですよ、器用な攻撃してきますね」

「元いた世界の能力の一つ、その応用編だ」

芹亜先輩の妹である鞠亜が使っていた遠心力を増減させる能力、暴風車軸。

なんとかこれを能力なしで応用できないかと、試行錯誤した結果の延長線上にあるのがこの戦い方だ。

実戦レベルにするには他の能力で身体能力を強化しないと使えない、って事で自分の心の奥底にお蔵入りしてたが、こういう所で役に立つとは思わなかった。

「本当に、あなたと格闘戦するのは楽しいですね」

「ああ、それは俺もだ。こんな気分で戦うのは生まれて初めてだろうな」

そう。俺が高揚していた理由はきつとこれだろう。

実験のためでもなく、誰かのオーダーを受けたわけでもなく、自分や周りの誰かのを

守る為でもない。

ただ自分自身の為、自分の強さを試す為、他人は一切関係ない自分だけの理由での戦い。

しかも、相手は手加減抜きでも五分五分にすらならないほどの強敵。

武器も能力も使わず身体のみで戦う美鈴。こんな相手とこんな理由で戦う事に、俺はひどく興奮している。

俺って、意外と戦闘民族だったんだな。

「私は久々ですよ。さあ、もつと楽しみましょう！」

「そうだな。まだ戦いは……これからだ！」

そして、戦いは再開された。

互いの拳が激突し、反発すると同時に俺が跳んで回し蹴りを放てば、同じタイミングで美鈴が深くしゃがみこみ下段回し蹴りを放ち、2人の足は空を切った。

着地を待たずに俺は右拳を美鈴に突き出したが、美鈴は身体を軽く横に反らしてかわしカウンターのようには右フックを繰り出してきた。

その右フックを左手で受け止めると、身体を素早く反転させ滑りこませ背負い投げしようとした。

だが、美鈴は投げの体勢に入った俺の足に自分の足を絡ませ踏みとどまった。

そこで2人共動作が止まり、固まってしまったので仕切り直して一端体を話した。

正直に言うと、背中当たった2つの柔らかい感触に戸惑ったからだ……ま、手で触った事が何度もある当麻に比べればまだ健全か。

などと言う動揺を顔には出していなかったせいも、美鈴は全く気にせずむしろさつきよりも嬉しそうだ。

「……ふー、ここままでやって一度も決定打を打ちこめないのは久々ですね」

「俺もだ。でもな、自分で言うのもなんだが、多少人間離れしてきてる気がする」

伸ばした腕を瞬時に戻したりなんて、こんな反射神経を無視したような連続攻撃が出る人間はいないだろうな。

「なら、これはどうですか？」

そう言うと、美鈴は今までとは違った構えをしてきた。

さつきまでは両手を突き出した攻撃に重みを置いた構えだったが、今は両手を大きく回し広げて防御の構えだ。

クイクイと手先を動かして俺を誘っている。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

左手を小さく引き殴りかかる動作をしたが、それはフェイント。

美鈴が左手に意識を少し向けた瞬間、右足で蹴り上げようとしたがそれは簡単に受け

止められた。

その体勢のまま、瞬時に地に付いた左足で空中蹴りを放った。これも人間離れしてるなあ。

「甘いですー！」

美鈴はなんと左足を掴み右足も掴まれたまま、ジャイアントスイングで投げ飛ばされた。

更に美鈴は俺を投げ飛ばすと同時に、追撃のために俺へと走ってきた。

空中で受け身を取ろうと身体を捻った所で……美鈴の顔が俺の目の前にあった。

まるでスローモーション、ゆっくりと美鈴が俺の目の前を通り過ぎて行く。

「あっ……」

どうやら空中で軽く静止したらしく、思いつきり跳んだ美鈴が俺に追いついて……らしい。

ユウキと美鈴はほぼ同時に着地すると間合いを詰め直すわけでもなく、ただ黙ってお互い気まずい顔をしあい苦笑いを浮かべた。

「え、えっと……ぶつかってません、よね？」

「ああ、大丈夫だ。俺と美鈴はただ通り過ぎただけだ、うん」

平静を装っているけど、思いつきり動揺しているわね2人共。顔も赤いし、ユウキもあんな顔出来るのね。

「あの2人、一体何をしているのかしら?」

そんな2人を見て、私はイラついた声でそう言った。

「そうですね!」

カメラ片手に観戦していた文は私よりも不機嫌な声を出していた、写真撮らなくていいのかしら?」

咲夜も不機嫌そうな顔をして睨んでいた。

全く、2人揃って美鈴に嫉妬しているのね。

「レミリアさんも、同じじゃないですか?」

「わ、私は違うわよ! せっかかない勝負しているのに、なにラブコメしてるのよって思っただけよ!」

「そう言う事にしておきましょうか」

ニヤニヤとこつちを見る文を無視して、ふと横を見ると。

「……むう」

パチエ、あんたもかい!?

この分ならフランは暴れそうな程かなとちらつと目を向けた。

「わあ……」

これは意外。フランは不機嫌どころか目をキラキラと輝かせて、戦いを再開した2人に魅入っていた。

「お二人との戦い、フランちゃんにはいい刺激になってるようですね」

さつきまで不機嫌だったのに、文はもうフランに興味を示したようだ。

「あなただつてさつきまで、あんなにうずうずしてたでしょ？」

「それはレミリアさんもですよ？ まあ、でも仕方ないですね。こんな戦いを見せられたら、身体が疼いて仕方ありません」

「……そうね。こんなの久々なもの」

お互い全力でぶつかり合う。ユウキは美鈴の能力を使っているとはいえ、あの美鈴が全力を出して互角になるほどの強豪とは思わなかったわ。

面白い事になる予感はずいぶん、これほどとは……私の目もゆるくなつたわね。

私達妖怪が全力を出せる事なんてそうはない。幻想郷のルールに乗っ取っていれば尚更だ。

けれども、美鈴は今自分の全力を出して戦い合える相手に巡り合えた。

それはユウキも同じようで、美鈴との戦いを心底楽しんでる。

「あんなに楽しそうに戦う美鈴は、初めてですよ。お嬢様」

「そう言えば、咲夜は美鈴の全力をまだ見た事なかったわよね？」

「ええ、格闘に長けているのは知っていましたが、ここまでなんて」

咲夜は美鈴の強さに驚いているようね。思えば美鈴が全力で戦ったのは、私と出会った頃くらいよね。

「行くぞ、美鈴！」

「行きますよ、ユウキさん！」

2人が掛け声と共に走りだし、互いの拳をぶつけ合っていた。

今までよりも間合いを詰めての乱打戦を始めたようだ。

「おららららっ！」

「はああ〜！」

人間の限界を超えたような速さでの拳の乱打。美鈴はともかく、人間のユウキには無理な動きをしている。

あれでは拳を痛めるだけだろうに、それでもユウキは楽しそうだ。

「ああく……なんて、羨ましい」

文がうつとりとしたような表情で、心底うらやましそうな声を出した。

でも、それは私もだ。

ユウキと美鈴の戦いが始まってからすぐ、私も文もすぐに2人の戦いを見てこう思った。

『羨ましい』

『私もやりたい』

初めて会った時からユウキは人間の上位に入る強さだったけれど、戦ってみたときでは思わなかった。

けれども、今のユウキは私と文を刺激する程の強さを持った……強者だ。

弾幕ごっこなんかではなく、純粹に力と力をぶつけ合って戦いたい相手。

そして、そう思ったのは私と文だけではない。フランもそうだ。

吸血鬼にして私の妹でもあるフランが、とても強い相手を前にこんな目をして魅入ってしまったている。

抑えきれないほどの闘争本能、これは紛れもない「強者の証」だ。

「フラン、今のユウキと戦いたい?」

「うん! 美鈴の次は私と戦ってほしい! もちろん、美鈴の能力使って構わないから

!」

「それは私も同じよ。こんなに心が躍って、胸がわくわくするのは久々だわ」

「ちよつと、レミイ。何物騒な事言っているの? まさかと思うけど……」

「ふふふつ、パチエちようどいい具合に2人の勝負が終わりそうよ?」

見るとユウキも美鈴も息切れをしていた。この時間で美鈴があれほど息切れするなんて、これはますますワクワクしてきたわ。

「はあ、はあ……美鈴、本当に楽しかったぜ」

「こちら、こそ、こんなに楽しい勝負は、何百年ぶりでしょうか。でもそろそろ……終わりますね」

ユウキを見ると、全身から陽炎のように発せられていた気の力が随分と弱々しくなっていた。

彼の体力の限界か、幻想支配のタイムリミットが近いようね。

「これが最後。最後の一撃……行くぞ」

「ええ、私もこの一撃に全てを籠めて……行きますよー!」

2人同時に駆け出す。今まで一番速く、力の籠った走りだ。

一步、二歩、三歩。走る度にユウキの右足に気が集まって行くのが見える。

美鈴も気は使っていないが、右足に力を籠めながら走っている。

すぐに2人の距離は縮まり、最後の攻撃が始まった。

最初に跳んだのはユウキ。空高く舞い上がり、空中で幾度も縦回転をしてからの右足での飛び蹴り。

対する美鈴も同じく飛び、こちらは横回転を加えた回し蹴り。

「はああく!!」

ユウキの蹴りが当たる直前、美鈴は回転の勢いをそのままに軸足を右から左に替えての上段回し蹴りを放った。

スピードと空中回転と気の力で威力を増したユウキの蹴りと、同じくスピードと横の高速回転による勢いを乗せた美鈴の回し蹴りが激突した。

——ドンツ!

「うわっ!」

「くっ、す、すごいですね……」

両者の蹴りが激突した瞬間、思わず身構える程の衝撃と風が部屋全体に広がった。床にヒビが入り、窓ガラスが全部割れてシャンデリアも砕けて落ちてしまった。

それほどの衝撃を放った両者は、既にその場になく壁へとそれぞれ勢いよく弾き飛ばされていた。

あの勢いで壁にぶつかれば身体が頑丈な美鈴はともかく、能力が切れて気の強化を失ったユウキはただじやすまない!

私では受け止めるには体格が合わず、ユウキに怪我をさせる受け止め方になる。

パチエが魔法で受け止めようとしていたが、絶対に詠唱が間に合わない。

咲夜は時間を止めて間に合ったとしても、人間の身体では受け止めきれない。

ならば、今一番適任は……

「文！」

「お任せ下さい！ うぐつ！ こ、これは……キツイ、です」

言うより速く文は壁へと飛び、見事にユウキを受け止めた。ここまで一秒にも満たない時間だ。

「うっ……つつつ、ユ、ユウキさん……はっ、ユウキさん！」

「彼は大丈夫よ。全く、もう少しで大怪我する所だったじゃない。いくらあなたが頑丈でも、もっと気をつけなさい」

「す、すみません咲夜さん」

どうやら咲夜は時間を止めてユウキを助けようとしたけど、既に文が動いているのを知り、美鈴の方へと向かったようね。

「ユウキさん、大丈夫ですか？」

「はあ……ふう、ありがとな文。もう大丈夫だ。あの一撃に意識集中し過ぎて反動を考えてなかった」

ユウキの方も無事見たいね。体中ボロボロだけど、見かけよりは体力を消耗してないみたい。

それよりも、文が後ろから抱きつくように受け止めたのが、何か気に入らないわね。「これは貸しですよ。と言うわけでもうしばらくこの体勢でいますね。ユウキさんもお疲れでしょうし」

「あのなあ……少しは疲れたけど、気の力で自己回復しつつ戦ってたから問題はない。と言うか、離せ」

「嫌ですよ。それにこんな美少女に抱き付かれて嬉しいんじゃないですか？ 美鈴さんには負けませんが、私も結構胸大きいでしょ？ ほらほら、さっきだって美鈴さんの感触わかって「お兄ちゃん！」ゴフツ！」

ユウキを抱きしめていた文が不愉快な事言っていたけど、フランが文を突き飛ばすようにユウキに抱き付いた。

フラン、グツジョブ！

「お兄ちゃん、お兄ちゃん大丈夫!? 骨とか折れてない?」

「心配かけてごめんなフラン。俺は大丈夫だ、ほら身体もちやんと動くぞ?」

ユウキは涙目で抱き付くフランを降ろして身体を動かし、安心させた。

うーん、少し嫉妬するわね。もちろん、姉としてね?

「美鈴、大丈夫か? 加減しないと言ったけど、やりすぎちゃったな、悪い」

「い、いえいえ。私の方こそ全く加減しなくて全力でやっちゃいました。私の能力を

使つて、身体に変な所はありませんか？ だるさを感じたり、お腹がすいたりとかは？」
「いや、特にはないな。まあ、少しはお腹すいたけど運動したせいだろうし」

あなた、運動程度じゃ済まない事してたわよ？

「そうですか良かったです。気による身体強化を長時間使うとお腹が空いちやったり、身体が重くなったりと副作用出る事あるんですよ。だから長期戦には向きませんし、私自身も気の強化はここぞと言う時にしか使いません」

そうね。今見たいな時間なら大丈夫だけど、もう少し長く続けていたらユウキが先にダウンしていたでしょうね。

最後にアレは使つたのはまだパチエと出会つて少しの頃、私に挑んできた時ね。懐かしいわ。

「ユウキ、美鈴、見事な戦いぶりだったわ。お互い決定打が一度も当たつてないから、これは引き分けね」

「別に勝負をしていたわけじゃないんだけど？」

私は2人の健闘を称え、拍手をしながら降り立った。

けど、2人共微妙な顔をしているわね。

何かあつたのかしら？

「レミリア、お前今度は何を企んでいるんだ？」

「いきなり失礼ね。何の事よ？」

「お前がそんな笑み浮かべてる時って、絶対に何か良からぬ事考えている時なんだよな
あら、バレていたみたい。美鈴も苦笑いを浮かべているわね。」

「そう。じゃあ、もつたいぶる事はないわね。ユウキ、次は私と戦いなさい」

「あ、お姉様ズルイ！ 次は私が遊ぶ番だよ！」

「あなたは一度戦っているでしょ？ 私はまだユウキと弾幕ごっこすらした事ないのよ
？ だから姉である私に譲りなさい」

「お姉様こそ、可愛い妹に譲ってよ！」

予想していたけど、フランもユウキと戦いたがっていたのね。

見れば文ももじもじしながらユウキをみているし、あなたも戦いたいのね……

「お、おいおい俺は美鈴とやりあったばかりで疲れてるんだけど、また今度じゃダメか
？」

「そうですよ、お嬢様。ユウキさんを休ませてあげてください」

「ダメよ。明日には博麗神社に行っちゃうじゃない。だから、今日のうちに済ませたい
のよ。美鈴、あなたはユウキと2人きりの世界に入って楽しんでしようけど、私とフ
ランはあなた達の戦いを見せられて身体がうずいて仕方がないのよ。責任取ってもら
わよっ！」

「もうこの際だからレミイと妹様、美鈴とユウキの2対2で済ませたらどう?」

「それよ! ナイス、パチエ!」

それなら手間が省けるわね。主を差し置いてユウキと楽しんだ美鈴への八つ当た

……お仕置きも兼ねてね。

「ええ〜!!? 俺を殺す気かお前ら?!」

「それでは私がユウキ様の手伝いをいたします。それならお嬢様達へのハンデにはちよ
うどいいと思いますわ」

意外な伏兵、それは咲夜。疲労困憊のユウキと美鈴のフォローをするという名目で、
ユウキと一緒に私達と戦おうだなんて良い度胸してるじゃない。

「よおし、その挑戦乗ってあげようじゃない! いいわね、フラン?」

「私はお兄ちゃんと遊べればいいよ。美鈴と遊ぶのも久々だし、楽しみだよ」

「それではモノのついでと言う事で、私はレミアさん側に付きますね。それでちよう
ど3対3になりますし。よろしくお願いしますね、フランさん」

「うん、一緒に頑張ろうね、天狗のお姉さん」

このバカラス、ちゃっかり混ざりやがったわね。しかも、フランをダシにして私に参
加を認めさせようだなんて。

「ちよつと、あなたがそつちに付いたらユウキ側が圧倒的に不利じゃない。仕方ないわ

ね、私がユウキ達のサポートするからこれで戦力的には五分五分ね」

「あ、パチエー！ あなたいつもこういうのに混ざるの嫌がるじゃない！」

「いつもはいつも、今回は今回よ。ユウキ、私が魔法あなたを全力でサポートするわ。あなたは後方の憂いなく遠慮せずに、レミイをぶっ飛ばしてあげなさい」

おい、何だか趣旨がおかしくなってるぞ、親友!?

「……諦めた方がよろしいですよ、ユウキ様。終わったら私が精の出る料理と紅茶御用致しますから」

「咲夜さんの言う通りみたいです。ユウキさん、速くやって速く終わらせましょう。後で私がマツサージしてあげますから」

あっちもあっちでさり気なくユウキにアピールしているし。

それを見た文とフランが更にやる気に燃えているし。

そう言う私も何だか、ものすっごくイライラしてきたし！

ああ、もう！ いつから紅魔館はこんな桃色空気が蔓延するようになったのかしら!? 「分かった分かった。とつとと始めようぜ！ もう破れかぶれだ。やりたい相手は全員ぶっ飛ばしてやる！」

ほとんどやけばちになったユウキの叫びを合図に、4対3の弾幕なしの集団格闘戦が始まった。

この結果は……言いたくないわ。

文は今日の出来事を新聞にするのを止めて、フランはイライラのあまり私のおやつプリンを横取りしたり。

咲夜と美鈴とパチエは終わった後、ユウキの部屋で仲良く談笑していたりと、とにかく私的には散々だったわ。

けれど、とても楽しくて有意義な時を過ごせたのは、間違いないわね。

後日、霊夢が今日の一件を知り、お仕置きと言う名の妖怪退治にまたやってきた。

博麗の巫女としてこのルールをもう一度身体に叩きこんであげるわ。と、そう意気込んでだけど、あれは完全に八つ当たりだったわね。

つづく

第38話 「いども」

紅魔館滞在最終日。長くて短いような紅魔館での生活も今日の夕方に終わる。

夕方から博麗神社で宴会をするそうなので、紅魔館の皆と共に行く事になった。

なんでも、異変を起こした主犯格が飲み物や食べ物を用意する決まりらしく、咲夜は朝から妖精メイドに指示を出したり買物に出かけたりと忙しそうだ。

俺も手伝うと言ったが、咲夜に丁寧に断られた。

「今回の宴会は私達紅魔館が主催する事になっています。ですので、流石にユウキ様を手伝ってもらうわけにはいきません。家事も滞りないですし、大丈夫です……その気持ちだけで私は嬉しいわ、ありがとう」

と、笑顔で言われてしまったのは、流石にそれ以上は言えなかつた。

と言うわけで慌ただしい咲夜や妖精メイドの邪魔にならないようにと、紅魔館の外でジョギングをしていた。

昨日は久々にくたくたになるほど大暴れしたし、夜は遅くまで宴会があるから昼食は軽めの予定なので、それまでお腹を空かせる程度に走っていた。

「ユウキさん、流石に速いですね。館の周り結構距離あるのに」

「お、美鈴。昨日もしたけど、紅魔館って良い距離だな、なかなかいいジョギングになるよ」

「そうですね。長すぎず短すぎず、走りがいありますからね」

「美鈴なら幻想郷を一回りしても、まだまだ余裕なんじゃないか？」

「流石に疲れそうですね。幻想郷は狭いようではなかなか広いですよ？ 私は人里くらいしか行った事ありませんけど」

「意外だな美鈴は人里に行った事あるんだ」

「休日の時に、何度か行った事あります」

などと門で美鈴とそのまま話しこんでいると、館からフランが飛んで出てきた。

「おにいちゃーん、ジョギングおわたー!! 終わったならあそぼー!!」

「フラン、日傘ささないで大丈夫か!」

今日は雲一つない晴天……って、アレ？ いつの間にか紅魔館の周りだけ囲むように分厚い雲がかかっていた。

「パチュリーに頼んで雲出してもらったの！ これくらい暗ければ大丈夫だよ」

パチュリー何してんだよ。それにしても、雲……ねえ。やけに真つ黒い雲だな。どう見てもただの分厚い雲じゃないよな？

「……雲は雲でも、これ雨雲だぞ？ あ、降ってきた」

「えっ？ ええく!? わ、わわっ！ 痛い痛い！」

「フラン、体から煙出てるぞ!？」

「フランお嬢様!?! 大丈夫ですか!?!」

急いで上着を脱いでフランに被せて、館まで走った。

忘れかけていたが、フランはれっきとした吸血鬼で、日光だけじゃなく雨などの流水でもダメージを受けるんだったな。

それにしても……春が近いとはいえ外で上着を脱ぐと流石に寒いな。

「ううくもう！ パチュリーのバカ！ 外で遊びたいのに雨雲呼んでどうするのよ！ ちよつと文句行つてくる！」

「……レミリアお嬢様の入れ知恵でしょうか」

「流石にそれはないだろ。パチュリーがボケたんじゃないか?！」

命がけのボケとは思うけど。

その後どこかから、むきゅー！ と言う誰かの叫び声と共に雨は止み、ただの曇り空となつた所でフランが満足そうに帰つてきた。

「さつ、雨も止んだしお外で遊ぼう、お兄ちゃん、美鈴」

「……深く考えるのは止めましょう、ユウキさん」

「そうだな」

まさに悪魔の妹だ。

美鈴と2人、苦笑しながら曇り空の下フランと遊ぶ事にした。

それから少しして、何気なく空を見上げると何か黒い物体がこっちへと飛んできた。

「わは〜、ユウキ〜♪」

「ユウキさ〜ん!」

「ん? あれはルーミアか? 大ちゃんも一緒か」

黒い物体は能力を使っていたルーミアで、その後ろには大ちゃんも一緒に飛んできていた。

「っ!?!」

「フ、フランお嬢様?」

美鈴とフランも気付いたが、フランはすぐに美鈴の後ろに隠れてしまった。

「ルーミア、大ちゃん。ひさし……「ユウキ〜久しぶり〜!」「ユウキさん!」……え!!」

手を振って挨拶しようとしたら、2人揃ってそのままの勢いで抱きついてきた。

思わず転びそうになったが、どうにか堪えれた。

「会いたかったです!」

「わ〜い♪」

満面の笑みで見上げる大ちゃん、嬉しそうに頬ずりするルーミア。傍から見ればすごく俺がヤバイ凶になっていると思う。

でも正直少女に飛び付かれる経験などあるわけなく、何がなんだかさっぱり分らず、どうすればいいかと美鈴に目でSOSを出すと。

「ふふつ、頭を撫でてあげればどうですか?」

と、面白そうに笑いながら言ったので、とりあえず2人を優しく撫でて見た。

……これ、犯罪じゃないよな?

「わあ〜気持ちいいです」

「えへへ〜」

ん〜、ロリコン達が狂い死にそうな上目遣いの笑顔だな。

でも、確か2人共実年齢的には俺より結構上のはず……これが青ピの言っていた合法ロリと言う奴か?

ってそんな事よりも、さつきから物凄く睨まれているな、美鈴の背後に隠れているフランから。

「う〜……おにいちゃん!」

「フランお嬢様も行ってきたらどうですか?」

「えっ!? い、いや……その、そういうわけじゃ」

流石はレミリアの妹、そういう反応はそっくりだな。

「め、美鈴だつて羨ましそうに見てたでしょ！」

「私は流石に、頭を撫でられるような年頃ではありませんので」

苦笑しているが、どこかしら残念そうな顔をしているのは気のせいか？

「つと、そろそろ2人共離れてくれるか？」

「うん！」

やけにあつさり返事したな。てつきりもつと粘ると思つたのに……つて離れてないし！

「ユウキさん、暖かいからもう少しこのままで……」

「ユウキ……美味しそうな匂いするからこのままで……」

「おい、待てルーミア。どさくさに紛れて噛みつかうとするな。なんで2人共抱きついてきたりしたんだ？」

そこまで好かれるような事した記憶ないぞ。餌付けは……したか。

「しばらく寺子屋にも来なくてどうしたのかなと思つてたら、バカラ……文さんにユウキさんはここに居ると聞いて」

なるほど、あいつのおおかげか。それにしても、大ちゃん。今何を言いかけた？

「それで、会いたかった——と抱き付いてあげれば、きつとユウキは喜ぶから、と言つてた

からやってみたの！」

「なるほど……あのバ鴉のせいでしたか」

「今度会ったら……ヤキトリだね」

「美鈴もフランもそう怖い顔するな。まずは俺がぶちのめすのが先だろ」

「この2人がやったらそれだけで終わりそう、俺がお仕置き出来なさそうだ。」

「ユウキさん、嫌……でした？」

「むゝユウキが嫌なら離れるゝ」

「おいおいおい!? これもアイツが仕込んだのか!？」

「——パシヤパシヤ！」

ん? 今シヤッター音が聞こえたような?

「ふふふつ、これは良い写真が撮れ……」

「ぎゅつとして、どっかーん!!」

「きやあああゝ!? カメラが!？」

フランが木々の一角に手を向け、破壊の目を握りつぶすとバ鴉の音が聞こえたので、美鈴とフランに目配せした。

「ルーミア、大ちゃん、ちよつと待っててくれよな?」

「【禁忌・フォーオブアカインド】……からの!」

「クランベリートラップ」「レーヴァテイン」「カゴメカゴメ」「スターボウブレイク」
「過去を刻む時計」「カタディオプトリック」「495年の波紋」「フォービドウンフルー
ツ」

「芳華絢爛」「セラギネラ9」「彩光乱舞」

「これぞホントの弾幕だな。」

「えっ、ちよっつ、まっ!? 多い多い! 多すぎで……きゃあああ〜!」

「わあ〜、花火だ花火だ!」

「昼間から……花火? それに今、文さんが花火のド真ん中にいたような……」

悪は滅びた、一仕事終えた俺達は無言でハイタッチした。

「ところで、美鈴は知ってるけど、その子はだーれだ?」

「私も知らない子ですね。ユウキさんのお友達ですか?」

友達、と聞かれても……返事に困るな。

見るとフランは少しオドオドしながら、俺と美鈴を交互に見ている。

あーなるほど。500年近くも地下にいたせいで、少し人見知りになっているのか。

俺や霊夢達はともかく、自分と同じような見た目のルーミアや大ちゃんは珍しいのか

な?

「フランお嬢様、こう言う時はまずは自己紹介と挨拶ですよ?」

フランは美鈴に促されて、恥ずかしそうにルーミアと大ちゃんの前へいった。

「は、初めまして。フランドル・スカーレット……フランって呼んで」

「私は大妖精、みんなは大ちゃんって呼んでくれるよ」

「ルーミアだよ！ よろしくね、フラン」

大ちゃんとルーミアが差し出した手をフランは握ろうとしたが、少し躊躇して俺を見上げた。

「大丈夫。今のフランは誰の手も握れるさ。それでももしもの時は、俺がいる」

「っ、うん！」

ゆっくりと、フランは自分の右手をあげ、その手を取った。

もう1人の手が重なり、3人の手はしっかりと結ばれた。

「え、えへへ」

恥ずかしそうに笑うフランにつられて、ルーミアも大ちゃんも笑った。

「フランに新しい友達が出来て良かったな、美鈴……レミリア」

振り向かず背後に声をかけると、レミリアの声が返ってきた。

「……いつから気付いていたのよ」

「ルーミアと大ちゃんが来る直前、これでも気配を探るのは得意だぞ？ 例えそれが吸

血鬼でもな」

「そう言えば、何度も私達の気配に気付いた事あったわね。あなた本当に人間なの？」

当然美鈴もレミリアがこつそりと、フランの様子を窺っている事には気付いていた。

「レミリアお嬢様も隠れてないで、しっかり見ていればよろしいのに」

「ひよつとして、レミリアもあの輪に混ざりたかったのか？」

「そんなわけではないでしょ、あなたのおかげでフランがどこまで人見知りか治ったか、見た

かっただけよ。それに親友ならパチエと……あなたで十分よ、ユウキ」

「ははっ、そりやどうも。でもよ、妹の友達なら姉として挨拶しないとな？」

「へっ？ ちよつと、離しなさいよ！」

ドドンと腕組しているレミリアをつまみあげ、ルーミア達と話すフランの所へ行つた。

「ユウキくその手に持つてるの何？ おやつ？ 食べていい？」

「止めとけ止めとけ……レミリアじゃ物足りないだろ」

「んくそうだなー」

「おい。それは私が小さいと遠まわしで言っているのか？」

「あはは、お姉様面白い格好！」

フランフラン……プランプランとむすつとしておやつ、もといレミリア。

「あ、あんた達ねえ……こほん、私はレミリア・スカーレット。この紅魔館の主よ。そし

て、フランは私の妹、妹の友達になってくれて礼を言うわ」

「威厳たっぷりと言っている所なんだが、この体勢で言ってもただシユールなだけだな」

「うん」

「このままハンガーにかけて軒先に吊るせば、てるてる坊主の代わりになりそうだ。

「いい加減離しなさいよ！ その妖精！ 人の足をつつつくな！」

「わっ！ 生きてる！」

「生きてるって何よ!? さつき自己紹介したでしょ!? 私は腹話術人形か!」

「よしっ、今日の宴会でレミリアを使った腹話術を披露するか」

「しなくていいわよ！」

「さつきからツツコミに忙しいレミリア。ちなみにまだ俺はレミリアを摘まんだままだ。」

「レミリアお嬢様、楽しそうですね」

「これを見て心底そう思っているなら、その節穴な目玉引っこ抜いてあげるわ、美鈴」

「ここで何か物足りない。とと思っていた原因に気付いた。」

「そう言えば、チルノはどうしたんだ？」

「チルノちゃんはヒミツの特訓をしているそうで、もう少しで完成すると言っていましたよ、アレが」

「へえ、そうか、アレが完成するのか」

「はい、ユウキさんに見せるのが楽しみとも言っていましたよ」

「そうかそうか」

「?? 何の話？」

「お兄ちゃん？」

と、何の事か分からないルーミアとフランを秘密と指をたて、大ちゃんと2人で笑いあつた。

それからみんなで鬼ごっこをしたり、弾幕ごっこをしたりした。

ハンデと言う事でレミリア対俺ら全員と、半ば冗談で言ったらプチつときたレミリアを……フルボッコにした。

「そ、それじゃあ約束通り、私が負けたからルーミアと大ちゃんも昼食を一緒に取るのを許可するわ」

「「わーい！」」

弾幕ごっこをする時にムキになったレミリアが、負けたら昼食を御馳走するという約束をして見事に玉砕。

ルーミアはインデックス顔負けの大食らいなのに、多忙な咲夜は大丈夫かと思っただけ、咲夜は既に大量の料理を用意していたようだ。

相変わらず手際がいいのか、レミリアが負けるのを予想していたのか。

「流石レミリア。わざと負けてフランの友達を招待しやすくするなんて」

「わ、わざとなわけないでしょ！ 本気でやったわよ私は！」

「レミリアお嬢様……本気でやってボロ負けなんて、墓穴掘りまくってます」

「う、うるさいわね！ 美鈴、そう言うあなたも手加減抜きで撃ってきたじゃない！ 昨日も本気だったし、少しは主に華を持たせなさいよ！」

何だかこれ以上はレミリアのプライドが木っ端みじんになりそうなので、ルーミアや大ちゃんを交えた昼食会を始めた。

余談だけど、ルーミアと大ちゃんを見た咲夜とパチユリーがジト目で俺を睨んできたが、美鈴が事情を話すとそれならしょうがない。と何かを納得した。

更に、ルーミアと大ちゃんが文にたぶらかされて俺に抱き付いた事を知った2人が、その日の宴会で文をボッコボコにしていたのは……見なかった事にした。

昼食を終え、ルーミアと大ちゃんは帰って行った。

あの2人とチルノは他の友達と宴会に行くので、その時に沢山紹介すると言っていたので楽しみが1つ増えた。

フランは宴会に備えて眠ると行って自室に戻り、俺も少し休もうかと思っただが、レミ

リアに部屋へと呼ばれた。

「レミリア、一体何の用だ？」

「ユウキ、あなたのここでの生活は今日で終わりね」

「そうだな。この1週間は本当に楽しかった。レミリア達のおかげだ。ありがとう」

本気でそう思っていたので頭を下げると、レミリアは苦笑した。

「あなたと言う人は、全く。私があなたに礼を言いたかったのに……ま、その性格はわざとじゃなくて、地なのは良く分かったわ」

「フランの事なら、散々礼を言われたし十分すぎる恩返しももらった。これ以上もらうわけにはいかない」

レミリアはやれやれと溜息を吐き、右手をかざすと1つの大きな旅行カバンが現れた。

「じゃあこれは餞別よ。あなたのサイズに合う洋服と下着が入っているわ。幻想郷に来る前には紅魔館にも男の使用人やらがいて、それはその残りよ。外の世界とことは文化も年代も違うから、少し浮いた格好になるかもしれないけど、それは今着ている服でも同じでしょ？」

中身を開けてみると、色とりどりの現代向きの洋服と下着が折りたたまれて入っていた。

俺は紅魔館では寝巻以外は来た時と同じ服と、防寒着を着ていたがこれは咲夜が能力を使い洗濯をしてすぐに乾かしてくれたから、ほぼ毎日着れる事ができた。

慧音の所では和服を借りてきていたけど、あれはどうにも着なれていなくて違和感あつたな。

正直、これから服をどうしようかとは考えていたのでこれはありがたかった。

「おお、これは本当に助かるよ。ありがとう。って、これ俺がもらつていいのか？ レミリア達の大切な人とかの遺品じゃあ」

俺がそう聞くと、レミリアはおかしそうに笑つてこう答えた。

「あははは、あなたがそこまで気にしなくていいわよ。確かに遺品と言つていいモノもあるけど、それらは違うわ。ま、そこら辺は詮索しないでもらえると助かるわね。ただ、私たちの服の生地に使えそうと思つてとつておいたものだから、思い入れも何もないわ」「なら、遠慮なく貰つておくよ。じゃ、またあとで」

「ええまたあとで……つてちよちよつと！」

バックを手には部屋を出ようとすると、慌てたようにレミリアが椅子から部屋のドアの前まで飛んで、俺の行く手を塞いだ。

「ま、まだ話は終わつてないの、勝手に出ないでよ」

「ああ、悪かった……」

と、レミリアがまた自分の椅子に戻って仕切り直し。

「私がフランの事で礼を言ったけど、それはあの異変の事だけじゃないわ」

「ん？ あの時の事以外で俺は何もしてないぞ？」

むしろしきりにフランが俺の手伝いや世話を焼きたかがってたから、それこそ俺が礼を言う側だと思うけど。

「今日、フランがルーミア達と友達になれたのを見て思ったわ。もうフランは完全に癒されてるって」

「……………」

「495年もあの子は地下に閉じ込められた。それが誰の意思であろうと事実は変わらない。そこであの子は狂気に堕ちてしまった……けれども、あなたが救ってくれた。そして、この1週間であの子は友達が出来る程まで癒されたわ。それはあなたが普通に接してくれたおかげよ」

「普通に接した？」

意味があまりよくわからない。確かに普通に接したけど、そこまで意識しなかったし。それは誰にでも同じにだ。

「そう、フランは吸血鬼でかつあんな恐ろしい力を持っているのに、いくら狂気から解放されたとはいえ、あなたは何も億さず、1人の女の子として可愛がったり時には窘めた

りしてくれた。フランはその事で心が癒されたのよ」

か、可愛がったって物凄く語弊があるように思うけど……けど、それは。

「それは俺だけじゃないだろ。魔理沙だって霊夢だってそうだったろ」

「そうね。でも確かにあの2人もだけど、でも一番普通に接してくれて嬉しかったのは、間違いなくあなただわ」

か、体が痒くなってきた。なんだこの味わった事のない感覚は。

「……で、でもね。それは私も同じなのよ」

レミリアはきよろきよろとあたりを見渡すと、少し小声で話し始めた。

「あなたはフランだけじゃなく、私にもパチュリーにも咲夜にも美鈴にも、誰にも偏見を持たず平等に接してくれた。それが嬉しいのよ、私達は」

あーなるほど、普通は怖がったり意識したりとするはずが、まるで人間、同種の相手をしているかのように振る舞ったのが嬉しかったと……

ん、思えば俺かなりフランクすぎたな……

「それってただの無礼者じゃないか？ それに妖怪って言うのは人間に恐れられるのが普通で、それを糧にしてるんじゃないか？」

「礼儀も良識もない愚か者の事よそれは。でもあなたは違うわ。あなたは例え相手が人食い妖怪でも吸血鬼でも殺人鬼でも、誰にでも優しくして時に怒ったり一緒に笑ったりし

てくれる。それにね、恐れが糧にならない妖怪だっているのよ？ だからこそ、あなたに聞きたい」

そこでレミリアの目付きが変わった。その眼から表情は読めない。

「なぜ、あなたはここに来たの？ あなたのいた世界で、あなたに何があつたの？」

—ドクンツ

「あなたが幻想入りした理由はスキマ妖怪から聞いて、みんな知っているわ。けど、そこで私達はみんな疑問に思ったの……なぜ、ここまで他人に厳しくも優しいあなたが、自分のいた世界の人間に忘れ去られてしまったのか、とね」

—ドクンツ！

心臓の高鳴りが酷くなってきた。

「異変が解決して、スキマ妖怪がやって来た時に教えてもらったわ。勿論フランも聞いた。その時私も含めた紅魔館のみんなは驚いたわ。あなたは決して誰にも忘れられるような……そんな孤独な人間じゃないのに、なぜ？ とね」

「そ、それは……」

「フランなんて泣き出したのよ？ でも、霊夢が言ったの。あなたは自分のいた世界に拒絶された事を全く動じていない。私達が下手に騒ぐ方が動揺する。とね。私も同意見だったわ、だからみんな普通に接していたの」

そっか、普通に接していたのは、俺だけじゃなかった。俺もみんなから普通に接してくれていたのか。

「あなたの過去はきつと想像以上の辛いモノだと言うのは、容易に想像できる。あなたが過去に沢山人を殺してきたのもすぐに分かったわ。それでもあなたは……独りになるような人間じゃない」

—ドクンドクンドクン

嫌な汗が全身から溢れ出てくる。

「あなたは、色々な人を助けて救ってきた。私にはそれが分かる」

「それは能力で知ったのか？ だったら俺の過去も分かるんじゃないか？」

「私に見えるのは過去じゃない、あなたがどんな運命を導いてきたかだけ。あなたが色々な人を助けて、救ってきた、その事実だけ……そう、あなたは「ヒーロー」だった。なのに、あなたは忘れ去られた。その理由が私には見えない」

—ドクンドクンドクンツ……

ヒーロー……当麻、一方通行、浜面……

「うっ、ぐっ……あああぁ〜!!」

頭が、痛い。胸が裂ける……俺の身体が引き裂かれる……

「……私を見なさい、ユウキ」

「はっはっ、ふっ……はあはあ……」

息が、苦しい。何も見えない……

「目を開けて、私を見なさい……私を見るの！」

その声に全身が震えた。ゆっくりと息を整え、顔を上げるとすぐに近くにレミリアの顔があつた。

「無理をさせたわね、ごめんなさい。ユウキ、あなたがいた世界の事を忘れろとは言わな
いわ。でも、今のあなたが独りじやない事も忘れたらダメよ。あなたがいたこの1週間
とても楽しかったわ」

「……ああ、俺もとても楽しかったよ」

もう用は済んだのか、レミリアは俺に背を向けている。

息も整い、汗も引いた。宴会に行く前にシャワーを浴びさせてもらおう。ついでに、
もらった服を着てみるか。

「宴会に行く時に呼ぶわ。それまで休んでいなさい」

「……ありがとう」

レミリアが何をしたかつたのか、言葉には出来ないが何となく分かつた。

ここに咲夜もパチュリーもないのも、それが理由だろう。

「最後に一つ、言っておくことがあるわ」

部屋を出ようとした所で、レミリアに呼びとめられた。

ふり返ったが、レミリアは向こうを向いたままだ。

「博麗神社に行っても、たまにで構わないから遊びに来なさい……いえ、来てほしいの。私達はいつでも歓迎するわよ。あなたのせいで、紅魔館は変わった……これから先ずつと、あなたが死ぬまでその責任、取ってもらうからね」

振り向いたその顔は、これまで見た紅魔館の主でもなく、フランの姉でもない。見た目相応な、少女の眩しい笑顔だった。

つづく

第39話 「宴会Ⅰ」

日が暮れる前に俺はレミリア達と博麗神社にやってきた。

博麗神社に来るのも1週間とちよつとぶりなのに、かなり久々な気がする。

主催者側なので色々準備があるから早く来たけど、まだ誰も集まっていはいないうだ。

霊夢が1人で皿などの準備をしていたが、こつちに気付いて顔を向けた。

「久しぶり、霊夢」

「いらつしやい……まだ生きてたの。分かっていたけど、結構な大所帯ね」

「何だか霊夢、機嫌悪いな。こつちをチラ見ただけだ。」

「まだみんな来てないけど、準備は手伝つてよ」

「勿論よ。台所借りるわね」

「勝手に使つて、こつちよ」

「霊夢はそれだけ言つて、咲夜を連れて奥へと引つ込んでしまった。」

「ねえ、美鈴。霊夢何だか機嫌悪いね」

「そうですね。何となく心当たりありますけど」

「美鈴は苦笑してフランに答えたが、何の事か俺には分からない。」

レミリアとパチュリーも分かっているようで、2人して溜息をついてる。

「言わぬが華、よ」

「霊夢も素直じゃないわねーまるで誰かさんみたい、ねえレミイ?」

「さーて、私にはなんの事だか分からないわね」

「2人共何の話してるんだ?」

「乙女の秘密よ」

本当に分からない。でも、考えても仕方ない。俺も何か手伝いするか。

「博麗の巫女もまだまだ子供、だったのね」

台所で咲夜と2人で料理していると、咲夜が急に笑いだした。

「それどういう意味よ」

「言葉通りよ」

本当におかしそうに笑う咲夜。

会うのは1週間ぶりだけど、こうまで愛想が良いメイドだったかしら?

あの時はメイド長と呼ぶにふさわしい厳格で、厳しい表情ばかりだったのに。

考えたくはないけど、原因は彼なのかしら。

「この一週間とても充実していたようね」

「あら、分かるかしら？ とても楽しかったわよ。それは私だけじゃなくて紅魔館のみんながでしょうけど」

皮肉のつもりなのに、あっさりと返された。何だか悔しい。

「散々心配してたのに、当の本人は女の子を沢山引き連れて楽しそうだったのが癪に障った、ようするに嫉妬した。でいいわよね？」

「そんなわけないでしょ。何でそんな事言うのよ」

イライラするわね。私が名前しか知らない相手にそこまでするわけないでしょ。

でも咲夜は面白そうに笑ったままだ。

「別に。異変の時は散々お世話になったから、ちよつとしたお返しよ」

異変の時、私は咲夜と戦った。面倒な能力だったけど、返り討ちにしたのを今思い出したわ。

「なんて、これは冗談だけど。あまり無愛想すぎると、彼出ていっちゃうわよ？ まあその場合、紅魔館で引き取りますけど。お嬢様達も みんな 喜ぶわ」

さつきもそうだけど、咲夜はわざと『みんな』と言う部分を強調して言っている。

「言っておくけど、ルーミアと大妖精とチルノにもかなり慕われてるわよ？ 懐かれると言った方がいいかしら？」

咲夜の意味深な笑みにイライラが頂点になりそう。

本当に何が言いたいのよ。

「あら、そのイライラは私に對してかしら？ それとも彼に對してかしら？」

「本当にあんた性格悪いわね！」

「そんな事あなたに思われても、彼は私をそうは思つてないから何ともないわ」

……おーけー、ここまで我慢したんだから挑発に乗つてもいいわよね？

「……お前ら一体何してるんだよ」

と、そこへいつから居たのか、藤原妹紅が呆れたように声をかけてきた。彼女の手にはタケノコや山菜がびっしり乗った籠があった。

冬用に蓄えていたのを持ってきてくれたのかしら？

「あなたはこの前の。それは手土産ね？ ありがとう、助かるわ。その辺に置いといてくれれば、私が調理するわ」

「ん、この前は料理御馳走様。じゃあ、あとはお願ひね、紅魔のメイドさん。もう少ししたら慧音も来る筈よ」

「そう言えば自己紹介してなかったわね。私は十六夜咲夜、咲夜でいいわ」

「咲夜、か。私はこの前言ったけど、藤原妹紅。妹紅でいい。咲夜、何だか雰囲気が変わったな」

「そう見えるかしら？ そう見えるなら、多分妹紅もこれから変わるんじゃないかしら」

？」

「あの外来人か……」

妹紅は何だか複雑そうな顔をして、神社の方にいるであろう彼の方へ目を向けた。

……つて、ちよつと待ちささない。ここ私の家の台所で、私が家主なのよね。なんで咲夜が対応するのよ。

何でいきなり2人共仲良くなってるわけ？

「あんた達、家主の私を置いて勝手に話進めるな！ まあ、一応御馳走様」

「霊夢はさつきから何をカリカリしてるんだ？」

「さあ？ 難しい年頃なんですよ」

「あんたもあまり変わらないうじゃない！」

ああ、もうイライラする！

「ところで、今日からここに住むユウキさんを部屋に案内しなくていいの？ それとも忘れてた？ 薄情ね」

「そんなわけないでしょ！ これから案内するわよ。あんたがちよつかい出してきたんでしょ！」

「お前ら、紅魔館でもだけど、ホント何してるんだよ……」

妹紅が心底呆れかえっているけど、それはこっちのセリフよ。

「なんだか台所騒がしいな。俺も手伝った方がいいかな？」

「止めておきなさい。もつと騒がしい事になるわよ？ それにあなたは主賓なんだから、ここにいないとダメじゃない」

レミリアに言われて、座りなおしたけど……主賓つて何だ？

「言つてなかったかしら？ 今回の宴会はあなたの歓迎会でもあるのよ？」

はっ!? 何だそりゃ!?

「君は幻想郷の新しい住民になったんだ。当然だろう？」

どこかで聞いた声にふり返ると、そこには慧音が立っていた。

「あつ、慧音……悪い、心配かけたな」

正直、慧音には罪悪感と言うか、後ろめたい気持ちが強い。

「ふふつ、そうだな。心配したさ、ふんっ！」

——ゴンツ

くくっ!?

慧音が笑顔で近づいてきたかと思えば、突然頭突きされた。

結構効いたな。石頭は性格だけじゃなかったか。

「大丈夫お兄ちゃん!? ちょっと、あなた。お兄ちゃんに何するの!」

フランが慧音に飛びかかろうとするのを、手で制した。

「いい、いやいいんだ、フラン。これは俺が悪かったんだから」

慧音はわざわざ妹紅の様子を見に来させる程、俺を心配してくれた。

オルソラ並に世話の焼きたがりだな。

「本当に、心配したんだぞ。でも、無事で良かった」

実際には大怪我したんだが……言わない方がいいな。

「博麗神社に住む事にしたと聞いたが、寺子屋の手伝いもして欲しいんだが……」

「妹紅から伝言で聞いた。俺で良ければ、手伝わせてくれ。神社の手伝いもするから、空いた時にだけど」

「そうしてくれ。梨奈も君に会いたがっていたぞ?」

要するに早く来いって事か。

「……はあ、早めに顔を出すようにするよ」

「そうしてあげてくれ。それで、この子があの時君を呼んだ子か? はじめまして、私は

上白沢慧音。よろしく」

慧音はフランに微笑みかけるが、まだフランは睨んだままだ。そこまで警戒してるのか?
か?

レミリアがそれを見て、クスクス笑いながら慧音に話しかけた。

「ふふつ、そう警戒しなくて大丈夫よ、フラン。慧音、私の名はレミリア・スカーレット、この子はフランドール・スカーレット、私の妹よ」

「私は上白沢 慧音だ。君達の事は、霊夢や妹紅から話は聞いているよ。先に言っておくが、先の異変についてどうこう言うつもりはない。それは博麗の巫女である霊夢の仕事だからな。もちろん、フランドールの事もだ」

「それは助かるわ」

あの異変は人里にも影響が出たが、霊夢がレミリアを倒した事で、あの夜のうちに霧が消えていつもの生活に戻ったのは聞いている。

幻想郷に住む人間として、そういうのには慣れているから問題はない。とあの時妹紅も言っていたけど、フランの能力の事もあるから、レミリアなりに少しは気にしていたのだろう。

慧音にそう言われ、少しレミリアの力が抜けた気がする。

「フランドールの能力にもどうこう言うつもりはない……が、彼女を寺子屋に通わせる気はないか？」

「? どういうつもり?」

慧音に突然言われ、レミリアも少し眉をひそめ、パチュリーや美鈴も驚いている。

「いや、フランドールの事は妹紅に聞いたが、ルーミア達からも聞いているのでな。新し

い友達が出来たと喜んでいたよ」

そう言えばルーミアも寺子屋に通ってたっけな。本人の気が向いた時にだけけど。フランの方に目を向けると、少しばかり興味がわいたような目をしていた。

それを見たレミリアも少し考え込んだ。

なぜか俺とフランを交互に見ている。何となくだが、何を考えているか予想つく。それでフランも寺子屋に？ そうね、ユウキがいるなら大丈夫でしょうし悪くはない話だけど、今すぐには答えは出せないわよ？」

「分かっている。気が向いたときで構わないさ。里の子達にも強制はしてはいないと、そこへ霊夢がやってきた。さっきよりもイライラしてるぞ？」

「ユウキさん、部屋に案内するからこっちへ来て」

それだけ言うと神社の奥へと歩いて行ってしまった。

「ほら、巫女様のご指名よ」

「そう言えば、俺今日からここで住むんだよな、あまり実感なかった」

宴会に参加しに来ただけ、じゃない。

今日から世話になる家に戻ってきたんだ。

……やっぱり何か実感沸かないな。

「君は本当に変わったな。そんな顔をするようになるとはね」

慧音が少し驚いているが、そんな顔ってどんな顔だ？

「……フランや美鈴達のおかげだ」

そこは私の名を出しなさいよ。と言う声が聞こえたが、構わず霊夢の後を追った。

霊夢に案内されたのは、神社から渡り廊下を歩いた先にある一角だ。

中は意外と広く、畳が敷き詰められた和室になっている。

「元は物置代わりに使ってたけど、あまり物置いてなかったからここを使って。一応掃除もしたし、紫も手を入れたから大丈夫なはずよ」

旅人や外来人などを泊める客間はあるらしいが、俺はここに住む事になるのでちゃんと部屋を用意したらしい。

「これで物置代わり？ 軽く掃除した程度？ 質素だけど、かなり手入されてるように見えるな。まあ、和室なんてあまり見た事ないから分からないけど、これで十分すぎる。ありがとう、霊夢」

礼を言ったら、なぜか霊夢が額に手を当てる。なんかのおまじないか？

「……食事とか掃除の事とか、色々話す事はあるけど、それは明日にしましょ。もう、みんな来ちゃったみたいだし」

確かに、人……いや、妖怪達が増えたようだ。宴会場の方が騒がしくなってきた。僅

かに魔理沙やチルノの声も聞こえてきた。

「ほら、行きましよ。主役が遅れたらダメじゃない」

「主役、ねえ……」

歓迎会、ただでさえ宴会とか集会の経験全くないのに、紅魔館で大人数で騒ぐのには少しは慣れたけど。

「歓迎会と言つても、それは名目上と言うだけよ、ただ飲んで騒ぎたいバカばかりだから、そう固くなる事ないわよ」

「そっちの方が俺としては、気が楽だ」

苦笑いを浮かべると、霊夢は何がおかしかったのかクスクスと笑い出した。

「何笑ってるんだ？」

「何でもないわ。さ、行きましよ」

荷物を置いて、宴会場へと戻った。

この感じだと結構な数いそうだけど……さて、どうなるやら。

ともかく、霊夢の機嫌が直ったようでそれは良かった、か。

つづく

第40話 「宴会Ⅱ」

宴会は誰が音頭を取ったわけでもなく、いつの間にか始まっていた。

と言つても、宴会なんて縁がない俺はどういうのが始まりの合図か、なんて知つてもいないけど。

なぜか文が咲夜やパチュリー達に腕を掴まれ、外へと引きずり出されていたけど、あれは無視だ。

皆それぞれで飲んでるので、俺はどうしようかと入り口で思っていると。

「適当に挨拶してきなさいよ。半分以上は初対面でしょ？」

と霊夢に促され、適当に輪に入る事にしようとする、ちやうどフランや大ちゃん達と騒いでいるチルノと視線があつた。

フランもチルノグループに馴染んでいるようで、少し安心した。

「ユウキ〜！」

言うが早いかチルノが文字通り飛んできた。

ほんのり顔が赤いが、酒を飲んでるようだ。

見た目はどう見ても未成年だが、妖精に年齢制限はないか。

「よつ、チルノ。フランも、大ちゃん達と楽しんでるようだな」

「お兄ちゃん、おそーい！ はい、ここ座って」

「ありがとな、フラン」

フランが場所を開けてくれたので、そこに座ると早速チルノがお酒を持ってきた。

「へへつ、ユウキも飲も飲も！」

「あもらうよ。チルノ、かなり酔っぱらってないか？」

「ん〜いつもこうだよ？ あたいはお酒でもさいきよーなんだ！」

こーいうのを出来あがっている、と言うのだろうな。

たまーに尼視や数多達に付き合わされた事あったしな……あれは地獄だった。

ともかく、チルノについてももらった酒を飲む。

「お兄ちゃん良い飲みっぷり！」

「そうか？ あまり酒は飲まないけどな」

恐らく日本酒だろうが、あまり飲んだ事のない味だな。

「ジーーー」

「ん？」

ジーと擬音を呟く声が聞こえたので見てみると、頭にアホ毛みたいな触角を生やした子と、羽飾りのついた帽子をかぶった子がこつちを見ていた。

この子達が前、チルノが言っていた友達の残り2人か。

「2人とも、見てないでちゃんと挨拶しないとダメだよ」

「あーそうだね。私はミステイア・ローレイだよ。よろしくね、おにいさん」

「私はリグル・ナイトバグだよ、おにいさん」

「ミステイアは雀、リグルは蜚の妖怪だったな。確かにそれぞれそれぞれらしい特徴はあるな。」

「俺はユウキだ。で、なんでミステイアとリグルは俺をお兄さんと？」

別に茶化しているわけでもなく、自然にそう呼ばれた。

実年齢的には俺の方が下だと思うが。

「えっ？ いやだった？ フランがそう呼んでるから……何となく？ あ、私はみす

ちーでいいよ。ミステイアってあまり呼ばれないし」

何となくで呼んでいたのか、みすちーの方が呼びにくい気もするけど、本人が良いならいいか。

「私もユウキさんって呼ぶより、こつちの方が呼びやすいから。ダメなら普通に呼ぶよ？」

「えー、お兄ちゃんはお兄ちゃんだよー」

今更だけど、本当に今更だけど、お兄さんとかお兄ちゃんって呼ばれる事がすごく違

和感が、というか恥ずかしくなってきたな。

フランに呼ばれた時はあまり気にしてなかったのに。

「じゃあ、私もお兄さんと、あ、お兄様の方がいいですか？」

「大ちゃん？　なんだか趣旨が違ってきてる気がするぞ？」

「とりあえずその上目遣いで言うのは止めてほしい。」

「あたいは、にいちちゃんと呼ぶ！」

「それじゃあ、私は……兄貴！」

「チルノとルーミアまで何を言いだすんだ!？」

「何だか変な方向にいってる気がするんだけど……」

「おにいさんだと代わり映えしないよね。ん〜じゃあ私は兄さん!」

「みすちーが言うと、更に変な方向に話が進んで行つた。」

「だったら私も変えた方がいいよね。兄様かな？」

「あ、それいいね。リグル、私が兄様って呼ぶから、リグルはお兄ちゃんです！」

「でもでも、兄様だと大ちゃんと何だか被らない？」

「兄貴は私だけのものー」

「ルーミア、その言い方は完全に誤解を招くから止めてくれ、ホント」

「そーなのかー」

何これ？ 俺の呼び方についてあーだこーだと議論始めたちびっこ達。止めた方がいいのだろうけど、どう止めればいいんだ？

何だか頭痛くなってきた。

「ははっ、大人気だね、ユウキ君」

額に手を当て困惑していると、背後から声がかげられた。

ふり返るとそこには、凜とした佇まいの金髪の女性が立っていた。

慧音のような知的な大人の女性に見えるが、その眼差しは強く優しい。

当麻の好きそうな年上の管理人さんタイプだな。

何より、背中から見える狐のような、9本の見事な尻尾に目を奪われる。

見ただけで毛並みもよく、ふわふわした肌触りだろうと分かる。

「ん？ 私の顔に何か付いているかな？」

「……あ、いえ、えっと、あなたは？」

ほんの少しだけ見惚れてしまった、不覚。

「おっと、これは失礼。直接は会った事はなかったね。私は八雲藍。紫様の式神だ、今日は主に代わってここへ来たんだよ、以後よろしく」

紫の式神か、元春のに比べたら……いや、比べるまでもないと言うか、比べるのは失

礼だな。

元春にこんな美女な式神がいたら、当麻達が鉄拳制裁加える所じやなさそうだな。それに主に代わってって事は、紫は来ないのか。

「紫様は本来この時期では冬眠している。今年は色々あつて中途半端に起きた為、もう少し休みたいのだそうだな」

起こされた理由は間違いなく俺だろうな。でも正直、安心した。出来れば紫には会いたくないからな。

それが顔に出ていたのか、藍は俺をみて苦笑いを浮かべた。

「そう邪険にしないでくれ。アレでも私の主なのだ。気持ちは……分かるが」

「いいのかよ。そんな事言つて」

「構わないさ、今日は無礼講だ」

今ので分かった。藍はかなりの苦勞人だな、主に紫のせいだ。

その時、藍の背中から猫の尻尾が2本飛び出してきたかと思つたら、勢いよく誰かが飛び出してきた。

「にやにやーん！ 私は橙だよ、藍様の式神です！」

藍の後ろから元氣よく飛び出してきたのは、猫がそのまま女の子になったような子だ。

式神の式神なんて言うのもあるのか、まあ式神自体俺はあまり詳しくないけどな。

橙は藍と同じく帽子を被っているが、それで隠す気がないようにネコミミがくつきり見える。

猫の尻尾が2本あると言う事は、猫又と言う奴か？

「よろしく、橙、藍さん」

「はい、よろしくお願ひします！」

「ふふつ、私の事は藍で構わないよ、ユウキ君」

思わず藍をさん付けで呼んでしまった。

「あ、橙久しぶり〜！」

「待ってたんだよー」

「チルノちゃん、大ちゃんも久しぶり〜！ そっちの子はフランちゃんだね」

「あれ？ 私を知ってるの？」

「紫様や藍様から聞いてるよ。仲良くしてね」

「うん！」

どうやら橙はチルノ達とは友達のように、もう子供達だけで輪になって騒いでいる。

フランも友達が増えて嬉しそうだ。

「あの子も、君のおかげであそこまで明るくなるとは。君はすごいな」

藍はフランを見て感心したように呟いた。紫の式神ならフランの事も知ってて当然

か。

「もう耳にタコができるくらい言われたけど、フランの事はレミリア達が家族として接したから俺はあまり何もしてない」

「ふふっ、そういう事にしておこう」

藍は口元を袖で隠すように小さく笑った。その仕草がどことなく時代劇などでみた昔の貴族みたいで、上品だな。

それにしても藍は見事な尻尾だ。ん、なら頭に被っている帽子はもしや？

「私の頭がどうかしたのかい？ ああ、帽子の中が気になるのかな？」

「ああ、その尻尾といいその帽子の下にはひよつとして？」

俺は正直に言った。まるで何かを隠すような形をした帽子。

その下にあると思われるものが気になった。

「君が思う通り、この帽子の下はこの通りだよ」

藍は帽子を脱ぐと、そこには立派な獣耳が生えていた。

「この耳といい尻尾といい、藍は九尾の狐？」

「異世界から来た君でも分かるとはね。私は九尾の狐妖怪だよ。と言つても、伝説にあるような狐妖怪とは別物だけだね」

この世界の伝説の九尾妖怪がどういふのかは知らないけど、俺のいた世界では伝承と

して残っているのを見た事がある。

青ピに擬人化萌えキャラと語っている中にも狐のはあつたしな。

学園都市で秋沙の一件が済んだ後にそういう類の伝承を少し調査してみると、九尾の狐の情報が少しあつたので知っている。

でも、本物に会えるのは少し感激だな。

「どうかしたのかい？ 何だか感激しているようだけどう？」

そんな俺を藍は不思議そうに見つめる。

思えば、俺は天狗とか吸血鬼をイヤって程見ているけど、何だか藍は別格だな。

「こういう言い方は変かもしれないけど、何だか初めて妖怪らしい妖怪に会えた気がしたからさ」

「妖怪らしい妖怪？ ふつ、はははつ、君は面白い事を言うんだな」

藍は少し首を傾げ、さつきとは違い心の底からおかしそうに笑った。

「ちよつと待ちなさい（待って下さい）！」

それを聞いてレミリアや、いつの間にか復活していた文がなぜか抗議の声をあげて俺に詰め寄ってきた。

その後ろでは霊夢や咲夜はなぜか呆れかえった顔しているし、妹紅や魔理沙は笑い転げている。

他にもおかしそうに笑ったり、あ然とした顔してるのがいるな。

参加者8割以上が妖怪のこの場で、今のは流石にまずかったかな？

「今のは聞き捨てなりません！ ユウキさん、私の綺麗な翼も色々散々見ているのに。何ですか、私妖怪に見られてませんか!? そう言えば最初に会った時に、はっきりと私は天狗と言ったのに反応薄かったですよね!？」

「私もよ。あなたには私がどう見えていたのか、この際はずきり聞かせてもらいましょうか!? 確かに普通に接してくれたのは嬉しかったけど、でも流石に吸血鬼として見られていなかったとしたら……どうなの、ユウキ!」

どうやら天狗や吸血鬼のプライドが傷ついたみたいだ。

「ユウキさん、あなた最初に狼妖怪に追われていたじゃない。まさかあの時緊張感なかったのって……ただの狼だと思ってたの?」

霊夢がジト目で睨みながら言ってきたけど、半分正解かな。

「今だから言うけど、アレただの大きな狼だと思ってた……」

今の霊夢は、まさに空いた口が塞がらないと言った感じだな。

咲夜と美鈴が肩に手を置いて、慰めてるようだけど、そこまで呆れるかな、いや、呆れるか。

確かに日本じゃ狼絶滅してるけど、ロシアであれよりふた周り程小さい狼に襲われた

し。

「だからって私はどうなんですか!? 見てくださいよ、この黒くて大きな翼! 何度もこれ見たじゃないですか!」

「私だつてそうよ!」

文は普段は仕舞つている翼を広げ、負けじとレミリアも隠してもいない翼を広げた。本人は威厳を出しているつもりだろうけど、後ろでフランやみすちーが力いっぱい翼を広げているので微笑ましい絵になっている。

「それはな……元いた世界で能力やら魔法やらで翼を出せる奴ら沢山いたから、正直翼があるから、何? と言う感じ。でもフランの羽は宝石のように綺麗で、神秘的だったな」

「んなつ!」

「わーい、神秘的神秘的♪」

まるで弾幕に被弾したように撃墜された、文とレミリア。

そして、フランは嬉しそうに羽をパタパタさせている。

あ、パチュリーが笑い過ぎてむせて顔が真っ青になつてる。

無機質な羽や鳥みたいな羽も見たし、帝督の能力とかで俺自身も羽生やした事あるし。

それに何より、本物の天使の羽も見ちゃったんだよな。

「ルーミアみたいにも能力持って空飛ぶなんてのも、元いた世界で結構見たし。美鈴は妖怪らしいの強さ以外ないし」

闇を操ると言っても、暗くするだけしか見ていないから視覚妨害系の能力者は何人も知ってる。

それに美鈴に至っては、外見は人間と変わらない。

パチュリーは魔女と言っても、ステイルの弟子たちの方が魔女っぽい服装していた。

「そーなのかー」

「たはは、確かに妖怪らしくないとはよく言われます」

ルーミアは残念そうな顔をして、美鈴は苦笑いを浮かべた。

「あたいや大ちゃんは!？」

「2人は妖怪じゃなくて、妖精だろ?」

「あ、そっか」

これで納得するのか……正直、自分でも何言ってるか分からないのに。

と、肩をチョンチョンとつつかれ後ろを向くと、橙とこあが何かを期待するような目で俺を見ていた。

「あの、橙はどうですか?」

「私、私なんて羽だけじゃなくて頭にも、生えてますよ!? 橙ちゃんもですけど」
ものすつごく目をキラキラさせている。2人には悪いけど、ここまできたら変に期待させずに思いつきり言った方がいいか。

「ごめん、2人共。ネコミミや悪魔っぽい服装、見慣れてる……と言うか、コスプレとして有名な服装だし」

主に青ピと元春のせいで、雑誌で散々見慣れてしまった。

猫耳に関しては、海鳥が番外個体に尻尾も付けられている実物を見たからなあ。

と言うか、こあは悪魔っぽくないんだよなあ、パチユリーを散々いじってる点は悪魔っぽいけど。

「ぎ、残念無念ですう〜」

やられたーとばかりに大きさに倒れ込む2人。いつの間にコンビを組んだんだ？

「残念だったな、橙。でもユウキ君、ならばなぜ私を妖怪らしいと？ この尻尾や耳も見慣れているのではないのかい？」

藍は当然の疑問を口にした。

「ん〜昔の人が描いた絵で九尾の狐は見た事あるけど、狐耳や尻尾を付けてる人は見た事ないな。あー、後は……」

頭に浮かんだ理由を言いかけた所で止めた。

これは言えばとつても恥ずかしい理由だからだ。

「後は、一体何なのよ!？」

「そうです。ここまで言ったなら全部白状して下さい!」

よほどシヨックだったのか、半分涙目な文とレミリアに詰め寄られた。

「お、お前ら顔近い顔近い! それに大した理由じゃないから!」

「いいから言いなさい!」

尚も食い付く2人、藍も聞きたそうな顔をしてるし、霊夢と咲夜は諦めろと目で言うているし……仕方ないか。

「……俺、狐好きなんだよ」

「「はっ!」」

「だから! 俺は動物の中で狐が一番好きなんだっての! 猫や犬も好きだけど、たまに実物見て、気に入ったんだよ。ただ、それだけ……」

うわあ、めっちゃ恥ずかしい! つてかこれ当麻や尼視すら知らない事だったのに!

「そうかそうか、ユウキ君は狐が好きなのか。これは良い事を聞いたな」

「藍様、良かったですね。でも、猫も好きだって言ってくれましたよ」

「良いなー2人共、でも私も羽を褒めてくれたからいっつか♪」

藍や橙達は上機嫌で喜び、文とレミリアは少し固まった後思いつきり叫んだ。

「な、何よそれー!？」

うん、俺も狐好きを気付いた時はそう思った……

つづく

第41話 「宴会Ⅲ」

真つ白になったレミリアと文をほつといて、他に誰が来ているかと宴会を見渡して
みる。

するとこつちを手招きしている作業服っぽい服と、やけに現代風な帽子を被った青髪
の少女が見えた。

「おーい、こつちこつちー」

手招きされた方へ行くと、一緒にいた栗色の髪を紫のリボンでツイントールに纏めた
少女が俺の顔を興味深そうに見ていた。

「ちよつとはたて、いきなりそんなガン見は失礼だって。あ、ごめんごめん。私の名前は
河城にとり、見ての通り河童だよ」

いや、どこが見ての通りか分からないけど、とにかく河童と言う事か。

河童……頭に皿がある、キュウリ好きな妖怪だっけ。

なら、彼女の帽子の下には藍の獣耳のように皿が隠れているのかな？

「ん？ 私の帽子の下も見たいのかな？ へっへっへっ、秘密だよ♪」

酒に酔っているらしく、にとりは頬を染めてかなり上機嫌だった。

「はあい、こんばんは。あなたが文お気に入り外来人さんね。私の名前は姫海棠はたて、文と同じ鴉天狗。よろしくねー」

で、さつきから俺をジロジロ見ているのが、同じく酔っ払っている鴉天狗のはたてか。にとりはともかく、はたての方は関わりと面倒そうだ。

「俺は知っていると思うけど、ユウキだ。よろしく……って文お気に入りのはたてか？」
「文字通りの意味よ。最近文はあなたの事ばかり言っているのよ。それに、さつきもあそこまで文を取り乱させたり真っ白にしたり、なかなか見られない光景だったわ」
「あれは笑ったね。まさか、天狗に向かって妖怪らしくないなんて」

さつき笑い転がっていたのこの2人か。

「あーでも私も河童らしくないしね。外の世界での河童や天狗が描かれた本見た事あるけど、すごくゲテモノに描かれてたねえ」

「そうだな。文やレミアもだけど、にとりやはたても妖怪に見えない可愛い女の子だもんね」

「ひゅい!!? わ、私をおだてても何も出ないよ? 帽子取ればいいかな!」

何やらにとりが急に慌てふためきだしたぞ?

ん、何か寒気してきた……誰かに睨まれてる? 殺気?

「あははははははっ、あなたやっぱり最高に面白いわ! あんたも落ち着きなさいってに

とり。まー私も可愛い言われて嬉しいけどねー。で、文は確かに私から見ても天狗らしくないわね。人間と積極的に関わっているし」

そう言つて、はたては再度俺を舐めまわすように見た。

「ふーん、確かにいい男ね。度胸もあるし、強いし。文に興味ないなら、私とどう？
なーんて……ヒイツ!？」

はたてが冗談で言つた途端、突然顔が真っ青になり震えあがつた。

色々な所からさっきの倍以上の殺気が向けられたみたいだけど、具体的に誰からかは分からないな。

皆、冗談と分かつてなかつたのか、それともそういうフリだと思つたのか？

「はたて、あんたも相当度胸あるよ、この場でそんな事言うなんて」

酔いが覚めたのか、急ににとりが真顔になりはたての背後を指さした。

「はくたくてく、ちよつと向こうでOHANASHIしましようか♪」

「文、いつの間に復活したの!? 怖い、顔怖い! それに耳引つ張らないで、痛い! 冗談だから、あんたの片思い人は取らないから!」

「この! 言うに事欠いて片思いというなあ!」

復活した文に尖がつた耳を引つ張られて、はたては悲鳴をあげながら外へ連れ出された。

「さーって、鴉鍋って美味しいのかしら」

「あ、あれ？　なんで霊夢も付いてくるのよ!?　それに鴉鍋なら文がいるでしょ、文が！」

「私よりアンタの方が肉付きいいでしょ。一部の肉はほとんどないけど」

「ちよつと待ちなさい。どこを見て言ってるのよ！　その巫女よりはあるわよ！」

「よし、その挑発乗った！　これでも着痩せするのよ、私は！」

なぜか霊夢までも参戦して、はたては文と霊夢に足を引つ張られ退場した。

その時、助けを求めるような目をこっちに向けた気がしたけど、気のせいだよな。

それから外から女の子の悲鳴や爆音が聞こえてきたけど、誰も気に止めてないからこれも気のせいだな、うん。

「はははっ、君もなかなか気苦労が絶えなさそうだね」

男の声が聞こえたので振り向くと、白髪にメガネをかけた青年が俺の隣に座った。

「ん？　僕の顔に何か……ああ、申し訳ない。僕の名前は森近霖之助。よろしく、ユウキ君」

「男に君付けされた事ないから、呼び捨てでいい。俺も霖之助って呼ばせてもらおうよ」

「了解した。僕も呼び捨ての方が気が楽でいい。しかし、君はとても変わっているし、珍しいタイプだね。外人は何回か見てるけど、こいつも早くみんなに馴染んでいるのは見

た事がないよ」

霊夢も慧音も言っていたか、外来人は大抵取りみだすか絶望するって。

別に馴染んだとかじゃないけど、普通にしてるだけだしな。

「そういう霖之助もこの中じゃ珍しいな。正直、女の子ばかりで男がいるとは思わなかった」

俺が気になったのはそこだ。人里では男は見かけたけど、それ以外じゃあまり見かけない。

紅魔館でも昔は男がいたけど、今は女の子ばかりだしな。

「もう慣れたよ。こーう見えて結構彼女達と付き合い長くてね。悲しい事にあまり男扱いされてないとも言えるけど」

と言いつつも悲しそうに見えない。こんな個性的な女性の中でも全く臆していない所を見ると、それなりに人生経験があるのだろう。

霖之助は慧音と似たような感じがするが、半妖か？

まあ、慧音は半人半妖と言うか、半人半獣みたいなものだけど。

「失礼な事だったら悪いけど、霖之助は半妖なのか？」

「よく気付いたね。僕は人間と妖怪のハーフさ。でも、別に差別とかはされた事ないし、寿命も長くて困る事はないね。でも、僕は彼女達のように特別な力があるわけじゃか

ら、そこはちよつと不便かな」

確かに。霖之助からは強い力を感じない。でも、何かしらの能力は持っているようだ。

「霖之助は霖之助でちゃんと能力持っているじゃない。私からすれば羨ましい能力だよ」

にとりがそう言うのと、霖之助は少し嬉しそうにメガネを上げた。

「霖之助の能力って何だ？ あ、そう言えば霖之助は確か香霖堂っていう雑貨屋してるんだつたよな？」

「雑貨と言うか道具屋だけどね。特にこれと決めた商品を取り扱ってるわけじゃなく、外から流れてきた品物も取り扱っているよ。良ければご贖員に」

「いずれ行こうと思っていたんだ。俺の持っている貨幣を換金して、日用品買いそろえようと思つてき。紅魔館に行つてたりで、今まで忘れていたけど」

俺は財布から元の世界で使つていたお金をいくつか霖之助に見せると、彼は興味深そうに観察した。

「なるほど、君の事情はある程度は八雲紫から聞かされているよ。このお金は外の世界のお金と同じだから、僕が買い取つてあげられる」

周りに聞こえないように霖之助が小声で言つてきた。

ふーん、紫は俺が異世界から来た事を霖之助には話しているのか。にとりが不思議そうな顔をしているけど、何かを察したのか特に食い付いては来なかった。

「今度店に来るといい、そこで買い取らせてもらうよ。それで、僕の能力なんだけど【道具の名前と用途が判る程度の能力】だ。外の世界の道具だろうと名前と用途は分かるんだ」

なるほど、だから外の世界から流れてきた物を扱って商売出来るのか。

「本当、外の世界の道具が分かるなんて、羨ましい限りだね。私も調べれば分かるけど、それでも分からない事が多いからね」

「にとりは外の世界の道具に興味あるのか?」

「私はこう見えて技術屋だからね。未知のテクノロジーには興味津々さ」

と、なぜかにとりは目をギラリと光らせた。

「ところで……あなたは何か外の世界の変わった道具は持っていないの? 持ってたらずひ見せてほしいんだけど!」

にとりがどういう性格かこれで分かった。極度の機械バカって奴か。

確かに幻想郷の文化レベルはかなり低く、外の世界の技術は珍しく見えるから仕方ないか。

と言つても着の身着のまままで来てるので、武器もなければ小道具もない。

アレ？ 今更だけど、なんで俺携帯と財布以外何も持ってないんだ？ 普段何かしら武器は身に付けているのに。

靴もナイフや爆薬を仕込んだ靴ではなく、何の変哲もない靴だ。

一度小さな疑問を抱くと、それは立ちどころに膨らんだ。

幻想郷に来る前の記憶はあいまい……でも、何も身に着けていない俺はどこに何をしに行っていたんだ？

「おーい？ もしもーっし？ 聞こえてる？」

「あつ、ごめん。考え事をしてた。俺の持っている道具はこれしかないな。携帯電話、つて分かるか？」

学園都市に居た時の事を考えても仕方ない。もう幻想郷に来てしまつて戻れない以上はな。

「うん、分かる分かる。現物も見た事あるし、作つた事もあるよ」

懐から携帯を出すと、にとりだけではなく霖之助も興味深そうに覗き込んできた。

「へえ、僕の所にも携帯電話と言う名称の物はいくつかあるけど、これはそれよりずっと小さいな」

霖之助が見た事あるのは、どうやら数十年前の携帯電話の初期型のようなだ。

俺の携帯はタッチパネル式の学園都市でも試作段階の未来型携帯だから、こここの外の

世界の人間が見ても珍しがるかもしれない。

「見てもいいけど、解体するなよ、にとり。それ電話は使えなくても、まだまだ他に使える機能あるんだから」

「わ、分かってるよ。見るだけだよ見るだけ」

「だったらその両手に持ったドライバ―やペンチは何に使う気だ。」

「こんな小さいのに電池がよく持つね。ん、ひよつとしてこれ……太陽光パネルかい?! 外の世界じゃこんな小さいのまだ実用段階じゃないはずなのに、すごいじゃないか!」

「ちよつと見ただけでそれに気付くにとりもかなり凄いやと思うぞ?」

「仮にも学園都市の最新技術の結晶を触ったり、裏面を見ただけでこの携帯の充電機能に気付いたり、外の世界の技術レベルを知っているとは流石だな。」

「そう言えばさつき携帯電話を作った事もあると言っていたし、何か機械的な相談は彼女にするのもいいかもしれない。」

「えへへ、霖之助の店にあるの弄った事があるからね。機械はお任せだよ」

「そうだったね。おかげで貴重な外の世界の道具を何回壊された事か」

「う、うぐつ……その度にちゃんと弁償してるじゃないか」

「外の世界の物は貴重なんだ。お金を詰まれても売ったりなど出来ない物も沢山あるん

だよ。君と云い、靈夢や魔理沙と云い、弄りたいなら買つてほしいものだね。少しは紅魔館のメイド長達を見習つてほしいよ」

どうも香霖堂は靈夢やにとり達のせいで、あまりちゃんとした客がないようだ。

そう言えば、咲夜が珍しい紅茶やティーカップを香霖堂で購入していると話してた事あつたな。

「失礼ね、霖之助さん。私は魔理沙みたいに勝手に物持ち出したりしてないでしょ。ツケにしているだけじゃない」

「私はちゃんとお金払っていますよ!! カメラのフィルムとか貴重ですしー!」

いつの間にか外が静かになり、靈夢と文が戻ってきた。

「文はともかく。靈夢、そういうなら溜まりに溜まったツケを少しは払ってくれ」

霖之助が渋い顔をして言うと、靈夢は明後日の方を向いて口笛を吹きだした。

「あたたたつ、なんで2人ともそう真剣になるよ……つて理由は聞かなくても分かるけど、本当に2人共ベタ惚……」

少し遅れてポロポロになったはたても入ってきた。

「陰陽宝玉!」「天狗道の開風!」

「つてちよ、きやああ〜!!?」

と思つたら、また外へとぶつ飛ばされた。

いつもなら文がああなるのに、今日は違うようだ。

「2人共、過激だねえ」「にとり?」は、はい、私は何もいません!」

2人共怖いつて。完全ににとりが怯えてるよ。

霖之助は深く溜息をつくあたり、見慣れた光景なのだろう。

と、はたてが飛んでいった辺りに携帯電話が落ちているのに気付いた。

折り畳み式の携帯で、型は古そうだけどそれでも学園都市でも見かけるタイプだ。

「なんだ。幻想郷にもこんな携帯電話があるのか」

「ああ、それははたての仕事道具ですよ。彼女はその携帯を使った念写で写真を撮って、新聞を書いているんです」

「ちなみにその携帯は香霖堂にあるのを元に、私が作ったんだよ。と言っても仲間と一緒になだけど」

なるほど、にとり製の携帯電話か。防水加工もしてあるみたいだし、使えないが一応電話としての機能もあるようだ。

それにしても念写か。聞き慣れた単語に思わず笑みがこぼれた。

学園都市にも念写系の能力者がいて、水面に映し出したりカメラで撮ったりとタイプが沢山いたけど、携帯電話タイプはいなかったな。

「念写と言えば聞こえはいいですが、実際には部屋で引き籠って楽しんでる出不精ですけ

どね。にとりがそれを作つてからは特に」

「ちよちよつと、はたての出不精は携帯のせいじゃないでしょ。私は頼まれて作つただけだし」

「それに彼女の書く新聞、花果子念報は人気がありませんしね。私の新聞には遠く及びません！」

いや、俺からすれば文の新聞も十二分に低レベルな新聞だと思う。

「私はどつちも掃除に使えるから、便利に使っているけどね」

「僕は包装紙や緩衝材代わりに重宝してるよ」

霊夢も霖之助も、新聞本来の用途とは違った使い方をしているようだ。

「咲夜も掃除の時に役立つ、とか言っていたな。良かったな、文。新聞大人気で」

「いやいやいや、せめて読んでくださいよ！」

文が抗議の声をあげているが、文の新聞の内容は酷いからなあ。

はたての新聞は読んだ事ないけど。

「あんなに取材しても、俺の事を謎としか書かないような新聞に価値はあるのか？」

「あら、懐かしい事言うわね。そう言えば、ユウキさんの記事めちやくちやだったわね」
なつかしむように霊夢が言うけど、まだ一週間くらいしか経ってないんだけどな。

「い、いやアレは色々私なりに考慮した結果でして、そうだ！ でしたら汚名返上の機会

と言う事で、ユウキさん！ 再度私の取材を受けてください！ 今度こそしっかりと記事書かせて頂きますから！」

文はどこから取り出したのかメモと鉛筆を取り出し、取材モードに入った。

「なあ、霖之助。香霖堂には外の世界のどんな物が入ってくるんだ？」

「それは本当に色々さ。危ないモノも流れてくるけど、それは紫が引き取ってくれる。そうだ、今度店に来た時にでも道具をいくつか見てくれないかい？ 僕的能力じゃ用途は分かっても使い方までは分からないんだ」

「いいぜ。その代り、安くしてくれよ？」

「ははっ、君はなかなか商売上手だね。いいよ、君の気に居る物があればいいけど」

「ねえねえ、盟友。私の所にも遊びに来てよ。見せたい発明がいくつかあるんだ」

「にとりの所は妖怪の山でしょ、ユウキさんでも危険じゃない。彼が行くのじゃなくて、あんたがその発明ここに持ってきなさいよ」

「あのく目の前でスルーされるのは、いくら私でも傷付くんですけど……」

文の声は宴会の騒がしきにかき消されていった。

つづく

第42話 「宴会Ⅳ」

文とはたての漫才にも似たやりとりを着に霊夢や霖之助と酒を飲んでみると、ふと肩を突つつかれた。

振り向くと、そこには小さな人形が宙に浮いていた。

「シャンハイー！」

「ん？ なんだこの……人形？」

「その人形はアリスのね。向こうにいるわよ」

霊夢の指さす方を見ると、金髪の女の子がこつちをニコニコ見ていた。

どうやら今度はあつちにお呼ばれしたようだ。

「モテモテだね、ユウキは」

「そうね、モテモテね、ユウキさん」

「……行ってくる」

楽しそうな霖之助と少し不機嫌そうな霊夢という正反対の声を聞きながら、人形に引つ張られるような形で席を移動した。

「あら、やっとこつちに来たのね。待ってたわよ」

人形に連れられてきた席には、金髪の少女の他にパチュリーと魔理沙がいた。

金髪の少女からは魔力が感じられる。パチュリーも魔理沙も魔法使い同士として、アリスと仲良く談笑していたようだ。

「なんだここに居たのか、パチュリー。それに魔理沙も少しぶり」

「よっ、ちよつとぶりだな。あの時は色々どーも、おかげで死ぬかと思っただぜ」

「臨死体験つて割と貴重だぜ？」

「私はまだ三途の河を渡る気はないぜ」

何だか微妙に刺々しい視線と言葉を投げってくる魔理沙を軽くかわし、俺を呼んだ人形の主に目を向けた。

「初めまして、私はアリス・マーガトロイド、この子は上海。ごめんなさいね、お楽しみの中で呼んじゃって。こうでもしないとあなたと話すタイミング逃しそうで」

「別に構わないよ。宴会に居る全員と話すつもりでいたからな。タイミングをそっちが図ってくれたのは好都合だ、アリス」

「そう言ってくれると助かるわ」

アリスの名乗った少女。アリスは確か欧米などで一般的な女の子の名前、日本で言う山田太郎的な名前と聞くけど、これほどアリスと言う名前にふさわしいと思える人を見た事がない。

その視線に気付いたのか、アリスがちよつと照れくさそうな笑みを浮かべたので、慌てて視線を逸らした。

「ふむふむ、どうやらユウキはアリスに一目惚れかしら？」

「違うつての、パチュリー。ただ、アリスと言う名前がこれほど似合う人を見た事になつて思つただけだ。その人形と一緒に可愛いしな」

「あら、そんな事言われたのは初めてよ。上海の事も褒めてくれて、ありがとう」

「シャンハイー！」

上海はシャンハイとしか喋つてないが、その表情は嬉しそうでくるくる回つてからペコリとお辞儀をした。

「まるで人間みたいな人形だな。ここまで表情豊かなのは初めて見た」

「外人なら動く人形は見慣れていないわよね。これは私が全部手作りした人形よ。今

日はこの子、上海だけけど。家にはまだ他にも沢山いるわ」

「なるほど、アリスが魔力の糸で操っているのか」

そう言うとアリスは驚いたように目を見開いた。

「……驚いたわ。まさか外人人に一目で見抜かれるなんて、私の糸は見たり触つたりはできないのに、魔理沙やパチュリーが言うように普通じゃないのね」

この2人が何を言ったのか知らないが、確かに俺は普通じゃないな、色々な意味で。

で、なぜか自然と俺の膝に座っていた上海を撫でていた。

「ふうん、まるで上海を普通の女の子のように接してくれるのね。私としても嬉しいわ」
別にそんな事は思っていないが……人とそうでないかの区別なんて、俺は明確にはない。

木原を人間扱いせず、ガラクタのように殺したり、妹達を人間のように接したりなどだ。

「ふむふむ、ユウキはやはり小さい子に弱いのか。これはレミイや妹様が有利かしら？」
で、こっちはこっちで何やらメモっているし。

「おいパチュリ、文みたいなさ事するなよ」

「失礼ね。あんなバツと一緒にはしないでよ。魔法使いは好奇心で出来ているのよ、だからアリスだってあなたに興味湧いて誘って来たのよ？」

それとこれとは全く関係ない気がする。

「アリスが俺に興味？ それは幻想支配にか？」

「うーん、それもああるわね。けど、それよりも……」

アリスはさつきから無言で酒を飲みながら、たまに俺を睨んでくる魔理沙に目を向けた。

「なんでこっちを見るんだよ。私は何も言っていないぜ？」

「そう言う事にしておいてあげましょうか」

おかしそうに笑うアリスに不機嫌そうな魔理沙は更に不機嫌になった。

まあ、十中八九原因は俺だろうけど、別にそれは気にしていない。

「今日は宴会を楽しむとしましょうか。あ、でも今度私の手伝ってもらっていいかしら？」

「パチュリーみたいに幻想支配の事を調べたいのか？」

「ううん、それはパチュリーから教えてもらったからいいわ。それとは別よ、あなたをなんでも屋と知っての依頼。ちゃんと報酬も出すわよ？」

何でも屋か、確かに学園都市ではそうだったけど、別に幻想郷でもそうするとはまだ言っていないだけだな。

でも、神社に居候中に寺子屋の仕事しつつ、何でも屋としても仕事受け持つつもりだったからいいか。

「報酬と言えば、ユウキ。この前の魔理沙の一件の報酬は決めたかしら？」

「ああ、あの時のか。うーん、まだだな」

数日前、魔理沙が図書館に侵入して俺が初めて弾幕ごっこをしたあの時。

俺は何でも屋としてパチュリーの依頼を受けたが、報酬はまだきめてなかった。

金銭でもいいのだけど、せつかくの機会だからと保留にした。

「そう。まあ、忘れるつもりはないけど、早めに言ってくれと助かるわ。お金はいらないのだったわよね？」

「七曜の大魔法使い、パチュリー・ノーレッジの報酬だぜ？ そんなありふれたものよりもっと有効的な事をお願いするさ」

「そ、そんな大げさに言われても何も出ない……わけじゃないけど、私にも出来ない事はあるわよ？」

大げさに言ったつもりはないけど、パチュリーは照れくさそうに言い、アリスがその様子を見てクスクス笑った。

「あらら、パチュリーは思っていたよりテレ屋なのね。でも、私から見てもパチュリーは凄い魔法使いだもの。借りを作ったのなら、それは簡単には返してもらおうわけにはいかないわよね？」

「ア、アリスまでそんな事言わないで、もう！」

「そうそう。だから私もつついっパチュリーの才能を借りたくて、御邪魔しちゃうんだぜ」

「魔理沙の場合は私じゃなくて、私の魔道書が目的でしょ！」

パチュリーがこう狼狽するのも珍しいが、きつと同じ魔法使いの友達が出来て嬉しいのだからうな。

パチュリーは孤独な魔法使いだったらしく、レミアアに出会うまでは独りだったらしい。

それからこあを召喚したり、美鈴や咲夜、フランとも出会ったがそれでも同じ魔法使いの魔理沙やアリスがいい刺激になっているようだ。

「あ、そうだ……ねえ、ユウキ？ 報酬は身体で払うのはどう？ 好きにしていいわよ

……こあの身体を」

「そこは自分じゃないのかよ！」

妙に演技っぽく艶めかしい目つきで迫ってきたパチュリーに、魔理沙と2人でツツコミを入れるとアリスが盛大に吹きだした。

どうやらこの3人かなり出来あがっているようだ。

魔法使いでも酔っぱらうんだな。

「なんて、冗談……」

「はいはいはい！ 呼びましたか？ ユウキ様へのご奉仕ですか!? パチュリー様公認でやっていいのですしたら、それはもう今から一週間でも一年でも永遠でもしちやい

「しなくていいわ」……はう?!

目をキラキラ……ではなくキラキラ輝かせてこあが俺の手を掴もうとしたが、一瞬のうちに咲夜が現れてこあの姿が消えた。

と思つたら、また次の瞬間には咲夜が戻つてきていた。その手には頑丈そうな鎖を持っている。

目がかなり怖いぞ。

「失礼しました。こゝろがひどく酔つていたので介抱のために裏の池に放りこんでおきました……パチクリー様も酔いが酷いようですが、霧の湖に沈めましょうか？ 鎖でがんじがらめにして」

「い、いえいえいえ、さめました！ 肝と一緒に冷めました！ ごめんなさいごめんなさい、もう変な事言いません！」

それを見たパチクリーは顔を真っ青にして涙目で、咲夜に土下座をした。その様子を見た魔理沙とアリスは爆笑している。

うーん、平和な光景だなーと少し現実逃避するしかない。

が、すぐに首を曲げ、飛んできた傘を掴んだ

これは明らかに俺の首を狙つて投げられた傘だな。

あれだけ騒がしかった空気が一瞬で静まり、霊夢や慧音、文やレミリア達までもが身構えている。

上海は俺の膝から離れ、アリスの側にいてその手には剣が構えられている。

「ごめんなさいね、傘がすっぽ抜けてしまったわ。怪我はなかったかしら坊や？」

飛んできた方を向くと、そこには緑の髪をして明るい服を着た女性がにこやかに立っていた。

その後ろでは美鈴が口をあぐりと開けていたが、同じくいつでも飛び出れるように身構えている。

そう言えば、この女性は美鈴と話しているのをちらりと見たな。

「あらあら、失礼。別に騒ぎを起こす気はなかったのだけどね。さ、皆さん続けてくださいな」

この一言で、また宴会の空気となり、それぞれ飲み食いやおしゃべりを再開したが、霊夢達はまだ警戒をしていた。

この女性、美鈴のように一見すると人間と変わらないが、紫のように言葉に言い表せないそこはかたない迫力があり、かなりの妖怪だと言う事が分かる。

レミリア達のような幻想郷の新参者だけでなく、顔馴染みと思われる霊夢や文まで警戒しているのがその証拠だ。

「ちよつと、幽香。ユウキが掴まなかつたらこの傘、私に当たる所だったじゃない」

場の空気を変えようとしたのか、アリスが明るい口調で微妙に論点がずれた抗議をするが、幽香には効果はないようだ。

「あら、アリス。そこに居たのね、坊やに隠れて見えなかつたわ。失礼、私は風見幽香。

よろしくね、坊や」

オリアナと同じく俺を坊やと呼ぶが、彼女とは違いその響きには明確な違いがあった。

それに幽香の目、俺と美鈴が戦っていた時のレミリアや文の目だ。

コイツ、俺の事を獲物と見ているな。

「俺を坊やと呼ぶのは2人目だな。よろしく、俺はユウキだ。別に坊やと呼んでも構わないが、坊や扱いは後悔するぞ？」

宣戦布告に近い挨拶の代わりに、こちらもありつただけの殺気を籠めて幽香を睨む。宴会の喧噪の中、俺と幽香の間に冷たい空気が流れた。

アリスやパチュリー、魔理沙は訝しげな表情で俺達を見守っていて、霊夢と慧音が思わずこちらに向かって来そうになったが、文と藍がそれを止めた。

「ふっ、ふふふっ、あっはっはっはっ……ごめんさい。ちょっとからかってみただけ。さつきも言ったけど、こんな楽しい宴会で物騒な真似はしないわ」

さつきまでの雰囲気を消し、幽香はただ単純に笑った。そして、俺の隣に座りこんだ。「分かっている、さつきのはお前流の挨拶だろ。別に俺は気にしてない」

霊夢と慧音を見ると、2人も警戒を解いた。

レミリア達ももうこつちを向いていない。

「ぶつはあく……おいおい、何宴会らしくない事してるんだよ、2人共」

魔理沙がジト目でこつちを睨んできてるが、パチュリーとアリスは素知らぬ顔で話を再開していた。

「文句は俺じゃなく、幽香に言えよ魔理沙」

「ごめんなさいね、魔理沙。彼の事ちよつと知りたくなくて、カマをかけてみたのよ。でも、思ったよりノリが良くてびっくりしたわ。いい余興になったでしょ？」

余興、ね。確かにこの場で何かをするつもりはなかったようだけど、幽香の目は間違いないく本気だった。

本気で俺を……潰そうとしていた。いや、単に戦いたがっていたのか？

「余興って、お前さんが本気で殺気出したら、宴会どころじゃなくなるっての。ユウキもユウキであんな挑発に乗ってくるとは思わなかったぜ」

「あんな熱烈な歓迎に答えないのは失礼だと思つてな。ま、でも幽香の言う通り、余興としては十分だろ。ま、飲み直しだ飲み直し。幽香もせつかくだし、色々話聞かせくれよ、ほれ」

「気が効くわね。頂くわ」

まだ空いていない徳利の蓋を取り、幽香が出したお猪口に注ぐと彼女はそれを一気に飲み干した。

「それじゃ、私からも。ようこそ、幻想郷へ」

今度は幽香が徳利を持ち、俺に酌をした。

その時、一瞬だけ幽香と目が合った。

——いずれ、な。

——ええ、いずれ、ね。

「はあ、全く。アリスだけじゃなく幽香にまで目を付けられるって、どんだけなのよ。彼は」

袖から出しかけた札をしまい、私は一息ついた。

幽香がユウキさんに興味を持った。何となく予想出来た事ではあったけどね。

幻想郷の中でも幽香の強さは断トツの部類に入っている。

そんな強豪妖怪は、普通の人間や妖怪に興味は持たず、強い能力を持った人間に興味を示す。

紫は幻想支配と言う異能を含めてまだユウキさんを警戒しているけど、幽香は彼と戦いたがってるわね。

さつき藍に、幽香はここで騒ぎを起こす愚か者ではない。と言われて、少しは落ち着いたけど、結構焦ったわよ。

「確かに、彼はモテモテだね、色々な意味で」

さっきの騒ぎにも動じる事なく、霖之助さんは私の盃にお酒を注いだ。

「ありがたい、霖之助さん。色々な、意味ねえ。何だか含んだ言い方をしてるけど、まさかっ!？」

霖之助さんも彼を?」

「おおう!？」

「っ!？」 んぐつ、ゲホゴホツ、れ、霊夢……その手の冗談は酒を飲んでいない時に言ってくれ。それにそのブンヤ達にわざわざ根も葉もないネタを与えないでくれ」

半分に冗談のつもりだったが、霖之助さんは飲みかけた酒が喉に詰まったらしく盛大にむせた。

そして、文とはたては色めきだし、メモ帳を取り出していた。

「これは良いネタが出来そうです! フラグメーカーユウキさん、ついに男性も落とす!？」

「香霖堂に恋人誕生の予感? これはいい記事かけそうね!」

「その2人。そんな記事書いて、ユウキさんに何かされても知らないわよ?」

全く。さっきまで文ははたてに嫉妬しまくってたのに、こういうネタには食い付くのね、新聞記者ってこんななぼつかなのかしら。

「あーそう言えば、椛は来なかったのかい?」

思い出したかのようににとりが言うのと、文はつまらなさそうに答えた。

「ええ、来ないわよ。一応呼んだんだけど、割と強めに。でも、仕事があるからって断られたわ。相変わらずあの子は面白みがないと言うか、固いわね」

「あの子呼んでどうする気だったのよ。まさか彼に会わせて何か面白い弄りネタでも？」

「うーん、そんな気はしたけど。まーそのうち焚き付けるわ。面白い事になりそうだし」
素に戻った文がここまで言う白狼天狗の権とは、私はまだ会った事はない。

けど、河童のにとりは仲が良くて、同じ天狗の文やはたてとはあまり仲が良くないのは皮肉だろうか。

文もはたても天狗としては強いけど、天狗らしくないとは幻想郷の共通認識だから、それが関係してるのかもね。

あ、らしくないと言えば……

「そう言えば、霖之助さんが宴会に来るなんて珍しいわね」

霖之助さんは、こんな賑やかな場所を好まない。

少人数での花見などは私や魔理沙とするけど、宴会に来た事は……なかったかもしれ
ない。

「そうだね。最初は僕も来る気はなかったさ……けど」

そう言う霖之助さんの視線の先には、さつきまでの険悪な雰囲気はどこへ行ったのやら幽香達と楽しそうに飲んでいるユウキさんの姿が。

まさか、本気で彼に惚れたんじゃないわよね!? 霖之助さんには魔理沙がいるでしょ!?

まあ、魔理沙の事は妹のように思っている感じはあるけど、それ以上にも見えているし……

「だから、そう誤解しないでくれ。僕が彼に興味を持ったのは、魔理沙の事でだよ」
「魔理沙が、どうかしたの?」

確かに、魔理沙の様子は数日前からおかしい。

何だか妙にイラついているみたいだし、私が聞いても何でもないとか言わなかったから詳しくは聞いてないけど。

「そうか、霊夢には言っていないのか。なら、僕が言う事じゃないか」

「何よそれ。気になるわね。話して頂戴よ」

「イヤ、これはどちらかと言えばユウキに言う事だからね」

はあ、これ以上は話してくれそうにないわね。

「一つ言えるのは、ユウキと言うよりは魔理沙がちよつと気になったから、だね」

妹の事を心配する兄のような目で霖之助さんが見つめる先には、アリスやパチュリー

と楽しそうに話しながらも、時折ユウキさんを見る魔理沙の姿があった。

つづく

第43話 「宴会V」

幽香の乱入があつたが、アリスとも知り合えたしこれで宴会での初対面者はいなくなつたはず。

途中チラホラと魔理沙から睨むような視線を感じたが、気にしない事にした。

「あら、どこにいくの？ まだまだ飲み足りないわよ？」

「いやいや、少し飲み過ぎた。ちよつと外の空気吸つてから戻つてくるよ」

「人間にしてはペース早かつたものね。いつてらっしゃい、戻つて来なさいよ？」

幽香から警告（？）を受けながらも、俺は宴会場の外の縁側に出た。

「流石にお疲れのようね」

外に出ると誰かに声をかけられ、横を向くと縁側の先に妹紅が座っていた。

彼女は一人で飲んでいたので、大きな酒瓶と焼き鳥が盛られた皿を持ちながらこっちに向かつてきた。

「流石にな。幽香みたいなタイプは初めてじゃないから慣れてるけど」

「ははっ、あなたはアイツが好きそうだね。強いし、相手の力をコピー出来るし。でも目を付けられたなら気を付けた方が良くないわよ？」

「ああ……そうだな」

幽香は美鈴とは違った意味でのバトルマニアだな。

まあ、そういう相手はあつちでも沢山いたし。

つい俺も殺気で応えちゃったけど。

「妹紅はどうしてこんな所で飲んでいるんだ？ 慧音はどうした？」

「慧音はレミリアやフランと話してるわよ。私には分からない話だし、ちよつと休憩がてら夜風に当たりたくなってるね」

そう言つて豪快に酒瓶を飲む姿は、とても休憩に来たとは思えなかった。

「あなたも飲む？ 思ったより残つてみたい」

「じゃ、いただくかな……んぐつ、ふう、結構キツイけどうまいな」

苦笑いを浮かべて差し出された酒瓶をひと飲みしてから、これ間接キスじゃないか？
と思つたけど向こうが気にしてないみたいだし、俺からも何も言わなかった。

「良い飲みっぷりね。お酒は飲み慣れているの？ 確か外の世界じゃ20歳にならないとお酒飲めないでしょ？」

「まあな。そんなの俺の周りの大人は気にせずにはいたけどな。酒の相手もさせられたし……」

本当は様々な身体状態で幻想支配の作用が変わるかの実験で、アルコールやら毒やら

病原菌やらを接種させられたのが始まりだけだ。

「なんだかここでも向こうでも苦労していたみたいね」

「向こうではともかく、ここじゃあまり苦労はしてないけど。みんな優しいと言うかお節介と言うか、物好きで世話好き多いし」

「あははは、その筆頭は間違いなく慧音ね」

笑った後、急に妹紅は空を見上げて黙ってしまった。

つられて俺も空を見上げる。

スモッグも電灯もない幻想郷の星空は透き通っていて、まるでプラネタリウムを見ているように綺麗だ。

「……あなたのいた所って、羽を生やしたりした奴とか色々なのいるのよね？」

俺が文とレミリアに言った事を思い出したかのように、妹紅が聞いてきた。

「あ、さっきは言いそびれたけど、吸血鬼は多分いる。実物は会った事ないけどな。後天使もいたな」

吸血鬼殺しなんて能力があるって事は、逆算的に吸血鬼は存在する事になる。

「て、天使!? それは私も会った事ない……」

そう驚くと妹紅はなぜか急に黙りこんでしまった。

辺りには風の音と、宴会場から聞こえてくる声だけが響き渡った。

何気なく妹紅の横顔を見てみると、何か変な感じがしてきた。

紅魔館で初めて会った時に感じた小さな違和感。

こんな近くで2人きりで話をして、それが強く感じた。

妹紅は人間だ。と慧音は言っていた。確かに妹紅は人間だと思う。歳も俺とあまり変わらない……ように見えるけど。

何だろうか。物腰や話し方、それ以外にもどこか遠くを見ているような、達観しているような面持ち。

こんな面持ちは俺と歳が近いとは思えない。

組織のボスとして、様々な経験を積んできたレイヴニアのような大人っぽさとは違う。

小萌先生のような見た目は幼女中身は熟……いや、でもこれとも違う。

言うなればレディリーのような……

「ねえ、流石に不老不死は……いなかったよね？」

少し考え事をしてしていると、ふと妹紅が恐る恐るという感じで聞いてきた。

「いや、いるぞ。最低2人、もつといるかもしれないけど、俺が知ってるのは2人だな」
なぜそんな事を聞いてきたのかは分からないが、興味本位でないので素直に答えた。

「ふ、2人もいるの!？」

すると妹紅は心底驚いた顔をした。ホントなんでこんな事知りたかったんだ？

ひよつとして、不老不死に興味がある……なわけないな。

「間違いない。そのうち1人は実際に戦ったし。肢体を斬り落としても、爆弾で吹き飛ばしても、全身を焼きつくしても生き返る……つてのは変だな。元に戻っていたから間違いない……あ、悪い……」

焼き鳥を食べながら聞いていた妹紅から、非難の目を向けられた。

うん、物を食べながらする話じゃないよな、普通。

それにしても、今思い出しても変な奴だったな、幻想支配が効かなかったから能力つてわけじゃなかったし。

本当は妹紅に言った以上の事を永遠とやって、こつちが根負けしそうになったな。

「で、戦ったって事は……勝ったの?」

「勝った、と言えるかな。そいつは地球ごと自爆して死のうとしてたんだけど、それをどうにか止めて捕縛した。後の事は知らないな」

実験体にされたんだろうけど、アイツには同情も興味も沸かなかったから本当に知らない。

「ち、地球ごとか……あなたって、本当に元の世界でも結構な敵を相手にしてたのね」

妹紅は感心半分呆れ半分と言った具合だ。

「で、なんでそんな事を聞いたんだ？ 不老不死になりたいのか？ でも、俺あいつらがなんで不老不死になったかは知らないぞ？」

すると妹紅は何を思ったか、右手を自分の顔に向けたかと思うと……

——ボンツ

妹紅の頭が爆発し、吹き飛んだ。

「……へっ？ も、も……こう？ っ!？」

しかし、次の瞬間には妹紅の顔が元通りにそこにあつた。

「……あー熱かった。ははっ、見ての通り。私は……もう1000年以上も昔に不老不死になった、蓬萊人なんだよ」

蓬萊人っていうのが、不老不死になった人間の事を指すのか。

あ、そうか。やっと分かった。レディリーだ。

彼女は見た目こそ幼かったが、言動や仕草が大人っぽいのではなく、達観しすぎているように感じた。

それは不老不死で長い間過ごしてきた者だからこそ、元がただの人間で不老不死になつた者だからこそだ。

あの時、妙な親近感を沸いたが、妹紅にもなぜか近い物を感じた。

「じゃあ、レミリアやフランよりも年上なのか。なら妹紅の事今度から、もこばあちゃんって呼ばないと失礼だな」

「いやそこ!?! じゃなくて、なんで妹紅じゃなくてもこ!?! でもなくって失礼っていうなら……ああもう! もつと他に言う事ないの!?!」

なぜか妹紅が立ちあがり激しく動揺しながら俺に詰め寄ってきた。こんなやりとり、ついさつきしたような……なんだこのデジャヴ。

「言う事……あー、後ろに慧音がいるよ」

「へっ? け、慧音!?!」

本当は結構前からいたんだけど、俺と妹紅の様子を窺っていたから黙っていたんだけど……

妹紅が自分の頭をふっ飛ばしたら、一瞬鬼のような形相になって、次に俺を心配そうに見てきた。

俺が慧音に気付いているのを、向こうが気付いていたかは知らないけど。

でも何で心配そうに俺を見たのかは、大体想像つく。

「も〜こ〜う!」

「ど、どうしたの慧音? 何をそんなに怒っている、の?」

首をかしげて可愛らしく言ったつもりだろうけど、それは男にしか通じない手だと思

う。

「自分の顔を吹き飛ばすなんて正気か!? いくら不老不死だからって、自分の身体を何だと思っているんだ!」

「い、いや、それはユウキ君には口で説明するより、実演した方が早いから……じゃ、ダメ?」

「ダメに決まっているだろ! 彼なら口で言うだけで納得したはずだ!」

「いやどうだろうな? 多分、不老不死ですって言われても、ふーん、としか俺は言わなかっただろうし、それを信じてないと思った妹紅が頭をバーン! ってしそう。

てか慧音、俺は自分で言うのも何だが確かに物分かりは良い方だけど……なあ?

「それは……その、さつきちよつとグロテスクな話を聞かされたから、お返しに〜と思つて……」

「こどもか!?!」

慧音、そのツツコミはおかしい。

それよりも妹紅が目でSOSを出してきた。妹紅は慧音にすごく弱みみたいだな。

「慧音、その辺でいいだろ。こういう言い方も変だけど、実際に目で見た方が納得しやすいのは事実だし。でも慧音の言う通り不老不死と言われても、すぐ納得しだろうけどな」

「……はあ、分かった。妹紅、頼むから自分の身体をもっと大事にしてくれ」

慧音、さつきとはうって変わった表情になって、よほど妹紅の事が心配なんだな。

「……分かった。ごめん、慧音」

妹紅もそれが痛いほど分かるから、心の底から謝ったんだろう。

それを見てやつと慧音が笑顔になった。

「うん、よしっ！ で、2人共。なんでこんなところで飲んでるんだ？」

「俺は一通り挨拶し終えたから、ちよつと休憩してただけだ」

「私も似たような物だよ。大勢で飲むのは慣れたけど、騒がしすぎるのは性に合わないから」

きつと妹紅はずつと1人だったんだろうな。だから、人が大勢いる場が苦手なんだろう。

俺も、そうだしな。

「全く……似た者同士め」

慧音は呆れたように言いながら、俺と妹紅の間に座り横にあつた酒瓶を一気に煽つた。

あ、それ俺と妹紅が間接キスした奴だ。

「ふう………月夜の下で飲む酒もうまいな。それで、ユウキ君。妹紅の事だが……」

「ん？ ひよつとして、妹紅が不老不死だつて話まだ続いてたのか？」

「うん、あなたは私を見て何とも思わないの？」

あーこれはアレか。気持ち悪くないのか？ とかそういう話か。

「んく別に何とも思わないぞ？ しいて言えば、妹紅は和服が似合いそうだなとか、そういう事なら思つた」

「ブツ!! い、いきなり何を言い出すの!! 確かに和服は着なれているけど、それは不老不死になる前の話だし……つて慧音も何笑っているの!!」

顔を真っ赤にした妹紅が、同じく顔を赤くして笑っている慧音をほかほか叩く。

「あははははっ、いや、ユウキ君らしいなと思つただけだ。それに和服が似合いそうと言うのは私も同意見だよ」

「はあく……そうよね。単身で吸血鬼の館に乗りこむ、超が付くほどの変人だものね、あなたは」

「そうそう。不老不死とか言われても、別にどうとも思わないぞ。まして幻想郷には神様までいるつて言われればな」

それを聞き、それもそうね。と妹紅も笑いだした。

その時、トテトテと廊下の向こうからこつちに走ってくる影が見えた。

「あく、ユウキさんみーつつけた！」

「おわっ?! だ、大ちゃん!」

突然俺の背中に抱きついてきたのは大ちゃんだった。

妙に顔が赤いし、酒臭い! 妖精って酔っぱらうのか!?

「もう、探したんですよ。全然こつちに来てくれないですし」

「わ、悪い悪い……すぐに戻るから、離れてくれないか?」

せ、背中に柔らかい感触が!

そんな俺の様子に気付いた妹紅が何やらいじわるそうな笑みを浮かべた。

「大ちゃん。ユウキ君は大ちゃんに抱き付かれて嬉しいみたいだよ」

「え、そうですか? やったあやったあ!」

大ちゃんは大喜びで俺に抱き付いたまま、ピョンピョン跳ね上がった。

「大ちゃん、酔ってるのにそんなに跳ねると気持ち悪くなるぞ!」

背中に柔らかいモノがこすられてるし!

「えっ、私気持ち悪いですか? 私のこと……嫌いですか?」

なぜか勘違いした大ちゃんが俺の前に周り、涙目で見上げてきた。

「い、いやいやいや。誰も大ちゃんが気持ち悪いだなんて言っていないぞ!? 慧音、いつの

まに離れてるんだよ!」

隣に座っていたはずの慧音は、妹紅と2人でいつの間にか離れた場所に座りこつちを

暖かい目で見つめていた。

「ははっ、2人の邪魔をするほど私は野暮ではないが？」

「何言ってるんだよ!？」それに、寺子屋の先生なら酔っぱらった生徒を指導しろ、指導!」

「そうだな。大ちゃん、酔っている時に激しく動く危険いぞ?」

「は〜い、慧音せんせい♪」

慧音の言葉で涙目は止めたけど、大ちゃんはなぜか俺に抱き付いたまま頬ずりし始めた。

「ちがっ!? いや、違わないけど、もっと別の事指導しろよ! 妹紅も何か言ってくれ!」

「私? ん〜じゃあね、後ろを見た方がいいわよ?」

「後ろ? ハッ!? なんかさつき似たやりとりしたような……!」

後ろから何か殺気を感じ、恐る恐る後ろを振り向くとそこには……子鬼がいた。

「おにくちやくん……なにしているのおく?」

目を赤くして俺と大ちゃんを睨むフランがいた。

いつぞや見たたく狂気に溺れているわけでもないのに、冷や汗が止まらない。

あの時よりも数倍危機感が増している気がする。

「フ、フラン? これはだな……って、大ちゃん寝るな!」

大ちゃんは急に頬ずりを止めて静かになったと思つたら、俺に抱き付いたまま寝てしまつていた。

これでは逃げられない。

「おにーちやーん!!」

「ちよつ、待てフラン。この状態で飛び付いて……ギャー!?!」

大ちゃんが眠つてしまつたので、体勢を変える事が出来ず。フランのタツクルを背中からモロに受けてしまった。

「大ちゃんに衝撃が伝わらないように受け止めたのは、流石と言っておこうか。さて、私達は戻ろうか、妹紅」

「そうね。じゃ、ユウキ君。ごゆっくり♪」

「待て、2人共! あーもう! 不幸だー!!」

宴会の喧騒に負けないくらいの大音量で、俺の叫びが月夜に木霊した。

つづく

第44話 「宴会VI」

深夜近くにまで及んだ宴会も、ようやく終わった。

今は慧音と藍が残って後片付けを手伝ってくれている。

「全く……あいつらだったら、たまには片付けをしてくれてもいいのに」

「まあまあ、私達が残っているからいいだろう？」

散らかった皿など、惨状を見ながら文句を言う霊夢を慧音が慰めた。どうやら、毎回こうらしい。

「咲夜くらいは残ると思ったのに、レミリアが酔い潰れて看護の為に一緒に戻ったし！」
「フランが呆れた目をしていたな」

フランはレミリア並に飲んだはずだけど全く酔っていないくて、ぐでんぐでんになったチルノや大ちゃんを介抱していた。

吸血鬼も酔い潰れるんだな。覚えておくか。

「ユウキ君。君は今日の主役だ。後片付けは私達に任せて、もう休んだらどうだ？」
「私も構わないわよ。明日からはしっかり手伝ってもらおうし」

藍と霊夢はこう言うってくれたが、久々にお酒を飲んだせいだろうかど眠気が全く来な

い。

ま、4日間徹夜した事もあるし。

「せっかくだけで、眠気もないし。それに、こういうのは新入りがやる事じゃないか？」
「ふふつ、君は面白いな」

そう言つて藍は笑つた。美鈴のような大人っぽい笑みや、咲夜のようなお淑やかな笑みとは違う、上品な笑みだと思つた。

「とか言つて、本当は藍と一緒に片付けしたかっただけじゃないの？」
「？ 別にそんな事ないぞ？ 男手あつた方がいいだろうし」

ジト目で霊夢に睨まれた。慧音はそれを見て向こうで笑つてるけど、何だろ？

「……ふんっ」

なぜか不機嫌になつた霊夢は台所に行つてしまった。

「あの博麗の巫女がか……うん、君をここに住ませた紫様の判断は正しかったようだ」
「紫の判断？ 何か怪しい事企んでるとか？」

式神である藍の前で主人の事を言うのは、おかしな話だけど紫は油断ならない怪しい奴と言う認識は伝えた方がいいだろう。

「やれやれ、紫様もすっかり警戒されてしまったか。仕方がない事だが、まだ君には何も手を出していないはずなのだがな」

主人を悪く言ったのに藍は諦め顔で溜息をついただけだ。どうやら、紫は怪しいという認識は藍もあるらしい。

「同じような空気をする奴、元いた場所で何人も見てきているからな。藍には悪いけど、紫は胡散臭いし」

「ぶつ、あはははははつ。胡散臭い、か。確かに。だが、そうはつきりと言う外来人は君が初めてだ。本人にも言つてあげるといい、きつと驚くよ」

藍、本当に紫の式神か？ 思いつきり肯定してるし。

「紫様は確かに胡散臭いが、それでもこの幻想郷を愛しているのは確かだ。そして、霊夢と君の事もかなり気にかけている。それは忘れないでくれ」

「ああ、それは感謝してる」

従者の顔になった藍に、少し照れくさかったが返事をした。

確かに紫は警戒しているが、同じくくらい俺を気にかけている。なぜかは知らないけど、何かに利用するような感じではないな。

ま、隠しているだけかもしれないけど。

「それで、結局藍は何しに来たんだ？」

「何、とほつ。」

「俺に、何の用があつたんだ？」

俺と藍の間に冷たい空気が流れた。台所から食器を洗う音だけが聞こえてくる。霊夢も慧音もこつちにくる気配はない。気付いていて、止めないだけだろうが。

「……君は、本当に鋭いのか鈍いのか分からない」

藍はそう言つて苦笑いを浮かべた。別に隠す気はなかったのかもしれない。

「ただの、観察だよ」

そう一言だけ言つて、藍は座布団の山を持つて奥へと行つてしまった。

俺もそれ以上追及する気はなかった。これはメッセージ。

紫が何を企んでいようとも、利用されるだけで終わるつもりはないという、宣戦布告に近いメッセージだ。

宴会が終わり半刻程過ぎて、やっと後片付けも終わった。

ユウキさんや慧音達のおかげで、思ったより早く済んだわね。

部屋に戻つて寝ようと思つてしていると、離れの縁側にユウキさんが座つて月を見上げてるのが見えた。

「……疲れただろうからゆっくり休みなさいって言ったのに」

仕方ない。と私はユウキさんの元へと行つた。

なぜこうも気にかかるのか、自分でも分からないけど彼を放つておく事が出来なかつ

た。

それに、どうしても聞いておかなければいけない事もあるし。

「ユウキさん、どうしたの？ 眠れないの？」

「霊夢こそ、疲れただろうに寝なくて大丈夫か？」

近づく私に振り向いたユウキさんの顔、なぜかさつきとはまるつきり違うように見えた。

さつき見たユウキさんは、まるで生気を感じないような顔をしていたように見えただ、気のせいだったのかしら。

「私はこれから寝ようとしてたのよ。で、あなたは どうして？」

「ちよつと、な……」

私は彼の横に座り、一緒に月を見上げた。

今夜は満月。明るい星空と月明かりのおかげで、灯りがなくても外は明るかった。

彼は何も言わず、私も何も言わない。

そう言えば、さつきも外で妹紅と一緒にこんな事してなかったかしら？

「霊夢、ここの連中は どうしてあんなに気前が良いと言うか、人がいいんだろうな。大体が人じゃないけど」

「二つ忠告しておくわ。連中は妖怪よ。人を襲うし、食べもする。そうする事が存在意

義だから」

「それは分かっている。レミリアやフランは人の血で出来たケーキとか食べてたしな。でもなぜかすぐに普通のケーキ食べるようになったけど」

あの吸血鬼姉妹がね……別に人里を襲ってなきや私も紫も何も言わない。

大抵は外来人が運悪く捕まって餌食になるだけ。

ま、見かけたなら助けていたけどね。

でも彼とは皆、割と親切に接しているわね。チルノや大妖精たちは元から無邪気だけど、ミスティアやリグルは警戒心強いはずなのに。

それより何より、文が一番驚いた。彼女だつて最初はかなり彼を警戒していた。

でもいつの間にか……あ、あそこまで露骨にアピールするようになったし。

レミリアやフラン達は異変の時に借りが出来て、それから1週間ほど生活する中で色々仲良くなったかもしれないけど。

ちよつと、違和感があるわね。

「でも、全員が全員あなたに好意を抱いているわけじゃないのよ。油断していると食われでも知らないわよ?」

「それも分かっているさ。紫はまだ俺を警戒してるし、いざとなれば殺す気だろうな。後は、幽香と……魔理沙か」

驚いた。紫や幽香はともかく、魔理沙の事まで気付いていたなんて。

霖之助さんは言い渋っていたけど、魔理沙がユウキさんの事で何か言ったのを気にしてたのだと思う。

「そ。気付いているのなら聞くけど……魔理沙に何をしたの？ あの子にしてはちよつと珍しいわよ？」

魔理沙は他の連中同様に最初ユウキさんに興味を抱いていたけど、今は警戒心どころじゃなく完全に敵意を向けている。

「うーん、思い当たるのは、数日前に魔理沙が紅魔館の図書館に侵入してきた時の事かな」

そう言つて、ユウキさんは魔理沙と弾幕ごっこをした時の事を話してくれた。

「本当にそれだけ？」

「ああ、幻想支配で魔理沙の能力を使ったけど、それはパチュリーと魔理沙を助ける時の一瞬だけで、後はパチュリーの力使ったぞ。能力停止も使つてないし」

「なるほどね……」

彼の言葉通りなら、魔理沙が敵意を抱いた原因は……お姫様だっこされた事？ あの子アレで結構乙女だから……つて絶対に違うわね。

なら、残る可能性は1つか。でもこれは私から言う事じゃない気がするわね。

それよりも、ユウキさんが何も感じていないようなのが気になるわ。魔理沙から嫌われていると言われても、ふーん、とほぼ無反応だし。

「意外ね。魔理沙の事、全然気にしてないの？」

「気にするって……何を？」

「敵意を向けられているって事よ。そう言えば、幽香に殺意を向けられても気にしないどころか、それ以上の殺意で返答していたみたいだし」

さっきの場面を思い出す。藍が止めていなければ2人の間に割って入ったかもしれない。

それほどに、あの時のユウキさんは冷たく怖いほどだった。

「うーん、これ何度も言っているけど、元の世界で戦争を経験したり、外道な奴らと渡り歩いたりしてきたんだ。あの程度の敵意なんて、俺には慣れっこだ」

「そういうものかしら……まあ、ユウキさんがそう言うならいいわ。ただ、魔理沙以上に幽香には気をつけなさいとだけ言っておくわ」

「ありがとな、霊夢」

元の世界……学園都市と呼ばれるユウキさんがいた場所。

そうだ。ユウキさんに聞かなければいけない事があつたんだ。

「ねえ、ユウキさん……」

「ん？ なんだ？」

「だけど、面と向かってしまうとしても言葉にならない。

これを聞く事がユウキさんにとってどんな意味を持つか、その答えがどんなものか、私には分からない。

でも聞かなければいけない。そんな使命感にも似たものを感じる。

だから……聞く。

「ユウキさん……元の世界に帰りたい、なんて思わないの？」

その時、ユウキさんの表情が見えなかった。確かに表情が変わったのに。

月が一瞬雲に隠れ、その影がユウキさんを覆ったからだ。

雲が晴れて、またユウキさんの顔が見えるようになったが、その時はいつもの表情だった。

「……思わないな。元の世界へは帰れないって言われたんだ。なら、こっちで生活する事を考えるのに手一杯だったし」

レミリアから宴会の途中で昼間の話を聞いた。

ユウキさんは、他人に忘れられる人間じゃない。

幻想郷に来てから性格や人格が変わったとは到底思えない。

つまり、ユウキさんは幻想郷に来る前からこんな厳しい中でも誰にでも優しくして、お

人よしだったはず。

レミリアがそれを指摘した時、彼はひどく狼狽した。過呼吸にまで陥るほどに。

トラウマ。彼にとって幻想郷に来た事自体がトラウマになっているのか、それともそれ以前にトラウマになるような事があったかは分からない。

「そう。なら早くここでの生活にも慣れてもらわなくちゃね。さ、明日は私もゆつくり寝るつもりだから、早起しなくていいわよ。食事も宴会の料理で残りがあるからすぐに用意出来るしね」

これ以上、彼とここで話すと多分、私か彼、どちらかが壊れそうな気がした。だから一方的に切り上げる。

「ああ、俺も眠れそうだな。おやすみ、霊夢。明日からよろしく」

「こちらこそ。明日からビシビシこき使ってあげるから覚悟なさい。根を上げないようにな」

「ははっ、そう簡単に俺は根を上げる事はないぞ？」

軽口を叩きつつ、笑顔で彼におやすみを言えた……と思う。

それから自分の部屋に戻り、後ろを振り向くと彼も自分の部屋に戻って行ったのが見えた。

「……おやすみなさい、嘘つきさん」

第45話 「レポート：外来人の脅威性について」

『外来人に関する報告書』

対象者

氏名：ユウキ

名字は不明。数回尋ねた事はあったが、返答はなし。

種族：外来人

ただし、外の世界からきたのではなく、未知の異世界から流れてきたので異世界人とも言える。

幻想郷や外の世界の人間と構造上の変わりはない。

性別：男性

年齢：16

外見：少し赤みがかった黒髪、こげ茶色の目、身長は高く香霖堂の店主並、体重は不明だが推定数値は標準並。

筋肉質で全身が引き締まっており無駄な筋肉は付いていない。力でも速度に特化でもない、バランス型の肉体と言える。

目立つ所にはないが、全身に古傷がある。

身体能力：体力も含め全体的に極めて高い。博麗の巫女も含めた幻想郷の人間内では一番の能力値と思われる。

特筆すべきは動体視力と瞬発力であり、どんな弾幕をすり抜けて突破する眼力と体力がある。

魔術や幻術、呪術の類は使用せず、ただし、毒物や薬物への対抗力は高く、自然治癒力と免疫力も高いと推測される。

性格：良い意味でも悪い意味でもお人よしであり、困っている人には手だったり口だったり出す偽善者。

温厚ではあるが、冷酷さも持ち合わせている。

悪人である事を自称していて人を殺すことへの抵抗感はないが、まずはそれ以外の方法を模索する。

自分より他人を優先させるが、自滅志願者でも自己犠牲者でもなく他者依存者でもない、形容しがたい性格。

特徴：子供に好かれやすく、本人も子供には弱い。だが、敵として現れた場合には老若男女問わず容赦はない。

元いた世界では人殺しや暗殺、護衛、破壊活動など様々な活動をしていた何でも屋ら

しい。

対価を払えば自身への実験も了承する。気配を読む事に長けていて敵意や殺意に敏感だが、好意には困惑を示し鈍い面もある。

能力：幻想支配（イマジネロード）

能力を持った人物を視る事で、その能力をコピー出来る異能。

視た相手の能力を強制的に停止させ、発動も阻害する事が可能。

その際、目の色が変わる。目の色は視た相手が使用する力によって変わる。

人間がもつ霊力は青、妖怪が持つ妖力は銀、魔法使いの魔力は赤、妖精など自然が具現化したものの力は緑となる。

ただし条件があり、初めて視る異能相手や強大な力の持ち主相手では視れない事があつたり、効果が現れるまでに時間を要し、コピー出来る時間もごくわずかに限られる場合がある。

弱点：幻想支配は1人しか効果を發揮せず、多人数の能力を一度にコピー出来ない。また、能力を無効化している間は身動きが取りにくくなる。

本人自体は霊力も魔力もないただの人間なので、単体では空を飛べず弾幕も撃てない。

また、力を用いない身体能力には効果がない。

例えば現在はいないが鬼を幻想支配で視た場合、鬼の能力はコピーできて身体能力はコピー出来ず、天敵となると本人も認めている。

対処法：前述の通り、強大な力を持つ相手ほど優位に立てるので、単体では天狗とはいえ分が悪い。

加えて身体能力も高い為、白狼天狗では例え数人掛かりでも返り討ちの可能性が高い。

それでも彼を排除しなければならない時は……』

「だあ〜……もう!」

そこまで書いて私はレポートを書いた紙を丸めて、ゴミ箱へと放り投げた。

「ダメだ……うまく書けない。いえ、書きたくない……」

外来人のユウキさんの事を大天狗様に報告する為、報告書を書きだして数時間経ったけど一向に進まない。

「脅威性、ねえ。こつちが敵に回す事さえしなければ大丈夫だと思うけど……」

大の字に寝転がり外を見ると、もう日が傾き始めていた。

「昨日の宴会は楽しかったなあ……せつかく、良い気分だったのに」

今朝軽い二日酔いの中、大天狗様から直々に報告書を催促された。

確かに、数日前に言われてそれから色々調査はしてきたけど、そこまで急かされるな

んで。

「ま、幻想支配の事知ったら黙っていられないのは分かるんだけどね」
やっぱり隠しておくべきだったかなあ。でもそれは色々まずいし。

「これも気乗りしなくなるとは……はあ」

本日何度目かの溜息。

朝から彼の今までの監視報告を纏めているけど、どうしても最後の項目が書き進められない。

ユウキさんが【退治する側】ではなく【敵】として現れた場合の対処法。
簡単に言えば、どうすれば彼を殺せるか。

「敵、か。異変が起きれば解決する為に、私や他の天狗と対峙する事もあるけど……」
さつきから同じような考えが、頭の中でグルグル回っている。

彼が敵として現れたらどうするか。

私は、彼を……殺せるか。

「……そんなの、考えたくないに決まってるじゃない」

そんなのは絶対に嫌だ。

「あらあら、随分乙女チックな顔してるわね」

突然、この場にいないはずの声が聞こえてきた。

なんで？ それはちゃんと破って捨てたのに……あつ、戻したんですか、そうですか。……オワツタ、シノウ」

首をつろうか、それとも空から落ちて落下死にしようか……

私がフラフラと外へ出ようとする、スキマ妖怪が苦笑いを浮かべながら肩を叩きました。

「まあまあ、待ちなさいって。この事は彼にも霊夢達にも秘密にするわよ。コレもホラ、この通り綺麗さっぱりよ」

スキマ妖怪が手に持ったメモを消し飛ばしたのを見て、私もようやく心が落ち着いてきた。

「……で、他に何かご用でしょうか？」

私が彼をずっと観察していたのを知っていて、その報告を堂々と盗み見る為だけとは思えないわ。

「そんな怖い顔しないでよ。色々な観点から彼を監視したかったのよ。お詫び……と言うか、代わりに良いモノみせてあげるわ」

そう言つてスキマ妖怪は、一冊の冊子をスキマから取り出した。

その冊子には「幻想支配考察 パチュリー・ノーレッジ」と書かれていた。

「これは、紅魔館の魔女が？」

「ええ、そうよ。あの魔女の観点から幻想支配を調べるようにとお願いしたの。で、ある程度の事が分かった訳よ。いいから読んでみなさいな」

そう言えば、あの魔女も幻想支配の事調べてたわね。

まー調査結果を見せてはくれないだろうな、とは思ってたけど、これは棚ボタ。

『幻想支配考察』

結論を先に言くと、幻想支配・ユウキには靈力や魔力に該当する【力】が存在する。

しかし、その力は無色透明と言うべきものであり、どれだけの量を持っているか観測する事は不可能に近い。

ならばなぜ力の存在を確認出来たのか。それは彼が幻想支配を使用する過程を数日に渡り観察した結果である。

幻想支配とは、他者の靈力や魔力などを目で視て自身の力に染め上げるものである。

透明な水が様々な色に変化していくイメージだ。

彼の元々の力は無色透明なので他者の力を容易に浸透させる事が出来、尚且つ他者への力に干渉して同調させる事で支配する事も可能になる。

浸透させた力は行使する事で消耗して薄まっていき、元の無色透明な力に戻っていく。

また強力な力は自身に浸透させるのに時間を要し、またすぐに薄まっていく。力を使えば使うほどに能力の使用時間が伸びて行くのは、彼の力が他者の力に慣れて行き、使っても薄まる割合が小さくなつていく為である。

幻想支配の能力使用条件もいくつか分かつた事がある。

① 霊力や魔力などを使わない能力は、幻想支配が通用しない事。

② 道具や武器を必要とする能力の行使には、力をコピーするだけでは使用出来ないと言う事。

②については彼自身の口から説明があつた。

元いた世界の魔術師達は何らかの霊装と呼ばれる道具や魔道書を用いて魔術を発動させる。

彼がその魔術師が使える魔術を行使する為には、その道具がなければ使用できない。

ただし、魔道書や霊装を使わず己の魔力のみで発動させる魔術は彼にも使用できる。

また、魔力を停止させる事が出来れば相手も霊装があつても魔術を行使できなくなる。

なので彼は元の世界の魔術師達からは特に警戒・嫌悪されていたようだ。

こちら側で例をあげるならば、霧雨魔理沙。

彼女の魔法は箒やミニ八卦炉を使用したものが多い。

魔法、スペルカードの一つ「マスタースパーク」はミニ八卦炉を使用する事で発動させていた。

もし彼が彼女の魔力をコピーしても、ミニ八卦炉を持たない彼ではマスタースパークは使用できない。

彼女がミニ八卦炉を使わずに発動出来るのかは不明だが、恐らくそれなしでは効果は激減するだろう。

①について。

これは体質による能力によるだろう。

能力持ちの幻想郷の住民は数多くいるが、大抵は霊力や魔力などの力を用いた能力が多い。

咲夜や美鈴も霊力や妖力を元にした能力だ。

ただし、幻想郷の能力は体質が元になった能力がある。

先日知った「蓬莱人」がそうだ。

藤原妹紅という蓬莱人は、「老いる事も死ぬ事も無い程度の能力」と言う能力を持っている。

もし彼が藤原妹紅を幻想支配で視たとしても、この能力は使えない。

なぜなら、藤原妹紅は特別な薬を飲む事で不老不死になったので、霊力や魔力を使っ

ていないからだ。

なので幻想支配で視た場合、彼女の霊力をコピーして、発火などが使えるようになるだけだ。

このように薬や元からの体質で得て、力を必要としない能力には幻想支配は無力である』

後冊子に書かれているのは、彼自身に関してや実験結果などで目新しい情報はなかった。

「蓬莱人に関しては、昨日の宴会で彼が実際に藤原妹紅を視て試したそうよ」

そう言えば、宴会の後半でユウキさんと魔女と蓬莱人の3人がどこかに行っていたわね。

はたてに絡まれていて後を追うどころじゃなかったけど、そんな事してたのか。

それにしても、昨日の宴会の後すぐにこの追加項目を書きあげたって事よね……

あの魔女も宴会で結構酔ってたと思っただけ、スキマ妖怪に急かされて急いでかきあげたのかしら。

……恐らくそうだろう。御愁傷様と心の片隅で手を合わせておく。

「なかなか興味深い内容でした。一応礼を言っておきます」

「レポートを見た代わりよ。ところで、さつきこれを博麗神社のユウキさんと霊夢に見

せに行っただけ。彼はなんて反応したと思う？」

ユウキさんの反応ですか、幻想支配の事は彼も知っていた感じだったし、元の世界でも分からない事だらけだったから喜んだか、驚いたかかな。

「ふーん。の一言で終わったわ」

「えっ？ いや、もつと他の感想は？ 驚いていたとか、喜んでいたとかは？」

「なかつたわね。霊夢もその反応に驚いていたわ。これを読んで初めて分かった事が多かったみたいけど、ものすごく淡泊だったわ」

か、彼らしいと言えはそうかもしれないけど、反応が薄いつてもんじゃないわ。でも……やっぱりは。

「霊夢と似ているようで、まるで正反対。他者に関心を持たない霊夢と自分に関心を持たないユウキさん。って所ね」

私と同じ事を思っていたのか、スキマ妖怪が呟くように言った。

「それが博麗神社に住ませた理由の1つですか？」

ユウキさんを博麗神社に住ませる理由。彼も考えていたみたいだけど、どうも霊夢に対しての何かの為に住ませたみたいね。

最も、それだけじゃなくて別の理由も色々ありそうだけど。

「ま、そうね。彼に関わる事でみんな少しずつ変わっていったわ。紅魔館の連中も、それ

にあなたもね」

「わ、私はなにも変わっていませんよ！」

「ふふつ、その顔じゃ説得力がないわね。」

そう笑いながら言う彼女に私は抗議したが、どうも顔があつい。

「そんな彼と一緒に住む事で霊夢も何か変われば、と思ったわ。で、それが理由の1つ

……あとは内緒よ」

「でしようね。あなたはそんな単純じゃないですものね」

付き合いはそれなりに長いですが、スキマ妖怪の考えている事は簡単には読めないわ。

「ふふつ、そういう事よ。それじゃ、お邪魔したわね」

「あ、待つて下さい。1つ気になる事があるのですが」

そう微笑んでスキマで帰ろうとする彼女を呼び止めた。

「……何かしら？」

スキマ妖怪は扇で口元を隠しながら振り向いた。

その目はさつきまでと違う。

「なぜ、あなたは【まだ】起きていますか？ あの吸血鬼や彼の事で目覚めたの

は分かりますが、いつも目覚める時期には早いはず。もう少し睡眠を必要とするのでは

ないですか？」

スキマ妖怪はいつの頃から冬の時期に数カ月眠るようになった。

妖力の回復の為か、もしくは別の理由かは知らないけど。

でも、今まで年末年始など冬の間にかかる事はあっても、すぐにまた眠りについていて本格的に活動を始めるのは桜が咲く時期だ。

今回は彼が来てからずっと起きています。

たまたま、と言う事も考えられるけど、違う理由があると思った。

これは記者としての勘と言うよりは、用心深い天狗としての勘。

「……近々何か起きる予感がするのよ。嫌な予感と言うやつね。下手をすれば、吸血鬼達が来た時以上にもなりそうな程の……」

真剣な表情で言う彼女の目は嘘を言っているわけでも、冗談を言っているわけでもない。

これは、ちょっと厄介な事になるかもしれないわね。

「でも、その時は霊夢や彼に動いてもらうから。私は何もしないけどねー」

真顔から一転し、いつもの怪しい笑顔を浮かべあつげらかんと笑いながら、彼女はスキマに消えた。

「……はあく、どうも彼女と話すと疲れるわ」

スキマ妖怪が来た理由や、あの魔女のレポートの事は頭の隅に置いておくとして、まずは報告書報告書つと。

『幻想支配が敵対した時の対処法。』

彼が自分から進んで妖怪の山へ敵対する事は考えられず、仮にこちらから彼を排除しようとした場合、最悪紅魔館や博麗の巫女、人里の守護者やその他多くの妖怪や人間を敵に回す可能性がある為、現時点で行動を起こすのは愚行である。

彼の能力は非常に脅威になるが信頼関係を結ぶ事こそ、我々への有益となりえる。

よって、彼の事は現状維持として観察の続行を進言いたします。

射命丸 文』

「よしつ、出来た！」

ようやく満足いく出来となったこの報告書を大天狗様へ見せた所。

「文……要するに彼を観察する名目で、彼の側にいたいって事じゃないのかこれは？」

と、やけにニヤニヤしながら凶星を付かれた。

「そ、そそそんな事あるわけじゃないですか、いやだなあ大天狗様」

「はたてが文にも春がキターと言っていたが、こういう事だったか。いや、結構結構」

あの報告書を読んでどうしてそんな結論になるのか、大天狗様に言いたかったけど、

まずは……

「変な事吹き込んだのははたてかあく！」

はたてとOHANASIする必要があるわね……

つづく

第46話 「香霖堂」

博麗神社に住み始めて、数日が過ぎた。

「ん……朝か」

窓から指す日の光で目が覚め、寒さの中服に着替える。

作りがしつかりしているのか、離れの中はそれほど寒くはない。

「晴れるには晴れたけど、雪がまた積もってるな」

ここ数日は神社から外へ出てはいない。

宴会の時は少し暖かくなってきたなと思ったけど、また寒さが戻ってここ数日は吹雪の日が多かった。

幻想郷の一年の気候がどういふものかあまり分かってないので、この時期にこれだけ寒いのは春が遅いのかいつも通りなのかは分からない。

ただ、昨日も霊夢がうんざりした顔をしながらも全く驚いていないので、例年通りと言ふ事なのだろう。

「霊夢はまだ寝てるな、朝食先に作るか。除雪は後だな」

ここ数日で決めた事。

まず朝食は俺が、夕食は霊夢が作り、昼食はそれぞれ外で食べる事もあるだろうからと、交代で作る事になった。

掃除は2人で分担して、洗濯はそれぞれが行う。女の子の洗濯物を俺がするわけにはいかないしな。

霊夢は気にしてないようだったが、下着の事を遠回しに言う顔は赤くして慌てふためき、結局各々自分でやる事に決まった。

その時の霊夢は不覚にも少し可愛らしいと思ったが、勘が鋭いので気付かれたのか横目で睨まれた。

「さてと、まだ食材残ってたかな。あ、昨日チルノが持ってきてくれた魚がまだ残ってたよな」

宴会の翌日に生活用品を買う為、人里へ行きついでに香霖堂へも行く予定だったが、紫がやってきて俺の能力の話になり、結局その日は行けなかった。

で、次の日から吹雪となり今日まで買い物に行けなかった。

俺が来る事になっていたからもしもの為にと、霊夢が買い置きしていたのがあったし、昨日もチルノが魚を持ってきてくれたから助かった。

まあ流石に今日は無理にでも買い物に行くつもりだった。

だけど、見事に晴れたので朝食を済ませたら行こうと思う。

「うん、こういう台所も慣れれば特に問題ないな」

学園都市に居た頃からちよくちよく自炊はしていたけど、電気コンロなど最新の家電を使っていたので、釜戸を使った古風な台所には最初は苦労した。

紅魔館は多少現代よりの台所の作りだったし、咲夜の手伝いをしていただけなので不便はなかったが、博麗神社は昔作りの台所だ。

けれども、見ただけでどういう造りでどう使うかは大体理解出来たし、霊夢からも教わったのですぐに慣れる事が出来た。

ミキサーとかそういう電化製品がないのは不便を感じるけど、そこまで凝った料理は必要ないしな。

「おはよー……やつと晴れたわね」

みそ汁と焼き魚と言う簡単な物だったが、そろそろ出来あがると言う頃に霊夢が起きてきた。

「おはよう、霊夢。もう少ししたら出来るぞ。と言っても、そろそろ食材がまずいから、あまり豪華じゃないけど。後で買い物行ってくる」

「気にしないで良いわよ。私一人の時に比べたら結構豪華よ？ それにしても……やっぱ違和感あるわね、あなたが台所に立ってる姿は」

霊夢は一人の時はあまり食事に拘りはないうで、簡単に済ませていたらしい。

俺が最初に幻想郷に来た日の食事は、結構ポリウムあったと思つたが、客がいればそれなりに作るようだな。

「似合わないか？ 自覚はしてる」

俺が食事作るようになったのは、あのクソババアの悪趣味みたいなものだったしな。台所に立つ俺の姿が面白いから、とか言つてたし。

「これでうまく作るんだから、なんか納得いかない」

「そうか？ 咲夜や霊夢にはまけるぞ」

「……なんでそこで咲夜が出てくるのよ」

「そりゃ、紅魔館のメイド長だし。あそこまでうまい料理あまり食べた事ないぞ」

オルソラも料理上手だったけど、一度しか食べた事ないし。

「そういう意味で言つてるんじゃないわよ。ま、いいわ。魚、そろそろ良い具合じゃない？」

「お、そうだな。じゃ、朝飯にするか」

それから朝食を食べて、昼までかかってやっと神社の周りの除雪を終わらせた。

昼飯を軽く済ませて、午後は香霖堂と人里に行く事にした。

最初は人里を先に行く予定だったが先立つものがない為、香霖堂で元の世界のお金を売る為だ。

「私の力使っていいから飛んで行きましょ。こんな雪の中、歩くには不便だわ」

霊夢がそう言うなら、と幻想支配で霊夢の力をコピーして、飛んで行く事にした。久々に霊夢の力を視て思ったが、今まで視てきた妖力や魔力とは明らかに違った。慧音も霊力を使っていたが、霊夢の霊力はけた違いだ。

「やっぱり凄いな霊夢。身体が軽い、どこまでも飛んで行けそうだ」

「空を飛ぶ程度ならいいけど、あまり私の力で妖怪退治はしないでよ。紫も言っていたけど」

「分かっている。大丈夫だ」

博麗の巫女の力で妖怪を退治するのは、異変の時など非常事態の時以外では使うなど先日紫からも言われているので分かっている。

「でも……ま、危なくなったら私の力使っていいわよ?」

さり気なく付けくわえてくる辺り、霊夢もなかなか心配性だな。

けど霊夢の力使わなきゃいけない程の相手って、普通にヤバイ相手だと思うが。

人里に向かう途中にある、魔法の森。

その人里側の一角に、香霖堂はひっそりとあった。

以前、紅魔館の近くから人里に向かって、慧音に運んでもらった時、ここは通ってな

かったな。

外見は見るからに少し古めかしい雑貨屋と言う感じで、何を売っている店かは分からないな。

中に入ると、更に何屋か分からない程色々な物が所せましと置いてあった。

その奥に暇そう……と言うわけでもなく、椅子に座って商品らしきランプを磨いている霖之助がいた。

「やあ、いらつしやい。君の事だからすぐに来ると思ったけど、やっと来たね」

「ずっと天気悪かったんだ。流星に吹雪の中ここまで来る無茶はしないさ」

「それもそうだね。おかげでここ数日は誰も客が来なくて商売あがったりだ」

「こんにちは、霖之助さん。客が来ないのはいつもの事ですよ。それに利益とかそういうの気にはしていないじゃない」

霖之助は霊夢に指摘されると、苦笑いを浮かべながらランプを台に置いてこちらに向き直った。

「そうだな。冷やかしならよく来るが、ちゃんとお金を払ってくれる客は普段から滅多に來ない。それに僕は利益を出したくて店を開いてるわけじゃないね。さて、早速君の用件を済ませようか、ユウキ」

俺は領り返して、財布を取り出し中であつたお金を出した。

と言つても、普段はカードで払っているから現金はそんなに持ち歩いてはいない。「ふむ、ふむ、これなら……これでどうかな?」

宴会の時に一度見せているので、霖之助は手慣れた手つきで俺の金を計算し、幻想郷のお金を取りだした。

「わつ、結構あるじゃない! ユウキさんもだけど、霖之助さんよくこんなにお金あつたわね」

霊夢がここまで驚いているとは、紙幣価値の違いと言うか……あ、ひよつとして香霖堂って貧乏なのにこんなな金がある事に驚いているのか。

「外の世界のお金の換金は、八雲紫からの仕事でもあるからね。それに関してのお金は結構用意されているのさ。最も、換金時にしか使つてはいけないと言われていたけど」
「なるほど、元いた世界でも古銭買取専門店とかあるしな。で、手数料がこの店の利益つて奴か?」

「そう言う事……正直、ここにある品を売るより、外の世界のお金を換金する方が利益出ているんだよ」

どれだけ利益あるのか知らないし興味もないけど、本業より副業が儲かるのか。

「後、僕が収集している外の世界の品で、たまに危険な物があつてね。それも八雲紫が買い取ってくれるのさ。例えば、武器とか爆弾とかね」

「普通そう言う幻想郷に害がありそうなモノは、幻想郷に着く前に紫が見つけて処分したりするのよ。でも、紫が気付かずに幻想郷に流れてきて、霖之助さんが見つける事もあるわ。あと、魔理沙が見つけて霖之助さんに売る事もあるの」

確かに、ピストルとか爆弾とかそう言うのを子供や、悪意ある人間なんか拾ったら大変だもんな。

何か護身用に良いモノがあれば、買おうかと思っていたけど、そう言う類のモノは期待しない方が良いか。

でも、ここにあるものは見た事あるものやないものなど本当に様々だから、少し興味が沸いた。

「ちよつと見て行っていいか？」

「おすきにどうぞ。壊したりしたら買い取ってもらおうけど、君なら大丈夫そうだ。そうだ、君に見てもらいたいモノがいくつもあるんだ。持ってこよう」

「私も久々だから少し見てよつと」

霖之助が店の奥へと引つ込み、霊夢が手近にあった小さなブローチを眺めだした。

俺も色々見させてもらうか。

「彫刻や絵画もあるのか、でもこれ全部偽物っぽいな」

名前は知らないけど、本やテレビで見た事ありそうな有名な絵画が壁に飾られてい

る。

彫刻の材質や絵画の塗り方を見ると、どことなく新しさを感じる。

俺は芸術には詳しくはないが絵画などの贋作の取引を潰した事もあるので、こういうニセモノは少し分かる。

「で、こっちの棚には昔流行ったロボットや玩具か」

コレを見る限りでは、幻想郷の外の世界も俺のいた世界とあまり変わらないようだ。

こっちの棚には見た事あるロボットやゲーム機が並んでいる。

「これは作り物の花？　なんだか変な造花ね」

霊夢が珍しそうにつつついている花のようなものは、サングラスをかけた造花の玩具、フラワーロックだった。

こんなものも幻想入りしているのか、確か新しいタイプのが出てたと思ったけど。

「それは外からの音に反応して動く玩具だ。けど、電池がないから今は動かないな」

「そう言えば外の玩具や道具って、電池とか電気がないとダメなものばかりよね。なんか不便」

「ま、大抵そんなものさ」

霊夢が目を向けた一角には、古びた掃除機や冷蔵庫が置かれている。

確かにこれは電気がないと動かないな。

学園都市なら自己発電式が増えるから、電気がいらぬ物も多いけど幻想郷の外ではそういう技術はまだみたいだ。

「おーい、これを見てほしいんだ」

霖之助が大小様々な物を両手に抱えて戻ってきた。

「結構沢山あるな。ここにあるのもだけど、これ全部霖之助が拾って来たのか？」

「そうだよ。大抵は無縁塚という所で収集してくるんだ。あ、これをまず見てほしいんだ」

そう言つて霖之助が箱から出したのは、健康器具の数々だ。

「何これ？ みんな変な形してるわね」

霊夢の言う通り、見た目は変な物ばかりで俺の知っている健康器具とはかけ離れてい
る気がする。

「名前と用途が分かるなら、これも大体予想付くんじゃないか？」

「そうは言つてもね。実際使おうと思つても、なかなかうまくいかないんだよ」

確かに。用途が分かつていても使い方が分からないだろうな、これは。

と言うか俺も分からないモノがある。

「えっと、この突起はツボを刺激するものか……こういう風に」

「うわっ!! こ、これはなかなかだね」

適当に手に取ったブラシを霖之助で実際に使ってみた。

「私もやってみようかな？」

気持ち良さそうにしている霖之助をみて、霊夢が少し興味をもったようだ。

「うーん、やめといた方が良いぞ？　こういうものは毎日続けないと効果でないモノ多いし。何より幻想郷に流れてくるって事は効果があまりなくて、外の世界で興味をひかなくなつたつて事だろう」

「毎日か、確かに私には無理っぽいわね」

それから霖之助が持ってきたガラクタギリギリのナニカを鑑定していった。

2時間ほど経過し、あらかた鑑定し終えたので霖之助が振る舞ってくれたお菓子を食べながら、談話となつた。

「クッキーだなんて、霖之助さんにしては珍しいお菓子ね」

霖之助のイメージ的に洋菓子よりせんべいとかの方が似合う名。

「ああ、魔理沙が午前中きてね。置いて行ってくれたんだよ」

「魔理沙がお菓子作り？　珍しいわね」

それなりに長い付き合いの霊夢でも、魔理沙がお菓子を作る事に驚いていた。

ま、俺も少し驚いた。1人暮らししてるそうだから、料理は出来るだろうがお菓子作りをするのはイメージが浮かばない。

「……そうでもないさ。魔理沙は昔から、ストレス解消にお菓子を作る事が多くてね」
「へえ、それは初耳ね。なるほど、霖之助さんは結構魔理沙のお菓子食べてきたのね。私は食べた事ないけど」

なぜか含みある笑みを浮かべた霊夢に、霖之助は無表情で紅茶を一飲みした。

「その口ぶりだと霖之助はひよつとして、魔理沙が幼い頃から知ってるのか？」

「まあね。僕は昔、魔理沙が生まれる前から彼女のお父さんが開いている店に弟子入りしていたんだよ」

魔理沙の父は人里で大型の道具屋を開いているそうで、霊夢も何度か行った事があるみたいだ。

ただ、魔理沙と父親の仲は最悪で、少し前から勘当状態らしい。

詳しくは話さなかったが、魔理沙が魔法の森で一人暮らをしている事が深く関係しているようだな。

これはレミリアやフランとはまた違った意味で、プライベートな問題のようで俺も関わるつもりはない。

「僕から言えるのは、魔理沙は昔から負けず嫌いだけど、それ以上に努力家だって事だね」

なぜか急に魔理沙の性格を言って、霖之助は話を締めた。

霊夢はそれを見て軽く溜息をついた。

まあ、霖之助が何を言いたいのかは、何となくわかったからいいか。

「つまり霖之助は魔理沙の頼りになるお兄さんで、霖之助にとつて魔理沙は手のかかる妹って事か」

「まあ、そう言う事……かな」

霖之助は少し懐かしむように苦笑いを浮かべた。

ふと外を見ると、日がだいぶ傾き始めていた。

特にめぼしいモノはなかったため、俺の分は何も買つてはいない。

「あ、長居しすぎたわね。人里で買い物して帰りましょう」

「そうだな。じゃ、霖之助またな」

「ああ、またごひいきに……それと、魔理沙を頼むよ」

小さく呟くように言つた霖之助に、俺は振り向かずにごう答えた。

「あまり期待するなよ？ お兄ちゃん？」

「ははっ、魔理沙はやらんぞー？」

「あははは、妹離れした方が良いぞー？」

「……先行くわねー」

笑い合う俺達を呆れた目で見ていた霊夢を追つて、俺も空へと飛んだ。

「結構長居しちゃったな」

「そうね。この時間でもまだ良いモノ残っていると良いけど」

あまり暗くなると店が閉まるのは、どこも変わらないな。

「そうだ、霊夢。はいこれ」

俺はさつき香霖堂で手に入れたブローチを霊夢に渡した。

それは、霊夢が最初に眺めてそれから何度かちらちらと視線を向けていたブローチで、キラキラと輝く赤い水晶が付いている。

「えっ? ど、どうしたのよこれ!? 高いんじゃないの?」

「ん、色々鑑定した報酬としてもらったものだよ。霊夢それ興味あったんだろ? 色々

世話になったし、これからも世話になるからな。それくらい安いモノだ……買って買ったわけじゃないけど」

それほど派手な装飾ではないブローチだが、綺麗な水晶がついていて実際に買おうとすればそれなりの値段はしただろう。

うーん、そう考えるとあの程度の鑑定でコレは香霖堂の赤字になるんじゃないかな。

ま、そういう所は霖之助気にしないみたいだから、俺も気にしない。

「いや、私は別にただ変わった水晶がついてるなー、とそれくらい……だけど、その、ありがと」

気恥ずかしいのか、霊夢は夕日に負けないくらい赤くなりながらアタフタと何か言いかけたが、最後には御礼を言ってきた。

そして、早速ブローチを上機嫌で胸元に付けている。

飛びながら器用だな。

「えへへっ、どう?」

夕日に照らされて、少し恥ずかしそうに笑顔を浮かべる霊夢は、普段見せない子供っぽさを感じて可愛らしかった。

「ああ、とっても似合ってます……可愛いぜ」

「くっつ!? そ、そんな直球でいうなあ!」

俺に可愛いと言われたのがそこまで意外だったか、霊夢の顔がますます赤くなった。全く、ふってきたのは霊夢の方なのに。

そう思うとなんだかおかしくなり、笑いながら速度を上げた。

「ほら、早くいかないと店閉まっちゃうぞー」

「い、い、い、待ちなさい!」

それから霊夢は毎日そのブローチを付けるようになり、俺は文や咲夜達から睨まれることになった。

……そう言えば、ジュースとかを奢る事はあつたけど、こうやって女の子にプレゼン

トをあげるのは、初めてだな。

つづく

第47話 「再戦（前編）」

ユウキさんと香霖堂に行つてから数日後の朝。

私はいつも通りの時間に目が覚めて、また外に降り積もつた雪を見てげんなりしつ、着替えていい匂いがする居間へ向かつた。

そこにはまるで私に来るタイミングを見計らつたかのように、朝食を準備していたユウキさんがいた。

「おはよう、相変わらず朝早いわね」

「おはようございます、霊夢さん！」

「おはよう、霊夢。朝ご飯出来てるぞ」

「見たら分かるわ。良い匂いがしたしね」

最初は、朝起きたら朝食が出来ているつて言うのにちよつと戸惑つたけど、今はもう慣れたわね。

ユウキさんの作る料理は、暖かくて美味しい。

何もせずに美味しい朝食が食べれるのは嬉しいけど、女としては何だか釈然としな
い。

「それじゃ……」

「「頂きます」」

うん、この味噌汁もダシが効いてるし、焼き魚も美味しい。

これは昨日、上機嫌なチルノが持ってきてくれた魚だ。

数日前にもチルノと大妖精が来て、新鮮な魚を置いて行ってくれた。

なんでも、彼女達と出会ったのは霧の湖で釣りをしようとした時で、それが縁なのかよく魚を持ってきてくれる。

たまにルーミアもおすそ分けと、狩った獣の肉を持ってきたりする。

人間の肉じゃないかと不安にはなるけど、肉が手に入るのは嬉しい。

これもユウキさんの人徳ってやつかしら。本人に言ったら否定するでしょうけど。……あれ？ 今声が1人多く聞こえたような？

「つてなんで文がここにいるのよ!？」

そう。食卓には私とユウキさんの他にバ鴉天狗の文までいた。

呑気に味噌汁なんか啜っちゃって!

「ああ、美味しい。ユウキさんの手料理が食べられるなんて幸せですね」

「つたく、朝食食べたらとつと帰れよ。ま、山菜のおすそ分けはありがとな」

「ふふつ。あ、今度は私の手料理を御馳走しますね。霊夢さんよりも美味しい事は保証

しますよ?」

朝から喧嘩売りに来たのかしらこのバカラス。

「よし、その喧嘩買った! ……じゃなくて、無視するな! ……なんであんたがここにいるのよ!」

「へ? ……ちゃんと挨拶しましたよ? ……それに私はユウキさんに誘われたからここにいます。ねえ、ユウキさん?」

何を言っているんだ? ……と言うあきれ顔で文は私を見て、ユウキさんに振り向いた。対するユウキさんはうんざりとした顔をして、私に向き直った。

「朝食の支度をしていたら、いきなりやってきたんだ。山で採れた山菜を持ってきたと言ってる。それと同時に文の腹がなったから、ついでに食べて行けと俺が誘った。以上」

お腹が鳴ったって……うわあ、そこまではつきり言うんだ。

「ちよ、ちよつとなんて事言うんですか!」

「ならもつと詳しく言えば良かったか? ……味噌汁の匂いを嗅いだ途端にグーと言う音が、文のお腹から聞こえてきて、顔を真っ赤にしながらアタフタと慌てる様は可愛かったです、面白かったです?」

「か、可愛いって、いえ、そのような動作を可愛いと言われるのは心外……ではなく、もつ

と別の所を見て言つてほしいといいますか……」

クネクネと気持ち悪い動作で恥ずかしがる文。

「なんだかすごくむかつくわね。ユウキさんもユウキさんで何を言つてるんだか、と睨むように見たが……」

「さて、御馳走様。さつさと片付けて雪はねでもするかな。でも思つたよりは積もつてなさそうだな」

「ええええ〜?!」そこはスルーですか?!」

さつさと朝食を食べ終えて、食器を片づけに台所に向かった。

ド、ドライにも程がある。文に少しだけ同情したくなつたわ。

「はあ、もういいわ。とりあえず、おすそ分けはありがとう、文。で、それだけが目的じゃないでしょ? 何しに来たの?」

どうせ碌でもない事でしょうけど、一応聞いてあげるか。

「はい……実は、新聞を持って来たんです」

「そこまで溜めて行く事じゃないでしょ。それにわざわざ薪代わりにもならない新聞持つてくるのはいつもの事ですよ」

「だから、せめて一度は新聞読んでくださいよ……」

私と文も朝食を食べ終えて、食器はユウキさんが片付けてくれた。

彼、元いた世界じゃ主夫でもしてたんじやないのか、と思つてしまった。

「それに今回の記事はユウキさんにも関係ある事なので、ぜひ読んでもらおうと」

「ん？ 俺に関係ある事？」

食後のお茶を持つてきたユウキさんも、文の言葉に興味を抱いたようだ。

それを聞き、文がニヤリと笑みを浮かべた。

「はい、まずはこれをご覧ください」

「ん、何々？ 『快挙！ 氷の妖精チルノ、見事に白黒魔法使いを撃墜、初勝利！』……

えっ？ チルノが魔理沙に勝った？ 嘘でしょ？」

文に渡された新聞を読んで驚いた。

新聞には弾幕ごっこでチルノに破れて、地面で目を回している魔理沙が写真付きで載っていた。

「私は昨日、最初から最後まで見ていました。チルノは確かに魔理沙さんと弾幕ごっこで真つ向勝負して勝ちましたよ？」

「信じられないわね。魔理沙がハンデでも付けたのか、それとも物凄く油断したのか……」

「やるじゃないか、チルノ。で、霊夢がそれほど驚くつてチルノが勝つのがそんなに珍しいのか？」

ユウキさんはチルノが勝った事に喜んではいるけど、あまり驚いてはいない。

けど、私や文から見ればこれはまさに快挙。

チルノは確かに最強クラスに強い妖精。

でもそれはあくまで妖精の中での話。

弾幕ごっこで魔理沙に勝てるはずもなかった。

紅霧の異変の時も、それ以前にも魔理沙の全戦全勝だった。

なのに、昨日は勝ってしまった。

「魔理沙さんは改良したスペカの試し撃ちのつもりのようにでしたが、慢心はともかくあまり手加減するつもりはなかったみたいでした。けど、一番の勝因は次に書いてありますよ」

文にそう言われ新聞をめくると、そこには記事はなく数枚の写真があった。それを見て私は驚き、ユウキさんは更に嬉しそうに笑顔を浮かべた。

「チルノ、ついにアレを完成させたのか。あーだから昨日上機嫌で魚を大量に持ってきたのか」

そう言えば、昨日チルノと大妖精はかなりの上機嫌だった。

私もユウキさんも何があったのか聞いたけど、2人は秘密としか言わなかった。

「ユウキさん、チルノのコレ、知ってるの？ 私は見た事もないのだけど」

私が驚いたその写真とは、チルノが空中に氷で作った道を滑っている写真だ。

1枚は魔理沙の弾幕を滑りながら綺麗に避けていて、別の1枚は逆に滑りながら魔理沙に弾幕を放つていくチルノの姿があった。

「紅霧異変の時、俺が人里から紅魔館に向かう途中でチルノと大ちゃんに会って、そこで俺が教えたんだよ。この新しいスペルカードをな」

それからユウキさんはその時あった出来事を話してくれた。

確かに私も魔理沙も異変の時に、チルノ相手に1対1を2回やって2回とも圧勝した。

あの時のチルノがすごく悔しそうな顔をしていて、大妖精が必死に慰めてたのを覚えている。

まあ、私達は先を急ぐからほっといたけど、あの後でユウキさんとそんな事があったなんて思わなかった。

しかも、その時文もいた……って思えば、文はずっと一緒にいたのよね。

「あの時、ユウキさんがチルノを慰めたしか言っただけじゃなく、新しいスペルを教えたんだなんて初耳よ」

そう、異変解決後に文からユウキさんの道中の話は聞いたけど、この事は初耳だ。

「いやあく面白そうなネタになりそうだったので黙ってましたが、正解でしたね」

上機嫌な文に文句を言おうと思ったその時だった。

「ユウキ〜！ いるか〜!？」

外から魔理沙の声が聞こえてきた。

こんな朝早くから今日は来客が多いわね……客と言えるものではないけど。

「ん？ どうしたんだ魔理沙の奴、思いつきり苛立ってるな」

魔理沙のどなり声に首をかしげながら、ユウキさんは神社の表に向かった。

私と文もそれにつづいたけど、嫌な予感しかしないわね。

「おはよう、魔理沙。宴会の時以来だけど、今日は朝早くからどうしたんだ？」

軽く雪がつもった境内に出た私達は、鳥居の前で不機嫌そうに仁王立ちする魔理沙を

見つけた。

いつもなら私の部屋にまで朝っぱらから堂々と入ってくる程なのに、今日は外で私達

を待っていた。

それにここ数日見かけなかったのも珍しいわね。

「お前、コレ読んだか？」

そう言いながら魔理沙がユウキさんに投げ渡したのは、さつきまで私達が読んでいた

文々。新聞。

「おお、魔理沙さんにまで読まれていたとは、初めてですね〜」

文はまともに読まれた事が嬉しいのか、口がワの文字になつてる。

「見ての通り、文が持つてきてくれてこれもしっかり読んだ。で、どうかしたのか？」
ユウキさんが不思議そうに尋ねるのを見て、魔理沙が更に不機嫌な顔になった。

これは……まずい、かしら？

「そうか、この新聞にはお前があの時、チルノの力を使って、チルノに新しいスペルカードを伝授したつて書かれてるけど、本当か？」

文々。新聞は嘘、と言うかかなり大げさに書くから、内容が合っているのか本人に直接尋ねに来たのね。

「まあ、そうだな。文の新聞にしては珍しく結構正確に書かれているぞ。つてこの時文も一緒にいたから間違えようがないけど。俺の幻想支配はあの時、チルノの力をすぐに視る事が出来たんだ。で、能力をこういう風に使えばいいぞつて教えた。名前は本人に決めるように言った。すぐにはチルノも使えるようにはならなかったみたいだけど」

なるほど、それがようやく昨日チルノがこのスペカを使えるようになったから、御礼のつもりで魚を沢山持つてきたのね。

でも、肝心の事を秘密にしたつて事は……文の仕業か。

「文、あんた昨日チルノに会つて、スペカが完成した事をユウキさんに黙っているように言ったんでしょ」

「そのとおりです。まあ、本当はチルノさんがユウキさんに弾幕ごっこを挑んで、その時
見せるようにしたかったんですけど、こうなるのは予想外でした」

あー御礼ついでに披露までさせるつもりが、本人がつい忘れちゃったわけか。
で、帰り道に魔理沙と遭遇して、弾幕ごっこになったと言うわけね。

つまり、昨日文はチルノの事を神社に来る前からずっと追っていたのか、気付かな
かったわ。

魔理沙はこっちの会話を聞いているのか分からないけど、ずっと俯いたままブツブツ
何かを呟いている。

「なるほど……そっか……ユウキ、私と弾幕ごっこで勝負だー」

魔理沙はミニ八卦炉をユウキさんに突きつけ、弾幕ごっこを挑んできた。

「はっ? いきなり何を言い出すのよ、魔理沙」

まあ、こう言いだすんじゃないかとは思ってたけどね。

「いいぜ? 朝食後の良い運動になりそうだ」

魔理沙からの挑戦を、ユウキさんはすんなりと引き受けた。

横で文が小さくガッツポーズをしたので、肘を思いつきり急所に突き刺した。

何となくだけど、文はこうなる事を予想していた……いや、こうなる事を望んで仕込
みをしていた気がする。

魔理沙がユウキさんに対して激しい嫉妬の念を抱いていた事は、文にも分かっていたはずだ。

「そうこなくつちやな……で、そのままでもいいのか？ 霊夢や文の力を使わないのか？

もしかして、私の力を使う気か？」

ユウキさんは手ぶらのまま、魔理沙の近くにまで歩いて行つた。

私や文を見るそぶりは見せない。かと言つて、魔理沙に幻想支配を使うようにも見えない。

まさかとは思うけど……

「いや今回、幻想支配は使わない。魔理沙の弾幕やスペカを全部かわしてやるよ」

「なっ!? わ、私をバカにしているのかそれは!」

これには私も文も驚いた。

幻想支配を使わないと言う事は、ユウキさんは飛ぶ事も弾幕を撃つ事も出来ない。

それで魔理沙の弾幕を全てかわす事で勝つと言つた。

いかにユウキさんでも、それは不可能だと思つた。

「馬鹿にしてるわけじゃない。魔理沙は俺に勝ちたいんだろ？ 幻想支配で他人の力を使った俺じゃなく、本気の俺に。だからそれに応えようと思つただけだ」

それを聞いて魔理沙の目が見開いた。凶星だつたみたいね。

魔理沙がずっと不機嫌だった理由。それはユウキさんに負けたからだ。

本人ははつきりとは言わなかったけど、付き合いの長い私や霖之助さんには分かる。不機嫌なのはただ負けただけじゃない。弾幕も打てず、飛べない全くの弾幕ごっこ素人のユウキさんに完敗したのがショックだった。

魔理沙は最初ユウキさんとフランの殺し合いを止めたそうだけど、その時はユウキさんの事をただの素人と思っていたはず。

ユウキさんとフランの弾幕ごっこを見ている時、魔理沙は少しショックを受けているように見えた。

魔理沙は昔から弾幕ごっこが大好きだった。

だからこそ、弾幕ごっこで殺し合いをするユウキさんとフランが気に入らなかったし、その後にはフランの弾幕を身一つで攻略した彼を見て、今までにない弾幕ごっこに衝撃的だったのだろう。

魔理沙は表には出さないけど、かなりの努力家だ。

魔法もそうだけど、弾幕ごっこを面白くやる為に日々新しい魔法やスペカ開発に勤んでいる。

私には負ける事が多いけど、その度に新しいスペカを作って再戦を挑んできている。結果は勝ったり負けたりだけど。

そんな魔理沙が、異変の直前に完成させたスペルカード【彗星・ブレイジングスター】

直接私は見た事ないけど、紅魔館に向かう途中で私用のスペルカードだと言っていた。

恐らく、異変後で私相手に使うつもりだったのね。

それが弾幕ごっこ素人のユウキさんに破られた……魔理沙のプライドはかなり傷付いたはず。

と、ここまでは私の予想。

本人から聞いたわけじゃないから、本当に魔理沙がこう思っているかは分からない。けれども、これだけは分かる。

ユウキさんは魔理沙の嫉妬心と敵意にとっくに気付いていて、それから逃げるつもりはなく、真っ向から受け止めるつもりね。

ホント、お人よしさん。

「そうか。じゃあ……遠慮なく行くぜ、ユウキ！」

「来い！」

魔理沙が箒に跨り、ユウキさんに向けて弾幕を放ちながら突進した。

第48話 「再戦（後編）」

「私の弾幕。かわせるものならかわしてみろ！ 使うのは3枚だけ！」

私はユウキに向けて弾幕を張りつつ、突進した。

別に籌でぶつかるつもりはないけど、それでもただ黙って弾幕を張るだけじゃ済ませたくなかった。

「なら、御言葉に甘えて……」

ユウキがそう言った瞬間、姿が消えた。

幻想支配を使ったわけじゃない。

ユウキはただ全力で突進する私に向かって、ただ走っただけ。

それなのに消えたように見えた。

「こつちだこつち」

「なっ、いつのまに!?!」

後ろから声が聞こえてふり返ると、ユウキは私の後ろにいた。

「いや、ただ全力で走って通り抜けただけなんだけど、そこまで驚くか？」

「……あつ」

ユウキは少し呆れたように苦笑した。

それを聞いて、私も自分の浅はかさに呆れてしまった。

なんて事はない。ユウキの言う通り、驚く事じゃなかった。

私は今まで霊夢やアリス、空を飛ぶ相手ばかりと弾幕ごっこをしていたので、地を走る相手と弾幕ごっこをした事がなかった。

それに弾幕を放つ自分に向かって反撃もせずただ黙って走り抜けるだけなんて、そんな奴はいなかった。

だから意表を突かれたのかもしれない。

私もほぼ全速でユウキに向かって飛んだので、ユウキも全力で走れば相対的に消えたように見えてしまうのは当たり前だ。

思えばユウキはフランを相手にした時と同じ事をしただけ、ただ全力で走って弾幕を突破した。

しかも今回、私はスペルカードを使っていない、ホントにただ弾を撃っただけ。

フランの時に比べたらかわすのは簡単だ。

「や、やりにくいぜ」

「おいおい、始まってまだ数秒でそのセリフかよ。しっかりしてくれよ、チャレンジャー」

挑戦者……か。安い挑発だ。

確かに私はユウキに負けて、そのリベンジに来たのだから確かに挑戦者だ。

『いや今回、幻想支配は使わない。魔理沙の弾幕やスペカを全部かわしてやるよ』

あいつは笑いながらも真剣な表情で私にこう言った。

私には、それが許せなかった。

天才、ユウキにはまさにその言葉に相応しい。

魔女パチュリーの魔力を得ただけで、その全てを理解して、適切に使って私を負かせたんだ。

元の世界で色々な修羅場くぐりぬけてきたからとはいえ、初めて会った時は力任せの素人だと思っていたのに。

弾幕ごっこの素人に私が苦心して編み出した魔法があっさりと破られた。

しかも、私の知らない弱点について。

私がどれほどの努力を、研究を重ねて生み出したのか知らないのに、こいつはあっさり……破った。

それがどうしようもなく許せなかった。

アリスや霖之助はそんな私を察してか気遣ってくれたけど、それが余計にみじめに感じた。

けどこれはただの嫉妬。ユウキは何も悪くない。それは分かっている。

だから宴会で会ったユウキにも普通に接しようとした。

まあ、意識せずに普通に話したつもりなのに、最初は少し嫌味っぽい挨拶になったけど。

けれども、そんな私の心中を知ってか知らずかアイツは私の嫌味を気にせず、いつもと変わらない風に返してきた。

それがまた私には不快だった。これもアイツが悪いわけじゃない、私の自爆だ。

アイツはアリスの魔法についても一目で看破した。だけど、アリスは私と違って驚いただけで、嫉妬している様子はない。

そればかりか、アイツの事を気に入ったようだ。

パチユリーもそうだけど、自分の魔法を簡単に暴かれて悔しくないのか？

聞いてはみたくなかったけど、私は聞けなかった。

その後、アイツは風見幽香にも目を付けられた。

霊夢や紫ですら警戒する程の危険な相手、風見幽香。

幽香の殺気をアイツは涼しい顔で受け止め、更にそれを上回る程の冷たい殺気で返した。

ほんの一瞬の出来事だったが、あの時のアイツの顔は忘れられない。

その殺気はアリスやパチュリー、霊夢達ですら固まるほどのものだった。あれがアイツの本気、いや、あれでもほんの片鱗でしかないはず。

その事に気付き、また、あの時私を負かした時、アイツは全く本気じゃなかった事にも気付いた。

結局、宴会で悔しさと嫉妬心だけが増したただけだった。

「つ、だったらー！ 【星符・メテオニックシャワー】！」

両手を突き出し、大型の星型弾幕をアイツにむけて放った。

最初に使うスペルカードは3枚と言ったけど、こんなに早く1枚目を使う事になるとは思わなかった

「相変わらず魔理沙のスペカは綺麗だな」

「そりやどうも。そのまま当たってくれと嬉しんだけどな」

「無理だな、それは」

アイツは余裕そうに笑いながら、次々と私のスペカをかわしていく。

時には顔をそらし、時には身体を捻り、必要最低限の動きでかわしていた。

「ハのっー」

撃ち方を変えて、アイツの周りを回りながら撃ち放った。

それでもアイツは余裕そうにかわしていく。

弾速をあげてもそれは変わらず、まるで踊っているかのようにかわす様は少し優雅に見えた。

結局アイツには掠りもせず時間切れになり、スペカの効果が切れてしまった。

「魔理沙さん。3枚で足りるんですかー!?」

「うるさいな！ まだ2枚も残ってるぜ！」

文が笑いながら何か言ってきたけど、気にしない。

そう、まだ2枚も残っている。勝負はこれからだ。

さつきはつい挑発に乗って、貴重なスペルカードを1枚使ってしまった。

しかも、あのスペカは一度アイツに使っている。かわすのは簡単だっただろう。

相手は反撃も飛行も出来ない。まずは通常の弾幕でアイツの動きを少し観察しないと。

「もう終わりか？」

アイツは右手をクイクイと動かし、かかってこいと挑発してきた。

2度も挑発に乗ってたまるか。

「まだまだ！」

さつきと同じ轍は踏まない。今度はアイツを囲むように飛びまわって弾幕を撃つてやる。

「そう来るよな！」

アイツは私の動きを読んでいたのか、一目散に林へと走った。

今日はあまり積もってないとはいえ、雪の中をあんなに速く走れるなんて。

そんな事より……

「狭い林の中なら思う存分飛べない、そう思ったのか？ 浅はかだぜ！」

伊達に魔法の森の中でずっと生活しているわけじゃない。

こんな木々が生い茂った場所でも、飛びまわって弾幕を撃つのはお手の元だ。

走りまわるアイツに向けて、弾幕を放った。

木が多少邪魔でうまく当たらないけど、アイツの姿は見失わない。

「だろうな。でも、こっちの方が俺も動きやすいんだよ！」

そう言うとアイツは一つの大きな木の枝につかまり、器用に登り始めた。

「猿かお前は！」

人里の大人でもここまで速く木登りする奴はいない。

あつという間に空に浮く私と同じ高さの枝にまで登った。

「幻想支配を使わないとは言ったけど、それだけだ。他に使えるものは何でも使う。いいハンデだろ？」

「なめる、なあ！」

私はアイツに向けて手から魔力レーザーを放ったが、アイツは他の枝に飛び移って難なくかわした。

そう言えばこちら辺の木々は密集しているだけじゃなく、枝の一本一本がかなり太い。

「ほらこつちだー！」

「っ!？」

アイツはあつという間に枝を飛び移り、私の横にまで移動してきた。

咄嗟に弾幕を放ったけど、アイツはまた枝を飛び移ってかわした。

なんて言う脚力だろうか。速度は私の方が断然に速いはずなのに、アイツは枝と枝をうまく跳び、私を圧倒していた。

「くっそおー！」

アイツを追いかけながら、弾幕を放つが当たらない。

私の弾幕は霊夢のと違って攻撃力は高いけど、ホーミング性能が良くない。

「待てー！」

だから私が直接狙って撃つしかない。

今度自動遠隔操作の固定砲台魔法でも作ろうかと思った。

次々と弾幕を放つが、アイツは枝に飛び移って行くだけじゃなく、時にいきなり反転

して私のすぐ真横を通過したりと変則的な動きをしてきた。

「結構な攻撃力だけど、当たらなければどうと言う事はないんだぞ？」

と言う挑発的な言葉と共に。

速度で勝っている私が先周りにして狙えばいいけど、それをさせてくれない。

アイツは木々の密集している箇所を縦横無尽に駆け回っている。

自分の優位なフィールドから離れようとはしなかった。

それでもあんなに激しく動き回っているんだ。

いくら体力があっても、そろそろ疲れがみえてもおかしくはないはず。

そう思っていると、アイツの駆けまわる速度が落ちてきた。

ここで決める。

「これで、どうだー！」

八卦炉を取りだし、前を跳ぶユウキに向けた。

ちよつと過激だけど、広範囲で高威力のコイツを使えば、どこに跳びまわっていると捕える事が出来るはずだ。

私の取っておきの十八番。

「【恋符・マスタースパーク】！」

「ちよつ、待ちなさい!!」

どこからか霊夢の声が聞こえたけど、私は構わずに放った。

前は図書館内だからそれなりに範囲を狭めて放ったけど、今回は本気だ。

まあ、これが当たっても死にはしない……はず。

「ど、どうだ。やったか!？」

私が八卦炉を降ろして、前を向くとマスタースパークが放った痕には、大きな穴が空いたように木々や枝が吹き飛んでいる。

これは……やりすぎたかもしれない。まさかアイツは……

「そういうセリフを言う時は大抵やってない。フラグって言うんだ、覚えておけ」

少し血の気が引きながらそう思った時、不意に下からアイツの声が聞こえてきた。

「っ!?! ユウキ!?!」

ちようど私の下にある木。そこにアイツは立っていて、笑みを浮かべながら私を見上げていた。流石に少し息が切れているようで、白い息がアイツの口から漏れていた。

「い、いつのまにそんな所に!?! アレを避けたのか!?!」

「図書館の時よりも広範囲だったから焦ったけどな、けどそれが返って良かったんだよ。あんな極太の魔力砲を撃てば、お前の視界はかなり遮られる。マスタースパークが放たれる寸前に、下に飛び降りて隠れたんだよ。ま、ここら辺の枝が太さの割に柔らかくて助かったけどな」

そうか、マスタースパークは確かに広範囲魔法砲撃だけど、それを撃つ時私の視界は遮られる。

その一瞬の隙について、アイツは柔らかい枝のしなる反動を利用して、地面に飛び降りるように避けたのか。

この高さから落ちても下には結構な雪が積もっていて、大怪我をする事はない。

「で、続きと行きたいんだが……少し待ってくれ、さっきの場所に戻るから」

私がマスパで空けた跡を見ながら、アイツは苦笑いをした。

アイツが見ている先には、霊夢が鬼のような顔をして浮かんでいる。

その横では文が呆れ半分といった表情で、私達の写真を撮っていた。

「まくりくさくさ！ 大切な森をこんなにしてくれて、どう責任取ってくれるのかしら？」

「ちよつ、霊夢！ わ、私のせい……だけど、ユウキがここに逃げ込むのも悪いんだぜ！」

「ユウキさん？」

「……アハハハ」

霊夢が睨むと、アイツにしては珍しく乾いた笑みを浮かべて明後日の方を向いている。

「ともかく、やるなら境内でしなさい！」

「わ、分かりました」

それから場所を元いた境内に移して、小休止になった。

ユウキは大丈夫と言っていたけど、霊夢と文が休めと言って無理やり休ませる事にしたからだ。

あの2人があそこまで他人を心配するなんて、かなり意外だ。

休んでいる間、冷静に今までを振り返って私はふと、ユウキの挑発にずっと乗っていた事にやっと気付いた。

安い挑発には乗らないつもりで、乗っていないつもりだったけど、私はしっかりと乗せられていた。

これは……負けたかな。

「どう？ 少しは頭冷えた？」

ユウキと離れた場所で休んでいた私の元に、霊夢がやってきた。

「霊夢……何の事だ？ 私の頭はずっと冷えてるぜ？」

「あらそう？ ユウキさんの挑発に乗って、2枚もスペカを無駄に消耗させられたように見えたけど？」

「うぐつ、そ、そんな事はないぜ？」

精一杯強がったつもりだけど、霊夢のニコニコ顔を見て両手をあげて降参のポーズを取った。

「はいそうです、見事にしてやられました……」

ユウキは私が3枚スペルカードを使うと言った時、既にどういう種類のが来るか予想していたはず。

1枚目の連射型を持ち前の動体視力と反射神経で攻略した後、すぐに場所を移動した。

狭い場所でチマチマと動かれて、私がイライラして木々毎高威力のマスパを使ってくるのを狙った。

あんなに速く枝を跳びまわれるなら境内のような開けた場所よりも、森の方がマスパを避けやすくなる。

私はその狙い通りにマスパを使ってしまった。

「あら、意外と素直ね」

「なっ!?! わ、私はいつも素直だぜ!」

「神社に殴り込んで来てからさっきまで、ううん、ユウキさんに負けてからずっと、素直じゃなかったように思えるけど? ユウキさんに図書館で負けてからの魔理沙、らしくなかったしね」

「う、うぐっ……」

全部見抜かれていた。

だから霊夢に会うのは避けていたのに……でも、アリスや霖之助にも見抜かれたんだし、霊夢ならもうとっくに見抜いているかも。

「それにしても、それまで私の事見抜いてよく止めなかったな」

今はもう大丈夫だけど、あの時の私はひよっとしたらユウキを傷付けたかもしれない。

それほど、私はユウキが許せなかった。

昨日チルノに負けた時、何が起きたのか分からなかった。

フラフラとその場を後にして、気が付いたら家で寝ていて文が新聞を置いてそれを読んだ。

ユウキがチルノに教えたスペカで私が負けた。

記事を読むと、ユウキがチルノの能力を使いあのスペカをすぐに思い浮かんだそう
だ。

私が新しい魔法を作るのにどれだけ努力と苦労を重ねたか、それを笑われた気がし
た。

チルノは魔法使いじゃないし、私と使う力も何もかも違うけど、それでも許せなかつ
た。

ユウキは私が苦勞して編み出した魔法の弱点を一瞬で見抜いたばかりか、もつと隙が

なく美しいと思える新しいスペルカードを即興で生み出したんだ。

これが、天才。私とユウキの力の差をまざまざと見せつけられた気がした。

だから、今日リベンジを挑もうと思った。

「ん？ そうね、魔理沙はユウキさんをかなり妬んで憎んでいるようにも見えたけど……ユウキさんなら大丈夫と思つたのよ」

「少し会わない間に、ユウキに大層な信頼を寄せるようになったんだな。へーふーん、なるほどなるほど」

意地悪そうに言うと、霊夢の顔が真っ赤になった

「なっ、何を言い出すのよ。そういうのじゃないわよ。ただここ数日ユウキさんと一緒に住んで、少しは彼の事が知れたから……それだけよ」

「ん、霊夢、そのブローチどうしたんだ？」

今気付いたけど、霊夢の胸元に見慣れない綺麗なブローチが着いている。

こんなもの霊夢は持っていなかったはず。

「あ、これは香霖堂でユウキさんに貰つたのよ……っ!? か、勘違いしないでよね。彼は世話になるからその御礼でくれたのよ!？」

「あーうん、分かった。御馳走様」

これ以上聞くと体中から砂糖が出そうになったので、話題を終え……ようとしたの

だったけど。

「ちよーつと待って下さい！ 今の話もう少し詳しく！ 何だか見慣れないブローチしてるなと思いましたが、ま、まさかユウキさんに貰ったものだったのですか!?!」

離れた所でユウキと話をしていた文が、私達の話聞いてすっ飛んできた。

結構地獄耳だな。

「ちよつ、文。いきなり胸倉掴むんじゃないわよ、服が伸びるでしょ!」

「良く見ると結構高級そうじゃないですか。ユウキさん、なんで霊夢さんにコレを!?!」

まさか……プロポーズしたんですか!?!」

溜息を吐きながらながらこつちにやってきたユウキに、この世の終わりの表情を浮かべた文が跳び付きながら尋ねた。

「どうやったらそこまで話が飛躍するんだよ。香霖堂でちよつとした仕事の報酬でもらったブローチを、これから世話になる霊夢にあげただけだ」

「な、なんですって……わ、私には、私には何かないんですか!?! 私もかなりお世話しましたよ!?!」

「あるわけないでしょ。あんたはユウキさんの変な記事書いてただけじゃない」

「そんな事ありません!」

……何だろう。しばらく家に引きこもっていた間に、霊夢も文もキャラが変わり過ぎ

てないか？

文は宴会の時からこうだったか。

そんな事より、何だか弾幕ごつこの続きをする空気じゃなくなつたな。

と言うか、霊夢と文が弾幕ごつこを始めそうだぜ。

「……で、お前はもう休んでなくて大丈夫なのか、ユウキ？」

「さつきは食べた後に激しく動いたからで、別に問題はない。続き、するか？」

「いや、いい。あのまま続けても、多分ユウキには勝てないだろうし。なんかもう、今日は満足した」

それを聞いてユウキは少し驚いた顔をしたけど、私は嘘を言っていない。

傍から見れば一方的な弾幕ごつこだったけど、私は満足だ。

ただ逃げるだけじゃなく、考えて動き回る相手にいかにして弾幕を当てるか。

考えてみれば、それはそれで立派な弾幕ごつこだ。

霊夢は私をらしくないと言つたけど、本当にそうだ。

ユウキは確かに天才で、嫉妬もしたけど……でも、それは結局ただの八つ当たり。

「そうか、魔理沙が満足したらないか。今日は引き分けた、俺も楽しかったしな」
弾幕ごつこ中のユウキは、とても楽しそうに見えた。

弾幕を放てず、空も飛べずにただ走りまわって避けるしか出来ないのに、それでも楽

しそうだった。

それを見て、私は心のどこかで恥ずかしいとさえ思った。

ユウキはこんなに弾幕ごっこを楽しんでいるのに、私は何を思つて弾幕ごっこをしているのだろうか。

「……………めん」

私は聞こえるか聞こえないかの小声で、ユウキに謝つた。

ユウキは聞こえていたのだろうか、特に何も言わずに笑顔で霊夢と文が始めた弾幕ごっこを眺めていた。

「弾幕ごっこつて、見ていてもやっていても楽しいな。すぐく好きになつたよ、弾幕ごっこ」

「……………そうだな」

それを聞いて、罪悪感が増した。

「初めて弾幕ごっこした相手は魔理沙で、今日もまたやつたけど、やつば魔理沙相手にすると面白いな」

「お、面白い？」

「ああ、真つ直ぐで力強くて綺麗で、図書館でやつた時に思つてたんだ。またやりたいつてさ。で、今日またやる事ができた。避ける事しかなかったけど、それでも十分に楽

しかった。魔理沙が相手だったからな」

何だかとても意外な事を言われた。

私として楽しい？ 私の弾幕が面白い？

私はユウキを妬んで、憎んでさえいながら弾幕ごっこをしたというのに。

「それは、ユウキが弾幕ごっこをそれほどしてないせいじゃないのか？」

つい捻くれた事を言ってしまった。

「うーん、紅魔館に居た時も神社に居た時も。それなりに弾幕ごっこはしていたんだけどな。本格的なのは図書館で魔理沙相手が初めてだったけど、魔理沙とやって一番楽しいな」

「そ、そうか……」

そう言われるのは初めてだったから、素直に嬉しかった。

「またやろうぜ、魔理沙」

「ああ、その時は今日見せられなかった新しい魔法を沢山見せてやるぜ！」

「うーん、流石に幻想支配使わずには厳しそうだな。うん、今度やる時は霊夢の力を借りる事にしようかな」

「げっ、そ、それは反則だぜ！」

もう私には、ユウキへの敵対心はなかった。

少し妬む気持ちはまだあるけど、それでも恨む気持ちはなかった。今日は引き分けに終わったけど、今度こそユウキに勝って見せる！ その時までにもっと魔法の精度磨いておかないとな。

弾幕ごっこは私が一番好きなのだから。
つづく

第49話 「前兆」

4月も下旬に差し掛かった頃。幻想郷は未だに雪に覆われていた。

流石に怪しいとは思ったけど、慧音曰くここまで雪が残る事は昔からたまにある事と言う事だ。

最も霊夢も慧音も怪しんでいたようだけど、はつきりとは何かを感じてはいないようだ。

「まあ、もうしばらくは様子を見る事にしよう。人里の皆もそれほど不審がつてはいないよ。子供達は雪遊びがまだ出来ると喜んでている程だ」

「そうだな、見ていれば分かる」

慧音と2人して寺子屋から外を眺めると、梨奈達人里の子供とチルノや大ちゃん達妖怪の子供が雪合戦を楽しんでいるのが見える。

その中にはフランの姿もあり、みんなと一緒に楽しそうだ。

今日はフランが初めて寺子屋に来る日だった。

前の宴会で慧音がレミリアと話をして、もう少し力の制御を学んでから来る事にはなっていたが、ようやく今日から通う事になった。

万が一の為に、フランは俺と一緒に寺子屋に来る事にして、朝紅魔館でフランを運えに行き俺は慧音の手伝いをしながらフランの様子を窺っていた。

人間を見慣れていないフランが人里の子となじめるか俺もレミリアも少しだけ心配していたが、その心配は必要なかった。

梨奈が真つ先にフランに話しかけ、他の子達もすぐにフランと友達になれた。

チルノや大ちゃん達も今日はいいたので、馴染み易かったのもあるのだろう。

「梨奈は君の事でフランとよく話をしていたな。なかなかモテるじゃないか、ユウキ君」

「……ア、アハハ」

フランよりも一回り大きい梨奈が率先してフランに話しかけ、2人は大の仲良しになった。

最も、大ちゃんやチルノも混ざり俺の事を色々話しているので、物凄く気恥かしい。話している内容は……耳を塞ぎたくなるほどだったが。

「こんにちは、フランを迎えに来たわよ。どう、あの子はうまく馴染めたかしら?」

「失礼します。御無沙汰しております、慧音先生、ユウキさん」

そこへ咲夜を連れ戻したレミリアがやってきた。

「おや、レミリア、こんにちは。フランの事ならこつちに来て実際に見てみるといい」

「よっ、こんにちは。俺らの心配はいらなかったぜ」

レミリアが窓から外の様子を見ると少し驚いたようだったが、すぐに優しい笑みを浮かべた。

「あの子をここに通させたのは、正解だったみたいね。一日でこうもなるなんて。2人のおかげよ、ありがとう」

「私は何もしていいないよ。最初は不安そうにユウキ君の方を見る事が多かったが、すぐにここに慣れたみたいだ」

「あら、流石はユウキさんね」

「俺は何もしてないっての、咲夜。礼は慧音やあそこでフランと遊んでいる梨奈や子供達に言えよ」

外ではフランと梨奈が雪まみれになりながら、ルーミアやリグルを追いかけていた。

そんな光景をレミリアは羨ましそうに見ていた。

「そんなに羨ましいなら混ざってきたらどうだ、レミリア？」

「へっ？ う、羨ましい？ 私がそんな事思わないじゃ…へブツ!!」

窓から半分身を乗り出してまで、外を眺めているのに説得力皆無だな。

で、顔を赤くしてレミリアが否定していた所に、どこからともなく雪玉が見事に命中した。

「やった、命中♪」

雪玉を当てたのはフランで、もちろんわざとだ。

さつきフランに目で合図を送ったのだが、うまく通じたようだ。

「フ〜ラ〜ン〜！ 良い度胸じゃない！」

レミリアは雪まみれの顔のまま、窓から外へ飛び出た。

一応フランと同じくパチュリー特製の日焼け止めクリームを塗っているから、今日みたいな曇り空で長時間でなければ日傘がなくても大丈夫らしい。

フランと梨奈目がけて雪玉を投げまくるレミリアは、外見相応の子供っぽかった。それを咲夜は暖かい目で見守っている。

「咲夜はどうするんだ？」

「そうですねえ、ユウキさんは？」

「俺は見ているよ……」

と、その時俺達に向けて雪玉が投げられた。それも割と本気の数度で。

「むきゅっ!？」

「……どうやら誘われてるみたいだな」

「そのようですね」

が、次の瞬間には雪玉は2つともレミリアに命中していた。てかレミリア、その叫びはパチュリーのだろ。

「っ!?……ああ、時を止めたのか」

慧音が今の一連の流れを不思議がったが、俺の目をみて納得したようだ。

ついさつきスカレット姉妹が、割と本気で俺達に向けて雪玉を投げてきたのを見えた。

なので俺は即座に幻想支配で咲夜の力を使い時間を停止して、俺と咲夜のすぐそばまで迫っていた雪玉をレミリアに投げ返した。

まあ、俺が咲夜が時間停止してどうにかすると思つてたみたいだけど、レミリアに2発とも投げ返されるとは思つてなかったようだ。

「仕方ないな。せっかくだし、慧音もどうだ?」

「そうだな。たまには童心に帰つて楽しもうか」

「ふふっ、下剋上の時間ですな」

と言うわけで俺達3人も雪合戦に混ざる事になった

咲夜、何だか嬉しそうだな。それに割と本気で言つてないか?

結局みんなで雪合戦をした。

俺、慧音、咲夜対その他のチームでやったけど、結構盛り上がった。

それからそれぞれの親が迎えに来て、お開きとなった。

咲夜が買い物をしてから紅魔館に戻ると言うので、俺も霊夢から頼まれていたのもあつたし一緒に買い物を買ませた。

レミリアもフランも一緒だ。

「でもまさか、お姉様が迎えに来てくれるとは思わなかったよ」

「そうだな。よつぽどフランが心配だったか？」

フランと俺がニヤニヤしながらレミリアを見ると、本人は顔を赤くしてそつぽを向いた。

「わ、私は別にフランを迎えに行くついでに、咲夜の買い物に付いてきただけよ！」

「お嬢様、それは言い方が逆だと思えます。ですが、間違つてはいないですね」

咲夜までもがニコニコ顔でそう言うと、レミリアは顔を更に真っ赤にして帽子を深く被つて顔を隠した。

「ふふっ、お姉様可愛い♪」

「ははっ、これじゃどつちが姉だか分からないな、ん？」

その時、白い何かがフワフワ浮いているのが目に止まった。

少し大きめの籠がぶら下げている。

「うわあ、なにあれなにあれ！」

「人魂かしら？ でも何か違う感じがするわね。咲夜は知ってる？」

「いえ、私もあのようなのは初めて見ました」

フラン達も気付いたようだけど、何なのかまでは分かっているようだ。

道行く人もチラチラ視線を送るが、特に気にはしていないようだ。

人魂のようなものは左右に動いていて、まるで何かを探しているかだ。

やがで俺達の前までやってくると、首をかしげるかのような仕草で止まった。

「俺達に何か用か？」

「あなた躊躇なく話しかけるわね」

俺に何かを訴えるかのような仕草で思わず尋ねたが、レミリアに苦笑いをされた。

確かにこんなのに声をかけるなんて酔狂だろうけど、まあそれだけ幻想郷に馴染んだ

と言う事だ。

「あ、何か言ってるよ。でも……」

「何を言いたいのでしょうか？」

人魂は必死で身体を動かしたり、尻尾の部分をパタパタさせたが俺達には何も伝わらない。

「うーん、俺達は何を言っているかわかるか？」

こっちの言葉は分かるようで、激しく頷いてきた。

「わあ、この子可愛いよ！ お姉様この子、飼っていい!？」

人魂の仕草が可愛らしくフランのツボにハマったようで、思わず抱きついた。

「ダ、ダメに決まっているでしょ。せめて手足が付いているものをペットにしなさい」と言いつつも、レミリアも人魂の仕草に心惹かれていのか興味津々といった目をしている。

そんな主に苦笑いをしていた咲夜だったが、ふと顔をあげた。

「どうかしたのか、咲夜？」

「どうやら、この子の飼い主が現れたみたいよ。ほら、あそこでキョロキョロしている子がいるわ」

咲夜が指さした先には、白髪でオカツパ頭の少女両手いっぱい食べ物が詰まったかごバックをかかえ、こちらに向かって走ってきてるのが見えた。

「もう、どこに行つてたの！ 探したんですよ！」

オカツパ娘は俺達が目に入っていないか、一直線に人魂に向かって説教を始めた。

人魂もシユンとなつて、ペコペコと頭を下げながら何かを言っているようだ。

「お腹が空いていた所に良い匂いがしてきたから、それでついフラフラと？ ってあなたは幽々子様ですか!? って私に言ってもしょうがない!? いやいや、私はお腹など空いていない！ 武士はくわねど親知らずとおじい様が言っていたもの！」

傍から見ると一人で漫才をしている頭が残念な子に見えてくる。

大体爪楊枝じゃなくて、親知らずをどうするんだ。今気付いたけど、この子2本の刀を持っている。

結構物騒な子だ。

「……この子、チルノと同類？」

「流石にチルノと一緒にするのは失礼だろ」

咲夜が真顔で失礼な事を……俺も同じ事考えてたけど。

「おい、そこのお前。いい加減私達に気付きなさいよ」

「何ですか、私は今忙しい……って誰だお前達は!? 気配が全くしなかった……タダ者じゃないわね」

「ねえ、お兄様。この子頭が可哀相」

レミリアが溜まりかねて声をかけて、アホな子はそこでようやく俺達の存在に気付いたようだ。

で、とうとうフランにまで心底同情されてしまったぞ。

「フラン。世の中には色々な人がいるんだ。チルノ以上の頭が空っぽな人もいるんだ。でも、そう言う人に出会っても何も言わず暖かい目で視てあげるのが大事なんだぞ？」

「うん、分かった!」

元氣よく返事をしたフランは文字通り暖かい目で、アホっ娘を見つめた。

つられて俺や咲夜達も同じような目をした。

「な、何なんだお前達は！ そんな目で私を見るな、照れるだろう！」

本気で照れてるぞ、コイツ。

「……咲夜、私頭痛くなってきたわ」

「奇遇ですね。私もです」

紅魔主従コンビが揃って頭を抱えると言うシユールな光景は、結構レアだけどこれじゃ話進まないな。

いや、進まなくていいからとつとと買い物済ませて帰ろうか……

その時、人魂がアホっ娘に向けて何かを訴えた。

「ん、今まで迷子になっていて、私を見かけなかったかこの人達に聞いてた所だった？」

そ、それは失礼しました。私にご迷惑をおかけしました！」

アホっ娘はやつと事情を理解し、急に口調が変わり俺達に頭を下げた。

「ねえねえ、あなたは誰？ そのお餅みたいなのは何？」

「私の名前は魂魄妖夢と言います。これはお餅ではなく、私の半霊です。私は半分人間ですが、もう半分は幽霊なんです」

魂魄妖夢、聞いた事ない名前だな。

それに半分幽霊か、どうりで変な気配がしたと思った。

俺達も自己紹介をした所で、レミリアが半霊を興味深そうに眺めた。

「半霊って言う事はこれもあなたって事なの？」

「はい。本体は私自身ですが、この半霊もまた私なんです……ヒヤツ!!」 な、何するんです、アヒツ!!」

妖夢はいきなり変な声をあげ、よがるように身体をクネクネさせた。

何事かと思ったが、フランが半霊に雪を乗せているだけだった。

「あははは、おもしろーい! じゃあこうしたらどうかかな？」

良い玩具を見つけたように瞳をキラキラとさせたフランが、今度は半霊をくすぐり始めた。

「っ、や、やめ……やめて、くだしや……っく」

「うわあ〜」

顔を真っ赤ににして必死に笑い声を抑えている。

その様子が卑猥を通り越して、すごく可哀相に見えてきた。

「フランお嬢様その辺でやめてあげてください」

「はーい」

「っく、はー……はー……な、なんとか勝ちました」

見かねた咲夜がフランを止めたが、妖夢何と戦っていたんだ？

「私の妹が迷惑かけたわね。大丈夫かしら？」

「こ、これくらい……平気です、鍛えてますから」

妖夢は笑みを浮かべてレミリアに答えたけど、その顔はまだ赤い。

「ごめんね。はいこれさつき落とした荷物だよ」

「ふー……いえ、大丈夫です。ありがとう、フランちゃん」

どうにか息を整え、落ち着いた妖夢が落としたかごバックをフランから受け取った。

その時ちらりとバックの中身が見えたが、びつしりと野菜やら食料品がつまこまれていた。

半霊が持っていたのと合わせるととても少ない量の食料だ。

一体何人分何だろ？

「ひよつとして、半霊が持つてるあの籠にも食糧がびつしりと？」

「あ、はい。ここで買ったものだけではなく、森や川などで見つけた山菜や魚が入っています」

それを聞いて、俺もレミリアも口があんぐりと開いてしまった。

半霊の持っていた籠をみせてもらったけど、確かに山菜や魚が入っている。

「あなた、すごい量ね。一体何人分の食料なの？」

咲夜もそれを見て驚きながら尋ねた。

紅魔館も人が沢山いるとは言え、それに比べても多い。

「……あ、いえ、これは私と幽々子様、私の主との2人分、です」

「2人分!?!」

俺達は驚いたが、妖夢もこれで2人分なのはおかしいと分かっているようで恥ずかしく、そうに小声だ。

「幽々子様は大食でして、それにちよつと最近忙しくてこれからも忙しくなるので、食料の買い溜めしておこうと思ひまして」

それを聞き、レミリアが少し眉をひそめた。

何か気になる事でもあるのだろうか？

「あなたも咲夜と一緒にメイドみたいな事してるのね。それじゃあ、その刀は何?」

フランは次に妖夢が腰に指している刀を指さした。

「これは魂魄家に代々伝わる刀です。私は幽々子様の警護役ですから」

ますます咲夜みたいだな。咲夜は洋風だけど、妖夢は和風と言ったところか。

「へー咲夜みたいでかつこいいね」

「あはは、ありがとう。では、私はそろそろ帰らないといけませんので、これで失礼します」

「うん、ばいばい!」

妖夢は半霊を連れて飛んで帰って行き、それをフランは手を振って見送った。

レミリアはさつきからずつと妖夢を訝しそうに見ているし、咲夜もそんなレミリアが気になっているようだ。

「お嬢様、先程からじつと妖夢を見ていましたが、何か気になる事でも？」

「……何でもないわ。私の気のせいかもしれないし、それよりあなた達は何か感じた？」

「私は特には、剣術の達人だと言う事しか……ユウキさんはどうでした？」

「俺も同じだ。妖夢はアホかもしれないけど、剣の腕はかなり立つな」

直接やりあつてないから何とも言えないけど、両手にあれだけの荷物を持っていたのに全くフラフラしていなかった。

流石に半霊をいじられて落としてはしまったけどな。

それにあの刀、使いなれてる。

剣術はそれほどでないけど、ナイフでならいい勝負が出来そうだ。

「そう。それじゃあそろそろ帰りましょうか、フラン、咲夜。あ、忘れる所だったわ。ユウキ、冬がまだ終わらず寒い日が続く事、霊夢は何か言っていたかしら？」

レミリア達もまだ春が来ない事を変に感じていたようだ。

「いや、変かも知れない。とは言っていたけど、まだそこまではつきりと異変だとは言っていないかったな。慧音が言うには昔は雪が遅くまで残っていて春が遅かった年も

あつたそうだ」

「それなら、もう少し様子を見ましようか、それじゃまたね。たまには紅魔館にも遊びにいらつしやい、美鈴やパチュリーが会いたがつていたわよ。勿論、フランと咲夜もね」

「あ、お姉様自分の事忘れてるよ」

「そうですね。本当は今日フランお嬢様に付いてきたのは、ユウキさんに会えるのも理由の1つでしたのに」

「だ、誰もそんな事言つてないじゃない！ 咲夜だつて今日身支度に少し時間かけてたじゃない！ 誰を意識してたのかしら？」

「当然、ユウキさんですよ？」

「は、はつきり言つたわね……」

「お前ら、そういう会話は本人の目の前で言うなよ……」

ものすつごく恥ずかしい。さつきから人里の皆の注目の的になつてんだよ！

しかも、何だかクスクスと笑われてるし、暖かい目で見守られながら何かささやかれてるし！

フランは何ともないようだけど、レミリアと咲夜は流石に恥ずかしいようだ。

顔を赤くして、わざとらしく咳払いをした。

「コホン、そ、それじゃあ今度こそまたねユウキ」

「お兄ちゃん、まったねー！」

「失礼します。ユウキさん、御身体に気を付けてくださいね」

「ああ、またな」

苦笑いを浮かべつつも、3人を見送って……ある事に気付いた。

「あ、やばっ……幻想支配で誰か視るの忘れてた。どうしよう、雪道をこの荷物で歩いて帰るのは少しキツイかも。米もあるのに」

結局寺子屋まで戻り、慧音の力を借りて博麗神社へと飛んで帰った。

その日を境にますます寒さと雪が厳しくなり、幻想郷は春どころか完全に真冬になってしまった。

つづく

妖々夢編

第50話 「春告精」

5月に入っても寒く、雪は解ける気配を見せず降り続いた。

「今日も寒いわね」

朝ご飯を食べ終えて、外の雪景色を眺めながら霊夢がポツリと呟いた。

「流石にこれは異変じゃないのか？」

いかに冬が遅い年があるとはいえ、5月に入ってからこの寒さはおかしい。

「間違いなく異変ね。と言っても、誰がどうやっているのか見当がつかないわ」

紅霧異変の時は紅魔館が霧の中心だったのですぐに解決できたが、今回はどうやっているのか分からないらしい。

誰が、何の目的で、どうやって行っているか。

そのどれも分からないのであれば、どこへ行けばいいのかも分からず、異変を解決出来ない。

「まあ、勘で行こうとは思うけど、それにしたって目星くらいは付けたいわね。じゃ、行ってくるわ」

と言う事で、霊夢は出かけて行った。

俺も俺で寺子屋の仕事があるので、人里へと向かう。

人里でも冬が遅い事が話題になっており、道行く人が不思議そうに話していた。寺子屋につくといつもの面子がいたが、チルノ達妖精や妖怪の子はいなく梨奈もいない。

フランは今日は一日パチュリーの訓練があると云ってたな。

チルノ達はたまに来ない時があつたからいいけど、梨奈がいないのは珍しいな。

「梨奈ちゃん熱出しちゃって、来れないの」

子供達の一人が心配そうな顔でそう云った。

その表情からよほどの風邪なのかと思つたが、慧音は心配するなと言う顔をした。

「ただの風邪だ。食欲もあるし、少し寝ていれば大丈夫だろう」

「寒さのせいかな。後でお見舞いに行つてくるか」

俺がそう言くと、慧音はやけにニコニコしていた。

「なんだよ。その顔は」

「いや、なんでもない。それより寺子屋をはじめようか」

「……分かつた」

釈然としない中、慧音の授業が始まった。

相変わらず授業内容は小学生レベルだけど、慧音の教え方は高校レベル。

なので最近はず俺が間に入って解説したりしている。

一応学園都市でもレベル5クラスの頭脳と言われてたし、これくらいならなんでもないがたまに自分がなんで寺子屋にいるのか疑問になってくる。

「慧音、冬の終わりを遅らせる事ってどうすれば可能なんだ？」

「ふむ、色々方法があるとは思いますが……どれが今回使われているかまでは分からないな」

最近天気が良くないので寺子屋の授業は昼ごろに終わった。

みんなが帰った後で慧音に季節の異常について聞いてみた。

慧音も独自で調べていたようだが、手掛かりがないのではつきりと断定出来ないみたいだ。

「魔法や能力の類じゃないと思うんだ。もしそうなら痕跡とかが分かるはず、と霊夢は言っていたぞ」

「そうだな。私も過去の文献を見て似たような事がなかったか、もう一度探ってみよう。そう言う事に詳しい知り合いもいる事だしな。ああ、そうだ。その知り合いに君を紹介するのを忘れていたよ」

「どんな知り合いかは知らないけど、今はそれどころじゃないだろ」

「そうだな。彼女は君好みの可愛い子だから、気にいるかもしれないぞ？」

悪戯っぽい笑みを浮かべる慧音、全く俺を何だと思っているんだ。

「可愛い子なら今日の前に居るから十分だ」

「そうかそうか……って!?! か、可愛いってそれはどういう意味だ!?!」

俺が言った意味を理解した途端、慧音の顔が赤くなつた。

「この前も色々からかわれたし、たまには俺もやりかえさないとな。」

「くつくつくつ、俺をおちよくろうとするから仕返した。じゃあな、慧音」

梨奈へのお見舞いの品も用意したし、行くとしよう。

「むむつ、君にからかわれるとは思わなかつた。まあ、いい、またなユウキ君。梨奈によろしく伝えてくれ」

「ああ、からかいはしたけど、嘘を言った覚えはないぞ、慧音?」

さつきよりも顔を赤くした慧音が何か言ってくる前に、飛んで寺子屋を退散した。

梨奈の家に行き、ちょうど外で雪かきを終えたばかりの母親がいて部屋へと通された。

「あ、お兄ちゃん! お見舞いに来てくれたの?」

部屋では梨奈が退屈そうに横になっていたが、俺の顔を見ると布団から飛び起きた。

「おいおい、梨奈。ちゃんと寝てなきやダメだろ？」

「そうよ。それに、ユウキさんに風邪を移す気？」

「あ、ごめんなさい……」

母にそう言われ、しずしずと布団へと戻って行った。

かなり聞き分けが良い子だけど、親の教育がいいのだろうか。それとも慧音や友達か。

多分全部だろうな。

「寝込んだって聞いたけど、その様子じゃ……大丈夫そうだな」

梨奈の額に手を当てたが、少し熱があるくらいで問題はなさそうだ。手を離すと梨奈は恥ずかしそうに布団にもぐった。

「あらあら、この子ったら急に静かになったわね」

「うー、お母さん！」

「ははっ、それだけ元気なら大丈夫だな」

その後、少し話をして部屋を出た。梨奈はもつといてほしいと言ったが、風邪をぶり返すと大変なのと言うと渋々納得したようだ。

で、早々に帰るつもりだったが、梨奈の母親にお茶でもと半ば強引に引きとめられて

しまった。

「あの子は寺子屋でも一番歳が上で、皆のお姉さんとして慕われていました。だからでしようか、兄や姉と言う存在にあこがれていたようで、ユウキさんに出会って兄が出来たように喜んでいますよ」

「俺は特に、何もしてないんですけどね。それにしても思ったより元気そうで良かったですよ」

「最近寒かったからでしょう。あの子が熱を出すなんて久々でしたよ。慧音先生に背負われて運ばれた時は驚きました」

慧音、口では大丈夫そうな事言っていたが、昨日はかなり慌てていたそうさ。

それでも薬を飲んで少し寝ると熱は下がったのが幸いだった。

「幻想郷でもここまで冬が長い事は珍しいんですしたよね？」

「ええ、少なくとも私は経験した事はないですね。春告精も見えていないですし」

「春告精？」

梨奈の母からの聞き慣れない単語に首をかしげる。

「ええ、リリーホワイトと言う名前で、文字通り春が来た事を幻想郷中に伝える妖精の事です。梨奈や寺子屋の子達と春が来ると花の冠を作ったりと、遊んでくれるんですよ」

春告精か……待てよ。

俺も霊夢も冬が長い異変と考えていたけど、春が来ない異変と考えればどうだ？

何者かが春告精を捕えるなりして、力を利用して春が来るのを遅らせているとすれば

……

けど、母親からの事を聞く限り、春告精は春が来るのを告げるだけで、春を運んでくるわけではない。

でも手掛かりにはなりそうだな。

霊夢ならとつくに気付いているかもしれないけど、念の為聞いてみるか。

「あなたも霊夢ちゃんも風邪には気を付けてね」

「はい。梨奈にもまた寺子屋でと伝えてください」

母親に手土産まで頂いて、家を後にした。

日は少し傾きかけているが、それでも時間的にはまだ夕方になろうかというくらいだ。

「日の傾き方は春だよな、でも感じる空気は冬そのものだ」

真つ直ぐに神社に帰ろうとしたが、何かが引つ掛かる感じがしたので森へと向かった。

すると人里の方から誰かがこちらに飛んでくる気配がした。

後ろを振り向くと、そこへ来たのは咲夜だった。

「ユウキさん、こんにちば。こんな所で何をしているの？」

「仕事帰りだ。で、ちよつと森で気になる気配がしてな」

咲夜は買い物帰りのようで、籠を持っていた。

「ふーん。で、霊夢はまだ動かないのかしら？ そろそろ燃料がつきそうなんだけど」

慧音も人里で冬の備えが尽きそうになってきていと言っていたな。

「霊夢はもう動いているぞ。でも、異変の原因や犯人がなかなか分からなくて、苦勞してる。こう寒さが続くと風邪をひく子も出てきて早くどうにかしないととは言っていたけどな」

「そう。それならいいけど、お嬢様が『私の時はすぐに異変解決したのに、今回は随分のおんびりね』と言っていたわ」

意外とレミリアのモノマネうまいな。

「それは本人に直接言ってくれ。霊夢だって寒いのは苦手と言ってたんだし、早く解決させたいのは霊夢も一緒だ」

その割には異変に気付くのが遅かったけど。

「フランお嬢様は大喜びだけだね。湖の側でチルノ達とよく雪合戦してるし」

勿論、美鈴が付き添いしてるわ。と付けくわえた。

「きやー」

その時だった。俺の耳に女の子の悲鳴が微かに聞こえた。聞こえるかどうかほどの小さな声だったが、咲夜にも聞こえたようだ。

「今の悲鳴よね？」

「だな！」

放つておく事も出来ない。俺と咲夜は急いで悲鳴がした森の中へと入って行った。

今は霊夢の力を使って飛んでいるので、かなり飛行速度は速い。

「で、寄り道してていいのか？」

「あら、寄り道もたまには悪くないわよ？ それより、あそこー！」

咲夜が指さす先には、見慣れない女の子が誰かから逃げるように飛んでいるのが見えた。

「おい！ 大丈夫か！」

逃げていた子は俺に気付くと、猛スピードで飛びこんできた。

「た、助けてください！」

涙目で俺を見上げるこの子はどうやら妖精のようだ。

金色の髪に白い服ととんがり帽子を被り、背中には大ちゃんとは違った透明な羽が付いている。

握られた手には何か握られているようで、暖かい力を感じた。

「来たわよ」

森の一角を見ながら、咲夜がナイフを取り出し構えると妖精の子は俺の背後に隠れた。

「……この気配は」

何か強い気配が森の奥からして現れたそれは……魂魄妖夢だった。

「あなた達でしたか、お久しぶりですね。今は急いでいますので、その後ろの子を渡してもらえますか？」

「久しぶりね。あの時とは随分と様子が違うようだけど、イメチエンかしら？」

咲夜が油断なく構えながら妖夢に尋ねた。

確かに、この前の妖夢はアホの子だったが、今日の前にいるのは毅然とした態度をして、隙のない抜刀の構えをしていてまるで別人だ。

これが、魂魄妖夢のもう一つの姿。

主の命に従い、使命を果たそうとする姿なのだろう。

「で、この子をどうする気だ？」

「……危害を加えるつもりはありません。少しの間だけ、来て頂くだけです。それと、渡してもらいたい物があります」

それ以上は教える義理も義務はない。そう刀を抜き放とうとしている妖夢は言っ

いるようだ。

その言葉を聞き、ある一つの確信が俺にはあった。

「なあ、君ってひよつとして春告精、リリーホワイトか？」

「は、はい。私の名前はリリーホワイトと言います」

見知らぬ人に名前を言われ、少し驚いた様子だったがこの子がやはりリリーホワイトか。

「だったらまさか妖夢がこの子を狙う理由は……」

「ねえリリーホワイト。なぜ妖夢はあなたを狙っているのか分かる？」

「はい、あの人は少し前から春を集めていました。だから幻想郷に春が来なくなつて、私も生き物に春を告げられなくなつてたんです！」

「春を、集める？」

季節を集めるとは抽象的な意味ではなく、文字通りの意味だと思うけど、それにして春を集めるとはどういう意味だろうか？

咲夜を見ると、彼女も意味が分からないように首を振っていた。

「あなた達には分からなくていい事です。これが最後です、リリーホワイトを渡して下さい。そうすれば私も何もしません、ですが……これ以上邪魔をするようなら、斬ります」

脅しやハツタリではない。妖夢は本気で斬りかかってくる。

ゆっくりと彼方の抜くその一つ一つの動作に隙はない。だけど相当の剣の使い手と
言うのはこの前出会ってからすでに分かっていたので、特に驚く事はない。

咲夜は今にも能力を使って妖夢を倒す気にいる。

それが一番でつとり速いが、それを行わないのは、妖夢に時間停止からの攻撃はこの
距離ではあまり意味がない。そう本能で察知したからだろう。

それは俺も同感だ。それほど、妖夢は強い。

「へえ、妖夢に俺が……斬れるかな？」

けれども、俺はあえて小馬鹿にしたような声で妖夢を挑発した。

「……………」

その刹那、妖夢が俺のすぐ目の前まで来て刀で斬りかかってきた。

速い。あの距離を1秒もかからずに詰めてきた。

この速さでは咲夜が時間停止をしても、それよりも速く動くかもしれない。

「きゃっ!？」

リリーホワイトが短い悲鳴を上げ、咲夜が驚いた顔をしながら、時間を止めようとし
ていたが少し遅い。

それほど妖夢は速かった。けれども……俺はもつと速い。

「なっ!?!」「えっ!?!」

次の瞬間、妖夢と咲夜の声が重なった。

それもそのはず、斬りかかったはずの妖夢の手に刀はなく。

代わりに俺が右手に刀を構えて、妖夢の首にぴたりと当てていたからだ。

「な、なぜ……?」 私の刀はあなたを捉えていました。なのになぜ!?!」

「私の能力で?」 いえ、違うわね」

咲夜は幻想支配で俺が時間を止めたと考えたが、すぐにその考えを振りはらった。

それが正解。

俺は幻想支配を使っていない。

確かに寺子屋での雪合戦のように、咲夜の力を借りて時間を止めれば良かっただろう。

けど、それよりもこうした方が俺には速い

「今、何をしたんですか?」

「俺がそれを教えると思うか?」 【敵】「であるお前に?」

その時、俺は殺気を籠めて妖夢を睨んだ。

宴会の時での幽香に絡まれた時以上の殺気を籠めた。

それだけで、妖夢の顔は怯み、一步下がった。その隙を逃す気はない。

即座に妖夢の腹に蹴りを放つ。

うまくお腹に食い込んだ蹴りは容赦なく妖夢を蹴り飛ばし、そのまま遠くの木に背中から激突した。

「がはっ!？」

俺は間髪いれず、右手に持った刀を妖夢に向けて投げた。

「っ!？」

受け身を取れず、思いつきりぶつかった妖夢にコレを避ける事は出来ない。

が、刀は妖夢のすぐ側に突き刺さっただけだった。

自分の僅か数ミリに突き刺さった刀を見て、妖夢は気絶したようだ。

「俺が殺すと思ったか、咲夜?」

咲夜はいつでも時を止めれるように身構えていたが、手を出す様子はなかった。

「あれだけの殺気を出しておいて、よく言うわね。本気で焦ったわ、あなたが妖夢を殺すんじゃないかってね」

口ではそう言っていたが、恐らく俺が妖夢を殺さないと分かっていたと思う。

でも、俺の後ろにいたりリーホワイトはそう思っていなかったようで……

「きゅ〜……」

「あっ……」

目を回して俺にもたれかかるように気絶していた。

「……小さい子の目前でやる事じゃなかったわね」

「あ、あははは。と、ともかく妖夢を捕まえて、なんで春を集めていたか聞くか」

気絶したりリーホワイトを俺が背負う事になり、咲夜が妖夢に近づこうとした時。

「っ、危ない！」

森の奥から妖夢の半霊である人魂が現れ、俺達に弾幕をばら撒いた。

咄嗟に背負おうとしたリーを置き、咲夜を庇うように覆いかぶさった。

だが、身体に弾幕が当たった衝撃はなく、弾幕は俺達の周りにばら撒かれ雪煙が視界を覆った。

「ちっ、煙幕の代わりか。こりや逃げられたな」

背後に振り向くと雪煙の向こうには、もう誰もいなかった。恐らく半霊が妖夢を連れて帰ったのだろう。

思えば、妖夢が最初から半霊を連れていない事に気付くべきだった。

コレは俺の失策だな。

「ユウキさん……あ、ありがとう。でも……その、近い、わ」

「ん……っ!? あ、ああ」

咲夜の方に向き直ると、すぐ目の前に真っ赤になった顔があった。

咲夜の吐息が俺の口に当たり、慌ててその場から離れた。

「ご、ごめん。その、大丈夫か？」

「だ、大丈夫よ……どこにも当たって、ないわ」

当たってない。それは弾幕の事だよな？

「それは、良かった。咲夜に怪我なくて……」

「ありがとう、助けられたわね」

そこで2人、無言で見つめあってしまった。

「……お前ら何してるんだよ？」

突然俺達の頭上から心底呆れかえったような声が聞こえた。

「えっ!? ま、魔理沙!」

見上げた先には、苦笑いと呆れが混じった表情を浮かべた魔理沙が浮かんでいた。

「あー……私より、そっちを見た方がいいぞ？」

魔理沙のあきれ顔は一瞬でひきつり、俺の背後を指さした。

その時、俺と咲夜は突き刺さるような冷たい殺気にも似た視線を感じ、恐る恐る振り返ると

「悲鳴が聞こえたから来て見れば……ホント、ナニヲシテイタノカシラオフタリサン？」

「れ、霊夢……？」

「あ、あなたもいたのね……」

般若か鬼か、恐ろしい表情をした霊夢が腕を組みながら、今日の気温以上の冷たい眼で俺達を見下ろしていた。

つづく

第51話 「異変」

鬼のように不機嫌な霊夢の理不尽な弾幕をなんとか避けきり、気絶したりりりーホワイトを背負って紅魔館へとやってきた。

最初は人里へ連れて行こうかと思つたが、紅魔館の方が近いのためこっちにした。レミリアに事情を話すと快く受け入れてくれた。

「へえ、この子が春を告げる妖精なのね。噂でしか聞いた事ないけど、確かにうちにいる子とは違うモノを感じるわね」

客室のベッドで静かに寝息を立てているだけで、りりーホワイトには特に怪我はないようだ。

「うちのメイド妖精と比べるのは可哀相でしょ。この子はちゃんとした役目があるもの」

パチュリーはりりーホワイトが手に持っていた光について調べている。

幻想郷生まれの霊夢や魔理沙も見た事がない光らしい。

「それにしても、あの妖夢が本気であった達に斬りかかるなんて思わなかつたわね」

「うんうん。あのお姉さんものすごくアホの子にみえたもん」

吸血鬼姉妹は俺や咲夜から聞いた妖夢の変わりように驚いていた。

ま、それは俺も咲夜も同じだけど。

「霊夢、魔理沙2人は妖夢の事何か知ってるか？」

「魂魄妖夢と言う名前に聞き覚えはあるし、それらしい人影はたまに見かけたけど特に話した事はなかったわね。魔理沙は？」

「私は名前さえ聞いた事ないぜ。あ、でもたまに人魂らしいのを見かけるって話は聞いたけどな」

どうやら霊夢も魔理沙も妖夢の事はよく知らないようだ。

「でも、魂魄家は冥界の白玉楼に代々使える護衛兼庭師、と言うのは知っているわよ」

「冥界？　なんだ幽霊の世界でも幻想郷にはあるのか？」

聞くからに幽霊だらけの場所と言う感じがするな。

「冥界は死後閻魔から転生や成仏を命じられた幽霊が駐留する場所よ。幻想郷のどこかにあるはずだけど、正確な場所は私も知らないわ。結界が張られていて生者は往来も認めも出来ないけど、魂魄家や一部の者は通れるらしいわ」

幽霊がいる時点で転生やら閻魔やらは驚かないけど、とことんファンタジーだな幻想郷は。

「ともかく、冥界に住む妖夢が原因で幻想郷に春が来ないのか？」

魔理沙が言っている事の半分は正しいだろう。

どうやって春が来ないようにしているかは分からないけど、妖夢が実行犯なのは間違いない。

でも真犯人は他にいる。

「いや、妖夢は誰かに命じられてリリーを狙っていた。おそらくは冥界の主って言う奴が原因だろう」

「あ、あれ……（こ）は」

その時、眠っていたリリーホワイトが目を覚ました。

最初は自分がどこにいるのか分からず不安そうに辺りを見渡したが、俺と咲夜の姿を見て安心したように笑顔になった。

そして、俺達が自己紹介をして紅魔館だと告げ話を聞く事にした。

「あの、助けて頂いてありがとうございます！ すみません、安心したら気がぬけちゃって気絶しちゃったみたいで、ご迷惑をおかけしました」

「……良かったわね。あの子、気絶する前後の記憶が曖昧みたいよ」

隣にいた咲夜に小声で言われ、うすら笑いを浮かべるしか出来なかった。

まさか俺の殺気に当てられて、それで気絶しただなんて言えないもんな。

「それでリリーホワイト。あなたが持っていたこの光、これ簡単に言えば 【春の光】

でいいのかしら？」

「あ、それ！ すみません、良かった！ 持つて行かれなかつたんですね！」

パチュリーが瓶に入った光を見せると、リリーはベッドから飛び起きて瓶を抱きかかえた。

よほど大事な物みたいだが、パチュリーが言った春の光とはなんだろう？

「春の光？ リリーホワイト、最初から全部話してくれない？ あなたがなぜ狙われていたか、あの光は何なのか、全部ね」

「あつ、はい……分かりました」

霊夢に促され、リリーホワイトは話し始めた。

「私は春を告げる妖精なのですけど、今年は全く春がくる気配がなくて、それで不思議に思つて色々回つていた所、この光をやつと見つけられたんです」

「これね。で、この暖かい光は何なの？」

フランが指さした光はリリーホワイトの手の中でさつきよりも、強く輝きだし辺りが少し暖かくなつた気がした。

「これは文字通り春の光です。春になると、この光が幻想郷を包みこんで春になるんです。でも、今年はこの光が幻想郷に見当たらなくて、やつと見つけたこの光もとても弱々しくて。それで、私は他の光を探していた所にあの刀を持った人に見つかつたんで

す」

うーん、季節が変わると季節ごとの光が幻想郷を包みこむのか、理解できるような出来ないようなだな。

深く考えるのはやめておこう。そういうシステムとだけ理解しておこうか。

霊夢も魔理沙もポカーンとしている所を見ると、この事はあまり広まっていないのかもしれない。

「いや、なんで霊夢までそんな顔してるんだよ。まさか、知らなかったのか?」

「しようがないでしょ。博麗の巫女が幻想郷の事全部知っていると思わないでよ、魔理沙」

「はいはい、霊夢が博麗の巫女としては勉強不足って事はよくわかったから。さ、話を続けて頂戴」

「なっ!? い、いいわよ。先を続けて、リリーホワイト」

レミリアの言葉に言い返そうとして黙った所を見ると、博麗の巫女としては常識の事だったのか。

「は、はい。あの人は最初、私が持っていた光を渡すように言っていたのですが、私が春告精である事に気付いて一緒に来るように言われて……私は怖くなつて逃げたんです」

「なるほど。そこへ俺と咲夜がと言うわけか。で、なんで妖夢は春の光を集めているの

か分かるか？」

「いえ、それは分かりません。あの人もそれは言っていないませんでした。すみません。でも、あの人が白玉楼に来てもらうと言っていたので、きつと白玉楼という所にこの光は集められているはずですよ。でも、私には取り戻す力がありません……」

申し訳なさそうな顔をするリリーホワイト。だけど、これは彼女のせいではない。

「春が来ないと、冬眠中の動物や春の植物達が起きて来れなくなります。だから、早く春を取り戻さないと……」

リリーホワイトは目に涙を溜めて俯いた。

自分の役目を果たせない事で、幻想郷に春が来ない事への責任感が沸いているのだろう。

そんな彼女を見て、放つてはおけない。

「大丈夫だ。春が来ない原因が白玉楼にあると分かったんだ。後は取り戻せばいいだけだ。俺に任せろ」

「……あなたが取り戻してくれるんですか？」

「ああ、俺は何でも屋だ。だからリリーホワイト、依頼してくれ。春を取り戻してくれと」

そう言うと、さつきまで沈んでいた彼女の表情が見る見る明るくなっていった。

「おいおい、ちょっとまってよ、ユウキ。取り戻すって、この異変をお前が解決するのか？」
魔理沙が驚いた顔をして言うと、霊夢も厳しい顔つきになり続いた。

「ユウキさん、これは立派な異変。解決するのは博麗の巫女である私の役目よ。だからあなたが関わる事じゃないわ」

魔理沙も異変解決しようとしている事はスルーか。

「分かってる。けど、もう関わっちゃったからな。最後までちゃんとしないと気が済まない」

「でも、いくら幻想支配という強い能力があるとはいえ、ユウキさんは空も飛べないただの人間なのよ!？」

「ユウキ、以前の異変の時はフランがあなたを呼んだから紅魔館へ来た。けど、今回あなたは自分から関わろうとしているわ。なぜ、そこまでするの？ 霊夢に任せておけばいいじゃない」

レミリアはこう言っているが、彼女は俺がどう答えるか分かっているはずだ。

「俺は、俺が出来る事をするんじゃない。俺は今まで俺がやりたい事をやってきた。それはこれからも変わらない。だから……行く」

それにこの異変。何か嫌な予感がしている。

霊夢や魔理沙にだけ任せておくのは危険だと言う、勘。

こう言う時の勤は外れた事がない。

「そう。ま、あなたならそう言うと思つたわ」

「うん、お兄ちゃんは悲しんでる女の子を放つておけないもんね」

レミリアは満足そうに微笑み、フランもどこか嬉しそうに言っているが、その言い方は誤解を招きそうだな。

「あーま、こうなる予感はしてたんだよなー。けど、ユウキは強いから大丈夫だろ、霊夢」
「無責任な事言わないでよ、魔理沙。はあ……朝からした嫌な予感はこちらか」

魔理沙は苦笑いを浮かべ、霊夢はまだ何か言いたそうだが、渋々と言つた顔だ。

パチユリーは溜息を吐き、咲夜はさつきから何か考え込んでいるようだ。

「リリーホワイト。あなたはとも責任感の強い子ね。大丈夫よ、ユウキならきつとあなたの願いを叶えてくれる。だから、安心して依頼しなさい。春が戻るまではあなたはここにいていいわよ。あの妖夢がまた来ても私達が追い払つてあげるわ」

「うん、リリーホワイトは安心して、お兄ちゃんに任せればいいんだよ」

「そこは普通、博麗の巫女であるあたしに言う事だと思ふのだけどね……まあ、いいわ」
レミリアに言われ、リリーホワイトは不安そうに俺を見上げていたが、フランにも後を押され意を決したように言つた。

「ユウキさん、霊夢さん、お願いします。春を、みんなの春を取り戻して下さい！」

みんなの春、ね。本当にこの子は優しいんだな。

「その依頼確かに受けた。俺達が必要春を取り戻す。それをここで待っていてくれ」
安心させる為に頭を撫でながら言うと、彼女は満面の笑みを浮かべた。

この時、複数の冷たい視線を感じたような気がするが、気にしない事にした。

「私は博麗の巫女としての責務を果たすだけよ。ま、その後はあなたの仕事よ。良いわね?」

「はい!」

霊夢の声がどことなく怖い気がするが、リリーホワイトは気付いていないようだ。

「おいおい。私の事も忘れてもらっちゃ困るぜ。冥界なんて行った事なかったからな、楽しみだぜ!」

「あーまだいたわね、魔理沙」

「すっかり忘れてた」

「こら! 私是最初からいただろ!? まさか、おいてけぼりにする気だったのか!? あ、まさか霊夢、ユウキと2人きりでデートのついでに行こうと……つて、まてまて札を構えるな! ここで夢想封印はダメだろ!」

魔理沙、お前のおかげで俺への視線が逸れた。感謝する。

「で、白玉楼がどこにあるか、誰か知ってるの?」

「「あつ」」

今まで黙ってきいていた、パチュリーがふと言った事に俺達はハツとなった。

異変の元凶が白玉楼にいる事は分かって、肝心の場所が分からなかった。

「冥界の結界は私がかどうか出来るけど、場所までは知らないわね……適当に飛んでいけば着くでしょ」

「結局、霊夢の勘だよりで行くしかないか」

霊夢の勘の良さは俺も知っている。一番手つとり早く正確なのはこの方法だろうな。

「今日はもう遅いから紅魔館に泊まっていきなさい。今から行く気はないでしょ？」
外を見るともう日は沈みかけていた。

レミリアやフランの為にカーテンを閉めていたので、外が暗くなっている事には気付かなかった。

「そうね。今から神社に戻るのも面倒だし。せっかくだから、今日は世話になるわ」
「私もそうさせてもらうぜ」

俺も断る理由がなかったの、俺達3人は紅魔館に泊る事になった。

「わーい、御泊り御泊り♪」

「決まりね。咲夜、早速用意を……咲夜？」

「あ、はい。お嬢様、部屋と夕食の用意は済ませてあります」

レミリアに呼ばれ、ハツとした咲夜だったがもうすでに俺達が泊る準備をすませているとは、流石だ。

そう言えばさつきから咲夜はずっと黙っていたな。

パチユリーも黙っていたけど、それは俺達の会話を聞いていただけだ。

でも、咲夜は考え事をしているようだった。

「咲夜、ユウキの部屋は勿論大きなベッドがある部屋でしょうね？」

「勿論です。フランお嬢様と私と美鈴が一緒に入っても大丈夫です」

「流石、咲夜だね！」

「ちよーつと待ちなさい。パチエやこあはとまかく、なんで私が数に入っていないのよ？」

さり気になんかを入れてるし!？」

「いやいや、私とこあはともかく、って何よ!？」 良いわよ、後でこつそりユウキだけを図

書館へ転送させるから」

「あんた達……少し、頭冷やそうか?」

「「「っ!?!」」」

……俺、一人で博麗神社に帰ろうかな。

「モテる男は大変だなあ?」

「うるさい!」

ニヤニヤする魔理沙に割と本気でチョップした俺は悪くない、はず。

ユウキを中心にした賑やかな夕食が終わり、久々の満月を眺めながら私は部屋でワインを飲んでいた。

最近の夜は吹雪で雲に隠れて月どころか星すら見えなかったのに、今日は運が良いわね。

—コンコンツ

「……入りなさい、咲夜」

部屋のドアがノックされて、私は外を眺めながら咲夜を招き入れた。

別に私が呼んだわけでもないけど、訪問者が咲夜と言う事は容易に予想できた。

「失礼しますお嬢様」

「こんな時間にどうしたのかしら？」

「はい、実はお嬢様にお願ひしたい事がございます」

咲夜は夕食のときは普通だったけど、今日は何か考え事をしていたのよね。

「それはお願ひごとによるわね。どう言った事かしら？」

「実は、私も明日ユウキさん達に同行したいので、許可をもらえませんか？」
やっぱり。ユウキが異変解決に向かうと言った時から、ずっと何かを考えてたもの
ね。

「そこまで考え込まなくてもいいと思うのだけど、そこは咲夜らしいわね。」

「いいわよ」

「えっ？ あ、はい……ありがとうございます」

私があつさりと許可した事が意外だったのか、一瞬ほかんとしたわね。

「何を驚いているの？ ユウキの力になりたいんでしょ？ 私が反対すると思った？」

「いえ、そうではなくて、何か言われるかと思っただけ……」

ああ、私が弄ると思ったのね？ でもね、咲夜。そう言われたからには……ねえ？

「ふふつ、私がおかやうと思った？ 例えば、今日ユウキに助けられた時にキスをしかけ

た事、とか？」

「っ!? な、ななぜそれをお嬢様が!？」

一瞬で顔が真っ赤になったわね、少し湯気出てる気がするわ。

「私だけじゃないわよ？ みんな知っているわ。フランや美鈴、こあはとても羨ましそ
うにしてたわよ？ パチエは何も言わなかったけど、結構不機嫌そうな顔をしたわね」

まあ、私も結構心穏やかじゃなかったのだけど、そこは、私は、大人だもの！

すぐに冷静に慣れたわ。それに美鈴とだって彼は似たような事になったし……次は私が、だなんて思つてないわよ!?

「そ、それで夕食の時美鈴達の反応が冷たかったのですね。それにしても一体なぜ……」
「そんなの魔理沙が面白そうにバラしたからに決まつてるじゃない? 怒つた霊夢に一方的な弾幕ごっこを仕掛けられた事まで話してくれたわよ? そう言えば、あの時あなたはユウキと霊夢を案内していたものね」

さつきから咲夜は顔を真つ赤にしっぱなしね。羞恥心と怒りが交互にだけど。

「そ、そうですか……コホン。それではお嬢様、許可を頂きありがとうございます。では、失礼いたします」

無理やり話を切り上げたわね。

「待ちなさい咲夜。ユウキの事頼んだわよ?」

「? はい、わかりました……ですが、お嬢様。ユウキさんに何か不吉な運命でも視えたのですか?」

やけに念を押して言ったから、咲夜が不安そうな顔になったわね。

「そういうのじゃないわ。咲夜、あなたは彼がなぜ必要以上に妖夢を挑発したのか、不思議に思わなかったのかしら?」

「そう言われて見れば、少し違和感がありましたけど。でもそこまでは……」

ユウキが妖夢と対峙した時の事を魔理沙から聞いた時、私はユウキが必要以上に挑発したように思えた。

直接見たわけじゃないけど、ユウキの実力なら挑発しなくて妖夢に対処出来たはず。

これは、考えすぎかもしれない。だけど、彼の性格を考えると……

「ならいいわ。私の考えすぎかもしれない。とにかく、同行する以上、彼から眼を離さないようにね」

「はい、分かりました。失礼します、お嬢様」

咲夜は私が何をいいたのか分かったようね。

ユウキは、自分への関心がまるでない。

生にしがみついているわけでも、死にたがりというわけでもない。

だからこそ、彼は……自分の生死をまるで考えていない。

「ふう……全く、なんで私が1人の壊れた人間をこうも気にかけるのかしらね」

月に問いかけても、答えが返ってくるはずもなかった。

続く

第52話 「氷精と雪の妖怪」

妖夢に襲われていたリリーホワイトを助けて、紅魔館に泊まった翌日。

「うひゃあ、今日はまた一段と寒くなったな」

吹雪とまではいなくても、雪が降っている外を見ながら魔理沙が言った。

確かに。今日は昨日よりも寒くなっている気がする。

携帯で気温を測ってみると昨日よりも低くなっていて、俺が幻想郷に来た時よりも寒くなっていた。

「幻想郷からほとんどの春が消えてしまったせいです……真冬に逆戻りしました」

リリーホワイトが哀しそうな声を出して、今にも泣きそうだ。

フランやこあが側につき慰めている。

「早く春を取り戻さないとね。ところで、本当に付いてくる気？ 魔理沙とユウキさん

は付いてくると言っているけど。本当は私一人で十分なのよ？」

今朝になって咲夜が俺達に同行すると言ってきた時は驚いた。

既にレミリアの許可は得ているらしく、美鈴やパチュリーも賛成していた。

フランも行くと言ったけど、別室で落ち込んでいるリリーホワイトの事を頼んでい

る。

「こあと3人、いい友達になれそうだしな。」

「少し勘違いしているようだけど、私はあなたに付いて行くのではないわ。ユウキさんのサポートの為に付いて行くと行ったのよ?」

俺が断ろうとしたが、それより先に霊夢が目に見えて不機嫌になった。

「それこそ要らぬお世話でしょ。ユウキさんには私がいるもの。あなたの世話は必要ないわよ」

「一応私もいるんだぜ?」

「あなたは異変解決だけ考えて行動すればいいじゃない。私はあなたの邪魔はしないわ」

「ついて来られるのが既に邪魔なのだけど?」

魔理沙の呟きはスルーされた。ってか俺も空気になっっている。

そして、なぜか魔理沙に睨まれた。俺が悪いのか、これ?」

「ん〜相変わらずあなたが関わると咲夜と霊夢が面白くなるわね」

「そうね。見ていて飽きないわ」

レミリアとパチュリーは何かがおかしいのか他人事のように笑って見ている。いや、実際他人事だろうけど。

「あ、ユウキさんまだいたんですね、良かった」

と、そこへどこかへ行っていた美鈴が戻ってきた。

手に白いマフラーを持っている。

「ユウキさん、これ使って下さい。今日は一段と寒いですから」

そう言つて美鈴は俺にマフラーを巻いてくれた。

学園都市製で尚且つパチュリーの強化魔法も施されたスーパー防寒具を着ているから寒さは問題ない、けど確かに美鈴が巻いてくれたマフラーは暖かった。

「どこに行っていたのかと思つていたら、それを取りに行っていたね。ユウキさん、美鈴はこう見えて編み物が得意なのよ。私のマフラーも美鈴が編んでくれた物よ」

咲夜はそう言つて赤いマフラーを自分の首に巻いた。

そのマフラーは手入れもされているように見え、咲夜が大事にしているのが分かる。

「えへへ、最初は手先の訓練にと、人間の真似をしていただけなんですけど、いつの間にか趣味になってしまって、自分で言うのもなんですけど、そこから売っているものよりは上手に出来てますよ。あ、もちろんそれはまだ誰も使っていませんので安心して下さい」

「別に安心も何もないだろ。けど、確かに暖かいな。ありがとう、美鈴」

手編みのマフラー、か。

まさか自分がこんなものを身につける日が来るとは思わなかったな。

そして、久々に取り出した防寒兼殴打用のグローブをはめて、出発の準備は整った。

「じゃ、行こうか霊夢、魔理沙……アレ？」

咲夜も準備が出来たので霊夢や魔理沙の方を向くと、霊夢はさつきよりも不機嫌な顔で俺を睨み、魔理沙はニヤニヤした顔をして俺を見ていた。

「2人して何だその対照的な顔は」

「別に？」

全く同じセリフを言ったはずなのに、全く別の感情が籠っているような返事をされた。

「私はもう行くわよー！」

霊夢は不機嫌な顔のまま窓から飛び出していった。

ちゃんと玄関から出ろよ。

「くつくつくつ、あー本当に面白いわ。けど、もう行きなさいユウキ。でないと、霊夢の機嫌がますます悪くなりそうよ？」

「何の事だか分からないけど、そのつもりだ。じゃあ行ってくる、リリーホワイトの事任せた」

「ええ、任せなさい。咲夜、ユウキの事頼んだわよ」

「はい、レミリアお嬢様。行つてまいります」

レミリアや美鈴達に見送られ俺達も紅魔館を出発した。

先にでた霊夢は少し離れた上空で俺達を待っていた。

少しは機嫌が直つたようだ。

「あら、ユウキさん。魔理沙の力を使っているの？」

俺は今魔理沙の力を使って空を飛んでいる。

最初は咲夜が自分の力を使ってと言っていたが、魔理沙が頼んできたのだ。

「ああ、私から言つたんだ。自分の弾幕つて奴を見たくつてさ。でも、やっぱり変な感じだな」

箒に跨つた魔理沙が隣で飛んでいる俺をジロジロと見てくる。

本来魔理沙は箒がなくても空を飛べるが、魔理沙なりの拘りで箒を使っているらしい。

「自分から言い出して今更何を言う。んで、これからどうする？ 慧音の所に行つて話を聞くか？」

博識な慧音なら白玉楼や妖夢の事を知っているかもしれない。

「うーん、慧音も白玉楼の事は知っていても、場所までは多分知らないと思うわよ？ 阿

求もだろうし」

阿求？ 聞き慣れない名前だったが、今はどうでもいいか。

「紫でもいりや一発だろうけど、アイツが都合よく出てくるわけないよな」

「同感。こういう時には姿見せないからね紫は」

魔理沙に霊夢が同意したが、俺も同感。

用事がある時はいなくて、用事がない時ばかりやってくる。

あれ、そんな奴もう一人いたよな……

「そう言えば、文はどうなの？ 彼女もここじゃ古参のうちでしょ。何か知っているんじゃないかしら？」

咲夜に言われ俺達は、あーと声が出た。

言われてみれば、文がいない。

何かと文が絡む事も多いからつきり今回もさり気なく付いてきてるかとか、霊夢と2人でキョロキョロ口辺りを見回したけど、姿も気配もなかった。

「確かに珍しいわね、文がいないなんて。全くこう言う時の為のブン屋でしょうに、役に立たないわね」

「ストーキングもないか。でも、文の事だから遠くから望遠レンズで見てそんな気もするけど」

「お前らヒドイ事言っているな、私も同感だけど」

「あのバ鴉が役に立たない、なんて何を今さらだけどね」

4人揃ってヒドイ事を言ったのだった。

結局、霊夢の勘を頼りに行こうと思っていると、俺達を呼ぶ声が聞こえた。

「おーい、ユウキに霊夢―何してるんだー?」

「ユウキさーん!」

俺達を呼んだのは、湖の淵に立っていたチルノと大ちゃんだった。

側には見慣れない女性がいて、俺達を見上げていた。

チルノを見た魔理沙の表情が固くなったけど、俺達は気にせず降り立った。

「あら、チルノに大ちゃん、それにレティじゃない」

「こんにちは、この前は御馳走してくれてありがとうございました」

「ユウキの手料理美味しかった! また作ってね」

「ああ、また作るよ」

この前、チルノが魔理沙に勝ったあの日、お祝いと言う事で夕食を2人に御馳走したのだ。

最も、御馳走と言っても文が持ってきてくれた山菜などを使い大したもののは作れなかったけど、2人はとても喜んでくれた。

「久しぶりね、霊夢に魔理沙。あなた達は初めてね？」

霊夢がレティと呼んだ女性は俺と咲夜を見て、ペコリとお辞儀をした。

「はじめまして、私の名はレティ・ホワイトロック。そちらのメイドさんが咲夜ちゃん
で、あなたが噂のユウキ君ね、よろしく」

差し出された手を掴み握手をしたが、その手は雪のように冷たい手をしていた。

それにしても、咲夜……ちゃん？ 隣を向くと咲夜が固まっていた。

霊夢と魔理沙は軽くふきだしてるし。

「ご、ご丁寧にどうも。だけど、私の事は咲夜でいいわ」

「えー、どうして？ ちゃん付けの方が可愛いわよ。あなたもそう思うでしょ、ユウキ君
？」

そこで俺に振るなよ!?

「えっ、いや。可愛いとは思うけど？」

「ほらほら、ユウキ君のお墨付き出たんだし、もう咲夜ちゃんでもいいでしょ」

「諦めなさい、咲夜。レティは私や魔理沙どころか、紫ですらちゃん付けで呼んでいるの
よ」

「えええく!?! あのスキマ妖怪も!?!」

紫までもか、そりやすくない。

「そんなに照れるなよ、咲夜ちゃん……って、うお!? 無言でナイフを投げるなよ!」
調子に乗った魔理沙が咲夜に追いかけられてどっかに行っただけ、無視しておくか。
「で、噂のってどういう意味だ? ま、想像付くけど」

「ええ、想像通りよ」

レティに噂しているのはチルノと大ちゃんだろうな、絶対。

2人共キョトンとしているのがおかしくて、思わずレティと笑った。

「そう言えば、宴会の時にはいなかったものね。レティは寒気を操る程度の能力を持った冬の妖怪よ。雪女と言った方が分かりやすかしら?」

「雪女か、どうりで手が冷たかったわけだ」

さつき握手した時にまるで氷を触ったかのような冷たさだったけど、霊夢の説明を聞き納得できた。

「私は人が大勢集まる場所は苦手なの。溶けたりはしないのだけどね、暑さや熱気などに弱いよ。だから冬以外の季節はほとんど眠っているわ」

俺がチルノ達と出会った頃は春に向けて眠る準備をしていたけど、また冬が戻ってきたから出てきたらしい。

「冬以外で寝てるって、紫と正反对だよな」

「紫はいつも寝てるでしょ。じゃ、私達は急ぐからまたね」

レテイともゆっくり話してみたいけど、今は異変解決中だからな。

「えー遊んで行こうよー」

「ダメだよ、チルノちゃん。ユウキさん達忙しそうだもん」

「4人して何か相談事していたようだけど、もしかして冬が長引いている事かしら？」

そう言うと、それまで明るくニコニコしていたレテイの目が一瞬だけ鋭くなった。

霊夢もそれを見て表情を固くし、俺も少し身構えた。

「そうよ。この異変は白玉楼の主が春の光を集めているせい。だからこれから白玉楼に行つて、春を取り戻しに行くのよ」

「そう……なら、あなた達を止めないわけにはいかないわよ、ねー」

嫌な予感があった俺と霊夢がその場から大きく後ずさった。

すると、さつきまで俺達がいた場所を猛吹雪が襲った。

これがレテイの能力か。

「レテイさん!？」

「レテイ?」

大ちゃんとチルノが驚いた声をあげるが、俺と霊夢はレテイの反応は予想出来た。

彼女は冬の妖怪、冬以外ではその力を発揮できず眠って過ごすしかないのなら、冬が永遠に続く今の異変は解決して欲しくないはず。

「レテイ、私とユウキさんを襲って、覚悟は出来ているのよね？」

「怖い顔しないでよ、霊夢ちゃん。せっかくの異変、楽しみましょ！」

「私に、異変を楽しむ趣味はないわ！ ユウキさん、ここは私がやるわ！」

言うが早い、霊夢は懐から札を出してレテイに投げつけた。

レテイも弾幕を撃ち、それを迎撃した。

俺はレテイと弾幕ごっこする気満々だったが、霊夢に先を越されてしまったのでチルノや大ちゃんと大人しく見学する事にした。

「行くわよ、博麗の巫女。【寒符・リングガリングゴールド】」

レテイの周りから霊夢に向けて白い空気を放った。あれは寒気だな。

その寒気の中から青い弾幕が現れ、機雷のように霊夢の周りに散布された。

更に、大きな弾と小さな弾をいくつも放っていった。

「っ、いつもより弾幕が濃い？」

「今は冬真つ盛り、私の妖力はハネ上がっているわ。油断してるとイタイ目見るわよ、霊夢ちゃん？」

どうやら普段のレテイよりも力が強いようで、霊夢が驚いている。

だけど、霊夢に弾幕が当たる事はなく、余裕でかわしていった。

「あれが、霊夢の力。そう言えば、俺霊夢の戦ってる所見た事なかったな」

初めて会った時は一瞬で狼妖怪を退治していたし、一緒に住み始めてからも霊夢は妖怪退治をたまにしていたようだけど、俺はその場に立ち会ってなかった。

「レテイ、がんばれー!」

「レテイさんも霊夢さんもがんばってください!」

さつきからチルノはレテイを必死で応援し、大ちゃんは2人を応援している。

「なあ、大ちゃん。チルノはレテイを凄く慕っているんだな」

あんなに真剣な表情のチルノは初めて見た。

「はい、レテイさんとチルノちゃんは姉妹のように仲がいいんです。チルノちゃんの冷気に耐えられるの前はレテイさんだけだったから……」

今はそうでもないがチルノは昔、力の制御が出来ていなくて周りの物をなんでも凍らせてしまい、他の妖精に怖がられて避けられていたらしい

それでも、大ちゃんやルーミア達はチルノの冷気に比較的平気だったので、今と変わらず仲良く遊んでいたのが独りぼっちではなかった。

ある時、レテイと出会い力の制御を学んで、今のように無暗に周りを凍らせる事はなくなり、妖精たちとも遊ぶ事が出来るようになったらしい。

大ちゃんからその話を聞いて、俺が頭に浮かんだ事があった。

「まるで、フランお嬢様のようなね」

いつの間にか俺の隣に咲夜がいて、大ちゃんの話を聞いていた。

「咲夜はやはり俺と同じ事を思い浮かべていたようだ。」

「咲夜、もう気は済んだのか？」

「ええ、さつぱりしました」

「ひ、ヒドイ目にあつたぜ」

そこへ帽子にナイフが刺さつたままの魔理沙もやつてきた。

「で、チルノだけど。俺も話を聞いて驚いたよ。フランに似てるなと思つてさ」

「普段のあの子からは想像も出来ないものね。でも、それでレティを慕っているのは分かるわ」

今もチルノは霊夢にやられかけそうになつたレティに大声で応援していて、レティも時折チルノに手を振つて応えている。

「ああ、私はその話はみすちーから聞いていたから知つてるけど、本人はレティが大好きつて事しか覚えてないみたいだぜ」

「妖精だものね。細かい事は忘れてるのかも、うちのメイド妖精達を見ていればよくわかるわ」

「別にそういうのはいいんじゃないか？ 大事な事だけ覚えておけばさ。な、大ちゃん？」

「はいー」

嫌われていた事より、救われた事を覚えていた方がずっといい。

「これで最後よ。【霊符・夢想封印 集】」

霊夢とレティの弾幕ごっこは、霊夢のスペルカードがレティを完全に捉えて勝負がついた。

「あいたたた、やっぱり少し強くなった程度じゃ霊夢ちゃんには勝てないわねー」

「何をわかりきった事を言ってるのよ」

「レティー、大丈夫？」

「大丈夫よチルノ、ありがとう」

心配そうにかけよってきたチルノに手を振り、レティは何事もなかったかのように立ちあがった。

これが弾幕ごっこの結末。派手な戦いとは裏腹に双方に大怪我せず、終わらせる決闘法。

……今まで見たり、俺がやってきた弾幕ごっこはまるつきり違うような気がするな、うん。

「お疲れ、霊夢。霊夢の弾幕初めて見たけど、御札と霊気の弾幕が綺麗だったな」

「そ、ありがとう。これくらいは日常茶飯事よ」

霊夢はそつげなく返事をしたが、なぜか向こうを向いてしまった。

「とか言つて本当は照れ……ハブツ!」

魔理沙が何か俺に言いかけたが、霊夢の弾幕を浴びて吹っ飛んでしまった。

レティ相手の弾幕よりも強い撃つてないか？

「レティ、これで満足したでしょ？ 私達はもう行くわよ?」

「うん、久々に弾幕ごっこできたし。私は満足よ、ありがと霊夢ちゃん」

レティは弾幕ごっこを始める前とはうって変わった表情をしている。

「やっぱ、さっきのは演技だったか。このまま冬が続く事は望んでいなかったんだろ?」

「ありやりや、ユウキ君にも気付かれていたのね。確かに私は冬にしか力を発揮できない雪女。だけど、四季がめぐるのは自然の摂理、春が来て夏が来て秋になつて冬がまた来る。それが当たり前なの」

後半は何だか俺達にはなく、チルノに向けて言っているように聞こえた。

そうか、チルノにしてみれば、冬が長引けばそれだけレティと会える事になるんだものな。

「うん……分かったよ。レティ。でも今はまだ冬だから、まだまだ沢山遊べるよね!」

「もちろんよ」

弾幕ごっこ中に大ちゃんが教えてくれた事だが、レティは近々異変が解決し春が戻つ

てくる予感がしたらしい。

それで、ずっと冬になればいい、異変解決はさせないと霊夢の邪魔をしようとしていたチルノを説得していたと言うのだ。

「チルノには私が眠っている間にも遊んでくれる友達がたくさんいるし、それに頼りになるお兄さんも出来たみたいだしね」

レティは俺に向けてウインクしてきた。

頼りになるお兄さん、ねえ……

「あー、今更だけど霊夢ちゃんじゃなくて、ユウキ君と弾幕ごっこするつもりなの忘れてたわ！」

どうやらレティは最初俺を挑発して、弾幕ごっこを挑み俺がどういう人間か見極めようとしていたようだ。

「そんな予感がしたのよね。だから私が先手を打たせてもらったわ」

「ええー、霊夢ちゃんの意地悪。そんなにユウキ君を独占したかったのね？」

「なっ!?! な、何を言っているのよ。そんなわけないじゃない!」

「うふふつ、霊夢ちゃんがここまでになるような子だもの。ユウキ君は噂以上なのね。私も興味がありますます沸いたわ」

何の事を言っているか分からないが、うかつに返事しない方がよさそうだ。

「流石はユウキさん、手が早いですね」

後ろに不機嫌なオーラを出しているメイドがいるからな。

いや、咲夜。今回俺ホントに何もしてないんだけど？ 向こうが勝手に盛り上がっているんだけど？

「はあ……ほら、行こうぜ霊夢、咲夜。じゃあな、レティ、チルノ、大ちゃん」

「そうね。こんな所でずっと油売ってるわけにもいかないし行きましょうか」

「では、失礼するわね」

「今度は私と遊んでね、ユウキ君」

「ばいばい！」

「異変解決がんばってくださいねー！」

3人に手を振って見送られ、俺達3人は霧の湖を後にした。

白玉楼の手掛りは何もないので、一先ずは人里に向かう事になった。

誰か1人忘れているような気がしたけど、霊夢も咲夜も何も言わなかったから気にしないでもいいよな。

続く

第53話 「マヨヒガ」

俺達は白玉楼のある冥界への場所を慧音に聞く為、人里へと向かつて飛んでいた。飛んでいた……はずだったのだが。

気がつけば、人里にもないような大きな屋敷の前にいた。

「ここはどこだ？ どうみても人里には見えないよな」

「さっきまで人里目指して飛んでいたわよね？ で、急に吹雪いてきたと思ったら」

「気が付いたらこんな場所に……何なのここ？」

どうやら俺達3人は変な所に迷い込んでしまったようだ。

ここは咲夜も霊夢もきた事がない場所らしく、怪しげに2人共キョロキョロ辺りを見ている。

俺達は確かに吹雪の中を飛んでいたのに、今いる場所は見事に晴れている。

そればかりではない。ここには雪が全くなく、しかも、まるで春のように暖かい。

屋敷からは人の気配はなく、声をかけても返事がない。

「ここはひよつとして、マヨヒガかしら？」

屋敷の周りを見渡した霊夢が、思い出したかのように呟いた。

「マヨヒガ？ 聞いた事ないわね。何なの霊夢？」

「マヨイガ、迷い家とも呼ばれているの。簡単に言えば隠れ里よ。山奥にあって、旅人が迷い込んで日用品を持って帰ると幸福をもたらす、そう言われているわ。でも実際に迷い込んだって話は聞かないし、ただの噂だと思ってたわ」

「物を盗むと幸福になれる、か。魔理沙が聞いたら飛び付きそうな話だな」

あ、そう言えば魔理沙がいない。霊夢にぶつ飛ばされてそのままだった。でも、ま、いつか。

「魔理沙ならもう何回も探していたわよ？ でも一度も見つからずに、遭難しかけた事もあったわね」

「まあ、泥棒に簡単に見つかるようじゃ隠れ里とは言わないわよね」

「確かに。で、ここも冥界と同じく普通じゃ入れない場所だったのは分かった。けど、行きたい場所はここじゃなかった。なら、とつとと出よう」

この屋敷内から日用品を持ち出せば幸福になれるみたいだけど、興味はない。

俺は、幸福になりたいとは思ってないし、それは霊夢も咲夜も同じよう興味を示していない。

当麻がいればこの屋敷に触った途端に御利益丸ごと消えそうだな。

「……で、どこから出る？」

ここに用が無いのですぐに出ようと飛んだわけだが、出られなかった。

空を飛んでも、走って出てもすぐに元の屋敷に戻ってきてしまう。

「結界、とは違うわね」

霊夢の言う通り、最初は結界で閉じ込められているのかと思ったが、違った。

まるでここら辺一体が別の空間のようだ。

どうしたものかと辺りを改めて見渡していると、ふと誰かに見られている気配がした。

「なあ、誰かに見られてないか？」

「そうね。さつきまでは感じなかったけど、今は感じるわね」

「……あそこよ」

咲夜が呆れたように指さした方を見ると、屋敷の玄関が少し開いていて誰かが覗き込んでいた。

「……あれで隠れているつもりかしら？」

「そう、みたいだな。あ、この気配は……おい、橙！ そんな所で何してるんだ！」

「にやにや!! ば、ばれたー!!」

この気配は橙だな。俺が呼びかけると、玄関から何やら物が倒れたり、落ちたような大きな物音が聞こえてきた。

何だかこつちが悪い事をしてしまった気がする。

それから少しして、今度は屋根の上から声が聞こえてきた。

「にや、にやにやーん！ よくぞ私が隠れているのが分かったにや。えつと……お前達はここから一步も出る事はできにやっ……出来ないのにや！」

わざわざ屋敷の裏から登ったのか、橙が仁王立ちしてポーズを決めていた。

「……………」

何とも言えない空気が流れた。

橙はかっこよく決めたつもりなのだろうけど、途中手に持ったカンペらしきメモ紙をチラチラ見たり、最後に囁んだりと色々台無しだ。

橙ってあそこまで語尾に拘る猫キャラだったのだろうか？

霊夢を見ると、頭痛がするのか額に手をあてていて、睨夜は呆れつつ。

「まあ、可愛い」

と呟いていた。

「……………つゝつゝ!!!」

俺達の目の前に降り立った橙は羞恥心で顔を真っ赤にして、涙目で俯き少し震えている。

それを見て罪悪感を抱かない人はいないだろう。

「な、泣くなつて。よく出来ていたから。かつこよかつたぞ、橙。なあ、2人共?」

「…………え、ええ、そうね。びっくりしたわよ。まさかあなたがいるなんて」

「私も驚いたわ。さつきは驚き過ぎて固まっていただけだから、だからほらなんでここにいるのか、とか私達が出る方法とか色々教えて、ね?」

ぽつりぽつりと話し始めた橙によれば、藍に俺達がここに来るだろうから勝負を仕掛けて白玉楼の情報を渡せとの事らしい。

「だから私は屋敷の中で待っていたんですけど、お兄さん達いつまでたつても入つて来ないから玄関から様子を見ようとしたら、あっさり見つかっちゃつて…………せつかく決めた決め台詞も囁んじやつて…………藍様ごめんなさい。橙は役目を果たせそうにありません…………」

ちなみにさつきのセリフは、チルノ達と遊んだ時にかっこいい決め台詞や決めポーズの話になった時に考えた物だそうだ。

にや、という語尾は個性を出す為に外の世界の本を参考に決めたようで、全力で止めさせた。

それでもまだ橙は落ち込んでいたので、霊夢が屋敷にあつたお茶を淹れて飲ませると、ようやく落ち着いた。

「橙、落ち付いたかしら?」

「あ、はい。落ち付きました。ごめんなさい、お兄さん、咲夜さん、霊夢さん」

「気にしないでいいわよ。それより私達はここから出たいの。橙はその方法を知っているのでしょ？ 早く教えてちょうだい」

俺達がここに来る事をなんで藍が知っていたのか、とか色々聞きたい事はあつたけど、流石に今の橙を問い詰める程鬼にはなれず、勝負をする事にした。

まあ、霊夢ならそんなの構わずに問い詰めるかと思つたのは、内緒だ。

「それは私も同じ事思つてたわ」

「咲夜、人の心を読むなよ」

「2人共……後で覚えておきなさい。で、勝負は何をするの？ 弾幕ごっこ？」

既に霊夢は御札を構えて、陰陽玉も取り出して完全戦闘態勢だ。

正直、橙相手ではオーバークイルもいい所だと思う。

あ、橙の顔が真っ青だ。

「い、いえいえいえいえ、そうじゃないです。弾幕ごっこじゃなくて！ こ、この屋敷には沢山の猫がいます。その中の1匹の尾に札が結び付けられています。それを使えばここから出られます」

猫などいるのか？ と疑問に思つたらどこからかにヤーにヤーという猫の鳴き声が

聞こえてきた。

沢山いる割には一匹しか聞こえなかったような気がする。

「驚いたわ、ここって猫の隠れ里なの？」

「えっへん、橙が集めた猫達です。橙は猫達のリーダーなんです」

小さな胸を張って誇らしげに言った……と思ったら、急に凹んでしまった。

「ですけど、普段は言う事聞いてくれなくて、今回もマタタビと鮭でどうにか協力してもらえました」

「それは……その御気の毒様」

威厳ゼロにも程がある。

「と、ともかく屋敷の中にいる猫達の中から、御札を探して下さい。言っておきますけど、猫達を傷付けたらダメです。能力や弾幕は禁止！はい、はじめです！」

「はあ、分かったわ。とつとと探してここを出ましようか」

無理やりに話を打ち切った感があるけど、今はそんな事より早く探してここから出るのが先決だ。

最初は咲夜の能力で時間を止めて捕まえる気だったけど、能力禁止じゃしようがない。

「この屋敷は意外と広いな。手分けした方がよさそうだ」

「じゃあ、2階は私とユウキさんが探すわ。咲夜は1階を……」

「じゃあ、1階は私とユウキさんが探すわ。霊夢は2階を……」

2人同時に全く逆の事を言いだして、一気に場の空気が冷たくなった。

「手分けした方がいいと言ってるでしょ？ 私がユウキさんと探した方がいいじゃない」

「私はユウキさんのサポートに付いてきたのよ。一緒に探すのは当然でしょ？」

ああ〜なんでこんな時にも争っているんだこの2人は？

つてか、2人で一緒に同じ所探すわけじゃないんだし、別にどっちでもいいだろうに。

「お兄さん、相変わらずモテモテですね。大ちゃんやフランちゃん達が妬くのも分かります」

項垂れる俺を橙は慰めてくれた。だけど、妬くつて何だ？ しかも、大ちゃんとフランちゃん【達】 つてなんだ？

まあ、それを聞くと墓穴掘りそうなので気にしないでおこう。

「俺は2階を探すから、2人は1階を探してくれ……」

少し重い足取りで2階へと登って行つた。

背後から何か聞こえてきたけど、無視無視。

「つて何だこりゃ!?!」

2階にあがった俺が目にしたのは一面襖だらけの廊下で、明らかに屋敷の外観よりも

広い。

「見ての通りです。この部屋全てに猫が最低1匹ずついます」

「あ、橙付いてきてたのか。って、この部屋全部にいるのか!？」

ざっと見ただけで30以上はありそうだけど、1つ1つ見ていくしかないな。

これは藍、ではなく紫の差し金だろうけど、一体何のつもりなんだか。

「まずは、ここから……うおっ!？」

「にゃっ!？」

一番近くの襖を開けるといきなり天井からハンマーが降ってきた。

橙を突き飛ばして、部屋の中に転がるように入る。

そこには確かに猫がいたが、今の仕掛けにビックリしているようで全身の毛が逆立っていた。

橙もハンマーを茫然と見上げている。

よくよく見ると、このハンマーは100tとは書かれているが、外の世界でありそうなただの玩具のハンマーだ。

「おい橙。この変な罠。まさか……知らなかった?」

「は、はい。こんな仕掛けはないはずですよ。そもそもこの屋敷も迷路みたいにはなっていますけど、それ以外は普通の屋敷なので……」

橙が言うには、この屋敷は入った者を惑わず簡単な迷路みたいな仕掛けをしたと藍が言っていたが、物騒な罠は仕掛けたとは言っていないなかつたそうだ。

恐らく部屋を広くして襖だからけの部屋にしたのは藍だけど、罠を仕掛けたのは紫だな。

動物虐待だろこれ。

「きゃーっ!? 何よこれ!? 雪!？」

「ちよっ、これって、トリモチ!？」

下からは霊夢や咲夜の叫び声が聞こえてきた。どうやら一階にも仕掛けがあるようだな。

「……こんな中から一匹の猫を探せっていうのか。ってか猫怖がつてるだろ」

部屋の隅で固まっている猫を抱きかかえて部屋を出た。

この猫、鈴は付いているが、尻尾に札が無い。

「全部の部屋にこんな仕掛けが……猫達が危ないです。お、お兄さん。早く御札を見つけてください! 御札を手に取りれば仕掛けは全部解除されるはずです!」

「あ、ああ。分かった」

全部の部屋に猫がいるのなら、間違つて罠にかかる危険性が凄く高い。

今回みたく玩具の仕掛けかもしれないけど、それでも猫には危ない。

それを危惧した橙が顔を真っ青にして、俺に懇願してきた。

紫の奴、今度会ったら一発殴ってやる。

「橙、お前は下がってろ。元々俺達が探す事になってるんだからな」

「は、はい。お兄さん、気を付けてください」

下からは物騒な物音と叫び声が聞こえてきたが、他人事ではない。

「……そらっ！ って、ぬおっ!？」

次の襖を開けると、今度はボールが飛んできた。

かわすのが無理と判断し、怪我を覚悟で掴みとるとグニャつと柔らかい感触があった。

「今度はゴムボールかよ」

一応、安全設計にはなっているみたいだ。

中は畳が敷いてある普通の部屋で、どこからこのボールが飛んできたのかは分からない。い。

しかし、部屋の中には猫の姿はなく、代わりなのか招き猫が置いてあった。

「なあ、橙。他の部屋から猫の匂いや気配ってするか？」

「そう言えば……しなないです。確かに全部の部屋に入るように指示して入ったはずですけど、いません」

これはひよつとして、最初の部屋以外には猫がないのか？

じゃあ、御札はどこにあるんだ？

「あ、お兄さん。あそこに手紙があります！」

橙が部屋の真ん中に置かれた手紙を見つけた。

中を開くと、こう書かれていた。

「すまない、橙、ユウキ君。紫様が悪ノリして屋敷をカラクリ屋敷に変えてしまった。紫様は猫を全て避難させたつもりだったが、御札を持たせた一匹だけ捕まえ損ねて逃げられてしまったようだ。その猫を探してくれ。御札はその猫の鈴に変化されているので、触れば御札に戻る。そうすれば仕掛けも何もかも解除されるはずだ。本当に申し訳ない。紫様には私からきつく言っておく。 藍」

「紫様……ヒドイです」

橙が、心底恨めしそうな声を上げた。

ともかく、さっきの猫の首に付けられた鈴に手を触れた。

すると、鈴はチリン、と鳴って御札へと変わって行った。

と、同時に2階の間取りが代わり、外観通りの広さに変わった。

「霊夢、咲夜——猫見つけたぞ——！ 仕掛けも止まったはずだけど、大丈夫……か？」

下にいる2人の元へ降りて行くと、そこには真っ白になった霊夢と裸足の咲夜がい

た。

「大丈夫に見える？　なんで、室内で頭から雪被る事になるのよ。他にもミミズが降ってきたりしたわ」

「部屋一面にトリモチがしかけられていたわ……転ばなかっただけ、マシね」

「どうやら1階は精神的苦痛がある仕掛けで、2階は物理的な仕掛けが施されていたよ
うだ。」

1階を探索しないで本当に良かった、と思いつつ2階の残りにはどんな仕掛けがあったのかと身震いした。

そして、藍からの手紙を見せ橙から聞いた事情を話すと、2人共とても素敵な笑みを浮かべて紫への怒りを露わにした。

「そう……紫のせいなのね。橙、紫に会ったら伝えてもらえるかしら？　次に会った時が命日だって」

「私からも伝言をお願いします。今回の御礼に次は私からの最高のオモテナシをいたします。」と

「いいわね？」

「は、はいいゝ！　必ず伝えます！」

うわあお、2人共いい殺気だ。でも、橙に八つ当たりは良くないと思うぞ。彼女も被

害者なんだし。

「で、これを持って出ればいいわけね？」

「そして、この御札はそのまま白玉楼への道しるべになるわけね」

持ってきていた予備の靴下に履き替えた咲夜と、咲夜の能力で服を乾かした霊夢。

2人の準備が整った所で俺達はマヨヒガを後にした。

「えっと、本当にいいんですか？ マヨヒガの日用品を持っていかなくて？」

橙が無駄に時間を取らせたお詫びと、屋敷の物を持って行って構わないと言ってきたけど俺達は断った。

「別にいいわよ。私は幸福になりたいとか思っていないもの」

「私もよ。今の自分はこれ以上ない幸福だと思っっているし」

「俺も興味はない。と言うか、持って帰ったら返って面倒事に巻き込まれて不幸になりそうだ」

俺がそう言うのと霊夢も咲夜も、全くだと言わんばかりに頷いた。

「あ、あはは……本当にごめんなさい」

橙はさつきから耳がシュンと垂れさがり凹みっぱなしだ。

悪いのは紫で、橙は被害者なのに物凄く良い子だな。

「橙が謝る事じゃないわよ。むしろ、あんたも文句言っつていいと思うわよ」

「そうよ。いくら紫は主の主だからって今回はあまりにもひどい。だから、あなたは悪くないわ。だから元気出して。猫達も無事で良かったわね」

「はい、ありがとうございます」

霊夢と咲夜に言われて、少しは元気が出たようだ。

「橙、今度来た時はちゃんと猫と一緒に遊ぼうな？ またここに来れるかどうかは分からないけどな」

「私も猫と遊んでみたいわね。フランお嬢様も猫が好きだから、きつと喜ぶわよ」

「あ、はい！ お兄さん達なら大歓迎です！ いつでも来てください。って私がどうこう出来るわけじゃないですけど」

てへつと、舌を出した橙に俺達は笑顔で応え、マヨヒガを後にした。

後で聞いた話によれば、紫は藍と橙からこつぴどく叱られ、1カ月の間3食全てご飯とみそ汁だけになったそうだ。

俺達が紫に今回の御礼をたつぷりとしたが、それはまた別の話だ。

続く

第54話 「人形と人間」

マヨヒガから元いた場所に戻ってきた俺達は現在、猛吹雪に襲われていた。

橙からもらった御札は、こっちに帰ってきた途端に小さな羅針盤に変わった。

この針が指す方向に白玉楼があるようだけど……

「ちよつと、これはヒドイわね」

「さつきまで、暖かい所にいたから、尚更響くわ……」

飛ぶのに慣れてる霊夢と咲夜でも、この猛吹雪の中進むのは困難だ。

「なら……これで、どうだ」

魔理沙の力を使い、俺達の周囲に吹雪を防ぐ球体状のバリアを張ってみた。

魔法使いだからこれくらい出来るだろうと思ってやってみただけ、あつさり出来た

な。

でも、こういう結界や防御魔法は魔理沙には合わないみたいだな。

魔力の消費が思ったより多い。

「ユウキさんこんな事も出来たの？」

「寒い事は寒いけど、これで少しはマシね。ありがと、ユウキさん」

「魔理沙の魔力で出来るかと思ってな、やってみるもんだ……で、2人共そんなにくつつく必要ないんだけど？」

慣れない魔法で大きいバリアが張れなかったからか、霊夢も咲夜も俺の両脇にぴつたりとくつついている。

「べ、別にいいでしょ。私の方狭いんだし、咲夜の方はまだ余裕ありそうだけど、少し離れなさいよ」

いや、霊夢の方もほどほど余裕あるからな？

「そうかしら？　あまり大きいバリアを張ると、ユウキさんに負担がかかると思っつくつついたのだけど？」

「気遣いは嬉しいけど、なんでわざわざ腕を絡めてきた？」

そう言うとき夜は含みのある笑顔から一転して、真剣な表情に変わった。

「ユウキさん、この魔法長くは続かないでしょ？　魔理沙って弾幕はパワーとか言っって、攻撃的な魔法ばかり使うからこういうの慣れてないはず」

「あ、そうか。そんな本人も慣れてない魔法は飛行しながらだと、ユウキさんの消耗が激しくなるわね。だから私達で支えて飛ぶと言うわけね」

「うっ、なんか話の風向きが変な方向に……」

ちよつと無理してる事がバレてたか。

「変じゃないわよ。さ、このまま行くわよ」

そう言つて霊夢が咲夜と反対側の腕に自分のを絡めてきた。

飛行に魔力はあまり使つていないけど、このバリアは魔力の消耗が激しいから、すぐに幻想支配が解けてしまいそうだ。

だから、霊夢と咲夜に支えてもらつて移動するのは、非常に効率が良いと言うか、負担が少ないからいいとは思うけど……

「なんだろうなこの図」

「両手に華でいいじゃない?」

「自分で言うか咲夜さんよお? ま、2人共華なのはその通りだけど……つて、うお!?

霊夢、いきなり手を離すよ!」

「なつ、何いきなり変な事言つてるのよ!」

今魔力をバリアにのみ使つているので、霊夢に手を離されるとバランスを崩してしまふ。

「うふふつ、照れているのね霊夢は」

「そ、そんな事ないわよ! ほら、早く行くわよ……つてあら? 何か飛んでるわね」

霊夢が見上げた先には、小さな人影のような物が宙に舞っていた。

人ではないようだけど、妖精でもない。微かに魔力がある……これは。

「あれは……咲夜、ちよつとごめん！」

咲夜から手を離し、飛びあがってその人影をどうにかキャッチ出来た。

「それ、人形？ つて上海じゃない」

「ああ、酷く消耗している。一先ずどこかに降りよう。そろそろ幻想支配も限界だ」

「あそこがちようどいいんじゃないかしら？」

幻想支配の力も弱くなり、吹雪はますますひどくなってきたので、俺達は一先ず森に降りた。

ここら辺は木々が密集しているので吹雪があまり来ないようだ。

「で、上海って確かアリスの人形よね？」

「そうよ。アリスが操っているんだけど、何でこの子だけ飛んできたのかしら？」

俺の腕の中にはぐったりとした上海がいた。

人形なので元からぐったりはしているだろうけど、時折微かに動いている。

その姿は今にも死にそうな病人のようだ。

「多分、アリスから離れ過ぎて魔力の供給が途切れたんでしようね。散歩していたら吹雪でここまで飛ばされたのかしら。アリスはたまに自由に行動させているみたいだし」

アリスは完全な自立式人形を作ろうとしている、と言っていた。

で、沢山の人形を持っているが、そのうち上海ともう1体は式神に近い存在へとなり

つつあつて、よく何も言わなくても自由に動く時があるとも言っていたな。

散歩しようとして外に出たら吹雪で吹き飛ばされた……なんかペットの放し飼いを想像してしまった。

「ともかく、早くアリスの所へ連れて行ってあげないと」

操っている人形の魔力が切れたからと言つて人形自体が死ぬわけではないが、どうもこのシャンハイは少し違う気がする。

「はあく……そうね。アリスの家はこの先にあるはずよ。ついでに休ませてもらいましょ」

「そうしましょうか、これ以上は流石に少しきついわ」

霊夢や咲夜がこんな事を言うのは珍しいけど、仕方ないな。

周りの木々のおかげで吹雪がだいぶ和らいでいるとはいえ、まだ昼間なのにかなり冷え込んできている。

いつぞやのロシアよりはマシだけど、それでもマフラーがなかったらちよつと危なかったな。

私が初めて作った人形、上海がどこかへ行つてしまった。

蓬莱が言うには、私が人形の修繕に集中している間に外へと行ってしまったみたい。上海と蓬莱は、他の人形と違い私が何も命じなくても勝手に行動する時がよくある。最初は完全自立人形になったのか、それとも魂が宿ってしまったのかと思った。人里で出会った死神曰く、付喪神や式神に近い存在になりつつあるようね。

って、そんな事はどうでもいいわ。

「まずいわね。魔力の繋がりがかなり薄いわ。この吹雪で遠くへ飛ばされたのかしら」人形達は私の近くにいれば、どこにしようとかかる。

だけど、この吹雪に飛ばされたようで、詳しい場所が分からないわ。

今まで私からの魔力が途絶えた事はないから、もしあの子への供給が止まったらどうなるか分からない。

最悪、上海が他の人形と同じように、ただの操り人形に戻ってしまうかもしれない……それは嫌。

微かな魔力を辿って探しに行こうと身支度していると、ドアを叩く音が聞こえてきた。

「こんな吹雪の中一体誰かしら？ ああ、この魔力は魔理沙ね。霊夢と咲夜もいるみたいだけど、ちょうどいい機会だから色々返してもらわないと……あれ？」

ドアの向こうからは確かに魔理沙の魔力を感じた。けれども、その力はとても弱くす

ぐに消えてしまった。

「魔理沙？　こんな天気はどうしたの？　つてユウキじゃない。いらっしや……上海
!？」

ドアを開けると、雪で真白になったユウキと霊夢、咲夜がいて、更にユウキさんの腕の中には上海がぐったりとしていた。

「よっ、アリス。迷子のお届けだ」

「こんにちは、アリス。見ての通りよ。そこで上海を拾ったから届けにきたの。しばらく休ませてもらえぬ？」

「ええ、勿論良いわ。さ、入って入って」

ユウキ達を中に入れて急いで上海を診つつ、他の子達にタオルや紅茶の用意をさせた。

紅魔館のメイド長である咲夜の口に合うかどうかはちよつと不安ではあったけど、彼女は美味しそうに飲んでくれたからほっとしたわ。

上海の方は怪我なのはなく魔力が切れたただけなので、補充するとまた動き回れるようになった。

私に心配かけた事を謝り、そしてユウキの方へ行きぺこぺこ頭を下げた。

「本当にありがとう。ちようど探しに行こうとしてたのよ」

「シャンハイ！」

「飛んできた上海をたまたま捕まえられたただけだ。それに礼は俺じゃなく霊夢に言えよ。最初に見つけたのは俺じゃないんだし」

ユウキは上海と会話しているかのようね。

あの子はシャンハイとしか言葉に出せないし、その意味は私にしか分からないはずなのに。

「シャンハイ！」

「あー私も別に御礼はいいわよ。こうやって美味しい紅茶頂けたしね」

上海が霊夢にもペコペコとお辞儀をすると、彼女は照れくさそうに笑って答えた。

霊夢、少し変わったわね。

以前なら誰にでもぶつきらぼうと言うか、無愛想に近かったのに年相応の女の子みたいな顔しちやつて。

「ホウライイ！」

「ん、この子は、ひよつとしてほうらいって名前か？」

蓬菜も上海を助けてもらったお礼が言いたいようで、ユウキの前で両手をパタパタさせた。

「そうよ。この子は蓬菜。上海と一緒に私が初めて作った人形なの。双子みたいなもの

ね」

「そうかそうか、よろしくな蓬萊」

ユウキはまるで女の子を相手にしているかのよう、優しく蓬萊の頭を撫でた。

蓬萊は気持ち良さそうにしているけど、それを見て霊夢と咲夜は訝しげな表情をした。でも、それは私も同じ。

宴会の時もそうだけど、ユウキは上海も蓬萊もまるで人間の女の子のように接している。

私としては嬉しい事、けどやっぱり違和感しかない。

人里の子供達もたまにやる人形劇の時には、ユウキと同じように上海達を人間のよう

に話しかけたりする。

でも、ユウキの場合はそれとは違う。

人形を人形と分かっている、それでもこのように接しているようだわ。

外来人の彼からしたら、気味悪がってもおかしくないのに。

色々な妖怪と出会ったせいでもそこらへんの感覚がマヒしたのかしら？

「それで、こんな天気の中3人してどうしたのかしら？ まさかと思うけど、今頃異変解

決に動いている、とかじゃないわよね、霊夢？」

幻想郷に春が来ないばかりか冬に逆戻りになってしまった。

寒いのが苦手な霊夢ならもっと早く動くかと思っただけど、ここまできてようやくのね。

「……異変解決よ」

霊夢は私が言いたい事が分かっているようで、バツが悪いのか少しそつぽを向きながら返事をした。

「まあ、霊夢が鈍いせいでこの異変の事何も分からなかったのだけど、ようやく原因と首謀者の事がわかったのよ」

「私が鈍いってどういう事よ!？」

「あら、言葉通りよ?」

咲夜が霊夢への嫌味を交えて、冬が終わらない異変について教えてくれた。

春の光、ねえ。私も幻想郷にはそれなりにいるけど、それは初耳だったわ。

と言う事は、アレがそうなのかしら??

「もしかして……アレも春の光かしら?」

私が指さした先にあるのは、テーブルの上にある小さな小瓶。

その中には淡い光を放つ桜の花びらのようなものが、数枚入っている。

霊夢がそれをじっくりと見てから、私に問いかけた。

「間違いないわ。形は少し違うけど、リリーが持っていたのと同じ力を感じるわ。アリ

ス、どうしたのよこれ？」

「少し前に森の中で見つけたのよ。最初は暖かい光だなあと思つて触ろうとしたら、こういう形に変わったの」

「あなたコレを調べようとはしなかつたの？ パチュリー様は興味深そうにして色々調べたのに」

パチュリーはこの光について調べたのね、でも私は特に気にしなかつたのよね。

「別に？ 最近寒いから便利なものを手に入れた、そんなくらいにしか気にしてなかつたわ。興味がないと言えばウソになるけどね。で、これがそういうモノと分かつた以上、手元に置かない方がよさそうね。霊夢にあげるわ」

そう言つて私は花卉を小さな巾着に入れ替えて霊夢に手渡した。

彼女は最初キョトンとして、ユウキや咲夜も頭に？を浮かべた。

「3人共何固まつているの？」

「いやいや、いいのか？ パチュリーはこれを使って実験をしたがつてたから、てつきりアリスも興味沸いて色々するのかわと思つてたのに」

珍しくユウキが驚いているわね。まあ、分からなくはないけど。

魔法使いにとつて、四季の光は実験などで使えそうないサンプルにはなるでしょうね。

「いいも悪いも、これをどうにかしようだなんて今も思っていないわよ。逆にこれが春の光で、それを物騒な手を使ってでも集めている危ないのがいると分かったなら、手元に置きたくないのは当たり前でしょ？」

「それは、まあ分かるけど」

「それに私の魔法は人形を操る事が主に目的だから、あまりコレは役に立ちそうもないわね。パチュリーの魔法使いとしての目的は別でしょうから。彼女がこれを欲しがっても不思議じゃないわね」

魔法使いにはそれぞれ目的がある。

私の目的は完全な自立人形の作成。

それにこの光はあまり役には立たないし、そもそも分野が違うわ。

「アリスがそう言うのならこれは私達が預かるわ。春を取り戻した時にコレもきつと必要になると思うし……本当に暖かいわねコレ」

霊夢が巾着を懐に仕舞いこむと、途端に顔が崩れてほわーんとなった。

私も外に出る時に同じようにした事あったから、霊夢がああなるのは凄く分かるわね。

「懐炉代わりにちようどいい暖かさね。あ、そうだ。アリス、これ後2個貸してもらえますか？」

「2個？ ああ、なるほどね。上海、持ってきてくれる？」

「シャンハイ！」

上海から巾着を2つ受け取ると、霊夢はその巾着に花卉を数枚ずつ入れて、ユウキと咲夜に渡した。

「はい、2人共。これで少しはマシになるでしょ？」

「ありがとう、霊夢、アリス。うん、結構温まるな」

「気がきくじゃない、霊夢。これなら問題ないわ。アリスもありがとう」

「気にしないで、これくらい上海を見つけてくれた御礼には安すぎるわよ」

私はずつと平然としていたけど、実は結構驚いている。

霊夢とは結構長い付き合いだけど、彼女が自分からこういう気遣いをするなんて。

ホント、ユウキの影響かしら？

「アリス、これ借りていくわね。異変が解決したら返すわ」

「霊夢は魔理沙と違って借りパクなんてしないしね。って、そう言えば、ユウキは魔理沙の魔力使ってたのよね？ 魔理沙は一緒じゃなかったの？」

魔理沙の魔法で寒さをしのぎながらここまで来たと聞いたけど、それならどこかで魔理沙に会っているわよね。

と言うより、異変の解決なら魔理沙は自分から首を突っ込むと思う。

「そう言えば、魔理沙はどうしたっけ？」

「気が付いたらいなくなっていたわよね。1人で先に進んだのかしら？」

「霊夢、自分でぶっ飛ばしておきながら魔理沙の事忘れていたのかよ。しかも、咲夜まで」

異変解決の為に一緒に出たけれど、霊夢に吹き飛ばされてそのままだったようね。

しかも、その理由がユウキ絡みで霊夢をからかったから、だなんて。

本当に異変解決してる最中なのかしら？

と、その時だった。誰かがやってきた気配がしてドアが勢いよく叩かれる音がした。

「ん、噂をすれば、多分魔理沙だ」

「確かにこの魔力は魔理沙ね。それも幻想支配の力だっけ？ 便利な能力よね。って、

そんなに乱暴に叩かなくても今開けるわよ」

壊されそうな勢いで叩かれているドアを開けると、全身真っ白な魔理沙が震えながら飛びこんできた。

「ぎ、ぎむい……あ、あああります、だずげてぐれえ」

「どうしたのよ、魔理沙。大丈夫……そうには見えないわね。上海、タオル持ってきて。蓬莱はお風呂にお湯張ってちょうだい」

「魔理沙、力借りるぞ」

「アリス、台所借りるわね」

ユウキは震える魔理沙を暖炉の前まで運んで、彼女の魔法を使って全身を熱で覆った。

咲夜は台所で生姜湯を作り魔理沙に飲ませた。

「全く、手間かけさせないでよね、魔理沙」

「いや、霊夢がぶっ飛ばしたせいだと思っぞこれ」

霊夢も盛大に溜息を吐きながらも、タオルで魔理沙を拭いてあげた。

風呂の用意が出来た所で、霊夢が運んでいれてあげると、ようやく元気になった。

「ふうく……ヒドイ目にあつたぜ。霊夢にぶっ飛ばされて雪山に突っ込んでしばらく動けなかったからなあ。ブレイジングスターでようやく脱出出来たぜ」

「う、ごめん、魔理沙……正直、やりすぎたわ、夢想封印」

「あれ夢想封印だったのかよ!？」

霊夢も流石にやりすぎたと反省したようね。

でも、夢想封印って、やりすぎにも程があるわよ。

「魔理沙、ブレイジングスターって、前に俺に使った奴じゃなく八卦炉をブースターにして改良した奴か？」

「あ、ああ。本当はお前用に使はずだったんだけど、まさかあんな事で使う羽目になる

とはな……って何で知ってるんだ!？」

ブレインジングスターは確か、霊夢用に開発したけどユウキに呆気なく破られて改良中だった魔法よね。

ようやく改良終えて、チルノ相手に試すつもりが逆に新スペカで返り討ちにあつて、結局使う事が出来なかつた。

ユウキへのリベンジ戦でも使う予定だったけど、うやむやになつてまたお預けになつたと、前に魔理沙から聞いた。

まさかの初使用が雪山からの脱出だなんて、お気の毒様ね。

「幻想支配で朝魔理沙を視た時に分かつたんだよ」

「な、何イ!? そんな事も出来るのかよ!? ひ、卑怯にも程があるぜ……」

「魔理沙、ユウキさんはその事も説明したじゃない。忘れてたの?」

「私も聞いたし、紅魔館のみんなも知ってる事よ?」

「そ、そう言われてみれば私も聞いた覚えがあるぜ……」

へえ、幻想支配つて、本人が新しく使えるようになった魔法まで瞬時に理解する事も出来るのね。

これにはちよつと興味が沸いてきたわね。

今度大がかりな人形劇がしたくて、幻想支配でその手伝いを頼もうと思つてたけど、

これは楽しみになってきたわ。

それからせつかくだからと、4人で昼食を食べた。

この家でこんな大人数で食事するのは、初めてだからちよつと私もはしゃいじやつた。

彼は私の手料理を美味しいと言ってくれて嬉しかったし。

まあ、その時霊夢と咲夜にすぐ睨まれたけどね。

片付けも終わり、咲夜が淹れてくれた紅茶を飲みながら雑談をした。

上海も蓬莱もすっかりユウキが気に入ったようで、2人して膝に座って気持ち良さそうにしていた。

それを見た霊夢と咲夜がまた不機嫌になったのが、すぐおかしかったわね。

でも、それを見て改めてユウキの様子に違和感を感じた。

彼は霊夢と咲夜がなぜ不機嫌になっているのかを、嫉妬している事に気付いている。だけでも、それを他人事のように見ていた。

「お、やつと吹雪が止んだみたいだぜ」

外を見るといつの間にか吹雪が止み、雲の切れ目から陽が差し込んできていた。

「それじゃ、行きましようか。結構な時間足止め食らっちゃたわ」

「じゃあな、アリス。また遊びに来るぜ」

「今度来るときは持つて行った魔導書を返しに来なさい。でないとなんか今度は凍えそうになつてもいれてあげないわよ」

「あ、あははは……」

魔理沙は笑つてごまかしてるけど、コレは返す気なさそうね。

今度家に直接強襲してやろうかしら。

「アリス、今度は紅魔館にいらつしやい。今日の御礼に最高の手料理、御馳走するわ」
「楽しみにしているわ、咲夜。フランにも人形劇見せてあげたいしね」

咲夜とは宴会の時はあまり話せなかつたけど、今日は結構話せたわね。

宴会にも来ていたフランドール・スカーレットが実は上海の事を気にしていた事も聞けたし、今度人形劇をする事も約束した。

でも、主であるレミリアの承諾はいいのかしら？

「アリス、避難させてもらっただけじゃなく、昼食までごちそうになつて、悪かつたな」
「気にしないで。上海を助けてもらった御礼もできたし、私も楽しかつたわ。ね、上海、蓬莱？」

「シャンハイ！」

「ホウライ！」

ふふっ、すっかり彼と仲良しね。

ユウキも上海達の頭を撫でて、外へと出て行った。

「あ、そうだ。ユウキ、少し待って！」

私は彼に聞きたい事があつた事を思い出し、呼びとめた。

「ん？ どうした？」

「ユウキ、あなたに1つ聞きたい事があるわ。あなたはどうして上海と蓬萊を最初から人形としてじゃなくて、人間の女の子のように接してくれたの？」

「どうして……って言われてもなあ」

質問の意図が良く分からないのか、ユウキは少し困った顔をした。

こんな反応されるこっちが困るわ。

「初めてなのよ。初対面でこの子達をそう言う目で見て、接してくれたのはね。霊夢も魔理沙も驚いたけど、それはあくまで人形としてだったわ。他にも外来人と出会つた事があつたけど、自由に動くこの子達を気味悪がつたりもしたのよ？」

「あーなるほどな。別に俺だって上海や蓬萊は人形と思つてるぞ？ でもな、俺にはそ

れは些細な事だからな」

些細な事、ねえ。

「この子達が人形だろうが妖怪だろうが、心があつて意思があるなら、それは俺にとって

は人間と同じなんだよ」

そう言う彼の目は一瞬だけ遠くを見ていた。

視線は私に向けられているけど、でも、別の誰かを見ているようだった。

その眼がほんの一瞬ひどく哀しそうに見えたのは、気のせいじゃないと思う。

「ま、要するにユウキは女には見境ないって事だな」

「おい魔理沙、それはどういう意味だ？」

魔理沙が身も蓋もない事を言うけど、私も心の中でちよつと同意しちやつたわ。

「そうね。吸血鬼の誘いに呑気に乗っちゃうほどだし。無謀と言うか考えなしと言うか馬鹿って事ね」

「れ、霊夢まで……否定しないけど」

そこは否定しないのね。認めちゃうんだ……

「あら、それがユウキさんの良い所よ？ 包容力があつて偏見も何も持たない。素敵な人よ、ユウキさんは」

咲夜、うまいフオローするわね。

でも、それは私も思うわ。

「アリス、さつきから口に出してるけど、まさかお前もユウキの事……」

「えっ？ ち、違うわよ魔理沙。私は別に……はっ!？」

「ア〜リ〜ス〜？」

魔理沙が突然トんでもない事を言いだした。

すぐに否定しようとしたけど、霊夢や咲夜が殺気立った目で私を睨んでいた。

なんだか、今日この2人に睨まれる事多いわね。

「まさかアリス……」

「あなたも……」

「だから違うってば！ それに、あなたもって何よ、もって！」

「あら言葉通りよ？ ねえ、霊夢？」

「そ、そこで私に振らないでよ？ 私は関係ないわ！」

咲夜は本当に彼への好意を隠す気ないのね……

で、霊夢？ 今更何を言っても説得力無いわよ？

「おーい、お前ら早く行くぞ！」

そして、当の本人はと言うと、もう空へ飛んでいてこっちを呆れたように見ていた。

鈍感、とは違うわねやっぱり。

「あ、ユウキさん。なんで先に行こうとするのよ」

「おまつ、ここは混ざる所だろ！」

「はあ……やっぱりこうなるのね。じゃ、今度こそ行くわアリス」

「ええ、気を付けてね」

漫才のような会話をしながら異変の原因、白玉楼へと飛んで行く4人を見送りながら私はポツリと呟いた。

「彼は嘘つき、か。霊夢の言う通りね。それにまるで糸のない操り人形のようなだわ」

続く

第55話 「騒霊ライブ」

アリスの家で春の光が変化した花卉をもらった俺達は、今度こそ白玉楼へ向かった。マヨヒガで手に入れた羅針盤の示す先は雲の上だった。

さつきまでは猛吹雪だったけど、今は晴れてはいないが雪は止んでいるので飛びやすい。

「こんな小さな花卉で結構暖かくなるもんだな」

魔理沙が花卉の入った巾着を見ながら言った。

雪は止んだとはいえ、まだ寒さは厳しい。

でも、花卉が春の暖かさを放ってくれているので、俺達は寒くなかった。

「花卉一枚でこの暖かさはすごいわね。それにしても、なんで妖夢はこれを集めようとしているのかしら?」

「幻想郷に永遠に冬にするつもり、なわけないわね」

「春を集めて独り占めする、ような感じでもなかったな」

咲夜の疑問は俺も霊夢も感じていた事だ。

「うーん、案外一年中春にして、一年中花見をしたいだけかもな」

「それはないだろ」

「それは魔理沙だけでしょ」

魔理沙だけは能天気だった。

そう言えば、異変の最中は妖精たちが興奮して騒いだりしてるはずなのに、今回はまだ一度も会ってはいない。

チルノや大ちゃんには会ったけど、あの2人はいつも通りだった。

「この寒さで妖精達も冬眠中？」

その割には紅霧の時は、ひっきりなしに襲ってきたけどな。

「うちのメイド妖精達も寒い寒いと、なかなか炬燵から出てこないのよね」

「あんたの所のはいつも役に立ってないじゃない」

「紅魔館に炬燵あったのかよ。今度借りておこう」

洋館に炬燵、なんてアンバランスな。

「つてか魔理沙、咲夜を目の前にして堂々と泥棒宣言するなよ」

「盗むとは言っていない。借りてくだけ借りてくだけだぜ」

「それは残念ね。魔理沙限定で永久的にレンタル禁止よ」

などと雑談をしながら白玉楼を目指し、ドンドンと飛んで行く。

やがて羅針盤が示す雲を越えた所で、俺達は妙な感覚におそわれた。

「これは境界ね、間違いないわ。私がいかに近付くまで気付かないなんて、相当な代物よ」

「で、霊夢これは破れそうなのか？　なんなら私がマスパで一発吹き飛ばそうか？」

霊夢は境界を見て難しい顔をした。

境界を張ったり破ったりは霊夢の十八番だけど、これは難しそうだ。

魔理沙が力づくで突破しようと八卦炉を構えると、どこからか声が聞こえてきた。

「騒がしいわね。騒ぐのは私達の専売特許だと言うのに、お株を奪わないで欲しいなあ」

「リリカちゃんリリカちゃん、この人達幽霊じゃないみたいよ。ちゃんと足がある！」

「足があるのは私達もでしょ？　でも、生きてる人間なのは間違いないわね」

声はすれども姿は見えず、どうやら2人組の女の子らしいけどどこにいるんだろう？

微かに気配はするけど、とても薄い。

「どこにいるの？　出てきなさい！」

俺達は辺りを見渡して警戒した。だけど視界が悪くて間近にいる霊夢達の姿以外何も見えない。

「どこに？　どこについて、私達はどこにでもいるわよ。ほら、あなたの後ろにも……うらめし、ゲボオツ！」

突然背後に僅かな気配と共に声が聞こえたので、思いつきり肘打ちすると見事に当

たつたようだ。

後ろを振り向くと、水色の髪をしてピンク色の服をきた女の子が空中でうずくまっていた。

感觸的に俺の肘打ちがちょうどみぞおちに入ったみたいだな。

「お、おねえちゃーん!?!」

そこへ茶色が混ざった銀髪の少女がスツと現れ、蹲った女の子にかけよつてきた。

どうも2人は姉妹のようだな。しかも、現れ方やこの気配から言つて恐らくこの2人は人間でも妖怪でもない。

「うわつ、綺麗に決まったなあ。すごく痛そうだぜ」

「あ、わ、悪い! 大丈夫か? いきなり背後に気配したからつい……」

「だ、大丈夫……です。こっちこそ驚かそうとして、すみません……」

「まあ今のは正当防衛ね。それに幽霊ならこれくらいどうってことないでしょ」

「たしかに、そうですけど、痛いモノはいたい……」

霊夢も気付いていたようだ。この2人は幽霊。妖夢と似た気配がしたから分かった。

でも、妖夢と違い完全な幽霊のようだけど、俺の打撃がなんで効いたんだ? 幽霊って確か触れないんじゃないか? あ、妖夢の半霊は触れたから幽霊にも打撃は効くのか。

と思つてよくよく2人をもう一度視てみると、どうも幽霊とは違う気がする。

「霊夢、この2人幽霊とは少し違う気がするんだけど」

「うーん、そう言われてみればそうかも……こいつら何者かしら？」

とここで、何か考え事をしていた咲夜が2人を見てアツ、と声を上げた。

「どうも聞いた事あるような声だと思つたら、彼女達はプリズムリバーじゃない。この子達は幽霊じゃないわよ。騒霊と自分達で言っているわ」

「騒霊？　咲夜、この子達の知り合いか？」

「ええ、この子達は紅魔館近くの森にある廃洋館に住んでいるの。ユウキさんが殴つたのは二女のメルラン、でそっちの赤い服はリリカ、他に長女のルナサがいるわ。3人合わせてプリズムリバー3姉妹と言うわけ」

彼女達は幽霊とは少し違い、ある少女が無自覚で生み出した幻想の存在で、ただ楽器を演奏するだけで基本的には無害らしい。

たまに紅魔館でライブをしているらしく、この前の宴会では声をかけたが先約があつて来れなかつたらしい。

「へえ、これが噂の騒霊か、噂でしか聞いた事ないのよね」

「私も初めて見るぜ。でも、案外普通だな。それに弱そうだ」

霊夢も魔理沙も初対面のようにだ。

確かに、感じる力は2人共それほど強くはない。

姉のメルランが少し強い程度か。

「あ、咲夜！　なんでこんな所にいるのよ!?　それとそのあなたいきなりヒドイじゃない」

「こんにちは、リリカ。私達はこの先に用があつてきたのよ」

「いきなり、つてその言葉はそっくりそのまま返す。顔面裏拳じゃなかっただけ、まだマシだろ?」

「どつちでもヒドイわよ!」

しかも結構手加減したんだけど、綺麗に入ったから運が悪かつたようだな。

「ユウキつてたまに怖い事言うよな……」

「そうかしら?　私でも同じ事されたら夢想封印するわよ?」

霊夢も怖い事言うな。あ、さつき夢想封印でぶつ飛ばされた魔理沙が顔を青くした。それを見て咲夜が軽いため息をつきながら、リリカに俺達の紹介をした。

「あーこれが噂に聞く紅白巫女と白黒魔法使いね。で、ヒドイ男」

「こつちも噂ではあんた達の事聞いているわ。後、せめて名前で呼びなさいよ」

「おう、白黒だけど霧雨魔理沙様だぜ」

「ヒドイのは否定はしないけどさ」

「うくやつと収まつてきたわ……私達は今日白玉楼からライブの依頼があつてきたのよ。私達は騒霊だから、冥界との行き来も自由なの。今は姉さんを待つている所よ」

そう言えば3姉妹つて言われてたものな。

「で、あんた達はこの先に行きたいのね……うーん」

リリカは何やらしばらく考え込み、やがてポンと手を打った。

「あつはつはつ、よくぞここまで来たわね。さあ、ここから先へ行きたければ私達を倒して行きなさい！」

……ポカーン

突然リリカがふわつと更に上空へ浮かび上がり、腰に手を当てて何かのポーズを取りながらそう言い放った。

俺も霊夢達もメルランですら目が点になって、何が何だか分からない。

「あつはつはつ、よくぞここまで来たわね。さあ、ここから先へ行きたければ私達を倒して行きなさい！」

「もう一度言わなくても聞こえてたつての！」

「え、えつと……ね？　リリカちゃん、最近外の世界のトクサツ、にハマっちゃったみた

いで、たまにこうなるのよ」

あー……そう言う事か。

「翻訳ありがと、メルラン。要するに悪役ごっこがしたいわけか」

なんか急に頭痛くなってきた。

それは霊夢や咲夜も同じよう、魔理沙だけが1人興味が湧いたみたいだ。

「面白そうじゃん！ 少し付き合ってやろうぜ？ 弾幕ごっこしてなくてウズウズしてた所なんだ」

「その意気やよし！ さあ、私とおねえちゃんの2人を見事に倒してみよ！」

「ええー!? 私もやるのお!？」

メルランは思いっきり嫌な顔をしたけど、気持ちはよくわかる。

「もう面倒だからパパッと終わらせましょうよ」

「そうだな……うん、深く考えたら負けだな」

霊夢が御札を取り出し俺も拳を握ったが、咲夜が俺達を手で制した。

「ここは私と魔理沙がやるわ。霊夢は雪女とやったし、ユウキさんはもしこんな上空で弾幕ごっこの途中で幻想支配が切れたら、地面へ真つ逆さまよ？」

確かにここに来るまでまた魔理沙を視てその魔力で結構飛んだせいで、少し消耗している。

「ただこの程度は問題ないし、万が一切れた時は再度誰かを視ればいいだけだ。」

「そう、なら今回は2人に任せるわ。ユウキさんもそれでいいでしょ?」

「ま、そうするか。んじや見学させてもらうぜ」

「霊夢と俺は少し離れた場所で、2対2の弾幕ごっこを見学する事にした。」

「すぐに終わらせるわ。魔理沙、足を引つ張らないでね」

「そつちこそ。まあ、最初は私に任せとけ!」

「魔理沙はどこからか小瓶を取り出し、空中に放り投げた。」

「先制の花火は私が頂いたぜ!」

「小瓶は緑の光を放ちながら、メルランとリリカに向かって飛んで行く。」

「スペカではなく改良した通常弾幕か、まるでミサイルだな。」

「これがマジックミサイルだ!」

「と思つたら本当にミサイルだった。」

「簡単にかわされたけど、魔理沙のミサイルはまだ尽きそうにない。」

「ほらほらほらあ!」

「うわつ、ちよつと、しつこい!」

「魔理沙にばかり気を取られると、あつという間に終わるわよ?」

「リリカが飛んで避けた先には咲夜が待機していて、ナイフを雨のように降らせた。」

あのナイフ弾幕ごっこ用で殺傷力はないと言つてたけど、当たると痛そうだ。

「リリカ!？」

「お前の相手はこの私だぜ！」

メルランがミスایلを避けながらリリカの援護に行こうとするが、魔理沙が今度はレーザーを放ちながらそのゆくてを阻む。

「むっ、やられてばかりじゃいけないよ！」

「私達の演奏、たっぷり味わうよいいわ！」

2人は手をかかげると、空中に楽器が現れた。

メルランはトランペット、リリカはキーボードだ。

「騒霊の本業、見せてあげる！」

そう言うのと現れた楽器に触れてもいないのに、勝手に演奏を始めた。

どうやら自由に楽器を作り出し、手を触れずとも演奏できるのが、彼女達の能力らしい。

「久々にあなた達の演奏を聞くのも悪くないわね。魔理沙、気をつけなさい。メルランの音は聞く者の感情を高ぶらせる躁の音色を出すのよ。変に気持ちが高ぶったりして暴走しないでよ！」

なるほど。自由に演奏するだけじゃなくて音そのものにも能力があるのか。

学園都市にも音を操る能力者はいくらかいたけどな。

「へっ、そんなの聞くまでもないぜ。弾幕ごっこ中の私は年中無休で昂ぶってるんだぜ！ んじやお前の音にも何か能力があるのか、リリカ？」

「うーん、あるにはあるけど、今は無意味かな」

魔理沙はキーボードから放たれる音の弾幕をかわしつつ、レーザーで反撃しているがさつきよりも命中率が悪い。

咲夜もメルランに応戦しているけど、少し動きが変だ。

「ふっ、不本意に昂ぶった感情の中でうまく弾幕をコントロール出来るかしら？」
興奮状態に無理やりさせられると、思ったように身体を動かさなくなる。

これは俺にも経験がある。

「あはははっ、だったらこうだ！ 【星符・メテオニツクシャワー】！」

すっかり興奮状態になった魔理沙はおなじみのスペカを放った。

気分が昂ぶっているせいか、いつもよりもド派手にばら撒いている。

「わわっ、私も負けないわよ！ 【鍵霊・ベーゼンドルフアー神奏】」

リリカも負けじと回転しながら迫ってくる弾幕をばら撒き始めた。

【冥管・ゴーストクリフオード】

【幻符・殺人ドール】

咲夜とメルランもスペカを使い、ナイフやら赤や白の弾幕を撃ちあっている

「危ないわね……」

俺達はさつきから黙って見るけど、実は流れ弾が結構飛んで来ていて地味に危ない。

「派手に撃ちあうのは綺麗でいいんだけど、もうちよつと考えてよね」

「まあ、4人共夢中になつてて周りに気を使う余裕ないだろ」

俺と霊夢は結界を張って流れ弾幕を防いでいる。

幻想支配で霊夢の霊力を使い、2人分の結界を張っているのだから頑強なものだ。

「とはいえ、これ以上離れてみるのもつまらないわね。それにしてももう1人はどこにいるのかしら?」

俺も霊夢もプリズムリバーの最後の1人の事を気にして、メルランとリリカを魔理沙と咲夜に任せていた。

「だけど、最後の1人は一向に来る気配がない。」

最も、騒霊も幽霊の一種みたいなもので気配がなく突然現れるかもしれないな。

「2人の姉だよな。もうすぐ来ると言っていたし……実はもう俺達の近くにいたりして」

「案外また私達の後ろにいるとか?」

「そのとおりです。あなた達良い勘してますね」

「うお!」

背後から急に声と気配がして、振り向くと金髪に黒い服を着た少女がいつの間にか浮かんでいた。

何となく変な予感がしていたので、今度はいきなり肘打ちする事はなかったけどな。

「あんたいつからそこにいたのよ!」

「ふっふっふっ、実は弾幕ごっこが始まる前からずっといました」

「それ結構前じゃないか?　なんで今まで出てこなかったんだ?」

俺はともかく霊夢にすら気付かれずに潜んでいるなんて、すごいな。

「……弾幕ごっこが面倒だった、から?」

「いや、そこで疑問形になる意味が分からん。ってか俺に聞かれても困るぞ」

「じゃあ、そういう事にしよう。私は弾幕ごっこが面倒だった」

「な、何なのこの子は」

2人してがっくりと肩を落とす。

脱力系と言えがいいのか、ゆったりとのんびり話すこの子はどこか理后を思い浮かばせるな。

「あ、私はルナサ、あそこにいる2人の姉、よろしく」

「ああ、よろしく、俺はユウキだ」

「博麗霊夢よ。で、2人の妹は弾幕ごっこの真つ最中だけど、あんたはどうするの?」
やるなら私が相手になる、と目で語る霊夢を見て、ルナサはかなり長く考えて呟くように言った。

「ん、私も観戦していい?」

「……好きになさい」

もう相手にするのも疲れるのか、霊夢は適当に返事をして魔理沙達へと向き直った。
ルナサは俺と霊夢の間に入るようにふわふわと浮かんできた。

「ねえ、ユウキ君。音楽は好き?」

「音楽? いや、好きでも嫌いでもないな」

学園都市にいる時も特に好きな歌手やグループもいなかったし、部屋で聞く事もなかった。

学校で授業は合ったけど……受けた記憶がないな、ほとんど休んでた気がする。

「ふーん。私の音は相手を鬱にする音楽だけど、聞いてみる? お手軽に死ぬほど鬱になれるよ? ちなみに私の専門はバイオリン」

「いや、それを言われて聞きたがる奴は稀だと思っぞ? 能力抜きになら演奏聞いてみたいけど」

いざとなれば幻想支配で能力停止させて聞けば……って、それじゃ演奏する能力も使

えなくなるか。

ルナサの音は相手を鬱にする、か。メルランとは正反対だな。

「そう言えば、あのリリカって赤いの。あれはどんな音を出せるの？」

霊夢が弾幕を放っているリリカを指さして尋ねた。

リリカの音にも何かしら効果はあるのだろうか、特に変わった音には聞こえない。

しいて言えば心に響かない、個性がない音には聞こえる。

「リリカは幻想の音を出せるの。具体的に言えば私の鬱にする音、メルランの躁にする音を合わせて聞き心地のいい音にするの。だから私達は3人一緒にライブをするの。弾幕ごっこをする時も3人一緒」

ルナサとメルランの音を調和させる音ってわけか。

考えてみれば、ライブする時に毎回相手を鬱にしたし躁にしていたら、観客はたまつたもんじゃないもんな。

「と言う事は、今あの2人はそれぞれに弾幕ごっこしてるけど、実質的には……」

「うん、メルランもリリカも実力は1/3人前程度。だから、あの2人は負ける。ほら、負けた」

ルナサの言う通り、メルランもリリカも弾幕を浴びて、目を回していた。

「ふー、良い運動になったぜ」

「弾幕ごっこは久々だったけど、まあ何とかなつたわね」

「うーん、まけたあ〜……」

「き、今日のところは私達の負けよ。でも、おぼえておきなさい。お姉ちゃんがいればあなた達なんて……つてお姉ちゃん!? そんな所で何してるの!?!」

リリカがルナサに気付いて、こっちへすっ飛んできた。

騒霊だからそんなにダメージ受けてもすぐに回復か?

「やつほー」

「やつほー! じゃない! いたなら何で加勢してくれなかったの? おかげで私もメルランお姉ちゃんも負けちゃったじゃない」

「う〜姉さん。遅過ぎ!」

リリカだけじゃなくメルランも抗議の目でルナサを睨むが、当の本人は首を少しだけかしげた。

「妹達が立派に1人でやれるように、影で見守る為に私は手を出さなかった……と言うのはどう?」

「ダメ! つてか私達に聞くな!」

どうやらルナサは妹達に対してもこんな感じらしい。

「じゃ、私達はもう行くわね」

靈夢はもう関わりたくないようで、さっさとこの場を後にしようとした。

「あ、ちよつと待てよ。結界はどうしたんだよ」

「そんなもの。弹幕ごっこしてる間に穴開けたわよ。ユウキさんが結界の弱い部分探ってくれたおかげで案外簡単に破れたわ」

弹幕ごっこが始まってから、俺が幻想支配で結界を視て、弱い部分を見つけて靈夢が破った。

あれ？ 咲夜がなぜか不機嫌そうな顔をしているぞ？

「そう言えば、靈夢に抱きかかえられて何かしてたわね、ユウキさん」

「うっ、見たのかよ。よくそんな余裕あったな」

「時を止めた時にたまたま目に映っただけよ」

俺が結界を視ている間、飛ぶ事が出来ないから靈夢に抱えられながらだったのが、少し恥ずかしかつたと言えば恥ずかしかつたな。

「ほうほう、お姫様だっこならぬ王子様だっこと言うわけですか」

ルナサがそれを聞いて、興味深そうにしている。

メルランとリリカは少しにやけ顔だ。また肘打ちしようかな。

「なんだそれ。俺は王子様って柄じゃない」

「そうよ。それに抱きかかえてたって、私はユウキさんを支えていただけだよ？ あーも

う、ほらさっさと行くわよ！」

「ぐえ、霊夢、首、くるしい……」

霊夢が俺の襟首を掴み強引にこの場を後にした。

正直、地味に首苦しい。

「くつくつくつ、霊夢をいじるネタがまた増えたな。じゃあな、お前ら。今度ライブ聞きに行くぜ」

「また紅魔館でライブお願いしますね。フランお嬢様にも聞かせたいので」

「はいはい、いつでもどこでもプリズムリバーは演奏しますよー！」

「今度は本当の私達の演奏を楽しんでね」

「ユウキ君、またねー」

プリズムリバー3姉妹に手を振り返しながら、俺達は破れた結界の先へと進んだ。
てかい加減、手を離してくれないかな霊夢。

「結界が破られて、亡霊たちが騒がしくなってきた。どうやら、やってきたみたいね。しかも春を持ってきてくれたようね……妖夢、行ってくれるかしら？」

「はい、幽々子様。今度は油断しません。残りの春を必ずや持ってきます」

「まあまあ、向こうからやってきたのだから、そう焦る事はないわ。それよりも……あの少年、彼は絶対に通してはいけないわよ？」

「……わかりました。では、行って参ります」

「……………彼の力は危険、危険なのよ……………でも、もうすぐ……………もうすぐで、私（ワレ）の封印が解けるわ」

続く

第56話 「冥界剣士」

雲の上に張られていた結界を破り、いよいよ冥界へと突入した俺達は人魂の歓迎を受けていた。

「いきなり物騒なお出迎えだな。幽霊は墓場で寝てろつてのに」

迫りくる人魂をレーザーで撃墜しながら、魔理沙は毒づいた。

気持ちには分からなくもない。

大きな門を抜けた途端に人魂が襲ってきた。それも四方八方から大量にだ。

霊夢曰くこれは幽霊らしく、冥界に多くいるものたちだ。

「ここは冥界でこいつらは幽霊、生者の私達が珍しいんでしょうね」

魔理沙と背中合わせで御札や弾幕を撃ち続けて、霊夢が答えた。

最も、幽霊だからと言って死んだ者の霊とは限らなく、自然現象として生まれる幽霊もいるらしいけど。

「もしくは侵入者である私達を追い払うように命じられている、からかしら?」

「そつちの方がありえそうだな」

俺も咲夜と背中合わせで迫りくる幽霊を追い払っている。

数が多いので弾幕ではなく、直接殴ったり蹴ったりして対処している。それでもキリがない。

「集めた春はどうやらこの奥にあるようね。向こうから暖かい空気が流れてきてるわ。羅針盤も向こうを指しているわね」

霊夢が顔を向けた先では、空がうつすらと桜色に輝いていた。

あの下に春の光は集められているようだ。

「でもコレじゃキリないぜ。一気に突破するか」

「それしかないか。俺と魔理沙で道を……ん？」

と、思っていたら幽霊達はまるで誰かに下がれと命じられたように、急に消えてしまった。

「……来たか。妖夢」

俺達が身構えた先に、魂魄妖夢がすつと現れた。

「ここからは通しません。それとあなた達の持っている春の光、それを渡して頂きます」
「そう言われて、はいどうぞって渡すアホはいないだろ」

妖夢は2本の刀を既に抜いていて、それを俺に真っ直ぐに向けた。

「あなたはどうしても通すなど、幽々子様を念を押されていますので、ここで引き返してもらいます」

「ユウキさんだけを念押し？」

「博麗の巫女である霊夢じゃなくて、俺を通すなどわざわざ？ どうしてだ？」

まあ異変の解決は博麗の巫女の責務だから、つてのはあるかもしれないけど俺はダメと名指しか。

「あなたは危険だからです。それは私も同感です」

幻想支配の事を言っているのか。こうも危険と面と向かって言われるのは紫以来か。

「っ!？」

その時だった。とてつもない何か嫌な感じがした。

何か危険を知らせているのとは違う、虫の知らせとも言うべき嫌な予感。

嫌な予感がする事は何度も会ったけど、ここまで強いのはは生まれて初めてだ。

勘が強い霊夢を見てみたが、特に何も感じてはいないようだ。

「どうしたの、ユウキさん？」

「咲夜。いや、何でもない……」

なら……は……

「霊夢達は先に行ってくれ。俺はここで妖夢の相手をする」

「なっ!？」

霊夢と魔理沙が同時に驚き、妖夢も目を見開いた。

咲夜だけはただ黙って無反応だけだ。

「何言っているのよ。1人でなんて危険じゃない!」

「おいおい、私から見てもアイツ結構やばそうだぞ? 大丈夫かよ」

魔理沙が心配するように、今の妖夢は前に会った時以上に殺気立っているのは分かる。

多分あの時俺に負けたのを心の底で、根に持っているのだろうな。

でも主の命を優先して私怨は心に潜めている感じだ。

「お前の主が言ったのは俺を通すな、だろ? 霊夢達の事は通すなど言われたか?」

「い、いえ、ですが侵入者を黙って通るわけにはいきません!」

「じゃあこう考えろ。俺達4人を一斉に相手にして全員通されるか、それとも主が一番危険視してる俺を確実に足止めするか」

「それは……」

妖夢は明らかに迷っているな。

迷う事じゃないと思うけど、こういう言い方をされて迷うとは、思っていた以上にかなり素直な性格だな。

「ちよつと、どういふつもりよ?」

霊夢が小声で話しかけてきた。

魔理沙も同じようでも頷いている。

「どういうも何も今言った通りだ。さつきから嫌な感じがする。ここで時間を食うわけにはいかない。霊夢達は早くこいつの主の所に行つて異変を解決させてくれ」

そう言うのと霊夢は驚いた顔をした。

なんでそこまで驚くんだ？

「……ちよつと、意外ね。リリーホワイトと約束したあなたなら、どうしても自分で異変を解決すると思つていたのに」

「ああ、なるほどな。でも要は異変が解決されて、春が戻つてくればいいんだろ。その為にどうすれば一番良いかを判断しただけだ」

「そういう事なら。私達に任せておけ！ 行こうぜ霊夢、咲夜」

魔理沙が霊夢と咲夜を駆りたてて先に行こうとしたが、咲夜は黙つて首を横に振つた。

「私もここに残るわ。それなら少しは安心でしょ、霊夢？」

「お、おいおい。俺は一人で大丈夫だつての」

あまり残つてほしくはないんだよな。俺が今からやろうとしている事を知られたくないし。

でも、咲夜はどこことなく気付いていそうな気がする。

霊夢は俺を何かを訴えかけるようでもなく、ただ黙ってじっと見つめてきた。そして、咲夜の方に目を向け同じく睨むように見た。

咲夜が少し頷くと霊夢は軽く溜息をついた。

「そう、ね。元々咲夜はユウキさんのサポートで付いてきたんだし。元凶退治は私と魔理沙だけで十分よ」

あれ？ 思ったよりもすんなりオツケーしちゃうんだな？

「おつ、どうした霊夢？ ここのは咲夜とユウキが2人になるのを妬く所、ゲフオツ!!」

俺と同じ事を思った魔理沙が余計な事を言つて、見事な肘打ち食らつてる……さつき俺がメルランにやったのはあんな感じか。

「と、とにかく！ 早くやつつけてとつと追いついて来なさいよ。まあ、その頃には終わってるかもしれないけど」

「はいはい。分かったから早く行きなさい……そう言えば、妖夢がやけに静かね」
さつきから静かな妖夢へと目を向けてみると。

「いや……うーん、ここは……」

眉間に皺を寄せて、しゃがみこみながらブツブツと考え込んでいた。

「ま、まだ悩んでる。しかもかなり真剣に……」

「根はとて真面目なのよ。アホの子だけ……」

咲夜がフオローしようとしたが、妖夢が実はアホの子だと言う事は霊夢と魔理沙も分かったようだ。

「はあく……ともかく、私と魔理沙は行くわね。油断しないようにね」

「ああ、そつちもな」

まだ悩んでいる妖夢の上を霊夢と魔理沙が飛んで行く。

俺と咲夜も今のうちに行けば良かったかもしれない。

でもそうはいかないんだよな。

「分かりました！ ユウキさん以外は通って……アレ？」

やっと結論が出たようだけど、顔を上げた妖夢の先には俺と咲夜しかいない。

「あの、博麗の巫女と白黒の魔法使いは？」

「もうとつくに先に行った。気付いてなかったのかよ……」

「な、なんですって!?! わ、私に気付かれずに行くなんて、流星は博麗の巫女です」

咲夜と2人で深く溜息をつく。

真剣に相手しようと思ったのが馬鹿らしくなってきた。

「あーほら、俺も先に行きたいからとつと始めようぜ」

俺がそう言うのと妖夢の目付きが変わり、刀を構えた。

切り替えが早いな。

「じゃ、やるか」

拳を握り妖夢へと走り出そうとした俺の肩を咲夜が掴んで止めた。

「待ちなさい。これを使って、いくらあなたでも素手じゃあの子は敵しいんじゃない？」

そう言つて咲夜が差し出してきたのは、2本のナイフ。

咲夜が弾幕ごっこで使っていたのよりも刃渡りが広く、サバイバルナイフなどの軍用ナイフに似た形状のナイフだ。

こういうのなら俺も使いなれている。

弾幕用ナイフもだけどこんな大きなナイフを2本もどこに仕舞っていたのかはちよつと気になるが、気にしたら負けだな。

「あーやつぱり咲夜は俺がしようとしてる事、気付いてたか」

「勿論よ。魔理沙は分かつてないようだったけど、霊夢は気付いてたでしょうね。だから止めると思つてたのに、意外だったわ」

「と言うわけで妖夢。これで、勝負だ」

「望むところだ」

俺がしようとしている事、それは妖夢と弾幕ごっこではない真つ向勝負。

本当は素手でやるつもりだったけど、流石にそれだと苦戦したかも。

それに弾幕ごっこじゃなく、真つ向勝負をするだなんて霊夢が聞いたら絶対に止めた

だろうな、薄々気付いていたみたいだけど。

前に俺と美鈴が格闘戦した時も、後で聞いて怒ってたし。

「あなたがこの前妖夢を挑発していたのは、こういう状況になるとよんでいたからかしら？」

「さーな。でも、妖夢の相手は俺がするとは決めていたさ。で、あんな勝ち方したら妖夢は弾幕ごっこではなく、剣で勝負を付けに来るとも思ってた。まあこうもすんなりと進むとは思ってなかったけど」

「それは……でも、霊夢も言っていたけど、油断しないでね。あなたなら大丈夫だと思うけど」

咲夜もやはり気付いていたか、あの時俺の側で妖夢の動き見てたしな。

「ああ、問題ない。弾幕ごっこならともかく、真つ向勝負なら……俺は絶対に妖夢に負けないから」

それを聞き、妖夢の耳がびくりと動いた気がした。

俺は絶対に妖夢に負けないから

自信満々にそう言い放ち、ゆっくりと彼は私に向かって歩いてきました。

安い挑発です……でも、私はその挑発に乗って昨日不覚を取ってしまった。

博麗の巫女と白黒魔法使いは通してしまっただけでも、春の光を持っている2人を西行妖の元へ導くのは好都合でそう。

彼の言う通り、幽々子様は彼以外を特に危険視せず、むしろ春の光を持つてくるのを待つていたように思えました。

なら私は幽々子様が危険視している彼をを止めるだけです。

あの時、私は彼を甘く見ていました。

私の外見が幼いから、女だから甘く見ている、そう思いこんでしまいました。

だから、軽く脅かすつもりで首筋に剣を当てようと踏み込み、あっけなく敗北。

確実に首を捉えたはずの刀は、彼の手の中にあり逆に私の首筋に当てられてしまいました。

何が起きたのか、あの時はさっぱり分かりません。

目にもとまらぬ速さとはまさにあの事でした。

彼は決して素人ではなく、弱くもない、そればかりか間違ひなく強いです。

そして、私を甘く見ているつもりも、侮っているわけでもない。

その証拠に、私に負けないと自信ありげに言っているにしても、彼は決して私を見下した目をしていません。

女だから、外見が幼いから弱いなどとは思っていない目です。

彼は最初から私を強者と見ていました。私はその目に気付いていなかっただけです。だから、私ももう侮らない。

「行きますー!」「行くぞー!」

ある程度距離を詰めた所で、私と彼は同時に叫び走りだす。

右の楼観剣を横一閃に振ったけど、彼が逆手に握った右のナイフで受け止められました。

すかさず左の白楼剣を突きだしましたが、彼は身を捻ってかわしました。

逆に彼の左手のナイフが突き出されました。

無理やり体をねじり、何とかかわし再び間合いを取る。

僅かこれだけで、彼がとても強い事を再認識させられました。

それでも、勝てないとは思わないです。

「……はあ〜」

2本の刀を鞘におさめ、腰を低くしての抜刀の構え。

昨日とは違う本気の速さでの抜刀。

力では敵わないかもしれないけど、速さは私の方が上です。

十分に呼吸を整え準備をしたなら、瞬間移動とまでは行かなくても天狗よりも早く移動できます。

この速さで繰り出す抜刀で一気に勝負！

「はっ！」

そう思っていました。しかし、現実には甘くありません。

「確かに速いな」

「なっ!!？」

私の最高速度の抜刀は空を斬り、真つ正面にいたはずの彼が、いつの間にか私の真横にいました。

「でもその程度じゃ、俺は捉えられない」

とっさに左手で腰にある白楼剣を抜き、彼へと振う。

全力の抜刀を繰り出した直後なので動作に遅れが出ますが、それでも何もしないよりはマシでしょう。

「これは遅い」

今度も白楼剣は空振り。今度は私の背中に彼が周りこんでいました。

剣士として背中への傷は一生の恥。

そうおじい様から教わったのに、私は簡単に背中を取られてしまいました。

ですが、それも一瞬だけです。

「うおおおっ〜!!」

硬直した体に鞭を打ち、全力で飛び上がる。

空中で宙返りをしながら、下にいる彼を見下ろしながら剣を振り降ろす。

それすらも彼は簡単にかわしてしまいました。

「まだ、まだです！」

両手で刀を抜き、彼へと猛襲をかける。

右で剣撃がかわされたなら、すぐに周るように左の刀で追撃。

左右同時の振り降ろし、からの時間差振り上げ。

十分な加速からの回転連続斬撃。

そのどれもが、2本のナイフのみで全て捌いて行きます。

「はあ、はあ……どうしました？ さつきから防戦一方ですよ？ 攻めてこないんですか？」

「それだけ妖夢の攻撃が激しかったんだよ」

思いつきりの強がり、やせ我慢。

私はさつきから何度攻撃しても、彼は最低限の動きでかわしています。

少し、息を整える時間を稼いだ方が良いでしょうね。

「それに、そのナイフの扱いにとっても慣れてるようですね」

「まあな。特にこの形状のは手にじつくりと馴染んできて、とても使いやすい。流石は

咲夜のナイフだ」

彼の後ろでメイドの咲夜さんが少し微笑みんだ気がしました。

「でも妖夢だつてすごい剣技だな。俺以上だ」

嫌味のつもりでしょうか？ いえ、彼はそんな目をしていません。

「ふっ、ふっ、嫌味ですか？ 私の刀はあなたに全く届いていないのに」

分かつていてもつい言ってしまった。

これではどっちが嫌味か分かったものではありません。

「そりゃあな。瞬発力にも動体視力にも自信があるし……何より、妖夢に足りないモノが俺には十分にあるからな」

私に、足りない物？

「それは一体何ですか？ 身長とか言わないでしようね？」

それでも背が低のは気にしてゐるんです。

「いや、背が低くても可愛らしいだろ？ 本人がどう思っているかは別にしてな」

「か、可愛い、ですか……」

可愛らしい……真剣勝負の最中に言う事でしょうか？

咲夜さんが額に手をあて、首を振って呆れているようです。

「あ、もつと言っておくと。咲夜にも勝てないと思うぞ？ 咲夜も妖夢に足りない物

持つてるからな」

「咲夜さん、にもですか?」

何でしょう。気品や上品さは幽々子様からも厳しく言われていますし……

「咲夜さんにあつて私にないもの……胸?」

こ、これでも人並みにはあるはず……です、よね。

「なんで最初にそこにいくのよ!? つてそんな哀しそうな顔しないの! あなただつて十分にあるわよ! 流石に美鈴やパチュリー様ほどじゃなくても……つてユウキさん、私を巻き込まないでください!」

「あははっ、ごめんごめん。じゃ、勝負に戻るか。お言葉に甘えて、俺から攻撃させてもらうぜ」

なにか心にダメージを負った気がしますが、おかげで息は整いました。

これでまだ戦えます。

さあ、次は彼から攻撃をしてくるそうですが、刀より刀身が短いナイフでの攻撃、簡単には通らせません。

彼との間合いも十分に開いています。

「……ふう」

彼は短く息を吐き、左手のナイフを逆手で構え、右手のナイフを私へと突き出しまし

た。

突進しつつ右のナイフで先制し、左のナイフで追撃するつもりでしょう。

タイミングを見計らってカウンターで返します。

「……………ふっ！」

「えっ!?!」

彼は突然、右手のナイフを投げました。

と言っても私に投げつけるのでもなく、ただ上に放り投げただけです。

つい視線が放り投げられたナイフに行ってしまいました。

「しまっ……………なっ!?!」

一瞬の間を作ってしまった事にはすぐに気づき、彼へと意識を向けましたが、彼の気が突然消えてしまいました。

姿を見失ったわけはありません。

彼はちゃんと私の正面にいて、私を見ています。

ですが、その目からは何も感じません。

まるで目の前にいるのはただの人形……………いえ、姿は見えるのに消えてしまったようでした。

この間は、1秒にもみたくない時間でした。

けれども、次の瞬間には……

「……………」

彼は無言で私の側を翔けぬけていました。

「……………え？」

そして、私の首は鋭いナイフで斬られていました。

続く

第57話 「経験値」

ユウキさんがナイフを上へと放り投げ、妖夢の脇を速く走り抜けた。

すれ違う瞬間、ユウキさんが瞬時に強い殺気を放ち「手刀」が妖夢の首を鋭く斬るように撫でたけど、本人にはナイフで斬られたように感じたでしょうね。

「……………っ!? かはっ、げほげほっ……………っほっ……………う?」

妖夢は首に手を当てながら激しく咳き込んでいる。

でも、斬られたはずの首は無傷でちゃんと付いている。

その事に気付いた妖夢はしきりに首を撫でて、今何が起こったのかわからない顔をしてユウキさんにふり返った。

「斬られて……………いない?」

「当然。俺は妖夢を殺す気なんてこれっぽっちもないからな」

「っ!」

それを聞いて妖夢が一瞬驚いた顔をした後、ユウキさんを睨みつけた。

殺す気はない。裏を返せば、殺そうと思えばいつでも殺せるという事。

彼女はそう解釈したようね。間違っではないと思う……………だけど。

「ユウキさん、なかなかのペテン師ね。詐欺師にも向いているかも」
ウソはついていない分タチが悪い。

ユウキさんは、相手のペースを崩すのが得意だ。

妖夢を自分一人に向けさせるために勝負を挑ませたのだろうけど、それにしても勝負を決める気があるのかなのか。

冷静さをかいた妖夢なら、ユウキさんは一瞬で決着付けられるのに、まだ勝負を続けるつもりね。

「随分と、余裕ですね。私になくてあなたと咲夜さんにあるモノのせいですか？」

「さーな。少なくとも今の妖夢よりは多少余裕はあるぞ？」

ギリツ、と歯ぎしりする音がここまで聞こえてきそうね。

さっきの言葉にもウソはない。ユウキさんは余裕そうだ……見た目だけは。

妖夢よりも余裕があるとはいえ、0・1と0の違い程度。

その事に気付かないよう振る舞っている。

「でしたら、その余裕……私が斬ります！」

刀を握り直す妖夢の側に半霊が飛んできた。

半霊は今まで離れた場所にいたようね。

「使うつもりはありませんでしたが……いきます」

半霊が妖夢に同化するように重なる淡い光を放ち、半透明だけでもう1人の妖夢が現れた。

フランお嬢様のスペカに似てるけど、これは自分の半身である半霊を変化させたものね。

「卑怯、とでもいいですか？」

「いや、2人で1人前なんだろう？ ならこれでやっとハンデなしになるってわけか」

「……くっ！」

またもや挑発に乗った妖夢がユウキさんをまた強く睨み駆け出した。

それに続いて半透明な妖夢が駆ける。

妖夢が右からの袈裟きりをユウキさんは、身を捻ってかわす。

さらに妖夢は追撃とばかりに、大きく振りかぶって横薙ぎに刀を振った。

ユウキさんはナイフを逆さに持ち、受け止めるつもりだったけど、半透明な妖夢が時間差で袈裟きりを放ってきた。

「……そう言う事か！」

すぐに左のナイフで半透明妖夢の攻撃を捌き大きく飛びはね、2人の妖夢から距離を取った。

「分身と言うよりは、自身の動きを遅れて再現させる技って所か。下手な分身よりもや

りにくい」

それを聞いても妖夢は反応しない。彼の言葉に反応してはいけなないと、学習したのだろうか？

「けど、だからと言って、俺との差が埋まるほどじゃない」

「ぐっ！」

訂正。まるつきり学習してないわね。

2人の妖夢の時間差斬撃をユウキさんは、2本のナイフだけで全て捌いてかわしている。

二刀流×2、4本の刀を間合いが短いナイフ2本でかわしていく。

「なんで、なぜ！」

妖夢の焦りをうみ、動きが雑になってきている。

それでも妖夢の猛襲はユウキさんを再び防戦一方にして、後ろへと押しで行っている。

本人は気付いていないようだけど。

そして、ついにユウキさんは大木へと押しつけられた。

「隙あり！」

これを好機と踏んだ妖夢は、刀を左右に交差させ一気にトドメを誘うとしている。

「もう……いいかな？」

でもそれはユウキさんが誘った罠。

追い詰めたつもりで、大ぶりの一撃をさせる為の罠。

ユウキさんは妖夢の動きに合わせて、木を蹴り反動で背後へと回りこんだ。

「しまっ……い！」

ユウキさんの動きに気付いた妖夢は空振りした一撃の軌道が無理やり変え、背後へと回転斬りを放つ。

しかし、体勢を崩したまま無理に放った苦し紛れの一撃に速度はない。

そんな攻撃に対処できないユウキさんではないわ。

——キンツ！

ユウキさんが妖夢の刀を弾き飛ばし、首にナイフを押し当てている。

これでやつと勝負がついたわね。

「……私、の負けです。最後に教えてください、私になくてあなたと咲夜さんにあるものはなんですか？」

「それはな、対人戦闘経験。もっと言えば、強者との対戦経験。更に言えば……人を斬った事があるか、ないかだ」

対人戦闘経験。私もユウキさんも人を相手にイヤと言うほど戦ってきている。

彼は元いた世界で数多くの能力者や魔術師相手に、ナイフや銃火器、特に能力を奪い戦って、殺してきた。

私もレミリアお嬢様を狙うハンターなどと戦って……殺してきた。

「最初に出会った時に、妖夢が剣術の達人なのはすぐに分かってたさ。けど、昨日対峙してあまり対人戦闘経験がない事に気付いたんだよ」

「な、なぜですか!?! 私は確かに未熟ですが、御爺様から厳しく指導受けましたし、これまでも妖怪や悪霊を斬って来ました!」

あー、そう言う事ね。

「妖夢、その妖怪や悪霊って、強かったかしら?」

「い、いえ。中には手ごわいのもいましたが、それほどの相手とは……幽々子様の方が強いです」

「言葉が悪かったわね。人、もしくは人型の妖怪と戦った事は?」

「……そう言われればありません。たまに人里で酔っ払いに絡まれる程度で……あつ!」

ここでやっと妖夢は、私やユウキさんが言おうとしている事に気付いたようね。

「どんなに剣の腕がよくても、人間相手に振っていなければその間合いの測り方、斬撃の組み合わせ、相手の力量の判断……などなど色々なモノが育たない。剣術の腕が劣って

いる俺でも、妖夢の動きがすぐに読めて簡単に対処できた」

「逆に人間、それも強敵相手との経験がない妖夢はユウキさんの動きが読めず、挑発に乗せられて動きが単調になり、技のキレが落ちたのよ」

「相手と力量差がある相手になら普段通りで対処出来ただろうけど、俺や咲夜、他にも力量差が近かったりする相手には遅れを取る」

さつきユウキさんが手刀で妖夢の首を捉えた時もそうだった。

放り投げた右手のナイフに気を取られ、そのコンマ一秒ほどの隙にユウキさんは本命の攻撃を開始した。

そして、達人との経験が少ない妖夢はユウキさんの本気の殺気にあてられ、ただの手刀をナイフによる斬撃と錯覚してしまった。

「それと一つ言っておく。妖夢にはどう見えたか知らないけど、俺結構余裕なかったかな？ 防戦一方だったのも、本当に妖夢の攻撃に対処するのに精一杯だったんだぞ？」

「ええく!!? そうだったんですか!?!」

うん、私がユウキさんをペテン師と思ったのはこれだ。

ユウキさんは終始妖夢を圧倒していて、攻撃も簡単にかわして挑発しているように

……見せかけていただけ。

実際、第3者視点だった私から見ればほぼ互角。

まあ、挑発に乗ってムキになって技が荒くなつて動きも大きくなつた妖夢が、スタミナを無駄に消耗していたから自爆と言つてもいいかもしれないわね。

ギリギリで防いだ攻撃を、余裕で捌きわざと反撃しなかつたと【見せかけた】ペテン。

それによつて、若干優位なはずだった妖夢が焦り、ズブズブと自分の利点を削り取つて行つた。

「はつきり言つて、本当の意味でまともにやりあつていたら、どうなつていたかな。負けはしないだろうけど、簡単には勝てなかつたかな」

「……………うまく、私は乗せられたのですね」

ユウキさんは妖夢に負けない。と霊夢に言つた。

絶対に勝てる、とは言つてないのよね。

ホント詐欺師かペテン師の才能あるわ。

「それで、私をどうするつもりですか？ 殺されても文句は言いません。私は完敗しましたから」

「いやいや、そんなつもりはないと言つたら？ それに本来なら弾幕ごつこで決着付けるものなんだぞ？ ガチで殺し合いなんてしたら霊夢に後で何言われるか分かつたも

んじゃない」

ユウキさんは一人で決着を付ける気だったのよね。

私は最初からユウキさんが妖夢と再戦するのに、弾幕ごっこではない勝負をするつもりと昨日気付いた。

レミリアお嬢様はここまで気付いていたから、私を同行する許可をくれた。

そして、それから私が思い至ったのがこの結論だった。

「あ、はい。弾幕ごっこの事は知っています。ですから、後腐れは残しません。どうぞ、先に進んで下さい」

こういう所は素直なのよね、この子。

弾幕ごっこ以外での決闘を望みつつ、決闘で負けたら素直に引き下がるなんて。

「先へは進むさ。霊夢にも言ったしな。でも、その前に聞きたい事がある……なんで妖夢の主は幻想郷から春を奪ったんだ？ わざわざリリーホワイトまで拉致しようとして」

「それは……」

まさか、妖夢との戦いに執着した理由って、この異変を起こした訳を聞く為だったの？

ならなんで普通に勝つなりしなかったのかしら？ それに、幽々子と言う白玉楼の主

に聞く手もあった。

何だかとおつても回りくどい事してるわね。

「それは……西行妖と言う桜の木を満開にする為です」

「西行妖？」

何だそれ？　と言う顔で彼は私を向くけど、白玉楼や冥界すら知らなかった私を知るはずないわ。

「西行妖は、冥界で、いえ、幻想郷が一番巨大な桜の木です。白玉楼の裏にありますが、ずっと花を咲かせないんです。幽々子様も何百年も白玉楼にいますが、一度も咲いていない所を見た事がないそうです」

「それでなんで春を集める事になるんだ？」

「幽々子様はただの春では咲かせるには十分ではなく、幻想郷中の春の光を集めれば、きっと花を咲かせられると」

「……桜の木を咲かせる為だけに春を集めたのか？」

その割には大騒動になっているわね。

「それだけではありません。幽々子様には亡霊となつて冥界の管理を閻魔様に任せられた以前の、生前の記憶がないんです」

「亡霊はそういうものじゃないのか？」

私も亡霊に詳しくはないけど、生前の記憶をすっかり持っているなんて、怨霊や悪霊とか恨みをもった霊しかイメージにないわね。

「いえ、死者の魂からなる亡霊は皆生前の記憶を持っていますよ？ 特に幽々子様のようない力を持った人間の霊なら尚更です」

なら、私が将来寿命で死んでも安心ね。命失って尚且つレミリアお嬢様や紅魔館の皆の記憶を失いたくないわ。

「幽々子様が覚えている事は一つ、満開の西行妖を見て死んだと言う事。なので、西行妖を満開にさせれば何か思い出すかもしれないと仰っておられました」

西行妖、か。恐らく霊夢達が向かった桜色に輝く空の下にあるのね。

あそこからはとても嫌な気配しか感じないのだけど、何か怪しいわね。

「妖夢、西行妖ってただの大きな桜の木、それだけなのか？ 他に何か由縁とかはないのか？」

「すみません。西行妖については、幽々子様も詳しくは知らず、御爺様も知ってはいけな事だと固く口を閉ざしていましたので……何も知りません」

妙ね。そこまでして隠すからにはただの桜の木じゃないのでしょうか。

「なるほど、それが春を集めていた理由か。で、リリーホワイトにその光の制御をさせるつもりだったと？」

「はい、リリーホワイトがいれば、もつと効率よくなると思って、幽々子様はもし見つけたらいい、とあまり重要視していなかったようですが」

これで春の光を集める理由が分かった。だけど、まだ私は腑に落ちない。

「ユウキさん、どうして妖夢に聞こうと思つたの？ それに聞くだけなら普通に勝てばもつと早く終わっていたんじゃない？」

「うぐつ……た、確かに。今思えばもつと早く私を倒す隙はあつたんじゃないですか？」
私と妖夢が尋ねると、ユウキさんはうーんと唸つてから答えた。

「確かに、勝つだけならもつと早く済ませる事出来たけど。それじゃ妖夢から話聞けないと思つてさ」

「私から話を？ どういう意味ですか？」

「ただ勝つだけじゃ、妖夢は主のしようとしている事を教えてくれないと思つたんだよ。人里で会つた時から忠誠心は高いと気付いたし」

そこで私に興味ありげな視線を送ってきたので、思わず目をそらす。

私だつて妖夢に負けないくらい忠誠心はあるわ。だけど、たまに遊んでしまう事もあるのよね、最近は特に。

でも確かに私がかもし、妖夢の立場だつたら負けても教えなかつたでしょうね。

数カ月前の異変の時、私は霊夢に弾幕ごっこで負けたけれども、レミリアお嬢様がな

ぜ紅い霧を出したかは、黙っていたし。

「尋問や拷問は何度もしているし、口が固い奴から情報仕入れる手段も色々知ってるけど、そういうのは今回したくなかったからな」

拷問と聞いて妖夢が若干顔色悪くしたわね。

ユウキさんもユウキさんでケロツと軽く言う物だから、尚更現実味あつてリアルね。

まあ、元いた世界で何をしてきたかは、聞く気はないし、聞きたくもないけど。

「だから、力づくじゃなくて妖夢が心から負けを認めたら素直に話してくれると思つてさ。結果はご覧の通り」

「なるほどね。だからあんなペテン師みたいな事したのね」

「ペテン師か、それは言われ慣れていたな」

あつはつはつはつ、と笑うユウキさん。

笑う所なのかしらこれ？

「……とこん私はあなたの手のひらで踊らされていたのですね」

妖夢ががつくりと肩を落としてるけど、そこまで気にする事ないと思うわ。

戦闘経験だけじゃなく、裏の仕事の数多く経験してきた場数の違いね。

その時だった。突然、私とユウキさんの胸元から眩い光が溢れ出てきた。

「な、何だ!? 巾着からだぞこれ!」

「それは……春の光？ お二人とも持っていたのですか!? てつきり博麗の巫女と魔法使いが残りの光を全て持つているのかと……」

あ、だからあの2人を先に行かせたのね。

「うぐつ!?……く、はっ、はっ……」

「ど、どうしたのユウキさん!？」

「どうされたんですか!? まさか怪我を!？」

春の光が少し収まってきたと思つたら、今度はユウキさんがうめき声をあげてしゃがみこんでしまった。

どこか怪我でもしていたのかしら？ でも、外見はどこも斬られていないのに。

「い、いや怪我じゃない……さつきも感じたけど、とても嫌な感じがする。このままだと……霊夢達が危ない! 咲夜、力借りるぞ!」

そう言うユウキさんは私を視てから飛びさってしまった。

これは幻想支配で私の力をコピーしたようね。

「えっ? い、今ユウキさんから咲夜さんの気配が?」

「説明は後よ。私達も追うわよ。確かに、嫌な気配、いえ力をあそこから感じるわ!」

でも嫌な力どころじゃないわね。

とても邪悪でドス黒い力、フランお嬢様が暴走していた頃よりも遥かに危険な力を感じ

じるわ。

一体何があったのかしら？

妖夢と戦うユウキさんを咲夜に任せて、私と魔理沙は冥界の奥へと進んで行った。

山のような高さの階段を飛びあがっていく。

目指す階段の先には門があり、その向こうの空が桜色に輝いている。

「なあ……本当に大丈夫なのか？ アイツ、妖夢と弾幕ごっこじゃなくガチでやりあう気だぜ？」

「それくらい知ってるわ。何を考えているかは知らないけど、咲夜もいるんだし、ユウキさんなら妖夢に負けないし、大丈夫でしょ」

全く。私が近くにいるのに弾幕ごっこじゃなくて、ガチ勝負する気だなんて。

この前紅魔館の門番と本気の手合わせしたって聞いて驚いたけど、今回はそれ以上ね。

でも、今はそれどころじゃないわ。

「あそこで私達が足止め食らってるわけにはいかないのよ。あそこからとてつもなく嫌な力を感じるわ。早くアレをどうにかしないと、トンでもない事が起きる、そんな予感

がするのよ」

「げえ、霊夢の予感ハシヤレにならないぞ!? そりゃあ急がないとな!」

「そう言う事。さあ、着いわ」

長い階段の先にある門をこえ、白玉楼に入った私達。

辺りを見渡すと奥に大きな桜の木が見えた。

離れたここからでもはつきりと見える立派な桜の木ね。

「あそこね……ん? 誰かいる?」

桜の木に誰が浮かんでいるの見える。どうやら踊っているようね。

あれが異変の元凶西行寺幽々子のようね。

「霊夢、あの桜の木の下の見ろ、下を!」

「どうしたのよ魔理沙、まさか桜の木の下には死体が埋まっているだなんて迷信……

えっ!」

桜の木に近付きながら、魔理沙に言われた所を見てみると、人影が2人倒れているの
が見えた。

そのうちの片方は尻尾が9本生えている。

「まさか……紫!?! 藍!?!」

桜の木の下には、死んだようにぐったりとしている八雲紫と藍の姿があった。

倒れた2人の上で優雅に舞う亡霊姫が、私達に妖しく微笑む。
「ようこそ、西行妖へ。そして、死出の旅路へ逝ってらっしゃい」

続く

第58話 「西行妖」

見た事もないような巨大な桜の木。

その下で死んだように倒れ伏した、八雲紫とその式神八雲藍。

そして、その上で優雅に踊る亡霊の姫。

彼女が恐らく幽々子という白玉楼の主で、妖夢に春を集めさせた元凶ね。

「な、なんなんだよこりやあ……」

隣で魔理沙が恐怖と困惑を合わせた声を出しているけど、私も同じような感想ね。

あの扇を使つて優雅に踊っている幽々子、と言うよりその背後の巨大樹から、今まで感じた事のような強くておぞましい妖気を感じるわ。

「綺麗でしょ、この西行妖。幻想郷の春と紫達の妖力でようやくここまで花を咲かせたの。せつかく持つてきてくれたのだから、あなた達のも……頂くわね」

幽々子が扇を一振りすると、そこから弾幕が放たれた……けど、これはただの弾幕じゃない！

「魔理沙、避けて！」

「もちろんだぜ！」

なんとかギリギリでかわせたけど、私と魔理沙がいた地面が大きく抉られている。

この亡霊、私達を殺す気で弾幕を撃ったわね。

「どういうつもり？　あなた、幻想郷に長いんでしょ？　弾幕ごっこくらいは知っているはずでしょ？」

「ええ、知っているわよ。うふふつ、今のはお気に召さなかったようね。なら、これはどうかしら？」

今度は小さなレーザーのような弾幕。これも私達を殺す気でいるわね。

このままじゃ罅が明かないわ。それに幽々子の様子もおかしい。

何かに憑依されているかのようなこの殺気と狂気、何がどうなっているのよ。

「魔理沙！」

「ああ、任せろ！」

私が幽々子を引き付けて、その間に魔理沙が紫と藍を救出する。

紫から何が起きているのか聞かないと、西行妖といい幽々子といい、レミリアの時とは違い過ぎるわ。

「私が相手よ！」

陰陽玉を取り出し周囲に浮かせて、御札を構える。

相手が殺しに来ている以上、容赦も手加減もしない。でも、それはいつもの事。

「うふふつ、何分持つかしら?」

幽々子が扇を振う度に赤と紫の弾幕が放たれる。

紫の弾幕は私の進路を塞ぐ壁になり、赤の弾幕が私目がけてくる誘導弾と言うわけね。

回避しつつ、御札を投げつけたり陰陽玉から弾幕を撃っているけど、すべて紫の弾幕に防がれている。

「まったく、ルール無用ってわけね! だったら一気に決めるわ 【霊符・夢想封印】」
本気の夢想封印。

これで倒せるとは思わないけど、ダメージを与えるなり隙を作るなりは出来るはず。

「それっ♪」

そのはずだったのに幽々子は陽気な掛け声と共に扇を一振りするだけで、夢想封印をかき消してしまった。

「な、なんですすって!?!」

今扇から放たれたのは、明らかに妖気の衝撃波、それも夢想封印を消すほどの強力なもの。

でも妙ね。亡霊とは言え元は人間のはず。

なのになぜさっきの衝撃波も弾幕にも霊力ではなく、妖力が感じられるのかしら?

「こいつ、まさか……」

「そう言えば、まだ名乗ってなかったわね。私は白玉楼の主、西行寺幽々子。ここ冥界の管理を任されているの。ここであなたが死んだら私の配下に加えてあげるわ。だから安心して……逝きなさい」

「黙りなさい！」

叫び声のする方をみると、魔理沙に助け出された紫と藍が息も絶え絶えに幽々子を睨んでいた。

2人共かなり弱っている。

「あら、紫。まだ生きていたの。あれだけ妖力を吸い取ったのに」

「その、姿でその声で……それ以上、幽々子のフリをするのは、やめなさい。西行妖！」

紫の叫びに、幽々子の口が裂けそうなくらいに広がり、邪な笑みを浮かべた。

「紫、どういう事？ 最初から説明しなさい」

幽々子の弾幕が止んだので、紫の方へと飛んだ。

衰弱は藍の方が酷く、魔理沙が近くの木に寄りかかるように寝かせた。

紫は肩で息をしながらもフラフラと立ちあがって、幽々子を睨んでいる。

「この異変、最初は確かに幽々子が自分の意思で始めた事。けれども、少しずつ幽々子は封印の溶けかけた西行妖に意識を乗っ取られていったのよ。妖夢も私も、それに気付く

事なくね」

「おいおい。話が全く見えないぜ。大体西行妖って何なんだよ」

魔理沙が尋ねると、紫はしばらく黙った後、幽々子を見て話し始めた。

「簡単に言うわね。西行妖、あれは人間の生気を吸って妖怪化した桜の木なの、私ですら手を出せないほどに強大な妖怪樹。でも……」

紫はそこで一端言葉を切った。まるで何か言いたくない事があるかのようなね。

基本的に話をはぐらかしたりする事が多いけど、ここまで言い淀むのは珍しいわ。

「幽々子が自分の亡骸を使つて封印して以来、春になつても花を多少付ける事はあつても満開になる事はなくなつたの。幽々子が亡霊となり、冥界の管理を任されるようになったのはそれからの事。今も西行妖の下には幽々子の亡骸が眠つていて、封印を守っているの」

「じゃあ、幽々子は自分で自分の封印を解こうとしたのかよ!?」

「……幽々子は生前の記憶を全て失つたわ。亡骸を封印に使つたせいでもあるけれど。彼女は西行妖の事も忘れたはずだった。けれども、春を集めて西行妖の花を咲かせる事が出来れば、自分の記憶が戻ると思つてしまったの。勿論、その下に自分の亡骸がある事も知らずにね」

生前の記憶を戻す為に春を集めていたのね。

でも、ならばなぜ今頃紫が動いたのかしら。自分から動く事など滅多にないはずなのに。

「で、あんたは一体今頃何をしようとしたのよ?」

「……私は最初幽々子の好きにさせるつもりで放つて置いたわ、監視はしていたけれどね。例え幻想郷中の春を集めても、西行妖が満開になる事はないし、それより先に霊夢が解決すると思つたのよ」

「ここで紫に睨まれた。」

異変に気付かずここまで大事になつたのは、私にも責任が……ないわけないわよね。

「……でも、予想は外れたわ。西行妖の封印は徐々に解けていき、そればかりか埋められた亡骸を通じて幽々子の意識をの取つて行つたの。私も気付かなかつた……気付いた時にはもう手遅れに近かつたわ。だから妖夢が離れた隙に、私と藍で再度封印しようとしたのだけど、逆に妖力を奪われ封印を解く手伝いをしてしまった」

紫と藍、幻想郷でも最強のコンビの妖力を奪うだなんて……

「西行妖は封印される前よりもずっと強大になつてゐるわ。まだかろうじて封印の力が残つてゐるけど、あなた達の春の光をもし取られたら、完全に封印が解けるわ」

「もし、封印が解けたらどうなるのよ?」

あまり想像したくない事だけどね。

「幽々子は亡骸ごと消滅して、西行妖は幻想郷中の妖怪や人間、妖精ありとあらゆる生者の力をたやすく奪い。幻想郷は冥界に、いえ、西行妖に吞まれるわ」

「そ、そんな……ウソだろ？」

魔理沙が冷や汗を流している。紫の表情が決して冗談でも大げさに言っているわけでもない事を物語っている。

かくいう私も、少し怖い。

「今の西行妖なら出来るわ。でも今ならまだ、間に合うわ。私も藍も妖力がほとんどない、それに妖力じゃ吸収されてしまうの。だから、霊力や魔力で幽々子を……西行妖を倒して、再度封印するのよ」

レミリアのように幻想郷を支配するわけではない。

幻想郷が減じる。これは今までなかった最大の異変、ね。

「魔理沙……やるわよ」

「ああ、幻想郷滅亡の危機、こりゃ本気でやらなきゃな」

魔理沙は軽口を言っているけど、その表情は今まで見た事ないほど固い。

私も自分がどんな表情しているか分からない。

最初はただ春が来ないだけの異変のはずだったのに、それがここまでの大事になるなんて。

「それで……話は終わったか？」

幽々子、いえ西行妖の声が変わった。

さつきまでは上品な女性の事だったのに、今は邪悪でおぞましい声になっている。

もう幽々子の演技はする必要なくなったという事ね。

今までなぜか黙っていたけれど、それは自信の表れかしら？

「ええ、博麗の巫女として、お前を封印する！」

「普通の魔法使いとしても、放つてはおけないぜ！」

私達は左右に散らばり、同時に弾幕を……いえ、攻撃を始めた。

「食らいなさい！」

「それ！」

魅せる為の弾幕ではなく、倒す為だけの弾幕を放つ。

私も魔理沙も周囲にばらまくのではなく、当てる為の軌道で放った。

「弱いな。その妖獣の方がまだ強い攻撃だったぞ？」

「なにいく!?! 全然効いてない!?!」

私の御札と霊力弾も魔理沙の魔力レーザーも効かなかった。

まるで見えない壁に阻まれたかのように、当たる直前で消えてしまった。

「私と藍の力を吸い取ったせいで、耐性がついてしまったのね……」

紫が私と魔理沙に目で合図を送った。無言で頷き、再度靈力を溜めた。

しかし、西行妖も黙ってされるがままになるわけじゃない。

扇を振う度に妖力の波動が襲いかかってくる。

とつさに私達は防御結界を張ったけど、簡単に破られて弾き飛ばされてしまった。

これじゃ力を溜めて強力な攻撃をする隙もないじゃない。

「西行妖の攻撃は必ず避けなさい！ あなた達でも防ぎきれないわ。それに今のアイツは幽々子の能力を少しずつ使えるようになってきているわ！」

ただでさえ避けにくい攻撃なのに、必ず避けろとは紫も無茶を言う。

「幽々子の能力って何よ!？」

「死を操る事が出来る能力、よ。文字通り簡単に相手を殺せる、動作も何も必要ないわ」「いーく!?! そんなのフラン以上に反則だぜ!」

フランは破壊の目を自分の手に生み出し、それを握りつぶす事で能力を発動させていた。

けれども、幽々子は何も動作もいらならしい。

「そんなの反則どころか無敵じゃない!」

「でもまだ完全に使えるわけではないの。死に誘われやすくなる程度だけど、まともに攻撃を受ければ、タダでは済まないわ」

どっちにしろ、これを食らったら怪我じやすまない規模だと言うのはとづくに分かってるわ。

まづいわね。早くしないとユウキさんが来る。

西行妖じやユウキさんでも相手が悪過ぎる。

「魔理沙、あんたがやりなさい！ 【夢想封印 散】」

力を籠める隙がない以上、低威力でも広範囲攻撃で相手の隙を作るしかない。

その間に魔理沙が強力な一撃を放てばいい。

魔理沙の魔法は、溜めが必要ないものじや隙を作れるものはないから。

「効かぬわ！」

案の定、西行妖は扇を振りかき消していく。

「【夢想封印・集】！」

「ちっ、無駄だあ！」

広範囲にばら撒かれた弾幕を一気に集束させる。

これならすぐに全てはかき消せない。

その間、魔理沙が十分に魔力を籠める事が出来た。

「いくぜ…… 【マスタースパーク】！」

「何っ？」

狙うのは西行妖……の本体。

あれだけ巨大な樹、それも動けないのなら良い的になるわね。

これなら多少なりでもダメージが……ない!?

「ウソだろ!？」

またしても見えない障壁に阻まれてしまった。

「ふっふっふっ、ようやく……だな」

「っ!?! 危ない、逃げなさい!」

紫が叫ぶと同時に西行妖の巨大樹が眩い光を放ち、私と魔理沙は見動きが取れなくなってしまうた。

「か、体が……」

「……くっ、動かない?」

そればかりか胸元から中着に入れていた春の光が現れ、西行妖に吸い込まれていった。

「これで残りは、いや、これで十分か!」

邪悪な笑みを浮かべたまま西行妖に乗っ取られた幽々子の体は、本体である巨大樹に吸い込まれ融合を始めた。

「まずいわ。もう封印が完全に解けてしまう!」

「もう手遅れだ。死して我が従僕となれ、博麗の巫女！」
「逃げろ、霊夢！」

西行妖から巨大な桜色の弾が私に向けて放たれた。
体が思うように動けず、霊力も溜める事が出来ない。

このままじゃ避けられない！ 当たる!?

「霊夢！」

その時、ユウキさんが突然現れ、私を突き飛ばした。

直後、光弾がユウキさんを包みこんで爆発した。

一瞬何が起きたか分からなかったけど、ユウキさんが私を庇って、代わりに攻撃を受けた。

それを理解して、私は頭の中が真っ白になった。

「ユ、ユウキさ……ユウキさん!？」

「ユウキ!？」

私と魔理沙の束縛が解け、爆発へと駆け寄った。

爆発の中からボロボロになったユウキさんが現れ、飛んできた咲夜が抱きかかえた。

「ユウキさん、しっかりして下さい、ユウキさん！」

「お願い目をあけて、ユウキさん！」

咲夜と私が必死に呼びかけているけど、ユウキさんはぐったりとして目を開けない。ユウキさんの服はほとんど吹き飛び、焼け焦げている。

あちこちに傷があり、血がでていて思ってたよりも重傷には見えない。

ただ、ユウキさんが巻いていたマフラーがバラバラになり、燃えだして消えて行った。「これは、パチュリーの魔法？」

それを見た魔理沙がマフラーの切れはしを掴んだ。

「このマフラー、ずっと何も感じなかったけど今はパチュリーの魔力を感じるぜ！」
「まさか、パチュリー様がマフラーに魔法をかけていた？」

魔理沙の言う通り、何の変哲もなかったはずのマフラーから魔力を感じるわ。

「ああ、ユウキの怪我が思ったほどひどくないのも、きつとパチュリーがマフラーに守護と身代りの魔法をかけていたからだ」

ユウキさんが命の危険にさらされるほどの攻撃を受けたら、魔法が発動してマフラーが防御してダメージを肩代わりする魔法。

それをパチュリーが美鈴の作った魔法にかけていたようね。

「良かった、本当に良かった……」

「パチュリー、美鈴。ありがとう」

自分でも不思議なくらい、心の底から安堵した声が出た。

「つて安心するのはまだ早いぜ、霊夢」

「ええ、そう……ね。まだ終わってなかったわね」

声に怒りが籠る。自然と拳を握りしめた。

ユウキさんをここまでした西行妖と、自分に腹が立った。

「彼は私が預かろう」

そこへ藍がふらふらとしながらも、ユウキさんの側へと寄ってきた。

「あんたもポロポロじゃない。そんなナリでユウキさんを任せて大丈夫なの？」

さつきよりは少しは回復したみたいだけど、藍はまだ歩くのがやっとと言ったところ
ね。

「責任を持って私が彼を死なせない。だから、霊夢達は西行妖を頼む」

「……分かったわ」

「いいの、霊夢？」

咲夜が不安げな表情を浮かべたけど、今の私達にユウキさんを守る余裕はない。

マフラーのおかげで比較的軽傷とはいえ、このままじゃ危ないわ。

「大丈夫よ。紫よりは信用出来るわ。それで、咲夜、妖夢は倒したの？」

「いいえ、ユウキさんが勝ったけれども、倒してはいないわ。あそこにいるわよ」

ユウキさんは妖夢を倒さなかったのね。まあ、予想は出来たけど。

咲夜が指さした先には、茫然と西行妖に取りこまれてかけている幽々子を見上げる妖夢の姿があった。

「幽々子……様？ 幽々子様！」

「待ちさない、妖夢！」

刀を抜き、走りだそうとした妖夢を紫が止めた。

「紫様？ どういう事ですか？ どうして、幽々子様があんな御姿になっているのですか!？」

半泣きで紫に詰め寄る妖夢。

それに対して紫は淡々と今起きている状況を説明した。

「……ただ、口調はともかく紫も珍しく辛そうな顔をしているわね。」

「……そ、そんな。それじゃあ私が春を集めたから、幽々子様は」

崩れ落ちる妖夢を紫が支えた。

「しっかりとしない、妖夢。幽々子を助けられるのはあなたしかいないのよ」

「幽々子様を、私が？」

紫の言っている事が良く分からないと言う顔をしたけど、私達も分からず顔を見合わせた。

「魔理沙、咲夜。あなた達で西行妖の攻撃を引き付けなさい。その間に妖夢が幽々子と

西行妖の繋がりやを断つよ、その白楼剣で」

紫が妖夢の持つ2本の刀のうち、短い方を指さした。

「白楼剣は人の悩みを断つたり、幽霊を成仏させる事が出来る剣。その奥義は見えない物を断つ事にあるの。だから、西行妖と幽々子の繋がりを断てば、西行妖は弱体化するわ。そこを霊夢が霊力を限界以上にまで溜めて、特大の結界を張るのよ」

白楼剣の事はよくわからないけど、これしか手はなさそうね。

紫は幽々子を助ける事を前提として作戦を話している。

この事が少し引っ掛かるけど、気にしても仕方がないわ。

「よっしゃ、任せろ。私のスピードであいつの目を回してやるぜー」

「どこが目なのか分からないけどね。私は良いわよ。ちよつとむしゃくしゃしている所だったし」

魔理沙と咲夜はやる気十分ね。

2人共、ユウキさんがやられて少し怒っているようだわ。

と言う私も、結構怒っているけど。

「分かったわ。で、あんたはまだ能力が使えないの?」

紫がスキマを開いたり、境界を操る能力を使えばもつと楽に行くはず。

異変には口出ししないけど、幻想郷の危機ともなれば進んで動くのが紫だし。

「無理ね。これでも結構フラフラなのよ……」

なのに紫はきつぱりと無理と言った。

いつものように言い淀んだし出し惜しみしているわけじゃない。

本当に今の紫は能力が使えない。

「最初に言っておくわ妖夢。これが失敗したら……幽々子ごと、西行妖を消すしかないわ。もう復活するまで時間がない。幽々子が完全に取り込まれたら終わりよ」

「っ!? そ、そんな……」

紫が真面目な表情で話す。これは本気ね。

幽々子を助けたい気持ちは強くあるけど、幻想郷を守るためには犠牲にする事も厭わない。

「心配するなって、まだ何が何だかイマイチよくわからないけど、要はお前がちゃんと斬れば良い話だろ?」

「そうね。あなたの剣の腕はユウキさんも認めていたでしょ?」

魔理沙と咲夜の言葉に項垂れていた妖夢が顔を上げた。

「幻想郷を守るのは私の役目。けど、後味悪い結末なんて、私は御免よ」

私の言葉が最後のひと押しになったのか、妖夢はさつきまでの泣きそうな表情を一変させた。

「……分かりました。皆さん、よろしくお願いします」

妖夢の表情に陰りはない……ようは見える。ちゃんと決心がついたのなら良いのだけど。

「藍、ユウキさんの事頼んだわよ」

「ああ、こちらこそ。幽々子様の事、お願いする」

「今の西行妖の攻撃は、即死攻撃と思いなさい。あの強さじゃ防ぐのも無理よ。絶対に避けなさい」

紫の言葉に頷き、私達はそれぞれの武器を手に西行妖に向き直った。

藍に介抱されているユウキさんに目を向ける。

「待ってなさい、ユウキさん。あなたが目を覚ます前に……ケリをつけるわ!」

続く

第59話 「死闘（前編）」

八雲藍に介抱されているボロボロのユウキさんに目を向ける。

情けない、本当に情けないわ。何のために私はユウキさんに付いてきたのかしら。

私は彼をサポートする為のはずだったのに。

レミリアお嬢様やフランお嬢様、美鈴達からもユウキさんの事を頼まれていたのに。

結果、彼は致命傷こそ負ってはいないけど、意識不明で倒れてしまった。

しかも、彼の命を救ったのは美鈴とパチユリー様。

私は何もしていない。何も出来なかった。

自然と奥歯を強く噛みしめ、ナイフを握った手に力が入る。

ユウキさんは私の力をコピーして、西行妖に襲われていた霊夢を助け出した。

私の時間停止は長時間維持出来ないし、連続で使用出来ない。

だから、ユウキさんは霊夢を助ける瞬間時間停止が解けて、自分を守る事が出来ず光

に呑まれた。

でも彼は自分を助けるなんて、そんな選択肢は頭にないわね。

なんて、そんな事を今は考えている場合じゃないわね。

「何考え込んでいるんだ咲夜？ 遅れても知らないぜ」

「あら、私はもう始めているわよ、魔理沙？」

「うおっ!!? いつの間に!?!」

既に私は考え事をしながらも時間停止をして、西行妖に向けてナイフをばら撒いている。

捕らわれている幽々子という亡霊を助ける義務も義理もないし、むしろ事の元凶である彼女を西行妖もろとも滅ぼしたい気持ち強い。

けれども、ユウキさんならきつと助けるだろうと思いついて協力する事にした。

「合わせなさい。魔理沙！」

「任せろ！ メテオニックシャワー！」

霊力を籠めたとはいえ、ナイフだけでは心もとない。

だから魔理沙の魔法と同時に撃った方がいい。

と、思ったのだけれど……

「げっ!?!」

放たれた弾幕によって、全て撃ち落とされてしまった。

弾幕はそのまま私と魔理沙に向けて放たれ、かろうじてかわせた。

西行妖の弾幕や攻撃や全て即死攻撃と思って完全に避けなきゃいけない。

相手は巨木。動けはしないし、いい的だけどこうもやりにくい相手だとはね。

「直線でダメなら、こいつだ！」

魔理沙が帽子を勢いよく振ると、中から沢山の小瓶が出てきた。

あれはプリズムリバーとの弾幕ごっこで使ったマジックミサイル、まだあんなにあつたのね。

ミサイルは左右に大きく展開した後、曲線を描きながら西行妖へ向かって飛んだ。

さながら誘導ミサイル。

「なら私はこれよ！」

また時間停止を行い、ナイフを沢山展開させた。

でも今回はただ投げただけじゃない。

ナイフとナイフがぶつかるようになげ、跳弾の要領で機動が不規則になるようになげた。

これなら簡単に迎撃はされない。

「ルミネスリコシエ……」

私と魔理沙の攻撃は西行妖の迎撃に半分近く落とされたけど、残りは全て命中した。

しかし、すぐに西行妖は私達に弾幕だけではなく、レーザーのような光線まで撃ち返してきた。

どうにか、避けられたけれどもまた西行妖との距離が空いてしまったわ。

「叫びをあげないから、攻撃が効いているのか分からないわね」

「だな。少なくとも私達の攻撃は通っているみたいだぜ。このままやるから、締めは頼んだぜ妖夢、霊夢！」

「任せなさい。死ぬんじゃないわよ、2人共！」

抜刀の構えをした妖夢は無言で頷き、霊力を溜めている霊夢の激励を受けて私達は再度攻撃を再開した。

このまま妖夢が突撃しても、西行妖に弾かれるだけ。

私と魔理沙で隙を作らなきゃいけない。

「いつけえー！」

魔理沙が八卦炉を構え、マスターズパークや他の魔法で攻撃を繰り出す。

私も時間停止で場所を変えつつ、ナイフを投げつける。

もつとも私のナイフじゃ対して効果はないので、もつぱら西行妖の弾幕を迎撃する事に専念している。

防ぐのが無理でも、軌道を反らす事は出来るわ。

でも、最初はすぐに弾き飛ばせただけ、段々と逆に弾かれている。

段々と、攻めているはずの私達が、押し返されてきているわ。

「魔理沙、咲夜。一端戻って！」

その時、霊夢が声を張り上げた。

「このままじゃダメ！ 作戦があるわ！」

「くっ、しようがない。ここは霊夢の作戦に期待しようぜ」

「そう、ね！」

迫っていた妖力弾をどうにかナイフで防ぎ、私達は後退する事にした。

霊夢の言う通り、このまま攻め続けても無駄に消耗するだけね。

幸い、ある程度距離を取ると西行妖からの攻撃は止んだ。

どうも、時間稼ぎをしているようね。

「ちまちま攻めてもラチがあかなわ。こうなったら多少力押しでやるしかないわね。魔理沙、咲夜、妖夢よく聞いて」

霊夢の作戦を聞いて、私達は思わず顔を見つめ合った。

「作戦って、ようするに……力押し？」

「な、何よその目は。小細工を弄する時間はないの。時間をかければかけるほどアイツは強くなる。私でもどうしようもなくなるわ。だから……」

霊夢の言う力押し。私と魔理沙の攻撃程度では西行妖に隙を作るのは難しい。

そもそも、動かない、動けない相手でも目も耳もなく、相手をどうやって識別しているのか分からない相手に困るのは意味がない。

こういうのは目と耳があり、動ける相手でないという意味がない。

しかも、木の幹に捕らわれている幽々子がさつきよりもだいぶ同化が進んでいる。

これ以上時間をかけていては、西行妖に幽々子が完全に取りこまれてしまい、幻想郷全体の危機になる。

あの八雲紫と藍の2人がかりでやられるくらい強力な妖怪が更に強くなってしまうのは、流石にレミリアお嬢様やフランお嬢様でも……勝てない。

だから、ここで勝負を付けなければいけない。

次の攻撃で、決めなければいけない。

魔理沙が私達の前へと進み、箒の尾に八卦炉を付けて構えた。

「それじゃあ、とっておきだぜ！ ブレイジングスター！」

ブレイジングスター、以前図書館でユウキさん相手に使ったスペルカードね。

彗星のごとく西行妖に突撃する魔理沙。

身に纏った魔力は半端なく、西行妖の攻撃を尽く弾いている。

前見たあの時よりもはるかに速く、力強い。

それは箒の後ろに八卦炉をブースター代わりに取り付けた事推進力が増したせいね。

あれなら、ユウキさんに指摘された背後からの攻撃も、八卦炉ブースターで弾かれてしまっただろうから気にする事もなくなっただわね。

前よりもさらに攻防一体の魔法。

「魔力の消耗が激しいわね。あれじゃ長くは持たないわよ。魔理沙、本当にこれでケリをつけるみたいね」

霊夢の言う通り。魔理沙が残る魔力を全て使っているかのような力強さ。

西行妖の周りを飛びまわり、攻撃を一身に受け、弾き、そしてかわして行っている。

恐らく、今西行妖の意識は魔理沙に向かっている……はず。

目も耳もどころか、顔もないから表情が分からないけど、今なら多少なりとも隙が出て来ている……といいわね。

背後に目を向けると、霊夢が頷いた。

今しかチャンスはないわ。

「そろそろ私達も行くわよ、妖夢」

「お願いしますー！」

妖夢を抱きかかえ時間停止を連続で使用して、西行妖との距離を詰める。

最初からこれをすれば良かったかもしれないけれど、実は結構消耗が激しいのよね。

「おーにさん、っつちらー！」

魔理沙が煽るように上空を旋回している。

挑発に乗ったのか分からないけど西行妖が淡く輝きだし、上空にいる魔理沙に向けて何十本ものレーザーを放った。

今しかチャンスはない。

「今よつ、妖夢！」

「はい！」

一気に西行妖の近くまで来た所で、妖夢が駆け出した。

ここまでくれば時間停止で近づくよりも、妖夢が走った方が速いわね。

妖夢が腰に下げた白楼剣に手をかけ、幽々子を取りこんでいる木の幹へと斬りかかった。

白楼剣がどういうものか私には分からないけど、紫の言う通りならこれで幽々子は西行妖から切り離せる。

「幽々子様、今お助けします……「妖夢」……えつ、ゆ、幽々子様……？」

「ただ、妖夢の刀は西行妖を斬る寸前で止まった。」

「妖夢……」

「ゆ、幽々子様……様？」

「妖夢、早く斬るのよ！」

しまった。主思いの妖夢が助ける為とはいえ、主に刀を向ける事を躊躇するんじゃないのか。

そう思っていたのに、強い意思が籠った顔を見て大丈夫だと安心してしまっていたわ。

今の幽々子の声は、恐らく……いえ、間違ひなく西行妖が幽々子の声を真似た。

だったら、まずいわ！

「妖夢……死んで」

「えっ!？」

捕らわれていた幽々子がレミアアお嬢様ですら浮かべた事のないような、邪悪な笑みを浮かべた瞬間、私は妖夢へと手を伸ばした。

それよりもはやく西行妖から膨大な妖力が集められた。

アレはさつきユウキさんを飲みこんだ光。

妖夢の肩を掴み逃げようとしたけど、時間停止は使ったばかりで逃げれるような時間は止めれない。間に合わない！

目も眩むほどの禍々しい赤紫の閃光が放たれた。

「八方鬼縛陣！」

霊夢の声が聞こえて、私と妖夢を守るかのように壁が出来あがっていた。

「これは、霊夢の結界？」

「馬鹿！ 早く逃げなさい！」

霊夢が私達を守る為に、結界を張って閃光を防いでくれた。けれども、その結界もすぐにヒビが入った。

完全に壊れる寸前、時間停止をしようとしたけれど、少し遅かった。

結界が破壊されその余波で私達は吹き飛ばされた。

「咲夜、妖夢！」

咲夜と妖夢は砲撃が直撃こそしなかったけれど、大きく吹き飛ばされ地面に激突した。

「このおく！ ブレイジングスター！」

魔理沙はそんな私達を見て激昂し、再度魔法を使い西行妖に突撃した。

その時、西行妖の周りが赤紫色に輝きだした。

まるで西行妖の周りの空間に異変が……待って、これに似た現象を私は見た事があるわ。

「なっ、う、動けない!? 違う……前に進めない?」

突っ込もうとした魔理沙が空間に押しとどめられているかのように、空中で止まって

しまった。

「これは、フランの時と同じく空間が歪んでいる？」

「でも、歪み方があの時の比じゃないわね。それだけあの悪魔の妹よりも膨大な妖力があると言う事よ」

あの場になかったはずの紫が空中に止まった魔理沙をみて言った。

分かってはいたけれど、紫は紅霧異変の一部始終は見ていたようね。

「恐らく、我々が近寄れないようにしたのでしよう。1mの距離を100kmにまで広げるような歪み方です」

藍の言う通りなら、厄介なんてもんじゃないわねあの結界。

「魔理沙、そこからすぐに離れて！」

「言われなくても……し、しまった。魔力が……くそっ……」

「魔理沙！」

どうにか西行妖が攻撃する前に、魔理沙は離れる事が出来たけれど、魔力が切れてしまったようで箒から落下してしまった。

「……最悪」

最悪。何もかもが最悪。

妖夢は白楼剣で幽々子と西行妖の繋がりを斬る事に失敗。

咲夜は攻撃されようとしている妖夢を助けようとしたけど、能力が不十分だったように失敗。

私はせっかく溜めに溜めた霊力を、2人を守るための結界に全て使ってしまった、あげくその結界もすぐに破られ咲夜と妖夢は直撃こそしなかったけれど、その余波で重傷、大失敗。

魔理沙は魔力切れで魔法の効果切れ……墜落、失敗。

結果、私は無傷だけれど、さっきの結界に霊力を一気に使ったので、結構キツイ。

咲夜と妖夢はユウキさんよりはポロポロになってはいなくて意識もあるようだけど、怪我はユウキさんよりヒドイ。

少し離れた場所に落ちた魔理沙は寝転がりながら手を振っている。無事見ただけで、動けないみたいね。

けれども、今の私には彼女達の心配をしている余裕はない。

「最悪、ね。確かにそうだわ……妖夢が倒れた以上、白楼剣が使えなくなっただけは幽々子を助けられない。おまけに西行妖の周りには空間をゆがませる結界。近づく事がますます困難、いえもう不可能に近いわ」

横で紫がさつきよりはマシな顔色になったけれど脂汗を流しながら、感情を無理やり押し殺したような声を上げた。

失敗した私達を責めている、わけはないよね。

「まだ、力は戻らない？」

「……スキマを作るのも無理ね」

紫はスキマを作ろうと、手で線を描いたけれども何も起こらない。

その表情からして本当に戻っていないようね。

そもそも、紫の能力さえあれば幽々子を助ける事も出来るのに……

「霊夢…… 【夢想天生】 の準備をしなさい。もう本当に時間がないわ」

「……分かったわ」

夢想天生。私にとっておきの切り札にして最後の手段。

これを使えばどんな妖怪でも確実に、滅ぼせる。

空間をゆがませる結界だろうと、貫ける。

ただし、これを使えば幽々子は助からない。

西行妖だけを滅ぼす、なんて真似は出来ない。

「ま、待って下さい。紫様……一体どうする気ですか？」

頭から血を流し、折れたのか左腕を庇いながら妖夢が紫に詰め寄った。

「どうもこうもないわ。さつきも言ったでしょ。あなたたちが失敗すれば、幽々子ごと

西行妖を消滅させると」

「そ、そんな待つて下さい！ 私が今度こそ、白楼剣で幽々子様を……あぐつ」

妖夢は地面に転がった白楼剣を手にとろうとしたけど、痛みでうまく握れない。「その腕では無理よ。それにあなたじゃ幽々子は斬れないわ。さつきみたいだね」紫の目には妖夢への失望の色はない。

まるで最初から妖夢には期待していなかったかのようね。

「霊夢、急ぎなさい」

「ええ、分かっているわ」

私はさつきまでと同じく精神を集中させ、霊力を溜める。

でもそれは結界の為じゃない。西行妖を滅ぼす為の準備。

私の周囲に陰陽玉が浮かびあがる。

この全てに霊力を溜める事で、夢想天生が放てるようになる。

「待つて、待つて下さい！ 見捨てるんですか……幽々子様を、見捨てるんですか！ 紫

様！」

「見捨てるわ……このままじゃ、幻想郷は幽々子、いえ、完全復活した西行妖によって滅ぼされる」

「霊夢、さん。あなたも止めてください。幽々子様を……助けてください！」

涙を流しながら妖夢が私の足にすがってくる。

それを目に留めながらも、私は夢想天生の準備を続ける。

「助けるわ。だから……完全に吞まれる前に私が、西行妖ごと消すのよ」

「……そ、そんな……」

すがりつく妖夢への非情な最後通告。

本当はそうは思わないはずなのに、こんな自分に嫌悪感が湧くわね。

ホント、私どうしちやつたのかしら。

今も幽々子をどうにかしようと色々考えてるし、どうにもできないって結論を認めたくはない。

けれども、やっぱりは手は浮かばず、このまま夢想天生を使うしかない。

私は博麗の巫女。幻想郷を守るのが役目。

このまま西行妖が完全復活すれば、私でも止められない。夢想天生も効かなくなる。

そうなれば、ユウキさんもみんなも、確実に死ぬ。

それだけは絶対にダメ。

だから、涙を流して私に懇願する妖夢にかけられる言葉はこれしかない

「……ごめんささい」

小さく、絞り出すように呟いた。

唇を深く噛みしめる。口の中はさつきから鉄の味しかない。

「あ……ああ、幽々子……さま、幽々子様！」

たまらず西行妖へ、幽々子へとかけだした妖夢だったけれど、足がおぼつかずすぐに倒れてしまった。

「やだ……やめ、て……幽々子、さま……」

必死に手を伸ばす先で、幽々子が西行妖に呑みこまれていく。

もう顔以外は全て西行妖の中。

後、数分も持たない。

私の夢想天生なら……間に合う。

「……紫様」

「何も言わないで、藍」

ちらつと紫に目を向けると、眉間にしわをよせ険しい表情をしているが、一筋の涙が零れ落ちている。

「やだ……やだあ……う、うう、だれか……だれか、たす、けて……誰か、幽々子様を助けて！」

妖夢の泣き叫ぶ声……耳が、痛い。

私も涙が溢れてきた。

その時、静かな、だけどとても優しく力強い声が聞こえた。

「……………任せろ」

誰かの、泣き声が聞こえる。

——あ、ああ……………やだっ

届かない手を必死に伸ばしている。

——やだ、やだあ、やめて……………やめてっ

でも、その手は何もつかめず、誰も救えない。

——うっ……………うう……………

泣き声だけが木霊する。それを聞き、体中に力が戻る。

あの時もモニターの中での小さな泣き声ははつきりと聞こえ頭から離れず、血が出るまで両手を強く握っていた。

「あ……………ああ、幽々子……………さま、幽々子様！」

ああ、いやだ。こんな声は聞きたくない。

こんな声をさせたくない。

「やだ……………やだあ……………う、うう、だれか……………だれか、たす、けて……………誰か、幽々子様を助けて！」

なら、俺がやる事はただ一つ。

あの時は何も言えなかったけれど、今は違う。
あの時は側に居れなかったけれど、今は違う。

「……任せろ」

涙を流す2人の少女に声をかけ、その涙を流させる元凶を強く睨む。

「おい、お前。お前がこの子の涙を踏みにじってでも復活しようっていうのなら」

九尾の妖狐が、声も出せずただ驚愕の表情で俺を見上げていた。

「そして、その人を滅ぼさなきゃお前を倒せないというのなら」

妖怪の賢者が式神以上の表情を浮かべ、その扇を落としていた。

「もう誰も悲劇を止められないというのなら」

涙を浮かべた2人の少女の頭に手を置き、そつと撫で、そして……

「まずは、その幻想を支配する！」

幻想郷で初めて出会った【敵】へと向き直った。

続く

第60話 「死闘（後編）」

一歩一歩【敵】へと進む。

周りに倒れている魔理沙達を一瞥して、少なくとも命に別条はないと分かり、少し安堵する。

魔理沙は頭を抑えて起き上がった。咲夜や妖夢ほどの怪我はなさそうだ。

近くで起き上がろうとしている咲夜に肩を貸している。

咲夜は頭から血を流してはいるが、意識はあるようだ。

俺を心配そうな眼で見ている。

妖夢も腕が折れている以外では、足元がおぼつかない程度で目立った傷は見えない。

だけど、安心はしても胸の熱さは収まらない。

コイツは、西行妖は、絶対に倒さなければいけない俺の敵。

止めなければいけない相手でも、俺が相手をしなければいけない相手でもない。

俺が倒すべき敵。でも、俺じゃ倒せない、俺だけじゃ倒せない。

ならばどうする？

妖夢との戦いと咲夜的能力を限界まで使った反動、そして、霊夢を庇って受けた攻撃

のせいで体中が少し麻痺している。

でも、この影響はもうすぐ収まる。もう少しでまともに動けるようになる。それまでに少しでも敵に近付くしかない。

痛みはない。いや、あるのだろうけど全く感じない。

「ま、待てユウキ君！ その体でアレに立ち向かうのは自殺行為だ！」

後ろで藍が声をあげているように、きつと俺は見た目よりも重傷だろう。

美鈴とパチュリーのおかげで俺は命拾いをした。

だけど、命拾いをしただけ、無傷じゃない。

頭はくらくらするし、足元もおぼつかない。

でも、そんな事はどうでもいい。

今は西行妖を倒す事だけを考えている。

その為に必要な手段は、必要な力は全部揃っている。

「霊夢、今度は俺が隙を作る。急いで霊力溜めてくれ」

「……分かったわ。後で言いたい事がごまんとあるから、覚悟なさい」

「了解だ」

霊夢は何かを言おうとしたが、すぐに返事をした。

もう時間がない事は分かっているからだろう。

地面に落ちていた白楼剣を鞘におさめ、鞘に収まったままの楼観剣と共に腰に差す。少し離れた場所に落ちている八卦炉と箒を拾い上げた時、体の感覚がある程度戻ってきた。

これなら、戦える。

「咲夜、魔理沙、妖夢……力、借りるぞ！」

まずは、咲夜の力だ。

ユウキさんが一歩ずつ西行妖に向かって歩いて行く。

ポロポロになった服は既に脱ぎ捨てていて、上半身は裸だ。

思わず目をそむけたくなった。ユウキさんの背中にはいくつもの傷跡が見えた。

最初に出会った時、神社で文と腕や胸にある沢山の傷跡は見たけど、背中はおつとひどかったのね。

「咲夜、魔理沙、妖夢……力、借りるぞ！」

ユウキさんがそう言うと、咲夜の方を向いた。

最初は咲夜の力を使うようね。

ユウキさんがゆっくりと、西行妖が張った空間を歪める結界に手を伸ばす。

何をするつもりなのかしら？ 時を止めても空間の歪みは関係ないと思うのだけど。

「や、やめな、さいっ!」

魔理沙に担がれた咲夜がそれを見て叫んだ。

咲夜はユウキさんが何をしようとしているのか分かるのね。

私には分からないけれど、嫌な予感しかない。

「……邪魔」

ユウキさんが右手を振ると、割れた風船のように空間が弾けた。

弾けたと言うよりは、境界が消し飛んだと言った方がいいかしら？

——プシュツ

それと同時にユウキさんの頭から、血管が千切れたかのように血が噴出した。

「ユ、ユウキさん!」

思わず駆け出しそうになったけど、彼はそれを左手を突き出し制した。

彼は、自分がどうなろうと西行妖を倒す気でいた。

ここで無理にでも止める事も出来る。けれども、時間がないのは確か……私は歯を食いしぼり、霊力を溜める事に集中した。

次にユウキさんが魔理沙の力を使い、箒の上に乗った。

「ブレイジングスター」

八卦炉をブースターにした、魔理沙の新スペルカード。

その突進力は私でもかわしきれぬ自信はない。
流石私用に開発したスペルカードの改良版ね。

——ウオン！

ここで西行妖が唸り声のような叫びをあげた。

先程までとは比べ物にならない程、濃密な弾幕がユウキさんに向けて放たれた。

さつきはブレイジングスターに弾かれていたけれど、今度のは威力が高く簡単に貫いてくる。

それでもユウキさんはひるむ事なく、体をひねったりしてかわしながら両腰に差した妖夢の刀を抜いた。

「はあっ！」

2本の刀を振り、西行妖の攻撃を次々と撃ち払って行く。

よく見ると魔理沙の魔力が刀に注ぎ込まれているのが分かった。

相変わらず力の使い方がうまいわね。

「すい……」

自分の刀で弾幕を突破するユウキさんを見て、さつきまで泣いていたのに思わず妖夢が感嘆の声を上げた。

咲夜から簡単に聞いていたらしく、幻想支配についてはあまり驚いた風には見えない

わね。

今のユウキさんは西行妖の攻撃を切り裂いて進む、まさに流れ星。

でも、なぜかユウキさんは西行妖の周りを飛びまわるだけで、特に攻撃をしかけられるわけでもない。

ユウキさんは何か叫んでいるようだけど、爆音と雄叫びが大きくてこつちまでよく聞こえない。

「彼、幽々子に呼びかけているわ」

「えっ？　なんて言っているの？」

紫が彼を見ながら言った。

唇の動きを見ているのか、妖怪だから聞こえているのか、紫と藍にはユウキさんが何を言っているか分かるようね。

「お前を呼ぶ妖夢の声が聞こえないのか。などと彼は言っています」

「なっ!?!　攻撃を捌きながら説得してると言うのかアイツ！　あんな加速してあんな動きする事すら無茶なのに！」

魔理沙が驚くのも無理はないわ。西行妖の濃密な弾幕を刀2本で防ぎながら、ユウキさんは幽々子へと叫んでいる。

そんな余裕があるわけがないのに。

「どうして、そんな事を？」

「幽々子の意識を少しでも表面に出す為よ。あそこまで融合してしまつたら、白楼剣でも私の能力でも簡単には引きはがせないわ」

ユウキさんの言葉が聞こえているのか、浸食の速度が遅くなっている。

それどころか、顔まで埋もれていたのが今では首が見えるほどに出てきている。

「ユウキさんは、幽々子を絶対に助けるつもり、なのね。さつき私の力を使って空間の歪みを無理やり元に戻したけど、アレは私の能力の限界を越えているわ。体かなりの負担がかかっているはずよ」

「っ!? くっ!」

「待つんだ、妖夢!」

咲夜の言葉を聞き、藍の制止も聞かずに妖夢が駆け出した。

折れた左手を抑え、足を少し引きずりながら西行妖に近付いていく。

「目を覚まして下さい、幽々子様! そんな妖に呑みこまれる幽々子様じゃないはずです!」

「幽々子! あんた西行妖に生前も死後も良いようにやられていいの!?! そんなに諦めのいい性格じゃなかったはずよ!」

妖夢だけでなく紫ですら声を張り上げた事に、私と藍は目を丸くした。

魔理沙と咲夜も驚いた顔をして、紫を見ている。

こんな紫は初めて見た。

「幽々子、妖夢があれだけ無理をしているのに、主のお前が根性見せないでどうするんだ!? とつと目を覚ませ!」

そう叫びながら弾幕をかくぐり、刀を収めたユウキさんが勢いをつけたまま幽々子を殴った。

「ゆ、幽々子様!」「幽々子!」

その時だった。

「ゆかり……よう、む……」

聞こえた。今まで西行妖に操られていた時とは違う。弱々しくもはっきりと意思の籠った声。

西行寺幽々子の声が私達にも聞こえた。

妖夢と紫が声にならない叫びをあげる。

「今だっ!」

ユウキさんは西行妖から距離を取り、垂直に飛び上がった。

両腰には鞘に収めた2本の刀。

そのうちの1本、左腰に差した短めの刀、白楼剣を手に取り抜刀の構えのまま西行妖

へと急降下してきた。

今彼が纏っているのは魔理沙の魔力ではなく、妖夢の霊力ね。

もう箒を自由に操る事は出来ないけど、その分白楼剣に妖夢の霊力を溜めている。

少しでも勢いを付けて威力を高める為に、わざと上空で力を切り替えて箒から飛び降りたのね。

「はああああ〜〜!!」

西行妖も黙っているわけではなく、自分に向けて落ちてくるユウキさんに向けて弾幕を撃ちつけている。

「てめえの殺す為の攻撃なんか、面白くもなんともないんだよ!」

ユウキさんは首をそらしたり、落下で体の自由が利かないはずなのに体をずらすだけの必要最低限の動きで全てかわしていた。

痺れを切らしたのか西行妖が淡く輝きだし、私の結界でも防げなかったあの光線が放たれた。

「させるか!」

魔理沙が残った魔力で箒を操り、ユウキさんに乗せ光線かわした。

「さんきゅ、魔理沙。うおおお〜!!」

ユウキさんが空中で箒を蹴り、更に加速して西行妖へと突っ込む。

そして、白楼剣を抜き幽々子を斬った。

いえ、彼が斬ったのは幽々子ではなく、幽々子と西行妖の繋がりを。

「幽々子様！」

彼が斬った所から白いヒビが入り、幽々子がそこから落ちてきた。

「紫！」

「分かってるわ！」

彼は間髪いれずに紫に叫んだ。一度だけならスキマを開く妖力が回復していると彼は読んだのね。

その読みは正しく、紫は何かスキマを開き落ちていく幽々子を回収して、こちらへと運んだ。

「幽々子様、しつかり！」

妖夢が幽々子へと駆け寄る。しかし、まだこれで終わりじゃないわ。

ユウキさんは斬った勢いそのままに滑るように着地した後、すぐに駆け出した。

その手に握られているのは白楼剣ではなく、楼観剣。

「はあ〜！」

楼観剣に霊力が注ぎ込まれていき、西行妖にも匹敵するほどの巨大な蒼い刀身が生み出された。

「い、いけない！ それ以上力を使えば、体が！」

「迷津慈航斬・霊！」

妖夢が叫ぶと同時に、ユウキさんは楼観剣を西行妖に叩き付けた。

巨大な刀身は西行妖、ではなくその周りに漂う膨大な妖力を斬っている。

赤紫色の妖力が、蒼い刀身に削り取られて徐々に消し飛んで行くのが分かる。

「妖力を注ぎ込む楼観剣に霊力を注ぐ事で、妖力を削る技に変えたんだ。しかし、無茶にも程がある！」

藍の言う通り、かなり無茶をしていると思う。

刀を振るユウキさんの身体から血が噴き出してきた。

「くっ、霊夢まだか、まだ溜まらないのか！」

「あと、もう……少し！」

魔理沙と咲夜を助ける為に结界を使ったせいで、再度霊力を溜めるのに時間がかかっている。

せつかくユウキさんが時間を稼いで……いえ、それだけじゃない。

まさか、ユウキさんがやろうとしているのは……

「ユウキさん、もういい。もう、離れて!!」

「おらあー！」

私の声が聞こえていないか、ユウキさんは楼観剣をそのまま振り下ろした。

と、同時に西行妖から漂う赤紫の妖力に大きな隙間が生まれた。

「まだ、まだあー！」

楼観剣を地面に突き刺し、次にユウキさんの目が青から赤に戻った。

魔理沙の魔力を再度使い、箒と八卦炉を手元に寄せた。

そして、そのまま穂先に八卦炉を付けて、先程空いた妖力の穴にへと突っ込んだ。

なんなの、あの構えは？ とても嫌な予感がするわ。

「ま、まて、それは……その魔法は使うなあー！」

「ファイナル・スパーク！」

魔理沙が止めようと叫ぶが一足遅く、八卦炉から巨大な砲撃が放たれた。

その砲撃はマスタースパークのようだったけれど、威力が段違いね。

——ウツ、ウオオオーン！

西行妖が苦しんでいる。これはかなり効いているようね。

と、ここで西行妖に変化が現れた。

今まで西行妖に咲いていた異形の花が爆発したかのように、四方へ飛び散った。

同時にファイナルスパークを放っていたユウキさんが爆発の余波で、吹き飛ばされた。

「あれは、春の光。彼が内側から砲撃で無理やり西行妖から春の光を吹き飛ばしたのね。これで幻想郷中に春が戻るわ……霊夢っ、今しかないわ！」

「ええ……」

蓄えた妖力は削り取られ、復活の礎にしていた春の光は全て吹き飛ばされ、全身のあちこちから煙を吹いた西行妖は満身創痍ね。

「これで、終わりよ西行妖！ 八方龍殺陣！」

ありつたけの霊力を注ぎ込んだ御札を、包囲するように西行妖へと配置し、一気に縛る。

その時、西行妖の根元から紫色に輝く光の蝶が出てきて、封印を強化するかのよう陣へと吸い込まれていった。

「あれが、幽々子が命と引き換えに張った封印術よ」

そして、西行妖は再度封印された。

博麗の力をも上書きした事で、もう西行妖の封印が解かれる事はないと紫は言った。

「はあ、はあ……こ、これで……終わったのね。私も、霊力がすっからかんよ……っ、ユウキさん！ どこにいるの!？」

思わず倒れこみそうになつたけど、踏みとどまった。

魔理沙や咲夜もユウキさんを探そうと駆け出した。

と、そこへまだ晴れぬ土煙りの中から、ゆっくりとこちらへ歩く人影が見えた。
あれは……ユウキさん！

「ユウキさん、良かった。無事だったのね！」

少し俯きながらゆらりゆらりと、こちら歩いてくるユウキさんだったが、様子がおかしい。

「ユウキ……お前、大丈夫、っ!？」

「ユウキ、さん？」

魔理沙と咲夜がハツと息をのんだ。

ユウキさんは全身傷だらけで、髪の毛は真っ白になっている。

「……よか、った……みんな、ぶじ……で」

「ユウキさん！」

体の痛みも忘れ駆け寄った。

もう少し、もう少しで彼に手が届く……所で

「がふっ！」

「「っ!？」」

口と全身から血を飛び散らせながら、ユウキさんは倒れた。

続
く

第61話 「後悔」

博麗神社の一室で、巨大な魔法陣の上で瀕死のユウキをパチュリーとアリス、美鈴が治療を施している。

「呼吸が荒くなってきたわ。アリス、もつと魔力を注いで！」

「やってるわよ！ 美鈴、そっちは!？」

「ダメです。これ以上気を流しこむと、逆効果です！ ユウキさんの生命力がほとんど尽きているんです！」

回復を促進させる魔法陣に必死で魔力を注ぎ込むパチュリーとアリス。

美鈴は気を使い、回復力を促進させているけど、こちらはあまり芳しくない。

フランの時は命に別条がない怪我だったけど、今回は違う。

ユウキの体は内側も外側もポロポロで、パチュリー特製の回復魔法でも命をつなぎとめるのがやっとだ。

それもアリスと魔力を注ぎ込まなければ維持できない程、瀕死の重傷だった。

「お待たせ！ ごめんなさい。薬草だけど山の雪がまだ解けてなくてろくに探せなかったわ。文にとりはまだ探しているみたいだけど、一先ずこれでどうにかして！」

「ありがと、はたて。こあ、あなたは咲夜の分を作りなさい！ やり方は分かるでしょ！？」

「任せてください、パチュリー様！」

はたてやこあも慌ただしく動いている。

文やにとりは妖怪の山や近隣の山々をめぐって、薬草をかき集めている。

けれども、こつちも冬が長引いたせいで薬草がまだ育っていないから、収穫には手間取っている。

少し回復した魔力はとつくになくなり、後遺症で体も自由に動かせない私に出来る事は、ただ邪魔にならないようにするだけだ。

霊夢が西行妖を封印した直後、ユウキが全身から血を噴き出し倒れた。

西行妖が倒れた事で妖力を取り戻した紫が博麗神社に運び、魔力がある程度戻った私ですぐに紅魔館へ行きパチュリー、美鈴、こあ、とたまたま居合わせたアリスを連れてきた。

フランとリリーホワイトも付いてくると言っていたようだけど、レミリアがそれを止めた。

『フラン、あなたはユウキの容体が落ち着くまで会ってはダメよ。私とここにいなさい』

『どうして?! お兄ちゃんが死にかけてるんだよ、咲夜だってヒドイ怪我してるって!』

お姉様は心配じゃないの!』

『心配に決まってるでしょ! だからこそよ! フラン、あなたはそんな状態の2人を見て冷静でいられる? 私だって、冷静でいられる自信ないわ』

『お姉様……』

『だから、今は待ちましよう。大丈夫よ。ユウキはそう簡単に死にはしないわ。リリーホワイト、あなたは自分がするべき事をしなさい。せつかく彼が約束通り、春を取り戻してくれたのよ?』

『……分かりました』

こうしてスカーレット姉妹は紅魔館に残った。

咲夜は紅魔館で治療させるつもりだったみたいだけど、本人がどうしてもと言うのと霊夢が許可したので博麗神社で一緒に治療する事になった。

その後、美鈴が人里へ行き、慧音に知らせて薬や包帯をかき集めた。

ちょうどその頃、妖怪の山から文とはたてが飛んできた。

『スキマ妖怪に異変解決まで山から出る事を禁じられていたんです……ですが、こんな事になるのなら、アイツをぶっ飛ばしてでも着いて行くべきだったわ!』

長年一緒にいるはたてですら見た事がないと言うほど、文は怒り、そして深く悲しん

でいた。

どうやら文は紫から今回の異変に関わる事を禁じられていたようだ。

異変の元凶である幽々子と西行妖の事を知られたくなかった、からかそれ以外にも理由があったのかは分からない。

文達が来た時には、既に紫も藍も姿を消していた。妖力を完全に回復させる為に戻つたらしい。

それから、文とはたては妖怪の山に薬草を取りに行き、パチュリー達はユウキと咲夜の治療を始めた。

咲夜は命に別条はないが、ユウキの怪我は酷く、瀕死だった。

『外傷もそうだけど、一番の問題は能力を使い過ぎたのね。生命力すらもほとんど残っていないわ』

霊夢を庇って受けた攻撃のダメージは、美鈴のマフラーが肩代わりしたおかげでそこまで重傷ではなかった。

けれども、咲夜の能力で西行妖が張った空間の歪みを元に戻した時、それからすでに過剰使用だった。

確かに咲夜の時間を操る能力を応用させて、空間をも歪めさせたりする事はできるけれども、西行妖が張った結界を破るには力が足りなかった。

それでも限界以上に能力を使い、どうにか結界を破ったけれど、その時既に頭の血管がかなりやられていた。

次に、私のブレイジングスターで西行妖の攻撃をかわしていた。

無茶苦茶な機動をしながらだったけれども、これは、まだマシな方だった。

それから妖夢の力を使い、白楼剣で幽々子を救出した。

しかし、紫が言っていたけど、幽々子を救いただけでは西行妖は封印出来なかったようだ。

あの時には封印がほぼ解けていたので、幽々子を失ってもあまり弱体化はしなかった。

その事に瞬時に気付いたユウキが取った行動が、問題だった。

妖夢の力を限界以上に楼観剣に注ぎ、西行妖の妖力の流れを斬り裂け目を作り、私の魔法ファイナルスパークで春の光を解放させた。

ファイナルスパーク、それは私が組み上げた魔法の中でも最大で最強の魔法。

しかし、私は一度も使った事がない。使えば全ての魔力を使いきってしまう事が分かったからだ。

「それを分かっていたはずなのに、アイツは躊躇なく使ったな……全ては春の光を取り戻す為、か」

楼観剣で妖力に穴を穿ち、そこへ私の最大魔法を叩きこんだおかげで春の光を全て吐きださせる事が出来た。

西行妖の弱体化と春の光の解放、まさに一石二鳥。

「でもそのせいで、ユウキは生命力すら使ってまで無茶をして……内部から崩壊した、か」

髪が白くなったのは、力を使い過ぎて生命力まで使ってしまった証。

今もまだユウキの髪は白いままだ。

「……結局、ユウキがあんな無茶しなければ、解決はしなかったな……」

パチユリー達の邪魔にならないように、そつと離れにある部屋を出る。いつの間にか日が沈みかけていた。

そこへ咲夜の看病をしていた慧音が、別室から出てくるのが見えた。

慧音は私の顔を見て一瞬目を見開いたが、すぐに溜息を吐きつつこっちへやってきた。

「慧音、咲夜の具合はどうだ？」

「ああ、足の骨が折れて他にも怪我はあるが、ユウキ君ほどじゃない。まあ、彼の事をしきりに心配していて安静にさせるのに苦労はしたよ」

「そう、か……」

「ユウキ君のサポートをするはずが、自分には何もできなかった。彼女はその事ばかりを口にしてたよ」

それから客間へと移動して、慧音が淹れてくれたお茶を飲み話をした。

静かに話す慧音だけど、さつきから手が強く握られている。

慧音も、瀕死のユウキを見て最初は結構動揺していたな。

でも、すぐに冷静さを取り戻していた。

それは……自分以上に取り乱した霊夢を見たからだ。

『ユウキさん、ユウキさん!! ごめん、なさい。ごめんなさい。私のせいで……私がかつと早く異変に気づいていければ!』

あそこまで泣き叫ぶ霊夢を初めて見た。

その様子があまりに酷かったのでパチュリィが魔法で眠らせて、自分の部屋に寝かせてある。

霊夢も咲夜同様、激しく後悔してるんだろうな、自分のせいでユウキがあんな目にあったと。

「魔理沙も少し休め。魔力もまだ回復していないし、体もまだ動かせないのだろう?」

「私は大丈夫だぜ、これでも少し休ませてもらったし、結構頑丈だからな。慧音こそ大丈夫か?」

「私の方は大丈夫だ。むしろ、こういう事をしてるから、ある程度は冷静でいられる……むっ、誤魔化しても無駄だぞ？ これ以上看病人が増えられても困る」

「眠れないんだよ……疲れ過ぎて逆に眠気がなくなつたのかもな」

慧音も私と同じか。

正直、あんな状態のユウキを見たら、落ち着いてなんかいられない。

私も何か手伝えればいいけれど、満足に体を動かせない今の私はただの足手まといだ。

「いいから少し休め、酷い顔してるぞ？」

慧音に渡された手鏡を見て、ギョツとした。

「……こ、これはヒドイ。霊夢やユウキに見られなくて良かったぜ。アリスとパチュリーはユウキにかかりつきりだしな」

自分でもそう思うくらいヒドイ顔をしていた。

「やれやれ、霊夢や文、咲夜だけではなく魔理沙もまでか」

「なっ!! 何の事言ってるんだ!？」

「いや、失礼。魔理沙は霖之助さんだったな、うんうん」

「な、ななななで今度はアイツの話が出るんだ!？」

唐突に霖之助の話がされ、なぜか顔が火照つて来た。

「はっはっはっ、少しは顔色が戻ったようだな」

こ、コイツもかなり性格が変わってきた気がするぜ……いや、教師以外の顔はこんなものだったかな。

「そういう慧音はどうなんだよ」

「私か？ ふむ……特に、どうともないな」

少し考え込んだが、やけにあっさりと答えてきた。

「何だよ、つまらないなあ。あ、妹紅はどうなんだ？ ユウキを見て何だかやけに動揺していたようだったけど」

妹紅も慧音と一緒にやってきたが、血まみれの包帯姿で苦しむユウキを見て、顔を真っ青にしてパチユリーから容体を聞くと知り合いに薬を貰いに行くとして出て行った。

「妹紅か……彼女の場合は事情が事情だからな。親しい人の死に目に幾度も合つてはいても、慣れないのだろうな」

そうか、妹紅は不老不死の蓬莱人だったな。すっかり忘れていたぜ。

そりゃ何人もの家族や友人の死を看取ってきたもんな。

「特にユウキ君や君達のように不老不死と聞いても恐れも差別もしないで、ちゃんと人として接してくれる存在は、彼女には特別なんだよ。相手が人間なら尚更な」

「なるほどな……おっ、噂をすれば戻ってきたぜ」

ちやうど外を見上げると、妹紅が急いで飛んでくるのが見えた。何があつたのか服があちこち破け、髪もボサボサになつていた。

「お、おい。妹紅、一体どこに行つてたんだ!? 凄い恰好じゃないか!」

「私の事なんかよりこれ、薬を貰つて来た。これを飲めば数日で治るそうさ。早く飲ませるんだ」

そう言つて妹紅は丸薬が入つた小袋を渡してきた。

正直、どこで貰つて来たのかは気になるけど、今は何でもいい。

急いで飲ませないと。

「魔理沙、その薬をパチュリー達に渡したらしっかり休むんだぞ!」

「分かつてるつて!」

背中では慧音に返事しながら、私はユウキが眠る部屋に急いだ。

駆け足で薬を運ぶ魔理沙に声をかけ、私は溜息を一つついた。

「全く、誰もかれも無茶をしすぎだ……妹紅もだ」

ギロリと睨むと妹紅はバツが悪そうに顔をそむけた。

妹紅がどこへ何しに行ったかは、私には大体予想がついていた。

「し、仕方ないでしょ。異変の影響で人里には薬が少ない状態だったし。森や山にも薬

草はまだ生えていなかったんだから」

そう。文やはたてが妖怪の山で薬草集めに苦勞しているけれど、人里でも同じような状況だ。

異変が解決し、冬が終わったと言っても一晩で雪が消えるわけじゃない。

寒さがだいぶ和らぎ春らしい暖かさは戻ったけれども、ここ数カ月で降り積もった雪が完全に解けるのはまだ先。

冬の備蓄は食料や燃料はともかく、薬に関しては怪我人や病人の為にかなり消費している。

寒さによる風邪や病気、雪に足を取られ転倒して骨折したり、物の下敷きになったりと様々だ。

「しかし、よく彼女達が薬をくれたな。外界との接触を極端に嫌っていたのに」

「最初は半ば力づくでアイツの所に押し掛けて後は……って思い出させないで、慧音。とりあえず、里の分もいくつか分けてもらったから後で運ぶわ」

これには私は目を丸くした。

【彼女達】が見ず知らずの彼に薬をくれたばかりではなく、人里の為にも分けてくれるとは。

「イイモノが覗れたから、って言われたわ。全く、人を見せものに……ってまた思い出し

てきた、くう〜！」

妹紅は一体何をしたんだ？ 聞いても応えてくれそうには……絶対ないか。

何にせよ、妹紅がかなり無理をして薬を取ってきてくれた事にはかわりない。

私は妹紅の前に座りなおし、深く頭を下げた。

「妹紅……すまない、ありがとう。ユウキ君の為に、人里の為に色々世話をかけた」
「よ、よしてよ慧音。彼の事は、私が自分でしたかったからやった事なのよ。それに、人里の件にはあつちが勝手にした事よ。私は何もしてないわ」

私の土下座に慌てる妹紅。でも、彼女の苦労は半端なかつただろう……何せ、彼女がこの世で一番嫌う者達に頼みごとを死に行つたのだから。

「……私からも礼を言わせて」

と、そこへ私達以外の声が聞こえ、振り向くと霊夢が立っていた。

「霊夢、まだ寝てなくていいのか？」

「大丈夫よ、慧音。パチュリリーに無理やり眠らされたおかげで、少しは頭冷えたから」

いつものような口調で話す霊夢だったが、その声には全く元気がない。

「私には全く大丈夫に見えないのだけれど、もう少し寝たら？」

妹紅も心配そうに声をかけるが、霊夢は首を横に振った。

「もう、これ以上休んでなんかいられないわ……それより、慧音、妹紅。ユウキさんや咲

夜の事、それに色々ありがとう、そして、ごめんなさい」

ここまで霊夢が頭を下げるのを私は初めて見たかもしれない。

悪いと思つた事には謝罪の言葉を口にする事はあつたが、こうも丁寧に頭を下げる事は滅多にない。

「あなたが礼を言つたり謝る事じゃないわ。私も慧音もユウキ君を死なせたくないから、だからここにいる、それだけよ」

うんうん、と私も頷いた。

「いいえ、それだけじゃないわ。私が博麗の巫女としてもっと早く異変に気付いて、行動を起こしていれば、こんな事にはならなかつた」

「それは仕方のない事じゃないか、霊夢。冬が長くて春が訪れるのが遅い事は過去にもあつた」

「そうよ。私だつて経験した事何度もあるわ。だから、すぐに異変と気付かなかつたのも無理はないわよ」

それなりに長生きしている私と、昔から生きている妹紅も経験している春の訪れの遅さ。

流星に今回のような遅さはなかつたけれど、それでも気付くのが遅れるのは無理がない事だ。

「……気付くべきだったのよ。異変として気付かないにしてもおかしいと調査はすべきだったわ」

「妖術や魔法で遅くされていたらならともかく、春の光を集めるなんて方法は気付きにくいぞ」

冬を長くする、春を遅くする方法ならいくつか文献にあったから、私は推測は立てられたけれど、四季の光を奪うなんて発想自体普通は浮かばない。

「私は、春の光の事も、白玉楼の事も何も知らなかった。博麗の巫女なのに！ 知ってなきやいけない事なのに！ 知っていけば、もつと早く異変を解決できた。西行妖の復活も止められたし、それでユウキさんや咲夜達が傷付く事もなかった！ それに私は今回も紅霧の時も無傷だった。でも、ユウキさんだけがあの時も今回も死にそうな目に合つて、私は彼のおかげで無傷なのよ!？」

さつきよりも取り乱してはいなかったが、それでも霊夢は泣いていた。

霊夢の悲痛な叫びを私と妹紅は聞いている事しかできなかった。

今の霊夢は博麗の巫女ではなく、純粋な年頃の女の子にしか見えなかった。

「なんで……なんで、ユウキさんばかりが傷付くのよ。あの人が何をしたのよ！ 元いた場所で友達や家族、世界そのものに忘れ去られて拒絶されて、孤独に幻想郷へと追いつ出されたって言うのに、弱音も愚痴も何も言わない彼が、どうして幻想郷でも傷付いて

ばかりなの！ うっ……もう、傷付いてほしく、ないのに……ひっ、ぐっ」
「霊夢……あなた、そこまで彼を……」

霊夢の叫びが聞こえたのか、パチュリーと美鈴がやってきた。
その表情はすごく痛々しかった。

誰もそれ以上何も言えなかった。ここにいる全員が霊夢の気持ち痛みほど分かっている、同じ事を考えていたからだ。

恐らく、いや、絶対に今妖怪の山で必死に薬草を探す文も同じ事を思っているだろう。
「パチュリー、美鈴、ユウキ君はどうなった？」

「そうね、ホントはその事を言いに来ただけ……」
そこでパチュリーは一呼吸して、表情を少し和らげた。

「もう大丈夫です。持つてきてくれた薬のおかげで、山は越えました。まだ絶対安静ですけれど、命は助かりました」

「だそうよ……って美鈴、私が言おうとした事先に言うんじゃないわよ」
「あはは、すみません。ユウキさんが助かった事が嬉しくて、つい」

美鈴がさつきまでの辛そうな顔から一変して、嬉しそうに頬が緩んだ。
ユウキ君が助かった。それを聞いて霊夢も深く息を吐き、泣きながら笑みを浮かべた。

「正直言つて私でも手の施しようがなかったのよ。あなたが持つてきた薬、本当にすごいわね。どこで手に入れたのかしら？」

「生憎、それを明かさない事を条件にもらつてきたのよ。だから、こればかりは秘密よ。いいじゃない、彼が助かったのだから」

「そうね。じゃ、この薬咲夜にも使わせてもらうわよ。私と美鈴は咲夜についてるわ。ユウキにはアリスが見ているそうだから。こゝは紅魔館へ向かわせたわ、レミイ達に知らせないとね。で、あなた達も休んだら？ ユウキはまだしばらく目を覚まさないわよ。だから特に霊夢……つて言われるまでもなく寝ちやつてるわね」

振り向くと霊夢がテーブルにうつ伏せになりながら眠っていた。

緊張の糸が解けたのか、さつきまでとはうつて変わつて目に涙を浮かべ、笑顔のまま寝息を立てている。

「魔理沙もユウキに薬を飲ませた途端、寝ちやつたのよね。まあ、無理もないわね。ろくに回復もしてなかったんだし」

「パチュリー様だつて朝からずつと休まず魔法を使い続けて、無理しすぎですよ。しつかり休んでください」

「はいはい、咲夜に薬飲ませたら私も休むわよ。美鈴、あなたもね」

2人はそう言つて、咲夜の眠る部屋へと出て行つた。

確か、パチユリーは体質的に体力があまりなかったはず。

それなのに朝からずっと魔法を使い続けていた。美鈴も美鈴で朝から気の力をずつと使っていた。

彼女達も霊夢や文に負けないくらい、彼の事を強く想っているのが良く分かる。

「本当に、不思議な人ね彼は」

「ああ、全くだ。一先ず霊夢を部屋へ運ぼうか。手伝ってくれ、妹紅」

ユウキ君。君にはこんなな思ってくれる彼女達がいるんだ。

早く元気になって、戻ってきてくれ。

続く

第62話 「私闘」

目の前には西行妖が張った空間をゆがませる結界。

さて、まずは咲夜の力でこれを突破するか。

「や、やめな、さいっ！」

背後で咲夜が何か叫んでいるが、無視した。

咲夜の時を操る能力を応用させて、空間の歪みを元に戻す。

「……邪魔」

右手で結界を打ち払う。

結界は風船が割れたように弾け飛んだ。

——プシュッ

と、同時に頭の血管が切れる音がした。

限界を越えて使えばこうなるのは当然か。

俺の幻想支配は本人が出来ない事は出来ない。

今回の場合、咲夜の能力なら確かに結界は破れるけど、肉体にかなり反動が来る。

多分、咲夜がこれ使ったら死んでいたかもな。

だけど、これで終わりじゃない。だから、この程度の傷、痛くもなんともない。

「ユ、ユウキさん!？」

霊夢が駆け寄ろうとしていたので、手で制した。

これくらいじゃ俺は倒れない。

箒と八卦炉を空中に放り投げ、次の力を使う。

魔理沙の魔力を全身に滾らせ、箒の穂先に八卦炉を付けるとその上に飛び乗った。

「ブレイジングスター」

ブースターとなった八卦炉が火を噴き、一気に最大加速する。

前のブレイジングスターなら真後ろが死角になっていたけれど、これなら八卦炉の火が攻防一体のブーストとなり背後からは狙えなくなった。

良い改良をしたな、魔理沙。

——ウオン!

西行妖も黙って俺の接近を許すはずがなかった。

今までよりもっと濃い弾幕を放ってきた。

流石にこの威力の弾幕はブレイジングスターも突き破ってくる。

「はあっ!」

両腰の刀を抜き、魔理沙の魔力を通して強化する。

そして、その2本で弾幕を切り裂きながら進む。

刀を使うのは久々だったけれど、問題は無い。

だけど、流石にこの物量の弾幕を全部かわしたり打ち払うのは無理だ。

弾幕が少しずつ身体を掠めて良く。

それでも俺は西行妖の周りを飛びながら、幽々子に斬りかかる機会を窺った。

「いや、ダメだ。このままじゃ斬れない」

これは直感。今白楼剣で斬っても、幽々子と西行妖の繋がりを断つ事は出来ない。

それほどまでに幽々子は西行妖に浸食されている。

ならばどうする？ どうすれば幽々子を助けられる？

俺は妖夢に任せると言った。それにあんなのを見せられたら、助けないわけにはいかない。

「おい、こらー！ そののねぼすけ亡霊！ とつとと起きろ！ お前を呼ぶ妖夢や紫の声
が聞こえないのか!？」

俺が幽々子に呼びかけると、西行妖の攻撃が激しくなった。

どうやら呼びかけは効果的らしいな。

「目を覚まして下さい、幽々子様！ そんな妖に呑みこまれる幽々子様じゃないはず
す！」

「幽々子！ あんた西行妖に生前も死後も良いようにやられていいの!? そんなに諦めのいい性格じゃなかったはずよ！」

傷付いた身体をおして、妖夢が幽々子に叫んだ。

驚いたのが紫も大声で幽々子に呼びかけていた事だ。

紫と幽々子は知り合いのようだけど、あんなに必死な表情を見るのは初めてだ。

よっぽどの大親友だったのだろうか？

そんな事より、西行妖に沈みかかっていた幽々子が浮かんできた。

あと少しもうひと押しで白楼剣で斬れるはずだ。

「幽々子、妖夢があれだけ無理をしているのに、主のお前が根性見せないでどうするんだ!? とつとつと目を覚ませ！」

弾幕をかくぐり、ダメ押しとばかりに目覚めの一発を幽々子の顔面にお見舞いた。

「ゆ、幽々子様!」「幽々子!」

それがきっかけになったのか、それとも妖夢と紫の言葉が聞いたのか、今まで無反応だった幽々子からはつきりと声が聞こえた。

「ゆかり……よう、む……」

声だけじゃない。うつすらと幽々子の瞳が開いている。

意識もわずかだがあるようだ。

「今だっ！」

これを逃したら後がない。

残った魔力で垂直に飛び上がり、即座に妖夢の力に切り替え腰に差した白楼剣に手をかけた。

もう箒を操る事が出来ないけど、それよりも白楼剣に霊力を溜める方が先決だ。

「はああああ〜〜!!」

勢いよく箒を蹴り、幽々子に向けて飛び降りる。

そうはさせないと西行妖も弾幕を撃ってくる。

「てめえの殺す為の攻撃なんか、面白くもなんともないんだよ！」

さつきまでのように自由に身体を動かしてかわす事はできないけど、少しだけなら空中でも姿勢を変えられる。

弾幕ではかわされると判断したのか、西行妖はさつき俺が食らった極大の光線を放とうとした。

流石にこの体勢でアレはかわせない。楼観剣で切り裂くか？

「させるか！」

と思つたら、魔理沙が箒を操り俺を乗せて運んでくれた。

おかげで光線は間一髪かわす事が出来た。

全く、残り少ない魔力で無茶をする……ま、俺が言えた事じゃないか。

「さんきゅ、魔理沙。うおおお〜!!」

幽々子の正面に周ったところで箒を再度蹴り、西行妖へ突っ込む。

妖夢の靈力に呼応した白楼剣の導くがままに刃を振う。

狙うは西行妖と幽々子の繋がりで。

「幽々子様!」

狙い通り、西行妖にヒビが入り大きく裂け、中から幽々子が落ちてきた。

「紫!」

「分かっているわ!」

スキマ一回分くらいなら妖力が回復していると踏んで、紫に幽々子を任せただけ、大

丈夫だったようだ。

幽々子があつちに任せて、俺は次の狙いへ向けて力を使う。

右腰に差した楼観剣を抜き、妖夢の靈力を籠める。

この楼観剣は妖力を集中させて巨大な刃を作る奥義があるが、妖力の刃じや西行妖には通じない。

なので妖夢の靈力を使う事にした。

「はあ〜」

次の狙いは、西行妖の弱体化と春の光の解放だ。

幽々子を解放したとはいえ、西行妖はさほど弱体化したようには見えない。

恐らくほぼ封印が解けた事で、幽々子の力はもう必要なくなっていたのだろう。

このままじゃ霊夢でも封印出来ない。

いや、仮に封印出来たと言っても溜めこんだ春の光までそのまま封印してしまう。

それでは意味がない。

「い、いけない！ それ以上力を使えば、体が！」

妖夢が忠告してくるけど、そんなの聞いていられない。

コレを使えばどうなるかくらい、俺にも分かっている。

「迷津慈航斬・霊！」

巨大な蒼い霊力の刃を西行妖に振り下ろす。

流石にコピーした妖夢の全霊力を使ってもなかなか削れない。

少しずつ刃が食いこんで行くが、それと同時に俺の身体が反動で傷付いて行く。

両腕が使いものにならなくなりかけているけど、もう少しだけ耐えてくれ。

「ユウキさん、もういい。もう、離れて!!」

霊夢が何か叫んだが、もうあまり聞こえてこなくなつた。

そして、妖夢の霊力を通して西行妖の妖力に一本の筋道が見えた、ここが斬れ目だ！
「おらあー！」

その筋道にそって刀を力任せに一気に振り下ろす。

すると西行妖が纏っていた禍々しく赤紫色の妖力が大きく斬れた。

と、同時に俺の左腕が裂けた。これはもう使い物にならないな。

フランの時以上に重傷だけど、これでまだ終わりじゃない。

「まだ、まだあー！」

再度魔理沙を視て魔力をコピーし直した。

もう両脚にも力が入らない。

ひざから崩れ落ちそうになりながらも何とか堪えて、右手に箒と八卦炉を引きよせた。

さっきのブレイジングスターのように箒の穂先に八卦炉をくつつけ、そのまま西行妖の裂け目に突っ込ませる。

「ま、まて、それは……その魔法は使うなあー！」

「ファイナル・スパーク！」

自身の魔力と生命力の全てを一気に放出する、マスタースパーク以上の火力を誇る魔理沙の最大魔法、ファイナルスパーク。

本人としては未完成で封印していた魔法なんだろうけど、今のこの状況にはコレを使うしかない。

——ウツ、ウオオオーン！

「苦しいか？ 地獄へは俺も付き合ってやるよ……」

西行妖が苦しそうに断末魔のような叫びをあげると、一面に咲いていた赤紫色の花弁が一斉に四方八方へと吹き飛んだ。

同時に俺のポケットに仕舞っていた巾着の中から春の光と一緒に飛び出していった。

「……これで、幻想郷に春が戻る。後は頼んだぜ、霊夢」

直後、西行妖で爆発が起こり俺は吹き飛ばされ、そこで意識が途切れた。

次に意識が戻った時、辺り一面が薄い霧で囲まれた川辺にいた。

「あ、あれ？ ここはどこだ？ 霧の湖……じゃないな」

ゆっくりと辺りを見渡してみたが、見た事もないような景色だった。

次に身体の具合を確かめたが、これもまた不思議で全身に傷が無いどころか服も着ていた。

「俺は西行妖の爆発に巻き込まれて……死んだのか？」

「半分はそうだね」

「っ!? 誰だ!?!」

独り言を呟くと、すぐ後ろで声と人の気配がした。

ふり返ったけど、誰もいなかった。

プリズムリバー達のように幽霊かと思ったけど、確かに今感じたのは人の気配だった。

「ハッ!」だよ、ハッ!」

続けて声のした方を向くと、歪な形をした大鎌を担いだ赤髪ツインテールの女性が立っていた。

身長は割と高めだが、それより何より胸元を強調させる服装は……火織みたいなただの痴女か。

当麻が喜びそうな格好はしているな。

「やつ、はじめましてだね。私の名は小野塚小町、見ての通りの……「変態痴女」 そうそう、露出が高いのは私の趣味……って勝手に人を変態呼ばわりしないでくれないかい!?!」

「今自分でその服装は趣味って言ったじゃないか」

「お前さんに乗せられただけだよ! 私に至ってノーマルただのしがない死神だよ!

これ見て分かんないのかい!?!」

「随分と、使いにくそうな鍬だなあーと思ったけど」

「いやいや、これで慣れると案外耕しやすなんだよ……つてだから違う！ どっからどう見てもこれは鎌にしか見えないうらう！」

うん、魔理沙並にノリやすい性格だな。

「はあ、はあ……全く、変わり者だとは知っていたけど、初対面でこんなに疲れさせられるとは思わなかった」

「うん、俺も目が覚めたら痴女死神がお出迎えしてくれるとは思わなかった」

「痴女は余計だつて！ で、お前さん私が死神と分かってて、やけに冷静だね？ 普通は自分の状況とかにパニック起こさないかい？」

痴……小町に言われて自分の状況を再確認してみる。

手足は普通に動かし、古傷痕はあるけれどそれ以外の外傷は身体にない。

強いて言えば、身体がふわふわした感じがする。

それがおかしいと言われればおかしいけれど、別に騒ぐような事じゃないな。

「はあく……お前さんは今死にかけの状態で、肉体は博麗神社にある。今ここにいるのは魂だけつて事さ」

「なるほど、死にかけ？ 死んでないのか？」

てつきり死んだと思っただけだな。

ファイナルスパークの反動で右手の骨がいかれて、それから爆発に巻き込まれたんだし。

「まだ、死んでないよ。今紅魔館の魔女と門番、それに人形遣いたちが必死でお前さんを治療中さ」

そっか、パチュリーや美鈴達が俺を治療してくれているのか、これで2回目だな。

それでもほとんど助かる見込みなさそうだな……なら、早く死んだ方が彼女達も楽になると思うんだけど、自分の事とは言え、どうにもならないか。

「それともう一つ、私は確かに死神だけど、お迎えは専門外さ。三途の河の船頭をやっているよ。だからと言って、お前さんを運ぶためにここにいるわけじゃない」

「三途の河……つまりここは死後の世界の入り口って事か」

「死後の世界の入り口でもあるけれど、あっちに行けばそのまま幻想郷へと行けるよ」

小町が指さした先には、霧が晴れて見通しのいい道が続いているのが見えた。

「幻想郷と地続きか、まあ、冥界にも生きたまま行けたし流星は幻想郷、何でも有だな」
もう何があっても驚かないかも。

「ん？ なら小町はここで何をしているんだ？」

てつきり死んだ俺のお出迎えかと思っただが、違うようだし。

かと言って死にかけて、今にも死んじやいそうな俺に何の用だ？

「お前さんと話すとは疲れるが、なかなか楽しそうでもある。けど、今回用があるのは私じゃない。私は彼女の立会人さ」

小町が言うのと、どこからともなく砂利を踏む音が聞こえてきた。

——ジャリ、ジャリ

「待たせたね、小町。彼が思ったより早くここに来たみたいで、ちよつと驚いたよ」

「あーそれは確かに。私ももう少し先かなーとは思ってたけどねえ」

小町に親しげに話しかけながら霧の中から現れたのは、霊夢と似た巫女服を着た女性。

顔つきや髪が霊夢に似ているけど、目付きが鋭くかなり違う。

霊夢と同じく脇が露出しているが、黒いアンダーウェアを巫女服の下に着込んでいる点と、長く黒い髪をリボンで止めてない点が違う。

それより何より身に纏うオーラと言うか雰囲気がるで違う。

霊夢は少女な感じがしたが、この女性は違う。

洗練された大人の女性がかもしだつて気配だ。

年齢は特に読めないが、そこまで年上と言う感じはしない……霊夢の姉か親戚のお姉さんくらいか？

確かに気配は人間だけれど、この感覚は火織やアツクアに初めて相対した時、いや、そ

れ以上の威圧感があるかもしれない。

でも三途の河原で会うなんて、幽霊？ ではないな。ちゃんと彼女は生きている。

「初めまして、ユウキ君。まずは礼を言わせてくれ、西行妖の一件本当にありがとう。彼女達を救ってくれて感謝する」

「あ、いや、俺はただリリーホワイトに頼まれた仕事を果たしただけだ。あんたは霊夢や紫の知り合いか？」

「ふふっ、さて、どうだろうな？ のんびり自己紹介と雑談と行きたいところだけど、どうやら時間がないようだから……用件だけ済ませよう、か！」

言うが早いか、離れた場所にいた巫女が、次の瞬間には目の前にいて拳を打ち込んできていた。

「っ!？」

驚きはしたけど、避ける必要がないとすぐに分かった。

拳は俺の目の前で寸止めされていた。

「ふむ、避けないのかい？」

「当てる気がないと分かったからな。あそこから一気に距離を詰められるとは思わなかったけど」

少し強がって見た。仮に反応出来たとしても、あのタイミングではかわすのも受け止

めるのも難しい。

確かにこの巫女は人間だ。だけど、下手をすれば美鈴よりも強いかもしれない。

「おいおい。いきなり物騒な事するねえ、あんたも。まあ、時間がないのは分かるけど
ッ」

「あははは。いや、でも避けようとしなかったのは、かなり意外だったよ」

この巫女も小町も何が時間がないと言うのだろうか？

俺がもうすぐ死ぬって事か？

「で、名乗りもせずにいきなりこんな事をしてきた理由は？」

「理由は簡単さ、君と拳を突き合わせてみたくなつてね」

コイツも美鈴や幽香と同じくバトルマニアか？

「俺が受ける理由はないと思うけど？」

「理由ならあるさ。私を倒さなければ、君は生き返れない」

「……はあ」

これはあれか？ リリカと同じく特撮ごっこか？

「随分と間の抜けた返事をするもんだね。ま、今のは冗談さ。特に意味はない。ただ、今
回くらいしか機会がなさそうだったからね。話をしてからやろうとかと思つたけど、
こつちの方が早い。どうだい？ 私の挑戦、受けてくれるかい？」

「はあ……よくわからないけど、まあ、いいか」

受ける理由も断る理由もないし。せっかくだから冥土の土産にするか……冥土の土産とは言わないか。

「ありがとう。では、行くぞ！」

巫女はペコリと頭を下げ、瞬時に貫手を放ってきた。

「くっっ！」

どうにか顔を傾けてかわせたが、彼女の攻撃はそれで止まらず次々と貫手を放ってきた。

この貫手1つ1つがまるで鋭いナイフのようだ。木にすら貫きそうだな。

「ちっっ！」

「どうしたんだい？　かわしているばかりじゃつまらないだろう？」

反撃の隙がなかなか見えない。でも……

「たしかにこのままじゃつまらないな」

「むっ？　うおっ!？」

貫手を見切り、右手で掴むように受け止めそのまま反動を利用して投げ飛ばした。

「ははっ、そうこうなくてはな。じゃあ、次はこれだ！」

巫女は次に腰を深く構え、手のひらを突き出し掌底を繰り出してきた。

とっさに両手を交差させガードしようとしたが、頭の中で警鐘が鳴り響いた。
「やばっ!？」

何とか身体を捻り、その一撃をかわした。

——ボンッ

彼女の一撃はそのまま空を切った。いや、空を弾いたと言うべきだろうか。

「あのままだったらガードごと腕持っていかれたかもな」

あの巫女、とんでもなく強い。

彼女の攻撃はかわすか受け流すだけにして、受け止めるのは選択肢から外した方がよさそうだ。

「……君は打って来ないのかい？」

「お望みとあらば!」

右の拳を強く握り、彼女の脇腹を狙ったボディブローを打った。

しかし、彼女は簡単に左手で払いのけた。

ならばと左手で顎をアッパで打ち上げようとしたが、彼女は右手で掴まれた。

「思ってたより良い攻撃だ」

「そりゃ、どうも!」

右の膝蹴りを放つ。これも彼女は左手で払いのけ、両手で掌底を放ってきた。

このタイミングではかわせない。

「ならばー！」

こつちも両拳を強く握り、彼女の掌底に合わすように突き出す。

——ドンッ

拳と掌がぶつかり、辺り一面に打撃音が鳴り響いた。

何とか威力を相殺出来たけど、少し拳が痛い。

彼女はここで一端離れ、両手を軽く振った。

「いい、いいぞ。私も数多くの妖怪と戦ってきたが、君ほど手ごたえのある相手はなかなかいなかった」

「そりゃ、どうも。でも、俺より強い奴なんざ幻想郷にごろごろいるぞ？」
彼女と同時に駆け出す。

いつかの美鈴と戦った時のように両脚を交互に蹴り合った。

「ふっ、はっ、オリヤ！」

「やっ、ほっ、せいっ！」

最初は上段蹴り、続けて中段、最後は互いに距離を置いてからの飛び蹴り。

結果は互角。互いの蹴りが交差し、反動で吹き飛ばされた。

「驚いたな。君、本当に人間かい？」

「その言葉、そっくりそのまま返すぜ！ あんたこそ人間かよ？」

「ふふつ、そう言われたのも久々だな」

それからはただ黙つての打ち合いになった。

俺の右拳を彼女が左手で払いそのまま右の手刀を放てば、俺は手刀を同じ手刀で受け止める。

反撃とばかりに回し蹴りを放ったが、地に深く沈みこれかわし逆に蹴りあげてきた。

顔を反らす事がかわずと、彼女は地面に手を付きそのまま連続蹴りを放ってきた。

後ろに大きく飛び跳ねる事かわし、腰を深く入れ右手を沈めた。

彼女も同じような動作で右手を構え、同時に駆け出した。

「はっー」「やあー！」

俺と彼女、2人が放った正拳突きは互いの顔の寸前で急停止した。

「はい、そこまで。白熱している所悪いけど、時間切れだよ」

どうやら俺と彼女の動きを止めたのは小町のようだ。

「むつ、もうそんな時間になつてしまったか……残念だ」

それにしても時間切れとはどういう事だろ？

「なあ、さつきから時間時間って一体何の時間だ？」

「答えはお前さん自身の身体にあるよ。ほれ見てみな」

小町に言われて、自分の身体を見渡してみると、薄く輝きだしているのが分かった。

「これは、一体……ああ、もう死ぬのか」

それを聞いて小町と巫女は怪訝な顔をして、そして、笑いだした。

「ふふふつ、君は勘違いをしているぞ？」

「そうそう。言つたろ、お前さんは治療中だつて。どうやらそれが成功したみたいだ。もうすぐここに居る魂は肉体に戻る。そうすればお前さんは目を覚ますさ。今度こそ本当にな」

そうか、何か暖かいものに包まれている感じがしたけど、これで俺は生き返るのか。

いや、死んでないから生き返るのはまた違うか。

「そつか、じゃあな小町、色々世話になった。その巫女さん、最後まで相手出来ずに悪かったな。また今度機会があればな」

そう言うのと、巫女は少しだけ哀しい顔をした。

「残念だけど、君とはもう会う事はないだろう」

「えっ？　なんでだ？　まさか、お前は亡霊？」

そんな心配はしなかったのに。

「ははっ、さて、どうだろうな？ それじゃあ元気だな、今回の件は本当に感謝しているが、あまりあんな無茶はしないでくれよ？」

「……善処する」

無茶をしない約束は出来ないけどな。

「私はまた幻想郷で会えるから、そんなときはまた話そう。それまでこつちに来るんじゃないよー？」

「ははっ、どうなるか分からないけど、こつちに来る事になったら世話になるよ」

小町の言葉に苦笑いを浮かべて返事をした途端、目の前がまた真っ白になった。

「ふーどうやら無事に蘇生出来たようだね」

「ああ、良かった……これであの娘達が悲しまずに済む」

「そう思うなら、せめてあの娘達をよろしく頼む。くらい言っても良かったんじゃないのかい？ 認めたんだろ、彼の事」

「ユウキ君の事は今回の手合わせで大体分かった。でも、その言葉は言えないよ。それは彼には逆効果だ。それにそんな事言わなくても、大丈夫さ」

彼女はまた寂しそうに笑った。

「そう言えば、小町。君はちゃんと彼に礼を言ったのかな？ 西行妖の一件は、君らにも

関わってた最重要案件のはずだっただろう？」

「……あつ、忘れてた」

不味い。彼女が礼を言ったけど、私は言っていない……最初に言うはずだったのに、変にからかわれて忘れちゃってた。

「やばい……四季様に怒られる」

何だろう、少し寒気がしてきたね。

「もう手遅れだな」

「こゝまゝちゝ！」

「きゃんー！」

突然背後から誰かに思いつきり叩かれた。

私にこんな事出来るなんて四季様しかないんだけどね。

「全くあなたと来たら、人間にからかわれたくらいで大事な礼を忘れるだなんて、たるんでる証拠です！」

やつぱり、私を背後から叩いたのは上司であり、閻魔大王である四季映姫・ヤマザナドゥ様。

「いや、ですけど、初対面でいきなりあんな事言われたら……」

「そもそも、あなたがそんな恰好をしているからいけないんです！」

そんな恰好、つて一応これ死神の仕事着なんだけどなあ。

「む、無茶言わないでくださいよ四季様。これが一番私に合ったサイズなんですよ？
文句はデザインした係に言ってくださいよ」

と言つても、胸元が開けているわけでもなく本当に普通の着物なんだけどねえ。

「黙りなさい。人のせいにするとは何事ですか！ 大体、あなたの胸がそんなに大きいのがいけないんです！ 全く、死神でそんなに胸が大きな者はあなたくらいですよ!」
「そんなあ、私以外にも胸大きい沢山いるじゃないですか、ほら、例の亡霊姫だつて、スキマ妖怪だつて……あつ」

これは、地雷を踏んじやつたかな。

四季様、身長割に胸がないと思つているからなあ。

でも、私から見れば普通サイズだと思つけどなあ。

巫女に助けを求めるように視線を送ると、ひらりと目をそらされた。

あ、そうか。彼女も私くらい大きいからとぼつちりを受けないようにしてるんだな、
こんちくしよく薄情者！

「ほ、ほほう、それはつまりあなた周りには胸が大きい者が多くて、私みたいなのが少数派だと言う事ですか」

「い、いえいえいえいえ、そんな事はありませんし、言つてもいないし、思つてもいない

ですよ!」　そもそも、四季様胸小さくないじゃないですか!」

「ふむ、良い度胸ですね。そこら辺あなたがどう思っているかじつくりと聞かせていただきますま…「あ、あのー?」…なんですか巨乳巫女!」

これは、巫女が助け舟を出してくれたのか!?

さつきは薄情者と言つてごめんよ。

「すみませんけど、私もそろそろ時間なので失礼します。」

「あ、そうですね。申し訳ありませんでした。では、最後に…彼の事はどうでしたか?

何か掴めましたか?」

そうだった。忘れてたわけじゃないけど、巫女がここにいる理由、彼と戦った理由がちゃんとあつたんだった。

「彼は、悪人とも善人とも判別はしにくいですね。しかも、本人はそれを強く自覚しています。ですが、霊夢達は彼のおかげで良い影響を受けているのは確かですね。言葉に言い表せない物を秘めているのは間違いないです」

「そうですか、貴方が言うのならばそうなのでしようね」

「後は、彼の心の奥底に感じたものがあります」

「ほう、それはなんですか?」

「拳を突き合わせた時に分かったのですが、彼の心の奥底に彼自身も気付いていない程

の底にわずかに見えたのは……【無】でした」

そう言い残して、巫女は去って行った。

それにしても 【無】か、私もそこまでは気付けなかった、流石は先代巫女。

「ところで四季様、そこまで彼の事が気にかかるなら直接会えば良かったじゃないですか？ 仕事そこまで立てこんではいけないでしょう？」

「……小町、正直に言ってお下さい。彼女は彼から 【無】を感じ取りましたが、あなたは何か感じる物はありませんか？」

そういう四季様の目は普段以上に真剣だった。

裁判の時でも滅多にこんな目をした事はない。

しかし、つい最近こんな目をした事はあった。

それは西行妖の封印が解けかけていると分かった時だった。

結局、私達ですら手を出せない中、ユウキ君が霊夢達と協力してどうにか抑える事が出来た。

「四季様、私も巫女と似た感じですね。善人とも悪人とも違う、自殺志願者でもなければ命知らずでもない。形容しがたい性格、ではありません」

そう言う所を四季様は警戒しているのだろうか？

「そうですか、あなたでも気付きませんでしたか……」

「?? 一体四季様は彼の何をそんなに警戒しているのですか？」

「彼は、西行妖以上に危険な存在である事、それを覚えておいてください」

四季様は決して冗談で言っているわけではない。

本気で、ユウキ君を西行妖以上に危険視している。

「それは、幻想支配の事を言っているのですか？ 私や四季様の力も使えるようになれば……」

「いえ、違います。確かに幻想支配は強力ですが、八雲紫が監視にとどまっている以上、危険は少ないでしょう。問題は彼自身の……いえ、今はまだ言えません。さあ、仕事に戻りますよ」

分からない。なぜ四季様ははっきりと言わずに言い淀んだのだろうか。

私はさつきまでそこにいたユウキ君の事を思い浮かべた。

とても四季様が警戒するような人間には見えなかった。

彼は、幻想郷に何をもたらすと言うのだろうか？

続く

第63話 「目覚め」

誰かに呼ばれた気がした。

それが誰か思い出せず、必死で思い出そうとして……目が開いた。

「……(ハ)は」

最初は自分が寝かされている事すら気付かず、頭だけを動かして辺りを見渡してようやく布団の中で眠っていた事に気付いた。

外から流れる空気が今までと違って暖かい。

どうやら幻想郷の長い冬もやっと終わったようだ。

「つて事はここは博麗神社、か」

やがてここが博麗神社の自室である事に気が付き、起き上がろうとしたが身体が動かせなかった。

かろうじて頭が少しあがる程度で、首から下は全く動かせない。

「参ったなあ。流石にここまでは初めてだな」

フランの時みたたく頭痛がないだけマシかと思つたが、全身が動かせないのだから今までで一番ヒドイ。

両手足は付いている感覚はあるが、まともに付いているのかもさっぱりだ。

そこで自分が西行妖にした無茶の数々が頭に浮かび、生きているのが不思議だと感じた。

「うーん、五体がまともに動かせないのは流石に初めてだな。骨が折れてるのかすら分からない」

死にかけた事は何度かあったけど、今回はその中でも1、2位を争うくらい瀕死の重傷だったって事か。

三途の河での出来事も覚えているし、あれが夢でない事も分かる。

俺は……まだ生きている。

「……そっか、生きているのか、俺」

「そうよ。生きているわよあなた」

何となく口にしてみただけだけど、誰かに聞かれているとは思わなかった。

声のした方に顔を向けると、そこに立っていたのはパチュリーだった。

相変わらず三白眼な目でこつちを見下ろしてるけど、その口元は僅かに微笑んでいるようだった。

「パチュリー、あれからどうなった？ 霊夢や咲夜達は？ 西行妖は？」

そう聞くとパチュリーはあからさまに大きな溜息をついて、俺を睨んだ。

そしてなぜか小声で話すように言ってきた。

まあ、見た所早朝のようだから、大声出すと霊夢を起こしちゃうだろうからな。

「最初に知りたい事がそれなのね。本当にどうしようもないわね、あなた。まあいいわ、まず今日で異変が解決してから丸一週間たったわ。西行妖は霊夢によつて封印されてもう解ける事はないわ。と、同時に幻想郷の冬も終わつたわ。と言つても雪が解け切つてないから本格的な春はもう少し先になるそうよ」

仕方ないな、異変解決の時も猛吹雪に見まわれたし、あれだけの雪が数日で全部溶けるわけがない。

それでも春の日差しと風になったのは分かる。

「で、みんなの状況だけど、一番ひどかったのは勿論あなた、手足は引きちぎれかけてて内臓もボロボロ、9割9分死んでいたわ。次に酷かったのが妖夢と咲夜ね。2人共手足をどこかしら折っていたし。で、魔理沙は軽傷、霊夢、紫、藍は無傷。だけど、全員が力の全てを使いきつていて消耗が激しかったわ」

咲夜と妖夢が酷かったのか……霊夢が庇つたとはいえ西行妖の攻撃を受けたからな。

ん？ 丸一週間しか経ってない？ 俺は瀕死の重傷だったのに？

「パチュリー、俺の怪我経つた一週間でよくなったのか？」

身体は動かせないけれど、どこにも傷を負っている感覚はない。

フランの時でさえ目を覚ましたら傷はかなり残っていて、完治に数日かかった。今回はあの時より重傷なのに、何かおかしい

「ああ、その事ね。あなたの怪我は私とアリスが回復魔法かけたけど、あまり効果がなかったのよ。命が助かったのは妹紅が知り合いから貰った薬のおかげよ。その薬のおかげで咲夜も完治したわ。後で礼を言っておきなさい」

「妹紅が？ そっか……パチュリーもありがとな。マフラーの件もだし、今回だけで2回も助けられた」

「べ、別に良いわよ。あなたが死ぬとレミィや妹様、紅魔館のみんなが悲しむから、助けただけよ……私だって、あなたに死んでほしくないし」

頬を赤くして言うパチュリーが何だか色っぽく感じたけど、言わない方がいいな。

俺の身体が動かないのは、その薬の後遺症と幻想支配の使いすぎが原因のようだ。

咲夜も薬を飲んで傷は治ったけど、丸一日布団から出られなかったらしい。

「で、聞きたい事は終わり？ 私からは色々と言いたい事はあるけれど、それは彼女達から言ってもらう事にするわ」

パチュリーが俺の身体を後ろから起こしてくれた。そして、指さした方を見ると布団に寄りかかるように眠る霊夢と文、そして、少し離れた部屋の隅で正座して眠っている咲夜がいた。

「3人共、まさかずつと？」

「3人だけじゃないわよ。アリスと魔理沙は別室で休んでるし、美鈴やこあも最近まで付きつきりだったわ。後は慧音や妹紅、チルノやら大妖精やら大勢が毎日来てたわよ」

「どうやら、宴会の時にいたメンバーが毎日お見舞いに来ていたようだ。」

「どうしてここまで大事になるかな。」

と、俺を支えていたパチュリーが後ろから抱きしめてきた。

「おわつ？ 何だよいきなり？」

「黙ってて、霊夢達が起きちゃうわ。少し……このままにさせなさい」

背中と後頭部に柔らかいのが当たってるんだけど、それを指摘するのは……止めてお

こうか。

「んぐつ……良かった。本当に、目を覚まして……」

後ろを振り向かずとも分かる。パチュリーは俺を抱きしめながら、泣いていた。

「最初に瀕死のあなたを見た時、頭が真っ白になったわ。回復魔法も効かなくて、段々あ

なたの命が消えていくのが分かって……でも私にはどうにもできなくて、死んじやうつ

て思ったら、とても怖くなったわ」

「パチュリー……」

「妹紅の薬で傷が治って一安心したけど、あなたは全然目を覚まさなくて……」

それからパチュリーは俺の頭を自分の膝へと乗せた。

これって膝枕と言うやつか？ 初めてで実感沸かないけど、枕よりも柔らかい……って当たり前か。

と味わったことのない感触に浸っていると、涙が俺の頬に落ちてきた。見上げると目を真っ赤にしたパチュリーが俺を見て、また泣いていた。

「本当に、えぐっ……ひうっ……良かった」

意識を右手に集中させて、どうにかその涙を拭いた。

ただ、誰かが泣いているのを放っておけなかった。

西行妖を倒そうとしたのも、妖夢が泣いているのを放っておけなかっただけだ。

「ユウ、キ……」

「ありがとな、パチュリー」

俺が改めて礼を言うと、パチュリーは初めて笑顔を見せてくれた。

その笑顔がとても眩しくて何だか頬が熱くなり、不意に顔をそむけると……

「……………」

障子の隙間から覗く小さな顔と目が合った。

こちらの様子を窺っていたのは、上海だった。

「……………シャンハイ」

とても小さな声だったが、その声は脳内に直接響くほど印象的な声だった。どうやら怒っているような恨んでいるようなそんな声。

「シャン、ハーン」

あ、今明らかにトーンと言うか声の出し方が変わった。

そして、上海はゆっくりと襖を閉めてどこかへ行ってしまった。

……きつとアリスに俺が目を覚ましたと「それだけ」を伝えに行つたに違いないな、うん！

「これはマズイ」

パチュリーは何だか顔が林檎のように赤くなつて、ブツブツ言ってるけど何言ってるか分からない。

とにかくトリップしているのだけは分かる。

足元に目を向けると、幸い霊夢達はまだ寝ているようだけど、いつ目が覚めるか分からない。

「パ、パチュリー？ そろそろ離れた方がお互いの為だと思ふぞ？」

「……はっ!? そそそそうね。そうしましょう。うん、それがいいわね」

パチュリーが今の状況を把握して慌てて立ちあがったので、俺は頭を床にぶつけてしまった。

「~~~~~!?!」

すぐにパチュリーが再度頭を持ってさすつてくれたけど、いきなりの事だし受け身も何もないので地味に痛い。

「あつ、大丈夫ユウキ?!」

「だ、大丈夫……」

パチュリーの声に何事かと霊夢達がようやく目を覚ました。

「朝からうるさいわねえ」

「う、うくん……何よ、パチュリー、ユウキさんがどうかした……つてユウキさん?!」

文はいつもと違った口調をしていたが、俺に目を向けカツ! と目を見開き飛びこんできた。

霊夢と咲夜も俺を驚いた表情で見てるけど、反応が遅れた。

「ユウキさん、ユウキさん、ユウキさん!!」

「むきゅつ?!」

「うごっ?!? ちよつ、文。落ちつけ……く、苦しい……」

パチュリーごと吹き飛ばされそうなくらい、猛烈に突っ込んできたな。

後ろでパチュリーが支えてくれてなかったら外までぶっ飛んだかもしれない。

いや、それよりも胸を押しつけてくるな! 後ろのパチュリーと合わせてトンでもな

い絵になつてゐるぞ!？」

「あ、文……いいから、離れて、くれ……む、胸に押しつぶされる……」

「いーえ、もう離さない、離しませんとも! ユウキさん、良かった……心配じだんですよっ!」

途中から文は涙声になり流石に罪悪感が湧いてきたけど、息が出来なくなつてきて命の危機もそれ以上だった。

「離れる、バ鴉!!」

「あやややっく!?」

次の瞬間、霊夢と咲夜が鬼のような形相で文を蹴り飛ばした。

そのまま襖をぶちやぶりそうだったが、咲夜が時を止めて襖を開けたようで文は無事にお空に帰つて行つた。

「あ、あははは……お、おはよう霊夢、咲夜。迷惑かけてごめんな」

「あ……お、おはよう、ユウキさん。迷惑だなんて、こつちこそ助けてもらった恩人だもの、ありがと……」

「……おはようございます。礼を言うのはこちらです。私達の代わりに戦つてくれたのですから」

俺が挨拶すると、2人は正氣に戻つたようでバツの悪そうになしながら、照れ臭そう

に顔をそらした。

咲夜はいつものように瀟洒に挨拶を返したつもりだろうけど、少し冷や汗が出てるぞ。

「2人共、朝から元気ねえ」

「う、うるさいわよ、パチュリーー！　大体ユウキさんが目を覚ましたなら、私達を起こしてと言ったでしょ！」

「そうですパチュリー様、私達が起きるまで一体何をしていたんですか？」

2人がジト目でパチュリーを睨む。

流石は霊夢と咲夜、勘が鋭い

「な、何をつて……し、診察に決まってるでしょ！　目を覚ましたからって完治には程遠いのよ。現にユウキは今身体を全く動かせないのよ」

「えっ、やっぱり薬の副作用？　それとも力の使い過ぎで？」

霊夢も咲夜も診察と言う事で誤魔化せたけど、全くの嘘じゃないしな。

「その両方ね」

「やはり、そうなのですか。私は丸一日で身体が戻りましたけれど、ユウキさんはどれくらいかかりそうですか？」

「大体最低でも1週間くらいは見た方がいいわね。それ以上かかるかもしれないわ」

一週間身体が満足に動かせないのか……

「長いな、身体がなまっちゃうぞ」

ぼつりとそう呟くと3人の表情が一変した。

「そういう問題じゃないわよ！ あなたどれだけ無茶したか忘れたの!? さつきも言っただけど本当に死にかけたのよ!？」

死にかけと言うより、三途の河に行ったなんて言ったらどんな顔するかな。

絶対に言えないな、そんなあからさまな地雷。

「1週間でも短いわよ！ と言うか、ユウキさんは完治するまで絶対安静、いい!？」

「は、はい」

思わず即答したけど、さつき文を蹴り飛ばした時以上の迫力だな、霊夢。

「霊夢の言う通りです！ 絶対に安静にしてください。私がしばらくここに残って家事をしますので、ご心配なく」

「えっ、なんで!？」

咲夜の言葉に霊夢やパチュリーが反対するかなーと思っただけど、霊夢もパチュリーも特に反応はない。

どうやら前もって話していたみたいだな。

「私1人じゃ、ユウキさんに付きつきりになるのは無理なもの。咲夜に居てもらった方

が色々助かるわ」

「レミイや妹様達も納得済みよ。と言うより、咲夜が言いだす前にレミイが言ったのよ。あ、私もここにいるわよ。咲夜よりは紅魔館に戻ったりはするけどね」

レミリア達まで承諾済か……って、パチュリーもかよ。

「当然、経過観察の為よ。誰かさんのおかげでこの100年図書館に籠って研究してた以上に、回復魔法の腕上がっちゃったしねー有効に使わないと」

霊夢じゃ包帯も満足に巻けないでしょうし。と付けくわえると霊夢が何か言いたそうにパチュリーを睨んだけど、押し黙ってしまった。

まあ、霊夢は昔から怪我や病気になった事ないから、看病なんて経験ないんだそうだ。

「よお、ユウキ目が覚めたんだな」

「おはよう、ユウキ。具合はどうかしら？」

そこへ魔理沙とアリスがやってきた。

上海はアリスの側に浮かんでいるけど、俺と視線を合わせようとしない。

何だかパチュリーを睨んでいる気もする。

「魔理沙、アリス、おはよう。2人にも迷惑かけた、ありがとう、それとごめん」

「礼はいらないぜ。むしろ、こっちが御礼を言わないとな」

そう言ううと魔理沙とアリスは揃って俺に頭を下げた。

「おいおい、何もそこまでしなくたって……」

「いや、これくらいじゃ全然足りないぜ。ユウキがいなかったら私達は死んでいた」

「そうね。話は聞いたけど、あなたが無茶をしなければ私も、いえ、幻想郷がどうなっていたか」

魔理沙とアリスを見て、霊夢達も姿勢を正し改まって俺にお辞儀をした。

「れ、霊夢達まで、止めてくれって。そこまでされる覚えはないぞ？ 逆に俺がそこまでしなきゃいけないのに」

身体が動いていれば、即座に土下座しただろうな。

「いいえ、ユウキさん。あなたは私の命を救ってくれたわ。それにあなたがいなければ西行妖を封印出来なかった。本来博麗の巫女である私がすべき事を、払うべき犠牲を……あなた一人に背負わせてしまった。ありがとう、そして、ごめんなさい」

普段の霊夢からは想像も出来ない程、凜とした振る舞い。

博麗の巫女として礼を言ったのだろうな。

「ユウキさん、申し訳ございませんでした。私はサポートをする為に付いて行ったはずなのに、結局何も出来ず逆に助けられてしまいました……このご恩、一生忘れはいたしませんわ」

「妹様の時も、今回もあなたは無茶ばかりしたわね。でも、その無茶をしなければ、もつ

と酷い事になっていたのは確実。だから幻想郷に住む者として、私はお礼を言いたいの。きつとレミイ達も同じ事をするわ」

か、身体がかゆくなってきた。

「だから止めろつて。咲夜は十分に俺のサポートしてくれたし、咲夜がいたから俺は能力を使つて霊夢を助けられたし、西行妖とも戦えたんだ」

そう、咲夜の時を操る能力がなければ、きつと霊夢は救えず、西行妖の結界は突破できなかつた。

まあ……流石に結界を破る時は力のキャパシティがすこーし足りなくて、無茶したけど。

「それにパチュリーはさつきも言つたけど、美鈴と作つてくれたマフラーのおかげで俺は助かつたんだ。だからパチュリーが礼を言う必要はないさ」

そうだ。俺が礼を言われる筋合いは、ない。

その時だった。部屋の片隅で空間に筋が入りスキマが開いた。

「ふふつ、まあ人の御礼は素直に受け取る物よ。おはよう、ユウキさん」

「おはよう、ユウキ君。礼を受け取らないとは君らしいと言え、らしいな」

そこから出てきたのは紫と藍。

「おはよう、藍、それと紫。どうやら妖力は完全に戻つたようだな」

「おかげさまでね。あなたが魔理沙の砲撃で春の光と一緒に、溜めこんだ私達の妖力を解放してくれた時に、ってどうして私よりも藍に先に挨拶したのかしら？」

「人徳の違いだろ。今回の異変の元凶の件もだけど、お前が橙の猫達にしかした事覚えてるしな」

そう言えばそうね。と霊夢と咲夜は思い出したかのように紫を睨んだ

「……意外と細かいわね」

扇子で口元を覆って誤魔化そうとしたけど、流星にマヨヒガの一件は悪いと思ってるみたいだな。

藍も紫を睨んでるし。でもすぐにこっちに向き直った。

「君には本当に感謝している。幻想郷も幽々子様も助けてくれてありがとう。ここには来れない妖夢に代わって、礼を言わせてくれ」

「だーかーらー礼なんかいらなくての。そう言えば、妖夢と幽々子はどうしたんだ？」
「幽々子も妖夢もまだ寝ているわ。幽々子は消耗が激しいし、来たがっていたけれど妖夢は怪我がまだ治っていないから安静にさせてるわ」

俺や咲夜を治した薬を妖夢は受け取らなかつたらしい。

自戒の為にコレは自然治癒に任せると言ったようだ。

「で、その報告か？ それとも……俺を殺しに？」

俺の言葉に場の空気が変わった。

紫は目を細め、藍は困った顔をしている。

「どうして、そう思うのかしら？」

「……西行妖の一件で、俺の幻想支配がますます危険と判断したんだろ？ 本人が無意識にかけてる能力のリミッターを自由に外して限界以上に引き出せると分かったから」

俺の言葉に紫から殺意と敵意が増したのが分かった。

それを見て霊夢や咲夜、パチュリー達も戦闘態勢になっている。

襖の向こうからはいつ戻ってきたのか、文の気配もする。

「……そう怖い顔しないで頂きたいわ。その天狗も入ってらっしゃいな」

紫が指を動かすと襖が独りでに開き、怖い顔をした文が手に持った扇を紫に向けている。

「あなたは信用できません。異変に関わるなど警告された時は素直に聞きましたが、もしユウキさんを殺すならば……私は容赦しません」

「私も同じよ。あんたが警戒を強めた理由は分かるけれど、だからと言って同意すると思わないでね」

「もし、ユウキさんに害をなすならば……」

「紅魔館を敵に回すと思いなさい。これは紅魔館の総意でもあり、レミイからの伝言で

もあるわよ」

霊夢や咲夜達だけでなく、魔理沙とアリスもそれぞれの武器を構えている。

俺は警戒こそすれど、全く身体が動かさず幻想支配も使えないので何も出来ない。

「霊夢達はともかく、あなた達まで見抜いていただなんて意外ね」

「ユウキの事が心配なのも理由の一つだけど、お前の事も私とアリスがここに居る理由の一つだけ？」

「そう言う事よ。彼をむぎむぎと殺させはしないわ」

魔理沙やアリスの警戒の仕方を見ると、俺が寝ているこの1週間の間に紫は何度か俺を殺す機会を窺っていたのか？

「さっきは別に冗談で言ったわけじゃないけど、俺を殺す気ならわざわざ正面からは来ないよな？」

紫はそれを聞き、ゆっくりと口元から扇子を離し敵意と殺意を解いた。

霊夢達はまだ警戒しているけれど、それでも場の空気が少しは和らいだ。

「……あなた相手に回りくどい真似は逆効果になるわね。そうよ、あなたの言う通り、幻想支配の危険性が増してすぐにも排除しようと思ったわ。けれども、排除した時のリスクも幻想郷を滅ぼすくらい大きい事も事実。なので……まだしばらくは様子見をさせて頂くわ」

つまり現状維持つてわけか。

「それでも親友を救ってくれた恩義も感じているのよ？　不意打ちや暗殺もどきで排除するのは、流石に心が痛むわ」

「よく言うわ。どの口がほざくのよ」

吐き捨てるように言つた霊夢の言葉に、この場の全員が同意したと思う。

「ふふふつ、これ以上ここにしていると何されるか分からないから出直すわね。ユウキさん、西行妖と幽々子の事、心から礼を言うわ。感謝もしている。これだけは信じてね」

紫はそう言つてスキマの中へと消えていった。

続けて藍も俺達に頭を下げ、無言で付いて消えた。

やれやれ、これから何かある度にこう言う事が起きそうな気がするな。

別に、本当に俺の力がここでは危険だと言うなら、殺す事なんて構わないつてのに。

「紫様、本当に彼を殺す気があつたのですか？」

「そうね。7：3くらいで殺すつもりだったわ。霊夢や紅魔館の事は地底の連中の力を借りれば、抑えこめるでしょうし」

「……私には紫様が本当にユウキ君を殺せるとは思いません」

「あら、どうしてかしら？」

「西行妖に向かう彼を見ている時の紫様の表情を見れば、分かりますよ」

「……一体私がどんな表情をしたのかしら？」

「霊夢達は気付いていないようでしたが、紫様はひどく動揺していました……まるで二度と会えないと思っていた相手を偶然見かけたような顔をしていました」

「……それは本当なの、藍？」

「覚えていないのですか？」

「私も少し疲れているようね。藍、この話は終わりよ……あなたもこれ以上追及はしないように、これは命令よ」

「はい、分かりました、紫様」

続く

過去編Ⅱ

第64話 「木原」

8月10日 某所

俺は今非常に重たい足取りで、とある収容所の廊下を歩いている。

この廊下の先に、1人の女が待ちかまえていた。

「やーつと来たのか、随分と待ちくたびれたわね」

歪な形をした格子の先に体中に包帯が巻かれた女、テレステイナーナⅡ木原Ⅱライフラインがいた。

手錠も拘束もないが、右足と右手にギブスをはめている。

まあ、こういう姿にしたのは俺と美琴なんだけどな。

「随分会わない間に面白い格好してるな、顔芸の次はコスプレに目覚めたか？ 痛々しすぎて目も当てられないけどな」

「そういうあんたも随分と面白い顔つきになってきたわね。いえ、これは予定通りなのかしら？ 木原殺しのヒーローさん？」

「木原殺し、今回はその名の通りに出来なくて心底残念だ」

こっちの皮肉も涼しい顔で返してくる。

直接会うのは数年ぶりだったけど、やっぱりあのクソジジイの孫だけはあるな。

「木原勇騎、木原であって木原ではない木原。木原を殺せる要素として【ヒーロー】の属性を付与されてきた。こいつに殺された木原は10人以上。最近では幻想殺しとの接触によりその属性を更に強化させている……くつくくくつ、よくもまあこんなカイブツを育てたもんだな、屁視のババアは」

「ヒーローは殺しなんて手段を選ばないし、選択肢にも浮かばない奴の事を言うだろ。お前らが勝手に俺をそう呼んでいるだけだ」

そうだ。ヒーローと言うのは当麻みたいな奴の事を言うんだ。俺なんかじゃない。

「で、そのヒーローさんが今回私を殺す手段として選んだのが。レベル5第三位超電磁砲を取りこむって事？ あんなモルモット共をよくもまああそこまで使いこなしたもののね、流石は木原」

モルモット、か。確かにそうかもしれないけど、だけど……

「俺やお前みたいなクスよりはマシだろ？ それにそんなモルモットに負けたお前は、一体何だろうな？ 後、今回俺は柵から牡丹餅でお前を捕まえたんだ。取り込んだわけじゃないし、そもそもそういう考えが通じない世界の人間だぞ美琴達は？」

コイツを今回捕まえたのは運が良かった。

普通なら殺す事も捕まえる事も出来ないはずだった。

それが数週間前に起きた木山春生の元生徒を使った実験で乱雑解放事件なんてモノを引き起こした。

あげく美琴達とトラブルを起こしたばかりではなく、大げさに部隊を展開し駆動鎧まで出動させた事で俺が介入出来るようになった。

とはいえ俺は錬金術師とか言うフザケタ魔術師と戦ったばかりだったのに、面倒事起こしやがってこのババア。

「ふーん。暗闇の五月計画の被験者にもかなり気にかけてたようだし、まさかあんたが年下趣味だったとはねえ。これは傑作だ、あつはつはつはつ」

暗黒の五月計画、最愛と海鳥の事か。

別にそこまで気にかけてはいないけどな、海鳥は今何してるか知らないし。

「そんな趣味はねえよ。ただ俺の周りにいるのはろくでもないババアとジジイだけだからな。その反動だ」

ホント、裏側にはロクな大人いないからな。

「で、そろそろこんな所にきた本題を話したらどうなのかしら？」

「本題か、なら単刀直入に聞くぞ。木原幻生はどこにいる？」

その名を口にした途端、今までへらへら笑っていたテレスの顔つきが変わった。

「……あのジジイはお前が殺しただろうが？」

「いや、死んでなかった。確かに俺が殺したが……生きていた」

「へえ、死んで逃げるとは、流石にしぶといじゃねえか」

この反応。テレスはそこまで深くはしらないな。

実の祖父なのに随分と……ってそんな情を期待する方がおかしいか。

ま、コイツからアイツの情報を得られるとは思ってないけど。

「時間の無駄ってわけか」

「そういう事。じゃ今度はこつちの質問にも答えてもらおうか……ギブアンドテイク、

それくらいはわかるだろう？」

聞き入れる理由はないが聞いてやるか、コイツも誰かと話したいのだろうし。

「その哀れんだ目を止めろ！　ちつ、お前……あのレールガンをこつち側に引きこませないようにしてるな？」

「ああ、そうだ。美琴はレベル5の中で唯一こつち側を知らないからな。知らないまま
でいればいいさ」

操祈や軍覇も暗部の事知ってるけど、美琴は違う。

全く何も知らない。知らないなら、知らないままの方がいい。

勿論、レベル5である以上いずれは嫌でも知ってしまうだろうけど……まだいいはずだ。

「ぶっ、ふふっ、あーっはっはっはっはは！ こいつは傑作だ。お前のそういう甘さは相変わらずだなあ、勇騎？」

「安易に想像出来たリアクションどうも」

俺だつてこういう甘さを自覚してる。

「けどよお。お前だつて分かっているだろ？ 学園都市で生きるには闇に吞まれて無知なモルモットとして生きるか、闇に使つてぶっ壊すか、それしかねえんだよ！ それにもうあのモルモットは手遅れさ！」

それを聞いて今度は俺が笑う番だ。

「……ぶふっ、んくっ、ははっ……くくっ、あははははっ！」

「何がおかしい？」

「だ、だつてよ……くくっ、その、ドヤ顔で闇だなんて……はははっ、あーおかしいつたらねえな！」

心の底から笑つたのは久々な気がする。

よりにもよつてこんな奴が学園都市の闇を語るだなんてな。

「ふふっ……いい、いいか、学園都市の闇なんてのはな、てめえみたいな三流木原が語れる

ほど浅くはないぞ?」

「……何?」

「ましてや、ドヤ顔で……闇っ、キリッ! だなんて、お前何十年遅れの中二病だ?」

「言ってくれるじゃねえか、紛い物の木原の分際でえ!!」

さつきまで俺の言葉に無反応だったのに、これくらいの挑発に簡単に乗るようじゃやっぱ三流だなコイツは。

「勿論、俺だって学園都市の闇を分かっているわけじゃないさ。いや、俺だけじゃない、てめえも尼視のババアでさえも学園都市の闇だなんて全部理解しちやいない……だから、うかつに言葉にしななんだよ。この三下!」

「うぐっ……」

もうこいつと話す事はない。もう一つの用事を済ませて帰るか。

「てめえがそんな三下だから……こうなるんだよ」

俺は懐から小さいボールを出して、素早くテレスに向けて投げつける。

「つ!? なんだこりゃ? は、離れない!?! まさか、このクソガキ!」

テレスはとつさにボールを左手で掴んだが、それは間違い。

ボールはテレスの手にピツタリとくつついて離れない。

「お前、俺が何なのか、さつき自分で言ったのにもう忘れたのか? 俺は木原であつて木

原ではない木原、木原を殺す木原……昨日は美琴達の手前、本業はせずに捕えただけだけど……今は遠慮する必要あるか？」

「ちいっ！」

テレスは咄嗟に壁や天井に目を向けた。

やっぱどこに隠しカメラが付けられているか把握してたか。

「もう一つお前が忘れていている事がある。それは俺の得意分野、ハードではなく、ソフト開発。施設への侵入・暗殺・破壊工作に必要なスキルの特化、特にハッキングに関しては、そこいらの電気能力者以上だって事」

こここの監視カメラなんてとつくの昔にハッキングして俺の思うがまま。

警備員も監視員も席を外している。

つまり、ここで俺が何をしようが、すぐには外部に漏れない。

「クソガキイ！ てめえ、私を殺しに来たか！」

「俺が木原幻生の事を聞く為だけに、わざわざお前なんか会いに来ると思うか？ お前が本当の事しゃべるとはおもえねえし、精神操作対策もしてるだろうし」

幻生が生きていると話した時の反応を見れば、それで良かっただけだし。

「な？ お前の存在価値なんかないだろ？ むしろ目障りだし、殺せるうちにとつとと殺すに限るよな？ 俺がお前を殺せるわけないと安心しきって油断して、ばっかだよ

な」

「くそつ、このおー！」

さつきまでの余裕の表情とはうって変わって、汗をかきながら俺を睨んできている。左手に着いたボールを必死にはがそうと、格子や壁に叩きつけている。

殺す気ならもつと早くやっていただろうから、俺はテレスを殺せないと踏んでいたんだらうな。

「あーそういう事しない方が身のためだぞ？ 使えない右手でどーにかするしかないん

じゃないか？ ま、もう時間ないけど……じゃあなあ」

「お、おい！ まちやがれ、これを外せえ！」

涙目になりながら、それでも懇願するわけでもなく命令口調で叫ぶテレスに一瞬だけ目をむけ、俺はその場を後にした。

「クソガキつ、外せ、くそつ、やめろ、やめろおく!!!」

——ポンツ

後ろでテレスの絶叫と、間の抜けた音が聞こえ、辺り一面が急に静かになった。

「どれどれ。おおくこりや効果は抜群だったな！」

スマホを取り出しリアルタイムでの独房の映像を見ると、そこには涙を流して気が狂った顔をしたテレスティーナが白目をむいて失神しているのが映し出されていた。

その左手には可愛らしい兎の人形が飛び出たボールが握られている。

「この映像は後で尼視や他の木原に売りつけるか……あくあくあ、ホントに爆弾でふっ飛ばせたらなあ」

本気でテレスを殺す気でいたけど、止められた。

テレスはまだ利用価値があるからと言う事だけど、実際の理由は分からない。

だからせめてもの憂さ晴らしにと、わざわざ俺がきて根回ししてイタズラをしたと言わうわけだ。

少なくともテレスは学園都市の誰かに生かされてるって事、これで思い知らされただろうな。

それから、留置所を後にして隠れ家の1つに行き、昨日消耗した武器や弾薬の補充をしながらい息ついた。

備え付けのベッドに身を投げ出し、ここ数日の出来事を思い浮かべた。

「それにしても、アイツもう手遅れとか言ってたな。まだ何か美琴に仕掛けてるって事か？ うーん。ま、いいか」

別に何かやばそうな仕掛けだったら、その時にどうにかすればいいし。

俺がどうにかしなくても、美琴達なら何とかしそうだし。

「今はともかく……少し休むか」

一昨日は当麻と捨て犬……ステイルと一緒にアウレオルスと言う錬金術と戦い、昨日はテレスの駆動鎧部隊と戦った。

「アウレオルスとの戦いで幻想支配を使わなきゃ、昨日はもつと楽に行けたんだろうけどなあ」

まだ魔術を幻想支配で視る事には慣れていないので、昨日は使わずに戦わざるを得なかった。

最も、魔術を見たのはアウレオルスで2回目だからしようがない事だけだ。

「木原殺しの木原、か……」

俺は赤ん坊の時に学園都市で木原尼視に拾われた置き去りだ。

どういうわけか尼視が気紛れに俺を手駒にしようと、育て始めた。

これには他の木原達がすごく驚いたが、数年もたつと俺の利用価値を思い知る事になった。

俺に幻想支配という能力が備わっている事が分かったからだ。

その能力がいつから使えるようになったのか、それとも最初から使えてたのかは覚えていない。

ただ、学園都市で能力開発を受ける前にそれが開花した事で、俺は原石と呼ばれた。それからは幻想支配の実験に付き合わされて、地獄のような苦しみを受けた事もあつ

た。

幻想支配に目覚める前、俺がまだ幼い頃から銃やナイフを手に取り、人を撃つたり斬つたりもした。

身体がある程度大きくなると、重火器やヘリの操縦も覚えさせられた。

施設への潜入、ハッキング、暗殺、破壊工作……etc

俺は教えられた事は何でも覚えて、すぐに身につけて行った。

木原一族は一般的には科学者だが、俺は実験などを行う頭脳ではなく実働と言う分類に入る。

勿論、実験を参加したり企画をしたりもしたけど、肉体労働の方が専門だ。

特に、俺がやらされる暗殺や破壊工作、その中でも……木原を殺す事が俺の専門分野になつていった。

しかし、木原殺しとは言え、無作為に殺すわけじゃない。

他の木原や学園都市の統括理事会からの依頼があつて、初めて俺は木原を殺す事が出来る。

これまでに殺した木原の数は14人。

いずれも外道とかマッドサイエンティストとか呼ばれるクズばかりだったが、俺が殺すべき理由は毎回まちまちだ。

木原一族への裏切りだったり、木原と言う情報を表に出そうとしたり、などなど。

「俺には関係ないけどな、木原を殺せればそれでいいし」

俺は木原が憎い。それは多分、尼視に拾われた赤ん坊の頃から抱いていた感情。

理由は分からない。そもそも、理由があるのかすら分からないが、俺は昔から木原と言う物が憎かった。

そんな俺が木原殺しの為に調整されたのは必然だったのかもしれない。

そして、木原を殺す為、俺に施された処置の1つ、ヒーロー性の付与。

これは俺もよく知らないし、興味なかったので知ろうとした事もない。

ヒーロー性なんて言葉にすれば簡単だけど、どうすれば付けられるのかも分からないし。

ただ、俺が木原ではない木原、と呼ばれたり変わり者やら甘い奴と言われる事も自覚している。

それに、俺はヒーローと呼ばれるのは嫌いだ。

上条当麻、本物のヒーローの存在を1年前に食蜂操祈の一件で知った時から特にだ。

「ダメだ。最近動いてばかりだったから、落ちついて休むと変な事考えちゃう」

俺はベッドから起き上がり、外へと出た。

いい加減腹も減ってきたし、何か食べに行くか。
そう言えば、最近は幻想支配使ってもそこまで腹が減る事はなくなつたな。

続く

第65話 「アイテム」

朝飯兼昼飯をどこで食べようかフラフラ散策したが、昼時なのでどこのレストランやファーストフード店も混んでいて、結局ファミレスに落ちついた。

ここも混んではいたが、6人ほど座れる大きな隅っこの席が空いていたのでそこに座る。

何を頼もうかとメニューを覗き込んでいると、入り口から騒がしい声が聞こえてきた。

「だあく、結局麦野のせいでもここも満員御礼なわけね……」

「私のせいじゃないでしょ。フレンドが片付けに手間取ったからでしょ!」

「いえいえ、超お二人のせいです! おかげでこんなに混んだ時間になったじゃないですか!」

「……北北東から信号がきてる」

聞いた事ある声がしたので、顔をあげると入り口付近で話してる女の子達と目が合った。

「あれ? 最愛? それに理後に沈利?」

「ん〜？ あーあなたは！」

「ゆうき、ひさしぶり」

「あん？ げっ、お前かよ……」

「?? だれ？」

彼女達は四者四様の反応をしてきた。最後の金髪少女は知らないけど、他の三人は色々と顔見知りだ。

「お客様、申し訳ございませんがこちらの方々とお知り合いでしたら、相席は可能でしょうか？」

その様子を見ていたウェイトレスが俺に相席を尋ねてきた。

「あ、俺はいいですよ。彼女達が良ければ」

別に知り合いじゃなくても相席くらいどうって事はない。

今は完全にフリーだし、見られてまずいものも持ってない。

それに最愛達とは久々だから話すのもいいな。

「私は超構いませんけど、麦野はどうですか？」

「他の奴と相席よりはマシか、しょうがないわね」

「結局、何だかよくわからないけど、麦野達がいいなら私もいいよ？」

「ゆうき、ここ座るね」

そうやって、彼女達は俺の席へと座ってきた。

俺の横に最愛、正面に理后が座りその横に沈利と金髪少女が座った。

「お前らに会うのも数カ月ぶりだな。相変わらず元気そうで何よりだぜ、アイテム」
「まーね。そつちも相変わらずって感じね。色々話は入ってきてるわよ。また第三位と一緒に暴れたんだって？」

そうやってうすら笑いを浮かべたのは、麦野沈利。

これでも学園都市最強のレベル5の一角を担う超能力者だ。

彼女とは昔から幻想支配の実験や、暗部絡みの仕事でよく会う事が多い。

最近は組んでいなかったけど、色々と裏で活躍しているのは聞いていた。

「もうそんな話流れてるのかよ。てかそういう情報がなんでお前らにまで入るかな」

「ユウキはやる事がたまに派手で、超目立つから仕方ないです。しかも、たった1人で能力使わずに十数体の駆動鎧を撃破だなんて、こつち側でさえ目立つのが当たり前です。本当に暗部なんですか？」

ウェイトレスが持ってきた水を飲みながら、こつちをジト目で見るのは絹旗最愛。
レベル4の大能力者で、以前俺が潰した暗黒の五月計画被験者の1人。

あの時よりも表情が豊かになっているようで、安心した。

「表だって目立ってなきや後はどうでもいいんだよ。今回だって華はレールガンに譲つ

たし」

「大丈夫、そんな目立ちたがり屋なゆうきを私は応援してる」

ボケーっとソファアに身を任せてだらっとしながら、微笑みかけてくるジャージ姿の少女は滝壺理后。

俺の能力との関係で、彼女とは実験で知り合った。

そして、幻生を殺すついどとして彼女をとある実験から解放した。

「どこをどう解釈したら俺が目立ちたがり屋になるんだ、理后？」

「へえこの人も暗部関係なんだ。私はフレンダだよ」

物珍しそうにこつちを覗る金髪少女、名前は知らないし会った事も多分ない。

「お初だな、俺はユウキ。アイテムに人が増えてたとは知らなかったな」

「そう言えば、絹旗と滝壺を連れてきたのはお前だったよな。全くうちは託児所じゃないんだっての」

「他の奴らより沈利なら任せられると思ったからな。それに案外面倒見もいいし」

最愛や理后をそれぞれ解放した後、暗部に渡す事は決まっていたがどこに渡すかは俺が決めた。

他の所よりも沈利の方が【まだ少し】はマシと思ったんだけど、その判断は正しかったな。

「ふんっ、おだてても何も出ないわよ」

照れ隠しなのかふいっとそっぽを向いた麦野。横に居たフレンドが怪訝な顔をした。
「麦野が……面倒見がいい?」

その一言で麦野の耳がピクリと動いた。

ま、すぐ隣にいるんだから当然だけど、フレンドはアホなのか?

「むぎのは優しいよ、フレンド?」

「そうですね。ユウキに紹介された時は超怖い人だと思いましたが、実際はそこまででもなかったです。怒らせると超怖いですけど」

「あ、あんたたち……」

麦野は感動で震えている……わけがない。そんな女じゃないのはよく知っている。

このままだと朝食兼昼食タイムが台無しになりそうなので、とりあえずメニューを突き出してみた。

「おい、沈利。じゃれあうのは後にしてさっさと注文しろよ。今週はサーモンフェアって事でお前の好きな鮭づくしだぞー」

「ゆーうーきー? いくら私が鮭好きだからって、この状況でそんなもんに目を奪われる子供でも思ってたのかあ、ああん!」

「……相変わらず涼しい顔で人を怒らせるのが超得意ですね、あなたは」

テーブルから思いっきり身を乗り出して襟首を捕まえようと迫る麦野に、俺の隣でメニューを眺める最愛が深く溜息をはいた。

「ふふつ、ゆうきは変わらないと思っただけど、やっぱりどこか変わった」
「??」 どういう意味だ?」

尼視やテレスに言われれば嫌味に聞こえるけど、人畜無害で天然な理後に言われると物凄く照れ臭さが増すな。

「そのままの意味だよ。ね、きぬはた?」

最愛も理後の言葉に同意するように小さくうなづいた。

そんなに変わったかな、俺?

「ん〜話がわかんないー! 結局こいつは一体何なのー!」

フレンドは1人蚊帳の外なのが不満なようだ。

「うるさいフレンド。いいからあんたはさつさと自分の仕事をしてくる。私アイスコーヒー、今は甘いのがいい気分だからシロップとミルクを忘れずに」

沈利達は最初にドリンクバーを頼み、それからじっくり何を食べるか決めるようだ。

で、フレンドはアイテムの中ではドリンクバーの往復係みたいだな。

「あ、私はメロンソーダで」

「わたしはオレンジジュース」

「俺はアイステイター」

「はいはい、結局通路側に座った私がこういう役回りな訳よ……ってなんであんたまで!？」

席を立ちかけたフレンドにビシッと指を刺された。

「なんでって、そりゃ俺もドリंकバー頼んだからだろ?」

「そっかーそれなら仕方ないよね……って違う!　なんで、私が、あんたの分も、持つて来なきゃいけないのよ!」

「なんでって、俺は一番奥にいるし、最愛に避けてもらうのも悪いだろ?」

「フレンド、それは私が超邪魔だから、とつとどつか行けと言ってるのですか?」

「ひいつ!?!　絹旗目が怖い、目が!　違うから、そういう意味で言ったんじゃないからあ!」

「良いからさっささと行つてこい!」

冷たい笑顔の最愛に怯えるフレンドを蹴り飛ばして、沈利は俺へと向き直った。

「んで、あんたがここにいてるって事は偶然か?　それとも面倒事か?」

「安心しろ、今回はただの偶然だ。一仕事終えて昼食をどこで食べようかブラブラしてただけ」

暗部では偶然を装って、意図的に自然と接触させられるなんて事はよくある。

「ならいいけど、私らも同じようなもんだし。続けて面倒な仕事おしつけられるのはごめんよ、特にあんたが絡む仕事はね」

「その気持ちはよく分かる」

結構面倒な事多いからな。俺と言うか尼視のせいだけだ。

「おまたせ。結局、1人で4本持つのはきつかった訳よ」

そこへフレンドが器用に4つのグラスを持って帰ってきた。

意外に早く戻ってきた事と、グラスの持ち方から場馴れしているのが分かる。

本人からすれば、そんなの言われても嬉しくないだろうけど。

「器用だな、フレンド」

だからといって本人に言わないわけではない。

「ふふーん、そこはコツよコツ。慣れればどうってことないわ! ……なーんでこんな

の慣れちゃったんだろ私」

俺達にグラスを渡しながら軽く落ち込むフレンド。

沈利とは違った意味で、根は良い奴なんだろうな。

「ん? あれ?」

持ってきたグラスを見て、ある事に気付いた。

「ふふーん、ドリンクは持ってくるけど、付属品は持ってくるとは言っていない! さあ、

何も入ってない紅茶を飲むか、絹旗をどけて自分で取りに行くか!」

なんだその中途半端な嫌がらせは。

でも、フレンダ、お前はやっぱ馬鹿だな。

「俺は別にこのままで十分だけど、沈利はそうじゃないだろ?」

「えっ? あっ!」

「フレンダ? 私、シロップとミルクって言ったよねえ? 聞こえなかったのかし

らあ?」

「それとフレンダ、自分の分超忘れてますよ?」

「ああ〜!」

「大丈夫だよ、ふれんだ。私はそんなドジっこなふれんだを応援してる」

フレンダは慌ただしく席を立ち、シロップとミルクを律義にも俺の分も持つてきてくれた。

「ああ〜疲れたあ〜……それもこれも」

ソファにうなだれたフレンダからなぜか睨まれた。

「あんた、だから一体何者だつていうの! 麦野達の知り合いつて事はレベル4くらい?」

「いや、俺はレベル0」

嘘は言っていない。レベル0とは言ったけど、能力がないとは言っていない。

「ふうん、後でちよつとツラ貸して。初対面の奴に舐められたらこの業界終わりつて訳よー！」

俺がレベル0と分かるのとフレンドの態度が変わった。さつきまで散々からかわれたのが癪に障つたらしい。

でも業界つて、芸能界やスポーツ業界じゃないんだから……

それにツラ……

「ふれんだ、それはツラじゃなくて面じゃない？」

かっこよくきめたつもりだろうけど、理后につっこまれて固まった。

「カツラ？ 変装用はいくつかあるけど、今日は持つてないな。どうせならハゲになれるカツラかしてやろうか？ でもその長髪が邪魔だな」

「私がつとり早く髪の毛吹き飛ばすか」

「麦野がやると毛根が超死んでしまいます。私が引っこ抜きましょうか」

「ハゲのカツラなんているかあ！ 麦野と絹旗も悪ノリしないで！ 2人にやられると毛根どころか頭皮が無くなる！」

さつきからツッコミに忙しい奴だな。

「はあ、はあ……な、なんて厄日なの今日は……」

「どーでもいいけど、俺……さっき喧嘩売られた？　しかも、暗部として？」

ニタリともものすつごく悪顔でフレンドを睨むと、沈利達は揃って哀れな表情をフレンドに向けた。

「あーフレンドの補充が必要か、つたく爆弾系に強い奴ってなかなかいないのよねえ」

「あ、あれ？　麦野？　なんで私がこれから死んじやうって話で進んでるの？」

沈利が9割以上素で反応すると、フレンドがたらりと汗を流した。

「フレンド、超忠告しておきますけど、ユウキは超超強いですよ？　少なくとも私じゃ勝てません」

「き、絹旗くそれはちよーつとオーバーなんじゃない？　そ、それに流石に麦野なら瞬殺

出来る……？」

最愛の忠告（？）に汗をだらだら流しながら助けを乞うように麦野を見たが、視線をそらされた。

「当然負ける気はしない、けど……認めたくないけど、勝てる気もあまりしないわねえ。

こいつ色々と面倒だから」

「た、たきつぼ？」

最後の砦とばかりに理后へと目を向けるが、彼女は珍しく真面目な顔をして……フレンドに向けて手を合わせた。

「大丈夫だよ、ふれんだ。私はそんなふれんだのお墓参りにはサバ缶を忘れない」
「せめてそこは最低限応援して!!」 もうお墓の中確定!」
結局、ここにはフレンダの味方はいなかった訳だな。

続く

第6話 「遭遇」

アイテムと別れて午後からどうしようかと公園で考えていた時、久しぶりに芹亜先輩から連絡が入った。

「久々ですね、先輩。で、今日はどういった事で？」

『ああ、久しぶりに君に仕事の依頼だよ。能力者を誘拐して外部に引き渡す事を企む連中がいる。すでに誘拐は実行されていて、6人ほどやられているんだ。まあ、全員レベル1，2程度だから誘拐できたのだろうけど』

能力者の誘拐、それを聞いて木原の誰かの仕業かと思ったが、違うようだ。

『犯人は外部と接触して引き渡すつもりらしい。で、現場に一番近い君達に依頼したいんだよ』

「君、達？」

『そう。外部からの支援者と誘拐実行グループはアイテムを使うのだけど、君は誘拐された6人の救出をお願いしたい』

「あー、あいつらじゃ救出なんてデリケートな事無理でしょうね」

破壊と殺戮をもって肅清するのがアイテム。これは彼女達向きじゃないな。

ま、それは俺にも言える事だけだ。

『これからデータを送る。外部の回収は夜行われるが、それまで誘拐された者たちはそれぞれバラバラに監禁されているようだ。しかし、君なら問題はないだろう。結構分散されて監禁されているなら移動が面倒そうだけだ』

「了解。根こそぎ排除でやりますよ」

『で、だ。今回の報酬だがいつも通りの金銭でもいいけど。私の妹の御奉仕でどうだ？
もちろん、色々な意味でだ』

「ブー!?」

思わず飲んでいたソーダを吹き出してしまった。

「おまつ、じ、自分の妹に何をさせる気ですか!?!」

『いや、最近経験値がたまらないとか言っていたからな。これも良い経験になると思っただのだ』

「謹んでお断りします……鞠亜によりしく伝えてください、それじゃ」

これ以上話を続けていると何かトンでもない事に巻き込まれそうなので、急いで電話を切った。

するとすぐに仕事に関するデータが送られてきた。

「さてと、久々にアイテムとの仕事が入ったわけだけど、沈利の奴今頃文句タラタラだろ

うな」

今回は、直接は俺が絡んでいるわけじゃないけどな。

一仕事終えた頃にはすっかり夜となつてしまった。

居場所は掴んだけど、それぞれ監禁場所の距離が離れ過ぎていた為、誰かを助けると別の学生が危険にさらされる可能性が高かつた。

なので、誘拐された人達が外部に引き渡す為に一か所に集められた直後を襲い、纏めて救出した。

俺が救出した直後に、沈利達が犯人達を全員始末した。

その時、彼女達の仕事ぶりを遠目で見たけれど、やはりアイテムは暗部の中でもチームワークが格別だな。

「あーなんだかんだでこんな時間か、晩飯どうするか」

などと考えながら俺は人気のない道路を走りながら、帰路へと付いていた。

この辺りは工業地帯のハズレで、昼間でも滅多に人がいない。

なのに、俺は急に違和感を覚え、バイクを停めた。

「なんだ、この感覚？ 学びの園やセブンミストで感じたような……嫌な感じだ」

ヘルメットを脱ぎ辺りの空気を吸い込んでみると、やはり何かが違うていた。

目に見える範囲で異変はないはずなのに、妙に胸がざわめく。

——ドンッ！

その時、確かに爆発音が聞こえた。

「あっちか！」

音がした方へと急いで向かった。

爆発音と共に銃声までも聞こえ始めてきたので、バイクを駆動音がしないサイレント走行へと切り替えた。

そして、何かが起こっているであろう場所へとたどり着き、バイクを降りてゆっくりと近づいていた。

さっきまで聞こえていた爆発音も銃声も聞こえなくなり、代わりに誰かが騒いでいる声が聞こえた。

「ギャハハハッ、おいおいなんだア？ まだ始まって20分も経ってねえゾ？」

気配を殺して更に近付き、コンテナの影から声の主を見ようと顔を出して、目を見開いた。

「とつと立ち上がらねエと、これでゲームオーバーだア。さア、コンテナニューする気はあるかア？」

とがったナイフのような鋭い口調で話す声の主は、真っ白い髪と細長い手足をした俺

と変わらない年頃の少年だった。

しかし、俺が驚いたのはその少年ではない。

アイツが声をかけている相手、少し離れた場所でボロ雑巾のように血まみれで倒れている少女を見て驚いた。

その少女は常盤台の制服を着て、昨日共にテレスティーナと戦った超能力者、御坂美琴だった。

だが、何かがおかしい。

顔も身体付きも美琴だったが、何かが変わる。

よく見ると、美琴らしき少女の側にはゴーグルのようなものが碎けて落ちていた。

「はあく、つまねえ。もうちょっとで10000の大台にいくつてのに、全く進歩がみられねえ。お前らちゃんと学習してんのかア？ とつとと終わらせてコーヒーでも飲んでた方がまだ有意義だなア」

少年は心底失望したような顔をしながら、ゆっくりと美琴らしき少女へと歩いて行く。

恐らく、トドメを刺すつもりだろう。

その時、俺はその少年の正体に気付いた。

一方通行、学園都市レベル5の頂点に君臨する最強の能力者。

本名は知らないし、アイツの専属である数多も名前ではなく能力名で呼んでいた。なんでアイツがこんな所で美琴……らしき少女を殺そうとしているのかは分からない。

何かの実験なのか、それとも個人的な喧嘩なのか。

ただ今分かるのは、確実に少女は一方通行に殺されようとしている事だ。

俺は自然と、懐から拳銃を取り出し一方通行の足元目がけて撃った。

——バキユン

「……ンア？　なんだア？」

一方通行に銃撃は効かない事は分かっていた。

アイツはこの世のあらゆるベクトルを操作出来る能力。

銃弾だろうがミサイルだろうが、アイツに反射されて自分がやられるだけだ。

だから、足元を撃って動きを止め意識をこっちに向けた。

「おいおい、なんだ乱入かア？　聞いてねエぞ。誰だ、てめエは？」

訝しげな表情を浮かべる一方通行を無視して、美琴に似た少女に駆け寄る。

「おい、大丈夫か？」

幸い骨を折っているようではないが、出血がヒドイ。

「あ、あなたは誰ですか？　とミサカは突然現れたあなたに驚きと戸惑いを隠さず尋ね

ます」

意識ははっきりとあるようで、虚ろな目で俺を見てきた。

焦点の合わないその目を見て俺は確信した。

この少女は、御坂美琴のクローンだと。

そして、俺はとある単語が頭に浮かんだ。

「……量産型能力者計画」

「あなたは実験の関係者なのですか？ とミサカは重ねてあなたに尋ねます」

レベル5の能力者のクローンを作る計画は知っていた。

だけど、それは実行前に失敗作として中止になったはずだ。

尼視曰く、とてもお粗末な計画で三流科学者の考えそうな内容だったそうだ。

「お前、御坂美琴のクローンなのか？」

「はい……ミサカは検体番号99339号です。とミサカは未だ事態を把握できずに答え
ます」

無機質な声、デパートなどの機械音声の方がまだ感情が籠っている。

「待て、9939？ それに、実験……10000の舞台、まさか……」

今までの情報を整理すると、最悪の結果が瞬時に浮かんだ。

今行われているのは実験で、美琴のクローンは最低でも9939人作られ、その全て

が一方通行に殺されている、と言う事。

「一方通行……お前、まさか」

「正解、正解、だいせいいかア〜い！　ンで、人をご機嫌に無視してくれたキミは一体どこ
の三下だア？」

「……………」

無言でゆつくりと一方通行に向き直る。

頭が一瞬にして怒りであふれかえった。

火織にやられた当麻を見た時の、涙子の涙を見た時もこんな気持ちになった。

それでも、すぐに怒りを鎮める。

相手は今までとは違う。ある意味で火織よりもバケモノな学園都市最強の能力者、一
方通行だ。

頭に血がのぼったままじやすぐにやられる。

「あん？　なんだその面は？　まさかとは思うが……オマエ、そいつを守ろうとしてる
のかア？」

今の俺がどんな顔しているか分からない、頭から血を引かせたつもりでも心底ムカつ
ているのは確かだ。

「ああ、悪いか？」

「ぎゃは、ギャハハハハハッ！ どこの物好きだア!? だが、いいねエ、最近マンネリで退屈してたんだア。そういうサプライズは大歓迎だぜエ！」

次の瞬間、目の前に一方通行のニヤケ面があつた。

けど、俺は何にも驚かない。

一方通行のデータは既に何度も見ている。アイツの能力で出来る事は分かっているつもりだ。

今のもただベクトルを操作して、ものすごい速さで飛んできただけだ。

「まあ、せいぜいがんばってくれや。白馬に乗ったヒーローさんよー！」

一方通行の右手が伸びてくる。

あれに捕まったら、いや、触れるのもダメだ。

とつさに身をかがめ、地面を転がるようにその場から離れた。

「いい反応だア、ちつとは楽しめそうだなア。けど……いいのかア？ 大事なお姫様を放つておいてよオ？」

一方通行の足元には、動かない9939のミサカがいる。

「ちつ、やつぱそつちを狙うか！」

一方通行が足を振り上げ、9939の頭を踏みつぶそうとしている。

出来るかどうかかわからないけど、幻想支配を使うしかない！

今までにレベル5の能力者相手に幻想支配を使った事はある。

だけど、一方通行とどこにいるか分からない第六位には使った事がないし、軍覇相手にはなぜか使えなかった。

他の美琴や沈利、操祈や帝督相手に使った時は、長時間持たなかったし頭痛も酷かった。

今回初めて一方通行に使うが、恐らく長くは持たない。

だからと言って、躊躇う事は一切ない！

「……あん？ てめエ、今何をした？ なんだその青い目は？ てめエ、能力者か？ しかも、今使ったのは俺の能力だと？」

「あなたは何をしていますか？ とミサカは今何が起きたのか分からず困惑しながら尋ねます」

俺が何をしたかと言えば、幻想支配で一方通行の能力を使い、踏みつぶされる寸前の9939を抱きかかえ救った。

まあ、その際お姫様だつこという形になったけど。

「美琴……いや、9939、ああ、もうメンドクサイ！ 美琴っぼいの、ちよつとここにいろ」

「えっ、あなたはだから何を？ それより、っぼいのは何ですか？ とミサカは混乱し

ながら尋ねます！」

離れた場所に美琴つぼいのを置き、改めて一方通行の前に立つ。

一方通行はさつきまでの余裕の笑みを消して、心底不機嫌そうな顔をした。

「てめエ、一体何者だア？ 人の能力をパクる能力者なんて聞いた事も……いや、待てよ。まさか……てめエは！」

「俺の名前は、木原勇騎……一応初対面だが、俺の事は知っているのか、一方通行？」

「グフツ、アギヤ、アヒヤヒヤヒヤ！ 他人の能力を操る変わり者の木原がいるとは聞いた事あったが、実際にいるとは思わなかったなア」

「変わり者ねえ。いい加減耳にタコが出来るくらい言われてるつての」

ホント、これで何十人目だ。

「俺も認めてやるよ。確かにてめエみたいな木原は見た事ねエよ。ヒロインのピンチに颯爽と駆けつけるつて、どこのヒーロー様だア？」

「ヒーローヒーローうるさい奴だなあ。そんな単語は小学生で卒業しとけよ中二病モヤシ」

「……いいぜエ、てめエが何もンだろうが、ブツ殺す事には変わらねエ！」

中二病と言われた事か、それともモヤシと言われた事が頭にきたのか、怒り狂った表情の一方通行が足元の地面を大きく蹴った。

蹴られた地面はベクトル操作により大きな穴があき、石や土がマシンガンのように襲いかかってきた。

「流石は小学生、石蹴りが好きなのうだな。もうちつと大人な攻撃しろよ」

俺もベクトルを操って空中に飛び上がり攻撃をかわすと、すぐに両手を大きく振った。

両手の動きに合わせて空気のベクトルを操作して、空気弾を作り一方通行へ投げ飛ばす。

「キャハッ！ 流石は俺の能力を使ってるだけあるなア！ けどよオ、本家である俺に勝てると思ってるのかパクリ野郎！」

空気弾は一方通行の手前で霧散された。

同じ能力での攻撃は同じ能力で無効化される。

「次は俺のターンだア、一方通行ってのはア、これくらいは当たり前なんだけぞ？」

一方通行が右手を軽く上へと振う。

それを見て、アイツが何をしたか予測し、急いでその場を離れた。

次の瞬間、一方通行の周りに巨大な竜巻が発生した。

「ああ、てめえの能力ぐらいお見通しだったの！」

こちらも竜巻を作り、一方通行にぶつける。

それだけで辺りは静寂へと戻った。

「チツ、本当に俺と同じ能力が使えるみたいだな。だが……だからと言って、てめエが俺に勝てるわけでもねエなア」

「ハア、ハア……つ、このままじゃラチがあかないな」

初めて一方通行を視たせいで、頭痛がしてきた。それにもう使える残り時間が少ないはず。

レベル5で一番初めに能力を視た相手は、操祈だった。あの時みたく2、3分で倒れないだけマシか。

この分だと能力停止も使えそうにない。

どうやって一方通行を倒す？ ……いや、一方通行を倒しからって何になる？

実験が中止になる？ あの美琴っぽいのが助かる？ そもそも、俺は助けたいのか？

なぜ一方通行を倒そうとした？ 何のために？

疑問はわき出てくるが、今はそれを無理やりにも押しこめる。

今考える事はただ一つ、一方通行を倒す事。殺す事は多分無理。そこまで余裕はない。

「ン？ お前、息が上がってるぞオ？ ハハア、さては能力に限界があるようだな。そりゃそーだ、何のデメリットもナシで他人の能力使えるわけねエーモンなア！」

まずい、すぐに弱点に気付かれた。

まあ、能力だけじゃなく演算能力も学園都市トップクラスなんだから、それくらいすぐに気付くか。

帝督にも見破られたしな。

けど、どうする？

「……互いに反射がある以上、真つ向勝負じゃ無理。次で決めるくらいでない……」
ベクトル同士がぶつかっても、相打ちがせいぜいだろうな。

ん？ ベクトル、反射……待てよ？

実際に能力を使ってみて分かったけど、一方通行の反射は自身に向かってくるベクトルの向きを自動的に逆転させている。

ベクトルの向きを変えられる境界線でこっちが先に向きを逆転させれば、反射は無効化されるはず。

要は一方通行の目の前で寸止めをすれば良い話。

言葉にすれば簡単だけど、それを実際に実行できるかは別の話だ。

だけど、今の俺は一方通行と同じ能力、同じベクトル操作、同じ反射が使える。

俺は、一方通行に勝てる。そう確信した。

「どうしたア？ そのまま突っ立ってても、時間切れになるだけだぞオ？」

「だったらお前から攻めて来ればいいだろ？ それともお前実は攻めるより攻められるのが好きな、真性のドM変態だったのか？」

「クカカカツ、いいねエ、三下らしい安っぽい挑発だア、受けてヤンよオ！」

そう叫びながら一方通行は俺に向かって突進してきた。

それに合わせるように、俺も突進する。

真つ向からの激突なら、ベクトル操作もしやすい。

これで、決める！

「うおおりやあ〜！」

俺と一方通行、同じ能力を持った2人が同じ速度で今……

続く

第67話 「絶対能力進化」

俺の拳と一方通行の手がぶつかる寸前……

「止まりなさいい」

その声で一瞬動きが鈍った。

おかげで反射を逆転させるタイミングを失い、やむをえず一方通行から離れた。

一方通行も怪訝な顔をしつつ、俺から離れた。

そして、新たな乱入者に目を向けると意外な人物がそこにいた

「なんで、なんででめえがここに、木原病理！」

そこにいたのは、車いすに乗っていかいにも無害そうな笑顔を浮かべる女性、木原病理。

俺が苦手とする相手の1人。

「あらあら、なんでと言われても星空が観たくなって散歩していたら、派手に暴れている坊や達が見えたので、ちょっと通りがかってみました」

「なんだア？ そのババアも木原か？ クズの底辺を這いずり回る木原が2人もだと？ おいおい、どんだけ俺を楽しませたいんだおまえらはよオ？」

俺とやりあってハイテンションなままの一方通行が、突然の乱入者である病理に殺意を向ける。

「いえいえ、あなたを楽しませるのは私の仕事ではないのですよ。私は散歩がてらにユウキクンと久々にお話ししようと思っただけです。ああ、そうそう。伝言を預かっていましたね。コホン、今日の実験は延期です、また後日連絡するとの事です、一方通行クン？」

「……チツ！」

一方通行は美琴っぽい9939がいる方向を見て、次に俺と病理を睨み舌打ちしてこの場を去った。

俺はそれを見て呆気に取られた。少しは抵抗するなり嫌味でも言うのかと思ったが、こうもあっさり引き下がるとは思わなかった。

実験とやらがひとまず延期になり一方通行が去った以上、戦闘を続ける意味はない。そもそも、なんで戦ったのかすら俺には分からないのに、これ以上何をするのか。

「あららー？ 話に聞くより数百倍は聞き分けがいいですね。ちよつと期待外れでーす……つてあらあ？ あなたまで去ってしまうのですか？」

「お前と話すとただ疲れるだけで俺には何の得もない。でも、こうして戦闘が終わったんだ。お前の専売特許は果たしたと言っくいんじやないか？ ま、そもそも今回は

『諦め』とは違うけどな」

病理がこのタイミングでここに現れた理由は、俺に一方通行との戦いを、もしくは実験の阻止を『諦めさせる』為だろう。

病理は『諦め』のプロフェッショナルだ。話術や妨害、その他もろもろあらゆる方法で精神的にも肉体的にも社会的にも諦めさせる天才だ。

そんなのを相手にするだけでも、不毛だ。

そもそも俺はこの実験が何のためにあるのか、美琴のクローンが作られた理由とか、まだ何も把握していない。

でも、俺を止める為に病理をよこした事で、色々予測はつけられる。

とりあえず実験は延期になり、9939も生きてるのでそれで良しとするか。

「それそれは凄く残念ですね。久しぶりにお話ししたかったのに……その為に『新調』してきたのに」

「随分と準備がいい事で。さって、あの子を病院に……って、え!!」

物足りないと言う表情の病理をほっといて、9939がいる場所に行こうとふり返った時、俺は驚きのあまり固まった。

「この個体の事でしたら、大丈夫です。とミサカは9939号を担架に乗せつつ答えます」

「多少の外傷はありますが、この程度でしたら何の問題もありません」

「しかし、スケジュールの若干の調整が必要となりました」

「ですが、予測されている範囲内の事のようにです」

「ならば速やかに9939号を施設へと搬送するべきです。とミサカは提案します」

常盤台の制服を着て、ゴーグルを付けた美琴の顔をした少女が何人もそこにはいた。

普通の人がこの光景を見たら自分の目を疑うか、下手すれば狂ってしまいそうだな。

「1万以上は作られていると予測したけど、実際に観てみると異様な光景だ……」

「では、これで失礼します。とミサカは頭を下げます」

美琴のクローン達は、ぐるりとほぼ同時に俺に目を向け、頭を下げるとこの場を後にした。

その時、担架に乗せられた9939の美琴が、黙ってこちらをジツと見つめてきたのが印象に残った。

8月11日

とあるセーフハウスの中でコーヒを飲みながら時計を見る。

既に時間は朝になっていた。

「あく久々の徹夜だ」

実験場を後にして、すぐにこのセーフハウスにやってきた。

ここは主に情報収集のための機材が揃っていて、大型サーバーやスーパーコンピュータなどがある。

昨日の実験の情報がありとあらゆる所にハッキングをかけて、情報を得た。

ここまで大掛かりで回りにくいハッキングは久々だった。

並の電気能力者以上の手際で証拠も残さなかったけど、念の為此のセーフハウスは破壊した方がよさそうだな。

他にもいくつか似たようなセーフハウス持つてるし。

そして、ハッキングの成果を今確認している所だ。

「……絶対能力進化（レベル6）、レベル5のその先にあるレベル、ねえ」

神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの（SYSTEM）と言われる物の事なら少しは知っている。

レベル5の先にある学園都市の究極の目的、レベル6の事を言っているらしいけど、詳しくは知らないし興味もない。

で、そのレベル6に唯一辿りつける可能性のある第一位、一方通行をその高みへ至らせるのがこの実験。

学園都市最高のスーパーコンピューター 『樹形図の設計者』 が導き出した予測で

は、第3位的美琴と128回戦って殺せばレベル6になれる。

だけど、美琴を100人以上用意出来るわけもない。

それで以前凍結させた『量産型能力者計画』を再利用する事で美琴のクローンを『妹達』を代用させる事にした。

ただし、妹達は能力が大幅に劣化する為、美琴を使った時と同じ結果を出すには2万もの戦闘データが必要になった。

「相変わらずの狂い様だな、学園都市の闇つてのは」

別にこの程度なら予測済みだし、色々トチ狂った実験を見てきたりもしていたので驚きはしない。

でも、それでも、怒りが収まらない。

昨日と同じく何に怒っているのか、なぜ怒っているのか自分でも分からない

この怒りは昔から何度かあった。

涙子や当麻の時ばかりではなく、暗闇の五月計画で最愛と海鳥を助けに行つて研究者を半分殺した時も、体晶実験のしすぎで衰弱しきつた理后を見た時もだった。

「この実験、潰す」

恐らく、いや、絶対に妨害が入るだろうな。

昨日病理が来たのがその証拠。俺にこの実験に関わるのを『諦めさせる』為アイ

ツは来た。

俺にはそんなの関係ない。潰すと決めた以上、手段を問わず絶対に潰す。

でも……どうやって潰す？ この実験は今まで俺が潰してきたような研究者達を殺せば終わる、というものではない。

統括理事会どころか、理事長が絡んでいる可能性が高い。そんな実験を潰そうとするなら、ただ皆殺しではダメだな。

一方通行を殺す……か？ とここまで考えて違和感を覚えた。

「何だ、この実験。知れば知るほど違和感しかない。こんなの、実験になるのか？」
具体的にどこかどうとは分からないけど、やけに頭がモヤモヤする。

それに統括理事会絡みと言えば芹亜先輩の依頼、今にして思えばあの依頼を解決した帰り道に実験に遭遇した。

偶然？ それともこれは芹亜先輩が暗に俺に実験を止めるように仕向けた？

「これ以上はハッキングするより、この実験関連の研究所に忍びこむ方がいいか」

——ビビィー

と、そこへまるでタイミングを見計らっていたかのように、尼視から通信が入ってきた。電話ではなくこの場所に通信を送ってきたのが、何ともタイミングが良いのか悪いのか悪いの

か。

『昨日はやってくれたみたいだな』

開口一番にこのセリフ、想定内だ。

だけど、よくやってくれた、と言わんばかりの笑顔を浮かべ、心底面白そうに言ってくるとは正直思ってた。

「なんだその笑みは？ 俺が実験を妨害するのは、お前にも不都合な事なんじゃないのか？ だから病理のババアを寄こしたんだろ？」

『病理？ ぶつ、アツハツハツハツハツ、私があんな陰険に頼むわけないだろう？ アレの差し金は別だ。私としてもお前が介入するのはもつと後だと思っていたんだが、いや、面白い展開だ』

違ったか、一番の適任を送りこんできたと思っただけだな。

『で、お前はこれからどうする気だ？』

「勿論、実験を止める」

嘘も誤魔化しも無意味なので、正直に話す。

ここでコイツがどんな反応を示すかで、こっちも対策を取るつもりだ。

『なぜだ？ 今回は暗黒の五月計画みたく依頼を受けたわけじゃないのに、なぜ即答する？』

尼視の奴、止める事に反対するのでも肯定するのでもなく、まるで俺がどう答えるか試しているような言い方だな。

「さあな。妹達に同情したのか、と言われれば否定しきれないし。でも一番は……：なんかムカついたから。これ以外答えようがないな」

『ぶふっ、くくくっ、あはははっ、あゝっはっはっはっはっ！ こりや傑作だ傑作！』
なんだ？ 俺を嘲っているのかと思っただけ、そうじゃない。

尼視は馬鹿にしているわけでもなく、ただ本当に面白そうに笑っている。

それを見るのはすごく不快だ。

「何だよ。文句でもあるのか？」

ま、そりやあるだろうな。木原らしくない、とまた言われるか。

『いやいや、それでいい。お前はそれでいい。実を言うと、私もこの実験にはどちらかと言えど否定的なんだよ。お前が実験を潰すと言うのなら、協力はしないが妨害もしない』

要するに自分は灰色で、実験には関わってない。と言いたいんだな。

もったいぶった言い方しやがる。

「そいつはどーも」

これ以上話す事もないと通信を切ろうとしたら、急に尼視が真剣な顔つきになった。

『あ、そうそう。実験だけど、一方通行を殺しても無駄だぞ?』

「どういう意味だ?」

殺しても、無駄? 殺すのはダメ、ですはなく?!

『言葉通りだ。後は自分で考えろ』

そう言い残して尼視は通信を切った。

アイツが何を考えているのかさっぱり分からない。

「やっぱ何か裏があるな、それも結構大きい裏が。さて、どこから行こうか」

実験に関わっている研究所のリストはアップした。

こうしている間にもデータが他の研究所に移されている可能性高いけど、行ってみる

価値はあるか。

「じゃ、行動開始だな」

必要なデータと機器を詰め込んだバッグを手に、室内にまんべんなく特殊な液体を振りまきサーフハウスを出る。

すぐに背後にシューっという音が聞こえてきた。

さつき巻いた液体は、ハウス内のPCやモニターなど設備を全て溶かす特殊な金属。

EMPでもいいけどそれでもデータを再生させられる恐れもあるし、物理的に破壊するのが一番だ。

「まずは……飯かな。昨日の昼から何も食べてなかった」

昨日は依頼を片付けて夕食をどうしようか考えていた時に、あの実験に出くわしたんだった。

荷物をバイクに乗せそこらへんのファミレスに行こうとしたその時、誰かの気配を感じた。

うまく足音を消してるようだな、相手は恐らく1人。

今いる場所は普段誰も近寄らない僻地。

こんな所にこのタイミングで来るのは、十中八九……敵。

「……動くなっ」

振り向きざまに銃を向けたが、そこに立っていたのは予想外の人物だった。

「ミサカに敵対意思はありません、とミサカは突然銃を向けられ驚愕しながら答えます」
包帯だらけで無表情の美琴、いや、妹達の1人がそこいた。

続く

第68話 「ミク」

美琴に似た妹達の1人、9939号は個人サロンの一角でメニューを凝視していた。

「ふむふむ、チョコミントアイスの程良い甘さを堪能できたので、次は王道のパニラカイチゴミルルクか迷います。とミサカは真剣に悩みます」

色々な料理を目の前にして、あえてデザートを先に食べる9939号。

「……なんだこの状況」

実験の関連施設に潜り込もうとした矢先、昨日出会った妹達の1人がやってきた。

何の用か尋ねようとしたら、唐突に彼女の腹がなった。

仕方なく先に朝食を食べる事にしたが、包帯だらけとはいえ美琴のクローンである彼女がファミレスなど目立つ場所に行くのは色々と危ない。

いや、包帯だらけだからこそ逆に目立っているけれど。

なので個室サロンを借りて、食事はそこで頼む事にした。

勿論、念の為監視カメラやその他の類はない事は確認済みだ。

「この料理の多さ、食べ盛りの男子と言う事なのでしようね。とミサカは推察します」

「食べ盛りと言うか、昨日の昼から何も食ってないんだよ。いいからアイスばっかじゃ

なくてお前も食べるよ」

特に好き嫌いはないそうなので、色々頼んでみたが彼女はなぜかデザートばかり食べている。

「こういう所はやはり女の子……なのかな？」

「ふう〜おそまつさまでした。とミサカは手を合わせて言います」

あれだけあつた料理は見事に空となった。俺も結構食べたけど、9939も意外と食べるんだな。

「言葉を微妙に間違えてるけど、お前ホントに学習装置で色々学んだのか？」

「はい、それは勿論。例えば、若い男女2人が1つの部屋にいれば起こり得る事なども……いたっ!? な、なんでミサカは叩かれたのですか? とミサカは涙目で訴えます」

「やかましい! せめてホントに涙目になって言え、真顔うで言うな! 誰だ、お前にそんな情報埋め込んだ奴は!」

妹達はクローンで生まれた時から美琴と同じ体格とは言え、当然知能や人格は0歳児だ。

1からじつくりと教え込む時間もないので、学習装置で基本的な知識などを埋め込んで行っている

どんな知識が埋め込まれているかは知らないけど、碌なものはないさそうだ。

そう言えば……

『それに学習装置は今別件で忙しいからな』

幻想御手事件の時、尼視は確かにそう言っていた。

あのババア……まあ、それを今言っても仕方ないか。

「さて、ではこれで失礼します。とミサカは頭を下げます」

「待て」

お腹一杯になって満足した彼女はペコリと頭を下げ個室を出ようとしたので、慌てて手を取った。

「?」 なんてでしょうか? やはり、デザートにお前を食べる。と言われてしまうのでしょうか、とミサカは頬を赤らめます」

言葉と裏腹に彼女は相変わらず無表情で言葉も淡々としている。

「だから真顔で言うな!」 ってかそんな事吹き込んだ奴マジで誰だ!?! そうじゃなくて、お前はなんで俺に会いに来たんだ!」

「おお、そうでした。大事な事を聞く為にあなたを探していたのです。とミサカはピコーンと古典的な表現をします」

何だか思いつきり疲れた。本当に美琴のクローンなのかと疑いたくなる。

「んで、なんで俺に会おうとしたんだ?」 まあ、どうやって俺の居場所を掴んだのかは大

体想像できるけど。それに昨日の怪我の治療はいいのかよ？」

「怪我でしたら、特に大した事はありません。この包帯も変装の一環です。とミサカは余分な包帯を解きながら答えます」

「どうやら出血の割には大した怪我ではなかったようで、頭と腕の一部以外の包帯を解くと確かにそこは怪我はしていないようだ。」

「なんでミイラ女に変装したのかとかはともかく、思っていたよりは重傷ではなかったか。」

「実験は延期のままか？」

「はい。実験の再開は連絡待ちです。とミサカは答えます」

「何にせよ、すぐに彼女が殺されないと分かっただけでも良かった。」

「そう安堵すると彼女は真顔のまま少し首をかしげた。」

「あなたは、どうしてそこまでミサカの事を気にかけるのですか？ とミサカは昨日から抱いていた疑問をなげかけます」

「どうしてって？ 別に理由はないぞ？」

「ミサカは実験を行う為だけに生み出されたクローンです。18万円と言う金額とボタンの一つで簡単に作られる紛い物です。なのに、なぜあなたはまるでミサカを普通の人間として扱ってくれます。なぜですか？ とミサカは問います」

「……人間、ねえ」

「さらに付けくわえるのなら、あなたは立場上一般人ではなく、実験を『行う側』なのではないのですか？」とミサカは再度問います

9939号はそこまで俺の事調べたのか、それとも誰かが教えたのか。

「確かに俺は実験を行う側だろうな、木原だし。でも、今回は加われとは言われてない。なら好き勝手にやらしてもらおうさ」

病理が出てきた以上、俺が妨害すると碌でもない事になりそうだけだな。

ただし、それが直接的な妨害か間接的な妨害かにもよる。

「言っている事はよく分かりませんが、とにかくあなたは不良少年と言う奴なのですか？」とミサカは尋ねます

「どこをどう受け取ればそんな答えになるのか分からないけど、間違っているとは言えないな」

「ではでは、あなたは偽善者という奴なのですか？」とミサカは更に尋ねます

ホント、学習装置で碌な知識与えられてないな……それとも尼視辺りの入れ知恵か？「偽善、それは違う。そもそも根本から間違っている。俺は自分を善と思つた事はないし、善になろうとも思つてない。自分から進んで人を殺した事もあるし、昨日も一方通行を殺そうとした」

当麻や美琴などこっちに無関係の表の人間が裏側に関わらないように動く事はあるけど、それは下手にこつち側に来られると見動きがしにくくなるからだ。

「ですが、それでもあなたはミサカを助けてくれました。それに、今も実験を止める気なのではないですか？」とミサカは尋ねます

相変わらずの真顔だったが、視線がさつきよりも鋭くなった気がする。

「実験は……止める」

「それは、なぜですか？」とミサカは重ねて尋ねます

「その前に聞くけど、俺にその事を聞きに来たのは、誰の指示だ？ それとも自分の意思でか？」

「これはミサカの意味です。ミサカは治療を終えた後、ずっと考えていました。ミサカがクローンと知っても、あなたの見る目は他の科学者達とは全く違う目をしていました。ここで先程尋ねた事の繰り返しになりますが、なぜミサカを助けたのですか？」とミサカは同じ問いをします

下手に誤魔化す気はなかったが、彼女の目を見ると答えに困ってしまった。

「なぜか、は俺も分からない。昨日は本当にたまたまあそこを通りがかったただけだ。で、一方通行と血まみれのお前を見たら、気が付いたら駆け出していた、後は知っての通りだ」

「分かりました……つまり、あなたは単純バカなのです。とミサカは結論付けます」
「ブーッ!? バ、バカと来たか……そう言われたのは初めてだな」

真顔で馬鹿と言われるのは結構キツイな、それも美琴顔で。

「でも、実験を止める理由ならばつきり言えるぞ。こんな実験は気に入らないからだ」
「気に入らない、とはどういう事ですか？」 とミサカは尋ねます

「勝手に生み出されて勝手に殺されて、お前らの犠牲にするのが大前提なのが気に入らない」

「ミサカはその為に生み出された模造品です。むしろ実験の為に死ぬのは当たり前です。とミサカは……」

「違うっ!」

自分でも驚くくらい大声を上げてしまった。

9939号も流石に驚いたのか、目を大きく見開いている。

「お前は確かに御坂美琴のクローンとして生み出された。だけど、それでも今のお前は立派な人間だ! 実験動物なんかじゃない!」

「ミ、ミサカの存在意義は……それに、ミサカは18万円という単価で簡単に作られる作り物の体と借り物の心を持った実験動物、人形と言われてもその通りですと答えるだけです。とミサカは答えます」

「お前は実験動物でも人形でもない。ちゃんと意思と心を持った人間だ！　少なくとも俺や実験を企てた連中よりはマシな人間だ！」

体中がアツイ。開いた口から絶えず言葉が出続ける。

それにムカついてもいる。実験の事だけじゃなく、自分を人形と言い切る9939号にもだ。

「ミサカに意思と、心があると？　とミサカは自分の胸に手を当ててみます」

「お前はなんで俺の元に来た？　誰かに命じられたわけでもない。お前は自分で考えて疑問に思ったから俺の元に来たんじゃないのか!?　それは紛れもないお前自身の意思だろ！」

「……ミサカの意思、心……」

ボーっとしながらも何かを考え込んでいる9939号。

今更だけど、こいつに名前がないな。

「あーお前、9939号が検体番号だったよな？」

「はい、確かにミサカは9939号ですが、とミサカは首を傾げながら答えます」
うーん、だったら安直だけどこれがいいか。

変に捻った名前よりはマシだろう……ってなんで俺は子供が生まれる父親か!?

「よしっ、今日からお前の名前は『ミク』だ！」

「……はい？ ミサカには既に9939号と言う……」

「それは名前じゃないだろ？ ただの番号。俺は人を名字ではなく名前で呼ぶ癖があつてな、いい加減お前、とかそういう呼び方するのは性に合わなくなってきた。だから、俺は今からお前の事をミクと呼ぶ。それがお前の名前だ」

「は、はあ。とミサカは意味が分からず困惑します」

そりゃ突然お前はミクだ、なんて言われても普通の人間でもピンと来ないか。

「あなたの言いたい事は相変わらずよく分かりませんが、とにかくミサカは今から『ミク』と名乗れば良いのでしょうか？ とミサカは混乱しながら尋ねます」

「おう、よろしくなミク」

俺が手を差し出すと、ミクは俺の顔と手を交互に眺めながらも、しっかりと手を握つた。

「ミク、それがミサ、ミクの名前……ミク」

正直、自分でもなんで名前を付けたのかよく分からないけど、仕切りにミクが自分を実験動物と言い張るのを見て名前で呼びたくなかった。

ミクは自分の名前を噛みしめるように呟いていたが、一瞬だけ口元に笑みが浮かんだのは見間違えではないと思う。

次にミクが顔を上げた時はいつものような真顔になっていた。

「しかし、9939号だからミクとは少し安直過ぎませんか？ とミクはあなたのセンズに愕然とします」

「うっ、や、やつぱりか……」

ジト目で睨まれてしまった。もつとよく考えれば良かったか？

美琴のクローンだからミコン、怪獣みたいだ。みこと……みこな？ ないな、うん。

「ですが、ミクと言う響きはとても気に入りました。とミサカは感謝を述べます」

今度は見間違えじゃなかった。

ミクは確かに笑みを浮かべて、俺に頭を下げた。

俺は今更気恥かしさがこみ上げて来て、思わずミクから目をそらした。

「……そ、それでこれからどうするんだ？ 怪我が治ったら実験が再開されるんだろう？」

「はい、そうです。実験のスケジュールは細かく管理されていきましたので、僅かな調整で

も困難を極めます。ですが、今回の件は既に調整が行われています。とミサカは与えら

れた情報をそのまま伝えます」

ミクの怪我が治ったら実験が再開は間違いない。

なら、それまでにケリを付けなきゃいけない。

こっちはまだ実験の裏まで掴んでないと言うのに……

やはり一方通行を殺すしかないのか？ いや、例えそれで実験が終わったとしてもミ

ク達はどうなる？

最悪、学園都市そのものに喧嘩を売る事にもなりかねない。

ま、それはその時に考えるか。

「なら、ミクは実験に拒否の意思を示せ、拒否がダメなら体調不良でも何でも理由付けて実験の延期を申請しろ」

要は時間稼ぎ。こんなのが通用するとは全く思わないけど、とにかく今は時間が足りなさすぎる。

「それは……不可能です。ミクはやはり実験に参加する事に存在意義があります。とミサカは若干辛そうに答えます」

今回も真顔、ではなく少し眉が垂れさがっている？ 残念そうな辛そうな表情になっていた。

「またそれか！ 存在意義くらい明確に持っている人間なんていないっての。後でいくらでも考えればいいし、実験が中止になったら俺のアシスタントでもやってくれればいい」

「あなたのアシスタント、ですか？ いえ、それよりも実験が中止？ とミサカは動揺しながら尋ねます」

「そうだ。さつきも言ったけど、俺は実験を潰す。だから、ミクはそれまで生きろ。で、

実験が中止になったら、他のミサカ共々面倒見る！　それでいいだろ？」

俺の言葉にミサカは今までで一番驚いた表情を浮かべた。

「そ、それは……プロポーズですか？　とミサカは狼狽します」

なんでたー!?!　とつつこもうとしたが、よくよく考えれば確かにそう捉えられそうな事を俺は言つたな、うん。

「あーいや、ほら、仮に実験が中止になったら俺の責任だろ？　だつたら後の面倒を俺が観るのは、当然……ああもう、それは後！　とにかく、俺は実験を潰す。ミクは実験にこれ以上参加しない。これでいいだろ!?!」

「わ、分かりました。とミサカはまだ頭がパニック状態のまま返事をします」
個室サロンを出て、気がつけば昼を大分回っていた。

研究施設への侵入は夜に行こうかと思っていたが、早めに動かないと。

「それでいい。じゃ、俺は行く所があるから……またな、ミク」

「はい、御馳走様でした。それと、素敵な名前ありますがどうぞございます、ユウキさん。とミサカは顔をあつくししながら見送ります」

ミクはこのまま施設に戻るらしい。

送ろうかと言つたが、ゆつくり景色を見ながら帰りたいと言うのでここで別れた。

最後にミクが俺に手を振ってくれたが、今朝までの無表情とは打って変わって柔らか

い
笑
顔
だ
っ
た
。

続
く

第69話 「闇」

いくつかのセーフハウスで準備をしていたら夜になった。

実験は中断されているようだけどあいつらの事だ、ミクの怪我が回復次第すぐに再開されるはず。

ミクの様子から見ると、実験再開まで2、3日もないかもしれない。

今夜中にケリを付けるつもりでいなければ、間に合わない。

「まずは、ここか」

目的の研究所からかなり離れた場所にバイクを止め、装備を整えて下水道から侵入する。

正面も裏もカメラや警備が多くて侵入は無理。

他に警備が手薄そうな研究所はいくつかあったが、そんな所じゃ俺の欲しい情報は手に入らないだろう。

木原としてのパスで入れるとは思うけど、侵入の痕跡は残したくない。

なので下水道とパイプラインを使ってこっそりと侵入する事にした。

ま、どうせバレるだろうけどな。

「おい、とつととそれを運べ、主任が待つてるぞ」

「へいへい、全くバックアップの取り忘れなんて死活問題だつてのに」

「ぼやくなよ。仕事だろ？」

などという研究職員達の会話を聞きながら排気ダクトや、特にカメラの死角を歩く。ここに来るまでにこの施設の警備システムにはすでに手を加えてある、もちろん、バレないようにだ。

もう少し時間がたてば人は減るかもしれないけど、時間もないし人が多い方がいざという時に脱出しやすい。

今回の目的は内部からのハッキングだ。外部からでは破れないセキュリティも内部からなら簡単に破れる。

なので、目指す部屋はサーバールームだ。

いくつか分散されているが、その中の一つに細工すればいい。

(さーつてと、こゝこゝまでは順調)

変装したりカメラの向きを変えたり注意をそらしたりと、色々な手段を用いてやつとサーバールーム前にたどり着いた。

今俺がいるのはサーバールーム正面通路にある換気ダクトの中だ。

正面と言つてもここからサーバールームはかなり離れている。

ここから落ちて侵入すれば楽なのだがそこは学園都市の研究所。ここへの侵入は容易じゃない。

セキュリティは完ぺきで、入れる人数も限られていて声紋や指紋は誤魔化しが効かない。

(ここ)でコイツの番つと)

懐からPDAを取りだし、操作する。

——ウイーンウイーン

すると1分もせずに研究員と武装した警備員達が駆け寄ってきた。

「なんだっ!? 火事か!」

「分かりません、カメラには何も異常は見られなかったのですが、今開けます!」

望遠メガネでその様子を確認した俺は次に演算銃器を取りだした

演算銃器で発射するのは通常の弾薬ではなく、先端に液体が入った特殊な弾薬だ。

「空きました!……みた所何も異常は見当たりませんか?」

職員達がサーバー内を慎重に探索しているのが、内部の監視カメラをハッキングした映像で確認出来る。

しかし、異常は起きていないのだから見つかるわけがない。

「異常なし、ただの誤報だ。念の為警備システムのチェックをしてくれ」

やがて部屋の隅々まで調べた所員達が出てきて、ドアを閉めた。

(システムチェック程度じゃ無駄だぜ、っと)

ドアが閉まって行き完全に閉まる寸前、ルームの一角に狙いを付け、撃った。

極小の弾丸は音もなく発射され、誰にも気付かれる事なくルーム内のサーバーに当たった。

弾丸はサーバーに触れた瞬間に弾けて、透明な液体をばら撒いた。

(これでよしっ……ハッキング完了。データ受信開始)

PDAには次々と実験に関するデータが送りこまれてきている。

今撃ったのは俺が作った特殊な液体をサーバーに付着させる為の弾丸。

この液体はデータを吸い出し、俺のPDAに送信させる送信機の役割を持っている。

俺特製で名前もまだないが無色透明で空気に触れると5分で蒸発してしまい、痕跡は一切残さない。

普通にサーバーにハッキングしても良かったけど、念には念を入れた。

まずは、警備システムを誤作動させサーバールームのドアを所員達に開かせ、わずかな隙を狙い演算銃器で音もなく液体をサーバーに振りかける。

普通の銃器では、当たった瞬間にサーバーを傷付ける事なく弾を弾けさせて液体を振りまくなんて芸当出来ない。

直接液体を振りかける事が出来ればこんな手間をかける事はなかったけど、それは仕方ない。

(データ受信完了……とりあえず、ここから移動するか)

今いるダクトは狭く複雑な構造をしているので、結構無理な体勢をしている。

データ受信が終わったのでこんな所にいる必要はない。

来た道は使わず別ルートで研究所の上層階へと向かった。

その途中にある少しだけ開けたベースで、改めてデータの閲覧をした。

本当はセーフハウスに戻ってからの方がいいけど、この研究所で何か出来る事があるかもしれないので残る。

(絶対能力進化と幻想支配について……俺が知りたかった事とは微妙に違うけど、これも興味深いな)

このデータによると、俺の能力である幻想支配はレベル5との接触によって、レベル6への進化の道筋を探ったが結果は芳しくなかったようだ。

一方通行と第六位以外のレベル5と偶然接触した事はあったが、あれは全て意図された事だったか。

で、次に一方通行の能力をコピーして絶対能力進化実験の代理を行う事も計算されたが、結果として代わりにはならないという結論が出された。

(幻想支配の能力は幻想殺し以上に未知数であり絶対能力進化への誘導は不可能。また一方通行と戦闘した場合、幻想支配が勝つ確率は100%であると出た為、代理にはならない……だと?)

つまり、俺が一方通行と戦った場合、俺が勝つと言う結果が既に出ていて、尚且つ俺じゃレベル6にはなれない。

他に分かった事がいくつかあった。

——あ、そうそう。実験だけど、一方通行を殺しても無駄だぞ？

アイツがああいった理由が分かった。

一方通行を殺したとしても、それは予測範囲内であり実験は違う形で続行されると言う事だ。

早い段階で俺が一方通行に勝てる出ている以上、代案を用意しない程あいつらは甘くない。

具体的なプランは分からないが、それを探ってから対処するよりも一方通行には手を出さない方が早いだろう。

(でも、これですますます実験の本当の目的が分からなくなったな)

どうも一方通行が妹達を2万人殺せば終わると言う実験にはどうしても思えない。

この実験が終わった後の展開が読めない。

暗黒の五月計画や体晶実験など俺が今まで潰してきた実験は成功した後の展開が読めていた。

けれども、この実験は読めない。

まるで……成功する事が前提に入っていないかのようだ。

綿密に計画されているように見えて、目に見えない矛盾や穴が見えてくる。

一番の穴は、一方通行が現時点でレベル6に最も近い学園都市『最強』の能力者という前提で動いている事。

確かに一方通行は能力者の中では最強だ。

なのに、レベル0認定の俺には早い段階で負ける事が分かっている。

(なんだ、この焦燥感は。嫌な予感とでも言えはいいのか)

言葉に言い表せない焦りが、違和感と共に湧いてくる。

おかしい。何かがおかしい……けど、何かがおかしいのか分からない。

(尼視が何か仕掛けたのか、俺に?)

そんな事をされた覚えはないけど、アイツの事だから俺が気付かないように行く先々で飲み物や食べ物に何か混ぜたりするくらいはする。

(くそつ、もう一度ハッキングするか? いや、ここでは危険だな。ばれないうちに他へ

移動しよう)

他の研究所へ移動しようとした時、ふと通路での研究員達の会話が耳に入った。

「で、実験の進捗状況は？」

「勿論、順調ですよ。問題はありません」

その会話が耳に入った時、猛烈な違和感に襲われた。

近くにあった通気口ダクトを静かに覗き込む。

今いるダクトの下は休憩室になっているようで、2人の所員が話をしていた。

実験が……順調？ どう言う事だ？ 昨日の夜に延期となつてまだ再開されていな

いはず。

「先程、第9944次実験が終了したそうです」

……今、何と言った？

「連続した戦闘データの収集が目的ですが、一方通行に疲労はないですね」

「それはそうだろう。アイツならクローンを何千人相手にしても疲れるほどの戦闘にはならないさ」

9944次実験の終了、それが意味するのは……妹達が現時点で一方通行に、9944人殺されたと言う事。

つまり、その中には当然、9939号であるミクも……

（つ、そんなわけあるか！ あいつの怪我はまだ治ってない。そんな状態で実験を強行しても結果に響くだけだ！）

高鳴る心臓を抑え、深く深呼吸をした。

ここで興奮しても見つかるだけだ。

まずは落ちついて……いられなかった。

（もう、見つかるリスクとか関係ない！）

ダクト内を通り、研究室に入りこみ内部から急いでハッキングを仕掛けた。

最初からこの手を使わなかったのは、内部アクセス履歴がどこかに痕跡として残ってしまう事を防ぐためだった。

PDAからの外部ハッキング、研究所内からの内部ハッキング、どちらも痕跡が残るリスクはあった。

だから、手間がかかる手段を取ったのだが、この際どうでもいい。

今は確実に早く情報が手に入る手段を取る。

「……頼む、まだ延期されていてくれ、ミク」

無意識に口にしてしまった。

「実験経過報告、これだ！ 実験は9944まで滞りなく終了……な、に？」

9939次実験は……他の実験同様の結果で終了していた。

終了時刻は、ミクと別れてから30分も経っていなかった。

ちようど俺が昨日実験に乱入してから12時間後に開始されていた。

「第9939次実験において、乱入者を装つての実験中断、再開する事によつて予想外のアクシデントを盛り込む計画だった。当初の予定より若干のズレが合ったとはいえ、予定通り12時間後に再開……くそっ!!」

思いつきり近くにあつた机を殴り、椅子に倒れこむように座つた。

机が凹み、拳から血がにじみ出ているが気にする余裕はない。

「……元々、ミクの時に乱入者は用意されていた展開だった？　つまり、俺が乱入していなくても実験は一時中断されて、12時間後に再開された……だと、ふざけんっ!!」
今にして思えば、病理のタイミングがおかしかった。

俺の行動を先読みして、病理を送りこんだのかと思つていたが、それにしてもタイミングが良すぎた。

「っ!?……つまり、木原病理が乱入者役だったのか!!」

あんな深夜にあんな場所でどうやって乱入を装うつもりだったのか、それは分からな
い。

けれども、結果として俺が乱入者役に……そこまで考えて、違和感が頭の中をかけめ

ぐった。

基本車いすの病理が乱入者役では、不自然すぎる。

「まさか……俺が乱入する事も、最初から予定内だった？」

俺が乱入する事が予測範囲内だったのではなく……俺が乱入する事こそ、9939実験の要だったと言う事。

病理は俺が一方通行を殺さないようにする為の、保険であの付近にいた。

他にも色々仮説は立てれるが、一番違和感がなかったのはこれだ。

「俺は……結局、良いように利用されていったってのか！」

サプライズ、一方通行が言っていたように昨日の乱入は一方通行にしてもミックにしても俺にしても、まさにサプライズだったのだろう。

——ミック、それがミサ、ミックの名前……ミック。

脳裏にミックとの会話が浮かんでは消えていく。

——それは……不可能です。ミックはやはり実験に参加する事に存在意義があります。とミサ力は若干辛そうに答えます。

ミックは、実験を拒否したのだろうか？ その事については全く触れられていない。

——あなたのアシスタント、ですか？ いえ、それよりも実験が中止？ とミサ力は動揺しながら尋ねます。

何がアシスタントだ！ 助けた事すら実験の一部に組み込まれていた事に気付かず、俺はミクに……生きる希望を抱かせた。

「俺は……なんて、馬鹿なんだ!!」

学園都市の闇？ そうだよ、コレが闇だ。

テレスに散々中二病とか言っておきながら、俺はまんまと闇に踊らされた。

「俺は、ただのピエロだ!」

頭の中を色々な感情が駆け巡っている。

怒り、憎しみ、哀しみ……こんな事は初めてだった。

でも、それ以上に浮かぶのは……

——はい、御馳走様でした。それと、素敵な名前ありがとうございます、ユウキさんとミサカは顔をあつくしながら見送ります。

ミクが最後に見せた笑顔だった。

それから何分、何十分か俺は凹んだ机に顔をうずめていたが、涙は出なかった。

そんな事よりもっと他の事を考えていた。

それは、これからどうするかだった。

「いいぜ、俺が一方通行を殺しても実験が止まらないって言うなら……一方通行以外、ミナゴロシにしてやる」

次の日、とある研究所が実験の失敗によって炎に包まれ、勤めていた所員が全員死亡したと言うニュースが学園都市に流れた。

続く

第70話 「毒」

8月15日 夜

「……壊滅、完了」

廃ビルで目標の沈黙を確認して、その成果をPDAで見る。

「妹達の身体データの詳細、やっと手に入れた」

数日前、ミクの死を知り半ば衝動的に所員を皆殺しにして研究所を爆破したけど、我ながらアレは目立ちすぎた。

ニュースや警備員の情報を見ると事故に見せかける事には成功している。

だけど、上には俺の仕業と気付かれていますと見た方がいい。

だから、次からは爆発事故ではなく、ガス漏れ事故を装った。

勿論、研究所に侵入して毎回皆殺しでは、すぐに潰される。

なので、出来るだけ痕跡を残さず誰にも見られずに心がけた。

まあ……あの時はめっちゃくちや頭に血が上って、上り過ぎて冷静になったから……と
思っておこう。

それから俺は実験を止める為に色々データを集めた。

仮に実験が終わった場合、妹達がどんな扱いになるか分からないが、身体的な問題がある可能性が高い。

クローンであり実験体として生み出された以上、寿命が短く設定されている可能性が高い。

それをどうにか出来なければ、本当に救われた事にはならない。

なのでまずは妹達の身体データを手に入れる事にした。

だが、妹達と実験に関わるデータは簡単に手に入るレベルでは詳細が分からないようになっていた。

詳細なデータは数多くの研究所にバラバラに保管されていて、一つや二つの研究所にハッキングした程度じゃ手に入れられなかった。

美琴ならもつとストレートに出来ただろうけど、ある意味当事者とは言えアイツを巻き込むわけにはいかない。

「……そろそろ出てきたらどうだ、一元春？」

独り言を呟きながら、屋上の一角に銃を向ける。

月明かりの死角からいつも教室で浮かべるような笑みを浮かべながら、銃を向けた元春が出てきた。

「流石はユウヤン、気付いていたか」

「んで、こんな所にこんな遅く何の用だ？」

妨害はあると思つてたが、意外に遅かった。もつと早く来るかと思つたし、それに元春一人が来るとは思わなかった。

襲撃は数回したが、いずれも暗部の影はなく拍子抜けしていた所だった。

だからこそ研究員を皆殺しにするのは『最低限』で抑える事出来ただけだ。

「いやあくあそこの研究所でガス漏れ事故が発生したつて聞いて、ちよつと様子を見に来たんだけよ。最近色々な研究所で事故が多発してるからにやゝ怖い怖い。それにしても野次馬が俺の他にもいるとは思つてなかつたにやゝ」

元春は表向きの声をしているが、サングラスの向こうから僅かに見える目は裏の目をしていた。

「そうだな。研究所つてのは危険な物質を沢山扱つてるから、少しのミスが大惨劇なんて事も珍しくないよな」

「そのミスがこうも続くつても、偶然とは恐ろしいもんだぜい……さてと、本題に入ろうか」

そこまで言つて場の空気がさつきよりも冷たくなった。

「やりすぎだ」

元春がどこまで知っているのかは分からなかったが、今の一言だけで少なくとも絶対能力進化実験の事を知っているのが分かった。

流石は多重スパイ、ある種俺よりも裏の事を知っているだけはあるな。

「やりすぎ？ 違うぜ、元春……まだまだやり足りない、ぜ！」

——ドドン

俺が発砲するのと、元春が撃つのはほぼ同時だった。

互いの弾はハズレ、俺と元春が柱に飛びこむ音が響く。

「元春、邪魔するなら、お前でも容赦はしない」

「いやあくその顔に口調、まるで昔のお前に戻ったみたいだな。嬉しいような悲しいよ

うなだぜい、ユウキ？」

昔の俺。元春と初めて出会った頃の俺か。

「そういうお前は、相変わらずだな！」

懐から煙幕爆弾を取り出し投げつけた。すぐ当たり一面に煙幕が立ちこめる。

息を止め、目を瞑り煙幕の中をかけ、元春に向けて銃を撃つ……より先に足元に銃弾

が当たった。

「お前のテリトリーには入れさせないぞ」

「ちっ」

やっぱ組んでいた時期が長いだけあって、元春は俺の戦術は知り尽くしているな。

それにアイツは俺を相手にする時の手段も色々考えているはずだ。

下手に自分のペースに持ち込もうとすると、こっちが危ない。

それに今ここで元春と遊んでいても、時間の無駄だ。

だったら、ここは撤退する方がいい。

耳栓を両耳にはめて、手持ちの爆弾を確認する。

今回はあまり持つてきていないが、それでもここを抜けだすには十分だ。

「悪いな元春。生きていたら新学期に学校で、な！」

懐からビー玉大の小型爆弾を無造作に投げる。と、同時に隣の廃ビルに向かって飛ぶ。

さつきなげた小型爆弾に殺傷力はないが、閃光弾と煙幕弾、それに神経を一時的に麻痺させる特殊な音波を発生させる。

サングラスをかけた元春に閃光は効かないし、煙幕も効果は薄い。だが、神経麻痺を引き起こす音波は防げないはず。

これで時間が稼げる。と思ったその時、廃墟と化したビルの一角に不釣り合いな物を見つけた。

「……ん、あれは、折り鶴？」

よく見れば部屋の一面に小さな紙片が散乱していて淡く輝きだし、その周りを囲むようにフィルムケースに入った折り紙が置いてあった。

なぜここに真新しく折られた折り紙があるのか、そんな事よりもその折り紙から【魔力】を感じた事に驚いた。

そして、なぜか散乱している紙がどこか魔法陣にも見えた気がして……すぐにその場を離れようとした。

『悪いなユウやん。生きていたらまた新学期に学校で会おうぜ』
そんな声が脳内に直接響くと同時に、大爆発が起こった。

「つつく!! くそつ、元春の奴。やってくれたな」

体の至る所がズキズキと痛むが、どうにか無事だ。

息を整えながらふり返ると、4階建ての小ビルがまるまる吹き飛んでいた。

「よく逃げられたな、俺」

あの時、窓から飛び出しワイヤーガンを使い、どつかの蜘蛛男のように空中を飛び出るだけビルから離れる事が出来た。

しかし、少しでも反応が遅ればあの爆発に巻き込まれていただろう。

ここら辺一体が区画整理や立て直しかで、廃ビルばかりだったのが不幸中の幸い

……いや、だからこそ元春はあんな派手な事をしたんだろう

「てかあのやろお、魔術使えたのかよ」

能力者に魔術は使えない。使えばどうなるか、それはこの前の三沢塾の時にイヤって程見せつけられた。

全身が斬り裂かれたようになり、死ぬ危険性が高い。

「いや、アイツの能力はレベル0とはいえ肉体再生、多少は融通が効くって事か」

魔術による肉体ダメージは能力によって少しは回復する。それによって元春は魔術を行使しても大丈夫と言う事なのだろう。

「全く土御門元春は能力者であり魔術師でもある。なんてずっと前に分かっていた事なのに……可能性を考慮しなかったとは、何やってんだ俺」

少しばかり頭に血が上り過ぎていたようだ。

ミクを救えなかった事で感情的になり、手当たり次第に皆殺しなんてらしくない事をした。

道端に座り込み、見上げた空には綺麗な月が浮かんでいた。

それを眺めながらこれからどうするかを考える。

元春は俺を始末しに来たわけじゃないな。

もし、俺を殺す気なら追撃をしてくるだろうし、元春だけを寄こすはずがない。

「警告のつもり、か？ 随分甘い事だ。でも、今後の事を考えると研究所を襲撃は止めた方がいいかもしれない」

実験中止後妹達に何かあった時の為に、専門家や設備を減らすのは得策じゃない。データの収集や破壊のみをした方がいいだろう。

警備員や風紀委員がやってくる気配はまだないので、少しばかり夜風に当たって頭を冷やす事にした。

しばらくくじつとしてしていると、少しずつ頭の中にある靄が晴れていくような感じがした。

「もう、いいか。ひとまず近くのセーフハウスに……っ!？」

移動しようと思ったその時、唐突にこちらに近づいてくる人の気配を感じ物影に隠れる。

最初は警備員か暗部の後処理係かと思ったが、足音は1つしか聞こえてこない。

足音から女性、いや、女の子のようだ。体格は美琴くらい……ん？ 美琴くらい？ 嫌な予感があったが、人影の後ろに回り込み後頭部に銃を突きつけた。

「動くな。俺に何の用だ、妹達？」

銃を突きつけた後頭部にはゴーグルが付いていた。

「あなたに敵対の意思はありません。それにしても、私の気配に気付いて背後をあつさ

りと取るとは流石ですね。とミサカは感嘆しながら答えます」

振り向いた妹達の1人、御坂妹と呼ぶか。その御坂妹は相変わらずの無表情でこちらを見上げた。

他に妹達がいなかったかと思渡したが、少なくとも近くにはいないようだ。

「だからお前らは言葉だけじゃなくて、せめて少しは驚いた顔をしろよ。つて、お前は一度会っているよな？ ミク、9939号の御坂妹を運んだ時に最後に挨拶した奴だろ、お前は？」

よくよく見るとこの御坂妹は会った事がある。

ミクと初めて出会った時にいた妹達の1人だ。

それを聞いて御坂妹は動揺したかのように大きく目を見開いた。

「私の検体番号は10032号で、あなたとはあの時確かに会いましたが、ミサカの区別が付くのですか？」とミサカは驚きながら尋ねます」

10032か、こりやまた番号が飛んだな。

「区別と言うか、一度会って言葉を交わした人の事は忘れないだけだ」

流石に完全記憶能力とまではいかないけど。

「それでも見た目も何もかもが同じミサカの区別が付くとは、やはりあなたはとても変わった人ですね。とミサカは納得します」

「……そんな事より何しにきた？」

このまま話を続けていると、イライラが募るばかりになりそうなので無理やり話を切り替えた。

最初は元春と同じく俺を仕留める刺客かと思つたが、武器もなく無防備すぎる10032号を見て、その可能性は低いと判断した。

勿論、警戒は怠らない。

「ミサカはあなたに伝言を預かつてきました。とミサカは答えます」

「伝言？ 一体誰からだ？」

伝言と聞いて、何かそれ以上聞いてはいけない気がしたが、つい聞いてしまった。

「はい、9939号、いえミクからあなたへの伝言を預かっています」

「なっ？ ミ、ミクから!？」

ミク、その名を聞いて頭が真っ白になりかけた。

さつきも今までもずっと考えていたのに、ミクから伝言があると妹達の1人から聞かされて、なぜか動悸が激しくなった。

「伝えます……ユウキさん、この伝言をミク以外から聞いているのなら、ミクはこの世にはいません。それがミクにはとても辛いです。私は科学者達に言われたからではなく、自分の意思で一方通行に挑みます。実験のためではありません。あなたに出会って、名

前を付けてもらって、ミクはもつと生きてみたくなりました。あなたが実験を止めてくれて、あなたと一緒に生きてみたくなりました。だから、私は私の意思で実験に挑み、生き残ってみたくなったからです。ですが、私は死んでしまったのですね。ユウキさん、ごめんなさい、そして、ミクに名前と生きる目的を与えてくれて本当にありがとうございました。さようなら、どうかお元気で……と、ミサカはネットワークに残されたミクからの伝言を言い終わります」

目の前が真っ暗になったような感覚。数日前、ミクが死んだと研究所で知った時以上に胸の奥が痛くなった。

10032号の言葉はそのまま一語一句が俺の体に浸透してきた。

それでもその場に倒れこみそうになるのを堪え、無表情でこちらを見ている10032号に聞いた。

「……一つ、聞かせろ。なぜ、今俺に伝えに来た？」

ミクの実験が終わってから時間が経っている。

その間に俺に伝える事は出来たはず。なのに、10032号は今、このタイミングでわざわざこんな場所に来て俺に伝えに来た。

「……数日のあなたではまともに話を聞く事が出来ない。だけど、今のあなたなら大丈夫だろう。と言われこの近くの施設で待機していたミサカが伝言役になったと言うわ

けです。とミサカは質問に答えます」

「それは誰に言われた？」

「木原尼視という科学者からです。とミサカは質問に答えます。」

「尼視か……そうか、そう言う事か」

これで合点が言った。なぜ元春が1人で来たか。そして、その後タイミングよく御坂妹がやってきたか。

全ては、尼視のたくらみだ。

どういう意図があったのかまでは分からないが、元春の襲撃で頭を覚まさせ、ミクの遺言を伝える役を10032号に与えた。

全く、本当に俺が嫌がる事が大好きなクソババアだ。

暴走には制御を。そして、感情の再起動を。

「10032号、もういいぞ……しばらく、1人になりたい」

「分かりました。それでは失礼します。とミサカはこの場を後にします」

10032号が見えなくなったのを確認して、近くの瓦礫に思いつきり拳を叩き付けた。

「ちく、しょう……」

10032号と話をして、同じ顔と声をしていてもミクとは違うのだと改めて感じ

た。

そして、そのミクを死なせたのは、俺だと言う事も……

「ミク……すまない、俺の、せいだ」

ミクが死んだと知った時よりも、もっと強く深く俺に突き刺さってくる。

ミクは俺と生きたいが為に……俺のせいでミクは自分から実験に参加する意思を見せたと言う事。

「ちくしょう、ちくしょう……ちくしょおく!!!」

拳を地面に何度も叩きつけた。涙もとめどなく溢れてくる。

こんなに泣いたのは、何年ぶりか分からない。

あの時のようにドス黒い怒りが俺の中を埋め尽くそうとするが……

——ユウキさん、ごめんなさい、そして、ミクに名前と生きる目的を与えてくれて本当にありがとうございます。

ミクの遺言が、真っ白に塗りつぶしていく。

2度目の感情の波が押し寄せてくる。

しかし、1度目とは違う。殺意と敵意よりもっと深い悲しみが俺の中から溢れてくる。

「うわああああ〜!!!」

それはまるで、猛毒のように俺をジワジワと苦しめていった。そして、この時から俺は何かが変わって行ったのだと思う。

続く

第71話 「偽物」

8月16日

あれから眠れぬまま朝を迎えた。

セーフハウスに向かう気力もなく、ベンチに座りずっと考え事をしていた。

「……馬鹿だな、俺。何してるんだろ」

殺して壊して、それでも何も変わらない。

自己満足にすらならない。

「ヒーロー、か」

自分に与えられた性質、ヒーロー。木原を制御し殺す為に全くの正反対の性質を植え付けられた。

尼視が目指す先は知らないし、その為に色々されてきた洗脳に近い実験の事もどうでもいい。

けど、その結果が今の自分なら……

「アイツなら、どうするかな」

ふと頭に浮かぶのは上条当麻、記憶を失っても何も変わらない超お人好し。

「止めだ。そんな事より、これからどうするか、だな」
いくら悩んでもキリがない。

それにミクの事を思うなら、行動あるのみだ。

「まずはコレを分析しないと。もつとも、これで全部じゃないようだけど」
昨日手に入れた妹達のデータが入ったステイックを取り出す。

どうやらあそこにあったデータだけでは、まだ不足しているみたいだ。

機密情報の分割保存。全てを知るためにはピースが足りない。

でも、俺は医学の知識も少しはあるし、遺伝子の事にもそれなりに詳しい。
だから今まで入手したデータを組み合わせる事で全体像が見えてくるはず。

既に入手していたデータを昨日見たけど、やはり妹達には遺伝子に欠陥があるよう
だ。

「【当然】 だな。実験のために生み出された妹達だ。そこまで長い寿命を設定する必
要は……っ!？」

そこまで口にして、思わず息を飲んだ。

当然、俺は確かに自然とそう口にした。

「……何が、当然、だ！」

近くの電柱に思いつきり頭を打ち付ける。

流石に頭が痛み額から血が流れ落ちたが、気には止めない。

「ははっ……やっぱりこうか、こうなのか」

妹達が実験の為だけに生み出された存在で、だから寿命を短くされている……それが、当然と無意識に納得しまった。

昨日まであれほどミクの事で怒り狂っていたのに、もうこれだ。

「やっぱり、俺は……木原だ」

科学の為に全てを犠牲にして、その事に疑問を持たない、木原一族。

赤ん坊の時に木原尼視に拾われ、勝手に木原と名付けられたと言っても、俺はやはり木原だ。

「……だとしても、俺が止まる理由には、ならない」

額の血を拭き取ってこの場を後にしようとしたその時、遠くのベンチに膝を抱えて座り込む常盤台の服を着た少女が見えた。

そして、その少女はともよく見覚えのある顔をしていた。

「美琴？　なんでこんな時間にこんな所……まさかっ!？」

憔悴しきった顔と汚れた制服、見るからにボロボロのその姿を見て嫌な予感がした。まさかとは思うが美琴の奴、実験を知った？

声をかけるかどうか木陰に隠れて様子を窺っていると、美琴に近付く人影が見えた。

「久しぶりね。ベンチで夜明かししている不良少女がいると思えば……」

美琴に声をかけた少女は俺もよく知るウェーブのかかった髪とジト目が特徴的な先輩、布束砥信だった。

どうやら砥信先輩も実験に関わっているようで、美琴とは面識があるようだ。

少し意外だったけど、妹達に知識を植え込む学習装置の監修をしていた砥信先輩なら関わっていても不思議じゃない。

「あの実験に関わっている人間、みんなイカレてるわ」

美琴の言葉が胸に突き刺さる。砥信先輩は理非善悪とは少し違うと言っているけれど、あまり違っているとは思わない。

科学を第一に考えている連中は、ほとんどイカレていると自覚している連中ばかりだ。

いや、自分からイカレたと言った方がいいか。そして、その最先端が木原だ。

「アンタがマネーカードをバラ撒いていたのは、実験を妨害する為なんでしょう？」
「そうね」

これには驚いた。まさか砥信先輩が実験を妨害する為にすでに行動していたなんて。

俺の知る限り、砥信先輩がそっち側に周るようなタイプには思っていなかった。

「彼女の方が、ずっと人間らしいと思ったから……」

彼女が以前に調整に立ち会った妹達の1人。彼女は初めて研究所の外に出て空気の香りと風、太陽の光、世界をまぶしいと言った。

そんな彼女を見て、砥信先輩は科学で汚れた自分よりも人間らしさを感じたようだ。

ミクと出会った俺と……同じだ。

「あなたは彼女達をどう見るの？」

砥信先輩の問いに、顔を上げた美琴は死んだような目をしながらも、その表情には黒い決意が籠っていた。

美琴はそのまま暗い顔をしながら去って行った。

結局近くの柱の影に隠れていた俺の事には気付いていないようだった。

普段ならリーダーでこんな距離に隠れている俺の事が分からないはずがない。

それだけ、今の美琴は精神的に追い詰められている。

でも悪いが俺にも美琴にまで構っている余裕はない。

それに美琴なら、俺と同じ事を考えていても、同じ手段までは取らない。それは断言出来る。

もし、俺と同じ手段を使った時は……考えたくもない。

ともかく美琴の姿が完全に見えなくなつてから、砥信先輩の背後に忍び寄り背中に銃

を突きつけた。

「久しぶりですね。砥信先輩」

「っ!? ええ、久しぶりね」

先輩は俺の顔を見ると驚いたが、すぐに諦めたような顔になり溜息をした。

「Shoot。甘く見ていたわけじゃないけれど、もうあなたをよこすとは思ってなかったわ」

どうやら先輩は、俺の事を始末しにきた暗部の刺客だと思っっているみたいだ。

まあ、逆の立場ならそう思うかも。

「安心して下さい。俺は先輩を始末する気はないですよ……今のところは」

「kidding? ならこのタイミングであなたが現れた理由は何?」

「その前に1つ質問に答えてください。先輩は実験を止める気が、今もありますか?」

もしここで偽りの答えをされたなら、始末する事も考えた。

始末すると言っても命を取る以外の手段でだ。

「どうやらさつきまでの会話を聞いていたようね。私は今でも実験を止める気はあるわ。それで? それを聞いてどうする気なのかしら?」

先輩の目は、嘘を言っているようには見えなかった。

俺は銃を懐にしまった。それを見た先輩が更に怪訝そうな顔をした。

「incomprehensible こつちの質問に答えて。始末するつもりじゃないなら、私に一体何の用かしら? 警告?」

「違います。俺も、実験を止めたい側なんでね」

それを聞いて、先輩は何か考え込んでいたが、ハッと目を見開いた。

「まさかここ数日、実験関係の研究所で謎の事故が多発していたのは……てつきり彼女の仕業かと思っていたけれど、あなただったのね」

信じられないと言う顔をしているけど、気持ちは理解できる。

普通、俺はそういう側じゃない。

「ええ、俺の仕業ですよ。ちよつとデータを抜きとる [ついで] にね。美琴なら皆殺しより別のやり方すると思いますよ?」

自然に俺と先輩は美琴が去った方に目を向けた。

もう美琴はどこにいなかった。

「assent 甘い彼女なら確かにあんな事はしないでしょうね。でも驚いたわ。まさかあなたがあんな事するなんて……誰かの依頼? いえ、違うわね。あの実験の阻止なんて、あなたに依頼する関係者はいるわけないわね」

実験の事を知っていて、木原である俺にその破綻を依頼する。

本当に馬鹿げているというか、ありえない……わけでもないけど。

暗黒の五月計画やら俺が依頼されて潰した実験は結構ある。けれども、今回の実験は今までとは規模も何もかも違う。

実験や俺の事を知っている人ならば、この実験を中止させる事を俺に依頼出来るわけがない。

尼視は別だけど。

「ならあなたが私に用と言うのは、実験の事を聞く為？」

「正確には妹達のデータ、もっと言うなら寿命に関わる調整のためのデータです」

「……なるほど、私も考えなかったわけじゃないけれど」

それだけで砥信先輩は俺が何を言いたいのか理解できたようだ。

先輩は懐から小さなメモリスティックを出すと、俺に差し出した。

「念の為にとっておいた、と言うわけじゃないけれど、これをあなたに渡すわ。私が持っているよりも有意義に使ってくれるでしょ？」

俺は黙って頷き、スティックを受け取った。

今まで手に入れたデータと組み合わせる事で、きっと何かが見えてくる……はず。

先輩の持っているデータが全て俺の持っているデータと同じものだった時は、またどっかから入手すればいい。

「用事は済んだ。あまり俺と接触してない方がいいだろうから、じゃあな砥信先輩」

先輩にまであらぬ疑いや暗部の手が伸びないとは限らないし、これ以上関わらない方がお互いのためだろう。

「ええ……待って！」

去ろうとしたその時、先輩がふと何かを思いついたような顔をして俺を呼びとめた。

「あなたまだ実験を止める気なのよね？　なら、1つ依頼したい事があるの」

「依頼？」

何の依頼だろうか？　実験を止めると言う依頼は無意味だし。

「今はまだ準備が整っていないのだけど、数日中に連絡するから詳しい事はその時に、いわね？」

「分かりました。こっちも色々準備した事があるので」

いつ何をどうする依頼かを知りたいけど、こんな所で話す事じゃない。

俺も少し頭を冷やす時間が欲しい。こうしている間にも実験は繰り返されている。

だけど、こんな状態で動いても事態は好転しないばかりか、悪化してしまうだろう。

「それじゃ、その時が来るまであまり動かないでね。ただでさえ警戒が強い中、彼女が動き出すとますます動きにくくなるわよ」

「……でしようね」

今度こそ砥信先輩と別れた。

美琴が動く。それがどういう事になるか、予想はつきやすい事だ。

そして、砥信先輩が何を企んでいるか知らないけど、美琴が動く事を利用するみたいだ。

なら、俺はその動きを利用させてもらおうか。

砥信先輩と別れた後、俺は近くのセーフハウスに寄ってから第7学区のとある病院にやってきた。

依頼がある時か、俺が世話になる時以外でここに来るのはこれが初めてだ。

最も、病院なのだから当たり前か。

最近じゃ、錬金術師と戦って負傷した当麻の見舞いに来た時以来か。

夜間に来ればよかったのだろうけど、今は時間が惜しい

まだ診察時間前とは言え、なるべく他の医師や看護婦、患者に見られないように冥土帰しの部屋までやってきた。

ドアを開けるとカエル顔の凄腕の医師、冥土帰しがカルテとレントゲン写真を交互にらめっこしていた。

「誰だい？　なんだ、君か。珍しいじゃないか、君の知り合いは入院していないと思ったけどね？　それとも、君が診察を受けにかい？」

「久しぶりですね、先生。今日は別件、裏の用事です」

それを聞き冥土帰しの表情が変わった。

「どうやら、今までにない厄介事を抱え込んでいるようだね。君、ここ数日ロクに睡眠も食事も取っていないようだね？」

「っ、流石気が付きましたか。でも、それよりまずはコレを見てください」

隈が出来たり、顔色が悪いのは自覚していた。

だから、道行く人に不信感抱かれないように、化粧品などで目立たないようにはしていた。

「僕を誰だと思っているんだい？ 必要なら後で栄養剤を……これは!？」

俺が渡したメモリスティックの中を見て、冥土帰しの表情が強張った。

渡したのは実験と妹達に関するデータのコピーだ。

それから先生は10分ほど黙々とデータを見て、深く息を吐いた。

「なるほどね。量産型能力者計画は御破算になったと聞いたけど、で、これを僕にどうしろと?」

「見ての通り、御坂美琴のクローンである妹達は極端に寿命が短くなっています。先生ならどうにか出来ないかと……」

「ふう……まだはつきりとは何とも言えないよ。彼女を診れば一番だけど、そういう

わけにもいかないのだろうか?」

やはり冥土帰しとは言え、難しい問題か。

俺自身でももつと調べるつもりだけど、今後の事も考えて冥土帰しに任せた方が好都合だと思った。

「僕は出来ないとは言っていないよ。ただ、今すぐには解決策を出せないと言っているんだよ? 見た所彼女達に投与されている薬品に対する抗体と、ホルモンバランスの調整などが必要そうだけど、詳しい事はこのデータをよく見てみないと分からないよ?」

「……そう、ですか。それだけで十分です。ありがとうございます」

実験をどう終わらせるか、どう妹達を解放するか、色々大問題が山積みだけど、寿命に関しては……希望がある。

「気にする事はない、これが僕の仕事だからね。けど、実験を中止させてこの患者達を僕の所に連れてくるのは、僕の専門外だよ?」

「はい、それは俺の仕事です」

「結構。なら一先ず今はゆっくりと休養する事を勧めるよ。栄養剤は必要かい?」

「いいえ、ありがとうございます」

冥土帰しに礼を言つて病院を後にする。

休養を勧められたが、俺にそんな時間はない。

調べなければいけない事はまだ山ほどある。

まずは、10032号が言っていた「ネットワーク」について調べるか。

その時、美琴の言葉が頭に浮かんだ。

——私は……クローンを人間としてなんて見れないし、殺される事を受け入れている連中を助けようなんて思えない。

美琴、アレがお前の本心だなんて俺はこれっぽっちも思っていないからな。

続く

第72話 「暗部」

8月19日

それから数日間、美琴は暴れに暴れまくった。

俺がまだ潰していない実験関連施設を能力でハッキング。人的被害を出さずデータや機器のみ破壊。

残りは直接乗り込んでこれも人的被害を出さずに破壊。

「見事な手際だ。流石レベル5って所か」

俺の場合、痕跡を残さず事故に見せかけてって事は出来るけど、時間がかかるからな。美琴みたいなスピードじゃ出来ない。

「俺がやった破壊活動とは別物として考えられており、能力者の襲撃による可能性が高い事を踏まえ、実験の外部研究施設への引き継ぎと、暗部への護衛の申請……ちっ、やっぱるか」

最悪、でもないが予想していた中では悪い部類に入る展開だ。

引き継ぎ先がどこかまでは掴めないけど、今までよりも侵入が難しくなるのは确实。

暗部が動いたとなると……俺が動いても色々とヤバい事になる。

「動きにくくなるか、ま、俺がやりすぎた時にこんな動きが出なかった方がおかしいか。で、警備に当たる暗部は……って電話か」

セーフハウス内でデータ収集をしていた時、携帯が鳴った。

出てみると連絡してきたのは砥信先輩だった。

数日前にされた砥信先輩からの依頼は、先輩が収集してきた人間の感情データを、それを調整中の妹達にする手伝い。

この感情データを妹達の一人にできれば、ミサカネットワークによって妹達全体にインストールされる。

ミサカネットワーク、妹達が同一クロン体であり、電気操作能力者である事を利用して構築された脳波ネットワーク。

これによって妹達は自身の経験を他の妹達にアップロードしたり、どれだけ離れた場所においてもお互いの場所を瞬時に把握して通信を行ったりと多種多様な使い道がある。

今回、先輩はそのネットワークを利用して感情データを妹達全員にインプットする事を思いついた。

勿論、それで実験が中止になるとは先輩も思っていない。

俺や美琴がどれだけ施設を破壊しても、実験は中止にならない。それほどこの闇は深

い。

けれども、もし妹達に仮初でも人間らしい感情があれば、実験による死を恐れ、その姿に心動かされる研究者が増えれば、もしも、一方通行がその姿を見れば何かが変わるかもしれない。

俺は先輩からその話を聞いて、ミクの事が頭によぎった

ミクは生きたいと願い、その為に一方通行に挑んだ。

それはそれまで妹達にない感情が芽生えた結果によるものではないか、それなら今回先輩がやろうとしている事は既に行われている事ではないか、無駄ではないか。

それでも、俺は先輩からの依頼を受ける事にした。

先輩のたくらみが成功するに越した事はない。だけど、恐らく失敗する。

でも、その失敗を利用して俺はある事を知りたかった。

色々な施設に忍び込んで実験や妹達のデータを得たけど、それでも掴み切れなかった部分がある。

それを知るために先輩を、利用する。

『依頼が出来たわ、今日の夜動くわよ』

「了解。で、場所はどこでしたか？」

『あなたの予測した通り、Sプロセッサ社脳神経応用分析所よ、流石ね』

「あそこの施設はこんな大規模移設の経験ないから、先輩に手伝いを建前としてお願いすると思ったんですよ」

ただ単に感情データを妹達にインプットするだけなら、俺に任せればいい話だけど先輩は自分でずると言った。

美琴が派手に暴れたせいで研究施設のデータ移動が決定し、その混乱に乗じてデータを入力する。

Sプロセッサ社脳神経応用分析所、あそこは実験関連施設の中でも特に大きい。

大きい分、データを移設する作業は大規模になり、そんな作業が不慣れな連中は学習装置の監修を担当した砥信先輩に移設の手伝いをお願いするだろう、そう俺には簡単に予測がたった。

先輩も同じ事を思っていて、尚且つ、いざ問題が起きた時のスケープゴートとして自分が呼ばれる事も分かっていた。

『あなたはこうするの？ 私の助手として一緒に来る？』

「いえ、俺は裏からこっそり入りますよ。色々やりたい事もあるので。でも、もしもの時はすぐにかかけつきますんで、渡した発信機無くさないようにしてくださいね」

『certainty 暗部が来たら、頼んだわよ』

今回、俺が依頼された手伝いとは、暗部対策だ。

残った研究関連施設は2つ、そのどちらにも暗部が手配されているのは分かっている。

問題は、どの暗部が当たっているかだが、それは分からなかった。

分からなかったけれど、先輩が暗部に邪魔されないようにするのが俺の役目。

その為の小道具はいくつか用意したし、先輩に通信機能付きの超小型発信機も渡してある。

先輩の企みを利用する分、アフターケアは万全にしないと。

そして、その夜。Sプロセッサ社脳神経応用分析所に先輩が入ったと同時に、俺も地下から侵入した。

通常なら俺でも簡単に侵入出来ないほどのセキュリティが施されているが、急な移送の為にセキュリティが甘くなるのは予測済み。

それに外部ハッキングで稼働しているセキュリティはあらかた把握したし、侵入経路のカメラも抑えてある。

『私は何をすればいいですか？』

『ああいいえ、後ろに控えていて下されば結構です』

先輩が持っている発信機から、先輩とこの職員の会話が聞こえてきた。

どうやらこの施設のアホ職員達は先輩の事を微塵も疑っていない。

一番問題なのは、ここに美琴が襲撃して来ないかどうかだったけど、どうやらもう一つ残っている病理解析研究所の方を襲撃したようだ。

もし、美琴がここを襲ってきた場合の対処も俺の仕事、今の美琴には話をして分かるような精神状態じゃなさそうだし。

そういう意味では、まずは一安心。あとはここを警備している暗部がいつ動くかな。

「急げ！ もたもたしているとお前だけ置いて行くぞ！」

「そう言うならコレもつの手伝えよ！」

施設内部に潜入した俺は、服を着替え研究所員に紛れて施設内部を進んでいく。

途中何人かの所員と遭遇したが、移設作業でてんやわんやの彼らに見慣れない俺に不審を抱く余裕はない。

まあ、移設作業してる風に見せる為にダミーの荷物両手に抱えて、顔をうまく隠しているのも効果があるか。

そうやって施設内を周り、小細工を仕掛け終え先輩と合流しようとする所員の動きが慌ただしくなってきた。

『目的地に到着したわ。そっちは？』

「今そつちに向かつていますよ。それより、この奴ら、やつと気付いたようで今先輩を皆探しているみたいですよ」

『問題ないわ。すぐに終わるもの。「そうですね、もう超終わりです」なっ?!』

「っ?!」……発信機を潰されたか。それに今の声は、最愛」

どうやらここに配置された暗部は、アイテムのようだ。

で、最愛が先輩の目的に気付いて先回りして確保、と言ったところか。

大方沈利の指示だろうけど、的確だな。

とにかく急いで先輩の元に……と思いつつ、先輩の居る場所に到着。

「この通信機で一体誰と話をしていたのですか？ まあ、超手遅れでしょうけど、このま

ま連行します」

隠れつつ室内の様子を窺う。中には暗部の下っ端が数人と先輩を取り押さえている

最愛が見える。

その奥の部屋にシリンダーが見えた。中までは見えないが、あそこには調整中の妹達

がいるはず。

悪いな、最愛。と心の中で謝りつつ、閃光爆弾と携帯を取り出し、ゴーグルをかけて

準備完了。

まずは複数の発電機にしかけた爆弾を爆発させ、照明を落とす。

——ドガンッ!

「なっ?! これは一体何事ですか!?!」

「照明が!?!」

一瞬にして建物全体の明りが落ち、真っ暗になる。

すぐに予備電源が作動し、照明が元に戻ったがこれで終わりじゃない。

今のはただの合図、これで先輩は目を瞑ったはず。

続けて室内に閃光弾を投げ入れる。

——ポボンッ!

「ま、まぶしいっ!?!」

「目があ〜!?!」

目を瞑った先輩以外の税んの目がくらんだ所で、内部に突入する。

まずは取り押さえていた先輩から思わず手を離し、両目に手を当てている最愛に幻想

支配の能力停止で空素装甲を無効化。

「ウグッ!」

即座に急所に一撃を食らわせ、気絶させる。

残った雑魚達も素早く昏倒させた。

普段空素装甲で自動防御している最愛以外は、普通にやりあつても問題なく無力化出

来る。

「大丈夫ですか、先輩？」

「unbelievable 暗部の能力者を一瞬で無力化させるなんて、流石ね」

「そんな事より早く作業済ませてください。3分で脱出しますよ」

「こんなの30秒もあれば……できた」

先輩は流れるような手つきで感情データが入ったディスクをコンソールに入れて、データを入力し終えた。

これでガラスの向こうに眠る妹達の1人、検体番号19090号に感情データがインストールされた。

さて、これ以後はどうなる？

——ブーツ！

「エラー？ な、なんで!？」

呆然とする先輩が見ているコンソール画面には、ERRORとWARNINGの赤字がいくつも点滅していた。

どうやら19090号にインストールする事は成功したが、ミサカネットワークに流し込むのは失敗したようだ。

「やっぱり、こっぴどくなったか」

「っ！ い、今なんていったの？ やっぱり？ どういう意味よ、それは！」

「話は後で、ここから逃げますよ、先輩」

詰め寄ってきた先輩の手を取り、急いで部屋を出る。

遠くから多くの足音が聞こえてきた。

「やっと侵入者に気付いたのか、遅すぎだつての」

携帯を取り出し、さつき仕掛けたもう一つの罠を作動させる。

——ドドツ！

数か所で爆発音が聞こえ、また建物内が真っ暗になった。

さつきと違うのは、今回は照明が復旧せず非常灯も完全に落ちて完全な暗闇になった事だ。

「非常電源も落としたの？ ま、待つてそれじゃあの子が！」

発電機を全て落とし予備すら切った事で、あの部屋にいた19090号の調整に問題が出る事を先輩は危惧した。

「大丈夫ですよ。調整関係の設備は他とは遮断していますから、問題ないです」

でも、それくらいはちゃんと考えて処理している。

「そ、そう……それなら良かったけど」

真っ暗闇の中、俺は暗視ゴーグルを使っているが、何も無い先輩は俺の手に引つ張ら

れる形で走っていて足元がふらついている。

このままじゃ危ないので、先輩を担いで逃げる事にした。

「それより、ちよつと失礼！」

「えっ？　ちよ、ちよつと何をするの!？」

背中に担ぐよりもお姫様だっこの方が手つとり早い。

幸い、先輩は何も視えていないので自分がどんな状況なのかは……分かってない、はず。

「こつちの方が早いですよ、少しの間我慢して下さい」

「だ、だからってお姫様だっこする事はないでしょ!？」

「あ、やっぱバレバレですか?」

暗闇の中、何が起きたのか右往左往している所員を尻目に、俺は先輩を抱っこしながら脱出経路から外へと逃げ出した。

施設を飛びだし、停めてあったバイクに乗り急いでその場を離れた。

俺達が脱出した事にまだ気づいていないのか、追手がくる気配はなかった。

ひとまず、隣の学区にまで逃げた所で人気のない公園にバイクを停めた。

「いやあくそれにしてもいたのが最愛だけで良かった。理后か沈利がいたらちよつと面

倒だった」

もしくは配置された暗部がスクールだったら、ちよつと危なかつただろうな。

最愛は俺が先輩の手助けした事には気付いていないだろうけど、今度会ったら映画のチケットでも贈ろう。

「……あなた、こうなると分かっていたのね？」

しばらく俯いていた先輩が睨みつけるように俺を見上げた。

「ある程度の予想はしてました。勿論、先輩が成功する事を祈ってましたよ」

「よく言うわ。抜け目ないあなたの事だもの。こうなる事があなたにとつての成功だったんじゃないの？ ミサカネットワークのセキュリティがどうなっているか、それを突き止めるのがあなたの本当の目的、違う？」

無言で頷くと、先輩は深く息を吐いた。

そう、俺の本当の目的は、ミサカネットワークのセキュリティの解明。

ミサカネットワークの存在を知った時、いや、妹達の事を知った時からずっと考えていた事。

それは2万人ものクローンをどうやって管理するか？

ましてや2万のクローンが脳波ネットワークで繋がっているのなら、1人でも学園都市の敵に悪用されてたら連鎖的に妹達全員が敵の手に落ちる事になる。

今回先輩がやろうとしていた事は、まさきとうってつけだった。

ミサカネットワークに外部から正規とは違ったルートで情報を入力しようとした場合、どうなるか。

その答えがアレだった。

「私もヤキが回ったわね。まさかあんなセキュリティをいつの間にか用意していたなんて……」

「先輩はこれからどうしますか？　ほとぼりが冷めるまで逃げると言うのなら、逃走手段は俺が用意しますけど？」

先輩は今日の騒動の犯人として既に知れ渡っているはず。

最愛と他の雑魚に現場を目撃された事が決定打となって、暗部から追われるだろう。

例えばあの場の全員を口封じで殺しても、先輩が訪問した直後にこの騒動が起こった事で真つ先に疑われるのは明白だ。

「いいえ、これ以上世話になるわけにはいかないわ。それに暗部に捕まる事はとつくに覚悟できていた事だし……ここで別れましょう」

見るからに傷心し切った先輩は、そのままいざこかへ去って行った。

俺も実験の妨害で派手な事してきたが、なぜか目をつむられてきた。

だから、先輩もひよつとしたら……なんて甘い考えは起きなかった。

先輩はすぐに他の暗部に捕まり、スタデイと言う組織に売られそこでまた事件があった。

だが、俺はそれに直接かわる事が出来なかった。

結局、あれが先輩と交わした最後の会話になった。

続く

第73話 「本物」

8月21日

某研究所内

「……………ここにもいなかった、か」

砥信先輩と別れてからずっと、実験のデータが移送された施設への侵入・内部ハッキングを繰り返してきた。

勿論、侵入とハッキングの痕跡は残さなかったし、誰にも見られず傷付ける事もなかった。

そうまでして俺が探しているモノ、それは打ち止め（ラストオーダー）と呼ばれる妹達の1人。

一昨日の一件で分かった事、それは打ち止めという個体がミサカネットワークを管理する権限をもった個体である事。

他の個体と同じく培養液の中なのか、それとも自由に動き回っているのかは今も分からない。

打ち止めを探しだしてどうするかは、迷っている。

人質にしても全く無意味、ならば実験を中止にするような命令をさせようかと思ったけど、効果があるのかは疑問だ。

とはいえ、他に実験を妨害する方法が浮かば……ない。

ともかく打ち止めを探し出すのが先だ。

それにしても……

「打ち止めの情報がなさすぎるのが気になるな」

データ移送がされたとは言え、実験主要施設ではなく外部施設だから打ち止めに関する情報が全くないのかもしれない。

もしくは、今までが色々と情報が簡単に手に入り過ぎていたのがおかしい。

俺が実験阻止のためのデータ収集をしていると知って、重要度が比較的低いデータを数打ちで出す事で、本当に隠したいデータにまで手が届かなくなるようにしているのか、ここならありえる話だ。

今に至るまで、俺に何の妨害も中止命令も下されていないのがその証拠だ。

「くそっ！ こんな事でいつになったら実験を中止出来るんだ！」

思わず近くにあったモニターを殴りつけた。

すると、衝撃でモニターのスイッチが入ったのか同列施設への侵入者情報と共に、カメラの映像に切り変わった。

目を向けると、そこには美琴の姿があった。

「美琴、まだ施設襲撃を続けていたのか？」

一昨日、美琴は病理解析研究所で沈利や理后達と交戦したのは知っている。

昨日は何も行動を起こさなかったので、何かあったかそれとも襲撃を諦めたのかと思っただが、今回また再開したようだ。

それも移設先の施設、183か所全てを標的にしているのかもしれない。

「それにしても、なんて顔していやがる美琴！」

美琴の電撃によってカメラが破壊されていき、俺はその度に切り替えていった。

モニターの中の美琴は笑っていた。

施設を破壊しながら浮かべる笑みには、狂気しかなかった。

『アハツ、アハハハハツ……』

「ダメだ、美琴。そのままだと、お前も闇に引きずり込まれる！」

電撃による破壊活動のせいか映像がこちらに送られてくるだけで、こちらからは映像も音声も送れない。

美琴のいる施設は、昨日侵入したうちの1つでここから近い。

急いで向かおうとした、その時だった。

『うるさいっ！ ならどうすればいいってのよ!? どんな方法があるっていうのよッ

！』

痲癩を起した美琴の電撃が周囲を破壊していく、幸いカメラには当たっていない。このカメラに気付いていないのか？

『ハッ……ハア……アツ？』

その時、美琴が何かに気付いたように、恐る恐るモニターの1つに目を向けた。

さつきの電撃の影響でモニター画面が粗くなり、何が映っているのか明確にはこちらでは確認できない。

調整しながらカメラをズームする事で、ようやく分かってきた。

「どっかの路地裏に倒れる……妹達!」

妹達の1人が誰かに電撃を浴びせるが、それをそのまま跳ね返されて悶え苦しんでいる。

明らかに実験の映像だった。それもどっかの路地裏で行っているものだ。

肩から激しく血を流し倒れこんでいる妹達の元へ歩み寄ってくる人影があった、一方通行だ。

『あ、ああ……やだっ』

美琴はモニターに向けて必死で手を伸ばした、届かないと分かっているでも伸ばさずにはられない。

そのモニターの向こうでは、一方通行が妹達の傷口に指を刺し込んでいく。

『やだ、やだあ、やめて……やめ、っ!?』

美琴の手の中で、妹達が爆ぜた。

モニターいっぱい広がる赤い血。

まるで美琴の手が妹達の血で染め上げられていくかのようだ。

『うつ……うつ……』

静かに泣き崩れていく美琴。その小さな泣き声がやけに耳に入ってくる。

気が付けば両手からは血が滴り落ちていた。

無意識のうちに爪が食い込むほど、両手を強く握りしめていたようだ。

「やって、くれたな……やってくれたな、アイツらあ……!!」

あんなに激しい電撃の中で、実験の様子が映し出されたモニターだけが正常に映るわ

けない。

美琴が襲撃していると分かり、誰かの手によってわざと映し出したとしか考えられな

い。

そして、そんな美琴の様子が、俺がいるこの施設の、この部屋の、このモニターに、このタイミングで映し出されるはずがない!

「そうかよ。そうまでして墮としたいのか、美琴を、俺を!!」

上層部がどんな目的かは知らないけど、俺と美琴を地獄の底すら突き抜けさせたいらしい。

「上等だ。俺は底なし沼地獄で生まれたんだ。これ以上どこにも落ちようがねえ……けど、美琴までそうはさせねえぞお！」

このままだと美琴がまずい。精神的に壊れるか、自暴自棄になつてしまふ。だから、まずは美琴を見つけるのが先だ。

「でも、その前に……ふんっ！」

——ドンッ！

近くの柱に思いっきり頭をぶつけて、興奮を冷まさせる。

あの時のように頭に血がのぼったまま暴れても裏をかかれるだけだ。

でももう限界だった。ミクを死なせた数日前とは違う。

今度こそ、徹底的に、全てを破壊する。

一方通行を、実験に関わった人間を、そして、それでも尚実験を続けようとする全てを、今度こそ皆殺しにする。

本当は、最悪の場合として打ち止めを見つけてから実行するつもりだった。

冷静に、確実に……今度こそ皆殺しにする。

「はい、下がって下がって。ここから先は危険だから立ち入り禁止ですよ」

「……だよなあ」

すぐに美琴がいた施設に向かったが、空振りだった。

施設は火の海と化し、警備員が辺り一面を封鎖していた。

無線を傍受すると、施設内部に生体反応はなく、美琴は既に逃亡した後のようだ。

また、この火事も今まで通り不審火として処理される事も分かった。

「関係ねえ」

呆然と立ち尽くす研究員達を皆殺しにしたかったが、人が多すぎたので諦めた。

あいつらは後で殺す。

それから美琴を探そうとしたが、監視カメラなどには反応はなくどこにいるのかは分からなかった。

恐らく、これからアイツがする事を誰にも邪魔されたくないから映らないようにしているか、カメラを操作しているかだろうけど。

「それとも、こんな時間だから一度寮に戻ったか？ いや、それはないか」

最後に見た美琴の目、あれは死ぬ覚悟を決めた目だった。

だったら今更門限を気にするはずがない。

しかし、最後に黒子に会いに……どうもモヤモヤするから、それもなさそうだ。

一度アジトでちゃんと探そうかと、ふと上を見上げると、風力発電のプロペラが回っているのが見えた。

周りにいくつかプロペラがあつたが、回っているのは一部だけだ。

「風もないのになんで……っ、そうか！ これだ！」

まだ頭に血が上っていたみたいだ。

冷静に考えれば美琴の居場所なんてカメラで追わなくても、他に方法はいくらでもあつた。

その中の一つがこのプロペラだ。

プロペラは風を受ける以外にも、モーターに特定の電磁波を浴びせる事によって回転する。

これが常に電磁波を発し続けている美琴への道しるべになる。

「よしっ、これおを追えば……んっ？ えっ？ 当麻？」

バイクを走らせようとした時、脇を走るツンツン頭が見えて思わず声をかけた。

「おわつと！ な、なんだユウキか。こんな時間にどうしたんだ……っ、つて今はそれどころじゃない。悪い、ユウキ！」

なぜこんな所で子猫を抱えて全力疾走しているのか気に放ったけど、急いでいるようだったし俺も急いでいるので構わないでおこうと思った。

が、突然ビル風が吹き、当麻のYシャツがめくられて腰に隠すように差さっているコピー用紙の束が見えた。

一瞬、ほんの一瞬だけそこに書かれている文字が、妹達と書かれた文字が俺の目に止まった。

「おい、待て当麻！」

俺は走りだそうとする当麻の肩を掴んだ。

「なあっ!? って、ユウキ、さっきも言ったけど俺は今急いで……「妹達」……っ!?」

ただちらつと見えた文字を言っただけで、当麻は明らかに動揺した。

間違いない、当麻は実験の事を知った。それも背中に隠しているレポートで。

「ユ、ユウキ? あのな……」

「当麻、その腰にさしている用紙を見せろ、早く！」

俺の剣幕に何か察したのか、当麻は黙ってコピー用紙を俺に差し出した。

そこには俺の思っていた通り、実験と妹達に関する詳細なレポートが書かれていた。

内容自体は既に知っている事しか書かれていなかったが、問題はこれをどこで手に入れたかだ。

レポートの最後には地図があり、何箇所か×印が描かれていた。

「当麻、これ美琴にもらったのか?」

「いや、御坂の部屋で見つけた」

当麻がどうやって美琴の部屋に入ってコレを見つけたのかは気にはなったが、それ以上に俺の頭は真っ白になった。

「ユウキ、まさかその内容……お前も実験の事を？」

「あ、ああ……知っている」

当麻に嘘も誤魔化しもする必要はない。

後で面倒事が増えそうだけど、俺は実験を知っていてそれを潰す為に美琴を探している事を伝えた。

当麻も、たまたま妹達の一人と美琴と出会い、その時の美琴の様子がおかしく思い、寮まで様子を見に行った。

そうしたら、たまたま美琴が入手した実験の事が書かれたレポートを見つけて、美琴を探して走っている最中だった。

「っ！ そ、そうか……良かった」

俺の話の聞いて当麻はなぜか安堵の表情を浮かべた。

「当麻？」

「あーいや、安心した。さっきはユウキが実験の関係者かも、って思ったけど、実験を止めようとしてたんだな。疑って悪かった」

当麻が頭を下げるのを見て、俺はさらに衝撃を受けた。

右手で殴られたわけでもないのに、1つの幻想が殺された間隔がした。

「ぶっ、ははっ……あはははっ、あーっはっはっははっ！」

「ユウキ？ もしもーし、ユウキきーん!？」

当麻が心配そうな顔をしてきたが、俺は笑わずにはいられなかった。

木原であり、木原殺しの為にヒーローという属性を埋め込まれた《ニセモノ》の俺がこの数日学園都市を駆けまわってようやく手に入れた情報。

それを当麻は誰かに頼まれたわけでもなく、自分から行動してその結果実験の事を知り、いても経つてもいられず美琴を心配して走っている。

当麻は実験には何も関係ない。いや、今思えば幻想殺しの事には実験の資料には何も書かれていないのもおかしい話だが。

それでも上条当麻は自分から進んで実験の事を知り、巻き込まれた当事者の1人である友達を心から心配して行動した。

「あははっ……これが、本物って奴か？」

「ユ、ユウキさま？ 一体全体どうしたんでしょうか？」

「なんでもねえよ。それより、今は美琴だ。乗れ、当麻！」

「わわっ、つとそうだな。行こうぜ、ユウキ」

バイクに備え付けてあった折り畳み式の簡易ヘルメットを当麻に被せる。

2人乗りとかそういうのを気にしてる場合じゃない……なぜか子猫もいるが、気にしない、そんな時間もない。

待つてろよ、美琴。今、本物のヒーローが行くぜ。

しかし、この後本物のヒーローがどういうものか、改めて見せつけられる事になるのだった。

続く

第74話 「ヒーロー」

バイクの後ろに当麻を乗せて夜の学園都市を駆ける。

電磁波で回っている風車の先、そこに美琴がいる。

しばらくバイクを走らせると、大きな橋の上に誰かが佇んでいるのが見えた。

「いた、美琴だ！」

「ああ、やっと見つけたぜ！」

橋の下にバイクを停める。美琴はまだ俺達には気付いていないようだ。

美琴の元へ向かおうとした時、当麻がずっと抱いていた子猫を俺に渡してきた。

「悪い。ここからは1人で行かせてくれないか？」

俺も行こうとしたが、当麻の見た事もない強い意志の籠った目を見て自然と足が止

まった。

「……それはいいけど。で、俺にペットのお守しろってか？」

「ははっ、この子猫はさ御坂妹が見つけた子なんだ。だから、頼む」

そう言い残して当麻は美琴の方へと走って行った。

何か考えがあるのか、それとも何も考えていないのか……絶対後者だな。

確かに俺がいると話ややくしくなりそうだしな。

科学者って事は知っているから、下手すりや実験関係者って事で美琴に襲われそう
だ。

『何やってんだよおまえ』

ヘルメットのスピーカーから声が聞こえてくる。

これはこつそり当麻に付けたマイクのおかげだ。

『何よいきなり。何してようが私の勝手でしょ』

美琴は当麻が夜遊びしている自分を説教に来た、と思っっているようだ。

しかし、当麻が出した自分の部屋に隠したはずのレポート用紙を見た瞬間、全てを
悟った。

『で、結局アンタは私が心配だと思ったの？ 私を許せないと思ったの？』

美琴はずっと自分を責め続けていた。だからきつと誰かに断罪されたかったのだら
う。

その役を当麻に任せようとしている。けれども、当麻はそんな事はしない。

『心配したに決まってるだろ』

『えっ？……』

当麻は迷いもなくそう言いきった。心の底から美琴を心配してる。

それが逆に突き刺さるようで、美琴はかなり動揺している。

『う、嘘でもそう言ってくれる人がいるだけ……』『ウソじゃねえつつつてんだろ!!』

当麻の大絶叫に思わずヘルメットを脱いだ。

アイツがここままでになるなんて、少なくとも俺が知りあつてからは初めてだ。

同じ感情的になるのでも、俺とは雲泥の差だな。

『あの子達ね。平気な顔で自分達の事を実験動物つて言うのよ』

そして、美琴は静かに語り始めた。

どうやら妹達との出会い方は俺と似たような物みたいだな。

美琴はやはり妹達の原因は自分にあると考え、今夜も行われる実験に乱入して一方通行と決着を付けると言い去ろうとしたが。

『勝てるのか?』

当麻がそれを止めた。

実験のレポートを読んだ当麻なら分かる事だろう。

美琴じゃ一方通行には絶対に勝てない事を。

そうでなくても美琴は以前一方通行と交戦して手も足も出なかった。

今やつてもあの時と同じ結果になるのは目に見えている。

それでも一方通行に挑もうとする理由……

『おまえ、死ぬ気なのか』

そう。美琴は死ぬ気だ。死んで、実験を止める気だ。

美琴が一方通行に何も出来ずに最初の一手で死ぬ事になれば、【樹形図の設計者】の演算のミスと言う事で実験の見直しになる。そう美琴は見立てていた。

樹形図の設計者は数週間前、暴走したインデックスとの戦闘で破壊された。

だから再演算は出来ず、実験の根本が崩れ去り中止に追い込まれる。

筋は通っているようにには見えたと、俺には実験が中止になるとは思えなかった。

これくらいで止まるような簡単な実験には思えない。

この実験の裏には、レベル6とはまた違った意図が隠されているとしか思えない。

それにそもそも自殺しに行く奴を前にして、当麻が黙っているはずもない。

『最初から死のうとしてるヤツを行かせられない』

立ち塞がった当麻に対して、美琴は電撃を放ちレポートを焼き払った。

精神的に追い詰められて実験を止める方法が他には思いつかない美琴には、今の当麻は感情論や綺麗事だけで動く甘ちゃんにしか見えない。

『今回ばかりは負けるわけにはいかない！ だからアンタも本気できなさい。さもなければ死ぬわよ！』

負けられない……か。違う、そうじゃない。それは負けじゃないぜ、美琴。

美琴は本気で電撃を放とうとしている。当麻は仕方がないと言う顔をして右手を……あげた。

「『何のマネ?』」

思わず美琴と同じセリフが口から出た。

てつきり美琴を止める為に戦うのかと思っただが、当麻は両手を上げただけだ。どうみても戦う姿勢じゃない。

『俺はおまえとは戦わない』

どう言うつもりだ? なぜ戦わない? 言葉で説得するつもりか?

いつもの美琴ならともかく、今のアイツはかなり追い込まれている。下手をすれば本気でお前を殺しに来るぞ?!

『フザけんなっ! 戦う気があるなら拳を握れ! 戦う気がないなら立ち塞がるな!』

美琴が叫びながら全身から紫電を放つ。それでも当麻は一步も動かず、右手をかざして打ち消す事もしない。

そして、ついに電撃の槍が当麻を撃ち抜いた。

「『っ?!』」

当麻の体がビクンと撥ねて、地面に叩きつけられた。と同時に隠しマイクが弾け飛んだ。

一番困惑しているのは槍を放った美琴本人だろう。

きつと、当麻は防御する。最後には自分の命を守るために電撃を打ち消すに決まっている。

そう思っていた美琴だったが、現実はず違った。

「ちっ！」

これ以上は待つていられない。当麻を死なせる事も、美琴に人殺しをさせる事も俺は絶対に嫌だ。

猫を抱えて美琴へと走り、幻想支配で能力を停止させようとした。

「なっ……んで」

けれども、それより先に動く影があった。

当麻は電撃が直撃したはずなのに、ゆっくりと起き上がり【左手】を突き出した。

まるで俺に手を出すなど言っているかのようだ。

「た、戦いたくない理由なんて、わからねえよ……けど、お前を止める理由にはつきりして」

「なんでよ！ こんなイカれた実験を止める唯一の方法じゃない！ 私が原因で始まった実験なのよ!!」 なら、私が止めるしかないじゃない！」

「だからだ！ そんな方法で実験を止めたって、御坂妹達は喜ばねえ、お前も、御坂妹も、

誰も救われない」

「うっ……あ、うわあぁ〜!!!」

再び美琴を中心に辺り一面に電撃が迸った。

当麻の周りの地面がえぐれて、こつちまで電撃が走ってきた。

とつさに幻想支配で美琴の力を使い、電撃を曲げて防いだが腕の中の子猫が爪をたててきてそつちの方が痛い。

「これが最後よ……私が死ねばあの子達だって、少しは気が晴れるでしょ……だから！」
美琴は涙を流しながら懇願するように叫んだ。

まずいつ、さつきまでは無意識に手加減していたようだけど、これは違う。

「どかない」

「っ……どいて、どいてよお！」

「やばっ!? 当麻！」

能力停止は間に合わない。急いで周囲に電撃のバリアを作り、身をかがめる。
と同時に橋全体をこれまでにないほどの紫電がかけめぐった。

「……当麻っ!?!」

電撃の嵐が止み、当麻がいた場所からは土煙が立ち籠っている。

アイツが無事かどうかは分からない。

その時、子猫が腕からすり抜け、土煙の中を駆けていった。

——にやあお

子猫が心配そうな鳴き声を駆ける先に、当麻が倒れていた。

「……………ね、こ？……………あ、あんたは！」

その向こう側で茫然と座り込んでいた美琴だったが、子猫と俺の存在にようやく気付いたようだ。

「よっ、随分派手に暴れたもんだな、美琴」

「アンタ、一体何の用？　ってこんな所にこんな時に来るなんて理由は1つだけよね」

少しは頭冷えたかと思っただけれど、まだみたいだな。

美琴は俺を見てすぐに実験の止めようとする自分達の妨害に来たと思った。

でも、姿見た瞬間に電撃撃たれないだけましか。

「落ちつけ、俺は確かに実験の事は知っている。だけど、俺は実験を止めたい側だ」

「……………本当なんでしょうね？」

「ああ、俺も……………妹達に会った」

今までの事を簡単に話すと、どうにか美琴は一応信じたようだ。

「つて、そんな事より当麻をほっといいていいのか？」

「っ!?　そうだった！」

倒れた当麻に駆けより脈などを確認するが、特に異常はなかった。

美琴が無意識に当麻周辺のみ電流を下げていたからだ。

俺の方へ飛んできた電撃は電圧も電流もすごく高いものだったけど……

「……なんで、こいつはこうまでして私なんかの為に……」

当麻を膝枕しながら美琴はぼつりと呟いた。

「さあな。明確な理由なんてないだろ、当麻が真正正銘の馬鹿なだけだ。それでももし理由があるとすれば、それが上条当麻だから、だろ」

「っ!!」

俺がそういうと美琴は何か気付いたように、ハツとした顔になった。

当麻が記憶喪失になった事は俺と冥土帰ししか知らない。

美琴は記憶喪失前からの知り合いだが、全く気付いていない。

それもそのはず、上条当麻は記憶を失っても何も変わらなかつたからだ。

目の前に困っている人がいれば進んで助けに行き、自分が出来る事をする。

謝礼も見返りも求めず、誰かが助かった事実を見てそつとその場を後にする、究極のお人好し。

そこに理由はない。ただ体が勝手に動く、それだけだ。

「……本当に、おおばかよね」

美琴の瞳から涙がこぼれ、当麻の顔に落ちる。

子猫が側に寄り一鳴きすると、当麻はゆっくりと目を開けた。

「なにやっつてんのよ、アンタ。こんなにボロボロになつて……なんでアンタは笑つていられるのよ」

当麻は笑つていた。泣いてる美琴を見上げて、笑つていた。

「おまえの味方でよかつたと思つたからさ。だから、泣くなよ」

当麻は軽い火傷をおつた手を伸ばし、そつと泣いてる美琴の頭を撫でた。

美琴はじつと目を閉じ、黙つてされるがままで。

それを見て俺は、当麻には一生勝てないし、届かない。

そんな場違いすぎる事を考えていた。

「分かつたんだ。実験を止める方法」

当麻が呟いたその言葉の意味が、俺も美琴もすぐには理解できなかった。

「実験は一方通行が最強つて事を前提としてるけどさ、もしもソイツが学園都市歳弱の無能力者にすら負けるほど弱かつたら？」

それを聞いて俺は電撃を撃ち込まれたような感覚が走つた。

「えっ、まさか……」

「俺が、戦う」

そうだ。なんでこれに気付かなかった。

当麻の右手、幻想殺しなら一方通行の反射も無効化出来る。

一方通行に唯一触って、殴れる存在だ。

もしも、一方通行が無能力者の当麻に破れる事になれば、実験は中止になる可能性が高い。

「むっ、無理よ！ アイツは私なんかとは次元が違う。正真正銘の化け物なのよ！」

「いや、それでも当麻なら……アイツに届く」

「ユウキ、あんたも何言ってるのよ!? あんたコイツを死なせる気なの!？」

さつきまで自分が死ぬ気だったのに、まあこれが美琴の本当の姿だ。

やっと元に戻ったみたいだな。

「当麻、言っておくけど俺は力を貸せないぞ？俺が力を貸せば、実験は継続される……」

だから俺は一方通行に手が出せなかった。それでも？」

「ああ、行くよ。一方通行は俺が止める。だから待っていてくれ」

当麻はボロボロの体で起き上がりながらも、すつきりとした笑顔で美琴にふり返った。

「御坂妹は、お前の妹は必ず俺が連れて帰ってくる。約束するよ」

一片の迷いも躊躇いもなく、当麻ははつきりとそう言いきった。

それを見て、美琴はまた涙を流し、俺は自然と笑顔を浮かべていた。

「じゃあ、急ぐか。次の実験まで時間があまりないぜ」

橋の時計はさつきまでの電撃の嵐で止まっていた。

携帯の時間を確認すると、次の実験開始時間までもう数分しかない。

「ああ、場所は分かっているのか、ユウキ？」

「任せろ。ほれ、さつきと乗れ」

当麻にヘルメットを投げ渡し、呼び寄せたバイクへと跨った。

「その子猫、御坂妹が拾ったんだ。だから、預かっててくれないか？」

「……うんっ」

「じゃ、行ってくる、御坂」

「えっ、あんた今……名前」

当麻が美琴の事をビリビリ以外で呼ぶのは、これが初めてだ。

それは呼ばれた美琴にとっても初めてのことのように、驚いた顔をしている。

そんな美琴を置いて、俺はバイクを飛ばした。

今夜行われる実験は10032、つまり10032号の妹達が殺される。

それまでになんとしても実験場に行く。

それにしても、どうしても実験の計画書には幻想支配の事が書かれているのに、幻想殺

しの事が書かれていなかったんだ？

続く

第75話 「最弱VS最強（前編）」

第一〇〇三二実験場

バイクを飛ばして俺と当麻が到着した時、既に実験は終わりがかけていた。

10032号は血まみれになって倒れていて、無傷の一方通行が笑いながら見下ろしている。

それを見た瞬間、頭に浮かんだのはミクと最初に出会った夜の事だった。

俺は一瞬膠着していたが、当麻は素早くバイクから飛び降りて駆け出して行った。

当麻に気付いたの一方通行はだるそうに顔を上げた。

「おいおい、一体どーなってるんだよ。これで乱入者は何回目だよ？ いい加減学習しろよオ。んで、今回の場合、実験はどーなんだア？」

「なぜ……あなたが、こっつ!？」

当麻の出現に驚いた10032号が起き上がろうとしたが、一方通行がその頭を踏みつけた。

「何だ今度はお前の知り合いかア？ いい加減うんざりなんだよなア。今度こそ口封じってお約束の展開に……」「離れるよ」……ア？ なんか言ったかア？」

「今すぐ御坂妹から離れろっつてんだ！ 聞こえねえのか三下あ!!」

当麻の怒りに満ちた咆哮が辺り一面に木霊した。あんな顔をした当麻は初めて見た。

「ハア？ オマエナニサマ？」

一方通行は当麻の叫びに半ば呆気に取られながらも、またすぐにやけた面に戻った。その様子じゃア実験や俺の事を知っているみたいだが……」

一方通行が何気なく蹴った小石は加速し、当麻の近くにあつた柱を撃ち抜いた。それでも当麻は動じずまっすぐに一方通行を睨みつける。

「へえ、オマエ面白エな。俺を最強と知ってそんなに牙を……」

「グチャグチャ言つてねえで、離れろっつてんだろ！」

「離れろ、ねエ？」

一方通行が倒れ伏した10032号に目を向けた。

「まずい。あの野郎！」

「なら、ちゃんとキヤッチしろよ？」

そう言つて一方通行は10032号を当麻のいる方とは全く別の方向へ蹴り飛ばした。

さっきの小石のようにそれほど加速はさせてないが、大きく跳ね跳んだ。

当麻からは遠すぎて間に合わない。

俺は一方通行の能力を使い、急いで10032号をキャッチした。

見るからに頭部からの出血がひどかったので、負担がかからないように受け止め、ゆっくりと地面に着地した。

「ふう、危なかった。安心しろ、彼女は無事……とまでは言わないけど、大丈夫だ」

「ユウキ！ そっか、良かった」

「アア？ てめエは……そうかそうか、1人じゃ俺に勝てないからお仲間を連れてきましたってかア？ その割には弱そうな雑魚を連れてきたなア」

10032号を抱えて当麻の横に降り立った俺を見て、一方通行は何か勘違いをしていた。

「勘違いすんじゃないよ、三下。お前をぶっ飛ばすのは俺だ！」

「クツ、クククツ……ホント、面白くないなア」

意識が朦朧としていた10032号はうつすらと目を開け、当麻と俺を交互に見上げた。

「な、何をしているのですかあなた達は、とミサカは問いかけます。ミサカは必要な機材と薬品があれば……モガツ？」

「あーその手の話はもう飽きた。いいから黙ってる、今治療するから」

いつか聞いたようなセリフを言おうとする10032……御坂妹の口に手をあて黙

らす。

「関係ねえよ。お前が作りモノの体とか、心とか、そんな小さい事情なんてどうでもいい。つてか俺に聞くのはとんでもなく今更だぞ？」　この馬鹿は別にして」

「馬鹿は余計だろ……ともかく、俺達は世界にたった一人しかいないお前を助ける為に、ここに立つてんだよ」

御坂妹は俺達の言葉が理解出来ていないのか、目をぱちくりさせている。

「お前には言いたい事は山ほど残ってたんだ。だから勝手に死ぬんじゃねえぞ。ユウキ、御坂妹の事任せた」

「ああ、俺が言った事忘れるなよ」

ここに来るまで、一方通行と戦うに当たつての当麻の取るべき戦法はいくつか教えてある。

「当麻は頷くと一方通行へと向き直る。一方通行はさつきからただ笑って見ているだけだ。」

「私の治療より、彼を止めてください。一方通行の強さはあなたも分かっているでしょう？」　とミサカは促します」

「俺は一方通行との戦闘には参加出来ない。アイツに任せるしかないんだ。だから、まずはお前の怪我の治療が先だ」

あつちは当麻に任せた。なら俺は俺のやれる事をする。

バイクから緊急医療キットを取り出し、応急処置を始めた。

裂傷や火傷、あらゆる怪我に対応した道具はいつも常備している。

幻想支配があるとはいえ、結局は自分の体一つでやっていくんだから、これくらいの装備は必需品だ。

あいにく検査する機器は持っていないが、今は一方通行のベクトル操作能力がある。

これを応用して、血の流れなどを測定し出血個所と骨に異常はないかを診てみる。

脳波が少し乱れて、頭部からの出血がミクの時よりも酷い。

御坂妹の意識ははつきりとしているのが幸いだ。

鎮痛剤を打って、出血個所に薬を塗って行く。

早く病院に連れて行った方がいい事には変わりはない。

けれども今この場を離れるわけにはいかない。

「……彼は、あの時のあなたと同じ顔をしていました。とミサカは思い出しながら呟きます」

黙って治療を受けていた御坂妹はポツリとそう呟いた。

「あの時？」

「数日前、突然実験に乱入し993、ミクを助けようとした時のあなたと、同じ顔で怒っ

ていました。とミサカは答えます」

「……そっか」

それだけ返事をして、冥土帰しに電話をした。

『もしもし、こんな時間にどうしたんだい？』

「診察予約だ。患者は2人、1人は妹達だ。実験を中断させたが、重傷だ。応急処置はすませた」

『そうかい。君の腕なら問題はないね。で、すぐに連れて来れそうなのかい？』

俺の口ぶりから通常の事態とは違うとすぐに感じ取ってくれた。こういうのは流石だ。

「いや、まだ無理だ。それと、もう1人追加になる。そっちはまだどんな怪我になるかは分からない」

『なるほど、カレだね？ 実験を中断させたと言うけど、君達は今一体どんな状況だい？』

「一方通行と戦闘中。俺は手が出せない」

それだけで全部理解出来たようで、冥土帰しは電話の向こうで深いため息をはいていた。

『……なるほど、理解出来たよ。またとんでもない事やっているね、君達は。ともかく、

死なせないで連れて来てくれ。死んでいなければ必ず治してみせるからね？」

「ああ、妹達もアイツも絶対に死なせねえよ」

今も向こうで一方通行に吹き飛ばされている当麻に目を向け、電話を切った。

最悪、一方通行を殺してでも死なせない。

その場合、実験がどうなるか予測できないが、それしか道はない。

「や、やはりあなたも彼を助けに行つてあげて下さい。とミサカは懇願します」

「……移動するぞ」

尚も頼もうとする御坂妹を抱きかかえ、その場を離れた。

出来るだけ頭部に負担を強くないように空を飛び、見晴らしのいい場所へと移動する。

こう言う時一方通行の能力は便利だな。

2人はコンテナ置き場へと移動し、激しい戦いを続けている。

しかし、実際は一方通行がただベクトル操作で一方的に当麻に攻撃しているだけだ。

当麻は幻想殺しを使うどころか、接近する事すら出来ていない。

「…っ、は、離して下さい。とミサカは叫びます」

今にも飛びだしそうな御坂妹を止める。

「ダメだ。今行けば、アイツがああまでして戦っている意味がなくなる。俺が何のため

にお前の側にいると思ってる？」

「し、しかし、このままではあの人は！ とミサカは反論します」

「……まだだ、まだアイツは負けてない」

コンテナが派手に吹き飛ばされ、その中で傷だらけになりながらも当麻は立っていた。

さつきと変わらい目をして瓦礫の山に立つ一方通行を睨みつけている。

状況は圧倒的に一方通行が優勢だ。

なのに、一方通行はイラついていた。

「チツ、オマエ自分が最弱だつて事が理解できていねエのか？ そんなに死にたいなら、愉快的オブジェに変えてやんよ」

一方通行は壊れたコンテナの中から出てきた袋に目を向けている。

アレは、小麦粉か？ だとすれば、一方通行がしようとしているのは!?

「いい具合に今日は無風状態だ。コンだけ小麦粉がありや、クククツ……よオ三下、粉塵爆発つて知ってるか？」

「っ!？」

当麻も一方通行の狙いに気付いたようで、一目散にその場から走りだしたが、遅い。

一步通行が蹴り飛ばしたコンテナが激しくぶつかり合い、火花を散らした。

と、同時に大爆発が起こった。その規模は大きく、あつという間に俺達のいる所まで炎と爆炎が迫ってきた。

「ちい！ 伏せてろ御坂妹！」

「は、はい！」

一方通行の能力で防げはしたが、今ので能力を使いきってしまったようだ。

「大丈夫か、御坂妹？」

「は、はい、私は大丈夫ですが……か、彼は?！」

「あそこだ。アイツもどうやら大丈夫だ。当然一方通行もな」

俺が指さした先では、さつきよりもポロポロになった当麻と無傷の一方通行が対峙している。

「オマエさア、よく頑張ったぜ? この一方通行相手にこうも五体満足で生きているんだから……まア、楽になれ！」

一方通行は両手を広げて当麻へと向かって行った。

右手か左手、どちらかが触れても生体電気や血の流れを変えて殺せる魔手。

——来たっ！

俺と当麻もそう思っただろう。

当麻の幻想殺しを正確に当てられる瞬間、それは一方通行が自分から迫って来た時だ。

一方通行の反射を突破できる幻想殺しの最大の弱点は、右手で触れなければいけない事。

その為には当麻は右手で一方通行を殴る必要があつたが、無暗に近寄つても返り討ちが関の山。

それに最悪当麻の右手には何かがあると警戒させてしまう恐れがあつた。

だから、当麻に伝えた事、最初は自分から無計画に突っ込み、一方通行を油断させる事。

当麻は無能力者で、切り札もなにもないと思わせる事。

だから当麻は最初こそ自分から突っ込んだが、それ以降は一方通行の攻撃を避ける事に専念した。

と言つても、意識的に専念しなくてもそうせざるを得ない状況になる事は簡単に予想出来た。

それでも、当麻はこの一瞬を待っていた。

一方通行が自分から突進してくるこの瞬間、カウンターの要領で右手の幻想殺しで、ブン殴る！

「うおおお〜!!!」

当麻の叫んだ次の瞬間、一方通行は飛んでいた。

自分から飛んだわけではない、当麻の右手に殴り飛ばされたのだ。

「なんだ、コリヤあア~~~~!」

一方通行がしばらく自分がどうなったのか理解できないように、殴られた痛みと鼻から出で手についた自分の血を茫然と眺めていた。

「愉快に素敵に、キマっちまったぞ、オマエはア!!」

それでもすぐに立ち直り、近づいてきた当麻に再び手を伸ばす。

「あ…………え?」

しかし、その手も当麻の右手に簡単に振りはらわれた。

そして、再び当麻のカウンターが一方通行の顔を捉えた。

「あ、あの一方通行が2度も殴り飛ばされるなんて信じられません。とミサカは目を見開いて驚きます」

妹達がここまで驚いた声を上げたのは初めて聞いた。

ミクの時にでもここまでののは聞いた事ないな。

「なら見開いた目でよく見る。今、お前達の未来がアイツの右手で開かれようとしているんだ」

「ミサカ達の…………未来…………」

人の気配がしてふと目を向けると、フェンスの向こうに美琴の姿が見えた。

アイツ、あれだけ言つてもやつぱり来たか。子猫はどこかに置いてきたようだ。

「ガあアアア〜！ クソがア!!」

一方通行はがむしやらに当麻を捕まえようと迫るが、そんな動きじゃアイツは捕まえられない。

正確に動きを読まれ、的確にカウンターを決められその度に崩れかけている。

「なんなんだよつ、その右手はア〜!!」

一方通行はさつきまでとは正反対に当麻に一方的に殴られていた。

これも予想通り。一方通行は殴り合いにめっぼう弱い。

向かってくるベクトルの全てを反射させてしまふ一方通行は、恐らく殴られた事すらないはず。

喧嘩慣れして一方通行の動きをすぐに読み、反射も無効化する当麻はまさに天敵と言つていい。

最も、能力関係なく天敵だろうけどな。

「チョーシ乗つてンじゃねエぞ三下アア!!」

一方通行は地面を蹴り当麻を吹き飛ばそうとしたが、当麻はそれすらかいくぐり一方通行の喉へ鋭いアッパーを繰り出した。

「くだらねえモンに手え出しやがつて。【妹達】 だつて精一杯生きてきたんだぞ」

これで終わった……か？

「何だってテメエみたいなのに、食い物にされなきゃならねえんだ」

いや、一方通行の意識は落ち切ってない。

「まだだ!!」

そう叫ぶと同時に、一方通行の周りに風が舞った。

「ぐっ!!」

「くかきけこかきくけききこかかきくこくくけけこきくかくけけこかくけきかこけききくくききかきくこくくけくかきくこけくけくきくきこきかかか——!!」

それは一瞬にして巨大な竜巻となり、コンテナも何もかも吹き飛ばしていった。

「(っ)もまずいー」

「きやつー」

一方通行の力は使いきったので急いで御坂妹を抱きかかえ飛び降りた。

一方通行レベルの力だと、一度使いきると再び視れるようになるにはタイムラグがある。

美琴の能力みたく、何度も使っていればそういうラグはなく連続使用は出来るけど、一方通行はこの前初めて視た能力だから無理だ。

だから、御坂妹の力を使い電磁石のように、飛び交うフェンスを足場にしてこの場を

離れた。

「つとと、大丈夫か、美琴！」

「お姉、様？」

降りた先に美琴がいたが、こつちに気付いていないし目も向けていない。

「え……は……な……んで」

美琴が見ている先には、血まみれで倒れている当麻の姿があった。

一方通行のすぐ側にいた為、竜巻に吹き飛ばされ、途中でコンテナか柱に激突したのだろう。

地面に血だまりを作って倒れている姿に、いつかみた妹達の死体がダブる。

「えっ……あ、あの人は……」

「くそっ、当麻にまで目がいかなかった！」

「いやあああああ!!」

辛うじて息はあるようだが、それでも隣で茫然としている御坂妹よりも重傷なのは明らかだ。

「なんだよそのザマはあ、立てよ最弱ッ！ オマエにやまだまだ付き合ってもらわなきゃ割に合わねんだっつの！」

あれだけ殴られまだあんな元気残ってたのか！

「あ、一方通行は何をしようとしているのですか？ とミサカはあの人の事を気にかけながら尋ねます！」

「風を一点に凝縮してプラズマを作りだそうとしてるんだ。見ろ、アレを！」

一方通行の頭上に巨大な光球が浮かびあがっている。

あれだけでも相当な物だ。どうする？ 一方通行の力はまだ視えない。これじゃ能力停止は使えない。

「一方通行！」

その時、美琴の声が聞こえた。

一方通行が興味なさげな顔をして振り向く。

「動かないで！」

美琴はゲーセンのコインを構えている。レールガンを撃つ気か！

「お姉様!? まさか……!?!」

「そのまさかだ、ここにいろ！」

御坂妹を置いて美琴の元へ駆けだす。

アイツこの期に及んで自分が死んで実験を止める気だ。

今の一方通行はそれじゃ止まらない！

「美琴、よせっ！」

「ユウキ!? あの子は無事!?!」

「ああ、あつちで休ませている」

「なら……後はお願いね。止めてないで。もう、これしか手はないもの!」

美琴は諦めきつている。でもそんな覚悟はダメだ。

「……やめ、ろ、みさ……」

「良かった、けど、これで終わらせるわ」

かすれたような当麻の声を聞いてほっとしたようだが、それでも覚悟は揺るがない。

「ダメだ! 今の一方通行は俺達なんか眼中にない! 実験中止なんて命令は無意味だ!」

一方通行の目を見た美琴は、思わず手を下げた。

今の一方通行はあのプラズマを使いたくてしょうがないだけだ。

上層部の命令なんて聞くわけがない。

「つ! じゃ、じゃあどうすればいいのよ! アレは学園都市中の風を一点に凝縮したプラズマよ! このままじゃみんな死んじゃうわ!」

「……風を、一点に……?」

何だろう。美琴の言った事が頭の中で木霊する。

自分でも御坂妹に言ったが、空のアレは風を一点に凝縮したプラズマ、なら風をどう

にかすれば……

「…………!!」

美琴と同時に顔を上げ、同じモノを見上げた。

「同じ事考えたか、流石電気能力者の頂点」

「だ、だけど、私が直接やつても、1人じゃ恐らく……っ!?」

「……他に手はない。ミサカネットワーク、お前も知ってるだろ?」

俺と美琴が思いついた手段、それは街中にある風力発電の巨大プロペラを使い、風の向きを変える事。

そして、それは風を集めている一方通行の精密な計算を狂わせ作成中のプラズマを乱す事にもなる。

1つ1つでは力が足りなくても学園都市には数万のプロペラがある。それを使えば、あのプラズマは消せる。

ただし、美琴1人では規模がでかすぎて間に合わない。

それに美琴が直接手を出す事は、恐らく実験中止にも悪い影響が出る。

ならば……美琴以外の者が手を出せば、本来この実験は一方通行と……彼女達の戦いでもある。

俺と美琴はすぐに御坂妹の元へと戻った。

全身包帯だらけでコンテナにもたれかかっている御坂妹を見て、美琴は息を飲んだ。

「ひどい……怪我。ユウキ、こんな状態のこの子にさせる気!？」

「……応急処置は済んでいる」

「そういう問題じゃ!……くうく!!」

「??」

美琴は俺を睨んだが、他に手が浮かばない。

それは美琴も分かっているようで、何事かと俺達を見上げている御坂妹に意を決したように語りかけた。

「無理を言っているのは分かっているわ。後でどんな恨み言を言っても、殴っても構わない!。だけど、今は今一度だけ、お願いを聞いてほしいの!」

「お姉、様?。一体何を?」

「私は、私じゃみんなを……アイツも『わたしのいもうとたち』も守れないけど、だ、アンタなら出来るの!。ううん、アンタにしか出来ないの!。だから、お願い……私の代わりに、アイツの夢を守ってあげて!」

涙を流しながらの懇願。

ずっと一人で無力感と絶望感に苛まれながらも、それでも戦い続けて今なおさらなる無力感に襲われている。

それでも、救えるのなら、自分の妹達を救えるのなら、当麻の夢を救えるのなら、美琴は何でもする。

御坂妹は美琴の言葉を自らに染み込ませるかのように黙って目を瞑った。

「その言葉の意味は分かりかねますが……」

そして、御坂妹はゆっくりと目を開けた。

「何故だか……その言葉はとても響きました」

姉の言葉に乗った想いは、妹へとしっかりと届いた。

続く

第76話 「最弱VS最強（後編）」

学園都市にいくつも建てられている風力発電用のプロペラに異変が起きた。

風もないのに回転を始め、しかも、すぐに普通では考えられない程速く周り出した。

その異変は学園都市中に散らばっている妹達が、上空に浮かぶ巨大なプラズマを作り出している一方通行の計算式を乱す為に起こしている。

辺り一面に一方通行が起こしているのとは別の風が吹き荒れ、巨大プラズマに変化が起きた。

「あん?」

綿密な計算式の前で作りだされているプラズマが大きく歪み、拡散され始めた。

最初は何が起きたのか分からないような顔をしていた一方通行だったが、プロペラの異常な回転に気付きこちらを向いた。

「てめエか! ぶっ潰す!」

御坂妹のしている映像がミサカネットワークを通じ他の妹達に流れている事を悟り、一方通行が攻撃をしかけようとしてきた。

「させると思う(か)!!」

俺と美琴が一方通行の前に立ち塞がる。美琴の手にはコインが握られている。

俺達が一方通行に手を出したらどうなるかは分かっている。でも、これ以上御坂妹に手出しはさせない。

もう少して一方通行の力をコピー出来るようになるが、さてどうするか。

一方通行を殺すだけならいくらでもやりようはある。

「理解できねエな。あつちに転がっている三下もオマエらも、なんで人形を庇う？」

人形と言われ御坂妹が僅かに体をこわばらせた。

それを横目で見た時、何か今までの妹達とは違うと感じた。

自分達の事を実験動物とはつきりと自覚していて、実験の事もなんとも思っていない。かっただけだ。

「だけど、御坂妹は人形と言われはつきりと反応を示した。

「なんで？ 愚問だな。第一位の頭脳あるくせにそんな事も分からないほど馬鹿なのか？」

「あん？ 何だと？」

「そうね……そう、この子を守る理由なんてとっても簡単な事だったのよね」

美琴も御坂妹の反応を見て、何か答えが出たようだな。

「私はこの子達の姉で、この子達は私の妹だもの。妹を守るのは、姉として当然の事で

「しよ?」

それを聞き、一方通行も御坂妹も呆気に取られたような顔をした。

「今更姉面する資格はないのは分かっているわ。それでも、今はこの場に立つ事、許してくれる?」

「……ハイ」

御坂妹は俯き加減で小声ながらも、しっかりと姉に対して返事をした。

「カツ、カカツ……クツ、カーツハハハツ! いきなり何茶番を始めたかと思えば、人形と姉妹ごっこかよ。くだらねエ!」

「黙れよド三流! この御坂妹も他の妹達も生まれ方はクローンでもな、ちゃんと生きてんだよ。俺やお前よりもよっぽど純粋な人間としてだ! てめえには一生理解できないかもしれないけどな」

「理解、ねエ。おれア、お前こそ理解できねエなア。なア? どうして木原のお前がそんな所でそんな風に立っていやがるンダア?」

「……木原?」

一方通行俺を木原と呼んだ事に、美琴は意外そうな顔で俺の方を向いた。

そう言えば美琴は俺の名字が木原って知らなかったな。

「なんだ? 第三位ともあろうお方が知らなかったのかア? ソイツは木原だ。人形を

作ってこんな実験を始めた科学者共の同類なんだよ。んで、その木原サマがヒーローごっこたア、笑わせてくれるぜエ」

ヒーロー、ごっこ……ねえ。

「ぷっ、くくっ……はっ、はははははっ！」

「あん？ 何がおかしい！」

美琴や御坂妹も突然笑い出した俺にも留めていない。

それどころか、俺や一方通行すら見てもいない。

彼女達の視線は、さつきから一方通行の後ろへと向いている。

「だってさあ、よりにもよってヒーローごっこ来たもんだ。あはははっ、あーおかし……俺は俺がやりたい事をやっているだけだ。木原も何も関係ねえよ。ヒーローごっこをするつもりもない。それに、ヒーローならお前のすぐに後ろにいるぞ？」

その時やつと美琴達の様子がおかしい事に一方通行が気付いたようで、恐る恐る後ろを振り向いた。

「バツ、バカな……」

そこにはボロボロにならながらも、上条当麻がしっかりと立ちあがって一方通行を睨んでいた。

体中に傷があり、脚もがくがくに震えて今にも倒れそうだったが、当麻は倒れない。

その瞳に宿る光に衰えは見えず、しっかりと一方通行へと向けられている。

——ジャリッ

「っ!？」

それは一方通行が当麻から一步後ずさった音だった。

学園都市で最強の能力者である一方通行が、無能力者である当麻を恐れ、臆したのだ。

「……面白エよ、オマエ……最っ高に面白エぞっ!」

臆した事を認めたくないのか、一方通行は叫びながら一直線に当麻に向けて跳んだ。

両手を振りかざし、今度こそ当麻にトドメを刺す為に。

美琴も御坂妹も信じられないと言うような顔をして何も動けず、美琴の手からコインが零れ落ちた。

俺はニヤリと笑っただけだ。

「やっちまえ、ヒーロー」

一方通行が襲いかかったが、無意識なのかそれともただ単に怪我で崩れ落ちたのか当麻の体が沈み、一方通行の右手が空を切る。

続けて一方通行の左手が振われたが、当麻が右の拳で殴りはらった。

「ぐっ!!」

両手が払いのけられ、今の一方通行は完全に無防備だ。

当麻は倒れこむように一方通行に迫り、眼前で小声ながらもはつきりと呟いた。

「歯を食いしばれよ、最強——俺の最弱は、ちつとばつか響くぞ」

そして、当麻の右手が一方通行の顔面に深く突き刺さった。

どこにそんな力が残っていたのかと不思議に思うくらい、その拳には力が籠っていた。

一方通行はすごい勢いで殴り飛ばされ、地面を転がり五体を力なくさらけだし、動かなくなった。

ここに最強の超能力者、一方通行は——最弱の無能力者、上条当麻に破れた。

「冥土帰し、俺だ。全部終わった。重傷者が2名、1人はいつものアイツ、それでももう1人が妹達、2人共骨に異常はないけど出血がひどいな」

『分かった。もうこつちの準備は整っているよ。すぐに手配させる。君は大丈夫かい？』

「俺は今回何もしないからな。無傷だ。それじゃ、当麻と御坂妹は任せませ」

全てが終わり、冥土帰しへ連絡して当麻と御坂妹の手配を頼んだ。

倒れて気を失った当麻へと駆け寄り、脈などを軽く診断したが、命に別条はなさそう
だ。

「おい、御坂妹」

姉妹揃って呆けている2人に声をかけると、御坂妹はこつちを振り向いたが、美琴は
まだボーっとしている。

「は、はい、何でしょうか？」と、ミサカは目の前で起こった事に理解が追いつかず、混
乱しながら答えます」

「後少しで救急車が来て、アイツと病院に運んでもらう。んで、後の事は冥土帰して凄
腕の医者に任せてあるから、色々話を聞け」

「あの……彼は、大丈夫ですか？」

「当麻は問題ない。見た目よりは軽傷と言つてもいいくらいだ。同じ病院へ運ばれるよ
うにしてあるから、自分の治療が終わったら見舞に行つてやつてくれ」

御坂妹も怪我はヒドイが、当麻ほどではない。

ま、それでも寿命の調整のための入院はするだろうけど。

それからすぐ救急車がやってきて、当麻と御坂妹を運んで行った。

美琴はまだ気が抜けたようにずっとしゃがみこんでいたけど、俺が無理やり救急車に
詰め込んで行かせた。

3人に色々話す事はあったが、それは後回しだ。

今は真つ先に話をしないと行けない奴がいる。

「おい、生きてるんだろ、一方通行」

「……なんだ、まだいたのか、木原」

一方通行は起きてはいたが、両手両足をダランと広げ地面に寝転がったままだった。

コイツも左指が骨折してるし、それなりの怪我もしているので病院に運んだ方がいいか。

そう思っていると、電話が入った。

相手は木原尼視だ。

せつかくだからとスピーカーにして、一方通行にも聞こえるようにした。

尼視も俺がそうするだろうと思っただろうだ。

『お疲れさん。お前の目論見通り、絶対能力進化実験は一時凍結が決まった。一方通行や妹達のこれからは……ま、当分はお前の方針に沿う形になるな。妹達の寿命調整に關しても、こっちは中止させる気はない。むしろ、推し進めてくれて一向に構わない』

「……ちつ、結局そうなるか」

俺がしてきた事ややろうとしてきた事、どこまでお見通しなのか分からないが、恐らく全部だろうな。

中止ではなく凍結と言うのが気になったが、それは後で調べよう。

『おや、不満かい？ 何だったら妹達の1人や2人、お前が自由にしても構わないぞ？ あの子の代わりとして相棒として雇っても……』

これ以上尼視の声を聞きたくなかったので一方的に通話を切り、電源もオフにした。一方通行は表情を変えず、黙って俺と尼視の会話を聞いていた。

「と、言うわけで実験は凍結、まあ中止になったわけだ……で、お前は どうする？」

「……どうするって、どういう意味だア？ 俺はお役御免でオマエが俺を殺すかア？」
「そうしたいのは山々だけだな。そんな無意味な事するつもりはない」

そう。今更コイツを殺してもどうしようもない。

殺すなら、実験に関わった全員を殺す……が、それも無意味だな。

「とりあえず、病院へ行け。アイツらとは別のお前専用の所への手配も済んでいる。すぐに迎えが来るぞ」

「……一つ教えろ」

「なんだ？ 俺がここまでする理由か？」

「んな事どーだっていい……アイツは、あの三下は一体何者だア？」

一方通行はただ単純に知りたがっているように見えた。

御礼参りに行きたいとか、そういう感じで当麻の事を知りたいわけではなさそうだ。

「アイツは……ただの馬鹿さ。んで、俺やお前みたいな奴にとっては天敵だ」

「……そおかよ」

その答えだけで満足だったのか、一方通行は眠りについたようだ。

俺が何もしないのを分かっているのか、随分と無防備な事だ。

一瞬落書きでもしてやろうかと思ったが、暗部の回収係が来たので渋々その場を去った。

あの後、携帯の電源を入れると屁視から一通のメールが入っていた。

さっきの件の嫌疑か何かかと思ったが、開けてみると妹達の今度についてと見慣れない研究所の名前と、住所のみが記載されていた。

妹達の今後の処置について決まるのが早過ぎると思ったが、やはり妹達は絶対能力進化以外にも目的があつて作られたようだな。

その辺りは置いといて、今は送られてきた研究所へ行ってみるか。

「ここに一体何があるんだろう？ 見た所、普通の研究所に見えるが」

それから30分後、俺は送られてきた研究所の前にいた。

その研究所は、巨大な倉庫が並んでいる施設の横にあった。

念の為武器を持ち、研究所へと入る。

いつものように裏から侵入しようかと思ったが、明りが付いておらず、人の気配もなかった。表から堂々と入った。

中のセキュリティはなぜか俺のIDが通じていて、ほとんど素通りに近い。

俺を殺す罠ならもつと別の方法を使うはず、ならばここにはどんな意味があるのか分からない。

「……ここも絶対進化能力の施設だったか」

所内は特に混乱があったという形跡もなく、ただ今が真夜中だから暗いだけ、と言う感じだ。

パソコンやネットワークは生きていたので色々調べてみると、ここもどうやら実験関係の施設のようなのだ。

しかも、セキュリティレベルが半端なく、俺や美琴が調べた時には引つ掛からなかった研究所だった。

「まさか、ここに打ち止めが？」

などと甘い予測を立てたが、これが大正解。

ここは俺がずっと探していた打ち止めがいる。

急いで目的の研究室を見つけ中に入ろうとすると、人のいる気配がした。

「っ、誰!？」

向こうも俺の事に気付いたようだ。無人だと思つて油断しすぎたか。しかし、この声は聞き覚えのある声だ、確か名前は……

「……久しぶりだな、芳川桔梗」

「あなたはっ!?! どうしてここに?」

芳川桔梗、遺伝子専門の研究者で、何度か会つた事がある。

学園都市の研究者にしては、色々と甘い所がある。

「打ち止めがここにいと聞いてな」

「……そう、仕事、と言うわけね。ま、実験は中止と聞かされてから覚悟はしていたけれど、ここのも早いとはね」

桔梗は深く息を吐き、手に持ったカップを置いて両手をあげた。

どうも何かを勘違いしているようだ。

「俺は別にお前を消す依頼は受けてないし、仕事で来たわけでもないぞ?」

「あら、そうなの? じゃあ一体何のために?」

「打ち止めの事を調べる為に来た。彼女はどこにいる?」

それを聞いて桔梗が訝しげな表情を浮かべた。

「……あなた、そういう趣味があつたの?」

「そういうって、どう言う趣味だ？」

「打ち止めはあつちにいるわよ」

桔梗が指さした部屋に入ると、そこには……

「なっ!?! この子が打ち止めなのか!?!」

他の妹達と同じく全裸でシリンダーに浮かんでいる、10歳ほどの幼女がいた。

「妹達の管理個体としか知らなかったからてつきり、少し他の御坂妹より年上に作られているのかと思ったが……まさかの幼女かよ、つておい桔梗! さつき言っていたそういう趣味って」

「そう。てつきり幼女趣味のあなたが打ち止めに興味を持って、実験中止に伴って連れられて来たのかと思つたのよ」

「ふざけるな! 俺にそんな趣味はない!」

割と真面目に憤慨すると、彼女は悪びれもせずにあら、ごめんなさいね。とだけ言つた

「で、お目当ての打ち止めはこの子だけど、どうするつもりなの?」

「……お前がどこまで聞いているか知らないが、実験中止に伴つて妹達は全員寿命や体のバランスの治療に入る事になった。で、打ち止めも保護しに来た」

本当は目的も何もなくなっているんだけどな。

実験が中止になった以上、打ち止めを使ってあーだこーだする気もない。

ひとまず、この子を冥土帰しの元へ連れて行って後の事はその時決めよう。

メールには打ち止めの事は書いてなかったし、桔梗の様子から察するに学園都市として打ち止めをどうするか判断はまだここには来ていないようだ。

「そう。けどそれならちよつと待つて頂戴。この子は他の妹達とは違って特殊なの。こ

この施設で後数日預らせてくれない？ それからあなたに引き渡すわ」

打ち止めが入ったシリンドラーをもう一度見上げ、桔梗へ向き直る。

桔梗の言葉に嘘は感じられなかった。

冥土帰しも優秀だが、この子の専門家は桔梗だ。

ならば、桔梗に任せた方がいいだろう。

「一応言うておくがコイツに変な真似したら、俺が消すぞ」

「肝に銘じておくわ。それにしても……実験が凍結と聞いてすぐにあなたが来たけれど、まさかあの実験、あなたが止めたの？」

桔梗が興味深そうに聞いてきた。

工作上、実験を止めそうなのが俺しかいないと思うのは当たり前か。

「俺は何もしてねえよ。俺は……何も出来なかった。それだけだ」

それだけ行って俺は研究所を後にした。

そう、俺は……無力だ。

続く

日常編Ⅱ

第77話 「なごり雪」

外からの暖かな日差しで目が覚めた。

昨日と同じように春を感じさせる陽の光、そして風。

「よっ……まだ、ダメか」

布団に誰か乗っている感覚がして、力をいれてどうにか上半身を起こしたけど、まだうまく動かせない。

それでも両腕がある程度自由に動かせるようになったし、体の感覚も元に戻ってきているので昨日よりはマシか。

昨日は霊夢と文が脚に寄りかかるように眠っていたが、今日はチルノと大ちゃんが覆いかぶさるように眠っていた。

「今日も2人か」

独り言をつぶやき、軽く溜息をつく。昨日目が覚めた後は本当に大変だった。

紫が出ていった後、チルノと大ちゃんがやってきて大泣きしながら俺に飛びついて来た。首に抱きつく2人に危うく窒息させられる所で、霊夢と文が苦笑いを浮かべながら

離してくれたおかげで助かった。

「あら、やっと起きたのね」

昨日の事を思い出していると、襖が開いてなぜかレティがやってきた。

「レティ？　なんでこんな所にいるんだ？　ん？　やつと？」

そこまで言つて何か違和感があった。外からは暖かい日差しが感じられるが朝にしては強い気がする。

まさかと思い携帯の電源を入れると、12時になろうとしていた。

幻想郷へ来ても携帯の時計は自動的に微調整されていたので、この時間は正確なはず。と言う事は？

「……寝過ぎした？」

「ええ、咲夜ちゃんがお昼御飯作ってるわよ？　あなたの様子を見てきてつて頼まれた

の。あ、寝ているようなら起こさないようにとも言われたわよ」

どうやら俺は昨日の晩御飯を食べた後から、今の今までずっと寝ていたようだ。

レティ達はさつき来たように俺がまだ寝ていると聞き、チルノ達は様子を見に来てそのまま寝てしまったらしい。

「起こしてくれば良かったのに」

「霊夢ちゃんが言っていたのだけど。無理に起こすよりもぐっすり寝た方がいからつ

て、朝食の時もぐっすり眠っていたから起きささないようにしていたみたいよ？ だからチルノ達も静かにしてたみたいだし」

なるほどな。体が動かせない以上、起きてるよりは寝ていた方がいいかもしれない。

「レテイ、ユウキさん起きたの？」

「起きたわよ、霊夢ちゃん、パッチェちゃん」

「えっ、パッチェちゃんって何!?!」

と、そこへ霊夢とパチユリーがやってきた。

「おはよう2人共。悪い、寝過ぎしたな」

「おはよう。別にいいわよ。むしろ寝ていた方がこつちとしても楽だしね」

霊夢がそっけない顔でそう言うと、パチユリーがクスクスと笑いだした。

「あれ〜？ 朝ユウキが起きないからって怪我が悪化した、とか薬の副作用か、って大騒ぎしてたの誰だったかしら？」

「あらか〜霊夢ちゃん、そんなにユウキ君が心配だったの？ へえ〜？ ふう〜ん？」

ただでさえ顔を赤くした霊夢がレテイの意味深な笑みを見て、更に顔を真っ赤にさせた。

「なっ、なななっ、何よ！ 文句あるの!?! と、とにかくもうすぐ昼食出来るから準備しなさい！」

そう言つて霊夢は乱暴に襖を開けて出て行つてしまつた。

「ふふつ、霊夢ちゃん本当に年頃の女の子っぽくなつたじゃない」

「レティは霊夢の事昔から知つて居るのかしら?」

パチュリーへの問いにレティは我が子の幼い頃を思い出す母親のような顔になつた。

「そうねえ。霊夢ちゃんは幼い頃から博麗の巫女としての貫録があつたわね。でも、ぶつきらぼうと言うか、表情があまりなくて心を閉ざしていたわね」

表情があまりなく心を閉ざしていた、か。

「そう……」

「何でそこで俺を見る、パチュリー?」

「別に?」

と、ここでようやく大ちゃんが目を覚ました。

チルノはまだ起きる様子はない。

「むにやむにや、ふあ? おはようございませしゅ、ユウキサあくん……ふう」

むにやむにやという人を初めて見た。まあ、人じゃないけど。

そして、大ちゃんは起きたと思つたら、俺に抱きついてまた眠つてしまつた。

「おーい? 大ちゃん? 起きてくれないか? せめて、離れてくれ」

「あらあら、ユウキ君やつぱりモテモテねえ〜♪ で、パツチエちゃんも混ざりたそうな

目をしてるし、面白いわねえ君達。お姉さんも混ざろうかしら?」

「やめてくれ、色々とシヤレにならない事になりそうだ」

「誰がそんな目をしてる……だからパッチエちゃんは止めてちょうだい」

ただでさえ今の状況でもまずい事起きそうなのに。

てかもうお昼なのに、なんでこの子達こんなに寝起きが悪い?

その昼まで寝ていた俺が言うのも何だけど。

「うつ、うつくん……あれ? ここは、どこ?」

「お、チルノようやく起きたか。おはよう」

「あ、ユウキ! どうしてここに!?!」

これは素なのか、寝ぼけているのか?

「チルノ、あなた達はユウキ君のお見舞いに来てそのまま寝ちやったのよ。それよりも

挨拶は?」

「ああ、そうだったそうだった! おはよう、ユウキ!」

レテイに言われて、ようやく自分がいる場所や何をしていたか思い出したようだ。

「レテイってチルノ達のお母さんみたいよね」

「あらやだパッチエちゃん、私これでもまだ若いのよ?」

その言い方がすてにおばさんくさい気がするが、わざわざ声色まで変えてわざとだろ

うな。

「妖怪に若いも何もないでしょうに、つてだからそのパツチエちゃんを止めなさいって！」

「ん〜大ちゃんは何してるの？ 気持よさそ〜あたしも〜……」

「待て、チルノ。お前まで来るな……ハッ?!」

寝ぼけ眼ですり寄ってくるチルノを手で押しとどめていると、不意に部屋の空気が冷たくなり背後が凍りつくような悪寒が走った。

「な、なあレテイ、チルノ？ 今冷気放出してないか？」

「してない、わねえ〜？ でもおかしいわねえ、春になったはずなのに真冬よりも寒く感じるわねエ〜……」

レテイは笑顔のままだが、冷や汗をかいている。

こつちに寄ってきていたはずのチルノが顔を真っ青にして、無言で後ずさりした。
「……よしっ、寝直そう」

「はあ、気持ちはすごく分かるけど現実逃避してないで、後ろを向きなさいよ。」

布団に入り直そうとしたが、パチュリーに止められ仕方なく後ろを振り向く。

そこにはお盆を持った2人の美少女が修羅のようなオーラを放って立っていた。

「おはようございます、ユウキ様。よく眠られたようで良かったですわ♪」

とてつもなく軽やかで明るくしゃべっているけど、それが余計に怖いぞ咲夜。

「ほんの少し目を離しただけで、随分とお楽しみだったみたいね、ユウキさん？」

そして、咲夜以上に冷たい目で俺を見下ろす霊夢。

「2人共、大ちゃん達にヤキモチ妬くくらいなら、添い寝の一つでもすれば良かったじゃない。せつかくユウキ君動けないんだし」

レティがそう言うのと、2人共さつきまでとは雰囲気が変わり、あたふたと慌てふためた。

お母さんみたいと言うのはこう言う感じか。

「だ、誰がヤキモチなんて妬くのよ。こんな子供に！」

霊夢、お前も十分に子供だ。

「添い寝……しようとはしたけれど、その度に霊夢やパチュリー様と鉢合わせに……つて何を言わせるのよ！」

いや、お前が何を言ってるんだ咲夜! あ、なんか頭痛くなってきた。

「うふふふ……はいはい、それじゃ昼食にしましょ。せつかく咲夜ちゃんが作ってくれた料理が冷めちゃうわ。ほら、大ちゃんも起きて」

そんな様子を笑って見ていたレティが大ちゃんを起こして、ちゃぶ台やらを準備し出した。

それを見て霊夢達が揃ってこう呟いた。

「「やつぱりお母さんだ……」」

昨日の夕食もそうだった。が、食事は俺の部屋で食べる事になっている。

体が動かせず、居間に移動するのも大変な俺の為だ。それで、今日の朝食は俺が寝ているからと居間で食べたようだ。

昼食の献立はチルノ達もつてきてくれた魚だ。

最初から俺達と一緒に食べる為に持ってきてくれたようだけど、チルノ達は釣りが得意なんだな。

「で、その箸は一体何だ、霊夢、咲夜、パチュリー？」

俺の目の前には煮物がのった箸が三膳差し出されていた。

こんな光景、数ヶ月前に紅魔館で見たな。

チルノ達は不思議そうに眺めているけど、混ざる気配がないのが幸いだ。

「何って早く口開けて食べなさいよ。昨日もしたでしょ？」

「アレは完全に両手が使えないから仕方なく頼んだけど、今日は両手が使えるからそういうのいいってさつき言ったよな？」

昨日は霊夢と咲夜とパチュリーと美鈴と文、計5人が交互に色々食べさせてくれたからなあ……正直、食べるに良かった。

まあ、本当に両手動かさなかったしお腹もペコペコだったし、世話してもらってるのに文句言うのは筋違いってのは分かるけどさ。

「確かに言ったわね。で、それがどうかしたかしら？」

「観念しなさいよ。腕だつてまだ完全に動くわけじゃないでしょ」

「世話係としては当然です。いい加減に慣れてください」

三者三様に詰め寄る霊夢達をどうしようかと思っていると、ふと背中をつつかれた。

「ユウキくん？」

「ん、なんだレティ？ 今いそが……んんっ!？」

振り向いた途端、口に箸が突っ込まれた。

思わず嘔んでしまったけど、この触感は漬物だな。

「どう？ 美味しい？」

「あ、ああ……美味しい、ぞぞ？」

「そう、良かったあ♪ これ私が漬けた漬物なのよ？」

笑顔で嬉しいそうに話すレティだったが、その笑顔はどーみても悪魔の笑みにしか見え
えない。

こう確信的な笑顔だな。で、なぜそう思ったかと言うと、霊夢達からどす黒いオー
ラのようなものを感じたからだ。

レテイ、分かっててやったな。

「ユウキ（さん・様）？」

「はい」

「黙って食べ」

絶対零度の笑顔で迫る三人に対して見動きが取れない俺が出来る事は。

「……はい」

素直に従う事だけだった。

こんなの慣れるわけないっての！

「あははは、あく面白かった」

「そりやそうだろうな……」

食後咲夜は買い物、霊夢は魔理沙と用事があると言って外出した。

チルノは大ちゃんと外で遊んでいる。

「パチュリー、夕食からは自分で食べるから、いやマジで。紅魔館の時より疲れたぞ」

「わ、悪かったわね。ついムキになっちゃったの。はい、あなたの両手はもう完全に動けるようになったわ」

たかが昼食にこんなに疲れるとは……そんな俺に午後の診察を終えたパチュリーは

バツが悪そうな顔をした。

元凶でもあるレティは悪気のない顔で、ニヤニヤと俺達を見ている。

「それでレティは今日どうしたんだ？ 見舞いに来ただけ、じゃないな。ひよつとしてお別れでも言いに来たか？」

「えっ？ ど、どうして分かったの!？」

レティの様子からそう思っただけだが、凶星のようでかなり驚いている。

「ただの勘だ。様子も何かおかしかったしな」

「あちゃー流石ユウキ君ね。まあ、霊夢ちゃんも気付いていたみたいだけど」

そう言うレティは先程までとは打って変わって真面目な顔になった。

「そうよ。いつもなら今頃はとづくに眠っている頃だもの。異変のおかげ……と言うのは変だけど、それで冬が長引いてそれでいれたけど、もう眠らないとね」

空を飛びまわっているチルノ達を眺めながら、レティは寂しそうに言った。

外はもう空気は春で、暖かい日差しのおかげで雪もだいぶ無くなっている。

「四季がめぐるのは自然の摂理、なんてこの前は言ったけれど……ね」

レティは掌に冷気を出したが、どうにも弱々しい。

「去年も一昨年もその前も、ずっとずっと同じ事繰り返してきたはずなのに、今年は半年以上も出てきちゃったから、ちよつとね」

いつもより長くチルノ達といたから、別れがいつもよりも辛く感じる、か。

「なーんて、こんな事ユウキ君に言ってもしょうがないのね。あ、でもメインはお見舞いよ？」
でも、良かったわ目が覚めてくれて……もう眠るつもりだったからね」

「雪女とはいえ、夏や秋はいちやいけな、なんて決まりでもあるわけじゃないでしょ？」

「冬以外が苦手とは言え、レテイ程強い力を持っているならば眠る必要はないんじゃないか？」

パチュリーの疑問は俺も感じていた事だ。

「うーん、確かに私は普通の雪女よりも妖力強いから、例え夏でも平気と言えば平気なんだけど。そのせいで季節に影響が出ちゃうのよ、冷夏とかね。随分前に一年中寒い年になった事あって、当時の博麗の巫女に退治された事もあるわ。それ以来冬以外は眠る事にしたの」

俺達の問いにレテイは寂しそうに笑って答えた。

なるほど、力が強すぎるからこそダメなのか。

「本当は春の光が幻想郷を包みこんだ時、すぐにでも眠ろうと思ってたのよ。せつかくの春の到来を邪魔したらダメだから」

「でも……まで起きていたのは、ユウキの事？」

レティはパチユリーに頷くと、俺をじつと見つめてきた。

「ユウキ君が死にかけたと聞いて、チルノも大ちゃんもルーミア達もみんな泣いていたのよ。そんなあの子達ほつといて眠れるわけないじゃない」

「うっ、それは……悪かった」

1週間も眠つちやつたからなあ。

「冗談よ。チルノ達もだけど、ユウキ君の事も心配でね。命が助かったと聞いた時、せめてあなたが起きるまではいようと思つたのよ」

「どうして俺にそこまで？」

追いかけてっこをしているチルノと大ちゃんの方を見て、レティは優しく微笑んだ。

「霊夢ちゃんや魔理沙ちゃん、寺子屋の子供達の事話す事は今までも沢山会つたけど、ユウキ君の事を話すあの子達の目は今までと違つて見えたから、かしらねえ」

「……いや、そこで俺を睨む理由が分からないんだが、パチユリー？」

それでもジト目のまま無言で睨んでくるパチユリー、何なんだ一体？

「うふふっ、ユウキ君も霊夢ちゃんもパツチエちゃんもこれから色々苦労しそうね。」

そう言うレティの体が少しずつ透けてきたような気がする。

「レティ？ 体が……」

空で遊んでいたチルノ達も、レティの様子がおかしい事に気付き降りてきた。

「レテイ！」

「レテイさん！」

「ごめんね2人共。これ以上いると、いつまで立ってもいけそうにないから、このまま行くわ」

レテイはチルノや大ちゃんの頭を撫で、俺達へと向き直った。

2人が動揺していない所を見ると、眠ると言うのはこういう事を言うのだろうか。てつきり山奥かどこかで眠るのかと思ったけど、違ったようだ。

「もう、いいのか？」

「ええ、チルノ達とは昨日一日、夜中もずっと色々と遊んだから大丈夫よ。ね、2人共？」
俯いたままうなずくチルノと大ちゃん。

そっか、だから2人共あそこまで眠たかったのか。

「それじゃあ、ユウキ君。春を取り戻してくれてありがとう。それとチルノ達とこれからも仲良くしてあげてね」

「ああ、言われなくてもそのつもりだ」

仲良く、と言うのが何か含みあるような言い方してる気がする。パチュリーがまたジト目になったし。

「パッチェちゃんもそんな顔しないの。美人が台無しよ？」

「よ、余計なお世話よ。ま、今度の冬に来た時は宴会に顔を出しなさいよ。レミイ達もあなたと話したがっていたいしね」

「考えておくわ。あ、霊夢ちゃんや咲夜ちゃんに、次に私が出てきた時には何かしら進展あると期待してるからがんばって。と伝えておいて」

「それこそ余計なお世話よ！」

意味深な笑みを浮かべたレティにパチュリーは苦笑いで応えた。

反応しない方が身のためだな、うん。

チルノと大ちゃんは泣いているのかと思っただけど、2人共寂しそうにはしているが、そこまですではなかった。

それを見たレティも少し驚いた顔をしている。

「レティ、また冬に遊ぼうね！」

「レティさん、ありがとうございました！」

「2人共……ふふつ、これも誰かさんのおかげかしらね？」

誰かさんって誰の事だろうなー

「では皆さん。よい春を……また木枯らしと共に会いましょう」

笑顔で手を振りながらレティは溶けるように消えていった。

後には、雪がハラリハラリと舞っていた。

続く

第78話 「弟子入り」

数日立ち、ようやく上半身がまともに動けるまでに回復した。

下半身はまだ感覚が戻った程度で動けないが、ひとまずは十分だ。

「よっ、ふんっ……う、やっぱ上半身だけでだとキツイな」

1週間以上も体を動かさなかつたので、少し運動不足だ。

だから、せめて腕立て伏せでもやろうと思ったが、これがなかなかきつい。

「ユウキさん、レミリアお嬢さ……一体何をしてるの!？」

とそこへ咲夜がやってきた。

パチュリーは紅魔館に戻っていて、夕方また帰ってくると言っていた。

霊夢と魔理沙と出かけていて、もうすぐ帰ってくるはずだ。

で、咲夜は何だか驚きつつ怒ってるようだけど、一体どうしたんだ？

「何って……しばらく体動かしてなかつたから、軽く運動してるんだけど？」

「ダメ！ パチュリー様から言われてるでしょ、完全に回復するまでは安静にしないと

！」

だから走ったりせず、静かに腕立てをしてたんだけどなあ。

「そう言われても、体がなまっちゃうんだけど……で、レミリアがどうかしたか？」

「あ、そうだったわ。レミリアお嬢様とフランお嬢様が見舞いに……」

「お兄ちゃん！」

咲夜の言葉をさえぎるように襖が勢いよく開き、涙目のフランが飛びこんできた。

あれ、こんな光景前にもあつたな……

「フラン!?　ちよ、まて……うごっ!?」

——ドゴツ!

大きな音と、衝撃で部屋が少し揺れた。

腕立て体勢のままだったので思いつきりタックルを食らい、そのまま吹き飛んでしまった。

吸血鬼の身体能力でタックル＋受け身が取れない!!大ダメージだ。

「フラン、ちよつと大人しくしなさい……もう手遅れか」

「フランお嬢様、ユウキさん、大丈夫ですか!？」

「むきゅ……」

フラン、それはパチュリーのセリフだ。

「……あまり大丈夫じゃ、ない」

頭から柱にぶつかったので、しっかりとタンコブが出来ていた。

「ご、ごめんなさいお兄ちゃん。私またやっちゃった……」

「とりあえず、大丈夫……だと思うから、降りてくれ」

フランが俺に乗ったまま謝ってくるが、先に降りてほしい。

重くはないけど、地味にキツイ。

「ちよつと、今の音と揺れは何よ。つてレミリア？ あらフランも」

「おお、今日は姉妹揃ってユウキの見舞いか？」

「ええ、そんな所よ魔理沙。お邪魔してるわ、霊夢」

「あ、霊夢、魔理沙！」

外出から帰ってきた霊夢と魔理沙がやってきて、呆れたようにこの惨状を見た。

「ユウキ、大丈夫？ わつ、すごいタンコブ。睽夜、氷嚢持つてきなさい」

「分かりました、すぐに！」

「フラン、ユウキさんが心配だったのは分かるけど、気をつけなさいよ。ユウキさんは頑丈とは言っても、それでも一応人間なの。吸血鬼のあんたのタツクル食らったら無事じゃすまないわよ！」

「……ごめんなさい」

霊夢に怒られて羽も垂れさがりシユンとなるフラン。

フォローしてあげたいが、力加減を覚えてもらわないと色々困るしな。

「フラン、次から気を付けてくれればいいからな?」

「うん、ごめんなさい、お兄ちゃん」

まだ俯くフランの頭を撫でるとやっと笑顔が戻った。

「で、霊夢、一応ってなんだ一応って、俺は普通……の人間だ」

「フランのタックル食らってタンコブですむのが、普通かなあ?」

「普通って部分でだいぶ躊躇ったわね」

魔理沙とレミリアが苦笑いを浮かべたが、俺だって普通の人間と一緒にしたら、何かが違うって自覚はある。

「はい、これでよし」

「ちよつとおおげさじゃないか? でもありがと、咲夜」

俺はそこまですなくていいと言ったが、霊夢達に念の為にと言われ包帯を巻いて咲夜が持つてきてくれた氷嚢で頭を冷やしていると、急にスキマが開いた。

「ん? 紫?」

「こんにちは。ユウキ君、怪我の具合は……更に悪化してる!?!」

「あ、藍じゃない」

てつきり紫かと思っただけど、出てきたのは藍だった。

「な、なるほど……なら、今度にした方が良いかな」

事情を聞いて納得した藍が、しきりにスキマの中を気にしていた。

「藍、今日は一体何しに来たんだ？」

「うーん……実は体調が回復した幽々子様と妖夢が君に、いや、君達に御礼と謝罪をさせてくれと言ってきているんだ。ユウキ君もそろそろ回復しただろうと思っただけだね」

「「っ!？」」

幽々子と妖夢と聞き、霊夢達の顔色が変わった。

ま、西行妖に操られたと言っても、異変を始めたのは幽々子自身の意味だしな。

でも、少しあいつらの事も気になってたし、向こうから来てくれたなら、会ってみるのもいいかもしれない。

「俺は構わないぜ。怪我と言ってもタンコブ程度だしな」

「ちよつと、ユウキさん。いくら操られたからって、あんな大怪我負わせた元凶なもの!」

「……相変わらず、甘いわね」

霊夢とレミリアが呆れた風に言うが、自覚してる。

「完全に治つたらまた行くこうと思ってたし、向こうから来てくれるなら都合だ」

本当は今幽々子達が来たら、最悪レミリアやフランが殺しにかかるかも、とは思った

けどな。

「はあく……諦めなさい、霊夢。遅かれ早かれユウキは彼女達に会うつもりだったようだし、なら人が多い方がいいでしょ？ あなたも文句くらい言いたいんでしょ？ 最も、私もフランも咲夜もだけどね」

そう微笑んだレミリアだったけど、眼が笑ってないし怖い。

「紫様の古い友人だし、私も付き合いが長い人だ。気持ちは分かるが、ほどほどにしてくれると助かる。紫様はまだ眠ったままなので私が代役なんだよ」

それで藍がスキマを使って幽々子と妖夢を連れてきたってわけか、紫の式神だからあの程度はスキマを使えるみたいだな。

「分かった、幽々子達には手出しはしないわ、多分だけど。ここでいいでしょ、ユウキさんあまり動かせられないし」

霊夢が承諾すると、レミリア達は黙って頷いた。

少なくとも話は冷静に出来そうだな。

「すまないな。それじゃ連れてくるよ」

そう言つて藍はスキマに戻り、少しすると幽々子と妖夢を連れてきた。

妖夢は折れた腕には、包帯を巻き添え木と三角巾をしている。

あの薬を使わなかったんだ、一か月近くかかるのが普通か。

「はじめまして、と言う挨拶が正しいのでしようね。私は西行寺幽々子と申します。この度、私の不注意で皆さんにご迷惑をおかけした事、深く謝罪させて頂きに参りました。特に、ユウキ様は生死の境をさまよったようで、まことに申し訳ございませんでした」
幽々子と妖夢はまず正座し俺達に頭を下げ、謝罪の言葉を述べると更に深く頭を下げた。

異変の時は西行妖に取り込まれた状態しか見てないけど、凜とした佇まいで上流貴族も真つ青になるくらい礼儀正しい。

「本来であれば、すぐにでもお伺いすべきだったのですが、私は衰弱しきつて満足に動けず、妖夢も片腕がこのようになっており、本日まで静養させて頂きました。謝罪が遅れてしまい、重ねて申し訳ございません」

「あーその、そこまで肩肘張った謝罪は、返ってこっちが気遅れしてしまうのですけど……」

「そう……ですか。ふふつ、紫に聞いていた通り面白いお方なのですな」

初めて見た時から何となくそんな気はしていたが、こうも上品なお嬢様オーラ全開で話されるとやりにくい。

妖夢はさつきから黙って頭を下げたままだ。

「貴方達にも随分とご迷惑をおかけしまして、その上助けていただきありがとうございます

ます」

霊夢、魔理沙、咲夜に改めて向き直り、深く頭を下げると霊夢達は困ったような顔をした。

「わ、私は博麗の巫女として異変解決は当たり前なの。それに、私はあんたを助ける気はなかったし、西行妖ごと倒すつもりでいたわ。礼はユウキさんと魔理沙達に言いなさい」

「異変を解決するついでだっただけだぜ。だから礼はユウキと咲夜に言えればいいぞ」
へ？ この流れはまさか……

「私はユウキさんがあなた達を助けようとしたから、手伝っただけです。礼はユウキさんにどうぞ」

やっぱ俺か!?

幽々子がなぜか物凄く目をキラキラさせて俺を見てるし。

「あー……うん、礼は貰っておく。以上、はいこの話終わり!」

「ははっ、随分と乱暴に話を畳んだな。照れ隠しにしては下手だな」

しょうがないだろ、魔理沙。

「それにしても、冥界の主よ。我が従者である十六夜咲夜と、大恩人のユウキが結果的には無事だったから良かったが……もし死んでいれば……」

レミリアが真顔で幽々子を睨みつける。

まだ俺を恩人と言ってるのかよ。もういいだろ、レミリア。

「……死んでいれれば？」

「私が、いや、我ら紅魔館が全存在をかけて、どんな犠牲を払おうとも貴様らを冥界ごと滅ぼす所だったわ」

レミリアから今までにないほど、覇気と殺気が放たれた。

こうも鋭く、怒りに満ちた殺気は初めてだ。

幽々子と妖夢にだけ向けられているが、俺だけではなく霊夢と魔理沙もあまりの迫力に驚いている。

レミリアの眼が血のように紅い。これが、真のレミリア・スカーレットか。

見ると、フランも狂気にこそ落ちていないが、レミリアに負けず劣らずの殺気に向けて眼を紅く染めている。

これだけの殺気の中で、妖夢は反射的に幽々子の前に出ようとしたが、幽々子がそれを制した。

幽々子もただ黙って堪えているような感じだが、冷や汗を流している。

その時、霊夢と咲夜が意味深な目で俺を見てきた。

はあ、しょうがない……

「レミリア、フラン。もういいだろ？」

「そうね。ユウキに免じて、この辺にしておくわ」

「……お兄ちゃんが、そう言うなら」

論すように優しく言うのと、レミリアとフランの眼は元に戻り、一步下がった。

「コホン。紫の知り合いなら言う必要ないかもしれないけれど、博麗の巫女としてこれだけは言っておくわ。異変を起こしても私が解決するし、それに対しての謝罪はいらない。ただ即座に私に退治されるだけ。でも、幻想郷に関わる異変はもはや異変とは言わない。今度は退治ではなく、全力で排除するわ」

「肝に銘じておきましょう、博麗の巫女」

霊夢は幽々子だけでなく、自分にも言い聞かせているみたいだな。

さて、これで一応場が収まったか、なら気になる事を聞いておくか。

「妖夢、しばらくぶりだな」

「はっ？ は、はい！ 御無沙汰しております！ 此度の一件、御師匠様達には大変お世話になりました。お見舞いに伺おうとは思ったのですが、腕を折っており静養に努めさせていただき、このように遅れてしまい、申し訳ございませんでした！」

「お、おう、それは……大変だったな、うん」

妖夢、しばらく会わない間にキャラが迷走しすぎてないか？

妖夢とはあまり話していなかった霊夢や魔理沙はともかく、咲夜が思いっきり眼を丸くしてるぞ?」

「腕の具合はどうだ? 俺や咲夜が使った薬、使わなかったみたいだけど」

「はい、痛みは多少和らぎました。あの薬は御師匠様と咲夜様が御使用される為の物。未熟者である私の自業自得の怪我になど、使うべきではなかったので……御師匠様と咲夜様は御身体の具合は大丈夫でしょうか?」

「えっ、いや、私はもう大丈夫よ。ところで咲夜【様】ってどういうつもりかしら?」
 今までにない妖夢の眼差しと強い尊敬の念が籠った言葉。

まるで、頭の上がらない人に対する……あー吹寄に勉強を教えてもらおう当麻がこんな感じだったな。

「はい、御師匠様は勿論、私が到底及ばない高みにある咲夜様の腕前にも、私は心から感服いたしました! ですから、敬意を籠めて咲夜様と呼ばせて頂きます!」

「そ、そう……あの時も言ったけれど、そこまで私とあなたに差があるわけじゃないのだけれど……れ、レミリアお嬢様、お腹を抱えてまで笑う事はないでしょう!! 霊夢達まで!」

「だ、だって……くくくつ、すごく、おもしろいもの。あははははっ、しようがないでしょう?」

妖夢の咲夜への言葉遣いが面白いのか、咲夜の反応が面白いのか、絶対両方だな。レミリアも霊夢達もお腹を抱えて笑っている。

そういう俺も笑いを堪えるのに必死だ。

幽々子や後ろで控えていた藍も、なんとか我慢しているが口元が緩みまくっている。ん？ 今……と言うか、さつきから何か不穏な単語混ざってなかったか？

咲夜様、はまだいいとして……御師匠様って誰だ？

「なあ、妖夢。御師匠様って一体誰の事だ？」

「あ、これは失礼いたしました！ 私とした事が、順序を間違えてしまいました。おほんつ、ユウキ様……どうか、この私を弟子にして頂けないでしょうか？」

畳みに額を押し付け、今までにないほど頭を下げる妖夢。

……でし、つてあの弟子だよな？ これはつまり……妖夢が俺に弟子入りしたい？ だからさつきから俺を師匠と呼んでいたのか？

「えっ、ええええええええ！ おまつ、弟子入りって一体どう言うつもりなんだ!? お前確かもう師匠いただろ!! 一体何で俺なんかに!!」

妖夢は確か、祖父から剣術を学んだと前に藍から聞かされた事があった。

本当、なんでこういう流れになったんだ？

「先日の異変の折、私への御指導とても身にしました。私に足りない物は力と技だけ

ではなく、経験。強者との経験が足りない。幽々子様の側にずっといながら、西行妖に乗っ取られていった事に気付かず、西行妖との戦いでも私が未熟だったばかりに、御師匠様達が要らぬ怪我を負ってしまいました！」

悔し涙を流す妖夢。すぐく真面目な話で、本人的にはシリアスなんだろうが。

いつの間にか俺と妖夢から離れた霊夢達がニヤニヤ顔で暖かい顔をしてこつちを見ている。とてもシユールだな

それに俺は指導したつもりは一切ないんだけど、ここは最後まで黙って聞いた方がいいな。

「この数日間、私はずっと考えておりました。もつと腕を磨きたい。強くなって、今度こそ幽々子様のお役に立ちたい……その為には、御師匠様の元へ弟子入りするのが一番だと、そう決心したんです！」

えつと……どこから突っ込もうかな。

ともかく弟子入りしてないのに、俺を師匠と呼ばないでくれ。

「あのな妖夢？ 俺は別に指導したつもりないし、あの時も言ったけれど確かに妖夢には負けないけど、劍の腕自体は俺より上なんだぞ？ 俺が教える事なんて何も無い」

「そんな事はありません！ あの時はナイフでしたが、御師匠様の腕前は私よりもはるかに上でした！ 勿論白玉楼にお越し頂く手間はおかけしません。私が御師匠様の都

合のいい時に神社まで来ますので、そこで私の剣技を見てくださるだけで構いません
！」

妖夢の眼が更にキラキラ度が上がった。まるで操祈みたいだな……あれはしいた
けっばいけど。

「そう言われてもな。俺は確かに日本刀も使った事あるし、訓練も受けたけど。ナイフ
が一番得意だし刀よりは棒をよく使ったし……咲夜あくお前からも何か言ってくれよ」
思わず助け船を出したが……

「私から見てもユウキ様の腕前は達人の域を越えています。妖夢が弟子入りしたくなの
のは当然、むしろ必然かと……良いのではないですか？ 内心、可愛いお弟子さんが出
来て嬉しいのではないですか？」

助け船は木っ端みじんに破壊された。

しかも、様付けされてるし、後半ものすっごく睨まれたし！

霊夢やレミリアも咲夜の言葉を聞いて、俺を軽く睨んでるし。

「……おに〜ちや〜んっ？」

フランもかよ!?

ここうなったら魔理沙に頼る……のはやめよう。

「うおい!？」

藍、君に決めた！

「藍！」

「諦めてください」

助けを求める以前の問題だったか……幽々子はニコニコと笑ってるし、多分妖夢から前もって聞いてたんだろうな。

「……御師匠様あ、どうか！」

妖夢が頭を下げながらも、眼を潤ませて見上げながら懇願してきた……やばっ、可愛いかも。

「ユウキ（さん・様）？」

「っ!？」

あれ？ さっきより霊夢達が睨んできてる？

なんで俺が責められてるんだ？

フランは無言だけど眼から光消えてるし、狂気に落ちた時より怖いぞ!?

「あくもう、分かった分かった！ 妖夢、俺の弟子になれ！」

もうどうすればいいのか分からなくなったので、仕方なく弟子入りを認めた。

「あ、ああ……ありがとうございます！」

「うおっ!？」

途端に妖夢が満面の笑顔で俺に飛びついて来た。

フランの時とは違って、ちゃんとすわっていたのでなんとか堪える事が出来たけど思わず抱きとめる形になった。

「「「っ!?!」」」

あ、なんか背後からさつき以上にドス黒いオーラを感じる。

「ふふっ、良かったわね妖夢。ユウキ様、ありがとうございます。妖夢の事お願いします……いろいろと」

「おい、待て！ 最後意味深な事言ってるんだよ!?! いや、まて、霊夢、咲夜、レミリア、フラン……なんでお前らそんな怖い顔してるんだ?」

なんだかわけが分からない間に、人生初となる弟子が出来てしまった。

でも今はそんな事より迫りくる霊夢達をどうにかしないと……

「「ユウキ(さん・様)!?!」」 「オニイ〜チャーン?」

「ああ〜もう不幸だー!!」

続く

第79話 「善人」

妖夢が弟子入りして数日経ったある日。

「あはははは、そんな事あったのね。その時いれば良かったわ」

縁側で横に座ったアリスに妖夢が弟子入りした話をする、大笑いされた。

「笑いごとじやないっての。文がいなくてホント良かったと思う。ま、結局次の日きて知られて五月蠅かったけど」

「あの文もなのね。ふーん、霊夢にも驚きだけど、咲夜もそんな一面あったなんて、ちよつとびつくりよ」

「う、うるさいわよ」

ニヤニヤとしたアリスの笑みに、反対側の横でお茶を飲んでいた霊夢はバツが悪そう
な顔でそっぽを向き。

「忘れて、本当に忘れて。あんなに取り乱して、これでも今思うと少し恥ずかしいわ」

俺とアリスにお茶を持ってきた咲夜が、少し顔を赤くしながら同じようにバツが悪そ
うな顔をしていた。

「で、そんな乙女な2人が今の彼の状況、どう思ってるのかしら？」

かなり意地悪な質問をアリスはしている気がするな。主に俺に対して。

「ノーコメントよ」

「流石に、そこまで子供ではないわ」

2人が素っ気なく答えてくれた事は、少し感謝しておくか。

自分でも今の俺の状況、なんだこれって感じだし。

「こんにちは、具合はどうだいユウキ君？」

「お邪魔するわよ。って、また面白い事になってるわね」

そこへやってきた慧音と妹紅。

まあ、笑顔であいさつしかけてあげた右手をそのまま固まってしまったのは、仕方ない。

何せ今の俺は、アリスと霊夢に挟まれてルーミアが膝の上で器用な姿勢で眠り、頭に上海を載せているのだから。

ルーミアはアリスと一緒にやってきて、いつの間にか俺の膝に乗って眠ってしまった。

地味にこの体制はキツイけど、リハビリにはちょうどいいかも？

「……なんであなたはいつもハーレム状態なの？」

ジト目で若干睨んできている妹紅の言い分は至極真つ当な問い、だけど俺に言える事は

ただ一つ。

「もうかつたるいから細かい事は気にしない事にした」

隣でアリスが笑い、もう反対側では霊夢が睨み、後ろからは恐らく咲夜のものであるう深い溜息が聞こえた。

「んん〜？ あ、けーねせんせー……おはよう」

騒がしさに目を覚ましたルーミアが目を擦りながら辺りを見回し、慧音を見つけると膝の上からピョコンと飛び降りた。

お前は猫か？

「ルーミア、おはよう。気持ち良さそうに眠ってたね」

「うん、兄貴の膝、とても気持ち良かった」

まだ言ってたんだその呼び名。名前で呼べとあの時言っただけけどなあ。

この前見舞いに来たみすちーやリグルは俺を普通に呼んでくれてたし。

「兄貴、ねえ。ユウキには似合ってるような似合ってなさそうな呼び方ね」

「笑うなって妹紅。そういうのは一番俺が理解してる」

「シヤンハイイ？」

げんなりとしながら答えると、アリスがまあまあと笑いながらいい、頭に乗っていた上海も無言で肩に手を乗せた。

どうやら慰めてくれてるようだ。

なんか余計に哀しくなった。

「で、今日は2人して一体何の用？ ユウキさんのお見舞い？」

「子供達、特に梨奈がユウキ君の事を心配していたからね。それにいつ来れそうかとも気になっていたよ」

寺子屋の子供達には流石に俺が死にかけた事は言っていない。

ただ、体調を崩して寝込んでいるとだけ伝えたようだ。

「でも私や大ちゃん達が兄貴は元気になってきてると言ってるから、大丈夫だよ」

「そっか、ありがとなルーミア」

フランは寺子屋には行っていないが、ルーミア達が行って俺の事を話している。

だから問題ないとは思ってなかったんだけどな。

「梨奈は、相変わらず？」

「ああ、自分の風邪が移ったのではないかと落ち込んでいたよ。何度も違うと言ったのだけだね」

風邪どころじゃすまないし、でも本当の事を言うわけにはいかないからなあ。

早く寺子屋行って元気な姿見せた方がいいか。

手足も完全に動くようになったし、リハビリも順調だし、そろそろ……

「ユウキさん、まだダメよ?」

と、心を読んだかのように霊夢が俺を睨んでくる。

慧音と妹紅にお茶を出した咲夜も心配そうな顔で見えてきてるけど、もう問題ないんだけどなあ。

「れ、霊夢、それに咲夜も俺ちゃんと言ったって言ったよな? 身体もほら、元通りだ」
縁側から降り、軽くそこらを飛びまわって宙返りまでしてみせたが、霊夢の顔は怖いままだ。

「はあく、過保護ねえ霊夢は。私から見てもユウキはもう完治してるわよ? むしろ動かないとりハビリにならないくらいよ。パチュリーはなんて言ってるの?」

アリスに言われ、パチュリーが最近来てない事に気付いた。

目が覚めて数日は俺に付きつきりだったけど、最近はたまにしか来ない。

代わりに美鈴やこあが来て、俺の様子を見たりしてくれる。

今日も午前中に美鈴がやってきて、はち合わせた文と弾幕ごっこやってたな……何しに来たんだろ、2人共。

「そう言えば、妖夢達が来て以降パチュリー来てないな。咲夜は何か聞いてるか?」

「いいえ。だけど、もう少しで研究が完成するからとか、言っていたわね」

研究、か。何をしてるんだか。

「ともかく、それだけ動けるようになったのは、安心したわ。ねえ、慧音?」

「そうだな。それにしても……異変の度に重傷負っているが、元いた場所でもこうだったのか、君は?」

何気ない慧音の質問にみんながハツとなった。

なぜか意表をつかれた顔をしているけど、それは普通質問された俺がする顔だと思うけど?」

まあ、俺はと言えば、別にどうとも思っていないなかったので慧音が知りたい事を答えた。「こういうのは俺じゃなくアイツの役割だったし、大怪我まではした事あまりないな。怪我はしたけど、後能力の使い過ぎで倒れた時はただの疲労だったし」

思い出してみると、結構俺も病院送りにはなってるけど、重傷は当麻ばかりだったな。魔術絡みの時は、天草式に治療されたりしていたな。

当麻には魔術が効かないから病院送りは当たり前だし。

それでも死にかけた事は、数回あるか。

「あなた以上に病院送りになった人って、一体どんな人よ」

霊夢が呆れた風に言うがそれは俺も同意。

「アイツは、当麻はクラスメートでとにかく不幸の塊みたいな奴で、馬鹿でお人好しだったし甘くて、でも正義感が強くて困ってる人を放っておけず自然に身体が動くような、

まあ絵に描いたような善人だったな。後ものすごく鈍感」

「「「……………」」」

あれ？　なんでみんなしてそんな意味ありげな視線を俺に送って来るんだ？

「わはー、なんだか兄貴みたいだなだね、そのトーマって人」

「……………へっ？」

ルーミアがそう言うと、みんな真剣な表情へと変わった。

ひよつとして霊夢達もそう思ったのか？

「俺が…………馬鹿だと？」

その時、何人かは飲んでいたお茶を吹きだしていた。

「そこじゃないわよ!!　あ、いや、そうだけど、もー」

俺がバカだとは思ってたのか霊夢。

否定は…………出来ないか、うん。

「うーん、でもアイツの馬鹿はなあ俺のとは違うからなあ。あ、そうだ。当麻はラッキー

スケベの塊でもあったな」

「ら、ラッキースケベの塊？　ナニソレ？」

アリスが疑問に思うのも当たり前だな。

俺も自分で言っていて、何っているんだと思ってしまう。

「転べば女性の胸に飛び込む。使用中のシャワールームを開けて、丸裸を見てしまったりとかとか」

「いや、もうそれただの変態じゃない」

……妹紅の言う通りだな

「それを本当に偶然やってしまうのが当麻のすごい所だったな」

「ほうほう、でユウキさんはそんな彼が羨ましかつたんですか？」

いつの間にか文が屋根からこちらを覗き込んでいた。

「羨ましがるわけないだろ。関係ない俺にまで飛び火する事もあったんだし……で、さ
らりと会話に混ぜつつくるな、文」

ま、ルーミアが起きた辺りからいたのは知ってたけどな。

「ちよつと文。来るときは正面から来なさいよ。屋根から盗聴なんて、問答無用で退治されても文句は言わせないわよ？」

霊夢そこは言えないじゃないかと、言わせない、なのか。

「まあまあ、バ鴉は屋根に上るのが好きだから仕方ないじゃない」

「おーこれが大ちゃんの言っていた、バ鴉と言う名の射命丸文なのかー」

「いや、せめて最低限そこはカラスと言って下さい、アリスさん。それにルーミア、私は射命丸文と言う鴉天狗です。大ちゃんにもよく伝えておいてくださいね？」

文……と言うバ鴉のおかげでどうにか話題は反らせたかな？

「そろそろ夕食の支度をするけれど、ルーミア、それに慧音達も食べていくでしょう？
構わないわよね、ユウキさん、霊夢？」

空を見上げると向こうがうつすらと夕焼け空になってきていた。

なんだかんだでもう5月だし、日が傾く時間も遅くなってきたな。

「おっと、もうそんな時間か。せつかくだから食べていつてくれよ。お礼を兼ねて俺が
手料理御馳走するぜ？」

「そこは家主の私に最初に聞く事でしょ！ まあ、いいわよ」

「わーい、ごっはんごっはん！」

「シャンハイー！」

ルーミアは嬉しそうに踊っている上海と一緒に居間へとかけていった。

まだ食事の支度をすると言っただけなのに気が早すぎる。

「ユウキが作る御飯か、楽しみね」

「アリスには紅魔館での食事の約束もしたけれど、どうせならユウキさんの手料理も込
みの方がいいでしょ？」

「ええ、そうね……って深い意味はないわよ?! 霊夢、だからそう睨まないで！」

そう言えば、異変の時咲夜とアリスがそんな約束してたな。

で後日、紅魔館でアリスを招いてもっと豪華な食事会をした。なぜか俺や霊夢も込みで。

「慧音と妹紅は？ 無理強いはしないけど」

「いや、ここは君の手料理をじっくりと品評してあげよう」

「そうね。あなたが料理するってなかなかイメージ出来ない事だし」

「ははっ、流石に咲夜程じゃないけど、期待には応えてみせよう」

こうして、夕食は大人数で楽しいものとなった。

「あ、あの〜？ スルーは勘弁して欲しいんですけど〜？ 私も夕食を……「文様！」

「げえ〜!? 椀、はたて!」

「何が、げえ〜ですか！ もう戻って下さい。今日は天狗の会合があるの忘れたんです

か!」

「愛しいユウキに会いたいの分かるけど、会合には出てこい。って大天狗様からの伝言

よ。ほーら、いくわよ!」

「ちよっ、せめてユウキさんの手料理を、そんな殺生、なあ!」

何だか背後ではたと聞き慣れない声が混ざって騒がしかったけど、すぐに静かになったので俺達は無視した。

ユウキ君と咲夜の手料理をたっぷり堪能し、私と妹紅は帰路についた。途中まで一緒だったルーミアとアリスは魔法の森で別れた。

暗い夜道だったが、妹紅に炎を出してもらいながら歩いて帰る事にした。

森の中も雪がすっかり溶けて、歩きやすくなっている。

「いやあく意外だったわね。ユウキが料理上手なんて」

「そうだな。咲夜には負けると言っていたけど、そんな事はなかったな」

ユウキ君の手料理を食べた妹紅は神社にいた時とは大違いで、さつきから上機嫌だ。

そんな彼女をみて、思わず笑みがこぼれる

「な、何よ慧音急に笑いだして」

「いや何、今の表情をユウキ君にも見せてあげれば良かったのに。ぶつきらぼうにうまい、としか言わなかったじゃないか」

「あ、あれは、別に深い意味はないわよ。何となく霊夢達に恨まれそうだからわざとよ！」

何を誤魔化しているのか分からないけど、こんな妹紅を見るのは久々だ。

不老不死の彼女は、昔から私以外にはぶつきらぼうに接する事が多い。

霊夢や魔理沙はそんな妹紅を気にする事はなかったけど、人里では良い印象を抱いてない。

それがここ最近は変わってきた。

よく笑うようになり、笑顔も愛想笑いではなく年頃の少女のような笑顔になってきた。

そう言えば、霊夢も同じように変わってきた。

2人が変わった理由、その共通点……

「恋する乙女、か」

「ぶっ!? い、いきなり何を言い出すのよ慧音!?!」

「おや? そんなに過敏に反応するのは、自覚はあったのかな?」

「つゝゝ! 慧音の意地悪!」

「あははっ、すまない」

これはからかいすぎたか。

妹紅もユウキ君の事が好きになってきているようだけど、どうも霊夢や咲夜に遠慮しているようだ。

蓬莱人である自分よりも、普通の人間である霊夢や咲夜の想いを優先しているのかも
しれない。

そこまで深く考える事ではないが、これはまだ強く言う段階ではないな。

「……そう言えば、ユウキの奴。文が乱入したおかげで、当麻って友人と自分が似てい

るって話題が反れてほつとしていたわね」

「そうだな。そこら辺は相変わらずだった。外の事を話す事を線引きしているようだ」
妹紅は当麻をユウキ君の【友人】と言ったが、彼の口ぶりからは当麻という【知人】の話に聞こえた。

それは話の内容ではなく、話し方に違和感があった。

自然に話しているように振る舞っていたが、まるで実際にいる人物ではなく、本に書かれた登場人物を紹介するような話し方だった。

霊夢や咲夜、アリスもその事に気付いていたけど、誰も触れる事はなかった。

「そういう所を聞きたくて、あんな質問をしたんでしょ？ 文がいなかったらもつとルーミアが突っ込んだ事聞いたでしょうね」

私は外の世界での彼の事をもつと聞こうとした。

それが、彼がなぜ幻想郷に来たのか、その手掛かりになると思ったからだ。

でも、その話は中断された。

「そうだな。子供は特に核心を突く事を遠慮なく聞くからな」

——わはーなんだか兄貴に見たいな人だね、そのトーマって人

——へっ？

あの時の彼の表情、何か突拍子もない事を言われたような顔だった。

「馬鹿でお人好しで甘くて、そして、困っている人を放っておけない。そのまんまじゃない」

「後は……ラッキースケベで鈍感？」

前者はともかく、後者はどうだろうな。

「鈍感、なのかしら？ それとは違う気がするわね。あれだけされて気が付いてない、ようにはみえないし」

それは何となく理由が分かる気がする。

当麻を友人と心の中では思っていないように「偽っている」理由と似た理由な気がする。

「何にしても、ユウキは……偽悪者で、偽善者で、善人ね」

彼の言う当麻は彼そのものに思えたのは、きっと私達だけではないだろう。

続く

第80話 「水晶石（前編）」

「もう雪もすっかり無くなつたな。まだ少し日陰に残っている程度か。もう少しで桜も咲きそうだし、そうなつたら花見と魔理沙が言つてたな」

今俺は神社近くの森の中、その木の枝に乗っている。

周囲をぐるりと見渡し、ゆっくりと深呼吸をした。

両手足を軽く動かすと、やはり若干の重たさを感じる。

少しなままっているみたいだけど、この程度なら特に問題はなし。

「ふー……よしっ、やるか！」

まずは右下に見える太い枝に跳ぶ。

片足が枝に付いた瞬間、左前方の枝に目をむけ距離を測り跳ぶ。

枝を掴み跳ぶ方向を変え、別の枝に飛び移る。

同じような事を何度も繰り返し返す。

目で追つてから跳ぶより、跳びながら目で追う、周囲の枝の配置を瞬時に視界に収め連続して跳ぶ。

段々と木の枝を飛びかう速度があがり、しばらくすると魔理沙と再戦した時のように

高速で移動できるようになった。

木の枝だけではなく、木の幹を蹴り上がり三角飛びの要領で大樹の天辺の枝に昇った。

「あーいい眺めだ。空を飛んでもいいけど、やっぱこういう高い所で見渡すのもいいな」
学園都市でもよく高層ビルの屋上に昇っていた事はある。向こうはビルばかりの都会で、こっちは自然が溢れていて見た景色は全く違う。

思えば、こういう大自然の中で高い所に登った事はないな。

ロシアに行った時に数回木に登って辺りを見渡したけど、あの時は余裕あまりなかったし。

「少しは感覚戻ったか」

手足を軽く振ってみるとさつきまであった違和感がなくなっている。

でも、あまり無茶ばつかしてると後で霊夢と咲夜が怖い。

今もちよつとりハビリに走っていると、書き置き残したが……不安だ。

「ん、この気配は……まあいいか。早く戻ろう」

両手を広げ、そのまま自由落下。

すぐに幹を蹴り隣の枝まで跳び、そこからは次々と枝を飛び跳ねて神社まで向かった。

移動しながらふと、お前は忍者か！と自分で自分にツツコミたくなった。

「さて、そろそろか……なっ！」

太めの枝を探し、少し力を入れて跳んだ。

そして、空中で回転蹴りの動作をしだした瞬間、飛び出してくる人影があった。

「はい、ユウキさーん！ 私の胸にとび……わひゃ!? ウゴツ!」

思いつきり枝に頭をぶつけ悶える文を置いて、そのまま突き進む。

「ちっ、外したか。まあいい、次がある」

などと思いつきり悪役なセリフを吐いたが、反省はしていない。後悔はしている。もつとタイミングを測るべきだったと言う後悔だ。

何をしたのかと言われれば、文がこっちに向かつてる気配がして、ちようど俺の前に出ようとしていた。

だから俺は、タイミングを合わせてカウンターの要領で回し蹴りをお見舞いするつもりだったけど、やっぱり少し少なまってたようでタイミングを外した。

だけど、文もギリギリ反射的にかわしたせいで頭を枝に思いつきりぶつけてしまった。

涙目で後頭部をさする姿がちよつと可愛かったが、本人には内緒だ。

「いたたたっ。い、いきなり蹴りはないじゃないですかー！ しかも、そのまま放置!」

後ろで何やらごちゃごちゃうるさいが、これだけ加速しているのに急停止などしたら反動が凄い事になる。

わざわざ止まって文の相手をするのも面倒なので、そのまま速度を落とさず神社に戻る事にした。

どうせ追いかけてくるだろうし。

そうこうしているうちに博麗神社に到着。誰かいるようだけど、この気配はレミリア達か？

速度を少しずつ落とし、境内に跳びだし土煙を出しながら着地。

「コホツコホツ！　ず、随分と派手な着地ねユウキ。ゲホゴホッ！」

「大丈夫ですかパチュリー様!？」

「だから中で待つてなさいって言ったのに……」

「お兄ちゃんおかえりー!」

激しく咳き込む声に顔をあげる。

そこには土煙を思いつきり吸い込んだのか咳き込むパチュリーに、それを介抱する美鈴。

そんなパチュリーを呆れたように見るレミリアに、無視して笑顔で俺を出迎えたフランがいた。

「よつ、大勢で今日はどうしたんだ？」

「パチュリーがあなたに用があるっていうから、せっかくだからとみんなで来たのよ。当の本人がこの状態だから少し待つてなさい」

「みんな？ こあは留守番か？」

こあがいない事に気付く。いたらいたで文以上にうつとおしい事になるけど、姿が見えないのはいきなり現れそうで不気味だ。

「こあなら霊夢達とお兄ちゃんを探しに行っちゃったよ」

「……なるほど」

こあは俺がいないのを知って、霊夢や咲夜と一緒に探しに出たようだ。

「こあも心配性だな。せっかく書置き残したのに」

「その書置き、2人共気付いてなかったわよ。部屋に入ってあなたがいない事知ったら、真つ青にして3人共飛びだして行ったから」

「なんで枕に置いたのに気付かないかな」

「すぐに私が書置きに気付いて止めようとしたんですけどねえ」

止める暇もなかったです。と美鈴は苦笑いを浮かべた。

「ユウキサーン！」

その時、怒号と悲鳴と安堵が混ざった叫び声が聞こえてきて、霊夢達が帰ってきたが、

なぜか文も一緒だった。

「生きてて良かったですよ〜!!」

「それは大げさにも程があるだろ、こあ?」

どうやったたらそこまで深刻な事態を想像するかな。

「一体どこに行つていたのよ!?!」

「ちよつとそこら辺を散歩してた」

「霊夢やこあとさつきまで色々探したんですよ!?!」

「ちゃんと書置き残してたんだけどな」

「書置き?」

霊夢と咲夜は美鈴が持つていた書置きを見た。

それでも納得出来ないと言う顔をしてまた俺に詰め寄ってきた。

「どうして私達に一言言つてから出掛けなかつたのよ。こんな分かりにくい書置き残したつて分からないでしょ!」

「……枕にわかりやすく置いたんだけど? つてか部屋にいなかった程度でそんな大げさな反応するとは思わないだろ」

溜息をはきつつ反論すると、霊夢は露骨に視線をそらした。

これじゃトイレや風呂に行くのも一声かけなきやダメか?

「確かに、少し慌て過ぎたわね。大方リハビリに行くと言えば霊夢が許可しないと思っ
たんでしょ？」

「言っても言わなくても結果は同じだったようだけどな」

これなら言ってから出た方がまだ……マシじゃないな、うん。

で、完全に俺に文句を言うタイミングを逃していた文がずずいつと俺の前に出てき
た。

「ユウキさん、ひどすぎですよ！ いきなり飛び蹴りだなんてー！」

「いやあく急に文が飛び出してきたら回し蹴りしたくなるだろ、普通？」

「あーそれは蹴りたくなりますねえ、うんうん……つてなるわけないじゃないでしょう
!？」

なると思うけどな、ならないか？

「んで、今日は何しに来たんだ？」

俺と文の漫才にあきれ果ててたパチュリーが、何かを思い出したかのように手をポン
と叩いた。

表現が古いな。いや、ここじゃまだ新しいのか？

「もう色々言うのも面倒になったから簡潔に言うわね。これを付けて幻想支配使って誰
とでもいいから戦って」

そう言ってパチュリーが手渡してきたのは、小さい透明な水晶が付いたリストバンドが2つと首飾りが1つだ。

マジックアイテムかと思っただけど、特にそういう感じはしない。両手と首に付けたが、特に変わった所はない。

「えらく簡潔に言っただな。で、これは何だ？ 幻想支配の源にあるっていう無色透明な力に反応する水晶、って所か？」

「……………」

ん？ 急にパチュリーが黙ってシヨボンってしちやっただぞ？

「説明しようとした事を全部言われてしよげちやっただんですよ。ユウキさん、勘が良すぎます」

「そんな事言われてもなあ」

こあがこつそりと俺に小声で教えてくれたけど、想像がついちやっただからしょうがない。

「あーパチュリー。で、これを使って能力使えばいいんだな？」

「……………そうよ。誰の使ってもいいわよ」

テンション下がってるなあ。俺のせいかな？

慰め方がわからないので、気にしないでおこーう。

「じゃあ……美鈴のを使うか」

美鈴がガッツポーズして他のみんなは残念そうな顔をしているけど、なぜだ？

「で、誰が相手してくれるんだ？」

「私がやるわ。たまにはこういうのも悪くないし」

さつきから霊夢が静かだったな。てつきり戦うの反対すると思ったのに。

「意外だな霊夢。反対しないのか？」

紅魔館で似たような事した時は後で怒ったのに。

「反対しようとしたけど、もう身体も完治したしリハビリも必要でしょ？ それに反対するだけ無駄だしね」

霊夢は色々諦めた！ うん、人間諦めが肝心な時もあるよ。

「ちよつと待って下さい！ 弾幕ごっこじゃないし、霊夢さんじゃ役不足でしょう。こ

こは天狗の私が相手になります！」

「いえ、私が相手になるわ。たまには運動もしないとね」

「えー咲夜さんもやる気ですか、私もやりたいです！」

「美鈴は何度も相手になってるでしょ。お兄ちゃんとは私がやるの！」

「そう言えば、私はまだユウキとまともに戦った事なかったわね。せつかくだし、どう？」

あれよあれよと言う間に、文やフラン達までもが俺と戦いたいと言い出した。

そんな中こあとパチュリーはその輪の中に加わらず、ちやつかり俺の隣に立って成り行きを見守っている。

「2人はいいののか？」

「冗談。あなたの相手が務まるほど自惚れてはいないわよ。それに私は観測しなきゃいけないしね」

「わ、私なんかユウキさんのリハビリ相手になんて無理すぎますよー」

魔法特化の2人じゃ分が悪いとは思わないけど、でもどちらかと言えば今は身体を動かしたいから格闘特化の美鈴か文がいいな。

レミリアやフランじゃパワーがあっても体格差あるし、咲夜はナイフで相手してもらうのは今度にしたくない。

霊夢はどうなんだろ。強力な霊力で身体強化するとは聞いてるけど、格闘は出来るのかな。

軽くストレッチしながら霊夢達の言い争いが終わるのを待っているんだけど、あいつらいつまでやってるんだ？

「「「「じゃーんけーん、ぽんっ！ あいこでしょー！」」」」

あ、あいつら結局じゃんけん始めやがった。

で、何度かのあいこで勝ったのは……文だった。

「やったー！ 勝ちましたー！」

よほど嬉しいのか、そこら辺をピョンピョン跳ねまわって全身で嬉しさを表現している。

対照的に霊夢達はとても悔しそうだ。

中でもレミリアが一番苦虫をつぶしたような顔をしている。

案外負けず嫌いだからなあ。

「良かったな、文。おめでどう」

「ありがとうございます、ユウキさん」

「じゃー！」

と片手を上げて文を見送る。

「はいー！ では私はこれで……じゃないですよ！ 勝ったんだから私と戦って下さい

！ 何のためのじゃんけんですか!？」

わざとじゃなかったんだけど、何となくお約束的な意味でやりたくなった。

「しくしく。ユウキさん、やっぱり私の事嫌いですかー？」

涙目+上目で抗議してくる文がちよっと可愛いかも思ってしまった。不覚。

「いやそんな事ないぞ?」

「じゃ、じゃあ私の事好きですか？」

「いやそんな事ないぞ？」

「どっちですかー!?!」

文との漫才をするのも楽しいと言えば楽しいけど、そろそろイライラしたギャラリィから何か飛んできそうだな。

と思っていたら、陰陽玉やナイフや火球や弾幕が文目がけて沢山飛んできた。

「」「」「いいからさっさとやれ?」「」「」

「……はい」

文はじゃんけんで勝った時とは正反対にテンションが急降下している。

目なんてどんよりと暗くなってるし。

「おいおい、文とタイマンでやるの初めてでこれでも結構楽しみなんだから、もつとやる気出してくれよ」

そう言う文の尖った耳がピクンと動いた。

「楽しみ? 私と戦うのがですか?」

おつ、目に少し生気が戻ってきた。

「ああ、だから早くやろうぜ」

「っ、はい!」

また霊夢達が睨み利かせてきてるからな。

さてと、俺も久々に幻想支配を使うか。

「美鈴力使うぞ」

「はい。早く終わらせて下さいね」

文のやる気を見ると、そももいかなさそうだな。

「んっ……んん？」

幻想支配は問題なく使えた。

そして、美鈴を視るて能力を発動させると、これも問題なくあの時のように全身に力が漲ってきた。

だけどなんだろう。以前よりも身体が軽く感じる。前よりももつと強く能力を使えている気がする。

「これは……？」

この違和感は美鈴も気付いたようで、驚いた声をあげている。

リストバンドと首飾りを見ると、水晶がうつつすらと白く輝きだしている。

チラリとパチュリーに目を向けると、無言でニヤリと笑みを浮かべ親指を立ててきた。

これは、パチュリーの企みが成功しているって事かな？

「問題はないのよね、パチエ？」

「ええ、説明は後でするわ。今は思う存分やっちゃいなさい、ユウキ！」

レミリアが少し心配そうにパチユリーに聞くと、パチユリーは自信満々に頷いた。

「おう！　いくぜ、文！」

「な、何だかよく分かりませんが、いきます！」

文は仕舞っていた羽を大きく広げ、戦闘態勢を取った。

前に紅魔館でレミリアや咲夜達も交えてやりあつた時よりも、本気の構えとみた。

今回は弾幕ごっこことは少し違い格闘主体だけど、弾幕も飛行もありの模擬戦みたいなものだ。

文相手に手加減の必要はないし、思いっきりやるか。

続く

第81話 「水晶石（後編）」

——シユツ！ ガツ！ ヒユツ！ ドツ！

神社の境内に風を切る音と鈍い打撃音が連続して鳴り響いています。

「やつ、せいー！」

ユウキさんが下段から上段へと連続回し蹴りを放ちましたが、文は紙一重で全てかわしてしまいました。

「はっ、たあー！」

文も負けじと蹴りと手刀を混ぜた連続攻撃を繰り出すと、ユウキさんもそれらを全て両手で捌いていききました。

ユウキさんのリハビリも兼ねての文との戦いは、ある意味私とやった時以上に熾烈になっっています。

「これなら、どうですか？」

文は翼を広げ、高速移動でユウキさんに攻撃をしかけてきました。

「この程度ならどうも shouldn't！」

ユウキさんは文の高速攻撃を寸での所でかわしつつカウンターで反撃しますが、文に

は当たりません。

ヒット&ウエイの文に対して、ユウキさんはカウンター狙いです。

「霊夢、動き追えてる?」

「……聞かないで」

あまりの動きの速さに、人間の咲夜さんや霊夢ではそろそろ目で追えなくなってきたようにすね。

「うわあ〜2人共速い速い!」

「最初から飛ばすわね」

あの動きをちゃんと追えてるのは私とフランお嬢様、それにレミリアお嬢様だけですね。

「……………」

パチュリー様とこあは黙って見ていますが、身体強化の魔法を使わない2人には追えていないようです。

私の能力で身体能力を数段引き上げたユウキさん、それに天狗としても最上位の力を持つ文。

2人は最初から本気でぶつかりあっています。

傍から見ればユウキさんが構えている周りを文が高速で飛び交っているだけに見える

ますが、実際は激しい攻防が繰り広げられています。

ユウキさんがあまり動かないのは無理をしない為と、幻想支配の制限時間を少しでも伸ばす為でしょうね。

私の能力である、気での身体能力強化は動けば動くほど消耗し、早く切れてしまいません。

「美鈴、あなた2人の動き追えているわよね。どちらが優勢か分かる？」

「文の方が優勢ですね。まだお互いの攻撃はヒットしていませんけど、ユウキさんは文の攻撃をどうにか防御していますが、文はユウキさんの攻撃を余裕で回避しています」

「……そう」

先程から聞こえてくる風を切る音、これはユウキさんの攻撃を文がかわしている音。

そして、打撃音は文の攻撃をユウキさんが防御している音。

これでどちらか優勢かは咲夜さんにも分かったでしょう。

霊夢も何だか悔しそうな表情浮かべてますね。

気持ちは分かりますが、状況は文の方が優勢なのは悔しいですけど納得です。

いくらユウキさんが人間の中では一番強いと言ってもいくらいだとしても、相手はあの鴉天狗最上位の文。

私は異変の時に勝ったと言え、あの時の文はまだ本気じゃなかったですし、勿論私も

本気ではなかったです。

中途半端に力を出したせいでお互いボロボロになりましたけど。

「それって文はお兄ちゃんの攻撃をかわせるけど、お兄ちゃんは文の攻撃をかわせないから文の方が優勢って事？」

「そうよフラン。でも、それだけじゃないわ。見方を変えれば優劣は逆転して見えるわよ？ よく見なさい。今はどちらに余裕があるように見える？」

レミリアお嬢様に言われフランお嬢様はユウキさん達を良く見ました。

私にはレミリアお嬢様が言わんとしてる事が分かります。

フランお嬢様もすぐに気が付いたようですね。

「あれ？ 最初は文の方が余裕見えて笑っていたのに、今はお兄ちゃんの方が笑ってる？」

最初は文が余裕の笑みを浮かべながらかわしていました。

ユウキさんの方はほぼ無表情で淡々と防御や反撃を繰り返していましたが、今は違います。

文の表情から焦りは無いですが余裕は消えています。

逆にユウキさんは少し笑みを浮かべていますね。

「どう言う事？ まさかユウキさんが文を押ししているの？」

「そうじゃないわ。文は最初こそ違うけど今はユウキの攻撃をかわしているんじゃないわ、防御出来ないでいる。そう言う事よ」

レミリアお嬢様の説明に霊夢も咲夜さんも不思議そうに首をかしげました。

「つまりですね。文はユウキさんの攻撃を防御しようとしたら、防御の上から貫かれるって事です。それだけユウキさんの攻撃力と精度が上がっているんです、この短時間です」

「あなたの能力をより引き出しているようになってきてるわね。幻想支配が強まっていると言う事かしら。面白いわね」

パチュリー様の言う通り、ユウキさんの力がますます上がってきています。

気の力で潜在能力を引き出し尚且つ高める、それが私の能力の1つです。

本人に出来る事は出来るけど、出来ない事はできない。それが幻想支配。

ですが、気の力で自身を強化する上限は本人次第です。

ユウキさんは私と前に戦った時以上に力を引き出しています。

「今のユウキさん相手では、私でも苦戦するかもしれないですね」

「そうね、まるでどこかの戦闘民族みたいね彼は。あつ、文を捉えられたみたいよ！」

ユウキさんがカウンターの掌底で文を弾き飛ばすのがはつきりと見えて、レミリアお嬢様が感嘆の声をあげました。

フランお嬢様や咲夜さん達も思わずガッツポーズを出しました。最初は反対していた霊夢も嬉しそうです。

しかし、ユウキさんのリハビリは過激ですね。

やり過ぎる前にいつでも止めれるように身構えておきましょうか。

念願とも言えるユウキさんとの1対1での対戦。

紅魔館ではレミリアさんや門番などと乱戦になって思う存分ユウキさんと戦えなかったけど、今回はタイマンだから思う存分やれる。

そう思っつてついつい最初からちよつと本気を出してみたけれど、やっぱり彼は面白いし、強いわ。

門番の能力で身体能力を極限まで高めているとはいえ、彼の攻撃は鋭く重い。

最初はそれでも私の方が速いから、難なくかわしていたのだけど段々とそうはいかなくなってきたわ。

彼の攻撃は段々と重みを増して行き、天狗の私でも防御の上から潰されそうな勢いになった。

逆に私の攻撃を、彼はかわせずに防御するしかなかったけど、カウンターを狙われるようになった。

あの魔女が作ったアミユレットのおかげ？ いえ、そうは見えないわね。

それでも、私に攻撃が当たるとは思わなかったけど、私は攻め方を得意のヒット&アウェイに変えた。

高速移動でユウキさんを攻め続けて、どちらにも有効打は与えられず半ば膠着状態になった。

けれどもその状態も長くは続かなかった。

「見えた」

「ぐほっ!？」

何度目かの高速移動からの蹴り。ユウキさんはそれを紙一重でかわし、鋭い掌底がタイミングよく私のお腹を直撃した。

「ありや？ 大丈夫か文？」

「だ、大丈夫です……結構効きましたけど」

彼にとつてもこのカウンターは予想以上に効果があつたみたいね。

人間よりは頑丈なつもりですけど、流石に応えたわ。

今の攻撃を受けて思いましたが、やはりユウキさんの力が上がっている。

これは防衛するのは危ないわ。

「ふふっ、やっぱりユウキさんは強いですね」

「楽しそうだな文」

「あやや、分かっちゃいました？ 何せこうも本気を出す事なかなかないので」

天狗の中でも大天狗様を覗けば上位の実力を持つと言う自負がある。

でも、私ほどの者が本気を出してぶつかる相手はそうそういないし、使う機会はない。それにそもそも力を見せびらかすのは天狗ではなく、鬼のする事。

弾幕ごつこのルールが出来てからは尚更の事。

勿論、弾幕ごつこに不満はないわ。でも、やっぱりたまには本気を出したい時もある。

ユウキさんは初めて会った時から私をからかったりヒドイ目にあわされたけど、それでも私を侮つてもなめてもいない。

ちやんと自分よりも強いと認めてくれている。

たかが人間に認められても、なんて最初は思ってたけど今はそれがとても嬉しい。だから彼が大好きになった。

私が入間のそれも外来人にここまで惚れ込むなんて、半年前の私には想像もつかなかったわね。

「第一ラウンドはこの辺でいいだろ？ 次はもつと違う趣向でやろうぜ？」

「いいですねえ。ですが、時間は大丈夫なんですか？」

幻想支配で門番の力を使ってから結構立つ。

前回紅魔館での時を考えるとそろそろ時間切れになりそうだけど。

「うーん、まだしばらくは持ちそうだな。初めて使う能力じゃないし、美鈴の能力は俺との相性いいみたいだ」

彼がそう言うのと門番は照れくさそうに笑った。

ちよつとムカつとくるわね。

私の能力使つてくれればもつとあなたは強くなると言うのに！

「そうですかそうですか、それじゃあ容赦も手加減もいりません、ねー！」

言うが早いか、私は懐から葉団扇を取り出し素早く振り風の弾幕をはなつた。

「容赦も手加減もする暇与えないさー！」

対するユウキさんも両手を振り、門番の弾幕を放ち相殺させた。

うーん、しかしこの程度でヤキモチ妬いちやうなんて、我ながらちよつと子供っぽかったかしら？

「対応が速いですね」

「天狗に褒められるのは光栄。これでも早撃ちは得意だったんでね」

元の世界にいた頃は拳銃を良く好んで使ってたんだっけ。

その装備の彼とも戦つてみたいけれど、ここじゃ無理ね。

「じゃあもつともつと早撃ち見せてください、ねー！」

葉団扇を何度も振り、さつきよりも速く濃密な弾幕を放つ。

「そういうやり方じゃないんだよな、俺の弾幕ごっこは！」

彼は自分に向かつてくる弾幕のみ迎撃して、そのままその場から飛び跳ねた。

行く先は森の中、そこは彼のテリトリーね。

わざわざ追いかけるのもあれだけど、天狗の速さをもっと体感してもらいましょうか

！

「弾幕ごっこで鬼ごっこですか！」

「おーにさんごっこちらっ♪」

「私は天狗です！」

などと軽口を言い合いながら、私は彼に向けて弾幕を放ち続けた。

彼は先程していたリハビリと同様に、木の枝を飛びはねながらかわしていく。

ただ空を飛んでいるだけじゃ、私に速度で敵わないのが分かっているから、自分の得意の移動方法で避けているわね。

魔理沙との再戦でも同じように飛び跳ねて彼女を翻弄していた。

あの時は能力の補助はなかったけど、今回は違う。

身体能力が強化されて、脚力もアップしているので前後左右縦横無尽に飛び跳ねている。

その速度は単純に空を飛んでいる私に匹敵するほど。
やっぱり彼は戦い方が上手。

これじゃ椀程度じゃ絶対に勝てないわね。

「よそで見禁止だぜ？」

いつの間にか私の真横にいた彼が、両手を構えた。

あれは門番のスペルカードを使おうとしているわね、ならばこつちも！

「虹符・烈虹真拳」！

「風符・天狗道の開風」！

彼の放つ虹色の乱打と、私が放った烈風が激しくぶつかりあい、お互い吹き飛ばされてしまった。

すぐに私は体勢を立て直し、木の幹を蹴り彼を追撃しようとした。

彼も空中で受け身を取りながら勢いを利用して森を出て、境内に戻って行った。

私は更に加速して行き、彼の着地と同時に次の攻撃に移るつもりでいた。

けれども、彼は空中でスペルカードを発動させていたようで、両手に気を練り込んでいた。

って、このスペルカードは……まずっ!?

「星気・星脈地転弾」！

身の程もある巨大な気弾が私に向けて放たれた。

紅魔館の時もこのスペルカードを、同じような状況で放たれて負けた。

けれども今回は……

「【風符・天狗報即日限】！」

自身の周りの風の流れを操り一時的に速度をあげ、紙一重で急上昇する事でかわす事ができた。

「あのタイミングならいけると思ったんだけどなあ」

「ぎ、残念でしたね！ 天狗の速度を甘く見ないでくださいー！」

「それにしても結構焦ってたな」

正直、門番の時と同じシチュエーションじゃなかったらさっきので負けていたかもしれない。

門番が向こうで意味深な笑みを浮かべてこっちを見ているのも、癪に障るわね。

「じゃー今度はこっちの番ですよ！ 【突符・天狗のマクロ……っ!?!】」

風の塊を眼下の彼に向けて落としたけど、彼はそれよりも速く飛び上がっていた。

「おりゃー！」

気がついた時には私の少し上にまで飛び上がっていて、右足を高く上げてカカト落としの体勢になっていた。

「ぐっ!？」

何とか両手を交差させて防御したけれど、思ってた通りその一撃はとても重く、地面に叩きつけられた。

「いたたたつ、ちよつと両手痺れました。容赦ないですねユウキさん」

冗談半分で抗議の視線を送ったけれど、彼は全く気にする様子はない。

「対して効いてないだろ。それにあの速度でも反応されると思ったし」

不意をついた攻撃をしたようにみえて、私が防御するのを読んでたのね。

でも、腕がしびれたのは本当だったりする。

「さてと、そろそろ制限時間になりそうだし。次が最後だな」

「そうですね。もっと楽しみたかったですけど、これ以上は……」

チラリと横目で霊夢達を見ると、案の定睨まれた。

これ以上はダメのようね。

「じゃ、いくぜ!」

「行きますよ!」

彼と同時に飛びだす。私は空を飛び、彼は地を翔ける。タイミングも速度もほぼ同じ。

ちよつとぶつかりそうになる直前、最後のスペルカードを放つ。

「【彩符・彩光乱舞】！」

「【竜巻・天孫降臨の道しるべ】！」

彼の放った虹色の竜巻と、私の生み出した竜巻が激しくぶつかり、一つの巨大な竜巻へと変貌した。

これは予想外すぎる!?

「うわわっ!?

「あややつ!?

彼も私も竜巻に翻弄され、そのままきりもみ状態となり吹き飛ばされてしまった。

「ユウキさん!」

「危ない!」

受け身も取れないまま大木に激突すると思った次の瞬間、私は門番によつて抱き止められていた。

彼もメイド長が時間を止めて受けたようで無事だ。

「あなたに助けられるとは正直言つて予想外でした。彼の方に行かなくて良かったのですか?」

彼女が私を助ける理由はないけど、超お人好しなのね。

「そうですね。助ける義理もないし、あの時の意趣返しでユウキさんを助けたかったし、

ライバルが1人減った方が良かったですけど……なんて、冗談です。咲夜さんと役割分担、適材適所ですよ」

「なるほど……」

彼よりも私の方が速く大木にぶつかるから、私を優先させた。

ホント、妖怪らしくないですね門番……美鈴も。

「……助かりました、美鈴」

「いえいえ、どういたしまして、文」

などと初めて嫌味なしで名前を呼び合い、2人で笑い出した。

はあくこれも彼の影響かしらねえ……

「何、友情深めあつてるのよー」

「いだっ!？」

唐突に霊夢から頭に陰陽玉が投げられた。

霊力が籠っていたので、地味に痛い。

「いきなりどうしたんですか、霊夢さん？」

「どうしたもこうしたもないわよ！ やりすぎにも程があるでしょ、何なのよさつきの

はー」

「さつきの、と言われても、これくらいの事。美鈴も紅魔館で彼のリハビリに付き合う

時にやってみましたよ？」

鬼の形相で睨む霊夢、それを美鈴は明後日の方をみながら口笛を吹いてごまかしていた。

直後、美鈴も陰陽玉を脳天に食らっていた。

「全く、あの時といい今回といい、リハビリなんてレベルじゃないでしょ！」

「あははっ、ごめん、咲夜。ありがとう」

スペルカードでのぶつかり合いで弾き飛ばされた俺は、咲夜に助けられた。

文の方は美鈴が助けに入ったようで、あっちも無事だ。

「本当にあなたたつて見てる方がハラハラする戦い方よね。でも大事なくて良かったわ」

「ユウキさん、大丈夫ですかあ!？」

「お兄ちゃん、どこも怪我してない!？」

パチュリーがジト目で睨み、こあとフランが心配そうに駆け寄ってくる……アレ、なんか見た事あるような光景だなこれ。

「ふふっ、相変わらず血を滾らせる戦いをするわねユウキ。霊夢や咲夜が何度も飛びだしそうになってたわよ？」

レミリアは今の戦いをみて非常に満足そうだった。見ているだけで収まるのなら前

みたいな事にはならないか。

「で、パチュリー。この水晶一体何だったんだ？ 最初はブースト効果でもあるのかと思っただけで違うみたいだし」

美鈴の能力を使った時の違和感、それはただ単に幻想支配が美鈴の妖力に適應して効果を増加させたからにすぎなかった。

ならこの両手と首につけた水晶が光つたのは一体何だったんだ？

「ふふん、これはね幻想支配の元になっている力、無色透明なあなたの力に反応する新しい魔法石よ！」

ババーンと盛大に発表したパチュリーだったが、何の用途の為の石かピンとこない。

レミリアや咲夜達も同じようで、皆首をかしげている。

俺達の反応がイマイチだったのが拍子抜けだったようで、パチュリーは不満そうだ。

「あ、あのね。要するに通常魔力で生み出される魔法石はその術者の魔力に反応するのだけど、これはあなたの持っている力にのみ反応するの」

「それは何となくわかるけど、これが一体何になるんだ？」

俺に魔力とも妖力とも違う力があるのは前に聞いた。

学園都市の科学力でも、イギリスやローマの魔術サイドにも解けなかった力の一端を解明したのはすごいと思っただ。

そして、今回その無色透明な力に反応する石をパチュリーがここ数日で錬金術を使い作りだした。

それもすごいと思う。

「あなた……本当に自分の事には淡白よねえ」

「いや、パチュリーはすごいと思ってるって」

「そういう事じゃないのだけど、まあともかく話を続けるわね。この石が完全にあなたの力に反応するかの実験はこれで大成功。次の段階へと進める事が出来るわけ」

「ふむふむ、次の段階？」

石を作って次は何をする気なんだ？

「そう。これを使ってあなた専用の武器を作る。これが第二段階よ。まあ第三段階も考えてるけど、それはまだ出来あがってから話すわね」

「俺の……武器？」

この水晶のような石が俺の武器になるのか？ 見た所とても頑丈そうには見える。

加工すれば武器にはなりそうだな。

「ただの石じゃない事くらいあなたにも分かるでしょ？ これを元に練成したまさにあなただけの武器を作る。あなたが今まであの時の一件の報酬を決めないから、私が勝手に決めさせてもらうわ」

「えっ？ あれはこの前の異変でのマフラーで十分だって、おかげで死なずに済んだんだし」

てつきり美鈴にもらったマフラーにかけた身代わりの魔法。あれが報酬だと勝手にそう思ってた。

「それじゃ魔女としての私の沽券にかかわるの。いいから、どんな武器が良いか言いなさいよ。刀でも槍でも斧でもなんでも出来るわよ。流石に銃は無理だけど、それでも数本作れるわよ？」

「へえ、やるじゃないパチエ。しばらく実験ばかりやってて何してるかと思えば、こういう事してたのね」

そう言えば、パチユリーはここ最近、図書館に籠りっぱなしだったな。

そこまですてもらう事は全くないのだけど、咲夜もフランも素直に受け取れと目で見ている。

正直、武器の事は考えなかったわけじゃない。

幻想支配はあくまで他人の力を借りるのであって、相手次第で弱くも強くもなる。

能力もち相手だといけれど、火織やアックアみたいに能力をコピー出来ず、身体能力でもこつちを圧倒する存在には相手にならない。

ここでは妖夢がそれに該当する。

彼女には勝てたが、それは経験値の違いと、俺の得意なナイフを咲夜から借りて使ったからというものでかい。

俺専用の武器が出来れば、それはそれでかなり助かるだろう。

「大体分かったけど、これを使って俺専用の武器を作っても、どんな効果があるんだ？」俺の力に反応してビカビカ光るだけの武器なんて、目立つだけだ。

「例えば、この石を使って刀を作るとするわ。そして、その刀に幻想支配を使うように視たり、力を籠めたりすると、切れ味があなた次第でいくらでも変わる刀が出来るのよ。豆腐すら斬れない刀も、鉄をもさくつと切り裂く刀もあなたの力の入れ次第ってわけ」そう聞くとこれはかなり便利な武器が出来あがりそうだな。

切れ味がよすぎると相手を簡単に傷付けちゃうからな。
でも、切れ味を意図的になくす事が出来れば、相手を気絶させて無力化するだけにする事も出来る。

「へえ、随分と便利なものが出来あがりそうね」

いつの間にか霊夢や文、美鈴もこちらにやってきてパチュリーの話を聞いていた。

「いくらあなたでも能力無しの素手じゃどうにもならない妖怪は沢山いるわ。そんな相手に出くわして周りに誰もいなかった時、武器があると便利よ」

「そうですね。ユウキさんに専用の武器があれば、まさに鬼に金棒じゃないですか」

「私もいいと思いますよ。素手だけじゃ無駄にキズを増やすだけになっちゃいますから」

意外にも霊夢は賛成のようだ。

文も美鈴も俺を心配して勧めてくれている。

うん、ならここはパチュリーに任せてみよう。

「パチュリー、じゃあこれで俺の武器製作頼むよ。形状の違うナイフが2本。具体的な形状は後で紙に書くよ」

「そう、あなたはナイフが得意なものね。でもナイフ2本だけでいいの？ 精製したものはまだあるから、それ以外にも刀も作れるわよ？」

「ナイフだけで十分だ。刀もいいけど、ナイフの方が持ち運びに便利だし、使いなれてるからな」

刀を作ってもらえば妖夢への稽古にも使えそうだけど、あまり出番なさそうだし。

「分かったわ。じゃあ、早速製作に取り掛かりましょうか。出来れば2、3日図書館に居てほしいのだけど、どう？」

「えー!？」

紅魔館に泊りつて事か、体は問題ないし今の戦いでもかすり傷も負ってないから大丈夫か。

で、なぜか霊夢が反応している？

「善は急げと言いますものね、流石はパチュリー様」

「えっ、おい美鈴。俺はまだ何も言っていない」

俺が返事をする前に美鈴がすでに乗り気だった。

「ユウキさんの着替えの用意は出来てるから、後はその身一つで紅魔館に向かうだけね」
咲夜まで俺が紅魔館に泊まる事を前提に話を勧めているし。

しかも、いつの間にか俺の着替えまで用意してる!?

「ちよっ、ちよっと待ちなさいよー」

「ユウキさんのお部屋はこの前泊まって頂いた部屋ですよ。掃除もばっちり私がしましたので大丈夫です!」

霊夢が抗議の声をあげようとしたが、こゝかに遮られた。

「わーいお兄ちゃんお泊りだ!」

「ふふふっ、これでしばらくはまた楽しくなりそうね」

この吸血鬼姉妹は……諦めよう、うん。

「いやあくこれでまた紅魔ハーレム生活が始まるんですよね。どうですかユウキさん？」

「急にインタビュワーになられても、俺は何も答えられないっての! で、霊夢……?」

どこから取り出したマイクを向ける文にチョップをして、さつきから無言で睨んで
きける霊夢に声をかけると。

「……………何よ？」

声色が怖すぎる……………これはとんでもなく不機嫌な時の声だな。

「と言うわけで、ちよつと紅魔館に行ってくる」

「……………はあく、分かったわ、分かったわよ。あなたが断らないって事くらい。行つて
きていいわよ」

霊夢も色々と諦めてくれてるな、うん。

「じゃあ行きましょうか。そうだ、霊夢。ついぞと言つては何だけど、今日の夕食は豪華
にするつもりなの、だからあなたもいらつしやい。咲夜、問題あるかしら？」

「いえ、問題ありませんレミリアお嬢様。霊夢の着替えもここに、戸締りも大丈夫です」
「手際良すぎでしょ!? 人の下着まであさるな！ ああくもう分かったわよ！ 行つて
やるわよ！ ユウキさんだけあんた達に任せておけないものね！」

あれよあれよと言う間に話は進み、霊夢も俺と一緒に紅魔館へお泊りする事になつ
た。

「あの〜ついでのついでに私も、いいでしょうか？」

「あら、あなたはダメよ。せつかくユウキと戦う権利を譲つたのだから。次は私達の番

よ?」

「ええ〜!? なんでそう来ますか!?!」

文もついてくるつもりだったようだけど、レミリアに言いくるめられて泣く泣く山へと帰る事になった。

何だか可哀相だけど、俺は招待される側だから何も言えない。

仕方ないから今度飯でも御馳走するか。

「文、今日は楽しかった。また今度やろうぜ?」

「あつ、はい! こちらこそ、こんなに楽しい時間は久々でしたよ。またぜひお相手して下さいね!」

さつきまでのどんよりとした空気を漂わせていたのに、一瞬で明るく軽やかになった。

そんなに戦うのが好きだったのか、天狗は好戦的じゃないと聞いてたけど、文は別かな?」

ともかく、こうして俺と霊夢は紅魔館に泊まる事になった。

道中アリスを見かけ、そのままレミリアに招待されて一緒に紅魔館へ向かい、騒がしい食事会を堪能する事になった。

続
く

第82話 「幻想武装」

紅魔館に泊まった次の日の午後、ここはパチュリーの図書館にある少し開けた広場。今、俺の両手にはパチュリーが生み出した水晶石で出来たナイフがある。

左右のナイフの形状は先端が両刀で、根元が方刀のコンバットナイフを元にやや大きめに作ってある。

俺が学園都市でいつも使っていた形状だ。

「それじゃ準備はいい、ユウキ、アリス？」

これから始めるのはそのナイフを使った実験。

パチュリーが言うにはこのナイフに幻想支配を使う事で、俺の力が流れ込み弾幕を切り裂いたり弾く事が出来るようになるらしい。

早速試してみようと思った所に、昨日から泊まっていたアリスが相手として名乗り出た。

アリス曰くしばらく人形達を遊ばせていなかったもので、ちょうどいいらしい。

俺の幻想支配についても実際に見て味わってみたいとも言っていた。

やっぱアリスも魔法使い。俺の力に興味があるようだ。

「ああ、俺はいつでもいいぜ」

「私もいいわよ、パチュリー」

両手に握ったナイフに幻想支配を使う感じで両手に力を籠める。

すると、ナイフの柄に埋められた水晶が淡く輝き、刀身が白いモヤのようなもので覆われた。

これが俺の無色透明な力を実体化させたって奴か。

そして、パチュリーや霊夢が見守る中、アリスが両手を俺にかざし、弾幕を放った。

「まずはこれくらいね」

弾幕、と言うには余りに密度が薄く、10発もいかない程度の弾幕。

けれども、これは弾幕ごっこではない。

「この程度なら、あつという間だな」

両手のナイフを振り、有言実行。あつという間に弾幕を切り裂いた。

ナイフに斬られた途端にアリスの赤い弾幕は霧散して、消えてしまった。

「まだまだ物足りなさすぎだろ、アリス」

「言うじゃない。だったら次にいきましようか。上海、蓬莱！」

「シャンハーイ！」

「ホウラーイ！」

アリスが腕を振うと、風船を頭に付けた上海と蓬萊が現れ、次に上海よりも一回り小さな人形達も出てきた。

次にやるのは応用編。パチュリー曰くナイフに注ぎ込む力を調整する事で、弾幕を斬るのではなく弾く事が出来るようになるという。

弾幕ごつこのルールのそれにどうかと思つたが、通常弾幕はともかくスペルカードの弾幕までは弾けないと言う事なのでこれも試してみる事にした。

アリスが操る人形は20以上、全ての頭に風船が付いている。

この風船を弾いた弾幕で割るのが目的だ。

それにしてもこの人形の数はすごい。アリスは平然とした顔で操っている。

「へえ、流石アリスね。あれだけの人形を自在に操れるなんて」

「錬金術や属性魔法が得意なあなたとは系統が違うけど、これでも魔法使いとしては最高クラスと自負してるのよ?」

パチュリーの賛辞にも、慢心ではなく自信と誇りを持って答えている。

今度アリスの魔法を使わせてもらおうかな。と少し興味を持った。

「おっと、おしゃべりは後で。じゃ改めていくわよ!」

「はい」

さつきと同じ要領でナイフに幻想支配を使い、力を流しこむイメージを作る。

んっ、さつきよりも力が吸い取られる感じがする。

「それっ!」

アリスの掛け声と共に、上海達は一斉に飛びかかってきた。

そして、それぞれから青い弾幕が放たれた。

「流石に量も濃さも段違いだな、っ」と

今は空を飛んでいないので下から撃たれる事はない。前や後ろ、上からも上海達の弾幕が飛んできた。

さらにアリス自身の弾幕も飛んでくるので、難易度はかなり高い。

「よっ……っ……だ!」

飛んできた弾幕をナイフで撃ち返す。

その弾幕は蓬莱の風船に当たった。

「ホウラーイ……」

哀しそうな声を出しながら蓬莱はアリスの後ろへと下がっていった。

「あららくもう1体目?」

「むっ、これからよ霊夢!」

霊夢が挑発するように言うと、アリスもそれに律義に乗った。

いや、外野が挑発しないでくれ。これ結構キツイ。

「でも、大体分かってきたか、な！」

真後ろから狙つて来た人形の弾幕を弾き、返す刀でナイフを一振り。

それだけで3体の人形に弾幕を当てた。

「こういうの、なんか面白いかも」

次に狙うは真上の2体だけど、ただ撃ち返すだけじゃ簡単に避けられる。

左手のナイフを無造作に上へと放り投げ、逃げるように後ろに飛びつつ向かつてくる弾幕をドンドン上の人形に向けて弾く。

「数だけ撃ち返しても……ええ!？」

余裕の笑みを浮かべていたアリスが急に驚いた声をあげた。

それもそのはず、いつの間にか人形の風船が次々と撃ち落とされていったからだ。

「はいそこまでよ。もう十分でしょ?」

パチュリーが俺達の間を割って入ってきた。

確かに俺の新型ナイフの性能実験はこれで十分だろう。

と言うか、これ以上やったら俺が持たなかった。

幻想支配を解除して【両手】に握られたナイフを美鈴が作ってくれた革製の鞘に納める。

しかし、美鈴もよく短時間でこのナイフにあう頑丈な鞘を作れたよな。

と思っていた途端、体中から力が抜けて今にも倒れそうになったがどうにか堪えた。霊夢には気取られないようにしないと。

ただでさえ、実験に難色しめしてたんだし、これ以上心配はかけたたくない

「……あーなるほどなるほど、そういう使い方ね」

と、俺のナイフを仕舞うのをアリスは俺が何をしたか分かったようだ。

「さつき上に放り投げたナイフに撃ち返した弾幕を当てて、更に跳ね返させたってわけね。気付かなかったわ」

「……20体以上もの人形を操っているんだ。いくらアリスでも集中力に限界があるだろ？」

上海や蓬莱は半自立型人形で、操作や指令はあまり必要ない。

でも、それ以外の人形はアリスが自分で操作しなければいけない。

今のアリスには10体程度なら難なく操れるが、20体もの人形をそれぞれ不規則な動きをさせながら弾幕を撃つ動作をさせるには骨が折れるはず。

無造作に投げたナイフの行き先に目を向かせないように、派手に弾幕を弾いたしな。

「はい、これを使ってアリス」

「ありがと、パチュリー。ふう〜……ちよつとかっこつけたくてやせ我慢してたんだけど、あなたにはお見通しってわけね」

パチュリーが持ってきたタオルで汗を拭くと、アリスはさつきまでの余裕な表情を変させ苦笑いを浮かべた。

「それでもあの数を同時に操ったのは流石だな。流石にコイツがなきや俺も避けきれなかったよ」

瞬発力だけじゃかわすにも限界ある。

例え幻想支配でアリスの魔力使っても、人形はアリスの制御下にあるから簡単には奪えない。

シエリーと戦った時もそうだったしな。

今みたいにナイフで弾幕を弾こうとしても、体力がものすごく消耗されるから持たないし、スペルカードを使われたら弾けない。

アリス単体での魔法ってそこまでないし……あれ？ アリス何気に魔法使いとしては俺の天敵？

場所にもよるけど、弾幕ごっこじゃ勝ち目薄いかも。

「やせ我慢はユウキさんもそうでしょ？ また無理して！」

キツイ口調の霊夢に頭を叩かれた。

実は結構きつく、立っているのもやつとという状態なのがバレバレのようだ。

頭痛がしないでただ脱力感のみなので、幻想支配の使い過ぎと言う事だろうな。

「斬るだけならいいけど、弾けるようになるまでに籠めなければいけない力の量は半端ないって事ね。非効率にも程があるわね」

「でもそれくらいのもメリツトはないとね。弾幕ごっこじゃ使えないし。ただでさえユウキさんの幻想支配は強力なのに、弾幕まで防げたら反則過ぎるわ」

パチュリーのいう通りこれは効率が悪過ぎる。

弾幕を斬る事だけを考えて、撃ち返すのはよほどの緊急の時だけにした方がいいな。

西行妖と戦った時に、妖夢の刀に魔理沙の魔力を通して斬り裂いたり弾いたりはしたけど、あの時は無我夢中だったし消耗を考えてなかったしな。

「あら、一足遅かったかしら。もう終わってしまったのね」

とそこへ咲夜がやってきた。

この実験見たがっていたけど、昨日しばらくぶりに紅魔館に帰ってきたから色々やる事が溜まっていたようだ。

「あら咲夜、随分遅かったわね」

「さつきやつと溜まっていた仕事終わらせたのよ。美鈴やこあががんばっててくれたけど、やつぱりメイド妖精達だけじゃ色々ね」

うっ、俺の世話のために数日神社で付きつきりだったからな……

館の仕事を手伝うと言ったけど、丁重に断られたし。

「悪い、咲夜。手伝えれば良かったな」

そう言うのと、咲夜は苦笑いを浮かべた。

「誤解しないで、そんなつもりで言ったわけじゃないわよ。あなたを看病するのは私がそうしかつたから。で、ここの手伝いを断つたのは私よ。これは私の仕事だもの。そんな事より、あなたにお客様よ」

「俺に客？　なんで紅魔館に俺の客が？」

「ふふっ、どうぞ」

「やつほー」

「ルナサ!？」

咲夜が図書館に通した人物は、プリズムリバー三姉妹の長女、ルナサだった。

「こんばんわーユウキ君、霊夢ちゃん久しぶりー」

相変わらず間延びした物言いだな。理后そっくりだ。

「お見舞いに行けなくてごめん。しばらく忙しかったから……」

「久しぶり。って、そんな事気にしなくていいのに。どうしてここに？」

「ようやく予定空いたからあなたに会いに神社に行ったらもぬけの殻。そこへ魔理沙がやってきて恐らくここだって言ってたから来た」

「なるほどね。で、わざわざ紅魔館まで来たの。へえ〜」

霊夢がジト目でルナサとなぜか俺を睨む。咲夜やパチユリーも同じだ。
ただアリスだけは興味深そうな顔をしている。

「ねえ、この子は一体誰？ ユウキの新しい彼女？」

「「んなっ!？」」

「そんなわけないだろ。って新しいってどういう意味だよ」

アリスはからかっているだけだろうけど、霊夢や咲夜、パチユリーのリアクションが
大げさすぎないか？

「こあは……固まってる。」

「ううん、私は愛人。ユウキ君の彼女は霊夢ちゃん」

「「ええ〜!？」」

ルナサも悪ノリしてるし。あ、こあが今度は気絶した。

「違った？ じゃあ、咲夜ちゃんが彼女で私は愛人。それとも、霊夢ちゃんが妻で、咲夜
ちゃんが恋人で、私が愛人の方がいい？」

「いや、それ私に聞かれても」

悪ノリが悪化してる!?! しかも、乗せた本人まで困惑してるし。

霊夢と咲夜は額に手をあてて深く溜息ついてるし、パチユリーは茫然としてるし……
と言うか俺ほったらかしかよ。

「あ、ごめん。あなたを入れるの忘れてたわ。えっと……」

「私はアリス、アリス・マーガトロイドよ。あなたの事は知ってるわ。よろしくね、ルナサ・プリズムリバーさん？」

「うん、よろしく。じゃあアリスちゃんは、愛人1号で、私は2号」

「あ、それいいわね」

「よくないわよ！ 何さつきから勝手に話進めてるのよ、ルナサ！」

やっとなこち側に戻ってきたかパチュリー。

プリズムリバー三姉妹は紅魔館のみんなとは知り合いだったな。

てか誰でもいいから止めてくれ……なくてもいいか、俺は傍観者でいさせてくれ……
「パチュリーちゃんは……ユウキ君の愛人V3で。あ、それとも愛人ウィザードの方がいい？」

「それどこのライダーよ！ Wでもクウガでもないわよ！ じゃなくて！……全く、相変わらずにも程があるでしょあなたは」

ルナサは前からこんな性格だったみたいで、パチュリーが苦労してそうだ。

アリスとパチュリーはルナサを交えてワイワイと賑やかだな。

「で、いつまで眺めている気？」

「下手に口出せば飛び火するのが分かっている。だったら鎮火するまで傍観してた方が

いいだろ、咲夜？」

「いや、飛び火も何も火種はあなたでしょ」

さつきまで騒がしい輪に入ってたのに、いつの間にか霊夢も咲夜も傍観者になつていた。

「さーって俺は別に何もしてないし。何も言っていない。なら、話してる事は俺の事だとしても、俺は知らない」

別にルナサもアリスも本気で言ってるわけじゃないんだし……いや、半分は本気で言ってるような気がして怖いな、特にルナサ。

「で、いつまで漫才を見てればいいんだ？ メルランやリリカは来てないのか？」

「あの2人ならフランお嬢様に演奏の事を教えているわよ？ ルナサと違って、あなたに会うのは嫌がっているみたいだけど」

そりや出会い方が最悪だったからな。咲夜も分かつて言ってるんだらうな、とても楽しそうに笑ってるし。

ま、どうでもいいか。

続く

第83話 「紅魔ライブ」

久々にパチユリーちゃんと楽しくお話しが出来て、アリスちゃんと言う人形遣いの友達も出来た。

だけど、そろそろ戻らないとリリカがまた怒りそうなので私達は客間に戻る事にした。

「こあちゃんはなぜか私達の会話を聞いて目を回して倒れたっけ。どうしたんだろう？」

「そう言えば、こあはほつといて良かったのか？」

「大丈夫よ。一応ベッドに寝かせてきたし」

私達が戻ってきた部屋は、紅魔館でライブをする時に使わせてもらっている部屋。

そこまで広くはないけど、少人数相手にはちようどいい具合の広さ。

中に入ると、フランちゃんが演奏を終えた所だった。

「失礼します。レミリアお嬢様、フランお嬢様。ユウキさん達をお連れしました。そこらはどうですか？」

「御苦労さま咲夜。ええ、フランが色々教えてもらったわ。メルランもリリカも教える

のが上手よ」

私達はユウキ君に会いに来るついでに、レミアちゃんに頼まれていたフランちゃんへの楽器の指導をした。

メルランもリリカもさつきまで笑顔だったけど、ユウキ君の姿が見えると途端に表情を固くした。

いくら出会い頭に肘鉄をもらったからって、ここまで苦手意識持たなくてもいいのに。

ユウキ君へのお見舞いも2人が洩るから行く時期逃しちゃった。

「よっ、久しぶりメルラン、リリカ。元気そうだな」

「え、ええ、私達騒霊だもの。風邪にも病気にもなりはしないわ」

メルランは相変わらずユウキ君に苦手意識持つてるね。

軽くトラウマになってる？

「そっちは大怪我したみたいだけど？」

「おかげさまでもう全快してるぞ。心配してくれてありがとな」

リリカもメルランよりはいいけど、よそよそしいと言うか、緊張してる感じがする。

それでも彼はそんな2人に普通に話しかけている。

なんか、すごい。

「ユウキ、その顔見るとナイフは完成したようね」

「ああ、パチュリーとアリスのおかげだ」

それを聞いてパチュリーちゃんもアリスちゃんも恥ずかしそうに笑みを浮かべた。

で、それを見た霊夢ちゃんや咲夜ちゃん、レミリアちゃんにフランちゃんも面白くなさそうな顔をしている。

知り合ったばかりのアリスちゃんとはともかく、パチュリーちゃん達もこんな笑顔を浮かべるようになったんだ。

まるで恋する乙女みたいな笑顔だね。

「……何、達観した顔をしてるの姉さん？」

「メルラン、なんでこっちに来てるの？」

「いや、別に特に意味はないわよ」

私の背中に隠れながら小声のメルラン。

そんなに彼が怖いのかな？

でも、ユウキ君はそんなメルランを見てもケロツとしてるね。

「……………」

「うん。分かってるから、その冷たい目はやめて姉さん」

本当に分かってるのかな？

それに私、そんな目をしてるつもりないんだけど。

「ねえねえ、お兄ちゃん！ 私、メルランからクラリネットを教わったの。聞いて聞いて！」

そう言つてフランちゃんは嬉しそうにユウキ君にクラリネットを吹いてみせた。

その音色は習つて数時間の子が奏でる音色には聞こえず、とても綺麗で透き通つていた。

「おお、すごいなフラン」

「本当大したものね」

ユウキ君やアリスちゃんに褒められてフランちゃんは恥ずかしそうだったけど、少し誇らしげだった。

フランちゃんの事は前から聞いていて、いつか楽器を教える約束をレミリアちゃんとしていた。

その約束を今回やつと果たす事が出来た。

「それにしてもフランちゃん、短時間でよくそこまで吹けるようになったね」

「ふふつ、私の妹だもの。物覚えはかなりいいし、それくらいの教養はあるわよ？」

「へえくじやアレミリアも楽器の演奏は得意なのか？」

「勿論。彼女達と一緒に演奏した事もあるわよ」

そうだね。レミリアちゃんは色々な楽器持っていて、よく一緒に演奏したね。

「ちようどいいわ。咲夜、楽器持ってきて。ユウキや霊夢にも私の演奏を聞かせてあげるわ」

「かしこまりました、お嬢様」

あれ？ 今一瞬咲夜ちゃんとユウキちゃんの目が合ったような、アイコンタクトをしたような？

気のせいかな？

「お持ちしました、お嬢様」

咲夜ちゃんはすぐに楽器を持ってきてレミリアちゃんに手渡した。

それを手に持った姿は……うん、とてもよく似合ってるね。

「ありがとう咲夜……ってなんでこれをチョイスしたのよ！ もっと別なのあるでしょ、私に似合う楽器が！」

「かしこまりました。」

咲夜ちゃんが持ってきたのは、寺子屋で子供達が使っているような、ソプラノリコーダー。

とっても良く似合ってるよ。と思わず口に出しそうになった。

それはユウキちゃんや霊夢ちゃんも同じのようで、笑いを堪えている。

「それでは、これをどうぞ」

「そうそう、これよこれ。懐かしいわねえ、昔幼稚園で演奏会……なんてしてないわよ！ 私幼稚園なんて行ってないじゃない！　なんで鍵盤ハーモニカ！」

次に持ってきたのは鍵盤ハーモニカ。

確か、さっきのリコーダーと一緒に外の世界では幼稚園や小学校で使うんだっけ。

しかも、少し演奏してみせたらユウキ君や霊夢ちゃんだけじゃなく、パチユリーちゃんまで吹き出しちゃった。

メルランとリリカも顔を真っ赤にして我慢してるね。

「咲夜、私をいくつだと思ってるの!?　もっと私に似合うの他にあるでしょ、バイオリンとか！」

「わがまま言わないのレミリア。鍵盤ハーモニカもリコーダーもよく似合ってるじゃない」

「そうそう。俺のいた所じゃ、鍵盤ハーモニカやリコーダーを使ったプロの演奏家もいるんだぞ？」

「そういう問題じゃないわよ！」

霊夢ちゃんとユウキ君がフオローしてるけど、フオローになってるのかな？

「……」

「…………ふふっ」

ふと咲夜ちゃんと目が合ったので、無言でサムズアップすると、笑顔でそれに応えてくれた。

でも、これ入れ知恵したの絶対ユウキ君だよな。

「まあまあレミイ、楽器なら私が用意してあげたから、これを使って演奏しなさい」

「パチエ……………ありがとう。やっぱり一番頼りになるのは親友のあなただけね」

そう言つてパチユリーちゃんが手渡したのは、カスタネット。

「わあくこれなら誰でも簡単にリズムがとれるわね、うんたんうんたっ……………つてアホかあ!!」

「ブツ！」

「こらその騒霊！ あんた達まで笑うんじゃないの！」

さつきからノリツツコミがうまいねレミアちゃん。

とうとう堪え切れなかったメルランとリリカまで嘖き出しちゃった。

「それと、こあ！ 後ろに隠したそれ出したら、グングニールの刑だからね！」

「ギクッ！」

いつの間にか戻ってきたこあちゃんが後ろ手に隠したのは、トライアングル。

本当に色々な楽器持っているんだね、レミアちゃん。

「はあくお姉様さつきから我がままばかり。お兄ちゃんと霊夢は何か楽器演奏できる？　一緒に演奏しようよ！　咲夜もいいでしょ？」

「ええ、それでは私はピアノを弾かせてもらいますね。美鈴も呼びましょうか」

まだワーワー騒いでいるレミリアちゃん達を尻目に、フランちゃんはどうかやらせつかく演奏を覚えたのでユウキ君達と一緒に演奏したいみたいだね。

咲夜ちゃんも美鈴ちゃんも混ざって演奏会した事もあったね。

「私は琴を少しと、あと横笛なら紫に無理やり習わされたわね。ユウキさんは？」

「俺は楽器を触った事すら数回程度だな。基礎知識はあるけど、リコーダーすら演奏した事はないし、楽譜も読めないな」

「へえ〜そうなの。何だか意外ね。確かユウキ君は外の世界の人だよ？　学校で習ったりは？」

リリカの言う通り、ちよつと意外。ユウキ君は何でも出来そうな気がしてたから。

それに外の世界では学校と言う寺子屋みたいな場所で、色々な楽器を演奏したりするはずだけど。

それを聞くとユウキ君は困ったような表情を浮かべた。

「俺は学校あまり行つてなかったからな。家庭教師みたいなのはいたけど、音楽系に關してはさっぱりだ」

何だかユウキ君の昔の事は、聞いちやいけない話みたいだね。

霊夢ちゃんも咲夜ちゃんも表情に影が差しこんでいるし。

「そうだ。ユウキ、幻想支配でルナサ達の能力をコピーすれば出来るんじゃないの？」

幻想支配？ 私達の能力をコピー？

「どう言う事、アリスちゃん？」

「そっか、あなた達はユウキの能力知らないのね。ユウキは他人の能力をコピー出来る能力の持ち主なのよ。で、あなた達の能力は音を操る他に、手で触れずに楽器を演奏出来る能力があるでしょ？ それを使えば演奏出来るんじゃないかと思って」

へえ、ユウキ君そんな能力の持ち主だったんだ。

そう言えば最初に会った時も魔理沙ちゃんの力をユウキ君から感じていたような？

「じゃあ、リリカの能力を使わせてもらおうか」

「えっ、私？」

いきなりユウキ君から指名されて戸惑うリリカ。

なんで、私の力を使わないのだろう？

私達全員演奏する能力持つてるのに。

「ルナサやメルランだと躁や鬱になる音出すんだろ。まあ、ここにいるメンバーに聞きそうにはないけど、念の為な」

そっか。確かにリリカの音は私かメルランと一緒にじゃないと意味ないものね。

「なるほどね。まあ、別にいいけど……いい、痛くないですよ?」

「リリカに何かするわけじゃないっての」

「うん、大丈夫だよリリカ。お兄ちゃんがリリカを視るだけだから」

ユウキ君がリリカを視るだけ。何だろ、その響きがものすごく……

「視るだけ……つてエ、エッチ! 変態!」

あ、やっぱそう思っちゃうよね。

「フラン、間違つてないけどもう少し言い方あるだろ。で、リリカ、もう終わったぞ」

呆れた目をしたユウキ君からさつきまで感じなかった力を感じる。

「えっ、もう? あ、あれ? あなたの目が青くなつた?」

「本当だ。それにリリカの力を感じるわ」

メルランの言う通り、今のユウキ君から感じるのはリリカの力?。

「何だか懐かしい反応ね」

「そうね。もう皆知つてるから大抵慣れちゃったわよね」

霊夢ちゃんやレミリアちゃんは懐かしそうに言うけど、ユウキ君の能力を知った時は

皆私達みたいな反応したんだね。

「ふーん、目が青いつて事は、騒霊の力は霊夢や咲夜と同系列の力と認識してるみたい

ね」

「確か青い時は使っている力が霊力だからよね」

「そうだな。妖夢を視た時も青い目になってみたいだし」

パチュリーちゃんとアリスちゃんはそんなユウキ君を何やら観察してる。

妖夢ちゃんは半人半霊で、騒霊として生まれた私達とは微妙に違うのだけどね。

「ま、ともかく使ってみるか。えっと、フランそのクラリネット借りるぞ」

「うん、いいよ」

ユウキ君が両手をかざすと、フランちゃんの持つていたクラリネットが宙に浮き、音を奏で始めた。

リリカはキーボードを担当する事が多いけれど、楽器全般が得意だから当然かな。

「確かに演奏はしてるわね」

「ええ、音も普通に出てるわね」

「でも……」

「「……下手」」

レミリアちゃん達の言うように、クラリネットは綺麗な音色を響かせているけど、演奏と言うには程遠い。

さっきのフランちゃんの演奏に比べるまでもないね。

「ん〜やっぱりこうなるか……フラン、ありがとう」

クラリネットをフランちゃんに返して、ユウキ君は苦笑いを浮かべた。

確かに下手だったけど、ユウキ君はこうなると分かっていたみたい。

パチユリーちゃんもどこか納得した表情を浮かべている。

「でも、ちゃんと音は出せてたのに、どう言う事？」

リリカは不思議そうな顔をしていて、私もメルランも同じ事を思っていた。

「俺の幻想支配って能力はコピー出来ても、技能まではコピー出来ないんだよ。今のだと、手で持たずに演奏と言っても、ただ吹くだけ。楽譜が読めないからちゃんとした音色にならない」

「ちゃんとした音楽になっているのは、プリズムリバー達的能力じゃなくて技術って事ね」

「あくなるほど、そういう事ね」

レミリアちゃんに言われて納得できた。

手を使わずに演奏出来る能力を使っても、演奏する本人であるユウキ君に音楽の才能や知識、経験がないと意味がな。

「あれ？ でもユウキさん、あの時妖夢の技使ってたじゃない。あれは違うの？」

「妖夢の力使った時も剣術と言うか、妖夢の霊力を使った技だから使えたんだよ。霊力

を使わない妖夢の剣術はコピー出来ないさ。美鈴のだって気を使った技しか使えないし」

「そうなんだ。便利そうに見えてなかなか不便な面もあるんだね。ユウキ君の能力って」

万能な能力なんて幻想郷にすら存在しない。

いつだったか、閻魔様に言われたっけ。

「ま、別に演奏出来なくても……うっ、フラン、そんな目で見ないでくれないか？」

「う……」

フランちゃんがとても寂しそうな表情でユウキ君を見上げている。

これはきつとユウキ君と一緒に演奏したいって事だよね。

それにしても、ユウキ君の困った顔は何だか面白い。

最初に会った時は何でも出来て余裕があるような子に見えたけど、結構苦手な事とかあるんだね。

レミアアちゃんや霊夢ちゃん達もそれを見て笑っているし。

メルランもリリカも、さつきよりはかなりユウキ君に対して怖がったりはしてないみたいで、良かった良かった。

「ねえ、ユウキ君。良かったら私達が教えてあげるよ？ フランちゃんにだってまだ教

え始めたばかりだし。一緒にどうかかな？」

「あ、うんうん。それがいいよ、お兄ちゃん！ ね、お姉様？」

「そうね。ルナサ達の予定にもよるけど、紅魔館なら楽器がたくさんあるわけだし。私もあなたと一緒に演奏してみたいわ」

レミリアちゃんがそんな事を言うのが何だか意外かも。

咲夜ちゃんやこあちゃんも少し驚いてるね。

「ちよーどいい機会だし、そういう趣味も持った方がいいわよ、ユウキさん！」

「器用なあなたならすぐに覚えるんじゃない？ 私もあなたの演奏聞いてみたいわ」

「霊夢にアリスまで……分かった。ルナサ、リリカ、メルラン。俺に演奏の仕方教えてくれないか？」

根負けしたユウキ君が私達に頭を下げた。

私は最初から教えたいと思っていたし、リリカもメルランもそれを見てやる気が出てきたみたい。

「うん。いいよ、覚えたら今度演奏会開こうね」

「よーっし、そうと決まればビシバシ鍛えるから、覚悟しなさいよ！」

「はあく……姉さんとリリカがいいなら、私も何も言わないわ。しょうがないわね、教えてあげる」

こうして、紅魔館でフランちゃんとユウキ君、それに霊夢ちゃんやこあちゃんにも教える事になった。

そして、数日後のお花見で大演奏会が開かれ、大盛況になったのはまた別の話。

続く

第84話 「妖精ピクニック」

しばらくぶりに寺子屋へとやってきた。

怪我也治りリハビリも済んだのでやってきたのだが、実は少し気が進まなかったりする。

これまでのみんなの反応から、寺子屋で何か起きるかは大体想像がつく。ま、なるようになるか。

今日は確か寺子屋にはフランやチルノ達はいないはず。

なぜいないのかと言えばフラン曰く、今日は梨奈ちゃん達の番だから、とか言ってたな。

「おはよー、慧音来た…「お兄ちゃん！」…グホッ!」

寺子屋の戸を半分開けたところで、中から梨奈が突進してきた。

倒れこんだりはしなかったけど、ちょうどみぞおちにこられたので結構きつい。

なんでフランといい梨奈といい、人の急所を的確にタックルできるかな。

梨奈は俺が寺子屋に入った途端か、俺の姿を見た時に突進してくるだろうとは思っていたけど、まさか戸を開けてる途中で来るとは思わなかった。

こうなるのはここに来る前から予想していたし、神社に寝ていた頃から何度も合った事でもいい加減慣れてきた。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

俺を見上げて不安げな顔をする梨奈。これ以上この子に心配をかけたくなかった。

本当に俺の事を何も知らないこの子に。

「ああ、大丈夫だ。心配かけたな、梨奈」

「良かったあ、えへへっ」

軽く頭を撫でてあげると、安心したようで腰に抱き付いた腕から力が少し抜けた。

なんかこう、子供の対処の仕方が慣れちゃったなあ……まあ、梨奈はフランやチルノと違って、涙子や美琴と同じくらいだからセーフか？

「ふふっ、朝からお熱い事だな2人共」

「あつ、ユウキお兄ちゃんだー！」

「おはよーございますー！」

「よお、慧音。それに久しぶりだな、みんな」

奥から慧音と他の子供達が顔を出してきた。

遅く着たつもりはないけど、今日はみんな来るの早いな。

あつという間に子供達に囲まれた。

「君が今日から来ると聞いて、皆早くから待っていたんだよ」

「つたく……不意打ちで来た方が良かったか」

慧音の意味深な笑みに、思わず苦笑いが零れる。

「兄ちゃん、また来れるようになったの？ 風邪大丈夫？」

「ああ、海斗。今日からまたよろしくな。つてそんなに待ちわびてるとは思わなかったな」

「だって、慧音先生の授業も楽しいけど、ユウキお兄ちゃんの授業の方が分かりやすいんだもん」

「うんうん、おにいちゃんの授業もつと聞きたい！」

「絵里、由麻、気持ち分かるけど、せめて慧音のいない所で言つてあげような？」

子供達の後ろで微笑んでいた慧音の表情が固くなって、眉がピクピクしてる。

俺のせいじゃないと思うが、そんなに笑顔のまま睨まないでほしいんだが。

それから午前中、俺と慧音が交互に授業を行った。

子供達に言われた事を気にしていたのか、慧音にしては分かりやすい授業だった。

そして、授業が終わり今日の昼食は皆でピクニックをする事になっている。

と言つても、人里から離れた場所ではなく、近くにあるお花畑でだ。

そこも人里の一部で、妖怪は襲ってはいけない事にはなっている。

俺と慧音がいる以上、襲ってくる命知らずはいないと思うけど、用心はしておくか。人里を出て小高い丘に付くと、そこは一面色々な花が植えられていた。

お弁当を食べる前に子供達はおいかげっこや、首飾りを作り始めた。元気な事だ。

「へえ、こんな場所が近くにあったのか」

「最近まで雪で覆われていたからな。君が気付かないのも無理はない」

「ここは私達のお気に入り場所なの。幽香お姉ちゃんが手入れに来てくれるんだよ」

「幽香が？ へえ」

確か幽香は太陽の畑と言うここよりも、もつと広大な草原で主に向日葵に囲まれて過ごしていると文から聞いた。

ここみたいな花畑も彼女から見れば、自分に関わりがなろうと見過ごせない場所なのだろう。

花の大妖怪なのだから当然と言えるか。

「君はあまり驚かないのだな。大抵幽香がたまにここの手入れをすると聞いて驚くのだが」

「人里にもよく来て花屋の店主と会話してる。と言うのは聞いた事あるし。それより梨奈が普通に幽香を知ってて親しげなものには少し驚いた」

「うーん、幽香お姉ちゃん優しいよ。去年、ここでお花の事教えてもらった事あるし。怒ると怖いけど」

この子、何気にすごいな。俺へもだけど、幽香にもそういう事言うのか。梨奈はひよつとして、怖いもの知らずと言う奴なのではないかな。

「梨奈はすごいな。ま、幽香は自分から誰かれ構わず喧嘩売ったり、ちよつかい出したりはしないし」

沈みたく分別はわきまえている……はず？

「彼女をそこまで断言出来る君もすごいぞ。それに、宴会で喧嘩を売られた君が言う事でもないな」

後半の危ない部分は梨奈に聞こえないように小声で言ったが、その表情は不安げだ。俺も忘れていたわけじゃない。それに喧嘩を売られたと言うか、いずれ相手をしなきゃいけないってくらいだな。

「？ 2人共どうしたの？」

「いや、なんでもない。じゃお昼にしようか」

その時、何かが近づいてくるのを感じ、空を見上げると真っ白い誰かが飛んできた。

「みーつーけーまーしーたー!!」

「リリー!？」

そのまま俺の胸に飛んできた白い影はリリーホワイトだった。結構なスピードで飛んできたけど、どうにか堪える事が出来た。

最近、こう言う事多いな。胸や腹に何か仕込んでおいたほうが……いや、それは何かが違う気がする。

「ユウキさーん、お久しぶりです！ 探したんですよー！ なかなかお礼を言いに行けなくてごめんなさい。春の到来遅かったせいで色々忙しかったんです！」
「お、おいおい。分かった、分かったから離れてくれ、リリー」

横目で梨奈達を見ると、梨奈はあんぐりと口を開けていて、慧音は生温かいながらもまたかと言いたげな目をしていた。

「おやおや、リリーホワイトにまで懐かれるなんて、君はやっぱりすごいな」

「リ、リリーちゃん、久しぶりー」

「……あつ、えつと……お、お久しぶりです。慧音先生、梨奈ちゃん」

2人の視線に気付いたリリーは、一瞬で顔を真っ赤にして素早く俺から離れた。うん、羞恥心がある子で良かった。

「ユウキさん、ずっと会いたかったんです！」

「言いたい事は分かるから、その言い方は誤解を招きそうだから控えてくれないか？」
「ここに文とか面倒なのいないから、多分大丈夫だと思うけど。」

「お兄ちゃん、リリーちゃんに随分慕われているんだね？」

いたー!? 梨奈が結構よく見かけるような怖い表情になってる……

梨奈はそういう類の中には、絶対に入らないで欲しかったんだけどなあ。

慧音は他人事だと思つて笑つてるし。いや、他人事だけどさ。

「え、えへへつ、ユウキさんは命の恩人さんなんですよ」

「へー、私とおんなじだね」

……梨奈つて確か、14だったよな。能力も何もないただの女の子だったよな。

何でこつちもプレッシャーを感じるかな。

「ははつ、梨奈もそのくらいでいいだろう。リリー、良ければこれから一緒に昼食にしな

いかい？」

「えつ、慧音先生いいんですか？ ……じゃあー」

一瞬チラリと俺を見て、それを見た梨奈が俺を見て、と言うなんだこれ。

「おーい、みんな。そろそろお昼にしよう」

「はーいー！」

時間もいい頃合いなので、慧音が作ってきた弁当を食べる。

大きい風呂敷を持つてきたのは俺で、てつきり遊び道具かと思つたが全部重箱に入つた弁当だった。

俺が来る事を知っていたからなのか、かなり大量に作ってきたな。

これならリリーがいても……いても多すぎないか？

「慧音、がんばりすぎじゃないか？　いくら育ちざかりと言ってもまだ幼い子も多いんだぞ？」

「は、はははつ、君もいるからこれでも少ないかと思つたのだが、確かに多かつたかもしれないな」

「でも慧音せんせーのお弁当美味しいから、おれたちいくらでも食べられるよ！」

「そう言ってくれると先生も嬉しいよ、修太」

山のようなお弁当箱にも子供達は目をキラキラさせて、果敢に挑んでいる。

「リリーも梨奈も何か食べたい物あるか？」

「私は何でも食べられますよ。では、煮豆取ってもらつていいですか？」

「お兄ちゃん、私は卵焼きと佃煮下さいな」

他の子達に遠慮してか、弁当箱から離れた場所に座つている2人に皿に盛つて渡す。

慧音も、他の子達に渡したりと忙しそうだ。

「ユウキ君も食べてくれないと困るな。この前の料理をお礼も兼ねているのに」

「この量だ。食べ損ねる事はないだろ。それに、慧音だつて食べてないだろ」

「私は君と違つて取り分けながら、ちゃんと食べているぞ？」

ん、何だろ。慧音今視線を梨奈やリリーに向けたな。なんか、いやーな予感がしたぞ？

「お兄ちゃん、これどうぞで」

「ユウキさん、これはどうですかー？」

同時に差し込まれる2人の箸。これも何度も見た光景だな。

違うのは、2人共彼女達と違って無邪気って所か。

何だか今日はデジャブを感じる事が多い日だな。

さて、これを断ると恐ろしい事になりそう。主に背後から早く食べ。と言う慧音のプレッシャーがすごい。

「じゃあ、頂きます……モグモグつ、うん、うまい。やっぱり慧音は料理上手だな」

一時期寺子屋で寝泊まりしていた時に、慧音の手料理は食べたけど咲夜に負けず劣らず上手だ。

「そう言ってもらえると、作った甲斐があると言うものだ……2人にはお返しはしないのかい？」

「ああ、それもそうだな」

慧音が、何か重い立ったように、そつと耳元に小声で囁いてきた。

お返し。つまり俺がされた事を2人にもしろって事か。

「じゃ、ほれ、梨奈。この煮物美味しいぞ」

「ふえっ!? あっ、はい、頂きます」

「で、リリーには菜の花の天ぷらだ」

「ご、ごちそうになります」

2人共呆気に取られた顔をして、俺が箸を出すと食べてくれた。

一応噛んではいるようだけど、2人共何だか動きが機械的だ。

そう言えば、こういうのされてばっかでした事なかった。

うん、今度霊夢や咲夜達にもやらないとダメだな。

「ふっ、あはははっ、本当に君は面白いね」

「どうしたんだよ、慧音。急に笑いだして」

何かがツボにハマったらしく、慧音はお腹を抱えて笑いだした。

「慧音せんせーどうしたの?」

「梨奈お姉ちゃんもリリーちゃんも顔真っ赤だよ?」

「また風邪引いちやっただ?」

食べたりしやべったりに夢中だった他の子達は何が起きたのか分からず、みんな首を

かしげている。

「全く、こういう空気にだけは慣れないなあ……ん?」

深く息を吐いてふと周りを見渡した時、見ている景色に違和感があった。

「あつちやいけない物があるとか、あるべき物がなとか、そういうのではない。あ、そうか、そういうモノか。こういう違和感は久々だな」

学園都市にいた時、何度か感じた違和感。

学舎の園、ケーキショップで視覚障害の子を視た時と似ている。

つまり、誰かが光学迷彩かそれに似た何かで俺の視界のどこかに隠れている。悪意や敵意は感じないから放っておいてもいい。

が、一方的に見られるのは気分が悪い。

せめて、出てきてもらおうか。

「……見つけた」

試しに幻想支配で無作為に視てみると、離れた草むら反応があった。

この感じは、チルノやリリーのような妖精の力。

でも、力自体はあまり強くない。これなら能力停止も簡単にできるな。

「さーって、姿を現してもらおう、か」

「「っ!」」

能力停止を使うと、チルノよりも小さい妖精が3人も現れた。

「ちよつとルナ! 何で能力止めちゃったのよ。見つかつちやつたじゃない!」

「わ、私何もしてないわよ!? あ、あれ? なんで能力使えないの!?!」
「あーこれは、逃げられない、かなあ」

それぞれ違う格好をしていて、どうやら光学迷彩っぽいのは縦ロール髪の子、ルナと
呼ばれる子が使っていた能力のようだ。

「お前ら一体誰で、ここで何をしてるんだ?」

「え、ええつと、ですね。私達はその……」

「ユウキ君。サニー達を怖がらせてはダメだぞ」

そこへ慧音がやってきた。

怖がらせる為に睨んだつもりはなく、むしろ呆れたような目をしていたつもりなんだけ
ど。

警戒心、と言うよりは怖がっているな。

「慧音、この子達知っているのか?」

「ああ、彼女達は光の大妖精と呼ばれている。3人共、彼はユウキ君と言って、私やチル
ノ達の友人だ。怖がる事はない」

今回はメルランの時みたいにかかしたわけじゃないのに……あ、能力停止したまま
だ。

「あ、あれ? 戻った! 力が戻ったよ!」

「もう遅いわよ！ 全く……でも、慧音やチルノ達の友達なら、大丈夫、よね。私はサニーミルク、この子がルナチャイルド」

「そして、私はスターサファイア。よろしく」

日に月に星、だから光の三妖精か。

「初めまして。俺はユウキだ。普段は博麗神社にいて、たまに寺子屋にいる。で、さつきは何をしていたんだ？」

何をしていたか尋ねると、彼女達は内緒話を始めた。

「どうするのよ。あつさり見つかっちゃって」

「でも、慧音先生がああいうんだから、大丈夫じゃない？」

「サニーは楽観的すぎるわね。でも、別に私達悪い事してたわけじゃないんだしね」

思いつきり目の前で作戦会議。会話が丸聞こえすぎる。

慧音が苦笑い浮かべて軽く頷いたので、ここは聞こえていない風にしておこう。

丸聞こえな内緒話が終わり、俺が能力を止めたルナが代表するように前に出てきた。

「私達、リリーホワイトを追ってきたんです。いつもより様子がおかしかったんで、後を付けてきたらここに辿りついて。あんなリリーホワイト初めて見て、それで気になっちゃたんです」

「ふふつ、なるほど。確かにあんなリリーホワイトは初めてだな」

あんながどんななのは、聞かない方が身の為だと俺の勘が告げている。

「なあ、慧音。せっかくだから3人共一緒にお弁当どうだ？」

あの大量のお弁当を消費するには、この子達にも協力してもらおう。

「いいんですか？」

「私は構わないよ。彼女達も寺子屋に来る事があるから、子供達とも顔なじみさ。遠慮なく食べるといい」

「それじゃいったきまーつす！」

「あ、ちよつとサニー！」

「一目散とはまさにこの事ね」

慧音がそう言うのと、赤と白の服を着てオレンジがかった金髪の少女、サニーミルクが物凄い速さで駆け出した。

それをルナチャイルドとスターサファイアが呆れた目で見ていた。

「ははっ、元気があっていいじゃないか。子供達も大歓迎しているようだし」

「そうだね。私達も食べようか、ルナ」

「うん」

2人もサニーミルクに続いて子供たちの輪の中へ入って行った。

俺も慧音と2人、肩をすくめて昼食に戻る事にした。

「へえ、ユウキさんって他人の能力を使えたり、止める事出来るんですね」

「さっきはそれで私の力止められちゃったのね」

「便利ねー」

それからお弁当を食べ終え子供達は慧音を連れてまた花畑に遊びに行き、俺はリリーと三妖精達と食後のお茶を飲んでいた。

「便利と言えば、三人共凄い能力持つてるじゃないか。色々使い勝手よさそうだし」

三人の持つている能力を聞いたら、物凄い能力だった。

サニーが光を屈折、ルナが音を消す、スターが動く気配を探る事が出来る。

「かくれんぼなら無敵なのよー」

「ならユウキさんは三人の天敵ですねー」

リリーが言うのと、三人共ギクツとなった。

確かに俺はさっきのように光を屈折させても違和感に気付くし、音を消されても気配で分かる。

けど、動く気配を探る能力で俺の位置を把握されながらだと、近づく事も出来ないな。「それにしても、リリーホワイトに本当の意味で春が来るなんてねー？」

さっきの仕返しとばかりに、意地悪な笑みを浮かべてサニーが言うとりリーの顔がまた赤くなった。

「わ、私に春だなんて、そんな……でも、間違いじゃない、かなあ」
チラチラとこちらを見るリリー。

反応したら多分もつとドツボにはまりそうだから、敢てスルーしておこう。

「でも、これでチルノや大ちゃん、ルーミアまで何か変わったように見えた訳わかったわね」

「そうね。でも、そんなにこの人すごいのかな？」

三人共、じーつと音が出そうな程俺を見てきた。

物欲に塗れた目ではない、本当に好奇心の塊みたいな目つてのは、何だか苦手だ。

「ユウキさんとはかくすごいんです！」

いや、何が？ 俺の何がとにかくなんだ、リリー？

「確かに能力はすごいけど、ねえ？」

「うん、さつきちよつと怖かった」

ルナとスターはまるで出会った事のメルランやリリカみたいな反応だ。

「そうかな？ 今は怖くもなんともないよ？」

「えっ？」

サニーだけは、笑顔で俺を見ている。

絵に描いたような明るい笑顔、流星は日の妖精つて所か。

「サニー、あんたまさか……」

「まさかのまさか？」

「ちつがーう！ そう言う意味じゃない！」

「どういう意味……いや、何も言うまい。」

「下手に口出しするとロクな事がない。」

「どうしたんですか、ユウキさん？ 何かを悟った様な顔をして空を見上げて」

「何でもない。ただ、流れに逆らうより、身を任せた方がいいって事さ」

「はあ……そうですか」

それから三妖精の喧騒を聞き流しながら、リリーと二人でただ空を見上げていた。

……平和だなあ

続く

第85話 「竹林の因幡」

桜が幻想郷に咲き誇り、花見の時期になった。

リリーホワイトが忙しかったのは、春の花を早く咲かせる為だったようだ。

異変のせいで春が遅くなり、咲き始めるのも遅くなると夏にまで影響が出る為だそう
だ。

幽香も手伝ったようで、ようやく桜も満開になった。

そして、俺は明日の花見の為に食材集めをしている。

本来異変後の宴会であり、前の時みたく首謀者である幽々子や妖夢が主体となって食
材と集めるのだが、今回は宴会兼花見なので皆で集める事になった。

『あなたの事で白玉楼に色々複雑な思いを抱いてるのもいるから、こういう形になつた
のよ』

と霊夢は言っていた。

和解や贖罪、と言うと大げさかもしれないけど、幽々子も妖夢も明日の宴会で他の皆
に馴染んでくれればいいなと思う。

チルノや大ちゃん、リリー達はこの前知り合つた光の三妖精も一緒になって魚を釣つ

てくると言っていた。

文やにとり達も山で山菜を集め、魔理沙とアリスは森のキノコ集め、紅魔館組は飲み物を用意する。

霊夢は食器やらの下準備をしているが、俺は何もしなくていいと言われた。

最大の功労者だから、と言っていたけどそれなら霊夢や魔理沙達にも何もしなくていいはずなのに。

それに2回連続宴会で何もしないのは申し訳ないので、籠を背負い食材探しに出かけた。

最初は人里で何かないか探そうと思ったけど、異変のせいで食糧不足だった所から宴会の為に大量に買うのは悪いので別の場所へ行く事にした。

「そう言えば、こっちはまだ行った事なかったな」

人里から魔法の森や博麗神社とは別方向、妖怪の山とは正反対の道へはまだ行った事がない。

幽香が住んでいる太陽の畑とも違う道。

あまり人が通らないようだけど、確かに森と言うか、林に続く道がある。

せつかくだから行ってみる事した。

人里周辺には滅多に凶暴な妖怪は近寄らない事にはなっている。

でも一応出てきた時の為に、霊夢の力はストックとして視てきたので、最悪使つて戦うか逃げるなりすればいい。

「へえ、結構見事な竹林だな」

獣道を少し進むと森の奥に竹林が見えてきた。

竹林はテレビや資料でしかみた事がなかったけど、こうまで立派なのは初めてだ。

高くたくましく生い茂っていて、奥には深い霧がかかっているようで、まさに幻想郷の竹林に相応しい雰囲気が出ている。

冒険心があるわけではないけど、少し興味が湧いてきた。

「これだけ見事な竹林ならタケノコがたくさんあるだろうな。ん？ 何か奥に……ある？」

竹林の奥に目を凝らした時、違和感とまでは行かなくても何かを感じた。

冥界で見た結界に近いような、別な物のようなともかく変な感じだ。

行つてみようかと足を踏み出した時、竹林から誰かが出てきた。

「ちよーつとそこ行くおにーさん。これ以上は危険ですぜい？」

出てきたのは、逆三角形のサングラスをかけたウサミミ女だった。

右手で銃を撃つポーズを取って、気分はギャングつて所か？

「……さーって、タケノコ探すか」

「ちよ、ちよっと!? まさかの無視!？」

気を取り直してタケノコを探そうかと思っただが、スルー失敗。

「で、何なんだよ。エセギャング」

「むむつ、これをギャングと見抜くなんて、おにーさん外の人だね?」

「まあな。服を見て……ああ、そう言えばそうだった」

今の俺が着ているのはレミリア達から貰った人里でも違和感のない服だ。

学園都市で着ていたのは、西行妖との戦いで服もズボンもボロボロになって修繕不能になったんだった。

「これじゃ一目じゃ外来人とは分からないか。」

「ああ、俺の名前はユウキだ。よろしくな」

「ほうほう、じゃあゆーちゃんだね。私の名前は因幡てゐ。何の妖怪かは見て分かるよね?」

ゆ、ゆーちゃん。これまた変わった呼ばれ方だな。

「何の妖怪……うーん、兎、のコスプレ妖怪」

「おいしい! じゃなくて、なんでコスプレ!?! 見たまんま、どこからどう見ても兎の妖怪でしょ!」

コスプレって言葉は知ってるのか。

それにしてもこのてゐ、見た目は少女だけど……多分、今まで見てきた妖怪の中でもトップクラスに歳いつてる気がする。

下手すりゃ紫より年上かも。

「ん、どしたの？ 私の顔じつと見て、ひよつとして惚れた？ 安くしとくよ？」

「安くつて何をだ？ 兎肉なら興味ないぞ」

「真つ先に兎肉浮かぶつてどうなの!? あ、やつぱし私を食べたいの？ せいて……ふぎゅっ!」

よからぬ事を言いそうになつたので、思いつきり脳天にチョップをかました俺は悪くない。

コイツからは文と同じ感じがするな。

「自業自得だ」

「ひ、ひどいよゆうーちゃん。こんないたいけな少女に何の躊躇もなく馬場チョップするなんて」

馬場チョップとはまた懐かしい言葉を言う。

「やかましい。誰がいたいけな少女だ。お前、俺より数千倍歳いつてるだろ」

「ギクツ！ そ、そりやくさ、人間よりは歳いつてるけど、流星に……す、数千倍は盛り過ぎじゃないかなあ〜？」

この動揺。間違いなく千、いや、数千歳は越えてるな確実に。

「全く、人間が迷いの竹林に入ろうとしてるの善意から止めようとしたのに、ヒドイ打ちを受けたよ」

「そりやどーも。あれ、因幡の兎……どつかで聞いた事あるような？」

確か歴史関係の本で読んだような……

「ゆーちゃん、因幡の兎に引つ掛かり覚えてるのに、そこから先は何も思い浮かばないの？」

「いなば……イナバ……あつ、確か100人乗つても大丈夫！」

「ストーツプ!! 何トンデモナイ事言ってるのさ!？」

残念。これは違うようだ。

「えっと、確か……亀と競争して、昼寝をして、騙されて背中に柴を背負わされて大火傷したんだっけ？」

「ちつがーう! 確かにどつちも兎出てくるけど! 後半は立場が違う! それ狸!

兎はむしろいい事したの、敵討ちしたの!」

はあはあ、と肩で息をしながらツツコミをするてゐ。

あれ。間違えたか……あつてると思ってたんだけどな。

「その顔。まさかゆーちゃん、今のマジボケ?」

頷くとてゐるは脱力しきつた顔でうなだれてしまった。

これはボケた方が良かったのかな。

おどぎ話とか民謡って読んだ事ないから、中途半端にしか知らない事が多い。

「ゆーちゃんって一体何者なのさ。こんなに会つてすぐに疲れる人間初めてだよ」
てゐるは疲労感が半端ない顔をしている。

ちよつと気の毒だったか。でも、本当にそう思つて答えたんだから仕方ない。

そこへ、妹紅の声が聞こえてきた。

「おい、詐欺鬼。ユウキに何をして……ホントに何してるんだ？」

最初妹紅は警戒心を出して、てゐを睨むように現れた。

だけど、てゐの疲れ切つた表情を見て、困惑したようだ。

「よお、妹紅」

「あ、もこたん」

「よつ……つて、もこたん言うな！」

妹紅だからもこたんか、可愛いな。

「ユウキ？」

「俺は何も言つてない」

絶対零度の笑みつてああいうのだろうな……炎まで出してたし。

「で、こんな所でどうしたの?」

「実は明日の花見で使えそうな食材探しててさ。こつちには来た事なかったからそのついでにな」

「だったら私が後で沢山持つていくよ」

そう言えば、妹紅は迷いの竹林に住んでるんだったな。

「と言うか、食材探しながらあなたがする事ないわよ。あなたは異変解決最大の功労者でしょ。そんな事は私達がするわ」

「そう言われてもな。2回連続で何もしないわけにはいかないだろ。霊夢にそう言ったら何か食材探してきてって言われたんだよ」

「なるほどね。でもここは妖精や妖怪ですら迷う危険な所なのよ。だから私が付き合つてあげるから、一緒にタケノコ探しましょう?」

「いいのか? だったらお願いしようかな」

おお、妹紅が付いていてくれるなら安心だな。

「ちよつとお二人さん。私の事忘れない?」

「なんだ。まだいたのか」

てつきり帰ったかと思つた。

「ちよつ! 2人して息びつたしだし!」

「あー悪い悪い。んで、詐欺兎が何でユウキと一緒にいるんだ？」

てゐるを詐欺兎と呼んでるけど、そんな兎には見えないけどな。

「確かにてゐるは紫並に胡散臭いけど、別に詐欺られてはいないぞ？」

「胡散臭い!!? しかもあのスキマ妖怪と同列!？」

「……一応、結構昔から知ってるけど、コイツがこんなにツツコミする奴とは初めて知ったよ」

さつきからツツコミしてばっかりだもんな。

「てゐると知り合いなのか、竹林仲間って所か？」

それを聞いて心底嫌そうな顔をして、妹紅は大げさに両手を振った。

「冗談。そんなもんじゃないわ、ただ竹林に住んでるっただけ。てゐはこくら辺の妖怪兎の親玉なのよ」

「妖怪兎? それってさつきからいるあんなのか？」

指さす先には、竹藪の中からこつちの様子を窺っている丸っこいのが数匹。良く見れば長い耳があつて、兎にも見える。

「そうそう、あれよあれ。別に害はないけど、警戒心と好奇心の塊って所ね」
警戒心も好奇心も高いのか……矛盾してるようないやな。

「ゆーちゃん見慣れないから警戒してるんだよ。で、興味も持つてるみたい。呼んでみ

たら?」

「もう来てるぞ?」

「うおつ、早っ! いつの間に? ゆーちゃんすごっ!」

さつき目が合った時に一匹がピョンピョンと跳んで来たので、抱っこしてみた。

良く見ると俺の知ってる兎よりも真っ白で、丸っこいな。

今は俺に抱き抱えられて安心したような顔をしている。

「顔が少しにやけてるわよ? ユウキって小動物好きよねえ。狐が一番好きなのよね?」

「ああ、元々猫や犬が好きだったけど、間近で狐を見た事あつてな。その時にな」

呆れるように妹紅が言うけど、好きな物は仕方ない。

ロシアで偶然見た時はなんか和んだんだよなあ。あの時は戦争中だったのに。

「ところでゆーちゃん。その子ね人型にもなるんだよ?」

てゐが悪戯っ子のような浮かべる笑みをしたかと思えば、急に腕の重みが増した。

で、さつきまでいた子兎が兎耳をして、てゐとおなじ服をきた少女へと変わっていた。

「……へっ?」

「ど、どうも」

その子は恥ずかしそうにしながらも、潤んだ目で俺を見上げて挨拶までしてきた。

小さな兎を抱き抱えていた体勢が、突然女の子に変わって、お姫様だつこになった。ものすごく嫌な予感がして、妹紅の方をチラ見すると。

「……………」

睨んでたよ。ちよつと殺気が籠ってる目で俺とこの子を睨んでる！

この子は妹紅の視線に気付いてないようだからいいけど、気付いたら失神しちゃいそうだな。

てゐがまたそれを見て、面白い玩具を見つけた子のような目を……いや、あれは獲物を見つけたハンターの目だ。

「うっしっしっ、そうじゃないかと思ってたけど、ゆーちゃんがそうだったんだねえ、もこたん」

「な、なんだよその目は」

「いやあく別に〜？ ただあの時の必死なもこたんの姿を思い出しただけだよ。そうだよね〜、ゆーちゃんいい子だもんね〜そりゃああなるよね〜？」

「うっぜー！」

何の話で盛り上がってるか知らないけど、とにかくこの子どうしよう。

降ろすか、と考えてたら哀しそうな表情を浮かべてきた。

この手の攻撃って反則だよな、やっば。

「ゆーちゃん、出来ればそろそろ他の子達も抱っこしてあげて欲しいな。ちゃんと順番待ちしてるし」

「順番？ つてうお!？」

足元を見ると、丸っこい兎が数匹列をなしていた。

みんなして俺と抱っこしてる兎っ娘を羨ましそうな目で見上げている。

「人型になれる兎は近くにはその子だけだから大丈夫だよ」

何が大丈夫なのか分からないけど、この子のように急にだっこしたら人型になるわけじゃないのは少し安心だな。

妖怪兎の中には、人型になったりしゃべったりする兎もいるようだ。

とりあえず兎を順番に抱っこして撫でると、どの兎も気持ち良さそうに目を細めていく。

てゐもその気になれば兎型になれるのかな。

「うーん、どうだっけかな。ずーっとこの姿だから忘れちゃった」

「ユウキなら分かると思うけど、コイツこんな身なりで数千年以上生きてるお婆さんだからね」

「ちよっ、せめておねーさんと言ってよ」

お姉さんか……ならば呼んでみよう。

妹紅とアイコンタクトをして、2人で頷きあう。

「分かったよ。てゐ姉さん」

「これでいいか、てゐ姉ちゃん」

「……やっぱり、てゐでいいよ」

妖怪には精神攻撃が効くのが良く分かるな、うん。

「さてと、この兎達も満足したみたいだし、そろそろタケノコ採りに行くかな」

もつともつとー、と言いたげな視線を足元から感じるけど、気にしたら負けだ。

人型の子もじーつとこっち見てきてる。

話せはしても無口な子なんだな。

「そうね。暗くなる前に終わらせましょうか」

「ゆーちゃん、真面目に言うけどここら辺は幻想郷でも危ない場所だから、近寄ったらダ

メだよ？」

急にてゐがお姉さんっぽく言い出した。

でも、顔を見れば本気で言ってるのは分かる。

ま、根はいい兎つてのは最初に分かってたけどな。

「もこたんに会いたくなったら、竹林の入り口で叫べばいいんだよ。もこたーん、デート

し……あつっ!」

「お前は何言ってるんだ！ 燃やすぞ!？」

「もう燃やしてるでしょ。熱かったなあ」

根は……いい、けど一言余計なんだな。

「ふんっ。行くわよ、ユウキ。」

「ああ、じゃあ、またな皆」

兎達を一通り軽く撫でて、不機嫌な妹紅の後についていく。

「できればここ以外でねーばいばい、ゆうちゃん」

「さようなら」

てるともう一人の兎っ娘の挨拶を聞きながら、竹林の奥へと進んで行った。

「あー面白かった。かなりの変わり者だったけど、良い子だったねゆーちゃん」

私が満足そうに言うとお菊ちゃんも笑顔で頷いた。

他の子達も同じようで、面白かったー楽しかったーと騒いでいる。

「あ、てるこんな所にいたのね。探したわよ!」

とそこへ、私達とは違う兎耳をしてブレザーを着た鈴仙ちゃんがやってきた。

「鈴仙ちゃんこそ、こんな所まで出てくるなんて珍しいね」

鈴仙ちゃんが竹林の、それも人里に近い入り口に来るなんて珍しいにも程がある。

「私だって来たくて来たわけじゃないわよ。御師匠様があんたを連れて来なさいって言うから、こんな所にまで来る羽目になったんじゃない」「そっかそっか。じゃあ早く戻ろうか」

兎達をひきつれて、永遠亭に戻ろうとしたけど鈴仙ちゃんがなぜか固まってしまった。

「ん？ どしたの鈴仙ちゃん？」

「いや、てゐが素直に言う事聞くなんて、それに他の兎達もだけどすごく機嫌がいいわね。何かあったの？」

「うーん……秘密だよ☆」

「何よそれ」

人間やもこたんと楽しく遊んだ、なんて知ったら鈴仙ちゃん何言うか分からないからね。

全く、兎の中で警戒心の塊なのは、実は鈴仙ちゃんだね。

でもゆうちゃんと出会えば、鈴仙ちゃんも何か変わるかも？。

勿論、御師匠様やお姫様もだけど。

あの子にはそんな目に見えない不思議な力があるような気がした。

「何にせよ。これから楽しくなりそうだねー」

続
く

第86話 「花見」

満開の桜が咲き誇る博麗神社。

その神社に大勢の妖怪や妖精が集まった。

「それじゃ、みんなグラス持ったな！ 今日には念願の花見っだー！ 飲むぞー騒ぐぞー

！」

「「おぉー！」」

幹事、と言うよりは発起人の魔理沙の掛け声で皆思い思いに飲み始めた。

プリズムリバー三姉妹の演奏も始まり、すぐに賑やかになった。

花見と言つても宴会と変わらないんだな。

花見、か。言葉でなら知ってるし見た事もあるんだけどな、ニュースでなら。

「でも結局、みんな花より団子、もしくはお酒なのよね」

「別にいいじゃないか。何にもない所で飲むよりは綺麗な所で騒ぐ方が風情あつて」

「そりゃあ、まあそうだけどね」

始まってすぐにどんちゃん騒ぎし出した面々を尻目に、俺と霊夢は境内に座りながら

飲んでいる。

ちなみに霊夢は日本酒を猪口で、俺は咲夜が作ってくれた果実ジュースをグラスでだ。

未成年の飲酒についてアレコレ言うのは前回で止めたので何も言うわないが、お酒の飲み方が様になっているー5歳って……

「ん、どうしたのユウキさん？ 人の顔じつとみて」

「いや、日本酒飲むのが霊夢に良く似合っているなと思って」

「ブツ!? ケホケホッ、い、いきなり何を言い出すのよ！ もしかしてもう結構酔ってる？」

酔ってるのは霊夢の方だと思うけど、なぜにそこまでむせる？

「そこまで驚く事かな。俺はアルコール入ってないこれしか飲んでないぞ？」

やっぱり猪口と巫女服って合うのかもしれないな。

「はあ。で、さつきからボーっとしてるけど、どうしたの？」

ちつ、霊夢がずっと俺の事を見ているのは知ってたけど、そこまで見てたか。

「……別に、大した事じゃない。おっ、あそこにいるのはっ」と

視界の箸に隅っこの方で、皆と外れて静かに食べたり飲んだりしている妖夢と幽々子を見つけた。

幽々子は平然と桜を見つつ飲み食いしてるけど、妖夢はどこかそわそわしているよう

だな。

ちよつと声かけてみるか。

勘のいい霊夢から逃げれる口実にもなるし。

「何、逃げようとしてるのよ」

逃げられなかった！

知らなかったのか、魔王からは逃げられない……なんてな。

「御師匠様、霊夢さん。お久しぶりです！」

「こんにちは。今日はお誘いいただき感謝するわ」

「別にいいわよ。宴会は大勢で楽しむものだしね」

「そうそう。んで、2人は何静かに飲んでるんだ？」

やっぱり妖夢の師匠呼びにはまだ慣れないな。

「宴会もいいけど、静かに桜を愛するのもまたいいんじゃないかしら？」

「こいつらが騒いでるのはいつもの事よ。ここ、座るわよ」

俺と霊夢が座るが、妖夢の様子がまだおかしい、どこか落ちつかない様子だ。

幽々子は気にせず黙々と料理を食べている、と言うか結構食べてるな。

そう言えば、妖夢と初めて会った時も大量に食糧買いこんでたけど、納得だ。

「妖夢、少しは落ちつきなさいな」

「どうしたんだ妖夢？　まさか緊張してるのか？」

「……実はこういう大勢で飲み食いする場合は初めてなので」

これは意外だった。白玉楼は冥界にあるから、亡霊こそいても生者はいないから仕方がないと言えれば仕方ないか。

「でもなら幽々子だって初めてでしょ。やけに落ちついてるけど、そこはやっぱり年季の差ね」

「ふふふつ、これでも昔は色々や宴に出た事があるんですよ。妖夢が生まれてからは行っていませんけど」

霊夢の嫌味もさりとかわして、余裕の笑みを浮かべる辺り流石だな。

しかも、紫と違って胡散臭くない笑顔だし。

この前のような上品なオーラ全開だったらどうしようかと思っただけど、これならまだ話しやすい。

ホントにアイツの親友なのかな……いや、疑う余地はないけどさ。

「うう〜師匠の言う通り、私には色々経験不足なのですな」

「いや、俺が言ったのはそういう意味じゃないから」

挙動不審だったのは収まったけど、今度は物凄く落ち込んでしまった。

「面倒な弟子をもったものね、ユウキさん」

「そう思うなら代わってくれないか、霊夢？」

「絶対嫌」

だろうね。

「さきつ、妖夢はほつといて2人共飲んで飲んで。とっておきのお酒持ってきたのよ」
そう言つて幽々子が取り出したのは少し大きめの徳利だ。

「ひどい主だな。でもとっておきのお酒には惹かれるな」

「あら、ユウキ君が飲んでいたのはジュースね。ひよつとしてお酒はダメだったかしら？」

俺の持っていたグラスを見て、幽々子が少し意外そうな顔をした。

「別にダメって事はないけど、せっかく咲夜が作つてくれたジュースだからな」

「あらそうなの。ユウキ君はモテモテね」

楽しそうに言うのは良いけど、横目で意味深に霊夢を見ながら言わないでくれ。

霊夢が不機嫌になつていつてるし。

「もう飲み終えたし、お酒は飲めないわけじゃないから、これは遠慮なく頂くよ」

「はい、どうぞ。霊夢ちゃんもこれ使つてね」

「ん、いたたくわ」

幽々子が渡してくれた猪口少し大きめで、変わった形をしたものだった。

色も淡い赤で、猪口には似つかわしくないと思ってたが良く見ると似合っている。

それに見た限りかなり高級そうにも見える。

霊夢もそれが分かるようで、興味深そうにまじまじと見ている。

「お酒も徳利も猪口も全部私が作ったのよ」

「へえ………って全部!?!」

「お酒はお手製だと思っただけど、まさか徳利と猪口までか」

改めて2つの容器をみると、どことなく職人技もあるけど趣味が入った造形になっているのが分かるな。

「冥界の管理と言っても、年中多忙と言うわけではないのよ。だから、暇つぶしを兼ねて最初はお酒を作ってみようと思っただけ、それなら陶芸の真似事をしてみようとも思っただけだよ」

「趣味って。確かに形や色が拘りあるみたいだけど、それでも職人技だぞ」

「徳利と猪口とはいえ、人里でもこれだけの見た事ないわ」

陶芸には詳しくはないけど、絵画同様贋作や密輸に関しての捜査の時、歴史的価値が非常に高い美術品として何度か見た事がある。

これはそれに負けず劣らずの作品だ。

「幽々子様は結構凝って作っているの、昔の物も劣化せずに結構残っているんですよ」

「2人にそこまで褒めてもらえると嬉しいわ。でもこう見えても千年以上も造り続けてきたもの。うまくもなるわよ」

妖夢は主の作品が褒められて、自分の事のように嬉しそうだ。

幽々子はさらつと自分の歳を飛んでもなく言う辺り、本当にすごいな。

下手に若作りしてるとっかの誰かさん達にも見習わせない。

「ささつ、肝心なお酒も飲んでね。あ、そうだね。どうせなら日本酒よりもこれがいいわね。2人共梅酒は飲めるかしら？」

「梅酒か、飲んだ事ないけど多分大丈夫だ」

「私は大好きよ、梅酒」

そう言えば、霊夢は人里でよく梅酒を飲んでたな。

「そう、良かったわ」

幽々子は後ろに置いてあったいくつかの包みを取り出した。

中から出てきたのは、梅が漬けこんである大きい瓶。

梅酒には詳しくないけど、色からして結構漬けこんでいる感じがする。

「他にも果実酒いくつかあるけど、私のオススメはこの梅酒なのよ。どうぞ」

瓶のふたを開けると、中から梅の良い香りがしてきた。

これはかなり期待できそうだ。

幽々子に注いでもらって、匂いをかぎつつ一口飲んだ。

「んっ……なにこれ、甘いのにすごく飲みやすい。こんな梅酒初めてだわ」
「へえ、こういう味なのか、梅酒って」

梅を漬けるから酸味が強いのかと思っただけど、そんな事なかった。

「外の世界では氷を入れたり、他の飲み物を混ぜたりするのが流行り、と紫が言っていたわね。でも私はそのまま飲むのが一番好きよ」

「あーロックとか水割り、お湯割りでしょ？ 前に飲んだ事あるわ。でも、私もそのまま飲むのが好きよ」

ソーダ割りやカクテルを混ぜて飲むのもあったな。

俺は飲んだ事ないから分からないけど、拘りがある人はいるのは知ってる。

「あら、何かいい匂いがあると思ったら、梅酒だったのね」

「とても良い匂いがあるわね」

と、そこへ梅酒の匂いにつられたのか、レミリアと咲夜がやってきた。

以前会った時はレミリアは露骨に幽々子達に警戒心剥き出しだけど、流石にもう平気なようだ。

「よっ、2人共。これ、幽々子が作った梅酒なんだ」

「これを幽々子が？ もしかして後ろに見えるお酒も？」

「ええそうよ。私の趣味なの。良かったらどうかしら？」

幽々子が梅酒を勧めると、レミリアは少し困った顔をした。

「……せつかくだけど、私は遠慮するわ。前にパチエが作った梅酒飲んだ時、ヒドイ目にあったのよ」

以前、パチュリーが気まぐれで梅酒を作った所、最初は酸味が強すぎてレミリアが卒倒。

次に甘さを加えたら入れ過ぎてまたレミリアが卒倒。

ちなみに咲夜や美鈴は顔をしかめる程度で、倒れたりはしなかったそうだ。

……レミリアばかり被害被ってるな。

でも、何だか勿体ないな。そんな理由で梅酒嫌いになったのなら、尚更幽々子の梅酒を飲んで本物の梅酒を味わって欲しい。

「幽々子の梅酒は大丈夫だって。初体験の俺でもすんなり飲める程美味しいんだ。一口だけでも飲んで見ろよ」

そう言つて手に持った猪口に梅酒を注ぎ、レミリアに差し出した。

「……ユウキがそう言うのなら、一口だけ……」

猪口を受け取る手が急に止まった。

何かと思つてレミリアを見ると、顔が少し赤くなつてきてる？

「レミリアア？ もう酔っ払ったのか？ あ、悪い。まだ手を付けてないのが良かったな……じゃあ、これは俺が」

「飲むわ、飲むわよ！」

勿体ないので俺が飲もうとすると、レミリアはひったくるように猪口をぶんどり、一気に飲んだ。

大きめとはいえ、猪口だからそれほど入ってはいないが、そんなに一気に飲んで大丈夫か？

「んぐつ、ぶはあく……あ、本当に美味しい。幽々子、あなたすごいわ！」
「それは重畳。こちらもいいモノ見せてもらったわ」

「いいモノ？……っ!! あ、いや、それは……さっきのは何でもないわよ！」

幽々子が面白そうに笑って、レミリアが顔を真っ赤にさせてあたふたしただけど、何が何だか分からないな。

「霊夢さん、咲夜さん？ どうしました顔が物凄く怖いですよ？」

「黙れ、妖夢」

「は、はいー!?!」

こっちはこっちでなぜか妖夢が霊夢と咲夜にメンチを切られて涙目だ。

何があったのかと首を傾げた時、向こうの空から誰かが飛んでくるのが見えた。

「ユウキキーン、遅くなりましたー！」

やってきたのはリリーホワイトだ。彼女は遅れてくると大ちゃんから聞いていた。

と言つても、別に始める時間は決めてなかったし、途中参加もオツケーなので何も問題ない。

「よっ、リリー。別に遅れてはいないぞ。始まつてまだ間がないしな……つてどうした？」

リリーは笑顔で飛んできたが、妖夢の姿を見ると俺の後ろに急いで隠れてしまった。

どうやら襲われた時の事が、少しトラウマになつているみたいだ。

「あつ……どうも。あの時はまことに申し訳ございませんでした」

妖夢もリリーが自分を怖がっているのが分かつているようで、バツが悪そうな顔をしている。

これは、あまり良くないか。

「ほらリリー、もう全部終わつたし襲われる事はないから大丈夫。何かあつても俺や霊夢達が近くにいるんだし」

「そうよ、リリー。そんな所に隠れてないで一緒に楽しみましょ」

リリーは俺と霊夢に言われ、恐る恐る背から出てきて俺と霊夢の真ん中に座った。

それでもまだ表情は硬いな。

「リリー、これ幽々子が作った梅酒だ。すごく美味しいから飲んでみたらどうだ？」

ここで妖夢に目で合図を送ると、向こうも俺の意図が読めたようでハツとした顔になり、すぐに新しい猪口に梅酒を注いだ。

「こちらをどうぞ。幽々子様特製の梅酒です」

「あ、はい頂きます……甘くて、美味しい」

リリーは妖夢に差し込まれた猪口を少し飲むと、味が口にあつたようで一気に飲んだ。

「あの、もう一杯もらえますか？」

「はい、勿論！ 沢山あるのでどんどん飲んで下さいね」

リリーはよほど気にいったようでいつも通りの笑顔になり、妖夢におかわりをお願いした。

妖夢もそれが嬉しいようで、笑顔でおかわりを注いだ。

「流石ねユウキ。あの2人の空気をすぐに変えちゃうなんて」

「大した事してないってレミリア。宴会はみんな楽しんでるのがここの流儀だろ」

レミリアはさつきから上機嫌で咲夜と梅酒を飲んでる。

こつちのトラウマも無事に解消されたようだ。

「あ、こんな所にいたんですね。私達も混ぜて下さいよ！」

「おーいい匂いがするね」

そこへ、文にとりがやってきた。

はたてはどうやら今回は用事で不参加のようだ。

「ちよつと、せつかくの梅酒の風味が鴉臭さときゆうりの匂いで台無しになるじゃない。少し離れて座りなさいよ」

「そんなーと言うか鴉臭さって何ですか!？」

「キユウリは臭くないよ!」

「そう言う問題じゃないんじゃない、河童?」

文にとりの抗議にレミリアが呆れたように言う。

でも、すぐに2人も話に混ざり、一気に場が賑やかになった。

あ、レミリア、俺の猪口使ったままだ。

ま、いいか。

「はい、どうぞユウキさん……2人共、今日はありがとう」

新しい猪口を俺に渡しながら、幽々子は俺と霊夢に礼を言つて来た。

「いきなり礼を言つてきて、何の事よ?」

「今日の宴会に誘つてくれた事もだけど、今も私達に気を使つてくれたのでしょ? 私達

達が皆に馴染めるように」

「別にそんなんじゃないわよ。異変が終われば宴会はいつもの事だし。今だってたまたま視界に最初に映ったから来ただけよ。でしよ、ユウキさん？」

「だな」

まあ、気を使うまでもいなくても、気にはなった。

幽々子も妖夢も、宴会の騒ぎには自分からは加わりとうせず、少し離れて参加しているように見えた。

異変の首謀者である幽々子と妖夢にいい印象を抱いていないのは、今日の参加者にもいる。

でも、異変が解決した以上何も文句は言わず、水に流すのが流儀だ。

だから、俺と霊夢が気を使う必要はなかったかもしれないけどな。

「ふふつ、そういう事にしておきましょうか。それにしても……ユウキさん、あなたも経験不足な事、結構あるのね」

幽々子は突然変な事を言ってきた。

「レミリアお嬢様、今日は参加されて良かったですね。ええ、本当に」

「咲夜!?! まださっきの事根に持ってるの!?!」

「んん? 私達が来るまでに何かあったのですか?」

「どうせ彼がらみじゃない?」

「ブツ!! ち、違うわよ! 見当はずれな事言わないで、河童!」

「その反応、まさか!」

その視線の先にはレミリアがさっきの事で咲夜にからかわれて、文にとりがそれに反応している。

いや、文、こつちを睨まれても困るんだが。

「はあ……で、幽々子が言ってるのは何の事だ? 確かに俺も経験不足な事沢山あるけど?」

「さあ、何の事でしょう? ねえ、霊夢ちゃん?」

「ん、霊夢は何の事かわかるのか?」

「わ、私に聞かないで!」

扇子で口元を隠しながら笑う幽々子の仕草は妙に似合っている。

だけど、本当に何の事を言っているのかは分からない。

霊夢は幽々子が言いたい事分かってはいるけど、聞いても何も答えてくれなかった。

続く

第87話 「花見Ⅱ」

霊夢はレミリアや幽々子達と楽しく話こんでいるので、俺は別の所に行く事にした。で、席を立った途端。美鈴やフラン達と一緒にいた幽香と目が合った。

幽香はニコリと微笑んだだけだけど、これは確実によばれているな。

どこに行こうか悩んでたから構わないけどな。

そこにいたのは美鈴とフランと幽香、それに大ちやんとリグルだ。

何だかメンバーが中途半端な気がするな。

「よお、楽しんでるかフラン」

「お兄ちゃん！ 待ってたんだよ！」

「ユウキさん、ここどうぞ」

大ちゃんが場所を空けてくれて、フランとの間に座る。

何だか、前の宴会の時と同じような気がするけど。

それを見ていた幽香と美鈴がなぜか笑った。

「？ 何を笑ってるんだ？」

「宴会の時もそうだけど、あなたは本当に子供に好かれやすいと思ったのよ。梨奈にも

好かれてるでしょ?」

そう言えば梨奈は幽香と仲良かったんだよな。

「ルーミアもチルノもよくおにーさんの事、楽しそうに話してるしね」

「ルーミアの場合、餌付けのせいかも。で、また俺をおにーさんと呼んでるのか、リグル
師匠よびといい、名前以外で呼ばれるのは未だに慣れない。

かろうじてフランによばれるのが慣れたくらいだ。

「ユウキさんよりこっちの方が言いやすいし、個性だよ個性」

「個性って、自分で言うものかそれ」

「やっぱり私もユウキさんよりお兄様の方がいいかな」

まあ確かにチルノやルーミアといるとキャラが強くて、リグルじゃ影薄くなっちゃい
そうだよな。

俺の隣で考え込む大ちゃんも何気に個性強いし。

「おにーさん、何だか失礼な事考えてない?」

「ああ。良く分かったな。いや、ホントリグルは大変だなと思って……がんばれよ」

「否定もせずに即答!! しかも、なんか励まされた!?!」

リグルのツツコミがツボにハマったらしく、幽香とフランは大爆笑して大ちゃんと美
鈴は必死に笑いを堪えているがすぐに崩壊した。

「ところでチルノやみすちーはどこにいるんだ？ てつきり大ちゃん達と一緒にだと思っただのに」

「あ、チルノちゃんならここにいますよ」

美鈴がちよつと体をずらすと、チルノが丸まって眠っているのが見えた。顔が真っ赤なので酔っ払って眠ってしまったのか。

チルノは意外と酒に強いはずだったんだけどな。

「で、あの鳥妖怪と闇妖怪は上ね」

「上？」

幽香が指さす方を見ると……

「まーてーおーにーくーチーキーン！」

「ちよつと、ルーミア私は鳥だけど、肉じゃないわよ！ ああもう悪酔いするんじゃないの！」

ルーミアがみすちーを追いかけ回していた。

「何してるんだ、アレ。ん？ あっちでも誰か飛びまわってるな」

向こう側の空では誰かが弾幕ごっこをしているようだった。

それにしても派手にやってるようだけど。

「「魔理沙ーニゲロニゲローー！ さあ、逃げなきゃ食べちゃうぞー！」」

「わわっ、ちよつと待てフランス！ そのセリフはレミリアが言いそうなセリフだぜ！」

3人のフランが魔理沙を追いかけ回していた。

こつちもあつちも追いかけっこ。

「これ、どんな状況なんだ？ ルーミアは何となく予想付くけど、なんでフランが分身して魔理沙を追いかけてる？」

俺の隣に座っているフランに目を向けると、あはははは、と冷や汗をかいている。

美鈴と大ちゃんも苦笑いを浮かべ、幽香はくすくす笑っている。

というか、美鈴がいたのになぜこんな事に？

「え、えつとね。力を完全に制御できるようになったの見える為に、フォーオブアカインドを使って見せたんだけど」

「魔理沙さんが「それじゃ酔っ払っても制御できるかこの分身達で試してみようぜ」と言つて分身のフランちゃんに沢山お酒を飲ませたんです」

「つまり、あれは魔理沙の自業自得つて事か。それにしても大ちゃん魔理沙の口真似うまいな」

「え、えへへっ」

まあどうせ碌でもない理由だとは思つてたけど、本当にくだらない理由だった。

「気付いた時には手遅れでして。レミリアお嬢様は放っておきないと言っていましたし

……」

「うん。それで正解だな。皆あれを肴に飲んでみたいだし」

「助けてー！ と上から聞こえるけど、無視無視。」

「助けてー！ という別の声も聞こえるけど、そっちも多分大丈夫だろう、多分……たぶん？」

「ところで、今回の異変、私からも礼を言っておくわ。春を取り戻してくれてありがとう」

「どうしたんだよいきなり。それに異変を解決したのは霊夢だ。礼は霊夢に言ってくれ」

まさか、幽香から礼を言われるとは思わなかった。

そう思ったのが顔に出たらしく、俺の顔をみて幽香は笑った。

「ふふつ、私からの礼は意外だったみたいね。冬が長引いたせいで春の花が咲けなくて、ちよつと困ってたのよ」

つまり、冬のままだと春の花も咲かず、花の妖怪としては見過ごせないってわけか。

「霊夢がまだ動かないようだったら、私が動く所だったわ」

「もし幽香が動いていたら、多分事態は悪化していたでしょうね」

そこへアリスとパチュリーがやってきた。

前日もそうだったけど2人とも酒には強いのか、まだ酔っている様子はない。

「あらアリス。それはどういう意味かしら？」

「何でもかんでもぶつ放すだけのあんたじゃ、今回の異変は解決しなかったって言ったのよ」

「霊夢や咲夜に聞いた話だと。今回の異変はユウキと霊夢、魔理沙、咲夜と妖夢がいなきや無理だったわね」

幽香が睨むように言ったが、隣に座ったアリスは全く気にせず毒を吐くように言い、パチユリーもそれに同意した。

前の宴会の時も思ったけど、アリスって幽香の事昔から知ってるみたいだな。

「あら心外ね。私を魔理沙みたいに言わないで頂戴」

「弾幕はパワーだけ。が決め台詞ですからね、魔理沙さんは」

美鈴が苦笑いを浮かべながら言うけど、アレ決め台詞だったのか。

そう言えば、フランの部屋で最初に会った時も言われたっけ。

フランも俺と同じ事を思ったのか、俺の方をチラチラ見てくる。

「あの事はもう気にするなって言ったる？」

「えっ、うん。ありがとうお兄ちゃん」

少し落ち込み気味だったフランの頭を撫でる。

それだけで安心したのか笑顔が戻ったが、反対側から視線を感じ振り向く。

「……………」

大ちゃんが催促するような目でこつちを見てきてる。

何だろ。幻想郷に来てからこういう事ばかりな気がする。

しようがないから軽く一撫ですると、大ちゃんはそれだけで満足に笑った。

「大ちゃんもなかなか行動的になりましたね」

「そう？ あの子は前から行動派よ？ チルノやルーミアの影に隠れて目立ってなかつ

ただけよ。でも、今は目立ってるわね」

よくチルノや大ちゃん達と遊ぶ美鈴と、昔から知っているアリスの見解は分かれてい

る。

けれども、大ちゃんは変わったと言うのは2人共一致しているんだな。

「おい、お前らさつきから人が助けを求めているのに、無視して呑気にいちやついてるなよ

！」

「あう〜ヒドイ目にあつたあ」

そこへポロポロになった魔理沙とみすちーがやってきた。

どうやら分身フランはタイムリミットで消えて、ルーミアは酔っ払ってるのに激しく

動きすぎてダウンしたらしい。

向こうで慧音と妹紅が介抱しているのが見えた。
妖怪なのに酒に弱いんだな。

「みすちーはともかく、魔理沙のは自業自得だろ」

「ルーミアに絡まれるのは結構あったけど、今回は流石に命の危機を感じたわ」

「まあまあ、無事だったから良かったじゃない」

半泣きのみすちーを、リグルが慰めている。

ルーミアに追いかけられるのは今回だけじゃなかったのか。

「魔理沙、ごめんね？」

心底申し訳なきような顔をしたフランに、流石の魔理沙もこれ以上は何も言えなかった。

「い、いいって事だぜ」

「何よ偉そうに。ユウキも言ってたけど、元凶はあんたじゃない」

「いくら妹様が力制御出来るようになったからって……美鈴、あなたが付いていながら何やってるのよ」

「うぐつ……反省してます」

「すみませんでした……」

アリスとパチュリーに責められ、魔理沙とついでに美鈴は縮こまってしまった。

「ところで分身とはいえフランと、ルーミアやチルノがここまで酔うなんて何飲んだんだ？」

「えっと、これだよ。魔理沙が持ってきたんだけど。全部私の分身とルーミアが飲んじゃった」

フランが手にしたのは空の瓶だが、その形はともお酒が入っているような形には見えない。

「嫌な予感がしたから私は飲まなかったのよね」

「フランお嬢様達が飲みたがったので、私も飲まなかったんです」

一口飲んだフラン、ルーミア、チルノが気にいつてしまって、3人で一気に飲み干してしまったようだ。

瓶に残った酒の匂いを嗅いでみたけど、普通のお酒の匂いがするだけだ。でも、何だか妙な感じがする。

「ちよっと、いいかしら？ 魔理沙、これ本当にお酒？」

「どれどれ。うわっ、ナニコレ。魔理沙、あんたまさか……」

魔法使いのパチュリーとアリスが匂いを嗅ぐと、何か分かったようで目付きが鋭くなつた。

魔理沙は口笛を吹いて明後日の方を見ている。

「どうしたんだ2人共？」

「これ、お酒を元にして作った魔法薬の一種よ。人間には害はないけど、妖怪や妖精には物凄く効くように出来てるわ。毒じゃないだけまだいいけど……」

「……魔法沙？」

「は、はい！」

パチュリーの説明を聞いて俺が笑顔で魔法沙を振り向くと、なぜか魔法沙は正座した。

おかしいな、何だか魔法沙の顔に恐怖の色が浮かんでいるぞ？

「えっと、だな。宴会の為に変わった飲み物用意しようとして色々試して、これが一番美味しかったから持つて来たんだけど、まさか人間以外に作用する魔法薬になるとは思わなかったぜ」

「要するに……全部お前のせいかなぁ！」

「いだけだつ、ぎ、ギブう〜！ 頭ぐりぐりするのやめろお〜！」

魔法沙への制裁を終えて、皆で飲み直した。

その時ふと大ちゃんにお酒をついでいる幽香を見て気になった事があった。

「それひよつとして幽香が作ったお酒か？」

「ええ、そうよ。花から作ったお酒。大ちゃんやチルノ達が好きなのよ。あなたも飲ん

でみる?」

幽香が作ったという牡丹酒をもらって飲んだが、これがまた結構なうまさだった。だけど、気になったのは酒の味じゃない。

「魔理沙もだけど、幽香も今回は自分で作ったお酒持って来たんだな」

確か前回の宴会ではお酒は人里から買ったもので、自前のお酒はなかったはず。

「うーん、言われてみれば、お酒は作っても宴会に持ってきたのは初めてだぜ」

「そうね。この前の宴会の時は、これ持ってきてなかったし、持ってくる気もなかったわ」

「そう言えば、私も今回は自前のお酒持参したわね。レミイは嫌な顔してたけど」

パチュリーが飲んでいるのは、レミアにちよつとしたトラウマを植え付けた梅酒だ。

さつき飲ませてもらってけど、幽々子には負けるがかなり美味しかった。

「それがどうかしたんですか、ユウキさん?」

大ちゃんに聞かれて、少し答えに困った。

「どうもしてはいないけど、何か気になって。今回自分で作ったお酒持ってくる人が多いからさ。酒造りがブームなのか?」

「ブームと言う程じゃないけど、長年生きてると、趣味が色々出来てくるのよ。で、自分にあつたお酒を作るようになる妖怪が多いわけ。私や魔理沙みたいだね」

「おいしい、私はまだ十数年しか生きてない人間だぜ？ お前達と一緒にするなよ、幽香」

長年生きてると趣味が増えて、お酒を作るようになる。

それはいいんだけど、引つ掛かると言うか、気になると言うか……うーん？

「ユウキさん、どうしたんですか？ まさか、変な予感でもしてるんじゃないですか？」

少し考え込んでいると、美鈴が心配そうな顔で聞いてきた。

パチュリーやフラン達も同じような顔をして俺を見ている。

「い、いやいや。別に大した事じゃないさ。色々なお酒があつて賑やかな花見だなど思っただけだよ」

これは嘘じゃない。嘘じゃない、けど……頭に何か引つかかりを覚えたのも確かだつた。

けれども、それが何か分からないまま、花見は終わった。

続く

萃夢想編

第88話 「幻想郷縁起」

花見が終わった次の日。

いつも通り午前には寺子屋で授業を手伝い、みんなで昼食を食べて神社へ帰ろうとした時、慧音に呼びとめられた。

「ユウキ君。今日はこれから何か予定はあるのかい？」

「予定？ 特にはないな。散歩して帰ろうかと思ってるくらい」

霊夢は用事があつて夕食まで外出中だし。

晩御飯は花見の料理が残ってるからそれ食べるから買い物もいらぬ。

「そうか。なら、ちょっと君に会いたいと言う人がいるんだが、いいかい？ 本当は昨日

言うつもりだったのだけど、言いそびれてしまつてね」

「ああ、それなら構わないぞ」

そう言えば、霊夢もだけど慧音も結構酒強いな。

昨日みんなが作ってきたお酒かなり飲んでたはずなのに、二日酔いもなくケロツとしてる。

ま、それは俺もか。

「さて、ここだ」

慧音に連れられてやってきたのは、梨奈の所よりも大きな屋敷だった。

大きな門が目立っていてここの前は何度か通つてゐるし、人里で一番大きな屋敷だから知っているけど、誰が住んでるかは知らなかったな。

「慧音、この主が俺に会いたいわって人か？」

「そうだ。名前は稗田阿求と言う人間だ」

その名前には聞き覚えがあった。

何度か霊夢や魔理沙が口にしていただけ、特に気に留めなかったな。

「彼女の事は本人に聞くと良いだろう」

慧音に促され屋敷の方を向くと、和服に身を包み大きな花飾りをした紫髪の少女が俺達を出迎えてくれた。

見た目こそ幼いが、凛とした佇まいは幽々子のように上品で大人の雰囲気漂わせている。

そのギャップに違和感と言うか、何かを感じた。

人間なのは間違いないけど、何か訳ありのようだ。

「いらっしやいませ、慧音先生。そして、はじめまして、ユウキさん。稗田家9代目当主

稗田阿求と申します。以後お見知りおきを」

「ご丁寧な挨拶、痛み入ります。俺の名はユウキ、博麗神社の居候です」

丁寧にお辞儀をしながら挨拶する姿に、思わずこっちもあまりした事がない挨拶をした。

その姿がおかしかったのか、それとも居候と言ったのがツボにハマったのか、阿求は一瞬キョトンとしたかと思えば、年相応な少女の顔になって大声で笑った。

隣にいる慧音はそんな阿求にポカーンとしている。

「ぷっ、ふふっ……あははははっ！ は、初めてですよ。私を見て狼狽もせずにそんな挨拶をしてきた人間は。普段道理に碎けて話してくれて構いませんよ。堅苦しいのは苦手です」

「そうか。じゃあ普段通りに話すよ、あつきゆん」

「「ぷっ!」」

お言葉に甘えて碎けて話してみただけど、碎き過ぎたか。

あつきゆん、阿求だけでなく慧音まで嘔き出してしまった。

「き、君は碎けるにも程があるだろ!」

「いえ、構いませんよ。話に聞いていた通り変わった人なのですな」

「幻想郷のみんなに比べたら俺なんてまだまだだ」

「いや、君も十二分に変わっているぞ?」

なんて事を話しながら屋敷の中へと案内された。

屋敷内は外で見る以上に広く、中庭まであつて和風豪邸と言つた感じだ。

これだけ広いと色々大変だろうと聞いてみたら、お手伝いさんや庭師の人が結構いるらしい。

そうして、俺達が案内されたのは意外にも普通の広さの和室で、本や巻物などがびつしりと棚に仕舞われている。

「ここは私の個室になります。客間のほうが広いのですが、こう言つた部屋の方が落ち着くでしょう?」

「……普通、初対面の男子を自分の部屋に招くかな」

警戒心なさすぎだろ。別に何もするつもりないし、慧音がいるからつて事だろうけど。

でもだからと言つて広い客間だと確かに落ちつかないかもしれない。

「貴方の事は慧音先生や寺子屋の子供達からよく聞いています。いずれ会つてみたいと思ひ、慧音先生に時期を見計らつてもらつていたんです」

俺は砕けた口調になつてるけど、阿求は言い方こそ柔らかいが、言葉自体まだ堅いな。元からこういう性格なのか。

ちよつといじわるしてみるか。

「で、今日こうしてきたのだけど、実際俺を見てどうだった？」

「そうですね。やはり聞くより実際見て話す方がいいですね。貴方はとても素敵な殿方ですよ」

……いじわるな質問をしたつもりだったけど、もの見事に跳ね返された。

「人はみかけに寄らない物だぞ？」

「人を見る目はありますし。妹紅や梨奈ちゃんや大ちゃん達の言葉は説得力ありますから」

なぜにその人選なのかは、聞かない方がいいだろうな。

「そうかい。ところで、阿求は歴史作家か歴史研究者か？ それらしい資料がかなりあるんだけど」

よく見ると書物の中には外の世界の物らしい本もある。

「そのどちらでもありませんね。歴史研究者と言うのであれば、慧音先生の方が近いかもしれません」

「確かに。しかし、それは私の能力ゆえの話だ」

慧音の能力は歴史を隠すんだったよな。で、満月の時には歴史を作る能力になる。

前に慧音の力を幻想支配で視た時にどういったものかと思っただけど、イマイチよく分

からなかった。

「私は【幻想郷縁起】という幻想郷における妖怪や地理などを纏めた書物を書いてるんです」

そう言つて阿求が見せてくれた本には、幻想郷に住む妖怪の生態や危険地域など様々な情報が書きしるされていた。

外来人の俺でも分かるように色々と詳しく書かれていて、これなら子供でも読めるかもしれない。

「阿求には私が授業で使う資料も作つてもらつているんだ。君も何度か整理した事あっただろう?」

「あーどうりで見覚えある字だと思つたんだ。なるほど、あの分かりやすい資料は阿求が作つたのか」

「えへへ、そう言つてもらえると嬉しいですけど、これも仕事なので。実は今日貴方に來てもらつたのはコレを読んでもらつて、どんな反応をするか見たかつたのもあるんです」

「外来人の俺でも分かりやすく書かれているか、か?」

「はい。流石、鋭いですね。今回の幻想郷縁起は書く事が多くて、纏まりきれてるか不安だったのですね」

なるほど。確かに厚みがあるけど、俺からすればまだ普通だな。

もつと百科事典並に分厚い資料を何度も見てるし。

ん？ 今回は？

「これって何冊も書いてるって事か？」

そう聞くと、阿求はチラリと慧音を見ると、慧音は笑顔で頷いて応えた。

「実は、私はただの人間ではありません。それは気付いていますね？」

「っ!? やっぱりそうだったか」

俺が阿求に違和感を覚えたのを、阿求が知っているのには驚いた。

「先程私を見た時に少し、考え込むような仕草を見せたので、それに洞察力や勘の鋭さは

人間離れしているとも聞いていましたし」

「に、人間離れって……否定はしないけど」

誰から聞いたのかは分かりきった事。

隣に視線を向けると犯人はニコニコと笑っているだけだ。

「私は一度死ぬと百年ほどでまた稗田家の当主としてまた生まれ、その度に幻想郷縁起を書いているのです」

「転生、と言う奴か」

阿求は30年ほどしか寿命を持たず、死ぬと閻魔の元で100年ほど働き、稗田家の

人間として転生すると言う。

今の阿求はもう9回も転生したそうだ。

傍から聞くととても不幸な話に聞こえるけど、本人は長い目で見れば不死とも言えるし特に不満もないし不幸とも思つてなさそうだ。

なら俺がとやかく言う事じゃない。

「今は昔と違い、人間と妖怪がうまく共存していて、外の世界から沢山の妖怪たちが幻想郷に入ってきています」

レミリア達も外の世界から来た妖怪だしな。

「ですが、その分危険地域や人間に害を及ぼす妖怪も増えて、書き留める事が多くなつてしまつたんです」

「妖怪は人間を食らい、人間は妖怪を退治する。それは昔から変わらないルールだ」

慧音の言う通り、それは幻想郷のルールだ。

俺も何度も霊夢達から警告されていた事だ。

でも、実際はともうまく共存してると思うけどな。

たまに人間を襲う変な妖怪は俺も退治してるけど。

「しかし、別に不幸も不満も思つていなくても大変な仕事だな。人間に妖怪の恐ろしさを伝える書物を書くなんて」

資料集めもそうだし、実際に見てみないといけない場合もありそうだ。

「それでもないですよ。私には一つ能力がありますから「一度見た物を忘れない程度の能力」この能力があるから初代当主稗田阿礼はこの仕事を任されたのです」

それを聞いて、俺は目を見開いた。

阿求の能力は、まさに完全記憶能力。

阿求はインデックスと同じ能力を天性で持っている。

こればかりは俺の幻想支配でも真似できない。

完全記憶能力は霊力や魔力に頼らない能力だからだ。

まさか幻想郷でもその能力者に出会うとは。

完全、記憶能力……か。

「?」 どうかされましたか?」

「い、いや何でもない。ちよつと能力に驚いただけだよ」

と、その時だった。襖の向こうから声が聞こえてきた。

「阿求様。失礼いたします。霊夢様がお見えになりました」

「分かりました。いつもの部屋にご案内して差し上げて下さい」

「霊夢?」

思わぬ訪問客に俺も慧音も思わず声に出た。

「靈夢が一体阿求に何の用事なんだ？」

阿求は少し考えるそぶりを見せたかと思えば、笑い出した。

「急に笑いだして一体どうした？」

「いえ、少し思い出した事がありました。靈夢さんは先日の異変以来ちよくちよく来て
いるんですよ」

「靈夢が？ どうして？」

今のお手伝いさんとの話から察するに阿求に用があるわけじゃなく、ここにある何か
に用があるみたいだけど。

「……なるほど、そう言う事か」

慧音は何か思い当たる事があるようで、納得した顔をした。

「慧音、何が分かったんだ？」

「靈夢も博麗の巫女としての心構えを見直したのさ。最も動機はそれだけじゃなさそう
だけど」

慧音は俺の顔を面白そうにジッと見た。

阿求も慧音と同じように暖かい目で俺を見ている。

靈夢がここに来てるのは俺が原因って事か？

「ともかく、靈夢さんのいる部屋に行きましようか」

と阿求に案内されたのは屋敷の奥にある倉庫だった。

「ここには沢山の書物があります。外の世界の古い書物もありますよ」

阿求の部屋にも沢山の本があったけど、ここはそれ以上って事か。

中に入ると、確かに数多くの本が並んであった。

流石にパチュリーの大図書館までとは行かなくても、資料庫としては十分な広さだ。

霊夢は2階の奥からひよっこり顔をのぞかせた。

「あら阿求。今日もお邪魔させてもらって……えっ？ ユウキさんに慧音？ なんてあった達までいるのよ!」

俺と慧音の姿を見るなり、なぜか恥ずかしそうに顔を真っ赤にワタワタしながら降りてきた。

「よっ、霊夢。用事があるってこの事だったのか」

「そ、そうよ。悪い?」

「ん? 別に悪くないけど?」

霊夢の様子が何かおかしいな。

隠しごとがバレたような顔をしている。

「むくわ、笑えばいいでしょ」

「笑うって、何をだ?」

さつきから話通じてないような気がするんだけど？

阿求も慧音もクスクス笑ってるだけだし、何なんだ？

「お、面白いでしょ！ 博麗の巫女である私がこの前の異変で、白玉楼とか幻想郷の事で何も知らないから、こつそりとここで色々と昔にあった出来事とかそういうの学んでるなんて！」

あーなるほどなるほど。要するに霊夢は幻想郷の事を勉強し直そうとしているわけか。

確かに異変の時、レミリアや魔理沙達に知らない事多すぎて呆れられてたな。

で、勉強しに来てる事を俺達に知られたくなかったから黙っていたわけで、たまたまここで居合わせてしまってバツが悪いと。

別に気にする事ないと思うんだけど、博麗の巫女としてのプライドって奴か。

「何よその顔。ま、まさか阿求から私がここに來てる理由聞いたんじゃないの!？」

「いや。霊夢がよく來てるって事しか聞いてないけど？ でもそっか、ここなら歴史の勉強にはもってこいだよな」

「~~~~~つ!!？」

そう言うと、霊夢がさつき以上に顔を真っ赤にした。

顔から湯気が出そう……あ、出た。

「霊夢さん。見事な自爆ですね」

「うむ。隠し事をするとかメにならないという良い見本だな」

阿求、こうなると分かってて俺に黙ってここへ通したろ？

そして慧音、それは少し違うんじゃないか？

「霊夢、そんなに恥ずかしがる事じゃないって」

影で努力してる所を見られるのは恥ずかしがるのは、思春期の女の子には恥ずかしいよな。

魔理沙の時もそうだったし。

「う、うるさいうるさいうるさい！ そうよ。私はお勉強に来てるの！ だから邪魔しないで！」

霊夢は大声で叫びながら資料庫の奥へと飛んで行ってしまった。

「やれやれ、しょうがない子だな霊夢は」

「ふふつ、可愛らしいじゃないですか」

俺としてはイマイチ腑に落ちない所もあるけど、霊夢はあれで放っておいた方がよさそうだな。

「それにしてもすごい本の数。これ全部把握してるのか？」

「ええ、目録はつけていますし、整理整頓もお手伝いさん達皆さんでやっていますから」

パチュリーの大図書館は洋書ばかりだったけど、こっちは巻物まであつて和風大図書館だな。

こういうのを見ると何かワクワクしちゃうな。

「ユウキさん、よろしければしばらくご覧になれますか？」

「えっ!?! いいのか!?!」

見てみないと分からないけど、秘蔵の書物とかも混ざつてそうだし、部外者の俺が見て良いものなのか？

「良いも何もここへ案内した時点でこうなるとは予想していましたから。外へ持ち出さなければ構いませんよ。貴方は悪用しないでしようし」

「私もよくここへはくるんだ。で、必要な資料は借りるか、写させてもらつている。きつと君も気に入ると思つてね」

俺が紅魔館ではよく図書館で本を読んでいるのを慧音は知つて、ここも気に入ると思つたのか。

「その代わりですが、後で貴方の能力や外の世界のお話を聞かせてくださいね」

「ああ。それくらいなら構わないぜ」

文みたく取材と言うわけじゃないし、能力や学園都市の事も他の皆も知つてる事だ。

慧音が信頼している阿求に話すのは全く問題ない。

「あちらが幻想郷の歴史に関わる書物が置いてあつて、こちらには妖怪の資料がありません。後でお茶を用意させますから、ごゆっくりご覧になって下さい」

「私と阿求は少しやる事があるから部屋に戻っているよ。霊夢と一緒に勉強するとい」

2人はそう言つて戻つて行つた。

霊夢と一緒に言われても、今はあつち行かない方がよさそうだな。

さて、許可も得た事だし、早速読んで行つてみるか。

「まずは妖怪の資料を見てみるか。えっと、天狗や河童の事も本になつてるな。後は……鬼か」

天狗や河童、妖狐や幽霊と言つたありふれた妖怪には出会つたけど、鬼と言う日本のポピュラーな妖怪にはまだ出会つた事ないな。

「霊夢達からも鬼の事聞いた事ないな。でも本があるつて事はいるんだよな。よしつ、これから出会うかもしれないしこれを読んで予習するか」

この数日後、鬼と出会い、戦う事になるとはこの時の俺は全く思つていなかった。

続く

第89話 「花見Ⅲ」

——花が咲いているうちに花見だ〜！

と誰が言ったか、前に花見をしてから3日も経たず、また花見と言う名の宴会をする事になった。

まあ異変のせいで桜が咲くのが異様に遅かったから、花見をまたしたいと思うのは仕方ないか。

「こいつら桜を口実にただ飲みただけよ」

霊夢はそんな事を言っているが、宴会自体には反対ではないようだ。

「それとこれとは話が別。酒の肴があるうちに楽しまなきゃ」

「それには同意。それにしても3日前にやったばかりなのにまだこんなに集まるなんて、みんな暇なんだな」

今回は前回見なかった霖之助やはたての姿も見える。

「僕は店で窓から見える桜をゆつくり見るつもりだったのだけど、魔理沙に強引に誘われてね。もう慣れたよ」

霖之助は1人花見をしていたら、連れだされたいらしい。

それはもう拉致と言わないか？

「私はこの前出られなかったからね。今日はネタ探しもかねてやってきたわ」
「ほほう、だったらネタになりそうな事、今からするわよ！」

「文？ ちよつ、いきなりどこに連れだすの!？」

突然やってきた文に首根っこを掴まされ、はたてが連れ出されてやってきたのは宴会の中心。

そこには妖夢と美鈴、こゝあ、にとり、魔理沙がいた。

「さーって、これで役者は揃いましたね。ユウキさんと霊夢もどうぞどうぞ」
「何をするつもりなのか分からないのにどうぞも何もないでしょ」

「霊夢に同じく。何をするつもりなんだ？」

面子としてはなかなか面白いのが揃ってる。

「ふっふっふっ、宴会と言えば……早飲み大会！」

「「イエエーイー！」」

魔理沙の一声で一斉に叫び声が上がった。

ポカーンとしていたら、いつの間にか霊夢と一緒に参加者席にいた。

「あつ、おい！ 俺はやるなんて言っていないぞ！」

「私もパス。お酒は味わって飲むのが好きなの！」

「御師匠様も霊夢さんも諦めてください。私は諦めました……」

「レミリアお嬢様に言われて、フランお嬢様から応援されたら、断れなかつたんですよ。なのでお二人も付き合って下さい……」

「あはは……何だか懐かしいノリだなあ」

「燃えてきたあー！」

妖夢は諦めたように死んだ目をして、美鈴とにとりは苦笑い、魔理沙だけは乗り気だ。「だからなんで私まで参加させられるのよー！」

「いやあ、紅魔館と白玉楼、それに博麗の巫女、魔法使いと人間と河童の代表まで出されたら天狗の代表も出さないわけにはいかないじゃない？」

魔理沙は魔法使い、霊夢が巫女として人間代表って俺か？

自分で言うのも何だが人間代表として出されてもいいのだろうか。

咲夜や妹紅もいるのに。

「……こつち見ないで」

視線を送ってみると、何か言う前に2人揃って真顔で拒否された。

「はあく諦めましょう、ユウキさん。今のこいつらに何言っても無駄よ。魔理沙はともかく文も妙にハイテンションだし」

確かに、魔理沙と文はハイテンションだな。

でも魔理沙はこの前もそうだったから気にしないけど、文も文で今日は一段とハイだな。

「はたて、文は何かあったのか？」

「私に聞かないでよ。でも、文が酒の席でハメを外すなんて珍しいわね。ストレスでも……それはないわね」

「文はストレスでどうこうなるタイプじゃないわよ」

霊夢に同意。ま、たまには文もこうなるか。

「それではただいまより、幻想郷早飲み大会を行います！ ルールは簡単！ 白玉楼が主、西行寺幽々子さんお手製の日本酒一升瓶5本、一番早く飲み終えた方が勝利！ 優勝賞品は、香霖堂より提供された金の食器です！」

「『おお〜』」

霖之助、あんなものいつのまに？

「昨日拾ったのを見付かってね。どうせなら今日の余興にしようと言われたんだよ。僕は食器には興味ないから承諾したのさ」

「……霖之助さん」

余計な事を、と言わんばかりの霊夢のジト目攻撃に咳払いして明後日の方を向いた。

金の食器か……そういうコレクターでもないから、もらってもうれしくないな。

それは霊夢も同じのようで、深く溜息をついている。
でも、あつて困る物ではない。

「美鈴！　なんとしても手に入れなさいよ！」

アレが一番欲しいのはレミリアか。

それなら自分が出れば良かったのに、でもあの小さい身体じゃ無理か。

「それでは……用意、始め！」

文の号令と共に皆一気に飲み始めた。

日本酒5本は多いのか少ないのか分からないけど、出された幽々子の日本酒を飲んで
思つた事。

「な、なんだこりゃ!?　ホントに日本酒かこれ!？」

「……全く同意見だわ」

吐き出さなかつた自分を褒めたい。

それくらいに強いお酒だった。

霊夢も同じく、吐きそうになるのを必死に堪え、どうにか1本飲み干した。

「おやおや〜?　ユウキさんと霊夢さんはここでギブアップでしょうか!?　優勝候補筆
頭の2人が早くも脱落かあ〜!？」

勝手に優勝候補に入れないでほしいんだが……

それにしてもこのお酒強すぎる。

味は美味しいけど、これは味わいながら料理を食べつつ飲む酒だ。

どうにか3本空けたけど、流石にキツイ。

他の皆も苦戦しているかと思渡すと、意外な光景が広がっていた。

「ぶはー、結構イケますね。これ」

「幽々子様お手製のなのですから当然です」

美鈴と妖夢は顔をほんのり赤くしながらも平然と飲んでいる。

「いいねえいいねえ。やっぱりお酒はこうでなくっちゃー」

「うーん。私はもつと強いお酒が好きなんですけど、でもうまいー」

にとりとなんと魔理沙も何なく飲んでいる。

魔理沙は魔法でも使っているのかと思ひ、幻想支配で視てみたがそんな事はなく、ただ本当にお酒に強いだけだった。

「……霊夢、ギブアップしていいか？」

「奇遇ね。私も同じ事言おうとしてたわ」

金の食器を霊夢にあげようかと思っただけど、これは無理。

霊夢も少しきつそうだ。

無理に飲んで倒れてもイヤだし、ここらが引き際かな。

「おーつと、ユウキさんも霊夢さんも、もう4本空けていた！ 流石は優勝候補筆頭！」

「えっ？」

いつの間にか俺と霊夢の周りには一升瓶がたくさん転がっていた。

アレ？ 俺たちこれだけ飲んだっけ？

もう記憶があやふやだけど、ここまで飲めたのなら……

「最後までやりましょうか」

「そうだな。せっかくだ。優勝しちやおうー！」

あと1本飲み干すだけと言われれば、やる気が出てきてしまうものだ。

美鈴達も3本目を飲み終えて4本目にいつているし、ぐずぐずはしてられない。

「一気に……」

「ラストスパートよ！」

と、霊夢と2人意気込んだ所で、記憶が無くなった。

「……やっぱり無理だったようですね」

ユウキさんと霊夢さん、2人仲良く一升瓶を抱えながら眠ってる。

やっぱり人間にこの日本酒はきつすぎたかな。

私も飲ませてもらったけど、これは完全に妖怪向けのお酒。

魔理沙さんが飲めたのは、魔法使いだから？ ま、どうでもいいわね。

早飲み大会は、意外な事にとりが優勝、続けて美鈴が準優勝だった。

「いやあく金つて実験や研究材料として貴重なんだよねえ。もうけたもうけた」
にとりらしいといえばにとりらしいけど、せつかくの食器を溶かして発明に利用しようなんて勿体ないわね。

そして、準優勝の美鈴には銀の食器一式が贈られた。

これも霖之助さんが見つけた外の世界の物。

どうしてこんな高価そうなのが幻想郷に来たのか分からないけど、いい宴会のネタになったわね。

「お嬢様、やりました準優勝の銀の食器です！」

「優勝じゃないのが悔しいけど、でもまあこれはこれで……って、銀の食器なんて私とフランが使えるわけないでしょ！」

あやや、どうやらレミアさんとフランちゃんには使えないようで、って吸血鬼だもの当たり前か。

「だったらこの食器は私や美鈴が使うわ。食器としてもだけど、これだけの天然ものの純金は滅多に手に入らないもの」

パチュリーさんもとりと同じような発想してるわね。

私としては十分ネタが出来たし、満足いく早飲み大会だった。

でもこの子にはそうではなかったみたいだけど。

「はたて……だらしなさすぎでしょ」

「うゝ、今は、何も言わないで……きもちわるい」

はたては、何と2本目でダウンしてしまった。

元々お酒弱い子だけど、同じ天狗として情けないわね。

まあ、あんなにお酒を一気に飲む事なんて、ここ数百年なかったから仕方ないのかな

?

「なんだ、はたて、だらしないね。これくらいの酒でダウン?」

ちよつとだけ顔を赤くしてるけど、にとりは平然とした顔をしている。

私もにとりも、この手の事には一応慣れっこなのよね。

「そう言えばはたては、昔からこうだったよね。よくそれでからかわれてたっけ」

「ええそうね。あのお方たちの良い鴨だったわね。鴉だけど」

私もにとりも、今はもういまいかかつての妖怪の山を仕切っていた鬼を思い浮かべた。

彼らならこのお酒でも一石を丸ごと飲み干しても平然としてそう。

「あーこっちは2人共良い寝顔してるね。もう写真は撮ったの?」

「ふふつ、それはもうバツチリ！」

にとりは桜の木に寄りかかって眠る、ユウキさんと霊夢さんの寝顔を眺めた。

ユウキさんの寝顔は散々みてきたけど、あれは布団で眠っていた時ばかり、しかも傷を直す為の眠り。

こんな平和な状況での寝顔はあまり見た事がない。だからすごく貴重。

「それにしても意外だったね。彼も霊夢もこのお酒をほぼ飲み干せると思わなかったんだけど」

「私もそれは同感。1本が限界だと思ったのに、4本半も空けるとは意外ね」

2人共それなりにお酒に強いけど、ここまで飲むとは思わなかった。

当初の予定では、早々に酔い潰れたユウキさんを……げふんげふん。

あのメイドもいたし、そんな隙が出来ると思わなかったけどね。

「意外と言えば、今日の文はやけにテンション高かったね。何かあったの？」

「私？ んー、別に何もなかったわよ？」

でも、思い返してみると、にとりが言うように今日の私はハイテンションだった気がする。

「あー確かにはしやぎすたかも。そうねえ……宴会の雰囲気にあてられたのかも」

私は呑気に言っただけれど、宴会の雰囲気にあてられたと言う表現は、実は間違いじゃ

なかったと気付くのはもう少し後の話だった。

続く

第90話 「疑惑」

2回目の花見翌日。

「ようこそ、アリス、魔理沙」

「こんにちは、パチュリー」

「お邪魔するぜ、パチュリー」

私の図書館にアリスと魔理沙がやってきた。

呼んだのは私だけだね。

「わざわざここまでごめんなさいね。ちょっと外で話すのは危ない気がしたのよ」

「おいおい。用件を言わずに招待したかと思えば、随分物騒な物言いだな」

魔理沙が茶化すように言っただけ、私の顔つきを見て表情を改めた。

「あなたが呼んだのは、花見で感じた妖気の事ね？」

「なんだ。誰もかれも気にしてなさそうだったから、あれを感じたのは私だけかと思っただぜ」

アリスは最初からずっと真剣な表情をしている。

どうやら2人共、私と同じものを感じていたみたいね。

4日前と昨日の花見、その時に感じた妖気。

人妖入り乱れての宴会なら妖気を感じるのは当たり前。

でも、あの時に感じたのは明らかに異質な物だった。

それが気になった私は、独自に調査する為にアリスと魔理沙を呼んだ。

「普通なら私も気に留めなかったかもね。でも魔理沙、あれに気付いていたの私だけ

じゃなかったわよ？ レミイも美鈴も妹様ですら気付いていたみたいだし」

「えっ？ そうなのか!？」

恐らくは、文や慧音辺りは確実ね。後、西行寺幽々子も気付いているはず。

「気付いているのと実際に動くのは別よ。ま、うちは咲夜が動いているけど」

「そう言えばいなかったわね。ここまで案内してくれたのは美鈴だったわ」

「レミイと美鈴は静観、まあ咲夜が動くからつて2人は動かないみたいだけど。妹様は

気付いていてもよくわかってなさそうだったし」

何も分からないまま、下手に動いて事態が悪化するよりはその方がいいわ。

「で、博麗神社の方はどうだったのかしら？ 霊夢とユウキはもう動いている？」

魔理沙は博麗神社で2人の様子を見てから来てもらっている。

実のところ一番の気がかりはそれだったりする。

「あの2人は……二日酔いでダウンしてたぜ」

——ズルッ

思わず私とアリスは椅子から落ちかけた。

「な、何よそれ。何やってるのよあの2人は……」

「そう言えば、昨日2人共珍しく飲み過ぎてダウンしてたのもね。あれほどのお酒を大量に飲めばそりやあ二日酔いにもなるか。でもそっちの方がいいかもね」

「そうね。霊夢まで倒れてるのはちよつとあれだけど」

アリスは苦笑いを浮かべ、私もそれに同意した。

これでユウキは少なくとも今日一日は安静にしているはず。

「私が行った時には咲夜が世話してたから大丈夫だろ」

「……なるほど」

調査よりも看病優先させたわけね、咲夜。

となると、今日は咲夜もダメね。

「そう言えば魔理沙。あなたもユウキや霊夢と一緒にしこたま飲んだはずだけど、どうしてケロつとしてるのかしら？」

アリスが疑問に思うのも最もね。

昨日の早飲み大会で出たお酒、私もアリスもあの後飲んだけどとても強いお酒だった。

なのに魔理沙は平然と5本飲み干していた。

まあ、河童や美鈴の方が飲むの早かったけれどね。

「魔法でも使ったのかしら？ お酒が強くなる魔法なんて初耳だけど」

そもそもそんな魔法、ばかばかしくて作ろうとも思わない。

アリスも同じように首を振っている。

「ん？ いやあ〜……実は新しい魔法薬を試してたくてさ」

「魔法薬？」

魔法薬と聞いて私もアリスも首を傾げた。

「この前みたいなのはならないように、私自身でちゃんと実験したんだ。お酒に強くなる魔法薬だけ」

「……呆れた。そんなしようもない研究してたなんて」

全く、アリスが呆れるのも無理はないわね。

この前の妖怪や妖精に効く酒とか、魔理沙っておかしなものばかり作るわね。

「そ、それより話を本題に戻そうぜ！」

話を逸らすのが下手だけど、確かに本題からそれすぎたししようがないわね。

各々あの妖気についての心当たり、もしくは宴会での違和感について話をする事、それが今日の本題。

「はあ、なら私が気付いた事を話すわね。初めての花見の時のお酒、最初に違和感があったのはあれね」

「やっぱりアリスも気になったのはそこね。」

「えっ？ 何かおかしいことあったか？ 別にいつも通りお酒がたくさんでて皆で飲んだだけだろ？」

「魔理沙は気付いていないようだけど、問題はそこじゃないのよ。」

「宴会でお酒が出るのは当たり前。でも、みんながみんな自前のお酒を持ってきた。変だと思わない？ 少なくとも私は変だと思つたわ。あなた達はどう思つたのかを知りたかつたのも理由の一つ」

「幻想郷で比較的日子が浅い私達よりも、魔理沙やアリスの方が詳しい。」

「だから私が違和感に思つても、ここでは当たり前のことがあるかもしれない。でも、アリスがそう感じたのなら、当たり前で事ね」

「あなたに言つてない事あつたけれど、私だつて幻想郷はそう長くはないわよ？ 少なくとも、魔理沙の方が長いわね」

「えっ？ そうなの？」

「これには驚いたわ。流石にアリスはこの生まれじやないとは思つていた。」

でも、霊夢や魔理沙達にも馴染んでたし、昔からの知り合いのように接していたから

てつきり長いもののばかり思っていた。

「あーアリスは魔界出身だからな、私や霊夢はその頃からの付き合いだぜ」

「魔界とは、そりやまたとんでもない所出身ね」

私も行った事はないし、興味もない場所だけだね。

「わ、私の事はどうでもいいでしょ！　ともかく、そう言うわけだから幻想郷の昔馴染みって括りには私を入れない方がいいわよ」

これはちよつと予想外だったかしら。

魔法使いであるアリスは見た目以上に、結構長い間ここにいると思ってたのに。

「じゃあ……あまりアテにならないかもしれないけど、魔理沙。あんたはどうなの？」

これまでの宴会とこの前の花見で違和感とかはなかった？」

「あ、あまりアテにならないってのはあんまりじゃないか？」

本命アリスで、保険的な意味で魔理沙を呼んだのよね。

それを察したのか、アリスがくすくす笑っている。

「まあいいか。確かにお酒の件か。大抵霊夢や他のみんなが酒を用意するけど、確かに自前のお酒を用意してくるなんて事はなかったな。幽香に酒を作る趣味があったなんて知らなかったぜ」

私達が起こした異変の宴会の時も、紅魔館にあったお酒を用意した。

けれども、花見の時にはわざわざ咲夜や美鈴が趣味で作ったお酒を持っていった。別にレミイが言い出したわけでもないし、誰かに言われたわけでもない。

そして、もしも、もしも私がお酒を作る趣味があれば、持っていたかもしれないわね。

「じゃあ、酒以外で私になった事を言うわね。昨日の宴会ではつきり気付いたんだけど、みんなのテンションがおかしかったわ」

「テンションが？ どういう事？」

「久々の宴会でみんな陽気に盛り上がってたけど、それだけじゃないのか？」

「違うわね。あの天狗もだけど、数人なんだか様子がおかしかったのがいたわ」

昨日、私は花見を楽しみつつ、他の皆の様子を窺っていた。

そうすると酒の進み方に反して、皆のテンションが上がり過ぎている事に気付いた。

「あの早飲み大会だって、花見が始まってまだ間もない頃に行つたでしょ。それにうちこのこあや美鈴、あの時までお酒あまり飲んでなかったのよ？」

「それなのに異様にテンション高かったわけか。でも、それいつもの事じゃないのか？」

「そう言われれば返す言葉もないわね。こあは特にユウキが絡むとそうなるけど、昨日は絡んでなかったしね」

絡む前に早飲み大会で早々にダウンしてしまつただけだ。

「うーん、どうもイマイチ確信に欠けるな。確かに妖気は気になるけど、ちよつとおおげさな気もするぜ」

「何言ってるのよ。普通ならアンタか霊夢が動きそうなモノでしょ」

アリスの言葉に耳がピクつとなつた気がした。

「異変、そう呼ぶにはまだ弱いとは私もレミイも咲夜も思ってるわ。でもだからって静観はしないわ」

誰かが明確に動いた異変ならともかく、今回ののはちよつと気味が悪い。

手遅れになる前に早急に動く。

「わ、私だつて今日辺り動こうとしたんだぜ！」

「どうだか。パチュリーもはつきりと言つた方が早いんじゃない？」

「あら、何の事かしら？」

しらばつくてみるけど、アリスにはもうとつくにお見通しよね。

と言うより、咲夜が動いている以上、バレバレなのは分かつてたし。

「最低限ただの異変かどうか確かめて、あわよくば咲夜に解決させよう。そうすれば、ユウキが無茶してしまう事はない……でしょ？」

やっぱり、バレバレね。

「なーんだ。惚れた男の為に要らぬ苦勞を背負うとしてるってわけか、紅魔館も相変わ

「らずユウキには甘いぜ」

くつくつくつくと笑う魔理沙の頭に魔導書をぶちかましたくなつたけど、ムキになつても仕方ない。

「そうよ、悪い？ 私もレミイも咲夜も妹様も美鈴も、ここにいる皆もうあんな思いはしたくないのよ」

次にユウキが無茶をすれば、今度こそ死んでしまう。

現にこの前の異変だつて、妹紅が持つてきてくれた薬が無ければ死んでいた。

私もアリスも彼に何も出来ずにいた、あの無力感。

あれだけは二度と味わいたくない。

アリスもあの時の事を思い出したようで、暗く沈んでしまった。

何となくわかつてたけど、この子も少なからずユウキの事を……

「……悪い。ちよつと調子に乗り過ぎた」

魔理沙もバツが悪い顔をして謝ってきた。

考えてみれば、異変の時もその後の治療も何も出来ず、無力感に苛まれていたのは魔理沙も同じだったわね。

「ともかく、そう言うわけよ。ユウキが二日酔いでダウンしてるのは返つて好都合ね」

「でも、霊夢もダウンしちゃつて、咲夜が看病してるようじゃ、意味なくないかしら？」

「うぐつ……」

アリスの言う通り、いくらユウキがダウンしたからって異変解決に動きそうなのが2名も動けなくなったら意味がないじゃない。

ここは私やアリスが動くよりも一応人間である魔理沙に動いてもらうのがいいわね。アリスと領き合つてじつと魔理沙を見つめた。

「な、なんだよ2人してその目は？ 分かつてるつて！ 私だつてあの妖気が気にならないわけじゃないんだし。それに霊夢もユウキも動けない今、私がやらなきゃ誰がやる、だぜ」

魔理沙はそう言うと、箒に跨り図書館を後にした。

どこをどう探すのかは聞いていないし、指示も出していないのだけど、アテがあるのかしら？

「行っちゃったわね。で、あなたはこれからどうするの？」

「本当は咲夜に様子を見させてから考えようと思つただけど、予定変更ね。まあ魔理沙の様子を見させてもらうわ。あなたはどうするの、アリス？」

「そうね。なぜかしら、今回の異変あの時よりも緊張感、と言うか切迫した事態にはならない気がするのよね」

それは私も思っていた。怪しい妖気は感じてても特に害意と言うか敵意を感じないし、

幻想郷の危機という感覚がしない。

勘だよりなんて霊夢じゃないのだけどね。

「それでも万が一って事があるから、あなたや魔理沙を呼んだのだけど」

「心配性ね、パチュリーは。でも、動いているのは咲夜や魔理沙以外にもいそうだし。私はしばらく様子見しようかな」

何か会ったの時の為にね。と言い残してアリスも去って行った。

「さてと、私はまずは……ここあに二日酔いの薬でも作りましょうか」

魔法薬は専門じゃないのに、なんで悪魔が二日酔いなんてしちゃうのかしら。

続く

第91話 「悪寒」

「うーん、やっぱり、おかしい」

2 回目の花見の記事を書いている途中、私は妙な寒気に襲われた。

「んん？ どしたの文？ 顔色悪いよ？」

同じく新聞を書いていたはたてが神妙な顔をしてくる。

「はたて、昨日の花見何か妙な胸騒ぎしなかった？」

「あんたも感じたんだ。ものすごく嫌な感じだったわ。変な妖気も感じたし」

「最初はあれだけ人妖が集まっていれば、と思つてたけど、今考えるとあそこにいた誰の妖気でもなかったわ」

一度目の花見の時も妙な感じしたけど、昨日はそれが更に増した感じがする。

それもこう、触れたくない部分に触れてくる嫌な感じ。

「そう言えば気付いてた？ にとり、割と早めに帰つてたよ」

「えっ？ そうなの!? 気付かなかった」

言われてみれば、早飲み大会の時はいたのにそれからしばらくして見かけなかった気がする。

にとりに限らずこの連中は宴会の途中で帰るなんて、よほどの事がないとありえない。

嫌な予感、的中しないと良いけれど。

「よしつ、ちよつと行つてくるわ」

「行くつて、にとりの所？ あ、言わなくてもいいわ、彼のところもでしょ？」

「……どうして分かつたのよ」

「あんたの顔見ればすぐに分かるわよ。ユウキ君によろしくねー、ついでに霊夢にも」

そんなに私分かりやすい顔してたのかしら。

はたてが言うように、私はにとりの住処と博麗神社に行くつもりなのは間違いないか。

でも、なんか納得いかない。

そうして、私はにとりの家へとやってきた。

ここに来ると油臭くて、変な音が外まで響いてくるのは相変わらずね。

今回は何を作つてるのかしら？

「にとり〜？ 入るわよ〜？」

「あー今ちよつと立てこんでるけどどうぞぞー」

家に入ると、変な機械に囲まれたにとりが何かを作っている最中だった。

「やあ、文。今日は一体どしたの？ カメラの調子でも悪くなった？」

「そんなわけないでしょ。ちよつと昨日の事で聞きたい事があつたのよ。なんで宴会の途中でいなくなったの？」

私がそう聞くととりはバツが悪い顔をした。

これはやっぱり、何かあるわね。

「一応気付かれないように、こつそりといなくなつたつもりだつたんだけどなあ」

「はたてが思いつきり気付いてたわよ。でも一体どうしたのよ。具合が悪くなつたわけでもなさそうだし」

「うーん、うまく説明出来ないんだけど、あの場にいるのがちよつと、怖くなつた？」

いや、聞いているの私なのに、頭に？マークを浮かべられてもね。

「とにかく、なんとなく嫌な予感したから早めに戻つて来たんだよ。ちよつと制作意欲が湧いたのもあるけど」

「嫌な予感、ね。そんな博麗の巫女じゃあるまいし。で、制作意欲が湧いたつて言うのが今作つてる奴なの？」

にとりがさつきまで弄っていた物を見てみる。

見た感じ作り始めたばかりで、何が出来るのかさっぱり分からない。

「ユウキ君に元いた世界の機械の事色々聞いた時に、ちよつと閃いたものなんだよ」

そう言えば、にとりは熱心にユウキさんに元いた場所の話聞いてたわね。

「でもユウキさんの元いた学園都市って、幻想郷の外の世界よりもものすごく発展した場所なんですよ。いくらにとりでも作れるの?」

「ちつちつちつ、この私を舐めてもらっちゃー困るよ。河童の頭脳は幻想郷一!」

にとりは河童たちの中でも頭はいいわね。

成功より失敗の方が多いけど。

「で、その幻想郷一の頭脳をもつてして、作つてみたのがあのガラクタ達?」

私が指さしたのは、部屋の隅に置かれている作りは新しいけど明らかに失敗作と思わしきガラクタの山。

「あ、あれはガラクタじゃないよ。ちゃんと使い道があるから失敗作じゃないよ!」

「使い道って例えばどんな?」

「……一部資源の再利用? ほら、文も聞いた事あるでしょ、外の世界風に言つてリサイクルでエコなの!」

「はあ、ユウキさんがそれ聞いたらなんて言うかしら」

「……ここがゴミ屋敷になる前に、彼にリサイクルとエコについてにとりにしつかり説明して貰つた方がいいかも。」

「話を戻すけど、昨日とこの前の花見で感じた変な妖気、あれに覚えある？」

「覚えがない……と言えばウソになるんだらうけど、あんまり思い出したくないなあ」
にとりが唸るのも無理はない。

私だって心当たりがないわけじゃない。

でも、認めたくないのよねー

「そう。それだけ聞ければ十分よ。あとは霊夢に忠告すればいいんだし」

「おりよ。珍しいね。文が霊夢に忠告だなんて」

「……私にとりの予感が正しかったら、結構面倒な事になるかもしれないでしょ」

「それは、言ってる」

出来れば正しくない事を祈ってるけどね。

妖怪の山を後にして、博麗神社へとやってきた。

途中、人形遣いのアリスが神社から飛んでいくのが見えた。

彼女も今回の事で、色々動いているのかもしれない。

そして、神社に降り立った時、私は珍しい光景を目にした。

「あれ？　なんであなたが境内の掃除してるんですか？」

いつもなら誰もいないか、霊夢かユウキさんがいる境内に紅魔館のメイド長がいた。

それも箒を手を持って掃除をしていた。

「あら、アリスが来たと思っただら次はあなたなの。今日は客が多いわね。霊夢に用事？ それともユウキさん？」

「強いて言えば霊夢さんですね。ユウキさんにも会いに来ましたけど。お二人とも中ですか？」

そう聞くとメイド長は呆れたように溜息をついた。

「あれ？ どうしたんですか？」

「……2人共、昨日の花見で飲み過ぎたみたいで、二日酔いで寝込んでるわよ」

——ズゴツ

思わずずっこけてしまった。

確かに昨日は早飲み大会で思いつき飲みまくっていたけれど、でも二日酔いって……

「こけてるけど、原因の一端はあなたにあるのよ。早飲み大会に半強制的に参加させたから」

「あ、あははは……」

メイド長に睨まれ、思わず視線をそらす。

魔理沙が主導で開いた早飲み大会。2人を強引に誘ったのは確かに私だったわね。

「霊夢もユウキさんも一応人間なのだから、あなた達妖怪と同じ酒の量の飲めるわけないでしょ」

魔理沙はどうやら人外認定のようで。

それにしても、一応つてつけるのね。

人間離れはしてる2人だけど、一応人間なものね。

「それで、あなたがここで掃除してるのとどういいう関係が？」

もうおおよそ分かりきった事だけど、聞いてみる。

「最初は、宴会で感じた妖気の事で話を聞きにきたのよ。でも、2人共ヒドイ顔で寝込んでたから、仕方なく看病してるのよ」

あ、やっぱり。

「……本当に仕方なくですか？」

「訂正するわ。進んで看病したのよ。彼は断っていたけれど、ほっとけるわけないでしょ？ 霊夢はついでよ」

「そ、そこまではつきり言いますか」

うわあ、藪蛇だったなあ。

「こどもユウキさんの看病したいからここにいると言いきつちやうとは、しかも霊夢はついでとまで言つちやった。」

「それで、あなたは一体何の用で来たの？　ただ遊びにきた風には見えなかったけど？

用件は私が窺いますわ」

「いえいえ、大事な用件ですから直接ユウキさんに言いに行きますよ。掃除の邪魔はしませんから、どうぞごゆっくり」

彼の元へ行こうとした瞬間、私は鳥居の下にいた。

どうやらメイド長が時間を止めて、私をここへ移動したようね。

「そうね、掃除の途中だったわ。じゃあ、遠慮なく続けさせてもらおうね」

「あはは、あなたは掃除、私は用事を済ませるだけですよ？」

「ええ、済ませちゃいましょうか」

言うが早いか、メイド長は懐からナイフを、私は葉団扇を取り出した。

ユウキさんとやって以来、久々の弾幕ごっこ。

とつと勝ってユウキさんの所に行きますか。

・
・
・

「はい、私の勝ち。あなたは用件を話してとつとと帰る事ね」

今日3人目の来訪者の文を弾幕ごっこで返り討ちにした。

一人目の来訪者魔理沙は事情を話すとお大事にと伝言を残して去って行って、二人目のアリスは魔理沙から話を聞いてただ様子を見に来ただけのに、このブン屋はしつこいわね。

「うう〜……これは予想外の展開です」

「大体、用件があるのは霊夢の方と自分で言っただでしように」

文の事だから、寝込みを襲うか寝顔を写真に収める気だったわね。

……いつそ撮らせて後でもらう手もあつたわね。

「分かりましたよ。今日は引きさがります」

「あら、意外といさぎよいのね。いつもこうだといいのだけどね」

文は未練がましくユウキさんが寝ている方へ目を向けていたけど、気持ちを切り替えて私に向き直った。

それはさつきまでのおちやらけた雰囲気ではなかった。

「では霊夢さんに伝言を、昨日とその前の宴会で感じた妖気。私やにとりの勘が正しければ、非常に厄介な事になるかもしれないので、早めに対処を。と伝えてください」

不吉な事を言った文の目は真剣だった。

「厄介な事って、西行妖みたいな危ない奴が異変を起こそうとでも?」

「あーいえ、語弊がありました。厄介なのは厄介ですけど、そう深刻な厄介さではないで

すね。どちらかと言えば私達側で厄介ですけど」

「? どういう事よ?」

「つまりですね。あの妖気は恐らく異変の前触れだと思います。もしくはもう始まっている異変かと」

文がこうまで言うのだから、やはり私やお嬢様達を感じたのは異変だったのね。

「そう。とりあえず異変だつて事は霊夢に言つておくわ。気付いているのかもしれないけれどね。でも、あなたがわざわざ忠告に来るなんて珍しいわね」

異変となれば格好のネタになるのに。

まあ、この前のように幻想郷滅亡の危機レベルの異変となれば話は別でしょうけど。

文の話しぶりからして、そこまでの事ではなさそうね。

だからこそ、最低限の忠告だけしにきたのかもしれない。

「……あのスキマのせいだ、前回の時は私何も出来ませんでしたからね。だから今回はせめて最低限はしようかと」

「解決の糸口までは教えないのね?」

「糸口はあるようではないですよ。それにこの忠告だつて、私のただの勘ですから。本当は異変でもなんでもないかもしれないし」

そう言うけれど、多分これは異変。

レミリアお嬢様やパチュリー様も感じたのだもの。

でも、西行妖の時見たく、危険な感じがしないのは確かね。

「では、私はこれで、お大事にと伝えてくださいね。あ、ユウキさんだけでもいいですよ？」

「はいはい。ちゃんと霊夢にも伝えておくわ」

こうして、文は帰って行つた。

文が来た理由は忠告以外にもあるのは分かっている。

霊夢に暗に発破をかけたのね。

前回の時見たく、もたもたして取り返しをつかない事になる前に、ユウキさんに危害が及ぶ前にどうにかしろ、と。

それについては私も同意見。

だからこそ真つ先にここにきたのだし。

最も、まさか二日酔いの世話をする事になるとは思わなつたわ。

「さてと、そろそろ食事の用意をしましょうか。2人共まだ寝込んでいるでしょうけれど」

私は2人の様子を見る為に、神社へと戻って行つた。

しかし、まさか危惧した翌日にユウキさんが異変の元凶と戦う事になるとは思つても

みなかつたわ。

続く

第92話 「スペルカード」

一昨日は散々飲み明かし、昨日人生初となる二日酔いを経験してしまった。

咲夜が来て看病してくれたから助かったけど、不覚にも程があるな。

「御馳走様。うん、体調はぼっちりね。それじゃ私は異変調査にいつてくるわね」

霊夢は異変調査のために朝食を終えると早々に出かける支度をした。

花見の時から日に日に強くなる謎の妖気の調査。

本当は昨日いく予定だったけど、霊夢も俺と同じく二日酔いでダウンしたため今日からする事になった。

でも、今回の異変に関しては、紅霧の時や西行妖の時とは違い深刻なものを感じてない。

それでも異変はすぐに解決しなきや、と霊夢はやる気満々だ。

「なあ、やっぱり俺も一緒に行くこうか？」

「ダメー！ 異変終わるまでユウキさんは絶対外出禁止！」

と厳しい口調で霊夢に言われてしまった。

どうも俺が異変の度に無茶して死にかけるから、だそうだ。

「そんなに心配しなくても妖気自体に危険は感じないし、私の勘でもあまり深刻な感じしないから私1人で十分よ」

とまで言われてしまい、俺は結局お留守番になった。

寺子屋に行くくらいならいいと思うけど、前回は寺子屋の帰り道でリリーと遭遇してあんなったんだよなあ。

「それじゃいつてくわね。こんな何がしたいのか訳分からない異変、すぐに解決させてくるわ」

そう言つて霊夢は飛んで行つた。

霊夢にあそこまで言われたんじや、黙つて留守番しているしかないか。

今回は前回と違つて嫌な予感しないしな。

それに……こつちから探す必要ないかもしれないし。

「とりあえず、掃除と洗濯するか」

洗濯は最初各々でやっていたけど、いつの間にか手が空いている方がやるようになってた。

女の子の服や下着を洗うのには抵抗あつたけど、それは霊夢も同じだ。

でも、それを言うとかえつて意識しちゃうから何も言わずにやっていたら慣れてしまった。

掃除も洗濯も終えて、一休みしていると空から誰かが飛んでくるのが見えた。まあ、あんなに高速で飛んでくる奴なんて一人しかいないか。

「ユーウーキーサーン！」

やっぱり文だったか。昨日も来たけどおっぱらったと、咲夜に聞いた。

だから今日もまた来たのだろう。

それにしても、両手をひろげてこっちに飛んでくる文。

何がしたいのか大体予想付くから御盆でも投げつけようかと思った、その時。

「あやややっ!？」

突然文の周りにいくつもナイフが現れた。

文は咄嗟に体を捻りなんとかかわしたが、バランスを崩してあのままじゃ地面に頭から突っ込みそうだ。

「……しようがない」

誰が何をしたかは分かるけど、あのまま頭から地面にダイブは流石に痛かろうと思いい、文の力を使い空中で抱きとめた。

「大丈夫か？」

「は、はい。ありがとうございます……」

文にしては珍しくお淑やかに答えたな。声も小さいし、顔も少し赤い。

あ、お姫様だっこしてるからか。

「ちよつと、咲夜く大失敗じゃないの！」

「申し訳ございません、お嬢様。逆効果でした」

「いいなあ〜」

「美鈴も妹様も心底羨ましそうね」

「そういうパチュリーも羨ましそうな目をしてるじゃない」

案の定、レミリア達が現れた。

文が俺に突撃するのが見えて、咲夜がナイフを投げたようだ。

ちなみに上からレミリア、咲夜、美鈴とフラン、パチュリー、アリスの順だ。

紅魔館組＋アリスなんて珍しいな。

—カシャ

「へっへー、こりや面白い写真が取れたぜ」

シャッター音がして振り向くと、魔理沙が文のカメラで写真を撮りまくっていた。

「よっ、何やってるんだ魔理沙？」

「よお。見て分かるだろ？ 文のこんな姿貴重だからな。せっかくだから自分のカメラ

に収めてやろうと思ってるさ」

写真を取られているにも関わらず、文は未だに固まっていた。

「おーい、文？ 大丈夫か？」

「……はっ!? あ、はい。大丈夫……って、魔理沙さん何撮ってるんですか!？」

頬をペチペチ叩いてようやく正気に戻り、ここでようやく魔理沙に撮られている事に気付いた。

「何って、お前の好きなスクープをお前のカメラで撮ってるんだぜ」

「返して下さい！ 全く飛んだ不覚ですよ」

天狗なのに落ちかけたのが不覚なのか、恥ずかしい写真を撮られたのが不覚なのか。どっちもだろうな。

「こんにちは。相変わらずあなたの周りは賑やかね」

「よお、アリス。俺に言われてもな」

アリスが呆れかえってるけど、俺のせいじゃない！ と思いたい……いや、思わせてくれ。

「咲夜、昨日はありがとな。おかげさまで今日は絶好調だ」

「それはよくわかりました。さつきからずっと見ていましたので、よく分かります」

満面の笑みの女性って、時にどうしてこうも怖くなるんだろうなあ……

「そ、そうか。で、文はともかく、みんな今日はどうした？ 魔理沙、霊夢なら出かけて

るぞっ。」

「私はともかくって……」

文は特に用事もなくフラツときた感じだしな。

「昨日一日中色々な所行つたけど、イマイチ手ごたえなくて霊夢に付いて行こうと思つたんだけど。こつちの方が面白そうだな」

「こつちの方？」

魔理沙はこつちを見て面白そうに言うけど、俺は今日留守番なんだけどな。

「で、アリスはどうしたんだ？ レミリア達と一緒になんて珍しいじゃないか」

「私も魔理沙と同じね。何だか面白そうだから来たといった所よ」

だから何が面白そうなんだ？

「私達の用件は2つよ。1つ、昨日咲夜を介して霊夢に頼まれたのよ。あなたが異変に巻き込まれないように見張っててとね」

「わあく……ソレハゴクロウサマ」

わざわざレミリア達に言うかな。

しかもレミリアもレミリアで、紅魔館総出で見張りにきたし。

「ふふっ、それはただお兄ちゃんに会いに来る為の口実だよ」

「フラン!？」

「本当は私だけで来るつもりだったのに、私も行くと次々言い出して結局みんなで来る事になったのよ。あ、言い出したのはレミリアお嬢様ね」

「咲夜まで……」

レミリアはさつきまで威厳たっぷりだったのに、フランと咲夜に暴露され見る見る顔を赤くして俯いていく。

こつちの方がレミリアには似合ってるな。

「ははっ、そうか。留守番とはいえやる事なくて退屈してたんだ。ありがとな、レミリア」

「………っ！ な、撫でなくていいわよー」

俯くレミリアをつい撫でてしまった。

最初は気持ちよさそうに目を細めたが、すぐにハツとなり俺から離れた。

出会った頃は貫録あつて姉らしさが強かったのに、最近は大ちゃん達と変わらない表情する事多くなつたな。

で、背後から殺気に似た視線を感じるの、もはや御約束か？

「ジューー」

「口に出してまで睨むなって、フラン」

フランの頭も撫でる。こうしてると次に羨ましそうな視線が咲夜と美鈴と上海

……つて上海もかよ！

「じゃあ、代わりにアリスを撫でよう」

「ちよつ、なんで私なのよ!? 上海にしなさいよ! つて上海も睨まないで!」

「そう言いつつも満更じゃなさそうだよな、アリス……つて、わわっ!」

余計な事を言つた魔理沙が人形にチクチク刺されてる。

自業自得、とは言え半分以上は俺のせいだけだな。

「はいはい、じゃれるのもそこまでにしなさいよ。話が進まないじゃない」

パチュリーが不機嫌そうに手を叩いて、その場を纏めた。

「どうやら彼女は彼女で俺に用事があるみたいだな。あれ?」

「パチュリー、こあは来てないのか?」

「あの子は仕事よ。昨日一日寝こんだから、今日はしっかり働いてもらわないと」

こあは俺や霊夢と同じく、昨日は二日酔いでダウンしてたらしい。

「悪魔も二日酔いするんだな。つてか本当に悪魔なのか?」

「悪魔のコスプレした何かを呼んじやったかもね……」

深く溜息をつく。パチュリーに少し同情した。

てかパチュリーもコスプレつて単語知っていたのか、意外とここでは浸透してる言葉なのかな。

「さ、無駄話はここまでにしましょ。さつきレミイが言ったもう1つの用事がこれよ」

そう言っつてパチュリィが手渡したのは、ラミネート加工がされたかのような小さなカードが十数枚だ。

手にとつて見てすぐに分かったのは、ナイフと同じく幻想支配の力に反応する水晶石で作られたものだと言う事だ。

「これは一体なんだ？」

「何つてあなた専用のスペルカードよ？ いい加減自分のスペルカードを持った方がいいでしょ？」

スペルカードか。確かにみんな弾幕ごつこの時はスペルカードをとつておきとして使っている。

美琴のレールガンや、軍覇のすごいパンチみたいな必殺技だな。

しかし、俺にそんなものはない。

あるとすれば、能力停止？ その幻想を支配する！ と言つてパンチするわけでもなく、視て支配して……地味すぎる。

考えないようにはしてたけど、地味だなあ。

「何を考えているか簡単に分かるけど、説明を続けるわね。手にとつて分かったと思うけど、これはあのナイフと同じ水晶を使っているの。まずは幻想支配で私を視て、その

カードを手にとってロイヤルフレアを使ってみなさい」

言われた通りパチュリーを視て、空に向けてロイヤルフレアを使った。

「日符・ロイヤルフレア」 うお？ カードが赤く輝いた？」

スペルカードを使った途端、カードが赤く光り表面に模様が浮かび上がった。

「それがそのカードの効力。誰のだろうと使ったスペカが反映されるのよ」

「なるほど。で、これが一体何なんだ？ そもそもこんなカードみんな使ってたか？」

今まで何度か弾幕ごっこを見てきたけど、皆スペルカードを使う時名前は叫んでもこんなカードは掲げてなかったはず。

「一応私達はみんな持つてるのよ。カード自体はただの紙だったり、カードじゃなくて石だったりね」

パチュリーが懐から取り出したのは、ロイヤルフレアのスペルカード。

よく見ると俺が使ったのと同じ絵柄が描かれていた。

「おっと、そこから先は私が説明するぜ！」

そう言つて魔理沙も何枚かスペルカードを取り出した。

それぞれ絵柄があり、何となくマスタースパークやブレージングスターだと言うのが分かる。

「こーやって次に使うスペルカードを掲げて使用宣言するのが普通だ。でも必ずしもこ

れを使う必要はない。要は相手に自分が今からなんのスペルカードを使うか分らせればいいってわけだぜ」

「へえ、そういうものか。でもだったら俺が専用のスペルカードを持つ意味が分からないだけだ？」

宣言するだけなら、カードは必要ない。

わざわざ作ってくれたのはありがたいけど、必要性を感じないな。

「誰もが持っているものだしね。それにただの紙を元にしてるとはいえ、大抵自分の魔力なり妖力なりを籠めて作ってるのよ」

「チルノのはレティが作り方教えて一緒に作ってたな。それに弾幕ごっこは美しさを競うものでもあるんだ。自分用にかっこいい名前のカード持っていた方がここでは自然だぜ」

そういうものか。郷に入っては郷に従えというしな。

「分かった。これで俺用のスペルカードを作ればいいんだな。といつても、俺自身できるのは幻想支配でのコピーと能力停止のみだぞ？」

「能力停止とは言え、停止するのは妖力とかですよね？　それで弾幕が撃てなくなるようになるんですし、それはそれであなただけの強力なオリジナルスペカじゃないですか」

文の言う通り、あれもあれで立派なスペカか。

「弾幕ごっこでの緊急回避用スペルカードとして作って見たらどうだ？」

魔理沙に進められ、カードを一枚手に取り能力停止を使う感じで力を籠める。

カードがうつすらと白く輝き始めたけど、まだ何か足りないな。

「忘れちゃいけないのは、スペカにはそれに相応しい派手でかつこいい名前が必要よ」

「名前、か。確かに名前はないな。能力停止！ っつても何かしまらないか」

不夜城レッドとか、スカーレットシユートとか、インパクトはあるよな。センスはと

もかく。

「ユウキ、今何か失礼な事考えなかったかしら？」

「いや、全然そんな事考えなかった事もないかもしれないかなとだけ言っておく」

「一体どつちなのよ！」

そう考えると、特に名前に意味はなさそうだよな。

あ、フランの「495年の波紋」は……考えないでおこう。

ともかく、弾幕の見た目から付けてるものもあるけど、俺のは撃たないよな。

それでも名前、名前、大抵みんなのスペカには、符というのが付いてるから、俺もそ

れに習ってみるか。

能力停止は名前が浮かばないので、先に別なの作ろう。

「うん、思いついた。【幻符・幻想支配モード文】！」

最初に幻想支配で人の力を使う時のスペルカードを作った。

文の力を身に纏うと、カードの色が銀色に輝いた。

これは俺が妖力を纏ったからこの色にカードが輝いたんだな。

うん、分かりやすい。

「あ、私ですか♪」

文はなぜか嬉しそうで、他の皆は複雑な顔をしている。

「あとは、これで【風符・風神一扇】よし、うまく行った」

さつきと同じように文のスペルカードを使うと、カードに模様が浮かび上がった。

そして、スペルカードの効果が見えると、模様が消えてしまった。

これは何度でも使い回せるって事か。

「前まではただ宣言してただけだけど、カードを使うとなんか気持ちいいな。ありがとう、パチュリー」

「ふふつ、どういたしまして。能力停止のカードはどうするの？」

「それも作りたいけど、名前がうまく浮かばないんだよね……」

「じゃあ私が付けてあげましょうか？」

なぜかレミリアが意気揚々とした顔で言ってくる。

「美鈴、咲夜。何か良い案ないかな？」

「ええと、申し訳ありませんけど、私は思い浮かびませんね」

「こういうのはやっぱり本人が決めるものじゃないかしら？」

「ちよつと、なんで私はスルーしたのよ！」

だってレミリアのネーミングセンスがねえ。

「咲夜も言ってるけど、自分で付けた方がいいわよ？ あなたの能力なんだし」

アリスにも言われ、仕方なく自分で考えてみる。

「うーん……」

「こういうのは頭に思い浮かんだ適当な単語でいいんですよ」

文はそう言うけど、その適当な単語すら浮かばないんだよな。

「じゃあ……【幻符・幻想支配モードエンド】」

「えっ、また私です、かー!？」

空を飛んでカメラを構えていた文に向けて、つい能力停止を使ってしまった。

文はそれほど高いところを飛んでいたわけじゃないけど、急に妖力を消されて頭から

落下した。

うん、さつきも文で使ったしこれでいいよな。

「よくないです！　よりにも寄って飛んでる時にやらなくてもいいじゃないですか！」
「あはは、悪い悪い。とにかくこれで俺のスペルカードは出来たな」

使う時に懐からカードを取り出して翳せばいいだけだ。

うん、何だかようやくこの弾幕ごっこを始めれるって気がする。

「おめでとう、ユウキ。それじゃ早速試してみましようか。相手は私がするわ」

「あ、お姉様ずるい！　私だつてやりたい！」

「私がお相手いたします」

「いや、ここは弾幕ごっこ熟練者の私が適任だぜ」

私も私もと次々に俺と弾幕ごっこをやりたいと言いつ出した。

「待て。どうしてそういう話になる？」

なんか大勢で来たと思つたらそう言う事かよ。

「ここにいる中で、ユウキと弾幕ごっこしてないの私だけでしょ。だから今回は私の番
よ」

「あら、私だつてユウキとはやった事ないわよ？」

「お嬢様、パチユリー様、私もです」

言われてみれば、文に魔理沙、アリス、美鈴、フランと弾幕ごっこだけじゃないけど
戦つた事あるな。

最も、アリスはナイフの訓練に付き合ってくれた程度だ。つてかこの流れに思いっきりデジャヴを感じるんだけど。

「だったら私も混ぜてもらってもいいかな？」

「っ!? 誰だ？」

不意にすぐ側で声がして振り向くと、そこには角を生やした幼女が瓢箪片手に立っていた。

さつきまで気配が全くしなかったのに、いつのまに？

でも、この子から感じる妖気は……

「誰!？」

レミリア達も初対面のようで、皆一斉に警戒した。

そんな中、文だけは恐怖一色に染めた青白い顔をしている。

「あ、あわわっ……あなたは、やはりここ最近感じていた妖気は、やはり!」

「やつほー、久しぶり文。でも残りは初めましての人ばかりだね」

少女は瓢箪をぐいっとひと飲みした後、不敵な笑みと共にこう叫んだ。

「やあやあ、我こそは伊吹萃香。幻想郷に舞い戻ってきた、鬼だ!」

「「なっ!?!」」

鬼と名乗った萃香は張りのある声で叫び、それを聞いた魔理沙やレミリア達は驚い

た。

「あ、よろしく。俺の名はユウキ、外人だ」

—ズルツ！

ん？ 自己紹介してきたから俺も普通に自己紹介しただけなのに、なぜか萃香やレミリア達は一斉にこけた。

「何やってんだお前ら？」

「……あ、あはは、ユウキさん相変わらずマイペースですね」

「マイペースで済ませれる話じゃないでしょ」

美鈴が苦笑いを浮かべ、アリスが半ば呆れてるけど、俺そんなに変な事言ったかな？
「う、うーん。別に怖がらせたりとかそう言うつもりはなかったんだけど、こういうリアクションされるとやりにくいな」

萃香も拍子抜けしたような顔をしている。

だから、なんでそんな反応になるんだ？

「まあいいさ。今日はお前さんに挑戦しにやってきましたんだ」

萃香は俺を指さすと、それまでの陽気な表情を一変させた。

急に雰囲気が変わり真顔になった。

「最初に言っておく。私は、お前のような大うそつきは……大嫌いだ」

そうやって睨みつける萃香からは、激しい敵意のようなものを感じた。

続く

第93話 「自分」

突然現れた鬼、伊吹萃香。

身なりは小さいが、頭に生えた立派な角と秘めたる力は鬼そのもの。

私は西洋の鬼である吸血鬼だけど、これが東洋の鬼なのね。思っていたよりは小さいわね。

そんな鬼がいきなりユウキの前に現れた。

スキマ妖怪みたいな空間移動でも、咲夜みたいに時間停止したわけでもなくいきなり現れた。

そして、驚く暇もなくユウキを見て敵意を隠そうともせず言い放った言葉。

「最初に言っておく。私は、お前のような大うそつきは……大嫌いだ」

「「「!?」」」

いきなり現れた時以上に、その場の空気が強張った。

咲夜はナイフを取り出し、美鈴は拳を握り、パチユリーは魔導書を取り出した。

魔理沙は八卦炉を構え、アリスも人形達を呼びだした。

私とフランもすぐにグングーニルとレヴァーティンを出せる体制。

ただ、文は目を大きく見開いて驚いてるだけ。

で、言われた本人であるユウキはと言うと……

「ふくん、そっか」

——ズコッ

その場にいたユウキ以外全員、一斉にずっこけてしまったわ。

さつきも萃香が鬼だと分かったのに、彼は何も反応しなかった。

今回も敵意丸出しで嫌い発言したのに、警戒心も何もない。

どれほど危険な状況か彼が分からないはずはないのに。

「そ、それだけ!？」

思わず萃香も驚いた声をあげる。

流石に虚を突かれたようで、敵意がふつとんでしまってるわね。

「それだけでも何も、初対面の相手に嫌いです。って言われてもどう反応しろと?」

「いや、それはそうかもしれないけど……ああもう! なんなんだお前さんは!」

それには同感ね。

彼は鬼というのがどういうのか分かってないんじゃないのかしら?

天狗の文がここまで怖がるのだから、この萃香も相当な実力者なのに。

「あ、そうだ。萃香、聞きたい事あるんだけど?」

「ん？ 何？ お前さんを嘘つきといった理由かい？」

「いやそんな事じゃなくて、今回の異変……と言っているのか分からないけど、首謀者はお前だろ？」

「「っ!？」」

「これまた直球ストレートでせめてきたわね。」

私も萃香を見て、すぐに妖気の正体がわかったけど。

それにしても、嘘つきと呼んだ理由をそんな事扱いとはね……

「ぷっ……あはっ、あーっはっはっはっ！ いやあ、これは参ったねえ。いきなりそう斬り込んでくるかい？ こっちのペースを崩しておいて、すかさず自分のペースに引きずり込むなんて」

「だって、鬼は嘘が大嫌いなんだろ？ 書物にちゃんと書いてあったよ」

ユウキのあのすました顔、まさかここまでの展開は予想していたと言うの!？」

「あはははっ、いかにも。私の能力は『密と疎を操る程度の能力』物質だろうが精神的なものだろうが何でも集めたり散らしたり出来るのさ」

「なるほど。じゃあ一度目の花見の時、みんなが自前のお酒を持ってきたのも、2回目の時妙にテンションがおかしかったのも」

「そう。私の能力でやった事だよ。色々なお酒飲みたかったからね」

「で、今いきなり現れたのは自分自身を散らさせたのを、集めたからか。なんでもありだな」

「へっへっすごいでしょ」

私達吸血鬼も似たような物だけど、本当になんでもありね。

「だけど、それ以上に能力の説明を少し聞いただけで、そこまで言い当てれるユウキもなんでもありな気がするわ。」

「じゃあ最後に2つ、なんでこんな事をしたのか。ただ単に宴会がしかなかったわけじゃないだろ？ あともう1つ、なんでこの場に現れた？ 霊夢がいないからか？」

ユウキの疑問は私も思っていた事だった。

「今まで影も形もなかった異変の首謀者がこうして簡単に姿を現すなんて……ってそこまで深い異変じゃなかったのだけどね。」

「もう終わりが近いし、言ってもいいかな。異変を起こした理由は、お前さんの予想通りただ宴会がしかなかっただけさ」

「そう言いながら萃香はほとんど散ってしまった桜を見上げた。」

「今年は冬が長すぎて、春があつという間に終わったからね。花見も満足にできなかつた。だから、せめて宴会だけでも多くやろうと思つたんだよ。流星に毎日じゃアレだから3日おきに、つてね」

「あー……そりやお気づかいドーモ。んで、それだけじゃないだろ？」

「うん。でも、目的の大半はそつちかな。他の目的はそうなればいいかなー程度にしか思っでないよ」

嘘嫌いのこいつが言うのだから間違いはない、と思うのだけど。

どうにもしつくり来ないわね。

異変の犯人が自ら名乗り出て、その目的もペラペラ話すなんて、一体何がしたかったのか。

魔理沙達も同じようで、困惑した表情を浮かべている。

「ちよつと待った。他の目的って一体何なんだ？」

たまらず魔理沙が萃香に問いかけた。

「別に大した事じゃないよ。こう大勢で騒いでいれば、幻想郷に鬼が戻って来ないかなー、とね」

「サラリと飛んでもない事いいますね、萃香さん!？」

「ん？ あ、文。久しぶりだねー何百年ぶり？ それとも千年以上ぶり？ まあ元気そうで何よりだよー」

絶叫する文に陽気に手を振り答える萃香。

鬼と天狗の関係は分からないけど、何となく予想がつくわね。

「ちよつ、何百年つて！ あ、違いますからねユウキさん。確かに萃香さんとは会うのは
久々ですけど、そんな何百年もなんて……」

「そんな事で動転するなよ、文。お前が数千年程度生きてるなんて今更知つても驚かな
いって」

「ちよつ!!? 桁がおかしいですよ！ 私はまだそこまで生きてません！」

……おかしいわね。さつきまで緊迫して殺気立つた空気が、あつという間にふやけ
て桃色に変わってるわ。

「文が実はこの中で一番長生きしてるおばあちゃんだつてどうでもいい話は置いと
て」

「よくないです！ なんで私がおばあちゃん扱いなんですか!?!」

「2つ目の質問にも答えてもらえるかな？」

「無視ですか!?!」

文、哀れね。美鈴とフランが肩に手を置いて慰めてるのがまたシユール。

「2つ目は簡単だよ。博麗の巫女がこんなに早く動くとは思わなかったからね。それに
他にも私の妖気に気付いて動いているのが予想よりも多かつたから。下手に見つけら
れるより、自分からタイミング見計らった方がいいと思つたんだよ」

「ふーん、てつきり俺に用事があるから出てきたのかと思つたけど?」

「……本当に鋭いね」

また、空気が変わったわね。

「霊夢の勘が悪い方で当たりましたね。お嬢様、ここは私があの鬼を退治します」

「咲夜、動いてはダメよ。美鈴もフランもパチエもいいわね？」

「えっ？ お姉様どうして!？」

「彼がそれを望んでいないわ」

あの鬼はユウキに用があつて出てきた。

ならそれに私達が横やり入れるのを、彼はよしとしない。

さつき私をチラ見した目が、そう言っていたわ。

霊夢の心配は見事到的中しちやったようね。

勿論、大怪我しそうならすぐに止める。

「だからってレミリア、いいのかよ？」

「彼女は彼よりもはるかに強いのかよ？」

「いくらユウキさんでも無謀すぎます！」

案の定、魔理沙もアリスも文も反対してきた。

私だつて反対したいわよ。でも、さつきの彼の目は本気だった。

全く。鈍感なのか敏感なのか分からないわね。

いや、少なくとも、自分の事には鈍感なのだけだ。

「で、俺に何の用なんだ？」

「別に。ただちよつとお前さんに言いたい事があつて出てきたんだよ。そうしたら面白い話をしてたから乗ってみようかとね」

「俺用のスペルカードの話か。なんだ相手してくれるつてののか？」

「そうそう。幻想支配の力、ちよつと興味あるからね」

「俺の事嫌いなんだろ？」

「嫌いさ。でもそれとこれとは別問題だよ」

「分かった。ならやろうか」

「おいおい。ちよつと待てよ」

ユウキと鬼が対峙して、戦おうとした時、魔理沙がそれを止めた。

「何だよ魔理沙。今からいい所だつてのに」

「……萃香、私からも質問だ。ユウキを嘘つきといつたけど、あれはどういう意味だ？」

魔理沙、それを今聞いちゃうのね。

萃香がなぜ彼を嘘つきといつたのかは、大体予想がつく。

けど、それを明らかにするのがはたして良い事なのか、悪い事なのかは分からない。

なにせ、彼の運命は出会った時からずっと読めないのだから。

「どういうも何も、言った通りだよ？ 彼は嘘を突いている。あんた達に言う意味じゃないよ。彼は自分に嘘をついているんだよ」

それを聞いても、ユウキに動揺してる様子はない。

ただ無表情で聞いている。

「人間は嘘をつく。これは今も昔も変わってない。その吸血鬼はどうかしらないけど、私達鬼は嘘が嫌いだ。でもね、他人に対しての嘘なら、嫌いでもしようがないとも思えるさ。そうやって人間は生き延びてきたんだからね」

嫌いな物は嫌いでも割りきってる部分もあると言う事ね。

「でも、彼は違う。自分を騙して誤魔化して嘘を付いている。私はそういう人間は特に嫌いなんだよ」

「お兄ちゃんが自分に嘘をついてるって、何の嘘を付いてるって言うの？」

魔理沙もだけど、フランも少しイライラしてるわね。

それは咲夜やパチエ達も同じ。

私も鬼の言いたい事は分かるけど、イライラするのも事実。

「はあく……あんた達も本当は分かっているとと言うのに、わざわざ言葉にしないとダメなのが、甘いねえ」

「回りくどい言い方は止めて、とつとと要点を話さない」

黙って聞いているだけのつもりだったのに、イライラが募ってつい口を出してしまつたわ。

ん、この気配は……どうやら【彼女達】も聞き耳立ててるようね。

「あんたと文は特に気付いている事だろ？ ユウキは、自分に対して何の感情も持っていないんだよ」

「っ……」

やっぱりその事を突いてきたわね。

思わず握った拳に力が入る。

「元いた世界に、友達に、家族に、仲間に忘れられて捨てられてこんな所に飛ばされたのに、お前はその事を悲しまないし怒りもしない！ 幻想郷でこんなにお前を心から慕う友が増えたのに、喜ばない！」

萃香は感傷的に叫ぶけど、ユウキの表情には若干戸惑いが見えるだけ。

「感謝もして安堵もしてる。だけど、それは誰かの真似をしているだけだ！ 彼女達に心配をかけたくないから、誰かを真似しているだけだ！ 仮面をつけているだけだ！」

魔理沙とアリスの顔色が見る見る変わって行く。

咲夜も美鈴も文も辛そうに顔を歪めていく。

パチエとフランは萃香を睨みつけている。

叫ぶ度に萃香から敵意が溢れ出て来る。

日本の鬼は仲間意識が強い。

だからこそ、ユウキの事が許せないのかもしれない。

この鬼、ユウキが幻想郷にきてからずっと見ていたような口ぶりね。

「あんたは他人の事は心配して怒りもしたり悲しみもする。けど、自分にはそれを向けない。他人の事には本気になるのに、自分の事には本気にならない！ あんたには、自分というものがまるでない！ あるように自分と他人を誤魔化しているだけだ！」

そう。彼はいつだってそうだった。

フランの事を気にかけて、わざわざ紅霧の中を会いに来て、命がけで目を覚まさせてくれた。

春が来ない事を落ち込むリリーホワイトの為、白玉楼まで行き、妖夢と幽々子の為に西行妖に命をかけて挑み、救った。

それ以外にも、自分の為に行動しているようで、実は誰かの為だった事ばかり。でも、自分を軽んじている風には見せなかった。

だから、気付かなかった者も多い。

「……どうして」

自然と口から出た、疑問の言葉。

ここまで言われているのに、なぜユウキは何も言わないの？

なぜ、肯定も否定もしないの？

なぜ、動揺もしないの？

そんな彼がとても痛々しく見えて、悲しくなっていた。

「……なぜ、言い返さない？」

萃香も何も言わないユウキに問いかけた。

「ん〜言い返す事がないというか、強いて言うなら、萃香はなんでそこまで言うのかは気になるかな」

「な、に？」

淡々と話すユウキが、まるで機械のように見えた。

ここまで感情が消えた彼を見るのは、初めてね。

「萃香はずっと俺を見てきたようだけど、俺は萃香を知らないし。鬼の事だつてついでの前知ったばかりだ。見ず知らずの他人をそこまで言うなんて、優しい鬼だな。とは思うけどさ」

今までのユウキとは別人に見えた。

もう誤魔化すのはやめた、という事かしら？

「なにを、言っているんだ？」

言い負かしているはずの萃香が逆に動揺している。

ここまで言い放つたのに、ユウキにはまるで応えていない。

いや、届いていない？

「萃香の言いたい事は分かるけどさ。正直、俺は別に何か意識してって事はないぞ？

元いた場所であって、別に友達も家族も元からいなかっただし。こつち来て色々世話かけっぱなしなのは申し訳ないと思ってるし。その分何でも屋でもやっつて返そうとしてるだけだ」

これには私も目を丸くし、呆気に取られた。

いや、私だけじゃなく、萃香も咲夜達も驚きを隠せていない。

フランですら、ユウキの異常さに言葉を失っている。

その時だった。

「そこまでよー！」

突然上空から霊夢が現れ、ユウキと萃香の間に割って入るように降り立った。

さつきまで隠れて話を聞いていたのに、これ以上は我慢できなかつたようね。

「お、霊夢、早かつたな」

「ユウキさん、大丈夫……そうね。咲夜、レミリア、あんた達何突つ立ってたのよ。こういう事にならないようにする為にわざわざ呼んだって言うのに」

「ごめんなさいね。止められる空気じゃなかったのよ。でも、ナイスタイミングね。ええ、本当に」

ジト目で睨むと、霊夢はバツが悪そうな顔をしてすぐに萃香に向き直った。

「……博麗の巫女か、ちょうど良かったよ。このままだと私の方が変になりそうだったよ」

「ユウキさん。後は私に任せて、下がってて」

「霊夢、今から俺がやろうとしてただけど、もう少し待つててくれないか?」

「いいから、下がってなさい!」

「は、はい……」

あまりの迫力に、ユウキは思わず後退りした。

鬼気迫るとはまさにこれね。

今の霊夢は、鬼よりも鬼らしい迫力があつたわ。

「ユウキ、いいよ。この勝負は私の負けさ」

「はあ?」

萃香のいきなりの敗北宣言。

魔理沙達は呆気に取られてるけど、私には萃香の気持ちがあつた。

「完全な読み間違えだったよ。お前さんは嘘つきなんかじゃなかった。実際にはもつ

と、夕チが悪かった。あのまま戦つてもきつと私は負けてたね」

「えつ、ちよ、ええ〜？」

「……ひとまずは、良かった。と言つていいのかしら」

魔理沙とアリスは目を白黒させ、文はひとまずユウキと萃香の物理的な激突が無い事に安堵した。

「何がいったいどうなつてるの、美鈴？」

「私にも分かりません。咲夜さん、パチユリー様、分かります？」

「分かるわけではないですよ」

「萃香は言葉で負けたのよ。精神的ダメージとは少し違うけれどね」

パチエの言う通り、萃香は弾幕ごっこではなく、妖怪の弱点を突かれたと言つてもいい。

ユウキの異常さが、予想を越えていて理解が及ばず、逆に心を折られかけた。

現に萃香にあれば自分の心を見透かされたと言うのに、ユウキはケロつとしていゝる。いや、少しばかり困惑してるけど、それは勝負を挑まれたのに何もしいまま不戦勝して納得いかないと言つた顔ね。

「何が何だか分からないけど、まあ勝負は勝負つて事、なのかな。ま、いいか。霊夢、無茶するなよ」

「ユウキさんにだけは絶対に言われたくない言葉ね……で、萃香だっけ。あんたには色々言いたい事あるけど。それは後、まずは意味不明な異変、今ここで終わらせてあげるわ」

「はあ、色々と想定外すぎるけど、気持ち切り替えて、勝負だ、博麗の巫女！」
想定外なのは、私もよ萃香。

こんな運命、視れるはずもなかったわ。

なにはともあれ、鬼とユウキが正面衝突するのは回避出来たのは、重畳ね。
嫌な予感が未だに拭いきれてないのが、気掛かりだけど。

続く

第94話 「花見Ⅳ」

幻想郷に鬼が戻ってきた翌日。

私達は今年最後の花見をしていた。

萃香はもう宴会をしない代わりに、今日最後の花見がしたいと言ったからだ。

まあ私も花見は好きだし、宴会をしたがる萃香の気持ちは分からなくもなかったしな。

散りかけた桜は萃香が幻想郷中の花卉を集め、擬似的に満開にした。

今回は萃香が能力で集めたわけでもないのに、大勢集まった。

宴会なんて理由つけていつもやってるのに、物好きだよな私も含めて。

で、始まったわけだが、1人だけ納得がいかない顔をしているのがある。

「なんか釈然としないわ」

「まだそんな事言ってるのかよ、霊夢。いい加減切り替えろよ」

霊夢は昨日からずっとこの調子だ。

ユウキの為に早く異変を解決しようと思気揚々と出かけたなら、犯人の方からユウキに近付いてきた。

そして、霊夢が思っていたユウキの異常性を真つ向から言い放つたのに当の本人にはまるで応えず、逆に萃香の方が疲弊してしまった。

その後霊夢が萃香を退治して、異変は終わった。

それがどうにも納得出来ないのだろう。

私もなんかしつくり来ないぜ。

「あははは、そうそう細かい事気にしないで、ほら飲んで飲んで」

「原因の一端はあんたにあるんでしようが！」

異変の犯人である萃香は、もうかなり出来あがっていて霊夢の隣で豪快に酒を飲んでいる。

で、萃香の隣で死んだ魚のような目をしている文にとり、はたてはさつきから黙つたまんまだ。

「およ？　その3人も全然飲んでないじゃん。私が飲ませてあげようか？」

「「いえいえ結構です！　自分で飲みますから!!」」

「遠慮するなーせっつかくの花見なんだぞー！」

昔、鬼は妖怪の山を仕切っていて、天狗や河童はその下に付いていたらしいけど、当時の力関係が良く分かるな。

ちなみに彼女は最初から妖気の正体も、異変の犯人も萃香だと気付いてたそう。

それにしても、鬼がどうこうではなく酔っ払いって怖い。

「で、あんたはなんでそんなにスツキリしてるのよ。ユウキさんの事はもういいの？」
「あんなにユウキに敵意むき出したのに、コロっと態度変わったもんな」

私がそう言うと、萃香はバツが悪い顔をして頬をかいた。

霊夢に退治された後、萃香とユウキはなぜか普通に会話をしていた。

というか、いつの間にか杯を交わし合う仲にまでなってるのには私も霊夢達もビックリした。

あんなに色々言われて敵意を向けてきた相手と普通に話すユウキもだけど、罵倒していた相手に笑顔を浮かべて会話出来る萃香も萃香だな。

「あーまあね。ユウキが仲間や友達、家族から忘れられたのに何とも思っていないし、こっちで友達や自分を慕う者が大勢出来てもそれを喜んだりしてない。ってのは今も思ってるよ」

萃香が見つめる先には、大ちゃんとしてアリスに挟まれ咲夜や美鈴達を巻き込んでいつも通りの騒ぎをしているユウキの姿がある。

最近思ってたけど、アリスもユウキに惚れてないか？

「でもさ、それは我慢しているわけでも自分に嘘をついてるわけでもなかった。ただ、壊れてるだけだったと気付いたのさ」

「それは……そうね」

そう言う萃香はどこか寂しそうな顔をして、霊夢や文も悲しそうな顔をした。

「それにしてもさ。鬼は嘘が嫌いだしとしてもユウキをあそこまで嫌つてたのは、なんでだ？」

私は気になつている事を萃香に聞いてみた。

いくらなんでも昨日のアレは異常に見えたからだ。

「うーん、そうだね。なんでだろうね、私にもよくわからないや、あはは」

「あははつて、昨日はユウキさんを殺しそうな程睨んでたじゃないですか」

文の言う通り、殺気はなかったけどそれでもユウキを殺しそうな勢いが昨日の萃香にはあつた。

「だつてさ、なんか腹立つたんだよ。私はずっと見てたけど、ここに来てから弱音も吐かないし悲しむそぶりも見せなかつたんだよ。仲間に忘れられたのにさ。それを気にしないつて事は、逆に彼が誰も友達だと思つてなかつたつて事でしょ」

確かにそれはそうかもしれない。

例えば私が霊夢に忘れられて、悲しむ事も怒る事もなかつたとしたら、私は霊夢を何とも思つてなかつた事になる。

「でも、本当は違つた。彼は『友達も家族も元からいなかった』つて、淡々と言つてい

た。嘘とは違う、本当にそう思ってる。それを聞いてさ気付いたよ。彼は心のどこか大切な物が壊れちやつてるんだ」

「ユウキさんは大きな傷を負っていて、自分に嘘をついてるとも感じたわ」

「いずれ癒される傷だと思っていました。でも、傷とは少し違っていたんですね」

傷、ねえ。今度は妹紅とルーミアに絡まれてるあいつを見たら、とてもそうは見えないんだけどな。

「ふーん、彼の事やっぱり良く見てるよね霊夢も文も、私はさっぱり気付かなかったよ。

流石恋する乙女は違うよね」

「ち、ちがつ！ 一緒に住んでるからいやでもそういうの目に止まるだけよ！」

「わ、私だつて彼が幻想郷に来た時からの知り合いだから、気付いただけよ！」

はたてに言われ2人揃つて誤魔化してるけど、ユウキの事が大好きなのはバレバレなんだよな。

私はユウキの事最初に見たときからどこか変わった奴とは思つてたけど、そこまで深くは考えなかった。

まあ……他の事で深く考えて嫉妬心かられた事はあつたけど。

「ちよつと、それどういふ事よ！」

突然、レミリアの声が辺りに響いた。

一瞬シンと静まりかえったが、すぐにまた皆飲み始めた。

「どうしたんだよ、いきなり大声だして。ユウキ、またお前何か言ったのか？」

レミリアがこんな顔をするのは大抵ユウキのせいなんだよな。面白いけど。

「そう言われてもな。幻想郷の鬼って初めて見たなって言っただけだぞ？ 阿求の所で

見せてもらった本に、鬼は昔はいたけど今はいなくなつて書いてあつたし」

「あー確かに昔はいたらしいからな。そう言えば私も鬼は初めて見たか」

昨日は色々と驚く事あつたから忘れたぜ。

「魔理沙、あなたまでそんな事を鬼なら何度も見たでしょ!？」

ああ、そういう事か。確かに吸血鬼も鬼か。

「鬼？ レミリアとフランが？」

ユウキはまだ分かつてないようだ。こういう所は鈍い。

「吸血【鬼】！ これでどう!？」

「あー……そう言えばそうだな。レミリア、吸血鬼だったな」

「そこから!？」

ガーンという効果音が聞こえそうな程、レミリアはショックを受けていた。

ユウキ、わざと……じゃないな、天然すぎだぜ。

パチユリーやフランが大笑いしてるけど、それでいいのかフラン？

「ユウキ、いい機会だから私と勝負しなさい。吸血鬼の恐ろしさ思い知らせて……」
「お兄ちゃん、お姉様なんか放っておいて、一緒に飲もう?」

「フラン!?!」

カリスママモードで勝負を仕掛けようとしたら、よりにもよって妹に邪魔されるとは哀れだぜ、レミリア。

「ユウキさんって弱い人には優しいけど、強い人には結構強気よね?」

「そうだね。そう言った所、私は気に入ってるよ」

「うーん、そうか?」

咲夜と萃香に言われユウキは少し考え込むように空を見上げた。

確かにユウキは大妖精やチルノやルーミア、梨奈達のように弱い妖精や人に優しいけど、あれでも大妖怪な文やレミリア、紫にまで結構ズバズバとした物言いしてる。

ああいう所も霊夢達が惚れこむ要因の1つかもな。

「そうだ。勝負と言えば、どうだいユウキ? 余興の1つとして私とやらないかい? 昨日はやりそびれたからさ」

「えっ? ちよつと、それは今私が……」

「いいぜ。お腹も結構膨れたし、食後の運動にはちょうどいいな」

「あれ? 私スル!?!」

というわけで、萃香がユウキと勝負をするという流れになった。

霊夢は止めるかと思っただけど、昨日よりは危険性ないからと言っていた。

「レミイ、今のあなたとつてもおいしいわよ」

「それフオローのつもりかしら、パチエ？」

スル―されまくってたレミアは地面にのの字を書いていじけていた。

昨日はなんだかんだとうやむやになった萃香と再戦（？）する事になった。

花見の余興と食後の運動を兼ねてにしては、鬼との弾幕ごっこは少々過激だったかな？

鬼と真つ向からぶつかってタダで済むわけない。

弾幕ごっこなら何とかかなりそう。というか少し楽しみだったりする。

萃香を幻想支配で視て、妖力を得てもあの怪力にはあまり意味がない。

ここはやっぱり美鈴や文の力を使う方がいいな。

「じゃ、やろうか。ハンデって事で私は3枚しか使わないから、ユウキは何枚スペカ使ってもいいよー」

「そいつはどうもありがとうございます」

3枚か、昨日霊夢とやった時と変わらないけど、同じスペカを使ってくるとは限らな

いよな。

「じゃ、行くぜ。【幻符・幻想支配モード美鈴】」

スペルカードを掲げ、美鈴を視ながら宣言する。

美鈴の気の力が俺に宿り、身体全体が強化された。

美鈴の力はどうかやら使うだけで、身体能力が全て自動的に強化されるようだ。

気を練る事さらなる強化も出来るけど、それはまた別のスペカが必要だ。

「へえ、そうなるのか」

「萃香は俺の幻想支配も知ってるんだろ？ 驚く事か？」

「實際目の前でみるとじやまた違うもんだよ。それよりも、かかっておいでー」

酔っ払いの動きをしながらも手をクイクイっとさせ、萃香は俺を誘う。

なんか酔拳と相手しているみたいだ。やり合った事ないけど。

「お言葉に甘え、てー！」

一瞬で萃香の元へと詰め寄り、上段からの回し蹴りと見せかけた下段蹴りを放つ。

「おおっ？」

萃香は少し驚いたようだけど、ジャンプで軽々とかわされた。

それは予測済みだったので、地面に手をつき上段への回し蹴りをうつ。

「おお〜♪」

しかし、それもかわされた。鬼って力だけじゃないな。

すぐに起き上がり様に貫手をしたが、簡単に掴まれ投げ飛ばされた。

空中で体勢を立て直したのでダメージはない。

「今度はこっちから行くぞー」【萃符・戸隠山投げ】

これは昨日霊夢にも使ったスペカだ。

萃香の両手に石や岩が集まり、少し大きな岩石となりそれを次々と投げてきた……つ

て次々!?!

「それそんなにたくさん投げるものだっけ!?!」

「質より量の弾幕ごっこ♪」

楽しそうだな、萃香。ってそれどころじゃない。

避けきれない程の大きさじゃないけど、数が多い。

最初はかわせたが、段々ときつくなってきた。

「しょうがない。【虹符・烈虹真拳】!」

両手で打撃の乱打を放ち、迫りくる岩石を次々と粉碎していく。

どっちのスペカの効力がもつか分からないけど、萃香の方が先に出した分こっちは有

利だ。

「おりよ? じゃあ、量より質だ〜♪」

「げっ!？」

効果がないと思つた萃香は、次に今までとは段違いの超特大の岩石を作りだした。

これを凌ぎきれば、このスペカは終わりだ。

「いつけ〜!」

「だったら【熾撃・大鵬墜撃拳】!」

あつち超特大でくるならこつちも超特大の一撃で迎え撃つ。

全ての気を右拳に集中させて、巨大岩石を打ち砕いた。

「うわっ、ユウキさん流石です!」

「お兄ちゃんすごい!」

「ユウキ、がんばれ!」

美鈴やフラン、チルノ達が歓声をあげた。正直、自分でも驚いた。

これで美鈴の力は使いきつたけど、それでもあの岩石をあそこまで粉碎出来るとは思わなかった。

やっぱり、幻想支配の効力が増しているのかな。

「いやあ、あれほどまでに見事に砕くとはねえ。やるじゃん」

「そつちこそ、昨日とは大違いの振る舞いだつたな」

霊夢に放つたのはあれよりも少し小さかつた気がする。

「あれくらいならどうにか出来ると思ったんだよ。でも、これならどうかな？」
【鬼神

ミッシングパープルパワー】

「それは昨日も……えっ？」

萃香の体が何倍にも大きくなった。

これは昨日も使ったスペカだ。でも霊夢の御札弾幕を吹き飛ばしたスペカだと思っ
たが、名前が微妙に違う。

しかも、昨日使ったのは一時的な巨大化だったけど、今回はずっと巨大化している。

「こういうスペカもあるんだよーそれぞれっ♪」

「うおっ、揺れる揺れる」

巨大な身体が動く度に、大地が揺れて思うように動けない。

ここは地上戦よりも空中戦の方がいいな。

「だったら【幻符・幻想支配モード文】！」

「おお、天狗の速さに目をつけたね。なかなかいいねえ」

今度は文の力だ。

文の力は風を全身に纏い、飛行速度が大幅に上がる。

力には速さで勝負と思ったが、ただ勝負してもつまらないな。

ここは……良い事思いついた

「師匠、笑つてますね」

「あらあら、何だか悪い事思いついた笑みね」

悪い事とは失礼だな、幽々子。

でも間違つてはいない。

「それっ!」

まずは萃香の周りをグルグルと飛びまわる。

下手に弾幕うつても効果なさそうだし、力の消費が激しくなる。

それなら飛行に力を注いだ方がいい。

「うわつと、うお? おお〜つてちよこちよこ何なんだよ〜!」

「まるで蚊ね」

萃香は俺を捕まえようと手を伸ばすが、簡単に捕まる天狗の速さではない。

それより幽香、蚊とはなんだ蚊とは!

「だつてぶんぶん飛び回つてるじゃない」

「文の力使つてるだけにつてか?」

「魔理沙、座布団没収」

「霊夢!?!」

スル―スル―。

「このおくりつまでもチヨロチヨロとお！」

俺を捕まえようと萃香は両手をあちこちに伸ばしてきて、段々とバランスが崩れてきてる。

「よしっ、ここだ！」

「えっ？ わひやつ!?!」

突然萃香が奇声をあげ、身をよじった。

俺が何をしたかと言えば、隙をみて近くに落ちていた葉っぱ付きの木の枝で、萃香の膝の裏から太ももにかけて撫で上げただけだ。

「ひゃんっ!?! ちよっ、それははんそ、ぶふっ、あははははっ……あっ」

妖怪だろうが鬼だろうが、ただでさえ酔っ払って千鳥足な上に、巨大化の上バランスを崩しかけた所に敏感な所を葉っぱで撫でられたらくすぐったくて仕方ない、はず。

と推測してたが、これが見事に大当り。

萃香はバランスを完全に崩し、後ろに大きく倒れてしまった。

その際、地震のような振動が博麗神社周辺を襲い、見物していた霊夢達までも転倒してしまったのは予想外だった。

「いたたっ、なんて非常識な戦いしてるのよ」

「ちよっとーワイン零れちゃったじゃない、咲夜!」

「はい、お嬢様。ぶどうジュースのおかわりです」

「うおい!？」

「あ、あはは、まさかあの萃香さんをこんな方法で倒すなんて」

「思わず写真撮っちゃった。スクープにしていいわよね」

「ユウキはやつぱり面白いねえ」

霊夢やレミリア達は文句をいい、文やはたて、にとりは茫然としていた。

まさか鬼をこんな事で転倒させる人間がいるとは思わなかったって顔だな。

「いっつつ……いやあ、参った参った。まさかこんな方法で破ってくるなんてねえ」

元の大きさに戻ったが、特にダメージはないようだ。

ただ倒れただけだから身体が頑丈な鬼には効果なかったか。

でも、精神的ダメージは結構あったようだ。

「でも、このままじゃ鬼としても私個人としても収まり効かないからねえ。そっちがそんな手を使うなら、こっちはこんな手を使うよ!【酔夢・施餓鬼縛りの術】」

「やばっ!」

今までにない猛烈な嫌な予感がしてすぐに離れようとしたが、それより速く萃香が投げた鎖が俺を捉えた。

と、同時に体中から力抜けていき、幻想支配が解けてしまった。

「そーっれ、おまけ♪」

「えっ?」

そして、そのままポイッと軽く放り投げられた。

勢いはないけど、身体に力が入らなくて受け身も取れないまま俺はなぜか、アリスの方へと投げ飛ばされた。

ーボフツ、ムニユ

「キャッ!」

……柔らかい。

頭というか全身が柔らかいものに抱きとめられた。

「え、えっと、ユウキ? 大丈夫? ひゃん!」

アレ? 俺は萃香にアリスの方に放り投げられて、アリスはそのまま俺を受け止めた。

そして、顔と手に伝わる柔らかくて丸い感覚……あ、いい匂い。

「ユウキ、ちよつと、どけて、あんっ」

オレハイツタイアリスノドコヲモンデルノデシヨウカ?

「……ごめん、俺今うごけない。どうにかして」

「そ、それならしょうがないわね。このままでも……あつ」

怒って俺を突き飛ばすなりすると思っただけど、アリスは戸惑いながらもなぜか俺を抱き締めようとして、手が止まった。

「へえ、動けないんだ？　なら、私が手を貸してあげるわ」

「私の風でどこまでもーも遠くに運んであげますよ、ユウキさん♪」

「アリスも満更じゃなさそうだな、顔真つ赤だぜ？」

首が後ろに回らないが、間違いないく霊夢と文は怒ってるのが良く分かる。

あれ、冷や汗が止まらないぞ？

そして、魔理沙、余計な事を楽しそうに言うなよ！

「ふっ、ふふふっ……今は真昼間だけど全力全開が出せそうな気がするわ」

「奇遇だね、お姉様。私モ思ウ存分暴レソウナ気ガスルワ♪」

「……お手伝いしますわ、お嬢様」

レミリア、多分今眼が真つ赤だろうなー。

フラン、狂気に落ちたような声色だけど、そんな事ないよな？

咲夜、手伝わなくていいから2人の主を止めてくれ！

アレ？　何このデジャブ。

「ユウキ、ちよつと燃やしていいか？」

「大丈夫だよ。あたいがすぐに凍らせるから」

「ユウキさん……覚悟してくださいね？」

「……………」

妹紅、両手というか全身真っ赤に燃やしてない？

チルノ、俺じゃなくて皆を凍らせて止めてほしいな。

大ちゃん、眼からハイライト消えてる気がするのは気のせいだよな？

で、ルーミアは無言で口を開けてる気がする。

「師匠……流石です」

「ユウキ君つてすごいわねえ、色々な意味で」

「ホント、こんな大勢の前で大胆ね、ふふっ」

「あんなに怒った妹紅は久々だな。ユウキ君、事故とは言え諦めてくれ」

「ユウキさん、がんばってください」

どうにか首を動かした先には、尊敬の眼差しで俺を視る妖夢と、楽しそうに笑う幽香と幽香。

それに苦笑いを浮かべる慧音と、唯一俺を案じてる美鈴。

案じるくらいなら助けてほしい。

にとりやはたて、リグルやミスティア達は離れた場所に避難していた。

「ユウキ君」

「あ、ルナサ。頼む、何とかしてくれ」

いたのかルナサ。あ、リリカとメルランも避難してる。

「これで、あなたも私と一緒にになれるね」

「一緒について、なんだ!?!」

同じ亡霊になれるのか? いや、そもそもお前ら騒霊だろ!

というかアリスはいい加減俺を離して逃げればいいと思うんだけど?

「ふっ……この子達が逃がしてくれないみたいよ?」

あ、上海と蓬萊に剣付きつけられてる。

お前ら、完全にアリスのコントロールから離れてないか?

「もう覚悟を決めましょう? 最後があなたと一緒に悪くないわ」

「アリス、お前そんなキヤラだっけ!?!」

何諦めきつた顔してるんだ!?!

「「「さあ、覚悟はいいかしら?」」」

「ぎゃー!?! ふこうだー!?!」

「あつはつはつはつ、モテモテだねえ彼は」

神社の屋根からユウキの女難を着に酒を飲む。

まあ、その女難の原因作ったのは私だけどね。

「そう思わないかい、紫？」

そう呟くと、背後にスキマが現れ、中から紫と藍、橙が出てきた。

「確かにそうだけど、あなたもしばらく会わない間に変わったわね。霊夢達をわざと炊き付けるなんて」

紫とこうして話すのは何百年ぶりになるかな。

「人聞きの悪い事言うねえ。鬼の私にあんな辱めを与えた彼に、ちよつとご褒美あげただけだよ」

機転を利かせたとはいえ、鬼の私を転ばせるだけじゃなくあんな声出させるなんて、ううくやっぱり恥ずかしかつたなあ。

「外の世界の人間の一部にはご褒美でも、彼にとつては御褒美じゃなさそうだけどね」

「ふふつ、お久しぶりです、萃香様。こちらは橙、私の式です」

「初めまして、萃香様。橙といます」

藍も立派になって、今じゃ式をもつまでになったか。

橙もいい子そうで結構優秀な素質持つてるね。

「うん、久しぶり藍。橙も初めまして。藍、あそこに混じりたがってる顔してないかい？」

「っ?! ご、御冗談を萃香様」

ありや、カマかけたつもりはなかったんだけど、藍は少し動揺してるね。

これには紫と橙もびっくりしてる。

「藍、あなた……」

「藍様?」

「ゆ、紫様、橙、違いますからね!? もう、からかわないで下さい萃香様!」

「あはははっ、ごめんごめん」

これは思わぬところで思わぬものを見れたかな。

それにしても意外だね、あの藍が外来人を気にするなんて。

そう言えばユウキとは人里で結構会って話をする仲だったっけ。

「でも、紫が彼を気に留め、警戒するのも分かるよ」

「……そう?」

幻想郷の人間や妖怪たちがユウキを認めて、慕いつつある中、紫はずっとユウキを警戒している

いや、あの閻魔様も彼を警戒してたっけ。

「紫がどんな所まで警戒してるかは分からないけど、あまりこそこそとしない方がいいよ。彼、気付いてるみたいだから」

昨日も私との話を盗み聞きしてたの知ってたみたいだったしね。

「そうね。彼、そういう気配には敏感ですから。本当に彼つて敏感なのか鈍感なのか分からないわね」

「それは言えてる」

アリスをお姫様だっこして、霊夢達から逃げ回るユウキを見下ろす。

彼が本当に嘘つきだった方がどれだけマシだったのかな。

続く

過去編Ⅲ

第95話 「9月1日」

人生初の夏休みが終わった。

夏休みといっても、普段とやってる事は何一つ、なにひとつとーっつ、変わらなかった。

幻想御手や禁書目録に関わったのはまだいい。それから錬金術師やテレスの馬鹿を潰したり、レベル6実験を……当麻が止めるのを見ていた。

その数日後、原因不明の体調不良で2、3日寝込んで、その後アイテムや美琴達と協力してスタディだかなんだか馬鹿の集まりを潰したりもした。

これだけ言っても結構な密度だな、うん。

でも思えば、昨日31日が一番めちやくちやだったかもしれない。

桔梗に預けていた打ち止めが逃亡して捜索しようとしたら、外部からの侵入した魔術師を当麻と倒し、なぜか一方通行と共に打ち止めに撃ち込まれたウイルスを除去した。

まあ、一方通行がその際脳にダメージを負ってしまったけど、打ち止めは助けられたからいいでしょう。

これで終わりかと思えば、なんでもか知らないがまたまた外部から来た魔術師となぜか学園都市の外へ行ってしまった当麻を追いかけて連れ戻して朝が来た。

流石の俺でも疲労が半端ない。

で、ようやく終わり学校サボって寝ようかと思っていた所へまた別の仕事が入った。

何でも正式な手続きを経て外部から入ってきた人間が、こっそり能力者を拉致つて外部へ出ようとしているので止めるこの事。

内容がくだらないし、出る時のセキユリティーですぐに捕まるだろうし、尼視からの仕事だったのでキャンセルしようとして思い直した。

ちよーどいい、溜まったストレスを発散させよう。

と意気込んだのだが……

「何だよ、何なんだよ……てめえら雑魚すぎるだろ」

拳銃を撃ってくるスーツ姿の雑魚Aの両腕を軽く切つて、ナイフで刺そうとしてきた雑魚Bの腕をへし折りながら思わず叫んでしまった。

こいつら雑魚にも程がある。幻想支配を使わずとも楽にやれた。

「うっ……がああああ〜！」

「うるさい。野郎の叫び聞く趣味はねえんだよ」

雑魚C、D、Eが拳銃を構えたので、雑魚Fの肩を外しながら三人の手を銃で撃ち抜

く。

ついでに逃げようとしたGの脚を撃って転倒させ、脳天に一撃加えて意識を奪う。

こんな流れ作業を繰り返して、あっという間に雑魚達を倒した。

「さーって、掃除も済んだ。おい、大丈夫か？」

こいつらに乗ってきたライトバンの隠しドアを開け、つめこまれていた学生を見つけ
た。

さつきまでとは違い、殺意を消し笑顔で学生に手を伸ばす。

「あ、ああ、ありがとうございま……」なんて言うと思ったか、裏切り者くん？……えっ
？」

俺が伸ばした手に握られている銃を見て何を言っているんだと言う顔をしているが、
その表情には少しだけ、企みがバレて驚いている色が見えた。

「バレてないとも思った？ のびてるこいつらの手引きをしたのはお前だろ？」

「な、何を言っているんだ!？」

「ま、今回は俺が分かったわけじゃないけど、学園都市にはバレバレだったって事さ。お
前が狂言誘拐で外の研究機関に映ろうとしていたって事がな」

地面に転がってる奴ら、外部組織は学園都市の能力者、コイツみたいな低レベルな学
生にまずは接触した。

内部の学生が協力すれば、スパイを仕込むなり強行突破するよりは簡単だと考えたよ
うだ。

そして、コイツは外部組織の誘いに乗り色々な手続きの助言などをした。

コイツは風紀委員の末端の1人であり、普通の学生よりもセキュリティに詳しくかつた
のもターゲットに選ばれた一因だろう。

「大方、コイツらに学園都市よりももつと能力開発に特化した自分達の所のなら、お前の
能力を有効活用出来るとか言われて、協力を誘われたんだろ？ お前は幻想御手にも手
を出そうとしてたみたいだしな」

「う……ぐっ」

凶星を付かれたコイツは俯いたまま……ん？ 能力使おうとしてるか？

「おっと、そんな事はさせないぞ？」

「なっ!? の、能力が使えない？ えっ、なんであんた眼が青いんだ？」

「色々説明するの面倒だから、最後に一言だけ言っておく。ようこそ 【こつち側】 へ
♪」

——パンツ！

それだけ言つて俺は引き金を引いた。

辺りを見渡し、全員気絶しているのを確認してから携帯を取り出し尼視に電話をし

た。

『おや、予想よりも早かったな』

「……はー、終わったぞ。ターゲットは眠らせたし、外部組織の雑魚は適当に転がってるから回収しろ」

『分かった。ん？ 誰も殺してないのか？』

「別に殺せって命令受けてないし。殺した方がいいなら今からするけど？」

『くつくつくつ、いやいい。こっちで回収して後始末をしておこう。色々聞く事もあるしな。しかし、誰も殺していないとはね。やはりこの前の……』

尼視が何か言いそうだったので、電話を切った。

俺の仕事は終わりだし、すぐに下っ端共が来るだろう。

俺が麻酔弾で眠らせた学生は、取り調べとか尋問を受けてから暗部直行になる。

ま、自業自得だな。

「さーって、飯食って……帰って寝よう」

今日は学校休み決定だ。仕事をしたせいだからサボりじゃない。

学校とは正反対の場所にいるし、今から行っても下手すりゃ始業式も何もかも終わってる。

当麻が学校で記憶喪失をうまく誤魔化せるか心配と言えば心配だ。

まあ、インデックスの一件の後、学校まで一緒に行き校内を案内して間取りや自分の座席、それにクラスメートや関係する教職員の顔と名前は教えてある。

夏休み中に何度か補習で行ってるし、今更俺がフォローする事もないだろう。

今日一日くらいゆっくり休みたい。

「けど、こう言う時に限って次の仕事が……やっぱりきた」

バイクの所まで戻ってる途中、携帯に仕事のメールが入った。

嫌な予感というのはすぐに的中しちゃうよな。

「えっと、侵入してきた魔術師を捕獲せよ。今回も今まで通り殺害は認めず、つてまたかよー」

これで何度目だよ！ つてかこの短期間で魔術師侵入させすぎだ！

火織やバーコードは一応取り決めがあったようだからいいけど、錬金術師やアステカの変装ストーカーに弦を使う変な奴。

科学に特化させすぎて魔術的な侵入者には無防備なのかここは!?

と、愚痴つても仕方ない。入った者は早急に確保しないと。

メールには侵入した魔術師の画像も添付されていた。

推定年齢は20代後半、ゴスロリファッションに手入れをしていないボサボサライオンヘアーか、物凄く目立つな。

今までの魔術師は全部当麻かインデックス絡みだったから、今回もそれ関係か。

ひとまず、画像が取られた現場に向かおうとバイクを飛ばしていると、尼視から電話が入った。

「おかけになった電話番号は現在使われておりません。100回死んでからおかけ直してください」

『……メールは見たな。それについて補足だ』

俺の軽口をスルーしようとしたみたいだけど、最初歯軋りがはつきりと聞こえてきたぞ？

「このゴスロリライオンがどうかしたか？ ああ、殺すなつてのは理解してるぞ」

仮にも科学サイドの俺が魔術師を殺す事になれば、色々とトんでもない事になる。

つてのは錬金術師の時に説明は受けた。

ならば元春が適任じゃないかと言ったが、あいつはあいつで色々と問題があり簡単には動かせないらしい。

で、科学サイドで当麻やインデックスの事に詳しく、魔術を無効化出来る幻想支配を持つ俺が適任とも言われた。

ま、インデックスの時にこういう事になるんじゃないか、とは元春から警告受けてたからいいけどな。

『それは当たり前だが、今回は今までよりも事態が複雑だ。侵入してきた彼女はイギリス清教の手の者だ。今まで以上に丁重に扱ってくれよ?』

「……なるほど。そりゃ面倒だ」

今までの魔術師は外部組織の者ばかりだったが、今回は同盟を結んでいるイギリス清教の正規の魔術師だ。

最も、イギリス清教の意思ではなく、コイツの独断専行なのは既に向こうから伝えられている。

こつちに被害が出る前に速やかに拘束しなければならない。

「で、そいつの目的と居場所は?」

『目的は分からん。禁書目録の回収、幻想殺しの捕獲、色々理由は思い浮かぶがな。ともかく、ソイツは……あ、風紀委員にまで情報入ってるな』

「はあ!? なんてあつちにまで情報いってんだよ!? 除外するもんだろ、普通!」

侵入者の情報で魔術師絡みの時は、風紀委員には情報がいかないようになってはいます。

程度にも寄るけど魔術師は黒子達には荷が重い相手の場合が多いし、俺や最低限当麻が相手をした方がいい。

『今回の侵入者、シエリー||クロムウエルは今までの奴ら違って、門から堂々と入ってきて』

たらしいぞ。豪快にチャイムを鳴らしてな』

「……アホなのかそいつ」

学園都市と外部をつなぐ門を正面突破、それも力づくで来るなんて、アホとしか思えない。

けど、それで通ってしまったと言う事はそれなりの実力者と言う事。

現に警備員が数名重傷らしい。

この時点で、学園都市にはコードレッドが発令されて警備員も風紀委員も総動員された。

『と言うわけで、今回の一件を早めに処理する理由が増えたと言うわけだ』

「了解……通りであの雑魚共焦っていたわけか」

さつき潰した外部組織の雑魚共、俺が踏み言った時やけに焦った様子でどこかと連絡を取ろうとしていた。

コードレッドが発令されたせいで学園都市は外部との通行を全面的に禁止する。

だから脱出の準備を進めていたアイツらは、自分達の事がバレて封鎖されたと勘違いしたようだ。

どっちにしろバレバレなのは事実だけど。

コードレッドが発令されたのは知ってたけど、それ当麻が絡んでいたからだと思ってた

んだよな。

アレとは別件だったか。

「防犯カメラが写した現場は、近いな。ん？ あの信号は……」

駅前近くまで来た時、空に信号弾が登ったのが見えた。

アレは付近で治安部隊による避難命令だ。

と言う事は、魔術師を見つけたのか！

魔術師を警備員や風紀委員の手に渡すわけにはいかない。

すぐに信号弾の登った現場に付いた。

そこにいたのは風紀委員で俺の知り合いで、さつき魔術師相手じゃ荷が重いかもしれ

ないと思つた相手。

白井黒子だった。

「動くなと申し上げております」

黒子はあつと言う間にゴスロリライオン、シエリーに詰め寄り、能力を使って地面に

叩きつけ金属の杭で拘束した。

動作と言動に能力者としての自信と慢心が入り乱れているのは、あいつの長所でもあ

り短所でもあるな。

と、地面に磔にされたシエリーが不敵な笑みを浮かべているのに気づいた。

よく見るとシェリーの右手にはチョークが握られており、地面に何か描いている
マズい！ 魔術を使う気だ！

「黒子、そこから離れろ!!」

「ユ、ユウキさん!?! どうしてこんな所に!?!」

魔術師相手には幻想支配がすぐには効かない。

魔術のコピーも能力停止にも時間がかかる。

インデックスの時はとっさに出来たけど、錬金術師やストーカー野郎にはすぐには出
来なかった。

「遅いね」

「なっ……!?!」

突然黒子の後ろの地面が爆発した。

黒子はテレポートをせず、すぐに後ろを振り向いた。

ここで振りむかずその場を離れていればよかったのだが、所詮は結果論だ。

「ん、です……!?!」

爆発したアスファルトの地面や、周囲に合ったガードレール、自転車などが次々に宙
に浮き、あつという間に巨大な腕になった。

腕はすぐに黒子を拘束した。いや、現れたのは腕だけはなかった。

まるで周囲にある物をなんでも吸収して作られた巨人のようなものが現れた。

「あつ、ぎつ……!」

「黒子!」

あんな状態じゃ演算に集中出来ず、黒子はテレポートで脱出できない。

まずは黒子を助ける為すぐに懐から銃を出し、巨人の腕を撃った。

1, 2発では効果がないのは分かりきっていたので、全弾を一点に集中させて撃った。だけどビビ一つ入らない。演算銃器が爆弾でもなきや効果がない。

だったら!

「ああ、ぐぐつ……」

「黒子、能力借りるぞ!」

幻想支配で黒子を視て能力をコピーし、まずは黒子の側までテレポートした。

そして、すぐに黒子に触れて一緒に離れた場所まで再度テレポート。

「大丈夫か、黒子」

「え、ええ……大丈夫ですわ」

流石風紀委員のベテラン。未知の攻撃に少し動揺はしているが、混乱まではしていない。

「離れてろ。ここは俺が……」

「何の騒ぎか知らないけど。私の知り合いに手え出してるんじゃないわよ!」

巨人を破壊しようとする向き直った時、突然キンとコインを弾く音が聞こえ、直後にオレ
ンジの光線が巨人を貫き、爆発した。

いや、あれは爆発したと言うよりも……

ともかく、その光線は何度も目にしていたいし、俺自身も何度か使った事がある。

レベル5第3位、御坂美琴の代名詞、超電磁砲だ。

後ろを振り向くと、すぐ側に美琴が立っていた。

「美琴」

「お姉様!」

「もう大丈夫よ。あのでかい手は囷だったみたいだから」

美琴が言うようにあの腕の崩壊は囷だ。

崩壊した巨人が煙幕となったようでシェリーの姿がどこにもなかった。

「で、今の何だったの? あんたまで関わってるって事はヤバいつて事?」

「まあな。外部から強行突破してきたどつかの馬鹿がいるって事しか俺は聞かされてい
ない」

「おねーさま——!」

せっかくシリアスに話してるのに、黒子が泣きながら美琴に飛び付いた。

よっぽど怖かったのだらう……と言う演技をしているはバレバレだ。

美琴も分かりきっているので、特に相手をせすぐに引きはがした。

「黒子、あの場合すぐに他の風紀委員に連絡するのが先だろ。いくら人通りが多かったからって、門を正面突破してくる危険人物に一人で挑むなよ」

「うぐつ、お、おっしゃるとおりですの」

「ユウキの言う通りよ。あんたは一人で何でも解決しようとしすぎ、少しは私とか周りを頼りなさいよね」

俺に注意され凹んでしまった黒子だったが、続けて美琴が慰めるように優しく頭を撫でると、一瞬で目付きが変わった。

「うつ、うふふつ。私を心配してくれるのですね、おねえさまあ〜」

「少しは自重しろ！」

またもや美琴の胸に飛びこもうとした黒子の脳天に、俺と美琴のチョップがさく裂した。

それにしても、アイツの目的が分からない。

こっそり侵入するわけでもなく、堂々と力づくで入ってきて、尚且つ街中では堂々と目立つ格好で歩いていた。

お前の目的が何にせよ次は逃がさないぞ、シエリー・クロムウエル。

続く

第96話 「風斬氷華」

美琴達と別れ、俺はシエリーの足取りを追っていた。

「おい、シエリー＝クロムウエルに関して開示できる情報はあるか？」

『さあな？』

ダメ元で尼視にシエリーについて分かっている事を聞こうとしたが、案の定はぐらかされた。

「じゃあ、今朝の一件の報酬としてシエリーに関する情報を言え」

『くつくつくつ、どうした？ やけに焦ってるな』

「……………」

焦りもする。シエリーと話をする事で目的を探ろうとしたけど、巨人を相手にしていたせいでロクに会話もできなかった。

あいつの狙いが幻想殺しか禁書目録か、それとも別の何かか。

それを早く突き止めなきや被害が拡大する。

使う魔術の全貌が分からないけど、あの巨人だけでも十分に脅威だ。

もし今度は人の多い所でアレを使われたら……

『まあ、いい。お前にも関係ないとは言えないからな。恐らく今回の一件の原因は20年前だ。お前がいつか調べていた、魔術と科学の実験の事だよ』

尼視や学園都市の一部の者には魔術と言う存在が認識されていた。

ならばそれに関わる事件や実験などが行われていた可能性が高い。

インデックスの一件があつてから今後魔術サイドとの接触や戦闘に備えて、俺は可能な限り調べてみた。

その中で20年前、木原一族の者がイギリス清教の一部と手を結び、ある実験が行われた事を知った。

施設を作り、その中でエリスと言う能力者にイギリス清教側の魔術師が魔術を教える新しい法則を生み出そうと言う実験だ。

ただし、当時は知られていない事だが能力者には魔術は使えない。その結果、エリスは身体が崩壊し重傷を負った。

すぐには死にはしなかったが、イギリス清教の【騎士派】と呼ばれる一派が情報漏洩を防ぐために施設に乗りこんできた。

エリスは、自分に魔術を教えたイギリス清教の魔術師を庇い死んだ。

しかし、科学側、と言うか木原は能力者が魔術を使うとどうなるかはある程度予測していたようだ。

なので、こちら側からすれば結果的に実験は成功したとしている。

ここまですが俺が知っている事。

で、尼視が教えてくれたのが、エリスに魔術を教えた魔術師の名が、シエリー＝クロムウエルだと言う事。

「なるほど……そう言う事か」

まだ釈然としない事はあるがこれでシエリーが堂々と侵入して、街中をうろつくわけが大体わかった。

自分の友達を殺したあの実験が、科学側が憎いのだろう。

だから学園都市に復讐にきた……のだけど、やっぱりしつくりこない。

もつと本人に会って話をしてみるしかないな。

「ん、新しい目撃情報か。これによると、地下街に向かっている？ 当麻とインデックスに合流した方がいいな」

すでに地下街には特別警戒宣言による封鎖警告が出ている。

アイツの狙いが具体的には分からないが、やはり狙いは当麻とインデックスだろう。

不特定多数の能力者を狙っているのならもうとつくに暴れているはずだ。

そう思い当麻に電話をしたが、出ない。

「……おかしいな」

今日は学校午前で終わりどつくに家に戻っていると思ったのだが。

緊急事態なので、仕方なく小萌先生に電話をかけて何か変わった事がないか確認する事にした。

「あ、もしもし小萌先生ですか？ 俺です、ユウキです」

『あーユウキちゃんですか！ どうしました？ 今日お休みする事はちゃんと聞いていましたよ？』

「その件じゃなくてですね。当麻に用事があつたんですけど電話繋がらなくて、アイツちゃんと学校来てましたか？」

もしかしたら既に巻き込まれていて現在交戦中、なんて事もありえなくはないからな。

『上条ちゃんはちゃーんと登校していましたよ。あ、でもなぜかインデックスちゃんも付いてきちゃいましたけど』

……何やってんだよ。

学校なんかインデックス連れて……いや、勝手についてきたって所だろうな。

それからなぜか、当麻が始業式をサボってインデックスや見知らぬ女の子とイチヤイチャしてたり、元春が連絡もなしに学校に来なかつた事まで愚痴を聞かされた。

俺のせいじゃないのに、つて元春やつぱり休んだか、今回の一件では動かないと聞い

たけど他に仕事が入ったみたいだな。

『それでですね、姫神ちゃんと言うにはその時一緒にいた風斬氷華ちゃんって子とインデックスちゃん連れて、地下街に遊びに行ったらようですよ?』

「……風斬氷華?」

当麻とインデックスの行き先が分かったが、同時に聞き覚えのある名前が出てきた。

風斬氷華、詳しい事はあまり知らないけど、能力者が発するAIM拡散力場が人の形になったものだったか。

俺の幻想支配がAIM拡散力場を元に能力をコピーしたりしてる関係で、風斬氷華を使う実験をする予定だったが色々事情があり中止になった事がある。

その風斬氷華が当麻やインデックスと一緒にいる、しかも魔術師が侵入しているこのタイムミングで?

出来過ぎ感が否めないけど、シエリーが狙う可能性は特大だな。

「ありがとうございます、小萌先生!」

『あ、ユウキちゃんちよつとまつ……』

電話を一方的に切って頭の中で先生に謝罪する。

これ以上話す事はないし、こっちも急いでいる。

アジトのどれかに行けばカメラの映像で当麻達もシエリー達も追えるけど、そんな時

間はない。

近くの地下街出入り口からは避難指示によって、多くの学生などが出てきている。そこを通らず非常口を通って、俺もすぐに地下街へと入った。

——ドオン！

地下街に入った途端、轟音と共に激しい揺れに襲われた。

「ちっ、あっちの方が早く見つけやがったか！」

恐らく、シエリーが当麻達を発見して攻撃を開始したのだろう。

「おい、開けろよ！」

「いやあ、出してえ！」

地上へのゲートが閉じられ、逃げ遅れた人々が殺到している様を横目に地下街を走った。

当麻に電話をかけたがまだ出ない。

ただ闇雲に地下街を走っても探せるわけがないが……もうすぐ起きるはずの音へ耳を傾けた。

——ドオン！

「きたっ！ あっちか！」

さっきの轟音とは違く爆発のような音、戦闘によって起きる音だ。

この音を頼りに懐から演算銃器を取り出し、爆弾を確認して走る。

普通の銃器では歯が立たないのはさっき分かった。

だから演算銃器と爆弾を使って倒す。

「演算銃器、大分小型化したとはいえ、まだ懐に隠して持ち運ぶには大きすぎるのが欠点だよな」

なんて事を考えながら次第に大きくなる銃声音と叫び声を頼りに追いついた。

そこには愛穂先生を筆頭に装甲服で身を固めた警備員達が、通路の向こうから迫る巨人相手に奮闘していた。

「愛穂先生！」

「ユウキ!? またお前か、こんな所に来たら危ないじゃん!？」

「それ、誰に言ってるんですか? 全員、巨人の左足首を集中して撃てー!」

「っ、その少年の言う通りにするじゃん!」

「は、はい!」

いきなり現れた子供の俺に命令され、戸惑っていたが愛穂先生が発破をかけてくれたおかげで全員従ってくれた。

警備員達のライフルは小口径ではないが、威力が足りない。

巨人の足を少しは削って行くが、すぐに周りの地面や壁のタイルが磁石のようにくっ

ついて補強していく。

でも、さつきよりは銃弾の密度が高いのですぐには全て回復しない。

「これはどうだ！」

演算銃器を構え、ちょうど巨人の右足首に続けて発射した。

コイツらの前で銃器を使うのには慣れているし、後でどうとでもなる。

一度に両足首を砕かれ、流石の巨人も体勢を崩した。

「腕は良いけど、品が無いわね」

「そんなゴテゴテの玩具作るお前に言われたくはない！」

「……なんだって？」

巨人の悪口を言うと、どこかプライドを傷つけられたのかシエリーの表情に苛立ちが見えた。

「ちっ！」

それを好機と見た警備員の1人が手榴弾のピンを抜き、投げつけようとした。

俺も同じ事を考えていたので、動作を合わせて粘着式の爆弾を投げようとしたが、それよりシエリーの方が速く動いた。

「エリス！」

両膝を付きながらもシエリーがエリスと呼んだ巨人は、腕を地面に叩きつけて地響き

を起こした。

俺は危うく爆弾を手放しかけたがどうにか堪える事が出来た。

しかし、警備員はピンを抜いた手榴弾を落としてしまった。

「伏せろ！」

その警備員の襟を掴み、後ろに投げ飛ばした。

——ボウーン！

警備員を投げ飛ばすと同時に、近くのにシールドに隠れた。

おかげでどうにか爆風と破片の直撃はやりすごす事が出来た。

それでも衝撃で頭がグアングアン言っているし、擦り傷だらけになった。

しかし、他の警備員は俺よりも危ない。

シールドやバリケードで身を守っていたが、衝撃により全員武器がどこかへ飛んでいき、大半が気絶している。

かく言う俺も衝撃と破片によって演算銃器が使えなくなってしまった。

まったく、一介の警備員が持つにしてはちよつと威力高すぎだろ！ と愚痴りつつ投げ損ねた爆弾を取り出し、シールドから飛びだしエリスの足へとくつつけた。

「何っ!?!」

流石にすぐに反撃してくると思わなかったのか、今回はシェリーの反応が遅れてエリ

スの足が吹き飛んだ。

俺が投げたのはさっきの手榴弾とは違い、爆発範囲を縮めて威力を集中させるように爆発するタイプの爆弾だ。

「エリス！」

エリスの右足は綺麗に吹き飛んでいた。

それでもすぐにさっきまでと同じく、修復が始まっている。

「大丈夫ですか!？」

その時背後から学生服をきたツンツン頭がやってきた、当麻だ。

爆発音に反応して来たのだろうけど、あまりの惨状に固まっているようだ。

それもそうだ。重装備の警備員が大勢血を流して倒れているのだ。

こんな光景を見慣れている学生は多くない。

「少年、こんな所で何を……月詠先生んトコの悪ガキじゃん」

愛穂先生が驚いた声をあげているけど、俺はやっと来たかと言った感じだ。

「愛穂先生？ それに、ユウキ!？」

「当麻、話は後だ。あの巨人と魔術師を止めるのが先だ」

「あ、ああそうだな」

当麻は俺がこの場にいるのに驚いたが、すぐにエリスに向き直った。

「当麻、インデックスと風斬氷華は？」

「お前なんで風斬を……って、インデックスはさつきあつちで会った御坂と一緒に白井が外へ連れ出した。風斬は向こうで待たせている」

「……そうか」

美琴と黒子が当麻達と一緒にいたのがちよつと意外だったが、2人の安全を確認してほつとした。

後はあいつらをここで倒せばいいだけだ。

「あら、うふふ、こんにちは。幻想殺しの方に出会うなんてね。あの虚数学区のカギと禁書目録は一緒じゃないのかしら？ それとそちのカギはさつき会ったかしら？」

ん？ あれ？ 何か……違和感が、まあいいか。

「ああ、さつきは白井が世話になったな、シエリー＝クロムウエル」

「……へえ、科学の街でも私の名を知ってる奴がいたんだねえ。なら、イギリス清教とわざわざ名乗る必要もないわね？」

「イギリス清教!? こいつインデックスと同じ組織の人間かよ！ なんのなんでインデックスを襲おうとしてるんだ!?!」

当麻の反応見ると、シエリーがインデックスや自分を狙ってきてるってのは知ってるみたいだな。

でも、まさかインデックスと同じイギリス清教の魔術師が襲ってくるとは思わなかっただろうな。

「お前の目的は察しが付いている。科学と魔術の世界で戦争を引き起こしたいんだろ？」

「20年前の復讐として」

「なっ！ 戦争って、それに20年前ってなんだよ！」

「っ!？」

さっきまで笑っていたシエリーの顔色が変わった。やはり復讐のために戦争を起す気か。

さて、当麻にこの話をしているのかどうか……これから魔術の世界にも関わるのなら知っておいた方がいいな。

「20年前の話だ。科学側と魔術側が歩み寄って協力し合い1つの実験を行う事になった。そこで魔術側から1人の魔術師が選ばれた、名はシエリー・クロムウエル。彼女は科学側からやってきた能力者の少年に自分の魔術を教えた」

俺の話を黙って聞いているが、シエリーの表情が険しくなってきた。

「だが、当麻も知っての通り能力者に魔術は使えない。当時はその法則が知られていなかった」

表向きは、な。

「その後、習得した魔術を使った能力者である少年は、どうなったかは三沢塾で目にした
だろ？」 アレが起きたんだよ」

それを聞き、1か月ほど前の事を思い出した当麻の顔色は真っ青になった。

「それからすぐ魔術側の一派が実験を潰す為に施設を強襲、瀕死の少年はシエリーを逃
がす為に……死んだ」

「そ、んな事が……」

「その少年の名は、エリス」

「黙れ！」

エリスの名を口にした途端、シエリーが強く唇を噛み叫んだ。

横で愕然としている当麻が今何を思っているのかは正確には予想できない。

けど、全くの加害者側だったシエリーの、被害者としての一面を知らされて動揺はし
ているようだ。

「そうさ。科学は科学の世界で、魔術は魔術の世界でキッチンと住み分けていれば、あんな
事には、エリスは死ななかつた！」

そう叫ぶシエリーの姿はさっきまでとは違って見えた。

けれども、それは一瞬で終わった。

「だから……私には必要なのよ、科学と魔術の戦争の火種がね！ その為には何だつて

利用する！ 私がイギリス清教の者だって事も、虚数学区の鍵も、禁書目録のガキもね！」

その時、シエリーの目線が俺にも当麻でもなく、俺達の後ろに向いている事に気付いた。

当麻も同じ事に気付き、2人で後ろを振り向くとそこには。

「あ、あの……」

当麻よりも少し背が低く、少し茶色が混ざり長いストレートの髪を一房だけ横に纏めたメガネをかけた少女がいた。

間違いない、彼女が風斬氷華だ。

「……風斬？ つ、馬鹿野郎！ なんでここにきた！」

「危ない、伏せろ！」

当麻と2人、風斬氷華に向けて走り出したが、それよりも速くエリスが動いた。

「エリス！」

「ウガアアアア！」

突然背中に衝撃が走り、俺と当麻は地面に倒れてしまった。

エリスが地面を殴り、その衝撃で抉られた地面のカケラが飛んできたのだ。

「えっ……」

茫然としていた風斬氷華の顔面にも大きく尖ったタイルのカケラが、直撃した。

「か、かぎぎりい〜!!」

「くそおー!」

エリスに向き直り懐に手を伸ばしたが、演算銃器はさつき使えなくなり爆弾はこの状況では周りに被害が出る。

今俺に使える武器は幻想支配だが、まだコイツには使えない。

「……かぎ、ぎり?」

背後から当麻の困惑した声が聞こえ、振り向く。

そこには風斬氷華が倒れていたが、顔面に大きなカケラが直撃したのに不思議と血や脳髓などが出ていない

それよりも問題なのは、その傷口だ。

確かに風斬氷華の頭半分は砕かれている。しかし、その傷口から見えるのはただの空洞。

まるで割れた陶器を見ているかのように、風斬氷華の頭の中は空洞なのだ。

それだけではない。空洞の中から僅かに見えたのは三角柱の形をした結晶のような物。

俺はそれに似た物を前に見た事がある。

幻想御手事件。その時対峙したA I Mバーストと呼ばれた異形の怪物。ソイツの頭部、中心核と思われる物体と同じ結晶だ。

「かぎ……ぎりっ？」

困惑した当麻の声が、静寂した辺りに響き渡った。

続く

第97話 「一騎打ち」

「なんだよ、これ……」

当麻は困惑の表情を浮かべながら、頭部が半分砕けた風斬氷華へ右手を伸ばそうとした。

「ダメだ当麻！ 触るな！」

「っ!？」

俺が叫ぶとハッと気付いた当麻が右手をひっこめた。

当麻の右手の幻想殺し。AIM拡散力場の集合体である風斬氷華に触れば、恐らく彼女は消滅するだろう。

「おい、ユウキ。一体これはどういう……」

「説明してる余裕ねえよ」

当麻達を背にシエリーと対峙する。

シエリーは特に追撃する事もなく、訝しげな表情で氷華を見ているだけだ。

まあ、あんな構造してる人間見れば魔術師とか関係なくそうなるな。しかし、この状況はどうするか。

「あ、あれ？ わた……し、メガネ……」

意識が戻った風斬氷華が自分の顔に手を当て……そのまま固まった。

「な、にこれ……えっ？」

彼女が横を向くと喫茶店のウィンドウに目を向けた。

土器が割れたのような顔、そこから見える不可思議な物体。

それが自分の姿だと気付くのにそう時間はかからなかった。

「いや……いやあ〜!!」

風斬氷華は叫び声をあげながら走りだした。

事もあろうか、シエリーとエリスという自分を狙う敵のいる方へと。

「ばっ、待てー!」

俺が止めるよりも早く、シエリーは無言で手に持ったチョークを振った。

すると風斬氷華を薙ぎ払うようにエリスの剛腕が降られた。

「ちっ!」

咄嗟に風斬氷華を突き飛ばし、そのまま地面を転がる。

俺の頭上数センチの所をエリスの腕が通り抜けた。

風斬氷華にも怪我はないようだ。彼女はゆっくりと立ち上がりフラフラとまた駆け

出して行った。

「あ……あ、あああ〜!!」

「風斬!」

当麻が叫んでも彼女は止まらず、そのまま地下街の奥へと走り去ってしまった。

「行くぞ、エリス。無様で滑稽な狐を狩りましょう」

「待て!」

彼女を追いかけようとするシエリーとエリスを止めようとしたが、シエリーはこちらに見向きもしなかった。

代わりにエリスが支柱と天井を抉り、健在を陥没させ通路を塞いだ。

「くそっ!」

思わず地面を殴りつけたが、それで何も解決しないのは分かっていた。

それでもさつきからイライラが止まらない。

シエリーを逃がした事もだが、風斬氷華の事も俺はイライラしていた。

なぜかと言われても、イライラしたからとしか答えられない。

当麻はどうしているかと思ひ、ふり返ると誰かと電話で話しているようだった。

どうやら話している相手は小萌先生で、内容は風斬氷華についてだった。

どうして小萌先生がその事を知っているかは分からないけど、当麻に説明する手間は省けたな。

「大丈夫ですか、愛穂先生？」

とりあえず、警備員達がどれだけの損害か確認した。それによつてやれる事が変わってくるからだ。

「ああ、私は大丈夫、他のみんなも」

辺りを見渡すと無傷の警備員は一人もいなかった。

みな頭や手に包帯を巻いて応急処置をしている。

「また借りを作つてしまったじゃん。それでこれからどうする？」

「決まつてる。俺はアイツを追う。風斬氷華も放つておけないしな。絶対アイツもそう言うぜ」

「アイツ？」

怪訝な表情を浮かべ、俺が向いている先を見た愛穂先生の眼が僅かに見開いた。

そこには電話を終えて風斬氷華の事を小萌先生から聞いた当麻が、さつきまでの困惑しきつた表情を一変させていた。

そして、愛穂先生や警備員達の視線が集中する中、静かに頭を下げてこう言い放った。

「俺の友達を、助けて下さい！」

それを拒否する者は一人としていなかった。

「覚悟はいいな、当麻？」

「ああ、勿論だ」

当麻を2人、僅かな明かりが灯る地下街をかける。

風斬氷華の行き先は分からないが、シエリーとエリスが進んだ先は分かる。

なぜなら、遠くから物音が聞こえてくるからだ。

あんな巨大で、アスファルトや建材で構成された巨人が静かに動けるわけがない。

「見つけた！」

走る先では、十字路の真ん中にへたりこみ涙を浮かべる風斬氷華に向けて、シエリーがチヨークを向けていた。

「泣くなよ、化け物」

シエリーが冷たく言葉が俺と当麻の心に火をつけた。

「アナタガナイテモキモチワルイダケナンダシ」

更に続けて言い放った言葉が、俺達の足に更に力をこめさせた。

「当麻！」

「おお！」

当麻が風斬氷華に振り下ろされたエリスの拳を右手で受け止め、俺がシエリーにそのまま走り抜け思いつきりぶん殴った。

同時にエリスの体がぼろぼろと崩れ落ち、ただのアスファルトの塊になった。
「ガフツ!? な、何……」

「ちっ、浅かったか」

殴った時の手ごたえがぬるかった。

恐らく、殴った瞬間後ろに飛んで衝撃を逃がしたんだろう。

コイツ、見た目よりも場数慣れしてる。

「エリス！」

すぐにシエリーはチョークを使い、空中に魔法陣のような図形を描いた。

するとエリスの体が再構成された。

やはりあのチョークで描くのが鍵って事か。

「つたくみつともねえな。こんなつまんねえ事でいちいち泣いてんじゃねえよ」

「な、なんで来たんですか!? それもたった2人で！」

「いんや、2人じゃねえよ」

急ぎシエリーの元から離れ、当麻と氷華を守るように立った。

と、同時にシエリーがいる通路とは別の三方向からライトがシエリーに向けて照らし出された。

すぐにシエリーはエリスの影へと隠れた。

「思ってたより展開がずつと速いな。流石警備員」

「これ以上生徒ばかりに危ない事させられないじゃん？」

愛穂先生が俺や当麻達を守るようにシールドを構えた。

「どうして、なんでわた……」

続けざまに言おうとした氷華の口に指をあてる。

「なんで私なんかの為に？」

それ以上の言葉はいらない。

「別に特別な事じゃない。俺はただ頼んだだけだよ……俺の友達を助けて欲しい、つてな」

「俺はともかく、当麻にとってはこれがいつもの事だ。だから、どうしてって質問は無意味だぞ？」

氷華は目をぱちくりさせ、困惑しきっている。

きつと俺達が来るまでシェリーに色々言われたせいで、当麻の言葉に実感が湧かないのだろう。

「絶望するのは勝手だけど、ちよつとそれは早合点しすぎだぜ？」

「ああ、今からお前に見せてやる。お前の住んでるこの世界には、まだまだ救いがあるつて事を！」

氷華は俺や当麻だけではなく、愛穂先生や他の警備員達に目を向けた。皆氷華を守ると言う意思が籠っている。

誰も化け物と言う目で氷華を見てはいなかった。

「そして、教えてやる！ お前の居場所（げんそう）は、これくらいじゃ簡単に壊れはしないって事を！」

「ちい、なんだ？ なんなんだよこの茶番はあ……エリス！ 1人残らずブチ殺せ！」

「させるか！ 配置B！ 民間人の保護を最優先！」

合図と共に警備員の銃器が一斉に火を吹いた。

狙うはエリスの下半身。

いかに魔術で生み出されようともあの重たい巨体では重心をさえる足を失えば自壊するのは、さつき俺が爆弾でやった事で明白だ。

シエリーも何か反撃しようと思構えているが、銃撃の厚さでエリスの影から出る事が出来ない。

当然、これは隠れているシエリーに何もさせない為の攻撃でもある。

愛穂先生が当麻と氷華を地面に伏せさせシールドを構え、迫るエリスの破片や跳弾から守っている。

俺も近くの警備員のシールドに隠させてもらっている。

銃撃音の中、愛穂先生が当麻に何か話しかけている。

恐らく、さっき話した作戦の確認だろう。

警備員の銃撃でエリスの動きを止め、一瞬の隙を作り当麻が幻想殺しでエリスを無力化させ、俺がシエリーをしとめる。

俺が無力化させる事に関しては、身体能力の高さをいやと言うほど知っているからか、渋々了承した。

しかし、当麻がエリスを無力化させる事には難色を示していた。

当麻の幻想殺しについては俺も説明したし、小萌先生からも聞かされているとはいえ、俺と違いただの一般生徒をあんな巨人に向かわせたくはないのだろう。

けど、自分達だけでアレを止められない事もさっきの戦闘で身にしみている。

いかに早く無力化させるかが肝心だと、俺と当麻で説得した。

その作戦が今第二段階に向かおうとしている。

愛穂先生が視線を俺に向けてきて、頷いて答えた。

「準備せよ（プリパレーション）！ カウント3！」

それを合図に警備員の銃撃が更に激しきを増した。

「カウント1——0！」

0の合図と共に、銃撃が突然止まった。

それと同時に俺と当麻は一目散に駆け出した。

「エリイ〜ス!!」

シエリーの叫びと共に、エリスの腕が俺達に振り下ろされる。

「させるか!」

懐から小型の青い球体をいくつか取り出し、エリスに投げつけた。

球体の正体は、以前火織に使った瞬間接着爆弾。

しかも、更に改良を重ねた強化タイプだ。

球体から飛び出た液体は、エリスの上半身にこびり付き即座に固まった。

これで当麻への障害はなくなった。

「後は……っ!?!」

当麻がエリスに触れそうになった瞬間。シエリーの口元が歪に歪んでいるのが見えた。

いつの間にかエリスの足元には魔法陣が描かれている。

「離れろ、当麻!」

考えるよりも先に全力で当麻を突き飛ばすと同時に、エリスと足元が同時に崩れた。

確か、こここの更に地下は地下鉄が通っていたな。

と思いつきながら、俺は更に暗い地下へと落ちて行った。

「間に合えー！」

落下しながら懐から小型の銃を取り出し、天井に向けて撃った。

銃弾の代わりに小さいフックがついたワイヤーが飛び出て、天井に突き刺さった。

「ふう、セーフ」

咄嗟にワイヤーガンで宙釣りになったおかげで、地面に激突しないで済んだ。

「……油断、してたわけじゃないけどな」

シエリーの執念を甘く見ていた。

あの時、アイツはエリスの地面に魔法陣を描いていた。

しかも、それは俺達への攻撃のためではなく脱出のためだ。

恐らくあの魔法陣は地面を破壊する為の物。

あの場では下手に戦闘を続けるよりも、体勢を立て直すべきと判断し、逃走の準備をしていた。

更にエリスをわざと自壊させるというオマケつき。

危うく俺だけじゃなく当麻も穴に落ちる所だった。

「シエリーは……もう奥へ行っただか」

ワイヤーを伸ばし、地面に降りる。

思った通りそこは地下鉄の線路だった。

辺りに人の気配はない。

どうやらシエリーはもう行ってしまったようだ。

「あの場で逃走して次に狙うは……インデックス!」

氷華と当麻を仕留め損ねたシエリーが次に狙うターゲットは、禁書目録しかない。

ここから追いかけるよりも、地上に出た方が早い。

ワイヤーガンでさっきの場所に戻ろうとしたが、ここは二手に別れた方がいいと思っ
た。

そこで携帯電話を取り出し、当麻を呼びだした。

俺は今地下深くにいるけどそこは学園都市製、すぐに当麻に繋がった。

「当麻、そっちは無事か!」

『それはこつちのセリフだ! 大丈夫なのか、ユウキ?』

声を聞く限り元気そうだ。

「時間がない。シエリーが次に狙うのは地上にいるインデックスだ。俺はこのまま地下からシエリーを追うから、お前は先にインデックスの所に行け!」

『何だつて!?! あ、でも、まだ地下の封鎖が解かれないって』

「そこは大丈夫だ。俺の指示した場所から地上に出る。俺も後で追う!」

『わ、分かった!』

当麻に場所をメールで送り、すぐに線路を走った。

メールしたのは、俺が地下街に入る時に使った非常口。

あそこは封鎖対象外になっている特別通路だから通れるはずだ。

俺は俺で地下からシエリーを追えばいい。

「そう遠くへは行っていない……んっ!？」

突然嫌な予感が出て、その場を後ずさった。

と、同時に支柱の1つが砕けて、降り注いできた。

さっきまでの戦闘でもろくなって崩れたのではない。

明らかに誰かが今崩したんだ。

「へえ、うまく避けたじゃない」

そこへ線路の暗闇からうすら笑みを浮かべたシエリーが現れた。

エリスはいない、不味いな。どうやらエリスだけを先行させたようだ。

「……シエリー……クロロホルム」

「シエリー……クロムウエルだ! わざとらしく間違えるな!」

シエリーはさっきまでの笑みを消し、こちらを睨んできた。

とりあえず先制口撃は功を奏したようだ。

「で、あのお人形を1人で向かわせて、お前はここで追撃の足止めか?」

「ふ、うふふふ、そうよ。今頃標的の元へ着いているかしら。心配しなくても後でちゃんどぐちやぐちやの肉片を届けてあげるから」

お返しだろうか、下手な挑発をしてくるな。

「あーいやいや、そんな心配は全くしてない。なぜなら、アイツがもう向かつてるからな」

「アイツ？ 幻想殺しの事か！」

「そうそう。それに足止めと言ってるけどさ。本当は俺がお前を足止めする為に追いかけてた、って気付いてるか？」

「何っ?」

「お前の魔術の事はもう既に理解した。あの巨人は一体しか作れないって事もな」

幻想支配でシェリーの全てはまだ視れないが、それでもさっきの戦闘中アイツが使う魔術の事はうっすらと視えた。

恐らく、あと少しで完全に視えるようになる。

「お前は巨人の遠隔操作は出来ても遠隔生成は出来ない。だから術者であるお前がここにいる以上、今インデックスを追いかけてるエリスを潰せば、もう脅威はなくなる」

ここに降りた時から、足止めにトラップ程度はしかけてあるとは思ったけど、シェリー自身が残っていたのは嬉しい誤算だ。

相性で考えれば、俺がシエリーと戦い、当麻がエリスと戦うのが一番理想的だ。

もつと正確に言えば俺が【敵を倒し】当麻がインデックスを【助ける】というのが理想的だし、正しい構図だよな。

最も、誰の邪魔も受けず、シエリーと1対1になりたいとは思ってたけどな。

「……お前は一体、何者だ？」

ここに来て初めてシエリーは俺を真つ正面から見据えてきた。

思えば、俺は当麻や氷華と違って、こいつからすれば警備員と同じくただの邪魔者にか見えてなかった。

幻想支配の事を知らないのかどうかは、この際どうでもいい。

大事なのはここからだ。

「俺の名は……木原勇騎だ」

俺がそう名乗ると、シエリーの表情が強張りすぐに殺気に満ちた目になった。

「木原、だど？ てめえ、まさか……」

「なんで俺が20年前の事を、お前とエリスの事を知ってると思った？ たかが学生にしか見えない俺が？」

木原と聞き、シエリーの脳裏に浮かんだのは20年前の実験の事だろう。

当然だ。あの実験での科学側の仕掛け人は、木原の人間だったのだから。

「てめえは、あの木原の関係者か！」

「まあな。だからどうしたって言われると、返答に困るが……とにかく、お前の事情はお見通しだ」

本当は木原と名乗る必要はない。

けれども、俺はどうしても1対1でコイツに名乗らなければと思った。

その理由はよく説明できない。

別に木原の業を背負うつもりも、肩代わりする気もない。

だけど、俺が木原の関係者と名乗る事で、コイツの復讐心が自分に向けられると思った。それだけだ。

そして、その試みは成功したようだ。

「そおーかい、そーかい。わざわざ名乗ったつてのはそーいうことかい。だつたらお望み通り……テメエをグチャグチャのミンチにしてやんよお！」

「やれるものなら、やってみろ魔術師！」

魔術師との2度目の一騎打ちが始まる。

続く

第98話 「魔術と科学」

ゆつくりと周囲を見渡す。

地下トンネルの天井や壁などに数十個もの魔法陣が描かれている。

これが一齐に発動したらこんなトンネルはあつという間に崩壊するだろう。

発動、したらの話だが。

「くふつ、ふふふつそれで？ 木原だろうが何だろうが、あなた1人で何をしようつていのの？」

「その言葉、そつくりそのまま返すぜ？ 1体しか作れない切り札のエリスは遥か彼方にやつちやつて、今のお前はまるつきり無防備。そんなんでどうやつて俺をグチャグチャにする気だ？」

「それは、こうするのよ！」

シエリーがチョークを振う……が、何も起こらない。

「それで、どうするつて？」

「チイ！ どう言う事？ なぜ魔術が発動しない!？」

何が起きたのか分からず、シエリーは取り乱したようにチョークを振うが、結果は同

じ。

俺が幻想支配でシエリーの魔力を支配したからだ。

シエリーは超一流の魔術師だろうけど、インデックスやいつぞやの錬金術師よりもレベルは低い。

だからコピーするだけじゃなく、停止させるのも簡単にできた。

「お前……なんだ、その赤い目は！ それにこの感じは……」

「なんだ、ようやく気付いたのか？ さっきからこうだったのに」

俺の目を見たシエリーが、やっと異変に気付いたようだ。

今の俺の眼は赤く輝いていて、シエリー自身の魔力を感じるはずだ。

「幻想殺しだけがお前らの天敵じゃないんだよ、魔術師」

「くっ……」

魔術を封じられても尚、シエリーはチョークを手放さず俺を睨みつけてくる。

その瞳に見える感情は、憎悪だけではない事に気付いた。

となると……こりや作戦変更だな。

「お前……敵討ちしに来た、だけじゃないのか」

「っ、いきなり何を言い出すの？」

「学園都市に正面突破しておいて、堂々と道を歩き魔術を行使して、でもお前がやってい

る事はどこか変なんだよ」

「……………」

こいつの行動が読めなかった部分があった。

戦争の引き金を起こす目的を聞いても、それでも理解出来ない部分があった。

それが今繋がった気がした。

「戦争を起こそうとするなら学園都市を無差別に攻撃すればいいのに、お前はそれをしなかった。黒子との戦闘でもお前は逃げを選んだ。それなのに風斬氷華やインデックス達は周到に追いかけている」

「それが、どうした!」

「お前、戦争を引き起こしたい気持ちよりも、20年前の自分とエリスみたいな悲劇をもう引き起こしたくないって想いの方が強いんじゃないか?」

「このつ、テメエに一体何が分かるっていうんだあ!」

シエリーはチョークを捨て、拳を握り殴りかかってきた。

が、俺はその拳を簡単に掴んでみせた。

危なかった。実はそろそろ幻想支配がヤバい状況で、効果が切れそうになっていた。

「1つ聞くぞ、シエリー! クロムウエル。魔術で当麻とインデックス達の様子をずっと見てたはずだよな? それを見てどう思った?」

「っ!？」

「羨ましい、妬ましい、そんな感情がお前の中に一瞬でも沸かなかつた。なんて言えるか？」

「な、何を……言っているの？」

「一步、また一步後ずさりしていく。」

「当麻とインデックスに、昔の自分とエリスを重ねたんじゃないか？」

「そ、そんな事、あるわけ……」

「元々今回学園都市に襲撃を仕掛けたのだから、魔術サイドのインデックスが学園都市で科学側の学生に保護されているって知ったからじゃないのか？」

「このっ、好き勝手……言いやがって、ああそうだよ。その通りよ！あの時から、ずっと科学が憎くて、学園都市が憎かつた！けど、だからって魔術と科学がぶつかるのを、心の底から望めなかつた！」

今のシエリーからはさつきまで感じた殺気も敵意も感じなかつた。

そればかりか、まるで駄々をこねる子供のようにすらみえた。

「禁書目録が学園都市にしていると知って、またエリスの時みたいな状況になって……いてもたつてもいられなくなつた！だけど、いざここへ来てみても私が本当は何がしたいのか分からなくなつた。だから……」

後の言葉が続けず、ゆらりと立ち上がった。

「マズイ！ もう、幻想支配が限界だ！」

やっぱり魔術師は慣れていないせいなのか、能力停止の時間が短い。

身体からシエリーの魔力が消えたの感じた。

シエリー自身もその事に気付いたのか、再びチョークを手に取った。

「我が身の全ては亡き友のために (Intimus115) !!」

トンネル中に描かれた魔法陣が一斉に輝きだした。

もうあと十数秒で完全に崩れ去るだろう。

と、考える前に俺は走りだしていた。

「ひとまず、お前は一度頭冷やしやがれ！」

手加減はしたが、渾身の一撃が今度こそシエリーを完全に捉えた。

2, 3度バウンドしてシエリーの体は地面へと転がった。

「お前、本当はとても優しい奴なんだな。復讐のためだけにきたのかと思って、木原の名前出したの意味なかったぜ」

「……………それでも、私は……………エリス……………」

シエリーは涙を流しながら意識を失った。

もう心配はいらないが、一応手足を拘束してから愛穂先生に確保の連絡をした。

後は警備員に任せて、俺は地上を目指した。

シエリーは倒したけど、エリスは止まらないと分かっていたからだ。

さつきまでエリスはシエリーが遠隔操作していたけど、今は自動制御に変えている。

シエリー自身の魔力を経つても、しばらくは動き続けるはず。

まあ、こういう時の為に当麻を先に行かせたから大丈夫だろうけどな。

予想通り、俺が地上へ出た時にはすでに全てが終わっていた。

エリスを構成していたパーツで出来た瓦礫の山。

これを見るだけで何が起きたのかは一目瞭然だ。

「あつちも、大丈夫そうだな」

上を見上げれば、工事途中の廃ビルの屋上でインデックスと氷華が抱きあっていた。

結局、風斬氷華と当麻とインデックスがどう知り合ったとか、そういう事情は分からないが、察しはつく。

色々あつたけどなんだかんだで当麻が説得した……と言うか、今回ばかりはインデックスの方が活躍してみたいだな。

で、俺はある意味で魔術師相手にするよりも苦痛を感じる作業を始めた。

尼視への報告だ。アイツの事だから一部始終を見ていた可能性は大だけど、それでも

連絡をしなければいけない。

「あーもしもし？ オレオレ、シエリーはなるべく傷付けずに無力化して警備員に引き渡した。後はそっちでやってくれ、以上」

『ちよつと待ちなさい、待て、wait!』

「簡単に報告を済ませて帰って寝ようとしたけれど、そうはさせてくれないらしい。と言うか、なんだその三段活用。今回はどんなキャラ設定にしてるやら、歳考えろよ」

『モノローグのつもりだろうが、思いつきり口に出してるぞ、このクソガキ』

「あつ、聞こえてたか？ うんうん、やっぱりオバサンにはその口調が似合ってるぞー」
電話口の向こうで何か歯軋りする音とメキメキって音が聞こえてくるが、気にしない。

アイツにそんな握力ないの知ってるし。

『……で、3度目の魔術師相手はどうだった？』

散々挑発したが、いつものように冷静で冷淡な声でそう聞かれた。

「意外だな。てつきり風斬氷華の事を聞いてくると思ってたのに」

A I M 拡散理樹場の集合体である風斬氷華を幻想支配で視たらどうなるか？ が今

回の仕事の目的だと思つたのに。

『あつちは知らんよ。興味もない。それよりもそろそろ魔術師相手にも視慣れてきたん

じゃないか?』

「どうだろうな。確かにシエリーを視るのは簡単に出来たけど、コピーや能力停止は長時間出来なかったし」

流石に比較対象が聖人や錬金術を極めた魔術師じゃ厳しいか。

「ま、どっちにしろ。神裂火織クラスでなきや多分タイムマンなら魔術師相手でもどうにかなりそうだな」

『ふむ、そうか。それを聞けただけで良しとするか』

と言つて、尼視は電話を切ってしまった。

いつもの事なので特に気にもしない。

それからすぐにメールで今回の報酬について振り込み明細が届いた。

これもいつもの事、そう全てがいつもの事だった。

だが……今回の一件は少し違って見えた。

「科学と魔術、か」

深く考えた事はなかったし、考える必要もなかった。

でも、今回のような事件は今後増えると言う予想はインデックスの事件の時からしていた。

「……能力者相手でも魔術師相手でも俺のやる事は変わらないか。殺すか殺さないかの

違いなんて、毎回あるし」

考えても無駄な事は考えない。

まずは昨日から働きづめの疲労を回復する事に専念しようとな俺は家へと戻った。

それから数日後、またもや魔術の厄介事に当麻と俺が巻き込まれる事になるとは夢にも思わなかった。

続く

第99話 「オルソラIIアクイナス」

9月8日

「『禁書目録誘拐事件解決の為、学園都市外部へ赴く上条当麻の護衛、及び事件解決への全面協力』……ねえ？」

とある実験のデータを届ける仕事の為、来たくない尼視の所へわざわざやってきたのに報酬と共に手渡されたのは新しい指令書と、外出許可書その他もろもろ関係書類。

「なんだい。その心底嫌そうな胡散臭い顔は」

「存在そのものが胡散臭いお前に言われたくない。こんな茶番になんで付き合わなきゃならないんだ？」

「ん〜？ これのどこが茶番だ？ イギリス側との密約は知っているだろう？ 一時的に滞在している禁書目録にここで何かあれば国際問題どころか、戦争レベルの大問題だ。それを解決するのは保護者である上条当麻の仕事。で、その護衛に適任なのは、何度も彼と共に魔術絡みの事件を解決してるお前以外にいない。どうだ？」

尼視は何言ってるんだと言う顔で、長々と今回の指令について説明したけど、実に胡散臭い。

「まず第一、狂言誘拐なんか仕込んで俺と当麻に何をさせたいんだ？ しかも、学園都市の外でだなんて」

学園都市の外、そんなの行った事、1、2回程度だな。

「なぜ狂言だなんて分かる？」

まるで生徒の答え合わせをしている教師の顔で、つてこんな事言ったら小萌先生や黄泉先生に失礼だ。

ニヤニヤ顔の尼視は無視して書類だけひったくり、その場を後にした。

なぜ、狂言誘拐と分かったか。それは簡単、インデックスが本当に誘拐されていたら、こんな悠長な事していられない。

緊急オーダーとして俺か誰かの所に来るはず。

それがなく、しかもわざわざ外出許可書まで用意して俺にのんびり手渡す余裕なんて……コイツならしかねないか。

恐らく魔術絡みの事件があり、その解決にインデックスが必要で、保護者であり幻想殺しを持つ当麻も必要。

で、それらの護衛と監視の為に俺が選ばれた。貧乏くじとは言わないけど、損な役回りだ。

「ま、何にせよ。当麻に合流すればいいか。つて、えっ？ 今回の任務では殺害は御法

度。武器・爆弾・バイクは一切使用禁止。小道具は必要最低限のみ、後は現地調達!」
指令書を改めて見直した俺は思わず声をあげた。

殺すなど言うのは分かる。錬金術師もストーカーもシェリーも殺すなど言われた。

学園都市外部の人間でも殺した事は何度もある。

だが、相手が魔術師となれば話は別。

科学側の俺が殺すレベルにまで介入するのは、拭いがたい問題になる……のは今までがそうだったし、納得出来る

が、学園都市製の銃器や爆弾などの武器は勿論、バイクも持ち込めないのは不便だ。

移動手段は徒歩か現地での乗り物を使用して、武器も素手か現地で調達する事と書かれている。

でも、これも分からなくもない。学園都市の技術が漏えいする事を防ぐなどと言う名目だろう。

前に学園都市の外出た時は、尼視の付き添いで武装も何も持たず、実に平和な仕事だったし。

色々と気にくわれない点はあるけど、火織みたいなトンでもない奴相手じゃなきや、別に素手でも問題ない。

一番面倒なのは……

「素手でやるのは相手次第じゃ時間かかるな」

と言う事だけだ。

「ま、なるようになるか。当麻やインデックスもいるんだし、殺しとか銃器は刺激がありすぎるしな」

当麻はまだ学園都市を出ていないのは確認済み。

向こうに俺が同行するかどうか知らせてあるか不明だ。

ひとまず、当麻の寮まで行ってみるか。

「動機は歪んだラブなのかー!？」

「あれ、この声は舞夏か」

当麻の寮に付くと部屋の前で当麻と舞夏がいた。

掃除ロボに乗った舞夏は驚きつつも少し興味津々と言った顔をしていて、当麻はぐつたりとお疲れモードだ。

「当麻、舞夏。一体どうしたんだ？」

「ユウキ？ お前こそ一体どうしたんだよ」

「おーユウキ！ 実はな、上条当麻とシスターと神父の三角関係発覚だぞー！」

「………はい？」

訳分からん。当麻の方を見ると、ふかーく溜息を吐きなら紙を渡してきた。

その紙には、彼女の命が惜しければ、今夜7時に学園都市外の廃劇場『薄明座』まで来い。と書かれていた。

この彼女と言うのはインデックスの事だろう。つまりこれは狂言誘拐の小道具と言う事か。

「定規で筆跡隠しなんて、三流ドラマの見過ぎだろ。で、差出人は？ 舞夏が神父って言うってたけど、まさか……」

「ああ、アイツの事だよ。ご丁寧に外出許可書付きでな」

「何だー？ ユウキも神父の事知ってるのか？ それはつまり、四角関係!？」

「んなわけあるか!」

目をキラキラさせた舞夏に、当麻と一緒にツツコミを入れた。

まあ、舞夏はこういう事に興味津々なお年頃なのだろうな……

「と言うわけで、俺はこれから出かけなきゃならないんだ。悪いけど、用事なら帰ってからでいいか？」

「いんや、俺の用事はソレだ。俺もインデックスの誘拐事件解決に協力する。建前としてな」

「はあ?」

ポカーンとする当麻に事情を話し、2人で学園都市の外に向かう事になった。ゲート近くの駐車場にバイクを預け、徒歩で学園都市を出る。

「あー何年ぶりだろうな。学園都市を出るのって」

周りの景色を眺め思わず呟いた言葉に当麻が怪訝な表情を浮かべた。

「あれ？ ユウキは学園都市生まれなのか？」

「ん、ああ、まあな。生まれも育ちも学園都市で外へは2、3回出たくらいだ」

忘れかけてたが、当麻は7月以前の記憶がないんだったな。

同じような会話を前にもしたっけ。

あの時も言っていないが、育ちはともかく生まれは不明だけどな。

この話題は膨らませたくないの、違う話を振った。

「で、薄明座ってのはどこなんだ？ 地図とか入っていないのか？」

「地図は入っていないな。GPSで調べたけど、潰れた劇場の場所なんて載っていないぞ」

潰れた廃墟の場所なんて最新地図には乗せないか、仕方なく近くのコンビニで話を聞

いて見る事にした。

古い地図でもないかと探したが、生憎カバーが掛かっていた。

わざわざ買うまでもなかったのだけど、そこで当麻が財布を忘れてきた事に気付くと

言ういつもの小トラブルがあった。

「いやあー良かった良かった。あそここのバイトのおっちゃんが場所知っててくれて」

財布を忘れてブルーだった当麻が、それを忘れようとわざとらしく陽気に振る舞う。

「現実逃避って言葉、知ってるか？」

「うぐっ！」

なのでわざとらしく言うと、グサつと何か突き刺さったような顔になって面白い。

薄明座は学園都市から一キロくらいの場所にあるようで、この分なら待ち合わせ時間よりも早く付けそうだ。

バスを使うまでもないかと近くの停留所へ目を向けると、場違いな格好をした女性がいるのに気付いた。

「おい、当麻。あそこにシスターっぽい人いるな」

「本当だ。シスターっぽいと言うかシスターじゃないか？」

どうしようかと当麻と顔を見合わせる。

9月には言ったとはいえ、まだまだ暑い。

それなのにシスターは長袖長スカートの真黒な修道服で身を固めている。

顔はよく見えないが、バス亭の時刻表と睨めっこしているようで挙動不審と言えなくもない。

このままスルーしてもいいんだが、何か怪しい。

待ち合わせの時間まで余裕もあるし仕方ないので、話しかける事にした。

正直、嫌な予感しかしないけどな。

「あのーそのシスターさん。どうかしましたか?」

「はい? 私の事でしようか?」

振り向いたシスターを見た当麻が少し驚きの表情を浮かべた。

それも無理はないか。

シスターは見るからに外国の人で、俺達より少し年上に見えて、流暢な日本語を話す口調はおっとりとしていて、何より修道服を着ていても分かるくらい胸がでかい。

要するに当麻が常日頃タイプと言っている、管理人のお姉さんタイプなのだ。

「ああ、さつきから時刻表見てるけど、どこか行きたい所でもあるのか?」

「まあ、それは御親切にありがとうございます。実は学園都市に向かうバスを探しているのですが、それらしいのがどこにも見当たらないのでございます」

どうやらこのシスターは学園都市に行きたいそうだが、いささか不可解だな。

学園都市に用事があるなら、行き方とか知っていると思うんだけど。

「学園都市へはバスは走ってないぞ」

当麻の言う通り学園都市へはバスも電車も走っていない。

セキュリティやら密輸対策やらで学園都市へは契約タクシーこそあれど、交通機関

は一切ない。

徒歩で入るか、自家用車で乗り入れて検査を受けるしかない。

「学園都市に用事があるなら、徒歩で入るしかないな。ほれ、あそこらへんにゲートがある。割と近いだろ？」

「まあ、それではあなた様方は徒歩で学園都市から来られたのですね？」

「そう。許可証あるなら今なら割と簡単に入れると思うぞ」

「それはそれはお忙しい中、ご助言ありがとうございます」

のほほんと話すシスターだな。

そう言っていると、バスがやってきた。

どこへ向かうかは知らないけど、俺達もこのシスターも乗る用事がない。

少しバス亭から離れた俺達だったが、シスターは俺達に頭を下げ……そのままバスに乗り込んだ。

「ちよつとまで！」

慌てて俺と当麻でタラップに足を乗せたシスターを止めようと駆け出した。

「あら？ あなた様方もバスに乗られるのですか？」

「ちげーよ！ さつき俺とユウキの説明聞いてたのか!? 学園都市へはバスじゃ入れないの！ このバスに乗っても変な所へ行くだけだ！」

あ、変な所へ行くと言われ、バスの運転手の顔が若干ひきつったな。

「まあ、そうでございませうか。重ねてご助言、まことにありがとうございます」
シスターは笑顔で礼を言う……バスの中へと入って行こうとした。

「人の話を聞け——！」

結局俺と当麻でシスターの手を引き、バスから降りた。

その時の運転手がそれはもう迷惑そうな顔をしていた。

救いなのは、乗客が1人もいなかった事だな。

「はあ、なんでこんなに疲れるんだよ、全く」

さっきから叫びっぱなしで当麻はぐったりとしている。

俺も精神的疲労が蓄積中。こんなに疲れさす相手はなかなかいないぞ。

で、元凶たるシスターはどこからハンカチを取り出し、当麻の頬の汗を拭っていた。

突然の事で、当麻は顔を赤くして後ずさった。ウブな奴。

「失礼ですが、あなた様はかなり汗をかいているのでございますよ」

「それはお前のせいだ……」

本日何度目かの俺と当麻のハモリであった。

つてこのままじゃ話が進まないな。

「で、学園都市に何の用だ。許可証はあるのか？」

「許可証でございませうか？ あいにくと手持ちが少ないのですが……」

「お金の話じゃねーよ！ 学園都市へ入る書類！ それがないと一般人は立ち入り禁止！ 無理やり突破しようとしたらあつという間に捕まるの！」

最近ではありとあらゆる手が入ってくる魔術師の方が多いけどな……主に力技。

「そうでございませうか。許可証なるものは持っていません」

「はあーやっぱりか……」

許可証を持つているなら、学園都市に入る方法くらい知ってるはずだもんな。

送迎される場合もあるし、色々説明受けるし。

「それでは、あちらのバス亭で待つていればバスが来るのでございませうか？」

「いつの話してるんだよ!？」

どこで話がねじ曲がったのか、少し離れた場所にあるバス亭を指さすシスター。

俺も当麻もこの時思った。このシスターを一人にしてはいけないと。

怪しいおにーさんやら不良なガキんちよに簡単に騙されてしまう、そういうタイプだこのシスター。

かと言っていくら俺でも簡単に許可証なんて出せるわけがない。

尼視に借りを作るのは死んでもイヤだし。

まあ、どう言った事情で学園都市に入りたいかにもよるか。

「もう一度聞くけど、学園都市に何の用だ!？」

「ユウキ、落ちつけ。顔が怖い顔が怖い!」

さつきよりも凄んでしまったが、それはこのシスターが悪いと思っておこう。

それを察した……わけじゃないだろうが、シスターは少し真顔になりこう答えた。

「実は私、追われているのでございます」

あ、嫌な予感の中。

「それで、これからどちらに向かうのでしょうか？」

「俺と当麻が最初に向かおうとしていた所。そこならそつちの事情に詳しい奴いるからさ。とりあえず、そこへ行った方が話が早い」

シスターが言うには、ちよつとした方が話が早い。教会勢力の力が及ばない学園都市に助けを求める途中だったそうだ。

その際、俺も当麻も魔術師の事を知っているのにシスターは驚いていた。

でも、学園都市に逃げ込んでも魔術師の手から逃れられるとは限らない。

既に何人もの魔術師が潜入してるし、つい先日もしエリーに強引に突破されたばかりだ。

なので、インデックスとステイルが待っている場所に向かう事にした。

どんな問題抱えているかシスターは言わなかったが、少なくとも学園都市に逃げるよりは、ステイルに話を振った方がどうにかなりそうだ。

「アイツがグダグダ言ってきたらインデックスを利用して丸めこませよう。」

「ユウキ、さつきから悪い顔になってるぞ」

「ん？ だって悪い事考えてるし。安心しろ、割を食うのはステイルだから」

「あーそれならいいか」

「案外当麻も薄情だな」

シスターと3人で雑談しつつ、目的地である薄明座に辿りついた。

なんだかんだありながらも、待ち合わせ時間前に着いた。

廃劇場とは言え、まだ本格的な取り壊し工事は行われていないようだ。

解体に使う重機も資材も見当たらない所を見ると、既に買い手がいて建物をそのまま

再利用するのかもしれない。

「インデックス達は、中か」

「そうだな。数人の気配がする。それも魔術師の気配」

「えっ、ユウキ。そんな事もわかるのかよ？」

「まあな。なんとなくく分かるようになった」

幻想支配の影響か、能力者が近くにいれば分かるのは前からだ。

能力者以外でも、ただの人の気配も分かる。

最近では魔術師も近くにいれば分かるようになった。

気配の読み方は誰かに教わったわけじゃないく、気が付けば身についていた。

劇場の正面に回ると中に3人の男女が出てきた。

そのうち2人は俺達の目的の人物で、ステイルとインデックスだ。

「とうま！ その女の人は誰！」

「いきなりそれかよ。ま、気持ちに分かるけどさ」

「あれ？ ゆうきも一緒だったんだ」

インデックスはステイルから事情は聞いているようだ。

それにしても、まず最初に巨乳シスターに目が行くとはな。

「それよりも、その隣にいる不良神父に色々聞きたい事と言いたい事があるんだけどな

！ 主に狂言誘拐までして何がしたいのかとか！」

「あー狂言誘拐は気付いているのか。君よりその隣にいる彼に聞いたのだろうけどね。

ま、君達には人探しを手伝ってもらおうと思ってるね。こちらにいるローマ正教のア

ニエーゼⅡサンクティスが現場責任者だ」

ステイルに紹介された幼女、アニエーゼはおどおどしながらも俺達に頭を下げた。

インデックスよりも更に小さく幼いアニエーゼは、よく見ると連れてきた巨乳シス

ターと同じ修道服を着ている。

上は長袖だが下はミニスカと言うアンバランスきで、30センチもの厚底靴を履いている。

きつと身長にコンプレックスあつて、例えばバレバレでも高く見せたいんだろうなーと心の中で同情の涙がホロリ。

「何やら不快な思考を感じるのですが……」

「あー、うん。がんばれアニエーゼ」

「なんで初対面の人にいきなり励まされるんですか!？」

コイツ面白いな。持って帰って玩具にしたい。

「はいはい。漫才はそこまでそこまで。とつとと仕事を片付けようか」

「んで、人探して一体誰を探すんだ？ ひとつとくけど、俺は普通の高校生だぞ。ユウキ

みたいな事はできねえぞ」

「俺を判断基準にするのは間違ってるからな、当麻？」

ともかく、誰を探しているのかそれが肝心だ。

ステイルはつまらなそうに煙草の煙を吐きながら、当麻の後ろにいるシスターを指さした。

「それには及ばない。そこにいるシスターが探し人ってわけさ。と言うわけで君達の出

番は終わりだ。御苦労さま、もう帰っていいよ」

「おい、そりやどういふ事だよ！」

「どうもこうも今言つた通り、そこにいるオルソラ＝アクィナスが行方不明の探し人なんだよ」

名前を呼ばれてシスター、オルソラはビクツとなつた。

「オルソラ、だつて？」

「どうした？ 君も何か言いたい事があるのかい？」

「お前、オルソラつて名前だったのか」

——ズルツ！

そう言えば、シスターシスターと呼んでて肝心の名前聞くのすっかり忘れてたぜ。

ん？ どうしてみんなずっこけているんだ？？

「き、君つて男は……ま、まあいい。とにかく、彼女をアニーゼに引き渡す」

「あれ？ そう言えば、お前誰かに追われてるつて言つてたよな？ それ今回の件に関

係あるのか？」

当麻の問いにオルソラは無言で俯いた。

その表情は分からないが、少し震えているようだ。

「心配ない。僕らイギリス清教もすぐに引き上げる。それくらいの警戒心は彼らに見

習ってもらいたい所ではあるがね」

彼らつて誰だ彼らつて、警戒心ないのは当麻だけだぞ。

『いやいや、そう簡単に引き渡されて貰っちゃ困るのよなあ?』

突然、頭上から野太い男の声が響いた。

頭上には紙風船が不自然に浮かんでいて、声はそこから聞こえる。

当麻達が頭上に目を向ける中、瞬時に意識を切り替えて周囲を警戒する。

こう言う場合意識を一点に集中させ、他の場所から奇襲をかけてくるパターンが多い。俺もこの手をよく使う。

建物の影や屋上、それ以外の物影全てに意識を向けるが、気配はない。

『オルソラ! アクイナス。お前は分かっているのよな。ローマ正教に戻るより、我ら天草式と共にあった方が有意義な暮らしを送る事が出来るとよ』

——ゾクッ

それと同時に、オルソラの周りの地面から刀身が3本飛び出た。

「しまった!」

刀身はそのまま地面を走るように三角に切り取り、オルソラは地面ごと地中へと姿を消した。

「オルソラ!」

「待て当麻！」

「ダメだよとうまー！」

当麻が急いで地面の穴へ駆け寄ったが、俺とインデックスが止めた。

地面に空いた穴の底には、いくつもの刃が侵入者を迎撃しようとして待ちかまえていた。この状態の所に丸腰では俺も飛びこめない。

と、ステイルが口に加えた煙草を放り投げながら、呪文を唱え始めた。

「我が手には炎、その形は剣……」

煙草の火が激しく燃え盛り、ステイルの手に剣となつて宿り始めた……が遅かった。

「ちいつ、逃げられたか」

既に穴の中は何も見えず、襲撃者達はこの場を立ち去つて行つた。

「くそつ、すぐ側にいながらやられたぜ」

地面を叩くが、どうにもならない。

俺達の意識を上に向けて、不意打ちを仕掛けるのはまでは読めたが、まさか地面の下から仕掛けてくるとは思わなかった。

ここら辺の地下には、下水道が通っていてまさに奇襲にはうつつつけの場所だった。

「おい、一から説明する気あんだろうな？」

「説明なら、僕の方が聞きたいくらいだよ」

当麻が吐き捨てるように言うと、ステイルは忌々しげに答えた。

続く

第100話 「法の書」

法の書。それが今回の事件の発端だ。

インデックスが難しく説明しようとした所、当麻が頭を抱えてしまったのでステイルに簡単に要約だけしてもらった。

法の書とはそれ1冊で魔術の世界が終わってしまう恐ろしい魔導書らしい。

魔導図書館であるインデックスも勿論記憶しているが、その内容は高度に暗号化されていて今まで誰も解読出来なかった。

しかし、先程誘拐されたオルソラが解読法を見つけた。

しかも、法の書は日本の博物館で公開予定の為、こちらに移送中を天草式十字凄教と言う日本の魔術組織が襲撃し、オルソラも法の書も纏めて攫った、と言うわけだ。

天草式十字凄教、神埼火織が頭を務めていた組織だったが、ある事情から脱退した。そう以前当麻は火織本人から聞かされたそうだ。

で、頭であり聖人である火織が抜けた事で弱体化した天草式が強化のために、法の書を求めた、それがステイル達の見解だ。

それらを聞いて、そこまで重要な魔導書をどうやって盗んだんだ？ とか、どこか不

自然で腑に落ちない点がたくさんあった。

でも科学側の俺の視点ではそうでも魔術側から見れば常識的な事も多々あるので、うかつな事は言わない方がいいな。

「話は大体分かった。それでこれからどうする？ 向こうでアニエーゼが色々指示出してるみたいだけど、奴らの本拠地とか逃走手段とか何か分かってる事はあるのか？ 大人数で行動してるなら目立つだろ？」

俺が問いかけると、インデックスが少し困った顔をしながら答えた。

「うーん、天草式は私達みたいな修道服とか決まった服装を持たないんだよ。隠密性に特化した集団だから何気ない普段着で、周りの環境に解け込むから人数がたくさんいても目立たないかも」

言われてみればさつきオルソラが連れ去られた時、地下の下水道にいる複数の人影をちらつと見えた。

その時、彼らはどこにでもいそうな日本人の服装で、少し戸惑ったくらいだ。

「それだけじゃなくて天草式は、普段の食事や服装にも魔術的な意味をもたせてるし、ただの台所が魔術の儀式場だったりするんだよ」

「つまり、このバーコードみたく分かりやすい呪文とか変な模様描いた道具とか使わず、ただ歩いたり踊ったりしているような動作でも発動できる魔術を使うって事か？」

「えっと、大体それであってるよ」

「ちよつと待て、僕を引き合いに出さないでくれないか？　そもそもバーコードとはなんだ!？」

バーコードを無視していると、部隊に色々指示を出していたローマ正教のアニエーゼがやってきた。

「あつ、えつとおまたせ、しちまいやした。こちらの状況説明を行いたいですけど、そちらの準備はよろしいのでございますのでしようか？」

アニエーゼは緊張しているのか、物凄くちぐはぐな日本語だ。

さつきは結構普通に話していた、と言うか普通にツツコミ入れてきたのにな。

「あー、別に無理して日本語でなくても、俺はイタリア語が分かる。当麻にも翻訳して聞かせるから、そつちで話してくれて構ないぞ？」

「イタリア語が分かるのですか!？」　いえ、お心遣いはありがたいのですが、日本語も話せますので大丈夫です。さつきは少し緊張しただけです。ありがとうございます」

俺がいきなりイタリア語でしゃべったので、アニエーゼだけでなくステイルとインデックスも驚いた顔をした。

英語も満足に出来ない当麻は、俺とアニエーゼのイタリア語会話をハテナマークを浮かべながら聞いていた。

「なあ、ユウキ？ それ何語だ？」

「イタリヤ語だ。俺は一応英語以外にもヨーロッパの言語やロシア語、中国語もそれに話せるぞ？ 読み書きも程々にな」

「おお、これが、国際派って言うんだね！」

「まー仕事柄、な？」

流石に外国まで行く事はないけど、外国人相手にする事は意外にあるからな。

「俺の事はいいだろ。で、天草式の追跡はどうなっているんだ、アニエーゼ？」

「あ、もうしわけありません。では、現状の報告を……つとと、ひや！」

気合を入れ直そうとしたのか、背筋を伸ばしたアニエーゼだったがバランスを崩して後ろに倒れかかった。

やっぱそのシークレットシューズはやりすぎだったか。

と、倒れそうになったアニエーゼが振り回した手が当麻の手を掴み、そのまま2人して倒れた。

「うわっ!?!」

受け身も取れず当麻は前へ倒れ込んだ。

これがいつもなら、アニエーゼを押し倒す形になるのだろうけど、今回はさらにそのワンランク上を行っていた。

「いってて……ありや？ えっ？」

なんと当麻はアニーゼのスカートに首を突っ込むような形で倒れていた。

どうやったたらそんな正確な位置に倒れるのか、感心してしまうな。

で、後ろに倒れたアニーゼの短いスカートが全開になって、パンツが丸見えになっているので俺は急いで目を逸らした。

そして、その先には呆れた顔をしたステイルと、顔を真っ赤にして歯をカチカチ鳴らしているインデックスの姿。

「キャッ!? いや、は、はなれてー!」

「ちよっ、おさえこむっ……むごっ!?」

顔を背けているので状況がよくわからないが、布をぐそぐそする音と、抑えこまれていような当麻の声で大体分かった。

よーするに、いつものラッキースケベってわけか。

いや、ここまで来ると進化してないか？

「と、とどうま!? それはちよつとイタズラの限度を超えてるかも!」

「どう見てもただの犯罪です……って、ほらそこどけ!」

声で大体の位置が分かったので、後ろを向きつつ当麻の脇腹を蹴って無理やりどかせた。

「……うちの馬鹿が迷惑かけた。大丈夫か？」

「い、いえ、私が原因なんですから、どうも、です」

後ろに手を伸ばすとアニエーゼがその手を握ったようなので、引き寄せて立たせる。横を見ると咳き込みつつも当麻も自力で立ちあがったみたいだ。

「あなたたつて随分と器用なんですね」

「コイツよりはな」

「ひ、ひどい……」

起き上がったって尚脇腹を押さえている当麻を指さす。

「ま、まあともかく、仕切り直しといきやそう」

コホンと咳払いして、アニエーゼは状況の説明を始めた。

それによると、天草式の人数は50名前後。

下水道を利用して移動している為、人数ではこちらが多いがその動向が全く掴めない。
い。

流星は隠密行動を得意とする集団だな。

学園都市内なら追う手立てはいくらでもあるが、ここは外。俺でも厳しい。

「つまり、何にも分からないって事かな？」

「はい。今は別働隊で包囲網を作っているので、そちらにならヒットするかと」

インデックスの問いにも誤魔化さず、素直に次の手を言う辺りは流石大部隊の司令官つて所か。

「で、天草式の移動手段はどんなのあるんだ？ あいつらが普通に移動するとは思えないんだが？」

50人もの集団なら、分散しようが何しようがバスやトラックではかなり目立つはずだ。

「そうだね。恐らく魔術で移動すると思うよ。それも日本特有の術式で、日本各地の特
殊な渦を使って移動する地図の魔術があるの」

インデックスが言うにはその渦を使う条件があり、日付が変わった直後でなければ使えない。

今は7時半、タイムリミットまで後4時間半か。

「それでも時間はあまりないな。インデックス、ここら辺で一番近い渦の場所分かるか？」

そう言いながら、携帯で周辺の地図を出して、インデックスに見せた。

インデックスの指示に従って地図を動かすと、とある一点が出てきた。

それはここからそう遠くない場所だ。

アニーエーゼが早速斥候を出すと、不審な人影を目撃したと報告があった。

やっぱり人数多いと動きが早いな。俺は大抵1人だが、学園都市中の監視カメラやらを使っているので早いけど。

「それでは部隊再編などに時間を頂くので、行動開始は11時頃になつちまいます」

「ああ、あまり早過ぎても向こうが動かないだろうしね」

アニーゼは部隊に指示を出しに行き、残った俺達はアニーゼ隊の用意したテントで休ませてもらう事になった。

俺と当麻、それとステイルが1つのテントで、インデックスは個別にテントを用意してもらった。

その際、ステイルがこれでもかって程ルーンのカードを張った。

ステイルの最大魔術「魔女狩りの王」はルーンカードの使用枚数に応じて強度が増すみたいだが、テントに張れるカードの枚数では不安らしい。

それでもこの数なら誰かがうかつに手を出す事はできないだろう。

「ん？ 当麻何処行くんだ？」

テントの中で休もうとすると、当麻がどこかへ行こうとするのが見えた。

「いや、俺も何か手伝える事がないかと思つてさ」

当麻は法の書、と言うか魔導書が破壊出来ない代物だと聞かされてから何かを考え込んでいた。

恐らく幻想殺しで破壊できないかとか思ってたんだらうな。

でもうかつにそれをする事が出来ないから、思い悩んで落ちつかないって所だらう。

「その右手でうかつにあちこち触つて霊装を破壊しない事だね。当然弁償する事になるだろうし、その時イギリス清教は一切関与しないよ」

「ステイルのいう通りだぞ、当麻。もし何か破壊して学園都市が立て替えるって事になれば……覚悟出来てるよな？」

9割くらい本気で脅したら真つ青な顔を激しく上下させた。

これなら右手に注意を払うだろう。

ま、気分転換に歩きまわる程度ならいいか……歩きまわる程度で収まるとはこれっぽっちも思っていないけど。

「……、失礼するぞ」

「ああ、僕は寝る」

ステイルの隣で横になり、今回の事件を思い返す。

オルソラ、法の書、天草式、ローマ正教、アニエーゼ隊……

考えれば考えるほど今回の事件、謎が多い。

まず法の書が本当に日本に来ていて、天草式に盗まれたのか。

天草式は魔術サイドが崩壊するような書とその解説法を本当に欲しているのか。

あの神裂火織が頭を務めていた組織だ。火織と同じような人種が集まっていると思っただ方がいい。

その集団が魔術サイドに戦争を売るような真似をするとは思えない。

しかし、実際あいつらは俺達の目の前でオルソラを誘拐した。

邪魔するものは排除すると言う姿勢を明確に見せました。

そして……ローマ正教が派遣してきたアニエーゼ隊。

なるほど、これほどの大事件に派遣されるだけあつて、人数の多さだけでなく精鋭部隊なのだろう。

その大部隊を指揮するアニエーゼも、インデックスより幼いながらも見事な指揮力を発揮している。

部下達もアニエーゼを信頼し、尊敬もしているようだ。

でも、だからと言って、彼女達が【善玉】とは判断できない。

何か、心に秘めた物と言うか、法の書とオルソラ奪還以外にも目的があるように見える。

それは確たる保証がないので、ステイルにも話すわけにはいかない。

それでも俺の勘がこの事件、簡単に終わると思えないと言っている。

「キヤー！」

その時、外からアニーゼらしき悲鳴が聞こえた。

一瞬敵襲かと思つたが、襲われたとかそういう類の悲鳴に聞こえなかつたし、外の連中の足音に緊張が混ざつていなかった事からそこまで大事ではないみたいだ。

大方、当麻がさつきみたいなのラツキースケベを起こしたのだろう。

ステイルもそれに気付いているようで、テントの外を一瞥して目を瞑つた。

「お守の君がちゃんと側についていないからこうなるんだ」

「側にいたら俺まで巻き込まれて変態呼ばわりされるんだぞ？」

「それもそうだね」

しばらくすると、頭を押さえてポロポロになつた当麻が戻つてきた。

俺とステイルの予感はず解だったか。

そして、ステイルと雑談と言うか変な話を始めたので、俺は眠りについた。

恐らくだけど、朝にかけての大乱戦になりそうな予感がする。

寝れる時にはしっかり寝ておこう。

しばらくして、テントにアニーゼが入つてきたり、インデックスに襲われたりしたが、俺は何も知らない。

知らないつたら知らない。

午後11時半少し前。

俺、当麻、ステイル、インデックスは特殊移動魔術の渦があるテーマパーク、パラルスウォーツパーク裏手にある職員入り口にやってきた。

後数分、午後11時半ちょうどにアニメーゼ達がパーク正面から乗り込み、囿となつて天草式と戦う。

その隙俺達は裏から入つてオルソラの救出、法の書の奪還、渦の破壊を行う。

正直、4人いても時間が足りる気がしないな。

「なあ、ステイル、ユウキ。時間内に全部片付けられると思うか？」

当麻にそう聞かれ、ステイルと顔を見合わせ軽く溜息を吐いた。

「はつきり言うると全部は無理だろうな。このテーマパークは結構広いし建物も多い。この中からオルソラと法の書を探すのは一苦労だ」

恐らく建物の鍵も外されているだろうしな。

「僕も同意見だ。ただでさえこっちは4人。しかも魔術には全く無知が2人もいるんだ。厳しいね」

それも同意見だ。俺と当麻はド素人だしな。

更に当麻はただの高校生だ。

「それと、ローマ正教には伝えていない事がある。神裂火織と連絡がつかない」

それだけで事態の深刻さが分かった。

あの火織の事だ。天草式の事を思つての行動を起すだろう。

最悪、神裂火織が敵としてここに出てくるかもしれない。

1か月ちよつと前、あの当時のフル装備かつ美琴の能力をフル活用しても傷一つ負わず、完敗した神裂火織。

出来る事なら二度と相手にしたくない。

「全てを終わらせられると思わない事だ。僕達は法の書の解読と言う最悪の展開を防ぐために動く」

「そう言うわけで、俺達が最優先でやるべき事は、オルソラの救出だ。彼女さえあつちにいなきや法の書は宝の持ち腐れだしな。だろ？」

「……ユウキ」

当麻がずっと考えていた事を代弁した。

お人好しの馬鹿は、少し頬を緩めた。

ステイルとインデックスに同意を求めるとあつさりと頷いた。

「そうだね。法の書はローマ正教の管轄だ。解読されなきやどうなろうとイギリス清教には何の害もない」

「私もそれでいいと思うよ。ただでさえ人数少ないんだからみんなで纏まらないとね

！」

「分かった。ありがとな」

当麻が礼を言うと、2人共面食らったような顔になった。

普段から表情豊かなインデックスはともかく、ステイルがこんな表情になるのは見ていて面白いな。

「突撃前に気を削ぐような事を言うな」

照れ隠しのつもりか、舌打ちしたステイルが煙草を消した。

——ドンツ！

その時、パーク正面から轟音が聞こえてきた。

「始まったか。行こうぜ」

「ああ」

パーク内を一目散に駆け抜ける。

地図は頭にたたき込んである。

オルソラが捕まっていそうなポイントはいくつか目星を付けてあるので、虱潰しに行くしかない。

「っ!?! 待て!」

急に上から複数の気配を感じ、当麻達を止めた。

と、同時に上から物音が聞こえ、西洋剣を構えた少年少女が降ってきた。

「危ないっ！」

狙われていたインデックスをスタイルに押しつけ、降りてきた少女の剣をかわして、カウンターで回し蹴りを放つ。

「うぐっ」

短い悲鳴と共に、少女は剣を手放し意識を失ったが、続けて同じような剣を構えた男が3人降ってきた。

すかさず1人の足を払い剣を奪い、少女が落とした剣と合わせて2本を残りの2人に投げつける。

剣は簡単に弾かれたが、隙が出来た。

「はあー！」

懐に深く踏み込み、2人の腹に少しでも手加減をして掌底を打った。

2人の意識が飛ぶのを確認する暇もなく、ふり返り様に残り1人の剣をかわし、後ろに回って首に手を回し締め落とす。

これで4人、落とす事が出来た。

殺して良いならもつと簡単に出来ただけだな。

「す、すげえ……お前、今何をやったんだ？」

「全く見えなかつたんだよ」

当麻とインデックスが驚いた声をあげ、ステイルも無言だが口を開けて驚いている。当麻は俺のこう言う場面何度か見せていると思っただけ、あいつが記憶を無くしてからは初めてかもしれないな。

「気を抜くな。まだ来るぞ！」

遠くからまた数人近づいてくる気配を感じた。

「ちっ、囃では全員引きつけられなかつたか。上条当麻、君にやる。お守りだ！」

そう言ってステイルが当麻に投げ渡したのは、十字架のついたネックレスだ。

何の目的で当麻にコレを渡したのかは分からないけど、ただのお守りとして渡したわけではなさそうだ。

「おい、ステイル。これを一体どう、しろ……ってええー!？」

ステイルはインデックスを抱き抱えたまま、まるで蜃気楼のように霞んで消えてしまった。

「……今度は俺達が囃か」

俺はすぐにステイルの意図に気付いた。皮肉めいた笑みを俺達に向けていたしな。

「あつの、野郎！ 合図とか集合場所とか前もって打ち合わせしとけよっ！」

「2度目だから流石に気付いたぞ？」

いつぞやの錬金術師の時も同じような事があった。

などと、思っている暇もなく向こうから次の刺客が現れた。

「行くぞ当麻。あいつらの相手をしている暇はない！」

「あ、ああ、そうだな」

俺と当麻はそのまま通りを走り抜ける。

オルソラを隠すポイントの目星を付けた場所がこの先にあつたはずだ。

しかし、このままでは天草式も引き連れてしまう事になる。

ちらりと後ろを振り返ると、追つてきている天草式の数が増えていた。

明らかに魔術師でもなく、武器も持たない俺達2人に随分と数を割くな。

これならこの先にオルソラか法の書がある可能性は高いな。

だったら、次に囷になるのは……

「当麻、その建物を曲がったらそのまま突っ走れ。追手は俺が食い止める」

「だ、大丈夫かよ！ さつきより人数多いぞ？」

「おいおい。俺を誰だと思ってるんだよ？ お前こそ、お守がなくて大丈夫か？」

「そつちこそ馬鹿にするなよ！」

2人で笑い合い、曲がり角を曲がった所で俺は急停止した。

右手を掲げて走る当麻に、俺も右手を突き出して答える。

ここは店と店との間の通路で吹き抜けになっている。

さっきの観覧コースよりもかなり狭くなっていて、当麻もいなく俺一人。ここなら例え大人数でも相手しやすい。

柱の影に隠れ、追って来た集団の1人が間近に迫った所で、飛びだした。

「っ!？」

不意を付かれた男の顔面を殴り、昏倒させた。

「へっ、隠密集団が不意をつかれてちゃ世話ないな」

俺達を追っていたのは、子供や老人、男女合わせて7人。

そのうち1人は倒したので、残り6人。

みんなそれぞれ別の得物を構えており、油断なく俺を包囲するように散開している。

さっき仲間があっさりやられた事で警戒を強めたのか、急に襲ってはこない。

軽く全員を見渡し、獲物を確認する。

ドレスソード、戦斧、短剣、刀など本当に様々だ。

大人数相手にする時に向いている槍とか棒を持っている相手がいなのはちよつと

残念だけど、仕方ない。

狙うなら短剣かな？

「お前ら、始める前に2つ言っておく事がある。まず1つ」

天草式に向けて指を一本立てた。

「俺は老若男女問わず、敵には容赦はしない。ああ、一応殺さないから安心しろ」
挑発も混ぜたので、連中の中に怒りが見えた。

「2つ、お前ら集団戦が得意なようだけど……運がなかったな」

2本立てた指を折り、ゆっくりと構える。

「俺は、集団を相手にするのが大得意だ！」

「！！！！」

殺気を籠めて天草式を睨み、彼らに突撃した。

続く

第101話 「VS天草式」

俺を取り囲む天草式の数は老若男女合わせて6人、全員そこら辺にいそうな一般人の服装をしている。

けれども、1人1人が普段相手にしているスキルアウト共よりもかなり強い。

しかも、天草式が使う魔術や今まで戦ってきた魔術師たちと違い、明確な動作や道具、呪文がない。

普段の仕草や服や装飾品に意味を持たせる術式だ。

そんなの相手に長期戦は不利だ。

だから、一気に片付ける事にした。

「まずは……お前だ！」

「っ!？」

正面にいた少年を殴ろうと右腕を振りかざし、左から迫ってきていた青年に左のひじ打ちをしかける。

青年は対応が遅れ鳩尾にめり込み、そのまま意識を失った。

残り5人。すかさず持っていた西洋剣を奪い取り、背後から迫っていた老人の刀を受

け止める。

そのまま体勢を崩し、お腹に一撃加え気絶させようとしたが、突然ポニーテールの少女が割り込んできて代わりに拳を腹に受けた。

しかし、手応えが全くなかった。スポンジにパンチしたような感覚だ。思っていた通り、この術式を使って来たか。

「ちっ」

と、ここで少女が反撃に移ろうとたので急ぎその場を離れ、また別の相手に向かう。足を止める事なく次々に相手を無力化して行かないと、向こうに流れを取られる。

正面に回り込んできた大男が斧を横薙ぎに振った。

そいつの頭を踏み越えて、後ろで何か術式を準備していたであろう少年に飛び蹴りを放つ。

しかし、さっきの少女同様に手応えがない。

でも、それは予想通りだ。

なので、着地と同時に少年の懐に飛び込み、顎に手加減なしでアップパーカットを打つ。
「うぐっ」

これは効いたようで少年はそのまま倒れて、意識を失った。残り4人。すぐに少年が持っていた2本の短剣を拾い、左右から迫ってきていたさっきの老人と

少女に投げつける。

2人共避けたり自分の武器で弾いたりしたが、それで倒せるとは思っていない。

「おおらあー！」

西洋剣を両手で握り、振り向きざまに振う。

背後では踏み台にされた大男が今度は斧を振りおろしている所だった。

俺の横難いだ剣が斧の腹に当たり、斧の軌道がずれる。

その衝撃の反動で俺も体勢を崩したが、その勢いを利用して大男の真横へと移動する。

そのまま大男を蹴りあげようとした。

でも、そうはさせないと、大男の影から金髪の少女が手に持ったレイピアを突き出してきた。

こいつら本当に集団戦が得意だな。

互いの攻撃の隙を埋めるように連携を取ってきて、うまい。

だからこそ、攻撃パターンが読みやすいんだけどな。

半回転して突き出されたレイピアを西洋剣で受け止め、そのまま受け流しつつ少女へ足払いをかける。

そして、少女の背中を強く押し、体勢を立て直していたポニーテールの少女へとぶつ

ける。

「うっ!」

「きやつ!」

まだこれで終わらない。

剣を置き未だ体勢が崩れたままの大男に組みつき、そのまま背負い投げで2人の少女に向けて投げつける。

「だりゃあ!」

「ぐふっ!」

「かはっ!」

こいつらに張られていた対衝撃の術式では、今のは耐えられない。

3人共折り重なったまま、意識を失っている。

これで残るは老人が1人。

本当ならこれで退いてくれるとありがたいんだけど、この爺さん全く闘志が衰えていない。

こいつらと対峙して今の今まで数分にも満たない出来事だ。

その間に、俺はすでに5人、出合い頭のあの男も含めて6人倒してきた。

これで俺との力の差が分かったはず。

なのにその表情に驚きこそあれど、退く気配すらない。

強い意志が籠った目で俺を睨んできている。

こういう目を俺は知っている。

少なくとも営利目的でオルソラを誘拐したり、法の書なんて魔術兵器を盗んだりする目には見えなかった。

やっぱり、コイツらは……

「諫早さん！」

そこへ女性の声が響き、こちらに向かつてこようとしていた爺さんの動きが止まり、一歩引いた。

ーゾクリッ

と、嫌な予感がして、急いでその場を離れると轟！　と言う音と共に地面に槍が突き刺さった。

そして、ショートカットに桃色の服をきた女性が空から降ってきた。

爺さんを庇うように槍を構えたその姿を一目で見えてすぐに分かった。

コイツ、今までの天草式とは全く違う。

彼女の持つ槍も柄と先端の刃がとても長く、先端にはウイングのように両端に開けた刃もついている

フリウリスピアか、厄介だな。

「五和、すまない」

「いえ。ここは私が」

爺さんは俺を一瞥すると、この場から離れた。

他の場所の仲間の元へ向かったのだろう。

それを横目で確認して五和と呼ばれた少女は周囲に散らばる自分の仲間に向け
てから、俺を睨みつけた。

対する俺は幻想支配で五和を視た。

そして、そのレベルの高さに少し驚く。

やはり彼女は他のメンバーと違う。

実は、幻想支配で天草式を視ている。

さつき当麻と追いかけていた時や、囷となって対峙した時などにだ。

それぞれ視たのが一瞬だった為、俺の眼が何度も赤くなつた事に天草式は気付かなかつたのだろう。

その一瞬で彼らが使う術式を把握出来た。

これで、彼らがいづつかの錬金術師やシエリーレベルの魔術師だったら、こうも一瞬で
全てを把握出来はしなかつただろう。

俺の幻想支配相手のレベルに応じて、視なければいけない時間と効果が変わってくる。

レベルが高い相手にはしばらく視ていないと、能力をコピーしたり把握は出来ない。美琴も最初はしばらく視てないと使えなかったしな。

魔術師も何度も相手にしているせいか、魔術にもかなり視慣れた。

おかげで彼ら程度の魔術師なら一瞬で全てを把握し、支配も出来るようになる。

……これを狙って俺を魔術師にぶつけてきたんだろうな、尼視は。

ともかく、彼ら全員を視て、使える術式を把握したおかげで、それぞれを短時間で倒す事が出来た。

どんな防御術式や移動術式を使ってきて、どの程度の攻撃なら防御しきれないか、などだ。

少なくとも五和は一瞬で全部を視る事が出来ない。

このまま視ていればすぐに大丈夫だろうけど、時間をかけたくない。

それにさっきの爺さんの反応をみると、彼女は結構メンバー内では高位にいそうだな。

ならちようどいい。彼女に事情を聞くでしょう。

でも、俺が仲間を倒しまくったせいで向こうが結構怒ってるのをどうにかしないと

「しっ……」

そう考えている暇もなく、五和は俺の目の前に一瞬で詰め寄り手に持った槍を振つて来た。

その速度はさつきまで相手をしていた天草式とは比べ物にもならない。

咄嗟に転がるようにかわし、転がっていたドレスソードと短剣を手に取る。

五和の攻撃は、西洋剣一本では捌ききれない。

なのでここは二刀流で行くでしょう。

右手に順手持ちのドレスソード、左手に逆手に構えた短剣。

欲を言えば両手にナイフで相手をしたいが、ないものねだりをしてもしようがない。

「っ、せいっ……」

振われたスピアの刃を短剣で受け止め、そのまま懐に飛び込もうとしたが、五和は踊るように身体を捻りこちらの攻撃をかわし、カウンターでスピアを突き出してきた。

ドレスソードで受け止め、短剣で上に弾き今度は懐に入る事が出来た。

そのまま左の肘打ちを五和の胸に打ち込む。

うまく入ったが、手応えがない。

さつきまでの連中とはまた違った術式のようで、完全に衝撃を吸収されている。

五和は、打撃をもらったのが意外だったのか少し目を見開き、俺から離れた。

まずいな。このままじゃ決め手に欠ける。

負けはしないが、勝つには時間がかかりそうだ。

先に行かせた当麻やインデックスの事も気になるし、渦の時間まであまりない。なら、ここで切り札を使わせてもらおう。

「っ!？」

どうやら五和は俺の眼が赤くなつた事に気付いたようだ。

でも、動揺はせず声もあげないのは流石だな。

右手のドレスソードを五和に向けて投げつける。

五和は弾くよりもかわす事を選んでようで、身体を捻ってソードをかわした。

その隙に俺は目的の場所まで駆け出した。

五和は突然走り出した俺を追いかけたが、目的地はすぐそこ、もう着いた。

さつきアッパーで倒した少年の元に走り、地面に落ちていたもう一本の短剣を拾いあげた。

俺が視た相手は、五和ではない。この少年だ。

逆手で持った両手の短剣を無造作に振いつつ、呼吸を整える。

「なっ!？」

それだけで五和は俺が何をしたのか分かった。

そして、俺はひとつ飛びで五和の真後ろの死角に回り込み、短剣で斬りつける。

かろうじてスピアが間に合い防ぐ事が出来たが、おかげで隙が出来た。

短剣を捨てて、スピアを掴み背負い投げの要領で地面に投げ飛ばす。

その際、幻想支配で五和を視て、能力停止を使い術式を全て解除させた。

「きゃっ!？」

「ふう、これで終わりだ」

地面に倒れこんだ五和に馬乗りになり喉元に短剣を突き付け、勝負はついた。

スピアは遠くに投げたし、幻想支配で術式も封じた。

五和の眼からは闘志は消えず、敵意むき出しで俺を睨んでいるけどもうどうしようもない。

「妙な動きするなよ?」

「な、なぜ術式が消えたんですか。それに今のは香焼の……」

あの少年は香焼って名前なのか。

俺がやった事は、香焼を幻想支配で視て彼が使える術式の一つ、死角を狙った移動術式を使った。

ただそれだけだ。

なんで離れた場所で倒れている香焼を視たかと言えば、短剣を使った術式だったから

だ。

やっぱり西洋剣や斧よりも短剣の方が使いやすいしな。

「それより先にこつちの質問に答えろ。なぜ、オルソラを誘拐した？」

俺の質問に五和は困惑の表情を浮かべた。

まあ、そうだろうな。

オルソラを誘拐した理由を俺達は知っているはずだもんな。

そんな質問をこの場でする意味が五和には分からないだろう。

「じゃあ質問を変えろ。お前ら本当に法の書を盗んだのか？」

「どういう意味、ですか？」

五和の眼から敵意が少しだけ薄れた。

「自己紹介しておく。俺の名はユウキ、学園都市からやってきた。俺がローマ正教から聞かされた事は法の書と言う十字教を破壊させるほどの魔導書の解読法を発見したオルソラが、書ごとお前ら天草式に誘拐された。俺はその手伝いをしているだけだ」

「……………」

「ちなみに、お前は見てたか知らないが、俺と一緒に逃げていたツンツン頭はただの学園都市の学生だ」

「……………それを私に言ってどうするんですか？」

まだ敵意は消えない。

「どうも俺達が聞かされた話と事情が違うようなんです。おたくら……ひよつとしてオ
ルソラをローマ正教から保護しようとしてないか？」

「なっ!?! どうしてそれを!?!」

カマをかけたが見事に引つ掛かった。これは演技ではないな。

「簡単な話だ。神裂火織が頭張つてた組織が、どうしてこんな野蛮な真似までして、十字
教最大派閥に喧嘩売つてまで、なんで身に余る兵器を手に入れるのかつて事だ」

「女教皇を知っているんですか!?!」

火織の名前を出した途端、五和の表情が変わった。

演技をしてこちらを油断させている可能性はゼロじゃないが、ひとまず彼女の上から
退く事にした。

「神裂火織とは一度手合わせしてる。敵だったが、どうにも悪人には見えなかったな。
ものすごく不器用そうではあったけど」

「……女教皇」

悲しげに女教皇を呼ぶ五和を見て、彼女達と火織に何があったのか気にはなった。

けど、今はそれどころじゃない。

「話を戻すぞ。法の書つてのは使えば十字教の時代が終わるような代物だろ? そんな

のを現時点でトップに立っているローマ正教がなんで持っているか。そもそもそんなもの、ローマ正教が必要にしているのか？ いいやしていいない」

科学側に置き換えれば簡単な話だ。

例えば科学側のトップである学園都市が、もし科学の終わりを告げる兵器を自分で持つている理由。

それは、誰にも使わせない為に持っている。

レベル5を筆頭にした能力者達を自分達の手元に置いておき、他の能力開発組織に警戒を強めている理由もそれだ。

もしも、そんな誰も使えない兵器を使えるように出来る者が現れたら？

学園都市は……ソイツを消すだろうな。

って、自分で仮定しておいてなんだが、学園都市に例えると色々無理がありそうだな。「そんな中、どういう理由か分からないけど、法の書の解読法を見つけてしまった人がいた、オルソラだ。ローマ正教はその解読法が広まる前に何としても彼女を消す必要があった。それを知ったオルソラは逃げ出して、おたくらに救いを求めた」

「……」

五和は無言で俺の仮説を聞いていた。

ただ、時折拳を強く握りしめている。

「ここからの経緯は推測しにくいんだが、何らかのトラブルでオルソラは再び逃走。魔術や宗教が関わっていない学園都市に逃げ込もうとした。あ、俺と当麻はその時オルソラに出会ったんだ。で、その後は見ての通りだ。どうだ？」

「……あなたの推測通りです」

五和の表情から大分警戒が消えてきたな。

「でだ。オルソラが法の書の解読法を知った経緯とかも疑問だけど、もつと重大な疑問がある。それは、なんでオルソラはおたくらから逃げた？ まさかと思うが、見返りに法の書の解読法でも求めたか？」

「違います！ 私達は彼女に何も求めていません！ 私達はただ彼女が救いを求めてきた。だから助けようとした。それだけです！」

ここからは五和の話になった。

大まかな経緯は俺が予想した通りで、オルソラを救おうとしたのも、ただ救いが必要だったから手を差し伸べただけだった。

天草式は昔からやっている事は変わらない。

火織がトップになってからは、特にそれが顕著になったただけだ。

たった1人の少女の願いの為に、大蛇を相手にしたり。

死にゆく者の願いで、大勢の軍勢から村を守ったりしてきた。

彼女達は、当麻みたいなヒーローだった。

しかし、そんな彼女達でも守れないものがあつた。

それは神裂火織。

トップであつた彼女と共に闘う為に、守るために五和達は必死に戦つた。

その結果、火織以外の者達が彼女を守り犠牲になる事が、火織自身には耐えられなかつた。

だから、火織は天草式から離脱した。

「……結局、私達が弱かつたから、女教皇の居場所を守れなかつた。でも、だからこそ今度こそ、女教皇がいつ戻つてきてもいい場所にしたんです！」

そう話す五和の眼に一点の曇りもなかつた。

嘘も、演技でもない、彼女自身の決意だ。

「でも彼女には……それが通じませんでした。だから彼女は私達の元からも去つたんです」

あのオルソラが、五和達を信じきれなかつた……か。

恐らくだけど、それはオルソラが今までローマ正教にいたからこそ思い至つたんだろ
うな。

うまく言葉に表せないけど、それこそがローマ正教の本当の姿だと思つた。

「そっちの都合は分かった。信じよう」

「えっ……本当ですか？」

五和はチラリとまだ気絶している香焼達に目を向けた。

……仲間をこれだけ倒す相手がこうもあつさり自分達を信じるのはどうも納得出来ないと言った顔だ。

「あ……素手の高校生相手に数人がかりで殺す気で武器を振ってきたら、正当防衛になるからな!」

「いえ、それに關しては完全にこちらの落ち度ですから……その、すみませんでした」

「そうあつさりと謝られると、まあ俺もやりすぎた。ごめん」

「あなた程の腕なら、もつと簡単に、それこそ殺せたはずです。ですが、香焼達を最低限の怪我をさせないように気絶させています。それだけでも信用していいと思いましたが」

「ははっ、そうかい」

それを聞いて思わず笑みが零れる。

「な、なぜ笑うんですか!？」

「いや、やつぱりあの神裂火織がいた組織だけはあるなと思つてさ。お前ら色々似過ぎだ」

「それは最高の褒め言葉です！」

そう言つて初めて五和は笑つた。

「うん、良い笑顔だ。さてと、これからどうするかだな」

さつきまで響いていた音がいつの間にか止んでいる。

それは戦闘が終わつたと言う証だ。

「こう言つちやなんだが……恐らく、戦闘は」

「私達の負けでしょうね。仲間と連絡が付きません」

悔しそうに言う五和を見て、複雑な心境だ。

「ひとまず、みんなを起こして当麻達に合流するか。五和、俺に捕まつたフリをしてくれないか？」

「保険、ですか？」

五和は俺が何をしようとしているか勘付いたようだ。

「ああ、香焼達は隠れてもらつて、俺は五和を捕まえたつて事でローマ正教に合流して、状況を確認する。後は、臨機応変だ」

「か、肝心な所はあやふやなんです。ですが、時間はありません。それでいきましよう」

それから、気絶している香焼達を起こそうとしたその時だった。

——キャーーーーー!!
数々の悲鳴を聞いた俺でも驚くほどの悲鳴が、オルソラの絶叫が遠くから聞こえてきた。

続く

第102話 「ローマ正教」

突然響き渡ったオルソラの悲鳴。

距離的にはここから少し離れた場所からだ。

すぐに携帯を取り出し、当麻の場所を確認する。

当麻は現在どんな状態かまでは分からないが、オルソラとは離れた場所にいるのは間違いない。

「今のは……あつー！」

「俺の連れと合流する、五和も来い！」

天草式の五和を連れて当麻のいる方へ走った。

俺の勘が正しければ、もう手遅れかもしれない。

「さっきの悲鳴は向こうからでしたが、なぜこちらに？」

「確かにあの悲鳴はオルソラで向こうにがいるのは間違いないけど、同じくローマ正教の連中が集まっているはずだ。そんな中に無策で突っ込むのは無謀だろ？ お前らの事

情も踏まえて一度合流した方がいい」

素手であの人数相手では流石に骨が折れるし、下手にぶつかると後々厄介すぎる事態

になるのは確実。

なら当麻と合流した方がいい。何となくだけど、インデックス達もあつちにいる気がするしな。

「ですが、そつちにいるとなぜわかるのですか!？」

「俺はどつかのエセ神父と違って、何も考えずに二手に別れたりはしねえよ。ちゃんと居場所くらい把握してる」

当麻には超小型発信器を取り付けてある。

勿論学園都市特製だ。武器や爆弾は禁止されたが、こういう小道具は禁止されてなかったからいくつか持ってきてた。

後はその信号を携帯で追えばいいだけだ。

そうこうしてる間に、当麻やインデックス達が見えてきた。

傍らに天草式らしき男が拘束されていて、アニーゼと一緒にいたローマ正教のシスターが2人、当麻と対峙していた。

当麻が怪我をしていて、状況は最悪らしいな。

「あれは、建宮さん!？」

「とりあえず、あのシスターはこつちに敵対行動を取った。自己防衛って事で、排除する!」

大きな車輪を持ったシスターが何かを言っている。

声は微かにしか聞こえないけど、読唇術でどうにか言っている事はわかる。

『その天草式が抵抗し、あなた達を殺めた事にしましょうか』

ープチンツ

「ふざけた事ぬかしてんじゃねえぞ！」

「「っ!?!」」

まずは車輪を掲げたシスターを視て、能力停止。

次に、隣にいるシスターを視て使用魔術を把握し、乗っ取る。

「きたれ、十二使徒のひとつ！」

「えっ!?! そ、それは私の……」

ちっこいシスターが持つ硬貨袋を使った魔術を発動。

硬貨袋に色づいた羽が生え、車輪シスターに向かって突撃した。

「シスター・アンジェレネ！ 何をしているのです！」

車輪シスターは自分の魔力が無力化された事で硬直していたが、咄嗟に車輪を盾にして硬貨袋を防いだ。

その間に俺と五和は当麻達を守るように立ち塞がった。

「大丈夫か、お前ら」

「ユウキ!? それにその人は?」

「な、なぜあなたが天草式と一緒にいるんです!?!」

「なんだ。物分かり悪いなお前。そんなの法の書は盗まれていない、とか、オルソラの本
当の敵は誰か、とか全部聞いたからに決まってるだ、ろ!」

そう言つて車輪シスターを思いつきり殴り飛ばした。

勿論、殺さない程度には手加減したけど。

「がふっ!?!」

「シ、シスター・ルチア!」

「今のは当麻に攻撃した分な。で、まだ続けるか?」

「お、おのれ異教徒の分際で、よく私を殴りましたね!」

ルチアと呼ばれた車輪シスターがさつきより殺気を籠めて睨んできたが、その時どこ
からか笛の音が聞こえてきた。

「ちっ、退却命令ですか。シスター・アンジェレネ!」

忌々しげに俺を一瞥しながら、2人のシスターは笛の音が鳴った方へと走り去った。

「まてっ! えっ、ユウキ?」

「ダメだ。まずはこつちの体勢を立て直さないと」

当麻が追いかけようとしたが、俺が止めた。

今あいつらを追うのは無謀すぎる。

「お前さんはイギリス清教つてわけじゃないみたいだが、学園都市の人間か？」

「俺の名はユウキ、コイツの護衛だ。お前が天草式の【今の】リーダーか」

建宮と呼ばれた男は、隣にいる五和に目を向けた。

五和が静かに頷き返したのを見て、ようやく俺への警戒心を和らげた。

「今のつて、その口ぶりに五和も一緒つて事は大体の事情は知ってるわけだな。俺は建宮斎字、天草式十字凄教教主代理だ」

天草式のトップは今も昔も神裂火織。自分はあくまで代理、リーダー代わりつて事か。

とことん火織の事を慕つてる連中だな。

「当麻もインデックスも、大体は聞いているか？」

「天草式が法の書を盗んでなくてオルソラを保護しようとしたつて所は、けどまだ理解が追いついてねえよ」

当麻は法の書の説明とかあまり分かってなかったつぽいしな。

まあ、魔術サイドの話は簡単には理解できないけどな。

「こいつらは敵じゃなくて、ローマ正教はオルソラを殺したがってるつて事だけ理解してりゃいいよ」

「……分かった。で、これからどうするんだ？」

「まずは当麻、齋字の拘束を解いてやれ。右手で触ればすぐだろ。で、インデックス、ステイルはどこだ？」

ステイルはインデックスの護衛をしていたはずだが、姿は見えず近くにもいないようだ。

「ステイルなら……オルソラをアニエーゼ達の所へ、届けに行つた」

齋字の拘束を解きながら、当麻が心底悔しそうに拳を握りながら呟いた。

きつとオルソラをわざわざ殺したがってる相手に渡した事を悔んでるのだろうか。

「とにかく合流しよう。何をするにしてもな」

ステイルを探しに動き出したが、さつきまでの喧騒がうそかのように辺りは静寂に包まれていた。

あれだけいた部隊が全員この短時間で撤収したようだ。

流星は部隊行動が慣れていて、その早さに五和と齋字も驚いている。

「どう言う事かな？　なんで君達が天草式と一緒にいるんだい？」

訝しげな表情をしながら、ステイルが建物の影から出てきた。

俺はステイルに今までの経緯とローマ正教の嘘を言うと、ステイルはどこか納得した

ような顔をした。

「そうか、どうりでオルソラがアニエーゼ達を見て茫然自失になっていたわけだ」

「おい、なんで引き止めなかったんだよ！ お前も悲鳴聞いただろ!?!」

淡々と話すステイルに、当麻がかみついた。

「無理だ、当麻。これはローマ正教の問題だ。だから、イギリス清教のステイルに強く出る理由がない。下手に刺激すれば戦争の火種になる……だろ?」

俺がそう言うと、ステイルはつまらなさそうに煙草の火を消した。

「彼の言う通りだ。法の書がいまだバチカンに保管されている以上、僕らイギリス清教がこれ以上口出しする理由はない」

ステイルとインデックスが言うには、これからオルソラは宗教裁判にかけられると言
う。

実質、オルソラには何の罪もなく、裁く事は出来ない。

だが裁判と言いつつ、その実情は昔ながらの魔女裁判で、オルソラをローマ正教の背
信・背徳などそれらしい【表の罪状】にて【正当】に裁く。

それにより法の書を解読したと言う【裏の罪状】を隠すらしい。

「つまり、その罪状が確定するまではオルソラは生きてるって事か」

「五体満足、かどうかは分からないけどね」

「ステイル！」

俺に続いてつまらない事を言ったステイルを、インデックスが咎めるように言った。案の定、当麻がステイルを睨みつけている。

「だったらこれから助けに行けば！」

「助けに？ 君の拳ではあの大人数をどうにか出来る程万能なのかい？ いいかい、これはもうローマ正教内部【だけ】の問題なんだ。僕達がオルソラを助ける理由はない」

ステイルの言う事は至極真つ当で、俺でも理解できる魔術サイド内の話だ。

法の書と言う魔術サイド全体に関わる大問題が、実はブラフだった。

なんて言う事自体問題な気もするが、少なくともローマ正教徒であるオルソラの裁判に、外部であるイギリス清教が強く口出しできるレベルじゃない。

けど、それを簡単に納得出来る当麻ではない。

「なあ、ユウキ。なんでさつきから黙ってばかりなんだよ！」

「俺はお前の護衛に来ている身だ。しかもステイル達と違って科学サイドの人間。手も口も出せる限界がある」

「なっ!? お前もステイルと同じく口出しするなって言いたいのか!？」

「誰もそうは言っていない。【俺が】口出しできる事じゃない。としか言っていない」

「??」

俺が言いたい事を当麻はまだ分かっていないという顔をしている。携帯にちらりと目を向けたが、追加指令は何も来ていない。

「ここまでは静観って事か。」

「そうだ、上条当麻。突入時に渡したあのロザリオはどうした?」

「何だよ、今はそんな事話してる場合じゃないだろ! ……オルソラの首にかけちまつたよ。これでいいか」

不貞腐れたように言う当麻に、ステイルの眉が少しだけ反応した。

それはインデックスも同じで、口元には笑みまで浮かんだように見える。

「結構、それじゃこれで解散だ。せめてもの義務だ。学園都市の入り口までは見送りするよ」

「それってインデックスを見送りたいだけなんじゃないか?」

からかうように言うと、ステイルは無視して煙草に火を付けた。

「だけど、その仕草は凶星を差されて気まずそうにも見える。」

『まあ、そう落ち込むなよ少年。イギリス清教じゃない俺達天草式には、オルソラを助ける理由が十分にある。後は俺達に任せれば大丈夫よな』

そう言つて齋字と五和は俺達と別れた。

きつと、彼らはその言葉通りオルソラを助ける為に行動するだろう。

その為の道標は五和に渡してあるしな。

「……」

学園都市への帰り道、当麻はずつと考え込むように俯いて歩いている。

インデックスが優しく諭すように色々言つたが、気持ち半分で聞いている。

「あつ、そうだ！ 冷蔵庫の中からつぽだった！ 悪い、俺ちよつとコンビニ行つてくる」

「お前さつきからその事ばつか考えてたのかよ!?!」

突然当麻が大声を上げて、頭を抱えた。

呆れたように言つたつもりだが、本心ではない。

「じゃあ私も一緒に行くよ!」

「インデックスも一緒だと沢山買いこんじまうだろ。いいよ、俺だけで」

「なら俺も行くぜ当麻。外のコンビニつてどういふものがあるか、興味あるしな」

「えつ、いや、ユウキさんはここで……あ、ああ、じゃあいつしよに行くか!」

俺が一緒に行くと言つと当麻は派変に焦つたが、軽いウインクすると何か察したよう
で笑顔になった。

こういう察し方をさつきしてくれれば簡単だったのに。

「それじゃ僕はインデックスを君の部屋まで送っておくよ。後は好きにすればいいさ」
「悪いなステイル。道は分かっているから、大丈夫だ」

素つ気なく言うステイルにインデックスを任せ、俺達は走り出した。

その際、意味深な目をしていたが、絶対バレてるよな、あれ。

まあ、そもそも俺達がこれから何をしようとしてるかなんてバレバレか。

後は、祭りに参加するかどうかだけど、そこは心配いらぬいな。

「で?」「オルソラを助ける為に」 どこに行けばいいのか分かってるのか、当麻?」

先を走る当麻にこれから行くべき場所を尋ねた。

俺達がこれからする事は単純明快、ローマ正教に殴りこみをかけて、オルソラを助ける。それだけだ。

「……やっぱり分かってたか。でも、分かかって何で止めなかつたんだよ? しかも着いてきたし」

「バーカ、お前の考えくらいお見通しだ。それに、さつきも言っただろ? 俺はお前の護衛でしかないから、俺自身に止める理由はない。つまり、お前がどこへ行くこうと俺が護衛について行くのは当然なんだよ」

上条当麻なら、ここでオルソラを見捨てるわけがない。

なら、それに付き合うのは俺の仕事だ。

物凄い屁理屈だけど、これでいい。

後々何か問題になろうとも、これでいい。

もう、後悔はしたくない。

ミクの時のような後悔だけはしたくない。

「ははっ、さんきゅう、ユウキ。それで、オルソラの場合だけど、アニエーゼが言っていたんだ。オルソラのローマ正教への功績を称えて、この近くにオルソラ教会って言う教会が建てられたって、多分そこにいる」

「なるほど。ま、こっちにはいらなくても向こうにはいるか」

せっかくルチアに仕掛けた発信機だが、「俺達」には必要なかったか。

「ん？ どうした？」

「なんでもない。それより急ぐぞ。殺されないってだけでそれ以外何にされてるか分からないからな」

「ああ！」

俺と当麻は夜の街をひたすら走った。

目指すはオルソラ教会だ。

続く

第103話 「VSアニエーゼ隊」

オルソラを助ける為、走り続けた俺達の目の前に現れた建設途中の大きな教会。

「ここだな、オルソラ教会。中は静かだな、本当にオルソラがここにいるのか」

「ああ、そうみたいだ。入り口に結界が張られている。おそらく中の音が聞こえないような種類の結界だろうな」

「そんな事まで分かるのかよ、ユウキ？」

「まあな」

当麻は驚いた声を上げるが、本当は幻想支配でこんな事が出来るようになったのはつい最近の話だ。

以前でも能力者が使った能力を視る事で痕跡を辿り位置を探る事が出来たが、魔術相手では魔術師本人を視る事しか出来なかった。

それが今じゃ、魔術の痕跡を視る事が出来る。

最も、解除したりする事はできないが、それでも今回見たく魔術的な結界が張られているのが分かれば、後は当麻の出番だ。

「じゃあ当麻、ここにはオルソラもだがアニエーゼ達もいる。覚悟が決まったならとっ

ととぶち破ろうぜ」

「おおー！」

当麻が幻想殺しで結界を破ると、途端に中から人の気配がして微かに声が聞こえてきた。

「壊された?! 結界が?! なぜ、どこの組織のもんですか!?!」

それを聞き、当麻と頷きあい同時にドアを蹴破った。

中には沢山のシスターがいて、その中心には全身痣だらけのオルソラが横たわっており、アニエーゼが踏みつけていた。

「ちわーっすー! パーティーの二次会が行われてるのはここで良かったか、アニエーゼ?」

「なぜ、ここに……なるほど、ただのド素人ってわけじゃないですか。結界に対して絶対的な特別な力があるようですね」

俺達をただの結果破りのエキスパートとかでも勘違いしてるのか。

まあ、見た目ただの学生だししようがないか。

俺も魔術に関しては何素人だしな。

「一応聞くけどよ。もうごまかすつもりはねえんだな?」

「何を? この状況をみてわかんないんですか? ったく、どうやらイギリス清教は逃

げ帰っちゃったようですよけどあなた達は一体何なんですか？」

アニエーゼは余裕の表情のまま、言葉を続ける。

周りのシスター達も警戒はしているが、俺達を侮っているように見える。

数が違い過ぎるから当然だけど、相手の力量の把握も出来ないとかこいつら素人集団か？

天草式の方が警戒心強かったぞ。

あ、でも車輪シスターだけはめっちゃこつちを睨んでるな。

「ほら、これが最後のチャンスです。自分達が何をすべきかわかっちゃってますよね？」
とつと尻尾を巻いて逃げ帰れ、とアニエーゼは暗に言っている。

「ああ、よくわかってるよ。これが最後だ！」

俺と当麻は頷きあい、同時に走りだしアニエーゼに向けて拳を振った。

アニエーゼはとっさに両手を交差させガードしていたが、そんな身軽な身体で俺と当麻のパンチを防御出来るはずもなく、後ろのシスター共々ふっ飛ばされた。

そして、俺達はオルソラを背にしシスター達へと向き直った。

「き、サマ。なんのつもりだこれはー！」

「何をすべきか、だって？ そんなの決まってるだろ。オルソラを助けるに決まってる

だろうか！」

教会に響き渡る激昂したアニエーゼの声に、当麻はそれ以上の怒号で答える。

「集団リンチとか弱い者いじめめて大嫌いなんだよな。あ、そう言つて何だけど、俺達がお前らにこれからする事も、弱い者いじめだよな」

「弱い？ 私達が弱いですつて!! たった2人で何が出来るつていいのか、見せてもらうましようか！」

それを合図にして、周りのシスター達が一齐に武器を構え俺達に突き付けてきた。

もうそろそろこの辺でいいかな。

「あー始める前に3つ、お前らに言っておく事がある」

「何ですか？ 今更命乞いなんて遅すぎなんですよ？」

天草式にやったようにまず指を1本立てた。

「違う違う。天草式にも同じような事言つたけど、まず1つ、俺は老若男女問わず敵には容赦しない。殺しはしないけど、顔とかに傷ついても責任は取らないぞ？」

続けて2本目の指を立てる。

「2つめ、俺は集団相手に戦うのが大得意なんですね。200人いようが数の有利は通用しない。最後に3つ目」

3本指を立て、周りをゆっくり見渡して続ける。

「誰が、2人で乗り込んで来たと言った?」

その時、轟と爆音と共に炎が教会の窓を破壊して、付近にいたシスター達を吹き飛ばした。

そして、辺り一面にここにはいないはずの男の声が飛んできた。

「全く、勝手に始めないで欲しいね。で、始めるなら始めるでもう少し時間を稼いで欲しかったね。これじゃルーンを配置する時間もないよ」

「ステイル!?!」

「お前を待ってた覚えはないし、大体お前の魔術は準備に時間かかり過ぎだ。結果ばかり求めて、効率化を疎かにしすぎ!。もっと効率化を考えろよ」

「ぐっ、素人の君は黙っていてもらおうか!」

まさかこっちが来るとは思わなかった。

俺達がオルソラを助けに行くのが分かっても、黙認するだけとばかり思ってたんだけどな。

「イギリス清教!?! 馬鹿な!。これはローマ正教内での問題ですよ。内政干渉とみなされちゃうのが分かんないんですか!?!」

「残念だが、それは適応されない。オルソラはアクイナスの胸を見る。そこにイギリス清教の十字架がかけられているだろう?」

小馬鹿にするような笑みを浮かべながらステイルが指さした先を見ると、オルソラの胸にステイルが当麻に投げ渡した十字架がかけている。

当麻がオルソラの首にかけた……あ、そういう事か。

「イギリス清教の十字架をかけられる行為は、イギリス清教の庇護を受ける事を意味する。つまり、今のオルソラはローマ正教ではなくイギリス清教の人間、って事だろ？」

「ちつ、その素人の言う通りだ」

言おうとした事を俺に言われさつきまでのいらつく笑みを一転させ、イライラしながら悪態をつくステイル。

まさか学園都市の人間に宗教系の事が分かるとは思ってなかっただろうな。

うん、良い気味だ。

「そっか、それであの時あんなに喜んでいたのか」

オルソラの首に十字架をかけた時の事を思い出したかのように、当麻が僅かに笑みを浮かべて呟いた。

「そんな詭弁が通じるとでも思ってますか!？」

「思っちゃいないね。だが君達ローマ正教の一存のみで彼女を審問に欠けると言うのなら」

窓から飛び降りたステイルは不機嫌そうな表情を消し、真顔でアニエーゼを見据え

た。

「イギリス清教はこれを黙って見過ごすわけにはいかないんだよ。それに……」

ステイルは炎の剣を出し、アニエーゼに突き付ける。

「よくもあの子に刃を向けてくれたものだ。この僕がそれを見過ごす優しい人格を持つてると思ったのか？」

「やっぱりそっちが本命ね。インデックスを傷つけようとした連中をステイルが見逃すわけないか。」

「チイ、たかが3人に増えた程度で」

強がったアニエーゼの声は、また別の誰かの声にかき消された。

「3人で済むとか思ってたんじゃないのよ」

声と共に教会の壁に大きな穴があき、その向こうに齋字を中心とした天草式が勢ぞろいしていた。

無事にローマ正教に監禁されていたメンバーを解放出来たようだな。

「建宮！」

「俺が戦わなきゃならん理由は、わざわざ問うまでもねえよなあ？」

「頃合いと思っただけど、良いタイミングだな、齋字」

「よお、ユウキ少年、お前さんには借りが出来ちまったな」

「ありがとうございます。おかげでメンバーを素早く解放する事が出来ました。これ、お返ししますね」

「おう。借りと言ってもメンバーの一部を捕まえたのも俺なんだけどな」

五和が渡してくれた小型ポータブル装置を受け取る。

「ユウキ、一体これはどう言う事なんだ？」

「ん？ 別に、こいつらローマ正教の話が最初から胡散臭かったから、念の為倒した天草式達に小型発信器を付けておいたんだよ。で、事が露呈した後、五和に受信機を渡したってわけ」

「くっ、こちらの話を信じ込んでいると、油断しちゃいましたか……」

アニーゼが悔しそうに言うが、後の祭り。

「あとついでにあの車輪シスターを殴った時にも発信機を取り付けて、万が一監禁場所とアニーゼ達本隊が違う所にいてもわかるように保険をかけたんだよ」

「なっ!?! い、いつの間に!?! どこに、どこにつけたんですか!?!」

車輪シスターは顔を真っ青にして体中を弄って発信機を探した。

そこまで過剰反応するものか？

ま、男に免疫なさそうだし、潔癖症もあるから触られたのが心底イヤ何だろうな。

「発信機と言っても、そんな分かりやすい物じゃないぞ？ 学園都市特製の特殊な電波

を出す塗料だ。無味無臭で一定時間で消えてしまふ優れ物。お前ら魔術に対しては厳重に警戒するけど、科学に対してはさっぱりだからな。学園都市を舐めるなよ?」

当麻に付けた発信機は半永久的に電波を発信する機械タイプだけど、天草式や車輪シスターに付けたのは特別製だ。

そもそも、魔術サイドに学園都市の技術を簡単に渡すような事出来ないし。

「ぐぐつ、たかが東国の異端者が、ここまで私達を馬鹿にするなんて!」

「世間を知らない非常識な西国の女狐よりはマシだろ?」

「なんですって!」

「お、落ちついて下さい。シスター・アニエーゼ、シスター・ルチア!」

確かアンジェレネだったか、一番ちっこいシスターがそう言うのと、2人は深呼吸をしてどうにか落ちつかせた。

「話を続けるぞ。お前がこのまま学園都市に戻ると思ってたからな。予め、五和に言っておいたんだよ。俺達が突入して時間稼ぐって」

「ユウキ……まさかこうなる事を予想して?」

当麻が心底、驚いた顔をした。

本当なら学園都市に当麻を預けてから天草式に合流して一暴れしようとしてたけど、そうはならないとも思っていた。

こつちからしてみればステイルが参戦してる方が意外だったぜ。

「最初、お前さん方がそんな無謀な真似をするとは思ってなかったんだが。そもそも、お前さん達が動く前に肩を付ける算段のはずだったんだが。少年達、どうやらこつちの想像以上の面白いお馬鹿さん達のようにだよな」

「その事をどうして僕らが知らなかったのか、そこを聞きたい所ではあるね」

「まったくなんだよ。とうまもゆうきも無茶するにもほどがあるんだよ」

また新しい声がして、振り向くと教会の入り口にインデックスが立っていた。

いや、なんでお前まで来るかな。ステイルが来ている時点で察したけどさ。

「むうーゆうきが天草式にばかり言っつて、私達には何も言っつてなかったのはなぜなのかな？　とうまもとうままで気にしなくていいよつて言っつたのに」

「イギリス清教を巻きこまないようにつて俺なりの配慮だったんだけどな」

「インデックス、まかさお前まで……」

インデックスは腰に手をあて、ぶんぶんと言う擬音が聞こえてきそうな表情をしている。
「でもこうなつちやつたら仕方ないよね。助けよう、とうま。オルソラーアクイナスを、私達の手で」

「……ああ！」

これで本当に役者が全員そろった。

アニエーゼはそんな俺達を冷たい眼差しで見つめた後、シスター達に冷酷に一言だけ告げた。

「コロセ」

俺達を囲んでいたシスター達が一齐に襲いかかってくる。

「当麻、オルソラを！ 進路は俺が切り開く！」

「分かった！」

傷だらけのオルソラに当麻が抱きあげ、外へと目指す。

2人を狙って襲いかかってくるシスター達を俺が纏めて蹴り飛ばす。

「おらあ！ お前ら、弱過ぎるぞ！ 数が多いだけの無能集団か！」

それを聞いて顔を引き攣らせたシスターがまた何人か俺へと迫ってきた。

「だから、弱いつての！」

シスターの1人の襟を掴み、他のシスターへ投げ飛ばす。

実際、こいつら1人1人は弱い。天草式の方がまだ強い。

けど、数が圧倒的で一度に迫られたら、めんどくさい。

今は五和達天草式が俺達の周りに展開して、相手をしていくから突破するのは容易だ。

「悪い、オルソラ。遅くなった。だけどここからは俺達が絶対に守る！」
「オルソラ、体は大丈夫か？」

「ええ、こんなもの。全然、大丈夫でございますですよ」

怪我をして歩くのも苦痛なのだろうに、オルソラは心底安心し切った満面の笑みを浮かべている。

それを見て、俺も当麻も闘志が高まった。

教会の外へ出ようとする俺達の前に、多くのシスター達が出口を固めていた。

俺達の歩みが止まる前に、五和が飛び下りてきてシスター達を長いスピアで薙ぎ払った。

随分と大きさにスピアを振り回し、天草式の術式で身体能力を強化した五和は俺を一瞥した。

「任せた！」

「さ、さんきゅー！」

五和は無言で頷き、外への進路を空け俺達が外へ出ると、退路を守るように塞いだ。外へ出た俺達だったが、それでも既にシスター達が展開されている。

彼女達は手に火のついた松明を掲げている。

幻想支配で見るまでもなく、彼女達がしようとしている魔術は分かる。

「当麻、あそこだー！」

教会の周りに組み立てられた建設工用の鉄パイプで出来た階段を目指した。開けた裏庭では、オルソラを守りながら大人数を相手にするのは不利過ぎる。

でも、狭い足場や屋根の上なら大人数でもまともに動けない。

「やあー！」「ふんっ！」

俺達の背後からはシスター達が松明を振るい、その炎を投げつけてきた。

オルソラを抱きあげた当麻を先頭にどうにかかわしつつ、階段を駆け上がった俺は急に後ろを振り向き、シスターの一人を蹴り飛ばす。

一列に追っていたシスター達は将棋倒しのように次々と階段から転げ落ちていく。

それを下で見ていたシスター達の目付きが変わった。

手に持った様々な武器を天に掲げると、その穂先に赤や青などの光が宿った。

「ちっ、当麻向こうへ飛べー！」

遠距離魔術を数で使われたら、俺でも当麻でも防ぎきれない。

今はかわす事だけに専念するしかない。

「だあー！」

魔術の一つが足元へさく裂した。

爆風に乗る俺と当麻は足場から反対側の屋根へと飛んだ。

屋根へと着地と同時に当麻の腕から転げ落ちたオルソラをキャッチした。

軽いとはいえ、女性一人を無理な体勢で受け止めたので少しばかり衝撃が強かった。

「ぐっ……」

「だ、大丈夫でございますか？」

「気にするな。それよりオルソラの方こそ大丈夫か？」

怪我をしているのは分かっていたが、オルソラの破れた衣服の下に多くの足跡がくつきりと残っていた。

それを見て当麻が強く歯軋りする音が聞こえる。

「くそっ！」

「当麻、その感傷は後だ。ともかく今は、また来たぞ！」

十数人のシスターが俺達を囲むように屋根へと這いあがってきた。

「しっしっしっ！」

包囲の一角に突撃し、剣を振って来たシスターの腕を掴み、投げ飛ばす。

そのついでに剣を奪う事も忘れていない。

更に、左右から槍や斧を振り下ろしたシスターをかわし、武器を奪い蹴り飛ばす。

うん、やっぱりこいつら天草式より弱い。

右手に槍、左手に剣を構え、当麻とオルソラを背にする。

面倒だから、ここでこいつら全員潰すか。

「当麻、オルソラを決して離すな。敵は俺が潰す」

「ああ、分かった」

言ってる間に左から攻めつてきた手斧を剣で受け止め、膝を腹に突き出す。

右手の槍を風車のように廻し、残りのシスター達の攻撃を弾き飛ばした。

「おらあ！ 足元注意！」

体勢がひるんだシスター達の足元を槍の柄で薙ぎ払う。

「ああ!?!」「きゃっ?!」

足を払われたシスターは他のシスターを巻き込み、屋根を転がり落ちて行った。

「お、おいおいやりすぎなんじゃ……」

「この下は芝生で、この程度の高さじゃ悪くても骨折程度だ。それより今のうちに行くぞ！」

ぞー！ ん?！」

視界の端で、インデックスが歌を歌い、周りにいるシスター達が苦悶に満ちた表情を

浮かべ倒れているのが見えた。

どうやら魔術ではないみたいだが、あの歌に何か特殊な作用があるみたいだ。

シエリーの時もインデックスは強制詠唱と言う、相手の魔術にハッキングをしかけて

逆利用した事もあったみたいだしな。

「インデックス？ あれは魔術か？」

「いや、魔力を感じない。どうやらあれはインデックス独自の特殊能力ってやつみたいだ。あれならインデックスは大丈夫だろう。俺達もうかつに近付かない方がいいみたいだ。下に降りるぞ」

屋根から足場を伝い、再度地面に降り立った俺達が隠れるのに手頃な聖堂を見つけた時だった。

「玉砕覚悟で我らが主の敵を殲滅せよ！」

——ビクッ

それは多数のシスターを率いていた車輪シスターの声だった。

そして、その言葉の意味する事を瞬時に理解した俺は慌てて、インデックスへと向き直った。

「まずいつ！ 当麻、その聖堂の中へ行け！」

「おい、どうしたんだよユウキ！」

インデックスへと駆け出す俺の目の前で、シスター達が両手に万年筆を構え、自らの両耳に突き刺して行くのが見えた。

と、果物を潰すようなイヤな音が、俺がたまに耳にする音が聞こえた。

「玉砕ってやつばそういう事かよ！」

今までシスター達はこちらの様子を窺いながら攻めてきた。

攻撃の意思を弱めず、でも決して深入りせずだ。

だから数で劣る俺達は互角にやりあえた。

それが今車輪シスターの命令で変わった。

防御を捨て攻撃のみ、相手を滅ぼす為に手段も何も問わないと言う、神風攻撃命令。

その結果、自らを止めるインデックスの声が聞こえなくなるように耳を塞いだんだ。

「まさか、私の【魔滅の声】を回避する為に?」

インデックスを包囲していたシスター達は、両耳から血を垂れ流しながらも無表情で武器を構える。

「あーもうこれだからこの手の奴らは手に負えない!」

痛みなどお構いなしで、感情を殺して敵を殺す事だけに専念した戦闘人形。

そんな見慣れた馬鹿共は見ていて腹が立つ。

「痛みは感じなくても、熱さはどうだ!」

インデックスへ駆け寄ろうとしていたスタイルを幻想支配で視て魔術をコピー、炎の剣を両手に宿しシスター達を薙ぎ払った。

「大丈夫か、インデックス!」

「ありがとう、ゆうき!」

ステイルと齋字も駆け付け、インデックスを守るように陣取った。

「くそ、キリがねえのよ」

齋字の言う通り、これじゃキリがない。

屋根の上や他の場所では五和達が敵を倒してはいるが、それでも数が多すぎる。

「こつちだー！」

当麻が聖堂の中から叫んでいるのが見えた。

運よく聖堂の鍵はかかっていなかったようだ。

考える間もなく、俺達は聖堂へと駆け込んだ。

扉を閉めたと同時に、いくつも刃が扉を突き抜けてきた。

鉄製の扉でもない限り、すぐに突破されてしまうな。

「とりあえず、全員無事見たいだな。オルソラ、傷の状態はどうだ？」

「心配をなさらなくても、見た目よりは平気でございますよ」

「そっか、ならそつちは大丈夫だけど、何か手はあるか？」

一先ずオルソラは1人でも歩ける程度には回復したようだ。

でも、それで自体が好転したわけじゃない。

相手が捨て身の特攻を仕掛けてくる以上、オルソラとインデックスを守りながら戦う

こっちが圧倒的に不利だ。

俺一人ならどうとでもなるが……ってそう言えば、こんな敵も味方も大勢の集団戦は初めての経験かもな。

「難しいのよな。ウチの連中もがんばってはくれているようだが……」

いつまでもつかわからない。暗に斎字はそう告げている。

ただでさえ俺達が介入したと言え普通にやりあって、天草式はアニエーゼ達に壊滅状態にさせられたのだ。

今の悪化した状況ではどうなるかは、斎字達自身がわかつている。

「もしも、この場に法の書があれば、私の解読法と合わせて活路を見いだせるかもしれないのでございますが……」

オルソラの言葉に一同はハツとなった。

法の書は、科学側で言う核兵器みたいなもので、使うだけで魔術側が破滅すると言われている魔導書。

最も、法の書は天草式に盗まれたわけではなく、今もバチカンで厳重に保管されているのだが。

「……なるほど、法の書を使うってだけで脅しに使えるからな。十分に交渉に引きずり降ろせる……あつ」

そこまで言つてふと閃いた事が合った。

「「あるっ！」」

当麻もインデックスも同じ考えに至つたようだ。

「インデックス、確か法の書を一度見た事あるつて言つてたよな!」

「うん、未解読の魔導書として私の頭の中に保管されてるよ」

目をパチクリさせる斎字とオルソラに当麻が説明した。

インデックスの完全記憶能力、その能力で一度法の書を見た事があると云つていた。

流石に解読は出来なかつたが、その内容だけはインデックスの記憶にある。

しかし、それを使えば……

「ダメだ! それをすればこの子が【法の書の中身】を記憶してしまう! そうすれば今以上に大勢の魔術師がこの子を襲つてくるんだぞ!」

だよな。ただでさえ大量の魔導書を記憶してゐるつてのに、その上さらに今まで誰も解けなかつた最終兵器までも使えるようになるんだし。

「?? 心配してくれるの?」

ステイルが自分の身を案じる【本当の理由】が分からないインデックスは首をか
しげている。

当麻の立ち位置にむかし、ステイルがいた事など今のインデックスの記憶にはない。

そればかりか以前、命を狙つて来たほどの相手がなぜ自分の身を案じるのか不思議なのだろう。

それを察したステイルが、顔を赤くしてインデックスから目を逸らした。

ああ、こうなったインデックスが止められない事をステイルは知っている。

自分が狙われているのは当たり前前で、これしか現状を打破出来ないのなら彼女は甘んじてその身を投じる事を、この場にいる誰よりもステイルが理解しているのだろう。

ステイルは隠しきれない心の苦しさをぶつけるように、俺達を睨みつけてきた。

「上条当麻、今以上に強くなれ！　そして、木原勇騎！　彼女に危害が及びそうになったら学園都市が何が何でも彼女を守れ！！　この件が尾を引いて彼女が倒れたら、僕は灰も残さず学園都市ごと君達を魂ごと焼きつくすからな！」

「……分かった」

ステイルはそれだけ言うと舌打ちして背を向けた。

当麻はぐつと拳を握り、オルソラと斎字は複雑そうな表情を浮かべ、インデックスだけが未だに首を傾げてる。

てか何で、俺までフルネームで呼ぶかなあ。

まあ、そりやインデックスに何も無いようには今後も動かし、いざとなりや学園都市の動かせる所まで動かす覚悟はとつくに出来るけどな。

「それでは法の書の解読法をお教えいたしますね。まず基本はテムラー……」

オルソラはインデックスに何やら複雑な魔術用語を言っているが、俺や当麻にはその意味は全く分からない。

ただ淡々と聞いていたインデックスの表情が段々と曇り出したのが気になった。

「もういいよ。大体全部分かったから」

「あの何が分かったのでございませうか？」

突然オルソラの言葉を遮ったインデックス。

その意味する所に、とんでもなく嫌な予感がした。

「これ、正しい解読法じゃないの。トラップとして用意されたダミーだよ」

「そ、んな……!?!」

オルソラの表情が、いや、ステイルや斎字の表情すら凍りついた。

「ごめんね。この解読法は私も辿りつけたの。でも、法の書の怖い所は解読法が100通り以上ある事なの。正しい解読法でなくても、それらしく見えて解読出来たと思いをさせるんだよ」

「……法の書は誰にも読めないんじゃないかと、誰にも読めるからこそ正しい読み方が分からない魔導書、か」

立派なセキュリティだな。間違えと言う正解を沢山用意する事で、本当の正解を分

からなくさせている。

これくらいの方策はしているって事か、法の書を作った奴って心底性根が曲がりくねった野郎だな。

「考えようによつちやあ救われたかもしれんよ。連中に解読法が間違っていましたといやあ……」

——ドカッ！

齋字が無理やり明るく言おうとした時、扉が大きく壊された。

その向こうから無表情ながらも殺気だったシスター達が大勢こちらを睨んでいるのが見えた。

「無理だろうね。ここまで暗部を見せてしまった以上」

「都合の悪い目撃者は消せ、か。つくづく魔術側もこつち側と全然変わんねえな」

またもやセリフを遮られスタイルは苦虫を潰した表情を浮かべたが、気持ちを切り替えようと新しい煙草を取り出そうとした。

しかし、その時内心焦っていたのか、数枚ルーンカードが地面に零れ落ちてしまった。それを見て、俺はある事が閃いた。

『始めるなら始めるでもう少し時間を稼いで欲しかったね。これじゃルーンを配置する時間もないよ』

当麻も俺と同じくカードを見つめて、何か思いついた表情を浮かべている。

「当麻……ひよつとして？」

「ユウキもか？ 一か八かやってみるしかないか」

俺達は頷きあうと、ステイルと齋字に小声で話しかけた。

——バキッ！

扉が大きく破壊され、漆黒に包まれた雪崩のように数百のシスターが突入してきた。

「死ぬなよ、当麻！」

「お前もな、ユウキ！」

それを合図に、俺は懐から閃光弾と発煙弾を投げつけた。

あつという間に聖堂は煙と閃光に包まれた。

続く

第104話 「乱戦決着」

聖堂に迫るシスター達を閃光弾と発煙弾で凌ぎ、俺は当麻達と別れちよつとした荷物をかかえ屋根を登り裏手へと回った。

しかし、そこには既にさつきも多くのシスターと、それを率いる車輪シスターとアンジエレネが待ちかまえていた。

「おや、やつと出てきたと思つたらあなた一人ですか。ですが、これは好都合です！数々の無礼と侮辱と凌辱、今ここで晴らすとしましょう」

うつわあく、なんか知らないけど車輪シスターブチ切れてるなあ。

それにしても、無礼と侮辱はともかく、凌辱つてなんだ!?

殴った以外俺何にもしてないぞ!?

あ、それが彼女にすればそーなのか。

「はあ、めんどくせえ女だな。しょうがないから相手してやるよ」

「ふつ、強がりや！ この数相手にあなた一人で何が出来るんですか!？」

ざつと見て100人前後のシスターを連れてあるせいや、やけに強気な車輪シスター。

ま、普通に考えれば魔術師でもない一般人1人对戦闘シスター100人じゃ話にならないよな。

一般人、ならだけど。

「ん？ えっ？ 何？ お前、この程度の数で強がってるの？ ぷぷつ、いや、笑えるよあんだ。シスターよりコメディアンになったらどうだ？」

「な、何を!？」

「この程度、ハンデにもならないって言ってるんだよ。どうせなら他のシスターも呼んで全員でかかってこいよ。それでようやくまともな勝負になる、かもな？ それにしても今の絵はいいな。烏合の衆のお前らを、たった1人の俺が見下す、いい構図だな」

「ど、どこまでも我々を侮辱しますか……その傲慢、今すぐ後悔させなさい!」

怒号と共に、シスター達が一齐に魔術を放ってきた。

この程度の挑発にいつも簡単に引つ掛かるから小物なんだよなあ。

屋根を駆けまわり、飛んでくる火や光の魔術を回避する。

こいつらが使う魔術はさつき対峙した時、幻想支配で視ておおよそ確認済みだ。

最も、全員視たわけじゃないから油断出来ない。

それでも、今こいつらが使っている精密性も誘導性も低い魔術程度なら簡単にかわせる。

問題なのは……

「これなら、どうですか!」

車輪シスターとアンジェレネ、こいつらの魔術なんだよな。

本来なら、幻想支配で対応すべきものんだけど、今は無理。

車輪シスターは手に持った巨大車輪を俺の方へと投げ放った。

車輪は、俺の真上へと行き、そのまま爆発して多数の鋭い木片となって降り注いできた。

「そおらよつと!」

と、同時に俺はわざわざ聖堂から持ってきた、分厚いカーテンを空に向けて広げた。

アイツの魔術は車輪を爆発させるのと、飛び散った木片を再度手元に戻すのは魔術にやるものだ。

でも、爆発した後は自然の法則に従って飛び散らせてるだけ、ある程度の厚さと大きさの布をタイミング合わせて振る事で、防げる。

それでも貫通する物は貫通する。目の前をカーテンから突き破った木片が通り過ぎていく。

ボロボロになったカーテンを放り投げ、一目散に駆け出す。

次にくる魔術は恐らく、アンジェレネのだろう。

あれをかわすのは難しい。だけど、対処法はある。

「きたれ、十二使徒のひとつ……遅い!……えっ!」

アンジエレネが詠唱を終える前に屋根から飛び降り、シスター達のだ真ん中へ着地する。

いきなり屋根から降ってきた俺にアンジエレネも車輪シスター達も驚き、固まっている。

アンジエレネの魔術の欠点は、詠唱が長い事だ。

それに、このように味方に密接していればあの性格では、うかつに使えなくなる。

今も戸惑ってるし、この隙に数を減らそうか。

「いつまでも逃げてばかりじゃ飽きるだろ?」

近くにいたシスター達が武器を付き立てようとしたが、それより先に俺は身を屈め下段回し蹴りで、シスター達へと足払いをかけた。

周囲にいたシスター達は一齐に転倒した。その隙に槍を2本拝借して、大きく振り回した。

「おらおらおらあ〜!」

なるべく穂先の刃ではなく、柄に当たるように振り回すのは地味に大変だ。

やっぱりただの槍より、棒の方がいいな。

ナイフじゃ殺さずに仕留めるの難しいし、そこら辺の木の棒じゃすぐ折れそうだし、天草式に手頃なの借りれば良かった。

そう思ってる間にもシスター達を次々と倒して行く。

背後から斬りつけてきたシスターの刃を槍で受け止め、ふり返り様に回し蹴りで蹴り飛ばす。

こども密着しているから一人蹴り飛ばしたり投げ飛ばすと、他のシスターも巻き添えに出来るな。

「これでは私の魔術も使えない。一端散りささない！」

車輪シスターの号令と共に、それまで俺に蹂躪されていたシスター達が四方へと一斉に距離を取った。

と言つても、あれだけいたシスター達もほぼ1/3近く減ってるけど。

「くつ、僅かな時間でこれだけやられるとは……」

「お前、仮にもアニエーゼから部隊の前線指揮任されてるんだろ。それなら相手の戦力や戦術を見極めて運用しろよ。数だけに頼ってたら、俺みたいなタイプにすぐやられるぞっ！」

周りにはシスター達がたくさん倒れていて、まさに死屍累々。

いや、勿論気絶程度には収めてるけどな。

「万が一にも骨が折れたりヒビ入っていたとしても、正当防衛だから問題なし。その時だった。」

——ピーーツ!!

どこからともなく笛の音が響き渡った。

「な、なんですかこの笛の音は!?!」

「これは私達の合図とは違いますよ、シスター・ルチア」

シスター達は自分たちの合図とは違う笛の音に驚いているが、俺は音を聞いて思わずニヤリとした。

「どうやら、ここまでのようだな」

「…………ふ、ふふつ、なんですか。今のは降参の合図ですか? 今更遅すぎますよ!」

「いや、降参は降参でも、お前達を降参させる準備が整ったって合図だ」

今まで我慢していた幻想支配の力、これでようやく使える。

静かに目を閉じ、ゆっくりと力を解放させる。

その力は…………ステイルの力。

「なっ、目が赤くなっている!?!」

「そ、そう言えば私の魔術を使っていた時も赤くなっていましたよ!?!」

「今更気付いても、遅い!」

―世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ

―それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり

―それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり

―その名は炎、その役は剣

―顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ

【魔女狩りの王】（イノケンティウス）！

俺の背後にオレンジ色の炎に包まれた、巨大な巨人が現れた。

と、同時に建物を挟んだ向こう側でも炎があがった。

あれはステイルが使ったイノケンティスだろうな。

これを、この瞬間を俺は待っていた。

「二応、ネタばらししておこうか。俺が1人でお前らの前に現れた理由。天草式に頼んで、ステイルの最強魔術を発動させる為の下準備をする為の囷になったんだよ」

聖堂でのあの時、地面に散らばったルーンカードとステイルの魔術を思い出してピンときた。

ステイルの魔術はルーンの枚数に応じて威力が増す。

だが、少ない枚数でもこの教会の周囲に要所要所に配置し巨大な魔法陣を描く事で、威力が増すのではないか。

そして、この大乱戦の最中、大人数で行動でき尚且つ地図や図形を使った術式が得意な天草式ならば、短時間で最も効率的な巨大魔法陣を描けるのではないか。

ステイルと齋字に確認すると、理論上は可能と言われた。

ならば、後はそれを可能にする為に部隊の総司令官であるアニーゼの足止めに当麻がその役を買って出た。

当麻がアニーゼの相手を1人でする事にはインデックスや齋字だけではなく、俺も猛反対した。

護衛で来ているのに1人で敵の指揮官に向かわせるのでは、全く意味がない。

けれども、当麻は自分がいては幻想殺しで術式を阻害するから、俺が1人で行く方がいい。

それにその方がアニーゼも油断する、と言った。

確かにその通りだと思っただし、これ以上時間はなかったから、仕方なく任せる事にした。

代わりと言っては何だが、シスター達の大部分を俺が引き受ける事にした。

これにもインデックスと今度は逆に当麻が反対した。

俺1人の方が大人数相手にするのに動きやすいし、天草式が早く魔法陣を完成させたからステイルの魔術を使って切り抜けられるから、と幻想支配の説明をステイルと齋字に

もして納得させた。

後は、ステイルを一度見て、いつでもステイルの魔術を使えるようにしつつ、温存させる為に幻想支配なしでシスター達の相手をして、天草式の合図を持って、発動させたわけだ。

一度他の相手を視ると、上書きされてステイルの力が消えてしまおうし、早く使うとそれだけステイルの力を消耗させて肝心の時に効果が切れてしまうからな。

「あー後、乱戦でのお前の前線指揮を見て、俺達が聖堂に隠れた後、万が一の逃げ道を封じる為に裏手を固めていると踏んだんだ。大人数でここを張ってくれたおかげでこちらの計画はかーなりやりやすかったんだ。ありがとな、ヒステリックシスターさん♪」
「いやー思ってた以上のシスターが裏手に集まってるの見た時は、ラッキー♪ と思っただね。」

それにあの車輪シスターは俺に恨みあるし、挑発すれば簡単に乗ってくれると思ったし。

「お、のれー！ いきますよ、シスター・アンジェレネー！」

「あ、シスター・ルチア、は、はい！」

他のシスター達が戦意消失している中、車輪シスターは殺意が籠った目で俺を睨みつけて、悪あがきをしようとする車輪を投げつけた。

アンジェレネもそんな彼女を制する間もなく、急いで硬貨の入った袋を天に放った。
「往生際が悪いなあ」

2人が魔術を発動させるよりも速くイノケンティウスが腕を振り、車輪と硬貨袋を握りつぶし、超高熱の炎があつという間に灰とドロドロの液体へと変化させた。

「さーて……次は誰がこうなりたい？」

「あ……ああ、う」

今度こそ2人も戦意を失い、茫然自失となつてヘナヘナと地面に座り込んだ。

これでここは決着ついたけど、当麻は大丈夫かな。

アニエーゼが使う魔術は、念の為に幻想支配で視た時に覚えて、一通り教えたから大丈夫だとは思うけど。

「じゃあな。もう二度と会う事はないと思うけど」

もう殺気も敵意も持てず、ただ諦めと絶望に満ちた表情を浮かべる車輪シスター、ルチアに背を向け当麻の所へと向かった。

ところどころ炎で焼かれた敷地内を歩き、アニエーゼがいるであろう場所へとやってきた。

途中倒れていたり座り込んだりするシスター達がいたが、誰も俺に何かしようと思

ず、ただ黙って通しているだけだった。

まー背後にイノケンティウスを出したままだったからだろうけど。

「よお、ここも片付いたみたいだな」

「あつ、ゆうき！」

中には、インデックスや齋字に抱きかかえられたオルソラ、それにステイルと五和もいた。

皆がいる向こう側では、当麻に殴られたのだろうアニエーゼが気絶していて、当麻がゆっくりとこつちに歩いて来ていた。

「よつ、そつちも終わったのか？」

「当然」

「そつか……これで、解決、だ……な」

突然、当麻の身体がよろけて倒れそうになり、慌てて駆け寄り抱き支えた。

「とうまとうま！」

「あー心配するなインデックス。怪我は深くない、ただ気絶しているだけだ。ずっと戦い続けて緊張の糸が切れたんだろ、疲労も溜まってたようだしな」

当麻は俺の肩に抱かれて、健やかな寝息を立てていた。

「全く、大したもんだな、お前さんたちは。まさに奇跡としかいいようがないのよな」

苦笑いを浮かべた齋字は、抱き抱えていたオルソラを下ろすと、外にいる他の仲間の元へと行った。

よろよろとしながらも、オルソラは一人で歩き、俺の元へとやってきた。

「本当に、ありがとうございます」

「私からもお礼を言わせて下さい。あなたが囧になってくれたおかげで、こちらも素早くルーンカードを配置する事が出来ました」

「礼なら当麻に言えよ、オルソラ。俺はコイツの護衛で来ただけだ。五和も、元々騙されたとは言えこつちから攻撃しかけたんだし、今のだって生き残る為に自分からやった事だ」

「ふふつ、そうですか。それでも、ありがとうございます」

この手の礼はあまり慣れていない。

なんか背中がかゆくなったので、話題を逸らす為にステイルに話を振った。

「で、オルソラと天草式はこれからどうなるんだ？ オルソラはイギリス清教の庇護を受けるって仮の手続きだろ？」

「そうだね。それに關しては問題ないだろう。後は上がローマ正教と話をするだろうし。天草式もイギリス清教の傘下につく事になりそうだ」

「えっ？ そうなのか、五和？」

これは意外だ。なんかオルソラのついでに、な感じではなさそうだけど。

「実は、これは前から天草式の皆と決めていた事なんです。形はどうあれ、私達は女教皇の近くにいるのが正しい天草式の姿ですから。例え、共に闘う事ができなくても」

そう言った五和の表情は少し寂しげだった。

「そっか……あつ、アレとかアレとか。どうするんだ？」

寝転がっているアニエーゼや外で茫然としているローマ正教を指さすと、オルソラや五和がプツとなぜか噴き出した。

何がそんなに面白いんだ??

「……アレ呼ばわり、か。まあ、いい。ここから先は本当に僕らの仕事だ。君達はこれ以上関わるな。何、彼女達もローマ正教に送り返すさ。後の事は向こうが決める事だ」

「なるほど、確かに。じゃあ、俺達学園都市の人間は元の場所に帰るとするよ。当麻も一応検査させないといけないし」

当麻は毎度のごとくボロボロだったが、いつものゴタゴタよりはよっぽどマシだ。

「天草式も改めて色々世話になったな」

「い、いえ、こちらこそ！ また会えるといいですね」

「ははっ、立場的にはもう会わない方がいいんだらうけどな」

「それでも、私はまたあなた達とお会いしたいと思います。その時は、ぜひお礼をさせて

下さいね」

「ま、その時が来たらな。じゃあな、五和、オルソラ」

笑顔で手を振る2人に見送られ、俺達は学園都市へと向かった。

また会えるといいな、か。

一応、科学サイドと魔術サイドの裏側の人間だし、難しいと思うけどな。

でも、なんとなくまた会う気がするんだよな、天草式やオルソラとは。

「早くとうまを病院へ連れて行こうよ、ゆうき！」

「ああ、そうだな。歩いて帰るのは面倒だし、迎えを呼ぶか」

何気に疲労が溜まっているのは俺もだ。

イノケンティウスの消耗も激しかったし、殺さずに大人数と戦うのは疲れる。

その後、迎いの学園都市の救急車が現れ、どんな迎えが来るかわくわくして待っていた

たインデックスが若干凹み、なぜかステイルもちやつかり着いてきた。

安全にインデックスを学園都市内に届けたら、すぐにまたここに戻ってくると言っ

ていたが、お前いなくて後始末どうするんだよ。

こうして、法の書の事件は終わり、当麻は病院で検査入院と言ういつも通りの、俺は暗部での仕事と言うこれまたいつも通りの日常に戻った。

しかし、この時はまさか天草式やオルソラはともかく、アニエーゼ達ともすぐに意外な場所で意外な再会をするとは、夢にも思っていなかった。

続く

日常編Ⅲ

第105話 「剣士の憂鬱（前編）」

最後の花見を終えて、梅雨の時期となったある日の事。

私、魂魄妖夢は博麗神社へとやってきました。

師匠へ弟子入りしてから私は幾度かここへ足を運んでいます。

目的は勿論、師匠から剣の御指導を頂く為です。

いつもは大抵こちらの空いている日に神社へ行ってから師匠の予定を聞くのですが、今日は違います。

3日前来た時に、師匠の方から明日も空いてるから来て良いぞ、と声をかけてくれました。

その時、霊夢さんがなぜか半分呆れたような怒っているような顔をしていました。

「それじゃ、準備はいいか妖夢？」

「はい！ お願いします、師匠！」

師匠は今日も嫌な顔せずにつき合ってください。

……日が昇り始めた早朝だと言うのに。

「どうでもいいけど、もう少し遅い時間に来れなかったの妖夢？」

「も、申し訳ありません、霊夢さん」

昨日私はなぜか寝つけず、しかもまだ陽が昇っていない時間に目が覚めてしまい、いても経つてもいられず来てしまいました。

『あらあら、ふふふつ、そんなに楽しみだったなんて、妖夢もまだまだ子供ねえ。ところで、今日の朝食は……「行つてきます！」 あっ』

と幽々子様に笑顔で見送られたのはどこか引つ掛かる所もあります。

幸いな事に師匠も霊夢さんも既に起きていて朝食の準備をしていました。

私は朝食を取るのを忘れていたので、ちゃっかり頂いてしまいました。

「次から気を付けてくれればいいわよ。ユウキさんにも私にも迷惑かけなければね」

「あはは、まあそうだな。じゃ、来い！」

愛刀を横した木刀を握る両手に力が漲る。

最初はお互いに真剣でやり合っていたのですが、危なすぎると霊夢さんや咲夜さんなどに怒られました。

それからは白楼剣と楼観剣そっくりに削り取った木刀を持参しています。

師匠のナイフは切れ味を調整出来るそうなので、少し羨ましかったです。

「行きます、師匠！」

一步、二歩と間合いを詰め、飛び跳ねるように師匠に近付き、まずは右の袈裟斬り。師匠は軽く身体を捻るだけで簡単にかわしてしまいました。

もうこの程度では驚きません。

「しっ！」

左逆手に持った木刀を横に振いますが、これもかわされます。

更に追い打ちをかけるように回転しながら何度も斬り付けますが、全てかわされました。

「っ？」

ここに来て私は違和感を覚えました。

しかし、その正体が分かりません。

「どうした妖夢？ 手が止まってるぞ？」

「いえ、何でもありません。まだまだこれからです。」

ともかく今日の師匠はとにかく受けに周っているようなので、遠慮なく攻め続けさせてもらいます！

強く地面を踏み締めて間合いを詰めます。

「はああ〜!!」

さつきよりも素早く鋭い斬撃を、さつきよりも連続して繰り出します。

右下、左上、真上、左下……

「はあ、はあ、はあ……」

あれからどれくら打ち込んだでしょうか。

ほんの数十分か、それとも数時間か。

とにかく、私の攻撃は何一つ師匠には当たらず、私は地面に膝をつき息があがつてしまいました。

いえ、いつも師匠には届かないのですが、それでも今日みたくただかわされるのではなく、ナイフで受け止められたり受け流されたりです。

それが今日は、掠りもせずナイフで防御されるわけでもなく、攻撃が全てかわされましました。

こんな事は初めてです。

「とりあえず、ここままでだな。大丈夫か妖夢？」

「つ、大丈夫です。でも、どうして、当たらない……んですか」

「それは昼食を食べながら話すよ。食べていくだろう？」

「あ、はい。ぜひ！」

「ははっ、元気戻ったみたいだな」

そう言うのと師匠は台所へと向かって行きました。

「はい、これ飲んで洗面所で顔を洗って来なさいよ。それとも手を貸しましょうか？」
「いえ、大丈夫です。ありがとうございます」

霊夢さんが持つてきてくれた冷たい水を飲み少し落ちつきましたが、胸の中にはもやもやが積もって行きます。

洗面所をお借りして顔を洗ってスッキリさせたくもりでも、まだそれは続きました。その後、朝食に続いて昼食も師匠の手作りを御馳走になりました。

「御馳走様でした。とても美味しかったです、師匠。今度は料理の方も教えてもらいたいですね」

「妖夢だつて料理上手だろ？ それに俺なんかより霊夢や咲夜に教えて貰えよ。すごくうまいんだから」

「……褒めたつて何も出ないわよ」

師匠が褒めると霊夢さんは素っ気なく返事をして、食器を片づけに行きました。その顔がほんのり赤かったのは、気のせいでしょうか。

「さて、そんな事より、さっきのアレの事話すか。以前、妖夢には経験値が足りないつて弱点を教えたけど、実はもう一つ弱点があつたんだよ」

「もう一つの弱点、ですか？」

私の弱点がもう一つあった。

師匠の言う事なので間違いはないと思いますが、かなりシヨックです。

おじい様の教えを守り日々精進してきたつもりなのですが、まだ足りなかったようです。

「妖夢の弱点、それは太刀筋が素直すぎるんだよ」

「太刀筋が素直、それはどういう意味ですか？」

「簡単に言えば、妖夢の攻撃は読みやすいって事さ。初撃で相手を確実に落とすならともかく、何度もやっていたらすぐに妖夢の剣の癖が分かって、斬撃の軌道が読める。それはすなわち、簡単にかわけて尚且つカウンターがしやすくなる」

——妖夢、お前の剣はまっすぐ過ぎる。それは短所でもあり、長所でもある。

師匠にそう指摘され、私は昔お爺様に同じような事を言われたのを思い出しました。

あの頃の私は今よりも未熟で、お爺様の言葉の意味が良く分かっていませんでしたが、今なら分かります。

「そう、ですか……」

「あ、そこまで落ち込む事ないぞ？」

俯いた私に師匠は焦ったような声を出しました。

「慰めは要りません。私はやはり未熟なのでから」

結局、私は何も成長していなかったのですね。

「そう言う意味じゃないっての。良いか、よく聞けよ？　太刀筋が素直なのは良い面だつてあるんだぞ？」

「えっ？　どういう意味ですか？」

相手に読まれやすいのであれば、短所しかないです。

「単純だからこそ攻めにうってつけて事だ。妖夢の力がそのまま太刀筋に乗っているから、鋭い斬撃が出せている。下手に捻くれていると自分の力が十分に刀に乗らないからな」

確かに、お爺様は短所でもあるけど、長所でもあると言ってくれました。

「妖夢の身体は見た目こそ細くて綺麗な体つきだけど、斬撃の速さと重さは十二分に持っている。太刀筋を改善するよりも、それをもっと伸ばして、手数を増やせるようにすればいい」

「速さと重さ……」

一瞬私が重いと言われていると思いましたけど、違いますよね。

私の剣での一撃一撃に私の力の全てが乗っているのです、それを伸ばすように鍛える、ですね。

それにしても、今私の身体がどうこうと、褒められた気がしますが……？

「あー話はまとまったみたいね」

「ああ、うまく説明出来た……って、何で睨んでるんだ？」

「……別に」

霊夢さんが顔を半分だけ襖から出して師匠を睨んでいます。

正直、ちよつと怖いです。あ、私にも睨んできました。

「で、どうする？ 今日空いてるから、少し休んでからまたやるか？」

「そうですね……あゝ!?」

師匠の言葉に甘えようかと思っていた時、大切な事を思い出しました。

「な、なんだ？ 急に変な声出して」

「幽々子様の食事、用意して来るの忘れてました!!」

そうでした。いつもは大抵昼食後に来ていたので忘れていました。

思えば、出かける時、幽々子様何かを言いかけていた気が……

朝食どころか昼食も抜いていますね……

「幽々子って確か亡霊なのに物凄く大食漢だったわよね。用意してないのまずいんじゃないの？」

霊夢さんが意地の悪い笑みを浮かべていますが、全くその通りなので反論出来ません

!

「す、すみません師匠！　そう言うわけなので今日はこれで失礼します！」

「ああ、いいぞ。俺でよければ寺子屋とかで用事なきやいつでも相手になるから、また来い」

「出来れば手土産持参してね。食べ物限定で」

「はい。次は必ず用意します、霊夢さん。お2人とも、今日はありがとうございました！」

急いで博麗神社を後にして、私は白玉楼へと戻りました。

「……よう〜む〜？」

「ひい〜!?　ご、ごめんなさい幽々子様！」

餓鬼のような風貌になった幽々子様に危うく食べられそうになりました。

「ふう〜生き返るわあ〜」

「いや、幽々子様死んでるじゃないですか」

「そんな事より、今日の稽古はどうだったのかしら？」

幽々子に聞かれて、私は今日の稽古を頭の中でふり返りました。

「その顔だと、何か言われたのかしら？」

「えっ？　私何も言っていないよ？」

「妖夢の顔に書いてあるわよ。それに彼女から色々聞いたしね」

「彼女？」

幽々子様はまるで隣に誰かいるかのように話しますが、私には誰も見えません。

ま、まさか幽霊!?

「いやあく驚かすつもりはなかったんだけどね。ごめんごめん」

「萃香さん!？」

そう言っついていきなり幽々子様の隣に現れたのは、幻想郷に戻ってきた鬼、伊吹萃香さんでした。

どうも幽々子様は萃香さんを昔から知っているようです。

「君と彼の稽古に興味があつて、毎回見学させてもらつてたんだよ。気付かなかつた？」

「はい、気付きませんでした。あ、萃香さんの能力ですか」

萃香さんは身体を霧状にする事が出来るのでしたね。

それで、私と師匠の事をこっそり見学していたのでしょうか。

「そうそう。で、今日もユウキに一本も取れなかつたのが悔しいのかな？」

「悔しい、ですか」

萃香さんに言われて初めて胸のもやもやの正体に気付きました。

私は師匠から稽古を付けてもらっているのに、何も学べていない。

何も成長していない。これじゃいつまで経っても師匠に追いつけません。

「そう、ですね。私は悔しい、です。師匠に何度も稽古をつけてもらっても、掠りすら刺せる事ができません」

それに今日はとうとう全てかわされて、新しい弱点にも気付かされました。

これじゃあ、いつになったら師匠から一本取れるか分かりません。

「あらあら、妖夢はユウキ君から一本取る事が目的なのかしら？」

「それは……はい、私は師匠から一本もらいたいです」

言われてみれば私が師匠から稽古を付けてもらいたいのには、一本取りたいから……なのではないか。

「一本取る、それだけでいいのかな？」

「? どういう意味ですか？」

萃香さんなのですが、幽々子様も意味深な笑みを浮かべています。

「これ以上深く追求しても面白くはなさそうだから止めておくよ」

「ええ、そうね。もう少し、と言った所かしら？」

「お2人ともさつきから何を言っているのですか？」

全く意味が分かりません。

師匠から一本取れる。それだけで十分凄い事だと私は思うのですが？

「さてと。で、妖夢はこれからどうするんだい？」

「どうする、と言われましても……」

「ユウキから一本取る秘策か何かないのかな？ 私から見ても妖夢とユウキの実力差はそんなになんと思うよ。身体能力と経験値はユウキの方が上だけど、剣の腕はそれを補えるほどに妖夢の方が上だよ。だから総合的に大差はない」

「そ、それは大げさすぎます。師匠との実力差は私が一番身にしています！」
でなければ毎回完敗しません。

「はあ、妖夢はまず自分に自信を持つ事から始めないとダメかしら」

「そうだねえ。ほんの少しのきっかけがあれば、ユウキから一本取れると思うんだけど、言葉で動揺誘うとか」

「言葉で、例えば悪口とかでしようか？」

師匠に悪口なんてとんでもないです。

それに、そんな手で勝つても嬉しくありません

「悪口？ ダメダメ。ユウキには全く効果ないよ。霊夢やあの吸血鬼達の悪口なら効果ありそうだけど、そもそも妖夢はそういうのダメでしょ？」

「はい。師匠に悪口なんてもつてのほかです！」

「そもそも言葉で動揺誘うのは彼の十八番よ。妖夢にそれが出来るかしら？」

幽々子様の言う通り、師匠は言葉を武器にするのがとても得意です。

私なんかが言葉で太刀打ちできる訳ありません。

すると、萃香さんは悪巧みをしている悪者のような顔つきになって、こう言いました。「大丈夫。悪口でも何でもない言葉ならいいんじゃないかな？ 今度、ユウキに稽古付けてもらう時に彼にこう言うといいよ」

萃香さんが言う、悪口でも何でもないけど、師匠には効果抜群という言葉。

しかし、私にはその言葉を聞いて、師匠に効果があるのかどうかは疑問に思いました。その言葉とは……

続く

第106話 「剣士の憂鬱（後編）」

妖夢との稽古から一夜明け、今日はレミリア達紅魔館組がやってきた。パチュリールとこあも一緒なのは、俺の定期検診をしに来ている為だ。

で、暇だからと咲夜を誘って模擬戦でやりあう事にした。

その時、美鈴が何か言いたげな視線を送ってきたが、悪いけど今日は格闘よりナイフでやりあいたい気分なんだよな。

昨日は妖夢の為とは言え、不発で終わらせたから身体が疼いて疼いて……つてこんな事こつちに来てからよくある。

学園都市にいた頃はそういうのなかったんだけど、環境が変わったせいかな？

「それで、あの子とは昨日はそれだけやって終わったのかしら？」

「ああ、あれだけやれば十分だろ。攻撃が読みやすいって言う弱点の1つは教えた。もう1つは自分で気付くか知らず知らず乗り越えて行った方がいいだろう？」

「それもそうね。ふふつ、あなたも随分と師匠が柄に合って来たんじゃない？」

「そんな柄はいらないうっての」

俺と咲夜は世間話をしつつも、ナイフとナイフでやり合っている最中だ。

逆手の強襲をすれば、咲夜は順手の連続突きで応戦する。

咲夜が蹴りを放てば、同じく蹴りで受け止める。

一進一退の攻防。咲夜はナイフだけではなく格闘戦も得意だ。

俺と咲夜は戦闘方法が似ている上、実力もほぼ互角。

だから、美鈴と同じく結構やり合っていて楽しい。

楽しいのだけど……

「咲夜、スカートなんだからそう大振りな蹴り技を使うのはどうかと思うぞ？」

「あら、大丈夫よ？ 今日には勝負下着なもの」

「[[[[ぶっ!!]]]]」

ん？ 霊夢達が一斉に嘖き出したが、どうした？

「そうか、勝負下着か。だったら安心だな」

——ズルッ

あれ？ 今度は一斉にずっこけたぞ？

あ、なぜか咲夜までこけている。

「あ、あのねえユウキ。あなた勝負下着の意味分かっているの!？」

「えっ？ 勝負下着って戦闘用に動きやすかったり、長時間履いていても皮膚に影響が

出ないようなものだろ？」

俺がそう言うと、レミリアは開いた口がしまらないと言いたげに口をあんどりと開いた。

霊夢とフランは深く溜息をして、パチュリーと美鈴とこあは頭を押さえ、萃香は笑い転げている……つて萃香いつのまにいたんだよ。

「はあく……慣れない事をしたたり言ったりするものじゃないわね。そもそもこういうのつてあのバカラスがやるべき事よね。と言うか、あなた知識に偏りがありすぎるんじゃないかしら!？」

「???」
「なんで文が出てくるのか、とかなんで怒られてるか分からないけど、まあ、続けるか?」

「今日はもういいわ。ほら、お客さんが来たみたいよ」

咲夜が指さした方を見ると、空の向こうから妖夢が飛んできてるのが見えた。

昨日もやったけど、2日続けて稽古に来る事はよくある。

そして妖夢は、俺の姿を見つけると眼前へと猛スピードで迫ってきた。

「こんにちは、師匠! 今日稽古をつけてもらえないでしょうか!」

「お、おう。いいぞ」

やけに爽やかで、それでいてやる気満々といった表情を浮かべている妖夢。

昨日の帰り際とは大違いだ。

何にせよ。咲夜と中途半端に終わってしまったから、このまま続けるのは願ってもない事だけだ。

「ねえ、この子に何をしたの？ またテンションがおかしくなってるわよ？」

「俺に聞くなよレミリア。大方幽々子が何か言ったんじゃないか？」

「何を話しているんですか？ さあ、始めましょう！ すぐに始めましょう！」

こんなにハイテンションな妖夢は珍しいな。

たまに頭のネジぶっ飛んでおかしくなる事はある。

霊夢やレミリア、咲夜達は見慣れていると言つてもいいけど、美鈴やこあは驚いていない。

「何だか嫌な予感がするのよねえ……」

霊夢が何か呟いたが、俺は聞かなかつた事にした。

だって、俺も嫌な予感がすつごいするからな！

もう、考えるのは止める事にした！

「で、嫌な予感がするなら止めなくて良かったのですか？」

「あの子、今日はいつにもましておかしなテンションだし、どうなつてもしらないわよ？」

「うーん、ユウキさんは乗り気だし、危険な感じはしないからいいかなと思って」
私が呟いた言葉に美鈴と咲夜が反応した。

何だろう。どうも私が嫌な予感と言うと過剰反応してくるわよね、皆。

まあ、私の勘つてば予知能力レベルとまで言われてるから仕方ないけど。

でも、今回の嫌な予感は危険という意味ではなく、何かこう別な意味で嫌な予感するのよね。

「では、いきます。はあー！」

「ハッー！」

そんな事を考えている間にもう始まってしまった。

妖夢は昨日のユウキさんのアドバイスをちゃんと聞いていたようで、斬撃は相変わらず単調ながらも鋭さが増している。

ユウキさんもそれが分かっていて、今日はちゃんとナイフで裁いているわね。

「それにしても、あの動きは見事です。よほど剣の才能に恵まれているのですね」

「美鈴は妖夢の剣術見た事なかったのよね」

「私も初めてだよ。あのお姉ちゃんここまで強かったんだね！」

美鈴とフランは妖夢とユウキさんの稽古を見るのは初めてなので、結構楽しんでる。

確かに見ている分にはあの2人のやり合いは見ごたえがある。

昨日は一方的だったけれど、それでもユウキさんのかわし方が円舞のようで綺麗だったわ。

「さーつて、妖夢はどこで仕掛けてくるかねえ」

「そうね……つて萃香、妙な言い方するわね。何か知ってるのかしら？」

「んん？ いやあ、それは見てのお楽しみつてやつだよ。いい酒の肴になりそうだし」
なんて言いながら、呑気に瓢箪の酒を飲む萃香。

というかこの鬼っ子いつのまに來たのかしら。

昨日もこつそりとユウキさんと妖夢の事見ていたみたいだし。

「あんたね。たまには普通に入ってきて見てなさいよ。覗き見とか趣味悪いわよ？」

「別に覗き見じゃないよ。ただ気付かれなかっただけさね」

「呆れた。ただの屁理屈じゃないそれ」

「ほらほら、そんな事より決着付きそうだよ」

萃香の言う通り、ユウキさんと妖夢との勝負は決着が付きそうだった。

2人共まだ一撃を加えられていないけど、息切れた妖夢の攻撃速度が鈍ってきて、逆にユウキさんはカウンターを仕掛けてきている。

最も、実戦形式の稽古なのだから決着も何も無いわね。

「妖夢、そろそろ終わりか？」

「いえ、まだ、これからです！」

息切れを起こしているのに妖夢の目はまだ諦めていなく、これからが本番だと言わんばかりに燃えている。

これは何か秘策を用意したのかしら？

そして、その秘策に間違いなくこの酔っ払いが関わっているはず。

「へえ、面白いな。いいぜ、来い妖夢！」

「はい、師匠！」

そうして妖夢は数回呼吸を整えて、深く息を吸い込んだ。

「……………すきやき!!」

……………はっ？

——ドテツ

隣で萃香が素っ転ぶんでるけど、私は気にしなかった。

と云うかいきなり妖夢が素っ頓狂な事を言うので固まってしまった。

私だけではなく、咲夜やレミリア達も同様でユウキさんですら目をパチクリさせて固

まっている。

「シッ！」

「あつ」

——パシッ

ユウキさんの間の抜けた声と共に、彼の持っていたナイフが宙に舞っていた。

そして、首筋には妖夢の持つ木刀がピタリと付けられている。

これは……勝負あり？

「~~~~っ！ やりました！ ついに師匠から一本取れましたあく!!」

妖夢は両手を振り上げ、子供のようにはしゃいで喜んでいる。

異変前からこれまで全戦全敗、一撃を与えられずに完敗だったのだから、喜ぶのは当

たり前、かな？

それよりも妖夢が言ったあの一言の方が気になる。

「あく……今回はやられちゃったか、参った参った。隙を見せた俺の不覚だ。ところで妖夢、さつきはなんで急にすきやき、だなんて言ったんだ？ 突拍子が無さ過ぎて思考

停止しちやっただぞ」

「あ、あれはですね。師匠の好きなものを言ってみたんです。そうしたら隙が出来ると言う事でしたので」

「??」 話がさっぱり見えてこないけど、要するに妖夢は誰かからアドバイスを受けたって事だな？」

「はいっ！ あ、すみません！ 誰に教わったかは教ええないと言う約束ですので……」

「へーふうんそーなんだー」

ギギギツとユウキさんの顔がある一点へと向けられる。

と、同時に私や咲夜達も同じ方を向いていた。

その視線の先では……

「あ、あたたたつ、ま、まさかこんな展開になるなんて、あの子天然とかそういうレベルじゃ……あつ」

縁側から盛大に素つ転んだ萃香が顔を上げると、沢山の鋭い視線が突き刺さっていた。

「すくいくかく？ 妖夢に何を吹きこんだのかしら？」

「俺の弟子に何いらない事教えこんだ？」

「そこら辺を、詳しく聞かせて頂けますね、早急に」

「嘘はつかないわよね？ 仮にも日本の鬼なんだから」

「ホラ、サツサトハイテラクニナツチャイナヨ？」

私達に問い詰められ、流石の萃香もうすら笑いを浮かべながら後ずさって行く。

なんか、1名おかしな方向にいつてる気がするけど。

「あ、あはははっ、私はそろそろ……って、あれ？　なんで!?　霧化出来ない、つてユウキ!？」

「俺の能力停止の事、忘れてたか？」

「どうやら萃香は能力で逃げようとしてたみたいだけど、ユウキさんが幻想支配で先手を打った。」

さて、これで萃香は逃げ場を失ったわね。

「ま、待って下さい！　萃香さんはただ師匠に、すきやき、と言えばいいと教えてくれただけです。何も悪くありません！」

妖夢がそう言うのと萃香はアチャーと言った風に額に手をあて天を仰いでいる。

うん、妖夢色々話してくれてありがとう。

でも、一点だけどうしても気になる事があるのよね

「……だから、なんですすきやき？」

「えっ？　師匠は、すき焼きが大好物だからなのではないですか？」

「だからなんで!？」

ユウキが萃香から離れ、妖夢と話こんだ隙について私や咲夜は萃香に詰め寄った。

「ねえ、あんた、本当は妖夢に何と言えって言ったの？」

「まさかとは思いますが……」

「うう、お察しの通り、好きだ。って言えばいいよと言ったんだよ。でも、なんでか妖夢は変に解釈したみたい」

……なるほど。

すきってだけじゃ何でそうなるのか分からず、妖夢は自己解釈ですき焼きの事だと思ってしまったと言うわけね。

「これは妖夢の天然さに救われた。と言えばかしら？」

「そうね、咲夜。最も、妖夢がそのまま言った所でどうもならなかったでしょうけど」
彼にそんな言葉が通じるとは到底思えない。

「ただ、そう言われた時の彼の反応があるのかどうかは、少し気になったけどね。」

「まあ、いい。ともかく俺の隙をついた時のあの一撃、今まで一番鋭くて力強かったぞ。多分隙をつかれなくてもあの一撃なら受け切れなかったかもな」

「っ！ あ、ありがとうございませす、師匠！」

妖夢の一言で唾然としてしまったけど、ユウキさんの隙をついた時の一撃は確かに今まで見た中で一番いい一撃だったと私も思う。

咲夜やレミリア、美鈴も同感のようで、あの一撃を褒めていた。

「あ、ひよっとして、萃香さんが言っていた一言って、すき焼き、ではなく隙あり、だつ

たのでしようか……」

「いや、忘れる。馬鹿鬼に言われた事は綺麗さっぱり忘れる。コホン、ともかくこれで分かったと思うけど、妖夢が本気を出せば俺じや受け切れない一撃が容易に出せるんだよ」

「しかし、あれはまぐれです！ たまたまです！ あんな鋭く重い一撃なんて未熟な私にはとても……」

「はいそこ。そこが妖夢の一番ダメな所だ」

ユウキさんは、テンションが下がろうとしていた妖夢の頭に手を置き、優しく撫でた。
「えっ？ 師匠？」

「俺が言っていないなかった妖夢の最大の弱点。それは自分を過小評価しすぎて自信をもたな過ぎって事だ」

「自信を、持たない？」

「そうだ。妖夢は元々すごい剣の才能とそれを十二分に引き出せる力があるのに、妖夢自身がそれを否定してうまく力を出し切れていなかったんだよ。本来、俺と互角以上に渡り合えるって言うのにさ」

ユウキさんはああいうけど、多分妖夢が自信を失った原因って彼に2度も完敗したせいよね。

ま、言わぬが仏と言うやつね。

「きっかけはどうあれ、妖夢は自分でその力を發揮して俺に勝った。どうだ？　少しは自信が付いただろ？」

「その、言われてみれば、少し身体が軽くなった感じがしますが、でもあれは偶然」

「偶然だろうが何だろうが、妖夢の剣は俺を上回ったのは事実。それを認めろ。それを誇れ。魂魄妖夢は俺に剣で勝ったんだ」

「……っ、はい！」

ユウキさんが言いたい事が分かったのだろう。

妖夢はさっきまでのどこか影のある笑顔ではなく、憑き物が落ちたかのような笑顔を浮かべていた。

「全く、弟子思いと言うか、随分と周り道して伝えたわね、ユウキさんは」

「私は剣の事はさっぱり分らないけど。今の妖夢が今までとは違うって事は分かるわ」

咲夜とパチュリーの言う通りだ。

きつとあれが本来の、自信と誇りを取り戻した魂魄妖夢の姿と言うわけね。

「さって、これで俺が教える事はなくなった。妖夢の師匠も今日で終わりだな」

「いえいえ！　確かに私は自信を持ってましたし、師匠にも一本取れました。ですが、私が

師匠に教わりたい事はまだ沢山あります！　ですの、これからもずっと、いえ、永久に師匠と呼ばせて下さい！」

ユウキさん、これをいい機会とばかりに師弟関係を解消させる気だったわね。

でも、妖夢が今まで以上にユウキさんを慕ってしまったみたい。

今、ユウキさん、当てが外れてとても面白い顔をしてるわね。

「えっ、いや、もういいだろ？　俺より強くなつたんだし」

「そんな事はありません！　例え師匠より強くなろうとも、私は師匠の側で色々教わりたいんです。ずっと側にいさせてください！」

……何だか段々と妖夢の言う事が過激になつてきてないかしら？

それと、妖夢の顔がまるで紅魔館や文や妹紅みたいに、全く別の顔になつてきてないかしら？

「人の事言えないんじゃない？　妖夢の顔、霊夢とも同じような顔になつてきてるね。

花見の時とは大違いだ。これはこれからまた楽しくなりそうだねー」

「う、うるさいわね！　大体元はと言えばあんたが悪いんでしょ、萃香！」

全く、嫌な予感つてこれだったわけね。

道理で危険な感じがしないと思つたわ。

けど、ユウキさんにとっては、これは良かったのか悪かったのか、どっちなのかしら

ね？
続く

第107話 「閻魔の休日（前編）」

梅雨の時期もそろそろ終わろうかと言う6月下旬。

今日も寺子屋で慧音の手伝いをした。

最も、手伝いと言っても最近じゃ慧音と交代で授業を教える側になってしまったが。

「慧音先生、ユウキ先生、さようなら！」

「ああ、気を付けて帰るんだぞ」

「また明日な」

すっかり先生と呼ばれるのに慣れてしまった。

「あ、お兄ちゃん。あの小説読んでくれた？」

「ああ、あれか。勿論、梨奈が勧めるだけあってなかなか面白いな」

「私はもう何度も読んだから、しばらくお兄ちゃんジツクリと隅々まで読んでね！

じゃあねー！」

「……わ、わかった。またな」

ある日、梨奈から突然恋愛小説を数冊渡された。

なんでも、外の世界の本をこっちに合わせて書きなおしたものらしい。

それをなぜか俺に是非読んで欲しいと渡された。

で、博麗神社で読んでいたが……

『似合わないけど、確かに読んだ方がいいわね。ユウキさんは』

『そうですね。色々参考にして欲しいです』

『今度、パチュリー様からこういうのを百冊ほど借りてきますね』

と、霊夢や文、咲夜にまで言われてしまった。

恋愛小説の何を参考にすればいいと言うのだろうか。

この主人公みたいに軽くなれって事か？

それこそ似合わない気がする。

「それにしても、なかなか先生が様になってるな、ユウキ君。妖夢への稽古と言い、君は教える側としての才能があるのだろうな」

「よしてくれ、これだけやってればいやでも慣れる。子供達どころか親からも色々教えてくれて言われるしな」

「そうだな……君の授業は私より評判いいからなあ」

あ、慧音がまた凹んだ。

教え方が難しいって前は自覚なかったけど、最近ようやく自覚出てきたからな。

「慧音は中級者向け、俺は初心者向け教師。向き不向きは人それぞれだろ？」

「中級者……つまり私は子供達向けの教師ではないんだな」

「うわつ、逆効果!? つてかお前何だかすごくめんどくさくなってるぞ!」

前からこんなキャラだったか?

「慧音―邪魔するよー」

その時、寺子屋に妹紅がやってきた。

そう言えば、今日は午後から約束してた事があるつて慧音が言っていたな。

「慧音、迎えに来たよ。あ、ユウキも一緒か」

「よお、妹紅。ちょうど良かった。慧音を頼む、俺はもう帰る」

「ああ、またねユウキ……つて、えつ、ええつ!? ちょっと、一体どうしたの? なんで

凹んでいるのさ慧音!」

ほとんど押しつけるように凹んだ慧音を妹紅に任せた。

今度妹紅には何か奢ろうか……

「霊夢は出かけているんだつたな。昼はどこで食べるかつと、あそこにするか」

何を食べようかと歩いていると、蕎麦屋を見つけた。

ここの蕎麦屋は甘味処も兼ねていて霊夢や咲夜、妹紅と何度か来た事があって、その度に店員に冷やかされてたつてた。

お昼時だから混んでそうだけど、その時は別の所に行くか。

「こんにちはわーおばちゃん席空いてる？」

「あら、ユウキ君いらつしやい。1つ空いてるわよ」

やはり店の中は混んでいたが、ちようど2人用の席が空いていたのでそこに座った。

ここは蕎麦もうどんもデザートも美味しいから人気店だ。

店長のおばちゃんにはすぐに顔を覚えられた。

まあ、毎回霊夢とか咲夜とかと来てれば目立つからな。

「あら、今日は1人なの？」

「まあね。ここの蕎麦も餡蜜もうまいから、たまには1人で来てみようかと」

「嬉しい事言ってくれるわね。でも、隣に美少女いないと寂しいんじゃない？」

「そんな事ないっての」

寂しいと言うか物足りなさはあるな。

でも、おばちゃんのこういう話の振り方と言うか接し方は未だに慣れない。

学園都市にいた頃には身近にいなかったタイプだしな。

「さてと、今日は何を頼むかなつと、ん？」

メニューを見ながら考えていると、何か変わった気配を感じ辺りを見渡した。

すると、そこへおばちゃんの娘さん、琴葉さんがやってきた。

近々結婚予定だとかおばちゃんが自慢げに話してたな。

「あ、ユウキ君。ごめんなさい。実は相席をお願いしたいんだけど、いいかな？」

「いいですよ。俺は気にしませんから」

1人で来た事なかったからここでは相席は初めてだけど、他ではたまにあつたしな。

ここの人達は悪い人はあまりいないし、結構気さくな人も多いから話相手にはちよう

どいい。

「良かった。あのお客さん結構可愛いからユウキ君の好みかもね？」

「いや、俺の好みなんて言っていないし、そもそもないから！」

「ふふふつ、ごゆつくり〜♪」

琴葉さんは分かっているのか分かっていないのか、親指を立てて行ってしまった。

全く、おばちゃんと言い親子だなあ。

と、琴葉さんに案内されて女性が1人やってきた。

琴葉さんの言う通り、結構可愛い。

と言うか、綺麗だな。

「こちらへどうぞ。じゃ、ユウキ君。後は頑張つてね」

「ありがとうございます。失礼しますね」

「どうも。で、琴葉さん、何をがんばるんだ何を……」

見た目は俺と同じくらいに見えるけど、雰囲気的には少し年上くらいか。

それよりも服装が目立つ。まるで中国の時代劇に出てきそうな王朝っぽい服装をしている。

どこかのお姫様か？

いや、雰囲気や服装だけじゃないな。

彼女の存在そのものが異質だ。

感じる気配が人間ではないが、妖怪でも妖精でも亡霊の類でもない。

強いて言うなら、以前出会った痴女死神に近いか。

幻想支配で視てみようかと思ったが、視る理由がないので止めた。

「こんにちは。お邪魔してしまい、申し訳ありません」

「いや、一人で食べるのも何か物足りないかなと思っていた所だったから、ちょうどいいさ。俺の名はユウキだ」

「あなたの事はよく知っていますよ。あ、失礼しました。私の名前は四季映姫・ヤマザナドゥと言います」

差し出された手を握り返す。

見かけによらずしつかりとがちり掴んできた。

それにしても、変わった名前だな。

ミドルネームなら普通、四季・ヤマザナドウ・映姫、にすると思うけど。そんな俺の考えが顔に出ていたのか、映姫はクスクスと笑っていた。

「ふふっ、分かりにくかったですね。ヤマザナドウは名前ではなく役職名なのです。私は閻魔、ヤマザナドウとは幻想郷の閻魔と言う意味です」

「なるほど、閻魔だったのか。流星は幻想郷なんでもありだな」

——ガクツ

あれ？ 映姫の肩が落ちた気がした。

俺、何か変な事言ったか？

「そ、それだけですか？」

「それだけって何が？」

「私を閻魔と聞いて何も思わないのですか？」

「うーん、別に何も。吸血鬼やら亡霊やらいるんだからそれくらいいても不思議じゃないな。くらいい？」

そう言うのと映姫が頭を抑え始めた。

「え、閻魔が吸血鬼や亡霊と同じ扱いですか……ですが、これくらいは予想範囲内です」

「後は……」

「何ですか？ まだ何かあるんですか？」

「前見た本だと髭もじゃのおっさんだったけど、実際の閻魔って結構綺麗なんだな。雰囲気も凛々しいし髪型も似合ってるし」

「っ!？」

阿求の所で見させてもらった本に書いてあったのは、定年間近の髭ぼうぼうのおっさんだった。

閻魔がどんなものかは知っているけど、学園都市じゃ本ですら見た事なかったからな。

おや、映姫の様子がおかしいな。

「こ、これも予想範囲、です……」

俯いたままプルプル震えてるな。

笑いを堪えているのか、顔が少し赤い。

って、冷静に考えたら初対面の人に綺麗だ、可愛いだのって俺は何言ってるんだか……

俺……こんな軟派な性格だっけ。

あの小説を読んで影響受けたか？

思えば、資料やレポートは昔から沢山読んでいるけど、小説ってまともに読んだ事な

かったかも……

「あーごめんごめん。初対面の人に失礼だったな」

「い、いえ、これくらいの反応は予想済みなので問題ありません！　ただ、女性に御世辞を言うのはどうかと思います」

「お世辞とかは嫌いだぞ？　思った事言っちゃっただけだし」

「つゝゝ！　知ってはいても実際にされるとこも違うモノですか……」

映姫はまたブツブツと独りごとを言い出したかと思えば、急に立ち上がり俺にビシツと指を突き出した。

「と、とにかく、お世辞が嫌いなのや女性を褒めるのは悪い事ではありません。嬉しかったです、が！　あまり素直に言い過ぎるのは問題です！　そう、あなたは少し、いえ、かなり思った事を口に出し過ぎです！　あつ……」

映姫はここでやつと、自分のあまりの大声に周りの客達や、外にいた通行人すら立ち止まって一斉に俺達に注目しだしている事に気付いた。

そして、コホンと、咳払いし何事もなかったかのように座った。

流石閻魔、肝が据わっていると云うかなんというか。

「失礼しました。今日はいつもと違って完全な休みにするはずだったので……」

特に恥ずかしがるわけでもなく真顔になっているが、冷や汗出てるぞ。

妖夢と別の意味で真面目なんだな。

閻魔やってるからこれくらいが普通か。

「俺は気にしてないからいいけど。今日は休みだったのか？」

「はい。死者が亡くなる日がないのと同じく、彼岸の裁判は年中無休です。ですが、閻魔はそうではありません。ちゃんとシフトを組んで交代交代で裁判を行っています」

死者とか彼岸とか幻想的な単語出てきたと思つたら、急に現実的な話になつてきたぞ。

「なので今日は休みなのです。いつもは休日には幻想郷を見回つて、皆が善行を務めているか見て回っているのですが、他の閻魔や上司から、仕事や役目を忘れて完全休日を通つて。と言われました」

それは、何とも反応しがたい話。

ワーカーホリックって奴か？

「別に過労で倒れる事はないのですが、それが私の善行。とまで言われてしまえば言い返す言葉もなく、こうして何もかも忘れて人里でのんびりしようかと思ひまして」

「うーん、働き過ぎな日本人。って閻魔は人間とは違うか」

「そうですね。私、と言うか閻魔は神の眷属ですから。ですので、あなたの幻想支配でも私を視るのは難しいと思いますよ？」

「やっぱり俺の事色々存知か。観察にでも来たのか？」

うまく隠しているようだけど、俺を観察しようとする意思を感じるんだよな映姫か

ら。

「ふふつ、半分はそうですね。ですが、ここであなたと会ったのは本当に偶然ですよ？」
「そつか、ならこれは運命の出会いって奴だな」

「ぶーっ!?!」

それを聞くと、映姫はお茶を噴き出してしまった。

ちよつと小説のキャラを真似てシヤレっ気を出してみたのだが、やっぱ俺には似合わないな。

「けほけほつ、い、いきなり何を言うのですか？ しかも、さつきと違って今回は確信的にからかいましたね」

「あ、分かったか?」

「全くもってあなたと言う人は！ い、いえ……これ以上はやめましょう。今日は完全に休みなのですから」

「あらら、お客様大丈夫ですか?」

テーブルが濡れたので琴葉さんが布巾を持って来てくれた。

が、映姫の様子を見て、俺に意地悪な笑みを浮かべてきた。

「ははくん、ユウキ君。またやったんでしょ?」

「いや、またって何を!?!」

「霊夢ちゃんや咲夜ちゃんにも同じ事してたでしょ？」

「人聞き悪い事言わないでくれませんか？ 彼女、今日初対面なんですけど!？」
変に誤解されたらどうするんだよ。

「あ、お構いなく、そういう事情も知ってますから」

「……あ、そう……流石、じごくみみ」

もう、どうでもいいや……

「あのく盛り上がっている所すみませんけど、そろそろご注文いいでしょうか？」

「あっ！」

そう言えば注文するの忘れていた。

満席だった周りの席も空いてるんだろな。

と、思ったらなぜか帰らずに皆さん座ったまんま、お茶を飲んでいる。

「いやあくお茶が甘いなあ」

「とびつきり渋いお茶頼んだはずなんだけど」

「今日はデザートはいらわないわね」

……気にしないでおう。

そんな事より、とつと注文しちゃうか

「すみません。すぐ注文します！ 俺はざる蕎麦の大盛りと、栗あんみつぜんざいセツ

トで」

「も、申し訳ありませんでした。納豆蕎麦と……えつと」

映姫はどうやらデザートで迷っているみたいだな。

何となくだけど、ここには初めて来たように見える。

「あ、彼と同じものでお願いします」

結局、散々迷った挙句映姫は俺と同じものを頼んだ。

「ここに来るのは初めてなのか？」

「そうですね。いつもは人里に来る事はあつても食事をする事はありませんね。と言うよりも、人里を見回りに来ているような物なので、そういうのが良く分かりません」

「なるほど、生真面目なんだな」

「そうだ。良ければ人里を案内してもらつてもいいですか？」

「案内？ 外来人の俺が？」

「はて？ 俺はまだここにきて半年も経つてない。」

「最近やつと慣れてきた程度の俺よりも、昔から幻想郷の事知つてる映姫の方が詳しいだろ？」

「む、昔から……いえ、さつきも言いましたが、私は見回りこそすれど、どういう店がどこにあるのかまではよく見ていないので、よくわからない部分が多いんです」

人里全体は知っていても、実際にどこに何があるか細部が分からないって事か。

だから、有名なここに来るのも初めてで何を頼めばいいかも分からなかったのか。

中途半端な箱入り娘だな。

「何か？」

「いや、何も」

口に出さない方がいいんだよな、うん。

「いいぜ。今日は午後予定ないし。たまには色々見て回るのもいいだろ」

「それは良かったです。では、よろしくお願いしますね」

それから俺達は蕎麦とデザートを食べながら雑談して、人里巡りへと向かって行つた。

「四季様がちゃんと休んでるか観に来ただけど、なんで彼をデザートに誘っているんだろう？ いや、四季様あれで男関係天然な所あるから気付いてないんだろ？ なあ。でも、相手が彼だから大丈夫……かな？」

続く

第108話 「閻魔の休日（後編）」

はあ……私とした事が、なんとうかつな事を口走ってしまつたのでしよう。

彼の何かに中てられたのか、人里を案内して欲しいだなんて。

まるでこれでは、デ、デートを誘つたようなものです！

「ん？ どうかしたのか映姫？」

「いえ、なんでもありません……」

そう、彼です彼！

私がデートに誘つたと言うのに動揺もせず、あつさりとか諾を……つてデートじゃありません!!

「い、いきなり頭を抱えてどうしたんだ？ ひよつとして食い過ぎたか？」

「何でそう言う話になるんですか!? あ、いえ、いいです。なんでもありません」

彼は悪意や敵意には敏感なのに、女性には超鈍感ですね。

こういうのも分かつていたはずなのに、いざ実際に会ってみると調子を狂わされま
す。

これは霊夢とも似通っています、側にいるだけで魂の波長に変化を与えますね。

「そっか、じゃあ行くか。調子が悪いようなら早めに言えよ。医者の方に連れていくから」

「お気遣いありがとうございます。ですが、本当に大丈夫です」

本当に私を閻魔と分かっているのでしょうか。

思えば、彼は相手が誰であれ対等に接しています。

でも、まさか閻魔である私にまで同じ接し方をするとは思いませんでした。

彼の事は前々から危険だとは思っていましたが、実際に会ってみると別の意味で危険だと分かりましたね。

「よお、あんちゃん！ 今日にはまた別なべつびんさん連れてご機嫌だなあ。デートかい？」

「そっちこそ真つ昼間から酔っ払っているんじゃないの？ デートじゃなくて、人里を案内してるんだよ」

八百屋の前を通った所で、店の主人に声をかけられました。

ユウキさんはここ以外でもよく声をかけられています。

外人人だと言うのに、人里にとけこんでいる証拠ですね。

デートを否定されるのは、何か面白くはありませんが事実なので仕方ないです。

「同じようなものだろ。で、今日は巫女でもメイドでも魔女っ子でも妖精でも天狗でも

狐様でも梨奈ちゃんでもなさそうだけど？ 何十人目の彼女さんよ？」

「だーから！ 誤解まねくような事言わないでっの！ ってかなんで梨奈だけ名前出すかな!? それに間違われそうな知り合いなんてそんな何十人もいな……いや、いるか」

ふむ、自分が女性とばかり歩いていると言う自覚はあるのですね。

モテていると言う自覚まであるのかどうかは不明ですけど。

「ご心配なく、あなたの女癖の悪さは知っていますから」

「あ、そうですか……じゃ、せめてそんな冷たい目で言わないでくれないか？」

「ふふっ、冗談です」

「んで、お嬢ちゃんは人里慣れてないって言ってたけど、どこの人かな？ 見た所高貴な

服装してるけど？」

高貴な服装、言われてみてみれば私は普段着ている閻魔の服装で来ましたが、目立ち過ぎてでしょうか？

同僚に閻魔の事忘れてちゃんと休めと言われましたが、いざとなるとこれ以外の服と
言うのはないのですよね。

「人里には来る事はあっても、ゆっくり見て回る事はありませんでしたから、彼に案内をお願いしたのです。この服は仕事着ですが、職業はヒミツです」

正直に閻魔と言って畏まられても、せっかくの休日が満喫出来ない気がしますしね。

「綺麗な女には秘密が多いって事で。そういうわけだから今日は買い物じゃないんでね。また今度くるよ」

……何この男は自然にこういう事を言いますかね。

ま、まあ、言われて嫌な思いはしませんけど。

「あいよ。じゃ、これは選別だ」

そう言つて八百屋の店主はさくらんぼが入った小さな籠を手渡してくれました。

「さくらんぼか、いいの？」

「ああ、それならデザートしながら食べられるだろ？ 楽しんできなよ」

「デザートじゃないっての。ま、ありがとね」

「ありがとうございました」

店主に礼を言つて、2人でさくらんぼを食べながら散策再開です。

「程良い甘さと酸っぱさがいいですね。今年は異変の影響で農作物が心配でしたが、どうにかかなりそうですね」

さくらんぼを堪能していると、ユウキさんが私の服を見て何か考え込んでいました。

「？ どうかしましたか？」

「映姫、それ仕事着だったよな？」

「はい。私はこれで裁判をしています。何か?」

「うーん、やつぱり目立つな。それに仕事の事忘れて休日を堪能するには、その服は邪魔だ。よしつ、あそこ行こう」

「えっ? ちよつと、どこへ行くのですか?」

彼に連れられてやってきたのは、呉服屋。

中には着物の他に洋服や色とりどりの反物が飾られている。

見かけ以上に高級店と言う感じですね。

店に入ると、中から店主らしき女性がやってきました。

いかにもと言う感じで、この店の雰囲気にも合っている女性ですね。

「ユウキ君、いらつしやい。今日はデート? いつもとは違った女の子連れてるのね」

「だーかーらー、なんでこうこら辺の人達は俺ら見て決まったセリフ言うかな。台本

でもあるの? まあ、いいや。今日は彼女に合う服を探しに来たんだよ」

「あら、女性に服をプレゼントだなんて、ユウキ君も女心が分かつてきたのかしら?」

「そういうんじゃないって: 「ちよ、ちよつと待つて下さい!」……どうした?」

「このままでトントン拍子で話が進みそうだったので、強引に間に割り込みました。

「どうしたじゃありません! ここでは何をやる気ですか? まさか私に服を?」

「ああ、そのつもりだけ? ここは最初和服専門だったけど、最近は咲夜やアリスから

洋服の事を教えてもらって、そつちにも手を出し始めたんだよ。で、色々なサイズの服があるから作る手間がかからない」

「へえ、そうだったのですか……じゃないですよ！ なぜあなたが私に服を買う話になってるんですか!？」

私が再度問うと、彼は首を傾げ頭に？を浮かべていました。

まさに何を言っているのか分からないと言った顔ですが、それはこつちのほうです。「ユウキ君、あなただけじゃなくて霊夢ちゃんや咲夜ちゃん達にも服を買ってあげたりしてるのよ。だから、気にする事ないわよ」

「ほほう。つまり、女性を物で釣っているのですか？」

まあ、女性に対して打算的な考えを彼が出来るとは思いませんが。

何となくイラつきました。

「そんなわけないだろ。霊夢達には世話になってるし、それにあいつら巫女服とかいつも同じ服装ばかりだからさ、女の子なんだし違う服もあった方がいいだろ」

巫女にメイドなのだからそれらしい服装ばかりなのだから、それは仕方ないのでは？ と思いましたが、どうも他の妖精や吸血鬼達にも同じ事をしているようですね。

「自分の服は買わないのですか？」

「それがね。霊夢ちゃん達も同じ事言っていたけれど、自分は服を沢山あるからいいっ

て言うのよ。そればかりか彼ったら自分の事でお金使う事滅多にないのよ」

「それは言いすぎだよ。蕎麦屋とか団子屋には良く行くし、さつきもあそこでいろいろ食べたし……つてなんでそんなに俺の事詳しいの!？」

それは私も思いました。ここの人達、彼の事詳しいですね。

「私は、服の事で相談にのつてもらっている咲夜ちゃんやアリスちゃんに良く聞くからよ。他の所でも霊夢ちゃんや妹紅ちゃんとかが話しているらしいわよ」

「あ、あいつら……」

「まあ、いいじゃない。愚痴と言うより君の事を心配して言っているのよ。悪口は言っていないだし、それだけユウキ君が慕われてるつて事よ。と言うわけで、あなたも観念して、こつちに來なさいな」

「あつ、えつと?」

何がと言うわけなのか分かりませんが、彼女に手を引かれて店の奥へと連れられてしまいました。

全く、彼といると自分が閻魔だと言う事を忘れさせてくれますね、色々な意味で。

私が閻魔だと言う事を知ったら、この里の人達はどんな反応するのでしょうか。

結局、あれよあれよと言う間に色々な服を試着して、淡い水色のカーデイガンと紺色

のロングスカートを買ってもらいました。

私のサイズに合うのがあって、少し寸法直しをただけで着る事が出来たのは幸いですね。

今まで来ていた閻魔服は包んでもらい、彼に持ってもらいました。

流されてここまで来ましたが、何から何まで彼にまかせつきりですね。

「うん、やっぱり良く似合ってる」

「それはどうも……ありがとうございます。ですが、先程よりも目立っていませんか？
道行く人の視線がこちらに向いているのですが」

通りかかる人や店先で商売している人など、様々な人が私に目を向けています。

これでは前の服の方が良かったですね。

「ああ、映姫が綺麗だからだろ。それはどうしようもない」

「っ！ あ、あなたはあれほど注意したのにそんな事を軽々しく……そう言えば、あなたは何も買わないのですか？ あなたは自分のお金を自分に使う事はないのですか？」

さっきの服屋で店主が言っていた事が気になった私は、聞いてみる事にしました。

「別に買うモノないしな。食料品やら生活に必要なのは買ってるし、映姫と初めて会った蕎麦屋で餡蜜食ったり、結構自分の為に使っているだろ？」

「金を浪費しないのは良い事ですが、自分の事に使う事も大切ですよ」

「あまり使い道があまりないからな。世話になった霊夢達に使うのは良い事だろ」

「なら、尚更私がかここまで初対面のあなたにしてもらう理由がありません」

「ん、俺の金だし。別にどう使おうが俺の勝手だ。それに、そこまで高い買い物でもなかったしな」

そう言うのと、彼はどこか遠い眼差しになりました。

一体何を考えているのでしょうか。

「元いた世界でも結構稼いだけど、それは人を殺したり非道な実験とか黒い事ばかりして得た汚い金だ。だから、自分の為に使った。けど、こつちじゃ寺子屋で教えたり色々手伝いして得た綺麗な金だ。なら、他人の為に使った方がいい。そう思ったんだよ」

彼がヒドイ罪人なのは分かっています。

それを否定せず、かと言って贖罪に生きているわけでもない。

閻魔からすれば間違いなく黒の部類に入りますが、そうとは断定したくないと言う気持ちがあります。

「ま、死んだらそこから辺も全部含めて映姫に裁いてもらおうとして、せつかくの休みだ。もつと色々回ろうぜ」

「全く、あなたと言う人は。分かりました。ならとことん付き合ってもらいます」

それから、色々な店を周りました。

雑貨屋で髪飾りを買ってもらったり、本屋で私が彼に本に書かれている幻想郷の事を教えたりもしました。

そして、気が付けばもう陽が沈みかけていました。

「ユウキさん、今日は本当にありがとうございます。おかげで休日と言うモノを初めて味わえた気がします」

「いいっていいって。また休みになったら仕事の事忘れてノンビリしろよ」

「ふふっ、その時はまた付き合ってもらいましょうか」

ここまでされて、何も返さずに帰るわけには行きませんね。

今日一日彼と接して、どういう人間かもよく分かりました。

色々知ってはいたつもりでも、実際に会って話さないと理解出来ない。

そして、理解した結果、私が思っているよりは警戒すべき人間ではなかった。

いえ、女性関係については聞いていた以上でしたし、警戒をすべき事なのでしょうけども！

こほん、しかし、これならば私が以前から抱いていた警戒心について、話しても問題ないでしょうね。

この事は、霊夢も八雲紫も気付いてはいない事でしょうから。

「では、今日のお礼。と言うには語弊がありますが、一つお話しておくことがあります。」

私は今まであなたに対して非常に警戒心を持っていました」

「あー、だろうな」

「蕎麦屋でもいいましたが、あなたと出会ったのは全くの偶然でした。ですが、これを良い機会だと思いあなたの事をもっと知ろうとも思いました」

「なるほど。それでデートに誘ったと」

「こ、この人は本当に話のペースを乱すのが得意ですね！

「だ、だからそれは違います！　そもそもあなただってデートじゃないと……こほん、それはともかくとして。そこまでしてあなたを警戒した理由をお話しします」

「ん？　幻想支配の事じゃないのか？」

「違います。それは八雲紫に任せてあります。私が警戒したのは、あなた自身の事です。正確に言えば、あなたの魂」

「俺の、魂？」

言われて彼は自分の胸元に目をやりました。

いきなり魂と言われてもピンとくる人間はいませんからね。

「ええ、あなたの魂ですが……改竄されています。これはあり得ない事です」

「改竄ってどういう意味だ？　突然別人のように性格が変わったり、善人が悪人になったりって意味か？」

「それは変質と言えますね。人間には誰にでもある事です。ですが、改竄と言いましたが、具体的にどうとは分かりません。あなたの魂を見て、そう表現するほかなかつた。と言う事です」

「良く分からないが、どういう事だ？」

「恐らく、あなたが幻想郷にやってきた事と関係がある……のかもしれない」

これ以上の話はすべきではありませんね。

確証の全くない私の想像でしかありません。

「俺が、幻想郷に来た理由……」

彼は考え込んでしまいましたが、その表情には困惑の色が少しあってもそれ以上の動揺はありません。

以前、伊吹萃香が指摘した事ですが、やはり彼は自分自身に対しての感覚が壊れていきますね。

「私が言えるのはここまでです。これをどう捉えるかはあなた次第です。混乱させてしまいましたね。申し訳ありません」

「正直、何の事か分からないけど、教えてくれてありがとうとな」

彼は全く気にした様子もなく、気さくに手を振って私を見送ってくれました。

まだ伝えていない部分がありますが、ここから先はあなた自身が答えを出すしかない

のですよ、ユウキさん。

彼岸へと戻った私を、小町が迎えてくれました。

「おや、御帰りなさい四季様、休暇はどうでしたか？」

「ただいま、小町。ええ、思った以上に堪能できました。彼のおかげでしょうね」

私がそう言うのと小町は心底驚いた顔をしました。

そんな変な事を言ったつもりはないのですが。

「し、四季様がそこまで素直になるなんて、一体何があつたんですか!？」

「どう言う意味ですかそれは、私だつて楽しい事は楽しいと言いますよ？ それに、小町

も見ていたのでしょうか？ なら隠す必要はないじゃないですか」

「あちゃー気付いていましたか、ですが蕎麦屋の所だけですよ？ それ以降は何があつ

たかなんて全く知りませんよ」

素直に白状しましたか、まあ、私に隠し事は無駄ですしね。

それに、彼も気付いていたようですし。

あの時食べながらですが一瞬だけ、ちらりと目が小町の隠れている方へ向いていましたしね。

「さあ、仕事に戻りますよ。あなたもいつも通りに怠けてはいけませんよ？」

「分かっていますよ、四季様。今年はアレの年ですからね。その為に四季様には完全休暇を取ってもらったんですし」

「その事に関してはおあなた達には心から感謝していますよ。おかげで彼の事が良く分かりましたから」

「……今気付きましたけど、その包みには一体何が入っているのですか？」

「こ、これは……あなたには関係ありません！」

今の私はいつも着ている閻魔服です。

彼に買ってもらった服や髪飾りは包みの中にしまっておりあります。

これは、休日用。彼とまた会った時用ですからね。

そう簡単には小町や他の閻魔達には見せられません。

ふふっ、その時が楽しみです。

「あれれ？ 四季様、顔赤いですが、どうしたんですか？」

「黙りなさい！」

「きやん！」

続く

第109話 「夜雀の屋台」

映姫とデー……人里の案内翌日の午後、俺は紅魔館にやってきている。

と言うのも、パチュリーが図書館の仕事を久々に手伝ってほしいとの事だ。

報酬として夕食は向こうが用意すると言っていた。

別に用事はなかったから良かったのだけど……

『では、これからお連れいたしますね、ユウキ様』

迎えに来た咲夜が終始ハイライトが消えた目をして無表情で怖く、そのあまりの迫力に霊夢ですら何も言えなかった。

なぜあんまに不機嫌なのだろうか？

と思つたら、レミリアやパチュリーも不機嫌だった。

パチュリーは俺が来た時には、既に眠っていたがこあいわくずつと不機嫌だったらしい。

美鈴とフラン、こあだけは久々にやってきた俺に飛びついてきそうな程ご機嫌だった。

実際、フランとこあには飛びかかられたが。

なんで不機嫌なのか、本の整理しながらこゝあに聞いてみると苦笑いを浮かべこう答えてくれた。

「そりやあ見知らぬ美少女さんと人里でデートしてたからですよ」

「えっ、なんでそれ知ってるんだ？」

何でも昨日、咲夜が人里で偶然に俺を見かけたそうだ。

で、紅魔館に戻ってきて不機嫌な顔をしていたのを不思議に思い、レミリア達もその事を知り今に至ると言うわけだ。

なぜそれで不機嫌になるかな？

「別にデートじゃなかったんだけどな。で、こゝ達は上機嫌だったのは？」

「そりや、最初は私もムスツとしましたよ。美鈴さんは苦笑いを浮かべているだけでしたけど、フランお嬢様は終始無言で怖かったですし。ですけど、今日来てくれたので帳消しです」

要するに単純って事か。

「?? 何か言いましたか？」

「いや、なんでもない。とつとと終わらせようぜ。元はと言えば悪いのはお前だろ」

「にやははっ……ご迷惑おかけします」

パチュリーの魔力を使つての魔導書整理と言えば聞こえはいいけど、実際はちよつと

違う。

こあがイタズラで魔導書の表紙を滅茶苦茶に入れ替えてしまい、下手に触れなくなりました。

それだけなら以前にも何度かしてしまっただ事だが、今回はちよつと危険なブツにまで手を出してしまつた。

パチュリーくらいの魔力でなければ識別も整理も不能であり、本人は最近体調が優れないので俺に代わりにやってほしいとの事だ。

忘れたけど、パチュリーって身体があまり強くないんだつたな。

俺が来てからしばらくは調子が良かったけど、その反動でもきたのかもしれない。

「で、これを封印すればいいんだな。アレで」

テーブルの上に置かれたのは、桃色の魔力を発する本。

なんか話に聞いているよりは深刻と言うか、邪悪な気配はしないんだよな。

これに正しい表紙をかぶせて、封印をし直せばいいだけ。

俺が来る前にベッドで眠つたパチュリーが書き残したメモで教えてもらった封印呪文を頭の中で再確認する。

「はい！　これが本来この魔導書にあつた表紙です！」

「はあ……やるか」

表紙を翳し、呪文を唱える……やる気は起きないけどな。

「プープクチャガマデドンドコドーン！ プープクチャガマデドンドコドーン！ プープクチャガマデドンドコドーン！ ぽわぽわりんらぶはーとー！」

——ヒュウッ

地下なのに冷たい風が図書館を流れた。

「おい、本当にこの呪文であつてるのか？」

「はい……以前、パチュリー様も同じ呪文を使いました。そして、今のユウキさんと同じく、顔がりんごよりも赤くなりましたよ」

「そりゃそーだよー。なんだよこの呪文！ しかも、思った以上に魔力使うし！ 作つた奴ぶつ飛ばしてやる！」

唱えた後、今までにないくらいの脱力感に襲われた。

消耗する魔力量が異様に高いのだ。

「あ、それもパチュリー様と同じ事言ってますね」

「マジか」

見ると、魔導書は確かに表紙が覆いかぶさり、しっかりと封印がなされていた。

どうやら定期的に封印をし直さないと、今回みたいに簡単に外れてしまうようだ。

「……どうやら、うまく言ったみたいね」

「パチユリー、まだ寝てなきやダメだろ」

「パチユリー様！」

パチユリーが奥の寝室からフラフラしながらやってきた。

俺が来た時は紫色の顔色だったが、今はかなりよくなっているように見える。

慌てて抱き支えると、顔色がまたよくなつた気がする。

「薬も飲んでぐつすり休んだから大丈夫よ。それよりごめんなさいね、ユウキ。うちの馬鹿のせいで、後でウンと拷問するから」

「え、っ!? パ、パチユリー様? 私、かーなり御仕置きされたんですけど!」

「ふふっ、馬鹿ね。あれは御仕置き。これからするのはただの拷問よ」

「ひええく!? ユウキさーん、助けてくださいーい!」

「イヤだ」

「即答!」

当たり前だ。俺だって相当な精神的被害を被っているんだ!

幸いなのは、レミリア達は一切覗き見してない事だな。

パチユリーが今回ばかりは、レミリア達には見られない方が絶対良いと前もって忠告をしてくれた。

俺も嫌な予感しかしなかったので、フランにも終わるまではレミリア達と待っているように言ったし、レミリアにも覗き見するなって強く「お願い」をした。

「こあの拷問は後にして、レミイ達の所に行きましようか」

「いいけど、本当に休んでなくていいのか？」

「ええ、なんだかせつかくあなたが来たのだから。仲間はずれは寂しいわ」

何のことやらと思いつつ、レミリアの所まで戻ってきた。

「あら、もう終わったのかしら？ お疲れ様。パチエも顔色良くなったわね」

「ええ、おかげさまでね」

「お兄ちゃん！ 終わったんだよね？ あそぼあそぼ！」

早速とばかりにフランが飛び付いてきて俺の手を引いて外へ行こうとして、レミリアが立ちあがり止めようとしたが……

「待ちなさいフラ……」

——グウ

瞬間、時が止まった。

別に咲夜が能力を使ったわけじゃない。

だって、咲夜本人も目を丸くして驚いてるもん。

さて、今鳴ったこの音はお腹が鳴った音。

俺でもないし、近くにいたフランでもパチュリーでもこあでもない
この音はもつと遠から聞こえた。

正確には椅子から降りようとして、真つ赤に固まっているレミリアから聞こえてきた。

今、ここには聴覚が鋭い人が多いからすぐに出所分かるってイイヨネー。

「……なによ」

「「いえ、別に」」

「言いたい事あるならいいなさいよ。そうよ、今のは、私のお腹が盛大に鳴らした音よ！
だって仕方ないじゃない！ 私今日昼抜いてるんだもの！」

俺達は何も言っていないのに、レミリアは今にも爆発しそうな程赤くしながら一気に
噴火した。

「なんで昼を抜いたんだ？」

「それはですね。午後からユウキ様が来ると夢で知り、急きよ昼過ぎに目を覚ましましたの
ですが、ちょうど昼食が終わった時でしたので何も用意がなく私が作ろうとしたのです
が、ユウキ様が来る時に食事中じゃ失礼だからと……」

「あー、なるほどね」

吸血鬼であるレミリアとフランは昼夜が人間と逆転している。

俺が来てからは人間に合わせる生活リズムへと変えたのは知っている。

しかし、それでもたまには夜に起きて、昼に寝ると言う生活をしているらしい。たまたま、今日はフランが起きていたがレミアは寝る日だった。

で、能力のせいかな、俺が紅魔館にやってくる事を夢で知って、急いで飛び起きたが時間が微妙だったため昼食を食べ損ねたと……

「はあく……昨日はあんなに不機嫌だったのに、彼が来ると知って子供みたいにはしゃいでたのね、レミィ」

「う、うるさいわね！　そういうパチエだつていつにも増して仏頂面だったじゃない！」

「お2人とも落ちついて下さい」

「ずっと能面だった咲夜に言われたくはない！」

「あらら……」

うーん、相変わらずのぐだぐだっぷりだなここは。

「ねえ、腹ペコお姉様なんかほつといて遊ぼう……と、言いたいけど私もお腹すいちやつた」

てへつと舌を出すフランが可愛いと思つた俺は、正常だと思いたい！

「そうね。私もずっと寝てたからお腹が空いたわ。時間もちよいどいいし、咲夜夕食の支度は出来ているのかしら？」

外を見ると、もう陽もかなり沈んでいた。

結構長い間図書館にいたんだな。

「あ、それでしたら今日は夕食の予定です。フランお嬢様がぜひ皆で食べに行きたい所があるそうですよ」

「珍しいわね。それでどこへ行きたいの、妹様？」

「うん、みすちーがやつてる屋台に行ってみたいんだ！」

「みすちーつて、ミスティア・ローレライの事ですか？」

パチュリーとこあは今日の夕食の事は聞かされていないようだ。

それにしても、みすちーの屋台か。

やつていると言うのは知っているけど、一度も行った事なかったな。

「と言うわけで、今日はそこで夕食にしようと思っただけで、ユウキもそこで構わないかしら？ それとも咲夜の手料理の方がいい？」

「いや、構わないよ。咲夜の手料理も魅力的だけどな」

「ふふっ、言ってくれば365日3食用意するわよ？」

「あ、それ私知ってます！ 『この美味しい味噌汁を、毎日飲みたい！』 ですよね〜♪ キャンツ!？」

こあが何か言ったけど、ナイフを頭に数本生やしているだけだ。俺は何も聞いてな

い。

ついでに周りの皆の空気が一瞬張りつめた気がするけど、気にしない。

「今から行けばちようど焼き始めているくらいね」

「随分詳しいな、レミリア？」

「一度だけフランと2人で食べに行った事があるのよ」

「へえ〜♪」

「ユウキ、その笑みはどう言う意味かしら？」

「何でもないぞ？」

もうレミリアとフランに蟠りは全くないな。良い事だ。

「むう、まあいいわ。それじゃあ、行きましようか。咲夜、美鈴にも出かけると言いなさい」

「かしこまりました、レミリアお嬢様」

「わーい、みんなでおでかけおでかけー！」

こゝろ曰く、幻想郷に来るまでみんな揃って出かける習慣が全くなかったそうだ。

その割にはよく博麗神社に来てるよな。

「あの、パチュリー様。せめて回復魔法を」

「ダメよ。あなたは今日一日その格好ね。死にはしないんだからいいじゃない。ナイフ

を生やした悪魔なんてあなたくらいよ？」

「全然よくありません！ 痛いものは痛いんです！」

痛いとかそういう問題なのか？

美鈴が出かける支度を終えてから、私達はミステリアの屋台にやってきた。

屋台はリヤカー式で、テーブルや椅子もいくつか用意されている。

これらは全部霖之助の所でもらった物らしい。

屋台は森の奥にあるけど、そこまで分かりにくい場所ではない為色々な妖怪たちがやってくるわね。

まあ、人里から離れているから人間はやってこれないけど、たまに人里でやっているのを見た事がある。

霊夢曰く、人を襲わなければ人里では何をしてもいいらしい。

「おや、珍しい団体さんの御到着だね。いらっしやーい」

「お邪魔するわね。結構な人数だけど、大丈夫かしら？」

「大丈夫ですよー今テーブル出しますね。ってユウキ先生？」

ミステリアはユウキの姿を見ると羽をパタパタさせて駆け寄ってきた。

そう言えば彼女もフランと同じく寺子屋に通っているのよね。

「よつ、来たぜ」

対してユウキは右手を上げて苦笑いを浮かべながら応えた。

未だに先生呼びされるのは慣れていないのか、珍しく照れているのが何か可笑しかった。

見ると、咲夜と美鈴もクスクスと笑ってるわ。

「わ、笑うなよ。先生なんて元々柄じゃないのに最近こんな感じなんだぞ?」

「ユウキ先生の授業面白し、分かりやすいから人気だよ?」

「それ、絶対慧音には言うなよ」

彼がここまで照れたり困惑したりするのは珍しいわね。

先生と慕われるのが彼にとってよほどの事なのか、それとも少しずつ傷が治ってきてるのかしら。

「はいはい。そこまですして、早く注文しちゃいましょう。お腹空いたわ」

「パチエの言う通りね。ミステリア、私とフランはこの前と同じようにね。あなた達は
どうするの?」

「そうだな。こういう所は初めてだからまずはレミリアと同じもので」

「じゃあ、私達もそれをお願いするわ。いいでしょ、美鈴。同じものを沢山の方がしやすいでしょうし」

「私とこあもそれでいいわ」

結局全員、同じ焼き物とおでんの詰め合わせを頼んだ。

「そう言えばさ、ここは結局何の屋台なんだ？ 見た所おでんはあるけど、後は焼鳥？」

ユウキの言葉に、ミステリアが軽くずっこけたのが見えた。

私とパチエも少しがくつてなったのだけどね。

「あなた、知らなかったの？」

「ああ、みすちーには来てからのお楽しみみて言われてたし」

「そ、そう言えば先生には教えてなかったね。って焼鳥なわけないでしょ！ 私は夜雀

！ 同族売ってどうするの!？」

「自分の身を削ってるのかと。回復能力高いから1日で全部元通りとか？」

それを聞いて、またミステリアがずっこけた。

今度は咲夜や美鈴までもが……ユウキ、天然なのかわざとなのか。

「いやいやいや、そんなスプラッタな事無理だから!？」 回復能力高くて絶対にならない

から!？」

「で、結局ここは何を焼いてるのよ。人間、なわけないでしょうし、まさかそこら辺の妖

怪?！」

人間焼いていたら霊夢どころかユウキも黙ってないでしょうね。

それにミスティアが妖怪を捕えられそうもない。

「ミスティアなら逆に食べられそうね」

「さ、咲夜さん……まあ、私もそう思いますけど」

2人共辛辣ね。私も同感だけど。

「ひ、ヒドイ。違います！ 私が焼くのはコレです！」

そう言つてミスティアが取り出したのは、串に刺さつた2つの長い物体。

「これは、ウナギ、とヤツメウナギかしら？」

流石咲夜はヤツメウナギも一目で分かつたようね。

私は最初ウナギとは思わなかつたわ……

「正解！ 私は焼鳥撲滅委員会の会長だからね。焼鳥の代わりに焼きうなぎを普及させようとしてるのよ」

委員会と言いつつ、ミスティア1人しかいないのだけどね。

「なるほど。で、おでんは分かるが、卵入ってるけどそれはいいのか？」

「あ、それは……先生に食べてほしくて、私が生んだ産みたてだよ……つて冗談です！

冗談だから！」

わざとらしく顔を赤らめて、身体をしならせたミスティア。

だけど、すぐに赤くなつた顔が青白くなつたわね。

ユウキは白い目を向けたただけだけど、私達は全員それぞれ武器を構えて殺気を出していた。

こあまで冷たい微笑を浮かべながら、両手に魔力を纏わせて威嚇してるわ。

いけないわねえ。ちよつとムカついたからつてつい本気で殺気を出しちゃったわ♪

「はうく先生の事になると、ここのみんな冗談が通じなくなるよおく」

「みすちー、同じ鳥だからつて文やはたてみたいなさ事するなよ」

それは関係ないよ思うわよ、ユウキ。

「夜雀、変な冗談言った罰よ。何かサービスしなさい」

「お前は鬼か!？」

「あら、吸血鬼よ」

「そう言えばそうだったな」

「おいしい!?! このネタもう何回目よ。つてその目はわざとじゃなくて本当に忘れてた

の!?!」

本当にこの男は……フランも爆笑してる場合じゃないでしょ! 吸血鬼としての威

厳の問題なのよ!

「分かりましたー先生が初めて来てくれた事だし、とつておきのお酒を用意するわね」

ミステリアはぐそぐそと屋台の下から大きな酒樽を取り出した。

「じゃじゃーん！ 花見の時には間に合わなかったけど、これがとっておき！ 伝説のお酒、その名も【雀酒】 よ！」

「【雀酒？】」

聞き覚えのないお酒に私達は揃って首を傾げた。

意外にお酒に詳しい咲夜ですら知らないのね。

「あーそれが雀酒なのね。私も本でしか見た事がないけど、へえ、これが……」

ただ一人、パチエだけは知っているようで興味深そうに酒樽を覗き込んでいる。

「パチユリー様、雀酒っていつか飲んでみたいと言っていたアレですか？」

「そうよ、こゝろ。雀酒とは古来、雀がお酒を最初に作ったと言う伝説を元にしたお酒なの。雀は青竹の切り口に餌のお米を蓄えていたけれど、鳥頭だからその事をすぐに忘れてしまい。青竹に水が溜まり、いつしかお酒となったと言うわけよ」

言われてみれば、昔パチエが竹を使って実験をしていた事があったわね。

まさかお酒を作ろうとしていたとは思わなかったわ。

「私が説明する所だったのに……」

誇らしげに何かをしゃべりだそうとしたポーズのまま、ミステリアが固まっていた。

「ほら、そんな事よりも焼けているわよ」

「えっ?! わわっ!」

咲夜に言われてミステイアは煙が上がっている焼き物をひっくり返す。手際はいいのにどこか抜けているのよね。

「さーって、出来ましたよ。私特製の蒲焼とおでん！」

全員分を作るのは時間がかかると思ったけど、ミステイアはあつという間に全員分焼きあげた。

皿に出された鰻と八目鰻の蒲焼からは香ばしい良い匂いで、こあと美鈴は目をぎらぎらさせて早く食べたそうね。

「うわぁ〜いい匂いですよ、パチュリー様！」

「本当においしそう。焼鳥ならたまに人里で食べるんですけどね」

「私は洋食メインだからこういうのは作らないわね。今度作ってみましょうか」
食べる前からみんなもう夢中になつてゐるわね。

「それじゃ、頂きませうか」

「「いただきます！」」

こういう串焼き系を咲夜は作らないから、パチエとこあは珍しそうに食べている。

美鈴はともかく、咲夜は食べ慣れてない味に驚いているわね。

フランは相変わらずの美味しさだと言つてもう一本食べ終えた。

「へえ、思つていたより濃い味付けじゃないんだな」

「濃い方がいいならタレもあるよ？ 薄味の方が好みって言うのが多いからね」

「俺はこれくらいでいいさ。酒もある事だし」

ユウキは竹を切って作ったコップに注がれた雀酒に手を伸ばした。

「……なんでお前らじつとこつちを見てる？」

「いえ、雀酒がどんなものかと思ひまして」

「だったら美鈴、自分で飲めよ。俺は毒見か!？」

そういうつもりはないんだけど、ついね。

溜息をつきながらも、ユウキは雀酒を一口で飲み干した。

ここに来た当初、ユウキはあまり酒を飲まなかったけど、最近はよく飲むようになったわね。

たわね。

「お、なかなか飲みやすいし美味しいな。蒲焼にちょうどいいぞ」

美味しそうに飲む彼を見て、私達も雀酒を飲み始めた。

伝説のお酒とミステリアが息まくだけあって、初めて味わう美味しさね。

「純米酒でも吟醸酒でもない味ね。屋台で出すにはちょうどいいお酒ね」

洋酒派な咲夜も気に入るほど、これは美味しい。

「ねえ、ミステリア。これの製法教えてもらえないかしら？」

「これは企業秘密だからダメですよー飲みたかったら次からお金払って下さいねー」

「むむつ、絶対にこのお酒自力で作って見せるわ」

パチエは変にやる気を見せたわね。そこまでこれを飲みたいのかしら。

でも、出来たら私もまた飲みたいわね。

「へっへー今日は先生が来てくれたんで、お酒代だけ特別です。ささつ、どんどん食べて飲んでつてねー」

「わーい、ありがとうお兄ちゃん！」

「そこは私にお礼を言うべきじゃないかな？」

それからしばらく皆で食べて飲んだりして、この屋台の常連である妹紅と慧音もやってきた。

更に、お腹をすかせたルーミアやリグルもやってきて上機嫌になったミステイアが歌を披露して、宴会のように盛り上がった。

フランもそうだけど、ユウキも楽しそうに一緒に騒いでとてもいい夜を過ごせた。

ユウキは霊夢にも飲ませたいと、数本分の雀酒を分けてもらい神社へと戻って行き、お開きとなった。

翌朝、紅魔館に酔っ払い達のハイテンションな笑い声が響き渡った。

あのお酒、飲めば翌朝に超ハイテンションになって踊りだすと言う変な効果もあった

のね。

咲夜ですら鼻歌を歌いながら掃除をして、パチエも上機嫌にこあと踊って、ぜんそくが悪化した。

フランは分身したまま紅魔館を飛びまわって、美鈴やメイド妖精達が苦勞していたわ。

後で聞いた話だと、博麗神社でも同じようにユウキや霊夢、一緒に雀酒を飲んだ魔理沙も踊りまくっていたらしい。

ちよつと、混ざりたかったと思っただのではないしょ。

「パチエ、そう言えば結局ユウキに頼んで封印したアレって何が封じられてたの?」

「……女にとりつく色欲の魔物よ。いくらあなたでも抗えないほど強力なのよ。アレに憑かれたら、皆してユウキに襲いかかっていたでしょうね。で、そうだったら霊夢が黙っていないわよ」

「……一生封印しておきましょう」

でも、いざとなったら……

「ダメよ」

「ケチ!」

続
く

第110話 「蛭姫の仕事」

博麗神社

「あゝ……」

「いゝ……」

「うゝ……」

真つ昼間の博麗神社、ちゃぶ台にだらんと突つ伏している俺、霊夢、魔理沙。みすちー特製の雀酒を飲んで陽気に騒いで、完全に二日酔いだこりや。

途中から萃香も雀酒の匂いにつられてやってきたけど、朝いつの間にか消えていた。

「こういう副作用があるんだな、雀酒」

「ただ飲み過ぎただけだろう。しかし、よく効く酒だ。萃香のお墨付きだもんな。そう言えば、今頃あいつも二日酔いかな？」

「さあ、鬼に二日酔いなんて言葉あるのかどうか分からないわ」

そろそろお腹も空いてきた。

朝食は何も作る気が起きず、何も食べていない。

昼食の時間だが、まだあまり動く気にならない。

「にやつはつはつはつ！ そのとおり！ 鬼に二日酔いなんてあるわけない！」

頭にガンガン響く怒鳴り声が聞こえたと思つたら、これまたいつの間にか大きな荷物を背負つた萃香が立っていた。

「萃香、鬼にはなくても人間には二日酔いつてもものがあるのよ。大声出さないでよ」

「ごめんごめん。雀酒なんて珍しいものを飲ませてくれたお礼に、二日酔いに効く物作るから勘弁してよ」

「二日酔いに効く物？ つて萃香料理出来るのか？」

まっかせとけー！ と萃香は台所へ行つてしまった。

「霊夢、萃香つて料理出来たのか？」

「さあ、少なくとも私は見た事もないわ。ユウキさんは？」

「俺に聞いたつてわかるわけないだろ。とにかく待つてみようぜ」

それからしばらくして、小さな萃香が三人分の御盆を持つてやつてきた。

この萃香は能力で分身したものだ。

便利だよな。今度俺も幻想支配でやつてみるかな。

出てきた料理は野菜たっぷりの雑炊にシジミの味噌汁、大根おろしがたっぷり乗った焼き魚、納豆と言つたシンプルな和食だった。

「おおーうまそうだぜ！ でも、思つてたよりは質素なんだな。もつとこう豪快な料理

かと思つてたのに」

「それは私も思つたわ」

「同じく」

てつきりイノシシとかの丸焼きが出てくるのかと思つてた。

それを見て萃香は苦笑いを浮かべた。

「いや、まあ、そのイメージは間違つてないけどさ。これでも鬼は酒宴好きなんだよ？
酒に合う料理くらい得意さ」

ほとんど天狗や河童に作らせてたけどね。と小声で付け加えたのを聞き逃さなかつたぞ？

文もとりも昔は苦労したんだろうなあ。

「でもこれ酒に合うんじゃないやなくて、二日酔いに効く料理だろ？ 鬼は二日酔いしないのになんで得意なんだ？」

「うぐつ！ いや、それは……あははは」

萃香にしては珍しく言葉に詰まつてる。

そんなに動揺する事なのかな？

「はは、分かった。昔好きな男が酒に弱くていつも二日酔いになってたから、看病がてらに料理作つてた……つてまさかそんなわけないよな？」

あははくと魔理沙は冗談で言ったのだらうが……

「ささつ、冷めないうちに食べてよ。味見もしたし自信作だよ！」

「(凶星かい!)」

冷や汗を流しつつ分かりやすく誤魔化す萃香、流石に可哀相と云うか可愛い一面もあるな—と思いつつ、黙って昼食、いや朝食? を食べる事にした。

まずはシジミの味噌汁を一のみ。

魔理沙は雑炊を、霊夢は焼き魚を一口食べた。

「へえ〜……」

「ほお〜……」

「おお〜……」

俺達の口から思わず零れた感嘆の眩き。

「ふふーん、どんなもんだい?」

それを聞いた萃香は満面の笑みを浮かべる。

「いや、冗談抜きで美味しいな。この雑炊、食べやすくてちょうどいいぜ」

「この魚も焼き方が絶妙ね。大根おろしをのせるとさらに美味しいわ」

「味噌汁も塩味が効いてて美味しいぞ」

三者三様に料理を褒めた事で、萃香の機嫌が更によくなった。

「そうでしょそうでしょ！ おかわりもあるからじゃんじゃん食べてよ！」

「いやいや、いくら軽いからってそんなに食べたら意味ないだろ」

「ええ、せっかく沢山作ったのに？」

台所へ見に行つたが、雑炊も味噌汁もまだまだ大量に作られてあつた。

魚もほどよく焼かれている。

「どれだけ作つたのよ!? 私達4人分よ!」

「にやはは、久しぶりだからちよつと張りきつちやた」

「ま、まあいいじゃないか霊夢。夜も食べればさ……焼き魚だけ今食べようか」

今日一日で食べきれぬかちよつと心配なくらいだけ。

その時だった。

「「こんにちは〜!」」

外から数人の明るい声が聞こえてきた。

この声は、チルノに大ちゃん、それにリグルか？

「ここにいた! ユウキく遊びにきたよ!」

「あれ? 魔理沙さんと萃香さんもいる?」

「こんにちは。あ、食事中でしたか、ごめんなさい」

大ちゃんが俺達の様子を見ながら謝ってくるけど、視線が料理から離れないな。

いつもいるみすちーがないけど、屋台の準備でもしてるのかな？
つてルーミアもないな？

と、思ったら背後から急に抱きつかれた。

「やーほー、ユウキ〜♪ 美味しそうな匂い〜♪」

抱きついてきたのはルーミアだった。

料理の匂いにつられてるのか、よだれが出ているぞ？

「よっ、いらっしやい」

「相変わらず好かれてるな、ユウキ」

「言うな、魔理沙」

「こら、ルーミア。ユウキさんから離れなさいよ」

「は〜い!」

と霊夢に言いつつも、ルーミアは俺の背中から離れようとしな。

視線は料理にくぎ付けた。

良く見ると、チルノとリグルもじーっと料理を見つめている。

チラリと霊夢達に目を向けると、3人共黙って頷いてくれた。

よし、これで萃香の料理を無駄に出来ずにすむ。

「お前ら、良かったら、一緒に食べないか？」

「「えっ!? いいの!?!」」

その言葉を待っていたとばかりに、チルノ達はテーブルに座った。チルノと大ちゃんは俺の両隣に座っている。

で、ルーミアは相変わらず俺の背中に抱きついたままだ。

「ルーミア?」

「だって私が座る場所ないんだもん」

確かにチルノ、大ちゃん、リグルが座ってスペースがもうないな。

「魔理沙、あなた食べ終わったわよね? どけなさい?」

「えっ? 私かよ!?! いや……はい、いまよけます。食器、洗ってきます……ごちそうさ

までした」

「ルーミア?」

「はい!」

素早くルーミアは魔理沙のよけたスペースに滑り込んだ。

うん、この数秒間、俺は何も見なかった。

チルノ達だけでなく萃香も顔色悪いけど、気のせいだ。

霊夢がさつきから能面のような顔をしているのも全部気のせいだ!

「ふうく食べた食べた」

「おいしかったのだ〜」

「御馳走様でした。萃香さん料理上手なんですね」

「あつはつはつ、みんな良い食べっぷりだったね」

チルノ達も料理に大満足で、萃香も嬉しそうだ。

「それじゃ、また遊びにくるねー」

「ぐちそうさまー」

腹いっぱい食べて満足したのか、チルノとルーミアは帰ろうとした。

あいつら何しに来たんだ？

「ちよつと待った！」

が、リグルと大ちゃんが2人を呼びとめた。

正確には2人の襟首を掴んで止めた。

帰ろうとしていたチルノとルーミアはそのまま……

「ぐえ!？」

奇声をあげてしまった。

結構勢い付いてたからうまい具合に首を絞めてるな。

あ、ちよつと白目向いてる。

「待って、まだ何も用事済んでないよ?」

「今日は私がおにーさんに相談があつて来たんでしょ！」

「そ、そうだった。ごめんなさい……離して！」

どうやら今日はリグルの用事出来たようだ。それも俺に相談があるみたいだな。

チルノ達が座りなおし、改めてリグルが俺に向き直った。

霊夢と魔理沙、萃香は縁側でお茶を飲んでいる。

「で、俺に相談つて？」

「うん。おにーさんがいた外の世界つて、色々な能力者がいたんだよね？ 動物を操る

能力者もいたつて聞いたけど？」

「ん？ ああ……いたな。人間を操れるのも、動物を操れるのも」

久々に学園都市の話振られた気がする。

リグルが言う、動物を操る能力者もいるにはいるが、もつと詳しく細分化される。

精神操作の頂点である、操析は人間は操る事が出来ても、動物は無理だ。

逆に動物、それもげっ歯類や小型哺乳類と言う細かい種族限定で操れなくても、意思

疎通が出来るレベルの能力者も知っている。

「じゃあ、虫を操れる能力者っていなかった？」

リグルは何か希望に満ちた表情で聞いてくるが、何を相談したいのかさっぱり分からない。

それにしても、虫か。確かいたはずだけど。

「多分いたはず。と言つても俺はデータを見た事もあつた子もないな。それがどうかしたか？」

虫を使う能力つて使い道がなかつたから幻想支配で視ようとは思わなかつた。

確かレベル1、2程度で虫の居場所が分かる程度だつたはずで、使い道がな。

動物系の能力者なら、小ささを使つて建物への潜入や盗聴器代わりに使えたけどな。

それを聞くと、リグルはさつきまでと打つて変わつてしよんぼりしてしまった。

「実は、みすちーが焼鳥撲滅のために焼き鰻をやっているのを見て、私も虫の地位向上のために何か始めようと思つたの」

「それでどんな事をすればいいかつて私達も考えたんだけど思いつかなくて、色々な能力をみてきたユウキさんならもしかして、つて思つて」

「なるほどな」

確かにみすちーは焼鳥を撲滅する為にそれに代わる焼き鰻屋をやっている。

それが成果をあげているかは別問題だが、あの屋台はたまに人里でも出店してて好評だ。

虫のお姫様であるリグルがそれを見て、いつも気味悪がれて駆除される虫の為に何かしたいつて思うのは当たり前か。

でもな、虫の地位向上のために出来る事か。

「それは無理なんじゃない？ 実際害虫だったり毒虫だったりで存在自体が人間から見たらダメなの多いし」

「だな。寝てる間にぶんぶん飛び回って五月蠅かった事も多いぜ」

霊夢や魔理沙が言うように、農作物に被害を及ぼす虫など人の生活を脅かす虫も多い。

リグルも分かっているようで、2人に反論はせず俯いてしまった。

「でも、自分の眷属の為に何かをやりたいてって気概は良い事だと思うけどね、私は。ユウキは何か思い浮かばないのかい？ そっちの世界で虫を使った仕事とかさ」

仲間意識が強い鬼の萃香だけは、そんなリグルに好感を持っているようだ。

「そう言われてもな。虫を使った仕事か……養蜂場くらいかな」

「養蜂場なら人里でもうあるよ、おにーさん」

そう、養蜂場はもうすでに人里のハズレに一軒ある。

なら別の事で何かないかな。

養蜂場、養鶏場……にわとり、コケコツコー……あ、そうだ！

「お、ユウキのその顔は何か思いついたようだね」

「まあな。リグルは虫ならどんな種類のも操れるんだよね？」

「操れる、と言うか、話が出来るけど？」

「それで十分だ。じゃあさ、虫の知らせサービスなんてどうだ？」

「「虫の知らせサービス？」」

何の事だとみんな首を傾げた。

「ああ、予め決まった時間にその人の所に言つて、予定があるよつて教えるんだよ。例えば朝早く起きなきゃいけない人には虫が起こしに行つたりするんだよ」

「お、おお〜！なるほど！」

ちようど携帯のアラーム機能のような事を虫でやつてもらう。

まあ、虫よりも鳥の方が鳴き声でアラーム代わりになるだろうけど、小さな虫だからこそその人の近くに行ける。

「でも虫なんかが行つた所で退治されて終わるんじゃない？」

「もしくは無視されちまつたりな、虫だけに」

魔理沙が何か言つたが、みんなスルー。

チルノですら聞かなかつた事にして、流星の魔理沙も縁側にのの字を書いて凹んでいる。

「だから、それは派遣する虫を選べばいいんだよ。スズメバチが行つた所で怖がられて退治されるのがオチだけど、綺麗な

蝶とかならそこまで警戒されないだろ？」

それに前もって予定時刻に虫が来ると分かっているだけでも、警戒心が違ってくるはずだ。

まあ、最初は色々問題が山積みだろうけど、ひとまずの方向性は見えたかな。

「うんうん、それいい、すごいいい！ 流石、おにーさん！」

「お、おいおい」

喜びのあまり思わずリグルが俺に飛び付いてきた。

正直、そこまで喜ぶとは思わなかった。

結構問題が多い案だと思うんだけどな。リグルの悩みが解決しそうだからいいか。

と、ここで刺すような冷たい視線をいくつか感じた。

あ、この流れはヤバイ。

「……………」

やつぱり、霊夢と大ちゃんやんがジツとこつちを睨んできてる。

チルノとルーミアは羨ましそうにみてるし、魔理沙と萃香はニヤニヤと意味深な目で
見ている。

もう、どうにでもなれ。

「じゃ、私早速色々準備するね。ありがとう、おにーさん！」

そうやって、リグルは文字通り飛び去って行った。

その後、リグルは正式に「虫の知らせサービス」を始めて、俺が文に頼んで文々新聞に広告を載せたり、口コミで広めたりと少しは好評になった。

ただ、やはりそれでも虫は虫なので、気味悪がられたりはしているけど……リグルがこれで納得してるならいいか。

続く

第111話 「母、襲来」

今日は、魔法の森にあるアリスの家に来てきた。

以前俺に頼み事をしたと言っていた件でアリスに呼ばれた。

色々準備があるから待っててと言われていたからな、危うく忘れる所だった。

「アリス、来たぞー」

「いらつしやい！ さきさつ、入って入って。魔理沙とパチュリーも来てるわよ」

なんだか上機嫌なアリスに出迎えられた。

魔理沙とパチュリーも呼ばれていたのか。

奥のテーブルに2人が座っていて、こっちに手を振っていた。

「よお、来たなユウキ」

「こんにちは、ユウキ。ここで会うのは何だか妙な気分ね」

「おつす2人共。おつと、久しぶりだな上海に蓬莱」

上海と蓬莱が飛んできて俺の胸に飛び付いてきた。

この2人に会うのも久々だな。

「シャンハイハイー！」

「ホウラララーイ！」

……なんか2人共テンションがおかしい気がする。

「な、なあ、アリス？ 上海達どうしちゃったんだ？」

「あ、ごめんささい。私ちよつと妙なテンションになってたから、それが移ったのかもしれないわ」

人形遣いのテンションが人形に移るのか……そういうもの、なのか？

「アリスったら6日ほど徹夜してたよなのよ。いくら睡眠が本来いらぬ魔法使いだからって、習慣として残っている睡眠をいきなり止めたら影響出るわよ」

パチュリーが言った事で思い出したけど、魔法使いつて食事と睡眠は本来いらぬんだったな。

アリスもパチュリーも普通に寝たり食事してるけど、それは習慣だったっけ。

魔理沙は魔法使いだけど、魔法使いじゃないんだとかそこら辺はよく分からない。

「私だつてたまに食事も睡眠もしない時あるぜ？」

「それは魔理沙が研究に没頭していて、ただ食事と睡眠を忘れていただけでしょ。霊夢がああの時偶然尋ねてこなかったら死んでたわよ」

「わわっ、なんでアリスがそれを知ってるんだよ!? 霊夢か!? って、そこ笑うなユウキ

！」

「悪い悪い。なんだか簡単に想像付く光景だなと思ったただけだ」

実は俺もその話は霊夢から聞かされていたんだよな。

霊夢曰く、しばらく見かけなかった魔理沙を心配してきてみたら、真つ青な顔した魔理沙がうすら笑いを浮かべながら一心不乱に研究している姿を見て怖くなつて気絶させたとか。

「つたく、で、アリス？ 私だけでなくパチュリーにユウキまで呼んでどうしたんだ？」
「あなたはいつも呼ばなくてもご飯食べに来るでしょうが。つと、そうね。実はユウキに前々から頼みたかった事があつて、その事で2人の意見も聞きたいのよ」

そう言つてアリスは一冊の本と大きな紙をテーブルに広げた。

「これは、人形と舞台の図面か？」

「こっちは、台本ね。えつと、勇者とその仲間がドラゴンの群れを相手に大乱戦？」

「アリス、これひよつとして人形劇か？ それもすごく大規模なやつ」

「そうよ。良く分かつたわねユウキ！ これが前々から私がやりたかつた事なの！」

興奮気味に話すアリスの説明によると。

今までアリスは寺子屋や祭りなどで人形劇をやっていた。

全部1人でやっていたのでとても小さいものだった。

外の世界で言う映画みたいな大規模な物をやつてみたいと思つていたが、複雑な動き

を多くの人形達にさせる制御など1人では流石に色々と無理があった。

だが、幻想支配でアリスの魔法を使える俺が来た事で、それが可能になったと言うわけだ。

「でも、大規模にしたって肝心の話は、勇者が攫われた姫を助ける為にドラゴンを倒すって、ありきたりすぎないかしら？」

流石パチュリーは大図書館で様々な本をだけはあつて、色々な物語に詳しいな。

それを踏まえて呼んだのだろうけど。

「それは私も思ったけど、下手に話を複雑にすると表現がうまく出来なくなるのよ。だから話は王道でもスケールを大きくしたの！」

「それがこの勇者チーム5人対ドラゴン100体か？ 色々無理があるだろ!？」

魔理沙のツツコミ通り、無理がある気がする。

いや、元の世界でもっと過酷な状況にはなったけどさ。

「私がドラゴン100体や敵側を操るから、ユウキには勇者達をやってほしいのよ。あ、上海と蓬莱はお姫様役ね」

「姫が2人って、おお、なんかやる気満々だ」

「シャンハイ」

「ホウラーイ」

いつのまに替えたのか上海と蓬萊はお姫様っぽい衣装を身に纏って、揃ってお色気っぽいポーズを決めている。

……確か、それ昔流行ったパイレ○ツのギャグポーズじゃなかったか。

「ふむふむ、なるほどね。それなら面白くはなりそうだけど、ユウキは幻想支配で人形を操るのは大丈夫なの？」

「ん、ちよつとやってみるか。アリス、力使うぞ」

「ええ、良いわよ。あそこにある人形使ってみて」

アリスを幻想支配で視て能力を使い、棚に置いてある動物の人形を操る。

魔力の糸を出してそれを使う感覚か。

似たような事は何度かやってるから手慣れた物だ。

「お、ライオンが、カバと空中戦始めたぞ？」

「白鳥が空中で何か踊って、いえこれは武術？　なんでそんな動きさせてるのよ」

「ぶっ!! 象が鼻を軸にコマのように!! わ、分かったわユウキ。あなたがうまく操れるの分かったから、や、やめて……ふふっ」

いくつかの動物達を色々操ってみたが、それがアリスの笑いのツボにハマったらしい。

魔理沙は興味津々で、パチュリーは呆れている。

ん、なんだ？ 外に気配がする？

「ふー……ともかく、ユウキは大丈夫つと。あとは舞台や演出の方ね、あら？」

——コンコン

アリス達も気がついたようでドアに目を向けると同時に、ノックされた。

「……ものすごく居留守を使いたいけど、絶対にいるってバレてるわよね。はあ……
はい、いまあけますよー」

——ガチャ

「アリスちゃん!!」

「!?!?!」

なぜか投げやり気味なアリスがドアを開けると同時に、誰かがアリスに抱きついた。

突然来訪した女性性は、赤いローブを身に纏い、長い銀色の髪をしていて、ひよこつと

飛び出るサイドテールをしている。

彼女を見た魔理沙はアチャーと言った顔をしていて、パチュリーは目を見開いて驚愕の表情を浮かべている。

アリスをちゃんづけで呼ぶ程の親しい仲らしい。

俺は知らないけど、魔理沙は知っているような顔をしてるな。

「アリスちゃん久しぶりー！ ああ、会いたかったわあ！」

「ちよ、ちよつと待って、離してよ、ママ！」

「ママ!？」

あまりに衝撃的な一言に、俺とパチュリーの声がハモった。

「ちよつと、魔理沙あの人一体何者なのよ!？」

「あー……彼女は、アリスの育ての親で、魔界の神様だ」

「魔界の神様!？」

またハモった。

「あら、魔理沙ちゃん久しぶり、大きくなったわね」

「あはは、どうも」

さつきから彼女のハイテンションぶりに流石の魔理沙も苦笑いだ。

でも、親子だけあってさつきまでのアリスとどこか似ているな。

「あらら、そちらの魔女ちゃんは初対面ね。ごめんなさいね、いきなり押しかけちゃつて」

「ちよつとそれは私に言うべき事でしょ！ それより2人共固まつてるじゃない。早く自己紹介して帰って」

「帰って!?! アリスちゃん、ひどーい！ せっかく夢子ちゃんの目をかいくぐってここまで来たのに……」

「し・ん・き・さ・ま？」

「あ、はい。自己紹介させていただきます」

駄々をこね始めた魔界の神様を笑顔一つで黙らせたアリスすげえ……

「こほん。では、初めまして。私の名前は神綺。アリスちゃんのママで魔界神やってまーっす」

「かるっ！ 軽すぎ！ もつとこう威厳とか出しなさいよ！ ああ……無理よね。神綺様は昔からそういうの苦手だもんね」

「アリスちゃんがさっきからヒドイ……と、ともかく、魔理沙ちゃんの事は良く知ってるけど、そちらの2人の事も教えてほしいな？」

魔界の神様、なのは間違いないだろうな。

本人は全然力を出していないのに、感じるこの強大な力。

こんなに強い力は、幻想郷でも元の世界でも感じたことはない。

多分、西行妖やアツクアどころか大天使であるミーシャよりも強い。

あれ、これくらいの力を、前にどこかで感じたような気がする……まあ、いいか。

パチュリーがさっきから固まっているのは、神綺の力を感じ取っているからだろう。

で、力を裏腹な強烈なキャラクターのギャップに驚いているって所か。

それは俺もだけ。

「え、えっと、私はパチユリー・ノーレッツジよ。魔法使いなのはもう分かっているみたいですけど」

「うんうん、アリスちゃんや魔理沙ちゃんに負けず劣らずの才能を感じるわ。あ、敬語とかはいらないからこれからもアリスちゃんと仲良くしてね。で、そっちの気になる彼……」

「?!」

神綺は俺の方を向いて一瞬、ほんの一瞬だけど固まった気がした。

まるで何かに驚いている表情を浮かべたようだけど、それもすぐに消えて今度は興味津々とばかりに身を乗り出してきた。

「ねえ、ねえねえ、そこの君。あなた名前は!？」

「ユ、ユウキ……です」

顔が近い顔が近い!

神綺ってアリスのような娘がいると思えないほど、綺麗で若々しい顔をしているな。

それよりも彼女の目がギラギラしてないか？

「ユウキちゃんね! 分かったわ! で、あなたはアリスちゃんの友達? 彼氏? 婚

約者? それとも旦那様? あ、この子がまさかの2人の愛の結晶!？」

「シャ、シャンハイ!？」

突然俺とアリスの子供と言われた上海がワタワタとしていて、可愛いなー……つて現実逃避か。

「ちよ、ちよつとママ、じゃなかった神綺様！ 彼から離れて、困っているじゃない！ それにユウキは友達！ 親友！ それにこの子は上海で私が作った人形よ！ こ、こどもだなんて……まだ、早ゴニヨゴニヨ」

顔を真っ赤にしたアリスが神綺を引き離して一人でブツブツと何か言っているけど、聞かなかつた事にしよう。

そうでないかと、目をパチクリさせていたパチュリーがいきなり睨み出して怖いからな。

「あつはつはつはつ、相変わらずの親馬鹿ぶりだなー」

「あはは、そう褒めないでよ魔理沙ちゃん」

「「いや、褒めてないから！」」

うん、神綺が来たと分かつた途端のアリスの反応の意味が分かつた気がする。「で、一体何しにきたのよ。用件なら聞くから早く戻ってよ」

「むーさつきから辛辣くそんなにユウキちゃんとおしやべり邪魔されたのが、ムグググッ!?!」

「はい、神綺様く私特製のケーキ♪ 沢山食べてね」

アリスは、何か言いだした母親の口に無理やりキーキを突っ込んだ。手慣れているのを見ると、昔から苦労してたんだなーアリスは。

「もぐもぐ……うん、おいしっ♪ あ、来た理由ね。アリスちゃんが魔界から出てしばらくたつけど、どうしてるかなーと思って」

「それなら手紙とか電話とかでいいでしょ。昨日だって話したんだし」

「昨日話したばっかかよ。ってか手紙や電話出来るんかい！」

「魔界と幻想郷って実は繋がってて、往来は結構自由なんだぜ。んで、昔私と霊夢が魔界に行つてアリスや神綺と知り合ったわけさ」

日本とアメリカくらいの距離感って事か。

パチュリーが、それくらい近かったのね。とがっかりしている。

「どうやらパチュリーは魔界に興味はあったが、行く手段が分からなくて諦めた事があり、シヨックを受けていた。」

「それよそれ！ 昨日の電話もそうだけど、最近のアリスちゃんが妙に変わってるような気がしちやったのよ」

「へっ？ 私か？」

「うんうん、夢子ちゃんもそうだと行っていたし。でね。原因はやっぱり……彼氏が出来たのかと思って見に来ちやった♪」

そこでチラリと俺に目を向けないでほしい。
って、男は俺しかないか。

「ブフツ!?! は、はああく!?! 何よそれ!?!」

「ホウラーイ!?!」

アリスが噴き出した紅茶が蓬萊に直撃、効果は抜群だ!

って、パチュリー、なぜそこで俺を睨む。

魔理沙は目がキラーンと光ったし、文がたまにそれやるけど嫌な予感しかしない!

「ほほう、気付いちちゃったかおつかさん。やっぱりなー私でさえ分かるんだから、母親が気付かないわけないよなー」

「魔理沙ちゃん、そこ詳しく!」

「魔理沙、余計な事言わない! 違うから、違うからね!」

と、そこへ……

「へえ、何が違うのかしら?」

いつの間にかアリスの後ろに霊夢がいた。

俺もだが、アリスも魔理沙もパチュリーも誰も気付かなかった。

「あれ? 霊夢、いつからそこに?」

「最初からいたわよ! 神綺が突然やってきてアリスの様子を見に来たって言うから、

嫌な予感がして一緒に来たのよ！　って誰も気付いてなかったわけ!」

ごめん。神綺の力が強すぎて霊夢の気配がかき消されてたみたいだ。

「霊夢？　最初からいたなら神綺様止めてよ！　無想封印使ってもいいから！」

「そこまで!？」

「はあく……ごめん。最初に見た時に使わなかった事を心底後悔してるわ」

「霊夢ちゃんも!？」　2人共ヒドイわ！　もういいわよ。ユウキちゃんに慰めてもらおうからー!」

「わぶっ!？」

と神綺は離れていた俺の場所まで一瞬でやってきて、抱きついてきた。

こんな所で神様の力使うなよ。

ってか、何か柔らかいものに押しつぶされそう。

腕に抱きつくとかならまだしも思いつきり正面から抱きついてきやがった!

「あつ、ママ！　何してるのよ!」

「なんてうらやまつ……ユウキさんから離れなさい!」

「……またか、またなのね、ユウキ」

「くつくつくつ、これは面白くなつて来たぜ。写真とつておこな」

アリス、無理やりでもなんでも引きはがして、息が出来ない。

霊夢、一瞬何を言いかけた？

パチュリー、そこで俺をせめるのは理不尽だ！

魔理沙、後で覚えてろよ。

「む〜いいもんいいもん。このままユウキちゃん持つて帰っちゃうんだから。霊夢ちゃんとアリスちゃんとパチュリーちゃんやんが夢中になつてる彼、私も夢中になつちやうもん！」

「「……………ほう」」

「あ、やばっ」

神綺の胸に潰されてて、よく見えないけどこれ絶対ヤバいスイッチ入った！

このままじゃ俺もぶっ飛ばされる！

こうなったら幻想支配で神綺を視て……………こんな別次元の力、視れる気がしねえ！

力づくでどけようとしたら手がマシユマロっぽい物に当たった。

うん、何に当たったか分かった刹那に手を離れた。

なんかつい最近同じような事があつたような。

流石は親子だな♪

幸い今回は誰も気づいてなくてよかった。

「あらっ……………続きは魔界でね♪」

ムリデシター

「無想封印！」

「アーティフルサクリファイス！」

「賢者の石！」

「ついでに、マスタースパーク！」

あ、これ、詰んだ俺。

魔理沙、死んだら真っ先に化けてでてやるー！

続く

第112話 「人形劇」

アリスと一緒に行った大人形劇は、大盛況のうちに終わった。

俺の人形遣いとしての特訓もあったがそれ以上に劇場や小道具に時間がかかったが、アリス曰く思っていたよりはかからなかったらしい。

大規模にやりたいとアリスは願っていたがそれでも最初は、寺子屋か広場で場所を借りて小さめにやるつもりだった。

で、その話をどこからか聞きつけた萃香が、興味を持ってどうせならでつかくやろうと言ってきた。

にとり達河童の力を借りて、舞台照明や演出効果を迫力のあるものにしたたり、文やはたてに新聞で大々的に宣伝したりと、鬼の権威をフル稼働させた。

最も、萃香としてはただお願いしただけだったが、文達にしてみれば命令も同じだっただろう。

それから、俺はどうせならと、プリズムリバー三姉妹やみすちーに音に関しての演出を頼んだ。

劇にはそれに合った迫力のある生演奏があった方がいいと思つたからだ。

ついでに、みすちーの歌もあれば完璧だ。

リリカ達は快諾してくれて、みすちーも最初は恥かしがったが、大ちゃん達が説得してくれて主題歌や挿入歌をうたってくれた。

今度、みすちーの屋台でみんなに雀酒を奢らないとな。

次に劇に使う人形作りだ。

アリスがいつも使っている人形達とは全く違うドラゴンや勇者などを、アリスと神綺がずっと作り続けた。

神綺は娘がやる人形劇を観てから帰る。と未だ魔界に帰らず、アリスの家にいる。

たまに博麗神社に来て、俺に絡んできては霊夢達に退治されているが、全く懲りない。物好きな神様だ。

でも、人形作りの腕はアリス以上だった。

てつきり魔法か何かで作るのかと思ったが、全部手作りできさささとドラゴンを作った。

アリスは口では色々言っていたが、準備が思っていた以上に捗っていて喜んでいたな。

なんだかんだで母親と一緒に人形作りをしたのが楽しかったようだ。

そんなこんなで、いよいよ人形劇の1回限りの公演が始まった。

客は人妖入り乱れており、俺の見知った顔も知らない顔も沢山いた。

俺が操る巨大ドラゴンの群れと、アリスが操る勇者上海達の戦いは、ただ単に操るだけではなく、口から炎を吐いたり剣からビームが出たりと大迫力で子供だけではなく、大人からも大盛況だった。

そんな訳で、今は博麗神社にて打ち上げと言う名の宴会が行われている。

今回はアリスと神綺が料理とお酒を大量に用意したので、人形劇を手伝った萃香や文やにとり達以外にも沢山集まっている。

要は、何でもいいから宴会出来ればいいだけだ。とは霊夢の談。

「お疲れ様、ユウキ。ありがとう、おかげで助かったわ。大丈夫？ 疲れていない？」

「ううん、これくらいは平気だ。別に弾幕ごっこしたわけじゃないしな」

幻想支配でアリスの力使っていたけど思ったよりも上演時間が長く、数体の巨大ドラゴンを操るのは結構疲れると思った。

でも、思っていたよりはずっと疲れなかった。

思えば、アリスだけではなく、誰であれ結構長時間使えるようになった。

幻想支配が幻想郷に慣れてきたのかな？

「いやあくそれにしてもあの龍は迫力あったねえ」

そこへ上機嫌な萃香がやってきた。

右手に酒瓶、左手に酔い潰れたらしい文を持つている。

あ、地面に落されて伸びぢやった。

哀れ、文。

「萃香も色々ありがとね。素晴らしい劇場で演じられてよかったわ」

「何の何の。ユウキが人形劇やるなんて面白いと思っただからね。で、思ってた以上に面白いものを見れた……イタツ!?!」

ニヤリとする萃香に、幻想支配で力を視てからデコピンした俺は悪くない。

普通にデコピンしたら指がイカれる。

それでも結構痛い。

萃香の力をコピーしても、別に身体強化されるわけじゃなく気休め程度にしかならないって事を忘れてた。

「ふっ、ふっふっ……ドラゴンで悪役セリフを言うユウキさん。しっかりとカメラに収めましたよ……」

文がゾンビのようにフラフラしながら、カメラを掲げて得意げに言ってる、が。

「カメラで収めても写真だけで声まで撮れてるわけじゃないから、あんまり意味ないんじゃないの?」

「あッっ」

「そうだな。実際アレはかなり恥ずかしかつたけど、写真に撮られるだけじゃ別にどうってことはないな」

「あゝあゝ……」

アリスと俺がそうツツコムと、文は再度地面に崩れ落ちた。

萃香はそれを見て大爆笑してる。

さつきから話に出ている面白いものとは、俺が演じたドラゴンの事だ、

今回やった人形劇は勇者達VS悪のドラゴン。

勇者達は上海や蓬莱達、悪のドラゴンは俺が操った。

で、魔力の糸で操っただけじゃなく、役として声をあてた。

『勇者ども！ 姫を返して欲しければ、この牙龍の炎を凌いでみせよ！』

なーんて、実は結構ノリノリだったりする。

悪役だったからやりやすかつたけど、正直言つて、勇者側をやってくれと頼まれたら絶対に断つていた。

他者を演じた事は何度もあつたが、まさか演劇をする事になるとは少し前の自分じゃ考えられなかつたな。

「うつつふーん、2人共名演技だったわよ！」

「わっ、神綺？」「ママ!？」

背後からいきなり現れた神綺が俺とアリスを抱きよせた。

さつきまで向こうでパチユリーや魔理沙と話してたんじやなかったのか？

「子供達もたつきさん喜んでいたし。私も手伝った甲斐があつたわあ。ねえねえ、魔界でもやってみない？」

「そんな事言つてユウキを連れて帰る口実作つているだけなんじやないの？」

「あつはつは、口実なんて作らなくても連れて帰る気満々よ？」

「止めてよね!!? 本気で止めてよ!!? そんな事したら魔界が滅びるわよ!!?」

俺はこういうのは、もうツツコミはしないし、口も出さない。

出したらどうなるか予想付くし。

「悟つてる顔してるけど、それただ諦めてるだけだよね？」

「……そうとも言つ」

「しかし、噂でしか聞いてなかったけど、まさか魔界神が親馬鹿だったとは驚いたよ」
そう言う萃香は、さして驚いた表情を浮かべていない。

文も興味津々に親子漫才をしているアリスと神綺を覗いていた。

「ですねえ。幻想郷が出来る前から何度もこちらに来ていたようで、私も取材しようとしたのですが、毎回巻かれちゃったんですよね」

「あんなのでも魔界神だから、か」

今の神綺はアリスと姉妹にしか見えないけどな、どっちが姉に見えるかは黙秘。紫とも知り合いつばいしね。で、なんで紫は来ないで藍だけいるのさ？」

萃香が背後に声をかけると、誰もいなかった場所にスーッと藍が現れた。橙はさつきから向こうでチルノ達と遊んでいる。

言われてみれば、魔界神なんて強い存在がやってきてるのだから紫も顔を出しても良さそうなのに、気配すらなかったな。

「流石ですね萃香様。紫様は眠っているのです、私が代わりに」

「えええ〜!? 紫ちゃん来ないの〜!? 何か私の事言っていたのかしら?」

紫が来ないと聞いて、神綺が飛んできた。

ホント、行動力が凄まじいな。

「い、いえ、特に何も、ただ寝るとしか聞いておりませんので」

流石の藍も目をパチクリさせて動揺してる。

「む〜、せっかく来たのに……こうなったら隕石でも落として起しちやおうかしら」

「「やめいー!」」

「ふぎゅ」

あまりに物騒な事を言いだしたので、アリスと霊夢と一緒になって神綺の頭にチョップをかました。

霊夢もさつきまで咲夜やレミリアと話していたのに、いつの間にかこっち来てる。どいつもこいつも瞬間移動でも出来るのか？

「じよ、冗談よ冗談。やくねく3人共本気にしちゃって、やるわけないじゃないそんな事」

「出来る出来ないじゃなくて、やるかやらないか、なんだ」

「こんなのでも魔界神よ。紫よりも強いし」

「こ、こんなの!?! 母親に対してこんなのはないんじゃないかしら?」

また親子漫才始めたよこの2人。

仲がいい事で……何だか、美琴と美鈴さんみたいだな。

「ねえねえ、さつきの話だけど。ホントに隕石落とせるなら一つでつかいの落としてみてよ。一度でいいから巨大隕石を殴ってみたかったんだよね」

「止めてください! そんな事に興味もたないでください!」

「洒落にならないから止めなさいよ、萃香。もしそんな事したら私が萃香ごと隕石を吹き飛ばすわよ?」

文が顔を真っ青にして止めて、霊夢が本気になって怒っている。

普通なら冗談だっと思うけど、萃香と神綺なら本当にやりかねない。

「むく霊夢ちゃんも文ちゃんも冗談がつうじな〜い」

「いや、冗談じゃ済まないでしょうが神綺様！」

「あははは〜ところでアリスちゃん？ ユウキちゃんへの報酬、ちゃんと考えてるの？」

「へっ？ 報酬?？」

神綺に言われ、アリスはぼかーんとした表情を浮かべた。

言われてみれば、その事すっかり忘れてたな俺も。

「そうよ。ユウキちゃんが何でも屋さんだからアリスちゃんは仕事を依頼した。なら、当然報酬は出さないと」

「あ、そうよね。うん、それは当然よね。もちろん、考えていたわよ？」

アリスも人形劇の事で頭がいっぱいでその事は考えてなかったな。

「ウソでしょ」

「うそですよね？」

「私の前で嘘はよくないな」

霊夢、文、萃香に三者三様な目を向けられ、アリスは小声で。

「はい、忘れていました」

と答えるしかなかった。

「俺は別にいいけどな。報酬目当てで何でも屋やってるわけじゃないし」

「それはダメよユウキさん。労働の対価はキチンともらわないと」

なぜか霊夢に怒られてしまった。

別に生活に困るわけじゃないけど、居候の身として何か手に職を持ちたかったのが一番の理由だしな。

「霊夢の言う通りよ。それに私は最初にちゃんと報酬を出すつて言ったもの。あ、そう
だわ。何か私が服を作つてあげるわ」

「それがいいわね。アリスちゃん、裁縫が大得意なのよ。何か作つてもらつたらどうか
しら？」

服、か。

レミリアから沢山もらつているから困ることはないけど、全部お下がりだからな。

自分にあつた服を作つてもらうのも、いいか？

「それならさ、前着ていたような服を作つてもらつたらどうだ？」

服の話に興味が湧いたのか、魔理沙までもが話に参加してきた。

「魔理沙ちゃん、前着ていた服つて？」

「ユウキが外の世界で着ていた服さ。結構かつこよかつただけど、ちよつと前に直せ
ないほどに破れちゃつたんだ」

「あ、こらー！」

「馬鹿魔理沙！」

霊夢とアリスに睨まれ、魔理沙はハツとした表情を浮かべた。
ん？ どうしたんだ？

「外の、世界？ えっ？ ユウキちゃんて外来人だったの？」

「あー、そう言えば神綺には言つてなかつたつけ。俺は外来人だよ。と言つてもこここの外の世界じゃなくて全くの異世界から来たんだだけ」

てつきり言つたもんだとばかり思つてたけど、神綺には言つてなかつた。

幻想支配の事は、視たものの力が使える程度の能力、と言う分かりやすく言つただけだったし。

「……そう、そうなの」

あれ？ てつきり沈痛な表情とかを浮かべるかと思つたけど、神綺の表情は良く分からない。

何か深く考え込んでいるようだ。

別に同情的な表情をされるよりはマシだけど、一体どうしたんだ？

「ママ？」

「えっ？ あ、ごめんなさいね。ちよつとユウキちゃんの力が不思議だったから、異世界から来たって事で納得しちやつたのよ」

ウソだ。

さっきの反応は明らかに違う事を考えてたな。

萃香もそれに気付いて、半ば睨むような目を神綺に送っているし。

霊夢と文は不審な目で神綺をみている。

まあ、いいか。

「うーん、そうだな。着なれてる服も一着くらいあつてもいいか。じゃあ、アリス。俺がここに来た時のような服を頼むよ」

「え、ええ、あなたがそれでいいなら、一着と言わず何着でも作ってあげるわ」

アレ？ 今度はアリスの反応が変だな。

何か俺に気遣ってる？

あ、元いた世界の事を触れるのがタブーって勝手に思ってる？

「あのな。俺は別に元いた世界の事は気にしてないぞ。忘れてるわけでもないし。たまに思い出す事もあるし」

俺がそう言うのと、霊夢達は驚いた顔をして、深く溜息を吐いた。

なんで、そういう反応になるかな。

「あーそうね、そうよね。あなたはそう言う人だものね」

「気にしない方がかえっていいって事か」

「ユウキさんらしいですけどね」

「手遅れの末期なのは相変わらずかい」

みんな、思い思いに好き勝手言ってくれるが何が言いたいのかさっぱり分からない。

「ともかく、あの服と同じデザインと他にいくつかデザインするから、明日にでも私の家に来てよ」

「分かった。楽しみにしてるよ」

「さり気なく自分の家に誘うなんて高度なテクニックをいつのまに!? 流石はアリスちゃんね。でも、私もまだいるって事忘れてないかしら?」

「ああ、もうママは黙ってて!」

俺が行くより、アリスに博麗神社に来てもらった方が平和な気がしてきた。

続く

永夜抄編

第113話 「接敵」

「おお、なんて動きやすいんだ。ありがとな、アリス」

「ふふつ、気に入ってもらえて嬉しいわ」

「良く似合っているな。なんか強そうだぜ」

「へえ、なかなか様になってるわね」

俺は今アリスの家に来ている。

この前行った人形劇の礼としてアリスが俺の服を作ってくれて、それを受け取りにきた。

そこにはいつものように魔理沙とパチユリーもいた。

今回作った服は2人も協力しているようだ。

ちなみに、神綺はもう幻想郷にはいない。

人形劇を見た後、魔界から使いが着て半ば強制的に連れ戻されたようだ。

あの神綺にそこまで強く出れる人がいるとはすごいなと思った。

「で、これがあなたが向こうの世界で着ていた【戦闘服】ってわけね？」

「ああ、懐かしい感覚だ」

パチュリーが言った戦闘服、それは俺が学園都市で仕事の時に着ていた物だ。

この服の元にしたのは、シャットアウラ達黒鴉部隊が使っているボディスーツに似た形状だが、あつちより柔軟性などに優れた素材を使っている、防御力も機動力も上だ。

で、少し見た目を変えて、色も元は暗い色合いだったが、こっちは白や青を基本にした明るいものだ。

これなら普段着としても違和感はないはず。

「動きやすい素材で作ったし、魔法をかけながら作ったからちよつとやそつと弾幕じゃ傷つかないわよ」

アリスが言うように、柔軟性があつて結構頑丈に作られているな。

以前美鈴とパチュリーが作ってくれた身代わり魔法がかかったマフラー、あれと似たような魔法を使つて作ってくれたみたいだ。

「見た目的には普段着としても着られるし、何かあつた時にも十分対処できるわ」
「戦闘服なんて、ちよつと大げさかもしれないけどな。幻想郷でもさ」

魔理沙が言うように、戦闘服と言うものは誰ももっていない。

危険な妖怪がたくさんいる幻想郷でも、みんな普段着で退治したりしている。

人里にいる妖怪退治屋は別だけだ。

「でも、あなたは別。幻想支配があるとはいえ、すぐに無茶して大怪我しちゃうんだもん。これくらいは備えは必要よね」

アリスが睨むように言うのと、パチュリーがウンウンと頷いている。

備えあれば憂いなしとは良く言うからいいけど、何か納得いかない部分があるな。

「うん。ありがとな、アリス。それに魔理沙とパチュリーも」

「礼はアリスだけにいいな。私とパチュリーはアリスに頼まれて少し手伝っただけだぜ」

「そうそう。今回はアリスが物凄く頑張ったんだから大事にしなさいよ」

「ちよ、ちよつと!」

ニヤニヤしながら魔理沙とパチュリーに言われ、アリスは顔を赤くした。

うん、照れくさいんだろうな。

「シャンハイ!」

「ホウライ!」

「お、2人共褒めてくれてありがとな」

上海と蓬莱が俺の周りをパタパタしながら回っている。

何を言っているのかまでは分からないけど、この服が似合っつてると言ってくれてるのは分かる。

アリスの家で昼食を御馳走になった後、俺は人里へと向かった。今日は寺子屋の仕事はないけど、買い物をして帰ろうと思った。

魔理沙には、せつかくだから梨奈達に見せてこいって言われたけど、そこまでの事じゃないけどな。

森を抜けかけて、人里が見えてきた時の事だった。

——……っ………%、& ……

「ん？　なんだ？」

微かに頭に響く声のような、ノイズのような音が聞こえてきた。

「あっちは、竹林か」

迷いの竹林へと進むと、ノイズは段々と酷くなってきた。

そして、竹林に入ると収まってしまった。

「何だったんだ、今の」

言語なのかそれともただの悲鳴なのか、それすら分からない程のノイズだったが、この竹林に向けて誰かが放ったか、あるいはこの竹林から発せられているのは間違いない。ここに入るのはてゐや妹紅からは止められているが、何か今のは気になる。

特に気になったのが、今のノイズが科学的なものに感じた事だ。

魔術師同士の念話や遠距離通信の類ではなく、念波を利用した暗号通信の類に似ていたけど、はつきりと聞こえないので結局はよく分からない。

しばらく進むと、竹林の奥に何者かの気配がした。

誰かいる。

息と気配を殺し、慎重に進む。

その人物は、ブレザーを着てウサミミを生やして俯く俺と同年代くらいの女の子だった。

ウサミミと言っても、ここで出会ったてゐ達とは違い、尖がった耳をしている。

それにあの着ているブレザー。

人里は和服中心とはいえ、洋服を着ている人も多い。

それでもあのブレザーはどこか幻想郷でも浮いているように見えた。

それ以上に気になったのが、あの子が何かに怯えているようで、真つ白な顔をして震えている。

「いやっ……いやだ……」

かと思えば、ブツブツと呟き耳を抑えて座り込んでしまった。

それを見て放っておくことが出来ず、つい声をかけた。

「おーい、ちよつとそこのウサミミさん？」

「っ!? だ、誰!？」

声をかけると、ウサミミ娘はビクツとその場を飛び抜くほどに驚いたが、そこからの行動に今度は俺の方が驚いた。

何と、彼女は懐から拳銃を取り出して俺に向けたのだ。

拳銃自体を突き付けられるのはなれてはいるけど、幻想郷に来て初めての事だ。

そもそも、拳銃など危ない武器は紫が回収しているはずだ。

けど、ウサミミ娘が持っているのは、型式は少し古いが、玩具などではない本物の自動拳銃だ。

しかも、彼女は表情こそ驚いているが、懐に手を伸ばし拳銃を出して向ける動作を油断も隙もなく一瞬で済ませた。

間違いないく、彼女は拳銃をかなり使いなれている。

構え方にしても、軍人のような俺のような暗殺者のような構えだ。

自然に手が腰に差したナイフへと向けられる。

彼女が何者なのかは分からない。

ただ1つだけ言えるのは、彼女は凄く強い。

アリスやパチュリーのように強大な魔力をもっているわけでもなく、妖夢や美鈴のような武術の達人でもなく、紫や神綺のように圧倒的な力をもっているわけでもない。

ただただ、彼女は強い。しかも、俺と同じタイプの強さだ。

たった数秒だけで俺はそう感じた。

命の危機や、凶悪な敵とは幻想郷でも対峙したが、それは別の懐かしい感覚だ。

「答えなさい。あなたは一体何者？」

反応を見て彼女も同じ事を思ったのか、怯えた表情はどこにもなく、真剣な表情で俺を警戒している。

「俺は、ユウキだ。里に向かう途中で、たまたまた通りかかっただけだ」

ウソは言っていない。

「そう。でも、見られた以上黙って帰すわけにはいかないわね」

彼女は銃を向けたまま、目を瞑り開けた。

開いた瞳はルビーのように赤く輝いている。

それを見た途端、意識が飛びそうになった。

「なっ、なんだ？」

身体全体が底なし沼にハマったような感覚。

それでいて意識が乱されて、溶かされていく。

これは、精神攻撃、か？

でも、みさきちとも他の洗脳の類とも違う。

——このまま見た事を忘れて戻りなさい。

赤眼のウサミミ女の声が、心に突き刺さるように浸透して行く。

ダメだ。このままじゃ……コイツを殺さなければ。

「シッ！」

「っ!?!」

腰に差したナイフを抜き、ウサミミ女の首へと振う。

間一髪、ウサミミ女は、敵は首を後ろにそらしてかわした。

「くっ、やはりお前は！」

敵は、拳銃を構え撃とうとしたが、それより早くナイフを投げる。

ナイフは銃口に突き刺さった。

「何っ!?! ちっ！」

敵は、拳銃を投げ捨て大きめのナイフを取り出し両手に握った。

あれは、コンバットナイフか。

「やっ！」

敵はナイフを素早く連続で突き出してきた。

急所を狙った攻撃はなかなか速く、1本では裁き切れなくなってきた。

わざと体勢を崩し、地面を転がりながら敵が捨てた拳銃に刺さったままのナイフを抜

いた。

「くっ」

それでも敵は執拗にナイフを突き出してくる。

けど、今は俺も2本持っている。

落ちついて刃先を見定め、自分のナイフを滑らせていく。

数合渡り合つて分かったが、ナイフの材質はこつちが遙かに上だ。

向こうは恐らく外の世界の一般的なコンバットナイフ。

けれども、こちらは特注のナイフだ。

しかも、俺が扱いやすい形状になっている。

そんな得物で打ち合った結果はすぐに出た。

——ガキンッ！

「ちっ、これだから外の世界のナイフは！」

敵のナイフが欠けた。

それを見て敵は、こちらにナイフを2本とも投げつけて、竹林へと駆け出した。

「……」

投げられたナイフの柄を掴み、敵へと投げ返す。

「うそっ!?!」

それを見た敵が驚愕の声をあげ、近くの竹を盾にして防いだ。ただ投げられた程度のナイフ、再利用する事はたやすい。

咲夜のように何本も投げつけるか、霊力や魔力を纏わせられれば無理だが。

「これだー」

密集した竹の裏から敵は、なんと短機関銃・ウージーを手にしていた。

流石にアレはまずい。

近くの岩影に転がり込む。

——バババツ！

連続して発射された弾丸は、隠れた岩を容赦なく削り取って行く。

ウージーの威力は低い、それでも人を殺すには十分であり、何より連射力が厄介だ。

武器はナイフ2本のみ、しかも敵の能力が分からない以上、幻想支配で視るのは最後の手段にした方がいい。

自分と敵の状況を確認して、使えそうな物の配置を瞬時に計算した。

敵が再装填する瞬間を狙い、俺は岩影から地面を這うように駆け出した。

「そー」

竹林を蹴り上がり、宙を奔る。

ここにある竹は俺が知る普通の竹よりも太く、どれも弾力性が高い。

これなら足場にして空中を走るように動ける。

「落ちなさい！」

敵は、空中を駆ける俺に驚いたが、それも一瞬ですぐに俺に向けてウージーを乱射した。

やはりこの敵、戦闘にかけては冷静で判断力や適応力も高い。

ますます俺と同じタイプだ。

「っ?! 弾切れ！」

とうとう予備の弾倉も使いきったようで、敵はウージーを投げ捨てた。

その隙に俺は三角飛びの要領で竹を蹴り跳び、敵の背後へと回り込み首筋へナイフを振った。

「なめるな！」

だが、敵は振り向きざまにナイフを持った手を掴み、関節技に持ち込もうとした。

即座に技を外して、背中を蹴った反動で距離を取った。

「ぐっ、この程度」

と、見せかけて背後の竹に乗り、その反動を利用して再度強襲を駆ける。

だが、敵はそれを呼んでいたようで、いつから持っていたのか新しいナイフを構え俺の攻撃を受け止めた。

「今度はさっきのようにはいかない！」

このナイフは形状こそ、サバイバルナイフだがさっきのとは材質が全く違う。

これはさっきのように欠けさせるのは難しい。

「しっ！」

再度右手のナイフを振ったが、敵は左逆手にもったナイフで受け止めると右拳で殴ってきた。

咄嗟に左手のナイフを離し、受け止める。

ほぼ密接した状況で打った拳なのに、かなり重たい。

「くっ、ぐぐっ」

このまま握りつぶそうかと思ったが、なかなか頑丈な拳だ。

そして、そのままがちりと絡みあう状態になった。

敵は俺のナイフを自分のナイフで受け止め、俺は敵の拳を左手で握っている。

「やっ、ぐぐっ!?!」

俺が敵の腹を蹴り飛ばすのと、敵が俺を蹴り飛ばしたのはほぼ同時だった。

「けほっ、けほっ」

「は、はっ……」

互いにお腹に突き刺さった蹴りはダメージとなったようで、咳き込んでしまった。

——バンッ!

まだ咳き込みつつも、敵が懐から銃を取り出し俺に撃ってきた。

咄嗟にナイフで弾き飛ばした。

普通のナイフだったら危なかっただろう。

コイツ、やはり軍人か暗殺者の類だな。

「はっ、はっ……やああ!」

——バンバンバンッ!

敵は銃を撃ちながらこちらへ突撃してきた。

俺もナイフで弾きながら敵へと向かっていく。

敵の射撃は、俺と同じくらいの正確さだったが、それが逆に狙いを分かりやすくさせて何とか防ぐ事が出来る。

最も、一発防ぐ度に衝撃で手が痺れてきた。

それでもナイフを弾き飛ばされたと同時に、俺は撃たれ殺されてしまう。

ようやく、と言つてもほんの1、2秒の出来事だったが、こちらの間合いへと詰め寄る事が出来た。

「ハッ!」

この距離は近すぎて拳銃は使えない。

それは敵も分かっているのです、左手に握ったナイフを振って来た。

紙一重で攻撃をかわし、しゃがみこむ様にして敵の足を薙ぎ払うように蹴った。

だが、その攻撃は敵が足をあげた事で空を切った。

更に敵は後方に飛び跳ねながら、銃を撃ってきた。

しゃがんだ体制だったので、動きがワンテンポ遅れた。

銃弾はかろうじてナイフで防いだが、弾き飛ばされてしまった。

「っー」

どうにか近くの密集した竹に身を隠し、近くに落ちたナイフを運よく拾えた。

しかし、敵は走って遠くの竹に身を隠した。

再び距離が開いてしまい不利になった。

竹を飛び跳ねて接近するしかないが、敵はそれを読んでいるだろう。

こちらも拳銃か飛び道具が欲しい。

そう言えば、敵は先程から妙に色々な武器を手にかけている。

あのブレザーのふくらみから見て、最初に持っていた拳銃とナイフ以外は隠し持って

いないと思った。

しかし、あのウージーや材質の違うナイフ、更にもう一丁別の拳銃も今敵は手にして

いる。

恐らく、竹かどこかに隠しているのだろう。

そう思い、自分が隠れた竹の根元を見てみると、違和感があった。

その竹には割れ目のような細い線が走っていた。

これは自然に出来た割れ目とは違う、明らかに誰かが加工した。

敵が再度銃撃をしながらこちらに走ってきている。

割れ目にナイフを刺し込み強引にこじ開けた。

すると、中にはリボルバー拳銃が入っていた。

ここら辺の竹はかなり幹が太いたためこんな大きい拳銃も隠せたのだろう。

右手で拳銃を取り出し、敵に向けて撃つ

——ドガンッ！

「きゃっ!?!」

敵は俺が銃を持ってしている事に驚き、一瞬立ち止まってナイフで防ごうとした。

だが、これはただの拳銃ではない。

マグナム銃、コルトパイソンだ。

その威力は高く、防ごうとしたナイフは大きく弾き飛ばされ、思わず敵は片手を抑え

ながら近くの岩影に隠れた。

そういう俺も久々にマグナム銃なんぞ片手で撃つたので、流石に少し痺れた。

左手にマグナムを装備し直す。

右手の痺れはすぐに収まったので、ナイフを握る。

敵も、呼吸を整えているのか隠れた岩から出てこない。

先手を取ろうと飛びだそうとしたのその時だった。

——カランカランッ、カッ！

足元に手榴弾が投げ込まれ、眩い光を放った。

続く

第114話 「刺客」

私、鈴仙・優曇華院・イナバは月の脱走兵だ。

月では綿月豊姫様と綿月依姫様のペットとして、また月の兵士としての厳しい訓練を受けてきた。

月の兎の中でも、私は特に戦闘力が高いと評判だった。

だけど、いざ地球から侵略者が来て戦争になると聞き、仲間達が死んでいくのが怖くなって、気が付いたら私は月から逃げだしていた。

私は穢れた地上に降り立ち、昔この地へ追放されたと言う月の賢者八意永琳様と蓬萊山輝夜様の元へと向かった。

脱走兵としての自分をどう迎えてくれるか心配だったけど、そこしかもう行く場所がなかった。

私の不安をよそに、お2人は私を暖かく迎え入れてくれた。

こうして私は幻想郷の中にある迷いの竹林、その更に奥にある永遠亭に住んでいる。この竹林は普通のよりも太くしなやかな竹が空を隠すほどに茂っている。

更に、この中では入った者の方向感覚を狂わせ、二度と出られなくなる迷宮となって

いる。

月の罪人であるお2人や、脱走兵の私が隠れるにはちようどいい場所だ。

それに輝夜様は竹に思い入れがあるようだし。

こうして私は、永遠亭の一員となり、八意永琳様の元に弟子入りをした。

永琳様、御師匠様は厳しくも優しく主に薬学や医療系の知識を私に教えてくれた。

でも、変な薬の実験台にされるのは勘弁して欲しい。

輝夜様、姫様は外に出られない事を常日頃窮屈に思っていて、いつも私を遊び相手や

話し相手に誘ってくる。

そして、元々この竹林に住んでいて主でもある因幡てゐる。

彼女は私よりもはるかに年上なのに、子供のように私に他の兎達と一緒に悪戯を仕掛けたり弄んだりしてくる。

この3人と地上の兎達のおかげで、私は月での生活以上に毎日が楽しくて笑えている。

そんな毎日がずっと続くと思っていた。

ある日、突然私に月からの通信が入った。

——モドレ、モドレ、モドレ。

私が脱走してから一度も頭に響かなかつたのに、なぜか急に通信が届いた。

——次ノ満月ノ夜ニ帰還セヨ。迎エヲ出ス。

「えつ、ちよつと待つて下さい！ 次ノ満月つて、3日後じゃないですか！」

次ノ満月は3日後、もう猶予はない。

せめてその次ノ満月まで待つてもらえないかと伝えたが、通信はそれから絶えてしまった。

「……どうしよう」

月から迎えが来る。

私を迎えに来るだけならまだいい。

脱走した時から、いつかは来るかもしれないと覚悟はしていた。

でも、今は、御師匠様と姫様がここにいる。

2人も見付かってしまったら、どうなるか分からないけど間違いなく言えるのは2人にも、てる達にも迷惑がかかる。

だから、月の迎えが来る前に私が月に帰るしかない。

そう思っていた。その時だった。

「おーい、ちよつとそこウサミミさん？」

「っ!? だ、誰?！」

人が来るはずのないこの場所で、いきなり声をかけられ咄嗟に懐に仕舞っていた拳銃

を向けてしまった。

私に話しかけてきたのは、人間の男だった。

妖怪とは違う。人里の人間かと思ったが、男の服を見て一瞬だが驚いた。

男が着ているのは月の上層部直轄の特務部隊の服によく似ていたからだ。

白と青を基本とした、特徴的な作りの戦闘服。

もしかして、ここに私がいるのを確認しにきた偵察？

私がさっきの通信を受信したせいで、探知されて位置を知らせてしまった!?

マズい。このままだと御師匠様達が危ない。

でも、本当にただの人間かもしれない。

「答えなさい。あなたは一体何者？」

「俺は、ユウキだ。里に向かう途中で、たまたまた通りかかっただけだ」

彼は少し驚いた表情を浮かべたけど、それもすぐに消えた。

言っている事に嘘は感じない。

けれどもあの特務隊なら、これくらいの演技は出来る。

まあ、演技するくらいなら、特務隊の服を堂々と着てたりはしないかもしれない。

しかし、いくら動揺していたとはいえ、私が気付かずにここまで接近を許すなんて、

ダメものじゃない。

この男が誰であれ、こここの事を忘れてもらうしかないわね。

「そう。でも、見られた以上黙って帰すわけにはいかないわね」

私は能力を男に向けて、発動させた。

私の能力は【狂気を操る程度の能力】

普段は抑えているけれど、私の赤い瞳を直視した者は波長を狂わされて幻覚を見る。

それを利用して催眠状態にして、自分がどこにいたのかを忘れさせる事が出来る。

もうこの男は、正常な意識を保てず、私の言うがままに操れる。

「このまま見た事を忘れて戻りなさい」

これでこの男は、ここでの事を忘れて戻るはず。

と、一安心したのがまずかった。

「シッー」

「っ!?!」

咄嗟に半歩退いた私の目の前に、銀色の光が一閃された。

男はどこか取り出したのか、両手にナイフを握っていて、私の首を狙って振ったのだ。

首は撥ねられなかったが、空を斬ったナイフが前髪をかすめたのか数本髪が舞っ

た。

それに対する怒りよりも先に、戦慄が走った。

今の攻撃をかわせたのは、ただの偶然だった。

一般人だと決めつけて油断したのがいけなかった。

この男には私の能力が効かなかった。

月でも私の能力が効かない相手は限られてくる。

つまり、コイツは私を探す為に来た特務隊だ。

命令を聞いて私が帰還するかどうかと確認しに来て、私が能力を使った事で帰還の意思がないと見なされて、暗殺に移行したのだろう。

恐らく、最初は誤魔化す為に通りかかっただけのフリをして、反応を見たのだろう。

些か腑に落ちない点があるけれど、この場所を知られて、尚且つ殺す気で来ている以上、私も覚悟を決めてここでコイツを殺すしかない。

「くっ、やはりお前は！」

体勢を立て直しつつ、拳銃を撃とうとしたがそれより速く敵がナイフを投げってきた。

そのナイフは見事に銃口に突き刺さった。

もうこの拳銃は使えない。

私も懐からナイフを2本取り出し、敵に向けて突き出した。

私の素早い攻撃も敵はナイフ一本で的確に裁いていったが、流石に1本では厳しくなってきたのか、すぐに先程銃口に投げたナイフを拾いあげ反撃に転じてきた。

ナイフとナイフがぶつかり合う度に火花が散って行く。

マズイ。相手のナイフの方が硬い。

このままだとすぐに……

——ガキンッ！

思っていた通り、私のナイフが欠けた。

「ちっ、これだから外の世界のナイフは！」

さっきの拳銃も今欠けたナイフも、元は幻想郷の無縁塚と言う、外の世界からの異物が落ちてくる場所で拾ったものだ。

あそこは外の世界の色々な古い物が落ちていて、中には武器などの物騒な物まであった。

時折半妖の男や、魔女が拾ったりしているが、私も武器を探しに行っていて拳銃やナイフなど古い型のばかりだけど拾っていた。

そして、万が一の為に武器をこの竹林の至る所に隠していた。

それは私を追って来た敵を殺す為だ。

私はどんな事があっても、永遠亭のみんなを守ると決めたんだ。

その時が、今やつと来た。

しかし、敵の装備が月の物だとするならば、外の世界の遅れた武器ではかなり厳しい

かもしれない。

現に今も、材質が不明なナイフに外の世界のナイフが負けた。

それでも、まだ私が負けたわけじゃない。

すぐに欠けたナイフを敵に投げつけて、竹林の奥へと駆け出した。

敵は冷静に投げられたナイフをかわして、私を追って……いや、違う！

あろうことか、敵は私が投げたナイフを受け止めて、投げ返してきた。

「うそっ!」

自慢ではないが、私のナイフ投げは依姫様にも褒められた程うまいはず。

ここに逃げ込んでからも密かに訓練していて、腕は落ちていない。

なのに、簡単に投げ返された。

やはり特務隊は玉兎とは次元が違うわ。

それでもどうか目的の竹林を盾にして凌いだ。

この竹の根元に隠していた武器の1つがある。

素早く根元の節を蹴り、割れた中から武器を取り出す。

この武器の名は、ウージー。

外の世界では短機関銃と呼ばれる、小型のマシンガン。

これでハチの巣にしてやる。

「これでー」

ウージーを見た敵は咄嗟に近くの岩影に隠れた。

良い判断ね、でも！

——バババツ！

連続して発射された弾丸は岩を削って行く。

この幻想郷では、弾幕ごっここという決闘のルールがある事は、てゐや御師匠様から聞いている。

自分の力を弾丸にして撃ちだして、相手を殺さずに美しさを競い合う決闘。けれどもこれは決闘じゃない。

殺すか殺されるかだ。

私の能力を知っているであろう、この特務隊相手ならかわされるだけだ。

だから私は外の世界の武器に頼る。

私の弾幕は威力があっても、この武器に比べたら弾速と連射力は下だ。

それに弾幕は色が付いていて目立つから、避けられやすい。

最も、だからこそその弾幕ごっここという決闘なのだろうけど。

「そっつー！」

敵は隠れのを止めて、竹を蹴り上がって宙を奔った。

正直、驚いた。

敵はしなる竹林を足場にして、空を駆けている。

「落ちなさいー！」

でも、だからどうした。

自分でもこの場面ならそうやって回避する。

密集した竹林の中では、下手に地面を走ったり空を飛ぶよりも、しなる竹を最大限利用した方が断然速い。

ならばこちらは文字通りの弾幕を張って、敵のゆくてを阻めばいい。

しかし、肝心な時にウージーから音が消えた。

「っ!? 弾切れー！」

連射力は高いが、その分すぐに弾が切れるのが外の武器の欠点だ。

予備の弾倉もあつたが既に使いきつた。

元々拾つた武器には予備の弾はほとんど手に入らなかつた。

なのですぐに私はウージーを投げ捨て、近くの竹に隠した武器を手を取つた。

その隙について、敵は私の背後に回り込んでいた。

「なめるなー！」

私はナイフを持った敵の手を掴み、関節技を決めて骨を折ろうとした。

しかし、それより先に技を外され反撃とばかりに背を蹴られ、反動で距離を取られた。「ぐつ、この程度」

こちらにも反撃しようとしたが、敵は背後にあった竹を蹴り反動でナイフを振って来た。

それは読めていたのでこちらもナイフで受け止める。

「今度はさっきのようにはいかない！」

私が手にしたのは、脱走する時に持っていた月のナイフだ。

外のナイフと違い、簡単には砕けない。

「しっ……」

ナイフとナイフ、拳と拳がぶつかり合う。

敵はナイフだけじゃなく格闘もかなり得意なのだろう。

ほぼ密接した状況で放たれた拳は、思っていたよりもかなり重い。

均衡した状況の中、相手の顔を再度見た。

「……」

やっぱりこいつ、一流の暗殺者だ。

その表情は無表情、と言うよりは何も読めない。

すぐ近くににいるのに、そこにいない感覚。

気配も感情も何もかもとけこませて、消している感じた。

これじゃ強く相手を意識しなきゃ、すぐに見失ってしまう。

こんな奴を御師匠様や姫様の元へは行かせられない。

てゐや他の兎達じゃすぐに皆殺しにされる。

そんな事、絶対にさせない！

私はもう、絶対に逃げない!!

「やっ、ぐふっ!」

ほぼ同時に蹴りを腹に食らわせ、2人揃って後ろに吹き飛ばされた。

「けほっ、けほっ」

「は、はっ……」

助走もなしになんて鋭い蹴りを放つのだろう。

これじゃ武器なしでも拳や蹴りだけで相手を暗殺できる。

相手も私の蹴りが決まったようで、軽く咳き込み息を整えている。

今しかない。

私はさつき手にした銃を懐から取り出し、相手に向けて撃った。

今ならかわされない。

——パンッ!

だが、敵はあろうことかナイフで銃弾を弾いてしまった。なんて動体視力に反射神経、それにナイフの強さだろう。

普通ナイフで弾いたら、腕がしびれてナイフを手放すか、刃が欠けるのにそれが無い。月の銃より数段劣るとはいえ、それなりに速い弾速の拳銃ですら弾かれるんだ。

それより遅い私の弾幕じゃ、使うだけ無駄だ。

「はっ、はっ……やああー！」

——パンパンパンツ！

ならば、拳銃でけん制しつつナイフで仕留めるしかない。

敵もナイフを盾にこちらに駆け出してきた。

ほんの1、2秒の間に間合いは完全に詰められた。

この距離じゃ拳銃は意味がない。

「いのっー！」

ナイフを使った格闘術でどうか相手の隙を作り、拳銃でナイフを弾き飛ばせた。

敵は素早く近くの密集した竹林の影に隠れた。

こっちは弾が切れたので追撃よりも補充する方を選んだ

少し離れた竹林の影に隠れ、急いで武器の補充をした。

ここには別の拳銃の他に閃光弾も隠してある。

でも、ここの銃はデリンジャーと言って、小型で弾も一発しかない。慎重に狙わないといけない。

デリンジャーを手にまた駆け出す。

と、そこで私は嫌な予感がした。

さつき敵が隠れた場所にも、武器を隠したのではなかったか？

もし、それを見つげられたら？

私の予感はすぐに当たった。

——ドガンッ！

「きゃっ!？」

敵は隠していた武器、マグナム銃を手にして私に撃つてきた。

咄嗟にナイフで防いだけど、今度は逆に私の方のナイフが弾き飛ばされた。

まずいと、岩影に隠れる。

相手に追撃の隙を与えるわけにはいかない。

呼吸を素早く整えて閃光弾を相手に投げつけた。

——カランカランッ、カッ！

「!？」

敵は咄嗟に目を塞ぎ腕で閃光を防いだが、隙は出来た。

最初から目を瞑り手で覆っていた私の方が早い。

そう思い、岩影から飛びだし銃を敵に向けた。

——ドンッ！

「キヤッ!？」

なんと、敵は私の銃を正確に撃ち落とした。

闇雲に撃つてまぐれで当たったわけじゃない。

光でこつちが見えないはずなのに、私の足音だけで銃を撃ち落とした。

しかも、マグナム弾の反動で銃を持っていた左手がやられた。

でも、相手はマグナムを撃ち尽くした。

敵は弾切れのマグナムとナイフしかない。

ナイフは今すぐ振われても私に届く前に攻撃できる。

勝機はいましかない。

「いつ、のー!」

これだけ近ければ、私の弾幕でも避けられず致命傷を与えられると思い、右手を指鉄砲の形にして撃った。

——バシユッ!

「……えっ?」

最初は何が起きたのか分からなかった。

気が付くと、私の右足は撃ち抜かれていた。

それも、私の弾でだ。

なんと、敵の両手は私と同じく指鉄砲の形をしていて、そこから私の弾が放たれたのだ。

「がつ、ぐぐつ」

痛みを堪え地面を転がりながら竹林の影に隠れた。

隠れながら様子を窺うと、どうやら私が撃った弾も敵には届いていたようだ。

敵は右のわき腹を抑えている。

しかし、直撃ではなかったようで血はあまり出ていないように見える。

対してこつちのダメージは大きい。

右足はもう使えない。

この付近の武器は使い果たした。

残った武器がある場所は敵を挟んだ向こう側。

もう、弾幕で攻撃するしかない。

でも、なんで敵は私と同じ力で、私と同じ弾を撃つ事が出来たのだろうか？

それを考えるよりも先に、敵が動いた。

こっちは痛みのせいで思うように動けない。

鈍っていたわけじゃないけど、実践不足が響いてきたわね。

こうなったら、一か八か接近させてカウンターで弾幕を当てるしかない。

スペルカード、てみから聞いた弾幕ごっここの真骨頂、必殺技とも言える技。

これをぶつけて、殺すしかない。

敵が私の能力を知っていて指鉄砲の事を知っていたとしても、この攻撃は予測できないはず。

この攻撃は、私がおこへ来てから出来るようになった攻撃だ。

——ガサツ！

竹林に隠れた私の前に、敵が走ってきた。

動けない私にトドメを刺そうとしている。

今だ！

——イリユージヨナリイブラスト

目から放つ深紅の光線。

これは波長を操る能力の応用版。

武器を失い、追い詰められた時の為のとおき。

これだけ近くにいる、不意をつけるこれなら確実に仕留める事が出来る。

そう、思っていたのに……

——シュツ！

「なっ!?!」

敵は首を傾げるだけで、光線はかすめただけだ。

タイミングも位置も完ぺきのはずだった。

完全に不意をついたはずなのに、敵はこの攻撃を読んでいたかのように簡単によけてしまった。

「なんで……えっ?」

敵を良く見ると、さっきまでとは違う何かを感じた。

まるで、私が目の前にいるかのような錯覚。

それに、あの目、さっきまであんな色はしていなかったはず。

今は綺麗な銀色の目をしている。

敵の目に少し見惚れてしまった。

その間にも、敵は左手を私の頭に向けて弾を撃とうとしていた。

「あっ」

私の眼は敵の銀色の目に吸い込まれるように魅入られ、それせなかった。

これは、やられる。

——ザクツ、バシユツ!

「えっ?」

何度目か、私の目に驚愕の光景が映った。

なんと、敵は右手にもったナイフで自分の左手を刺して、私への攻撃をそらしていた。おかげで撃たれた弾は私の横、隣の竹を貫いていた。

「えっ、あつ……っ!」

呆気にとられたが、それでもこれは最後の好機だった。

——ダダンツ!

私は右手に力を籠めて、敵を撃った。

今度こそ私の弾は敵に直撃した。

敵の身体は小さく爆発して、吹き飛んだ。

「っ、はあ、はあ……か、勝った」

いや、まだだ。

爆発はしたが、敵はまだ生きています。

確実に仕留める為に、立ち上がった所で。

「うわあああ……!!!」

「がふっ!?!」

突然、黒い竜巻が私を吹き飛ばした。

地面に激しく叩きつけられ、血がこみあげてきた。

「よくも、よくもユウキさんを！」

「な、なに……？」

黒い風は、右手に団扇を持って大きな黒い翼を生やした少女となった。

あれは確か、天狗と言う種族だったはず。

その表情は憤怒、目は殺気に満ちている。

「絶対に許さない。バラバラに切り刻んで……っ!？」

と、そこへ今度は数本の青い矢が天狗に向けて飛んできた。

天狗はその場を飛びのいた。

その青い矢には見覚えがあった。

「うどんげから離れなさい」

「し、ししよ、うっ。」

その声は御師匠様、八意永琳様だった。

その側には、半泣きの一匹の兎、お京の姿もあった。

御師匠様は弓を構えながら、私の側へとやってきた

そして、胸元から血を流す男を挟んで、天狗と対峙した。

「邪魔をするなら、まとめて殺す！」

「そうはさせないわ」

天狗が団扇を振おうとしたが、それより早く師匠が先程よりも多い矢を一斉に放つた。

「それはこつちのセリフだ！」

——ゴオオ！

その矢は天狗に届く前に、炎の鳥によつて焼き尽くされた。

炎の中から現れたのは、藤原妹紅。

彼女は男の側に降り立つと、倒れた男の姿に驚愕し、天狗に負けないほどの憤怒の表情を浮かべこちらを睨んできた。

「ユウキ……オマエラ……文、やるぞ！」

「ええ！」

文と呼ばれた天狗は、男を守るように妹紅の隣に立ち身がまえた。

一瞬即発、殺気が渦巻く中で、また新しい声が2つ聞こえた。

「待って、鈴仙ちゃんも御師匠様も待って!!」

「妹紅！ 文も止め！」

「てゐる？」

その声はてると上白沢慧音だった。

「慧音、止めるな」

「巻き込まれるわよ？ それよりユウキさんを早く安全な場所へ連れてって」

妹紅と文は2人を一瞥しただけで、すぐに私と御師匠様を睨んだ。

どうやつても私を殺す気みたいね。

意識が朦朧としてるけど、私も戦わないと……

「うんげ、あなたは動いてはダメよ！ あ、待ちなさいお京！」

気が付けば、お京がああ男の元へ駆け出していった。

御師匠様が呼びとめるも、お京は目に涙を浮かべて文と妹紅の前に立ち、両手を広げた。

「お前……どけ」

「ころしますよ？」

「だめ、おにいさんも鈴仙ちゃんもみんなころしちゃ、ダメ！」

普段おとなしく声を荒げる事がないお京の叫びに、私と御師匠様は驚き目を丸くした。

しかし、それよりも驚くべき事が起きた。

「……文、妹紅、やめて……くれ」

「っ!! ユウキさん!」

「ユウキ!」

「ユウちゃん!」

倒れこんでいた男が、胸元を真つ赤に染めながらも立ちあがって、私達を庇う用に両手を広げ天狗と妹紅と止めようとしていた。

こちらにちらりと顔を向けたが、その顔は心底申し訳ないと言う表情を浮かべていて、さつきまでの彼とは別人のようだった。

「ば、馬鹿! 寝てろ! その傷で無理するな!」

「そうです。今すぐお医者さんへ運びますから!」

「ユウキ君、その身体で起き上がるな!」

倒れこみそうになった彼を見て、妹紅も天狗も慧音やてゐまで血相を変えた。

「妹紅も文も……ダメだ。これは、悪いのは……俺だ。慧音、頼む……霊夢へ、しばらく戻れないって、うまく誤魔化して……く……」

それだけ言い残すと、彼は再び倒れこんでしまった。

慌てて天狗と妹紅が抱きとめる。

もう、彼女達からは殺気は感じられなかった。

御師匠様はそれを見て、深く息を吐いて弓をしまった。

「ともかく、彼を永遠亭に運びましょう。私が治療するわ」

「し、師匠!？」

「その言葉、信用すると思ってるんですか？」

師匠の言葉を聞き、私は驚きの声をあげ、天狗は再び殺気の籠った目で睨んだ。

「どちらにせよ。人里へ連れていくよりは速いわよ。彼を絶対に死なせない。それだけは信じてちょうだい」

「文、ユウキ君を早く治療させないと本当に死んでしまう。彼女の医療の腕は人里とは比べ物にならない。私が保証する。妹紅もそれで構わないだろう？」

「……分かった。文、アイツの腕だけは私も保証するよ」

「お2人がそう言うのでしたら……」

慧音に説得され、渋々文と妹紅は了承したようだ。

けど、私はまだ納得し切れていない。

「しかし、師匠! 彼は……」

「はあく……あなたも少し寝て、頭を冷やしなさい」

「師匠? うっ……なぜ」

師匠はさつきよりも深いため息をついて、私の首に注射をした。

それは麻酔だったようで、私はすぐに意識を失った。

続
く

第115話 「永遠亭」

誰かに見られている感覚で目が覚めた。

と言つてもまだ意識がはつきりせず、まぶたも重い。

幻想郷に来てからこういう感覚は何度目か分からない。

今回、俺をジツと見ているのは誰だろうか。

フラン、チルノ、大ちゃん、こあ辺りかな。

もしくは霊夢や文、咲夜、アリス、美鈴、レミリア、パチュリー……つて候補多すぎ
だろおい！

と、自分にツツコミを入れた所で全部思い出した。

俺は、竹林で出会ったブレザーうさみみつ娘に何かされて、敵と誤認して殺そうとし
たんだった。

で、途中で文と妹紅が来て、てみやお京と呼ばれたうさぎつ娘も来て、ついでに赤青
の人も来て……

「あ、目が覚めた？」

「……んっ？」

自分の状況を思い出していた所で、覗き込んでいた誰かから声をかけられた。

臉をゆっくりと開けると、そこには黒い長髪で着物姿女の子がニコニコしながら俺を見ていた。

和服は人里で散々見慣れたが、着物となるとあまり見た記憶ないな。

それになんか、ひな人形みたいな着物だ。

好奇心の塊と言ったその笑顔は、どこか涙子を思い出すな。

「良かったわ。あなた、丸一日ずっと寝ていたのよ？ あーでも永琳の薬の副作用みないなものだから。でもおかげで傷は治ってるわよ？」

「色々一気に言われても頭に入らない。そんな事より、ウサミミの女の子はどうなった？」

「ふーん、自分の事よりも鈴仙の事を気にするのね。まあ、いいわ。あの子なら大丈夫、あなたより軽傷よ」

良かった。俺よりはマシか。

ってそんな俺の状況を改めて確認する。

アリスが作ってくれた服ではなく、病衣だ。

幻想郷にもこんな服があるのか。

で、身体と左腕に包帯が巻かれているけど、どっちも痛みはないしちゃんと動く。

左腕はあのウサミミっ娘にトドメを刺すのを止める時、ナイフで刺したはずなのに違和感すらない。

それに、ウサミミっ娘の攻撃をモロに受けたはずなのに、どこも痛くないのは少しおかしいな。

「もしもーっし、聞いている?」

「ああ、聞いている。で、ここはどこだ?」

「どこって……そこから話さないとダメなのね。ここは「ユウキ(さん)！」」 あら、時間切れね」

突然襖が開いて、妹紅と文が血相を変えて飛び込んできた。

「よお、文、妹紅!」

「ユウキさーんっ!」

「ぶぎゅっ!」

とりあえず元気に挨拶してみた。

すると、文が目^めに涙^{なみだ}を浮かべて飛び込んできた。

あ、今のでさつきの子、吹き飛ばされた。

「良かった、良かったですよお〜!」

「お、大げさすぎじゃないか?」

「だってだって、最初見た時は血だらけで死んでるって思ったんですよ!」

「ほら、こうやって生きてるわけだし、とりあえず離れてくれないか?」

「あ、あややや。そうでしたね。怪我人相手でしたね」

なんか毎回こんな事してる気がする。

で、ちらりと横を向くと、吹き飛ばされたさつきの子がこつちを睨んでいる。

俺のせいじゃないっての。

「姫様!」

「げっ、永琳」

次にやってきたのは、息を荒くした赤青の変な服を着た女性。

あ、彼女は確かあの時、お京と一緒にいた人だな。

姫つてのは着物少女の事かな。

「姫様、彼は危険だから会うのはダメだと言ったはずですよ」

「大丈夫よ、永琳。散々言ったでしょ、彼は鈴仙を殺そうと思えば殺せたのにそうしな

かった。トドメを刺そうとして自分で自分の手を刺してまで止めたのよ? それに、彼

は妹紅のお気に入りだもの。悪人なわけじゃないじゃない」

「それは分かっています。私が言っているのは、鈴仙の力の影響がまだ残っているかも

しれないから危険だという事です!」

うーん。イマイチ状況が分からないまま盛り上がってるなあ。

「ユウキ、気分はどうだ？」

ポカーンとしていると、妹紅が話しかけてきた。

さつきから俺と文を見て、話しかけるタイミングを測っていたっぽいな。

「ああ、大丈夫だ。痛みもけだるさもない。2人共、心配かけてごめん」

「べ、別にこれくらいいいって。西行妖の時に比べたら軽傷だったの分かってたし」

「またまた妹紅さん、ここに運びこまれてから、さつきまでずっと付きつきりでオロオロしてたくせにい」

「あ、文だつて泣きそうな顔してたじゃないか！」

また俺をスルーして2人で盛り上がってる。

いい加減今の状況教えてくれる人いないのかよ。

「じゃあ、私が教えるよ、ゆうちゃん♪」

呼ばれて横を向くといつの間にかてみるとお京がいた。

「怪我、大丈夫そうだよかったです」

「悪い。怖がらせちゃったな」

あの時、途中から誰かの視線は感じたけど、あれ多分お京の視線だったんだな。

覚えているのは、恐怖に震えながらも必死に俺とウサミミブレザー嬢を守ろうとし

たお京の姿だ。

「ううん、私は平気だよ」

「そっか。早速だけど、ここどこで俺はどうなったんだ？」

「まず、私と京ちゃんが竹林で銃声を聞いて急いで駆け付けると、ゆーちゃんと鈴仙ちゃんが見た事もないほどの殺気を出しながら殺し合いをしているのが見えたの」

さつきからちよくちよく出ている鈴仙つてのは、うさみみブレザーっ娘の名前か。

「で、私達じゃ止めれないのが分かったから、京ちゃんは御師匠様を呼んできてもらつて、私はもこちゃんを呼びに行つたの。で、もこちゃんといちちゃんを連れて戻つたら、あの天狗さんが鈴仙ちゃんを吹き飛ばしてたつてわけ」

そこから先は俺が覚えてる通りつて事か。

それにしても、もこちゃんにけいちちゃんつて……

まあ、あの2人よりも結構年上だしな。

「なるほど。御師匠様つて言うのは、あそこにいる彼女か？」

まだ着物少女と云い争つてゐるな。

文と妹紅も何か言ひ合つてゐるし。

なんだこれ。

「そうそう、八意永琳様。御師匠様は何でもできる凄い人なんだよ。ゆーちゃんと鈴仙

ちゃんを治療したのも御師匠様だし。で、ここはね、迷いの竹林の奥にある永遠亭って言う所なの」

「そっか、竹林の奥に変な感じがしたのは、ここが結界か何かで守られていたからで、てると妹紅が竹林に近付くなつての言うのは、迷うだけじゃなくここに近寄るなつて事だつたのかな？」

俺がそう言うと、シーンとなつてしまった。

これは凶星か。

「驚いたわ。本当にすごい観察眼と洞察力を持つているのね。あ、ごめんなさい。自己紹介が遅くなつたわね。私は八意永琳。鈴仙から色々聞きましたが、今回は弟子の不始末であなたにトンでもない迷惑をかけてしまったわね」

「こちらこそ、俺の不注意で誤解をさせてしまったようで」

鈴仙の能力はあの時、幻想支配で視て全部知った。

狂気を操る能力、本質は人の持つ波長を操るって事だけど、それで他人の認識をずらしたりすることが出来る。

で、俺はその狂気を操る能力をくらつて鈴仙を敵と認識して、殺そうとしたんだ。

久々にスイッチしちやつたな。

俺は、殺すべき敵と認識した相手は、手段を選ばずに徹底的に殺すように訓練されて

いる。

普段は抑えているけど、幻想郷に来てからは3度なった。

1度目はフランの狂気にあてられて、2度目は西行妖を倒す時、そして今回。

西行妖の時は自分でスイッチしたけど、フランと今回は能力の影響とはいえ暴走に近い。

みさきちレベルの精神汚染にもある程度抵抗できる訓練はしていたけど、幻想郷の能力は勝手が違うから簡単にかかっちゃったな。

少し修行した方がいいか。

「全く、竹林には近付くなって言ったのに」

「そうそう。ゆうちゃんデートしよーって呼ぶと良いって言ったでしょ」

理由はどうあれ、竹林に入ったのは俺のミスだからな。

前に注意してくれた妹紅とてゐにはホント申し訳ない。

「ちよつと、妹紅さんどう言う事ですか!？」

「まあまあ、2人共。今は彼の事が先よ。で、あなたの傷は私が治療したのだけど、どうかしら?」

「さっきも言いましたけど、俺は大丈夫。腕も動きまますし」

左腕を上げたり、手を開いたりして全快をアピールした。

すると、永琳は驚いた顔をした。

「驚いたわ。確かに私特製の傷薬は使いましたが、それでももうそこまで回復するなんて」

「俺は元々回復力が高かったですし。ん？ 薬？ あ、もしかして西行妖の時の薬って……」

永琳の特製傷薬と聞いて、もしやと思い妹紅を見ると、気まずそうに顔をそらした。

「ふふっ、気が付いたのね。西行妖の一件は私達も知っているわ。その時にあなたが死ぬ一步手前までの大怪我したのもね。で、その時妹紅がやってきたのよ。死にそうな程の重傷人がいて、助けてほしいってね」

「ばっ、ばかぐや！ それ以上言うな！」

「おやおや？ 何やら気になる情報ですね。さきさき、続けてくださいな」

妹紅は顔を真っ赤にして姫さんを止めようとしたが、記者の顔をした文に逆に止められた。

意地が悪いな文、流石新聞記者。

「でね。その時、妹紅ったら涙を流してこう言ったのよ『絶対に死なせたく奴なんだ。私に出来る事があれば何でもする。だから彼を助けてくれ！』って土下座しながらね」

「あつ、あう、あ……」

「あやややくこれは良い事を聞いちゃいましたね♪」

妹紅の顔が今にも噴火しそうなレベルにまで赤くなつた。

あまり見られない表情で何か新鮮だ。

「私も見た事がない表情だつたから永琳に言つて特製の傷薬を渡したつて訳」

「そうだつたのか。今回の事と言ひ、ありがとうございます」

「気にしないで、私は医者でもあるの。だから重傷人を放つてはおけないわ。直接診る事が出来ないからせめてと思つてね。それと、今回はあの時とは違う薬を使ったわ。あの時のはどんなに瀕死の状態でも治す事が出来る薬だけど、一生に一度しか効かないの。それは妹紅からも聞いたでしょ？」

そう言えば、妹紅が2度目はないつて言つてたな。

「かくぐくやく！ よくもユウキに話したな。しかも、厄介な文にまで知られちゃつたじゃないの！」

「あらあら？ 私はあなたのサポートしただけよ？ これで彼からのポイントはかーなり上がったんじゃない？」

「余計な御世話だ！」

姫さんは小悪魔的な笑みを浮かべて部屋を出て行き、妹紅は顔どころか全身を真っ赤

に燃やして追いかけて行つた。

仲良いなああの2人。

「やれやれ。怪我人の前で騒がないで欲しいわね。それで話を続けるわね。あなたはよほどの重傷から治つたと思つてるようだけど、実際は少し違います」

「ん？ どういう事ですか？」

「確かに左腕は、しばらく動かす事も出来ない程に重傷でした。ですが、それ以外の傷は見た目よりずっと浅かつたのです」

左腕以外が軽傷？

でも、あの時確か胸元は真っ赤になつていたような。

いや、痛みはそれほどなかつたけど、それは麻痺していたからだと思つた。

あれ？ なんできさつきまで楽しそうに妹紅の事をメモつていた文が見るからに不機嫌になつていつてゐるんだ？

「ユウキさんが着ていた服。妹紅から聞きましたが、魔法使いの特製らしいですね？」

「ああ、アリスつていう人形使いが他の魔法使いと作つてくれたんだよ。それが何か？」

「あの服は、とても強力な魔法で編み込まれていました。あなたを守る鎧と言つてもいいほどに頑強にです。おかげで鈴仙の攻撃も最小限のダメージで済んだのです」

「そっか、アリスの服が俺を守つてくれたのか」

実際には魔理沙とパチュリーも手伝ったみたいだけど、ほとんどアリスが一人で作ったと言っていた。

きつと魔理沙とパチュリーは服にかける防御魔法の事で手伝ったんだな。

パチュリーは西行妖の時、美鈴の手作りマフラーにも似たような魔法をかけてくれた事あったし、今回も助けられたのか。

今度アリス達にはお礼しないとな。

「で、なんで文ちゃんは、ゆーちゃんの服の話になると不機嫌になったのかな?」

「文ちゃん!? いやいや、そうじゃなくてですね。別に私は不機嫌にはなっていません」
てゐがウサウサと言いながら悪そうな笑みを浮かべて、文をからかっている。

なんで文が不機嫌なのかは気になるけど、気にしない方が多分いいだろうな。

「あ、そうだ! 文、慧音はここにはいないのか? 霊夢への伝言どうなったか気になるんだけど」

「慧音さんならまた後で来ると言っていました。霊夢さんへの伝言ならあの後すぐにしたみたいですよ。納得はしてないけど、納得はしたみたいですよ」

霊夢さん勘が鋭いから、と苦笑いを浮かべる文。

文や妹紅よりはうまく言いくるめられるかもと慧音に頼んだけど、誰に頼んでもいずれバレるかもな。

「さて、他にも話す事がありますが、今はここまでにしましょうか。今日一日は安静にしていして下さいね。お腹が空いているのなら料理、運びますけど?」

「ありがとうございます。今はいいですよ。少し眠ります」

後遺症はないけど、少し疲れがまだ残っているみたいで少し眠い。

「そうですか、では鈴仙からは後でちゃんと謝罪させますから」

「いえいえ、あの時も言いましたけど、殺す気でしかけたのは俺が先ですから」

「それでも最初にしかけたのは彼女が先ですよ、ユウキさん!」

文はまだ鈴仙の事怒っているみたいだな。

「あはは、思った通り、ゆうちゃんが鈴仙ちゃんの事憎んでるわけじゃなくて良かった

よ」

「向こうが俺を憎む理由はあるけど、俺にはないから大丈夫だよ」

「うん、ありがとう」

「私からも礼を言わせて、ありがとうユウキ君」

2人して頭を下げててると永琳は部屋から出て行った。

文は名残惜しそうにしていたが、部屋を後にした。

山へ帰らなくて大丈夫なのかな、文は。

「あ、そう言えばさっきの姫さんの名前、聞いてなかった」

えっと、妹紅は確かばかぐやって言っていたような……
何か引つかかる名前だけど、ま、いつか。
ひとまず寝よう。

続く

第116話 「かぐや姫」

夕日がまるで今の私の気分のように沈んで行く。

「はあ……」

それを見て、今日何度目か分からない溜息を吐く。

気分もテンションも何もかもが最悪。

昨日、竹林で殺し合いをした男、ユウキさんは月からの刺客でも何でもなかった。

彼はただの外来人、つまり普通の人間だった。

普通の、と言うには納得できない部分は多い。

アレから一晩明けて、お師匠様やてゐ達からその事を聞かされて、私はショックを受けた。

月の者ではないただの人間に、私は殺されかけた。

結果的に、私は彼に勝つたけれど、トドメを刺される瞬間、彼は正気に戻り自分で自分の腕を刺して私への攻撃を止めてくれた。

なのに、それを隙と見て私が攻撃した。

つまり、あの時、本当なら私が殺されていたはずだった。

これでも依姫様に鍛えられて月の兎達の間でも1、2を争う精鋭のつもり、だった。まあ、逃げだした私が精鋭なんて傲慢過ぎるけどね。

それでも人間程度は簡単に倒せると思っていた。

なのに、地上人である彼に負けかけた。

プライド、なんてとつくの昔に無くしたけれども、シヨックなのは変わらなかった。

「ウドンゲ？ 入るわよ？」

「あ、はい。大丈夫です」

お師匠様の声に、我に返る。

いけないいけない。

「具合はどうかしら？」

「もう、すっかり良くなりましたよ」

元々、彼から受けた傷はどれも大した事はなく、お師匠様の薬ですぐに治った。

これも、彼が無意識に手加減してくれたおかげ、らしい。

「そう。それは良かったわ。彼も気にしていたからね」

「彼、あの人間ですか？ 目が覚めたんですか？」

彼は私よりも怪我がヒドイと思っていたのに、もう目が覚めたのね。

「ええ、自分の事よりあなたの事を最初に聞いてきたわよ？ てゐや妹紅達が気にいる

人間だけはあるわね」

「……そう、ですか」

「昨日の事は全部自分が悪い。あなたは悪くないから気にしてない。そうも言っていたわね」

それを聞いて、更に気分が落ち込んだ。

昨日、あの殺し合いの彼は、やはり私の能力で気が狂っていたせい、なのね。

「そんなに落ち込んだじゃって。シヨックなのは分かるけどね。気にし過ぎると彼に氣を使われるだけよ。でも、反省はしっかりしなさいよ」

「はい、分かっています」

落ち込む理由は、彼に負けかけただけじゃない。

目が覚めてから私は、お師匠様だけではなく、てゐやお京、妹紅や慧音先生に散々怒られた。

お師匠様からは、能力を使って人を狂わせる事を禁じられていたのに、それを破った事。

安易に刺客と判断して、人間を殺しかけた事。

それと、黙って外の世界の武器を竹林のあちこちに隠し持っていた事を怒られた。

妹紅さんと慧音先生、それとてゐとお京からは彼を殺しかけた事を怒られた。

特に、てゐとお京に怒られたのが効いたわ。

いつもは悪戯などで私が説教する事はあつても、彼女から怒られる事は、多分初めて。しかも、普段あれほど大人しくて引つ込み思案なお京が、目に涙を浮かべて真剣に怒っていたのには、私だけではなくお師匠様や姫様も驚いていたわね。

「それと、武器は全て回収して処分したわ。月の武器は嚴重に保管してゐるけど、もう使つてはダメよ?」

「はい、すみませんでした」

数時間みんなの説教を受けた後、お師匠様に私が竹林に隠した武器の場所を教えて、回収してもらつていた。

外の世界の武器を隠し持つていたのは、私が思つていた以上に危険な事だったらしい。

更には、月から持つてきた武器までも隠していた事は姫様からもこつぴどく説教された。

曰く、あれが他の妖怪や、人里の人間などに渡つた場合、どんな惨劇を引き起こすか分からない。

事実、昨日彼は私が隠した武器を使って、私を圧倒していた。そのような事が幻想郷のあちこちで起きる可能性がある。

いつか来るであろう月の刺客達を迎え撃つためとは言え、私のした事は浅はかにも程があつたわね。

「もうその事はいいわ。あなたも十分に反省しているようだし。では、本題に入るわね」
そう言うと、お師匠様は暖かい笑顔から一転して、険しい表情を浮かべた。

それ見て、私も沈んだ表情を引き締める。

お師匠様が言った本題は、とても重要な事だからだ。

「ウドンゲ、あなたが月から入った通信。明後日に月から使者が来るのは間違いないのね？」

「はい。間違いありません」

「そう、ならいいわ。この話はこれでおしまい」

「えっ？ ええく!？」

お師匠様は、それで話を終了させてしまった。

さつきまでの真剣な表情はどこへやら。

「お師匠様!?! そんなあつさりとしていいんですか!?! あ、ですよね。私一人を迎えに来るのですから、私がここから出ればいいのですよね」

そう。ここには月の罪人である、姫様とお師匠様がいる。

でも、使者の狙いはあくまで私のみ。

私がいなくなればいいだけの話。

「何を馬鹿言っているの、あなたは」

「あいたつ!？」

そう思っていたらお師匠様に思いつきりどつかれた。

結構痛いです。

「そんな事するくらいなら最初から匿ったりしないわよ。いずれ使者が来るのが分かっていた。だから備えはしていた。重要なのはいつ来るかよ。それが分かった以上、何も恐れる事はないわ」

「備え? 何か対策があるんですか?」

「当然。だから、あなたは深く考え込む事はないわ。ただ、問題はユウキ君とあの天狗ね」

「天狗? ああ、まだいるんですか彼女は」

射命丸文と名乗った天狗は、妹紅と一緒に彼の側を離れずにいる。

私達へのけん制らしいけど、けん制が1割心配で離れたくないが9割とはお師匠様の見立て。

「でも、それは何とかかなりそうだし、それより彼があなたに会いたがついていたわよ? 夕食前に一度話をしてみなさい」

「そ、それは、その……」

本気の殺し合いをした相手にそんな気軽に会えるわけがない。

「大丈夫よ。彼は、あなたに謝りたがっていたし。それに姫様が彼に興味を持ってしまつてね」

確かに姫様なら彼に興味をもちそうね。

あの妹紅があんなにして彼を守ろうとしていたわけだし。

でも、姫様もお師匠様もなんでそんなに簡単に彼を信用するのだろうか。

確かに彼は月の使者ではなかったし、てみや兎達も彼に懐いている。

それでも、危険人物には変わりないのに。

「いいから、気まずい空気のまま一緒に食事するよりはマシでしょう?」

「はい……えっ? 食事?」

「そうよ。怪我が治つたばかりの彼をこのまま出すわけにはいかないでしょう? それ

に備えをしているとはいえ、明後日の事もあるわけだし。勿論妹紅や天狗もね」

お師匠様は一体何を考えているのだろう。

なんにせよ。少しの間とは言え、彼が永遠亭に滞在するのは確定のようね。

それにあの妹紅と天狗は、私を目の敵にしているし。

はあ……憂鬱だわ。

そして、お師匠様に言われた通り、彼がいる部屋まで来た。
恐る恐る襖に手をかける。

「……うん、よしっ。失礼するわ……」「なんでよー!?!」……「よう?」

深呼吸を何度も繰り返して、意を決して襖を開けようとする、中から姫様の怒号が聞こえてきた。

何事かと襖を開け、中に入る。

彼か、もしくは天狗が何かしたのであるか。

「離してよ慧音! こうなったら私の逸話を徹夜で叩きこんであげるわ!」

「待て、輝夜! 気持ち分かる! 分かるから落ちつけ!」

「ぶふっ、あはははははっ!」

「ひいっ、ダメだ。お腹が痛い……あなたやっぱ最高だよ、ユウキ!」

???

部屋の中には、顔を真っ赤にして怒っている姫様と、それを後ろから羽交い締めにして止めている慧音。

何がおかしいのか腹筋崩壊して笑い転げている妹紅と天狗。

それに困惑した表情の彼。

え、えーっとこれは一体どう言う状況?

永琳に言われたように寝ようと思ったけどなかなか寝付けなかったので、文と色々話していたらもう夕方になっていた。

「それじゃあ文は俺を探してたのか？」

「ええ、ちよーつとお願ひしたい事がありました、人里かなーと思って飛んで行ったら竹林から普段は滅多に出てこない兎が慌てた表情で飛びだしてくるのが見えて、何か嫌な予感として竹林に入ってみるとあなたとあの兎が殺し合いをしててつて所です」

文は迷いの竹林と、そこに住みつくてゐ達の事は知っていたけど、永遠亭の事は知らなかったようだ。

「そっか、迷惑かけて本当にごめん」

「いえいえ、まあ、確かにあの時のユウキさんは普段とギャップがありすぎて驚きましたけどね。人里の子供や氷精達には見せられませんね」

「あ、あはは……」

確かに、梨奈やチルノ達がああ殺し合いを見たらトラウマ与えそうだな。

「それでもおかげで竹林の奥にこんな屋敷があるのが分かりましたし、そこに住む住民達の事も分かりましたから結果オーライですよ」

これぞ柵から牡丹餅ですなー。と文は陽気に笑っている。

でも、あの時文が来てくれなかったら多分死んでいた。

それは別にどうでもいいけど、助けられたのは事実だ。

「で、俺に頼みごとって何だ？ 助けられたんだし、何でも言ってくれ。あ、変な事なら受け付けないぞ？」

「変な事って。私そんな変な事頼んだ事ないじゃないですか」

「どーだかな。ま、借りはキチンと返す主義だからな。今回は特別だ」

「じゃ、じゃあ丸一日デー」「ちよつと待った！……ちつ」

そこへ、さつき姫さんと喧嘩しに出て行った妹紅が戻ってきた。

外から何やら爆音が聞こえてきてたけど、弾幕ごっこでもしてたのだろう。

「全く油断も隙もあつたもんじゃないわね！」

「あややくお早いお帰りで。あ、ユウキさんの事は私がしっかり面倒見ますから、お2人はじっくりのんびり何だったら永遠に遊んで構わないですよ？」

「へえ、私相手に【永遠】なんて口にするなんてね」

何が面白かったのか、姫さんはクスクスと笑いだした。

「ところでさ、姫さんの名前はなんて言うんだ？ そつちは俺の事よく知ってるみたいだけど、俺は全く知らないんだが？」

「あら、そうだったわね。これは失礼いたしました。蓬萊山輝夜。妹紅と同じ蓬萊人で

す

「蓬萊さん、家具屋か。なるほどなるほど」

きつとこの人は、蓬萊人の姫様なんだろうな。

もしくは、家具屋の姫さんかな。

確かに竹を使った家具なんてのは元いた世界にもあったし、だから竹林に住んでいるのか。

「……あなた、何か勘違いをしていないかしら？ 私の名前を聞いても何も思わないの？」

「ん？ 何が?？」

「ああ、もう。私はかぐや姫！ これでどう?？」
何をいらついているのだろう?？」

「幻想郷の家具屋の姫として有名なんだろうけど、俺は分からないな。一応外来人だし」
そう言うと、姫さんはガクつと肩を落とした。

文はああ、と何かに気付いたようで、妹紅は妹紅で笑いを堪えているようだ。

「かぐやの姫って何よ!？」

「ユウキ君。彼女はかぐや、と言う名前で竹取物語に出てくるかぐや姫そのままの存在だよ」

そこへやってきたのは苦笑いを浮かべた慧音だ。

ん？ 竹取物語のかぐや姫？ ああ、そっか、俺が勘違いしてたのか。

「よっ、慧音。今回は迷惑かけてごめん」

「全くだ。色々言いたい事はあるけど、妹紅と文に言われたらどうから私からは何も言わないでおこう。霊夢にはうまく誤魔化したけど、詳しい言い訳は考えておいた方がいいぞ？」

「あ、あははは、そうするよ」

霊夢への外泊の言い訳も考えないと。さて、どう言おうか……

本気の殺し合いをした。だなんて言ったら鈴仙に迷惑かかるだろうし。

「ちよつと、私を無視しないでよ！ 私、これでも結構な有名人だと思ったのに、特に外来人で日本人のあなたなら、竹林でかぐやとくればピンとくると思ったのに、まさか家具屋と勘違いしていただなんて……」

姫さん、かぐやは地面に手を付いてショックを受けている。

かぐや姫って結構有名なのか。

名前を聞いた事は確かにある。

学園都市の衛星の1つ、ひこぼしⅡ号にいる天竺郭夜は、現代のかぐや姫って呼ばれていた。

けど、それがどういう意味なのかは興味なかった。

会った事も話した事もないし、宇宙事業には関わってなかったしな。

「……ねえ、まさかと思うけど、竹取物語って知ってるわよね？」

ジト目で睨む家具屋……もとい、輝夜。

竹取物語と言う名前は聞いた事あるけど、詳しくはどんな話だったか何とか思い出した。

「確か、川に洗濯に行ったおばあさんが、流れてくる光る竹を見つけてその中から生まれたお姫様が、鉞かついで亀に連れられて竜宮城で鬼退治する話だっけ？」

——ズコッ！

と、思わず擬音が出そうな程綺麗にずっこける輝夜。

「ぶふっ!!」

「あははははっ!!」

とうとう噴き出して笑い転げる妹紅と、それにつられて爆笑する文。

「なんでよー!!?」

アレ? 間違えたか?!

「えっと、ドラゴンに乗ってレンガの家に逃げ込む途中で、ガラスの靴を落としたんだっけ?」

「なんでドラゴン!? 私、純和風よ!? それ思いつきり西洋の童話じゃない!」
これも違ったか。

思わず、立ちあがって物凄い形相で詰め寄ってくる輝夜を慧音が止めた。

「離してよ慧音! こうなったら私の逸話を徹夜で叩きこんであげるわ!」

「待て、輝夜! 気持ちに分かる! 分かるから落ちつけ!」

「ぶふっ、あははははははっ!」

「ひいゝだ、ダメだ。お腹が痛い……あなたやつぱり最高だよ、ユウキ!」

妹紅が笑いながら肩を叩いてくるけど、俺はそんな輝夜を馬鹿にするつもりは全くない。
い。

本当に分からないんだよな。

うーん、てゐの時もそうだったけど、もっと童話の事調べておくべきだったかな。

一応魔術的な伝承については色々調べてただけだな。

「あははははははっ、あーおかしい。慧音、寺子屋で竹取物語とかは教えてなかったっけ?」

「彼が来る前にはやっていった。が、今更ながらやっておきべきだったと後悔してるよ。彼の知識は隔たりがありすぎる」

その時、いつの間にか襖が開いていて、口を空けてポカーンとしている鈴仙がこつちを見ているのに気付いた。

着ているのはブレザーではなく、俺と同じく白い浴衣のような看護服だ。

笑い転げていた妹紅や文もそれに気付いて、笑顔が消してジツと鈴仙を見ている。輝夜と慧音も黙って部屋の隅に移動した。

「あ、ど、どうも」

「こんにちは、いや、もうこんばんは、かな？」

夕日はもう半分以上沈んでいるから、こんばんわの方が自然だったかな。

鈴仙はチラチラ妹紅と文を見ながらも、部屋に入ってきて俺の目の前に座った。

「あ、あの……えっと」

「昨日はごめん。怪我、大丈夫か？」

鈴仙が何かを言う前に、畳みに手を付いて頭を下げた。

まずは俺が謝るのが普通だ。

仕掛けたのは俺が先何だしな。

彼女はただ俺を竹林から遠ざけようとしただけだ。

「「はあゝ」」

と、背後から四者四様の溜息が聞こえてきた。

なんで皆してそんな顔をするんだよ。

「っ!？」

鈴仙は突然驚いた顔をして、逃げるように部屋から走り去って行った。
ま、こうなるんじゃないかと思つてたけどな。

——ゴンツ！ むきゅつ？

「へっ？」

鈴仙が部屋を飛び出した直後、外からまるでタライが頭にぶつかったような音がして、パチユリーののような短い悲鳴が聞こえた。

「はい、鈴仙ちゃんもう一回やり直し〜♪」

「あ、てゐ？」

てゐが頭にタンコブを作つて目を回している鈴仙を担いでやつてきた。

意外と力持ちなんだな、てゐって。

「全く、こうなるんじゃないかと思つたよ」

「てゐ、ナイスよ。じゃ、私達は退散しましょうか」

「そうだな。ほら、二人共。気持ちは分かるが、後は当事者の問題だ」

「……分かりましたよ。では、ユウキさんまた後で〜」

「がんばれよ」

あの？ 皆さん？ なんでぞろぞろと部屋を出て行くの？

妹紅、がんばれの意味が分からないぞ？

最後に、てみると輝夜が親指を立てながら襖を閉めた。
なんのこつちや。

で、俺と伸びている鈴仙を残してどうしろっての？

続く

第117話 「逃亡者」

「う、うーん……あれ、ここ、どこ？」

私は確か、彼と話をする為に部屋を訪れて、それで結局何を話していいか分からず飛びだしてしまって、それから……

「あ、起きたか？」

声のした方を向いた私は、そのまま固まってしまった。

そこには、つい数時間前に私と殺し合いをした男が、笑みを浮かべて座っていた。

「あつ……えつ、な、なんで、あんたがここに？」

咄嗟に腰に手をあてるけど、今は寝巻を着ているし、武器は全部お師匠様に渡したのを忘れていた。

「警戒するのは分かるけど落ちつけて。ここは俺が寝かされていた部屋。お前は廊下で気絶してここに運ばれたんだよ。覚えてないか？」

「気絶？ あ、ああくてゐの仕業ね」

あの時、部屋を出た直後に、呆れ顔のてゐがいて頭に何かが落ちたんだったわ。

はあ、余計な事をしてくれたわね。

一体何を考えてるのかしら。

「で、あんたはここで人の寝顔をじつと見ていたって訳？　何か変な事してないでしようね？」

一応身体に変な感じはないけれど、油断は出来ない。

そもそも、なんでこいつと2人つきりなのよ。

「布団1つしかないから、俺の布団に寝かせる時に抱っこした程度で何もしてない。あ、寝顔も結構可愛かったぞ？」

「っ!!　そ、そう……いい、いちおう信じてあげるわ」

何なのコイツ。

あの時と違って無邪気と言うか、何を考えているか全く読めない。

なんで殺し合いをした相手にこうも無警戒になれるのか分からない。

話をする為に来たと言うのに、なぜ逃げたのか。

理由は簡単、何を話せばいいか分からなかった。

お師匠様の言う通りなら、コイツは危険人物ではない。

あの妹紅が惚れこみ、慧音すら信賴していて、てゐやお京が慕う程の男。

そんな男を本気で殺そうとしたのに、何を話せばいいのだろう。

私が何を話そうかと悩んでいると、彼は畏まって正座して深く頭を下げた。

「遅くなったけど、ごめん。俺、お前を殺そうとした」

「はっ?」

「あの時はお前の目を見て、能力を使われて直感で敵と認識しちゃって殺そうとした。本当に悪かった」

今自分の目の前にいる彼は、本当にあの時のアイツなのだろうか。

すぐ目の前においても殺気どころか気配すらろくに感じられず、まさに暗殺者の様に私を追い詰めたアイツとはとても思えなかった。

「ん? どうかしたか?」

「あ、いえ、何でもないわ。こちらこそいきなり仕掛けちゃってごめんなさい。あなたの事を月の刺客だと思ったのよ」

「月の、刺客?」

あ、マズイ。言わなくていい事まで言ってしまった。

深く詮索されそうな言葉を言って、彼の興味を招き……私の罪へと気付かせる事と言ってしまった。

でも、もう彼には気付かれました。

そのはず、なのに。

「ふーん、まあ、人も妖怪も近寄らない場所にわざわざ来るなんて怪しいもんな」

あ、あれ？ それだけ？

てつきり色々聞かれると思ったのだけど。

呆気に取りられた顔をしていると、彼は首を傾げた。

「今度はどうしたんだ？」

「なんでもないわ。それで、少し気になったのだけど、あなたは どうして竹林にやってきたの？」

彼が刺客でないなら、なんであそこに行ったのか気になった。

あそこは竹林の入り口でもなく、少し入った場所。

筧が沢山あるわけでもなく、あそこにいる意味が分からなかった。

「人里へ向かってたら何かノイズみたいなのが頭に響いてきたんだよ。で、それが何か気になって出所へ向かったら、ってわけさ」

「ノイズ？」

「そうとしか表現できないな。通信みたいな響き、と言うかそんな感じ。ノイズの内容は今もさっぱり理解できてないけど」

「そう、それで出所と思つた竹林に入ってきたのね」

それを聞き、さつきまでとは違った意味で警戒心が強くなった。

彼の言うノイズとは、私と月との通信の事だと思う。

いえ、それしかないわね。

ならば、彼はノイズとは言え玉兔の秘密通信を傍受できると言う事。

そんな事が普通の人間に出来るわけがない。

彼にはそんな能力が……あ、そう言えば！

「あんた、私の能力を使つたわよね。あれは何？」

警戒心が強くなっていく。

それを知つてか知らずか、彼は全く意に介さずあつさりと応えた。

「あーあれか、あれ俺の能力。幻想支配つて言つて視た相手の力をコピー出来るんだよ」

そう言つて彼は自分の能力を説明し始めた。

聞いてもいないのに弱点まで教えてくれた。

それを聞いて、納得した部分もあった。

あの時、土壇場でしか私の能力を使わなかつた事。

切り札を温存して最適の場面で使つた。

彼は、やはり暗殺者だ。

「これも言つておくか。俺、外人人でき、元いた場所じや裏稼業つて言えば分かるかな。

護衛とか潜入やら暗殺、破壊工作とかとか色々やってきたんだよ」

「えっ？ それもあつさり言つちやうわけ？ 普通、そう言うのは隠すか誤魔化すかす

るんじゃないの?」

「何で誤魔化す必要がある? 俺がそういう系の人間だって、戦った鈴仙が一番分かるだろ?」

「いや、それはそうだけど、ああもう!」

なんでこうノホホンと言うか、軽い人間なの!

とてもあの時殺し合った人間とは思えない!

ずっと色々悩んでいた私が馬鹿みたいじゃない!

「疲れた顔してるけど、大丈夫か? 傷がまだ痛むんじゃないか?」

「ええ、傷ね。ある意味そうね……ふふふつ」

傷は傷でも、心の傷ね。

「さて、これで言いたい事は言ったかな。他に何か聞きたい事あるか? 別に俺に隠す

事ないから何でも話すぞ?」

勝手に納得してスッキリしちゃってるし。

私は私で、色々聞いても胸の奥でまだモヤモヤとイライラしたものがあると言うの

に!

もう、イライラが限界を超えてしまった。

「……っ! どうしてあんたはそうやって平然としていられるわけ!」

「平然つて言われてもな。別に今警戒する事ないし、誤解も解けたんだし」

「そうじゃなくて！　なんでいきなり能力を使った私を恨んでるとか、そういうのが全くないの!？」

「恨む理由がないぞ？　お互い初対面だし、俺に個人的な恨みあつて攻撃してきたつて言うなら考える事あるけどさ」

「恨むでしょ!？　あんたを殺しかけたのよ!」

「それなら俺だつて殺そうとしたんだぞ？　なのお前罪悪感しかないじゃないか。俺からすればそれこそなんで？　なんだが?」

「そうじゃなくてそうじゃなくて！　つゝ!!　ああ、もうこれじゃ私一人が馬鹿みた
いじゃない!　ふう〜ふう〜」

興奮しすぎて息が切れてきた。

「落ちつけて傷に障るぞ?」

「……一番馬鹿なのは、私じゃない。勝手に勘違いして、独り相撲して、あげくにまとも
に謝罪も出来ない……つ、私つて、何も変わつてない」

後で知つた事だけど、私はそう言いながら、ポロポロと涙を流していたらしい。

「私はね。月兎、月の兎なの。月で生まれて月の都の豊姫様と依姫様に飼われていたの。
そこで護衛役として鍛えられて有事の際は月兎達を率いて防衛する役割を与えられて

いた」

話すつもりはなかつた過去が、口から出ていく。

なぜ彼にこんな話をするのかは自分でも分からない。

けど、誰かに聞いてほしくなつた。

例え、それがコイツでも。

「けれども、少し前地上の人間が月へと侵略に来て戦争になると言われて、大切な仲間達が死んでいくのが怖くなつて……気が付いたら私は地上で月を見上げていたわ」

「……………」

私の独白を彼は黙つて夜空を見ながら聞いていてくれた。

「自分がどうやってここまで来たのか、とかは何も覚えていなかった。ただ私は仲間を置いて月から逃げだしたつて事だけははっきりと分かつたわ」

話しているうちに、月での思い出と地上へ逃げてきた時の記憶が頭に浮かびあがつてきた。

月を見上げると震えが止まらなくて、月に背を向けて地面を向いて当てもなく飛んでいた。

地上に来たのは初めてで、知り合いもいなくどう生活していくかも何も分からなかつた。

「しばらくの間、身も心もボロボロになりながら地上を彷徨い続けて、そして、ふと昔、月を追放になったお二方の事を思い出して、必死になって居場所を探したわ。そして、とうとうここ、永遠亭に辿りついて、八意永琳様と蓬萊山輝夜様と出会ったの」

お2人は私が近づいてきてきている事にとくに気付いていて、逃亡者の私を笑顔で出迎えてくれた。

あの時の暖かい笑顔と、ここで出された食事の味は今も忘れられない。

「お2人は私の事情も聞かず、黙って匿ってくれた。数日たつて私は月から逃げた理由と今の月の状況を話したわ。そしたら、あなたはどうしたいの？ って聞かれたわ。私は迷う事なく、ここに居させて下さいと言ったの。お2人は、ようこそ永遠亭へ。って笑顔で迎えてくれたわ」

今にして思えば、お師匠様も姫様もすごくお人好しよね。

勿論、私を通じて月の状況を知る事も考えていたのだろうけど、それにしても私をあっさり受け入れてくれた。

「それから私は、永琳様に弟子入りして、ここで生活を始めたの。月にいた頃は地上は穢れた地で忌み嫌っていたのに、いつの間にかすっかり馴染んじやったわ」

正直、今は月にいた頃よりもずっと満足した生活を送っていると思う。

豊姫様と依姫様には申し訳ないけれどね。

「大体分かった。それより、まずはこれで涙拭けよ」

「あ、ありがとう……えっ、私、泣いてたのね」

彼は水でぬらした手ぬぐいを渡してくれた。

そこでやっと私は涙を流している事に気付いた。

男性に泣き顔を見られて、かなり恥ずかしかった。

「せっかくの美人が涙で台無しだぜ。あ、俺は何も見えないから」

なぜ彼は外を向いていたのかと思っただけど、彼なりに気遣ってくれたのか。

手ぬぐいで顔を拭いて少しすっきりしたわ。

これで話を終わらせたけれど、肝心な所を話してなかったわね。

「話を続けるわ。あんたと遭遇した日、月から突然通信が入ったの。逃亡した時にさえ何もなかったのに、急にね。通信は月への帰還命令と、次の満月の夜、つまり明後日の夜に使者が送りこまれるって内容だった」

「なるほど、それでいきなり現れた俺を刺客と間違えたって訳か」

「ごめんなさい。言い訳になるけれど、あんたが着ていた服、月の特殊部隊が着ていた服によく似ていたから」

「あれは俺の、友人からもらった服だよ。デザインは俺が元いた世界で着てた戦闘服だ
けど」

戦闘服、道理で動きが良かったり防御力が高かったわけね。

それにしても、彼今、友人って言おうとして何か言い淀んだ気がするけれど、気のせいかしら？

「私って最低でしょ。それなりに責任ある立場だったのに仲間を置いて逃げだした臆病者。お師匠様や姫様の好意に甘えてばかりで、いざって時には勘違いで無関係なあなたを殺しかけて、それで勝手に泣き出しちゃって……ホント、最低」

「そんな事ないだろ。鈴仙は仲間思いのいい人、いや兎だぞ？」
「……えっ？」

意外な言葉に私の頭は一瞬で真っ白になった。

私が、仲間思い？

「そりゃ昔は戦争で仲間を失うのが怖くて逃げただろうけど。今は世話になった人達のために命がけで守ろうとしただろ。それは対峙した俺が良く分かるよ。あの時の鈴仙、俺を殺そうとしてたけど、それ以上に何かを守ろうと必死だったし」

「な、なんで？……どうしてそう言うの？」

「ただ殺す為だけに向かってくる相手と、誰かを守るために命を捨てる覚悟で向かってくる相手ってのはそりゃ全然違うぞ。俺だっつてどっちの相手とも何度も戦った事ある経験者だしな」

そう言つて笑う彼からは、私を嘲笑つたり憐れんでお世辞を言っている感じはしなかった。

ただ、私を見て認めてくれていた。

会つて間もないのに、殺し合つた間柄なのに、彼は私をちゃんと見てくれていた。

それが、とても嬉しかった。

「……ひぐつ、うう、……えぐつ」

「えっ？ お、おい、なぜまた泣く？ どうしたんだ？」

私は自然と涙が流れてきた。

今度は、彼は私がなぜ泣きだしたのか分からないようで、ひどく焦っていた。

それが、とてもおかしかった。

「ところでき。2人共良かったの？ ゆーちゃんと鈴仙ちゃん2人きりにして」

「ふふーん、仮に彼女がユウキさんに惚れたとしても、ユウキさんはそう簡単にはおちませんよ。それに私の方が付き合ひ長いんですから、それなりに余裕を見せない」と

「余裕つて、文だつて彼の眼中にはないじゃない。お前はがつつきすぎなんだよ」

「超奥手な妹紅さんに言われたくないですね。そんなんじや彼に女としても認識されてないんじゃないですか？」

「……へえ、言ったな。晩飯にちようどいい、焼鳥にしてやるぞ?」

「そっちこそ、幻想郷の外まで吹き飛ばしますよ?」

「いやいや、私が言ってるのはそういう意味じゃないんだけどなあ……つい昨日、殺し合った2人を一緒に部屋にして大丈夫かなあ、って意味だったの。まあ、問題ないよね。ゆーちゃん兎たらしだし♪ ね、京ちゃん?」

「……次は私が2人きりになる番」

「京ちゃん!?!」

続く

第118話 「欠けた月」

鈴仙と殺し合いをして永遠亭のお世話になってから3日が経った。

身体がすっかり元通りになり、動いても違和感も何もない健康そのものだ。

だと言うのに、退院の許可が出なかった。

ここは病院じゃないんだから、退院って言い方は変だな。

ともかく、せめて後1日は療養しなさいと言われて、渋々まだお世話になっている。

その間、文と妹紅はずっと俺の側から離れなかった。

妹紅はともかく、文は天狗の仕事をしなくていいのかな。

「文、いつまでここににいるんだ？ 休み過ぎるとクビにされるんじゃないぞ。ユウキなら私が見てるから山に戻った方がいいぞ？」

妹紅がほぼ直球に山に帰れと言ったが、文は得意げにこう答えた。

「ご心配なく、有給休暇を取っているので大丈夫です」

「有休あるのかよー」

確かに天狗って人間社会に近い独特の社会があるらしいけど、そんな制度まであるとは。

「そんなことよりも、今日は何だか忙しくありませんか？」

「確かに。一応俺達に気を使ってるのか、静かに忙しそうではあるな」

永遠亭は朝から何かと騒がしかった。

鈴仙や永琳先生、輝夜は朝食の時は冷静を装っていたけど、今はばたばたと忙しそうに駆けまわっている。

てゐは朝から兎達に何か指示を出していて、忙しそうだ。

「そこから辺何かしらないか、お京？」

「うーん、よくは分かりません。てゐちゃんからは今日は皆バタバタしてるから、おにいさん達の相手をしてあげてって言われました」

お京は俺の世話係を命じられていて、色々と面倒を見てくれている。

鈴仙やてゐもよく来てくれる事もあるが、お京はここに来てからずっとだ。

最初は文が目を光らせていて、お京も文を怖がっていたけど、俺が仲介してすぐに打ち解けた。

代わりに、文と妹紅から兎誑しと言う不名誉な呼ばれ方をするようになった。

理不尽だ。

「今日は満月だから、それで何かあるのかもな。この連中、お月見大好きだし」
外を見ると、日も大分落ちてきてそろそろ夜になる時間だ。

永琳先生も輝夜も元は月の住民らしいから、月関係のイベントは外せないのかな。

「でも、中秋の名月にはまだかなり先ですよ?」

「あれって確か9月から10月くらいの時期だよな」

「そういう事は知ってるのに、なんで竹取物語を知らないんだよ。まあ、輝夜の反応面白かったけどさ」

「慧音さんから竹取物語の内容聞いて第一声が『つまりこれは輝夜の婚活話か?』ですもんねえ。そりゃ、輝夜さんも卒倒しますよ」

未だに輝夜はあの時の事を根に持っている。

そりゃ自分がモデルになった話を知らないだけじゃなく、他のと混合されちゃたまならないか。

「毎年秋に皆でお餅をついてお月見をやるんです。今年はぜひおにいさんも来て下さいね」

「随分気が早いな。それに俺は部外者だぞ?」

「でも、輝夜様は招待する気満々でしたよ? 鈴仙ちゃんもきつと喜びます」

「ま、その時になつたら考えるよ。あれ? 2人共どうした?」

見ると、文と妹紅が腑に落ちないと言う顔をしている。

「いやあく予想していた事とは言え、本気で殺し合った相手に随分と懐かれてるなあ

思いまして、予想していましたが！」

「そうだな。ユウキと話す鈴仙、何だか楽しそうだった。あんな鈴仙、私は見た事ないぞ。予想していた事だったけどな！」

そんなにおかしな事か？ いや、おかしな事か。

鈴仙とはもうわだかまりもなく、普通に話せてる。

それに文も妹紅も予測していた事なら、なんでそんな顔してるのか。

「大変ですね、おにいさん」

「ははっ、まあもう慣れっこだ。ありがとな、お京」

俺を気遣ってくれるお京の頭を撫でると、2人共不機嫌そうになった。

なんだ、2人も撫でればいいのか？

そうこうしているうちに、夕食が出来たと鈴仙が呼びにきた。

全くもう、ユウキさんには困ったものね。

こうなる事は予測出来ていたとはいえ、一度殺し合った相手とあんなに仲良さそうにするなんて。

今日も食事中にあの兎と楽しく話していた。

まあ、私も会話に混ぜられて十二分に楽しかったけれども……それでも納得いかない

わ。

「それは私も同感だけどき。今更でしよ？」

若干諦め気味に言う妹紅さん。

確かに今更すぎますけどね。

あの兎とユウキさんを2人きりにさせたあの時、こうなるって分かりきってましたし。

「で、あの時すぐく余裕ぶっていたけど、今はその余裕は何処行つたのよ？」

「そういう妹紅さんこそ、ユウキさんに見えないように、ずっと貧乏ゆすりしてましたよね？」

そこで2人して深くふかーく息を吐きだした。

今、ここには私達しかない。

ここは、私と妹紅に用意された部屋。

2人同部屋と言うのが何とも言い難いものがあつたけど、押しかけてる身分だから贅沢は言えない。

それに、ユウキさんの部屋はすぐ近くだからまだマシね。

「ところで、さっきの話ですが、ここの人達が何かを企んでいるようですけど、心当たりありますか？」

「さてね。鈴仙がいきなりユウキに襲いかかった件に関係はありそうだけど、そこら辺はぼかさされてるし」

そう。あの兎とユウキさんが殺し合った経緯は聞いたけど肝心な部分がぼかさされている。

なぜあの兎はユウキさんを危険人物と勘違いして、能力を使ってここから追い出そうとしたか。

普通に考えれば、迷いの竹林に無防備に入ってきたユウキさんを誤解した、のだろうけど何かピンとこない。

ユウキさんは興味がないって言っていたけど、恐らくその理由はある時間かされたはず。

「ユウキさんをここに引きとめている理由も、それ絡みでしょうね」
「私らまで遠まわしに引きとめてるしな」

そう。ユウキさんだけではなく、私と妹紅もここに軟禁状態。
と言つても、別にここから出るなど言われてるわけじゃない。

ただ、ユウキさんを引きとめる事で、間接的に私達を引きとめている事になる。
と言うよりこれはただの勘だが、妹紅ではなく私のみを引きとめている気がする。

うーん、分からない。

「ま、ユウキをどうしようとしているわけじゃなさそうだから、何を企んでいるかは興味ないけどな」

「それは、まあ、同感ですね」

結局行きつく先はそこなのよね。

ブン屋として彼女達が何を企んでいるのか、異変の前触れは気になるけれど、ユウキさんに害が及ばなければいいと思っっている。

全く、甘くなつたわね私も。

と、その時突然、空気が変わった気がした。

「えっ？ あれ？ あれれ？」

「ん、どうしたんだ文？」

何か、何かがおかしい。

具体的に何と言われても分からないけど、空気がおかしい？

妹紅は気付いていないようで、頭に？マークを浮かべている。

何気なく外を見ると、強い違和感があつた。

これは、始まつたと言う事かしら？

「妹紅さんは何も感じませんか？」

「いや、私は別に、とにかく始まつたんだな？」

「ええ、一先ずユウキさんの所へ！」

私を感じて妹紅が感じないと言う事は、人間には気付かない何か起きた？

急いでユウキさんの部屋に行くと、彼は窓から外を見上げていた。

お京と呼ばれている兎は今はいないようね。

「あ、2人共来たか」

「ユウキさん、大丈夫ですか？」

「何か身体に異常はないか？」

「いや、俺は別になんともないけど、アレ見て見ろよ」

ユウキさんに言われて窓から外を見る。

私達の部屋の窓からは見えなかったけど、ここでは満月が見えるのね……満月？

「ちよつと、待って下さい。あの月、おかしくないですか？」

「ああ、今日は満月のはずなのに月が欠けてるように見えるな」

雲一つない夜空に浮かぶ月。

その月が少しかけていた。

今日は満月であり、満月でなくてもあの欠け方はおかしい。

「どうやらあれは、偽の月みたいだな」

「えっ？ 分かるのか？」

「どうやったか、までは分からないけど、誰かが月を入れ変えたみたいだ。あの月は本当の月じゃない」

ああ、そうか。あれが本物の月でないから私は違和感を覚えたのか。
蓬萊人とは言え、妹紅は人間。

月に何か起きても気付かないのは無理もない。

けど、妖怪たちにとって月の光はとても重要だ。

今回の異変は人間にとってではなく、妖怪にとって大異変なのでは？

これは、どうしましょうか……

「ともかく永琳達がしようとしていたのがコレって事か」

ユウキさんは納得したように呟くと、立ち上がって部屋の外へ向かおうとした。

「ん、どこに行くんだユウキ？」

「どこって、永琳の所だけど？」

「まさか、この異変を解決するのですか？」

だとしたら危ない。

彼に危害を加える気がないにしろ、彼女は恐らく八雲紫よりも強い力を秘めている。

だからこそ、私も妹紅もここにいる。

その彼女に異変解決とは言え立ち向かうのは危険すぎる。

「それは分からないな。ともかくなんでこんな事を始めたか聞こうと思つてさ。悪巧みをしようとしてる感じでもなかったし」

「は、はあ……」

彼が何を考えているのか全く分からない。

「これを邪魔されたくはないんだらうけど、俺達を監禁するなり色々方法はあつただろ？ でも、それをしなかつたって事は、彼女達なりの理由があるつて事だ。深く立ち入る気はないけど、このままだと霊夢達が動きそうだし。やれる事をやろうかとな」

「はあ……分かりました。私も行きますよ。素直に全部教えてくれるとは思いませんけど、妖怪として今回の異変は放つてはおけませんし」

「私も行く。場合によっては輝夜達と戦うんだろ？ 手を貸すぜ」

「だからそう言う事しにいくわけじゃないつて……っ!？」

廊下へ出ようとしたユウキさんが突然、踵を返して窓へと走つた。

「今度は一体どうしたんだよ？」

「誰かが、何かをした」

「何かつて、一体何を？」

私も妹紅も空を見上げて、辺りの様子を窺うけど、さつき感じた違和感以外は特に変化は感じられなかった。

それでも彼は空を睨むように見つめていた。

ふと、彼の瞳が淡く輝いているように見えた。

幻想支配で誰かを視ている時のような変化。

けど、彼の眼は特に何色に変わっていると言ふ事はない。

ただ月と夜空を瞳に映しだして、淡く揺れているようだ。

そう言えば、彼はさつきあの月を偽物とすぐに見抜いたわね。

迷いの竹林に張られていたと言ふ結界も見抜いた。

彼の幻想支配には、そう言った空間の異変を探知出来るような能力まであるのかしら

？

その夜、いくつかの場所で人と妖怪が動き始めた。

続く

第119話 「博麗と紅魔（前編）」

「ユウキさんつたら今日も帰って来なかったわね」

神社の縁側でお茶を飲みながらぼつりと呟く。

ふと、無意識に隣を向いてしまう。

いつもこの時間は2人で縁側に座り、お茶を飲むのが日課になっていた。

たまに咲夜やレミリアなど紅魔館の連中や、文にアリスや大妖精達も一緒になる事が多い。

と言うか、今思えば2人きりの夜って思っていたより少ないわね……

ユウキさんは、3日前にアリスの所に行くといったきり戻って来ない。

慧音がやってきて、彼から伝言でやる事があるからしばらく帰れない。と言われた。

アリスの所で何かあったのか、紅魔館に誘われてお泊り会でもさせられていると思
い、最初は気にしなかった。

急によそに泊まる事や、それを誰かが伝えに来ると言う事も結構ある。

だから、最初は気にしてなかったのだけど、流石に3日も帰って来ないのは初めてね。

何だか今日は眠気がないのだけど、寝た方がいいのかしら。

「明日も帰つて来なかつたら慧音に場所聞いて迎えに行くかな」

「あららくたつた3日いいないだけで寂しくなるなんて、霊夢も乙女ねえ……うおっ!!」
「ちっ、外したわ」

唐突にスキマが開いて、紫の気配を感じたから針を投げただけで、かわされたわ。それにしても、今すごい声だったわね。

「で、一体何の用? 退治されに来たのなら大歓迎よ」

「全然歓迎されてないわね。それよりも、随分となりが寂しいみたいだけど、たまには空を見上げてみるのも悪くないわよ?」

紫が意味ありげに扇で空を差した。

何を言いたいのかわからないけど、仕方なく空を見上げる。

「別に空を見上げてても、月があるだけじゃない。あれ? 今日って確か満月の日よね?」
「なのにあの月、かけている?」

満月のはずの月が、僅かにかけていた。

しかも、月そのものもどこかおかしい。

「はあく……全く、様子を見に来て正解だったわね。あそこに浮かぶ月は偽物。分かりやすく言えば誰かが月をすり変えた異変なのよ」

「ふくん、異変ね。で、そんな事してどうなるのよ?」

「さあ、思い当たる事はいくつかあるし、それをしそうな妖怪も心当たりがありすぎるわね。ともかく、今回の異変は人間にとって影響はないでしょうけど、妖怪にとっては死活問題なのよ」

「なるほど。けど、そつちの問題なんて知った事じゃないわ。これが異変と言うなら解決するだけよ」

でも、妖怪に影響が出るなら、その妖怪が暴走して人里を襲つたりとかはありそうな展開ね。

これはすぐに動いた方がよさそうね。

珍しく紫が発破をかけたのはこういう事か。

「今回は私も行くわ。少し気になる事もあるし」

「年中引き籠つて寝ているあんたが!?! 明日は雪でも降るのかしら」

「ぐつ、こ、今回は彼の代わりと思いなさいな。手助けはしてあげるわよ。つてそこまで嫌な顔しなくてもいいじゃないの」

私がどんな顔をしていたのか知らないけど、紫をユウキさんの代わりと思えと言うのはかなり無理があるわ。

「で、気になる事って何なのよ?」

「それは……ヒ・ミ・ツ☆」

「夢想封印！」

——ピチューン

似合わないウインクまでした紫に、ついうっかりと撃ってしまった私は悪くないわね。

「いたたつ、もう、パートナーに向かつてヒドイ扱ね」

「誰がパートナーか、誰が！」

「ともかく、気になる事は気になる事よ。外れてるかもしれないし、今はまだ言えないわね」

紫は話す気はないと。

ま、いいか。今は、つて事は後で言う可能性あるつて事だし。

私が気になるのは、ユウキさんが不在つて事なのよね。

ユウキさんつて毎回異変に関わつてるから、今回もどこかで絡んでないかと心配なのよね。

「霊夢、彼が心配かしら？」

「もう一度スペカ食らいたいのかしら？」

ニヤニヤと薄気味悪い笑みを浮かべる紫に、札を取り出して牽制。

ホントにぶつけてやろうかしら。

「コホン、それはともかく。今回の異変、夜が明ける前に解決した方がよさそうね。犯人の目的はなんであれ、朝が来ると雲隠れする可能性が高いわ」

「そうね。でも、心当たりがないし。それにもう大分夜もふけたわ。急がないと朝になるわよ」

「ああ、それなら問題ないわよ。えいっ♪」

紫が指で空を弾くような動作をすると、結界のようなものが張られた感覚があった。

「紫、今何をしたの？」

「何って、夜が明ける前に解決するのなら、夜が明けなきやいいでしょ？　ちよつと能力で夜が明けないようにしたわ」

「なるほど……って、はあく!?　何してんのよあんたは!」

「いたひいたひ、ほおひっはらないで〜」

トンでもない事をやってくれた紫の頬を限界以上に引っ張って、どうにか鬱憤は晴らせた。

今更能力解除させた所で今夜中に解決できるとは限らないし、仕方ないか。

ユウキさんが関わってないとしたら、それはそれで急いで解決させなきやいけないし。

でも、なんだか妙に嫌な予感がするのよね。

西行妖の時とは違って、深刻なものじゃないのだけど。さて、まずは慧音の所へ行ってユウキさんの所在確認しましょうか。

紅魔館

なんだか今日は慌ただしい夜ね。

いつものようにレミリアお嬢様とフランお嬢様を起こして、食事を取り妖精メイド達に仕事の指示を出した。

けれども、少し前から妖精メイド達の様子がおかしい。

みんなソワソワしている気がする。

どうかしたのかと尋ねてみても、妖精メイド達も何だか気分がいい、としか言わなかった。

妙だと思っていると、妖精メイドの1人からレミリアお嬢様が呼んでいると言われて、部屋までやってきた。

「お嬢様、およびでしょうか……あら、お嬢様？」

部屋に入ると、そこにレミリアお嬢様の姿はなかった。

今日は満月の夜、いつもレミリアお嬢様とフランお嬢様は部屋か屋上テラスで月を眺めているから、いるとしたらテラスかしら。

テラスへ行くこうとすると、フランお嬢様がやってきた。

部屋に戻ろうとしているようだけど、フラフラしてて様子がおかしいわね。

「フランお嬢様、大丈夫ですか？」

手をかそうとかけよると、フランお嬢様は大丈夫と言いたげに手をだした。

「ううん、もう今日は部屋で休むから大丈夫。お姉様なら、パチュリーと上にいるわよ」

「一体何があつたんですか？ 風邪、ですか？」

吸血鬼が風邪をひくなんて聞いた事ないけれどね。

「まさか、私も良く分かつてないけど、お姉様にはまだまだ修行不足って言われちゃったわ」

あはは、と笑いながらフランお嬢様は部屋へと入って行った。

修行不足、とはどう言う意味なのだろう。

ともかく、屋上のテラスに行きましようか。

「あら、来たわね咲夜」

テラスへ行くと、レミリアお嬢様とパチュリー様がいた。

レミリアお嬢様は面白そうに月を眺めていて、パチュリー様は水晶をじつと覗き込んでいる。

「遅くなりました、お嬢様。どう言った御用件でしょうか？」

「咲夜、今夜はどこか違和感を覚えるとかないかしら？」

「違和感、ですか。みんなの様子がおかしいと言うのは感じますね」

「そう。やっぱり人間のあなたには何も感じないのね」

レミリアお嬢様は、フランお嬢様や妖精メイド達の様子がおかしい原因に気付いてい
るのかしら。

「原因はアレよ」

レミリアお嬢様が指を差した方を見ると、そこには満月が……いえ、あれはかけてい
る？ 満月じゃないわ。

そこで私は、フランお嬢様や妖精メイド達の様子がおかしい原因に、ハッと気付いた。
「気付いたようね。そう、これは異変よ。誰かが月を偽物にすり替えた。おかげでフラ
ンにまで影響が始めているわ。妖怪もそうだけど、私達吸血鬼にとって満月はとても
重要なものなの。それを弄られちゃたまったもんじゃないわ」

確かに。吸血鬼と月はきつてもきれない関係にある。

力が完全なレミリアお嬢様はともかく、まだまだ訓練中のフランお嬢様はその影響を
受けてしまった。

だから、レミリアお嬢様は修行不足と言って、フランお嬢様もそれを自覚していたの
ね。

と、その時、先程とは違う感覚に襲われた。

違和感、と言うより誰かの結界内にいる感覚。

しかも、これはどこか私と似ている？

そんな私の様子を見てレミリアお嬢様は、少しだけ眉をひそめ、空を見上げると深く溜息をはいた。

「でも、それだけじゃなくなったみたいね。今、夜を止められたわ。月をすり替えたのは恐らく別の誰かがやったみたいね」

「夜を止める？ 私と同じ時間操作ですか？ だから、今妙な感覚があったのでしょうか」

「厳密には違うわね。もつと正確に言うとな夜を明けないようにしてらるって事よ。大方、この異変を夜のうちに解決させる為にやったのでしょね。だとすると、スキマ妖怪かしら」

水晶を睨みながらパチュリー様が説明してくれた。

「あのスキマ妖怪が動いたとすれば、霊夢も動くでしょうね」

「そうね。博麗の巫女とは言え、人間である霊夢じゃ気付きにくいかもしれないけど、紫が動いたのなら気付くでしょ」

あとは、魔理沙かしら。

「パチユリー様はさつきから異変の犯人について調べているのですか？」

「厳密には違うわ。私はユウキを探しているのよ。彼、このところ博麗神社に戻ってないって言うじゃない。そんな中で起きたこの異変。関わってるかもしれないでしょ？」

博麗神社にみんなで遊びに行った時、ユウキさんはいなくて、彼は数日どこかへ行っていて留守、と見るからに不機嫌そうな霊夢がいるだけだった。

それを見てレミリアお嬢様はクスクス笑って、弾幕をくらっていたわね。

「なるほど。で、探知魔法で探しているのですか？」

「ただの探知魔法じゃ無理ね。彼の力はまだ私じゃ感知出来ないし。けど、アリスと作った服を辿れば居場所が分かるわよ」

パチユリー様がアリスと一緒にユウキさんに服を作ったのは知っている。

みんな、それを聞いて大なり小なり嫉妬心を浮かべていた。

かく言う私も少し、嫉妬してしまったのは内緒。

でも、その服に発信機みたいなものを仕込んでいたのかしら。

呆れつつも、それを彼が知ったらどんな顔をするかしら？

レミリアお嬢様も呆れたような目をしてるわね。

「ご、誤解しないでね。私もアリスもそんな仕掛けはしてないわよ！ただ、私とアリス

とついでに魔理沙の魔力で作られた服だから、その残留魔力を辿ればって話よ！もう、レミイまでそんな顔しないでよ！いくら私でもそこまでストーカーみたいなことしないってば」

「いや、私は何も言っていないのだけど……まあ、いいわ。で、結果は？」

「……」これを見て」

慌てるパチュリー様が妙に怪しかったけど、それはひとまず置いておくとして。

パチュリー様に言われ水晶を覗くけど、ノイズばかりで映像が見えない。

辛うじて竹のようなものが生えている屋敷と言うのが分かる。

「結界で覆われている場所にいるみたいね。で、その場所には竹が生えている。これで場所はもう分かるでしょ？」

「迷いの竹林、ですね。私は行った事ありませんけども、妹紅がそこに住んでいると言っていました」

だとしたら彼は妹紅の所にいるのかしら。

でも、今見えたのは大きな屋敷。

妹紅は一人で小屋に住んでいるはず。

どう言う事かしら。

「分かったわ。とにかく迷いの竹林に行ってみるわね。うまく行けば満月を隠した犯人

の手掛かりがつかめるかもしれないわ。咲夜、一緒に行く?」

「珍しいですね、彼を探しに行くならともかく、異変解決に積極的なんて」
妖怪であるお嬢様が自分から動くことはない。

大抵霊夢に発破をかけるか、人間である私に行かせようとする。

「異変解決なんて柄じゃないのは分かっているわよ。ただ、今回満月を隠された。せつかくの月夜を台無しにされて、妹にまで影響が出ている以上、放っておくわけにもいかないわ。人間であるあなたが一緒なら、格好は付くでしょ? それに彼を探しに行くついでよ、ついで」

「分かりました。そう言う事でしたらご一緒いたしますわ。それと、お嬢様。照れ隠しなら異変解決のついでに彼を探しに行く、ではないでしょうか?」

隣でパチュリー様が暖かい視線を送っている。

それを見て、自分の発言に気付いたレミリアお嬢様は夜でも分かるほど、顔が真っ赤になった。

可愛らしいわね。

「つゝつゝ!?! い、いいから、さつきと竹林に行くの!」

「はいはい。では、行って参りますね。パチュリー様」

「ふふつ、行ってらっしゃい。ユウキをよろしくね」

パチュリー様に見送られて、私とレミリアお嬢様は迷いの竹林へと向かった。
さて、彼は一体そこで何をしているのかしら？

続く

第120話 「博麗と紅魔（後編）」

満月を隠された異変を解決する為、私と紫はまず人里へと向かった。

途中、妖精や雑魚妖怪、陽気に歌うみすちーを瞬殺（殺してないけど）した。

妖精達が騒ぐのは異変ではいつもそうだけど、今回はいつもと少し違うわ。

やっぱり月に異変があると妖怪たちにまで影響が出るのね

「で、妖怪たちまでいつもと様子違うけど、あいつら人里に襲いかかったりしないでしょうね？」

「その心配はなさそうよ霊夢」

紫が指さした先には、人里の入り口があるはずだったが、里ごと綺麗さっぱりなくなっていた。

破壊されたのではなく消えた。

まるで元からそこになかったかのような消え方ね。

こんな芸当が出来るのは彼女しかないない。

「来たか、霊夢」

「やっぱりあんたの作業なのね、慧音」

慧音の能力、歴史を隠す程度の能力を使って人里の歴史を隠したのね。

「今回はいつもの異変と違って、妖怪達が人里周囲にまでうろつき始めたからな」

「それが正解ね。妖精達もいつもより動きが活発だったわ。異変は私達が解決するか
ら、それまで人里を隠して置いてちょうだい」

「言われずとも。それにしても、霊夢が来るのは予想していたが、まさか彼女を相棒にし
て来るとは思わなかったな」

彼女とは、私の後ろで呑気に手を振っている紫の事だろう。

「一緒に異変解決に動いてはいるけど、相棒なんかじゃないわよ」

「ふふっ、そうだったな。霊夢の相棒はユウキ君だけだったな」

「なっ、そ、そんな事より！ そのユウキさんよ！ 彼一体どこにいるの？ まさか、こ
の異変に関わっているんじゃないでしょうね？」

一番にここに来たのはこれが聞きたかったから。

ユウキさんの事だから異変に関わっている可能性は高い。

しばらく帰ってこれないと言うのもそのせいかもしれない。

私の勤は、半々と言ったところだけだ。

慧音は難しい顔をしてしばらく考え込んでいたけど、やっと口を開いた。

「うーむ、どう言ったらいいものか。確かに彼はこの異変を起こしたと思われる所には

いる。が、彼がしばらく帰れないと言ったのと、今回の異変には無関係だ」
「えっ？ それどういう意味よ？」

異変の犯人がいる所にユウキさんもいるけど、帰れない理由と異変には関わっていないってどう言う事？

「彼は迷いの竹林の奥にある、永遠亭と言う場所にいる。詳しい場所は、彼女に聞くとい
い」

やっぱり、この一件の犯人を紫は知っていたのね。

慧音に指を差された紫は、私？とキョトンとした顔でしらばっくれている。

「紫、あんた異変の犯人知ってるんじゃない！」

「いやだわ霊夢。さっき言ったじゃない。こんな異変起こしそうな犯人の心当たりは沢山あるって。彼女達も候補だったけど、確信はなかったわよ」

嘘だ。紫に確信はあった。物は言いようね。

でも、今はそれを追求している暇はないわ。

「とつとと行くわよ、紫。犯人の事は、行きながら教えなさい」

「はいはい」

「霊夢、気を付けてな。ユウキ君によろしく」

「ええ、人里は頼んだわよ、慧音」

「私達は迷いの竹林を目指して、迷いの森を進んで行った。

その道中、紫は永遠亭の事を教えてくれた。

「宇宙人？」

「そう。永遠亭に住んでいるのは昔、月から逃げてきた宇宙人達なの」

月から来た宇宙人って言われても、パツと来ないわね。

でも、月から来たのなら月に細工をするのも簡単、だと思っう。

「宇宙人だからって油断したらダメよ。月のテクノロジーは幻想郷は勿論、外の世界よりも何十倍も優れているのよ」

「外の世界よりも!? ってやけに詳しいじゃない？」

そう言っうと、紫は一瞬だけ苦虫を潰したような顔をした。

紫がそんな顔をするなんて、珍しいわね。

「ともかく、犯人が分かったのなら早く向かいましょう。あそこは結界が張られていて私のスキマでも通り抜けれないわ」

「紫の能力が効かないほどの相手か。それは油断ならないわね」

紫が私と一緒に来ると言っう理由が分かった。

私1人でも、紫1人でも手に余る相手だったからなのね。

もうすぐ竹林と言っう所で、突然空から何かが降ってきた。

「そこまでだぜ！」

「えっ？」

降ってきたのは箒に乗った魔理沙と、アリスだった。

「一体何の用よ、魔理沙」

「とぼけたって無駄だぜ霊夢。この異変を起こしているのがお前達だって分かってるんだぜ！」

「はい？」

紫と2人でポカーンとした。

魔理沙は何を言っているのだろうか？

「まだしらばつくれるのか？ 夜を明けさせないようにしている異変の犯人は、霊夢、それに紫、お前達だ！」

「何を頓珍漢な事を言ってる……」

魔理沙の言いたい事が分かり紫を見ると、露骨に視線を逸らされた。

彼女は勘違いをしている。勘違いではないけど、勘違いね。

「ねえ、魔理沙。何だか様子がおかしいわ。ホントに霊夢が異変の犯人なの？」

「何言ってるんだよ、アリス。お前だって言ってただろ。夜が明けないようにしているのは紫だって。で、その紫と一緒に動いているんだから霊夢も犯人だろ？」

「いや、待つて。その理屈はおかしいわよ！　なんで、私が紫なんかと組んで異変起こさなきゃいけないわけ!？」

「なんかって、霊夢ひどーい!」

「黙れ元凶！　紫が変な事するから誤解されちゃってるじゃない!」

夜を明けさせないようにするのは必要な事だったのかもしれないけど、異変を一つ増やしてどうするのよ!

で、そんな事気付かなかった私の馬鹿!

「ともかく、お前らを倒して私達がサクッと解決だぜ!」

「事情は後で聞くわね。ホントは、私ユウキさんを探しに竹林へ行く所だったのに」

アリスも竹林にユウキさんがいるって気付いたのね。

でも、それを聞かされちゃ、黙ってるわけにはいかないわ。

「ユウキさんの所に行くのは私よ!」

「あら、霊夢。なんだか目的、変わってないかしら?」

「うるさい!　とつとと片付ける!」

余計な時間を食ってる暇はないってのに!

少し前　迷いの竹林内部にて

——キンキンっ！

妖夢の刀をナイフで防ぎながら、後方へ誘い込むように退避する。

そこにはお嬢様が待機していて、つつこんでくる妖夢へ向けて弾幕をばらまいた。しかしそれは、上空からの幽々子の弾幕で相殺されてしまった。

「ダメよ妖夢。もつと周りを良く見なくちゃ」

「幽々子様、ありがとうございます！」

「全く、しつこいわね、あなた達。一体何なのよ」

お嬢様がいら立つのも無理はないわ。

私とお嬢様はユウキさんを探しに竹林へとやってきたのだけど、そこへ突然妖夢と幽々子が襲いかかってきた。

妖夢は、「お団子の仇！」　だなんて訳の分からない事言いながら斬りかかってきたし、何のこともかしら。

「とぼけないでください！　あなた達が月を偽物にすり替えて、せつかくの月見団子を盗んだ犯人だと言う事は分かっています！」

「はあ〜!？」

月を偽物にすり替えたのは、この異変の事を言っているのでしょうか、月見団子が

どうしたって?!

「全ては幽々子様が推理されました! 吸血鬼であるあなた達は満月の月見を自分達だけで楽しむ為に、月を偽物に変えただけではなく、私のとっておきの団子も持っていたと言う事を!」

「ねえ、咲夜。どうしましたようか、妖夢が何を言っているのかさっぱり分からないわ」

「奇遇ですね、お嬢様。私も何を言っているのかさっぱり分かりません」

何だか頭が痛くなってきたわ。

「よ、妖夢? 私、ひよつとしたら紅魔館の連中が月見をしようとしたけど、妖夢もお気に入りの団子屋さんが売り切れで、仕方なく私達の団子を持っていた、という可能性もあるかもしれない、かしら? って言っただけよ?」

あ、お嬢様も頭痛がはじめたようね。

「なんなのよそれ! そんなの推理でもなんでもないじゃない! そんな事の為に貴重な時間を無駄にさせるわけ!」

「お嬢様、気持ちは分かりますが落ちついて下さい」

気持ちは分かるわ。

こんなポンコツ主従に構ってる暇などないのに。

「もういいわ。咲夜、手早く片付けるわよ!」

「はい、お嬢様！」

「来なさい。今宵の楼観剣は一味違いますよ！」

「もう妖夢つたら、それじゃ私も少し楽しみましょうか♪」

それから私達は、私対妖夢、お嬢様対幽々子、で弾幕ごっこを始めたのだけど、決着はすぐに着いた。

「これで終わりよ！ 【紅符・不夜城レッド】」

「あゝれ〜♪」

やる気満々の妖夢と違い、なぜか弾幕ごっこにノリ気に見えなかった幽々子を、お嬢様がスペルカードで倒した。

すると、私と戦っていた妖夢の気が逸れた。

「幽々子様!？」

「悪いわね、妖夢。私、ユウキさんと違ってナイフは投げる専門なのよ 【幻符・殺人ドール】」

そこを私が一気に決めて、これで勝負ありね。

「そ、そんなあ〜」

「はいはい、私達の負け。潔く引き下がるわ〜」

「待ちなさい、亡霊組」

ボロボロになった2人はそのまま白玉楼に帰ろうとした所、お嬢様が呼び止めた。

「ねえ、幽々子。まさかと思うけど、あなたうっかり妖夢の御団子を食べちゃって、それを誤魔化す為にそれらしい理由つけて私達になすりつけようとしなかったかしら？」

「ギクツ!? なんのことでしようか？」

ああ、そういう事ね。

「なるほど。妖夢が好きなお団子屋ってユウキさんと良く食べにいつている、あのお店ね。私もよく彼と食べに行っているわ」

「はい。以前、一緒に買い物をした時、お師匠様に勧められて以来、あそこの御団子が大好物になったんです」

妖夢ったら、いつのまにユウキさんと人里デートだなんて。

ま、私もよくデートしてるからいいのだけど。

「そう。フランお嬢様もユウキさんに連れられて一緒に食べて、大好物になったわ」

「えっ、私行った事ないんだけど？ たまにフランが寺子屋から幸せそうに帰ってきてるのって、それ!？」

お嬢様が衝撃の告白をされたような顔をしている。

そう言えば、お土産に買った事はなかったわね。

つついっ彼と話しながら食べるのが楽しくて、いつも忘れちゃうのよね。

「ちなみに、美鈴やパチユリー様もたまにですが、人里で彼と食べてますね」

「何よそれ！ ユウキったら、皆を誘っておきながら私も誘いなさ……いえ、私の分もたまには買ってきてもいいでしょ!？」

「お嬢様、誤魔化し切れていませんし、怒るのそこですか」

「ついうっかりトドメを差しちやったわね。」

「コホン。ともかく、そう言うわけで私達もあの団子は大好物だけど、いつもユウキさんと食べてるから、わざわざあなた達の所から盗んだりはしないわ」

「いや、その反論もおかしいわよ！ まあ、確かに盗んではないけどね！ その団子、私食べた事ないもの！」

お嬢様が拗ねているのは、団子を食べた事がないせいなのか、はたまた、ユウキさんと食べた事がないせいなのか、9割以上後者でしょうね。

私の言葉を聞いて、妖夢はジツと目を閉じ考え込んだ後、幽々子に刀を向けた。

「幽々子様、謀りましたね？」

「な、なんのこことかしら〜？」

「お覚悟を！ 食べ物への恨みは怖いのは幽々子様が一番よくご存知ですよね！」

「きゃー!! ごめんなさ〜い!」

亡霊コンビは漫才をしながら飛び去って行った。

「……はあ〜」

残された私とお嬢様は、目を合わせると同時に深く息を吐きだした。思わぬ邪魔に出鼻をくじかれたけれど、これで竹林へ行くことが出来るわね。

竹林へ入り、パチュリー様に教えられた反応があつた場所まで進んで行き、竹林の奥に屋敷みたいなのが見えたが、ここでも思わぬ妨害が入つた。

屋敷に向かつて飛んでいるはずが、見当違いの方向にばかり向かつて行つてる。

真正面にあつたはずの屋敷が、いつの間にか右にあつたり、遙か後方にあつたり。

「これは、ずらされているわね……んっ？」

「お嬢様？」

辺りを見渡していたお嬢様は突然険しい表情を浮かべ、チラリと竹林の一角へと一瞬だけ目を向けた。

そこに誰かいると言う事かしら

確かに、誰かの気配がする。

うまく隠していて、僅かにしか感じないけれど、誰かいる。それも2人。

「咲夜！」

「はい！」

ナイフを数本投げつけると、2つの人影が飛びだしてきた。

「ビツクリしたわ。こんなにすぐ見つかるなんて思わなかった」

「だから言つたら。あの2人は手ごわいって」

仲がよさそうな2人は、偽の月明かりに照らされた所へ降り立った。

1人は男性で、もう1人はウサミミを生やした女性。

問題は、男の方。

その男は私もお嬢様も良く知っている、彼だった。

「よつ、こんばんは2人共。今日はいい月夜だな」

「なんであなたがそこにいるんですか、ユウキさん？」

そう、私達を阻むように降り立ったのは、ユウキさんだった。

続く

第121話 「相棒」

数時間前 永遠亭

俺達は月の異変を起こした理由を聞く為永琳の元へきた。

最初は、素直に理由を教えてくださいないだろうと思っていたが、永琳は俺達を見るなり溜息一つ付いてこう言った。

「分かりました。全てをお話ししましょう」

「師匠!？」

側にいた鈴仙は驚いた声をあげたが、輝夜は特に何も反応はせず楽しそうに微笑んでいた。

「いいじゃない鈴仙。仮にここで嘘を言っても彼には通じなさそうだし。妹紅だけならまだしも、彼と文まで相手にするのは得策じゃないわ」

「だからってそんなあつさりと!」

「それに、あまり時間に余裕はなさそうよ」

永琳はチラリと外に目を向けた。

彼女も自分達以外の誰かが、何かをした事に気付いたようだな。

それらへの対処の為に俺達への対応はスマートに行かせたいんだろう。

妹紅と文に目を向けると、2人共黙って頷いた。

『下手に事を荒げるつもりはない』

それは俺だけではなく彼女達も同意見だ。

一応、人間である俺と妹紅はともかく、妖怪である文には月の異変はどうしても放置出来ない物だった。

だから最初は少々血気盛んに見えたけど、永琳達には俺が面倒をかけて、尚且つ借りが沢山あるんだから穏便にいくならそうしたいと言うと、渋々納得した。

「と言うわけで、全てと言っても時間が無いから掻い摘んで話す事になっちゃうわね」

「ああ、それで構わない」

「と言っても、ほとんどの事情はあなたも妹紅も知っているから、その天狗さんに話すって事になるわね」

そうして永琳は自分達が月からの逃亡者で、鈴仙に月から今度の満月の夜に使者が来ると言う連絡が入った事を説明した。

ついでに、その連絡のせいで俺の事を月の刺客と勘違いした事も言うのと、妹紅も文も鈴仙を睨みつけたがすぐに向き直った。

「その使者が幻想郷にこられないように月に細工をしたのよ。どうやったかは企業秘密ね。で、これをするとう幻想郷の妖怪達に影響が出ると言う事も分かっていたわ。それを知られないようにする為にもあなたをここに引きとめたと言うわけなのよ」

「やけにペラペラと話してくれませぬ。何か裏があるんじゃないですか？」

「あら、それはブン屋としての勘かしら？」

永琳の話に裏はない。

これは、俺が暗部で培った勘によるものだ。

それは文も同じのようだ。

でも、だからこそ、彼女がここまで話すのが納得……ああ、そう言う事か。

「永琳、俺、いや俺達に協力させようって事か」

そう言うとう永琳は目を見開いた。

流石に気付かれるとは思ってなかったか。

「あ……なるほどね」

「そう言う魂胆でしたか。納得ですな」

「？ なんの事ですか？」

妹紅と文も気付いたが、鈴仙だけは分かっていないようだ。

これは永琳と輝夜で考えた事で、鈴仙には知らせてなかったんだな。

「簡単な事だよ鈴仙。俺達を月からの使者への迎撃要員として考えていたって事さ」
「えっ？ ええ〜!?」

「ユウキさんのお人好しさを知った皆さんは、鈴仙さんを迎えに月から刺客が来て、尚且つ彼女自身が月へ帰りたくないと思っていると知ったら、妨害の手伝いをすると考えたんでしょね。ユウキさんはあなた達に借りがあると思つていますし」

呆れながら文が言う通りだ。

俺も鈴仙が月へ戻りたくないのに刺客が来ると知ったら、手伝つただろうな。

「で、ユウキが手伝うと言えば、彼を心配して付きっきりの文も渋々ながらも手伝うと言いだすでしょね」

「あら、それはあなたも同じでしょ、妹紅？」

妹紅は、輝夜の指摘に顔を赤くしてそっぽを向いた。でも、否定しないのか。

さて、この推論は多分当たりかな。

実際俺は話を聞いて何か手伝えることがあれば手伝おうって思つてたし。

文と妹紅がノリ気になるかどうかは、それは彼女達次第か。

ここ数日接して思つた事、永琳つて紫以上に頭が切れる策士だろう。

でも、なぜか紫と違つて嫌悪感は抱かなんだよな。

それほど紫が信用ならないからかな。

「ともかく、刺客の心配はいらなないと思えますけど?」

「それは、どういう意味かしら?」

「幻想郷には外部から侵入出来ないように結界が張られています」

これは霊夢から何度か聞かされたな。

結界がいくつも張られていて外部からの侵入者を防ぐようにされている。

万が一突破されてもすぐに対処できるようにもしてあると。

「月の科学力を甘く見ない方がいいわよ」

「いえいえ、甘く見てないからこそ、八雲紫は当時の博麗の巫女と協力して強力な結界を張ったんです」

「……あなた、千年以上生きてるわね?」

それを聞いて、永琳の目が細まった。

そう言えば、昔紫は月を攻めた事あったんだっけ。

前に萃香がみすちーの屋台で教えてくれたな。

「と、歳の話はユウキさんの前でしないでください!」

「それを言うなら妹紅だつて千歳は軽く越えてるわよ?」

「さつきからいちいち私を巻き込むな! それを言うならお前だつてそうだろ輝夜!」

「むっ、私はいいのよ。永琳なんて億単位なんだし」

話が壮大にズレまくってるんだが。

「聞かなかった事にしよう」

「……そ、そうしてちようだい」

あ、輝夜に億単位って言われて永琳がシヨック受けてる。

否定しないって事は、そうなんだろうな。

「ゆーちゃんがこの中じゃ一番若いって事で」

「と言うか、まともな人間が俺しかいないんだが」

そう言うとなぜか全員が一斉にこつちを向いた。

なんだその顔は。

「ユウキが、まともな人間、か」

「何でしょうか。至極真つ当で正論で事実なんですけど、どこか否定しなきゃいけない

ような……」

「うん、まとも、って所は言い過ぎた」

人殺しとかしまくってたし、まともなわけがなかったな。

「いえ、そういう意味じゃなくて、その……えっと」

鈴仙が苦笑いを浮かべて何か言いづらそうにしている。

「はつきり言ってくれ、鈴仙」

「ゆーちゃん、人間やめてない？」

「それははつきり言い過ぎじゃないか、てる!? やめてないしやめた事もない……多分」
何この否定しにくい空気。

「確かに医学的にも生物的にも人間なのは間違いないわね」

「どうしてそこまで専門的に分析しなきゃ人間って分からないんだよ。もつと簡単に分かるでしょ、永琳」

「蓬莱人や宇宙人や妖怪からこうも言われる時点で、あなた人間じゃないと思うわ」

「お前、俺がかぐや姫を知らなかった事、絶対根に持って言ってるだろ輝夜……じゃなくって！ また、話が、ズレてる！」

もう何の話をしてたのかわかんなくなってきた。

「ふふつ、話を戻すわね。確かにあなた達の指摘は間違っていないわ。けど、誤解しないでね。こちらからあなたにお願いしよとしたのよ。仕事の依頼としてね」

「依頼として？」

「ええ、あなたは幻想郷で何でも屋をしてるって聞いてるわ。だから怪我の様子次第でと思ってたのよ。でも、文の言う通りなら、そこまで警戒する事もなかったのね」

そう言いながら永琳は大きく息を吐いた。

まるで、肩の荷が降りたかのように。

「ここに引き籠つて数百年。外の情報は手に入れてたけど、幻想郷も外の世界も色々変わったのね。永琳、もう隠れる必要はないんじゃないかしら？」

「姫様……そうですね。鈴仙もそれでいいかしら？」

「はい。私はお2人にどこまでも付いて行きます」

なにやら永遠亭の中で色々話が進んでるみたいだけど、そう簡単にはいかないんだよな。

「そちらはそれでいいかもしれないけど、一度異変を起こしちゃったのでしたら後には引けませんよ？　すでに異変解決のために八雲紫が動いているみたいですし」

「あら、じゃあやつぱりこれは彼女の仕業ね。こんな事が出来るのは彼女くらいのものだし」

永琳達と紫には、月の侵攻以外にも色々要因縁があるみたいだな。

そつちには俺には関係ないけど。

「博麗の巫女である霊夢さんもこの異変解決のために動いているはずですよ。そちらはどうするんですか？」

「そうねえ、このまま待ち受けましょうか」

「ええ〜!？」

のほほんと言った永琳に、鈴仙とてゐが驚いた声をあげた。

妹紅と文も驚きの表情を浮かべている。

「月の結界を解除してもいいのだけど、八雲紫が上書きしちゃったからちよつと面倒です。どうせなら、博麗の巫女さんに自己紹介を兼ねてここまで来てもらいましょう」

「はあ……進んで異変の退治側になる人を初めて見ましたよ」

それは俺も同感だ。

「じゃ、俺もそちらの計画通り協力するかな」

「あら、もうあなたが手伝ってくれなくてもいいのよ？ 幻想郷側への対抗ではなく月側への対抗手段と思っていたのだし」

「そうよ。それにこれは私達の問題。怪我人のあなたに無理をさせられないわ」

「心配してくれてありがとな、鈴仙。怪我なら鈴仙だってそうだろ。それに借りは少しでも早く返したいんでね。勝手に返済させてもらう。迷いの竹林で待ちかまえておくよ」

それに、異変を解決する側じゃなく異変を起こす側に付くのもたまには悪くない。

「ユウキさんだと誰もここに近寄れなくなると思いますが」

「買い被りすぎだ。弾幕ごっこなら霊夢達の方が何枚も上手だろ。あ、弾幕ごっこなんだから文も妹紅も手を出さなくて大丈夫だぞ」

まともに戦えば勝てると思うけど、弾幕ごっこじゃ無理だな。

現に、靈夢相手に何度か練習で弾幕ごっこした事あるけど、負け越してる。

「ああ、月からの刺客よりは遥かにマシだしな」

「そうですね。そっちの方が面白そうですし。じゃ、私はこっちを使いますか」

文はどこからかカメラを取り出したが、どこにしまつてたんだ？

「では、取材許可を貰えますか？ 異変解決の瞬間を撮りたいので」

「ちやつかりしてるわね。いいわ、あなた達を利用しようとしたのだしね。でも、昔の事はあまり書かないでね」

「はい。勿論です！ ではユウキさん、行きましようか。私は手を出しませんけど、近くでばっちりカメラガール役しますね」

ガールつて……いや、突っ込んだら負けだな。

そこへお京がやつてきた。

彼女は迷いの竹林周辺の様子を探っていた兎達から報告をもつてきたそうだな。

それによると、2人組の人影が空を飛びまわっているとの事だ。

「2人組ね。鈴仙、あなたはユウキ君と一緒にお客さんのお出迎えをしなさい」

「えっ、私ですか!？」

「そうよ。相手が2人組ならこつちも2人の方がいいでしょ？ てゐは兎達の指揮があ

るし、私は姫様の護衛。ほら、あなたしかいないじゃない」

「でしたら、私がユウキさんのパートナーになります！」

「いや、なら私がユウキとペアを組む」

2人組、パートナーか。

「鈴仙はここら辺の地形が良く分かっている。けれども、弾幕ごっこは不慣れ。なら、弾幕ごっこに慣れているユウキと組んで弾幕ごっこに慣れた方が今後の為でしょ？」

「分かった。よろしく頼むな、鈴仙」

「「えっ!?!」」

えっ? なぜにみんなそこまで驚く?

俺がすんなりと鈴仙と一緒に承諾したのが、そんなにビックリか?

「ま、まあ、ユウキさんがそういうのでしたら、私は何も言いませんけど。どうせ近くに

私もいますし!」

「私も何かあった時の為に近くで待機しておく」

なんで2人共不機嫌になったんだ?

鈴仙はもうわだかまりないってのに。

「??」ともかく、時間もあまりなさそうだし。行こうぜ、鈴仙」

「あ、はい。では、お師匠様、姫様、行ってきます。てゐ、あなたも急ぐ!」

「気を付けてね。あなた達のいる方に行くように結界を調整するから」

「楽しんでらっしやい♪」

「は〜い。鈴仙ちゃん、顔赤いよ〜？」

「うっさい！」

結局、成り行き任せで彼と一緒に侵入者の迎撃をする事になって、今こうして2人してやってきた2人組と対峙しているけど。

はあく〜なんでこうなつちやうのかな。

なぜ私なんかと一緒になるのを、まるで喜ぶかのように承諾したのかを彼に聞いたけど、そうとする暇もなかった。

やってきたのは、見た所吸血鬼の幼女と人間のメイドと言う変わった二人組だった。

彼女達はユウキの知り合いみたいで、彼の姿を見て驚いていた。

「よっ、こんばんは2人共。今日はいい月夜だな」

「なんであなたがそこにいるんですか、ユウキさん？」

2人共、滅茶苦茶睨んでる。

異変が原因で睨んでいるのじゃなくて、ユウキさんがこつちにいるのが原因なのは明らかだね。

なんだかちよつと優越感みたいなのがあるけど、気のせいね気のせい。

「なんでつて、半分は仕事で、半分は借りを返す為、だな」

「借りを返す?」

「そう言えば、咲夜にも関係してる事だったな。うん、彼女達には借りがあるんだよ。白玉楼の一件でのな」

「なるほど、あの時の薬の出所はここだったわけね」

それつて、前に彼が瀕死の重傷を負つて妹紅さんが薬をもらいに泣きながら土下座した事を言つてるのかしら。

それなら、私ではなくお師匠様と妹紅さんへの借りだと思ふのだけど、誤魔化してる?

「咲夜、ここは引きましようか。彼は元気そうだし、思つてたより深刻な状況じゃなさそうよ。恐らく霊夢も動いてるみたいだからそつちにやらせましょ。それに天狗や蓬萊人の気配もあるし、面倒はごめんよ」

「本当ですか? なんで天狗までいるのか気になりますが。正直拍子抜けもいい所です。私にとつても恩人になるわけですし、一度引きますか。ですが」

「ええ、分かつてるわ。このまま黙つて帰るわけにはいかないわよね」

吸血鬼とメイドは小声で話しているけど、私にはバツチり聞こえてるのよね。

隣の彼は首を傾げている所をみると、聞こえてないみたいだけど。

「コホン、分かったわ。私達はこれで手を引くわ」

「えっ？ あれ？」

何を納得したのか分からないけど、彼女達は手を引くみたいね。

正直、ありがたい事なのだけど、嫌な予感しかないわ。

彼も彼女達が何もせずには帰ると言うのは拍子抜けだったようね。

「この異変に關してはもう興味なくなつたわ。あなたがそつち側にいる時点で深刻さはなさそうだし。でも……」

「横にいるウサミミの彼女は一体……」

「ダレ？」

——ゾワッ！

な、何今の？ 殺気!?

2人が私を睨んだ途端、背筋がぞくぞくつとじた。

一体何だつて言うの？

「ああ、彼女は鈴仙・ウドンゲイン・イナバだ」

今、発音おかしくなかつたかしら？

「……鈴仙・優曇華院・イナバよ。あそこにある永遠亭の住民、と言つた所ね」

詳しく自己紹介する必要は今はないでしょう。

「うん、彼女は俺の相棒だ」

「「はっ？」」

相棒、確かに彼と2人でつてお師匠様も言っていたけど、だからつて相棒とあつさり言われると、意外だけど少し嬉しい。

仲間を見捨てた逃亡者の私を、勘違いから殺しかけた私を、彼は当然のここのように言ってくれた。

侵入者を前にして、自然と頬が緩む。

そんな私を見て、吸血鬼とメイドは深く息を吐き、今度はユウキさんを睨んだ。

あれ、こういう反応つい最近どこかで見た気がする。

「……なるほど、ユウキまたなのね」

「ええ、またなのですね。ユウキさん」

「また、つて何が？」

あつ、わかった。妹紅さんとあの天狗だ。

まさか、この2人もユウキさんの事を？

ということとは、今の状況つて非常にまずい気がするんだけど!?

「ねえ、咲夜。どうしましょうか。今日はこのまま帰ろうと思つただけけど、なんだか非常にムカつてるわ」

「そうですね、お嬢様。私も非常に腹が立っています」
 「おーい？ 2人ともなんか顔怖いぞ？」

ユウキさんって鈍感すぎるにもほどがあるでしょ!?

あんなに殺気や気配に敏感なのに、なんでこういうのには超鈍感なの!? わざとなの

!!?

「そのウサギ。悪いんだけど……」

「八つ当たりにつき合ってくださいね。大丈夫、ハリウサギになってもらうだけだから」
 ♪

吸血鬼は紅く輝く爪を伸ばし、メイドは両手にナイフを構え、とてもいい笑顔でこちらにやってきた。

あ、この顔知ってる。お師匠様がマジ切れした時の顔だわ♪

なんて思ってる場合じゃない!

「ちよつと、どうするのよユウキさん!？」

「えっ!?! これ、俺のせいなのか!?!」

「どこからどうみてもあなたのせいよ!?!」

3人で同じことを叫んじやったじゃない。

あーもう、不幸だー!!

続
く

第122話 「タツグバトル」

俺と鈴仙コンビVS咲夜とレミリアコンビの弾幕ごっこが始まった。

まず、レミリアが俺に、咲夜が鈴仙の方へと向かってきた。

分かれる前に鈴仙には、咲夜の能力は簡単に説明したから大丈夫かな。

「思えばあなたと弾幕ごっこって初めてだったわね」

「そういえば、そうだな」

レミリアの弾幕をよけながら、鈴仙の力を使った弾幕を張る。

鈴仙の弾幕は銃弾の形をしていて、指先から発射される事もあり自然と指鉄砲の形になるんだよな。

なんかこうやって撃っていると、少し懐かしい感覚がする。

この弾丸型弾幕は弾速や連射力は少しみんなに劣るけど、一発一発の威力は強い。

それに指鉄砲の形を変えることで、拡散型や連射型にもできる。

いや、指の形変えなくてもできるけど、こういうのは形が大事だ。

「ふーん。あのウサギの力を使っているのね。私や咲夜の力使ってもいいのよ？」

「それはまた今度の機会に。今の俺はあいつの相棒だから」

「……あくまでも相棒だから、ね」

あれ？ レミリアの機嫌がまた悪くなった？ 弾幕が濃くなってきたし!?

「おおく結構ハードだな」

「あら、今の私はルナティックよ！ 【紅符・不夜城レッド】

「ちよつ、いきなりスペカかよ！」

レミリアを中心に蝙蝠型の弾幕が高速で飛来してきた。

これは迎撃するより回避した方が早い。

このスペカはばら撒かれるタイプではなく、一転集中型なので軌道は読みやすい。

ただ、ものすごい密度と弾速なので、こつちも思いつきり飛ばさなきゃ、あつという

間に捕まって一気に落とされる。

鈴仙の飛行速度は遅くはないけど、速くもないからちよつと回避には厳しい。

地上の竹林に逃げ込めば回避できるかもしれないけど、あつちじや鈴仙がいる。

下手に向こうに飛ばせば巻き添えになる。

負けても問題ない弾幕ごっことはいえ、足を引つ張つて負けたくはない。

たまに霊夢や魔理沙、美鈴達とやりあうが、今回は異変解決のためのやられる側の弾

幕ごっこ。

勝敗が生死に関わらない真剣勝負っていうのは、俺にとつちやめちやくちや貴重だ。

「なかなかやるじゃない。いつもフランの相手をしているだけはあるわね」

「まあな。大抵俺は回避に専念するけど」

「そうね。それに比べて、あのウサギは……」

チラリとレミリアの視線が下を向く。

俺も横目で竹林へと目を向ける。

そこには、竹林を盾にして防ぎながら反撃している鈴仙の姿があった。

その姿を見て、懐かしい気持ちになったのは、学園都市にいたころの俺の姿がだぶつたからだ。

レミリアは鈴仙の姿を見て、つまらなさそうにため息をついた。

「あのウサギ、ここを戦場か何かと勘違いしてるんじゃないの？　というか、弾幕ごっこした事あるのかしら」

レミリアの言う通り、鈴仙の戦い方は弾幕ごっこというよりは、軍隊の訓練や模擬戦、よく見てもサバイバルゲームだ。

物陰に隠れながら隙をうかがつての反撃、泥臭さはあっても優雅さはあまりない。

「あなたが相棒として組んだのつて、あの兎が弾幕ごっこに不慣れだったからなのね。くすつ、あなた本当に先生やお師匠様が板についてきたわね。妬げちゃうわ」

「そういうんじゃない……いや、そうなんだけど。うーん、ちよつとニュアンスが違うという

か、恩を返すというか……ああ、もう！」

何やってんだ俺！ 自分で相棒って言っておきながら何ほったらかしにしてんだ！
確かに2人を分断した方がいいだろうけど、それじゃ意味がない！

「鈴仙！」

「えっ？」

鈴仙に迫るナイフ弾幕を撃ち落しながら、彼女の隣へと降り立った。

「ごめん」

「い、いきなり何を謝ってるのよ」

訳が分からないという顔をしているけど、これは俺のケジメだ。

「ふふっ、やっと面白くなりそうね」

レミリアも咲夜の横に並び立ち、再び2対2の構図になった。

「鈴仙、やり方を変える。まずは俺の動きに合わせてくれ。2人でやるぞ」

「そんな簡単に言わないでよ。私でもあの2人のコンビネーションは厄介だつてすぐに分かったのよ。急造コンビの私たちじゃ、分断して各個撃破の方がいいでしょ」

さすが、そこまで見抜いていたとはね。

「いいや、できるさ。俺たちなら」

「……またすぐそういうんだから」

鈴仙は俺が何を言おうとしているか理解できたようだ。

やっぱり、彼女と俺は戦闘スタイルが似ているだけあってそういう思考は通じやすいかな。

「あつ、前！」

「おおっ!?!」

いつの間にか、レミリアと咲夜がすぐ側まで近づいてきていて、爪とナイフを振るってきた。

鈴仙を突き飛ばし、地面を蹴って何とかかわせた。

2人は不機嫌そうにしながら俺を集中的に狙ってきた。

まあ、敵前で作戦会議してればそうなるか。

「随分と余裕ですね！」

「私たちが前にしていちやつくなんて！」

「それでもない。つて、別にいちやついてなんかないぞ!?!」

「……………」

うわあゝ2人そろって眉間に皺が……そんな事考えている場合じゃない！

至近距離からの弾幕って地味に格闘しかけられるよりもきつい！

「全く、何をやってるのよ！」

2人の後ろに回り込んだ鈴仙が両手で弾幕を放った。

果然に後ろからの攻撃だったが、2人は簡単にかわした。

けど、おかげで2人が離れてくれた。

「さんきゅ」

「さっきの借りを返しただけよ。それよりも、やるならさっさとやるわよ」

「ああー」

2人同時に地面を蹴り、竹林を跳び回った。

全く、ユウキさんったら、こんな時にも何をしているのかしら！

心配して様子を見に来てみれば、見ず知らずのウサギと2人で現れたと思ったら、相棒とか言っちゃって。

私だって西行妖の時に……思えば、あの時は何もしてなかったわね、相棒らしい事。

しいて言えば、妖夢の時にナイフを貸したくらいかしら。

「咲夜、イライラしすぎ……って今度は軽く落ち込んでない？」

「いえ、もう大丈夫です。ですが、お嬢様もイライラしていますね。真っ先に彼を狙ったじゃないですか」

本当なら私がユウキさんの相手をしようと思ったのに、お嬢様が猛スピードでユウキ

さんに突撃した。

よほど腹が立ったのね。私も同じ気持ちだけど。

「そんな事より、来るわよ！」

「はい！」

ユウキさんとウサギは地面を蹴って、それぞれ私達を中心に弧を描くように竹林を走り回った。

いえ、走り回っているというより、竹林を足場にして駆け回っている。

ここら辺の竹は、見たこともないほどにしなやかで頑丈にできている。

だから、バネのように飛び跳ねることが出来る。

それは、木々や壁などを蹴って、高速で跳ね回る動きを得意とするユウキさんには格好の場所ね。

しかもそれはあのウサギにも言えるようで、2人揃って私達を取り囲むように跳ね回って弾幕を撃ってきている。

飛び回られるよりも速く感じるわね。

「ええい、うっとおしい！」

「お嬢様、落ち着いてください！」

無論、私達もただ黙って弾幕をよけているだけじゃなく、動きを先読みして弾幕を

撃っているけど、当たらない。

時を止めれば簡単に補足できるけど、時止めのスペカはユウキさんにはお見通しだから、通用しないかもしれないわね。

つて、そんな事思っている間に2人の速度は増すばかりでそれに合わせて弾幕の濃さも上がってきている。

通常弾幕だけど、2人揃って同じ弾幕を使っているせいか、ちよつとしたスペルカード並みになつていいるわ。

仕方ないわ。ここで一気に決めさせてもらうわよ、ユウキさん！

「っ！ 今だ鈴仙！」

？ ユウキさんが自分の目を指差した？

まずいつ！ このタイミングでスペルカードを使われる！

「【長視・赤月下（インフレアドムーン）】」

ユウキさんとウサギの目が赤く輝いた瞬間。

「させないわ！ 【幻符・殺人ドール】」

スペカが発動するまさに寸前で、私のスペカが間に合った。

今私以外の時間が全て止まっている。

この間に、周囲に無数のナイフをばら撒いた。

普通にやったのならば、私の能力を知っているユウキさんなら時が動いた瞬間、いきなりナイフが無数に現れても驚かずに冷静に回避されるでしょうね。

それは、私の能力を警戒していたウサギも同じ事。

けれども、2人ともスペカを発動するとほぼ同時に使ったので硬直があり、これならばナイフに気づいてもスペカが完全に発動する前にナイフが当たるはず。

もしくは、交わされたとしても、これを予想して予め準備していたお嬢様の高速弾幕スペカが2人を捉えるわ。

「そして、時は動き出す……なんてね」

「っ!?!」

時が動き始めた瞬間、無造作にばら撒かれたナイフが一斉に2人に向けて放たれた。

2人とも、少しの驚きはあったけど、動くタイミングが遅れたわね。

これじゃ、私のナイフはかわせない。

案の定、ナイフは2人の体を……すり抜けた!?

なぜ、あのタイミングではかわせないはずなのに!

「幻覚よ咲夜!」

お嬢様に言われてハッと我に返った。

しまった。策に乗せられたのはこっちだった。

恐らくあの時のスペカは攻撃じゃなく、回避のためのスペカだったのね。

ユウキさんとウサギは、私達を挟むように地上と上空から両手を合わせて指鉄砲の構えをしていた。

「『双弾・幻月開花（ルナティックエクスペロージョン）』」

2人の指から特大の銃弾の形をした弾幕が1つ放たれ、続けて両目から放たれた光線がその弾に当たり加速されて猛スピードでこつちに迫ってきた。

今度はこつちがかわせるか否かってタイミングね！

「咲夜かわしなさい！」

「もちろんですわ！」

でも、悪いけど弾幕ごっこなら2人よりも馴れているわ。

冷静にその場から離れて銃弾を交わした。

これはどうやら威力と弾速重視のスペカね。

あのウサギはさつきから連射よりも威力の高い弾幕しか撃ってきていない。

まだ慣れていないのか、拡散型のスペカを持っていないのか。

どちらにせよ、交わしてしまえばこちらのものよ。

さあ、今度はこつちの番。

お嬢様がスペカを構え、私の次のスペカの準備を……

——バンツ!

「えっ?」

背後で何か破裂した音がして、振り向くと先ほど2人が放った銃弾が激突してはじけ飛び、無数の弾幕となって目の前に広がっていた。

あ、これは無理ね。

——ピチュン!

「あややくこれは思ってたより早く終わっちゃいましたねー」

少し離れた場所でカメラを構えていた私は、被弾した紅魔館の2人を見て隣にいる妹紅へと話した。

「急造コンビにしちや手際よすぎないか?」

妹紅はこの結果に驚いているようで、目をぱちくりさせている。

でも、それは私も同感。

予想では、ユウキさん達は善戦しつつもあの2人にコテンパンにやられると思っていた。

確かにユウキさんもあのウサギも強い。

それになぜか知らないけど、非常に腹立たしいけど息も合っている。

けど、それ以上にレミリアと咲夜の紅魔主従コンビが上回っている、はずだった。だけでも、結果は全くの正反対。

最初は、ユウキさんはレミリア相手に翻弄していたが、ウサギの方がメイド長に押されっぱなしで竹を盾にして抵抗するのがやっとだった。

それが、ユウキさんがウサギの方へ行き、少し話をして2人して駆け出すと状況が逆転した。

うーん、認めたくないけど、それからの2人の動きは綺麗だったわ。

スペカを使うタイミングの良さもだし、何より竹林を足場に駆け回る2人の動きはお互いがお互いをカバーしていて、見事というほかなかったわね。

そういえば、ユウキさんが言っていたけど、あのウサギは自分と似た戦闘スタイルらしい。

お互い銃とナイフを駆使して相手を翻弄して仕留めるのが、似ていると言っていた。

そういう軍隊的な動きというのは私には分からないけど、今回の弾幕ごっこを見て納得できた。

納得できたんだけど……

「何だかとても」

「ええ、そうですね」

「面白くない」

2人して同じことを思っていたようで、互いに苦笑いを浮かべつつユウキさん達のところへ向かった。

「ユウキさん！ お疲れ様でした！ 快勝おめでとうございます！ ついでに、そのウサギさんもお疲れ」

「まさか勝つとは思わなかったよ」

「よっ、写真はうまく撮れたか文？ 勝てたのは鈴仙のおかげだよ、妹紅」

「あ、あはははっ……」

明らかに不機嫌オーラ全開の私達に、ユウキさんは笑顔で応えてくれた。

対するウサギは、不機嫌の理由に心当たりがあるのか、若干引き気味な苦笑いを浮かべている。

「うゝ……なんでこうなるのよ」

「申し訳ありません、お嬢様」

そして、ここに私達以上に納得がいなくて面白くないという顔をしている負け犬ならぬ負け蝙蝠とメイド長。

2人ともまだまだやる気は十分だったが、あれだけ見事に被弾した以上、ここは大人しく引き下がるみたいね

「悪いな、咲夜、レミリア。わざわざ心配してきてくれたつてのに」

「全くよ。なんであなたがそっち側にいるのよ。訳が分からないわ。説明して」

「そうです。心配かけたと思っっているなら説明してください」

大人しく、ではなかつたわね。

まあ、気持ちはよーよーく分かる。

私がおし2人の立場だつたら、納得がいくわけない。

「まあまあ、お二方とも。弾幕ごっこで負けたのですから、事情は今度という事でいいじゃないですか」

「あなたもあなたよ、文！ どうして、こんな所で妹紅と2人しているのよ」

「私はここらへんに住んでるから、たまたまだ」

いや、その言い訳は多分通用しないわよ、妹紅。

「たまたまなわけないでしょ！ 異変の事とか色々偶然にもほどがあるわ！」
ほらね。

というか、最初は一旦引き下がると言っておいて、弾幕ごっこにも負けたのに引き下がる気ないわよね2人とも。

「あーもう、ともかく、異変が終わつたらちゃんと言明するから。霊夢も来るんだろ？
纏めて今度話すつて」

「……………」

紅魔の2人はウウキさんとウサギ、それに私達をしばらく睨んだ後、ものすごく深いため息をついた。

いや、私達まで睨む必要は、ないわけないわよね。

はあくこの2人でこれじゃ、霊夢が来た時が怖いわね。

ブルッ！ 考えただけで寒気がしてきたわ。

「……私達、逃げといたほうがいいかも」

「同感ですね。八つ当たり受ける可能性大です」

「ちよつと、怖いこと言わないでよ。その霊夢っていう博麗の巫女と直接対峙する私よりはマシでしょ!？」

確かに。異変側にいるとはいえ、この事に関しては霊夢だろうと、異変解決は二の次になるわよね。

で、怒りの矛先はウウキさん、よりも彼女の方に向くわよね。

そう思うと、同情しか浮かばないわ。

「鈴仙、強く生きろよ……」

「骨は拾ってあげますからね……」

私と妹紅は生暖かい目で優しくウサギを励ました。

「やめてよ、2人共!? 今日私の命日なの!？」

厄日なのは間違いないわね。

「おにいさ〜ん! 鈴仙ちや〜ん!」

そこへ、お京と呼ばれている兎が走ってきた。

ユウキさんをお兄さんと呼ぶ姿を見て、紅魔の2人の目がギロリと彼へと向いた。

けど、当の本人は全く気付いていない。

「あら、どうしたの?」

「新しい侵入者、巫女と胡散臭いお婆さんの2人です。今はてゐちゃんが相手していません」

「あーそれ霊夢と紫だ。なんだ、紫まで来たのか」

八雲紫まで来るとは予想外ね。

って、そんな事より、今この子八雲紫の事なんて言った!?

怖いもの知らずというか、天然というか、お京……恐ろしい子!

「あの2人を相手したらてるの奴は……」

「兎鍋になつてるかも」

「(――) 合掌……」

てる、いい兎だったわ……

「ここら、てゐを勝手に殺さない！ それよりも、ありがとお京、あとは私達で対処するから大丈夫よ」

「……気を付けてくださいね」

お京は心配そうにユウキさんとウサギを見上げたが、ユウキさんが優しくなると安心して永遠亭の方へと向かっていった。

「……いいなあ」

「心の声がダダ漏れしてるわよ、文」

「あ、あやややや〜」

紅魔コンビは黙って成り行きを見守っていたが、やがて満面の笑みを浮かべて、ユウキさんへ詰め寄った。

「何があつたのか未だに分かりませんが……ずいぶんと、随分と楽しい時間をすごしていたようで何よりですわ、ユウキ様♪」

「ええええ、これは後で紅魔館に数日監禁して、たーっつぷりとじーっつくりと、説明してもらわないとね♪」

「お、おう。咲夜、笑顔のままナイフを突きつけなくてくれないか？ レミリア、監禁って物騒な事言ってるんだ!？」

火に油、どころか火山に爆弾を投下というところね。

でも、ユウキさんにはいい薬になるでしょ。

……いえ、ならないわね、たぶん。

「さー咲夜、霊夢とスキマが来ると面倒だから帰るわよ。帰ってユウキが来る準備を
なくちや♪」

「そうですわね、お嬢様。ユウキ様へのスペシャルなおもてなしの準備をしないと。で
は、皆様、ごきげんよう♪」

そう言い残して紅魔コンビは去って行った。

残された私達はただ黙って見送るしかなかったわ。

さあ、ユウキさん、それに鈴仙、無事に朝日を拝めるかしら？

ユウキさんは異変が終わった後が本番のようだけどね。

続く

第123話 「VS最強コンビ」

なんとか咲夜とレミリアを退けた俺と鈴仙。

しかし、次に来るコンビは一筋縄ではいかない。

なにせ霊夢と紫という人妖最強コンビといつてもいいコンビが来るからだ。

文と妹紅は俺たちに合掌すると、すたこらさっさと永遠亭に戻ってしまった。

霊夢に姿が見られるとばつちりを受けながら、と言っていたけどそこまで見境ないわけじゃないと思うけどな。

「で、何か対策はあるの?」

「ない」

「即答?! いや、さっきみたいに必勝の策とかないわけ!」

文と妹紅が慌てて去つたのを見て、鈴仙が冷や汗を流しながら対策を聞いてくるけど、ないものはない。

そもそもさっきも必勝してわけじゃなく、臨機応変に対処しただけだしな。

「弹幕ごっこであるの2人を同時に相手にするつてのは、自殺行為に他ならないな。普通に戦うのならばいくらかやりようあるけど」

「そんな2人を今てゐるが1人で相手してるってことよね？」

兎達は直接手を出さずに、てゐのサポートに徹しているだろうかなあ。

実質1対2だな。

「……………」

「だから無言で合掌しない！ 私も心の中で合掌しちゃったけど！」

したのか。

「あつ、やってきたみたいよ。とにかくさつきみたいなの挑発はもうしないでね」

「挑発って？」

はて、咲夜たちに挑発したつもりはないんだけどな。

俺が挑発するのは、ものすごくくえげつないものだし。

「私の事、あ、相棒って呼んで挑発したでしょ」

「えっ？ なんでそれが挑発になるんだ？ それに鈴仙が相棒なのは間違いないだろ？」

そういうと鈴仙は、軽く咳払いして顔をそむけたが、すぐに呆れ顔になった。

何だか少し頬が赤いような？ たくさん動いたから暑くなつたかな？

「と・に・か・く！ 余計なことと言わない！ いいわね!？」

「お、おう」

あまりの劍幕で迫る鈴仙に、俺はうなづくことしかできなかった。

魔理沙とアリスという予想外の邪魔が入ったけど、やっと迷いの竹林にたどり着いた。

と、思ったら今度は落とし穴やら、空飛ぶトリモチやら、網やらわけの分からないトランプに襲われた。

さらに先に進むとウサミミの少女が妨害してきた。

紫並みに胡散臭い雰囲気醸し出している彼女は、当の紫曰くこの竹林のボス兎らしい。

弾幕ごっこで軽く蹴散らしたら、いつの間にか消えていた。

ユウキさんの事をじんも……尋ねようと思ったのに。

「はあくなんなのよこの竹林は」

「トランプに兎に、相変わらず色々あるわねこの竹林は」

「何面白そうに笑ってるのよ。ここの事知ってるなら少しは役に立ちなさいよ」

不本意ながら同行している紫はさつきからこの調子だ。

最初は今回の異変に危機感を感じていたのに、どうも慧音からユウキさんの事を聞いてから様子がおかしい。

緊張感も危機感もあるようだけど、どうも薄れている気がする。

かくいう私もこの異変の犯人の所にユウキさんがいると知って、どこか調子が狂うと
いうか緊張感が薄れてきてる気がする。

まさか今回の異変、もうすでに解決しちやってるんじゃないかしら？ とね。

それでも博麗の巫女として事情を聞かなきゃいけないし、退治もしなきゃいけない。

魔理沙や兎達の妨害で時間を無駄にした。

紫の結界で夜が明けけるのを防いだせいであまり実感がわかないけど、結構な時間が
たっているはず。
急がないと！

と、思っているのに……

「やっほー」

「なんでこんな事になってるのよ!？」

やっと永遠亭が見えてきたと思ったら、目の前に呑気な顔をしたユウキさんが現れ
た。

しかも、横にはさつきの兎とはまた違ったウサミミをした女の子がいる。

ウサミミ女は私とユウキさんの顔を交互に見比べたため息をついている。

ユウキさんという関係なのかしら、じゃなくて！

「ユウキさん、全然帰ってこないから心配してきてみれば、何をしているのかしら?」
「なんかデジャヴを感じるな。まあ、いいか。実は永遠亭のお手伝いをしていてき、これはその一環だ。色々聞きたいことあるだろうけど、あとでまとめて話すよ」

「どうやらユウキさんはこの異変に関わっている所か、なぜか用心棒として雇われているって事ね。」

隣で紫がやつぱり、と言いそうな顔をしている。

「こうなるってわかってたのかしら?」

「なるほどなるほど、細かい話は後で聞いわ。とりあえず今聞きたい事が2つあるのだから、その服見慣れないけどどうしたのかしら?」

今のユウキさんはレミリアからもらった洋服とは全く違う見慣れない服を着ている。

人里にもあんな服はなく、しいて言えば幻想郷に来た時に着ていた服に似ているわね。

「あ、これか? この前やった人形劇のお礼についてアリスが作ってくれたんだよ」

ああ、そんな話をアリスと前にしていたわね。

そういうえば、彼が戻ってこなくなつた日ってアリスに呼ばれて出かけたのよね。

なんでそれがこんな所で用心棒をする話になつてるのかしら。

「パチユリーと魔理沙も手伝つてくれてき。結構動きやすいんだこの服」

ユウキさんはどこか嬉しそうな顔をして服を見せるように一回りした。

それを見て、私も紫も少し驚いた。

あんなユウキさんはあまり見たことがない。

アリスがパチユリーと作った服でユウキさんがあんな顔をするようになった。

それは私にしても喜ぶべきことだし、安心もしたのだけど……どこか面白くない。

「そう。それはもういいわ。じゃあ最後に、横にいるウサミミの彼女は一体……ダレ？」

「れ、霊夢笑顔が怖いわよ？」

知らないわよ。ただこればかりはどうしても今すぐに確認したい事。

これは私の勘だけど、ただの知り合いにしては、ユウキさんとウサミミ女の距離感は近すぎる。

「あーまたその質問か、なんで咲夜もレミリアもそこが気になるかな」

ん？　なんで咲夜とレミリアの名前が出てくるのかしら？

「彼女は鈴仙・優曇華院・イナバと言って、永遠亭に住んでいて、俺のあ……」

そこまで言いかけた時、ウサミミ女がユウキさんの事を軽く睨んだ。

ユウキさんは苦笑いを浮かべてたけど、なんなのかしら？

「鈴仙は、俺の友達だ」

「はいっ!?!」

笑顔でそう言い切るユウキさんに驚いたけど、なんでウサミミ女まで驚いてるのよ。「えっ? まずかったか、鈴仙?」

「い、いえ、まずはくはないし、嬉しかったけど、でも……ああもうこれじゃさっきの二の舞じゃない! ほらあ!」

悲痛な顔で私を指差すウサミミ女。

全く、人の顔を指差して失礼ねえ。

「れ、霊夢ちゃ〜ん? 顔が鬼のようにこわいわよお〜?」

アハハハツ、紫ったら何を言ってるのかしら?

鬼って萃香じゃあるまいし、アハハハハツ♪

「うん、友達ね、友達。なんだーただの友達かー、た・だ・の!」

「?? 霊夢? どうしたんだよさつき来た咲夜達と言い、何か俺変な事言ったかな?」

「もう、ユウキは黙ってて!」

若干涙目でウサミミ女は叫ぶけど、なんでそんなにおびえているのかしら?

それにしてもユウキ、ねえ。私の知らない間にもうそんなに親しげに呼ばれる間柄の友達ができたのね。

そして、察したわ。咲夜とレミリアも私達より先にここへきて、今と似た状況になつたわけね。

ええ、ええ、そうでしょうね。あの2人もこうなるわよね。

だって、付き合いの長い私達の前でいきなりパツと出てきた女が、あつさりとユウキさんの友達になつてゐるんですものねえ。

しかも、ウサミミも似合つてて可愛いし、私よりも胸大きいし、ねえ？

「霊夢？ おーい、大丈夫か？」

「ええ、私は大丈夫よ。だからユウキサン？ 少し、頭冷ヤソウカ？」

「やっぱりこうなるんじゃない!？」

さあ、楽しい楽しい弾幕ごつこの始まりよ♪

咲夜やレミリアが怒つてた理由は分からないけど、霊夢はわかる。

やっぱり直接連絡取ればよかつたなあ。

でも、電話がないし、永遠亭から出れなかつたから仕方ないか。

そりゃ怒るよな。

異変解決に来たら、しばらく連絡せずに外泊していた俺がいるんだものな。

霊夢は心配性だからな。

「1人で納得した顔してるけど、あんた絶対わかつてないでしょ!？」

霊夢の激しい札弾幕をどうにかかわしつつ、涙目で鈴仙が叫んできた。

そりや弾幕ごっこ初心者鈴仙には、咲夜とレミリアの2人の弾幕よりも濃い霊夢の弾幕は怖いものがあるよな。

それに紫も静観せずに参戦してきそうだし。

俺1人だと霊夢の攻撃受けてもいいんだけど、鈴仙もいるからな、反撃するか。

「鈴仙、右だ！」

「わかったわ！」

紫が加わる前に霊夢を囲んで動きを封じよう、と思っただけだ。

「はあい♪」

「ちっ、お前が俺にくるのか」

紫がスキマを使って俺の前にワープしてきた。

霊夢も、俺ではなく鈴仙をターゲットに選んだようだ。

鈴仙と分断されてしまった。

ただでさえ1対1なら分が悪すぎるっていうのに。

「あなたと弾幕ごっこは2回目ね」

「1回目はあれ弾幕ごっこって言えるのか？」

「懐かしいわねえ。あの頃とは少しは変わったわね、あなた」

「そりやあな、幻想郷に存在する力にも慣れたしな！」

スペルカードを温存して通常弾幕で応戦しているけど、紫は涼しい顔してかわしている。

様子をうかがっているのか、俺をなめているのか、反撃らしい反撃はしてきていない。弾幕ごつこの隙に殺す事は考えていないみたいだな。

どっちにしても今のうちに落とさなきゃ。

「そう、なら今度は手加減いらないわね 【境符・二次元と三次元の境界】」

「うおっ!？」

隙を見て鈴仙の方へ行こうとしていた俺の行く手を遮るように、いくつもの光が走った。

これは俺が生まれて初めて目にしたスペルカードだ。

でも、あの時とは密度も速度も段違いだ。

光は地面や竹を走っているかと思えば、そのまま空中にまで走り出した。

動きは直線的だけど、数が多く弾速も速いからよけるのが精いっぱいだ。

「相変わらずの動体視力に反応速度。いえ、あの時よりもさらに速いですわね」

「今更監察か？ しよっちゆう俺の事見ていたくせに」

「あら人聞きの悪いこと言わないでくださいな。たまにしか見ていませんでしたわ」

「見ていることは否定しないんだな」

余裕を出しているように見せかけているが、実際に余裕はないのは紫にはお見通しだろう。

このままじゃ鈴仙の援護に行けない。

チラリと紫の背後に目を向けると、鈴仙の弾幕と霊夢の弾幕が飛び交っている。

まだ落ちてはいないようだ。

しかし、このままじゃ向こうもこっちも打ちが明かない。

何かいいスペカはとを考えて、そこでふと思いついた事があった。

スペカなしで通常弾幕のみとはいえ、このままでは鈴仙の力は時間切れで使えなくなる。

る。

ならばいつそのこと……

「一枚攻略されてしまいましたわ。やはり一度見せたスペカでは芸がなかったわね」

ちようど紫のスペカが時間切れで消えた。

やるなら今しかない。

「今だ！ 【幻符・幻想支配モード紫】！」

「ふふっ、やはり私の力を使うのね」

幻想支配で紫の力を使う。

ここまででは紫も予想していた、のはこっちも予想できた。

けど、ここから先はどうかな？

「こい！ 【式符・藍&橙】！」

「えっ？」

「はっ！」

「はい！」

頭にイメージした2枚のスペカ。

それは式神である藍と、藍の式神である橙を召喚するものだ。

一気に2枚も使ってしまったけど、これでいい。

「まさか、君に使われるとはね」

「えへへっ、よろしくお願いしますね、ユウキさん」

「2人共、頼りにしてるよ」

いきなり俺に呼ばれたのに、藍も橙も驚きもせずに従ってくれた。

それどころか少し喜んでないか？

「ちよつと、それは反則じやないかしら!？」

「紫様はスペルカードとして私や橙を使うことがよくありますからね。ユウキ君がそう

しても全く反則じやありませんよ」

「そういう事です！」

「2人共、従つてくれるのは嬉しいけど、やけにノリノリだな?」

少しは抵抗感出すと思つていたのに、かえつてこつちが驚きだ。

「ふふつ、何、君に使われるのなら悪くはないというだけさ。それに紫様に日頃の鬱憤を晴らすいい機会だらかね」

「紫様、覚悟——!」

「叛逆の式神……」

「ふつ、ふふふつ、いいわよ、そつちがその気なら藍達ごとやつちやうだけよ!」

「いくぞ、藍、橙——!」

「はいっ——!」

藍に目を向けると、わずかに頷いてくれた。

俺の意図が通じてるようによかつた。

「それっ——!」

橙が身体を丸めて高速で回転しながら紫へと向かう。

紫はヒラリとかわすが、藍が続けて弾幕をばら撒きながら回転攻撃を繰り返した。

2人は時には同時に、時には交互に紫に向けて攻撃を仕掛ける。

俺は、その合間を縫つて、紫の脇を突破した。

「あっ!?!」

「じゃあなー！」

俺の狙いはこれ。最初から紫を落とす事は考えていない。

鈴仙と合流して2人で相手しないと、先にこつちがやられる。

これは大前提だ。

「鈴仙！」

「遅い〜！」

霊夢の札に当たりそうな鈴仙の手を取り、スキマを使い回避する。

今は紫の力を使っているのだから、こういうこともできる。

「ユウキさん……紫ったら何をしてるのよ」

「悪いな霊夢。1対2だ」

これでも有利になったとは思っていない。

けど、霊夢にとっては、少しは不利になったと思つてほしかったがそうはいかないよ
うだ。

霊夢はニヤリと余裕の笑みを浮かべている。

あ、霊夢の周りに陰陽玉が浮かび上がってる。

これすごく嫌な予感する。

「これは好都合ね。ちょうど霊力も溜まつたし、2人纏めて落ちなさい！ 【夢想天生】

「そうはいきませんわよ?」

「げっ!? 紫?!」

いつの間にか紫が俺たちの頭上にいた。

藍と橙は向こうで伸びている。

まあ、こうなるとは思ってたけどね、それでも思っていたよりも2人は時間を稼いでくれた。

「特別サービス♪ 【紫奥義・弾幕結界】」

紫は、藍と橙をぶつけられたのがよほど気に食わなかったのか、若干額に青筋を浮かばせて自分の奥義を放ってきた。

これは、ダメだな。

——ピチュン!

「で、一体全体どういうわけなの?」

「話してもいいけど、それより先に異変解決した方がいいんじゃないか?」

俺と鈴仙を負かした霊夢は先に進まずに、俺たちに詰め寄ってきた。

「やけに素直に通すわね。そっちのウサギも何も言わないし」

「私の名前は鈴仙・優曇華院・イナバよ! 弾幕ごっこに負けたのだもの。素直に通すし

かないでしょ？」

「それは、そうだけど……」

霊夢は何だか腑に落ちないようだ。

気持ちは何となくわかる。

「用心棒は引き受けたが、負けた以上は邪魔する気ないよ。ただ、異変に関しては俺も簡単にしか聞いてないから詳しい話は永遠亭にいる八意永琳って人に聞いてくれ」

「はあ、分かったわ。でも、2人共一緒に来てもらおうわよ。逃がさないんだから。後でじっくり話を聞かせてもらおうわよ！」

「別にどこに逃げるっていうんだよ。てかなんで勝者なのにそんなに余裕がないんだよ、霊夢は」

負けたらここで異変が解決するまで待っていようかと思っていたけど、勝者がついて来いっていうなら従うしかない。

「……はあ」

なぜか霊夢、それに鈴仙までも同時に深いため息をついた。

それを見て紫はおかしそうに笑う。

本当になんだっていうんだ？

続く

第124話 「月見酒」

輝夜達が仕掛けた異変から丸一日が過ぎた。

今私は、ユウキに誘われて博麗神社でお月見という名の、いつのもの宴会に参加している。

「なんか釈然としないわ」

「お前さん、それこの前の宴会の時も言っただけでなかったか？」

「これがいわゆる天井つてやつですねえ」

ムスツとした表情を浮かべ、私と文に愚痴を言ってくる霊夢。

いつもなら霊夢の愚痴を聞くのは魔理沙かユウキだったけど、今は2人共いない。

ユウキは紅魔館組に絡まれていて、魔理沙はフランの相手をさせられている。

魔理沙は、彼がらみで溜まったフランのストレスの解消相手にさせられたって所ね、
愁傷様。

「ユウキさんの事もだけど、あなた達の事も納得できないのよ、文に妹紅！」

「なんで私まで？」

「ま、気持ち分かるけどね」

靈夢と紫がユウキと鈴仙を倒して永遠亭にやってきた時、私と文は隠れていた。けれど、すぐに紫のスキマによって引きずり出された。

なぜ永遠亭にいるのか靈夢に詰め寄られたけど、ユウキがなだめて一先ず異変解決を優先させることになった。

それから、永琳と輝夜が退治されて無事に異変は解決した。

でも、靈夢にとつては異変を解決したことよりも優先させる事があった。

それはユウキが今まで何をしていてなぜ永遠亭にいて、異変を起こす側にいたかということだ。

西行妖の時に自分の命を救ってくれたのが永琳だと偶然知り、恩返しのために今まで永遠亭で手伝いをしていた。

内緒にしていたのは、永琳たちは自分たちの事をあまり知られたくないからだだった。

そして、今回の異変を起こしたのは月から永琳たちを迎えに使者が来る事になり、それを防ぐ為に月との境界を封じた。

たまたま竹林に取材の種を探しに来た文と、月の異変を知り駆け付けた私が幻想郷の結界について説明した。

納得して結界を解こうとしたらさらに別の結界が張られた事で靈夢たちが来る事を知り、どうせなら大々的に異変を起こしたことにして退治されようという話になった。

弾幕ごっこにあまり練れていない鈴仙の為に、ユウキが助つ人として補佐する事になった。

以上が異変解決後に、霊夢やレミリア達に説明した内容だ。

嘘は言っていないし、間違つてもいない。

ただ、言っていない事があるだけだ。

霊夢達もそれに気づいたようだが、ユウキがそれ以上何も言わない雰囲気なので結局お流れになった。

「あーもうまたムカムカしてきた。ちよつと行つてくる！」

そういつて霊夢は、酒瓶片手に紅魔館組に絡まられているユウキの元へと突撃していった。

あれはかなり出来上がっているわね。

自業自得とはいえ、ユウキはご愁傷様ね。

「はあ、やれやれ。助かりましたねえ」

「また後で飛び火してきそうな気もするけどね。ところで、文。聞こうと思つていた事があるのだけど……あの夜何を見たの？」

「何を、とは何のことですか？」

私が聞きたがっている事を察しているはずなのに、文はとぼけた顔をした。

「ユウキと鈴仙が殺し合いをしていたのを、あなたは見ていたんでしょ？」

あの夜、私と慧音はてゐから助けを呼ばれて駆け付けた時には、文がすでに来ていて鈴仙と対峙していた。

状況はてゐから聞いていて、血まみれのユウキを見て私も血が上ったけど、少し気になる事があつた。

ユウキを永遠亭に運び入れた後、文の様子がおかしかつた。

助けに入るのが間に合わなかつた事への罪悪感かと思つたけど、それだけじゃなささうだつた。

「……そうですね。あなたには話してもいいでしょうね」

周りを確認して誰も自分たちに注目してないのを確認して、文は小声で話し始めた。

「私は今まで自分を狙う人間だつたり、ただの殺人鬼だつたり、人間の為に妖怪を倒そうと意気込む人間など、色々な人間を見てきたわ。けど、あの時のユウキさんのような人は見たことなかつたわ」

文はすぐくまじめな表情を浮かべた。

口調が素になつているあたり、かなり真剣なのだろう。

「感情が、というか生氣すら感じない表情を浮かべていたわ。まるで、能面、いえ能面の方がまだいいわね。とにかく、普段から何を考へているか表情が読みづらい時がある彼

「だけど、あの時は別格だったわ」

「それで、助けに入るのが遅れた、か？」

「……否定はしないわ。あれがユウキさんとは思えなくて、少し怖くもなつたし」

並み居る妖怪たちの中でも大妖怪に位置する文が、ここまで言うなんてよつぽどだったのかしら。

「鈴仙は彼と初対面だからそこまで動揺してなかつたけど、あれを霊夢やフラン達が見たら……シヨックを受けるかもしれないわ」

「そこまでののか。じゃあ、ユウキが鈴仙と殺しあつた事を霊夢達に隠したのは」

「西行妖の一件で懲りたんでしようね。あの夜あつた事を知れば、霊夢達が鈴仙を許さない。だから鈴仙達を守るために隠した。けど、もう一つはあの時の自分を知られたくなかつたんでしようね」

正直、私としてはそつちの方が驚きなんだけどね。

今までユウキは自分の事を考えなかつたし、自分に対しての周りからの感情にもすごく鈍感だったから。

「ま、数か月もほぼ毎日あんな状況だと、流石にどんな鈍感でも気づくと思いますけどねー」

そういつて、いつの間にかアリス達まで巻き込んで大騒ぎしているユウキの元へと、

カメラ片手に文は飛んで行った。

私は、ああいうのには混ざりたくない。

恥ずかしい、のもあるけど、巻き添えはごめんよ。

それに、少し妬んでいるから、なんて慧音にも知られたくないしね。

という会話を木の上で文達に気づかれぬように聞きながら、私は杯に次の酒を注ぎこむ。

竹林で本当はあいつに何があつたか、つていうのにはあまり興味がなかつたけど、耳に入つたなら気になつちやうよねえ。

それにしても、あいつもやつと、ここまできたか。

パツと見は変わつてないように見えて、ちゃんと変わつてきてるんだねえ。

その話題のあいつに目を向けると、さつきまでレミア達と飲んでいたのに、いつの間にかアリスや大妖精までやってきて大所帯になつている。

まあ、元々紅魔館の全員を相手にしていたから最初から大所帯か。

で、そこへ酒ビン片手に霊夢が文字通り突撃。

ありやりや？ 霊夢つたら顔が真っ赤になつてすっかり出来上がつてるね。

「ちよつとそで、どきになさい」

「は、はいいー！」

ちやつかり彼の隣に座っていた美鈴を退かせて、ドシンと座り込む。

その迫力にレミリア達は何も言えずポカーンとしていた。

私でさえブルツと来た程だもんね。

霊夢つて、あいつが関わりと博麗の巫女としての時より迫力出る時多いねえ。

まさに恋する乙女はムテキだね。

「で、どうなのよお？」

「何がだ？　つてか、霊夢酔いすぎ」

あんなに酔ったの、初めて見るかも。

「仕方ないじゃない。私達だって納得してないんだし」

レミリアがそういうと、咲夜達も頷いた。

まあ、あの説明じゃ完全には納得できないよね。

それはあいつもわかってるようで、苦笑いを浮かべている。

「そんなんじゃないわかってえ〜！　私が気にしてるのはあ、あのうさぎとの関係よ。いった

いあのメスウサギはなんなの?!」

霊夢の言う兎というのは、月の兎である鈴仙の事かな。

しかし、月の兎つてのは懐かしいねえ。

まさか竹林の奥にいるなんて思わなかったよ。

紫は知ってたようだけど、それでも手を出さなかったのは昔の事がトラウマにでもなってたのかな。

「メ、メスウサギって、鈴仙か？ あの時も言ったら、相棒で友達だって。弾幕ごっこに不慣れだったからサポート役になったんだよ」

その言葉に数人が不快感を示した。

いや、ただの嫉妬だね、ありや。

あいつが自分から友達って言う事は今までなかった。

相手から言われてやつと認識するくらいだ。

それが会って間もないはずの鈴仙を友達と相棒といった。

霊夢達から見れば、面白くないどころじゃすまない。

でも、そこらへんはまだあいつは気づいていない。

そこはまだまだだねえ。

「しいしよ〜！」

と、そこへ意外な人物、妖夢が涙目で叫びながらあいつに飛びついた。

「今の話本当ですか!？」 相棒を作ったって!」

「あ、いや、本当というか、何にそんな反応している？ というか酒の臭いが……酔っぱ

らしいすぎだろ妖夢！」

「酔つてなんかいませんよー！ それに久しぶりに師匠にお会いするんですから、ちゃんと化粧してきたんですよー！」

これは、いいものが見れたねえ。

確か妖夢はまだ自覚症状なかったと思つただけで、知らぬ間に恋心がすくすくと、か。

妖夢は、酒は多少飲めるけど、一度酔い始めると面白いことになる。

くつくつくつ、これからはますます酒の肴が増えるねえ。

「ちよつと、妖夢なんかに構つてないで私の質問に答えなさいよお、あの女とはどこまでいったのよ!？」

「おいおい、なんか質問が変わつてるぞ？ どこまでいったつてどういう意味だよ？」

「しいしよお！ 師匠の相棒つて私の事ですよね？ ねっ？」

「お前は質問の意図が全くわからん！」

ありやりや、霊夢も妖夢も完全に酔っぱらつてるねえ。

今日はあの時みたたく酒に細工なんかしてないのに、随分と深酒したもんだよ。

いつもなら嫉妬の目を向ける咲夜達は、巻き添えを食らわないように少し離れてるね。

あ、レミリアだけは違うみたいだ。

「……咲夜、ワインをありったけ持つてきなさい。足りなかつたら酒ならなんでもいいわ」

「レミイ、あなた、霊夢と妖夢に出遅れたからつて、酔っぱらつた勢いでユウキに絡もうとしてるでしょ」

「ギクツ、そ、そんな事あるわけないじゃない！」

そういつて、レミリアは咲夜が持つてきたグラスを一飲み。

でも、そのグラスに入つてゐるのは多分違うよね。

「ふう〜甘くて美味しいわ、このぶどうジュース♪ つて違ふでしょ！ 私はワインと

言つたのよ、咲夜！」

「お嬢様、真つ昼間からお酒を飲んで霊夢達のようなあのよふな醜態をさらす事は……

そういえば、ないですね。失礼しました、今お持ちします」

「?? まあ、いいわ。早く持つてきなさい」

一度は主をいさめようとした咲夜だつたけど、少し考えて日本酒をたくさん持つてきた。

でも、レミリアは確か……ああ、そういう事か。

「ぐう〜……」

「呆れた。レミイったら、自分は酔っぱらったら眠っちゃうって事忘れてるんだから。咲夜も、わざと日本酒を飲ませたわね？」

「さあ、なんのことでしょうか、パチユリー様？」

レミアアは飲みなれないお酒がある程度入るとすぐに眠ってしまう。

あのメイドもそれはわかりきってるからこそ、わざとレミアアにワインではなく日本酒をたくさん飲ませたのか。

主に醜態を晒させない為、ではなく霊夢や妖夢のようにユウキに絡むのを防ぐ為、の方が理由としては強いだろうね。

「あ、ここにいましたあ〜！」

と、ここで新しい乱入者がやってきた。やってきたのは、これまた霊夢達に負けず劣らず酔っぱらって顔を真っ赤にした鈴仙だ。

ユウキを見つけると、満面の笑みを浮かべて彼の横に座り、すばやく腕に抱きついて頬ずりまでしてきた。

これはさすがに予想外だ。

いいぞ、もつとやれえ。

「もう、どこにいたんですか、探したんですよ〜？」

「鈴仙？ お前も酔っているのかよ」

この状況で酔っぱらった彼女がやってくるのがどれだけ危険なことかは、ユウキもわかっているようだ。

ま、見てるこっちは面白くなってきたけどねー

「むう、酔っぱらったらいけませんかあ？ 大体あなたがいらないから一人ですーつとお酒飲んでたんですよー？」

あ、彼女の後ろで見てゐるが空っぽになった酒ビン抱えて、ユウキにウィンクした。

それだけでこの状況は見てゐるが作ったと分かった。

てゐるは、あんな見た目に反して、文よりもずっと古くからいる大妖怪だ。

なーんてこんな言つてるとお前が言うな、つて霊夢に言われそうだけどき。

そんなあいつが月の賢者や兎を匿つてたつてのは、少し驚きだ。

「ちよつと、なんであなたがそこにいるのよ。どきなさい！」

「そうです！ ししよーの隣は私が座るんです！」

「つてあんたもちやつかり隣にすわつてるんじゃない！」

ユウキを挟んで反対側に陣取つたのは妖夢。

霊夢は出遅れたようで……おや？

「あのお？ 霊夢さん？」

「あによ？ 文句あるわけ？」

「いえ、ないです」

霊夢はあぐらをかいてるユウキの正面にちよこんと座り、彼に身を預ける体制になった。

「では、私はここ……」「ここはわたし〜!」……あやややく〜!」

「フラン!?!」

文はユウキの背中に飛びつこうとして、飛んできたフランに突き飛ばされて星となった。

それを見てはたてとにとりは爆笑してる。

うん、平和だねえ。

「えへへっ〜♪」

「しーしよ〜」

「おにいちゃーん♪」

「……どうしてこうなった」

「知らないわよ」

四方をがっちり女の子で固められてハーレム状態のユウキだけど、身動きが全く取れなくなつたね。

咲夜やアリス達は羨ましそうな視線を送っているだけだ。

霊夢が目で思いっきり威嚇してるからね。

「あのさ、俺これじゃ動けないんだけど？ まだ何も食べてないし飲んでもいないんだけど？」

「じゃじゃあ、私が食べさせてあげますよ、はいあーん♪」

すかさず妖夢が近くにあった団子をユウキへと差し出した。

「自分で食べてるから、離れてくれないか？」

「あーん♪」

「お前今日変だぞ、何か変なものでも飲んだか？」

「あーん♪♪」

「……………」

とうとうユウキも諦めたね。

仕方なく妖夢の差し出した団子を食べだしたよ。

それを見て霊夢はピコーンと何かがひらめたようだ。

ユウキにとっては絶対ろくでもない事だろうけどね。

「ユウキさん、お団子だけじゃ喉がつまるでしょ。このおさく……………」ユウキさん！ む

ちゅ〜♪「……………?!」

瞬間、時が止まった。

咲夜が能力で止めたわけじゃない。

私もあまりの衝撃で酒を吹き出しちゃったよ。

鈴仙が、ユウキに、キスをした。

「~~~~!!?」

「んんんっ♪」

突然の出来事にユウキも目を大きく開けて固まっている。

「つ、ぶはあく〜! どうでしたか?」

「れ、鈴仙……お前今何をしたんだ?」

「何って、喉を詰まらせたらいけないと思って、お酒を口移して飲ませたんですよ?」

「いや、えっ? 口移して、え? マジ?」

「あ、大丈夫です! 私のフアーストキスですから♪ きゃっ♪」

あーこれはヤバいね。うん、ヤバすぎる。

避難した方がよさそうだね。

同じ予感がしたにとりやはたてはもうすでに逃げ出している。

慧音もチルノ達を連れて離れ……あ、大妖精とルーミアが!?

「……今何ヲシタ?」

鬼の私でも身震いするほどの冷たい声があたり一面に響き渡った。

その声に反応するかのように、ゆらりゆらりと1人、また1人立ち上がっていく。

あふれる殺気を隠そうともせず、狂気すら浮かべる様は、まさに悪鬼羅刹。

「鈴仙、やばい、逃げろ！」

「えっ？ もう一度してほしいんですか？ じゃ今度はあなたからしてください♪」

「お前馬鹿だろ!？」

鈴仙は自分がした事がどんなに愚かな行為か、まだ気づいていない。

それどころか、火に油、いや、火山に爆弾を投下した。

もう霊夢も妖夢もユウキの側にくつついてはいない。

2人共他の連中と一緒に虚ろな目をしてユウキ、正確には鈴仙を取り囲んでいる。

ユウキは冷や汗を流しながらなんとか周りを諫めようとしてる。

けど、誰も聞く気はないようだ。

「あーあ、これじゃユウキが誤魔化した意味ないじゃないか」

ユウキと殺し合いをした事が霊夢達にばれたらタダじゃすまないだろうから、彼は誤

魔化したつていうのに。

ある意味殺し合い以上の事をみんなの目の前でやらかしてしまった。

今の鈴仙には死相が見えそうだよ。

「さーって、ここら辺一帯が更地になる前に私も退散しようかねー」

背後で爆音やら悲鳴やらが聞こえてきたけど、私は振り返らない。「でも、いいものは沢山みれたねえ」

ユウキにも少しは人間らしさも出てきたことだし。

あいつが来てから、ここの宴会は退屈しないで済みそうだねえ。

続く

過去編IV

第125話 「大覇星祭」

9月19日

大覇星祭、それは9月19日〜25日の間で学園都市中の学校が競いあう大運動会の事だ。

そして、普段は出入りを厳しく制限する学園都市の数少ない一般公開期間でもある。

その為、セキュリティがどうしても普段より甘くなり、敵対組織や内部の不穏分子が蠢く期間でもある。

で、俺も去年までは警備員の手が回らない外部からの侵入者や、スキルアウト、その他反乱分子の始末をしてきた。

それは今年も例外ではなく、俺はとある超重大案件の下準備をようやく終えたところだった。

「よしっ、色々保険もかけたし。後はあいつが動くのを待つだけ」

今回はいつも以上に念入りに下調べと準備をしてきた。

アイツを殺すためだけに人の手も借りた。

使える手段は何でも使わないと、決して殺せない相手だ。

「そういえば、そろそろ開会式か。確か軍覇と操祈が選手宣誓だったな」

アジトのモニターを付けると、ちょうど2人が選手宣誓を行っている所だった。

『すべて根性で乗り切る事を誓うぜっ!!』

——ドカーン

大参事である。

「……仲介人の仕事、引き受けてやればよかったかな」

今年の大覇星祭選手宣誓を超能力者をお願いするという、超無茶で無謀な計画があった。

で、問題児だらけのレベル5へ選手宣誓をお願いする役に最初は俺が回ってきた。

が、俺にはそんな事している暇はなかったので、一蹴した。

その事に今俺は少し後悔している。

少しは手伝ってやればよかったかな、と。

「うん、気持ち切り替え切り替え。でも、どうするかな。一応最初の競技ぐらいは出るか」

俺が一応所属しているクラスの競技には、最初でないつもりだった。

大覇星祭にも行われる競技にも興味はなかったし。

当麻や制理達でどうにかしてもらおうと思っていた。

けど、思えば俺は2学期になってから一度も学校に行っていない。

仕事や実験で色々多忙で、学校をずっと休んでいた。

特別処置があるから退学や留年になる事はない。

とはいえ、こういうクラス行事には少しは顔を出しておくか。

多分、いや、絶対に制理が苦勞してそうだからな。

逆に祭り好きなあいつらの事だから、クラス一丸となって燃えているかもしれないか。

と、思った俺が甘かった。

「……なんだこれ」

学校へ行き、教室へ荷物を置きに行こうとして、ふと生徒の待機エリアに目がいった。

そこはまさに死屍累々と言った状況だった。

元春や青ピも含めてクラスメートのほとんどが地面にダランと突っ伏している。

パツと見、日射病で倒れているかのようだ。

そんな中、割とまともな状況なのは、当麻と制理と秋沙くらいだ

いや、なぜか制理はずぶ濡れだ。

可愛い下着が丸見えなので、一先ず視線を外そう。

ま、十中八九当麻が何かしたせいかな。

「これ、どんな状況だ？」

制理に背を向ける形で地面に寝転がっている青ピ達を見下ろす。

「ん？ あらユウキじゃない。見ての通りよ。上条当麻のだらけ具合が皆に伝染したのよ」

「ちよっ！ 人を病原菌扱いしないでくれませんか!？」

当麻の何かが伝染するならだらけ具合よりも不幸具合だろうな。

もしくはフラグ形成能力？

「当麻がウイルスかどうかは置いて、ほれ、風邪ひくぞ」

「ウ、ウイルス……」

制理の方へタオルを数枚投げる。

「あ、ありがとう」

「なにー!?! カミヤンではなく、よりにもよってユウキにフラグだとー!?!」

「嘘やあ、これは何かの間違いやー!?!」

背後から何か呆気にとられた声と、なんか失礼な声でした。

「だから！ うちの施設や設備に不備があるのは認めるのです！ でもそれは生徒たち

「には何の非もないのです！」

それとは別に、体育館の裏側から何やら言い争うような声が聞こえてきた。

「ん？ なんだ？」

「この声、小萌先生だな」

当麻と2人で角からこっつそりと覗き込む。

そこには、なぜかバニーガールな小萌先生と、もう一人メガネをかけた初老の男性がいた。

「生徒の質が低いから統括理事会から追加資金が降りないのでしょう？」

「なんだアイツ。見るからにプライドだけ高くて、他人を見下すのが趣味という感じがする。」

確か、これから俺達がやる棒倒しの対戦校の先生じゃなかったかな。

「ふっ、失敗作を抱え込むと色々苦労しますね」

明らかに小萌先生ごと俺達を見下し蔑むようなセリフを吐くなアイツ。

「せ、生徒さん達には失敗も成功もないのです！ あるのはそれぞれの個性だけなのですよ！」

それに対して小萌先生は、臆せずに堂々と言い返した。

流星は小萌先生。どこまでも生徒思いで生徒を信じている。

「なかなか夢のあるご意見ですなあ。これから始まる棒倒し、お宅の落ちこぼれ達を完膚なきまでに撃破して差し上げましょう」

そう言い残して、高らかに笑いながらあのクズは去って行った。

後に残ったのは、肩を震わす小萌先生。

「違いますよね。みんなは落ちこぼれなんかじゃ。ありませんよね……」

こつちから小萌先生の表情は見えなかったが、その目に光る涙はハッキリと見えた。

——ブチッ！

上等だ。

「おい、みんな、もう一度だけ聞く。本当にやる気がねえのか」

「もしそうなら、俺がやる気を叩きこんでやるが、どうだ？」

振り向いた先にいた皆の表情は、さっきまでとはまるで別人だった。

俺は急いでPDAから対戦校の情報を得て、敵が取るべき行動パターンを予測して作戦を立てた。

荷物を置いてくる前でよかつたぜ。

悪いな、こちらら低能力者や無能力者の集まりなんでな。

使える情報はなんでも使わせてもらう。

『第一種目棒倒し。各校の入場です』

スピーカーからのアナウンスが俺たちの士気をさらに上げた。

やる気は十分、作戦も立てた。

後は、敵を殲滅するのみだ。

「みんな、ユウキの立てた作戦は覚えたわね？ さあ、行くわよ！」

「「おうー！」」

棒倒し。互いの陣地に立てられた長さ7メートルの棒を倒すだけだ。

いたってシンプル。だが、ここは能力者がいる学園都市。

一応セキリテイエリアはあるが、炎や氷などがバンバン飛び交う危険な競技だ。

通常、棒倒しは相手の棒を倒す側、自分の棒を守る側、2つのグループに分かれる。

けど、今回俺が立てた作戦には、自分の棒を守るグループは存在しない。

あるのは、攻撃と援護のみ、超攻撃型布陣だ。

敵はエリート集団。対する俺たちを低レベルの落ちこぼれ集団と思っている。

だから、その慢心を利用してもらう。

先手必勝、ただがむしやらに突撃するのみ。

「「うおおおおおおおー！！！」」

競技開始の合図とともに、当麻達攻撃グループが一斉に駆け出していく。

俺はワントンポ遅れて走り出す。

後方では、制理を中心とした援護グループがその時を待っている。

「っ!？」

敵陣地では早くも能力者達が動き始めていた。

ただならぬ気迫と共に突撃する当麻達に少しは戸惑ったようだが、玉砕覚悟の悪あがきと思つたのだろう。

冷静に迎撃準備を進めてくる。

「やっぱ、その手で来るか」

敵の炎系と爆発系能力者が作った炎を圧力系の能力者が加工して透明な球体で包み込み、爆裂弾を生み出している。

いくら全力で突撃しているとはいえ、この距離なら相手の陣地に届く前に食らう可能性が高い。

けど、そうはさせない。

「悪いな。能力停止!」

圧力系の能力者を幻想支配で視て、すぐに能力停止を発動する。

「なっ!?! の、能力が使えなくなつた!?!」

すると、爆発を抑え込んでいた膜が消えて……

——ボン!

本来俺達に向けて放つはずだった爆裂弾は、味方陣地の上で爆発した。その衝撃で敵の陣形が崩れた。

「制理!」

「OK! みんな、今よ!」

援護組の念動能力者達が一齐に、その力を敵陣手前の地面に向けて発動させた。すると、地面がすくい上がり、土煙が上がった。

低レベルの能力でも、複数で放てば威力は倍増する。

敵がやった事をやりかえしただけだ。

「追い打ち!」

こつちには風力系の能力者がいないので、敵陣から能力を借りて突風を巻き起こす。

「けほっ、げほっ!」

「砂が口に、えほっ!」

土煙は敵陣をすっぽりと覆いつくした。

慌てて敵の風力能力者が風を吹かせようとする。

「借りっぱなしで悪いけど、能力停止だ」

「えいつ! ……えつ、能力が使えない!? なんで!? ぶはっ!」

すぐに能力停止に切り替えて、相手が能力を使えないようにする。
下準備は終わった。後は一気に……

「制圧だあ！」

「「うおおお〜〜!!」」

当麻達が砂塵舞う敵陣へと突撃した。

敵は砂で視界を防がれて混乱していて、当麻達の突撃にろくに対処ができていない。能力を使おうにも演算に集中できないでいる。

そうこうしてるうちに青ピ達が敵陣の棒へと殺到した。

しかし、敵も黙って倒されてはくれない。

すぐに数人が棒に群がり、防御へと回る。

おや、なんでか知らないが、当麻に攻撃が集中してきたぞ？

ま、あいつには幻想殺しあるからいつか。

「さて……俺も行くか！」

状況はこちらに若干有利だが、肝心の棒が倒せなければ話にならない。

俺は、軽い頭痛をこらえながら、最後の詰めをするために敵陣へと走り出した。

いくらレベル3、4の能力とはいえ、連続で能力停止を使えばこうなるのは分かっていた。

けど、この程度の痛みは慣れっこだ。

敵味方入り乱れての乱戦の中を、するりと走り抜けて棒を指す。

「ちよつと、ごめんよ！」

棒へと近づいた時、ちよつとガタイのいい奴がこつちに背中を向けていたので、それに飛び乗り弾みをつけた。

「そりゃあー！」

全力で飛び上がり、空中で錐もみ回転も加えたドロップキックを棒へと叩きこんだ。

相手がただの棒なので、手加減も何もせず全力での両足キックだ。

数人、棒に群がって押さえつけていたようだが、棒と一緒に吹き飛んだ。

あ、青ピもついでに吹き飛んだ……見なかったことにしよう。

——ピーッ！

そこで競技終了の合図が鳴った。

「はあ、はあ……よしつ、俺達の」

「「勝ちだあ！」」

みんなは当麻を中心に輪になり勝鬨を上げた。

ちらりと敵の先生に目を向けると、この結果が信じられなかったようで真っ白になって白目をむいていた。

「エリートつてもたいしたことなかったよな」

「上条はなんで集中攻撃くらってたんだけ？」

「いつもの事だけだな」

「……不幸だ」

当麻達はボロボロになりながらも、しつかりと歩いて行つた。

その先には涙目で救急箱を持って小萌先生が待っていた。

俺は、みんなと一緒にはいかず、こっそりとその場から離れた。

勝利の余韻はあるが、それ以上に俺には気になる事があつた。

競技が始まる直前まで一緒にいて、やる気満々だった元春が競技に参加していなかったからだ。

これは、何かよからぬ仕事でも舞い込んだに違いない。

そして、それはきつと、当麻と俺も関わる事になる、面倒で厄介な事件の始まりだろう。

さて、とつとと済ませて、本命に行くとするか。

続く

第126話 「追跡封じ」

嫌な予感というのは、早々に当たりやすいものだ。

元春を探してうろろろしていると、すぐに見つかつた。

しかも、明らかに学園都市で浮いている格好をした神父少年も一緒だ。

このまま見なかつたことにしたかつたけど、どうせ指令が来るだろうからそれは無意味だな。

「おい、そこのマジカル不良少年共。こんな所で何をしてるんだ？」

「っ!? なんだ君か」

「よう、ユウキ。不良少年はいいけど、マジカルは余計だにや」

声をかけられ一瞬身構えた2人だったが、相手が俺と知り揃つてため息をついた。

「競技サボつて何してんだよ。お前がいればもつと楽だったのに元春」

「いやあく悪い悪い。ちよーつとハズせない大事な大事な用ができちまつてにやあ。

おつ? カミヤんまで登場とは探す手間が省けたぜい」

「お前ら、こんな所で何やってるんだ？」

背後から当麻もやつてきて、数秒前に俺がこいつらに言ったセリフをそのまま吐い

た。

これで役者は揃ったわけだ。

あまりにもタイミングが不気味すぎるけど、これも運命かな。

嫌な運命だけだ。

「で、今回の厄介事は？ できればそちら側の問題は学園都市の外でやってほしいんだけど。もちろん、俺や当麻を巻き込まないでな」

ただでさえ常時の学園都市ですら厄介ごとで溢れているというのに、警備が甘くなる今時期なら尚更だ。

「まあそういうなってユウやん。むしろ今時期だからこそここがちょうどいいんだぜい？ 色々な問題が交差しているからにや〜」

元春はわざとらしく言ったが、その真意は何となくわかる。

科学側の総本山な学園都市内部なら、魔術的な問題が起きてもステイル達、魔術側は大きく動けず対応が限定されてくるからな。

まあ、その分のしわ寄せは俺達に来るんだけどな。

「??? なあ、本当にいったい何があつたんだ？」

話が全く読めていない当麻は？ マークを頭に浮かべているけど、俺だって実際何が起きたかはまだ聞いていない。

「実は……」

元春とステイルの話はこうだ。

警備の甘い学園都市の隙をついて、2人の魔術師が侵入した。

魔術師の名は、リドヴィア・ロレンツエツティ。

そして、彼女が雇った魔術側の運び屋、オリアナ・トムソン。

彼女達は学園都市内部で教会から持ち出されたトンデモナイ礼装の取引を行うらしい。

その礼装が、刺突杭剣（スタブソード）と言って、火織のような聖人用の礼装で、学園都市風に言えば、レベル5達を問答無用で殺せる核兵器みたいなものだそうだ。

それがあれば各魔術側陣営の戦力バランスが崩れて、戦争の引き金になりかねない。で、それを阻止するために学園都市に住む当麻の友人という立場でステイルがやってきたというわけだ。

聖人用兵器な為、火織は使えないしな。

ま、ステイル的にはそれすら建前で、インテックスがいるここで自分が知らない所でドンパチされるのが嫌なんだろうな。

当麻はステイルの友人として、元春は案内役としてしているなら、俺の出番はないかもなーと思っていたけど、話をしているうちに指令が入り、彼らに協力する事になった。

こういう流れになるのは分かった。

だから、自分から飛び込んだんだしな。

「でも、そんな大事ならインデックスの力も借りた方がいいんじゃないか？」

「「ダメだ」」

当麻がそういうと、俺達3人の声が重なった。

元春とステイルは、俺も同じことを言ったので少し驚いている。

「インデックスの力は借りれない。学園都市で何か魔術的な事件があると、必ずインデックスが関わっている。そうあちこちに認識されると、イギリス清教としても学園都市としても、もちろんインデックス個人にしても大問題になる。だろ？」

「おおまかにいえばその通りだぜい。実際、ここ数か月で魔術絡みの事件が学園都市で頻発して、そこにインデックスの名前が出てくるといふ認識は広まってるからにやー」

元春にそういわれ、当麻もハツとした顔をした。

思い出すだけでもここ数か月で色々起こりすぎたからなあ。

うん、思い出すのはやめよう。

「じゃあ今回はインデックスの力を借りない、だけじゃなくて」

「そう。インデックスに事件そのものを感知させないようにしないとダメだにやー」

「あ、つまりそれって……」

当麻はそこまで聞いて嫌な予感がしたようで、スタイルがタバコを一吹きして吐き捨てているように言った。

「上条当麻、それが今回君に与えられた最重要任務だ」

「要は食べ物でも与えまくって大人しくさせて、魔術のマの字も感じさせないようにいだけですよ」

「がんばれがんばれ」

「ああ……そうですか、そうですか、上条さんはインデックスさんの財布係ですか……くっそ、不幸だあ〜！」

こうして俺達はそれぞれ行動に移った。

ひとまず当麻はインデックスに合流して競技に戻ってもらい、俺達で魔術師たちの痕跡を探る事になった。

とはいえ、相手は魔術師で、しかも、追跡封じの異名を持つプロの運び屋。

純100%科学的な俺のやれる事は限られてくる。

「で、その魔術師達と取引相手の情報は？」

「あるようであまりないね。リドヴィアは自分の事よりも布教へ命をかける狂信的なローマ正教徒だが、魔術の腕はそう突出したものはない。魔術師としての実力はアニエーゼ達の方が厄介なくらいさ」

だから運び屋を雇ったのか、ということはおリアナの方は相当な手練れか。

「オリアナの方は運び屋としてこれまで数々の仕事をこなしてきた。当然俺達イギリス清教ともかちあつてきたが、毎回まんまと逃げられるというわけだ。逃げるためには人道的にも魔術的にも手段を選ばない。これで大体理解できるか？」

「それだけでイヤというほどわかる……が、オリアナの魔術としての腕は？　どんな魔術を使うんだ？」

オリアナがどんな魔術を使うかは、直接会つた時に幻想支配を使えばすぐにわかるが、向こうから不意打ちを受ける可能性もあるから先に知っておきたい。

が、元春とステイルは苦虫を潰したような顔でお互い見合っている。

「あーオリアナの魔術については、実はよくわかつてないんですわ！」

「はあ!!　イギリス清教とも何度かやりあつたんだらう!!　なら何か情報あるだらう!」

「何度も言つても、直接的にやりあつた事などごくわずかだ。彼女は戦闘屋じゃなく運び屋といつただらう」

「色々な魔術を使う。分かつているのはこれくらいだにやー」

「つかえねえ……」

「これはもう直接会つて自分の目で視るしかないか。」

「ただ、その追跡封じの異名は伊達じゃないって事は忘れるな」

「元春、俺にだって異名はいくつかあるの、知ってるだろう?」

「それもそうだにやー」

それからしばらくステイルは魔術的な痕跡探しを、俺と元春は学園都市内で取引に使われやすい場所を割り出すことにした。

元春曰く、オリアナは認識阻害系の魔術を使って姿をくらましているだろうと言った。

たとえば誰かが彼女を目撃して話をしたとしても、その目撃者の記憶からは彼女は消えている、と言った感じになるそうさ。

まあ、学園都市を適当に回って怪しい女を見なかったか、なんて聞いて回るわけじゃないけどな。

——ピピピッ

その時、元春の携帯に当麻から連絡が入った。

「どうもーカミヤン……」

元春はいつものように軽い調子で電話に出ていたが、すぐに表情が一変した。

「カミヤン、今どこにいる?」

どうやら当麻が目標に接触したようだな。

全く、こっちは苦労して探していたのにあのフラグメーカーは。

さつそく当麻の携帯を検索さして、地図に表示させる。

「おい、ユウ……」

「当麻の携帯ならもう追跡してる。いくぞ、一元春」

「はっ、流星はユウやん。仕事が早いぜい」

こういう時こそ、ハッキングとか盗聴とか裏ワザを活用する時だよな。

それからスタイルと共に、とある大通りで当麻に合流。

当麻が指差した先というのは、運び屋の方らしい。

当麻が指差した先には、つなぎを着た金髪の女性が大きな看板のようなものを持って、遠くを走っているのが見えた。

女性はすぐに角を曲がって見えなくなつたので、幻想支配は使えなかつた。

なるほど、塗装業者にでも偽装して多少の違和感をなくしているということか。

俺達は急いで追いかけたが、俺は違和感があつた。

「妙だな」

「ああ」

その違和感は、一元春とスタイルも感じているようだが、今はとにかく後を追うことを優先した。

つなぎ女、オリアナは自律走行バスの整備場へ逃げ込んだようだ。

「いるのか?」

「奥に気配がする」

一歩足を踏み入れようとして、その足を止めた。

建物の中は薄暗く、バスが何台も停められていて、隠れるにも、罨をしかけるにも持つてこいと言った場所だ。

元春とステイルを見ると、2人共頷いた。

これから俺が何をするか分かっているみたいだ。

「当麻く〜ん?」

「はいっ!? いきなり何気色悪い声出してるんだユウキ?」

「お先にどうぞ〜♪」

俺達の後ろで息を整えていた当麻を無理やり前に出して、建物内へと足を踏み入れさせた。

途端に、轟音と共に青白い炎が襲いかかってきた。

「うわあ!」

「当麻、右手を出せ!」

——パキーンっ!

当麻の幻想殺しによって、炎は打ち消された。

「あ、危なかった……って、ユウキさくん!? これを見越して俺を先に入れたな!」

「だって俺、相手視えないとどうしようもないし〜」

「適材適所。うん、なかなかのチームワークだ。ほら、次がくるぞ上条当麻」

ステイルが指差した先から、黒い物体が高速で飛んでくるのが見えた。

「ステイルはここに残ってルーンのカードを張り付けて待機だ。ユウキ、俺達で追うぞ。

カミヤんは……聞くまでもないな」

「僕としてはここに残ってくれた方が安全なだけだね。もちろん僕が、だけど」

当麻が抗議するけど、ステイルは気にせずルーンのカードを張り付けていった。

「当麻は切り込み隊長だろ。がんばれがんばれ」

「またかよ!」

「安心しろ。病院送り程度で済ませるようにはフォローするから!」

「病院送りは確定かよ! あとで覚えてろよ〜!」

そう叫びつつも当麻は次々襲いかかる罠をどうにか幻想殺しで対処していった。

フォローするといつても、現状武器も何も無い俺じゃやできることはあまりない。

体操服の中に拳銃仕込むわけにもいかないな。

どうにか罠を潜り抜け、建物を抜けた所で、アスファルトがめくり上がり巨大な津波

が現れた。

あまりの迫力に当麻の足が止まった。

「当麻、これも魔術だ！ 構わずぶん殴れ！」

「……………くつそお〜！」

当麻が右手で殴ると津波はあつという間に崩れ落ちた。

俺と元春はその合間を走り抜けて、オリアナを追った。

だが、気配を追った先に俺達が目にしたのは。

「やられた」

割れた窓ガラス、外れたマンホールの蓋、開けられたドア。

どれもこれもオリアナの逃走ルート、に思わせるためにわざと残された痕跡だ。

これではどこからオリアナが逃げ出して、どこへ向かったかを特定するのは難しい。

古臭い手でアナログだが、学園都市内ではあまりお目にかからない手段だな。

と、近くの壁に文字が書かれた付箋紙を見つけた。

恐らくこれがオリアナの礼装なのだろう。

念のため幻想支配を使ったが、何も反応がない。

もう、これはただの紙切れにすぎなかった。

「追跡封じのオリアナ＝トムソンか……………おもしれえ、逃げ切れると思っているのか」

お前が追跡封じの異名を持つ魔術師なら、こっちは追跡者の異名を持つ無能力者だ。
科学と魔術の追跡劇の始まりだ

続く

第127話 「追跡者達」

オリアナには逃げられたが、彼女が残した魔術礼装は手に入れた。

遠隔操作された魔術礼装には逆探知をかけられるそうで、元春はその為の魔術式

【理派四陣】の準備を始めた。

ただし、半径3キロ以内という有効範囲がある。

俺も似たような事は出来る。能力者本人を視るか、能力を使った痕跡などを視れば追跡は可能だ。

でも、有効範囲はかなり狭く、理后のような応用性は皆無で実戦向きじゃない。

だからこそ、ひとまず魔術的な追跡に任せることにした。

「でもさ、土御門って魔術使うとポロポロになるんじゃないやなかったか？」

そういうえば当麻は、元春が魔術を使うと最悪死ぬかもしれないって事を知っているんだったな。

「いやいや、これは俺の魔力を使わなくても大丈夫なんだにやー。というわけで頼むぜ、ステイル」

「ああ、分かった」

ステイルが一番適任だろうな。

元春が無理して魔術使ってポロポロになったら、戦力低下しちゃうし。

最悪俺だけでもいいけど、相手が魔術師なら元春がいた方がいい。

ステイルは……速効性の魔術じゃないからいらね。

「何かよからぬ事を考えてないかい？ まあ、いい。さつそく始めるよ」

元春が作った魔術式にステイルが手をかざすと、術式におかれた折り紙達が風もないのに動き始めた。

オリアナの魔力を探知中ってどこか。

折り紙達がそれぞれ回転しながら、円の中心に置かれたオリアナの紙に向かって動いていく。

やがて、ピタリと重なり映像が映し出された。

それは学園都市のある部分へとズームアップされていき……

「うぐああああ〜!!」

「ステイル!」

突然ステイルの体に異変が起きた。

ステイルは、まるで電撃でも浴びせられたかのように痙攣をおこし、倒れこんだ。

幻想支配で視ると、ステイルの体を明らかに別の魔力が覆い尽くしていた。

「カミヤん！ ステイルの体を殴れ！」

「ああ！」

当麻が幻想殺しでステイルに触れると、パキンという音とともにステイルに纏わりついてきた魔力が砕けちった。

「なん、だ、今のは……逆探知防止の迎撃術式の種類、か？」

何が起こったのかは、ステイル自身にもわかっていないようだ。

恐らくはステイルに探知されると知ったオリアナが、何か魔術を使って妨害したって所か。

「いや、そんな痕跡はないぜ。恐らくステイル個人の魔力に反応して、自動的に反応する迎撃術式が組み立てたんだだろうぜい」

前にやりあったインテックスの自動迎撃装置みたいなものか。

となると、魔術的に追跡は困難って事か。

元春とステイルはオリアナが魔道書の原典を持っているのか、とか魔術的な会話をしているけど、俺は話半分聞いていた。

もちろん、完全に無視しているわけじゃない。

ステイルと元春科学側の俺が魔術関係の専門用語を真剣に聞いた所であまり意味はない。

あくまで俺は科学側。魔術師側の組織的行動を科学、木原に置き換えることは簡単だけど、魔術の知識は応用させようがない。

その間、俺はある準備をしつつ、オリアナの行動から裏を読みとこうとした。今までのオリアナの行動は違和感を覚えた。

追跡封じの異名を持つものだから、追跡者を妨害する術は沢山あるのは当たり前だ。

だが、それでも、言葉に言い表せない違和感がある。

逃げに専念しているようで、別の目的を隠している気がしてならない。

「それで、結局これからどうするんだ？」

「まずは自動迎撃術式をぶっこわして、ステイルの魔術を使えるようにする」

今のステイルは、オリアナのせいで魔術を全て封じられた状態だ。

まずはそれをどうにかするのが先というわけだ。

「ステイル、何でもいいから魔術を使え」

元春がさつきから準備をしていたのは「占術円陣」というもので、誰の魔力も通つてない未使用の魔法陣だ。

これにステイルが魔力を使って発動させることで、わざとオリアナの迎撃術式を発動させて今度はそれを探知して居場所を探すというものだ。

当然、ステイルには迎撃術式からの攻撃が来る。

一度で見つけられる可能性はほぼなく、見つけられるまで同じことを繰り返すという。

この方法しかないのだろうが、当麻が納得できるはずもなかった。

「おい、待てよ！ それじゃそのためにステイルがボロボロになつても、それで構わないっていいのか！」

「ああ、それでオリアナを見つけて今回の事件を解決できるならな。カミヤん、これは命がけの戦いだ。国が傾く危険性もあるほどのな」

激昂する当麻に対して、元春は冷ややかに返した。

その目はいつもよく見る、裏の顔だ。

「わかった。それでいこう」

「ステイル！」

「馴れ合うなよ、上条当麻。それで問題が解決すなら構わない」

この事件を早く自分達だけで解決させなければ、インデックスが巻き込まれて、その結果、魔術世界の闇へと逆戻りになる。

その為に、ステイルは自分がどうなろうと構わない。

それがステイルの決意だった。

流石に当麻も、それ以上は何も言えなかった。

で、俺の方は準備が整った。

「はいはい。険悪シリアスモードはそこまでそこまで」

今まで少し離れて3人の様子をうかがっていた俺は、ステイルが魔法陣へと足を踏み入れようとするのを遮り、元春と当麻に向き直った。

「ユウヤン？ 一体どういうつもりだ？ まさかと思うが、カミヤンみたいに止める気か？」

「うん、止める。だって他にいい方法があるからな」

「どういう意味だ、ユウキ」

3人共訳が分からないといった顔をしている。当然だな。

「魔術的な追跡がダメなら、科学的に追跡すればいい。違うか、元春？」

「科学的に？ どうやってやるつもりだ？ まさか追跡系の能力でもコピーするのか？」

「時間がかかるぞ？」

「おいおい、元春。俺が誰だか忘れたか？ 3人共、20分だけ待て。すぐにオリアナを見つけ出す。それでダメならさっきの方法でやればいい」

「お、おい！ どこに行く気だ！」

困惑する当麻を背に、俺はとある場所へと向かった。

俺は学園都市のいたる所に専用のアジトを設けている。

そのうちの1つが、このバス整備場近くにある。

アジトの隠しドアを開けて、中へ飛び込むように入った。

遠隔操作で起動させていたPCを操作すると同時に、尼視へと通信をつないだ。

『……全く、私だつて暇じゃないんだけどな?』

「俺だつて暇じゃないのに、厄介な仕事を回してきたお前が悪い。これくらいはやれで、できたのか?」

『私を誰だと思ってる? もうとづくに終わってる』

そういうとモニターにある情報が表示された。

それは、オリアナの追跡データだ。

実は整備場へ追跡中にオリアナをちらりと見かけた時、画像を撮っておいた。

一瞬だったので、鮮明には撮れなかったが、全身像は撮れていた。

それを尼視にメールで添付して送った。

―整備場中心にコイツを追跡させて、そのデータを近くのアジトへ送れ。

学園都市には多種多様な防犯カメラが設置されている。

特に人の目が届きにくいこういう場所は色々な位置に設置されている。

それにオリアナの画像を入力させて、追跡させる。

この手は、流石に元春じゃ思いつかなかつた。

いや、思いついても実行には移せないだろうな。

監視カメラを使っての追跡なんて、俺もたまにしか使わない。

いくら木原の俺でも権限には限界あるしな。

で、尼視にそれをやらせたわけだ。

『おい。こつちに気を張るのはいいが。本番を忘れるなよ?』

「当たり前だろ。だからこそとつととケリつきたいんだよ」

『それが分かかってるならいい』

それだけ言って尼視は通信を切った。

さて、オリアナの現在地はつと、見つけた。

「まだそこまで離れていない、か。相変わらず行動パターンが分からないやつだ」

次に元春に電話をかけた。

「元春。オリアナの現在地が分かった」

『もうか!? 一体どうやって……ああ、聞くだけ野暮か』

「そういう事だ。今、整備場からの行動を逆算して……待て」

追跡封じと呼ばれる奴が、迎撃術式を仕掛けただけで終わると思えない。

なので、オリアナが整備場を出てからの行動を追ってみたが、一つ不審な行動が目

移った、

整備場を出た後、オリアナは運営委員の男子生徒が運んでいた玉入れ競技の為にボール籠にぶつかった。

ちようどオリアナは背後にある整備場の方を向いていたので気を取られてぶつかった。

これは完全に事故に見えた。が、問題はその後だ。

運んでいた男子生徒に自然な動きで色目を使った。

その動作が注意を逸らす為の動きだと分かり、オリアナの手元を拡大して動きを追った。

するとオリアナは、男子生徒が自分の胸に目を取られている隙に、彼がもっているボール籠に何かを張り付けた。

よく見ると、それは整備場で見かけたオリアナの術式が書かれた厚紙だった。

「おい、元春。オリアナが競技用のボール籠に単語帳を張り付けていたぞ。まさかこれって」

『何!? 恐らくそれが当たりの可能性が高いな』

ボール籠に張られた単語帳、これがただの白紙の単語帳なのか、迎撃術式が書かれた札装なのか、それとも別の何かなのかは映像では判断できない。

「なんにせよこれが罠なのは間違いない。俺はオリアナを追う。お前と当麻でそつちを

任せた」

ポール籠がどこで使われる物かは分かったが、競技場のどの場所に立てられるかまでは時間がなかった。

とりあえず、ポール籠が使われる競技場の情報を元春と当麻の携帯に送った。

『ま、待て。なら俺とカミヤんでオリアナに……』

「ポール籠に張られたのが、ステイルへの迎撃術式か、それ以外の何かが分からない以上。礼装を破壊できる当麻と魔術知識があるお前が向かうしかない！ さっきのお前とステイルの会話はばっちり聞いていた。オリアナが使う魔術の種も大体分かった。どっちにしろ足止めは必要だ！ オリアナの居場所は俺の携帯のGPSで追ってこい」

『……分かった』

元春との通信をおえて、パソコンを操作し、引き続き監視カメラにオリアナを追跡させて、そのデータを俺の端末へ転送するように設定をしてからアジトを飛び出した。

バイクが使えればいいのだが、大覇星祭中は私用車も含めて使用禁止だ。

だが、オリアナの現在地はリアルタイムで分かっている以上、地の利はこちらにある。

「今度こそ、逃がさない！」

俺は学園都市中を昔からバイクだけではなく、足で走り回ったり裏道や下水道、時に

はビルからビルへ飛び移ってきた。

そんな俺が、いくら地図で何度もシミュレーションをしてきたであろうと外部の人間に、追跡で遅れは取らない。

オリアナの居場所を最短ルートで駆け抜けて、アイツが人気のない場所を通るのと同じ時に追いつくことが出来た。

「追いついたぞ」

「……あら、見つかったわ」

無人の道へ入り込んだ先に俺がいたことに、オリアナは驚いた顔をしたが、それも一瞬の事。

相変わらずオリアナは看板のようなでかい荷物を抱えている。

アレが刺突杭剣……か？

「あなた、明らかに魔術師じゃなくてここの学生さんよね？ まさか君みたいな坊やに追いつかれちゃうなんてね」

「お約束のセリフだが一応言っておくか。ソレを置いて降伏しろ。でなければ、容赦しない」

「ふふつ、坊やみたいにしつこい男の子は嫌われるわよ？ それにお約束なら、私がどう

返すかもわかるでしょ？ 答えは、ノーよ！」

オリアナは右手で素早く単語帳を取り出し、その1枚を口にくわえた。すると、カキンというグラスとグラスが当たったような音が響いた。

だが、それだけで、あとは何も起きなかった。

「?」

何かの術式を発動させたのは分かるが、何も起きず少し困惑した。

けど、使った本人であるオリアナにもこの結果は予想外だったようだ。

「あら、坊やはさっきの整備場を無傷で通り抜けたのね。意外とやるじゃない」

「なんの事だ?」

「今使ったのは、一定以上のけがをした人を昏倒させる術式よ。お姉さんなりに傷つけずに済ませようと気を使ったのだけどね」

「そいつは残念だった、な!」

俺にとつても一撃目は予想外だったが、これでオリアナの戦闘方法は確認できた。

後は、攻めるのみ。

オリアナに向けて一目散に駆け出す。

「っ!?! はやい!」

そこまで距離はなかったのもあつたが、すぐにオリアナの横に回り込めた。

俺の速さに驚いた表情を浮かべた。

その顔へ向けて拳を振るった、が、躲された。

「けど、甘いわね」

今度は逆にオリアナが蹴りを繰り出してきた。

かわし切れず、左手でガードしたが、蹴りは思った以上に重かった。

蹴り飛ばされそうになったのを、どうにかこらえてオリアナと距離が空かないようにできた。

この距離ならまだ俺の間合いだ。

だけど、うかつには飛び込めない。

「驚いたわ。科学の街だからって、舐めたらダメね。生身でここまで速く動ける子がいるとは思わなかったわ。」

「こっちも驚きだ。魔術師のくせになんて格闘能力だよ」

「それって魔術師への偏見じゃないかしら？」

「どうかな？」

俺が今まで出会ってきた魔術師は、みんな身体能力というか格闘戦に弱かった。

火織や天草式達は別だけど、アニーゼ達も武器を持たないと話にならないくらいだった。

けど、オリアナは違う。彼女は、格闘戦も強い。

「でも坊やもなかなかのものよ？ お姉さん予想外すぎて、興奮しちゃったわ」
わざとらしく胸元を強調させてポーズを取るが、俺にそんな挑発は効かない。

「色仕掛けは相手を見てやるんだな！」

再び接近して殴りかかろうとしたが、オリアナはそれより早く単語帳のページを口にくわえた。

「ちっ！」

とっさに飛びのき、地面を転がるように横へと飛んだ。

俺が避けた先に、青い光が走り道路を切り裂いていった。

「？」

それを見たオリアナは、怪訝な表情を浮かべたが、すぐ次のページを口で破ろうとした。

「おせえ！」

今度は速かったのは俺の方だ。

オリアナが口にくわえるよりも速く、俺の拳が腹に突き刺さった。

「がはっ！」

口から空気が飛び出たが、それにも怯まずオリアナは単語帳を口にくわえた。

「まずっ!？」

両足の筋肉に力を込めて、連続してバク宙をして距離を取った。

直後、俺とオリアナの間に黒いトゲが生えた。

今のは、かなり危なかった。

このトゲは、少しかすただけでも麻痺して動けなくなるからな。

でも、オリアナと距離が空いてしまった。

「……今のもまぐれじゃないわね。坊や、一体どうやって私の魔術をかわしたのかしら？」

「素人じゃあるまいし、切り札を簡単に明かすと思うか？ どうしても教えてほしいりや、大人しく捕まるんだな」

「そう。なら、聞かないでおくわ」

と言っても、オリアナは追撃で魔術を放つては来なかった。

何度も自分の魔術が回避されたことで、少し警戒しているようだ。

俺がなぜオリアナの魔術を何度も回避できたか。

それは、彼女に追いついた時、幻想支配で視たからだ。

俺は、一度幻想支配で視てしまえば、相手の能力が使えるようになる。

それは同時に、相手がどんな能力を使うのか、分かってしまう事になる。

これが幻想支配の応用編だ。

そして、これは相手が魔術師だろうと同じ事。

オリアナがどんな礼装をどういう風に使って魔術を使うかは、元春とステイルの会話で予測はついた。

あとは、実際にオリアナを視てしまえば、魔術による攻撃パターンは予測できる。

オリアナはあの単語帳に様々な術式を書いている。

後は、口に含んで魔力を通せばすぐに発動できる。

問題は、あの単語帳に書かれた術式が多種多様すぎて、どの術式を発動するかは、直前まで分からない事だ。

俺にできるのは、俺とオリアナの距離と状況からアイツが使いそうな魔術を瞬時に予測して、回避行動をとる事。

でも、この回避方法はそう何度でもできることじゃないし、毎回賭けをしているのと同じだ。

そんな綱渡りをしているなんて、オリアナに気づかれるわけにはいかない。

それに、今のこの状況で使われたくない魔術はいくらでもある。

それを使われる前に終わらせないと

「このまま遊んでいたいけれど、そろそろ行かせてもらおうわね」

オリアナは、元春たちがここに来ることを警戒しているようで、早く切り上げるつも

りだ。

なら、俺も今さっきできたばかりの切り札を使うか。

と、ここでオリアナの背後にある電光掲示板が目に入ってしまった。

——玉入れ 競技が急病人の為、一時中止になった。

普段ならこれくらい、何とも思わないだろう。

けど、玉入れ 競技と、それが行われた場所がまずかった。

急病人が出た場所は、オリアナが張り付けたポール籠が使われた場所だった。

「坊や、よそ見なんて、余裕ね？ お姉さんから目を離したらダメよ？ あら？」

「……………」

その時だった。オリアナの持っていた荷物がほどけてしまった。

さっきオリアナの腹を殴ったと同時に、荷物を奪おうとした。

けど、それはうまくいかず、覆われたシートの結び目をゆるくするのがやっとだった。

それが今ほどけて、中が露わになった。

「それが、刺突杭剣……なわけないよな？」

「あらあ、バレちゃったのならしようがないわね」

オリアナがもっていた、看板のような大きな荷物。

それは、まさにアイスクリーム屋さんの看板だった。

つまり、オリアナは刺突杭剣なんて持っていないという事だ。

「……ちよつと予想外すぎるわね。いいわ、この場はひいてあげる」

「つ、待て！」

オリアナは看板を地面に投げ捨てる、竜巻を生み出した。

と言つても、竜巻はオリアナを中心に吹き荒れるだけで、俺に向かつては来なかった。

そして、竜巻が収まると、そこにはオリアナはいなかった。

「逃げられたか、くそっ！」

とりあえず、逃げられた事を悔やむよりも当麻達に連絡を取らなければ。

オリアナが持っていたのがただの看板だと分かっただけでも収穫としておこう。

看板の事もだが、それよりも玉入れ競技の急病人が気になった。

ひよつとしたら、魔術とは関係なくただの疲労による昏倒や、競技での事故かもしれ

ない。

そう、願いたかった。

元春に電話をすると話し中だったので、当麻に電話をかけた。

「当麻、こつちはひとまずは終わつた。そつちは……急病人が出たみたいだが」

「あ、ああ……それが」

当麻の声には怒りと疲れと、少しの後悔が混じっているように感じた。

それだけで、何が起きたのかは9割察した。
後の1割が知りたかった。

「間に合わなかった……吹寄が、魔術にやられた」

続く

第128話 「真なる脅威」

当麻達と合流し念の為、俺がオリアナから奪った刺突杭剣らしき看板を元春に確認してもらった。

見た目が看板だからと言って魔術で偽装しているとも限らない。

幻想支配があるとはいえ、科学サイドの俺が魔術サイドのブツを鑑定できるなんて驕りはない。

「俺がしくじったんだ。最初は美琴が礼装に触れたと思った。でもそれは勘違いで、それに気づく前に制理が……くそっ！」

オリアナが玉入れ競技のポールに張り付けた礼装を、当麻と元春が追っていた。

そして、ポールに触れたのは、運悪く競技の運営委員担当だった吹寄制理だった。

当麻がいち早く制理に右手の幻想殺しで蝕んでいた魔術を消したけど、後遺症は少し残った。

「冥土帰しには、熱中症と過労って事で処置してもらった。命に別状はないそうだ」

念のため、冥土返しに手配はとっておいたから、彼の病院に搬送された制理は万全の態勢で治療を受けることが出来た。

元々運営委員として働きづめだったから、その疲労が溜まっていたのもあったそう
だ。

「このツケは絶対にオリアナに支払ってもらおうぜ」

そういうと、当麻は今まで以上に決意の籠った目をして頷いた。

「さて、盛り上がってるところ悪いけど、話に割り込むぜよ、お二人さん。この荷物に関
しては問題ないぜい。これは真正正銘、ただの看板だ」

「全く、とんだ茶番だね。こんなものに付き合わされていたとはね」

と、そこへステイルもやってきた。

彼は電話しながらこっちに向かっていたが、表情がかなり険しくなっている。

嫌な予感しかしない。

「今回の一件、第一報は魔術側が持ってきたものだろ。精査はちゃんとしろよ。情報は
武器なのはそっち側も同じだろ」

「……違いはない。ああ、根底から間違えていた。今イギリスから連絡があった。事態は
思っていたよりずっと深刻だったよ」

ステイルがイギリスから受けた連絡はこうだ。

オリアナが学園都市に運んでいたのは、刺突杭剣にあらず。

そもそも、刺突杭剣という魔術礼装は存在しない。

歴史が深い魔術礼装が本来とは違った伝承として伝わるのは、考古学的にも魔術的にもよくある事らしい。

で、ここからが重要だ。

刺突杭剣が存在しないなら、オリアナが学園都市に持ってきたのは何か。

それは……

「使徒十字<クローチエディピエトロ> ペテロの十字架と言えば聞き覚えはあるかな。全く、とんでもないにもほどがある」

ペテロの十字架。俺は、かろうじて聞き覚えがある程度の知識しかない。

当麻に至っては何のことかさっぱりわかっていないようだ。

元春は流石に理解しているようで、眉間に皺をよせて冷や汗をかいている。

それからペテロの事も含めて、色々元春が説明してくれたが、経緯やら伝承やらはどうでもよかった。

肝心なのは、使徒十字が何に使われて、使うとどうなるものなのかという事だ。

「使徒十字をここで使うと、学園都市はローマ正教の支配下になるという事だ」

「なっ!?!」

使徒十字が刺した場所は、ローマ正教の物になる。

それは単にローマ正教の領土になるという事ではない。

使徒十字が刺さった場所では、目に見える見ええない、良い事悪い事、その全てが、戦争ですらローマ正教が有利になるように働くようになる。

そして、誰もそれを不思議に思わない。

気が付けばローマ正教だから安心、ローマ正教は絶対に正しい、なんて深層心理に深く植え付けられたりもするんだろう。

学園都市は物理的に崩壊しなくても、使徒十字が刺される前と後では内面的に全く別の都市になってしまう。

そんな事になれば、科学も魔術も関係ない。

世界のバランスがローマ正教に一気に傾く。

そういえば、似たような事を考えてた木原がいたな。

そいつは俺が殺したけど、あの時は命令があつて殺せるから殺しただけだったから深くは考えなかったけ。

つて、今はそんな事どうでもいい。

「つまり、この取引の引手が分からなかったのは、最初から引手なんかいなかったからか」

「送り側リドヴィアと運び手のオリアナで、ローマ正教の支配下に落ちた学園都市と世界のバランスを引き取るって事さ」

ステイルはタバコを地面に捨て、忌々しげに吐き出した。

「止めるよ。この取り引き。さもなければ世界は崩壊よりも厳しい現実には直面する事になる」

「はあ、今までも何度か危うい状況を防ぐことはあったが、ここにきてついに世界レベルの危機ですか。」

「で、そんなこんなで昼休みという事で一時解散となった。」

「悠長にしている場合ではないのだけど、オリアナの行方が追えなくなった。」

「学園都市中の監視、隠しカメラ＋その他、でオリアナを自動追尾していたが、それもとつくに巻かれている。」

「流石は追跡封じ。魔術師とはいえ、科学の本拠地に乗り込んでくる以上、それ相應の備えはしているらしい。」

「どうやったかは知らないけど、俺の手段ではオリアナを追えなくなった。」

「かといって、これくらいで追跡手段が全て絶たれたわけじゃないけど、俺の用意できる追跡のリソースはそろそろ別の案件に向けなければいけない。」

「世界の危機と天秤にかけられるレベルじゃないが、世界の危機を救った後の事も考えるところの方がいい。」

今回の一件を解決して、はい全部終了、ではない。

オリアナやリドヴィアを追跡する手段は元春に任せる。

さつきは魔術側での追跡手段が絶たれたからこっち側を使っただけだ。

で、今は当麻がオリアナの探索妨害魔術を打ち破ったおかげで、魔術でオリアナを追跡できるようになったんだ。

なら、今後はそっちでやってもらう。

魔術側が発端の問題に、こっちの手札をこれ以上使うのは今後を考えても効率悪い。

というか、そろそろ上から止められそうだしな。

天草式の時はこっちの手札を切りすぎたとまで言われたからな。

あの程度の技術、別にさらしても痛くもかゆくもないだろうけど、変なところに慎重なんだよな。

それに元春にだって科学的な追跡が出来ないわけじゃない。

色々と裏ワザを教えたことだってあるし、当然見返り込で。

まあ、いつか。

ステイルが使徒十字の詳しい情報をイギリスで調べるといふのだ。

闇雲にオリアナを撃破したところで、使徒十字を使われればそれまでだ。

だから、使徒十字の詳しい使用条件が分かれば、先手を打ちやすくなる。

その方針には賛成なので、俺も今のうちに食事を済ませることにした。

「……世界の危機、ねえ」

今回の一件が世界の危機だつていう実感はあるが、それを俺が食い止めるといふ実感がわかない。

当麻と関わってから、いや、その前から色々やってきた。

でも、それは単に殺したり、逃亡者を追跡したり、裏切りや取引を潰したりという人助けとは真逆の事ばかりだ。

まあ、理后や最愛、海鳥達の時みたいな事も多かったけどな。

「柄じゃない。なーんて今更だな。さて、何を食べるか……な」

何気なくモニターを見上げると、バルーンハンターという競技が行われていて、美琴が他校の生徒のバルーンを落としていく様子が映し出されていた。

が、何かおかしい。美琴の振る舞いに違和感があった。

まさかかと思い、美琴をよく見ると……

「やっぱり、御坂妹か。多分10032号かな」

直接見てないのでどの御坂妹かは正確には分からないけど、モニターに映っているのが美琴ではなく御坂妹だというのは分かった。

「美琴も御坂妹も自分から入れ替えるわけないから、何かの事故か……まずいな」

もし、このモニターに映っているのが美琴ではない、とアイツにバレたら非常にまずい。

この状況下では特にだ。

せっかかくアイツらの別荘を次々と潰していったのに、これでは元も子もなくなる。

「動くのは明日、の予定だったけど、仕方ない」

元春には裏の用事で抜ける。何かあればすぐに連絡しろ。とだけメールして、すぐにモニターが映し出している場所へ向かった。

途中にいた摩擦を操る能力者を視て、急いでかけつけた。

しかし、少し遅かったようだ。

御坂妹、10032号は何者かに昏倒させられていた。

足に何かで刺されたような跡がある。

彼女にそんな事が出来るタイミングは、さっきのバルーンハンターか。

そういうえば、さっき御坂妹のバルーンが割られる寸前、彼女の様子がおかしかった。

恐らく、その時に小型のデバイスで遅行性の麻酔を打たれたみたいだ。

毒を盛ると思えないからな。

で、あのバルーンハンターの状況下で御坂妹本人にも周りにも誰にも気づかれず、的

確に麻酔を打つことが出来るのは恐らく小型の軍事デバイス。

そして、その持ち主は、馬場芳郎あたりか。

が、そこまでは想定内の事だったのだけど、それ以外の想定外の事もあった。

「よっ、お前らも来たのか」

「あらあらこれはこれは、せんぱーい♪ こんな所で出会うなんて偶然力働きすぎだぞ☆」

俺より先に異変に気づき、御坂妹を保護しようとしていた2人の男女がそこにいた。

体操服の少女は、美琴や沈利と同じく超能力者第5位の食蜂操祈。

学園都市最高の精神系能力者。

複数のリモコンで能力の指向性を安定制御しなきゃいけないという欠点もあるが、それでも彼女は敵に回せばある意味一番レベル5で手ごわい相手になる。

そんな彼女は、昔からの知り合いで俺の能力や木原絡みのごたごたも知っている。

で、俺が今年から高校に通う事を知ってからは、わざとらしく先輩と読んでいる。

「おや、アナタもここにきましたか」

そしてもう1人、スーツを着た外人男の方はカイツノックレーベン。警備強化専門のアドバイザーで、今は操祈に雇われている。

こいつはあの実験にもセキュリティ面で関与していて、天井亜雄の一件で知り合っ

た。

善人と悪人、どっちつかずのフラフラな性分で、慎重派だが詰めが甘い所もある。で、この2人がここにいてるってことは、別に俺来なくてよかったじゃん。

「状況は？」

「アナタの懸念は分かりますヨ。ですが、今回は逆のようすネ」

「逆？ どういう意味だ？」

「つまり、敵は御坂さんを狙ったつもりで、妹さんを間違えて襲ったのよ。私と彼もあなたと同じ懸念力があつたから、ここまでできたのだけれどねえ」

俺と操祈とカイツが懸念していた事。

それは敵が御坂妹と分かっていてこんな事をしたのではないか、という事だ。

けど、実際は御坂美琴を無力化する目的で間違えて御坂妹を襲った、のが正しい。

それはそれで問題ありだが、ひとまずは大丈夫か。

「なるほど。敵が馬鹿でよかった。そんじや、彼女の事は任せた」

「ちよ、ちよつとちよつと！ どこへ行くつもりなのよ」

「俺は今別件で超忙しいんだよ」

「別件？」

操祈が俺を睨みながらリモコンを向けてきた。

それに対して俺は何もしない。

幻想支配を使う必要もない。

彼女が俺の頭を覗くのは必要最低限の情報のみだからだ。

操析が俺に能力を使うのはこれが初めてじゃない。

けど、操析は俺の心を読むことはあっても、操ったり超機密事項まで読み取ったりはしない。

それをした場合、どんな事になるか知っているからだ。

彼女も、学園都市の真の闇を知っている。

「……そう。あの人も関わっているのね。なら説得力が1000倍増ね」

「お前、いらん所まで読むなよ。自爆って言うんだぞそれ」

操析は、俺が今学園都市内である重大事件を追っている事だけを抜き取った。

だが、それに当麻も関わっている事まで知ってしまい、少しだけ表情を曇らせた。

あまりそういう表情をさせたくはないんだけどな。

「とにかくそういう事情だから。御坂妹は、恐らく暗部の馬場芳郎のT・M・Qにやられたんだと思う。殺す事は目的じゃないはずだから、そっちで駆除できるレベルだろう。後でデータを送る」

「ええ、分かりました」

「ああ、ついでだ。カイツ [Auribus oculi fideliores unt.] はどうなってる?」

あれもあれで早急にどうにかしたいけど、カイツの方が適任だ。

初春レベルでもなきやな。

「そつちも問題ありませんネ。あなたのくれたプログラムを元に、強力なダミープログラムを走らせてます」

「あれ、先輩が作ったのね。彼だったらプログラミング力で作った——なんて大胆な発言力だったのよ」

「い、いえいエ。それは……ですネ」

「そんな細かい事気にしてないつての。大部分を作ったのはたしかにカイツなんだし。じゃ、俺はもう行く。また明日な」

「ええ、また明日」

あまり操作たちと接触してない方が今はいいからな。

それに、さつきから妙な胸騒ぎがする。

最初は御坂妹の事かと思つたが、違う。

何か、こうとんでもなく嫌な予感がする。

元春に電話したらつながらなかったのだから、当麻に連絡をした。すると、元春はオリアナと交戦して取り逃がしたようだ。その時に携帯と、探索する理派四陣に必要なオリアナの礼装である単語帳を破壊されたらしい。

正直、手詰まり感はあるが、ひとまず第7学区へ向かった。

元春がオリアナと交戦した第5学区の地下道から近くにある交通手段をいくつか探索すると、第7学区へ地下鉄とバスを乗り継ぐ可能性が高い。

「さて、当麻とステイルはこの先の後から地下鉄で来るはず、うまくいけば挟みうち……っ!?!」

そこへ向かう途中の路地で、人だかりができている。

けど、それに訝しむ前がある臭いが鼻についた。

それは嗅ぎ慣れた臭いだったが、この場では似つかわしくない臭い。

血の、臭い。

「……くそっ!」

血の臭いが強くなる。

その時、オリアナの事は頭から消えていた。

「どけっ!!」

大声を出して、人の海を突き進む。

「ひ、姫神ちゃん！ 姫神ちゃんしつかりしてください！」

その先にあつたのは、倒れた少女とそれに寄り添い泣き叫ぶ小萌先生の姿。

そして、一面に広がる赤い血。

「……あ、秋沙？」

嫌な予感が、的中した。

血だまりの中、倒れているのは、全身をずたぼろに切り裂かれた姫神秋沙だった。

続く

第129話 「憤怒」

血だまりに沈む秋沙が目に入り、呼吸も心臓すらも止まったような気がした。

次に、頭から全身を怒りと憎悪と殺意が駆け巡った。

でも、秋沙の名を叫びながら包帯を巻いている小萌先生の姿が目に入り、殺意も何もかもが一瞬で消し飛んだ。

人ごみを強引にかき分け、秋沙の元へかけより状態を確認したが、誰が見ても瀕死の重傷だ。

「小萌先生、何があつたんですか？」

「ゆっ、ゆうきちちゃん……姫神ちゃんが、姫神ちゃんがあく!!」

小萌先生は、大粒の涙を流しながら、必死に包帯で秋沙に応急処置を施そうとしていた。

「話はあと。今は秋沙の手当てが先。これ使いますよ」

小萌先生が持っていたのは、棒倒しの時に傷だらけの青ピ達の為に用意していた救急箱だ。

急いで救急箱の中身を確認して、思わず小さな舌打ちが出た。

一目で見えてわかってはいたが、秋沙は重傷で救急箱程度では焼け石に水にすらならない程だ。

それでもやらないよりはマシだ。急いで全身の傷に包帯を巻いていく。

この包帯は消毒も兼ねているので巻いていくだけでいい。

けど、巻けども巻けども血は止まらず、包帯を赤く染めていくだけだ。

隠れアジトやバイクに常備している物ならもつと的確な処置が施せるけど、ないものねだりしても仕方ない。

「救急車はもう呼んでありますか？」

「は、はい」

これだけ動揺して震えながらも的確な処置を施して救急車まで呼んでいる小萌先生を流石と思いながら、応急処置を続けた。

やっと包帯を巻き終えたところで、人ごみの向こうから見慣れたツンツン頭と赤髪が見えた。

「姫、神？」

それは当麻とステイルだった。

当麻は、血まみれの秋沙を見て、言葉を失っている。

ステイルですら、驚愕の表情を浮かべている。

「なんで、そんな……姫神、一体どうして!？」

小萌先生は涙声で何が起きたのかと話出した。

少し前、2人は金髪の女性とぶつかり、その時小萌先生の持っていた水が秋沙へとかかった。

金髪の女性は最初なんでもない風にしていたが、びしょ濡れになった秋沙を見て表情が一変。

いきなり怖い顔をしたと思ったら、秋沙の体が見えない何かに切り裂かれたようになったという。

間違いなく、その金髪の女性はオリアナだ。

「でも、なんで秋沙を?」

「それは恐らくアレの仕業だろうね」

忌々しげにタバコを吐き捨てながらステイルが指差した先には、いつもは秋沙が首から下げている十字架のネックレスが落ちていた。

それは、秋沙の能力である【吸血殺し】を封じるためにイギリス清教が作った特別なネックレスだ。

吸血殺しは吸血鬼を呼び寄せて殺す危険な能力で、秋沙はその能力ゆえにある事件に巻き込まれた。

「なるほど。オリアナの奴、間違えたか」

「間違え、た？」

「あのネットワークスはイギリス清教が作り上げた特別製。俺達に追われていたオリアナは偶然それを目にする事で、秋沙が強力なイギリス清教の魔術師だと勘違いしたんだろ。自分を追ってきた魔術師、つまり敵としてな」

「なんだよ、それ。それだけで、それだけで姫神をこんな風にしたっていうのか？ ふぎけ 「ああ、ふぎけてやがる」 ユウキ？」

当麻は思わず手近の壁を殴りつけようとして、その手を止めてこちらを驚いた顔で見つめた。

「ああ、全くふぎけた話だ。制理も秋沙も何もしてない。ただ大覇星祭を楽しんでいただけの一般人だったのにな」

「お、おい、ユウキ？」

「ん？ どうした？」

見ると当麻と小萌先生が何か怖いものを見たような目で俺を見ている。

「君、とても怖い顔をしているよ。それは彼らには毒だからやめた方がいい」

ルーンカードを取り出して、人払いの結界を発動させたスタイルに言われて、ハッとなった。

鏡は持っていないけど、今の俺の顔、すごい事になっているようだ。

それくらい怒っている。ここまで怒っているのはミクの死を知った時以来だな。

と、自己分析した所で、両手で頬を強く叩き、表情を元に戻す。

感情的になる前にやる事がある。

ふう、俺もまだまだだな。

「まずいな。色々足りなすぎる。ステイル……つて、お前治療術式使えないんだったな。

ホント、使えないやつ」

法の書事件の時、ステイルを視て使える術式は一通り把握している。

それによると、ステイルは火傷の治療はできても裂傷などそれ以外の怪我は全く対処

できない。

「つ、一言余計だ！ それに出来る限りの応急処置をしたところを見ると、救急車の手配も済んでいるのだろうか？ なら、さっさと大通りまで行つて誘導しろ。ここにいても救助隊はやつてこれない」

「……ああ、そうだな」

人払いの結界のおかげで野次馬は去つたが、結界の作用で救急車が到着してもここを
発見できない。

だから俺が結界の外からここへ誘導する必要がある。

必要な処置、いや、出来る限りの処置はした。

さっきいた野次馬達に使える能力者がいればよかったのだけど、どいつもこいつも無能力者ばかりだった。

これ以上は、何も出来ない。

知識はあつても、それを活用できる道具が、全くない。

だから、今の俺に出来るをするが、秋沙が持たないかもしれない。

姫神はそれほどの重傷を負っている。冥土帰しに診せる前に、救急隊員が来る前に、手遅れになるかもしれない。

けど、これ以上俺が出来ることはない。

急いでこの場を離れて誰か適切な能力や道具を調達できればいいけど、それも時間の無駄になる。

「お、おい、待てよ！ 姫神は俺達のせいで巻き込まれたんだぞ！ その姫神をこのまま放っておく気かよ！」

当麻にはそう見えただろうな。

現にステイルは血まみれの秋沙の上をまたいでオリアナの追跡を再開しようとしている。

俺は、救急隊員をここへ誘導するために離れようとしたんだけど。

ああ、姫神の容体を冥土歸しに伝えないとな。

「調子に乗るなよ、素人が」

ステイルは当麻の髪を掴み、強引に秋沙へと目をむかせた。

「このままここにいて、この少女に何が出来る？ プロの僕ですら何も出来ないんだ。素人の君が一体何が出来る？ 手を握れば傷が癒えるか？ 叫べば彼女の痛みは引くのか？」

ステイルは怒っている。が、その怒りは当麻だけに向けられているのではない。

元凶のオリアナと、傷ついた秋沙に何もできない無力な自分に向けられているみたいだ。

「その怒りが君一人だけのものだなんて思うなよ。学園都市の闇に生きる彼だつて取り乱してあんな顔をした。それに僕にだって思うところがある。誰だつて、平静でいられるわけじゃない」

秋沙と知り合うきっかけとなった事件でも、ステイルはこんな表情を浮かべた事がある。

自分と同じ任務に失敗し、惨殺された魔術師の死体をみた時もこうだった。

死ぬ覚悟があつたであろう同業者の死体を前にしてもああだったのだ。

友人とまではいかないが、命がけて助けた秋沙が無関係な事件でこんな目にあわされ

たのを観れば、怒りは当然湧いてくる。

「当麻、これが俺やステイル、元春がいる裏の世界だ。何の罪もなく無関係な一般人が巻き込まれて死ぬ事もたくさんある。けど、そこで止まっていられないんだ。俺達に出来ることは元凶を一刻も早く潰す、それだけだ」

「……………」

当麻は何も言い返すことが出来ず、ただ黙ってゆっくりと立ち上がった。

瀕死の秋沙を治すためではなく、オリアナを追跡するために。

が、それよりも目に留まった光景があった。

立ち上がった当麻の先、小萌先生が何かをしていた。

小萌先生は、いつの間にか小石や空き缶を集めて秋沙の周りに置いていった。

あまりの光景に頭がイカれたのではないかと思うくらいだが、彼女はそういう人間ではない。

どんな状況だろうと、生徒の為に何かをする先生だ。

ならば、今彼女は一体何をしようとしている？

「君は何をやっている？」

ステイルもその光景に驚いたような顔をしている。

「シスターちゃんの時はこれでなんとかなったのですよ」

シスターちゃん、インデックスの時なんかあった？

それを聞き、ある事を思い出した。

記憶を失う前の当麻から聞いた事がある。

当麻がインデックスと2回目に出会ったとき、彼女はひどい傷を負っていた。

それを小萌先生がインデックスのサポートを受けて、治癒術式で治したというのだ。

「まさか、あなたが？」

ステイルは火織からその事を聞かされていたと思ったが、それが小萌先生とは気づかなかったのかな。

「せ、先生ちゃんと覚えているのですよ？　なのに、どうして、どうしてうまくいかないのですか!？」

小萌先生は一生懸命にその時の術式を再現しようとしているようだが、何も起きない。

ただ並べただけで発動するような簡単なものではないのだろう。

せめて、インデックスがここにいれば……

「違う、そうじゃない」

「えっ?」

ステイルが小萌先生の隣に座りこみ、懐からルーンカードを出して並べていった。

「海の水をバケツですくうように、まずは「箱庭」で領域を設定するんだ」

ステイルはまるで教師が教え子に問題の解き方を教えるように、術式について補佐し始めた。

それを見て、何をしようとしているのか分かった。

「上条当麻、君たちは先に行つて、オリアナを追跡しろ。土御門の新しい携帯番号を教える」

「ステイル……」

「期待はするな。僕にとってこれは専門外だ」

それでも、ステイルは小萌先生と共に秋沙に治癒術式を施そうとしている。

小萌先生は、以前使ったインデックスの知識を基にした治癒術式に使った陣形の配置を覚えていた。

ステイルはそれを補佐して再発動させるつもりだ。

正直、俺と当麻がここにおいても邪魔どころか、幻想殺しで術式を破壊しかねない。

「当麻、行くぞ。ステイル、秋沙を頼む。ここで最高の名医の元へ運ぶ手配はする。だから、それまでの時間稼ぎだけでもいい」

「期待はするなど言つたはずだ。早く行け」

「わかつた。ごめん、女神、ナイトパレードが始まるまでには全て終わらせて戻ってくる

からな」

当麻が秋沙の頬にそつと手を当てると、彼女の目が僅かに動いたように見えた。

「当麻、俺は一旦別れる。この恰好じや下手に動けないしな」

「えっ!?! あ、ああ、そうだよな」

さつき秋沙の応急処置をしている時に結構返り血着いちやつたからな。

アジトとはちよつと離れているけど、そこに行くしかない。

着替えのほかに、やる事もある。

「土御門に伝えろ。オリアナが街を徘徊していた理由、単に俺達の追跡を逃れているわけじゃない。何か別の狙いがあるってな。あいつならそれで何か掴めるだろ」

「オリアナが、街を徘徊していた理由? あ、そうか!」

当麻は珍しく俺が言いたい事を瞬時に理解してくれた。

「今度こそ、絶対に逃がさない。確実に、潰す」

「ま、また怖い顔になつてるぞユウキ!?!」

「ああ、悪い。そういうわけでこつちから連絡する」

そういつて、俺は急いで冥土帰しに電話しながら近くのアジトへ向かった。

アジトへ着くと、俺は着替えをしながら尼視へと連絡を取った。

『苦戦しているようだな。それに加えてえらく不機嫌そうだな』

「お前の戯言に付き合うつもりはない。全力でオリアナとリドヴィアを追跡する」

それだけで俺のしようとしている事に気づき、少しだけ目を見開いた。

『正気か?』

「お前に正気を疑われる覚えはない。あつちに回していた追跡のリソースを最低限だけ残してこつちに回す」

『……なぜそこまでする? お前の本題はこつちではなくあつちだろう?』

「あつちは操祈達がすでに動いているからな。少しの間ならそれで十分だ」

尼視は少し考える素振りを見せたが、すぐに邪な笑みを浮かべた。

『しくじるなよ?』

「誰に言っている?」

通信を切り、オリアナとリドヴィアの情報を入力して追跡を再開した。

最も、今度の追跡に使うのは監視カメラだけでは無い。

体臭・体温・その他もろもろの身体情報や人の流れなど、俺が使えるすべての追跡装置を使う。

「最初からこうすべきだった……俺のミスだ」

あの時もこうしておけば、秋沙は傷つかなかったはずだ。

また頭に血が昇るが、同時に頭に浮かんだのは、御坂ミクの事。

あの時のように、暴走してはいけない。

早急に、確実に、アイツらを追いつめる。

と、同時に当麻の携帯の通話を傍受した。

どうやら元春と使徒十字について話しているようだ。

会話に混ぜてもらってもいいが、あの2人だけで色々進んでいるようだし、黙って聞かせてもらおうか。

「使徒十字の発動条件は、星座が関係してる、か」

オリアナが街を徘徊している理由。

刺突杭剣の取引をお囷にした使徒十字が使えるようになるまでの時間稼ぎ。

それと、使徒十字の発動にかかせない星座の光を利用する為に最適な場所を探す為という結論になったみたいだ。

それについて、何か元春には思う所があるようだが、俺も何か違和感があった。

オリアナの役目はともかく、リドヴィアの役目は何かだ。

オリアナが探した場所でリドヴィアが儀式を行う。

それが2人の役割分担……か？

標的が学園都市だからと言って、敵地である学園都市内部で儀式を行うにはデメリッ

トが大きすぎる気がする。

そう考えていると、ステイルの携帯から当麻へ着信が入ったようだ。

「ん、これはまさか！」

急いでつなぐと、当麻の少し上ずった声が聞こえた。

『もしもし、ステイルか？』

『女学生の手当てが終わった』

『姫神は!?!』

『もうあんな術式は2度と使いたくないね。とりあえずショック症状からは脱した。あとは医者の仕事だ』

「…………ふう〜」

それを聞いて、全身の力がふっと抜けた。

良かった。後は冥土帰しの仕事だが、あの人ならば大丈夫だろう。

心配だったのは、冥土帰しの所に行くまでに秋沙が死ぬことだった。

それでも、あの人なら治しそうだけど、最悪からは脱した。

これで、集中してあいつらを追う事が出来る。

何やらステイルはお礼を言いたい小萌先生から執拗に追われているようだけど、それは俺の知った事ではない。

「……っ、そうだ」

一つ思いついた事があり、急いで俺達がオリアナに遭遇した場所とそこを起点にして、オリアナの今日の行動パターンを逆算させた。

そのルートを元春の携帯に送信して、電話をかけた。

「元春、今送つたのはオリアナの今日、徘徊したルートだ」

『ユウヤン？ いきなり何を送ってきたのかと思ったぜい。てか、それよりその口ぶりだと俺達の通話は』

「ああ、ぼっちり聞いてたぜ。別に驚くことじゃないだろ？」

『それはそうだにやー……で、これを使って星座に纏わる何かを探せ、か。他にお前は何か思うところは？』

「オリアナもそうだが、リドヴィアだ。アイツの役割が何であれ放つてはおけない。2人を同時に追跡する。俺の使える全ての手段でな」

『OK。なら、俺達は使徒十字の事に専念させてもらおう』

「ああ、それでいい。何か分かったら連絡する」

これで俺はオリアナとリドヴィアの追跡に、元春達は使徒十字の事に専念できる。

使徒十字について完全科学サイドな俺があれこれ考えるより、元春とステイルに任せ
た方が早い。

で、学園都市内をウロウロしているオリアナとリドヴィアの追跡は、俺の方が適任だ。「ほんと、最初からこうすればよかったな……けど、俺を本気にさせたこと、後悔させてやる」

続く

第130話 「敵」

あれから探索や準備に時間がかかり、気が付けばそろそろ夕方になろうかという時間になっていた。

でも、時間をかけたおかげで今度こそ逃がさない為の段取りが出来た。

当麻達の方はどうなったかと電話をかけてみる。

もうすであつちでカタがついているのならば、それはそれで問題ない。

が、それはあまりに甘すぎるな。

「当麻、俺だ。こつちの準備は終わった。いつでもあいつらを狩れる。そつちは何か分かったか？」

『ああ、使徒十字の使用条件は分かった。あー俺じゃなくて土御門の方がいいな』

それから元春の説明で、使徒十字の事が大体分かった。

使徒十字は星座の力を利用して、使用ポイントである【天文台】から特定地域を支

配下におさめる。

ただし、その為には使用する日付が年に一度と限られているなど色々制約がある。

法の書事件でイギリス清教に改宗したオルソラから得た、今日ここらへんで使徒十字

が使えるポイントを算出してもらったようなのでこちらにも教えてもらい地図にマーキングした。

そして、それを見た時にオリアナの本来の役目が何かという事が頭にちらつき、何か違和感があった。

「元春、説明の途中で悪いが、距離はどうだ？」

『距離、だと？』

「正確には術式の有効発動範囲だ」

電話の向こうで元春が怪訝な声を出しながら、推測でしかないが大まかな有効範囲を教えてくれた。

それを聞き、改めて地図を見直してようやくオリアナの今までの行動の不自然さから、彼女の真の目的とその目的地が絞り込めた。

これで必要な情報は全て揃った。

「よしっ、これでもう逃がさない。元春、当麻を連れて第23学区に向かえ。オリアナを

【鉄身航空技術研究所所属空港】に追い込む。合流ポイントはメールした」

『なっ、第23学区だって？ そりや今俺がオリアナの向かう場所にとっついてた所だ。そこが現実的に使徒十字の天文台として最も適した場所だからな』

「なんだそうだったのか。ま、こっちはそれとは別にオリアナをそこへ誘導させていた

んだが、それならそれで好都合だ。オリアナがそこへ向かう可能性が100%になったってだけだ」

元々俺はオリアナを追いこむ場所を探して、周りに犠牲者が出にくく開けた所を探していて、ちょうど目に留まったからそこへオリアナが向かうように警備配置にわざと隙を作ったりさせていた。

「ともかく、すぐに合流ポイントに向かえ。それと、ステイルに代わってくれ。あいつにはほかにやつてもらおう事がある」

『……分かった』

元春が何か言いたそうな様子だったが、ステイルに電話を代わった。

俺が本気で追跡するとどうなるかは、元春が一番分かっているだろうからな。

それから俺は合流ポイントへ向かい、元春と当麻と合流した。

本当ならいい加減体操服じゃなくて戦闘服にしたかったけど、まだ祭りの最中だから仕方ない。

「全く、相変わらずユウやんは無茶苦茶するにやー」

「無茶苦茶つて、ユウキは一体何をやっただんだ？」

「普通こんな所には易々とは来れないんだぜい、カミヤん」

元春の言うこんな所とは、合流ポイントとして設定した場所の事だ。

ここは、普段は警備が厳重で一般人は即座に見つかるルートだ。

でも2人共、ここまで来るのに特にほとんど障害も警備に引つ掛かる事もなく来れた。

俺が色々手回ししたからなんだけど。

「そんな事今はどうでもいいだろ。オリアナは確実にこの奥にいる。警備を気にしないで最短ルートで追跡できるんだ。魔術なりなんなりを使わなきゃうまく動けないオリアナより、俺達の方に分があるだろ？　ここで確実に仕留めるぞ」

「おーこわいこわい。それじゃいくぜい」

2人を連れて、広大な滑走路をひた走る。

元春はともかく、当麻はこんな広大な場所をひた走って見つからないかヒヤヒヤしているみたいだ。

監視機体とかその他もろもろが俺達を補足して、捕縛する事はないとさつき言ったのに。

ま、これが普通か。

「見えた！　あのフェンスの向こうが天文台のポイントだぜい！」

しばらく走ると広大なフェンスの壁が見えた。

あの先が鉄身航空技術研究所所属空港の敷地で、学園都市内で使徒十字を使うのに最も適したポイントであり、オリアナを追い込んだポイントだ。

幸いフェンスは２メートルほどで、電流が流れるタイプじゃない。

フェンスを乗り越えようと手足を引っ掛けようとして、ふとフェンスに何か挟まっているのが見えた。

それは、金網の針金と針金に挟まれた、単語帳の１ページだ。

当麻もそれに気づいたようだが、元春はフェンスを乗り越える事に意識を集中させていたのか気づかず、そのままフェンスに手足をかけていた。

「まずいっー」「つちみ……」

俺と当麻が同時に叫びかけたその時だった。

——バチチツ！

フェンス全体が青白く輝きだし、凄まじい電流が流れた。

それはそのままフェンスに手をかけていた元春の全身を襲った。

「がああああつ!!」

元春の体は感電したようにびくびくと跳ねていた。

「ちい！ 当麻！ そのページを殴れ！」

「でも土御門が！」

「命に別状はない！ 治療をさせたいなら早くあいつを止めるんだ！ オリアナに次の手を打たせるな！」

俺が指差した先に当麻が目を向けると、そこには単語帳を口に咥えたオリアナが不敵な笑みを浮かべていた。

「くそっ！」

当麻が単語帳を右手で触れて、破壊したのを確認すると急いでフェンスを乗り越えた。

そして、そのままオリアナへと駆け出した。

「オリアナあゝ！」

「ふふふっ……」

フェンスは越えたが、オリアナがいるところへは距離がありすぎる。

先手は確実に打たれる。

切り札である、能力停止をここで使うわけにはいかない。

もう一つ切り札は持っているが、それもまだ使うには早すぎる。

オリアナが単語帳を口から離して、踊るように一回転すると凄まじい暴風が地面を削り取りながら迫ってきた。

当麻が右手を構えて暴風を打ち消そうとしたが、すぐにそれを止めた。

「待て、当麻！ 地面に屈んで地面の津波を止めろ！」

この魔術の本命は暴風ではなく、暴風が削り取っていく地面の津波だ。

だから、地面の方を止めれば風はどうか凌げる。

「分かった！」

当麻が迫りくる地面津波に手を当てると同時に、俺は当麻の襟首を掴みその場から飛びのいた。

すぐ後ろを風がそのまま通り過ぎた。

ちっ、危なかった。思ってたより風が強かった。

「なっ!？」

当麻の右手が自分の魔術を無力化したことにオリアナは少し驚いたようだが、すぐに気を引き締めて次の魔術の準備を始めた。

当麻の幻想殺しにもっと驚くと思っただけど、そこは流石プロと言っておくか。

ともかく、2人して一直線にオリアナに向けて走り出す。

「もつとギャラリーがいても楽しかったけど、そっちは3人なのね。しかも、1人はリタイア。あの赤髪の坊やはどうしたのかしら？」

「敵にそれを簡単に教えると思うか？」

「大方、追跡封じの魔術の怪我が治りきってないって所かしら？」

「……………」

オリアナの指摘に凶星をさされた、演技をする。

それに騙されるかどうかは別だが。

「そつちの新顔君はともかく、あなたにはもう油断はしないわ」

オリアナが次に発動した魔術は攻撃ではなく、結界だった。

離れた場所では飛行機が飛び交っていて、さっきまではエンジン音が聞こえていたが今は何も聞こえない。

「なんだ!？」

「結界だ! どうやら外との通信を遮断するタイプだな」

「やっぱり、科学の人間なのに手品の種は割れちゃっているのねえ。だったら」

オリアナは続けてページを啜えて、水が渦を巻くように現れ鞭のように襲いかかってきた。

俺を狙ったかと思つたが、狙いは当麻だった。

当麻は幻想殺しで打ち消そうと右手を構えた。

しかし、水の鞭は何本も左右から襲いかかってきたので、幻想殺しが追いつかず当麻は激しく打ちつけられてしまった

「うわっ!？」

「当麻！」

当麻は結構吹き飛ばされたが、かろうじて意識は残っているようだ。けど、しばらく動けそうにない。

オリアナは次に俺を狙い魔術を発動させようとしたが、今度は俺の方が速い。単語帳を咥えようとした顔目がけて飛び蹴りを放つ。

「っ!？」

オリアナは、ページを咥えるのをやめ、地面を転がりかろうじて蹴りはかわされた。

「昼間と違って、今のは殺すつもりだったわね？」

「ああ、殺すつもりだったさ。お前は敵だ」

冷や汗を流すオリアナに、何の感情も籠めずに答えた。

近くに当麻がいたが、それでも構わず殺すための攻撃を続けた。

こいつは敵だ。敵は、殺す。

「シッ！」

喉元目がけた右手の突きはかわされたが、反撃の隙も与えず次に左手で首を掴んだ。

「あ、がっ……」

「……………」

絞め殺すつもりでいたが、それより先にオリアナが蹴りをいれようとしたので、首を

絞めたまま地面へと投げつけた。

「かはっ……」

起き上がろうとするオリアナの頭を踏みつぶそうと足を上げるより先に、どうにかオリアナは地面を転がり俺から距離をとった。

それでも起き上がるより早く髪を掴み持ち上げた。

「……つつ、う……じよ、女性の髪を乱暴に扱うのはいけないわよ?」

「お前はただの敵だ」

髪を掴んだまま顔を殴ろうとしたが、オリアナが単語帳を啜えているのに気づき、手を離して今度は俺が地面を転がるように離れた。

オリアナが次に繰り出してきた魔術は、数本の銀色の針を連射してくる魔術。

1本でも触れれば即座にしびれて動けなくなる。

広範囲魔術なので避けようがないし、俺の後ろにはまだ当麻が倒れている。

ここで、切り札を使うしかないか。

「ちいー!」

ポケットから、ある物を取り出し口に啜える。

そして、幻想支配を発動させる。

「っ!? それは、まさか!」

次の瞬間、俺達を守るかのように青白い壁がそり立ち銀の針を全て防いだ。

「……私の魔術を見破るだけじゃなく、使えるなんてね。しかも、私の魔力までもコピーできるなんて」

「切り札は最後までとっておくもの、だろ？」

「あの時、まさか盗られていたなんて、気付かなかったわ。手癖の悪い坊やね」

そう。最初の戦闘の時、一瞬のすきをつけてオリアナの単語帳から数枚拝借していたのだ。

それを今回、幻想支配で魔力をコピーして使用した。

ただ、盗れたのはほんの数枚で、オリアナに幻想支配の事を感じられないように温存していた。

「次はこっちの番だ！」

新たに1枚盗ったページを口に咥え、魔術を発動させる。

俺の周囲に数個の緑の刃が現れ、オリアナを取り囲むように放たれる。

「まさか自分の魔術に襲われるなんてね。でも！」

オリアナは踊るように身かわし、迫りくる刃を次々にかわしていった。

「自分の魔術だもの。簡単に読めるわよ？」

そうだ。俺がこの切り札を最初から使わなかったのはこの為だ。

俺がオリアナの魔力を視て、あいつが使える魔術の全てを把握して対処してきた。

逆に言えば、オリアナにも俺と同じ事が出来るわけだ。

実際、木山春生の時みたく相手の能力で攻撃したら、相手も自分の能力だから弱点も知っているんで、そこをつかれてちよつと手こずった事があつた。

「どんな魔術も使い方次第って事だ！」

次に繰り出した魔術は、巨大な水晶の杭をいくつも発生させオリアナ……ではなく、オリアナの周囲にばら撒くように這えた。

「一体何のつもり？」

てつきり自分に向けて放たれると思つていたオリアナは、この使い方に怪訝な表情を浮かべた。

本来なら、水晶の杭で相手を拘束させる魔術なのだが、俺は違う使い道をした。

「こうするんだよー！」

俺は水晶の杭を足場にして、空中を駆け回った。

実は、俺が今はいている靴はただの運動靴ではなく、靴の裏に地面や壁を蹴った時の反発力や圧力を最大限に利用して瞬発力を高める機能がある特注品だ。

「えっ!? 速い！」

俺の速さに戸惑いオリアナは、迎撃するための魔術の発動が遅れた。

その一瞬の隙が命取りだ。

「遅いっ！」

渾身の廻しけりがオリアナのお腹にめり込んむ。

——ベキベキッ

骨が数本折れた音と感触が足に伝わった。

オリアナは受け身もろくに取れず、十数メートル吹き飛ばされた。

これでオリアナは戦闘不能になった。

だからと言って、これで終わりというわけではない。

「ゴホッ、ゲハッ……はあ、はあ……わた、し……だれ、もがしあわせ……に」

「もう黙れよ」

オリアナはかろうじて意識が残っているようで、うわごとのように何かをぼそぼそと呟いているが、俺には関係ない事だ。

「てめえがどんな目的がこんな事してるか、どんな理由があるのかどんな信念があるのか、なんて俺の知った事じゃねえんだよ」

「……………」

オリアナはじつと俺を睨みつけてきている。

その瞳には悲壮感すら漂って見える。

「てめえはなんの関係もない制理や秋沙を傷つけた。ただ大覇星祭を盛り上げてみんなで楽しもうとされていただけの2人をな。どんな主義主張があろうと、どんな大義名分があろうと……誰かを傷つけていい理由にはならねえんだよ！」

俺は最後に残った単語帳のページを取り出し、口に咥えた。

右手を掲げると、巨大な火の玉が生み出された。

この魔術は単純明快だ。

ただ、巨大な火球で相手を焼き殺すというもの。

単純な威力や殺傷力では、オリアナの魔術の中でも1、2を争う魔術だ。

「こんな結末は覚悟していただろ？ なら、塵も残さず消え去れ！」

オリアナは諦めたような顔つきになると、そつと目を閉じた。

——ゴウツ！

巨大な火球はそのままオリアナに向かっていき……

「やめろお——！」

「当麻?!」

いつの間にか当麻がオリアナを守るように現れ、幻想殺しで火球を消し去った。

「もういい、もうこれ以上はいいだろユウキ！ もう勝負はついた！」

「……なぜ？」

覚悟を決めていたオリアナは、さつきまで殺そうとしていた相手が自分を守った事に心底驚いた顔をしている。

けど、俺は当麻の顔を見て、さつきまで熱く燃えたぎっていた頭が急に冷えていくのを感じた。

「オリアナ、俺だつて吹寄や姫神の事は怒ってるし、許せない。けど、だからつてここで終わっていいわけないだろ」

「ぼうや……」

「俺は魔術と科学の価値観の祖語とか、小難しい話は分かんねえ。お前にどうしてもこんな事をしなきゃ。学園都市をローマ正教の支配下に置かなきゃならない理由があるなら。自分の為だけじゃない理由があつたなら……」

「ふっ、ふふふっ……おかしな、坊やね。けど、もう手遅れよ」

『その通りです』

「っ!」

突然、辺りに何者かの声が響き渡った。

女性の声だが、聞き覚えはなく初めて聞く声だ。

当麻も同じようにで辺りをキョロキョロと見渡している。

その声はどうやら、オリアナの胸元から発せられているようだ。

オリアナに目を向けると、彼女は気絶していた。

だが、一枚の単語帳のページがはらりとその胸元から地面に落ちた。

あれは魔術式の携帯電話のようなもので、オリアナが気絶したことで張られていた通信妨害の結果が消えたから使えるようになったのだろう。

『まもなく使徒十字はその効果を発動し、学園都市はローマ正教の都合のいいように改変されます』

「」の声は……」

「お前がリドヴィア＝ロレンツエツティか」

『はい、はじめまして。そして、ようこそローマ正教の世界へ。まずは、あなた方の間違いを一つ訂正させていただきましようか。使徒十字は現在、学園都市内部にはございません』

リドヴィアはまるで勝利宣言でもしているかのように、軽やかで穏やかでそれでいて俺達を諭すかのように話している。

『あなた方は天文台を学園都市内部のみと思いついていたようですが、使徒十字の有効範囲は数百キロもありまして、学園都市外部からでも十二分にその効力を発揮するのです』

淡々と話すリドヴィアに、俺と当麻は顔を見合わせた。

その表情に、絶望感はない。

むしろ、その逆だ。

『おや？ あなた方は私の話を理解できなかったのでしょうか？ あなた方がいくらオリアナを追いつめようと、いくら学園都市内部を探し回ろうとも、徒労に終わるのですよ？』

リドヴィアの口ぶりから、どうやらこの通信術式は声だけではなく、こちらの映像もリドヴィアに見えるタイプのようなのだ。

なら、都合がいいか。

「わざわざご教授いただき感謝するぜ、シスター・リドヴィア。こちらばかりがあなたの正体を知ってるだけじゃ不公平だから、一つ自己紹介させてもらってもよろしいでしょうか？」

『……どうぞ』

大げさにお辞儀をすると、リドヴィアはさらに困惑したようだ。

「俺の名は、木原勇樹。学園都市の治安維持やらその他もろもろをやってる何でも屋で、得意分野も色々あるけれど……追跡はもつとも得意な分野の1つなんですよ」

『それが、何か？』

「最初は魔術側のゴタゴタだったからつい手を抜いてしまって、そちらを甘く見ていた

のは事実。それは謝りましょう。ですが、一度本気になった以上……お前ら、逃げ切れると思うなよ?」

『ご忠告感謝します。ですが、いくら学園都市のエキスパートでも、学園都市の外にいる私をそこから今すぐ補足して捕えること事は不可能でしょう?』

「ここまで言ってもまだリドヴィアの声にはまだ余裕があった。

自分が絶対的有利になっていると思ひ込んでいる。

まあ、状況的にはそう思ひ込んで仕方がないか。

「ああ、俺は不可能だな……俺はな?」

『えっ?』

『ああ、彼には無理だね。でも、僕らイギリス清教を舐めてもらっては困るね』

「ここでさらに別の声が俺達の会話に割り込む形で聞こえてきた。

その声は、バーコード神父ことスタイルだった。

『なっ、なぜ……どうしてここに!』

「あーその様子だと、ちゃんんと補足できたみたいだなスタイル?」

『まあね。今僕達の目の前には巨大な十字架とリドヴィアの姿があるよ』

『あ、ありえません。あなた達は学園都市内部にいた、はず!』

さつきまでの余裕な声とは打って変わって、今のリドヴィアの声には恐怖すら浮かん

でいるようだ。

「簡単な事だ。オリアナが囿だつて気付いてから何のための囿で本命のお前はどこにいるかつて考えただけさ」

元春やステイル曰く、使徒十字が過去に一度だけ使われた時は今のバチカンがそのまま有効範囲に収まったというのだ。

ならば、別に学園都市程度の広さなら、わざわざ内部で発動させなくても良い事気づいた。

更にオリアナがなぜ学園都市内部をウロウロしていて、人払いや気配を遮断する魔術を持っているにも関わらずそれらを積極的に使わなかったのかもわかった。

オリアナの役目は、追跡部隊の戦力把握と自分に追っ手を集中させるための囿だと気付いた。

そこから先はステイルに言つて、学園都市外部で待機中の他のイギリス清教の応援と合流して天文台ポイントを探索させた。

結果、リドヴィアを捕縛できたというわけだ。

「オリアナは一応生きてるからちゃんと回収しろよー」

『その口ぶりだと、まさか君……殺す気だったんじゃないだろうね？』

「あははははくじや、俺は元春を病院に連れて行くからまたなー」

『……全く、つまらん貸しが出来たな、君には』

本当につまらなさそうに吐き捨ててステイルは通信を切った。

「さーつてと、すぐにイギリス清教が来るみたいだから、面倒にならないうちに俺達は撤収するぞ。秋沙と制理のお見舞いついで元春を病院に放り込んでくるか」

当麻はさつきからずつと黙って俺を睨むように見つめていたが、重たい口ぶりどころ尋ねてきた。

「なあ、ユウキ。本気でオリアナを殺す気だったのか？」

「……まさか」

「そっか、そうだよな」

笑って答えると当麻は安心したように深く息を吐いて、グーツと背伸びをして元春の元へ歩き出した。

「なら早く行こうぜ。ナイトパレートが始まる前に姫神の所に行かないとな」

「そういえばお前、約束してたもんな。この女たらしく」

「ひ、人聞きの悪い事いうな！」

悪い、当麻。

あんな事言つたが、本当はお前が止めなきや間違はなくオリアナを殺していた。

殺したらどうなるかは分かっていたけど、それでも殺す事しか考えていなかった。

本当に殺さなきやいけない敵は、オリアナじゃない。

当麻が止めてくれたおかげで色々と助かった。

ありがとうな、当麻。

さて、今俺が本当に殺さなきやいけない敵は、ただ一人だ。

待ってろよ、木原幻生。

続く

第131話 「木原幻生」

「ぎゃあああああつー！」

小汚い悲鳴が廊下に木霊する。

「何重にも張り巡らせた罠の……とっておきがこれよお」

【重力子奇木板】に右手を挟まれて悲鳴を上げている老人を見て、私、食蜂操祈は、木原幻生を仕留めたと思った。

事の始まりは、御坂さんのクローンである【妹達】を使った【絶対能力進化計画】が頓挫したという話を聞いた事から始まった。

計画の中身や頓挫した詳しい経緯には興味なかったけど、計画が頓挫したことで残された妹達の今後については、まあ、色々と興味があった。

行方を調べているうちに、私以外にも妹達の事を探っている組織がいることに気づいた。

そして、それらも調べていくうちに【木原幻生】に辿り着いた。

あのジーサンが企む実験だから、ろくでもない事にしかならない。

まあ、最初はそれをどうこうする気は全くなかった。と言えば嘘になるのかしら。

とにかく、幻生の実験を阻止する為、色々な手を打って、最終的には御坂さんと、
少々、嫌々ながらも協力して追いつめた……つもりだった。

けど、それは罠だった。

木原幻生の目的は、妹達だけではなかった。

【外装代脳（エクステリア）】私の大脳皮質の一部を切り取って培養・誇大化された巨大
脳。

そんな気色悪いものが作られた目的は表向きにも裏向きにも色々あるけれど、私の能
力を誰でも使えるようにするというのが、一番の目的。

そのエクステリアを完全に掌握する為、私を囿の元へ誘い込み、エクステリアがある
施設を無防備にさせたのが木原幻生の罠だった。

そして、私と御坂さんが乗り込んだ時には既に遅かった。

エクステリアの完全掌握だけは免れたけれども、部分的には乗っ取られて保護してい
た妹達の1人にウィルスを仕込まれてしまった。

結果、幻生はミサカネットワークを使い、御坂さんの力を暴走させてしまった。

まあ、そっちの方は、彼にお願いしているから大丈夫なのだけ。

そして、肝心の幻生は施設内のセキュリティを総動員させた結果、右手を粉碎されか
けて悶絶させている。

「激痛の中で私の【心理掌握】を防げるかしらあ？」

さっきまでの幻生相手には私の能力が効かなかったけど、今のあいつになら私の能力が使える。

と、思っていた。

「ヒヒヒ、ヒヒヒ、ヒハ、ヒヤ、ヒヤーハハハハッ!! いやあくひどいねえ。こんないたいけでか弱い老人を痛めつけるなんて」

木原幻生の先ほどまでの悲痛な叫びは演技だった。

彼はゆっくりと右手首を取り外した。

「まあ、へし折ろうにも腕がないんだけどね」

幻生の右手は義手だった。

「言っただでしょ。実験で何度も死にかけてたつて。僕の全身は代替え技術の見本市状態なんだよ。まあ、実験で失ったのは一部分で、他は暗殺された結果なんだけどね」

しまった！ と思った時にはもう手遅れだった。

今の木原幻生は【幻想卸手】を使い【多才能力】を身に着けている。

流石にいつかの時のような1万もの能力を身に着けているわけじゃないけれど、厳選されている分、実用性が高い能力ばかり。

そのうちの一つに、酸素を操る能力があり、それを使われた。

「なる……ほど。もう策は何もない。そう見抜かせること自体が」

「ああ、俺達の作戦だ」

魔術を解除して首に手をかけ、皮を一気に引っぺがした。

「な……おま、えは」

「……木原勇樹だ。ようやく会えたなクソジジイ」

すかさず幻想支配の能力停止を幻生に使った。

「散々俺から逃げ回ってたけど、鬼ごっこは今日で終わりだ」

「ヒ、ヒヒッ……さすが、きはらころ、し……」

最後まで下衆な笑みを浮かべながら、木原幻生は倒れた。

「はあ、はあ……やっぱ、反動が、きつい……」

前に初めて魔術を使った時以上の頭痛がするけど、これくらいはもう慣れた。

まだ後始末がいくつも残っている。

取り急ぎ、木原幻生の遺体、いや、抜け殻の処分だ。

操祈のバックから化粧品に擬態させた小瓶を取り出し、幻生に振り掛ける。

——ジユウ

液体は幻生の体を衣服や義体ごと瞬時に溶かしつくした。

後に残ったのは、ただのシミだ。

一度は殺し損ねた相手だが、今度こそ殺せた。

「さて、美琴はまだ暴れているみたいだけど、当麻は大丈夫かな。なぜか軍覇まで出張ってきたみたいだから大丈夫だと思いたいけど……っ!？」

突然、外から凄まじい気配を感じ、悪寒が走った。

殺意とも違うこの感覚は、一度体験している。

「これは、黄金塾でのアレか？ いや、あの時より、デカイ！」

以前、錬金術師と戦った時、当麻の右手が切り落とされて、その切り口から巨大な龍が姿を現したことがあった。

あの時にも今と同じ、悪寒と恐怖を感じた。

あんな恐怖は生まれて初めてだった。

しかし、その感覚もすぐに消えた。

「……これは、終わったという事か」

なぜか分からないけど、アレを感じたという事は、美琴の暴走も収まったと確信した。

「さーって、そんじやまずは……」

バックから携帯を取り出し、操祈へと電話をかけ……ようとしてやめた。

向こうから、特殊な軍事スーツに身を包んだ操祈が歩いてきたのが見えたからだ。

「なんだ。気が早いな。今から呼ぼうとしたのに」

「エクステリアの崩壊力を確認したから、もう終わったと思ったのよ。もう完全に済んだのね」

操祈が床のシミへと嫌悪感を浮かべて、目を向けた。

「ああ、これがあのクソジジイの末路だ。御似合いだろ？」

「そうねえ……で、先輩はいつまでその恰好でいるつもりかしらあ？ 早く脱いで欲しいのだけど？」

シミに向けた以上の嫌悪感の籠った目で、操祈が俺を睨んでいる。

うん。睨む理由はよく分かる。

だって、今の俺、操祈の体操服を着ているからな。

今の俺の身体じゃパツツンパツツンすぎて動きにくい。

というか、えらい絵になってそうだな。

あ、操祈が吐きそうな顔をしてる。

「まさか、女装が癖になったんじゃないでしょうね!? 変態力はレベル6!」

「なるかアホ！ 俺だって早く着替えたいんだからバツク寄越せ！」

「わかってるわよ！ はい！ さっさと着替えて……っここで脱ぐなあ！」

「着替える場所なんかここらへんにあるかよ！ お前が向こうむけ！」

顔を真っ赤にさせた操祈が投げつけてきたバツクから着替えの服を出して、急いで着

替える。

ボロボロになった体操服は、バックと一緒に操祈へ返した。

「こうなるとは予想力働かせてたけど、思った以上にボロボロねえ」

「ホントはお前がこうなるはずだったんだがら、柔肌傷物にされなかつただけ儲け物だと思えよ」

「わかってるわよお。御坂さんの方も白井さんの方もどっちも終わったみたいだし。で、本当に要求を呑む実行力は大丈夫なの？」

「大丈夫だ。そうでなかった場合、俺が対処する。そんなに心配なら再度確認するから待ってろ」

心配そう、というか不安な表情を浮かべる操祈を安心させる為、まだまだやる事は残っているけど、心の底から電話をかけたくない相手ナンバーワンに、仕方なく電話をかけた。

もちろん、電話の相手は木原尼視だ。

「俺だ。全部終わった。今度こそな。で、確認するが報酬の方はどうだ？」

『そうか。報酬は問題ない。【ドリーの別個体】と【警策看取】の処分はお前に一任する。場所も既に送ってある』

操祈に指で丸印を見せると、心底安心した表情を浮かべ、すぐにわざとらしく咳払い

して誤魔化した。

美琴並に素直じゃないやつ。

『でだ。こちらでも確認するが、今度こそ確実に木原幻生は死んだんだな?』

「殺した。正確には消した、だな。遺体も完全に溶かきつたぞ」

『そうか、そうか! ふふつ、はははは……いいいやつほ〜〜!! ざまあ〜みろお、く

そじじー!』

「……………」

無言で通話終了。

電話の向こうで発狂している馬鹿は放置しておこう。

アイツの叫びはぼつちり操析にも聞こえていたようで、心底呆れきった顔をしている。

「やつぱり、木原は木原なのねえ」

「はあ、否定はしない。アイツの事は忘れろ。それより彼女の確保に行くぞ。早くしないと面倒になる」

「そうねえ。あ、ところでえ、先輩の影武者さんはいいのかしらあ?」

「……………あ、すっかり忘れてた」

地下道へ向かいながら、俺は影武者役を演じてくれているエツアリへと電話をかけ

た。

アイツがいなきや、この作戦の難易度はもっと上がったただらうからな。
というか、生きてるよなアイツ

続く

第132話 「食蜂操祈」

事の始まりは今から少し前、学園都市に残っている妹達の情報を集めている組織が複数確認された事から始まった。

まあ、これは予定内だったし、そう簡単に妹達の事を追跡できないようにしていたので問題はなかった。

ただ、その中の1つに暗部が関わっていて、もう1つの組織に食蜂操祈が関わっていると分かった。

「暗部がわざわざ関わるなんて妙だな。それに操祈もなんで？」

妹達を学園都市と世界各地へ治療目的で分布させた事に裏があるのは、すでに知っている。

それ以上層部の思惑があるなら、わざわざ暗部を使って学園都市内部の妹達の所在を確認する必要はない。

「主流派ではなく、どっか別の所」

暗部に関して言えば、主流派の動きではないのなら、その事を知らせて向こうから動きを止める事もできる。

問題は、暗部を動かしたのが誰かという事だ。

「……幻生か」

今、幻生は学園都市内部で色々動いているとはいえ、すでに俺に一度殺されて主流派ではなくなっている。

だからこそ暗部を使つて妹達を狙っている。

ミサカネットワークが狙いか、それと美琴か、もしくは、一方通行を引きずり出すつもり、か？

「アイツの事だから狙いが多すぎて逆にわかんないな。まさか操祈が動く事を前提にしたの、外装代脳狙い？」

幻生のかしそうな事は、考えれば考える程膨大になつていく。

だからこそ、俺はあいつの抹殺許可が出ても追跡しきれないでいるんだけどな。

前にあのババアが追跡しかけたが、それでも逃げられた。

アイツは表出て学会や実験やらに顔を出す事はあつても、そこでは補足できなかつた。

毎回影武者だったり、妨害だつたりで逃げられてしまう。

だからこそ、向こうから動きだしてくれた今回だけは外したくない。

「その為には、使えるものは何でも使わないとな」

まずは、今回の幻生の手駒を調べる事にした。

最初に浮かび上がってきたのは、警策看取という少女。

そして、その少女の名を目にした時、ある昔の事を思い出した。

俺と操祈が出会う事になった仕事だ。

「警策看取。そうか、才人工房の一件でのあの子が生きていたのか」

才人工房、天才や偉人級の間人を人工的に生み出す事を目的とした学園都市暗部の研究機関、のはずだった。

それが食蜂操祈という超能力者候補を手に入れた事で半ば暴走、本来の目的とは違った動きを見せた。

で、俺がその機関へ潜入して調査した場合によつては排除を命じられた。

そこで出会ったのが、操祈だった。

操祈はすでにそこにいた研究所職員全員を洗脳して、操り人形にして裏から支配していた。

所属する能力者に関しては何を出すなど言われていたので、操祈から話を聞いて、問題なしと上には報告した。

ま、操祈から話を聞く時に一悶着はあったけど。

その時にかつてドリーというクローンとの出来事も操祈から聞いて【みーちゃん】

という存在も知った。

で、そのみーちゃん 【警策看取】 という名前で消息不明になっていることも知った。

でも、その時の俺は必要以上に詮索しなかった。失敗だったかな。

「その警策看取が、幻生の協力者、ねえ。またどんな洗脳紛いの手を使って利用しているのやら、あのクソジジイ」

協力者と言っても、生易しい関係ではない。恐らく幻生が警策看取の事をうまく利用しているのだろう。

「これは、使えるか」

警策看取の過去、ドリーとの関係、消息不明となって今までどうしていたかの経緯を調べる事にした。

幻生の企みを知るには遠回りな事だが、これも何かの役に立つと思っただからだ。

その結果、警策看取がかつて親友であるドリーの投薬実験の中止を訴えて、反抗とみなされ軟禁された事。

ドリーにはクロローンの妹がいる事、などなどたくさん知る事が出来た。

そして、尼視からの情報で幻生の狙いが外装代脳とミサカネットワークを利用した美琴の暴走だという事が分かった。

これらすべての情報と考えられる展開をいくつも予想して、ある計画を立てて操祈と会う事にした。

「はろおく先輩☆久々の御呼出しなんて一体どんな要件かしら？ 最近は大人数しくしてたつもりですけど？」

「よく言うぜ。妹達の事とか幻生の追っかけとか、俺が知らないなんて微塵も思っていないだろ？」

「流石の諜報力。でも、始末しに来たわけじゃないんですよねえ？」

才人工房の一件以来、なぜか俺は操祈のお目付け役というか何かしら縁がある事が増えた。

当時の操祈は情緒不安定な時が多く、その調整として俺の幻想支配がうってつけという事だったのだろう。

操祈自身も俺には露骨な嫌悪感を示さなかったしな。

ま、初対面で頭の中覗かれた時。

『なんでこの娘、目が椎茸なんだ？』

と思った事で、操祈が変に力が抜けたからかもしれない。

でも、俺が別件で手が離せない時、幻想殺しと接触した事でお役御免となった。

と思っていたら、幻想殺し共々デッドロックとかいうチンピラ暴走族に狙われている

のを、アフターサービスとして対処した。

そして、当麻と操析の哀しい関係も知ってしまった。

「単刀直入に言う。木原幻生がミサカネットワークとお前、正確には外装代脳を狙って動き出しているから手を貸せ」

「単刀直入すぎ!?! 大体、木原が相手なら先輩だけで十分な破壊力あるんじゃないですか?」

「正直、アイツには何度も逃げられ、って口で説明するのめんどくさい。適当に読め」
操析相手に長話する余裕はない。

今、操析と接触している事がバレたら面倒事が増えそうだしな。

「はあ、ほんつとうに先輩って変わり者ですよ。自分から頭の中読めなんて言うてる人、先輩くらいですよ」

そう呆れつつも、操析はリモコンを取り出して俺に能力を発動させた。

操析は協力者や怪しいと思った人には躊躇なく能力を使って頭の中覗くからな。変に誤魔化すより、こつちから覗かせた方が早い。

もちろん、学園都市の闇とか命に係わる情報は読ませないけど。

「なるほどなるほど……えっ? 先輩が私になる? 魔術?」

「あー魔術ってのは、学園都市外部の能力の事って思えばいい。そこは深入りすると、マ

ジで死ぬぞ?」

「は〜い。毎度の隠蔽力は分かっているわ。で、これ……私のメリットは?」

俺の頭の中の計画を全て読んだのなら、それも分かっているはずなのに、あえて操祈はこの計画の自分の報酬を口で言わせようとしてきた。

「ドリー妹の解放、並びに警策看取の無罪と暗部から完全解放してお前に身元引受人となつてもらおう。これでどうだ?」

「それが私にどんなメリットになるのかしらあ?」

「お前がクローンである妹達の事を気にかけているのは、今回の一件と全くの無関係とは俺には思えないんだが……もつと言った方がいいか?」

「……………」

そのまま俺と操祈は無言で睨みあう事、数秒。

結局、折れたのは操祈の方だった。

「……はあく分かりましたー降参でーつす。先輩の洞察力つてもう能力者レベルよねえ」

「あはははっ、これくらいでないとここじゃ生きていけないからな」

「それにしても、乙女の柔肌を結構傷つける計画なのに、メリットが低すぎなんですけどお?」

「気に掛けるところはそこかい！」

「そこかいって、先輩乙女の理解力無さすぎにも程があるじゃないですかあ！ 人の肌を数センチ切り取るって怖い計画をよくも躊躇なく出来るわよねえ!!」

「いや、ほら、そこは俺も、木原だし?」

「そういう時だけ木原を出すのはズルいにも程があるんだゾ☆」

額に青筋を浮かべながらリモコンを構える操祈。

「冗談だ冗談。肌を切り取るのは俺もなんだし、お相子だろ?」

「先輩の肌と私の柔肌を同列に扱うなんてどんな無神経力!？」

操祈がガーガー喚く計画とはこうだ。

まず、操祈が黒子や涙子達、美琴の周辺の記憶を操り、孤立化させる。

これは美琴が狙われる以上、巻き込まれる恐れがあるのでそれを防止する為でもある。

ここは、操祈も同意した。

その上で、美琴に接触し事の経緯を話し、幻生を確保する。

俺は、とある魔術で影武者を作って、囷として別の場所に行き、俺自身は身を潜める。どうも幻生は俺の前には現れたくないみたいだからな。

というか、多分俺自身の動きを封じる手を使ってきそうだ。

ちなみに、幻生は近々行われる会議にお忍びで参加するという情報がある。

俺の影武者を作る魔術とは、一か月前に当麻を襲撃したエツアリというアステカの魔術師が使う変身魔術だ。

その魔術は対象者の皮膚を札として変身するもので、外見だけではなく声も何もかも本人そのものになる。

幻生は、変装を警戒して対策をしてくる可能性があるが、魔術による変身は見破れない。

念のため、操祈の能力を使って俺の記憶や癖などもエツアリにコピーさせる。

ここまでがプランA。

もし、幻生が外装代脳の施設まで辿り着いたら、今度は俺がエツアリの魔術を使って操祈に成りすます。

その時、俺は幻想支配で変身魔術を使った状態のまま、操祈が俺に能力で記憶や癖などを上書きする。

そして、その際、操祈には外装代脳のリミッター解除コード、と思わせた自壊コードを俺に埋め込ませる。

更に、そのコードが外部から読み込まれた時、俺の意識が完全に目覚めて魔術を解除するスイッチになるようにする。

もちろんその際に、操析が俺に上書きした情報は自動で削除されるようにする。

これは保険だが、予想だと操析に化した俺でも、操析本人でも幻生は破るだろう。

あのジジイの事だ。それくらいの用意はしているはずだ。

まあ、プランAでカタが済めばいい。

被害は俺の皮膚を削ぎ取る程度で済むが、プランBまでいくと操析の皮膚も必要になるからな。

で、結果は最悪だったけど、予想通りの展開となった。

外装代脳のリミッター解除コードを手に入れたと思つた幻生は、自壊コードを埋め込まれて内部崩壊した。

更にトドメとして、俺の幻想支配による能力停止によって、完全に消滅した。

全てが終わつた翌日。

警策看取とドリーに関わる手続きを全部終わらせて俺と操析は、警策看取を連れてドリー妹がいる施設へとやってきた。

「それにしても、今回はまた随分と遠回りで面倒な手段を使ったのねえ」

「仕方ないだろ。幻生のジジイを完全に殺すには俺の能力停止を使うしかなかったんだから」

「木原幻生が先輩から逃げていたのは、先輩の能力停止力を恐れていたからって事かしらあ?」

「そういう事。どんな技術や理論使ったのかは分からないけどな」

そう。木原幻生を確実に殺すには俺がアイツの目の前に立って、能力停止を使う必要があった。

ぶっちゃけ、幻生にそれが出来れば後はどうでもよかったんだが、今回のあのジジイの計画を逆に利用させてもらった。

木原幻生は、昔、とある一件で俺から脳天に銃弾を浴びて死んでいるはずだった。

尼視もそれは確認していて、仕事はそれで終わったはずだった。

それがどういいうわけか数週間後には生存が確認された。

どうやら幻生は完全に死ぬ間際に学園都市中に蔓延するAIM拡散力場を媒体に意識を別の肉体に移したらしい。

その原理とかは、いまだに詳しくは分かっていないが、ともかく幻生は生き延びた。

また次に殺す機会があっても、肉体を破壊しようが同じ手を使われたらキリがない。

しかし、前に殺されて以来、幻生は逃走を重ねた。

まるで俺と出会うのを恐れるくらいの逃走の仕方だった。

それを不審に思った尼視が出した結論は、俺の幻想支配があいつには天敵であるとい

う仮説。

原理も何もかも不明な幻想支配だが、相手が発するA I M拡散力場を視認して、それをコピーしたり流れを止めるなりしているのではないかという事だ。

それを幻生に使えば、アイツは意識を肉体から外に移す事が出来なくなるばかりか、うまくいけば意識そのものを消滅させることが出来るかもしれない。

「結果的にその仮説は大当たり。木原幻生はあなたの幻想支配で完全消滅。全くとんだ化け物がいたのね」

警策看取はブルツと身震いをして、俺を少しおびえた表情で見てきた。

「そうよお。先輩の恐怖力は半端じゃないの。だから、あなたも今回の一件でせっかくゼロになったんだから、これからは変に暴れたりしないでねえ。迷惑するの私なんだからあ」

「……もう、そんな無意味なコトはしない」

能力者や暗部にいた者からみても俺は、化け物。

それは間違いないな。

だからこそ、俺は能力者キラーで、木原殺しなんだから。

「はい。面倒な事は全部終わってるから。後はこの地下にいる彼女とご対面するだけ。あとは2人でお好きにどうぞ」

「分かったわ」

ドリー妹がいる部屋に繋がるエレベーター前で、俺は2人と別れた。

ドリー妹には興味がないし。必要な手続きは全部済ませた。

とはいえ、施設にいる研究員達も念のため操祈の能力で操ってある。

操祈も看取も、かなり緊張しているようだけど、後は3人の問題だ。

それに多分大泣きの場面になるだろうし。

そんなの操祈は、俺に見られたくはないだろうからな。

俺が関わるべき事じゃない。

施設を出て、とある人物に電話をした。

今回の一件の陰の功労者であり、暴走した美琴の相手をした当麻と軍覇に勝るとも劣らない程苦労したであろう、エツアリだ。

「よお、エツアリ。昨日は色々お疲れさん」

『いえ、これくらいどうって事ないですよ……と言いたいところですが、あなたの影武者は予想以上にハードでした』

「だろうな。幻生はどうやって俺を現場に近づけさせたくなかったみたいだし」

実際、エツアリに化けた俺に幻生がどんな妨害を行ったのかは知らない。死人の手に興味はない。

「でも、おかげでスムーズに動けたぜ」

『いえいえ、これも暗部の仕事ですから』

エツアリは、1か月前に当麻に敗れてから暗部に落とされた。

と言つても、手引きしたのは俺だけだな。

エツアリは魔術世界から学園都市にスパイとして侵入したが、なんの経緯でか美琴に惚れてしまった。

当麻を襲つたのも美琴の為だったしな。

で、そんなエツアリなので、美琴が狙われていると知つたら、有無を言わず協力してくれた。

『ですが、1つ忠告を』

「……なんだ？」

急に呑気な口調から真面目なトーンへと変わった。

自然に俺も周囲に目を向け、人がいないのを確認して耳を傾けた。

『襲撃は受けましたが、その手口は分かっています』

「はっ？ どういう意味だ？」

『襲われたのは確かですが、暗闇に誘い込まれて一方的に攻撃されたんです。人数は恐らく4人、遠距離からの狙撃と接近戦での斬撃だったので、生憎暗闇だったの

で詳しくは分かりませんでした』

「それでよく生き延びれたな」

『ははっ、尻尾を巻いて逃げただけですよ。あなたの恰好でお恥ずかしい真似をしてしまいました』

「そこは気にするな。とにかく、助かった。ありがとうな」

『っ?! 相変わらず変わった人だ、あなたは』

電話の向こうでエツアリが苦笑いを浮かべた気がする。

ま、いいか。それよりも4人の襲撃者か。

近々、お目にかかる事があるかもしれないな。

続く

第133話 「イタリアへ」

9月25日

今日は大覇星祭最終日。

と言つても、大覇星祭自体初日しか参加していない俺にとってはどうでもいい事だった。

俺はここ数日ダウンしていた。

木原幻生を殺す為に、エツアリの魔術で操祈の姿になり、更に操祈の能力を重ね掛けして見た目も中身も操祈になった。

おかげで幻生に近づき、完全に殺す事が出来た。

だが、魔術と能力の重ね掛けした反動がやってきた。

2日ほどは何ともなかったが、一昨日から頭痛や眩暈など調子が最悪に悪くなった。念のため冥土返しに見てもらったが特に異常はなく、ただの過労と言われた。

なので、大人しく休養していたわけだ。

「珍しく彼が入院しないと思つたら君がダウンとはね。入院するかい？」

と、冥土返しに言われたけど、病院は落ち着かないのでこうやって医療設備が整った

アジトで休んでいる。

今日は頭痛も引いて食欲も出てきたので、久々に外に出るかと体を起こしたら、携帯にメールが届いているのに気付いた。

「大覇星祭委員会からのお知らせ？ 何でそんな所からくるんだ？」

チエーンメールかと思いきや読まずに捨てると、また同じ送り主からメールが来た。

何度も削除しても送られてくるので、仕方なく開くことにした。

チエーンメールやウイルスとかだったら送り主を特定して半殺しにすればいいだけだ。

でも正直言つて、チエーンメールやウイルスメールの方がまだ可愛げがあつてマシだ。

メールにはこう書かれていた。

「おめでとうございます！ あなたは、大覇星祭参加者全員を対象とした特別懸賞に見事大当たりいたしました！ つきましては、景品である北イタリア五泊七日旅行のチケットや、その他必要書類などをご自宅へ郵送させていただきますのでご確認ください」

「……………」

無言でメール本文を何度も読み直し、思案する事2秒。

すぐにとある馬鹿へ電話をかけた。

『はろはろー☆ 一体どうしたのかにや〜?』

とある馬鹿、木原尼視の無駄にハイテンションな声が聞こえてきた。

「気色悪い声を今すぐ止めて、あのメールの説明をしろ」

『気色悪いとは失礼だな。あのメールとは何のことだ?』

「しらばつくれるな。イタリア旅行が当たったとかふざけたメールの事だ！ お前が仕組んだ事くらいお見通しだ！」

俺にあんなメールが来るわけがない。

とすれば、尼視以外に考えられなかった。

『ふざけてなどいないぞ? 念願の幻生を殺したお祝いと労いを兼ねて、学園都市の下らない仕事の事なんか忘れて海外で羽を伸ばせるようにという私の親心なのだが?』

「マジで鳥肌立ってきたからやめろ……」

親心なんて、鳥肌どころか吐き気までしてきた。

どんな猛毒よりも効くなこりや。

というか何を考えていやがるんだこのババアは。

『あ、そうそう。海外は仕事以外ではほとんど初めてと言っていいほどだったな。ちょうどいい、上条当麻が同じく北イタリア旅行に当選したそうだ。向こうは来場者数ナン

「バーズで見事に当選だ」

「おい」

『いやあくよかったなあ。向こうはペアだがこつちはシングル。いかにお前でも慣れない海外旅行に1人旅は寂しいだろう?』

「おいまてや」

『上条当麻は当然インデックスを連れて行くだろうし。さすがに幻想殺しと魔導図書館を2人だけで海外へ行かせるのは危険だからなあ』

「おいまて聞けこら」

『うんうん。護衛としてもお前は最適だからな。同級生で、しかも、何度も死線とともに潜り抜けてきた戦友。上条当麻も安心だろう。これぞwin-winだ』

「ころすぞ」

『なんだ。一体何が不満なんだ?』

「コイツは……まあ、素直に慰安旅行なんて企画するとはこれっぽっちも思ってたが、こよう来たか。」

「素直に最初から当麻とインデックスの護衛だっていえばいいだろう! すぐバレる仕込みなんかしてんじゃねえ!」

『簡単に仕事だって言うのは、つまらないだろう?』

こういう手段で知らせれば俺が能天気には喜ぶと思ってるのか、そこまでボケたか。

「……で、いつ出発だ？」

『なんだ。まだ送った書類は見てないのか。出発は明日だ』

「早いな!？」

『あー言われてなくても分かっていると思うが、武器や装備は持つていくなよ？ 発信

機程度にしておけ』

「はいはい。何かあったら現地調達すればいいんだろ」

俺、当麻、インデックスの3人で海外か。

しかもイタリアって、ローマ正教の総本山がある所じゃねえか。

まあ、いくのは北部だからローマとは逆方向か。

でも、つい先日ローマ正教のシスターとやりあったばっかりなのに、まさか報復して

こいつてか？

なら俺だけ行かせるはずだよな。

『じゃお土産を楽しみにしているぞ』

「ローマ教皇の生首でも送りつけてやる」

はあ、とりあえず、当麻に連絡するか。

せっかく、インデックスと2人きりでの旅行を楽しみにしてたのに!

とか文句は……言わないな。というかそういう気はあいつにはまったくないな、うん。

実際、当麻は俺が着いてくると知り物凄く喜んでた。

曰く、インデックスと2人きりじゃ不安だからと言っていたが、俺に何を期待しているんだか。

まあ、何かあった時のスケープゴート役を期待されている気がしないでもないが。

それから海外旅行の準備をした、が。

学園都市外部へ長期で、しかも、海外に行くというのが仕事でもあったことがないため。

着替えやらを持っていくスーツケースがない事に気づいた。

武器や爆弾を入れている大きいバッグがあるが、形状と色的に多分目立つ。

テロリストが武器を詰め込んでるように無駄にでかくて黒いバッグ。

これを持っていったら、向こうの警官に不審者扱いされかねないな。

仕方ない。買うか。

多分、使うのはこれつきりだろうけど。

そして、翌日の26日。

北イタリア旅行はツアー旅行のようなもので、27日に現地集合となっていた。なので、日本からは前日の出発になる。

当麻とインデックスとは、学園都市にある無駄に広い国際空港を待ち合わせ場所にした。

で、いざ着いてみると、当麻とインデックスが何やら騒いでいた。

「忘れ物はないよな。財布にパスポート、必要書類に着替え、あとそれから……」

「もう、とうまは家を出てからずっとそうだけど、何をそんな心配性になってるの?」

「そう、だよな。うん、たまにはこんな幸せが舞い込んできたっていいよな!」

「そうそう。その意気その意気!」

あまりのネガティブさに思わずホロリときそうだったが、当麻の心配は当たってる。

この旅行が無事に済むとは、俺も全く思っていない。

それは心配とかそんな次元の話じゃなく、確信だ。

「おーい、当麻、インデックス。こっちだ」

「あ、ゆうき! やっほー」

「やあ、ゆうきくん、おはよう! いい天気だね。まさに海外旅行日和じゃないか!」

うわあ、当麻の奴。さつきまで心配と不安が顔中に付きまくってたのに、今はもうすっかりハイテンションというか、変なテンションになってる。

正直、うざいくらいだ。

「うん。当麻は一度頭を再起動しようか？」

「うわっ、じよ、冗談だからその振り上げたこぶしを下げてくれー！」

「つたく、で、お前は海外旅行初心者丸出しの恰好なのはいいとして、インデックスはその恰好で行く気か？」

「この恰好?！」

当麻はいつもよりちよつと恰好をつけた服装だが、財布にチェーンを付けていたりとか、予備の財布を別ポケットに入れていたりとか、いかにもスリに狙ってくださいます言っているような恰好だ。

俺がスリなら本人に気づかれる前に身ぐるみ全部剥ぎ取れそう。

インデックスは、相変わらず安全ピンだらけの修道服だが、これはダメだな。

海外旅行初体験の俺でもわかる。

「私はシスターだもん。どこに行くんでも修道服なのは当たり前なんだよ」

「いや、それじゃなくて安全ピンつけたままゲート抜けるのか？」

「ゲート?！」

インデックスは何を言いたいかさっぱり分からないという顔をしている。

当麻が言うにはパスポートもよくわかってなかったみたいだし。

空港の出入国とか、そこら辺のシステムを理解してないのかな。

そういうえばインデックスって海外からどうやって日本の学園都市にやってきたんだろ？

まさか密入国とかじゃないよな。

「あ、安全ピン！」

当麻は俺が何を言いたいのかわかったようで、しまったという顔をして頭を抱えた。安全ピンなんて出国ゲートで引つ掛かるに決まっている。

いや、そもそも金属探知機は国内線でもあるんだからこの恰好じゃ飛行機はどれも乗れない。

「どうする!? 今から街へ行って服を買う余裕なんてないぞ！」

「落ち着け。シヨツピングエリアが向こうにあるからすぐに行つてインデックスの服を買つてくればいいだろ」

「お、おおく！ その手があつたか！ 走るぞインデックス！」

「えっ？ なになにお洋服買つてくれるの!?!」

「飛行機の時間あるから早めに終わらせろよ——！」

「わかつた——！」

当麻のスーツケースを預かり、俺はロビーで待機となった。

こうなる予感がしたから待ち合わせ時間早めにしといてよかった。

そんなこんなでインデックスの服も買えて、何事もなくゲートをパスして日本を出国できた。

機内では飛行機慣れしていないインデックスがそわそわしたり、食事はまだかと当麻に詰め寄ったりと、まあ退屈はしなかった。

で、問題はイタリアについてからの事だった。

「……誰も来ない」

そう。現地集合で合流するはずの案内ガイドや他のツアー客たちが、集合場所にいつまでたっても現れなかった。

やっぱりこのイタリア旅行、ただで終わる気がしない。

続く

第134話 「奇襲」

当麻とインデックスとやってきたイタリア。

だが、まだ来たばかりだというのにトラブルの連続だった。

現地合流のはずのツアーガイドや他のツアー客達は待てども待てども来ず、仕方なく俺達は手配されているホテルへと向かった。

幸い、場所は分かるしイタリア語も分かるからバスを使えば問題ない。

どのバスに乗ればいいのかって所で少し時間を食ったが、それでも無事に目的地に辿り着いた。

が、今度は別の問題が発生した。

「ねえねえ、とうまはどこ？」

当麻とはぐれてしまった。

ぶらぶらと商店街を歩いていたら、おいしそうな匂いに釣られてインデックスがあちらこちらにフラフラと彷徨い始めた。

当麻にここで待ってると言って、急いで追いかけてジェラード店に張り付いたインデックスにアイスを買って戻ったのだが、当麻がいなかった。

携帯にかけてみたが、電池切れのようであつながらなかつた。

「ちやんと待つてろつて言つたのにアイツ……」

「とうまは人の話を聞かないからね。まつたくもう」

「だぐれのせいだぐと思つてゐるのかな？ インデックス君？」

「ほ、ほめんなはい！（ご、ごめんなさい！）」

暴食シスターの頬を引つ張つてゐると、見知つた顔が歩いてゐるのが見えた。

「なんで彼女達がここに？ おーい、五和！ オルソラ！」

五和とオルソラはこちらに気が付くと、驚いた顔をして手を振りながらやつてきた。

「お久しぶりです、ゆうきさん、インデックスさん」

「あの時は大変お世話になりました。直接お礼を言えうれしいです」

「ああ、いいつて。俺は仕事だつたからな。で、なんでここに？ 確かイギリスに移つた

んだろ？」

先日的事件では、ロンドンでシェリーと一緒に使徒十字の事を調べ上げてくれたはず。

ず。

「実は荷物がまだこちらに残つておりまして、天草式の方々にお力をお借りしてイギリ

スへ運びこんでいるのでございますよ」

オルソラは元々この街に住んでいたようで、イギリス清教へ改宗手続きで必要最低限

の荷物だけ持って行って、後日改めて引越しするという事だったらしい。

天草式は人数も多くて、法の書での縁もあつて荷物運びの手伝いをしているのだそうだ。

「それでお二人はなぜイタリアへ？ 何か事件ですか？」

「あ、いやいや、当麻とインデックスがイタリア旅行に当たつてさ。俺はそれの護衛みたいなものだよ」

この面子で事件が起きない方がおかしいんだけどな。

「ま、護衛というか、見張りとも言うか」

「は、離してなんだよー！ 向こうからおいしそうな匂いが私を呼んでるんだよー！」

俺とオルソラ達が話している間にもインデックスはフラフラとしそうなので、猫のうに首根っこを掴まえている。

その様子を見て、五和は苦笑いを浮かべたが、すぐにハツとした顔になった。

「あ、あの。上条さんもここへ来てるんですか!？」

「まあまあ、では改めてお礼を申し上げなければいけませんね」

当麻と聞いて2人共驚いたが、五和のリアクションはちよつとオーバーでは？

「来てるぞ。今迷子だけど」

「「えっ?」」

これにはさすがのオルソラも目を丸くした。

まあ、そりやそうだよな。

俺もインデックスも全く当麻を心配してる感じじゃないしな。

「あ、あの、それって結構大変なんじゃ……」

「この辺りの治安は比較的良好ですが、それでも観光客目当ての詐欺や泥棒はありますし……」

「とうまが一人で勝手にどこか行くなんて今に始まった事じゃないか、イタツ!? な、何するのかな、ゆうき!? 暴力反対!」

「誰のせい誰の。当麻の事なら大丈夫だ。これで居場所がすぐにわかるし」

そうやって懐から小型デバイスを取り出した。

「五和は覚えてるか? これ、あの時使った探知機の進化版」

「あ、あの時の。覚えてます覚えてます」

法の書事件で今回のように俺達3人は学園都市の外へと出た。

その時、超小型発信器を取り付けたのだが、今回もあの時同様俺達には発信機が取り付けられている。

これはそれを探知できるのだが、法の書事件の時より精度が上がっている。学園都市外部に持ち出せる数少ない道具だ。

早速、五和達にも分かるように操作してみせると、当麻はここからそう離れた場所にはいない事が分かった。

本来なら学園都市の道具を部外者である五和とオルソラに教えるのは良くないのだが、これは別だ。

「とりあえず当麻を迎えに行くか。2人共どうする？ 昼食でも一緒にどうだつて誘いたい、引越しあるんだろ？」

当麻も五和とオルソラに会えたら喜ぶだろう。

年上のおっぱいがでかくて包容力の高い2人は、当麻の好みにドストライクだもんな。

「あ、それでしたらここで会ったのも何かの縁。よろしければ私の引越しのお手伝いをお願いできないでしょうか？」

「へっ？」

お昼を誘ったら引越しの手伝いを頼まれてしまった。

「天草式のみなさんがいらつしやいますが、それでも人手不足気味です。もし皆さんにご予定がないのであれば、お昼もご用意させていただきますから、ぜひ」

「お昼!?! いくいくいく! ね、ゆうきもいいよね? ね?」

「分かったから涎を垂らすなみつともない。それでもシスターか。少しはオルソラを見

習えつての」

お昼が食べれると聞いて、インデックスの目の色が変わった。

まあ、引越しの手伝いくらいなら軽いもんだし、当麻もきつと賛成するだろう。

昼飯代が浮いた！　と思いきや……

「じゃ、俺は当麻を拾ってから行くからオルソラの家を教えてくれないか？」

「それでしたら、私があの方をお向かいに参りますわ。ユウキさんとインデックスさんは五和さん、お願いできますでしょうか？」

「はい。その方がいいと思います。オルソラさんの方が土地勘もありますし」

言われてみれば、海外旅行初心者俺より、地元詳しいオルソラが当麻を迎えに行つた方がいいかもしれない。

というわけで、オルソラに当麻の位置を教えて俺とインデックスは五和の案内でオルソラの家へと向かった。

オルソラ邸では、すでに天草式達が荷物整理を始めていた。

見知った顔もいれば、初対面の人もいる。

五和に簡単に紹介されて挨拶をして、インデックスは冷蔵庫へと突撃していった。

そして、しばらくするとオルソラに連れられて当麻がやってきた。

「よお、迷子の迷子の上条ちゃん」

「ゆうきく！ お前までインデックスと一緒になつてはぐれるなよ！ 俺めちやくちや心細かったんだぞ！」

「ははっ、悪い悪い。てかちゃんと声はかけたんだぞ？」

恨めしそうな当麻の視線を軽く受け流すと、キッチンからお徳用サイズのエラートを抱えたインデックスがやってきた。

「とうまとうまとうま！ 本場のエラートってお徳用でもとんでもなくうまいんだねえ！」

「インデックス……ふこうだ」

不幸オーラが全身から湧き出ている当麻を目の前にして、元凶たるインデックスは呑気に業務用アイスプーンでエラートをおいしそうに頬張っていた。

それをみて全身から力が抜けて項垂れる当麻に心底同情した。

と、扉の向こうからじつとこちらを見つめながらひそひそ話をする天草式の姿が見えた。

「あれが教皇代理が一目置いた御仁……しかし、実力はいかほどのものか……」

「そこに疑問を抱くのは、あなたがオルソラ様救出戦に参加していなかったから……」

「かの御仁は、ローマ正教が誇る250名の戦闘シスター相手に一人で囷となり、武器を

持たずに大立ち回りを繰り広げた殿方なのですよ」

「学園都市では以前、あの女教皇様に立ち向かい七天七刀を掻い潜り、ぶん殴った事もあるとの確かな情報もあります」

「なんと、彼はそこまでの！」

流石に色々情報を持っているようだ。

少し、情報が大きさに伝わっている気がしないでもない。

そして、天草式のひそひそ話が耳に入ったようで、当麻のぐんにやり度がさらに増した。

それから当麻と引越しの手伝いをしようとしたのだが、それより先にオルソラがお昼を用意したというので4人で食べる事になった。

出された料理はアサリをメインとしたシーフードパスタとスープ、それにパンだ。

皿に盛られたパスタは山のような大盛りで、これだけでもお腹いっぱいになりそうだ。

普段は簡単な料理をするか、ファミレスで済ませている俺からすればここまで豪華な料理は初めてと言ってもいいかもしれない。

当麻も本場パスタに目をキラキラさせて、インデックスと一緒に大興奮している。

「うわあ〜！ おいしそうだ！ でも、引越しの手伝いする前にお昼いただきたいの
のか？」

「まずはせっかくお越しくくださいましたあなた達をおもてなしするのが先でございます
ですよ。それに調理道具も箱に詰めてしまつては料理ができなくなつてしまいますか
ら」

「でも、天草式の連中はみんなごはんまだみたいなのに」

五和達天草式は自分達に構わずにーといった感じで黙々と荷物整理をしている。

「天草式の今鍛練中で決まつた時間に決まつた食事を取るのをごぎいますですよ」

「天草式の魔術はあのバーコード神父とは別の意味で色々と面倒だよな」

以前使つた事があるからわかるが、天草式魔術は、その分様々な効果の魔術を必要最
低限の道具や仕草で発動できる利点がある。

「使います？」

と、そこへ五和がどこからかおしぼりを持ってきて当麻に手渡した。

「あ、どうも」

「いえいえ」

五和はそれだけ言うと、あたふたと部屋の外へ行つてしまった。

部屋の外から天草式の声が聞こえてくるが、聞かなかつたことにした。

街で会ったときに当麻の名前が出た時の反応といい、今といい、五和はもしかして当麻に惚れたか。

もしそうだとしたら、気の毒だけど彼女に勝ち目は薄いな。

見た目や性格とかは当麻の好みだろうけど、いかんせん魔術サイドの人間だからな。

基本的に学園都市にいる当麻とはただでさえ接点少ないのに、操祈とか美琴とか妹達とか恋のライバルが1万人以上いる。

ま、俺には関係ないけど。それよりパスタだパスタ。

「「いただきます！」」

「はい、めしあがれ」

まずはパスタを口に入れた俺達3人はあまりのおいしさに目を見開いた。

「うまああ！ うますぎるぞこれ！」

「うんうん！ とうまがいつも作ってくれるご飯より何百倍もおいしいかも！」

「このやろ、手伝いもしないただ飯食らいのくせに……でも、否定できない！ めちゃくちゃうますぎる！」

「うふふつ、おかわりもございますですよ」

本当に今まで食べたどの料理よりも格別においしかった。

ファミレスなんかと比べること自体失礼だったが、それでも俺が今まで食べてきたの

はなんだったのかと思うほどだった。

俺達3人はオルソラの手料理を腹いっぱい堪能して、少し休んだ後引越しの手伝いを始めた。

俺は、力があるので外でトラックに大きな家財道具や段ボールを運ぶのを手伝い、当麻とインデックスは部屋の中で荷物整理と掃除を行う事にした。

しばらくすると、2階のシャワールーム辺りから、ふこうだー！ という当麻の悲鳴が聞こえてきたが、いつもの事だと気にしなかった。

「では、よろしくお願いいたしますね」

荷物を全て整理してトラックに積み終えた頃にはすっかり日が暮れていた。

天草式がトラックを走らせるのを見送り、俺達は夜のキオツジアの街を歩きだした。

「こんな時間までお手伝いいただきありがとうございます。長い間引き留めてしまい申し訳ございません」

「これくらいどうってことないって、うまいオルソラの手料理も食べれたし。な、2人共？」

「うん！ あの料理が食べられるならずっとここにいたいかも！」

「ここから、引越越したばかりのの人に何を言ってるんだインデックスさん。ところで、オルソラはこれからどうするんだ？ 俺達と一緒にどこか観て回るか？」

当麻がそういうと、オルソラは少し苦笑いを浮かべた。

「ロンドンでの仕事を休ませていただいている身ですから、長居はできないのでございますよ。それに……」

オルソラは今度は感慨深そうな表情を浮かべ、キオツジアの街を見渡した。

「キオツジアにお別れを告げに回りたいと思いますし……それはあんまりおもしろくないのでございますよ。少々みつともない顔をするかもしれませぬ」

「……そっか」

オルソラはこの街にずっと住み続けて愛着があるのだろう。

しかし、本人の意思ではなく、ローマ正教の内輪もめで去らなければならない。

それは、どれほどの寂しさなどがあるのか、俺には分からない。

俺は、生まれも育ちも学園都市だ。

でも、オルソラと同じく自分の意思は関係なく学園都市から去らなければならない。なったのなら、俺はオルソラみたいにこんな表情は絶対に出来ない。

「それでは、機会がありましたら、今度はロンドンのお部屋にもご招待いするのでございますよ」

「ああ。お前も、また日本に来ることがあったら」

「その前にとうまもお部屋そうじしなくちゃいけないかも」

「護衛は俺が引き受けるぜ」

オルソラと別れて俺達は歩き出そうとした、その時だった。

突然殺気と力を感じた。

これはよく感じるもの、学園都市にいる時によく感じる気配、何者かが能力でこちらを狙っている気配だ。

「これって……っ！」

「みんな伏せ（ろ・て）！」

インデックスも気づいたようで、何か呪文のようなものを唱えた。

それは、インデックスの魔力を使わない魔術の狙いを外す特殊技能、強制詠唱だ。

俺は当麻をインデックスにぶつけるように押し付け、オルソラを抱きかかえてその場を飛び跳ねた。

——パァン！

その直後、オルソラの鞆がはじけ飛んだ。

「狙いはオルソラか！ 当麻、インデックスを守れ！」

「わ、分かった！」

オルソラを背後に庇う様に立ち、周囲に目を向ける。

するとオルソラの修道服にまるでレーザーポインターのような点が現れた。

すぐにオルソラを抱きかかえて、その場を飛び跳ねる。

同時に、いくつもの衝撃が俺のすぐ側をかすめた。

「ちっ、まずい！」

狙撃ポイントはいくつか検討がついているが、こつちにはかわす以外の対抗手段がない。

それに、すぐ近くの運河から幾人かの気配を感じ、オルソラを当麻の方へ押しやり身構える。

「出てこい！」

イタリア語で叫ぶと、運河から数人のロープ姿の男が現れた。

「狙撃は任せた！」

「うん！」

後ろにいるインテックスに叫びながら、襲撃者達へとかける。

襲撃者達はこちらを素人だと思って特に警戒はしてないようだ。

手に持ったナイフを突き出してくるが、そんなの遅すぎて当たるわけがない。

1人目のナイフを奪い、頭に突き刺そう……とせず思いとどまり、そのまま顎を打ちつけた。

このままだけは正当防衛にはなるだろうが、こいつら魔術師だから色々面倒そう

だ。

2人目は刃が赤く輝く槍を構えていたが、それを振るうより先に足を払い、倒れた腹に踵を落として意識を奪った。

それを見て動揺して動きが鈍った3人目を運河へと蹴り飛ばした。

これでは狙撃のみだが。

「大丈夫、こっちはもう済ませたよ」

「流石インデックス」

「えっ？ 今一体なにを？」

インデックスが睨みつける先では、屋根の上で大男が野太い悲鳴を上げながら膝をついていた。

狙撃ポイントがどこであろうが、こっちの状況を逐一見ていなければならぬ。

ならば、インデックスの強制詠唱が届くはずだ。

「ぐぐつ、前衛は見捨てる。今すぐここで撤退の船を出せ！ あの女は船の上で殺してやる！」

倒れこんでいた大男はイタリア語でそう叫ぶと、運河に飛び込んだ。

「船？ まさかっ！ まずい！ みんなここから離れろ！」

敵の意図に気づき、急いでこの場から離れようとしたが、遅かった。

大男が運河に飛び込むと同時に、大きな轟音と共に巨大な水柱が上がった。

と、同時に地面が地震のように揺れて砕け散り、地下から何かが浮かび上がってきた。その巨大な何かに俺達はそのまま押し上げられていった。

「とうま！　とうま！」

「インデックス！」

少し離れていた当麻とオルソラは間に合わなかったが、かろうじてインデックスをまだ残っていた地面へと突き飛ばした。

運河の底から、地面を砕きながら現れたのは、巨大な氷で出来た船だった。

続く

第135話 「女王艦隊」

運河の底から現れた巨大帆船。俺達は、それに巻き込まれる形で乗船してしまった。

1人川岸に取り残されたインデックスに向けて俺はある物を投げ渡した。

「インデックス！ そいつを五和に渡せ！」

「えっ？ わ、わわっ！」

もたつきながらもなんとかインデックスが受け取ったのを確認して、俺は船に上がった。当麻とオルソラに向き直った。

「2人共大丈夫か？」

「ああ、俺は大丈夫だ」

「私も大丈夫でございませすよ」

ひとまず2人の無事を確認して、これからどうしようかと考える。

この帆船はどうみても魔術で生み出されたものだ。

触ってみたところ、冷たくはないがどうやらこの船は水で出来ているようだ。

だから帆船全体が月明かりや街の灯りを乱反射させて、白っぽい電球色で輝いていて
明るい。

当麻が右手で触ったり、俺が幻想支配で視たが何もなかった。

幻想殺しや幻想支配の魔術への反応は未だに不明瞭な所があるけど、これを作った核を壊さなきゃ破壊できないかもしれない。

——ガコンツ

「おわっ!?! 進み始めたのか?」

「そうみたいだ。狭い運河を何の苦も無く削り取って進んでるぞ」

どういう原理で動いているか分からないが、川岸や途中の石橋を破壊しながら運河を抜けアドリア海へと進んだ。

ちなみに、さつき石橋を破壊した時の衝撃で、当麻がオルソラに覆いかぶさる体制になっっている。

思わずカメラで撮りたくなかったが、今はそんな事してる場合じゃない。

「海に飛び降りるのは、この高さは2人には無理か」

「さりと自分なら大丈夫って言ってるが、すごいな」

下は海とは言え、そこそこの高さがある。

俺だけならともかく、当麻とオルソラでは骨が折れるだろう。

それにすでに沖へ出ている以上、泳いで戻るにしても距離がある。

濡れた服で遠泳するには条件は厳しすぎる。

それにこの船にすぐに見つかる可能性も高い。

そうなれば、船の側面に装備されている大砲で撃たれて一卷の終わりだ。

脱出用の小舟でもないかと思渡したが、それらしいものは見当たらない。

「陸から……離れていくようではございませぬ」

「ああ、この帆船といい、さっきの襲撃者の目的が分からないな」

オルソラ狙いなのは確かだったが、法の書の件は片が付いていると天草式から聞いている。

なら私怨か。それにしてもオルソラー人に対して大げさすぎる。

と、考え込んでいると船体内部から複数の足音が聞こえてきた。

「まずい。2人共隠れろ」

「は、はい」

上甲板に身を隠すと、複数の男たちが武器を片手に飛び出してきた。

どいつもこいつもさつき襲ってきた奴らと同じ格好をしている。

あいつらを片づけてもいいけど、狙いも戦力も何もかも分からない中で、下手に騒ぎを大きくしても目立つだけだ。

「色々考えることはあるけど、まずは中へ入って安全な場所に避難するぞ」

声を抑えて言うと、2人とも無言で頷いた。

幸い、船室への扉は複数あり、奴らの隙をついて入り込む事には成功した。

当然というか、船内も扉も何もかも全て氷で出来ていた。

外と同様に、月明かりでも乱反射させているのか、思っていたよりは暗くはない。

でも、暗くないというのは下手に隠れても見つかりやすいという事だ。

現代の船舶ならある程度詳しいが、昔の帆船、特に魔術で生み出された船の内部構造は全く分からない。

闇雲に内部を進む前に、どこかで一度腰を落ち着かせたかった。

なので、中に人の気配がないのを確認して、すぐ近くの船室にもぐりこんだ。

外からはドタバタと走り回る音が聞こえてくるが、こちらに来る気配は今の所はない。

船室内は1人用の個室のようで、簡易な机といす、ベッドがあった。

ひとまず、当麻とオルソラはベッドに座り、安心したようには1つと深く息を吐いた。

「くそっ、何がどうなってるんだ」

当麻がポツリとつぶやき、オルソラが困惑した表情を浮かべている。

無理もない。俺も状況がさっぱりわからない。

「オルソラ、襲撃してきたやつらも今外にいる連中も、ローマ正教で間違いないか？」

「はい。あの服装は男子修道服で間違いないのでございます。ですので、ローマ正教の手の人だと捉えるのが正しいのでございませうが……」

「まさか、法の書の事でまた何か?」

当麻もさっきの俺と同じことが頭に浮かんだようだ。

「いや、それは片が付いている。それにオルソラー人をどうにかするにしては大がかりすぎる。本来はもっと別の目的のための船だったんだらう」

「では、先ほどの襲撃は?」

「……恐らく、ついで?」

オルソラーは眉を下げて、またさらに困惑の色を深めた。

襲撃はついで、そう考えるのが自然だが、襲撃された側からすればたまったもんじやない。

改めて船室内を見ると、丸い窓があるのが見えた。

そこから外の様子を見ようと近づくと。

——ドボンッ!

突然、船窓の向こうで海面が爆発した。

「な、なんだ!?! 砲撃か!?!」

「いや、違うな」

窓の外では次々と海面が爆発し、大きな水柱と共にこの船と同じ形をした帆船が姿を現した。

「この船は敵の本拠地じゃなく……」

「大船団の一隻に過ぎなかった、って事だろうな。全くそれにしても何十隻いるんだ？」
「キオツジアでは狭すぎて展開できなかったって事か。あ、インデックス！」

ここで当麻がようやくインデックスの事を思い出した。

急いで携帯を取り出し、インデックスが持っている携帯にかけたが繋がらなかった。

「インデックスのやつ。携帯の電源切ってやがる」

ちなみにインデックスに携帯電話やら固定電話やら、一般的な家電について一通りのレクチャーは、当麻と同居してすぐに俺がしてある。

当麻じゃうまく教えられないようで、様子を見に行つた時に教えてくれと頼まれたからだ。

「インデックスの事なら心配ない。最後に見た時は無事だったし。保険もちやんと手渡ししてある」

「保険？」

「問題は、天草式にうまく合流できれば、だけどな」

インデックスにもアレの使い方は教えてあるけど、使い方が分かるだけじゃどうしよ

うもない。

「何の事かわかんねえぞ」

「ああ、実はインデックスには……シッ！」

と、ここで部屋の外から何者かが近づいてくる気配がした。

ついに各部屋ごとへ探索の手がこつちに来たかと思ひ、当麻とオルソラに静かにする
ようにジェスチャーして、扉へと近づく。

——ガチャッ！

「っ!？」

ドアノブを回す音がすぐに聞こえてきた。

気配を探ると、どうやら相手は1人のようだ。

複数が来られるとちよつと面倒だけど、1人ならどうとでもなる。

——ガチャリ

ドアが開くと同時に、廊下にいる相手の手を掴み、なるべく音を出さないように地面
へと転がして押さえつける。

左手で口を塞ぎ、右手に机の上にあつたペンを掴み相手の首元に当てる。

もちろん、両足で相手の両手を押さえるのも忘れない。

と、ここまで一瞬でやったのだが、やっておいてなんだが、相手がすごく小さい事に

気づいた。

しかも、その相手は俺も当麻もオルソラもよく知る人物だった。

「お前、アニエーゼⅡサンクティス？」

「んっ!? つゝゝ!!」

「あ、アニエーゼ!?!」

「まあまあ」

当麻もオルソラも驚いた顔をしているが、俺も驚いた。

けど、普通に考えればローマ正教のアニエーゼがローマ正教の船にいたっておかしくない。

それに、アニエーゼは、オルソラとも俺達とも因縁がある。

状況が状況なので、この際贅沢は言ってられない。

彼女から情報を引き出す事にしよう。

と、言っても当麻とオルソラがいる前で過激な事は出来ないな。

アニエーゼは最初こそ驚いた表情を浮かべていたが、すぐに俺にを睨みつけて暴れだした。

と言っても、完全に押さえつけているし。

シークレットシューズなしではインデックスより幼い身体のアニエーゼでは俺をは

ねのけられない。

「あの、ユウキさん。アニエーゼさんに手荒な真似は」

「ユウキ、お前今すごい画になつてるぞ」

……幼女を押しさえつけるつてのは経験ないわけじゃないが、確かに悪質な変質者にか見えないよな。

しょうがない。

「はあく……いいか、アニエーゼ。まず最初に言っておく。俺達はお前らに敵対するためにここに来たんじゃない。むしろ、そっちが先に手を出してきてこんな事になった。理解できたか？」

「……んっ」

「じゃ、離すぞ。俺も手荒な真似はしたくないんで、ひとまず落ち着いて話をしよう、な？」

「っ!？」

アニエーゼを落ち着かせて安心させる為に笑顔で言ったのに、彼女は顔を真っ青にしてガクガク震えだしたぞ。

おかしいな。

ともかく、アニエーゼを離すと、彼女はさきつと部屋の隅まで後ずさりして、恐る恐る

る俺達を睨みつけてきた。

まるで警戒心丸出しの猫だな。

「ユウキ、お前今何したんだよ。アニエーゼ怖がつてるじゃないか」

「いや、当麻。そういう事言つてられる状況じゃないからな？」

「待つてくださいアニエーゼさん。私達は、あなたを傷つけるつもりは……ないのでございます」

オルソラ、そこで俺を不安そうにチラ見するなよ。

あ、なんか少し怒ってる気がする。

「あー……悪かった、アニエーゼ。もう何もしないから、ほらこつちおいで」

「私は猫ですか!? じゃなくつて、どうしてあなた達が『アドリア海の女王』にいやがるんですかい?」

相変わらずアニエーゼの日本語はたどたどしいというか、訛りやアクセントが変というか個性的だな。

「さつきも言つたろ。俺達は巻き込まれたただけだ。お前らにな」

そこで俺達はこれまでの事情を説明した。

旅行先でオルソラに出会って、引越しの手伝いをして、別れようとしたら変な奴ら

に襲われて、かと思えば帆船が運河に浮かび上がって巻き込まれてここにいる。

そういうと、アニエーゼは額に手をあて深く息を吐いた。

「はあく……なんで、貴方たちはそう面倒事や厄介事に首どころか全身を跳びこませてくるんでございますか」

「これも全部、ローマ正教のせい」

「あーはいはい、分かりました。全部ローマ正教が……って言えるわけねえでしょう！」
と、息卷いたアニエーゼだったが、ふと何か思いついたようで、いたずらっ子がよくする嫌な笑みを浮かべ始めた。

「ですが、これは利用できそうですね」

「その前にここの情報とか色々教えろよ」

「はあ？ いいんですか？ 私がここで大声を出せば 「んっ？」 は、はいいっ！ お、教えて差し上げます！」

何かほざきかけたのでペンを取り出して、さっきのような笑みを浮かべる。
すると、アニエーゼはまた顔を真っ青にして色々と教えてくれた。

いやあくやっぱり人を安心させるのは笑顔だよな。

「……………」

当麻とオルソラが引いてる気がするけど、多分気のせいだろう。

アニエーゼの説明によると、この艦隊の名は、女王艦隊。

アドリア海の監視を目的とした「アドリア海の女王」その護衛艦の1つだそうだが、艦隊の事は、アニエーゼもここに連れてこられた時に知ったそうで、オルソラも聞いた事はないと言っていた。

ローマ正教と言っても、部署が多くあるので末端のシスターたちには知らされていない事も多いのだろう。

そこは学園都市も同じだしな。俺だって暗部を全員知っているわけじゃないし。学園都市で行われているプロジェクトは、監視ですら全て把握できてはいない。

だが、アニエーゼの説明を聞いていて、ふと疑問がわいた。

「で、艦隊の規模とか色々と不自然な感じがするけど、ホントにアドリア海の監視の為だけの艦隊なのか？」

「ああ、俺達が襲撃された事だって、なんか引つ掛かるし」

俺と当麻がそういうと、アニエーゼはニヤリと悪戯っ子スマイルを浮かべた。

なので、俺も【営業】スマイルで応えようと、ブルブルと震えて答えてくれた。

「あ、貴方達は、ローマ正教のプロジェクトを破壊した張本人ですよ。そんな奴らが学園都市からわざわざイタリアに来たとなれば、わかるでしょう？」

「オルソラにまで警戒する事ないだろ。しかも、襲撃までして」

「彼女については、天草式をここに入れたことが問題なんでしょうね。彼らの戦闘力はよく知られているから、警戒網に引つ掛かるのは当然。と、ここまでは建前」

アニーエゼはふーつと息を吐いて表情を曇らせた。

「ここは一種の労働施設なんですよ。私みてえな失敗者や罪人達を働かせて、ローマ正教が受けた損失分を支払うため、のね」

「なるほど。ここ監獄ってわけか。ま、それはそつちの問題で、俺達に関わる事じゃない。で、俺達は早くここを出たいんだけど。せめて小舟を貸してくれないか？ 出ないと、俺達また何をしでかすか分からないぜ？」

半分以上は脅しに近いが、早くここから出た方がいい。

俺の仕事は当麻とオルソラを無事に脱出させることだ。

「そ・こ・で、交換条、件……と、言うのはどうでしょうか？」

アニーエゼは、三度悪戯つ子スマイルを浮かべかけて、すぐに引つ込めて真顔で言った。

「交換条件？」

「今この船には、シスター・ルチアとアンジェレネが囚われています。その2人を助けてここから連れ出してほしいんです」

「ルチアとアンジエレネが？」

あの2人は、直接戦った相手だからよく覚えている。

なんでもここにはアニエーゼ隊全員が労働者として働かされていて、あの2人は一度ここから脱獄して、アニエーゼ達を再度助けに来ようとして捕まったというのだ。

ここを脱獄した時の術式は今ならまだ有効のはずだから、それを使って脱出しろという話だ。

「アニエーゼも一緒に逃げようぜ」

「いいえ、私は残ります。今この女王艦隊は大仕事の準備で手薄になっています。私が旗艦に行くので、貴方達が動きやすくなるように隙も作れますし。それに、案外居心地いいんですよ、ここに」

アニエーゼは、労働者の反乱防止の為にここにいるようなもので、その為に船内の自由行動など結構な好待遇らしい。

慕っている上司をそういう待遇にする事で反乱防止にするのは、実は学園都市でも使われる手だ。

だが、それでも何か引つかかる。

「あの2人がやろうとした事は空回りなんですよ」

2人共、馬鹿なんですよ。とポツリとつぶやくアニエーゼに違和感があつたが、当麻

も俺も何も言わなかった。

「分かったよ。でも、多勢に無勢ってなったら助ける余裕なんかなくなるぞ」
「それ、以前250人のシスター相手にケンカを売った男のセリフですか？」

アニエーゼの皮肉が籠った言葉に、思わず笑みを浮かべた。

一応、敵として俺達の実力は認めているようだ。

アニエーゼは、座り込んでいる当麻に向けて手を差し出した。

握手、ではなく、立って、シスタールチアとアンジェレネを助けに行け、というサインだろう。

「つと、ありがとう」

当麻は、右手でアニエーゼの手を掴もうとした。

それを見て、俺はすごく嫌な予感がした。

「あ、当麻待て！」

「えっ?」

一足遅く、当麻の右手がアニエーゼの手ごと袖口に触れた途端。

——キーン

アニエーゼの修道服の縫い目が壊れて、バラバラに落ちて行った。

「あら」

それを見てオルソラが頬に手を当てた。

「その露出の多い修道服は全体が魔術的な拘束を与える為の特殊な装飾でございましたか」

つまり、魔術で編まれた特殊な囚人服という事か。

なるほど、だったら当麻が右手で触れたらバラバラになるな。

あ、以前インデックスが安全ピンで修道服を留めていた事に、触れないでと言ったのはこういう事があつたからか、なるほどなるほど。

と、呑気に考えつつ、俺は高速でアニエーゼに背を向けた。

「えっ……キャッ」

「シーーツ！」

背後では、すっぽんぽんになったアニエーゼが悲鳴をあげようとして、当麻とオルソラが全力で止めようとしていた。

「当麻……」

「あ、いや、ユウキさ、うごっ!」

俺はまだ背を向けつつ、当麻に向けて蹴りを放った。

全く、どうしてこんな状況でそんなラッキースケベが起こせるのやら。

続
く

第136話 「脱出」

アニエーゼからこの船に囚われているルチアとアンジエレネの居場所を聞き、俺達は
その部屋へと向かった。

幸い、この船にはそれほど多くの人は乗つてはななく、さらにアニエーゼが旗艦に移
る為、艦内が手薄になっていた。

誰とも出くわすこともなく目的の部屋が見えてきた。

部屋の入口に人はいなく、代わりに氷でできた鎧人形が飾られていた。

それを見た瞬間、嫌な気配がした。

「2人とも、止まれ」

「つと、どうしたんだ？」

「誰か、見張りがいるのでございますか？」

「見張り、ねえ。間違つてはいない、な！」

「わっ!」「キャッ！」

当麻とオルソラを後ろに突き飛ばすと同時に、目の前に鎧人形が音もなく現れた。

氷で出来ているからか、一瞬でここまで滑つてきたようだ。

「な、なんだこれ！」

「見張りだよ！」

鎧が手に持った棍棒を振り下ろすより速くその胴元に蹴りを叩き込む。

流石にこれで壊せるとは思っていない。

けれども、この一撃で体勢は崩せた。

「ほら、出番だぜ当麻！」

「なにをー!？」

すかさず後ろに下がっていた当麻の右手をつかみ、鎧の方へと投げた。

——パキンッ

当麻の右手が触れた瞬間、あつという間に鎧はバラバラに砕け散った。

「こ、これは一体何なのでございましょう？」

「多分、自動迎撃システムみたいな、魔術的にはゴーレムの一種なんだろう。外見はともかく、シエリーのよりは中身的には雑な造りだけだな」

「船の一部が姿を変えて、という言うことなのでしようね。シエリーさんのゴーレムとはまた違っているようですね」

「そっか……って、シエリーを知ってるのか？」

オルソラの口からシエリーの名前が出て、当麻が驚いた声を上げたが俺も驚いた。

あの一件後でのシエリーの処罰はイギリス清教へと一任した。

けど、それからどうなったかは知る由もなかった。

「どうやら、オルソラはイギリス清教内ではシエリーと同じ部署で働いているみたいだ。」

「つて、今はそんな事どうでもいいだろ」

「あ、はい。そうでございましたね」

部屋の中から人が出てくる気配はない。

まだこつちの騒ぎは気づいていないみたいだ。

部屋の中の気配を探ると、部屋には5人ほど気配を感じる。

うち2人はルチアとアンジエレネとして、見張りは3人か。

「部屋には見張りが3人だな。これなら簡単に制圧できる。準備はいいか?」

「あ、ちよつと待っていたきたいのでございます」

そう言つて、オルソラは鎧が持っていた棍棒の一部を手を取った。

「オルソラ?」

「私の武器でござりますよ」

硬い氷で出来ているとはいえ、砕け散った棍棒の一部なんて武器としては心もとないのでは、と当麻は思っているのだろう。

俺も少し疑問に思ったが、すぐにオルソラの狙いが分かった。

「あーなるほどな。オルソラ、実働部隊出身じゃないのに、なかなかすごい事思いつくな」

「ふふつ、あなた様におほめいただき光荣です」

頭に？マークを浮かべたままの当麻だったが、気にせず部屋のドアを開けた。

いつもの手なら素早く入って、即座に無力化するところなんだけど、折角だからオルソラ流に行こう。

部屋の中は監禁部屋というより、医務室のような2段ベッドがあり、その中に縛られた状態で部屋の隅に座らされているルチアとアンジェレネがいた。

それから、3人の魔術師が見張りとしていたが、俺たちが入ると驚いた様子で立ち上がった。

「動くな！」

「っ!?!」

突然、オルソラが今までののほほんとした声色を一変させ、どつかの機動部隊が犯人を制圧するかのような強い口調でしゃべりだした。

そのあまりの変貌ぶりに当麻も俺も一瞬、ぎよつとなった。

俺達がそんな状態なのを知りもせず、オルソラは手に持った棍棒の欠片を地面に転が

した。

「それ、なんだかわかりますよね。どうやって壊したと思います?」

意味ありげに袖の下に手を入れ、自信満々に告げるオルソラ。

この時、初めてオルソラをすごいと思ったかもしれない。

この場面でこの手のハツタリは効果抜群だ。

あの氷の鎧をここまで砕くのは、よほどの武器か魔術でなければ普通に考えれば無理だ。

パツと見、俺達に手持ちの武器はない。

ならば自分たちの知らないトンデモナイ武器、魔術礼装を持っていると勘ぐってしま

うだろう。

現に、魔術師共はオルソラ一人におよび腰になっている。

「あら、思わず日本語で話しかけてしまいましたね、分かりますよね?」

「……ぐっ」

「おっと、動くなよ?」

それでも魔術師の1人が何かをしようとしていたので、俺も武器を取り出した。

「おまえ、こうなりたいのか?」

俺が見せたのは、鎧の頭部の一部。

比較的形よく残っていたので持ってきたのだが、効果は抜群だ。

「ユウキ、お前悪役みたいな顔してるぞ」

「……ほっとけ」

悪役みたい、じゃなく、ほんとは悪役なんだけどな。

オルソラと俺の脅迫に、魔術師たちはあつかりと降参した。

部屋にはロープがなかったので仕方なく奴らのベルトできつく縛り上げ、ロープで目と口もふさいだ。

そして、念のため気絶してもらった。

と、ここでオルソラが深く息を吐き、今までの強気なオーラはどこかへすつ飛んでいき、いつものほんわか空気が戻ってきた。

「さて、お二人とも、助けにきたのでごぎいますよ」

「そんな言葉を私達を信じると思うのですか。そもそも、なぜあなたたちがここにいるのです」

やつぱりというか当然というか、少し前に殺し合いをしたばかりで本来なら遠い海に向こうにいるはずの俺達にルチアもアンジエレネも信用するはずもない。

なので、アニーゼ同様にここまでの事を簡単に話した。

「それでアニエーゼが言うには、ここから脱出する魔術をお前らが持つてゐるって」

「だから俺達はお前らを助ける。どう？ 利害が一致してゐるだろ？」

アンジェレネはアニエーゼの名前が出ると、若干信用したようだがルチアは違い、逆に警戒心を強めてしまった。

「ここは敵の本拠地、アニエーゼさんの名前を利用してまであなた達を助けに来る理由が、他に想像がつかないのでございますけれど」

なので、ここは交渉術に長けたオルソラが2人を説得した。

それに完全に敵対した俺や当麻より、自分達が加害者となって迫害したオルソラに説得してもらった方が説得力がまだあると思つた。

効果は靦面で、ルチアは難しい顔で少しだけ考え込んだが、俺達を一応は信用してくれた。

「分かりました。そちらの言い分も確かに一理はあるようです」

「よかつた。で、脱出つてどうやるんだ？」

「口で説明するよりも、シスター・アンジェレネ」

「あ、はい」

ルチアとアンジェレネは手を合わせると壁へと向けた。

すると、壁に人が通れそうなほどの穴が空いた。

幻想支配で視ていたが、どうやら自分達を縛っている拘束服を逆に利用しての干渉術式らしい。

この術式で船に穴をあけ、コースターを作って脱出する手順のようだと、その時だった。

「う、いたたつ」

「どうしたんだ!？」

「や、やっぱり拘束服にも迎撃術式を組み込まれてしまったみたいですね」

突然2人が頭を押さえてしやがみこんでしまった。

どうやら、2人が魔術を使おうとすると頭についたサークルが締め付けるといいう仕組みのようだ。

「ちっ、想定外ではないが、ちよつとこれはまずい事態だな」

最悪の場合、脱出に使う術式は俺がルチアかアンジェレネの魔力をコピーして、と思ったがその手は使えない。

あの術式は2人の魔力と拘束服が必要だが、俺は1人しかコピーできないので意味がない。

「げ、迎撃術式の一部を破壊すれば、済む話です」

ルチアはテーブルの上にあつたペンを手に取り、自分の服に編み込まれた術式を破壊

しようとした。

魔術に疎い俺が手伝えることなのかと思っていると、当麻が右手を出してきた。

「壊す、なら手つ取り早く俺の……うごっ!？」

右手でルチアに触れようとした当麻を、オルソラと俺が両脇から同時に肘内を食らわせた。

「まあまあ。まさか彼女達までも素っ裸にしたいのでございますか？」

「学習しろ、エロ当麻」

「は、はい……すみません」

どつき漫才をしている俺達をいぶかしげに見ながら、ルチアとアンジェレネは自分達に組み込まれた術式を解いていった。

「ところで、シスター・アニエーゼとはいっ合流できるのでしよう」

アンジェレネがぼつりと呟くように尋ねられ、俺達は顔を見合わせた。

これから言うことがいかに残酷な事なのか、理解はしているつもりだ。

でも、言わなければならない。それも早急に。

「悪い。アニエーゼは、来ない」

「えっ? ど、どういう意味ですか!？」

「俺達とお前達を逃がす隙を作る陽動の為に、旗艦へ行つた」

それを聞いた2人の目の色が変わった。

少しの希望が見え始めていたのに、一気に絶望に落とされた。

そんな風に見えた。

「冗談じゃありません！ 私たちがなぜ脱獄なんて選んだと思っただけですか！ シスター・アニエーゼが危険にさらされているからなんです！」

「なっ!? ど、どういうことだよ、それ！」

「やっぱり、か。どうやら思った通り裏があつたみたいだなこの女王艦隊は。」

ルチアとアンジェレネが話してくれた内容によると、この艦隊の本来の目的は旗艦である「アドリア海の女王」を護衛する事。

そして、アドリア海の女王という、旗艦と同名の大規模魔術を行う為に「刻限のロザリオ」という別の術式を必要としている。

さらに、その刻限のロザリオにアニエーゼが、文字通り使われるという事だった。

大規模魔術がいかなるものかまではルチア達も知らないようだが、発動すればアニエーゼは……

「間違いない脳は破壊されます。心臓のみを動かされるだけの存在として扱われるでしょう」

「な、なんだよ、それ。なんなんだよそれは！」

泣きそうな顔で話すアンジェレネ、ルチアも今にも泣きそうだ。

そして、それを聞いた当麻は激しい怒りを咆哮に乗せた。

俺も、今すぐにでも叫びだしそうな程、怒りに燃えている。

アドリア海の女王が、一体何をする気か知らないが、一人の勤勉な修道女を使つていはずがない。

アニエーゼは言葉も悪いし、ドSと見せかけた隠れDMだが、それでもローマ正教徒としては、オルソラにも負けずに熱心な教徒だ。

そんな彼女の信仰心と、大切な仲間への想いを利用する奴らが、許せない。

「……アニエーゼの一大事なのは、正直予想がついていた。けど、今の俺達にはこれしか道はない」

「なつ、シスター・アニエーゼを見捨てて自分達だけ逃げることでいいですか!」

ルチアが怒りの表情で詰め寄ってきた。アンジェレネも同様に涙目で俺をにらんできている。

「ああ、逃げる。アニエーゼを助けるためにな」

「助けるために逃げる? どういう、意味ですか?」

「今の俺達がこれから旗艦に攻めたとして、何ができる? やられるか捕まってアニエーゼに対しての人質にされるだけだ」

「でも、だからって！」

「だからこそ！ 今は逃げる。逃げて、態勢を立て直して、確実にアニエーゼを助ける為に戻ってくる」

正直、今の俺達はあまりに無力過ぎる。

敵の情報もろくに揃ってなく、規模も不明。

対してこっちは装備も何もない状態だ。

こんな状況では、例え俺一人だったとしても攻め込むのは自殺行為だ。

けど、今逃げれば、すぐにでも体制を立て直せる。

問題は、タイムリミットがいつまでかかって言うことだけだ。

「本当に？ 本当にシスター・アニエーゼを助けられるんですか？」

「ああ、約束する。必ずお前らだけじゃなく、アニエーゼも助ける。俺は、約束を守る」

「俺もだ、アニエーゼには世話になったしな」

「ふふっ、及ばずながら私も何かのお役に立てるのでございますよ」

当麻もオルソラも決してアニエーゼを見捨てる事はしない。

例え、今は逃げる事になろうとも、助けると決めた人を決して諦めない。

「あなた達……本当に、バカなのですね」

さつきまでの険しい表情はどこへやら、ルチアもアンジェレネも、少しだけ笑顔を見

せた。

その時、猛烈に嫌な予感が、死の予感がした。

「伏せろ！」

——ドゴンツ！

「「っ!」」

叫ぶと同時にが砲撃音がして、壁が吹き飛んだ。

「攻撃? でも、どこから?」

壁に空いた穴の向こうに、他の艦隊から砲撃が撃たれているのが見えた。

「ちっ、味方ごと沈める気か!」

「この船の素材は海水です! どんなに破損しても修復や新たな造船もすぐに可能です!」

「エコロジードな、まったく!」

とつさに腕時計を見た。

あれからどれくらい経った?

インデックスと別れて、どれくらい経った?

もうすぐだと思いが、仕方ない。

あいつらに期待するしかない!

「みんな、海へ……」

飛び込め、と言おうとして船室が大爆発を起こした。

どうにか横目で全員を確認し、そして、全員海に沈んだ。

激しい衝撃と降り注ぐ船の破片を全身に受け意識が飛びそうになる中、海の底に潜水艦のような影が見えた気がした。

「頼んだぜ、天草式」

そのまま、俺の意識は沈んでいった。

続く

第137話 「合流」

どれくらい意識を失っていただろうか？

数分？ それとも数秒？

体が水の中から引き揚げられた感覚がして、飛び起きた。

「ぶはあっー！」

いつもの癖で、とっさに警戒態勢をとってしまったが、目の前にいたのは当麻達を引き上げた五和達だった

「……五和、それに建宮齋字か、まさかお前まで来るとはな」

「あつ、はい。五和です。皆さんよくご無事でしたね」

「おう、久しぶりって言うほどでもないけどな」

今いるのは、樹で出来た船の中だ。

中には五和のほかにも、天草式がたくさん乗っている。

オルソラの引越しを手伝っていた連中以外の天草式も来たみたいだ。

インデックスも同乗していて、引き揚げられた当麻に寄り添っている。

「とにかくありがとな。当麻がいるなら、オルソラも無事か？ ルチアとアンジェレネ

は助けられたけど、さすがに3人は抱えられなかったからな」

水没する寸前、咄嗟に両手でルチアとアンジェレネを抱えたが、少し離れていたオルソラにまでは手が回らなかった。

ルチアとアンジェレネはもう目を覚ましていて、寝転がったままだがオルソラや天草式と話をしていた。

あの時一緒に放り出されたローマ正教達も拘束はされたままだが、他の天草式が救助したようだ。

「礼には及ばんのよ。こつちもお前さんが渡してくれた発信機のおかげで救助が楽になったからな」

「はい、これ。お返ししますね」

五和が差し出したのは、女王艦隊に連れ去れる前にインデックスに投げ渡した受信機だ。

これは、俺と当麻の体内にある発信機の位置情報を3D表示したり、正確な距離まで表示できる優れものだ。

別に操作自体は難しくない。それに五和にはこの受信機の使い方は説明してある。

だから、インデックスが彼女にこれを五和に渡せば、天草式が助けに来ると確信していた。

ちなみに、俺と当麻のキャリーケースなどの荷物は天草式が回収してくれたようだ。

「しかし、魔術サイドの俺らが言うのもなんだが。学園都市の技術をホイホイこつちに手渡して良かったのか？」

「これは学園都市で作ったものだが、別に技術自体は大したものじゃないからな」

確かに受信機も発信機も学園都市の技術が使われているが、そこまで進んだ技術じゃないからどうとでもなる。

武器はともかく、こういう道具はそういう風に作られている。

そうでなければ海外に行くのに持ち出し許可が出るわけない。

「で、ここは、船。木製の潜水艦って所か？」

「ま、簡単に言えばそういうものなのよ。最も、そこまで高性能なものじゃないのよさ。われら天草式が得意とするのは、海戦よ」

「なるほど。紙から木を、そしてそれらを集めてって所か。似たような技術はこつち側にもあるけど、魔術もぶつ飛んでるな」

上下艦というらしい船を幻想支配で視てみると、女王艦隊を視た時と同じような感じがする。

その時、アンジェレネ達を看ていた天草式の1人がこちらにかけよってきた。

「教皇代理。やはりだめでした。彼女達の拘束服の効果は、我々には解除出来ません」

「そっか。そいつは困ったな」

「それはあれか。アンジェレネとルチアの拘束効果を解くつてやつか？ インデックスでもダメか？」

それを聞いたインデックスは、難しい顔をして首を横に振った。

「私じゃ時間がかかるからダメだね。早く破壊しないと、女王艦隊から距離が離れたら別の効果が現れると思う。それにゆうきの機械のと一緒で発信機みたいになってるかも」

「そっか。俺の幻想支配でも無理だったしな」

最初に2人の服を視た時に何か方法はないかと俺なりに探したが、やはり魔術をかけた本人を視ないと俺にはどうにもならない。

「仕方ない、のよな。幸い少年はまだ眠ったままだし……」

そう言つて齋字は下品な笑みを浮かべて、まだ気絶している当麻、の右手とアンジェレネ達を交互に見た。

ま、それしかないな。

「はいはい、男どもは全員あつちで向こう向いてるように。覗いたら承知しないわよ？」
対馬という名の女性の指示の元、俺達は船の端つこで壁を向いて立たされた。

反対側では気絶したままの当麻の周りに暗幕が張られ、アンジェレネや五和達がい

る。

「すぐく不機嫌なインデックスとそれを宥めるオルソラも一緒だ。

「手っ取り早くアンジェレネ達の拘束を解く方法。当麻の幻想殺しで破壊するしかない。でもそれをするとな彼女達が素っ裸になる。つてわけだな」

「やけに詳しいのよな。まさしくその通りなのよ」

「あー女王艦隊の中でアニエーゼに同じような事したし。インデックスも昔同じような目に合ったらしいぞ」

「なるほどなるほど。それで彼女はあんなにどす黒いオーラを……つて少年、既に我らと合流する前に大人の階段を登っていたとは。流星は我らが女教皇様が見初められた御仁なのよな」

「……ツツコミはしないからな？」

程なくして、アンジェレネ達は無事に解放され、インデックスとおそろいの安全ピンだからけの修道服に着替えた。

上下艦を用意している天草式も、さすがにローマ正教の修道服は用意していなかった。

そんな中、当麻が目覚めて、軽く状況説明をしていると、イライラが頂点に達し痺れを切らしたインデックスが当麻に噛みついた。

そして、追いかけてまわされた当麻が五和を押し倒し、なぜかアンジェレネがルチアのスカートで捲つたり、と中々に力オスだった。

俺はというと、騒ぎに巻き込まれたくはないから、海の向こうに佇む女王艦隊を眺めていたので何も見ていなかった。

ま、いつもの事だな。

それから俺達は一度態勢を立て直すため、キオツジオの海岸へと戻ってきた。

そして、天草式が手際よく準備をして、バーベキューパーティーが始まった。

「ま、今は奴らも厳戒態勢なのよな。そんな中に無策で飛び込んでも何の解決にもならん。積もる話も、まずはおなかをふくらませてからなのよ」

「お腹が空いては戦はできぬ、ってやつだね。日本っていい諺あるよね、とうまー！」「お前はただ何でもいいたくから食べたいただけだろ……」

天草式が用意した料理の数々は、オルソラ程とまではいなくても、そこら辺のレストランよりはとても美味しかった。

アンジェレネがチョコドリンクを所望したり、それをルチアが咎めたりと、彼女達の日常的一幕も垣間見える事ができた。

そんな中で情報整理と作戦会議が始まった。

まずは俺達と一緒に拾い上げたローマ正教達を、やさしく尋問したのだが、アンジェレネ達同様詳しい事は知らされていなかった。

仕方ないので俺達は、女王艦隊に囚われてからアニーゼに出会い、聞かされた話をした。

ルチアとアンジェレネも改めて、ローマ正教内での自分達の置かれた状況を説明した。

それらを説明し終えて、インデックスに意見を求めた。

「アドリア海の女王、って言うのはね。ヴェネツィアを破壊する為だけの術式なの。破壊と言っても、物理的な破壊だけじゃなく、ヴェネツィアから離れていた人や物品、更にはヴェネツィアに由来する文化も歴史も何もかも全部破壊するんだよ」

「それは、とんでもなくえげつないな。こっちでもそこまで出来るものはないぞ」

島を吹き飛ばす程度ならいくらかありそうだけど。

「でもね。逆に、ヴェネツィアに対してしか使用出来ないんだよ。対ヴェネツィアにのみ特化した大規模魔術なの」

「じゃあ、あいつらなんでそんなものを使って何する気なんだ？」

「問題はそこなのよな」

当麻の疑問を齋字が続けた。

「昔ならいざ知らず、今はローマ正教にとつても重要拠点であるはずのヴェネツィアを徹底的に破壊する利点がるでない。それどころかローマ正教にすら打撃が来るほどのよ」

魔術サイドに詳しくない俺でもわかる。

今のヴェネツィアはイタリアにとつて重要な観光地であり、ローマ正教にとつても貴重な資金源のはずだ。

しかし、そこで俺はトンデモナク嫌な予感がした。

アドリア海の女王の効果は、物理的な破壊にとどまらず、文化や歴史にすら破壊するほどのトンデモナイ代物。

これをもし……学園都市に向けて使われたら？

「ところで、一つ聞きたい事があるんだけど？　話に出てきた【刻限のロザリオ】って何？」

それを聞いて、俺達は顔を見合わせた。

インデックスは、単語自体を初めて聞いたような口調だった。

10万3000冊の魔導書を頭に収めていて、知らない魔術はないというほどのインデックスが、聞いた事もない……だと？

「えっと、刻限のロザリオというのは、アドリア海の女王を発動させるために必要な術

式、なのですが……」

俺達のおかしな様子に、不安な表情を浮かべたルチアが改めてインデックスに説明したのだが。

「それって変かも。私の10万3000冊の中に、そんな記述はないんだよ」

「なんだって!?!」

それを聞いて、改めて俺達は、魔術に疎い当麻ですら驚愕の表情を浮かべた。

インデックスの中に、アドリア海の女王はあるのに、刻限のロザリオはない。

「一体どういう事なのでしょう。私達が聞かされていたのは間違いだったのでしょうか」

「そうとは思えないのですが、では、シスター・アニエーゼは一体何のために」

アンジェレネとルチアも困惑の表情を浮かべ、斎字やインデックスも深く考え込んだ。

だが、答えは出てこない。

「なあ、1つ聞きたいんだが、アドリア海の女王のさ、矛先を変える手段はないのか?」

「矛先を変える? それは……あくまでヴェネツィアに対しての術式だから……まさか!?!」

「まさか……その為の【刻限のロザリオ】!?!」

インデックスと齋字は俺と考えが浮かんだようだ。

魔術サイドのエキスパート2人が俺と同じ結論に達したということは、この仮説間違いはないようだな。

「一体、何がどういう事なんだよ。刻限のロザリオがどうかしたのか？」

ルチア達もハツとした顔をして、1人分かっていないようなのは当麻だけだ。

「つまり、刻限のロザリオを使えば、アドリア海の女王を学園都市に向けて使えるって事だ。それがどういう結末を招くかは、わかるよな？」

「アドリア海の女王は、物理的な破壊も勿論、文化や歴史……っておい、それって！」

「そう。あいつらは学園都市にアドリア海の女王を使う事で、科学サイドを一気に破壊するつもりだ」

驕るわけじゃないが、今世界の科学の中心は間違いなく学園都市だ。

その学園都市が由来の文化も歴史も何もかもを破壊されれば、世界中の科学が破壊されてしまう。

「ば、バカげてるだろそんなの！」

「使徒十字の件を忘れたか、アレは精神的、思想的な破壊。こっちは物理的な破壊。どっちも科学の破壊だ」

「そんな……」

重い沈黙が流れた。

そんな中、アンジェレネは泣きそうな顔で、ポツリと呟くように話し始めた。

「……シスター・アニエーゼはきつと何も知らないと思います。知つていれば、絶対に黙っているはずがありません！　いくらなんでも、何の罪もない一般人を大量に殺すなんて、そんな……」

「私も同意見です。それに、科学側相手とはいえ、そんなイカれた無差別大量破壊の為に、彼女を見殺しになんかできません！」

ルチアによれば、今回指揮しているのは、ピアージオ・ブゾーニ。

話を聞くと、中々にぶっ飛んだ、タカ派と言つたくそつたれ野郎つて所か。

「要はその魔術が発動する前に、アニエーゼ・サンクティスを助け出せばいいわけだが。これがとんでもなく難問なのよな」

斎字が冷たく突き放すように言い、アンジェレネとルチアが言い返している中、俺は頭の中で戦術をくみ上げていった。

使える道具は皆無。増援も武器もなし。乗り込むだけで死が隣り合わせ。

でも、やらなければ学園都市どころか世界の半分は破壊される。

加えて時間もなし。

さて、何をどう使うかな。

「なあ、建宮。もう良いんじゃないか？」

「ん？」

当麻がいきなり、齋字とアンジエレネ達の口論を遮った。

「俺達が議論すべきなのは、アニメーゼを助けたか助けたくないか。学園都市や科学がつていうのも大事だけど、それよりもっと根本的なのは、アニメーゼの命が失われるか失われないか、それだけじゃないか？」

当麻の言葉に目を丸くする。

こいつは、世界が滅びるって話を聞いても、アニメーゼを助けるかどうか、それを考えていた。

それは、御坂妹を助ける為に一方通行に戦いを挑んだあの時と、オルソラを助ける為に大勢のアニメーゼ隊を相手にした時と、全く同じだった。

「ぶっ、ははっ、あはははははっ!!」

思わず心の底から笑いが込み上げてきた。

「ゆ、ゆうきゅ? どうしたの、かな?」

いきなり笑い出した俺をインデックスが驚いた顔をして、オルソラも口に手を当てて呆然としていた。

ま、当然の反応だよな。

「おい、建宮齋字、それに天草式十字凄教、ついでにアンジエレネとルチアもよく聞け。これが上条当麻だ。どんな不利で絶望的な状況だろうと、助ける相手がいるなら、助きたい人がいるなら、なりふり構わず無茶をする学園都市最強の大馬鹿野郎だ、覚えておけ！」

インデックスは、仕方ないね。とに呆れた表情を浮かべ、オルソラも、全くです。と笑顔で同意した。

最初はポカーンとした齋字も、急に声をあげて大笑いした。

「ぶっ、あはははははっ！ 確かに、これは学戦都市最強、恐れ入ったなのよな！ まったくこれじゃ俺が悪者みたいなのよな！ こちとら最初からアニーゼⅡサンクティスを助ける算段も覚悟も既にあるのよ。お前達にそれを問うつもりだったんだが、その必要は皆無だったわけだ！」

どうやら、齋字は最初から俺達に、死をも辞さない覚悟を求めていたみたいだ。

でも、それも当麻に先を越されてしまったというわけだ。

「いいか我らが戦場に向かうからには、必ず生きて帰る。我らが女教皇様から得た教えは！」

「「救われぬ者に救いの手を！」」

これで、覚悟が決まった。

後は乗り込んで敵をぶっ潰して、アニエーゼを救うだけだ。
待ってろ、アニエーゼ。

お前が望まなくても、必ず俺達が救い出す！
そのついでに、世界も救ってやるさ！

続く

第138話 「海戦」

アニエーゼとついでに学園都市を助ける為、脱出したばかりの女王艦隊へと再び乗り込むことになった。

今回の突入に関しては、作戦は天草式に一任した。

俺は海戦の経験なんかないからな。

その点天草式は、海戦が大得意というだけあつて紙から木船を造る魔術や、木船で出来た艦隊の運用などテキパキと戦術を立てていた。

どうやら俺達の救出に使った上下艦と、火薬を積んだ火船を囿にして乗り込む作戦。単純だけど、これならいけると思う。

さて、俺の準備もしないとな。

「斎字、悪いんだけど武器余つてたら貸してくれないか？」

「武器？ おお、余ってるから構わないが、使えるのか少年？」

「これでも小枝からロケットランチャーまで何でも使えるぞ」

「そ、そいつはまた極端だな。で、何が欲しいんだ？」

「木刀、なければ日本刀でもいいけど。後は堅い棒だな、刃付いてなくていいぜ」

「それくらいならいくらでもあるのよな」

というわけで、天草式から2本の木刀と1本の棒を借りた。

借りたといつても恐らく、いや、絶対に無傷で返せるはずもなく、実質的に貰ったことになるな。

斎字も返つてくるとは思ってないみたいだし、思う存分使つてあげましょうか。

——ズキツ!!

「ぐっ!?!」

と、ここで突然、一瞬だが強い痛みが頭に走った。

なんだ、この痛みは。今まで何度か幻想支配の使い過ぎとかで頭痛が起きた事はあつたけど、こんな痛み方は初めてだ。

頭を押さえ、しゃがみこんだ時、目に映る景色がぼやけて見えた。

まるで微妙に違う2枚の重なった絵を網膜に直接投影されたかのような、そんな既視感にも似た何かだ。

でも、それはすぐに収まった。何なのかはわからなかったが、今は気にしないことにした。

どうせ気にしたところで、学園都市からかなり離れたここじゃ意味がない。

それよりもこれからの戦いに向けて確認する事があつた。

「ルチア、アンジエレネ、そっちの準備は終わったか？」

「はい。アンジエレネ、あなたもいいですね？」

「は、はい。終わりました！」

ルチアは、術式に使う木の車輪を天草式が紙から生み出した木で作り、アンジエレネも革袋に硬貨を入れて武器を用意した。

ちよつと幻想支配で視てみたが彼女たちの魔術は、法の書の時より精度が上がっているようだ。

でも、アンジエレネの方はまだ術式の詰めが甘そうに見えるな。

魔術に関してはあまり分かってないから口出しできないけど。

「当麻達もいいのか？」

「ああ、と言つても、俺は何もないんだけどなあ」

当麻は相変わらず幻想殺し一本で女王艦隊に乗り込むつもりだ。

ま、下手に武器持たせるよりは慣れてる素手の方がいいか。

オルソラは、インデックスから天使が彫られた銀で出来た杖を武器にするようだ。

アレは、確か法の書の時にアニエーゼが持っていた杖だな。

あの時回収していたのか。

確か、アニエーゼの魔術はちよつと面白い効果だったな。

「2人とも、今のうちに言っておく事がある。恐らく、相手はアニーゼ隊になると思う」

「……………」

ルチアもアンジェレネもそれはわかつてはいたのだろう。

けど、アンジェレネはまだどこか迷いに近い戸惑いが見える。

「一応手加減はするけど。向こうの出方次第ではどうなるかわかなんないって事だ」

「ええ、分かっています。私達の最優先はシスターアニーゼの命です」

「よしっ、こっちの準備は終わった。お前らも準備終わったようなのよな」

「ああ、行こうぜ女王艦隊へ」

今回天草式の取った作戦は、まず紙から作った大量の小型木船で艦隊を作る。

しかし、この木船は数こそ多いがどれも大砲や武器は一切積んではいない。

武器が付いていないのなら、これ自体を武器にすればいい。

女王艦隊V S 木船艦隊。

俺達の前方には、先ほどまでと同じように女王艦隊が佇んでいる。

まずは、**囀**、その1の出番だ。

「よしっ、ドンドンいけえー！」

斎字の号令と共に、木船艦隊のすべてが一斉に女王艦隊へ向けて進撃を開始した。

元から武器のないこの木船にできる事、それは特攻のみだ。

——ドカンッ！ドカンッ！

女王艦隊から、氷で出来た砲弾が次々とこちらの船を落としていく。

でも、数だけは多くそろえたこの艦隊、そう簡単には全滅できない。

やがて1隻、2隻と次々と女王艦隊へとぶつかり、大爆発を引き起こした。

実は俺達に乗っている船以外には火薬が積まれている。

「昔、イギリス海軍がスペインの無敵艦隊を破った時の戦法を真似させてもらったのさ」

「確か本物の軍艦に火薬を載せて突撃させたんだったよな」

「それはまた、大雑把な計画だな」

当麻が呆れたように言うが、計画はまだ終わっていない。

「さて、そろそろいい頃合だ」

斎字の合図と共に、上下艦が奇襲をかけるように女王艦隊へ向けて急浮上していった。

が、同じ手が通用するほど敵もバカではない。

対海中用の魔術砲弾を使用した。

上下艦の機動力ではかわすことは難しく、次々と着弾し爆発。

アツという間に沈められてしまった。

が、これも囿。

本命の俺達が乗った木船は、特攻と見せかけた激突で既に女王艦隊の一隻に既に取り付いていた。

「各艦の制圧は考えるな！ 相手の核だけ潰す事を考えればいいのよな！」

「一か所でもたついていると、奴ら船ごと俺達を攻撃してくるぞ！ 次々乗り移れ！」

俺達が飛び乗った船にはあまり人が乗っていないようで、甲板に人の気配はない。すぐに天草式が紙から作った橋を渡り、次の船へと渡っていく。

次の艦ではさつきと違い、大勢のお出迎えに囿まれた。

その中の面々には、法の書の時に見覚えのある顔がちらほら見えた。

「アニエーゼ隊……お前ら、アニエーゼがどうなるか分かってるんだろ！ だったら！

ユウキ？」

立ち塞がるアニエーゼ隊の面子を睨む当麻を制し、前へ出る。

「俺達はお前らと押し問答してる時間はないんだ。だから、3つだけ言っておく。1つ、俺達はアニエーゼを助けに来た。2つ、協力しろとは言わない。が、邪魔するなら力づくで押しとおる！ 3つ、その場合、殺しはしないが、骨の2、3本は覚悟してきやがれ！」

「……………」

少し、ほんの少しだけ動揺が見えたが、それでもすぐに彼女達は武器を構えて俺に向けて突進してきた。

「仕方ない、よな！」

腰に差した2本の木刀を抜き、アニエーゼ隊を数人まとめて弾き飛ばした。

「殺さない程度にしか、手加減はしないからな」

本気の殺気を込めて睨む、それでも彼女達は引こうとはしない

「この馬鹿者共が！ それだけの度胸があるなら、なぜシスター・アニエーゼを救う為に動けないのですか！」

ルチアは木の車輪を放りなげ、アニエーゼ隊の上で爆発させる。

爆発した木片はアニエーゼ隊へと降り注ぎ、倒れていく。

その隙に、当麻とインデックス、オルソラが次の船へ向けて進む。

が、まずい事が起きた。

「ちっ、急げ！ もう砲をこっちに向け始めたぞ！ お前らも邪魔したかったら次の船まで追ってこい！」

懐から天草式にもらった紙の束を取り出し次の船へと橋をかける。

すでに天草式の1人を幻想支配で視ているので、彼らの術式が使える。

——ドンッ！

当麻達が次の船に移ったと同時に、砲撃が始まった。

残ったのはルチアとアンジェレネだ。

「ここには味方しか残ってないってのに！」

「そんなのあいづらには知ったことじゃないんだろ！　ったく！　悪い、先に行け！」

このままじゃ残ったアニーゼ隊が危ない。

ルチアとアンジェレネもそれを気にして、船に残ったようだ。

俺も急いで元の場所に戻った。

護衛対象は当麻とインデックスだけど、そんな事言つてられない。

砲撃の第二波がすぐに発射された。

「きたれ！　12使徒のひとつ！」

アンジェレネが魔術を発動させ、投げつけた4つの金貨袋にそれぞれ4色の羽が生え

てマストに当たり砕いた。

そして、折れた船のマストが盾代わりとなり、敵の砲弾の直撃を防いだ。

ナイス判断。でも、それだけじゃまだ足りない。

盾となったマストが割れて、大きな破片が船の上に落ちてきている。

「ルチア！」

「分かっています！　このっ！」

ルチアが巨大な車輪を破片に当ててさらに小さく砕いた。

それでも、まだ当たりそこなった大きな破片が残っている。

そのうちの1つがアニエーゼ隊の1人に向かって落ちてきていた。

「きたれ！ 12使徒の、ああ!？」

アンジエレネがそれに気づき、金貨袋の魔術で破片を防ごうとしたがさつき使った衝撃で袋が破けてしまっていたようで、中の硬貨がバラバラと零れ落ちてしまった。

これでは魔術は発動しない。それでも、アンジエレネは躊躇する事なく、大きな破片に当たりそうになっているシスターを突き飛ばし救った。

けれども、今度はアンジエレネが危ない

「間に合ええ〜!!」

俺も、全力で走り、間一髪頭に破片が当たりそうになっているアンジエレネを抱き抱えて甲板を転げまわった。

勢いがつき過ぎて危うく落ちそうになったが、何とか踏ん張って持ちこたえた。

危なかった。天草式の術式で身体強化してなかったらあの距離とタイミングじゃ、流石に間に合わなかったかもしれないな。

「ふう……無事か、アンジエレネ」

「は、はい。ありが……」

「礼は後だ！ てめえら！」

アニーエゼ隊のシスター達は、最初自分達を救おうとしたアンジェレネに少し動きが止まったが、すぐに動き出した。

倒れこんだ俺達へと追撃を放とうとしていたシスター達を蹴り飛ばす。

この期に及んでもまだアンジェレネに攻撃を加えようとする彼女達に、怒りがこみあげてきたので今のは結構本気の蹴りだ。

蹴られたシスター達は船から落ちたが、骨が折れた感触はなかったし、たぶん生きてるだろう。

なおも詰め寄ろうとしたシスター達の前に、追いついてきた斎字達天草式が立ち塞がった。

どうやら最初に乗り込んだ船にも船倉にいくらか敵が残っていて、その相手をしていたみたいだ。

「つたく。心の底からつつまんねえモンをこの俺に見せてんじゃねえのよ!! だが……」

斎字はチラリと俺達を見て、無事を確認すると安心したかのようにフツと笑みを浮かべた。

「シスター・アンジェレネ！ 大丈夫ですか!？」

「シスター・ルチア、大丈夫ですよ。みんなが無事に帰るまで、私も、シスター・アニエーゼも、そのみんなも、誰も死ぬわけじゃないじゃないですか」

そこへ、ルチアとアンジェレネを狙って、隣接する船から3つの砲弾が放たれた。「あっ！」

斎字達が反応する前に、俺達が先に動いた。

——ギャンツ！ ギンツ！

——パキンツ！

対照的な2種類の音は、それぞれ氷の砲弾から発せられた音だ。

俺が木刀で真つ二つに斬った2つの砲弾。

それに、当麻が幻想殺しで砕いた砲弾から発せられた音だ。

しかし、いくら魔術で作られたものだからって、躊躇いもなく飛んできた砲弾を手掴みしようとするかな。

流石、当麻だ。

「その願いは、アニエーゼも心の中で願っていたものだ。あいつは自分を犠牲にしてでも、ルチア、アンジェレネ、そして、お前らも救おうとしていたんだ！」

敵対姿勢のままのシスター達へと木刀を向け、しっかりと彼女達を視た。

「その願いをかなえる為なら、俺は何度だって立ち上がるし、どんな所にだって行ってや

る！」

砲弾を砕いたその右手を強く握りしめ、改めてシスター達へと突き出す。

「だから使命感とか任務とか、そんな下らないものに縛られて、大事に慕って信じてるリーダーを助ける事もせず」

「敵対しても、それでも自分を救おうと体を張った仲間の、その願いを踏みにじるっていうなら、それが使命だと思っっているなら」

「まずは、その幻想を　ぶち殺す／支配する　！」

続く

第139話 「救出」

天草式が作った木の橋で女王艦隊の旗艦を指す俺と当麻達の前に、剣や槍を持ったシスターが押し寄せてきた。

「俺がやる。下がってろ」

当麻達を一旦止め、俺だけで彼女達に立ち向かう。

「やああー！」

突撃してきたシスターのメイスの柄に、左逆手に持った木刀を滑らせ、膝蹴りを叩き込み昏倒させる。

ほぼ同時に剣が振り落とされたが、身をそむけてかわし、がら空きになった胴を木刀で斬る。

時間差で斧を持ったシスターが襲ってきたので、身を屈め背中に装備した棒で斧を受け流し、カウンターで蹴りを入れる。

すると、残りのシスター達が俺を取り囲み、一齐に武器を突き出してきた。

「「やあー！」」

突き出された武器を、2本の木刀と背の棒で捌き、すり抜け様にシスター達を切り飛

ばした。

シスター達は海へと落ちたが、骨にヒビも入らない程度には加減したし、大丈夫だろう。

「す、すげえ。お前、剣術もできたのかよ」

「いや、剣術なんて上品なもの、俺は出来ない」

「えっ？ そう、なのか？」

当麻は驚きの声をあげるけど、俺は剣術なんてできない。

俺にできるのは、どうすれば相手を殺せるか、どうすれば相手を殺さず倒せるか、それだけだ。

「ほら、ぼさつとしてないでさっさと行くぞ」

「お、おう」

背後を天草式に任せ、俺達は女王艦隊の旗艦、アドリア海の女王へやつとたどり着いた。

護衛艦と違い、甲板に人影はない。

それどころかこの艦自体に人の気配をあまり感じない。

「やつぱり、この艦が女王艦隊全体を統括制御しているんだよ。この旗艦だけは簡単に再構築できないんじゃないかな」

「護衛艦で周りを固めているのはそういう事なんだろうし」

艦内へ入る扉はすぐに見つかった。

扉には魔術的な鍵がかかっている、当麻が幻想殺しで扉を殴った。

すると、扉と周りの壁が綺麗に消えて、四方をスパッと切り取ったようなあとが残った。

「ここも予想通りブロック構造だったって事か」

「なら、あの戦法が使えるな、当麻？」

「ああ、そうだな」

ここへ乗り込む前、インデックスやルチア達から女王艦隊についてわかった事や推測できる事を教えてもらっていた。

恐らく旗艦は、ブロック構造になっていて、当麻の幻想殺しでも一気にすべては消せないだろうとの事だった。

それを聞いてある戦法が浮かび上がり、当麻に伝えた。

と、その時、甲板のあちこちの氷が盛り上がり、見る見るうちに護衛艦で見た西洋鎧へと姿を変えていき、あつという間に甲板は氷の鎧で埋め尽くされた。

「甲板が無人なのって、これがあるから、なんだな」

当麻が右手を構えるが。

「中へ！」

「全部相手にしてたらキリがないんだよ！」

オルソラが叫び、インデックスが当麻の手を取り中へと引つ張った。

インデックスの言う通り、こんなところで時間をかけるわけにはいかない。

「オルソラ、これで道案内頼む」

「これは、あの時の？」

オルソラに手渡したのは、俺や当麻達に付いている発信機の位置を3Dでマップ上に表示させる追跡デバイスだ。

今画面上には、アドリア海の女王をスキヤンしたマップが表示されてい俺、当麻、インデックスの場所を示す3つの青い点がある。

それから船の最深部に赤い点が1つ点いている。

「今この船全体を大まかにスキヤンした。これが俺達の現在地だ」

「この3つの青いのが俺達か。じゃあこの赤い点は？」

「アニエーゼにこつそり仕掛けた発信機だ」

「ええ!! お前いつの間につけたんだよ」

当麻が呆れたように言うけど、本人に気付かれずこつそり発信機を付けるのは初歩なんだよな。

具体的にいつ付けたかと言えば、隠れていた部屋に入ってきたアニエーゼを取り押さえた時に付けた。

あの時は念のために付けたんだが、まさかここまで面倒になるとは思わなかった。

「お前、案外抜け目ないんだな」

「案外ってなんだ案外って」

こんなの当たり前の事……って、暗部を知らない当麻には分らないか。

それにしても、今更言われた感あるな。

「話を戻すぞ。アニエーゼがいるのが最深部のここ。恐らくここがこの術式の核になっている場所、だろインデックス？」

「うん。ここには壁や床全体に魔術的な意味が込められているから、それを辿っていくといいんだけど。たぶん、ルートのにもここで間違いないんだよ」

「というわけで、オルソラはこれ使つて道案内してくれ、多分ここには敵兵はいないけど、あの船にいた氷の鎧……なら！」

「「っ？」」

背後に振り向きざまに背中に差し込んだ棒を抜き突き出す。

すると、そこにはいつの間にか接近していた氷の鎧が巨大な斧を振り下ろす所だった。

——ドゴツ

鈍い音がして鎧の頭部に棒が突き刺さり、鎧は動きを止めた。

こういう時の為に天草式から硬い棒を貰った。

「当麻！」

「おう！」

そこへすかさず当麻が幻想殺しで鎧にとどめをさそう、としてこけた。

そして、こけた拍子に俺の足元付近に右手が触れてしまった。

「えっ？……」 「あっ……」

足元の床が綺麗に四角く切り取られ、俺はそのままその穴に吸い込まれるように落ちていく。

咄嗟に手を伸ばしたが一足遅く、その手は宙を切った。

「バ、バカー——!!」

「わわっ、わ、悪い、ユウキ！」

下の階層まで高さ的に距離があつたが、何とか受け身を取って下の階の床に降り立った。

「大丈夫か、ユウ……くそっ！」

穴の向こうから当麻の焦った声が出たと思つたら、氷の鎧が次々と穴の周りを横切る

のが見えた。

恐らく鎧が殺到してきて逃げたのだろう。

「仕方ない。こっちはこっちで動くか」

一先ず周りを見渡し、どうやらここは船倉だという事が分かった。

さつき見た船の見取り図を頭に思い浮かべ、ここからアニーゼまでの道を確認。

インデックスほどじゃないが、さつき見た図面を瞬時に記憶するくらいはできる。

それから当麻の携帯に、合流地点はアニーゼの所、とだけメールをして船倉を出た。

すると、既に居場所がばれていたのか、鎧達がワラワラと通路に群がっていた。

「あつちは大丈夫だろうな」

突進してきた鎧の間をすり抜け、脚部の関節を砕く。

本来なら、こいつらは俺と当麻で相手をして、オルソラが道順の確認、インデックス

には魔術的な罠を見つけてもらう、そういう手筈だったのだが、うまくいかないものだ。

「ただ砕くだけでもそれなりに有効か」

砕かれた鎧が倒れたまま、両手を動かしている。

幻想殺し以外で碎けばすぐに再生するかと思っただ、そういうわけでもないらしい。

だけど、いちいち再生速度を確認している暇はない。

「人間相手以外なら加減する必要もなくて楽だ、な！」

腰の木刀は使わない。もともとこれはアニーゼ隊のシスター達を殺さずに戦闘不能にする為に用意したもの。

ただでさえ、さつきアンジェレネを助ける時に氷の砲弾を真つ二つにした事でヒビが入っている。

これでは、氷の鎧相手では長くは持たないだろう。

両手に棒を構え、襲い来る鎧の腕を叩き壊す。

砕いた腕が持っていた剣を奪い、反対側から来た鎧の頭部に突き刺す。

剣はそのまま折れてしまったので、手を放し廻し蹴りで顔面を狙い、後方から迫る鎧の集団へ蹴り飛ばす。

ストレス解消にちょうどいいな、これ。

「本当は素手で砕きたいけど、流石に厳しいか」

いつも戦闘で使う殴打用のグローブをはめているならともかく、ただの素手で砕けると思うほどうぬぼれてはいない。

ま、ただの人相手なら簡単に撲殺できるけど。

「でも、こういう手でなら」

滑るように迫ってくる鎧集団の先頭の一体を、棒で足を払い転倒させ頭を潰す。

更にその後ろから来た鎧の頭を掴み、床に叩きつけ、同じく頭を棒でつぶした。

ここは、この船に入ってきた時の通路よりも細いので、数体鎧の残骸を転がせばそれだけで通路を塞ぐことができる。

それでも、こいつらならすぐに強引に突破してくるだろう。

今のうちに、アニエーゼが囚われている場所へと向かう。

——ドオン

鎧を破壊しながらしばらく進むと、少し離れた場所から爆発音のような音がした。

「ちっ……」

少しだけ足を止めたが、すぐに思い直し最深部を目指した。

気にはなつたが、ここからは離れた場所で下手に向かうとアニエーゼの所まで行くのに時間を取られそうだったからだ。

あの音が当麻が出したのなら、悪運強いからきつと辿り着くはずだ。

そうして、アニエーゼのいる場所が近くなってきたと思つたら、前方に扉が開いた部屋が見えてきて中から声が聞こえてきた。

うかつに入らず、耳を澄ませるとこの中にアニエーゼがいて、オルソラともう一人の誰かが会話をしているようだ。

当麻とインデックスの気配がない。どうやらはぐれたか、囨になったようだ。

でも、今はそれよりも中から聞こえる会話に集中する。

中にいる男がルチアの言っていた今回の黒幕、ビアージオという名の大司教らしい。ビアージオの狙いはやはり、アドリア海の女王を使い、学園都市を破壊して科学サイドを完膚なきまでに潰す事のようにだ。

アドリア海の女王の歴史とか、色々話しているが俺には関係のない事だ。

要は、これが学園都市と科学サイドを破壊するもので、ビアージオをぶつ潰せば良いという事が確定した。

アニエーゼを救出できれば、ビアージオの目論見もご破算になるのも確認できた。なら、もういいか。

「ローマ正教の悲願なのだよ。だからここで暴れてもらっても困るんだ」

「いや、今更そんな事言われても暴れまくってるわけだし?」

「っ!? 誰だ貴様!?!」

突然の侵入者に驚くビアージオらしき男。

なんか、思ってたよりもずっと酷い顔。

いかにも悪人って顔だな。数多といい勝負だ。

「どもー通りすがりの旅行者です」

「ユウキさん。ご無事だったのでございますね」

ほっとした顔をするオルソラと、対照的に驚いた顔をするアニエーゼ。
「なんで、そんなに驚くかな？」

「まあな。そつちこそ大丈夫だったか？ 当麻とインデックスは、はぐれたか？」

「あ、はい。お2人も囿になると……それに、あの方は」

そういつてオルソラはちらりとビアージオの右手に目を向けた。

ビアージオの右手には血らしきものが見える。

どうみてもビアージオの血には見えない。

という事は……

「当麻なら大丈夫だろう。あいつ見た目より頑丈だし。それより、アニエーゼを早く助けないとな。これ、どうなってるんだ？」

アニエーゼは、氷で出来た巨大な球体に寄り添うような形になっていて、よく見ると少し球体に取り込まれているようだ。

球体を視たところ、膨大な魔力を感じる。

恐らく、これが術式の要なのだろう。

幻想殺しなら簡単に壊せるのだろうけど、これは能力停止では解除できない。

かといって手持ちの武器でも破壊できそうにない。

だったら……

「な、なんであなたまでここに来ちまつてるんですか!？」

驚きのあまり固まっていたアニエーゼだったが、ようやく口を開いた。

「なんでって、お前を助けにだぞ？ オルソラやあいつが来てるんだから俺だつて来る
だろ?」

「そ、それはそうなのですが……」

「ええい！ 何をごちゃごちゃと、私を無視して喋っているのか、この異教の猿が!」

「お前まだいたのか。邪魔だからとつとと単に帰れよ、しわくちやチンパンジー」

「な、なにをっ!？」

チンパンジー、もといビアーゾは顔を真っ赤にしながら胸元の十字架に手を伸ばした。

あれがあいつの礼装か。それじゃあいつが使う魔術は、つと。

「日本人なら誰でも彼でも猿猿つて言ってる単細胞と言った方が良かったか？ 人を猿
言う前に鏡見ろよ、どう見たつてお前の方が老いてキーキーわめくしか出来ない皺だら
けのチンパンジーじゃないか。あ、チンパンジーは元から皺多いか」

「ふっ……」

今吹き出したのはアニエーゼだ。

この状況でのんきな事だ。

って、俺がそうさせたんだけどな。

「こ、この、主の威光をもつて万民を導こうとせん、ビアージオーブゾーニを下等な猿どもと同列にするか、この異教徒めがあ！」

「異教徒って、別に俺はどつかの宗教に入ってるわけじゃねえっての、オルソラ借りるぜ！ 万物照応。五大の元素の元の第五。平和と秩序の象徴『司教杖』を展開」

オルソラからアニーゼの杖を取り、幻想支配の対象先を切り替えてアニーゼを視た。

俺がアニーゼの魔力を使った事は、ビアージオも感じたらしく目を見開いていた。

「その力は、シスター・アニーゼの……なんなのだ貴様はあ！」

「学園都市からの刺客、って奴かな？ 最もお前らが変に手を出してこなきやただの観光客で終わってたんだけどな」

「学園都市の……お、おのれえ！ 十字架は悪性の拒絶を示す！」

ビアージオが胸元から投げつけてきた十字架があつという間に巨大化に襲い掛かってきた。

が、俺の方はすでに迎撃の詠唱は終わっている。

迎撃と言っても、ビアージオに対して、ではないが。

「異なる物と異なる者を接続せよ！」

「なにっ!？」

杖に当たる直前、十字架の衝撃はそのままアニーゼを縛り付けていた氷の球体を直撃した。

氷の球体は砕け散り、自由の身となったアニーゼが崩れ落ちそうになったので、小脇に抱えオルソラの所まで下がった。

「えっ、これは一体?」

救出されたアニーゼは今何が起こったのかさっぱり分からないといったようで、啞然とした顔で俺を見ていた。

「そういうえば、俺はお前の魔術当麻達から教えてもらってたけど、お前は俺の能力知らなかったよな」

ルチアやアンジェレネには使ったけど、アニーゼの前では幻想支配、使ってなかったな。

俺がやった事は簡単。

アニーゼの魔力を使い、蓮の杖を起動させてピアージオの魔術を利用して球体を破壊しただけだ。

俺自身の力では棒を使っても球体は破壊できそうにない。

そこでさつき、ピアージオを揶揄う間、こっそりと視てアイツが使う魔術を一通り覚

えた。

と言つても、アイツの魔力はなぜか普通の魔術師達とは何か違う感じがして、コピーするのは時間がかかりそうだった。

だから、直接使わず、アニエーゼの魔術を使ったのだ。

ビアージオも俺の挑発で頭に血が上つてなければ、俺から自分の魔力を感じただろうにな。

感づかれないように挑発したわけだけど。

「そうではなく、なぜ敵だったあなた達がここまでして私を助けるんですか！ あの時は利害が一致したからですけど、でも、今回は……私を助ける利なんてあなた達には！」
オルソラの傍まで戻り、地面に立ったアニエーゼが睨むような、それでいて苦しそうな表情で俺とオルソラを見上げて叫んだ。

対してオルソラは、苦笑いを少しだけ浮かべたが、すぐに慈愛に満ちた表情へと変わった。

「先ほども申し上げましたが、あなたの帰りを待っている人たちがいます。それだけで理由になりませんか？」

アニエーゼはオルソラの言葉にハツとした顔をした。

俺が来る前に、アニエーゼとオルソラで何か会話が あつたようだな。

「おのれ、私を無視するな！ 十字架はその重きをもつて「うるさい」ブホオツ！」
ビアージオが何かしようとしたが、それより速く俺が投げた棒が当たった。

「アニエーゼ、俺はオルソラや当麻みたいに説教とかグダグダ話すのは性に合わないから簡単に言うぞ……利？ そんなの知るか」

「えっ？」

さつきまでとは打って変わって、キョトンとした顔をするアニエーゼ。

「オルソラが言うようにお前を待つてる人がいて、その人達とお前、全員を助けたいって動く馬鹿がいる。俺はその馬鹿の護衛についてきただけだ」

と言いつつ、今回肝心の護衛が真つ先に護衛対象からはぐれちゃったんだが、考えないようにしよう。

「ま、ここまで来た以上、見過ごすのは胸糞悪いからな。要するに、俺は俺の為、自分勝手にお前を助けるって事だ」

「……ぶっ、なんですかそれ。要するにあなたもその馬鹿の1人つてだけじゃないですか」

「あー、そうかもな。馬鹿が移ったようだ。で、馬鹿が沢山お前を待っているんだが、どうする？」

「全く、馬鹿ばかりですか。ですが、シスター・ルチアは馬鹿真面目だったり、うちのシ

スター達も真面目そうに見えて案外馬鹿な所ありますし」

俺はアニメーゼに杖を差し出すと、彼女はさっきまでの弱弱しく苦悶に満ちた表情とは正反対の、初めて会った時や敵として対峙した時のような不敵な笑みを浮かべて受け取った。

「まあ、クソみたいな命令で無理やりうちのシスター達を戦わさせられてるアイツよりは、馬鹿の方がまだ1000倍マシなんでしょうね！」

「じゃ、やるぜ、アニメーゼ！」

俺は、さつき棒が当たった事で地面に散らばったビアージオの小さな十字架を片手に持ち、腰の木刀を抜いた。

ビアージオもヨロヨロとしながらも、なんとか立ち上がった。

さっきの攻撃で気絶してくれば良かったんだが、当たりがちよつと浅かった。

「なめた……口を、利いてるんじえねえぞ、この罪人共があああく!! 十字架は……十字架はその重きをもって驕りを正す!!」 なにいろ!!

ビアージオが発動するより早く俺が拾った十字架を使い、魔術を発動させた。

咄嗟にビアージオはその場を退き、どうにか十字架の攻撃から逃れたが、まだまだこれからだ。

「アニメーゼ！」

「偶像の一。神の子と十字架の法則に従い、異なる物と異なる者を接続せよ」

俺が木刀をアニーゼの杖めがけて思い切り振りぬき、同時にアニーゼが魔術を発動させる。

「ぐほおつ、な、なんだと……」

すると、杖に掛かるはずだった木刀の衝撃が、十字架を取り出し反撃しようとしていたピアージオの腹部に襲い掛かった。

「ぎ、きさま……なぜ、なぜシスター・アニーゼだけでなく、私の……力、まで」
「教えるかよ、チンパンジー」

ピアージオのダメージは相当なはず。後はアイツから十字架をすべて回収して、当麻を探して幻想殺しでこの部屋を破壊すれば終わりだ。

そう思っていた矢先の事だった。

「あ、ギツ、ああああああ〜!!」

突然アニーゼが床に倒れ伏してもがき苦しみだした。

と、同時に船全体が地震にあつたかのように大きく揺れて、崩れ始めた。

「アニーゼさん!? もしかして、刻限のロザリオがまだー!」

オルソラがアニーゼに駆け寄り、俺はピアージオへと向き直った。

ピアージオは息を荒くしながらも一つの十字架を握りしめていた。

その目はもはや正気を失っており、狂気に満ちた笑みを浮かべている。

「ビアージオ！ それが刻限のロザリオか！」

「礼装を介してアニエーゼさんに何かしたのでございますか！」

ビアージオを止める為駆け出したが、天井が崩れてきて行く手を阻んだ。

「ハッ、刻限のロザリオ……このままでは、使えんよ。未調整のままではな。だが、力は

ここにある。術式を爆発させて、貴様らローマ正教の脅威を潰すだけの力はなあ！」

「そんなっ！ この術式が爆発すれば、私達だけではなく、ヴェネツィアやその周囲の街

までもが巻き込まれてしまいます！」

「これだけ膨大な魔力の爆発だもんな！」

なんとか瓦礫の隙間からでもと思ったが、すでにビアージオの姿は完全に瓦礫の向こうに隠れていて視えない。

声はすぐそばに聞こえるのに姿が見えない。

これでは能力停止は使えない。

ちっ、もつと早くとどめを刺して完全に気絶させるべきだった！

「オルソラ、アニエーゼとインデックス、当麻を受信機で探してここから脱出しろ！」

「あ、あなた様はいかがなさるのでございますか!？」

「こいつは俺の不始末だ。俺がケリをつける」

瓦礫をよけるなり砕くなりして何とかピアージオを覗るだけでもできれば……

「ユウキ！ お前も脱出してくれ！」

と、瓦礫の向こうから当麻の声が出た。

「当麻?!」

「き、さま。生きていたのか!」

「死体くらい確認しろよ。ユウキ、状況は分かっている。こいつは俺が止める。だからオルソラ達を頼む!」

声の感じから重傷は負っていないようだが、それでも無傷ではないはずだ。

だが、今の状況では俺にできることはない。

「……行くぞ、オルソラ」

「はい……」

オルソラももどかしさを感じながらも、この場を逃げる事に同意した。

「必ず、後から追いつく!」

「絶対、絶対でございませよ!」

瓦礫の向こうからの当麻の力強い声を聞き、アニーゼをおぶり俺達は部屋を出た。

途中、インデックスとも合流し、外で待機していた天草式にオルソラ達を託し、俺は崩れ行くアドリア海の女王へと戻った。

瓦礫の山をかき分け、当麻の発信機の辿り、どうにか海中に沈んでいくボロボロの当麻とビアージオを引き上げ再度脱出した。

それから、当麻の傷の状態を看て、学園都市に報告して急いで帰りの手配をした。ここまでの大怪我を学園都市外部の病院で手当するわけにはいかないからだ。

近くの病院から学園都市に戻る道中、冥土返しからの電話を受け、当麻が何か叫んでいたがいつもの事なので無視した。

こうして、俺の生涯初めての海外旅行は幕を閉じた。

もう俺が海外に行くことはないだろう。

そう、思っていた。

だが、この数か月後に、再度海外へ渡ることになるとは。

それも、第三次世界大戦の戦場のど真ん中へと、予想外の人物達と行くとは思っていなかった。

続く

日常編Ⅳ

第140話 「薬師稼業（前編）」

私、因幡てゐの朝は、早……くもなく普通。

目が覚めて、軽く体を伸ばしつつ外を見る。

窓の外は雲一つない青空が広がっている。

「うーん、今日もいい天気だねえ。さって、鈴仙ちゃんはどうしてるかなー？」

着替えて鈴仙ちゃんの部屋の前まで行き、そつと襖をあけて中を見る。

「……ブツブツ」

そこには毛布に包まり体育座りしながらブツブツ呟く鈴仙ちゃんの姿があった。

「あーまだ重症だねこりゃ。ってか怖っ！」

全く、よつぽど一昨日の宴会での一件を引きずってるんだね。

そりゃ、酔ってたとはいえ、ゆーちゃんLOVEばかりの所でいきなりキスしちゃう

うんだもんねえ。

しかも、その後みんなして鬼も逃げ出すくらい阿鼻叫喚の地獄絵図。

ゆーちゃんがか幻想支配やら使って収めたけど、下手すればあの辺り一帯更地

どころかクレーターになってただろうね。

ま、酔わせたのは私だけど、あそこまでやるとは思わなかったよ。

でも、流石に後で御師匠様に怒られたなあ。

顔を洗って居間に行くと、御師匠様が朝食の準備をしていた。

いつもなら食事は鈴仙ちゃんがやっているのだけど、昨日は私、今日は御師匠様がやることになった。

姫様も料理すると言っていたけど、御師匠様が止めてたつけ。

御師匠様は危ないからって理由で止めていたけど、本当は姫様料理が下手だからなんだよねー。

「おはよう、てゐ。その様子だとウドンゲはまだみたいね」

「おはようございます、御師匠様。鈴仙ちゃんもいい加減開き直れば良いんだけどねえ」
「ああなつた原因の1つはあなたでしょ、てゐ。でも、ウドンゲの気持ちは分かるけどね。宴会であんなトンでもない事しちゃったたらね」

御師匠様が呆れ顔で溜息をついた所で姫様がやってきた。

「2人共、おはよう。鈴仙は相変わらず、というよりあれ昨日より悪化してない？ 思わず攻撃しそうになったわよ」

どうやら姫様は鈴仙ちゃんの部屋に寄ってからきたみたいだね。

「そんなにですか。それならある程度の荒療治は仕方ないわね……ねえ、てる？」

「えっ？」

まずい、こういうとてもいい顔をしてる御師匠様は、絶対に何か面倒なことを企んでいる顔だよ……

「はあ……」

窓から入る陽の光が強くなり、お昼になったのが分かる。

いい加減、引きこもるのもやめようかな。

でも、一昨日のあの出来事が頭に浮かぶと……

「……」

無意識に指が唇をなぞってしまう。

酔っていたとはいえ、私は、あの人とキスをした。

「っ!？」

あの時の感触を思い出して、一瞬で身体が火照ってきた。

あり得ない。そんなのあり得ない。

確かに彼は、罪人の私を認めてくれた。

それに殺し合いをして、殺しかけた私を本心から相棒と、友達と呼んでくれた。とても嬉しかった。

でも、だからって、キ、キスをするまでなんて……

と、また身体が暑くなったところで、お師匠様の声が聞こえてきた。

「ウドンゲ？ 入るわよ？」

「はいっ！ あ、ちよ、ちよつとだけ待つてくださいー！」

真つ赤になった顔を見られたくないとしたが、時すでに遅くお師匠様は既に襖を開けていた。

「……はあ、姫様やてゐの言つた通り、重症ね」

「ううう……」

「さてと、ウドンゲ。いい加減、引きこもりはおしまい。今日は、あなたに1つ仕事を言い渡します」

「はい？ 仕事、ですか？」

「ええ、いい気分転換にもなるでしょう？」

師匠の言いたいことは分かる。

2日間も布団に引きこもってウジウジするのは良くない。

だから、師匠は気分転換として私に仕事を頼みに来たんだ。

師匠や姫様達にこれ以上甘えるわけにはいかない。
うん、よしっ。気分一新して頑張るわ！

「つて、これのどこが気分転換になるんですか師匠——!!!」

「声がデカいぞ、鈴仙」

今俺は、鈴仙と一緒に永遠亭を出て、人里に向かって歩いている。

事の始まりは、少し前の事。

朝から霊夢は、修行の為とかで紫に連れられてどこか行ってしまった。

それでいて、珍しく午前中は、文やレミリア達とかアリスとか魔理沙とか誰も来客がなく一人で留守番をしていた。

1人分の昼食を作るのも材料の無駄と思い、人里に行こうとした時、てゐがやってきた。

何でも、永遠亭はこれから診療所として開業するらしい。

それは、この前の宴会で永琳が慧音と紫と話していたようで、俺も知らなかったし、霊夢も宴会後に知らされたようだ。

まあ、宴会では俺も霊夢もそれぞれろじやなかったからな。

迷いの竹林内にある永遠亭までの道は、妹紅やお京達ウサギが案内役になる事になっ

た。

しかし、案内役がいるとはいえあんな場所に患者は来ない。

そこで、宣伝と患者のアフターサービスも兼ねて薬の訪問販売もする事にした。

問題は、誰が訪問販売するかと言うと、永琳は必要になれば出張診断もするけど、普段は永遠亭で診断するので無理。

輝夜は姫だし、医療経験ないので無理。てるやウサギ達も助手程度レベルで同じく無理。

その点、鈴仙は永琳の元で医学を学び、知識も経験もそれなりにあるので訪問販売兼宣伝役となった。

ただ、鈴仙はアレで結構人見知りするタイプらしく、人里にうまく馴染めない所か余計なトラブルを生みかねない。

で、なぜか俺が人里の案内役、そして、鈴仙の手伝いをお願いされたというわけだ。

「永琳には、俺より適任がいるとはつきり言ったんだぞ。でも、てるやお京にまで俺が適任だつて頼まれたら断るわけにはいかないだろ」

「……」

鈴仙はまだ納得いかない顔で俺を睨んでいる。

さつきも永遠亭で会った時は、絶叫されたっけ。

『なんでここにいろのよー!?』

顔を真っ赤に叫んでたけど、ありや寝起きだったな。

そりや寝起きの顔を男に見られたくないか、若干寝ぐせもあつたし。

と、言つたらてると輝夜に盛大にため息つかれたのはなぜだろ。

「あなたはそれでいいわけ？」

「えっ？ 何がだ？」

「その、私なんかの手伝い、それも人里でなんて」

鈴仙が俺に対して何か遠慮してるといふか、気を使つてるのはすぐ分かるが、その理由がいまいちわかんないな。

「あー殺し合いをした件か？ あれは俺と鈴仙お互い悪かつたつて事で、もう終わった話だろ？ 俺は気にしてないから、鈴仙も気にするな」

「そうじゃない！ そつちじゃない！ いえ、全部否定できるかと言われれば微妙だけど、そうじゃなくつて、宴会の事よ！」

宴会？ ああ、最後のアレか。

「霊夢達との鬼ごつこの件か？ 別にアレはなんか慣れた」

「慣れてるの!? つてまさかあ、あの……えつと、私とした、その……アレも慣れてるの？」

「口移しか？ あれは流石にないな。されそうになった事はあるけど」

「だーもう、そうじゃなくって！ って、まさか意識してるの私だけ……」

鈴仙は頭を抱えるとブツブツと何かつぶやきだした。

聞かない方がいいだろうと、意識を外した。

少し歩くと人里に着いた。

あれからなぜか不機嫌そうな鈴仙と共に、まずは梨奈の家へと向かった。

今日、薬師として鈴仙が訪問するのは、慧音經由で話はいっているとの事だったからだ。

「ごめんくださいーい！」

「……失礼します」

玄関に入ると、近くに気配を感じなかったので少し大きな声を出したのだが、鈴仙はおずおずと声が小さい。

「鈴仙、それじゃ中まで聞こえないだろ」

「わ、分かってるわよ。あなたの大声に驚いただけだよ」

「あ、お兄ちゃん！ 久しぶり！」

と、そこへ梨奈が2階から階段を駆け下りてきた。

「おいおい、そんなに走って降りたら危ないぞ」

「大丈夫だよ。それよりいらっしやい、お兄ちゃん」

階段を降りてきた梨奈はそのままの勢いで飛びついてきた。

こうなることは予想してたのでしつかりと受け止めた。

横で鈴仙が驚いて目を丸くしてるけど、気にしない。

梨奈の両親はちよつと出かけていて、お手伝いさんも買い物に出ていて今は梨奈一人らしい。

ちよつとタイミングが悪かったか。

「おつ、梨奈。結構大きくなってないか？」

「えへへつ、分かる？」

最初に会ったころより身長は伸びているし、他にも色々大きくなっている。

うん、こりや美琴を越えたな。

「あのこの子は？」

置いてけぼりな鈴仙が梨奈をチラ見して俺に尋ねてきた。

若干顔ひきつってるように見えるけど、緊張してるか？

「ん？ この子は俺が手伝いしてる寺子屋の生徒だよ」

「初めまして！ 御咲梨奈です」

「あ、初めまして。私は鈴仙・優曇華院・イナバ。鈴仙でいいわよ」

「ふーん、鈴仙さん……」

梨奈は観察するように鈴仙をジーっと見つめている。

まあ、鈴仙の格好は人里には斬新だからな。

「その恰好。ここに来た頃のお兄ちゃんに似てるけど、お兄ちゃんとはどういう関係ですか？」

「えっ!? ど、どどどという関係って、それはその……仕事、仲間?」

「動揺すぎだ。梨奈、鈴仙は竹林の奥に住むウサギの妖怪だ。で、今は仕事仲間であのとも……」

「だああー!!」

友達と言おうとしたら鈴仙が突然大声を上げた。

「あ・な・た・は! またあの時と同じ過ちを繰り返すの!」

「えっ? あの時って何がだ?」

「いいから、あなたは黙ってて! 全く、やっぱりこの服、人里じゃ目立ってるんじゃないの? あの服装にした方が良かったんじゃないの?」

「あっちの方が不審者に見えて目立つぞ?」

今の鈴仙の服装は、いつものと同じブレザー服だ。

最初、出かける時には、行者のような紫色の服にうさ耳を隠すように編み笠を被って

いた。

目立たないようにと鈴仙が選んだ服だが、逆に思いつき目立っていた。

だから、普段の服装の方が鈴仙らしくていいだろ。と言うと、渋々いつものブレザー服にした。

その時、なぜか輝夜とてゐるがニヤニヤしていたけど。

「ふうん、へえー？」

梨奈は俺と鈴仙の話に興味深そうに聞いていた。

なぜか品定めをするかのように鈴仙と俺を交互に見ていたけど、急に笑顔になった。

「うん。色々分かった。よろしくね、鈴仙お姉ちゃん♪」

そして、満面の笑みで鈴仙に手を伸ばした。

対する鈴仙は最初少し戸惑っていたが、やがて何か合点がいったかのような顔をして、差し出された手を握った。

「ええ、これからよろしくね、梨奈」

「ふふふふ……」

なんか2人の間に火花が飛び交っている気がする。

まるで霊夢と咲夜、文と美鈴とかがたまにかわす視線の戦い、みたいな感じだ。

なにせよ、鈴仙も思ったよりも早く人里に馴染めそうで何よりだ。

続
く

第141話 「薬師稼業（後編）」

梨奈の家に訪問して3人で話をしていると、梨奈の両親やお手伝いさんが帰ってきた。

お昼を少し回った辺りだったので、俺と鈴仙はお昼をごちそうになることになった。昼食の席で、当たり前のように梨奈と鈴仙が俺を挟むように座り、梨奈の両親は何やら暖かな視線を送ってきた。

で、騒がしくも楽しい昼食が終わり、これようやく本来の用事である、薬の訪問販売ができる。

出来る、のだが……

「まず（？）こちらが……」

「（？）（？）」

鈴仙は鈴仙なりに親切丁寧に薬の説明をしているつもりなのだろうけど、薬の成分の説明から始まり薬の成り立ちまで本当に丁寧に丁寧すぎる。

鈴仙は専門用語ばかり言っているので、これでは薬の用法や効能がうまく伝わらない。

俺も一応、簡単な医学知識や薬学の心得はある。

だけど、鈴仙は俺も聞いたことがない成分を言っている。

恐らくだけど、月の科学や永琳が独自に生み出した成分だったりするのだろう。

そんな未知の単語をペラペラしゃべられても梨奈の両親は、何を言われているかさっぱり分からないだろう。

それでも、俺は一応薬については色々知っている。

なぜなら、永琳から一通り教わっていたからだ。

「永琳から説明受けていて良かった」

流石は鈴仙の師匠。こういう事態を予測していて俺に同行を依頼したのでだろう。

出発する前に今回持ってきた薬の説明を受けて、簡単な説明書も持たせてくれた。

おかげで鈴仙のわけわからん説明も何とか理解できている。

さて、梨奈の両親の頭から煙が出る前に交代しようか。

と言っても、俺も誰かに薬の説明するの得意じゃないんだけどな。

「鈴仙鈴仙」

「何？ 今良い所なんだけど？」

どこが良い所なのだろうか。

「熱心に説明するのはいいけど、ちょっとお客様の反応見た方がいいぞ？」

「反応？ あれ？」

ここにきてやつと鈴仙は、目の前にいる2人のお客が困惑交じりの愛想笑いをしてい
る事に気付いた。

ちなみに梨奈は、鈴仙の説明が難しすぎて眠くなつたようで、すぐに眠ってしまった。
なぜか俺の膝を枕代わりにしているが。

「いやあ、これがすごいお薬だと言う事は分かりましたよ。ねえあなた？」

「お、おう。そうだな。うん、これはすごい薬だ……なんの薬か分からないけど」

お父さんお父さん、そこは小声ではなくはつきりと言っちゃった方が鈴仙の為です
よー？

あ、鈴仙にはぼつちり聞こえていたようだな。耳がシヨボンとしちゃった。

流石ウサギ、耳がいいな。

「じゃあ、俺が代わりに説明しますね。この薬は簡単に言えば頭痛薬でして」

そして、俺は鈴仙の代わりに持ってきた薬を一つ一つ、用法と効果、起こりうる副作
用や注意事項を説明した。

「最後に、これだけは忘れないでください。これらの薬はあくまで応急処置です。これ
を飲んで症状が良くならなかつたらすぐに永遠亭に行ってくださいね。場所は慧音先
生か竹林の入口で兎を探せば案内してくれますから」

「ええ、よくわかったわ。ありがとう」

「これから何かあつたら永遠亭を頼らせてもらおうよ」

よしつ、これでここでの説明は終わり。

薬をサンプルとしていくつか渡して、永遠亭への行き方も伝えた。

つて、鈴仙のフォローのつもりがほとんど俺がやってしまった。

これではあまり意味がない。鈴仙も面白くないだろうしな。

と、思い鈴仙の方を向くと、案の定少しだけ不機嫌そうな顔をして俺を見ていた。

一応、お客の前だからあからさまには不機嫌そうにはしてないけど、分かる人にはわかる不機嫌っぷりだ。

「悪かったよ、鈴仙。お前の仕事取っちゃったな」

「そんな事はどうでもいいわよ。それより随分と気持ちよさそうに眠ってるわね、その子」

鈴仙の視線の先にはさつきからずっと俺の膝を枕にして眠っている、と見せかけてさつき目が覚めて狸寝入りしている梨奈。

つてか鈴仙、お前の仕事の事はどうでもいいんかい。

「なんだ鈴仙、眠たかったのか？」

——ドテツ

あれ？ 鈴仙がコケた。

つて、鈴仙だけじゃなく膝にいた梨奈や両親も一緒にコケた。
なぜに？

「そ、そういう意味じゃなくって！　つて、梨奈狸寝入りだったのね」

「あははっくおはよう、お兄ちゃん」

「おはよう。梨奈、俺が薬の説明始めた頃から起きてただろ？」

「えへっ、やつぱり気づいてたよね。流石お兄ちゃん。でもさ、お兄ちゃん、あっちの方は悪化してるよね？」

あっちは悪化してる？　はて、なんのことだろう？

首をかしげると鈴仙と梨奈は揃ってふかーくため息を吐いた。

梨奈の両親はニコニコ笑顔を浮かべている。

「もういいわ。ユウキ、そろそろ次に行かないと」

「ああ、そうだな」

なんだかんだで随分と長居してしまった。

次は何時にどこ、という小刻みなスケジュールで動いてるわけじゃないが、流石に次に行かないとな。

「では、これで失礼いたします。お昼までご馳走になってすみませんでした。何かありましたら慧音先生か彼に言ってください。すぐに永遠亭から駆け付けますから」

「ええ、これからよろしくお願いしますね」

「永琳先生にもよろしくお伝えください」

色々不安な所あったけど、どうやら一軒目は成功だな。

次からは鈴仙に任せて俺はフォローするだけにしよう。

「2人はこれから里を回るんだよね？」

「そうね。梨奈の所が最初だったから、それがどうかした？」

何かを考え込みながらの梨奈に、首をかしげる鈴仙。

梨奈は俺をチラリとみて深くため息をついた。

「覚悟しておいた方がいいかも。鈴仙お姉ちゃん頑張つてね、色々」と

「??」

俺も鈴仙も訳が分からなかったが、梨奈の両親だけは娘の言いたいことがわかるよう

で苦笑いを浮かべている。

流石親子。

「まあいいか。それじゃまたな梨奈」

「うん、またねお兄ちゃん、鈴仙お姉ちゃん」

「またね、梨奈」

鈴仙と梨奈、最初はちよつと険悪な雰囲気になったけどすぐに友達になれてよかつ

た。

な。 思えば梨奈は、フランが寺子屋に馴染むのにも一役かってくれたし、ホントいい子だ

それから彼に里を案内されながら色々な店や家を回って行つた。

道中色々あつたけど、予定していた所はすべて終える事が出来た。

もう陽がかなり落ちてきている。

「ふう、やっと終わつたわ。 ホント疲れる1日だつたわ」

「竹林で引きこもつてるより色々歩き回つた方が楽しいだろ？」

「私が疲れたつてのはそういう意味じゃないわよ」

彼は私は何を言いたいのか分かつてないようだった。

ホント、梨奈が言つてた理由が分かつたわ。

『いらつしやい。 あら、今日はうさ耳の子なのね。 でも、ユウキ君、女の子の趣味がいいわよねえ』

甘味処の店員さんや。

『おお、坊主。 なんでえ、今日はまた偉く可愛い子を連れて、霊夢ちゃんに怒られないのかい？』

八百屋のおじさん。

『巫女様に天狗様に閻魔様、つぎに誰を連れて来るかとおもったらうさ耳っ娘……流石、ユウキ殿、分かってらっしゃる』

通りすがりの酔っぱらい。

『おやおや、今日は兎のお嬢ちゃんかい。あなたは何十人目のユウキ君の彼女だい?』

服屋の店主まで行く所行く所、肝心の薬の説明を始めようとする前に、冷やかされたりからかわられてるんだもの。

その度に私が否定する羽目になるし、彼も彼で苦笑いを浮かべて否定してるけどね。でも、おかげで変に肩の力抜けて薬の説明はなんとかうまくできたわね。

梨奈の所ではちょっと彼の力借りちゃったけど、でも、あんな失態はもうしていない……はず。

そりや少しは彼にフォローしてもらったけど、仕方ないじゃない。

私、薬売りなんてしたことないんだし。

いや、なんで彼は私より色々薬に詳しいのよって思ったけどね。

「さてと、それじゃ慧音の所に行くかうか」

「そうね」

そんな私の心情なんて知る由もなく彼は呑気に寺子屋へと歩き出した。

その後ろ姿は隙だらけの無防備状態。

少し前に私と本気の殺し合いとは思えないのよね。

でも、隙があるようにみえて、さつきほぼ後ろから飛んできた球を見ずに避けてキヤツチした事があった。

隙があるようで実はない。

ホント、つくづく彼の事が分からないわね。

寺子屋に行くと、慧音先生がちょうど出て来た所だった。

「やあ2人共、待っていたよ。その様子だとうまくいったようだね」

「まあね。慧音が前もって話通してくれたおかげで結構スムーズにいったよ。鈴仙も思ったより早く打ち解けられたしな」

「ふふつ、そうかそれは良かった。ああ、本当に良かった」

慧音先生はそういって意味深な笑みを浮かべて私を見ている。

この笑みは知っている。てゐが悪戯をした時や、お師匠様が新薬を開発した時に見る笑みだ。

自然と一歩後ずさりしてしまう。

「そんな警戒しなくてもいいよ。私は何もしないから」

「いえ、彼が絡んでくるともう誰も信用出来なくて」

「それはちよつとヒドくないか？」

彼が何か言ってるが訂正するつもりはない。

「さてと、2人に客人が来ているよ」

「客？ あれ、妖夢？」

慧音先生に促されて寺子屋奥の住居玄関に入ると、宴会の時にいた刀を持った女の子が正座して私達を待っていた。

確かこの子、彼を師匠と呼んでたわよね。

うつ、あの時酔つて彼にキスした後、この子にも執拗に追いかけて斬られかけたのよね。

彼がナイフで刀を弾いて気絶させたから大事には至らなかつたけど。

あの太刀筋は只者じゃないわよね。

「はい、先日宴会での数々の無礼の詫びに参りました」

なんでも、宴会での事は半分程度しか覚えていないが、自分が刀を振り回して私に襲い掛かったのは覚えていられない。

そのことを彼と私に謝るため、まずは博麗神社に行ったら彼は人里と言われ、慧音先生の所で待たせてもらっていたようね。

で、待っている間ずっと正座のまま玄関で待つていたというのだ。

膝、痛くないのかしら？

「酒に溺れるなんてなんとという未熟！ しかも、師匠の手を煩わせたと幽々子様より聞きました。誠に申し訳ございませんでした」

「俺は別に気にしてないから、謝るなら鈴仙になろ？」

正直、私ももうどうでもいいのだけど、と言うかあの宴会を思い出したくないから蒸し返さないでほしい。

「それでは、コホン。改めまして魂魄妖夢と申します。ユウキ師匠の一番弟子です。先日酒が入ったとはいえとんだご無礼を働きましたこと、深く謝罪いたします」

「は、はあ、こちらこそどうも。私は鈴仙・優曇華院・イナバ。鈴仙で構いません。えつと、竹林の奥にある永遠手に住む、薬師の見習いです。これからよろしく願いますね」

ものすごく丁寧、かつ畏まって挨拶され、思わず私も正座してしまった。

この子、あんなに暴れてたけど、お酒が抜けるとものすごくまじめなのね。

そのギャップに驚いたわ。でもまあ、彼の方がギャップ強いけれど。

というか、今一番弟子って部分をやたらと強調しなかったかしら？

「よしつ、では夕食にしようか。2人共歩き詰めでお腹空いたんじゃないかな？」

「ああ、程よく空腹だぜ」

今日の夕食は慧音先生のところでと言うのは、彼から聞いていた。

人里を回った報告も兼ねてと言う事らしい。

「でしたら、手伝わせてください」

「俺も手伝うぞ？」

「えっ!? あなた、料理できたの!？」

彼が料理の手伝いをすると言い出すとは思わなかった。

というか、料理できたのね。

「これでも普段は霊夢と交代で作ってるし。たまに慧音や妖夢にも振舞ってる程度にはできるぞ?」

「師匠の料理はとてもおいしいのです! ですが、今日は謝罪も兼ねて私がお作りしますので、慧音先生もお2人とお話ししててください、お台所お借りしますね」

いうが早いのか、妖夢はダツシュで台所の方へと走り出していった。

「……ともかく、待っていいようか？」

「そうだな」

その行動の速さに驚いたが、慧音先生と彼は特に気にも留めなかった。

もう慣れてしまったかのようだった。
ギヤツプって、深いわね。

夕食ができるまでの間、人里での薬売りの反応や今後について慧音先生と色々話をした。

その中で、彼が私以上に薬の説明がうまかったと若干テンションが下がりながら言う
と、なぜか慧音先生の顔に陰が落ちた。

「ああ、分かるよ。ユウキ君って本職である私よりも教師が板についているし、授業もう
まいものな。うん、何とも言えない気持ちになっただろう？」

「……ええ、そうですね。お師匠様の薬、私よりうまく説明できていましたし」

「なんで2人して落ち込んでいるんだよ。ほら、そろそろ夕食できるからそれ食べて元気
出させて」

私達を凹ました元凶に言われても、だが、確かにいい匂いがしてきた。

妖夢の作る夕食はどれも美味しかった。

人里での新鮮な食材をふんだんに使った手料理の数々。

地球の料理は、お師匠様や姫様が気まぐれでたまに作るけど、それに負けなくらい
美味しい。

ただ……

「食材を使い切るなよ。明日から慧音どうするんだよ」

「ス、スミマセンデシタ」

「ま、まあまあ私も今日はこれくらい作る予定だったんだし。食材はまた買えばいいさ」
「妖夢」

「ハイ、ワタシガベンシヨウシマス」

妖夢は、ちよつと抜けてるところもあるのね。

「ところで、鈴仙。ふと気になったのだが、なぜユウキ君の事、名前で呼ばないんだい？
彼とかあなたとかばつかりじゃないか？」

突然慧音先生に私が彼を名前で呼んでいない事をつつこまれた。

「あ、それ私も気になりました。私は師匠は師匠なので師匠と呼んでいます、あれ？」
妖夢もそれは気付いていたようだけど、師匠師匠と連呼して自分が言いたいから
からなくなつたようね。

私は、彼の事を名前で呼ばないのは特に理由はない。

最初は、私の誤解で殺し合いになった事への罪悪感というか、後ろめたさというか
……とにかく、名前を呼ぶのをためらつた。でもいまは違う。違うけど、今更彼を名前
で呼ぶのに抵抗はないけど、なんというか恥ずかしい。

「俺は別に鈴仙の好きな呼び方で構わないけどな。俺の事言ってるんだってわかるし」

「いや、そういう問題ではないと思うぞ？」

彼は彼で気にしてないし。

それはそれでなんだかおもしろくない。

なんで私だけ深く考え込まなきゃならないのよ。

「分かったわ。じゃあ、あなたの名前を呼ぶわ」

「おう！」

「いくわよ……ハー、フー……ハァー、フゥー」

私は彼の方を向き直り、深呼吸を繰り返した。

なんで名前を呼ぶだけでこんなに手間取ってるのよ、私！

「鈴仙さんって面白い方ですね」

「妖夢に言われちゃおしまいだな」

「みょん!？」

あれ？ 彼の名前を呼ぶだけなのに、なんで深呼吸するたびに胸の動悸が早くなるの？

「鈴仙？ 大丈夫か？ なんでそんな緊張してるんだ？」

「き、ききんちようなんかしてないわよ！」

彼が私を心配そうな顔をしてジッと見つめてくる。

彼はただじっと私の言葉を待っている。

慧音先生と妖夢もいつの間にか固唾をのんで見守ってくれている。

さあ、今こそ言うのよ私！

「ユ…………ユウ」

最後の一文字が言えない、口から出てこない。

「…………キ」

「鈴仙、それでは伝わらないぞ」

呆れる様にいう慧音先生の声には軽く失望が混ざってる気がする。

「ええい、もう分かったわよ！……………ユ、ユウキ！」

言った。とうとう言ってやった。

なんだ。やっぱり名前程度どうって事ないじゃない

と思っていたのだけど……

「おう、どうした鈴仙」

ユウキに逆に名前を呼ばれて、ふと我に返り……

——ボンッ！

「あ、鈴仙さんのうさ耳から煙が!？」

「あわ、あわわわ、わわわわ……………し、失礼しま——っす！」

私はとてもこの場に、ユウキの前にいられなくなり、荷物を持って窓から文字通り飛び出してしまった。

「ふふっ、ははははっ！ ま、またな鈴仙」

「鈴仙、またなー」

「お大事にー！」

大笑いしている慧音先生と呑気にこつちに手を振るユウキと妖夢。

もうなんでこんな恥ずかしい目に合わなきやいけないのよ！

それから永遠亭に戻ると、顔どころか全身真っ赤で湯気すら出してる私を見て、お師匠様やてゐ、姫様にはものすごくからかわられ、お京には無言で睨まれたのでした。

続く

第142話 「風祝」

夏の暑さが本番を迎えたある日、俺は霊夢と魔理沙の3人と人里で団子を食べながら歩いてた。

たまにこうして3人で人里やら出掛ける事があるが、最近は各々用事で忙しかったりするから久々だ。

この前の永遠亭での異変以降、霊夢が微妙に不機嫌だったから気分転換と心配かけたお詫び、遊びに来ていた魔理沙には戦闘服のお礼と言う事で、俺の奢りで食べ歩きだ。

「3人で出掛けるのって、なんだか久々な気がするなあ」

「そうね」

「……霊夢は誰かさんと2人きりが良かったみたいけどな、イタツ!? た、叩く事ないだろ!?!」

相変わらず仲がいいなこの2人は。

「ユウキは知らないだろうけど、霊夢って昔は神社からあまり出なかつたんだぜ? 人里に来るのも週一くらいだったもんな」

「そうなのか? 博麗の巫女の仕事で色々飛び回っていたと思っていた」

「そりや、巫女の仕事で行く事はあつたけど、私用で出掛けるのは滅多になかつたな。私
が誘つてもたまにしか乗らなかつたし。だから神社が溜まり場になつたようなもんさ」
俺が神社に住み込むようになってからは、俺の買ひ物に付き合つてくれることはあつ
たけど、それ以外はあまり出掛けてなかつたかもしれない。

まあ、それは異変の影響とはいへ、雪が多かつたからだと思つてた。

そういうえば、前は人里に霊夢と出掛けると物珍しそうな視線が多かつたが、あれは俺
にだけじゃなく霊夢に対しても珍しかつたのかもな。

話題の中心の霊夢は、なんだかばつが悪そうな顔をして無言のままだ。

「ま、神社でまつたりも悪くないけどな。私としては引きこもるよりは外にいる方が好
きだぜ」

「よく言うわよ。引き籠りすぎて倒れかけたあんたを何度も助けたのは、どこの誰でし
たっけねえ?」

「あつはつはつはつ、そこはお互い様つて事だぜ」

ホント、仲がいい事で。

と、何やら里の一角に人が集まりだしたのが見えた。

「ん? なんだあの人だかりは?」

「さあ、妖怪が暴れているわけでもなさそうだし、妖精でも騒いでるんじゃない?」

「そういうのとは違うみたいだな。ちょっと行ってみようぜ」

特に目的もなく歩いていたので暇つぶしになるだろうと、人だかりに近寄ってみると緑髪の見かけない女の子が何やら演説をしているようだ。

「幻想郷の皆さん、初めまして！ 私は、東風谷早苗。守矢神社の風祝です！」

「守矢、神社？ ありえないわ。そんな神社存在しなかつた」

幻想郷に博麗神社以外の神社があつた事に驚いたが、俺以上に霊夢と魔理沙が驚いていた。

特に霊夢は目を丸くしてビックリしている。

「守矢神社に祀られているのは、八坂神奈子様。神奈子様は風雨の神様であり、農業の神です。神奈子様へ信仰すれば、皆様の農作物は勿論、それ以外にも幸が雨の如く降り注ぎます！ 今はまだお眠りになっていらつしやいますが、近々皆様の前にご降臨されて、そのお力を示す事になるでしょう。今日は、挨拶だけです、これからは、守谷神社と八坂神奈子様をよろしくお願いいたします」

そう締めくくり、早苗と名乗つた少女はペコリとお辞儀をした。

周りにいた群衆は、パチパチとまばらながらも拍手をしたが、皆が皆どう反応したものか困つたような顔をしている。

「なんだつたんだ今のは？」

「さあ、要するに神様の売り込みってやつじゃないか？ 私にもよくわからん」

魔理沙がそういうなら、幻想郷でも珍しい光景だったのだろう。

テレビショッピングみたいな演説だったけど、神様の売込みって。

と言うか、幻想郷の神様ってそういうものなのか？

てか今更だけど、幻想郷には神様が存在しているんだったな。

妖怪の山とかにいるみたいだけど、俺はまだ会った事ない。

俺の知っている元居た世界のは神様というか、天使だったからどういものか分からないけど。

思い出すだけで頭痛くなりそうなくらい場違いな存在だったな。

で、今の演説がどういう事か話を聞いてみるかと思ったら、俺より早く霊夢が動いた。

「ちよつと待ちなさい！」

「はい？ なんででしょうか？」

去ろうとする早苗を呼び止め、ズカズカと肩を鳴らして近づくと霊夢。

里の人たちもただ事ではないと、急いでこの場を立ち去るほどの迫力だ。

何をそんなにいら立っているのか。もしや、巫女としてのライバル心？

風祝がどういのかは知らないけど、巫女みたいなものか？

「なんででしょうか？ はこつちのセリフよ。今の演説あれはなんだったのかしら？」

「今の、ですか？ あ、もしかして神奈子様に興味を持たれましたか!? うれしいです！」

早苗は、靈夢の凄みにも全く意にも返さず、逆に目をキラキラさせて靈夢に迫ってきた。

靈夢が言った事、分かってないのかな。

「違うわよ！ 私は、博麗靈夢。博麗神社の巫女よ。あなた、守矢神社って言ってたけど、そんなの幻想郷になかったわよね？ あなた、まさか外の世界から来たのかしら？」
 「あーあなたがあのポツンと寂れた博麗神社の巫女さんですか。初めまして、お会いできて光栄です！ これからご挨拶に伺おうと思つていたんです、ちようどよかった！」

博麗神社を寂れたって、巫女を目の前にしてよくもズケズケと言えるな、とある意味感心だ。

「プツ、寂れた、つてよく見てるなあ」

「うっさい魔理沙！ 博麗神社は寂れてないわよ！ で、私にご挨拶つて、宣戦布告でもしに来る気だったのかしら？」

うーん、早苗からは悪意も敵意も全く感じない。

このままじゃ靈夢の方が喧嘩を売つてるように見えるな。

「はい、そこまで。靈夢は少し落ち着けて」

ガルル、と唸り声をあげて早苗に噛みつきそうな霊夢の頭に手を置き、落ち着かせる。つてこれじゃ、猛獣を大人しくさせるような扱いじゃないか。

霊夢ますます怒るかな？

「……………」

霊夢は黙つてうつむいてしまった。

やつぱり不機嫌になつちやつたか。このやり方は失敗だったな。

魔理沙も呆れ顔だ。

「ユウキ、やつぱお前すごいぜ」

と思つたら予想外に褒められた。

「どうすごいんだよ、魔理沙。あ、早苗だったつけな。ここじゃ人目付くから博麗神社で話聞かせてくれないか？ 霊夢もそれでいいだろ？」

「はい、ぜひお邪魔させていただきますー！」

「まあ……………それでいいわよ」

そんなこんなで急遽お出かけを切り上げ、博麗神社に戻ってきた。

文でも現れるかと思つたがどうやらいないようだ。

代わりにアイツがいるみたいだけど、まあいいか。

「では、改めまして。昨日外の世界より訳あつて神社ごと幻想入りいたしました、守谷神社が風祝、東風谷早苗と申します」

神社丸ごとかい。そりやまた大胆だな。

しかも自分から入ってきたのか、俺とは全く違う外来人だな。

いや、俺も外来人つて括りとはちよつと違うんだつたか。

「じゃこつちも改めて、博麗霊夢よ。で、彼がユウキさん。ああ、それと魔理沙よ。一応私達3人は人間よ、一応」

「いや、一応つて念を押さなくていいだろ。しかもこつちを見て言うなよ」

「ちよつ、私の紹介雑すぎる！」

魔理沙はスルーされた。

「で、幻想郷に来たと言つていたけれど、どうやつて？ 結界には何も反応なかつたわよ？ ましてや神社ごとなんて私が気付かないわけないわ」

「えつ？ 霊夢、結界を越えて外来人来てもすぐ分らないんじやなかつたか？」

確か外来人や外の世界から幻想入りしたのは、紫や霊夢では把握できない事が多いんだつたな。

だから、鈴仙が外の世界の古い武器を蒐集出来たり、霖之助や魔理沙が拾つたりしている。

「そういう風に結界を強化したのよ。まあ、そもそも外来人なんて滅多に來ないのだけどね」

俺が外の世界とは全く別の異世界から幻想入りしたので、靈夢が紫に掛け合い博麗大結界を強化したようだ。

外来人をこさせないようにするのは、妖怪の餌食にする為とか色々複雑で紫が反対したけど、その代わりに人が入ってきたら靈夢が感知できるようにしたらしい。

で、俺が幻想入りしてから入ってきた外来人は靈夢がすぐに発見して、外の世界に戻していたわけだ。

通りで最近外来人を見かけないと慧音や文が言っていたわけだ。

「それは、神奈子様の力です。尤も、そのせいで神奈子様はしばらく力を使えなくなりましたが」

「どういう事？ 神奈子って神様なのよね？ その神様が力が使えなくなっただって言うのは、幻想入りした理由と関係あるのかしら？」

靈夢には早苗達が幻想入りした理由は察しがついたようだ。

魔理沙もなるほど、と頷いてるが、俺にはさっぱりだ。

「はい。外の世界では、昔に比べて信仰心が薄れてきていたのですが、最近ますますひどくなって、神が存在を保てなくなる程深刻になりました。それで、存在が危うくなった

妖怪や古くからの神様達がいるという幻想郷の事を知り、最後の力で神社ごと移る事にしたんです」

例外はあれど妖怪や神は、人間の信仰心や恐怖心などで存在を保っている。

幻想郷と外の世界のルールと言ってもいいものだ。

そこらへんは俺のいた世界とは違うみたいだけどな。

で、早苗がいた外の世界では、人は神を信じなくなった。

そのせいで神奈子という神は存在を保てなくなり消える寸前だった。

そこで幻想郷という閉ざされた理想郷を知り、移住する事にした。

「じゃあ、早苗は元居た世界の家族や友達よりも神様を選んだつてののか？」

魔理沙は思わず声を上げた。

霊夢も同じく驚きで声も出ないようだ。

神社ごと幻想入りする。言葉にすれば簡単だけど、それがどれほど辛く難しい選択なのかは俺でも分かる。

「元々両親は幼いころに亡くなっています。私は神奈子様が親代わりになって育てられました。私にとっては神様以上に家族なんです。ですから、そんな神奈子様の為なら、私はどんな事でも耐えられます」

さつきまでの浮ついた感じとは打って変わって、今の早苗の表情は真剣そのものだ。

葛藤や悩みはあったのだろうが、自分の決断に間違いはない、そういつている。

これ以上、そのことに対して外野がどうこう言える話じゃない。

ましてや、俺は捨てたのではなく捨てられたのだからな

ああ……早苗が、



「そう。その事はもういいわ。で、幻想郷で信仰心を蓄えるってわけね。で、うちの神社が目障りってわけ？」

「い、いいえ。こんな寂れた神社なんて競争相手にならないと神奈子様おっしゃってましたし、私もそんなつもりは最初からありません」

「寂れたって、余計だつて言ってるでしょ！」

早苗の言葉に悪気は一切ないし、寂れているのも否定出来ない。

博麗神社って、参拝客少ないからなあ。

これでも俺が来る前よりはマシだったみたいだけど。

「ま、まあまあ、落ち着けよ霊夢。それともまたユウキに慰めてもらいたいのか？」

「そ、そそそんなわけないじゃない！」

俺は、ム〇ゴロウではないんだけど。

「あの、私はホントに挨拶に来たかっただけですよ。私は風祝で正確には巫女とは少し違いますけど、それでも霊夢さんは巫女仲間で、巫女先輩なんですから仲良くしたいと

思いました」

巫女先輩、ねえ。

改めて早苗を観察するが、多分俺や咲夜と同一年くらいだな。つてことは、霊夢の方が年下だ。

でも幻想郷の巫女としては霊夢の方が先輩だから、敬いたいからさん付けしてるつて所か。

ん？ 早苗から感じる力、霊力以外にも何かあるな。

「み、巫女仲間つて、私にはそんな気はないわよ」

とか言いつつ、早苗が自分を純粹に尊敬していると分かるのだろう。

邪険には出来ず、戸惑っている。

「お、照れてる照れてる。霊夢がユウキ関係以外で照れるのつて珍しいな」

「うるさいわね、照れてないわよ！」

俺関係つて、無関係な俺を巻き込まないで欲しいんだが。

「ところで、そちらのユウキさんは、お2人どちらかの彼氏さんでしょうか？ それとも、お2人両方の彼氏さんですか!？」

「「へっ?」」

あれ？ 早苗の様子がおかしいぞ？

「流石、幻想郷！ 私がいた世界よりこういう面では進んでいるんですね！ あ、もしかして正室、側室と言うものが残っているのですか!? それとも、お2人はユウキさんをめぐつての恋のライバル？ ユウキさん、モテそうですものね！」

「おい、ちよつと待て」

「大丈夫です大丈夫です。私も元居た世界の常識には拘りは捨てようと思つてここに来ました。人間が妖怪に食われる非情な世界。外の世界の常識なんて紙屑のようなものですが、だからこそ、私は新天地に心が躍るんです！」

「もしもーし？ おーい？ 早苗さーん？」

「でも、それでもこういう常識外なら大歓迎です！ かつこいい男の人をめぐつての愛憎劇は外の世界でも失われていません！ あ、そういう意味では外の世界の常識と一緒ですね！ 私だつて恋に焦がれる乙女。男運には恵まれませんでした、幻想郷では……と言うわけで、ユウキさん私なんてどうでしょうか？」

「夢想 封印！」

——ドゴーンッ！

「落ち着いたかしら、早苗さん？」

「ハ、ハイ、ゴメンナサイ」

ニコニコと悪魔の笑みを浮かべる霊夢の足元でぼろ雑巾のように転がる早苗は、そう

返すのがやつとだった。

その後、落ち着いた早苗に誤解を解き、彼女は早合点したことを詫びて、帰って行った。

なんでも守谷神社は妖怪の山のてっぺんに移住したばかりでまだ引越しの片づけが済んでないので、落ち着いたら遊びに来てくださいと言われた。

「はー嵐のような奴だったな。当分は退屈しなさそうだな」

魔理沙の言う通り、これから何か波乱がありそうで退屈はしそうにないな。

「そうね。はあ、全くまた面倒そうなのがやってきたわね……ねえ、紫？」

霊夢が外に向かつてそういうと、神社の外の空間が左右に裂けて中から紫が現れた。

「あら、気づいてたのね。彼も気付いていたみたいだし、流石ね」

「げっ、紫。私だつて気付いていたぜ」

魔理沙、そこ張り合うなよ。

「で、紫。彼女の話は本当なの？」

「あら、私に確認する事なんて何もなかったじゃない。でしよ、ユウキ君？」

「なんで俺に確認するかな。ま、彼女は嘘は全くついてないと思うけどな」

よっほど演技がうまくなきやだけど。

「嘘つく必要でもあるのか？」

「さあ？ 念のためよ。紫は気付いていたの？ 守谷神社の幻想入り」

「もちろん。だって彼女にここの事教えたの私だもの」

「やっぱり」

それを聞いて俺と霊夢が同じ事を思ったみたいだ。

「えっ、2人共そこまで気付いてたのかよ」

「私のはただの勘よ。ユウキさんは違うでしょうけど」

「俺だつて勘だぜ？ 外の世界で幻想郷の事知ること出来るのかは分からないし。でも、紫が絡んでそうだとは思つたけど」

「あら、人を黒幕みたいな言い方して2人共酷いわねえ」

「あんた、人じゃないでしょ。それで、ノコノコ出てきたつて言うのは、どういうつもりか説明する気があるのかしら？」

悪巧みかどうか分からないけど、何かを企んでそうな気はする。

紫に対してはなんか嫌悪感というか、警戒心を無意識に抱いちゃうんだよな。

アイツと同じ感じがするせいかな。

「そうねえ………しいて言えば、私も勘、かしら？ あなた達はまだ知らないでしょうけど、守谷神社の神様つて今いる幻想郷の神よりもとても強いよ。そんな方々が外の世界で消えるよりは、幻想郷に来てもらった方がいいじゃない」

こう見えて紫は、幻想郷の為にならない事はしない。

俺が来る前、レミリア達が幻想入りした時は、警告の意味で仕掛けた。

けど、今回は紫自身が招いたようなものだ。

幻想郷の為だろうけど、何か裏があるのか。

「いいわ。まあ、今は信じてあげる」

「随分と信用されてないわね、私。永遠亭の事を隠していたからかしら？」

あ、そういう事か。紫は鈴仙達の事知ってたけど、霊夢には話していなかったんだっけか。

「それだけなわけないでしょ」

「ふふつ、それでは私は消えるわね。皆さん、ごきげんよう」

紫は意味深な笑みを残してスキマへと消えていった。

でも、あの笑みは絶対にイミシンと見せかけてのわざとだな。

「じゃあ私もそろそろ帰るぜ。ユウキ、また今度奢りの続きな」

「あんたまだたかる気？」

「俺は構わないぞ。今回、結局団子しか食べてないからな」

食べ歩きではあったけど、物足りなさは俺もあったし。

「へへっ、約束したぜ。じゅあな——！」

魔理沙も箒にまたがり帰って行った。

さて、これからどうしようかな。

「ねえ、ユウキさん？」

「ん、どうした？ 良ければ、これからまた人里行くか？」

晩飯は人里で食べてもいいかな。

「ううん、そうじゃないの」

そう思っていると、霊夢は俺の正面に回り込んでジッと見つめてきた。

その表情は真剣、と言うより俺を心底心配しているような表情だ。

俺の何を心配しているんだ？ 財布？

「ユウキさん、大丈夫？」

「大丈夫って、何が？ 金ならまだ結構 「違う！」 えっ？」

「そうじゃない！ 私が気付いてないと思ってた？ それとも自分でも気付いてなかった？ 早苗は気付いてなかったけど、私も、魔理沙だつてそれには気付いていたわよ？」

「えーつと、何の事だ？」

あの魔理沙まで気付いてたつてなんだろうか？

「早苗が、友達よりも家族である神様を選んでこつちに來たつて言った時……一瞬だけ、凄く悲しそうで■■■■■そんな顔していたわよ？」

俺が、早苗を……？

続く

第143話 「天狗と河童と鬼」

今日は、文、妹紅、慧音の3人に永遠亭の一件で世話になったので、遅れてのお礼だ。人里の居酒屋は満員だったので、みすちーの屋台で飲む事にした。

まず礼を言おうとしたら、それより先に文が酒瓶を一気飲みして叫びだした。

「ここ数日ほんつともう大変だったのよ！」

「お、おう。それはアレか？ 早苗の事か？」

「そうよ！ というか、なんで知ってるの!? まさか既にお知り合い？ 仲良くなっ

ちやった!? もうフラグ立てちゃった!？」

「落ち着けて文。素になってるわよ」

「あやややつ、こ、これは失礼。最初から飛ばし過ぎましたね」

妹紅に言われて文は、慌てて言葉遣いを戻し、落ち着くためにみすちーが差し出した水を飲んだ。

と言つても、文の素は何度も聞いてるから今更つて感じしかないけど。

「早苗とは、外の世界から幻想入りしたと言う東風谷早苗の事だな？ 先日、人里で何やら勧誘めいたものをしていてユウキ君はその時に知り合った。そう魔理沙から聞いた

よ」

「それって、ユウキ先生と同じ所から来たって事？」

鰻を焼きながら俺達の会話を聞いていたみすちーが興味ありげに聞いてきた。

それに対して3人共同とも言えない表情を浮かべている。

「いんや、似てるけど違うよ」

「なんだ。ユウキ先生が外の世界でどんな生活してたか、前からちよつと気になってたのに」

「なら本人に直接聞けよ。ここにいるんだし」

「ん〜こういうのは本人より、周りの人に聞くのが一番かと思つて」

なんだよそりや。

「はいはい、そんな話より私の話聞いてくださいよー！ あ、ミスちゃん、お酒とツマミ追加ねー♪」

「分かりましたよーつてミスちゃん!？」

わざとらしく文が話をすり替えてきたが、俺の話だよなこれ？ ま、いつか。

「で、要は、妖怪の山にいきなり神社がドーンと現れて天狗たちが大慌てで、文はずつと忙しかつたつて話だろ？」

「天狗だけじゃありませんよ。河童とか山姥とか妖怪の山には色々な種族がいて、それ

「それが独自の社会築いているんです」

「最も、滅多に山から出ない種族ばかりだ。私も話で聞く程度しか知らない妖怪も多い」
 「それに妖怪の山って、あなたが思い浮かぶような外の世界の山とよりも大きくて、すごく広いのよ。だから、迷子になって危険だし、あの山には踏み入らない事ね」

妹紅がそういうと、文と慧音はウンウンと頷いた。

「いや、別に用事なかったら行くつもりはないぞ。山菜とかはあの山まで行かなくても森で沢山手に入るし」

「迷いの竹林には2度も入り込んだのに、よく言えるわね」

「妹紅の言う通りだ。フランドールに誘われたからと言って、紅魔館にも行ってしまおうのだからな」

「はたまた冥界にまで行っちゃいましたし。警戒心があるようでない。と言いますか、好奇心で動いているならまだいいのに、そうではないのだから、余計タチ悪いです」
 「なんでそこまで言わなきゃならんのだ。」

まあ、事実だから言い返せないけどさ。

「にやははははっ、なんだかおもしろい話してるね。私達も混ぜてよ」

「！！！！」

と、いきなり声がした方へ向くと、いつの間にか現れたのか、萃香が文の隣に座っていた。

慧音と妹紅は驚いた顔をしているけど、文は顎が外れそうなくらい口を開けて声にならない声をあげている。

相変わらず萃香には大袈裟な反応だな。

「そんなに驚かなくても私は何もしないよー?」

「い、いや、そういう意味ではなく、今の妖怪の山はとーつてもデリケートな状態でして、その……」

「ああ、そつちね。鬼はもう山から手を引いてるんだから今更茶々入れたりしないって。好きにしちやいなよ。ね、にとりー?」

萃香が横に目を向ける。そこにはぐったりとした顔をして、目が死んでいるにとりの姿があつた。

「にとりー!?!」

「大方、お前が河童たちの所で飲んで、酔い潰したつて所だな」

「流石、察しいがいいね♪にとりはまだ飲めるつて言うからもう1件付き合つてもらふと思つてね」

いつにも増して萃香が酔いまくつてると思つたら、既ににとり達と飲みまくつてたの

か。

「にとり、自分を犠牲にして仲間を救ったんだな」

「いや、慧音。あれはどう見ても逃げ遅れただけでしょ」

俺も妹紅の意見に賛成だ。

「んで、山の統制とかには興味ないけど、新しく来た神達にはちよつと興味があるんだよね。ユウキからみて彼女達どうさ？」

そういう萃香の目はギラリと光っていた。

全く、どこがちよつと、なんだか。興味ありまくりじゃないか。

「あのー？ 興味があるからって挨拶には行かないでくださいよ？」

「えー挨拶にも行ったらダメなの？」

「あなた方の挨拶ってちよつかい出しに行くって事じゃないですか！」

と、ここにとりがフラフラと起き上がってきた。

でも、目はまだ死んでるな。

「さつきもずーつと言ってたんだよお。外の神様がなんぼのもんじやー、かちこみだーって……私達でずーつと抑えてたんだから」

「あやややつ、お疲れ様だね、にとり」

何となくにとり達の苦労は分かったが、苦労をかけた本人の前でそれ言うかな。

「にやははつ、それにしてもここに戻ってきて正解だったね。ユウキと言い、宇宙人やら神様やら面白い事ばっかりだもん」

「なんか遠回しに俺が原因みたいに言つてないか？」

「言つてない言つてない。言うとしたらもつとはつきりと言つてるよ」

ま、そりやそうだな。

「あれ？ 難しい顔をして、どうしたの慧音？ 何か考え事？」

「いや、何でもない。それより、私もユウキ君から聞きたいな、東風谷早苗とはどんな娘に見えたのかな？」

俺から見た早苗の印象？ なんて慧音がそんな事気にするかな。

「私です。記者としても個人的にも興味あります」

「文は記者なんだから直接取材に行けばいいでしょ。ちなみに私も興味がある」

「ついでだから私も」

妹紅、にとり、お前もかい。

「確かに早苗と話はしたけど、そんなに長い時間してたわけじゃないし。神様にだって会つてないぞ？」

「それは私ですよ。早苗さんとは話をしましたが、神様は今回復中だからって事でお話聞けませんでしたし」

幻想郷に来るのに神様はほとんどの力使い切ったと言ってたな。

で、信仰が増えれば回復するから早苗はこれから布教活動するんだったな。

「早苗の印象か。霊夢を前にして博麗神社を寂れてるって2回も、それも悪気も悪意もなく素直な感想として言っちゃう天然さはすごいと思っただな」

「霊夢相手にそんな事を言っちゃうのは確かにすごいけど。それを天然で片付けちゃうユウキ先生もすごいと思うな。はい、これお酒と鰻の追加です」

呆れた顔をしながら、みすちーは萃香にとりの前に酒と料理を置いていく。

萃香は「この上客だからか、鬼相手なのに全く動揺してないな。」

「ありがとね♪ ふーん、怖いもの知らずな娘って所かな?」

「魔理沙も言ってたよ。霊夢にあそこまで言えるなんて肝っ玉が据わってるってね」

早苗が怖いもの知らず?

「いや、違うな。その逆だ。彼女は怖がりだ。だからこそ、失いたくないから必死なだけなんだよ。神様って言う家族をな」

ん? あれ? 空気がおかしいんだが?

「君は、本当に他人にはとても勤が鋭いよね」

「その反動か、自分には超鈍感だけどね」

「どういう意味だそりゃ。それよりもずっと気になってたんだけど、結局天狗や河童達

は、早苗達を受け入れたのか？」

幻想郷は全てを受け入れる。

紫はしばらく静観するようだが、彼女達が現れたのは妖怪の山。

しかも、神様付きの神社と一緒にだ。

俺の時とはまた違った特殊な事例だろう。

「そうですね。早苗さんは私達の所に来て色々話をされて、大天狗様や他の皆さんもとりあえずは様子を見ようという事になりました」

「こっちも同じだね。と言っても、河童はそういうの気にしないからね。水場を汚されたり独占されなければ問題ないよ。そもそも私達河童の社会なんて、外の世界風に言えば工場みたいなものさ」

天狗は会社、河童は工場、言いえて妙だな。

そういうえば、にとりには何度か工房に来ないかと誘われたけどその度に霊夢に行くなって釘刺されてたな。

あ、慧音と妹紅がジーつと俺を睨んでる。

「言いたい事があるならハッキリ言えって」

「さっき言った」

「妖怪の山には行かないっての」

なんでこう俺が妖怪の山に行きたがってるって勘違いするかな。

文にとりは俺が山へ行かないと言っても別に残念には思つてなさそう。

と言うか、安心してる？

「個人的には遊びに来てほしいですけどね。天狗の間ではあなたの事危険視してるのも多いですし。大天狗様は面白半分で来てもらいたがってますけど」

「大天狗様が面白半分でユウキ君に会いたがってるのは絶対文のせいだよね」
「うぐつ、そ、それはくそのく……何といいますか」

口笛吹いてごまかしてるけど、文は一体何をやらかしたんだ？

「またあることない事、というよりない事ない事新聞に書いたのか？」

「むつ、そんな事ありません。私はない事は書きません！ 誇張したりするだけです」
「自信満々に誇つて言える事かそれ!？」

新聞記者らしいと言えらしいか。

「あーなるほど。大体わかったわ。そりゃあんたのせいよね、文」

「自業自得、と言えるだろうな。ユウキ君にとつても、だが」

妹紅と慧音は、文が何をしたのか分かった風だけど俺にはサツパリだ。

てか俺も自業自得ってなんでだよ。

「そろそろこういう事にも鋭くなった方がいいと思うんだけどね、ユウキ先生？」

「ん、そこまで鋭くなったらもうユウキじゃなくなってるよ」

みすちーと萃香は何やら2人で酷い事言ってる気がする。

なんか俺以外の周り全員が理解しちやってる事、最近多くなってる気がするな。

「あ、新聞で思い出しました。近いうちにユウキさんにお仕事お願いする事になりますので、その時はよろしくお願いしますね」

「珍しいな、文が俺に仕事？ それなら金はいらないぞ。あの一件で一番世話になったの文だしな」

「いえいえ、これは正式な依頼ですし。こんな事で借りを返されるよりも、体で返して欲しいな……いやいやいや、嘘ですからそこで睨まないでくださいな、妹紅さん!」

「あんたの場合、本気でしようが」

「くつくつくつくつ、私の前で堂々と嘘をつくのかい？ いい度胸だね、文?」

「あややややー!?!」

「ふう、やつぱり自業自得だな」

なんでか知らないけど怒ってる妹紅と、9割9分便乗して怒ってるだけの萃香に追いかけられる文。

それを肴にして酒を飲む慧音にとり。

平和だなあ。

さて、文が俺に依頼したい仕事ってなんだろうな？

続く

第144話 「妖精探検隊（前編）」

あたいと大ちゃん、それに、光の3妖精であるサニー達の5人で遊んでいた。

最近、大ちゃんの元気がないみたいだから沢山遊んだら元気になると思った。

でも、大ちゃんはあたいたい達と遊んでいてもどこか考え事をしている感じだった。

なので、思い切って大ちゃんに聞いてみた。

「大ちゃん、何か考え事？」

と思っていたら、サニーに先を越された。

なんだか、敗北感。

「うん……何だか、最近のユウキさん。様子がおかしくないかな？」

「ユウキが？ うーん、どうだろう？」

大ちゃんの様子がおかしいって話が、ユウキの様子がおかしいって話になった。

「よく人里や神社で会ってるけど、特に変わった様子なかったわよね、ルナ？」

「そうね。昨日も人里でお団子ご馳走になったけど、変わった感じはしなかったかな。

サニーはどう？」

「うーん、そう言われてみれば、違和感があったような、なかったような？」

3人もよく分かかってないみたい。

だけど、3人共ユウキとよく遊んでお団子までご馳走になってるんだ。

なんだか、面白くない。あ、大ちゃん、目つき……こわい。

「それはおいといて。なんだかユウキさんと話してて変な感じがしたから、どうしたの
かなって思ったの」

「うーん、何か嫌な事でもあつて元気ないのかな?」

「元気がないようには見えなかつたよ?」

ルナやスターもだけど、あたかもユウキと話しても変わった感じはしなかつたかな。

でも、最初に会つた時とは違うような……うーん、考えても分からない!

「とにかく、元気がないならあたいたいで元気付ければいいよ。ユウキには沢山元気くれ
たし」

ユウキはあたいの事笑わなかつたし、励ましてくれて新しいスペルカードも考えてく
れた。

だから、今度はあたいが恩返しする番!

「うん、そうだね。ユウキさんにはお世話になりっぱなしだし」

大ちゃんも乗り気で、サニー達は何か話し込んでる。

「いつもご飯やおやつご馳走になってるし。私達も、恩返ししよう! って、2人してそ

の目はなに？」

「いやいやあ？ ベつつにー？」

「なんでもないわよー？」

ルナとスターがニヤニヤと変な目でサニーを見てる。

何か面白い事でもあつたかな？

「ふ、2人はいつつもユウキさんの事悪く言ってるんだもんね。いいわよ、私だけで恩返しするから」

「別に悪く言った事はないわよ。彼、面白いし。巫女より優しいし」

「そうねーイタズラは、毎回すぐにバレて怒られるけど、その後お菓子ご馳走になるし。うん、いい人よ」

「むうー」

そういうえば、サニー達はよく霊夢にイタズラ仕掛けてユウキに気付かれて怒られてるんだっけ。

物を隠してもすぐにユウキが見付けて、気配を消して隠れてもすぐにユウキや霊夢に見つかっちゃう。

ユウキって霊夢よりも勘が鋭い時あるから、3人の能力なんて簡単に見破っちゃうんだ。

ん、あれ？ 大ちゃんがニコニコしながら3人に近づいて行った？

「それでー3人共ー？ 行くのかな？ 行かないのかな？」

「ハ、ハイ！ イキマス！」

大ちゃん、笑顔がさつきよりも怖い。

氷精のあたいでも思わず身震いするほど、寒気がしちやった。

「それで、ユウキを元氣付けるって具体的にはどうするの？」

「ふっふーん。そこはあたいにいい考えがある！」

「あ、これ絶対失敗するやつだ」

ルナがすくしくしいな事を言っているけど、気にしない。

あたいは大人だもん。

「あたいがほかの妖精から聞いたんだけど、向こうの山の下に隠れた洞窟があって、その奥にとても綺麗な宝物が隠されてるんだって。それをユウキにあげよう！」

「向こうの山って、妖怪の山の隣の所？ それなら私も聞いたことあるわ」

「えー？ そんな面白そうな所知ってるならもつと早く教えてよ、スター」

「でも、私が聞いた話だと神様がいるからあそこには行ったらダメみたいなのよね。それに妖怪の山が近いから私達だけじゃ危ないし」

「かみさま？ あたいが聞いた話にはそんなの出てこなかったよ。それにあんたたちだけだと危険でも、今日はさいきよーのあたいがいるからきつと大丈夫！」

そう言うトルナとスターはどこか呆れた目であたいを見てるけど、気にしない気にはない！

「じゃあ、さっそく行こう！ 氷精探検隊しゅっぱーっつー！」

あたいと大ちゃんが行こうとすると、サニー達が前に立ちふさがった。

「ちよつと待った。なんで氷精探検隊なの？」

「だって、洞窟の場所を知ってるのあたいだし、それに言い出したあたいがたいちよーだから」

「ならスターだって知ってたじゃない。ここは光の三妖精探検隊しかないわ」

「サニー、何を張り合ってるのよ。それに名前が長いじゃない。この際、妖精探検隊でいいでしょ。私達みんな妖精なんだし」

そういえばそうだった。

今日はルーミアやリグル達は、用事でいないんだっけ。

なら、妖精探検隊でいいか。

こうしてあたい達は目的地の洞窟へとやってきた。

ここら辺はあたいも大ちゃんも初めて来る場所だけど、木々は普通に生い茂っている

のに、なぜか妖精や妖怪、動物も全く近くにいない。

「ここに来るまでもこのあたりも全く生き物の気配がしないわ。こんなの珍しい」
生き物の気配が分かるスターが驚いているけど、別に珍しい事じゃないと思う。

あたいただつて森をピクニックすると、誰にも会わない事よくあるし。

「やっぱり神様がいるから近寄らないのかしら？」

「だったら、これはチャンスじゃない！」

誰も来ないならあたいた達が宝物を取り放題。これはすぐに行くしかないよね。

「待つて、みんな。なんだかすごく嫌な感じするよ。行くのやめて、ユウキさんにはほかの贈り物にしない？」

でも、そんなあたいたを大ちゃんが止めた。

さつきまではユウキの為にーって張り切ってたのに、どうしたんだろ？

「どうしたの、大ちゃん？ あ、ここに何か書いてあるよ」

あたいたは、洞窟の入口に看板を見つけた。

随分文字が擦れていてなんて書いてあるか分からない。

「ダメだーこれじゃ読めないよ」

「でも、ここ、注 って書いてるように見えない？」

ルナが指差した所は、確かに注つて読めなくはないけど、やっぱりよく見えない。

「ねえ、せめて慧音先生や文さんに話を聞いてからにしない？」

「大ちゃんは心配性ね、大丈夫よ。何かいてもあたいが退治しちゃうし。いざとなったらサニー達の能力で逃げちゃうし」

「そうね。私達は逃げるから、チルノ頑張つてねー」

「おうー！」

サニー達に応援されて、あたいが先頭になつて洞窟へと入つて行つた。

やっぱりたいちよーは先頭にいないとね。

大ちゃんも中に入るのを迷つていたけど、結局あたい達に付いてきた。

大丈夫、何があつてもあたいがみんなを守るんだ。

「うわあ、この洞窟所々光つて綺麗。せつかく灯り持ってきたのに要らなかつたわね」
洞窟の中に入つて行つて、外の光が差し込まなくなつた辺りで壁や天井の岩が光つて
いるのが見えた。

光は薄い緑色で、ロウソクの灯りよりもボヤつとして弱弱しいけど、それでも洞窟
内を照らすには十分なほど光っている。

「なんで光つてるんだろう？ ヒカリゴケ、じゃないわよね。苔すら生えてないし」

「なんだか神秘的ね。これはますますこの奥に宝物がありそう」

「うん。早く行こう！」

洞窟内が明るくてよく見えるのが分かると、ちつとも怖くなくなった。あたい達はドンドン奥へと進んでいく。

よくルーミア達と探検する洞窟は、中が真っ暗で途中道がいくつも別れているけど、この洞窟はどうやら一本道のようなね。

これなら迷う心配もないし、何かあってもすぐに逃げられる。

大ちゃんも安心したようで、興味津々に洞窟内を見渡している。

「あそこ見て。青白い光が見えるわ」

洞窟内は緑色に光っているけど、スターの指差した先には、青白い光が見える。

「きつとあれがお宝の光よ！」

サニーは光に向かってすぐに飛び出していった。

「サニー、抜け駆けするつもりね！ そうはいかないから！」

「あ、チルノちゃん、待って！」

あたいもすぐに後を追った。

すると、目の前にいきなり大きく開けた空間が現れた。

どうやらここが洞窟の終点のようなね。

それにしても、これは……

「待ってよ、サニー、チルノ！ わっ、なにこれ！」

「こんなところに湖があるわ！」

これは、確か地底湖って言うんだっけ。

前にユウキに教わったから覚えてる。

開けた場所全体が湖になっていて、青白い光は湖の底から放たれていた。

「水面が光ってる、だけじゃないわね。何だろう、あの光？」

「もしかしてあれがお宝かも！ 潜ってみましょう！」

「……誰が？」

あたい達はお宝発見で、ワクワクして大盛り上がりだけど、大ちゃんの一言で止まった。

「だ、誰って、それはチルノでしょ？ 隊長なんだし」

「そうね。ここはチルノが行くべきよね。氷精だから水の中なんてお手の物でしょ」

「危ない気配はしないから大丈夫。だから行ってらっしゃい、チルノ」

サニー達に背中を押されて何だかすつきりしないけど、ここはたいちよーのあたいがいくしかないね。

「危ないよ、チルノちゃん。いつも泳いでいる川より深そうだよ？」

確かに、いつも泳ぐ川よりは深いかもしれないけど、大丈夫。

だってあたいはさいきよーだもん。

「っ!? 待って! 湖の底に何かいるわ!」

と、スターが急に大声を上げた。

地底湖に響き渡ってすごくうるさい。

「くあく、何よスター急に大声上げないでよ。で、何かって何? あなたさつき何の心配もしないって言ったじゃない」

「うん。そうだったんだけど。突然気配を感じたの。それもものすごく大きい気配。普通の妖怪とは違う……来るわ!」

スターが言うと同時に湖に巨大な水柱が上がった。

そして、その中からいくつも巨大な目玉があたい達を睨んでいた。

続く

第145話 「妖精探検隊（後編）」

私達の前に現れた巨大な水の怪物。

それは見た目だけでも強そうだけど、力も私が出会ったどの妖怪よりも強いのが一目で分かりました。

「あわわわっ……」

「ど、どうするのよ、サニーー！」

「私に聞かないでよー！」

あまりの迫力に、サニーちゃん達も怯えて動けない。

私もあの妖怪を見ただけで身体が動かなくなってしまうました。

それに震えが止まりません。

幽香さんや橙ちゃんのおばあちゃんみたいに強い妖怪は沢山知っています。

だけど、この感じ方はそれは何かが違っている気がしました。

慧音先生が教えてくれた、蛇に睨まれた蛙ってこういう事なのかな。

「ここは、あたいが何とかしなくちゃ……やい！ お前は何なんだー！」

「チルノちゃん!?」

チルノちゃんも最初は怯えていたけど、勇気を振り絞って妖怪に向き直りました。カッコいいけど、足が震えているよ？

「われの眠りを妨げるのはだれだ……」

「「っ!？」」

突然頭に声が響いてきました。

その声は、目の前の妖怪のものだという事はすぐに理解できました。

「あ、あたいはチルノだ! こっちは友達の大ちゃんに、サニーにルナにバターだ!」

チルノちゃんは負けじと大声で大妖怪に向かって叫びました

だけど、スターちゃんの名前、間違えてるよ。

「妖精? 何の用だ?」

「そのキラキラを取りに来ただけだ!」

「私の子を、だど? 赦さん!」

水の妖怪は洞窟中に響き渡るほどの咆哮を上げると、湖からいくつもの水柱が現れて私達に向かってきました。

いつも私達がやっている弾幕ごっこじゃない、本気で私達を攻撃してくるつもりみたい。

あんなの私じゃ対処できないし、サニーちゃん達の能力も多分無理。

「あたいにおまかせ！」

私が言うより先に、チルノちゃんが飛び出しました。

チルノちゃんはずいぶん動けるみたい。

でもあの妖怪、今までチルノちゃんが追っ払ってくれた妖怪とは大違いだよ。

それに、あの妖怪……本当に妖怪なのかな？

何だか、心のどこかで無意識に逆らったらいけないって思ってます。

「あたいたい知ってるよ！　水は簡単に凍るんだ！　【凍符・パーフェクトフリーズ】！」

チルノちゃんのスペルカードで、水柱は湖や妖怪ごと凍り付きました。

氷精のチルノちゃんに水の攻撃は効きません。

って普通は思うんだけど、私もサニーちゃん達もこれで終わったなんて全く思えませ

んでした。

——パキンッ

だからすぐに氷が砕けて妖怪は全くダメージがなかったようでも、不思議じゃありま

せん。

「うそお!？」

チルノちゃんだけは驚いていたけれども。

「チルノちゃん！　危ない！」

驚いて固まるチルノちゃんの目の前に水流が迫ります。

私はなんとか弱い弾幕を撃ってチルノちゃんを弾き飛ばして、水流から助ける事が出来ました。

「いててっ、あ、ありがと大ちゃん。このお、だったらこれだ！【氷符・フローズンコースター】」

「チルノちゃん、ダメー！」

私が止めるのが聞こえなかったのか、チルノちゃんは続けてユウキさんが考えてくれたスペルカードを使いました。

空中の水分を凍らせながら作ったコースターを滑りながら、氷の弾幕を妖怪に撃ち込んでいきます。

普通ならすぐに相手は凍り付くんだけど、あの妖怪には全く効いていません。

「このっ、このっ！」

それでもチルノちゃんは必死で弾幕を撃ち続けます。

「愚かな」

「うわあ!?!」

今までよりもさらに巨大な水柱が竜巻となってチルノちゃんを飲み込んでしまいました。

「チルノちゃん！」

それを見た瞬間、私は飛び出しました。

さつきまでは指一本動かせなかったのに、無我夢中でチルノちゃんの元へ。

「あ、ダメだよ、大ちゃん！ 逆らったらダメ！」

「あれは、妖怪なんかじゃないよ！」

サニーちゃん達もやつと、いや、最初から気付いていたのかもしれない。

目の前の存在は妖怪じゃない。神様です。

それも、大自然の神様。

私達妖精じゃ絶対に勝てないし、逆らえない存在。

「ほう？ この氷精だけではなく、お前も逆らうのか、大自然の申し子よ」

「ご、ごめんなさい！ あなたが神様だと気付かなくて。でも、お願いです。チルノちゃんを、離してください！」

この場所に妖怪も妖精も近寄らないわけが、ようやくわかりました。

この神様がいるからです。

この神様がいます。

幻想郷にも神様はいるのは知っているけど、この神様は別格。

人の信仰や思いから生み出されたり、物に宿る神様でもなく、自然そのものの神様。

だから自然から生まれた私達妖精は絶対に逆らえない。

それでも、最初はとても強い妖怪だと思っ
ていませんでした。

チルノちゃんは今でもそう思っ
てるのかもしれないです。

「お前達は、力強い。そして、人と交わりすぎた。だから我に気付かなかつたのだろう」

「人間に近く、過こし過こぎた？」

私達は、他の妖精よりも力が強くて人間の側にすぎたから神様の事分からなくなつたのかな。

でも、それなら他の妖精だって、好奇心から人間に近づいたりしてるけど。

「ふむ……脅かすのはこれくらいで良からう」

「えっ？ 姿が、変わった？」

突然水柱が消えて、チルノちゃんも解放されてさっきまでよりも身体が軽くなって、緊張もしなくなりました。

そして、さっきまで巨大な目が浮かぶ水の姿をした神様はいなくなり、代わりに人里で見かけるような恰好をした女の人
が立っていました。

薄緑色と青紫色の服を着て、髪の色は白に近い水色でまるで水のように。

何となくだけど、梨奈ちゃんのお母さんみたいな雰囲気の人です。

「ふはあく、やつとまとも息が出来るよ」

サニーちゃん達は腰が抜けたのか、その場にへたり込んでしまいました。

私もまだ足が少しふらつくけど、女の人に抱かれて目を回しているチルノちゃんの元へ向かいました。

「チルノちゃん！ 大丈夫!？」

「安心しろ。すぐ目を覚ます。この姿ならば、お前達も話しやすさかろう?」

「あ、えつと、はい……あなたは、さつきまでいた神様、ですか?」

「そうだ。あの姿は妖精には猛毒のようなものだからな。親しみやすい人の姿に変えたのだ」

それでも、目を見たら少し震えてしまいます。

「ふふつ、ここ数十年、この場所には妖精も妖怪も動物ですら来た事がないのでな。我も外へは百年以上出ておらぬ故、少し驚かそうと思つてな、許せ」

「は、ははつ、まだ腰が抜けて立てない、です」

「でも、悪いのは私達、だよな?」

「ごめんなさい」

私達が謝ると、神様はまるで子供に手をやくお母さんみたいな目をして笑っています。

「しかし、ここの水晶を持っていくのは許しませんよ。私の子であり、幻想郷の子でもあるのですから」

「幻想郷の、子?」

「我は、幻想郷の水の神、若宇加水杷（わかうかみずは） この湖は幻想郷の水源。あの水晶はやがて幻想郷の川や湖、雨となる子達。あの子達がいなくなると、いずれ幻想郷から水がなくなるのだ。だから持つていくのは許さないと云ったのだ」

うーん。難しくてよくわからないけど、あの水晶は水杷様の子供だから連れて行くのはダメって事だよな。

「ほーら、やっぱりここには神様がいて、来ちゃいけない場所だったじゃない」

「でも、結構乗り気だったよね、スター?」

「だって、お宝なのも本当でしょ?」

あ、水杷様がニコニコ微笑みながらもジーっとスターちゃんを見つめています。

「げ、幻想郷の大切な宝物よ!? だから、持つていくのはなしよね? ね?」

「うむ。聞き分けのいい子は好ましいぞ」

「スター……」

「あんたって……」

水杷様って、慧音先生みたいな神様だね。

「う、うーん……」

話し込んでいると、チルノちゃんが目を覚ましました。

「目が覚めたようだな、氷精」

「あれ？ 慧音先生？」

「我は先生ではない。神だ」

チルノちゃんもやつぱり水杷様を慧音先生と間違えたね。

とりあえず、チルノちゃんに水杷様と水晶の説明をしました。

水晶が幻想郷の水つて事はあまり理解できていないようだけど、水杷様の子供つて言うとすぐに謝りました。

「もずく様、ごめんなさい！ あたい、ゆうーかいは悪い事つて知ってるー」

「う、うむ、謝るのなら許そう。みずはともずくをなぜ間違えたのかは、触れない方がよさそうだな」

流石神様。

「でも、ならどうしよう？ ユウキに何を渡す？」

確かに、チルノちゃんの言う通りです。

ユウキさんを元気付けようとここまで来たのに、振り出しに戻っちゃった。

けど、あの水晶は絶対にダメだし。

「別にそんな珍しいものに拘らなくてもいいんじゃない？」

「ルナ、それ面倒くさいだけじゃない？」

「……ルナちゃん?」

「ひゃい!? そ、そんな事思ってないよ、私!? スターが適当な事言っただけだよ! チルノもサニーも怖い顔しないでよー!」

おかしいな。なんでルナちゃん、怖い物を見る目で私やチルノちゃんやサニーちゃんを見るのかな?

「……ぷふっ」

「えっ?」

突然、水杷様から笑い声がありました。

見ると、水杷様はおなかを抱えて大笑いしています。

なんだかさつきまでとイメージが違い過ぎます。

「ふふっ、あはははははっ! なんとこれは面白き事よ! まさか、かの者がこれほどの影響を与えるとはな。それほど強き想いを持てば、少しは枠からはみ出て我に気付かぬのも無理はない。なるほど、賢者達が警戒するのも無理はなからう」

水杷様、何一人で笑って一人で納得しているのだろうか?

「水杷様、どうかさされましたか?」

「いや、すまぬ。あの異世界からの外来人の影響力がここまでとは思わなんだ。やはり、ここに閉じこもってばかりではダメかもしれぬな」

「神様、ユウキの事知ってるの?」

確か、水杷様ってここから出てないんじゃないかな?」

それともユウキさん、ここへ来た事あるのかな?」

「もちろん。我はここを動かぬ。だが、水の神である我は幻想郷中の川や湖から情報を得ている。無論、ユウキという稀少な魂を持つ外来人の事も知っておるぞ」

「稀少な、魂?」

「おっと、お前達には難しい話だな。忘れるがよい。それよりも彼にプレゼントを渡したいそうだが、これはどうだ?」

そう言つて水杷様は、湖に手を触れると、水晶が付いた首飾りを取り出した。

その水晶は、湖にある水晶よりも透明でガラス玉のように見えた。

「水杷様、これは?」

「数十年ぶりの客人、それも妖精たちを手ぶらで帰すわけにはいかないからな。ほんの手土産だ」

「うわつ、綺麗。高そうですね、いいんですか?」

「うむ。これは水晶だが、我が子達ではない。御守り代わりと思つてくれれば良い。いずれ、役に立つ時が来るやもしれないからな」

「ありがとうございます、水杷様!」

「かみさま、ありがとう！」

こうして私達は当初の予定と少し違ったけど、無事に水晶を手にする事が出来た。

早速、私達はユウキさんへ渡すために博麗神社へ行きました。

そこで出会った霊夢さんにどこへ行ったのかと聞かれて、答えるともものすごく驚かれて怒られてしまいました。

「はあ!?! あんた達、あの湖に行ったの!?! ばっかじゃないの!?! 立札読まなかった!?! あそこは神聖ってだけじゃなくて幻想郷にとつて重要な場所だから誰も近寄らないの!?!」

「あう、ごめんなさい」

それから私達はみつちりと霊夢さんにあの湖の大切さと、水柺様の恐ろしさを教わりました。

「けど、あのかみさま、最初は怖かったけど、とつても優しくかったよ? あたい達にこれ渡してくれたし」

「えっ? そうなの? あら、これって……ええ!?! これをくれたの!?!」

水柺様にもらった首飾りを見せると、霊夢さんがさつきよりも更に驚いた顔をしました。

「あの水神様が妖精に、それも人に渡す為にくれるなんて……そう。なら、この話はこれでおしまい。ユウキさんならあいにく昨日から出掛けているわよ。もうすぐ戻ってくると思うから、待つてなさい」

「「はーい！」」

霊夢さんも少し変わった気がします。

前にもっと、こう周りに無関心というか、近寄りがたい感じだったけど、今はそれは感じません。

これも、ユウキさんのおかげかな？

続く

第146話 「執事体験（前編）」

今日明日と俺は紅魔館に泊まり込みだ。

と言つても、いつものように遊びに来たわけじゃない。

この前の異変での一件で色々心配をかけたようなので、その借りを返す為にやってきた。

そして、どう借りを返すかと言えば、紅魔館の執事になってレミリア達の世話をする事になった。

それはいいのだが……

「お待たせしました、レミリアお嬢様。今日と明日、誠心誠意お世話をさせていただきます」

「……似合ひすぎてて逆に気持ち悪いから、髪形も戻して口調も普段通りにして」
解せない。

今着てる執事服はレミリアが今日のためにわざわざアリスに頼んで作ってもらったというのに。

髪型だって咲夜に執事らしいようにワックスでオールバックにしてもらったという

に。

似合っていないならわかるけど、似合いすぎてて気持ち悪いって……

ちなみにこの格好を見たこあは鼻血を出して倒れてパチュリーが看病している。

ホントに彼女悪魔と思えないよな。

「ええーお兄ちゃん、せつかく似合ってたかつこよかつたのに勿体ないよ！ 美鈴もそ

う思うでしょ？」

「そうですよ、普段よりもクールで上品な感じが素敵で……「惚れなおした？」……はい、

惚れ直し、って何を言わせるんですかフランお嬢様！ 咲夜さん、顔怖い顔怖いです！」

何やってんだあいつら。

「ま、普段通りでいいって言うならこつちも気が楽だけだな。で、執事と言っても何をす

ればいいんだ？ 咲夜がやってるように掃除や洗濯、レミリアのボケにツツコミ入れた

りすればいいのか？」

「そうね。基本的には咲夜のお手伝……って待ちなさい。私のボケにツツコミつてそん

な事咲夜はしてないから！ そもそも私がボケるわけないでしょうが！」

「お嬢様。それがすでにボケです。そして、これがツツコミよ。わかってるじゃない、ユ

ウキさん」

「わかってなーい！ あんたが一番わかってないわよ、咲夜！」

おうおう、早くも主従漫才を繰り広げるとは。

でも、咲夜がいれば俺がツツコミ入れる必要ない気もする。

「もう、何やってるのお姉様。せっかくお兄ちゃんが執事やってくれるっていうのに、そんな普段やつてる下らない仕事を押し付けちゃダメでしょ」

「いやいや、ボケてないから仕事じゃないから！　というか、今ボケてるの確実にあなた達よね？　私がツツコミ入れてるわよね！」

「じゃあ、まずは昼食の仕込み、手伝ってもらおうかしら。掃除は午後でいいわ」
「主を無視して仕事に行こうとするなあ！」

何か吠えているレミアアをほつといて、美鈴は門へ、フランはパチュリーの所へと、俺達はそれぞれの仕事場へと向かう。

これが普段の紅魔館の日常風景だから慣れっこだ。

厨房で料理に使う野菜の皮むきをしていると、魚を捌きながら咲夜がほほ笑んだ。

「こうしてここで一緒に調理していると、あの頃を思い出すわね」

あの頃とは俺が怪我をして紅魔館の世話になった時の事だろう。

そういえば、あの時もこうやって咲夜の手伝いしたっけ。

「思い出すって、まだ数か月ほどしかたってないだろ」

あの時はまだ冬だったが、今ではもう夏になっている。

「まだ数か月でも、私達にとつてはもう数か月なのよ。だって、あの時の出来事が私達を変えたのだから」

「変えた、ねえ。俺は以前の咲夜達を知らないからなんとも言えないけどな」

「この妖精達はレミリア達が前より明るくなつたとはよく言ってるけど、俺からすれば前から明るい。」

ただ、レミリアとフランは互いに不器用だったただけだ。

「あなたなら、きつとそういうと思つたわ。さて、それじゃあ料理はこのまま任せるわね」

「ああ、分かつた。つておい。俺は手伝いで咲夜がメインでやるんじゃないのか?」「せっかく執事をするのなもの。料理もやつてもらわなくちゃ。それに、レミリアお嬢様をはじめ、紅魔館全員があなたの手料理を食べたがっているのよ。大丈夫、今回は私を手伝いをするから」

今日作る料理は最初に咲夜から聞いていたし、その料理なら俺でも作れるから問題ないが。

なんだかはめられた気分。

「本日の昼食は全て私が丹精込めて作り上げました。どうぞ心行くまでご堪能下さいませ」

「……あなた、気色悪いからやめなさいって言ったのに、わざとでしょ」
「何のことでしょうか、レミリアお嬢様？」

別に咲夜に嵌められたから八つ当たりしたわけじゃないぞ？

「へえ、執事服結構様になってるじゃない。小悪魔が倒れたわけね」

俺の執事姿を初めて見たパチュリーは、興味津々で俺を観察してくる。

若干顔が赤いような気がするが、風邪でも引いたのかな？

「わーい！ お兄ちゃんの手料理だ！」

「相変わらず美味しいですね。咲夜さんの手料理とはまた違った味わいがあります」

「なら私と彼の料理、どちらが好きかしら？」

「もちろんユウキさんの方がす……いやいや、その手には乗りませんよ、咲夜さん」

美鈴と咲夜は何の話をしているか知らないけど、聞かない方がよさそうだな。

「それで。ユウキは午後はどう回る予定なの？」

「午後は、掃除と洗濯を終えてから図書館へ行くよ」

「そう。それじゃそれまでにこあを回復させないとね」

パチュリーは嬉しそうに微笑みながら去って行った。

フランと美鈴は、その後ろ姿を見ながらニヤニヤしている。

「パチエつたら張り切ってるわねえ。もつとゆつくり昼食を楽しめばいいのに」

「お嬢様は遅すぎます。もうお嬢様以外は昼食はお済みになりましたよ？」

「え？ うそっ!?! あれいつの間に!?!」

レミリアは俺の料理を食べるフランを嬉しそうにじつと見ていたから食べるのが遅れた。

「もうお姉様。お兄ちゃんのせつかく手料理、残したら勿体ないでしょ。私が食べてあげるね」

「えっ? ちょ、フラン?」

「では、デザートは私が……」

「待ちなさい! ユウキ(の料理)は私のものよ。あなた達には渡さないわ……あつ」

「「……………」」

面白いくらいにフランと咲夜と美鈴が同じ表情を浮かべてレミリアを睨んでる。

「ご、ごごごかいししないでよね! ご馳走様! ちよつとシエスタしてくるわ!」

3人の視線に耐えられなくなったレミリアは、目にもとまらぬ速さで食堂から飛び去って行った。

そんなに慌てていくと、途中で窓からの日光にぶつかるぞー

「ギャー!? 日光、あつつ! あつついいー!」

ほら言わんこつちやない。

「あの程度ならすぐ回復するだろうから心配しなくていいよ、お兄ちゃん」

「さて、それじゃ午後のお勤めを始めますか」

「ユウキさん。まずは食器を片付けましょうか」

つくづくここの主の扱いが悪い気がする。

午後の仕事。

まずは、紅魔館の掃除からだ。

「私は床をやるから窓をお願いね。普段は私は能力使ってやっているのだけど、ユウキ

さんなら問題ないでしょ?」

「ああ、じゃさっそく使わせてもらおうぜ」

幻想支配で咲夜を視る。

咲夜の能力は何度も使った事があるので、使用時間も結構長くなっている。

時間を止めて、空を飛びつつ窓を拭いてく。

こんな数多くの窓を一枚一枚磨いていったら何日かかるか分からないな。

ホント、咲夜の能力は日常生活にも便利だ。

「よお、こんな所で何をしてるんだ？」

中の窓は吹き終えたので今度は外の窓掃除を始めると、魔理沙に声をかけられた。どうやら門番の美鈴はピチュンしたようだな。

あとで様子を見に行くか。

「見ての通り、窓掃除だ」

「なんだ。今日は紅魔館でバイトか？ だったら私の仕事手伝ってくれたら分け前弾むぞ」

「バイトでもない。ただの手伝い。そういう魔理沙こそ、こんな所で何してるんだ？ パチュリーならフランの訓練中だ。それとも訓練相手になりきたのか？」

「冗談言うなよ。前ならともかく、今のフランの相手はコリゴリだぜ」

最近のフランは、魔力コントロールが上達して弾幕ごっこも格段にうまくなった。たまにレミリアが負けるくらいだからな。

「そうか。なら一体何の用だ？」

何となく魔理沙が何しに紅魔館へ来たかは予想できるな。

「いやあくちよつと図書館から本を借りようと思っただけだぜ」

「ふーん。それはちよつど良かった。俺さ、今日明日と紅魔館の執事をやっているんだけど。パチュリーから一つ頼まれているんだよ」

「そ、それは非常に興味深いが、あいにく私は用事を思いだしたから……」

察したようで、逃げようとする魔理沙の肩をガシッと掴む。

「は、離してくれないかユウキ？ 私はこれから帰る所なんだぜ？」

「まあ、そう言うなよ。俺の仕事をさせてくれよ。パチュリーからさ、泥棒が入りそうになつたら退治してくれて頼まれてるんだよ。その泥棒は白黒の魔法使いで箒に乗って飛んでくるっていう話なんだよ」

「それって、もしかして私の事か？ 偶然だよなー？ 箒に乗った白黒の魔法使いなん

て私の他に沢山いるもんだぜ？」

「いるわけないだろー！」

——ピチューン

こうして色々な意味で掃除を終えて、俺は次の仕事場である図書館へ向かった。

図書館の掃除はこあがやっているので、ここで仕事は何度もやっている魔導書の整理だ。

「さっきのアレ見てたわよ。久々にスカつとしたわ。ありがとう」

「気にするな。仕事をしたただけだ。で、こあは？」

図書館にはパチュリーがいるだけでこあの姿が見えない。

そう聞くと、パチュリーが盛大に大きなため息をついた。

「こあならあなたが来た途端に鼻から血を吹き出して貧血になったわ」

「またかよ。なんだ？ 俺のどこか変か？ せつかく髪型元に戻したのに」

オールバックも新鮮だったんだけどな。

「多分、そのせいよ。オールバックで執事服のあなたも新鮮だったけど、普段の髪型で執事服というのにもこあには刺激が強すぎたみたいね」

「……………夕食にレバナニラとか沢山作るか」

「レミイが心底嫌がるわよ、それ」

2人して大きいため息をつく。

しようがないので1人で魔導書整理を始めた。

パチュリーも手伝うと言ったが、この程度なら1人で十分だ。

「その、へ、変な本とか怪しい本とかあつたらすぐ私に言いなさいよ？ 絶対に開けちゃだめよ!!」

「分かってるよ。いつかみたく日記とかポエム本とか見たりしないよ」

「つゝ！ あの時的事は忘れなさい！」

「こあの悪戯で魔導書とパチュリーの日記や恥ずかしい本の表紙が替えられる事が何度もあった。」

その度にパチュリーの黒歴史が色々暴かれて悶絶するわけだが、見ている分には面白
いんだよな。

でも、あの時こあが悪戯した本は全て回収して、もう何も残ってはいないはず。

それでも、また新しくこあがすり替えた本があってもおかしくはない。

「ん？ これは、当たりかな」

そう思っていたら早速それらしき本を見つけた。

ちよつと古めかしい表紙にしては、内部は新しそうで、表紙と本の中身の匂いが微妙
に違う。

「パチュリー、これなんか怪しいから開けてみてくれないか？」

「あら、またこあの悪戯かしら……っくく!?!」

俺から本を受け取り中を開いた途端、パチュリーが顔を真っ赤に声にならない悲鳴を
あげた。

「どうした、パチュリー？ 呪いでもかかっていたのか？」

「な、ななななんなんでもない、なんでもないわ！ それよりも、あなた！ こ、この
本まさか見てないわよね、見てないって言いなさい！ でないと呪うわよ！」

ここまで動揺するパチュリーも珍しいな。

よほどの事が書かれた本だったようだ。

「落ち着けて。俺は何も見ちやいないよ。表紙と中身に違和感あったから持ってきただけだ」

「そ、そう……それなら、いいわ。ゴホツゴホツ！」

安心したように近くのソファアに座り込んだ途端、激しくむせ返した。

これは持病の発作がでたのか？

一度、永琳に看てもらった時に薬をもらって落ち着いてきたはずだったが。

「大丈夫か、パチュリー?! 今水持つてくる」

「だいじよ、エホツ、ケホツ……大丈夫よ。ちよつと興奮しすぎた、わ」

大丈夫と言いながらもなおも咳き込むパチュリーが持っていた本から、一枚はらりと何かが落ちた。

「なんだこれ?」

「えっ? あつ、ひ、拾っちゃダメ!」

パチュリーが慌てて落ちた紙を拾おうとしたが、うまくつかめず風圧で紙がペロリと空中で表を向いて地面に落ち、思わず目が向いてしまった。

その紙切れは写真で、そこに写し出されていたのは……

「み、見ないでえ〜!」

「……………めん」

パチュリーの寝顔だった。

「っ?! つゝゝ!!」

—ポカポカ

顔どころか首元まで真っ赤にしたパチュリーにポカポカ叩かれた。

痛くはないが、その衝撃で今度は本自体が床に落ちて、中に貼られていたであろう写真がばらまかれた。

そこにいつもの寝巻のような服とは違い、可愛らしいパジャマに身を包んだパチュリーのような寝顔や寝姿が写されていた。

中には、パジャマがはだけて、きわどい部分が見えそうな写真もあった。

すぐに俺は目をそむけたが、何枚かが目に写ってしまった。

「はっ、ハハハハ……キユウ」

「パチュリー!?!」

あられもない姿を俺に見られたショックからか、パチュリーは白目を向いて倒れてしまった。

しばらくして目を覚ましたパチュリーは即座に写真と本を燃やした。

そして、部屋で寝込んでいるこあの所へ行き、ありつただけのスペカをぶち込んで部屋ごとこあが吹き飛んだ。

あの部屋の掃除は俺がするんだろーなーと思いつながら宙を舞うこあを見上げていた。

続く

第147話 「執事体験（中編）」

「この部屋掃除は結局本人にやらせる事になり、俺の図書館での仕事は終わった。で、夕食の支度に入るわけだが。」

「夕食はあなたに任せるわ」

「私、お兄ちゃんの手料理食べたいの」

「あの、私も食べたいです」

と、レミリア、フラン、美鈴に立て続けに言われ。

「後生ですから、ユウキさんの手料理をおく！」

貧血で倒れて昼食を食べ損ねたこゝからは泣き落としをされてしまい、仕方なく夕食も俺が作る事になった。

「全くみんな揃って同じこと言うかな。別に作るのはいいけど、俺なんかより咲夜の料理の方が美味しいだろうに」

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、私だつてあなたの料理は食べたいわよ？」

結構食材使ったから足りないかとも思ったが、いつの間にか咲夜が食材を買い足していたようだ。

昼食は、魚と野菜中心だったので夕食は肉系で行こう。

「で、こゝあはそこで何してるんだろ?」

「さあ?」

咲夜と2人でドアに視線を移すと、そこにはこゝあがジーつとこつちを見つめていた。さつきから何か言いたそうにしてるから少し気になる。

「こゝあ、お腹空いたの? パンくらいならあるわよ?」

「あ、いえいえ。空きましたけど、ユウキさんの料理まで我慢します!」

「どんだけ俺の料理待ち遠しいんだよ。そんな大層なものじゃないぞ。咲夜の料理の方が美味しいって」

こゝあまでくると病気としか思えなくなってくるぞ。

自動で俺の料理に麻薬物質でも入ってるんじゃないだろうな。

そんな能力、学園都市でもなかったぞ。

「はいはい。とにかく、ユウキさんが集中できないから図書館へ戻りなさい。出来たら呼ぶわよ」

「……はーん」

気にはなるけど、集中力途切れるほどじゃないけどな。

「ねえ、ユウキさん。夕食は和食にしてみましたらどうかしら?」

「ん？ レミリア達って洋食メインだろ？」

昼食はムニエルとかパスタとか洋食メインで作った。

紅魔館では和食より洋食の方がイメージ合ってるからな。

レミリア達には何度か博麗神社で食事出したけど、あの時は材料的に和風にしかならないからそうしていた。

「だからこそたまには和食がいいのよ。それに、和食なら私よりあなたの方が美味しいわよ？ 味噌汁とか」

「それなら霊夢の方が美味しいぞ」

俺は料理はなんでもやれるが、得意料理というものはない。

「ここで味噌汁とかって合わないんじゃないか？」

「だからこそよ。それにこれはフランお嬢様からのリクエスト。レミリアお嬢様は、あなたが作る和食なら何でもいいって言っていたわ」

今、俺が作るって部分強調しなかったか？

ま、リクエストがあるのはいい。何を作るか考える手間が省ける。

「あ、そうそう。肉じゃがもお願いでするわ」

「それは誰のリクエストだ？ 美鈴か？ パチュリーか？」

「いいえ、私よ。前に作ってくれた味が忘れられなくて。いい機会だからと思って」

お前かよ！ 確かに以前作ったけどさ。

あの時は大ちゃんや妖夢が絶賛してたな。

何か幻想郷に来て、料理の腕上がってる気がする。

学園都市じゃ滅多に作ってなかったしな。

「ほかにリクエストはあるか？」

「いいえ。後はあなたにお任せするわね」

こうして作り始めたわけだが。

こゝろがまたしても覗き見にやってきて、パチユリーに連れ戻されてくという事が3回ほどあった。

場の雰囲気似合わない和風な食卓で、スカーレット姉妹による漫才でにぎやかな夕食を終わった。

さて、次はフランと遊ぶ番だな。

と言つても勿論、ただ遊ぶわけじゃない。

フランの特訓の成果を確認する為、俺が鬼になり鬼ごっこをすることになった。

「お兄ちゃん、準備はいい？」

「俺の方はいつでもいいぜ」

「じゃ、いっくよー！」「禁忌・フォーオプアサインド」

スペルカードで4人になったフラン。

何度もこのスペカは何度も見てきてるけど、今回ほど4人とも強い力を感じた事は無い。

全く同じように分身してるように見えて、実は4人の魔力にばらつきがあったからな。

「ユウキさん、頑張ってくださいね！」

「おう。美鈴、力借りるぜ」「幻符・幻想支配 モード美鈴」

幻想支配で美鈴の気の力を全身に纏い、身体能力を強化する。

これで、どうにかフランの相手ができる、かな？

「2人共準備が整った所で改めてルール確認ね。ユウキは逃げるフランを4人共掴まえる事。フランの5秒後にユウキがスタート。弾幕なし、今使った以外のスペカなし、範囲は紅魔館の地上部分のみ。制限時間は30分。いいわね？」

「ああ」「うん！」

「それじゃ、スタート！」

パチュリーの合図と同時にフランが文字通り四方八方へと飛び去って行く。

「5秒経過です」

「よしっ」

5秒待つて俺がスタート。

咲夜とパチュリーが空間を弄ったので、紅魔館内は普段の何倍も広くなっている。

美鈴の力は慣れているので、スペカを使わなければ30分は余裕で力がもつ。

が、それでも30分は決してない長くはない。

ここは最初から全力で飛ばしていく。

「まずは……」

すぐ近くに隠れているフランの元へと行く。

「フランA、かくれんぼじゃなくて鬼ごっこなんだけど？」

「えへへっ、近くにいたら気付かれないかなーって思ったんだけど、流石お兄ちゃん」

「気配を探るのは得意なんでね」

だからチルノや大ちゃん達とかくれんぼする時は鬼役は絶対にさせてくれない。

ルナやサニーの能力で隠れてもすぐに見つけてしまい、勝負にならないからだ。

「むう、今度は気配を消す特訓しないとダメかあ」

そう言いながらフランはパチュリーと美鈴の所へと戻って行った。

ちなみにレミリアと咲夜は部屋で俺達の鬼ごっこを見ている。

間近で見ると、レミリアが混ざりたくなるから、とは咲夜の弁。

本人は否定していたが、ありや凶星の反応だった。

「さてと、次は……」

広間に出て上を見上げる。

上に1人いる。本人は隠れているつもりなのだろうが、羽根飾りが見えている。

「見つけたぞ、フランB！」

「わっ、もう?」

ひと息で3階まで飛び上がり、隠れている（つもり）のフランへと手を伸ばす。

が、今度はフランの方も分かっていたようで、さっと身かわし飛び去った。

これでやっと鬼ごっこらしくなった。

「おーにさん、こっつちらっ♪」

「余裕そうだな」

フランの飛行速度は前よりも速く、いくら美鈴の力で強化されていても俺の速度じゃ追いつけない。

が、屋外だったら難しいが、ここは屋内。

いくら紅魔館内が広くなったとはいえ、それは廊下が長くなっただけで天井の高さや壁の広さはそのままだ。

ちようどいい所に曲がり角が見えてきた。ここで勝負を決める。

—タンツ、ダツ!

「ええ!？」

まずは横の壁を蹴り勢いをつけて、正面の壁を蹴りあがり、勢いを増して体をひねり最後に天井を蹴り最大限に加速。

そして、曲がり角で速度を落としたフランの頭に軽く触る。

これで2人目ゲットだ。

「うー……負けたあ」

「それはレミリアの持ちネタだからやめてあげなさい」

フランBも待機場所へと戻って行く。

2人をスムーズに捕まえたように見えるが、残り時間は15分。

止まつてる暇などなく、走りながら気配を探る。

と、ここで壁を蹴り、反動を利用して後ろを振り向き手を伸ばす。

そこには、驚きの表情を浮かべ固まるフランCがいた。

「バレバレだぞ、フランC」

「わわっ!？」

フランBを追いかける俺の後ろをこっそり付いてきていたのは気が付いていた。

なので、気づいていないフリをして不意をついた。

「むう、バレないと思ったのに」

「フラン、少しは真面目に逃げような？」

「はいー！」

フランにとつては遊びとは言え俺にとつては仕事。少しは真面目に鬼ごっこをしてほしいものだ。

鬼ごっこつて時点で真面目というのもどうかと思うけどさ。

「さて、残るは本体か」

これまで捕まえたフランたちはいずれも分身体だ。

「てか、分身体を囮にして本体はどこかへ隠れたか」

これじゃ鬼ごっこ言うかかくれんぼだな。

ま、フランの特訓の成果は視ただけですぐに分かったけどな。

執事の仕事としては、こっちの方が合ってるか。

「気配もなしか」

動いてはいないみたいだから、どこかに隠れたのは確かだ。

紅魔館全ての部屋を調べるのは、時間的に絶対に無理。

なら、フランが考えそうな所を探した方がいい。

「なら、あそこかな」

残り時間、5分を切った。

違っていたら負け。別にそれでもかまわないけど、何もしないで負けるのは性に合わない。

「ここで違っていたら、負けだな」

俺は、とある部屋の前に来ていた。

直感ではないけど、フランは多分ここにいる。

一応中からは部屋の主の気配しかない。

——コンコン

「……入っていいわよ」

珍しく、ノックしてからの返事が返ってくるのが遅かった。

それで確信した。フランはこの部屋にいる。

「レミリア、入るぞー」

「……そこは普段通りで来るのね。ホント、予測できないわあなた」

部屋の中には呆れ顔のレミリアが椅子に座っていた。

テーブルの上には俺達の様子を見ていたと思われる水晶が置かれていた。

「執事口調はやめろって言ったのレミリアだろ。で、時間ないから失礼するぞ」

「あつ、ちよつと！」

まるで誰かがいるように少し膨らんだベッドに近づき、その下を覗き込む。

「見つけたぞ、フラン」

「あーあ、見つかった」

ベッドの上が少し膨らんでいたが、そこにいたのは咲夜だ。

ご丁寧なフランに似た色の金髪のウィッグを付けている。

これで俺の目を誤魔化せると思ったのか。

「申し訳ございません。フランお嬢様。やはりユウキさんは騙せませんでした」

「あはは、仕方ないよ。お兄ちゃんだもん」

いやいや、咲夜とフランじゃ体型とか違いすぎて囧にならないだろ。せめてレミリア

だろそこは。

と言うか、主のベッドに入るのは良いのか咲夜よ。

「ま、これで全員見つけたんだが……これ、鬼ごっこなのか？」

「何でもいいわよ。フランの成長が分かればね」

確かに。分身体はともかく、本体のフランは力も気配もうまく消せていた。

見付ける事が出来たのは、俺が探さないであろう場所に隠れると思ったから、たまた

まだ。

「では、レミリアお嬢様、フランお嬢様。そろそろお休みの時間です。お支度を」

本来、吸血鬼であるレミリアとフランは、これからが活動時間だ。

「だけど、最近ではすっかり人間のペースになって、夜は寝る事が多い。」

「あら、もうこんな時間なのね。フラン、満足したでしょ？」

「うん！ とても楽しかった。またやろうね、その時はお兄ちゃんが隠れてね」

「ああ、分かったよ」

その時は、本気で隠れてやる。

「それじゃ、ユウキ。お風呂に入るから背中流してくれる？」

「ああいいぞ」

「……」

あれ？ 3人共微妙な顔して固まってる。

「ユウキ、あなた何もいう事ないの？」

「いう事？ ああ！ 吸血鬼が風呂に入っているのか？」

確か流水がダメなんじゃなかったっけ。

「違うわよ！ 流水を渡れないだけで飛ばばいいだけだし。それに、風呂やシャワーダ

メなら致命的でしょう！ じゃなくって！」

「レミリアお嬢様、落ち着いてください。ユウキさん、ワザと言ってるだけですわ」

あ、咲夜にはバレてたか。

「ワザ、と？ ふ、ふーん。そんなの分かってたわよ。私も乗ってあげたのよ。ノリツツ
コミよ」

「お姉様、それノリツツコミじゃない」

さーって、これ以上ここにいると変な事になりそうだから、次の仕事に行きますか。
次は、門番の仕事だったな。

続く

第148話 「執事体験（後編）」

さて、後は美鈴の仕事を手伝って今日は終わり。

のはず、だったのだがレミリアに図書館に呼ばれた。

「どうしたレミリア？ 眠れないから絵本読んで欲しいのか？」

「違うわよ！ それにあなた、フランクにしろとは言ったけど、程度が過ぎるんじゃない！？」

「失礼いたしました、レミリアお嬢様。早速ですが、こあが持つてきたこの絵本をお読みいたしますので、ベッドにお入りください」

「わーい！ 絵本絵本♪ ……つてなるかー！ いつの間に用意したのよ、このベッド！」

一度はベッドに潜り込んだレミリアが勢いよく起き上がったのノリツツコミ、流石は紅魔館の主だ。

ちなみにベッドを用意したのは、こあだ。

「こあ、ナイス」

「イエーイ♪」

満面の笑みで俺とハイタッチをかわすこあは、まさしく小悪魔だった。

「あなた達、レミイで遊ぶのは後にしなさい。ってこれ私のベッドじゃないの！」

「はい。私よりパチュリー様の部屋の方が近いので」

「近いので、じゃないわよ！ 早く戻してらっしゃい！」

「はい」

気を取り直して、本題に入ろう。

「コホン。あなたを呼び出したのは他でもないわ。実は、今とある計画をパチエと立てていてその意見が聞きたいのよ」

そう言ってレミリアが取り出した大きな紙には 「紅魔館ホームアローン計画」と

書かれていた。

「……」

「どれどれ？ ああ、トラップの質はともかく配置はいいな。なかなかえぐい位置になっている。後はもうちょっと効果的なトラップを仕掛けられれば完璧だ。で、このトラップは撃退・捕獲・抹殺、どういうレベルを想定しているんだ？」

トラップと言っても、その用途に応じて様々なレベルがある。

ただ撃退するだけなら殺傷能力よりも派手さを重視すればいいし、捕獲なら麻酔や電撃を使って一瞬で敵の意識を刈り取るトラップを仕掛ける。

抹殺は簡単だ。爆弾や猛毒などを仕掛ければいい。

で、この計画に使われる予定のトラップは撃退と捕獲を重視しているようだな。

「違うわよ！ てか何よこの計画！ パチエー！」

「あーこれ確かに私が考えたものね。思い出したわ。魔理沙に泥棒に入られて魔導書を盗まれて、ヤケ酒飲みながら考えたのよね。レミイが言ってる計画はこつちよ」

「……もうつつこむ気もないわ。とにかく、この計画は見なかったことにしましょう」
ホームアローン計画はレミリアの手で燃やされてしまった。

結構、面白い計画だと思うんだけど、主であるレミリアが乗り気じゃないなら仕方ない。
い。

まあ、既にいくつか取り付けられているようだけど、それは解除しなくていいのかな。
「私達が計画しているのはこれよ、コレ」

レミリアは今の気が削がれたようで、半ば投げやりにパチユリーが出してきた紙を広げた。

「月面侵略計画？ 随分と物騒な計画だな」

これによると、外の世界にならつて月へ行けるロケットを作り、鈴仙達がやってきた月の都へ信仰するという計画らしい。

「侵略と言ってるけど、別に征服したいわけじゃないわ。レミイが仰々しくかつこつけ

ただけ。本当の目的は、月の都の技術力を手に入れる事」

「あら、ロケットで乗り込んで何でもいいから月の都にある物を持つてくるのよ。立派な侵略じゃない」

「で、なんでそんな計画を？ 鈴仙達に何か触発されたか？」

宇宙人が珍しくて宇宙に行ってみたくなくなった、かな。

今思えば、宇宙人に初めて会ったんだよな。

鈴仙に会った時、もつとりアクションすればよかったか。

ま、これ以上はないってリアクションしたからいいか。

「そんな所ね。月には都があるのは知っていたけど、あまり興味なかったのよね。月はそのこにあるだけで意味があり、月に行こうなんて思わなかった。けど、実際に月の住民に会い、その技術力に興味湧いたって言うわけよ」

鈴仙達、何か月の都の技術力見せたっけ。なるべくそういうのは見せないようにしていた……あ、あの薬か。

俺も世話になった。瀕死の重傷でも完治させるあの薬。

あれがあればどんな大怪我しても問題はないな。

人間である咲夜やフランに万が一があつた時の為に欲しいのか。

でも、咲夜は一度あの薬の世話になっているから、もう効かない。

ならば、あの薬を調べる事が出来れば似たようなものが作れるようになる。

「で、こことは別世界とはいえ、外の世界よりも遥かに進んだ科学力の持つ学園都市から来た俺に」

「そう。宇宙へ行くロケットの事を聞きたかったのよ」

「なるほどな。だけど、生憎俺は宇宙関係には詳しくないぞ?」

いくら学園都市の裏側の人間で科学にも詳しいとはいえ、宇宙は俺の専門外だ。

宇宙空間用の駆動鎧や、無重力空間での戦闘って言うならわかるけどな。

エンデイミオンへ行った時も、当麻達みたくロケットで行ったはなく、シャツトアウラと一緒に軌道エレベーター使ったし。

「それでも、ロケットに関する科学的な知識はあなた以上の存在はここにはいないわ。あなたが知る限りで構わないわ。それが私達に必要な知識かどうかは問題ではないの」

俺のわずかな知識でも手掛かりにするって事は、はかどっていないのかな。

まあ、いい。専門外とは言え、一般的な知識ならあるしな。

教えるにしても科学が発達してない幻想郷じゃ、初歩から教えた方がよさそうだな
「じゃ、まずロケットの構造から行くぞ」

「お願いします。ユウキ先生」

レミリアはともかく、パチュリーまで俺の先生と呼ぶとは。

しかも、ニヤついでるし。俺が先生呼びされるの苦手なの知ってて思いつきり確信犯だな。

さっきの仕返しのももりなのだろうか。

それからレミリアとパチュリーにロケットについて色々と話をした。

色々と言っても、ホントに俺が知ってる事って少ないんだけどな。

「以上が俺の知ってるロケットの知識だ。な、少ないだろう？」

話を終えて2人を見ると、揃って苦笑いを浮かべていた。

やっぱり、分かりにくかったかな。

一応専門用語を使わないようにして、使ったとしても補足説明は入れていたんだけど。

それでも幻想郷じゃ科学の話は厳しいか。

「いやいやいや、ユウキ。あなた、そのどこが少ない知識なのよ。長々と4時間も説明しちやってるじゃない」

「しかも、途中で私達にもわかりやすいようにかみ砕いた説明まで挟んで、休憩時間まで入れて。ホント、呆れるほどだわ」

あーそっちの事か。

「どうやら俺の説明は分かりやすかったようなのでそこは安心した。

「これでもかなり少ない方だぞ。宇宙工学とかそっち系の専門家たちに比べたら、初歩中の初歩だ。で、少しは役に立ったか？」

「ええ、それはばつちりよ。役に立たないからこそ役に立ったわ」

「ん？ 役に立たないなら、役に立ってないんじゃないか？」

「言ってる意味がわからない。」

「違うわ。言ってなかったけど、私達が行きたいのは科学のロケットでは行けない月なのよ。だからあなたの知識が完璧でそれを元にロケットを作っても意味がないの」

「んくますます意味が分からない。」

「月と言っても2種類あるわ。あなたみたい以外の世界の人間が言う月は【表の月】

私達幻想郷の者が言う月は【裏の月】あのウサギ達がやってきたのは裏の月なのよ」

「それで私達が作りたいロケットは科学のロケットと正反対のロケットなの。で、科学の要素を少しでも無くすために科学のロケットの知識が必要だったというわけ」

「つまり失敗作にならないようにするために、失敗の見本を知りたいってわけか。」

「それでもロケットとしての根本は一緒にする必要はあるのよね。これで、私達のロケットの設計図が書けるわ」

「計画の企画だけでホントに何にも進んでなかったのか」

まあ、鈴仙達と知り合ってすぐだから計画もスタートしたばかりって所か。

「ユウキのおかげで助かったわ。ご苦労様、今日はもう休んでいいわよ。私もスッキリしたから寝るわ」

「私も休む事にするわ」

魔理沙と違って純粋な魔法使いであるパチュリーは寝る必要はないけど、身体のために寝る習慣は残している。

「それじゃ、おやすみなさい。ユウキ」

「今日は楽しかったわ。おやすみなさい」

「おやすみなさいませ、レミリアお嬢様、パチュリーお嬢様」

「ッ!? ゲホゴホッ!」

図書館の去り際に、髪を整え執事らしい満面の笑みとお辞儀をして挨拶をした。

思った通り、レミリアとパチュリーは揃ってむせかえていた。

予想通りの反応だけど、なぜだ……

休んでいいとは言われたが、俺はまだ仕事が残っている。

予定の時間よりかなり遅れたが、美鈴の元へとやってきた。

レミリアに呼ばれたから遅くなる。とはメイド妖精に伝言を頼んだのだけど、今思え

ばこあか咲夜に頼めばよかったかも。

「なるほど。それでこんなに遅くなったわけですか。随分とレミリアお嬢様とパチクリ様とお楽しみだったようですね」

美鈴は、明らかに不機嫌と分かる笑顔で出迎えてくれた。

ニコニコといつものような明るい笑顔だけど、目が笑ってない。

「メイド妖精から何を聞いたか知らないしお楽しみの意味も分からないけど、とりあえず遅くなってごめん」

「いーえ、気にしてません。ドーせ彼女達の言う事なんて信じてませんから」

思いつきり気にしてるじゃん。

「それにあの2人にそんな度胸あると思いませんし」

「えっ？ 度胸？」

「なんでもありません。それよりも、来てもらってから言うのもなんですが、門番の仕事は今度で構いませんから寝てください。もう真夜中過ぎてます」

今まで気付かなかったが、既に時計の針は夜中の1時を回っていた。

普通なら寝る所だけど、俺は普通じゃないので全く問題ない。

「俺なら大丈夫だ。1日程度なら徹夜に入らない」

ホントに全く眠くない。幻想郷に来てからは徹夜はしたことなかったけど、学園都市

じゃ4日徹夜した事もあるしな。

「それ大丈夫って言いません。いいから寝てください」

「あ、おい。ちよつと」

いきなり美鈴の肩に抱えられた。

「口で言っても聞いてくれないから実力行使です！」

普通の女性に見せても、しっかりと人間離れした妖怪の美鈴にガツチリと抱えられてしまつては、流石に抜け出せない。

うーん、この展開は予想外だったから隙を見せてしまつた。

その時、誰かが空か飛んでくる気配を感じた。

「おーおー、こりやどうした事だ？ 美鈴がついにユウキを夜這いにかけてるぞーこりや傑作だ！」

「魔理沙!？」

こんな真夜中に魔理沙が紅魔館にやってきた。

なんでこんな時間に……つて、図書館に忍び込むために決まつてるよな。

美鈴は俺を肩に抱えながらも魔理沙が突破しないように警戒してる。

流石だな。でも、弾幕ごつこで突破されたら美鈴じゃ分が悪い。

「なあ、美鈴。俺が魔理沙を追っ払ったら、このまま門番の仕事手伝うつて事でいいか

「？」

「えっ？ ダメですよ。ユウキさんなら簡単に魔理沙を追っ払えるじゃないですか」
「ちよつと待て、簡単につてなんだよ！ まーそりや、流星にユウキ相手なら分が悪いと思っけど……」

美鈴はどうしても俺を寝かせる気か。

でも、今は魔理沙への対処が先だ。

「魔理沙、ユウキさんを寝かせて来るまでそこまで待つてなさい！」

「いや、そう言われて大人しく待つ奴がいるかつての！」

「あ、待ちなさい！ 魔理……」待て、美鈴。大丈夫だ……えっ？」

魔理沙は俺達をスルーして紅魔館に侵入しようとし、それを俺を担いだままの美鈴が駆け出そうとして止めた。

「どうして止めるんですか？」

「まあ見てろ」

魔理沙はそのまま、窓へと突撃し……

——グニョ

「わぷっ!？」

大の字になって窓にへばりついてしまった。

「な、なんだよ、コレ……」

「何ですかアレは」

「パチュリーが設置したトラップだな。魔理沙が窓から侵入しようとしたら引つ付くようになっている」

そう。窓にはトラップがしかけてあった。

「ご丁寧に魔理沙にしか反応しないように組み込んである。」

まるでハエ取り紙だ。

俺なら電流流すとかするけど、パチュリーは優しいな。

「私は虫じゃないぞ。これ剥がせよー!」

「設置したパチュリーじゃないと解除できないから俺らじゃ無理。それと、パチュリーさつき寝たばっか」

「な、なんだってー!?!」

「朝になったらパチュリー起きてくるだろうから、その時解除してもらえよ」

俺が幻想支配でパチュリーの魔力を使ってもいいけど、流星にこれからパチュリーの寝室に行くのはマズイ。

「いい機会ですから、そこで一晚反省なさい。パチュリー様も大体あと6時間くらいしたら起きて来るわ。さきさて、あんな泥棒はほつといて、ユウキさんも早く寝ましよ

うね〜♪」

「いや、俺の事はホントいいから。門番の仕事ほったらかしていいのかよ」

「おい、こら！ お前ら、私の事をほったらかしてイチャイチャするな〜！ これ取つてくれよー！」

魔理沙が騒いでいるけど、それを無視して俺は美鈴に担がれて半ば強制的にベッドに寝かされた。

そして、なぜか添い寝をすると行って美鈴がベッドに潜り込んできて、咲夜がやってきて強制退出させられた。

「レミリアお嬢様に休んでいいと言われたのだから、早く眠りなさい。でないと、私が寝させるわよ？」

という目が笑っていない咲夜の優しさに甘える事にして、眠ることにした。

翌日、まだ窓にへばりついていた魔理沙の隣の窓に、なぜかレミリアもへばりついていた。

こうして、俺の紅魔館での執事体験は終わった。

続く

第149話 「本稽古」

「はあ〜……最近色々あつたわねえ」

私は、永遠亭の庭を眺めながら誰に言うわけでもなくポツンと呟いた。

ここは、月の都にいた頃よりは遥かにマシ。

地上に来て、また月に戻って今度は永琳と2人で地上に逃げてしばらく彷徨って、迷いの竹林へと辿り着いて暮らし始めて数百年。

引き籠りながらも妹紅と出会って殺しあつて、それがだんだんマンネリ化してきた。

そう思つてたら月から逃げてきた鈴仙がやってきて、続けてユウキもやってきた。

鈴仙と本気で殺し合いをしているのを見て、最初は色々な意味で驚いた。

月の精鋭でもある鈴仙相手にただの地上の人間が互角以上に戦えてるのも、そんな彼が鈴仙を殺す一歩手前で踏みとどまったのにも驚いた。

けど、そんな彼が妹紅が私に土下座までして助けたいと思うほど、心から愛してる人間だと知つた時の方が驚いた。

まあ、これ言つたら妹紅といつもの殺し合いになりかけたけどね。

「ふふっ、今思い出して笑えて来るわね」

彼女が土下座をしてまで私に頼み事をして来た時の事を思い出すと笑いが止まらなくなる。

ま、そんな彼に実際に会ってみて、竹取物語のことを全く知らなかったのにはかなり拍子抜けさせられたけどね。

そうだ。今日は、彼の所へ行ってみよう。

「何か面白い事ありそうだしね」

ユウキの周りには女性が多く集まり、いつも何かしらの騒動を起こしている。

加わる気はないけど、傍から見ている分には面白いのよね。

「うーん、いつその事。私に振り向かせたら妹紅が悔しがるわね」

「いやいや、それだけはやめておいた方がいいよ。姫様でも返り討ちにあつて大火傷を負うだけが関の山——」

「あら、てる」

いつの間にかてるとお京がいた。

てるは呆れ顔だけど、お京はなんだか私を睨んでる？

「おにいさんをたぶらかしたら……あ、姫様じゃ無理ですね。はい、頑張ってください」
「ちよつと、それどういう意味かなー?」

お京ったら最近キャラ変わりすぎじゃないかしら?

前までは大人しくて口数も少ない兔だったのに、これも彼のせいかな？

「姫様でたぶらかされるようなら、もこたんも鈴仙ちゃんも苦労しないよ」

てゐは、昔からこうだった、ような気がするけれども、どうだったかしら。

「やってみなければ分からないじゃない。それでも求婚者が絶えなかったのよ？」

「姫様、それ死亡フラグだから」

「そんな事ないわよ！ と、言うわけで博麗神社に行ってくるわね！ 永琳が帰ってきたらうまく誤魔化してね」

永琳は、今鈴仙を連れて人里に往診に行っている。

つまり今がチャンス。

「えっ？ ちよつ、私が!? こういうのは鈴仙ちゃんの役目じゃ!？」

てゐとお京がポカンとしている隙に私は永遠亭を文字通り、飛び出した。

目指すはユウキのいる博麗神社！

と、意気込んで博麗神社に乗り込んだのだけど……

「はあー！」

「まだまだー！」

当の本人であるユウキは、なぜか絶賛戦闘中だった。

「なにこれ？」

私の目に映るのは、二本の刀を振るい勇猛果敢に切り込む魂魄妖夢と、二本のナイフで華麗にさばっているユウキの姿。

2人は師弟関係にあつて、たまに博麗神社で稽古をしているのも宴会で聞いた。

だけど、真剣で本気で斬りあつていてこの迫力はとも稽古とは思えない。

そんな2人を境内に座つて呑気にお茶を飲みながら見物している人がいた。

確か、冥界の主で妖夢が仕える西行寺幽々子だったわね。

「あら、あなたは竹林のお姫様ね？ いらつしやい。と言つても私もお客なのだけどね」

「こんにちは。ちよつと暇つぶしに来ただけけれど、あの2人は何をやっているのかしらっ。」

「見ての通り、稽古よ」

いや、とても稽古には見えないって。

「ふふつ、実はね。妖夢が彼にお願いしたの。本気の彼に稽古を付けてもらいたいって」
普段、妖夢に稽古を付けているユウキは手加減をしている。

ユウキはいつも全力と言っていたけれど、妖夢にとつての彼の全力は戦い方の問題らしい。

刀を主体にした妖夢に合わせた戦い方で稽古を付けているけど、それは彼本来の戦い

方じゃない。

だから、今日は気遣いなしで彼本来の戦い方で稽古を付けて欲しいというのが妖夢のお願い。

2人の普段の稽古がどうやっているか知らない私だったが、少し納得した部分があった。

竹林で鈴仙と戦っていた彼は、真つ向勝負な剣士ではなく兵士、もしくは暗殺者らしい戦い方をしていた。

きつと、あれが彼本来の全力なのだろう。

「ふーん、なら私も見物しましょうか。彼、私が来たの気付いてないみたいだし」
せつかく私が遊びに来たって言うのに、ユウキったら見向きもしない。

まあ、あれだけ真剣にやりあっていけば気付かないのは当たり前、なのだけどね。

今も、ただ黙ってナイフを構えながら妖夢の一挙手一投足に気を配っていて、全く隙が無い。

永琳に鍛えられたのを思い出して、なんだか懐かしさが感じられるわ。

「その様子だと、お姫様だからとはいえ、蝶よ花よと育てられてきただけじゃないみたいね」

「あら、分かる？ 教育係の永琳に昔から英才教育の一環として、護身術も習わされたの

よ。永琳は昔から心配性だったわ」

「私も妖忌に、しごかれたわくおかげで薙刀の心得はあるのだけれど。あ、妖忌って言うのは妖夢の祖父で先代庭師で、劍の師匠なの」

「えっ？ 妖夢って師匠いるの？ ならなんでユウキに教わっているの？」

宴会じゃそこまで詳しくは聞かなかった。

ユウキは確かに強いけど、劍ではなくナイフだし妖夢の戦闘スタイルとは違っているのに。

「ふふっ、ユウキ君とは色々あったのよ。あの月の兔ちゃんとユウキ君に色々あったようにね」

「……………」

どうやら彼女は鈴仙とユウキの事に勘付いているようね。

流星は、あの八雲紫の友人ね。

「そう警戒しなくてもいいわ。宴会での兔ちゃんの様子が、以前の私や妖夢と被ったから、何となくそうなのかしらーって思っただけよ」

「なるほどね。それで大体分かったわ」

察するに、彼女達が妹紅土下座事件の元凶と言った所かしら。

なら尚更ユウキが妖夢の師匠をやっているのもおかしい話だけど、お人よしの彼の事

だからそれも察せられるわね。

「これじゃ、鈴仙も妹紅も苦勞するわけね」

「あら？ あなたは違うのかしら？ てつきりそうだとばかり。だから今日も一人で彼に会いに来たのかと思つたわ」

「私？ あー違うわ。妹紅への当てつけにならないかと思つただけよ。そういうあなたは？」

「うーん、彼は悪くないのだけど、なんだか紫と喧嘩しちやいそうだから……様子見、かしら？」

なんのことやら分らないけど、なんだか私と同じく面白半分で彼にちよつかいを出しそうな雰囲気ね。

「ほらほら、そんな事より見物見物。彼の戦い方つて見ていると面白いわよ？」

「それは、知つてるわ」

多分、鈴仙を相手にしたのが彼の本当の本気、でしょうからね。

ユウキと妖夢は、さつきまで激しく切りあつていたが今は一步も動こうとしない。

互いに相手の隙を伺っている。

でも、それはユウキ本来の戦い方じゃない。

「師匠、言つたはずですよ！ 本気で来てくださいと。私に遠慮して、合わせないでください

いとー！」

「別に遠慮していたわけじゃないんだけど、な！」

そう言つてユウキは両手に持ったナイフを妖夢に向けて投げ飛ばした。

「っ!？」

予備動作がほとんどなしで投げられた事に、妖夢も一瞬虚を突かれた顔をしたけど、すぐに冷静にナイフを弾いた。

だけど、弾かれるのは彼も予想済み。

「えっ?！」

妖夢が目を向けると、既にその場にユウキはいなかった。

彼は、博麗神社の森へと駆け出していた。

木々の間を跳ぶように翔けるのが彼の得意戦法なのよね。

竹林では綺麗な程に駆け回っていたわ。

あれ? なにか彼の手元が光ったような?

「そっちはいきませんー！」

妖夢もユウキの戦法は熟知しているようで、すぐに走りながら左手の刀を彼の行く手を阻むように投げ、彼を足止めした。

けど、彼はその刀を抜き、すぐに方向転換して今度は妖夢に向かって駆け出した。

「しまった！」

「まだ、甘いな」

—キーン！

ユウキが持つ刀と妖夢の刀がぶつかり合う。

と、そこで妖夢の動きが止まった。

「いつの、間に」

ユウキは、妖夢の喉にナイフを当てていた。

彼は、先ほどナイフを2本とも投げて妖夢に弾かれて遠くに飛ばされていたはず。

「自分の得物は大切に。もしもの為の備えも忘れずに」

「あつ、ナイフに釣り糸が!？」

なるほどね。先ほどユウキの手元が光って見えたのは釣り糸だったのね。

よく見ると、彼の腕に輪っかが着いていてそこから釣り糸がナイフの柄に伸びている。

「幻想支配があるとはいえ、俺の武器はこれだけなんだ。万が一落したりしたときの備えをするのは当然だろ？ こういう小細工をいくつもするのが、俺の本来の戦い方だ」

「流石です。師匠」

小細工、ねえ。暗殺者というより、工作員みたいな事言うわね。

「とても面白かったわよ、2人共。お疲れ様」

「こんなの見てて面白いのか。って、輝夜？ いつの間に来てたんだ？」

「流石のあなたも気付いてなかったのね。まあ、来たのは少し前よ」

私が神社に来てからかれこれ30分は経っているのに気付かれなかったのはシヨツクではあるわね。

「んで、今日は1人みたいだけど、何の用があつてきたんだ？」

「たまには1人で出掛けたい時もあるわよ。それに、そつちこそ霊夢はどうしたの？」

「魔理沙と出掛けている。だから、こういう事も出来る」

「(こういう事?)」

鬼の居ぬ間に洗濯、みたいなものかしら？

まあ、本物の鬼も今日はいないみたいだけど

「霊夢ちゃん、ユウキ君と妖夢が真剣で稽古をするのをすごく嫌っていたのよ。だから今日みたいな本稽古は出来なかったというわけ」

「へえ。やっぱり弾幕ごっこじゃないからダメなのかしら？」

博霊の巫女らしく、弾幕ごっこに厳しそだったものね。

と、そういうと幽々子は何がおかしいのか笑い出した。

「ふふふつ、いえ、失礼。霊夢ちゃんが嫌うのはそういう事じゃないわ。ユウキ君が怪我でもしないか心配なのよ」

「えっ？ あー……そういう事。随分と過保護なのね霊夢は」

「全くだ。稽古くらいで大怪我するわけないだろうに。そこら辺の分別くらいついてるつてのに。なあ、妖夢？」

「えっ、あの、その……そ、そうですね」

突然ユウキに同意を求められ、慌てる妖夢。可愛いわね。

「師匠は私が怪我しないように気を遣ってくれています。けれども、私の方はそんな余裕がないので……」

ユウキ相手じゃ、妖夢は手を抜けないって事ね。

「そんなことないぞ。前ならともかく、最近の妖夢は結構強くなったから俺だつて手を抜けないぞ」

「そうねえ。最近の妖夢はユウキ君に不覚を取る事少なくなったわね。今日は久しぶりにやられちゃったけど」

「うう……正直、今日なら勝てると思ってました」

普段のユウキ達は知らないけど、確かに今日は割と互角だったように見えた。

でも、それはユウキが正面から妖夢と斬りあっていた時だけ、ユウキが攻め方を変えたらあつという間にやられちゃったわね。

「妖夢は搦め手に弱すぎるんだよな。真つ向勝負には強くなったから後はそういう所直そうか」

「そうはいつでも、あんな小細工してくるのここじやあなたくらいな気がするわ」

普通の妖怪は力任せに攻め立てるのが普通と永琳もてるも言つてたわね。

鈴仙なら事前にトラップを仕掛けて追い込んだりはするでしょうけどね。

「でも、私は師匠に勝ちたいんです！」

「ほら、最近の妖夢は、ユウキ君に教えを乞うだけじゃなくて、勝ちたいって必死なのよ」

「へえ、妖夢はユウキに勝ったら何かしてもらいたい事でもあるのかしらあ？」

我ながら今、嫌な笑み浮かべてるだろうなあ、と思いつつも妖夢をからかってみる。

「し、師匠にしてもらいたい事ですか……そ、そうですね。それは……その……」

あらら顔を真っ赤にして俯いちゃったわ。

まだまだ若くて初心なのね。

「俺は一体妖夢に何をされるんだ……」

こっちはこっちで変な方向に解釈しちゃってるし。

「うふふつ、あまりうちの妖夢で遊ばないでね。それじゃ、そろそろ帰りましようか、妖

夢

「は、はいー!」

ここら辺が潮時ね。そろそろ永琳達も戻ってくる頃でしょうし。

それに、霊夢が戻ってきたら多分面白い事にはなりそうだけど、それ以上に面倒に巻き込まれそうだわ。

「私も帰るわ。それじゃあ、ユウキ、妖夢に幽々子も、気が向いたら永遠亭にいらつしやい。歓迎するわ」

「おう、それじゃまたな」

「輝夜さん、さようなら」

「あなた達も、今度白玉楼に遊びにいらつしやいねー」

ふむ。不老不死の私が冥界に遊びに行くのも、また一興かしら?

永遠亭に戻ると、永琳達はまだ戻ってきてはいないようだった。

早速てゐとお京に博麗神社で見た事を自慢げに話したのだけど、2人共微妙な顔をした。

「それで、帰ってきたというわけですか。これは予想外です」

「ねっ? 京ちゃん、心配する事なかったでしょ?」

「何よ、2人してその顔は」

せつかく面白い見世物の事話してあげたのに。

「いや、姫様全く関係ない事を自慢げに話されても私ら反応に困るよ。それに、ゆうちやんを誑かしに行つたんじやなかつたんですか？」

えっ？ ユウキをたぶらか……あつ。

「すっかり、忘れてたわ」

「ふう〜ちよつとは面白い事にならないかと思つたけど、姫様予想の斜め下をいきますね」

「う、うるさいわね。そんな事より面白そうな事してたからちよつと忘れただけよ。お京もそんな顔しない！」

やっぱりこの2人、ユウキの悪影響受けている気がするわ。

続く

第150回 「新聞大会」

香霖堂

昼食を終えて、のんびりしているとユウキ君がやってきた。

何でも、いきなり紫が霊夢に稽古を付けるとやってきて、追い出されたそうだ。その内容が、霊夢に神様の力を使えるようにするというもの。

確かに博麗の巫女である霊夢は、神降ろしという神様の力を使う能力がある。

が、それはかなりの高等技術で、霊夢はまだ完全には使いこなせていなかった。

その神降ろしを完全なものにする稽古を、妖怪である紫が霊夢につけている。

で、幻想支配という他人の力をコピーするユウキ君がいては、神降ろしに影響を及ぼす可能性がある。

そこで稽古中はユウキ君は霊夢の側にいないようにと、追い出されたというわけか。

「それでここに來るとはね」

「迷惑だったか？」

そんな事はない。彼はよく店にある外の世界の商品の説明をしてくれて助かっている。

それに、魔理沙や霊夢と違って、商品を壊したりツケで持って行ったりしない。何より僕は彼を友人と思つてゐる。迷惑なわけがない。

「いや、君なら大歓迎だ。ただ、ここよりも人里や紅魔館とか他に行くところはいくらでもあるだろうにつて思つただけさ」

「ここが一番気が休まるんだよ。それにちよつと欲しい物もあつたしな」

「そう言つてもらえると嬉しいよ」

そう言うのと彼は苦笑いを浮かべた。

その笑みは初めて会つた時に見た時と少し変わったように見える。

初めて会つた博麗神社での宴会での彼は、明らかに戸惑いがあつた。

幻想郷に迷い込んできた外来人としての戸惑い、ではなくもつと別の戸惑い。

でも、今の彼からはそんな戸惑いあまり感じられない。良い事だと思う。

彼は誰とでも自然に接して、優しさも厳しさもある。

それは、霊夢と似ている。だからみんなに好かれ、彼の周りには人も妖怪も集まる。

まあ、彼の周りに集まる女性の半分からは明らかに恋愛的な好意を抱かれています。

ど、彼はそれに気付いているのか気付いていないのかまるで分からない。

彼は、自分の事に対して嬉しいとか悲しいとか思う事が全くない。

例えば、物をもらつて喜んでいても、それは嬉しいからではなく、喜んでゐる反応を

しないと相手が不安になるから喜んでゐる風を装っている。

だから誰かが自分に好意を抱いていても興味を感じず、ありきたりな反応でしか返さない。

そんな状況にやきもきして、強引に行こうとする女性もいるが、大抵彼に返り討ちにされるか、霊夢に退治されている。

変わったと言えば、彼以上に霊夢が変わった。

人間らしさ、というよりは年頃の女の子らしさが増えた。

恋する乙女は無敵だ。とは魔理沙の言葉だ。

全くその通りだと思う。

「それで、最近は何か面白い物でも流れてきてないか？ 今日暇つぶしだからタダで引き受けるぞ」

「ははっ、それはありがたい。実はそこそこ溜まっていた所なんだよ」

ちようど彼に見てもらいたい物が沢山あるのでちようどいい。

奥から数箱分持ってきたのだが、あまりの多さに彼が驚いている。

「多すぎだろ。いつの間にこんなになん？」

「僕が無縁仏で拾ってきたものもあるし、魔理沙が集めてきたものもあるよ」
でも、彼の言う通り多すぎかもしれない。

見た所ではガラクタバばかりだけど、それでも昨日一日でこの量は多い。

魔理沙も不思議がっていた。まあ、理由はあるのだけどね。

教えるのもいいけど、魔理沙やユウキ君達には黙っておこうか。

もう数日もすれば分かることだろうしね。

「えつと、これは健康器具、これは調理器具つと。電池式やコンセント式ばかりだな。

使えそうなものがほとんどない」

彼は鑑定しながら残念そうな声を上げた。

僕としてもせっかくの拾い物が使えないのは残念だ。

外の世界からの流れ者はアンティークな家具から家電製品と呼ばれるものまで多種多様で、ただのゴミにしかならないものも多いのは昔からだからそこまで気にはしていない。

「使えない物も展示しておくからいつものように分けておいてもらえると助かるよ。それに気に入ったのあったら持って行って構わないよ」

既に僕が気に入ったお皿や調度品は別に分けている。

「ありがとな。えつと、ゼンマイ式はあつても玩具がほとんどか、梨奈や大ちゃん達はこういうのはとつくに卒業してらるだろうけど他の子達にはいいかもな」

さり気なく寺子屋に通う子達の事まで気にかけている。

うん、いい先生をしているな。

けど、自分で使うものを探す気はないようなのは、相変わらずか。

彼に淹れてもらった紅茶を飲みながら、ふうと息を吐いた。

紅魔館のメイド長に淹れ方を教わったという彼の紅茶は、なるほど僕が自分で淹れるのよりは美味しい。

魔理沙もよく淹れてくれるけど、彼女はコーヒー派だからね。

ふと、外を見ると風が強くなってきたのか葉っぱが宙を舞っている。

これは、新しい客が来たようだ。彼の匂いでも鍵つけたのかな。

「どーもー！ 毎度おなじみ文々。新聞でえーっす」

「おー、文。古新聞ならそこに纏めてあるよ、今日はトイレットペーパーと交換しようかな」

「はーい！ 毎度どうもー……って誰がチリ紙交換ですかー」

と言いつつも、ユウキ君にネタを振られてすかさずトイレットペーパーを出すあたり大分彼に毒されてるな、

「相変わらず用意が良いな、文」

「これは新規ご契約様へお渡しする粗品です。それよりもここにいましたかユウキさん」

「ん？ 俺を探していたのか？」

「ええ、探しましたよ。博麗神社に行ったらスキマ妖怪に追い払われて、人里に行ってもいないし、紅魔館ではフランさんの相手をさせられるし、白玉楼では妖夢さんの料理の手伝いさせられるし、永遠亭では実験台にされそうになるし、幻想郷中を飛び回りましたよ」

「いい運動になったろ」

「ええ、おかげさまで。まさかここにいるとは思いませんでしたよ！」

まさか、彼がここに來たのは、それも狙いの一つだったのかな。

「ああ、だからここに居たんだよ」

と思つたらやつぱりか。彼もなかなか意地悪だね。

「もうイジワルなんですから！ ああ、それとも気になる子には意地悪したくなるタイプですか？ いやだもうう、ユウキさんつたら♪」

文のキャラがここまで壊れるとは思わなかった。

「霖之助、大体終わったぞ。俺もちよつと使い方がわからない物がいくつか混ざってるからそれも分けたぞ」

「ああ、ありがとう。君の目にかなう物はあつたかい？」

「うーん、今回は玩具が結構あつたからな。あとで寺子屋に持っていくよ。後、いくつか

欲しい物があつただけどいいか？」

「ああ、僕が気に入つたものは既に抜いてあるからね」

「ありがとな。それと電化製品はにとりに売ると喜ぶぞ」

「そうだね。今度来た時に話してみるよ。最近河童は電力に興味があるみたいだからね」

「あのー……すみません。目の前でスルーされるのは流石に堪えるのですけど。あれ、なにこのデジャヴ」

若干涙目になつた文がユウキ君にしがみついてきた。

流石妖怪、精神攻撃には弱いようだ。

「はいはい。わざわざそこまで飛び回つてまで俺に何の用だ？」

「はい！ 実は前から依頼したかつた事がありまして、もうそろそろその時期なのでお知らせしようかと」

「前から言つていた件か？ 別に俺はいつでも構わないぞ」

先の異変で、ユウキ君は文と妹紅と慧音に大きな借りがあるらしい。

具体的にどんな借りかは知らないけどね。でも、彼にとつて借りを作るといふ重要な意味がある。

借りを作る事で繋がりが出来る。繋がりが無い世界で生きてきた彼にとっては、それ

はとても重大な事だ。

と、霊夢は推測していた。魔理沙や慧音も同じような事を思っている。

けど、それにしても彼は貸しを作る事にはすごく無頓着だ。

自分の利益になる事へは必要最低限しか興味がない。

何でも屋としての仕事を引き受け報酬を得る事は、自分が生きる為というよりは世話になってる霊夢や他の皆へお礼をする為の手段でしか思っていない。

それは、とても哀しい生き方だ。

だからだろうか、霊夢や文、紅魔館のみんなが彼の事を必要以上に構ってしまっているのは。

「それで、肝心の俺への依頼とは？ 文の取材に付き合う事か？」

「おお、流石ユウキさん！ 勘がいいですねえ♪ 実はもうすぐちよつとした天狗たち

の間で新聞大会があるんですよ。その新聞記事のネタとして取材をするんです」

「なるほど。でも最初に言っておくけど、俺は新聞記者関係の仕事は全くの素人だぞ？

暗殺するターゲットや侵入する施設の事前調査は何度もしてきたけど、取材ってなると話は全く違ってくるだろ？」

なんとも物騒な事を言ってる気がするけど、彼にとつては普通な事だったね。

「ああ、その点は大丈夫ですよ。ユウキさんなら簡単ですから」

「答えになってないとおもんだけど？」

僕もそう思う。

「とにかく、もう少ししたらその時期になりますから、その時に具体的にお話します。何をするかはお楽しみに♪」

「いや、だったらその時に話せばいいだろうに、今日はなんで俺を探してたんだ？」
彼に最もな事を聞かれ、若干文の目が泳ぎだした。

これは、本題はただ単に彼に会いたかっただけだった、のかな。
と、そこへ別の女性の声が聞こえた。

「あーそれはアレね。神社に行ったら霊夢が紫にしごかれていて、邪魔者がいない今が彼をデートに連れ出すチャンスと思つて幻想郷中を探しまくった。でも、いざ見付けたら誘い文句が浮かばず、ちようど前から話していた依頼の件つていう建前を使った。こういう事よ」

「はたてー！」

いつの間にか文の同僚である姫海棠はたてが来ていた。

「いらつしやい。今日は千客万来だな。君が来るとは珍しいよ」

「たつた3人で大袈裟だな」

「1週間に3人来ればいい方さ、お客としてはね」

「確かにそうかもな」

客としてでなければ、もっと多い時もあるのだけどね。

「あら、なら私は4人目ね？」

今度は誰だと目を向けると、そこには風見幽香がいた。

今日は珍客が多いと思つたけど、彼女は意外と常連だ。

「こんにちは、ユウキ。こんな所で出会えるなんて。でも、ちょうどよかつたわ」

「なんだ、幽香まで俺を探していたのか？」

流石はユウキ君。幽香にまでモテモテとは。

そういえば、以前彼の歓迎会でもそうだったか。

「いいえ、元々ここには用があつてきたの。あなたに出会えたのは本当に偶然よ」

「彼女はよくティーセットや家具を見に来るんだよ」

幽香は、咲夜と同じく外の世界の食器やアンティーク家具に興味がある。

だからたまに見に来て、買っていつたりする数少ない常識的な上客だ。

「ちよつと椅子が痛んできたから買い替えようと思つて見に来たの。人里には椅子は座椅子くらいしかないのよ」

「人里は和風ばかりだから洋風の家具は不似合いだもんな」

人里では手に入りにくい洋風の家具や食器類は紅魔館やアリスなどに人気がある。

だから、入荷したらすぐに使えるように手入れをしている。

「それで、俺に何か用事か？」

「いつかの約束、もうすぐ果たせそうだから知らせておこうと思ったのよ」

「あーアレか。随分と待ったな」

「ふふつ、待たせちゃってごめんなさいね。今年はちょうどいい時期なのよ」

「なんの話をしているか分からないけど、彼と風見幽香には何か約束事があるみたいだ。」

「あまりいい約束には見えないけどね。」

「あのお〜？ 風見幽香とどんな約束したんですか？」

「文が少し警戒心を強めにして彼に聞いたでした。」

「彼女も宴会での彼と幽香の初対面時の騒動を知っているから、警戒しているのだろう。」

「別に、いつかちゃんとした舞台が整ったら本気でやりあおうって約束しただけだぞ？」

「「……………」」

「文とはたての時間が止まり、鳩が豆鉄砲を食ったような顔になった。」

「流石の僕もメガネがずり落ちたが。」

「「ええ〜!!? なんで!?!」」

「そして、ひと呼吸置いて2人が叫びだした。」

「なんでって、そつちこそ大げさに騒ぐのはなんでだよ」

「はあく……」

分かっていないのは当の本人だけか。

幽香は文たちの慌てっぷりがおかしいようで笑いをこらえるのに必死だ。

「ユウキ君。風見幽香は危険って霊夢や魔理沙から言われていただろう？」

「幽香程度の危ない奴なんてゴロゴロいて慣れっこだ。それにやりあうと言つても弾幕だ(っ)だぞ?」

「あら、それはそれでプライドが傷つくわね。私程度が、なんですって?」

ニコニコと笑いながら殺気を放つ幽香、それでも彼は涼しい顔をして返した。

「俺からすればそんな殺気満々で来られるより、無邪気な笑顔なチルノの方が厄介だ」

「ぷっ、あはははっ! ホント、あなたそういう所は正直よね」

まあ、彼からすれば氷精達の方が厄介だと言うのは何となくわかる。

殺意と敵意には慣れていても、子供特有の無邪気な好意にはいまだ慣れてはいないのだろう。

つまり、それだけ、元居た世界で彼は少なくとも分かり切った好意を向けられた事がない。

「ユウキさん、風見幽香は危険だって知っててなんでそんな約束受けたんですか。しか

もいつの間に—」

「危険だからと言われてもな。俺には誘いを断る理由はないし」

「あ、そうですか……」

文は彼を説得するのを諦めた。

彼は幽香の危険性を理解した上で、あんな約束をしたのだという事が嫌でも分かっ
てしまったからだろう。

「本人目の前にしてよくもそこまで言えるわね文。でも心配しなくても殺したりしない
から安心しなさいな」

「いえ、ユウキさんを取って食う気、ではないかと、色々な意味で」

「あら、そんなあなたや紅魔館の吸血鬼たちみたいな獰猛な真似するわけないわ」

「わ、私はそんな事しませんよ!」

「まーしそうになつた事はあるわよねー?」

「な、なんの事を言つてるのかしらーはたてー?」

女三人寄れば姦しいとはよく言ったものだ。

最も、幻想郷では三人ではきかないか。

おや、話題の中心である彼はいずこに?

あ、いたね。何やら小物類を収めた棚を見ているようだね。

「ユウキ君、アクセサリー類を見て誰かにプレゼントかい？」

おっと、今まで騒いでいた文たちの声がピタリと止まった。

これは失言だったかな。

「ん、この前大ちゃんやチルノ達からプレゼントもらったんだよ。最近俺が元気ないよ
うに見えたからって。あいつらに変な気を遣わせちゃったからさ」

なるほど。彼は探し物があるといったけど、妖精達へのお返しをさがしていたのか。

それにしても、彼の元気がないようにみえた、ね。

「贈り物を贈り物で返すのは何か違う気がするけど、生憎これしか浮かばなくてさ。お、
これいいな」

そういつて彼が持ってきたのは、花の形をして5色に輝く装飾が施された小さな髪飾
りセットだ。

装飾は宝石ではないけれど、見た目は綺麗だ。

「これもらうよ。いくらだ？」

「そうだね。これなら……」

彼の面白い物を三者三様の表情を浮かべて見守る文、幽香、はたて。

文は白目を向いてあんぐりとしていて、幽香は面白そうなものを見た顔をして、はた
ては呆れてるような顔をしている。

恐らく、自分の話題で盛り上がっているのに、当の本人は呑気に他の子へのプレゼント選びをしていてマイペースすぎると呆れているのだろう。僕もそれには同感だ。

心の中で苦笑いを浮かべつつ、彼から代金を貰う。

さつきお願いした仕事の報酬ついでに渡しても良かったのだけど、あれはすでに報酬をもらっているからこれは別問題だ。

と彼は言ってお金を出した。変なところで律儀なのも彼の特徴だ。

「さつてと、人里で買い物して帰るとするよ。その頃には霊夢の修行も終わってるだろうしな」

「おっと、もうこんな時間になってたんだね」

時計を見ると、4時を回っていた。

彼がいると時間がたつのは早いね。

「それじゃ、文たちもまたな。文も幽香も詳しい日取り決まったら知らせてくれ」

「ええ、その時が来たら知らせるわ」

「はあ……ユウキさんのマイペースにはまだ慣れそうにないですね。まあいいです。それではまたです、ユウキさん」

「まったねーユウキ♪」

こうして彼は帰って行き、幽香もお目当ての椅子を購入して上機嫌で帰って行った。

残ったのは天狗2人だけだ。

「そういえば、はたて。なんであんたがここに来たの？ 別にユウキさんに用があったわけじゃないんでしょ？」

「……ヤバツ……大天狗様にあんたを大至急呼んで来いって言われて探して探したんだ……」

「ちよつ、それを先に言いなさいよー!! そ、それでは私はこれでー!」

「これは、私も行かないとまずいわよね。というわけでまたね、店主さん!」

「まいどどうもー」

ついさつきまで賑やかだった店内が急に静かになると、どことなく物足りなさを感じる。

以前は、こんな事はなかったのだけどね。

「それにしても、このタイミングで文と幽香が彼に接触と言うのは偶然ではないね」

きつと2人共もうすぐ起こる異変に合わせて彼に仕事を依頼したり、弾幕ごっこに誘ったのだろうか。

異変は異変でも、これから起きる今までの異変とは少し違う。

ユウキ君でも、霊夢でも解決できない異変……六十年周期の大結界異変がもうすぐ始まる。

続
く

花映塚&文花帖編

第151回 「取材開始」

そろそろ夏も終わりが見えてきた頃、いつものように朝目が覚め境内の掃除をしようと外へ出たのだが。

「なんじゃこりゃー!?!」

目の前に広がる信じられない光景に、思わず叫んでしまった。

摩訶不思議な事には慣れていたつもりだったが、流石に今回のようなファンシーな光景は始めてだ。

「博麗神社が、花に埋もれている」

博麗神社の周りが花に囲まれているくらいなら、まだ、分かる。

人里の花屋さんや、幽香に花の種沢山もらって育ててたからな。
でも、これは囲まれているどころじゃなかった。

文字通り、花に埋もれている。

住居も、鳥居も、本殿も何もかもに花が咲き乱れている。

観賞用の花の事はよく知らないけど、咲いている花は桜やタンポポ、チューリップ、鈴

蘭、その他諸々季節感がまるでなく、色も形も多種多様すぎて綺麗だとは思えない。

昨日寝る時には何もなかったのだが、この一晩で博麗神社は花まみれになったのか。

「ちよつと、なんなのよこれー!？」

霊夢が叫び声をあげながら部屋から出てきた。

「おはよう霊夢」

「おはようユウキさん、じゃなくつて！ これは一体どういう事なのよ！ なんてうちの神社が花だらけになってるわけ!？」

「うーん、これはもう 『花麗神社』 に改名するしかないな」

「そこじゃないわよー！」

朝からテンション高いなー

「博花神社の方がいいかな？」

「だから、そこじゃないわよ！ これは立派な異変よ！」

霊夢は空へと飛びあがり辺りを見渡した。

「ほら、見て！」

霊夢の力で空へと上がって辺りを見渡すと、確かに森や紅魔館や人里付近、幻想郷中が色々な花で埋め尽くされていた。

けど、ここから見る限り紅魔館の建物自体には花が咲いていないように見える。博麗神社だけが敷地も建物も花で埋め尽くされている気がする。

あとで様子見に行くか。

「あ、これがそうなんだ。なるほどね、うん」

おや、霊夢が何か一人で納得したような顔をしている。

ひよつとしてこの異変に覚えてでもあるのかな。

「心配しないでユウキさん。これは異変は異変でも、今までと違って比較的安全な異変
よ」

「異変に安全ってあるものなのか？」

「先に朝食にしましよ。その後、教えてあげるわ」

そう言うとなぜか得意げな顔をした霊夢は神社へと戻って行った。

朝食を終えると、霊夢は今回の異変について教えてくれた。

それによると、60年に1度の頻度で外の世界から大量の幽霊が三途の川へと流れてくる。

その量は渡しの死神のキャパシティを超えていて、渡しきれない幽霊が一時的に幻想郷の花に取り付いて溢れ出す。

でも、時間が経てば死神が幽霊たちを彼岸へ運んでいくので、花も正常な数に戻って行くようだ

「つまり、これは自然に起きる異変で、黒幕はいなくて文字通り時間が解決してくれる異変って事よ」

「なるほど。だからいつもに比べて危険な感じがしなかったわけか」

今までの異変は、この前の月の異変以外は何かしら危機感というか嫌な感じがしていたからな。

「というわけで、ユウキさんがこの異変を解決する必要は、いつつさいないの！ 分かった!」

「お、おう」

やっぱり今日の霊夢はハイテンションで少し変だ。

異変で興奮するのは妖精だけじゃなかったっけ。

「分かればよろしい。じゃ、私は見回り行ってくるから留守番よろしくね」

「見回り？ 別に危険な異変じゃないのにか？」

「別に異変自体は自然と解決するものでも、それに便乗して妖精や妖怪達が何かしでかさないうちに見回るのはよ。あ、言うておくけどこれも特に緊急性とかはないんだからユウキさんが関わることじゃないからね！」

霊夢が何に対して釘を刺しているのかいまいちわからない。

異変解決の邪魔をするつもりはないんだけどな。

「相変わらず霊夢さんはユウキさんの事になると超が付くほど心配性になりますねえ」

「まあ、それでこそ霊夢だろ」

と、そこへ空か声が聞こえてきて、文と魔理沙がやってきた。

「おはよう、文、魔理沙。今日は早いな。悪いけど、もう朝食は終わったぞ?」

「えっ、それは残念……いえいえっ、そんなユウキさんの手料理をご馳走になりましたわけじゃないですよ」

「私も同じくだぜ。今回の異変について霊夢なら何か知ってると思ってるな」

文はともかく魔理沙は異変解決に動き出したようだ。

「異変と言ってもいつもの異変じゃないわよ。ユウキさんにもちようどその話をしていた所だし」

そう言つて霊夢は俺にしたのと同じ説明を魔理沙に行った。

魔理沙は感心して聞いていたが、文は少し訝しんだ表情を浮かべている。

「へえ、そんな自然に起きる異変つてのがあるんだな。私は知らなかったぜ。流石は博麗の巫女、物知りだな」

「これくらい知っていて当然の事よ」

魔理沙の誉め言葉をさらりと流した霊夢だったが、声色が若干弾んでいた。ちよつと動揺している気がする。

「そうですねえ、流石は霊夢さん。いつぞやの時の事を教訓にして色々勉強なされたようですね」

「なっ！ どういう意味よ文」

「春以来何度も稗田家の所でお勉強しているようですよ」

文がニヤニヤしながらそう言うと、霊夢の顔がみるみる真っ赤になって行つた。

「べ、別にいいでしょ。私にだって知らない事沢山あるからそれを勉強するのがどこが悪いのよ!」

「いえいえ、悪いとは言いませんし思つてもいませんよ。ただ博麗の巫女としての自覚がますます強くなつてるなーと天狗仲間の間でも感心していた所なんですよ。まあ、博麗の巫女としての使命感3割、残り7割はまた違った理由からでしょうけどねえ」

「ほほおーそれはそれは」

ニヤニヤが止まらない文と、それを聞いて魔理沙も何か分かつたようで同じくニヤニヤと暖かい目で霊夢を見ている。

で、なぜか俺が霊夢に睨まれた。

「なぜ俺を睨むのか分からないけど、阿求の所で勉強してるのは前から知ってるしな。」

俺が慧音から阿求を紹介された時も霊夢いたしな」

「……あ、そうだったあ」

俺がそう言うのと霊夢が俯きながら小声で呟いた。

やっぱり今日の霊夢は朝からおかしいな。

これも異変の影響かな。

「ところで、異変の話をしていたのなら今から早速調査に行くところだったのか？」

「調査と言うか見回りよ。ちよつと気になる事も……あ、なんでもないわなんでもない。

ユウキさんは気にせず留守番していてね」

誤魔化し方が下手すぎる。

それにしても、霊夢も今回の異変で気になることがあるようだ。

俺も気になる事はあるけど、どうやら霊夢も同じ事思っていたみたいだし。

ここまで気を回してくれてるならそつちは霊夢に任せよう。

「ほほう。ユウキさんは異変の見回りにはいかない、ですか。でしたら好都合ですねえ。

霊夢さん、ちよつとこちらに」

「何よ？ えっ、ちよつと？」

そう言つて文は霊夢を連れて、境内の裏へと行つてしまった。

「なんなんだ文の奴」

「さあな。文は最初からユウキに用があるみたいだったけど、心当たりは？ まあ、文の事だからただ単に遊びに来ただけかもしれないけどな」

「それを言うなら魔理沙もいつも大抵用事なしに来るだろ」

「というか、紅魔館組や大ちゃん達、みんな大抵用事なしに遊びに来るし。」

「ははっ、まあな。でも、今日はなんだかウキウキだったぜ？」

「ウキウキ、になる理由までは分からないけど。仕事の依頼なら受けてたから多分それだろ」

「へえ、文からの依頼なんて珍しいな。どんな事依頼されたんだ？」

「近々天狗の間で新聞大会が開かれるからその取材の手伝いをしてほしいってさ。詳しい内容は取材当日になって事だったんだよな。だから今日がそうなんじゃないか？」

「なるほど。お、戻ってきたぜ」

魔理沙の言うように、文と霊夢が戻ってきた。

文は相変わらず笑顔のままだが、霊夢はどこか納得いかないような表情を浮かべている。

「ユウキさん、話はつきました。以前お話した取材のお手伝いですが、今からお願いできますか？ あ、霊夢さんの許可は取ってあります」

「あーやつぱりか。それにしても、なんで霊夢の許可を取ったんだ？ まあ、文の手伝い

を近々するとは言つてあつたけど」

「それがまさか今日、異変の真つ最中に行うなんて思わなかつたのよ。でも、文から詳しい事聞いたし、ここで留守番させておくよりは安全だろうから、私は許可したの。あとはユウキさんの判断に任せるわ」

うーん、元から文から依頼来たら霊夢に外出する話をして取材するつもりだったから、この流れはおかしくないけど、どこか釈然としないな。

「あははっ、まるで霊夢がユウキの保護者みたいだな」

「ま、俺は居候の身だから間違つてはいないけどな」

「それはそれで私が納得できないのだけど。まあいいわ、魔理沙も異変の見回りに行く？ それとも、ユウキさんに付いていく？ 私は後者の方が……あー、魔理沙がいたら余計に拗れそうな気がするから私と一緒に見回りね」

「おい！ それは一体どういう意味だよ。つたく、ま、でも私は最初から異変の事で霊夢に誘いに来たんだし。それにユウキと文に付いて行つて馬に蹴られる趣味はないからなあ」

「魔理沙、余計な事言わない！」

「どわっ!? じよ、冗談なんだぜ〜！」

「待ちなさい！ あ、ユウキさん、くれぐれも無理はしないように。文、ユウキさんに何

かあったら夢想封印10発は覚悟なさい！」

逃げる魔理沙を追いかけられるように霊夢はそのまま飛び去って行った。

「は〜い。霊夢さんも魔理沙さんもお気を付けて〜♪」

「馬に蹴られるって……そういえば、幻想郷に馬っているのかな」

牛や豚、鶏は見かけるけど、馬はいたっけかな。

魔理沙が馬を知ってるって事は馬はいるんだな、多分。

「魔理沙さんの言った事全く理解できてないんですね。哀しいようなホツとしたような、複雑です」

「そんな事よりも、結局取材の手伝いつてなんなんだ？ まあ、なんとなく予感はあるけど」

文は、言った。もうすぐその時期が来る、と。

つまり、文は一定の周期で訪れるこの花が咲き乱れる異変がもうすぐ起きる事を知っていて、その異変を取材の題材にするつもりだった。

で、俺が手伝えることは、異変の解決の取材、でもあれ？ この異変は自然に終わるから解決も何もない。

それは文も知っているはず。なら、俺は一体何をするんだ？

「ふっふっふっ、実はですね。ユウキさんはこれから幻想郷中の各地をまわって、みなさ

んと弾幕ごっこをしてもらいます！」

「微妙に違うけど、俺が予想していたとおりだったか」

「ただ単に弾幕ごっこしてもらっただけじゃもったいないんで、せつかくだから花の異変の時に行えば絵面もよくなるじゃないですか」

危険性はないとはいえ、異変を利用するとはそこまでして新聞大会で優勝したかったのか。

「で、条件は2つ。幻想支配で使うのは私の力のみ。相手の力をコピーしたり能力停止は禁止。どうでしょうかー？」

「どうでしょうかって言われてもな。文の力は何度も視てるから慣れてるし、飛行速度は抜群だから回避に専念するだけで済みそうなのもいるか」

避けまくるより弾幕で応戦した方が写真写りはよくなりそうだけど。

「そこらへんは全てお任せします。私はただユウキさんと皆さんの弾幕ごっこを写真に収めたいだけです。あ、美鈴さんや妖夢さんみたいな相手にはナイフや体術使った接近戦も行ってください。勿論私の力を使ってください。そつちも絵になりますから」

「ん、分かった。それにしても、霊夢がよく許可したな」

弾幕ごっこするのはともかく、体術や剣術を使った模擬戦にはあまりいい顔しないの

に。

「まーそこは、私の交渉術でうまく丸め込んだと思っただけだよ」

「隠す気も誤魔化す気もなく丸め込んだってストレートに言いやがった」

「それはもう。ユウキさんに対して嘘や誤魔化しは萃香さん並みに通用しないって分かっていますから」

「鬼と一緒にされるのはどうなんだろう」

嘘や誤魔化しが嫌いなものと見抜けるのは全く違うと思うんだけどな。

「まあまあ、ともかく早速行きましょう！ どこをどう回って誰とやるのかは大体決めてあります。勿論皆さんにアポも取っていますよー」

「そいつはなんとも準備が良い事で」

誰とやりあうにしても、結構知り合い増えたから今日1日で終わるのかな。

「あ、ちゃんと宿泊場所も決まっていますので」

「まさかのお泊り確定!？」

ホントよく霊夢が許可したな……なんで俺は霊夢がこういうの許可しないと思ったんだろ？

ま、いつか。

「それで最初はどこから回るんだ？」

「最初はですね、迷いの竹林になります。さきつ、レッツゴーですよー！」
こうして俺は文の力を使い、幻想郷中のみんなと弾幕ごっこをすることになった。
文の力しか使えないけど、ちょうどいいから幻想支配が幻想郷にどこまで馴染んでき
たか確かめるにはいい機会だな。

続く

第152回 「新人研修」

文の新聞取材に付き合う事になった俺は、最初の取材場所である竹林に向かっていた。

日影が多い森の中でも所かまわずありとあらゆる花が咲き乱れている光景は異様としか思えない。

これが誰かが起こした異変ではなく、自然現象としての異変なのだからタチが悪いな。

で、そんな異様な森の中を俺と文は歩いている。

「なあ、飛んでいかないのか？」

飛んでいけば早く着くの、文は歩いて行こうと言いつ出したのだ。

依頼主である文の言う事には従うけど、迷いの竹林へは結構な距離がある。

今回の取材は幻想郷の色々な所へ行く。

なら、歩いていくのは効率が悪いと思う。

「大丈夫ですよ。永遠亭へは時間の指定はしていません、今日行くとしか言っていないから。それに新聞なので、弾幕ごっこだけではなく道すがらに色々な風景もカメ

ラに収めたいんですよ」

普段の風景ならともかく、今の花だらけの風景を撮ってどうするんだろ。

異変中だからこそ風景撮りたいのだろうけどな。

「で、腕を絡ませるのは取材になんの関係があるんだ？」

神社を出発してから文はずっと俺の左腕に自分の右腕を絡ませて歩いている。

それで左手はしっかりカメラを構えて、時折写真を撮っているのだから流石に器用だ。

「そんなの私がユウキさんと腕組みしたいからに決まってるでしょ」

分かり切った事を聞いているのかとでも言いたげな顔をして、文はあっさりと自分の欲望をさらけ出した。

しかも、いつもの取材口調ではなく素の口調でだ。

文は最近、素の口調で話す事が増えてきている。

「欲望に忠実なのは前からか」

「そうそう。今更何を隠す事があるのよ。それに、こんな事しても無駄って分かっているね」

と、腕組しながら胸を押し付けつつもどこか悟ったような顔をする文。

「無駄と分かっているならやめたらどうだ？」

「……そういう反応されるのも予想済みですよーだ。どうせ動きにくいとか言うんでしょ？」

「いや、この程度の拘束じゃどうって事ないぞ」

学園都市にいた頃に、相手の能力で両腕に重しがついたような状態で戦闘した事あるし。

「色仕掛けを拘束って言いきる辺り、もうどうしようもないわ」

「そんな事よりも、写真写りのいい弾幕ごつこの風景ってどういうのだ？ 新聞に載せるような写真なんて撮った事も撮られた事もないから分からないぞ」

たまに美鈴や妖夢との組手は撮られるけど、あれは弾幕ごつこじゃないしな。

「あら、それはなんだか意外。ユウキさんでもやった事ない事あるのね」

「暗殺用や破壊工作の為の写真なら撮る事あったけどな」

カメラを使う事はほとんどなかったな。

ロシアに行った時もスマホのカメラ使ったし。

「……やつぱり、そういう所はユウキさんらしいわ」

なぜか文は諦め顔でそう言った。

まあ、観光客みたく和気藹々とカメラを撮りまくるなんて俺には似合わないけどさ。

「別にそこまで気にすることはないわよ？ 永遠亭で紅魔の主従コンビとやった時みた

いにすればいいわ。しいて言うなら派手に動いてくれればいいわよ。シャツターチャンスは逃さないから」

「派手に、か」

普段の弾幕ごっこって俺は基本的に走り回ったり、飛び回ったりして回避中心だったからなあ。

鈴仙と一緒にやったアレは、派手と言えば派手だったか。

「あ、そうだった。忘れるところだったわ。ユウキさん、これは依頼というかお願いなんだけど、私の新スペカを考えて欲しいの」

「新スペカ？」

「そう以前も紅魔異変の時に氷精を励ます為に新スペカを考案したでしょ？ それにこの前の永夜異変の時も月の兎とコンビネーションスペカで紅魔の主従を蹴散らしたし。だから私にも新スペカを考案して欲しいのよ」

新スペカねえ。

そう言われてもチルノの時も鈴仙の時も単に思いついたからやってみようって感じだった。

幻想支配で視た力は本人に出来る事は何でもできる。

だから、俺がわざわざ開発しなくても本人はいざれ思い浮かんでたであろう使い方な

んだけどな。

「ま、考えておくか」

「よろしくね。それにしても、本命に行く前に練習、ううん、研修はしておいた方がいいかもしれないですね、わね」

ん？ なぜ今わざわざ言い直したんだ？

「だー！ もうダメです、ダメ！ やっぱりこっちの口調の方が話しやすいですね」
「??？」

「いやあくユウキさん相手だと、こっちの口調の方が違和感なくて話やすいなーと思いまして」

「別に俺はどっちでもいいけど、素の口調だろうと取材口調だろうと」

「いえ、私の方が違和感あるので」

「なんだよそりゃ」

と、その時複数の気配がこちらに向かってくるのを感じた。

毎度の如く異変でハイテンションになった妖精達かと思っただが、それはチルノ達だった。

「おーい、ユウキー！」

「ユウキさーん！」

「わはー！ ユウキだー！」

「やつほー、おにーさん」

「こんにちはユウキ先生」

チルノに大ちゃん、ルーミアにリグルにみすちー、いつもの仲良し5人組だ。

「よっ、今日は5人そろってどうしたんだ？」

「せっかく幻想郷中がお花畑になったから、今日は1日花見をしようと思って」

花見って、まあ間違いではないか。

「それでせっかくだからおにーさんもどうかと誘いに行くところだったんだよ」

「ユウキーユウキー、お弁当作って一緒に行こう！」

ルーミアは俺の手を取りせがんできているが、目的は俺じゃなく俺が作る弁当なん

じゃないか？

「生憎だけど、俺は今仕事なんですね。また今度な」

「仕事？」

「そーです！ ユウキさんは私の助手として取材中なんですから、お子様たちと遊んで

いる暇はないんです！」

と、ここでチルノ達との間に文は割り込んできた。

「あ、えつと……ぶんちゃんだ」

「こんにちは、バ鴉さん」

「わーい、鶏肉♪」

「おや、天狗さんもいたんだね」

「文さん、こんにちは」

「ちよっ!! 私ずつとユウキさんの隣にいましたよね? 皆さん気付いていなかったん

ですか?! しかも、チルノと大ちゃん是我的名前覚えてください! ルーミアは私の事肉としか思っていないんですか?! リグルさん、みすちーさん、お2人だけですよ私をまともに挨拶してくれる……つてお2人も私の事気付いてなかったですよね!!」

自分の存在に気付いてなかったチルノに一氣にツツコミを入れる文、なんだか楽しそうだな。

「楽しくないですよ! 名前で弄られるのは私のキャラじゃ「ユウキの仕事ってなに?」ちよつとルーミア!」

「文が今度の新聞に載せる用に弾幕ごつこの写真を沢山撮りたいんだってさ、その手伝いだよ」

「ふーん。だったら、あたいたちも協力するよ!」

「うん。面白そうなのだー」

唐突にチルノがそういうと、ルーミアも頷いた。

「協力ってなにをだ？」

「私達と弾幕ごっこしよう、おにーさん？」

「うんうん、そうすれば新聞のネタになるよ」

「私は、その、弾幕ごっこ苦手だから協力できないかな」

リグルとみすちーも乗り気で、大ちゃんだけは不参加のようだ。

俺としては別に構わないんだけど、文はどうかな？

「うーん、そうですね。では、ここはユウキさんの新聞記者としての新人研修ステージという事でお願ひしましょう！」

新人研修って、それに俺は手伝いはするが新聞記者は関係ないと思うんだが。

まあ、チルノ達と弾幕ごっこは久々だからいつか。

「やったー！ それじゃあたいがいくね」

「えーチルノはいつも遊んでもらってるから私がやりたいー」

「ルーミアだつて遊んでもらつてるでしょ。先生とは私が遊ぶの！」

「いやいや、みすちーよりも私の方がおにーさんに遊んでもらつてないよ！」

「わ、私も……でも、私じゃユウキさんを満足させられないよね」

……言葉だけ聞くとすごく誤解されそう。

「いやはや、相変わらずチルノ達に大人気ですなえ、この妖精たらしさん♪」

「妖精たらしってなんだよ」

冷やかすように文が俺を肘で突っついてくる。

顔は笑ってるけど、どこことなく不機嫌そうに見えるのは気のせいだろう。

「でも、正直言つて研修とは言え、チルノ達1人1人を相手にしても絵的には物足りないかと、すぐ終わりそうですし。そうだし、どうせでしたら皆さん一斉に相手をしてはどうでしょうか、ユウキさん？」

「幾らなんでもそれはチルノ達をなめ過ぎだ。彼女達だつて怒るぞ」

と思つたのだが、とうのチルノ達は。

「おー！ みんなで一緒に遊んでいいの!？」

「ふっふっふっ、これならユウキに勝てるー!」

「いやいや、今私達ものすごく馬鹿にされたよね?」

「でもさ、みすちー? おにーさん相手なら私ら全員でも勝てないと思うなあ」

「リ、リグルちゃん、本当の事だけどそれは言っちゃダメだと思う!」

意外と皆素直に受け入れているな。

チルノとルーミアは言われた事分かつてないようだけど。

「ユウキ! あたい達全員と弾幕ごっこで勝負だ!」

「勝つたら、お弁当作つてお花見だー!」

なんか勝手に報酬まで決められてた。

「みんな、絶対に勝とうね！」

「だ、大ちゃんが燃えてる！」

大ちゃんまでやる気満々だ。

しようがない。文に頼まれた新スペカの事もあるし、ちよつと本気で行くか。

既に幻想支配で文を視ているので、準備は万端だ、

「では、弾幕ごっこ、開始！」

文の号令と共に、チルノ達が一斉に向かってきた。

さてと、見栄えのいい弾幕ごっこにするには、普段みたいに回避に専念するよりこつ

ちもスペカを使って迎撃した方がいいかな。

「みんないっくぞー！ 合体スペカで先生攻撃だー！」

「チルノちゃん、それ字が違う！ あ、ユウキさん先生だから合ってるの、かな？」

チルノ達は、大ちゃんを除いて一斉にスペカを使用するようだ。

「【雪符・ダイヤモンドブリザード】」

「【闇符・ダークサイドオブザムーン】」

「【蛍符・地上の恒星】」

「【声符・木菟咆哮】」

「つて！ その位置で皆がスペカ使ったら……（ピチューン×4）……互いに被弾して危ないぞ。と、遅かったか」

チルノ達はお互いのスペカで互いに被弾しあつてあつという間にピチューつてしまった。

後に残つたのは、アタフタとする大ちゃんのみ。

「ひよつとしてこうなるかもと予想はしていましたが、まさかこうもあつさりと予想通りになるとは思いませんでしたよ」

と、言いつつもしつかりと文は、シャッターチャンスは逃さなかつたようだ。

——ヒュウッ

残された俺と大ちゃんの間には夏とは思えない冷たい風が吹いた。

「あー……大ちゃん、どうする？ 仕切りなおす？」

このまま続けてもいいけど、流石に大ちゃん1人では荷が重と思う。

「いえ、私の負けです。では、ユウキさん……負けた私を好きにしてください」

「いや、どつからそういう話になつたんだよ」

大ちゃんは負けたのに全く悔しそうではなく、モジモジしながらその場にへたり込んでしまった。

「はい、そこまでです！ この勝負はユウキさんの勝ちー！ ではでは、私達は次の取

材はありますのでこれで失礼しますねー!」

文は俺の手を掴み、空へと飛びあがった。

「なんだよ、文。歩いていくくんじゃなかったのか?」

「もうとつとと行きましよう! どうやらあの大妖精は異変にあてられて様子がおかしいようですからね。さっさとこの場を離れましよう!」

異変で妖精の気がおかしくなるのは経験してるからわかるけど、大ちゃんの様子がおかしいのはそれとは別な気がする。

「そういうわけだから、大ちゃんまたなー! チルノ達の事よろしくー!」

「あ、はーい! 今度会った時はめちやくちやにしていいですからねえー!」

大ちゃん、酔っぱらってるみたいだな。

「今回の異変は自然現象ですからね。妖精達への影響も普段より大きいのかもかもしれませんね。さー! 永遠亭に行きましよう!」

研修の段階でこんなにくだぐだで、今回の取材はちゃんと最後まで出来るのは不安に思いつつ、俺達は魔法の森を後にした。

続く

第153回 「チュートリアル：魔法の森」

魔法の森

弾幕取材の為、永遠亭に向けて迷いの森を進む俺と文。

その道中で大ちゃんやチルノ達に弾幕ごっこを仕掛けられたが、チルノ達が自爆したのでなかったことになった。

「うーん、やっぱり一度くらいした方がいいですかねえ？」

文はさつきから何かを考え込んでいる。

まあ、どうせろくでもない事だろうからほっとしてるけど。

「うん、決めました！ 本命の前に一度研修しましょう、研修」

「お前はさつきから何を言っているんだ？」

「いえ、さつきやりそこねたユウキさんの研修を行おうと思ひまして」

「なんでだよ。文の力使つて弾幕ごっこをするだけだろ」

なぜ弾幕ごっここの取材に研修が必要なんだ。

「ちつちつちつ、確かにユウキさんは弾幕ごっこにはかなり慣れてきていますが、私
が今回行うのは特別な取材なんです。普通に弾幕ごっこを取材するだけじゃ、わざわざ

ユウキさんに頼みませんよ」

つまり、いつも行う弾幕ごっことは違う弾幕ごっこをしなければいけないって事か。

派手に動き回ればいいとは言ってたけど、どうなのが派手になるのか。

「で、その特別っていうのは具体的には？　ずっと言ってるけど、派手に動き回るってのはどういう風なんだ？」

「例えばですね。避けなくていいものまで大袈裟な動きをして避けるとか、スペルカードも派手な動きや弾幕を放つものを使って欲しいんです。ユウキさんの弾幕ごっこは動きは綺麗ですけど、無駄がなさ過ぎるんで」

無駄がなさすぎる、か。

俺の弾幕ごっこは基本的には回避だからな、無駄な動きしていたらあつという間に落とされてしまう。

「それだと写真写りが良くないって言うのか？」

「いえいえ、それでも綺麗な絵面になりますから問題ありません。ただ……」

「ただ？」

「飽きました。私も読者も」

文の言葉に思わずつこけそうになった。

飽きましたって、なんだそりゃ。

文はまだわかるが、読者も、って。

そこまで文の新聞に読者いるとは思えないけど。

「というわけで、私が欲しい写真を撮る為にやっぱり研修が必要なんです！」

ただ研修って言いたいだけだと思う。

そういえば、ここはアリスの家が近いな。

アリスなら上海達を使った多角的な弾幕を使うし、写真写りが良い弾幕ごっこの練習になるかな。

「ん〜そこまで言うならアリスの所寄って行くか？」

「はい、寄りましょう！ ぜひ寄りましょう！」

なぜか文はものすごく乗り気だった。

乗せられた気がするが、目的が分からない。

アリスの家

というわけでアリスの家に来てきた。

家にはアリス以外にもパチュリーがいた。

「それで私の家に来たわけね。文と2人なんて珍しいと思ったらそういう事」
そういうとアリスはパチュリーの方をちらつとみて、なるほどと呟いた。

「道理で今日のパチュリーは機嫌がいいわけね。でも、それなら私にも言ってくれたら取材に協力したのに」

「いやあ、アリスさんには伝え忘れてました。まあ、そういうわけで私とユウキさんは今日から少しの間ですけど、2人っきりの密着取材なんです」

なぜか文が自慢するようにアリスとパチュリーに言うが、特に2人はどうとも思っていないようだ。

「2人っきりの密着って、行く先々で誰かいるじゃない。これから永遠亭には鈴仙、妹紅もいるかもしれないし。で、うちにはレミイや妹様や咲夜達。白玉楼には妖夢がいるわね」

パチュリーの言う通り、今回は文と2人きりってわけじゃない。

「いいんです。そこに行くまでが2人つきりなんですから！ 早速さつき出鼻をくじかれましたが」

「チルノ達みたく道中に出会うのだったっていいでしょ？ だから私達に自慢しても意味ないわよ」

アリスと文は、何か俺には分からない話をしているのでほつとこう。

そういうえば、パチュリーに相談したい事があつたんだった。

紅魔館で相談するつもりだったのだけど、ここで会えたのは良かった。

「なあ、パチュリー。ちょっと相談があるのだけど」

「あら、あなたから相談てかなり珍しいわね。いいわよ。どんな事かしら？」

俺が声をかけるとパチュリーは少し笑みを浮かべて答えた。

アリスの言う通り、確かに今日のパチュリーは機嫌がいいみたいだ。

パチュリーもなんだかんだと面倒見いいから相談をされると嬉しいのかな。

「実は文から今回の取材で頼まれ事をされて……」

「ふーん」

なぜ急に不機嫌に戻った。

なんだか今回なぜって思う事が多いな。

幻想郷に馴染んだつもりだったけど、まだまだ分からない事が多いな。

「その頼まれ事って言うのが、新しいスペカを作って欲しいって事なんだよ」

「新しいスペカねえ。以前氷精に教えたように文の力を使ってって事よね？ それは私に聞くよりも自分で考えた方が早いじゃないの？ 幻想支配はあなた自身の力じゃない」

「それはそうだけど、風の力って言うのが応用力高すぎて方向性が決まらなくてさ。文は方向性含めて俺に任せるって言うてるし。だから多様な属性魔法が得意なパチュリーに聞いてみたんだよ」

学園都市でも風系の能力ってあまり使った事ないしな。

まあ、パチュリーの属性に風はないけど。

「なるほどね。うん、だから私を頼ったのね。流石ユウキ、わかってるじゃない」

また上機嫌になった。

今日はそういう日なのか、確か女の子にはそういう日があるって土御門言ってたな。

「で、風の力を使ったスペルカードね。うーん、なら風の力を使って弾幕を反射する、のはどうかしら?」

「弾幕を反射? いいのかそれ?」

このナイフを作った時に霊夢から弾幕の反射は反則みたいな事言われたんだけどな。

「普通に反射するのではなく、スペルカードを使つての反射なら問題ないわ。スペカをスペカで相殺したりするでしょ? あれと同じよ。それにそっちの方が美しいわ」

なるほど、弾幕ごっこって美しさを競ってるんだもんな。

「ありがとう、パチュリー。それが分かれば色々と思ひ浮かんでくる」

「あゝ? 何2人だけで盛り上がってるんですか?」

いつの間にかアリスと口論を終えた文がこちらを睨んできた。

アリスもジト目でこつちを見ている。

「ん? あ、そっちの話は終わったか? なら、アリス、弾幕ごっこに付き合ってもらつ

「ていいか？」

「そうねえ。お茶会も始まったばかりで肴も欲しかった事だし。ちようどあなた用に試してみたいスペルカードもあったしね」

「ありがとな。あと、スペルカードは出来れば包囲攻撃型のを俺に使って欲しいんだ。アリスならあるだろ？」

「ふふつ、ますますちようどいいわね。試してみたいスペカはちようどそのタイプよ。早速始めましょうか」

こうして、俺達は外で弾幕ごっこをすることになった。思えばアリスとはあまり弾幕ごっこした事なかったな。

パチュリーに作ってもらったナイフの試し斬りした時と、あとは2、3回程度だ。なのに、俺用のスペカを用意するなんて魔理沙並みに勉強熱心だな。

「それじゃ、使うスペルカードは1枚ね。行くわよー」

小手調べとばかりにアリスは最初、人形を使わずに弾幕を撃ってきた。

いつもやる弾幕ごっこなら森の木々の合間を駆け抜けて避ける所だけど、今日は文の力を使って見栄えのいい弾幕ごっこをしなければならぬ。

なので、俺は素早く上空へ飛び上がり弾幕を避けた。

と、同時に両手を振るいこちらにも弾幕を放った。

別に手を振るう必要はないけど、文の弾幕は風の弾幕だからなんとなく風を起こす動作をしたくなる。

「わっとな!？」

アリスは俺の反撃に驚いたのか、慌ててその場を飛び撥ねて避けた。

「何やってるのよ、アリス」

慌てて避けたアリスをジト目で見ながらパチュリーは呆れた声を出した。

「だって、ユウキが弾幕ごっこ始まってすぐに反撃してくるなんて珍しいからつい、ね。あなたって弾幕は回避専門でしょ。避けながら打ってくるとは思わなかったわ」

「あーまあな。そうかもしれない」

俺は今まで弾幕ごっこでは攻撃する事はあつたけど、大体はスペカを避けまくって時間切れを誘うやり方だった。

「今回は文からもっと攻撃してくれって言われてるからな」

「なるほどね。じゃ、遠慮なく! 上海! 蓬莱! みんな!」

「シャンハイ!」「ホウライ!」

上海と蓬莱を中心に数体の人形が、俺を取り囲むように配置された。

この弾幕パターンは今までのアリスにはなかったな。

でも、この配置なら、いける気がする。

集中する為に目を閉じ両手を広げ、イメージとして自分を包み込む翼を作る。

「あやや？ ユウキさんの周りの風の流れが変わりましたね」

「そうね。半透明な翼が形作られているのかしら」

文とパチュリーの言う通りなら、俺のイメージはうまく形になっているようだ。

「むっ、何かしてくるみたいね。ならこっちも 【偵符・シーカードールズ】」

アリスがスペルカード宣言をすると、俺の周囲に展開された人形たちが一斉に弾幕を放ってきた。

このタイミングを待っていた。

俺は今から文の力を使った新しいスペルカードを使用する。

が、スペルカードを使う時は名前がないとしまらない。

そもそも名前を付けるなんて事は全く未経験なので、仮としてそれっぽい単語を付けてみた。

その名も。

【仮符・反風天開】

スペルカード宣言と同時に、両手を広げ自分の周りを包み込んでいた風の翼を一気に解放し、羽ばたかせる。

「嘘お!?! 弾幕が全部弾かれただけじゃなく、戻ってきた!?!」

「あやや、これは見事！」

アリスや文の驚いた声を聞いて、恐らく俺が思い描いたイメージ通りに行つたと確信した。

目を開けると、俺の周囲にいたはずの人形は全てが落ちていた。

「パチュリー、文。今のはどんな感じになった？ 文の風に俺の力を加えて、防壁としてだけじゃなく反射もさせてみたんだけど」

「はい！ ユウキさんが生み出した風の翼がアリスさんの弾幕の軌道を変えて、人形を撃ち落としました！」

「ふふっ、文の風にあなたの力を合わせるなんて器用な真似、すぐにできるとは思わなかったわ」

人形たちが放つた弾幕は、羽ばたく翼に逸らされるようにその軌道を変え、軌道を変えられた弾幕はそのまま、人形たちの元へと戻っていったはず。

一方通行が自分への銃撃などを相手に反射させていたのを、俺なりに再現してみたのだけどうまくできたようだ。

「パチュリーの言う通り、器用な事するわね、あなたは。包囲攻撃型の弾幕を望んでいたのは今の反射スペルカードの見栄えが一番良くなるだろうと見込んでの事だったのね」

アリスは、呆れ半分の反応だけど、やっぱりマズかったのかな。

「で、文。今の文の新しいスペルカードとしてはどうだった？」

文の反応から見て、今のスペルカードは成功だと思う。

「ただ、文の反応は鈍い。」

「うーん、今のはどうでしょうかあ。確かに半透明な風の翼など、見栄えはかなりいいんですけどね。私が使うとなると厳しいですね」

「厳しいというのはどういう事だろうか。」

「つまり文が言いたいのは、今のユウキが使ったスペカは、文の風にあなたの力を使って反射の属性を付与してるから見栄えのいいスペカになったのよ。文の風の力だけじゃあんなキレイにはいかないわ」

「パチュリーさんに詳しく解説されちゃいましたが、その通りです。私が風を使って弾幕を反射させようとしたら、暴風レベルの風を起こさないとダメで、そんなの乱暴的過ぎて美しくありません」

なるほど。確かに2人の言う通りだ。

チルノのような新スペカと言われたが、あれはチルノの力だけで使えるスペカだった。

けど、今回俺が生み出したのは文の力と俺の力がなければ成立しないスペカだ。

これじゃ、文のリクエストに応えたとはいえない。

「悪い文。また考え直すよ」

「いいえ、私のアドバイスが悪かったわ。風の力を使って弾幕を反射すると言ったのは私だもの。ごめんなさいね、文」

「あ、あややや！ そんな、気にしないでくださいな、お2人とも。そこまで真剣に新スペカを考えなくても、出来ればレベルでしたから。それに、今のスペカはあれはあれでユウキさん専用の新スペカと言うことで有効活用してくださいな、いいですよ」

文はホントに気にしていないようだけど、一度頼まれた以上それに応えないとダメだ。

「ひよつとして、文。ユウキが他の人の新スペカを思いつくのに嫉妬して、自分も作って欲しかっただけ、だったたり？」

「ギクツ？ な、なんの事でしょうかアリスさん？ 私は別に、ただユウキさんの発想力と応用力の高さを知ってるからですわねえ」

「はいはい。言ってる事変わらないじゃない。あ、言っておくけどユウキ。私のシーカードールズはまだまだ未完成なのよ。今回で改良点も分かったし、次はうまく反射出来ると思わない事ね」

「ああ、お互いまだまだ精進しないとな」

こうして、俺と文はアリスの家を後にした。

「あややくもうお昼時ですか。ユウキさん、迷いの竹林に行く前に人里へ行って昼食にしませんか？」

「そうだな。今から竹林に行ってもお昼時になるし、先に済ませちゃうか」

「はい、そうと決まれば行きましよう急ぎましよう！」

そう言うと、文は俺の手を取って空へと飛びあがった。

「お、おい。歩いてゆつくり行くんじゃないやなかったのか？」

「あはは、善は急げ、ですよ♪」

自分の新スペカが完成しなかったというのに、文はずっと上機嫌だった。

続く

第154回 「EXステージ：神様取材」

人里

俺と文は永遠亭に行く前に、少し遅めの昼食のために人里へと寄った。

昼食をとるのは、いつもの蕎麦屋だ。

人里には意外と食べ物屋が多いけど、なんとなくここが馴染みになってしまったな。

「あら、ユウキ君いらっしやい。今日は天狗様とデートかい？」

「今日は、ってなんだよ。今日はって」

またこの流れか。

「あ、大丈夫です。私も全部分かっていきますから。霊夢さんやレミリアさん達だけではなく閻魔様まで一緒に食事したのには驚きましたけど」

今更だけど、人里での俺のプライベートが筒抜けすぎな気がする。

「ところで、この前ユウキさんと来た時よりメニュー増えてませんか？」

確かに最近このメニュー、特にデザートが増えている気がする。

「ああ、それはちよつと前にきた子から外の世界のお菓子を教わって作り始めたんだよ」

外の世界から最近やってきた子、ひよつとして早苗かな？

「なるほど、早苗さんでしたか……」

文も同じように思ったらしいが、その表情は険しい。

「どうした文？ ひよつとして、早苗の事で何かあったか？」

妖怪の山にいきなり幻想入りした一件は、確か天狗たちは様子見の方向で解決したはずだ。

「えっ？ いや、そういうわけではないですよ。なんだかんだ早苗さんとはお話する事多いですからね。他の天狗たちもあらかた容認してます」

「なら問題ないだろ。何そんな険しい表情を浮かべているんだ？」

「いえいえ、どちらかと言うとあなたの事です、ユウキさん。随分と早苗さんと仲良く話をされているとよく聞きました。そこらへんはどうなのかなーと」

どうって、どう答えればいいんだ？

「私だって早苗さんに色々話を聞きたいと何度も神社に行きましたけど、大体霊夢さんやあなたの事ばかりで肝心の早苗さんや神様の話を聞けずじまいなんですよねー？」

早苗はよく博麗神社に遊びに来る。

霊夢も最初はちよつとめんどくさそうにしていたけど、純粹に自分に憧れを抱く早苗を邪険に出来ずなんだかんだ仲が良い。

俺も人里で会って食事に誘われてここに来る事も多い。

って、そういうえば俺も霊夢も守谷神社の神様に会った事ないな。

「ひよつとして守谷神社の神様ってまだ会った事ないのか？」

「そうです！ それもあります！ 大天狗様はお会いした事あるみたいですけど、私はなぜか毎回他の用事だったりで会った事も見た事すらないんです！ そうこうしているうちに大天狗様からは天狗や河童達は接触は控えろと言われて、取材が出来なくなりました！」

人里から妖怪の山の守谷神社へ行く道は、基本的に天狗たちが参拝客を陰から守護するという形になった。

神様を下手に刺激すれば山全体の大問題に発展しかねないそうさ。

それほど守谷神社の神様は力が強いらしい。

「だったら向こうから本人が来たなら問題ないだろ？ ほら」

「えっ？」

ちょうど蕎麦屋の入口で早苗と見た事ない紫の髪をした女性が入ってくるのが見えた。

多分、あの女性が神様なんだろうな。

早苗が神奈子様と呼んでるし、うまく隠しているみたいだけど、今まで視た事がない力を感じる。

「あ、ユウキさあ〜ん！」

早苗は大声をあげて俺の方へ手を振ってるけど、そこまで店内は広いわけじゃないのですぐ目立ってしまった。

でも、他のお客さんは特に気にする様子はない。

「皆さん慣れっこなようですねー」

文はすぐ横にいる自分の名前が呼ばれなかったのが不満なようだ。

「よう、早苗。ちよつとぶり」

「はい。お久しぶりですね！ 今日文さんがご一緒なんですね！ 文さんもお久しぶりです！」

今日も早苗はハイテンションで元気いっぱいだ。

「こんにちは。私の事なんて目に入ってないかと思ってきましたよ」

「はい。全く目に留まっていませんでした！」

「あ、あやややく……」

ものすごい笑顔でハツキリ言っちゃったよ。

「こら、早苗！ そんなにハツキリ言うんじゃないよ。天狗殿に失礼でしょ。と言うか私の事もほったらかしかい？」

「あわわっ、ごめんなさい、神奈子様！ コホン。ユウキさんに紹介しますね、こちらが

守谷神社の神様であられる八坂神奈子様です。神奈子様、こちらがユウキさんです」
「初めまして、八坂神奈子様。俺はユウキです。博麗神社の、居候です。よろしくお願いします」

俺が自己紹介すると、神奈子は俺の顔をジーつとみつめてきた。

紫のようにこつちを警戒してるわけじゃなく、品定めをされているようだ。

でも、永琳のように俺の事を観察するように見ている感じで不快感はない。

「うんうん、君がユウキ君ねえ。早苗から色々とよく聞いてるよ。耳にタコができるくらいね」

そういう神奈子の表情は心なしかうんざりしてるように見える。

色々苦労してきたんだろうな。

「で、そつちの天狗殿は射命丸文、だよね？」

「はい！ ご挨拶が遅れました。射命丸文と申します」

文はいつもの取材口調とも違う、畏まった言葉遣いだ。

流石に神様相手ではそうなるか。

「君の事は恵来えらいから聞かされているよ。どうやらお邪魔だったみたいだね」

と、ここで意味深な視線を俺に向けてきた。

別にただ雑談してただけだし、作戦会議みたいな事はしてないので問題ない、はず。

ちなみに、恵来と言うのは文の上司で天狗たちの取り纏めをしている大天狗の名前だ
そうだ。

「い、いえいえ」

「ちようどよかった。ユウキ君の知り合いなら相席お願いしてもいいかい？　ちよつと
混み始めちゃってねえ」

「早苗が良ければ、俺は構わないですよ。文もいいだろう？」

「えっ？　そうですねえ……」

文の方は色々と考え込んでいるようだ。

「ほら、今なら相席のついでに取材しても問題ないだろ」

「うくん、そうですね。相席を頼まれたら仕方ありませんよね、あはははは！」

と言うわけで、俺の隣に早苗が座り、向かい合う文の隣に神奈子が座った。

「では、早速ですが八坂神奈子様。色々とお聞きしたい事があるのですが」

「ん？　ああ、天狗社会も大変だね。いいよ、恵来には私から言っておくから。大体、私
はいつでも誰でも取材いいよと言ったのに彼女が変に気を遣ってくれたんだよねえ」

豪快に笑う神奈子につられて、文は苦笑いを浮かべた。

後で聞いた話だけど、大天狗の恵来を名前で呼ぶ者はほとんどいなく、なぜか気が
合って親友と化した神奈子くらいだけの事。

「神奈子様だったら幻想郷に来てから久方ぶりに直に敬わられてテンションが上がりまくってるですよ」

外の世界じゃ、神社への参拝客が減り誰かに敬わられる事もなくなり信仰が減って、神奈子が存在が消滅しかけた。

けど、幻想郷に来て人里での早苗の布教活動の成果もあって、人間だけじゃなく山の妖怪の一部からも信仰心が集まってきたそうさ。

「でも、その割には神奈子がこの店に来た時は特にそういう反応はなかったな」

「そうなのよ、ユウキ君！ この人里での信仰心は集まってるんだけど、もっとこう昔ながらの信仰の仕方つてものがいまいちなのよね」

「昔ながらの信仰？」

「有難みって言えば分かるかね。道行く人が拝み倒していく、そういうのがここにはないのよ。ま、私以外にも沢山神様いるみたいだから見慣れているのかもしれないけどね」

「つまり、神奈子をもってはやされたいのか？」

「うーん、そういうのとも違う、のかねえ……ところで、ユウキ君、うちに婿に来ないかい？ 早苗も君の事気に入ってるようだし」

「「ぶーっ!？」」

何かいきなり飛んでもない話をされた。

文も早苗も思いつきりお茶を吹き出してる。

俺はと言うと突拍子もない話に目をパチクリさせた。

「か、神奈子様!? いきなり何を言いだすんですか!? 勧誘するにしても言い方つてものがあるじゃないですか!」

「そうですよ! 今この場に霊夢さんいたら夢想封印どころか、夢想天生されますよ!」

「あー博麗の巫女つてのはそこまで野蛮なのかい。で、どうだいユウキ君?」

「どうだいつて言われても、ハッキリ言うとな俺は神様がどういうつてのに興味ないし。無神論者とまではいわないけどさ」

学園都市にいた頃から、宗教には興味がない。

これは別に俺が木原で、科学者の端くれだったから信じていないと言うわけじゃない。い。

神の力の一部を借り受けたら、本物の天使の偶像が現れたりとか色々目にしてきたから信じていないわけじゃない

神がどうこうつて言ってる輩にはロクなのがいなかったし。

「それは残念。ま、冗談だけどね。博麗神社に喧嘩売るつもりもないし。無理やり引き入れても信仰がないんじゃない意味ないしね」

「どうやら神奈子流の冗談だったようだ。」

「や、やだなあ神奈子様。冗談にも程がありますよ」

「そうですよ。危うく心臓が止まりかけました。いや、ホント、マジで……」

文の顔色がさつきから二転三転してて面白いな。

「それにしても、まさか神様と分かつててもこうも気さくに話出来る人間がいるなんて。」

大胆不敵と言うか豪胆と言うか、そういう意味でも君には興味湧くねえ」

神奈子がニヤリと悪巧みしてそうな笑みを浮かべた。

言われてみれば、ずっと神奈子って呼び捨てにしてたな。

神様相手には不敬すぎたか。

「これは大変失礼いたしました八坂神奈子様」

「「……………」」

あれ？ どうして3人とも固まるんだ？

「うん、君の言いやすい言葉でいいよ。別に悪口言われてるわけでもないしね」

なんだ？ 敬う気持ち籠めて丁寧な言葉使ったのに、神奈子がげんなりした表情を浮かべたぞ。

この表情、前に紅魔館で執事をやった時のレミア達と同じ表情だ。

「…………ユウキさんはやっぱりそのままが一番ですよ、はい」

「え、ええ」

文どころか早苗までも微妙な表情を浮かべている。
やっぱり変なのか。

俺だつてここのおばちゃんや梨奈の両親とか、敬語で話す事多いと言うのにこんな反応されたことない。

「いえ、変だとは言いませんよ？　ですが、その……」

「普段とのギャップが激しすぎて、正直似合つてないですね」

早苗に真顔で言われてしまった。

「いや、ほら、皆素の君が一番だつて言つてるだけだしね。変に気を遣われるよりは私も話しやすいから、ね？」

神様に慰められるつて初めての経験だ。

何とも言えない空気が流れる。

こういう場合、俺はなんて返事をすればいいのか。

「あーらダメだよ文ちゃんに早苗ちゃん、普段から色々してやられてるからつてユウキ君イジメちゃ。ほら、ユウキ君もこれ食べて元氣だしな。サービスしておいたからさ」

そこへ琴葉さんが頼んだ料理を運んできてくれた。

俺はただのざるそばを頼んだのに、普段より大盛でおまけに天ぷらまで付いていた。

「ははっ、ありがとう琴葉さん」

「とりあえず、食べようか」

「そうですね」

その後、何事もなかったかのように食事をしながら歓談を終えて俺達は別れた。

俺達は永遠亭を目指して、迷いの竹林へと向かった。

「で、良かったのか文？」

「えっ？ 何がですか？」

「神奈子への取材、ろくに出来なかっただろ」

結局、神奈子への取材はうやむやになり、早苗の天然な所を神奈子がぶっちゃけて、早苗がその度に否定していくと言う流れだった。

「あー、いいですよ。本人から何時でも神社に来ていいとお墨付き頂けましたし。はたして達にもそう伝えてくれと言われた程ですからね」

「これまでよりは守谷神社には天狗たちは行くやすくなるって事か。

「思ったよりは気さくな神様だったな」

「そうですね。私も思い描いていたイメージとのギャップが凄かったですよ」

「ひよっとして幻想郷の他の神様もあんな感じか？」

「うーん、考えてみれば結構気さくな神様多いですね、秋姉妹とか。ま、ユウキさんなら
いずれ神様以外にも色々な種族に出会おうと思いますよ」
さらりと文の口から出た秋姉妹とは、思っていたよりも早く出会う事になるのだっ
た。

一方、永遠亭では……

「遅い！ あいつつたら遅すぎるわ！」

「鈴仙ちゃんつたら朝から同じこと何十回言ってるのさ。ゆーちゃん達来るのは午後
だつて御師匠様も言つてたでしょ。あ、そうだ。そんなにイライラしてるなら息抜きに
さ……」

とある兎の悪巧み。

続く

第155回 「ステージ1：迷いの竹林」

迷いの竹林

やつと今日の取材1か所目にたどり着いた。

色々な所寄ったけど、本来の目的地ってここだったんだよな。

人里の周りでは花が咲き乱れていたけど、竹林に入ると普段より花が多いくらいで異変の影響はそこまで及んでいないようだ。

「さて、いよいよやってきました迷いの竹林、ここまで長い道のりでしたねユウキさん」
「ああホントにな。ここを目指して博麗神社を出たのが朝なのに、もうお昼どころか3時だぞ」

「問題ありませんよ。永遠亭には午後としか言っていないから。竹林に入ったらウサギ達が出迎えに来てくれる手筈になっています」

文がそう言うならいいか。

と、迷いの竹林に足を踏み入れたのだけど、妙な違和感があった。

いつかみたいに変な電波とかが飛び交っているわけではない。

注意深く辺りを見渡したが、特に変わった点は……あつ、あの地面微妙に他と色が違

う。

「さて、迎えのウサギさんはどこでしょうか？」

そこへ文が足を踏み出そうとしている。

「待て、文」

「えっ？ あややややつ!？」

文が足を地面に着いた瞬間、咄嗟に腕を引っ張り自分の方へと抱き寄せた。

その瞬間、地面が崩れ、大きな穴が現れた。

「危なかった。なんて古典的な罠なんだ」

下を覗き込むと、穴は結構深く、底には何か白いものが敷き詰められているのが見えた。

多分、トリモチかな。

「あ、あやややつ……」

「ん？ あ、悪い」

顔を赤くした文を抱きしめたままだった。

手を離すと、文は超高速で俺から離れ荒くなった息を整えているようだ。

「落とし穴なんて空を飛ぶ天狗には珍しいトラップだったか。そりゃ驚くのも無理ないか」

普段だつて飛んで移動するだろうし、落とし穴なんて狩猟用でたまに見かけるくらいだろう。

「ち、違います！ 確かに驚きはしましたが、そういう意味で驚いたんじゃないかもしれません！ 全くもう。ともかくこの先も落とし穴があるかもしれないから飛んでいきましよう！」

急に不機嫌になった文が、普段は消している翼を広げ竹林を飛んでいこうとした。が、そこでも何か違和感があった。

よく見ると、空中に糸のようなものが張り巡らされていた。

——プチンツ

「待て、文！」

「ええ？ またですかー!？」

飛び上がろうとした文を掴み、その場から離れた。

すると、文が居た場所を数個の球のようなものが過ぎ去り、すぐ横の竹にぶつかった。よく見ると、その物体の正体は泥団子だった。

「落とし穴を回避しようと飛び上がったら泥団子の餌食になるのか、なかなか考えたト
ラップだな」

「……………」

「あ、また悪い、文。呼び止めてたら間に合わないと思ってさ」

またさつき同様文を抱きしめる体勢になってしまった。

「うう〜」

顔を更に赤くした文が恨めしそうな表情を浮かべて俺を睨んでいる。

「いや、確かにこの体勢は悪かったけど、咄嗟だったからな。それにトラップの事なら俺を睨んでもしょうがないだろ」

「……もう、良いです！ こんな罠くらい全部まとめて吹き飛ばしてやるー！」

——ゴウツ！

文は葉団扇を取り出し、カいっばい竹林の奥に向けて振りかぶり、強力な竜巻を起こした。

竜巻は地面に空いた落とし穴や、空中や竹の間に張り巡らされていたワイヤートラップなどをみな破壊した。

鬱陶しいトラップを纏めて破壊しようとしたのだろうけど、なんだかただの八つ当たりのように見える。

スペルカードも使わず、ただ力任せに吹き飛ばしたし。

ただ、竹をなぎ倒すような環境破壊じみた真似はしなかったのは流石だ。

「落ち着けよ、文。ほら、もうトラップはなさそうぞぞ」

「ぜえ、ぜえ……少しはスッキリしました♪」

「そうか。そりゃよかつたな。それにしても……」

文が破壊したトラップに目を向ける。

そこには泥団子から、竹槍、爆竹、鉄球、とろろなど様々な嫌がらせが散乱していた。とろろは勿体ないだろ。

「あややつ、随分と悪質と言うか陰湿ですね。一応竹槍の先は綿で包んだりとか大怪我しないようにはしているようですが」

「念のために聞くけど。取材を盛り上げるために事前にトラップを用意してもらおうように頼んだのか?」

「そんなわけないじゃないですか! もしそうならなんで依頼したトラップに自分でかかりかけるんですか!」

「ま、そうだよな。つて事は……てゐ、そこにいるんだろ?」

竹林の一角に向けて声をかけると、てゐが苦笑いを浮かべながら出てきた。

「あちゃあ、いるのバレてたんだね。さすがゆーちゃん」

「なるほど。これはあなたの仕業でしたか」

「えーつと、この罠の事なんだけどね。どういったらいいかなあ」

てゐは罠を作った事を否定するわけでも肯定するわけでもなく、どういったらいいか

迷っている様子。

だろうな。この罠を作ったのは多分てゐじやない。

「このトラップ、鈴仙が作ったんだろ？」

「おお、当たり前！ よくわかったねゆーちゃん！」

「えっ？ 鈴仙さんが作ったんですか!?! てつきりてゐさんの仕業かと思ったのですが、ユウキさんも良く分かりましたね」

「やっぱり愛の力？」

そう言う文がてゐを睨みつけた。

って、愛の力ってなんだよ。

「そんなわけないだろ。ただ、俺がこの竹林で死なない程度のトラップを作るならこう
いうの作るから、じゃあこれは鈴仙だなって思っただけだ」

「いや、それを愛の力って言うんじゃない（かな・ですか）!?!」

2人してハモってツツコミされた。

俺別にボケたわけじゃないんだけど。

「はあ、鈴仙ちゃんと京ちゃんがここに居なくてよかつたなあ」

「2人とも永遠亭にいるのか？」

「うん。実はね、竹林に罠を作るのは私が提案して簡単な些細な罠ならいいってお師匠

様も許可したんだけど、沢山罨を作りすぎちゃって、それでお説教中なんだよ」
「なるほどなるほど、ってお京もかよ」

鈴仙が作ったのは予想できなかったけど、お京までとは思わなかった。

「罨自体は鈴仙ちゃんが作ったんだけど、それに付属するのは京ちゃんが作ったんだよ。泥団子とかとろろとか」

「これもまた意外すぎる。」

「って、元凶はてゐさんじゃないですか！」

「うっしっしっ、気付いた？ まー私も少しお説教されて、罰として罨の解除と鈴仙ちゃん達の説教が終わるまで2人の相手をするように言われて来たんだけど、まさか文ちゃんが力づくで解除するとは思わなかったよ」

「てゐはそう言ってるが、実際は俺達がトラップにどんな反応示すかコツソリと見ているつもりだったと思う。」

「あ、あややつ、それは忘れてください。で、私達の相手と言う事は？」

「うん。私が弾幕ごっこの相手になるよ。ゆーちゃんはそれでいい？」

「良いも何も俺は誰と弾幕ごっこするか文から聞いてなかったからな。問題ないぞ」

「今回の収財、どこに行くかは聞いていたが誰と弾幕ごっこするかは、まだ文から聞いてなかった。」

着いてからのお楽しみって言われてたし。

「じゃ、早速……あーその前に、片付けませんか？ 写真撮るにしても、背景が……」

カメラを構えた文が苦笑いを浮かべながら、指差した方を見ると文が破壊したトラップがぐちゃぐちゃになっていた。

確かに、これじゃ写真写りが悪すぎるけど、これやったの文なんだけどな。

「はあく仕方ない。手伝うよ」

「ごめんね。流石にこうなつてると思わなくて、さつき他の兎達呼んだから皆でやればすぐに終わるよ」

話しているうちに、人型になれる兎達がやってきて、落とし穴を埋めたりなどトラップの後片付けをした。

トラップの残骸の中には、見た事がないタイプの小型のレーザー探知機まであった。

竹林には釣糸だけではなく、こういう目に見えないものまで使っていたのか。

鈴仙が持っていた月の道具だろうけど、これを見る限り月の科学力は学園都市以上かもしれないな。

結構かかるかと思ったが、1時間もかからずに片付けが終わった。

兎達もてゐの指示でテキパキと働いていて、感心したのだけど。

「多分、ゆーちゃんがいるから張り切ったんだと思うよ」

と若干呆れ気味にてゐるは話していた。

どうやら永琳のいう事を聞く事が多く、てゐや鈴仙にはあまりいう事を聞かずに好き勝手に動く事が多いらしい。

「さて、それじゃ始めよつか、と言いたいところなんだけど。ゆーちゃん一つお願いがあるんだけど、いいかな？」

「それは、お願い事によるな」

「実はね、この子達も弾幕ごっこに混ぜて欲しいんだよ。私がゆーちゃんと弾幕ごっこするの知って自分達もやりたいって言ったんだよ。それが掃除を手伝った報酬だつて。5人ほどなんだけどいいかな？」

てゐがげんなりしたように兎達を見ると、皆ウンウンと頷いている。

「俺は構わないけど、文はどうだ？」

「私としては見栄えが良ければそれで構いませんので、あとはユウキさんにお任せしますよ」

「よしつ、なら大丈夫だね。みんなくゆーちゃんが大丈夫だつて！」

——ワーツ！

てゐの呼びかけにテンションが上がる兎達。

大人数が相手は良いけど、チルノ達みたく互いの弾幕に当たってピチュったりはしないだろうな。

「それじゃ、準備はいいですかー？」

「いつでもいいぞ」

「こっちもおつけー。スペルカードは1枚だけ使うよー」

「じゃ、弾幕ごっこ始めちゃってくださいー！」

文の掛け声と共に、てゐ達が一斉に弾幕を放ってきた。

「【幻符・幻想支配モード文】！」

文の力で両足に風を纏い、その場を飛び退き弾幕をかわした。

身体強化は美鈴の力が一番だけど、文の力もスピード強化には向いている。

「お、やるねゅーちゃん。みんな！ ドンドンいっちゃうよー！」

「「おーー」」

兎達は、てゐを中心に俺を取り囲むような位置につき、再度弾幕を撃ってくる。

アリスとの弾幕ごっこや、チルノや妖精達を相手にこういう配置を相手にするのは慣れてる。

とは言え、チルノ達はともかくアリスとやる時よりはやりにくい。

弾幕ごっこ自体はアリスの方が断然強いし、てゐ含めて6人同時に相手にするより

も、人形相手の方が数は多い。

が、やっぱり個々に動く兎達の方が動きは良い。

さて、せっかく竹林にいるんだから、避け方も少し凝った方がいいかな。

「ん？ おお？ 竹を足場にして飛ぶんじゃなく駆けるなんて。あ、そういえばゆーちゃんそういう動き得意だったよね」

「ただ避けるだけじゃ芸がないだろ？」

しなる竹をバネ代わりにして、素早く移動する。

幻想郷に来てから俺の得意技になった移動方法だ。

ただの樹よりもしなる竹でこの方法を使うと、単純に空を飛ぶよりも更に速く動ける。

鈴仙と最初に殺し合いをした時もやったから、てゐも知っている。

「ゆーちゃんって、本当に人間なの？ そんなスピードで動く人間見た事ないよ？」

「誉め言葉として受け取っておくよ」

てゐ達は竹林を駆け回る俺めがけて弾幕を撃ってきているが、狙いが定まらず掠りもしない。

と言うか、ちよつと速すぎる気がする。

文の力を使つてるとはいえ、こんなに速く動けたっけ？

「あややつ？ すみませーん！ ちょっとストップ、すーっぷー！」

と、ここで文からストップがかけられた。

「どうしたんだ、文？」

「せっかくこれからつて所だったのに。カメラでも壊れたのかな？」

「いやあ、ユウキさんの動きが速すぎなんですよ。ユウキさん自身を捉えるのは問題ないんですが、周りがボケてしまっんです。私の能力使っているんですからそれくらい速いのは当たり前なんですけどね」

なるほど。速すぎて弾幕含めてカメラに捉えきれないって事か。

学園都市のカメラならどんなに速い物体でもピンボケせずに撮る事が出来るけど、流石にそこまでの性能はないか。

俺のスマホのカメラで撮ってもいいが、パソコンもプリンターもないのでは印刷できないから意味がない。

「じゃあ、どう動けばいい？ 無駄な動きを付けなければいいか？」

「ユウキさんの場合、こちらから指示するよりも自由に動き回ってもらった方がいいと思うんですよね。なので、お任せします！ たださつきみたいに高速で竹林の間を駆け回るのを控えてもらえれば助かります」

高速でジグザクに飛び回ると流石にピントが合わせにくいのか。

「了解。ちよつと趣向を変えてみる」

「期待してますよー。あ、てゐさんすみません。続けてもらつていいですか？」

「うん、分かつた。じゃこつちもテンポあげていくよー!」

そうして、弾幕ごっこが再開した。

今度は、さつきみたいに駆け回つて回避するだけではなく、迎撃もしてみようと思う。

弾幕を避けつつ、両手に持ったナイフに力を注ぐ。

——ブオン

「っ!」

アリスの時のように弾幕を撃ち返す為、ナイフに力を注いだのだけど、なぜか妙な感じがした。

力がいつもより吸い取られていく感じだ。

それがどういう事なのか考えるよりも、動いてみる事にした。

目の前に迫る弾幕に向かって、ナイフを振るう。

弾幕は斬れたが、手ごたえが今までよりもよく、威力が増したような感覚。

一つ試したい事があつたけど、それと合わせてこれも試してみるか。

「てゐ、もつと撃つてきていいぞ!」

「言つたねえ。じゃあ、手加減なしで行くよー」
「兔符・開運大紋」

てゐが使つたのは、円形にまるで文様のようにならびながら放つていくような弾幕を放つスペルカードだ。

それに合わせて兎達もそれぞれ弾幕を放ってくる。

これを回避するのは結構難しい。

けど、俺は回避するつもりはない。

全て、薙ぎ払う。

「さて、うまく出来るかな」

両足に反射をイメージした風の力を集中させる。

まずは兎達が放つた弾幕へ向けて蹴ると、思った通りサッカーのように弾幕を蹴り飛ばすことが出来た。

「ええ〜!? 足で!」

美鈴の力を使った時、スペルカードで同じ事をした事があったので、文の力でも出来るんじゃないかと試したら、思った通りに出来た。

続けててゐのスペルカードをナイフで迎撃する。

流石にスペルカードは、蹴り飛ばせる気がしない。

ドドドッ

風を纏ったナイフが、弾幕を次々に斬り落とす。

いや、斬り落とすというか、かき消すと言った感じだ。
やっぱり俺のナイフがいつもより文の力で強化されている。

「うっそーん!!? 私のスペルカードまで!?!」

てゐるが驚いている間にも、文はシャッターをきりまくっている。

兎達の弾幕を蹴り飛ばし、てゐるのスペルカードをナイフでかき消していく。

こつちからの反撃をするほどの余裕はないけど、さつきまでの全力回避よりは写真写りが良いはずだ。

やがてタイムリミットとなり、弾幕ごっこは終わった。

取材のための弾幕ごっこなので、勝ち負けはない。

「ああ、掠りもしなかった所か、全部迎撃されちゃったよ。流石だねゆーちゃん」と言っても、てゐにしてみれば負けたように思ってるようだ。

「ユウキさんもてゐさん達も、お疲れ様でした! 良い写真が沢山撮れました!」

写真写りを良くすると言う、いつもと違う試行錯誤の弾幕ごっこだったが、文の満足できる結果だったようで良かった。

若干顔が赤い気がするのはいかんな。

「で、ユウキさん。足にまで力を籠めてるのは予想出来ましたが、アリスさんの時より

もナイフ捌きが上手、と言うかナイフの威力上がっていませんでしたか？」

文は今まで何度も俺の弾幕ごっこを見てきたし、午前もアリスとの弾幕ごっこ見ていたから違いに気付いたか。

「俺はいつも通りに力を使っただけで、なんだかナイフにいつもより力が強く込められた感じがしたんだよな」

「ふーん。ゆーちゃんって前から弾幕を弾いたり跳ね返したり出来るって聞いたけどね。まさかスペルカードまで弾かれるとは思わなかったよ」

「今まではただの弾幕なら弾けたり出来たけど、スペルカードは基本的に避けてた。ナイフで弾こうとしてもうまくいかなかったし。今回は出来そうな気がして試したんだよ」

「それって、私達を実験台にしたのかなあ〜？ 手間賃取るウサ」

「にっしっしっ、と悪戯っ子な笑みを浮かべてる。

「俺達に陰湿な罠を仕掛けたんだから、それでチャラだろ？」

「それは私関係……ない、とまでは言わないけど、鈴仙ちゃんと京ちゃんのせいだよ。ま、いつか、ゆーちゃんの舞踊も見れたしね」

「ん？ 舞踊？」

踊ったつもりはないし、そもそも俺は踊りなんて出来ないしやった事もない。

「私のスペカやみんなの弾幕をナイフや足でさばいていた時だよ。優雅に踊っているように見えたけど、ひよつとして無意識だったの？」

言われてみれば、さっきの俺の動きは踊りに見えたかもしれないな。

踊りなんて見た事すらあまりない。

ただ、頭に浮かんだ鞠亜の動きを真似したら派手に見えると思つてそう動いたまでだ。

「なるほど、そう見えたのか。文から派手に動いてと言われてな。俺なりにそれを意識したつもりだったけど、どうだった？」

「あ、えつと、ですね。はい。とても綺麗な舞でした」

文にそう聞くと、満足そうに何度も頷いた。

「うっしっしっ、文ちゃんさっきのゆるーちゃんの動きに見惚れてたでしょ？」

「そ、そそそんな事あるわけないじゃないですか。ただいつもと違った動きがかつこよかつたなーつて思つただけです」

「文ちゃん、それぜんぜん誤魔化せてないよ」

ともかく、文の満足できる写真が撮れたつて事か。

「じゃ、ここはもう良いか。次の場所はどこだ？」

「次は紅魔館ですね。一応夜行く事になっていますので、それまで人里で時間を潰しま

すか」

「いやいやいや、待つて待つて！」

人里に向かおうとした俺達とてゐる達が引き留めた。

「てゐ、何か俺達に用か？」

「いやいやいや、何ここで帰ろうとしてるのさ2人共！　これから永遠亭でしょ！」

なんでつて、弾幕ごっこをやつてそれを写真に収めるのだから、これでここでの取材は終わったはずでは？

「え〜？　そうでしたっけ？　もう取材は終わったので撤収するだけなんですけど？」

「文ちゃん、わざとでしょ！　本来なら竹林でゆーちゃんが鈴仙ちゃんと弾幕ごっこしてから、永遠亭で姫様の相手をする事になつてたでしょーが」

そんな予定になつていたので、肝心の俺が知らないんだけど。

「文、そうなのか？」

「あややつ、鈴仙さんがいないうちに早く切り上げようとしたんですけど、失敗しましたね」

「もう、ゆーちゃん来てくれないと鈴仙ちゃんと京ちゃんに私が怒られるんだよ」

「そこは怒るの永琳じゃないのか」

当初の予定がそうだったのならそれに従うか。

と、
いうわけで俺達は永遠亭を目指して竹林を進んだ。

続く

第156回 「ステージ2：永遠亭」

永遠亭

竹林での弾幕ごっこを終え、てみると共に永遠亭にやってきた俺達をお京が出迎えてくれた。

「いいらっ、しゃい。ユウキさん、文さん」

が、お京は足がガクガクと震えていて辛そうだった。

「大丈夫か？ なんとなく何があったか予想出来るけど」

「へ、平気、です。ちよつと石抱された、だけですから」

だと思った。って、石抱ってたしか正座の上に石を乗せる拷問だったよな。

似たような拷問なら俺もやった事あるけど、アレをされて足痺れただけってお京も妖怪だから頑丈なんだな。

でも、これも凝りすぎたトラップを仕掛けた罰だからどうこう言うつもりはない。

トラップの被害にあつて文句の1つも言うつもりだった文も、流石にこんな状態のお京には何も言えなかつた。

「ようこそ永遠亭へ。歓迎するわユウキ君、文。早速始めましょうか」

そこへ永琳がやってきた。

アレ？　ここの弾幕ごっこの相手って輝夜じゃなかったっけ。

「ごっちはいいけど、輝夜はどうしたんだ？」

「ああ、姫様なら、うどんげ達と一緒にトラップを作ったから今お仕置き中よ」

「あのお姫様もトラップに一枚かんでたんですか。何をしてるのでしようか」

文が呆れかえっているけど、俺も同感だ。

「実は、お京が作ってた泥団子に私が作った薬をこっそり混ぜてたのよ。と言っても身体が痒くなったりクシヤミが止まらなくなったりそういうクスリね。だからお仕置き中なの」

「あ、当たらなくて良かったです」

なんでそんなクスリがあるんだよ、とは突っ込まないでおこう。

「というわけで姫様に代わって私が相手をするわね」

「なんだか嬉しそうですね。まさか永琳さんも……」

「あら、私はうどんげとは違うわよ。最近診療ばかりで身体動かしてなかったのよ。だからたまには運動もしいと思っただら、こういう機会が来たから嬉しいのよ。それに相手がユウキ君なら思いつきりやっても問題ないし。あなたは弾幕ごっこのプロ。それも回避に関しては幻想郷一でしょう？」

ストレッチしながら嬉しそうに話す永琳。

で、俺だと何が問題ないのだろうか。

「いくらなんでもそれは買いかぶりすぎだろ」

「流石は永琳先生、分かっていますね！」

なぜか文が得意げになっている。

弾幕ごっこのプロは霊夢や魔理沙の事を言うのだし、回避に関してはそこそこ出来るとは思うけど幻想郷一は言いすぎだ。

「ともかく、私のストレス発散に付き合っつてね、ユウキ君」

「結局それが本音か。ま、いいけど。永琳先生にはお世話になってたしな」

「ふふっ、ありがとう。それで弾幕ごっこのただけど、今回はユウキ君が私に触ったら終わり、というルールはどうかしら？」

永琳がそんな事を提案してきたけど、基本的に今回俺は文の判断に従う事になっているので何も言わない。

「永琳先生に触ったら、ですか。何を狙っているのですか？」

なぜかジト目で文が永琳に尋ねているけど、永琳にそこまで深い狙いはないと思う。

「いえ、ただそっちの方がそのカメラで撮るユウキ君の写真写りが良いと思ったからよ。そうでしょう？」

「ま、まあ、それは、その、どうでしょう?」

永琳は、そう言つて意味ありげな視線を文に送る。

文もそれに何かを察したようで言葉が濁している。

なんか2人だけで通じる物があるようで。

俺には関係、はあるだろうけどどうでもいい事だ。

「文、俺はお前の指示に従うと言つた。でも、俺が素早い動きで弾幕を避ける動作はしない方がいいんじゃないか?」

だから竹林では弾幕を素早い動きでかわすよりも迎撃するのを優先させた。

「それはそうですが。予定が早まったと思つておきましようか。では、ユウキさん、今後の弾幕ごっこの動きは相手に応じて対応を変えろという方針で行きましょう。今回は永琳先生の言つた通りでお願いします」

「ああ、分かつた」

今回は迎撃十回避で永琳に近づいて触ればいいって事だ。

永夜異変の時、永琳と輝夜の弾幕ごっこを見たが、相手が輝夜だったら早く終わりそうなルールだけど、永琳はそうはいかない。

「勝ち負けは関係ないけど、すぐに落ちたら取材にならないからな。最初から全力で行く【幻符・幻想支配モード文】」

文の力を発動させ、両手のナイフと両足に風を纏う。

「あら、かっこいいわねソレ。じゃ、私も遠慮なく【天呪・アポロ13】」

永琳を中心に赤と青の弾幕が展開された。

流石、俺を接近させないようなスペルカードを使ってくるな。

俺は一直線に永琳に向かって飛びつつ、廊下や床を蹴り縦横無尽に弾幕を回避する。

永夜異変の時もだったが、今の永遠亭の廊下は外からは考えられない程拡張されている。

咲夜が紅魔館の空間を広くすると同じような原理で、永琳が永遠亭の空間を広げた。

「ホントに素早いわね。ちよつと趣向変えましようか。【鍊丹・水銀の海】」

それまでの弾幕と違い、永琳を中心に幾つものレーザーが放たれ行く手を阻んできた。

レーザーの合間を大玉の弾幕が放たれてくる。

こつちの進路を塞ぐ弾幕はフランも使うが、あつちは誘い込む迷路型でこつちは動きを捕らえるトラップ型つて所だ。

どちらにせよなかなか永琳に近づけないのには変わりない。

「あらあら、私はここのよ〜？ 早くいらっしやい、私に触れてごらんさ〜」

「あんな上機嫌な永琳様、初めてです」

オホオホと笑いながらハイテンションな永琳にお京が驚いている
確かに、永琳は上機嫌だ。

変な薬でも飲んで頭ラリってるのかな。

「お師匠様、最近ストレスたまってたから……」

そう言ってるのが苦笑いを浮かべている。

ストレスの原因が何なのかは聞かないでおこう。

天井や壁を蹴ってフェイントしかけながら弾幕をかくぐりつて、なんとか永琳の死角から近づく事が出来た。

これで触れば終わりだけど、こんなに早く終わっていいのだろうかと思いつつ、肩に
触れようとしたが、あっさりと躲された。

「流石ね。でも、こんなに早くは終わらせないわよ?」

頭上から降るような弾幕が放たれ、永琳から離れて仕切り直し。

その時、普通に離れたのでは芸がないかなとバク転しながら戻ってみた。

「いいですよ、ユウキさん! そういう動きです!」

文がハイテンションになっていたので、こういう動きをすればいいのかと今更ながら
理解できた。

「次、いくわね。【神脳・オモイカネブレイン】」

永琳が次に使ったスペルカードは、異変の時に見たものだ。

弾幕とは違う赤い大玉が現れ、そこからレーザーが俺を囲むように放たれ、同時に永琳からも連射力の高い弾幕も放たれる。

このレーザーはさっきのスペルカードと違い、消えはせず完全に檻のように俺を閉じ込めている。

狭い空間の中で弾幕をよけ続けなければならず、身体を小刻みに動かし避けていく。

ただし、こんな動きでは文の求める動きじゃないと思ったので、学園都市でたまにみかけたストリートダンサーの動きを真似てみた。

普段、俺が避ける動作は必要最低限の動きしかないので見ている方はつまらないと思う。

まあ、それでも文達は踊っているように見えると褒めてくれてるけど、実際の踊りとはこういう動きなのだ。

と言っても、学園都市から踊りなんてした事がない俺の踊りはぎこちないだろうけどな。

「いいです、いいですよー！ ユウキさん、優雅ですー！」

「おー！ ゆーちゃんかっこいいー！」

これで文が満足してくれるのならいいだろう。
てるとお京は拍手をしていた。

今更ながら、両手のナイフを全然使っていない事に気づいた。
なので弾幕を打ち返す事にした。

俺を囲っている檻を切るよりは、永琳から放たれる弾幕を打ち返す方が絵になるうだろう。

「へえ、切り裂くだけじゃなく打ち返す事も出来るのね。やっぱり面白いわ」

見様見真似の踊りをしながら弾幕を打ち返していくが、それでも弾幕が濃く永琳に近づく事は出来ない。

その時、ふと普段よりも力が消耗していない事に気付いた。

いつもは力を込めたナイフで弾幕を切り裂くよりも、打ち返す方が消耗するはずなのだが今は打ち返すのも切り裂くのも以前より消耗を感じない。

「これなら、試してみるか」

弾幕を避けつつ、ナイフに力を溜めこむイメージ。

今までよりも俺の力が、文の力がナイフに伝わり刀身に流れ込む感覚がした。

そして、その力が十分に注ぎ込まれた。

「ハイッだー！」

両手のナイフを永琳に向けて投げ放つ。

咲夜のようにまっすぐ投げけるのではなく、横回転するように投げた。

するとナイフに纏った風が勢いを増し、小さな竜巻となつて弾幕を切り裂いていった。

「っ!？」

永琳と文が驚きで目が見開いていた。

すぐに永琳はその場を飛び退き、どうにか躲した。

ナイフはそのまま突き進み、壁へと突き刺さった。

「危なかつたわ 「はい。タッチと」 あ、あら？」

永琳がナイフに意識が向いた瞬間、俺は永琳の身体にタッチをした。

実はナイフを投げたと同時に全ての力を足に集中させ、爆発のように風を起こして口ケツトのように突進していた。

のだが、思ったより勢いが付きすぎていて、タッチのタイミングが目測よりもズレてしまい……

——ムニユ

「っ!？」

「あはっ♪」

勢いあまつて危うく壁にぶつかりそうになったけど、どうにか止まれた。

永琳に触れる時、何か柔らかいものを触った感覚がしたけど、頬っぺたかな。

まあ、どこにしても永琳に触れる事が出来たのでこれで弾幕ごっこは終わりだ。

「よしつと、これにて終了。お疲れ様、永琳。どうだ？ 少しはストレス解消できたか？」

「え、ええ、そうね。別のストレスが溜まりそうだけど……まあ、これはこれでいいかしら」

なんだか的を得ない返答だけど、とりあえず満足したって事かな？

で、永琳はそれで終わったのだが、文となぜかお京が物凄く不機嫌な顔でこつちを睨んでくる。

対照的にてゐるはニヤニヤと面白い物を見たような顔をしている。

「いやあくさつすがゆーちゃん。最後の最後にやってくれたね♪」

てゐるは楽しそう、いや、面白そうに言うけど、そんなにすごい事やったかな。

「俺の投げたナイフが永琳の弾幕を切りさいた事か？ あれはどちらかと言えば文の力のおかげだぞ」

俺がそう言うと、文は深いため息をついた。

なんだか呆れかえってるような気がするけど、なんでだろう。

「いえ、あれはどちらかと言えばユウキさんの力だと思います。私の風では弾幕を吹き飛ばすにはあの程度では無理ですから」

要するに弾幕を切り裂く力＋文の風で、永琳の弾幕を突破出来たと言う事か。使ってみて分かったけど、この力の使い方は結構応用できそうだな。

「と・も・か・く！ ここでの弾幕取材は終わりましたので、次！ 行きますよ！」

「あらあら、お茶でも飲んでゆっくりして行けばいいのに」

「いいえ！ これ以上ここに居ると危険ですので、では失礼します！」

「なんでそんな急いでいるんだよ。あ、永琳、てゐ、お京またな！ 鈴仙と輝夜よろしくな」

そう言って文に手を引かれて永遠亭を後にした。

もう少しゆっくりしても良かったけど、思ったより疲れが出ていないからいいか。

「またいらつしやい♪」

「まったねー」

「え、えーりん……掃除終わったわよお、あら？ ユウキは？ まさかもう全部終わっちゃったの!？」

「あら、姫様、うどんげ。掃除ご苦労様。ユウキ君ならもう帰ったわよ?」

「そんなあくあれ、師匠？　なんだかツヤツヤしていませんか？　それにお京はなんでそんなに不機嫌なの？」

「……知りません！」

なんか俺達が飛び去った後の永遠亭が騒がしくなってたけど、気にしないでおこう

続く

第157回 「ステージ3：紅魔館（前編）」

日も暮れてきた頃、俺と文は紅魔館に到着した。

今後の予定は紅魔館で夕食をとった後、弾幕取材を行い今日は紅魔館で泊まる予定となっている。

「別に博麗神社に戻ってもいいんだけどな」

「まあまあ、霊夢さんの了承は得ているんですから」

紅魔館で俺が泊まる部屋って決まってるけど、ベッドが1人用にしては妙に広いんだよな。

しかも、夜中に外から複数の争う気配がして落ち着かないし。

「おや、紅魔館の前が騒がしいですね」

門に美鈴とレミリア、フラン、それにボロボロになっているこあが木に逆さづりにされていた。

さらにこあには、『私はまたやらかした大馬鹿者です』と書かれた板が付いていた。

それに見て何となく何があったか察してしまった。

「あ、ユウキさん……それに文じゃない」

「どーも、美鈴さん。私をおまけ扱いしてくださいってどーも」

なんでこの2人はいつも火花散らしてるんだか。

あーあ、弾幕ごっこ始めちゃったよ。

今日の弾幕取材相手は美鈴じゃなく、レミリアとフランだったのに。

「レミリア、フラン。一体こんな所で何をしてるんだ？ てつきり中で待っていると
思っただけぞ」

「いらっしやい、ユウキ。今日は楽しませよう……と歓迎したいのだけど、ちよつとト
ラブルが起きちゃってね」

「今、紅魔館の中滅茶苦茶になってるの」

レミリアとフランによると、俺と弾幕ごっこをするために紅魔館内を以前の紅霧異変
の時のように迷路にする予定だったそうだ。

咲夜が普段能力で紅魔館内を広くさせているが、その能力をパチュリーが魔法で強化
して迷路を作り、その中でレミリアとフランが待ち構えている部屋を探しだすという趣
向にするつもりだった。

ところが突如魔法が暴走してしまい、レミリアとフランとこあが紅魔館外にはじき出
されてしまった。

それどころか、強固な結界が紅魔館全体に張られてしまい、レミリア達が何をしても

中に入れなくなってしまったようだ。

ちなみにこうなった原因は、こあがパチュリーの魔導書にイタズラ描きをしたせいだった。

「なるほど。で、咲夜とパチュリーはどこだ？」

「2人とも紅魔館の中よ、妖精メイド達数名もね。本来、私とフランを見つけて倒したら迷路が解除されるのだけど、それが今は咲夜とパチュエを見つけて倒さないといけなくなっているのよ」

魔法が誤作動して、迷路を作っている咲夜とパチュリーが迷路のキーとなっていて、レミリアとフランとこあは部外者と見なされ追い出されたってわけか。

「フランの能力で迷路を破壊出来ないか？ 制御に不安あるなら俺がやるけど」

「それも考えたのだけど、それをやると連動して紅魔館が爆発するみたいなのよね」

それもこあのイタズラの副作用ってわけか。

そりゃ簧巻きにされて逆さづりにされるわけだ。

「解除するには、迷路の挑戦者として登録されている俺が中に入って攻略しなきゃいけないって事か。で、同行できるのは文だけ」

「そういう事。言っておくけど文はあくまでユウキの同行者という立場よ。下手にユウキに手を貸したら排除されるかもしれないから、気を付けなさい。けどいざとなった

ら」

「分かってますよ」

いつの間にか文と美鈴は弾幕ごっこから戻っていた。

で、レミリアが何に心配してるか分からないけど、そこまで危険を感じないから問題ないだろう。

「じゃ、行きますか」

こうして俺と文は、迷宮と化したと言う紅魔館へと入って行った。

さて、どんな迷宮になっているのやら。

「ユウキさんだー!」

「いらっしやいませー!」

紅魔館に足を踏み入れた俺達は、メイド妖精達の接待を受けていた。

目の前には紅茶やケーキ、どれも咲夜が用意したようだけど、正直ちよつと困惑している。

「なあ、咲夜とパチュリーはどこにいる?」

「うーん? 分からない! メイド長はユウキさんが来たらこれを出しなさいって言われて、そのままどこかに行っちゃった」

「行っちゃった、というより、紅茶とケーキ用意した途端パーっと消えちゃったよね？」
この様子じゃメイド妖精達は、紅魔館が迷路になってる事にも気付いてなさそう
だ。

「どうやら咲夜さんは、ユウキさんのお出迎えの用意を終えた所で魔法に巻き込まれた
ようですね」

だとすれば、咲夜は状況が分からず迷路の中を彷徨っている可能性もあるか。

「咲夜の事だから一瞬で状況理解してそうだけだな」

「そうですねえ。案外普段通り掃除でもしてるんじゃないですか？」

いつも冷静な咲夜の事だから、そんな気がする。

メイド妖精達にパチュリーの魔法が解けるまでここを動かないように言っ
て、俺達は
先へと進んだ。

次の部屋には誰もいなく机もテーブルも何もないく、ただ『①』とかかれた立札があ
るだけだ。

だけど部屋の造りや内装に違和感があった。

「こんな部屋、紅魔館にあったかな」

執事やってた時に紅魔館の部屋は全部見て回っているので間取りとかすべて覚えて
いる。

けど、こんな殺風景な部屋はなかったはずだ。

「トラップは、なさそうですね。迷路の通路用に作った部屋でしょうか？」

「多分そうだろうな」

レミリアの性格上、鈴仙みたいなトラップを仕掛けるとは思えないし、仕掛けるとしたらもつと大々的なトラップだろう。

そう思つて次の部屋に進んだ。

「②と書かれた立札に、ドアが2つか」

先ほどの部屋ではドアが1つしかなかったが、次の部屋では2つに増えていた。

立札が何を意味しているのか何となく分かった。

とりあえず右の部屋に進んでみる。

「どうやら当たりの様ですね」

ドアの先の部屋には『③』と書かれた立札があった。

そして、ドアは3つに増えていた。

「間違えたらどうなるんでしょうねコレ」

「最初からやり直しかな？」

ならばと念の為、俺と文は別のドアを開けようとしたが、なぜか文が選んだ方はドアノブが回らない。

「多分、ユウキさんしか開けられないようになってるのではないかと」

確かに、俺の選んだドアはドアノブが回る。

無駄に凝った造りだな。

そうして数分後、俺達は順調に進んでいた。

「……………」

目の前にある立札に付いている番号が、⑳

ドアの数は20に増えていた。

壁一面ドアって……

「いやいやいや、流石にノーミスでここまで来れるのはおかしいじゃないですか!？」

「多分これはお遊びだな」

「お遊び、ですか?」

「そう。パチュリーの元々の魔法か、こあのイタズラの影響なのかは知らないけど、最初からハズレのドアなんてなくて、ただ部屋が進むと単にドアの数だけ増える仕掛けなんだよ。で、おまけに俺だけしか開けられないドアって事」

「そんなバカな仕掛けをしてるんですか」

相手の精神力削るおバカなトラップとしては結構効果的かもな。

思えば以前、紫も同じような馬鹿なトラップを仕掛けたっけ。

「妖怪って馬鹿な仕掛け作るのが趣味なのか。文達も妖怪の山にこういうトラップを仕掛けてたりするののか？」

「こんなのと一緒にしないでください！ 妖怪の山は、天狗が見張っているので侵入者はすぐに見つけて駆けつけて排除するのでこんなの不要です！ まあ、にとりとかは、自分の縄張りになら付けてるかもしれないですけど」

以前にとりに学園都市でのセキュリティについて聞かれた事あったな。

そうこうしているうちに、今までの部屋と違い踊り場のような広い部屋にたどり着いた。

どうやらこのドアが最後だったようだ。

「……」

部屋に入った瞬間、すぐにナイフを抜き頭上に構えた。

と、ほぼ同時に頭上にナイフを構えた咲夜が降ってきた。

——カキンッ！

俺と咲夜のナイフがぶつかり合う。

すると、咲夜はまた姿を消した。

「うえあ?！」

数秒にも満たない一瞬の出来事に変な悲鳴をあげた文だったが、そこは記者。

すぐにカメラを構えて撮影を始めた。

——キーンキンッ！

咲夜は前後左右あらゆる角度から現れて俺に一撃を加えるとすぐに姿を消し、また別の角度から奇襲を仕掛けてきた。

時間停止を連続で使用して奇襲を仕掛けているのだろうけど、こんなに連続して使用する事は前は出来なかつたはず。

幻想支配で咲夜を視ればどんな使い方しているかは分かる。

が、今は文の力を使っているし、そもそも今回の取材中に文以外の力は視ないと決めているのでその手は使えない。

それと咲夜はナイフを投擲専門に使っていて斬撃にはあまり使つてなく、そこまで得意ではなく妖夢との斬り合いなら確実に負けると言っていた。

でも、そこまで妖夢と差があるようには思えない斬撃を繰り返している。

「ふふっ、強くなっているのはあなただけじゃないのよ。私だつて強くなってるんだから」

「ひよつとして、時を止める時間を短くする事で連続して時を止めれるようになってる、とか？」

「……………」

無言で睨みつけられて斬撃が激しくなった。
どうやら当たりだったようだ。

「ユウキさんってズルいですよね。これが出来るようになるまで私がどれだけ訓練したと思いますか？　なんであつさり見抜くんですか？」

「それは、なんか悪かった」

咲夜にジト目で睨まれた。

ほとんど勘だったんだけどな。

「でも、ユウキさんも流石ね。風を纏って結界代わりにして私の奇襲を察知して迎撃してくるなんて」

「迎撃なんて言えないぞ。防ぐのでやっとなんて」

俺は文の力で周囲に風を吹かせて流れを感じ、咲夜が時間停止直後に一瞬だけ乱れた場所にナイフを振るい防いだ。

でも、一瞬すぎてナイフで防ぐのが精一杯で反撃までは出来ない。

「コホン、お2人さん。そろそろ弾幕ごっこをしてもらえませんか？」

文が咳ばらいをしながら言ってきた。

確かに、さつきから斬り合いばかりだったな。

「あら、その割には文も随分と写真を撮っていたじゃない？」

「それは勿論、今回はユウキさんの勇姿はバッチリ撮っていくと霊夢さんにも言ってきましたので」

「どうせそんな事だろうと思ったが、博麗神社で霊夢とこそそ話してたのそれか」

「ありや、やっぱり気付いていましたか」

それ以外にも話してた事ありそうだけだ。

「では、気を取り直して弾幕ごっこの続きを……って、咲夜さんどうしましたか？」

咲夜はナイフをしまいと両手をあげていた。

「私は気が済んだからこれでいいわ。さ、2人共先に進んで」

「ええ、そんなあ、これからじゃないですかあ」

「俺としてはどっちでもいいけどな。急がないとパチュリーがヤバいつて話か？」

「察がいいわね。多分だけど、当初の予定より複雑な造りになったからパチュリー様の魔力消耗が激しいんじゃないかしら」

迷路を作るのも維持するのもパチュリーの魔力を元に行っている。

だから、こんな複雑な迷路を長時間維持するとそれだけパチュリーの負担が大きくなる。

「ええ!? それじゃ遊んでないでさつきと弾幕ごっこすれば良かったじゃないですか」

「しょうがないでしょ、今さつき気付いたのだから。というわけでユウキさん、パチュ

リー様の事おねがいね」

「ああ、分かった」

迷路の番人である咲夜は出番が終わってもこの部屋から出られないようだ。

こうして、俺達は次の部屋へのドアを開けて……

——ゴンツ！

頭にタライが落ちてきた。

流石に避けられなかった。

「あ、言い忘れてたけど、小悪魔のせいで次の部屋からはトラップが大量に仕掛けてあるわ。気をつけてね」

「ああ、十分に身に染みたよ」

こんな単純なトラップに引つかかる自分が情けなかった。

「文、お前は大丈夫だったか？」

「……大丈夫に見えますか？」

文の方には漬物石が落ちたようで、頭にデカイタンコブをこしらえていた。

初めて小悪魔が悪魔らしいと今更ながら思った。

続く